

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 7

東京大学本郷構内の遺跡

工学部 14 号館地点

2006

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室報告書 7
東京大学本郷構内の遺跡

工学部 14 号館地点

二〇〇六

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 7

東京大学本郷構内の遺跡

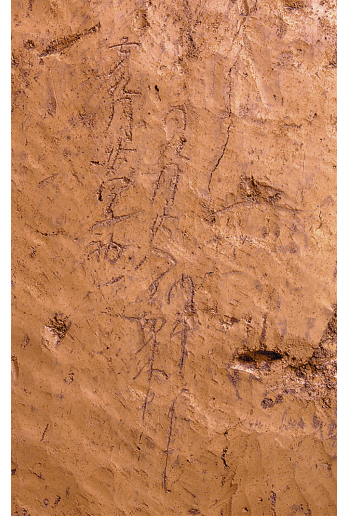
工学部 14 号館 地点

2006

東京大学埋蔵文化財調査室



調査地点全景



SU327



SK326 ウマ頭骨出土状況



SK335 錢貨出土狀況



SK392出土肥前色絵皿



SK292出土鍋島染付七寸皿



SK301出土鉢形土製品



人形・玩具類



生産関連遺物



漆パレット

例 言

1. 本書は、東京大学大学院工学系研究科・工学部 14 号館の新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本地点の略称は「工 14」とし、出土遺物の注記にはこれを当てている。
3. 本地点は、東京都文京区本郷 7 丁目 3 番 1 号東京大学本郷構内に所在している。
4. 本地点の調査面積は 1,785m² である。
5. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区 No.47 本郷台遺跡群」内に位置している。
6. 発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は、成瀬晃司、堀内秀樹である。
7. 本書の編集は、成瀬晃司を中心に執筆者の協議の上行った。
8. 第 I～III 章までの執筆分担は以下の通りである。第 IV、V 章は各節冒頭に記載した。
 - 第 I 章 成瀬晃司
 - 第 II 章 成瀬晃司・堀内秀樹
 - 第 III 章 第 1 節－堀内秀樹・大成可乃・安芸毬子、
第 2、5、6 節－原祐一
第 3、7 節－寺島孝一
第 4 節－大貫浩子
第 7、8、9 節－安芸毬子
9. 新美倫子氏（名古屋大学）・江田真毅氏（日本学術振興会・特別研究員）には、出土した動物遺体の分析を依頼し、玉稿を頂戴した。記して感謝したい。
10. 北野信彦氏（くらしき作陽大学）、降幡順子氏・肥塚隆保氏（奈良文化財研究所）には、生産関連遺物の分析を依頼し、玉稿を頂戴した。記して感謝したい。
11. 西田泰民氏（新潟県立歴史博物館）、吉田邦夫氏（東京大学総合研究博物館）には出土したガラス製品の分析を依頼し、玉稿を頂戴した。記して感謝したい。
12. 出土銭貨の詳細鑑定について、日本貨幣協会の小林茂之氏より、多大なる御教示、ご指導をいただいた。記して感謝したい。
13. 出土印章に際しては、東京印章協同組合常務理事・技術部長 前田照男氏、東京印章協同組合技術顧問 岩本博幸氏に多大なるご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。
14. 遺構写真は主に成瀬晃司、堀内秀樹が、遺物写真は青山正昭が撮影した。
15. 遺物の実測、浄書は主に今井雅子・坂野貞子・中村和子・佐藤智子が行い、最終的に（株）セビアスによってデジタル化を行った。
16. 本書に添付した CD-ROM には、検出遺構一覧表・出土遺物一覧表（xls 形式）、遺構写真・遺物写真（jpg 形式）、電子報告書（pdf 形式）を収録している。特に出土遺物一覧表は報告編には掲載されていないので注意されたい。
17. グリッドは日本測地系・平面直角座標系第 IX 系を基準にしている。
18. 発掘調査に伴う図面・写真・出土文化財は、東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス・茨城県新治郡八郷町柿岡 414 東京大学柿岡教育研究施設内において、運用・保管している。
19. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏・機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意

を表する。(敬称略)

石川 隆司 江上 智恵 岡本 康嗣 大橋 康二 小川 望 梶原 勝
加藤 元信 北原 糸子 古泉 弘 小林 克 小林 謙一 杉森 哲也
鈴木 裕子 武田 浩司 谷口 榮 長佐古真也 中山 経一 西本 豊弘
橋口 定志 堀内 明博 宮内 淳 宮内 昌枝 宮崎 勝美 宮崎 博
両角 まり 横山 昭一 前田 昭男 岩本 博幸
土屋建設株式会社 (株)三浦工業 (株)セビアス 施設部 工学部
文学部考古学研究室 東京印章協同組合


発掘調査参加者

(株)三浦工業

整理作業参加者(五十音順)

青山 正昭 安芸 毬子 阿部 常樹 池田奈津代 今井 雅子 遠藤 香
大島美智子 大貫 浩子 岡澤 麦子 小野 美恵 香取 祐一 川原 良子
北島くりか 坂野 貞子 佐藤 智子 佐藤 直子 佐藤 律子 中村 和子
野々村 海 野村 遊 宮本 直子 矢島 正子 柳 絢子

凡 例

1. 遺構の実測図は原則として 1/40 で掲載している。
2. 磁器・陶器・土器の実測図は原則として 1/4 で、人形・ミニチュア・遊戯具の実測図は 1/2 で掲載し、図版番号をイタリックで表記している。その他の遺物の尺度は、各図版にスケールを表示している。
3. 実測図に付けられる記号及びトーンは以下のことを表している。
 - ・▲は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
 - ・\—/ は、口唇部の口錆を表している。
 - ・\↔/ は、人為的な磨耗痕、敲打痕を表している。
 - ・↓—↓ は、播鉢体部播目の範囲を表している。
 - ・遺物中心線上下端の破線は、推定口径、推定底径を表している。
 - ・スクリーントーン  は、青磁の施釉範囲を表している。
 - ・本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』に、段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 に基づいている。
4. 遺構番号は、原則調査順に通し番号を付した。ただし調査担当者が複数介在しているため、必ずしも遺構番号の大小が、遺構の新旧を表すものではない。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。

SB：建物跡 SE：井戸 SK：土坑 SP：小穴 SU：地下室 SX：性格不明遺構
5. グリッドは、調査区北西隅を基準点とし (A1)、そこから東へアルファベットを、南へ整数 (アラビア数字) を 5m 間隔で付した。よってグリッド名は 5m 四方枱の北西コーナーを交点とする英数字を当てている。また D2 の座標値は日本測地系による平面直角座標系第 IX 系 (X=-32,015.589、Y=-6,407.967)、D12 の座標値は同 (X=-32,064.357、Y=-6,396.960) であり、グリッド南北ラインは真北に対し、N-12° 43' 07" -W である。
6. 遺構断面図などに記載された標高は、東京湾平均海面 (T.P.) を基準とし、基標番号「郷 (3)」弥生一丁目 1・弥生派出所前 (T.P.: 20.6743m) から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお、「郷 (3)」の T.P. は、平成 4 年 7 月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

目 次

口 絵
例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 調査の経過と概要

| | |
|--------------|---|
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の方法と経過 | 1 |
| 第3節 遺跡の位置と環境 | 4 |

第Ⅱ章 遺 構

| | |
|-------------------------|-----|
| 第1節 遺構の概要 | 7 |
| 第2節 A区の遺構 | 23 |
| 第3節 B区の遺構 | 51 |
| 第4節 C ₁ 区の遺構 | 79 |
| 第5節 C ₂ 区の遺構 | 105 |

第Ⅲ章 人工遺物

| | |
|--------------|-----|
| 第1節 磁器・陶器・土器 | 133 |
| 第2節 生産関連遺物 | 348 |
| 第3節 瓦類 | 359 |
| 第4節 銭貨 | 362 |
| 第5節 金属製品 | 380 |
| 第6節 木製品 | 392 |
| 第7節 石製品 | 394 |
| 第8節 ガラス製品 | 400 |
| 第9節 動物製品 | 404 |

第Ⅳ章 自然遺物

| | |
|-------------------------|-----|
| 第1節 工学部14号館地点出土の動物遺体の概要 | 409 |
| 第2節 工学部14号館地点出土の貝類遺体 | 415 |
| 第3節 貝類遺体のサイズに関する計測方法 | 438 |
| 第4節 工学部14号館地点出土の魚類遺体 | 445 |
| 第5節 工学部14号館地点出土の鳥類遺体 | 451 |
| 第6節 工学部14号館地点出土の哺乳類 | 456 |

第V章 工学部 14 号館地点をめぐる諸問題

| | | | |
|---------|---|-------------------|-----|
| 第 1 節 | 工学部 14 号館地点の空間構成 | 成瀬 晃司 | 465 |
| 第 2 節 | 工学部 14 号館地点出土の磁器・陶器・土器について | 大成 可乃 | 479 |
| 第 3 節 | 東大構内遺跡出土の人形にみる一考察 －工学部 14 号館地点の人形の様相と各期にみる成形技法－ | 安芸 毬子 | 503 |
| 第 4 節 | 江戸時代の貨幣流通についての一考察 －工学部 14 号館地点 SU335 出土の銭差をふまえて－ | 大貫 浩子 | 514 |
| 第 5 節 | 工学部 14 号館地点の一括廃棄土壌から出土した「鉄丹ベンガラ」の生産関連資料に 関する調査 | 北野 信彦・降幡 順子・肥塚 隆保 | 522 |
| 第 6 節 | 近世ガラスの化学分析 | 西田 泰民・吉田 邦夫 | 531 |
| おわりに | | | 539 |
| 引用・参考文献 | | | 541 |
| 報告書抄録 | | | 巻末 |

第 I 章 調査の経過と概要

第 1 節 調査に至る経緯

東京大学では、本郷構内に工学部 14 号館の新営を計画した。本郷構内は文京区 No.47 本郷台遺跡群として旧石器から近世までの複合遺跡として登録されており、事前に記録保存をする必要があった。それを受けて埋蔵文化財調査室では試掘調査を実施した。その結果試掘調査範囲全域にわたり、ソフトローム上面から近世の遺構、遺物が検出されたため、文京区教育委員会、施設部、工学部で協議した結果、本調査を実施する運びとなった。

第 2 節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査は、工学部 14 号館地点建設範囲を対象とした（I-1 図）。新営建物の軸がほぼ真南北にあることより、調査の便宜性から建物建設範囲を基準として 5×5m グリッドを設定した。

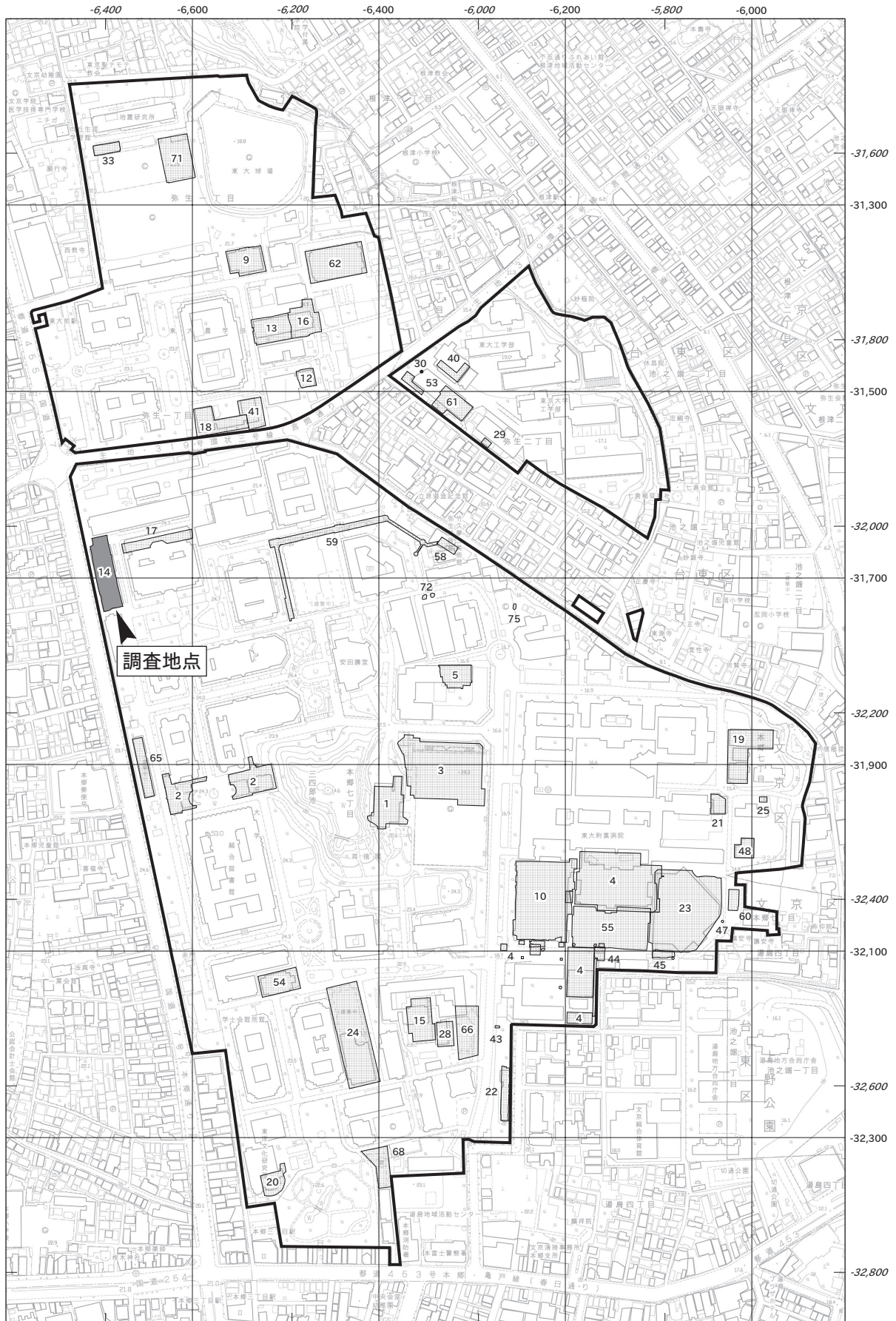
グリッドは調査区の北隅を基準とし（A1）、そこから東方向へアルファベットを、南方向へ整数（アラビア数字）を降順で付した。よってグリッド名は 5m 四方枱の北東コーナーを交点とする英数字を当てている。

(2) 調査の経過

本調査は建設予定地約 1,785m² を対象に 1992 年 11 月 26 日より翌 93 年 2 月 23 日にかけて行われた。本地点は試掘調査の結果、ソフトローム上に自然堆積層および江戸時代の整地層ともに認められなかったことより、重機によってソフトローム上面まで掘削し、人力による遺構確認作業に入った。残念ながら遺構確認面は、応化系共通規模実験室基礎による攪乱や近代以降の整地事業によって、ソフトローム面に達し、大学以前の生活面を確認することはできなかったが、調査地点周辺が本来本郷台地の北緩斜面であるのに対し、近代以降の盛土造成によって赤門と正門のほぼ中間に位置する尾根線レベルで平準化されたことで、現表からソフトローム上面まで約 2m の比高差が存在し、それにより遺構は比較的良好な状態で遺存していた。

表土掘削、遺構確認作業終了後、基本的に北側から遺構調査を行った。検出された遺構数は 464 基（小ピットを除く）を数え、内訳は地下室 18 基、井戸 11 基、土坑（採土坑を含む）210 基、ピット 219 基、柱穴列 4 基、性格不明遺構 2 基である。これらの遺構は江戸時代から本地点が大学に取り込まれる明治 43 年までに帰属する。

第2節 調査の方法と経過



I-1 図 調査地点（イタリック数字は旧日本測地系）

第 I 章 調査の経過と概要

| 番号 | 年度 | 遺跡名・調査地点名 (略称) | 遺構・遺物の年代 |
|----|------|--------------------------------|-----------------|
| 1 | 1984 | 山上会館 (U) | 江戸時代 |
| 2 | 1984 | 法学部 4 号館・文学部 3 号館 (文) (法) | 旧石器、縄文、江戸 |
| 3 | 1985 | 御殿下記念館 (G) | 旧石器、縄文、古代、江戸 |
| 4 | 1984 | 医学部附属病院 (病中) (エネセン) (給水) (共同溝) | 旧石器、古墳、古代、江戸 |
| 5 | 1984 | 理学部 7 号館 (理 D) | 縄文、江戸 |
| 9 | 1989 | 農学部家畜病院 (VMC) | 縄文、江戸 |
| 10 | 1990 | 医学部附属病院外来診療棟 (HG) | 江戸、近代 |
| 12 | 1992 | 農学部図書館 (FAL) | 江戸 |
| 13 | 1992 | 農学部校舎 (7 号館) I 期 (FA792) | 江戸 |
| 14 | 1992 | 工学部校舎 (14 号館) (工 14) | 江戸 |
| 15 | 1992 | 薬学部新館 (YS) | 江戸 |
| 16 | 1993 | 農学部校舎 (7 号館) II 期 (FA793) | 江戸 |
| 17 | 1993 | 工学部校舎 (1 号館) (FE1) | 江戸 |
| 18 | 1993 | 総合研究棟 (SK) | 江戸 |
| 19 | 1993 | 医学部附属病院看護婦宿舎 (HN) | 縄文、古墳、江戸 |
| 20 | 1993 | 総合研究資料館 (TUM) | 江戸 |
| 21 | 1993 | 医学部附属病院 MRI-CT 棟 (MRI) | 古墳、江戸 |
| 22 | 1994 | 本郷福利施設 (HF) | 江戸 |
| 23 | 1994 | 医学部附属病院病棟 I 期 (HW I) | 旧石器、縄文、古墳、中世、江戸 |
| 23 | 1994 | 医学部附属病院病棟 II 期 (HW II) | 縄文、古墳、中世、江戸 |
| 24 | 1994 | 医学部教育研究棟 | 江戸 |
| 24 | 1996 | 医学部教育研究棟 2 次 (医研 2) | 縄文、江戸 |
| 24 | 1998 | 医学部教育研究棟 3 次 (医研 3) | 江戸 |
| 24 | 2002 | 医学部教育研究棟 4 次 (医研 4) | 江戸 |
| 25 | 1994 | 医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場 (HND) | 縄文、古墳、江戸 |
| 28 | 1995 | 薬学部資料館 (FPS) | 旧石器、縄文、江戸 |
| 29 | 1995 | 大型計算機センター電気機室設備 (ACC) | 江戸、近代 |
| 30 | 1995 | 工学部全径間風洞実験室支障ケーブル移設その他 (AFC) | 縄文、弥生、江戸 |
| 33 | 1996 | 地震研テレメタリング地震観測施設 (EQL) | 江戸 |
| 40 | 1996 | 工学部全径間風洞実験室 (AFL) | 縄文、弥生、近代 |
| 41 | 1996 | ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー (ベンチャー) | 旧石器、江戸 |
| 43 | 1996 | 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK1) | 江戸 |
| 44 | 1996 | 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK2) | 江戸 |
| 45 | 1996 | 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK3) | 江戸 |
| 47 | 1996 | 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK4) | 江戸 |
| 48 | 1996 | 医学部附属病院看護婦宿舎 II 期 (HN II) | 縄文、古墳、江戸 |
| 53 | 1998 | 工学部強風シミュレーション風洞実験室 (AF IV) | 江戸、近代 |
| 54 | 1999 | 総合研究棟 (文・経・教・社研) (ES99) | 江戸 |
| 55 | 1999 | 医学部附属病院第 2 中央診療棟 I 期 (2 中 I) | 江戸 |
| 55 | 2001 | 医学部附属病院第 2 中央診療棟 II 期 (2 中 II) | 縄文、古墳、中世、江戸 |
| 58 | 1999 | 医学部附属病院受変電設備棟 (II 期) (YM) | 江戸、近代 |
| 59 | 2000 | 共同溝 (KK) | 江戸 |
| 60 | 2000 | 医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK6) | 江戸 |
| 61 | 2001 | 武田先端知ビル (TS) | 弥生、江戸、近代 |
| 62 | 2001 | 農学部総合研究棟 | 江戸 |
| 65 | 2002 | 法学部総合研究棟 (法 03) | 江戸 |
| 66 | 2002 | 薬学部総合研究棟 (YGS) | 江戸 |
| 66 | 2004 | 薬学部総合研究棟 2 期 | 江戸 |
| 68 | 2002 | インキュベーション施設 (INC) | 縄文、江戸 |
| 71 | 2004 | 地震研究所総合研究棟 (EQ04) | 江戸 |
| 72 | 2004 | 理学部 1 号館前 | 縄文、江戸 |
| 75 | 2005 | 工学系総合研究棟立坑 | 江戸 |

試掘・立ち会い調査を除く

東京大学本郷構内事前調査一覧

第3節 遺跡の位置と環境

東京大学本郷構内は武蔵野台地の東端、南東方向に延びる本郷台地上に位置する。構内の地理的環境の詳細については、すでに既刊報告書において述べられているので本稿では省略し、以下に調査地点周辺部についてのみ概観したい。

工学部14号館地点は、正門の北側、本郷通りにほぼ隣接して位置している（I-1図）。本郷キャンパスの西をほぼ南北に延びる本郷通り（国道17号線）は、基本的に本郷台地の尾根線に沿って敷かれた幹線である。本郷三丁目の交差点に立ち、北方向を望むと本郷通りは約60m北方の菊坂との三叉路付近まで緩やかに下り、そこから再び緩やかな上りへと変換し、路面が弓形になっていることがわかる。菊坂入口までの下りは「見送り坂」、その先の上りは「見返り坂」と呼ばれ、江戸追放の者が、この菊坂入口にあったとされる別れの橋で放たれ、南側の坂で見送ったことから「見送り坂」、追放者が北の坂で振り返ったので、「見返り坂」といわれたとされる（文京区教育委員会1980）。この「見返り坂」の緩やかな上りは赤門と大学正門の間付近まで続き、それより先はまた緩やかな下りへと変化し、農学部方向へ続く。その状況は目視でも確認できるが、本郷通り沿いの大学境界塀の下部石垣部分の高さの変化を見渡すと一目瞭然である。2004年に大学正門南側で調査を実施した法学系総合研究棟地点では、現表土から約80cm下で関東ローム層上面を確認したが（東京大学埋蔵文化財調査室2004）、大学正門の北側約110mを南端とする本地点では、関東ローム層上面までは現表土から約200cmを測り、本郷通り沿い旧地形（ローム層上面）は約100mの距離で、約1mの比高差に達することが確認された。近代以降、大学用地となってからの活発な造成によって今日の平坦面が築かれた結果をみることができる。

さて、本地点は加賀藩邸を中心とする大名藩邸を土地履歴とする本郷構内にあって、幕臣地に比定される稀有な事例である。以下にその履歴を概観するとともに、大学構内の用地変遷についても簡単に触れることにする。

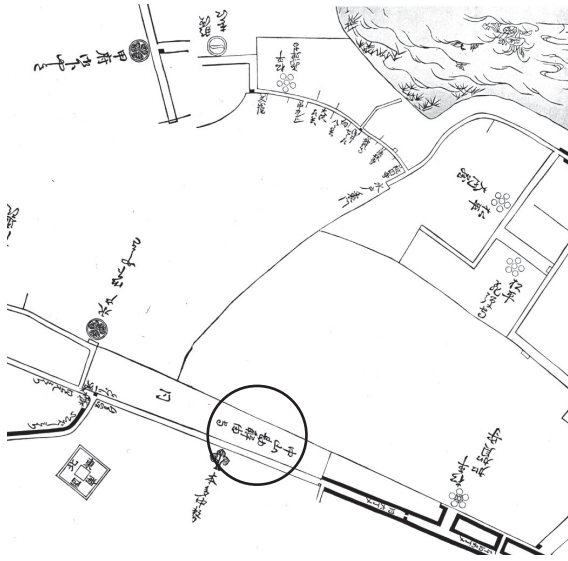
本地点は前述したように本郷通り、すなわち江戸時代の主要街道の一つ中山道に隣接している。



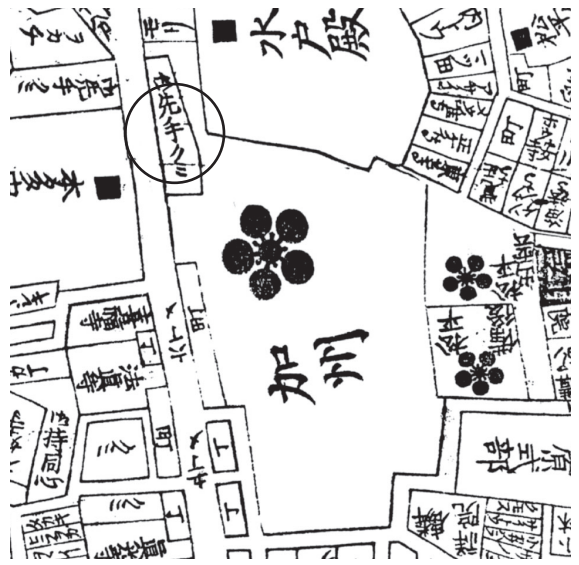
I-2 図 正保年間江戸絵図（抜粋）



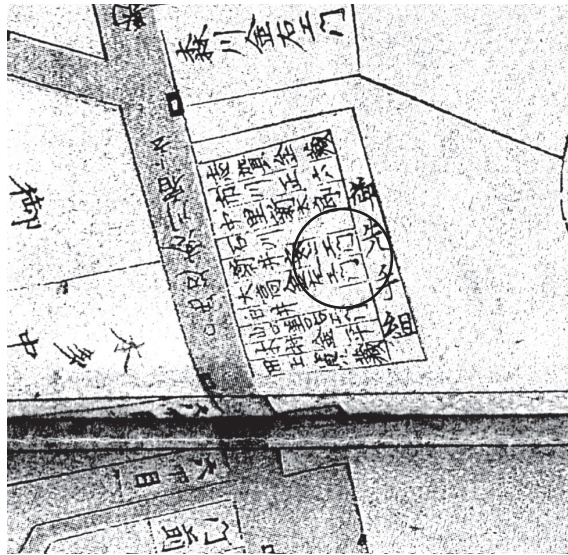
I-3 図 明暦3年（1657）江戸大絵図（抜粋）



I-4 図 延宝7年(1679)江戸方角安見図(抜粋)



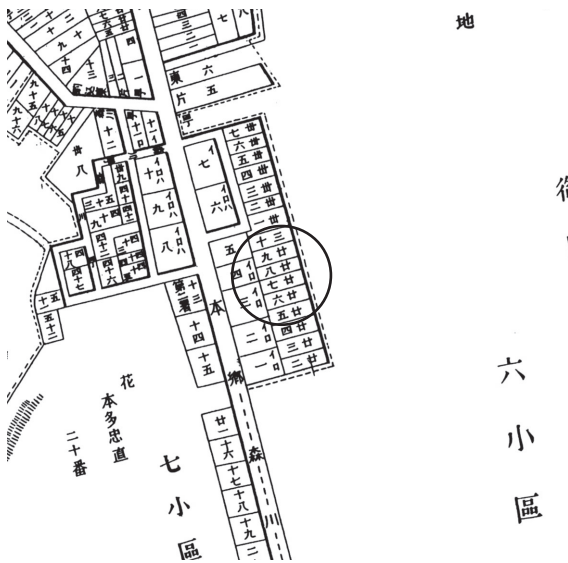
I-5 図 安永8年(1779)分間江戸大絵図(抜粋)



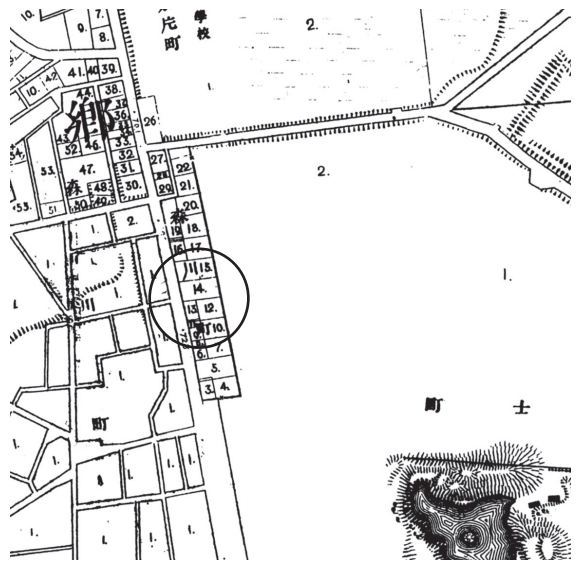
I-6 図 嘉永3年(1850)近江屋板谷中本郷駒込小石川辺絵図(抜粋)



I-7 図 安政6年(1859)分間江戸大絵図完(抜粋)



I-8 図 1876年明治東京全図(抜粋)



I-9 図 1895年東京実測全図(抜粋)

本地点の土地利用を知り得る最も古い絵図は正保元（1644）年の「正保年間江戸絵図」である（I-2図）。それによると加賀藩邸との位置関係から本地点は「矢代越中同心屋敷」に該当するすることが判る。矢代越中守は御先手鉄砲組頭を寛永15（1638）年から慶安4（1651）年まで努めた人物であり、本地点が御先手組屋敷内に位置することが判る。御先手組は外部からの侵入者に対する江戸の警護・防衛を役割としていたとされ、『大日本近世史料 柳営補任』によると（東京大学史料編纂所1964）、本地点を含む本郷森川宿に配置された御先手鉄砲組頭は森川金右衛門が慶長9（1604）年に任ぜられたとされるが、その役務の性質から組屋敷の成立は天正年間に遡る可能性も指摘される。続く明暦3（1657）年の「江戸大絵図」では「岡村権左衛門」（I-3図）、寛文11（1671）年の「新板江戸外絵図」では「中山カゲユ組」屋敷内に位置している。延宝7（1679）年の「江戸方角安見図」でも前者と同じく「中山勘解由守」と記されている（I-4図）。約100年後の安永8（1779）年の「分間江戸大絵図完」では「御先手クミ」と記されている（I-5図）。延宝段階では南端部は町屋と隣接し、北端部は本郷追分の北、東側へ折れ北方向へクランクをする路地に面していたが、南北両側ともに加賀藩邸に吸収され、屋敷地が縮小している。この屋敷割りの変化は天和2（1682）年の火災が契機となったとされる。嘉永3（1850）年「近江屋板江戸切絵図」は、居住者の氏名が書かれた珍しい絵図である（I-6図）。屋敷地の北側から東側にかけて逆L字状のスペースがあり、そこには「御先手組」と記されている。居住者の氏名は北から「志賀金蔵・市川正六・中里新太郎・石川・新井安口エ門・大高金左エ門・白井・山口善右エ門・木村金平・田上寅蔵」の10名が記載されている。ただしすでに指摘されているように記載された人物が居住していたかは定かでない（若林・西木1994）。安政6（1859）年の「尾張屋板江戸切絵図」においても区画の変化はなく（I-7図）、幕末まで同区画にて御先手組屋敷として機能していたことが推定される。

さて、江戸市中の武家屋敷調査書である『諸向地面取調書』によれば、この本郷森川宿に在した御先手鉄砲組に関し、「内藤甚左衛門組 六千九百九十七坪式合六勺」とある（史籍研究会1982）。本地点を含む本郷通り東側の区画は、明治16年作成の参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図では南北270m、東西36mを測り、面積にして9,720m²、約3,000坪となる。残り約4,000坪は本郷通りを挟み西側、現在の西方2丁目21～26付近に該当する。『諸向地面取調書』には12名の与力が記載されている。先にも触れたように組屋敷内の様相は不明な点が多く、与力、同心の屋敷配置、貸し地がどのように区画されていたかは知りようがない。ただし、近江屋板絵図にみられた10名の記載より嘉永段階での与力屋敷の配置を窺い知ることができ、裏手に区画された逆L字状の区画は、同心屋敷、貸地などを表現している可能性も考えられよう。

明治にはいると本地点を含む大縄地は、本郷森川町として町屋へと変更し、1876年の「明治東京全図」では本郷通りに面して7区画、その裏手に16区画の23区画に区分されており、北側には本郷通りから区画内へつながるコの字状の路地が設けられている（I-8図）。1895年の「東京実測全図」では、区画に変化がみられるが道に面していない裏手の屋敷へ通じる路地が描写されていることが読み取れる（I-9図）。このように明治期は区画の変更を伴いながら町屋として経営されてきたが、1910年に東京大学用地として買収され、現在に至っている。

第Ⅱ章 遺 構

第 1 節 遺構の概要

本地点では、地下室 18 基、井戸 11 基、土坑（採土坑を含む）210 基、ピット 219 基、柱穴列 4 基、性格不明遺構 2 基の総計 464 基の遺構が検出された。これらの遺構は江戸時代から本地点が大学に取り込まれる明治 43 年までに帰属する。

柱穴列は本地点東端部を南北に延びる 2 列（SB64、SB65）、それに接続し西へ延びる 2 列（SB82、SB397）が検出された。前者は江戸時代（幕末）の土地区画状況が比較的正確に把握できる参謀本部陸軍部測量局『五千分一東京図測量原図』（日本地図センター 1984）と、現代との対比より、加賀藩邸と組屋敷との地境の跡と考えられる。それぞれの柱穴には対応関係は認められず、最低 2 回の立て替えが行われたものと考えられる。後者は調査地点の北より 5 ライン付近に SB82 が、ほぼ中央 9 ライン北 1m 付近に SB397 が検出された。柱穴列間は約 18m（10 間）を測り、組屋敷内の地境施設と考えられる。これらの南北両側にはそれと並行して長方形土坑が集中して分布する。また柱穴列は確認されなかったが、13 ライン北側付近と 16 ライン付近にも遺構分布の希薄なエリアが東西に延びていることより、遺構としては捉えられなかったが、本来地境が想定されていた可能性が高く、本地点内での各屋敷地の間口幅は 10 間であったと想定される。また前述の参謀本部地図において東西の奥行きは 36m（20 間）を測ることから、1 屋敷地は間口（南北）10 間、奥行き（東西）20 間の 200 坪の区画が割り当てられていたことが判明した。『諸向地面取調書』（史籍研究会 1982）によれば本地点を含む御先手組組屋敷は内藤甚左衛門組にあたり、与力 1 人につき 200 坪が与えられたとの記載と一致することから本地点は与力の居住区であった可能性が高い。これらの柱穴に使用された礎石はほとんどが抜かれていたが、残存しているものには石垣石や軒丸瓦の瓦当を転用した例も検出された。

以上の成果を踏まえて、調査区北端から 5 ライン（SB82）までを A 区、9 ライン北 1m（SB397）までを B 区、12 ライン南 2m までを C₁ 区、それ以南を C₂ 区と区分する。

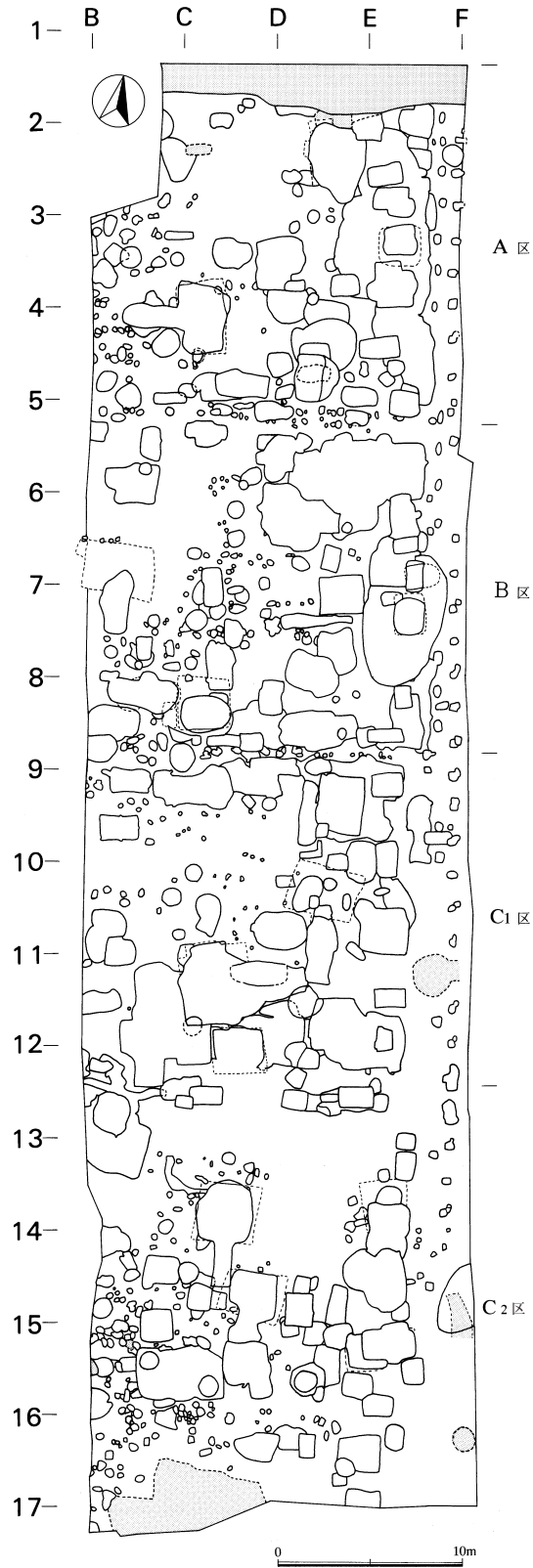
地下室は大形で階段を有するもの、梯子を利用したもの、小形で階段を有するものと有さないものなど総計 18 基検出された。そのうち大形の地下室は各屋敷内より 2～3 基検出されている。階段部はいずれも補強のために杭を打ち板材をあてがった痕跡が確認され、使用度の高さを物語っている。そのなかでも SU327 は全体的に整形、杭、梁などによる補強が特に丁寧に施され、壁面を削り抜き灯火具設置施設なども付設されていた。そして壁面には製作期間と製作者名が刻まれていた。

井戸は各屋敷地毎に検出されたがその数はまちまちである。但し構築場所が加賀藩邸との地境より 7～17m の位置に集中している傾向が認められる。

採土坑は A、B 区において、南北に主軸を有す不整楕円形、不整長方形を呈したものが加賀藩邸との地境付近に掘削されている。

本地点は屋敷奥側の約 10 間部分にあたり、家屋からはずれた裏手部分に該当することが考えられる。各屋敷地ともに家屋側には地下室、井戸などの施設が、加賀藩邸側の最奥部には採土坑、廃棄遺構などが、各屋敷地境には長方形土坑などが分布することで共通し、屋敷地奥部分の土地利用形態が比較的画一化されていたことが窺える。

第1節 遺構の概要



II-1 図 全体図

第II章 遺 構

| 遺構 | 区 | 図版番号 (I-@) | 遺物図版 (III-@) | | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 | | |
|------|---|---------------|--------------|----------|----------------|-----|-------------------|------------|-----|-----------|--------------|--------------|---------------|---------------|----|--|---------------|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | 骨角 ガラス | | 年代 | 遺構間 接合 | | | | |
| SK1 | A | 3 | 1 | | | | | | | | 貝・魚 | 19c 前 | | | | | |
| SU2 | A | 9、10 | 1~3 | 3~5 | | | | 125 127 | | | 136 137 | 貝・魚・ 鳥・哺乳 | VIIIc | 3 | | SK3、SX61-2 を切る。 | |
| SK3 | A | 2 13 14 | 6~10 109 | 10 11 | 115 117 | 118 | 125 130 131 | 133 | 132 | 137 | 貝・魚・ 鳥・哺乳 | VIb~VIIId | 2 | | | SU2、SU18、SK19、 SK21、SK24、SK25、 SK58、SK59 に切られ、 SK9、SK10、SK84、 SK85 を切る | |
| SK4 | A | 3 | | | | | 131 | | | | | | 17 前、19 | | | SK5 を切る | |
| SK5 | A | 3 | | | | | | | | | | | 17 ? | | | SK4 に切られる | |
| SK6 | A | 3 | | | | | | | | | | | 17 前~中 | | | | |
| SP7 | A | 3 | | | | | | | | | | | | | | 柱痕か? | |
| SK8 | A | 11 | 11 | | | | | | 135 | | | 貝 | 18 後 | | | | |
| SK9 | A | 14 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK10 | A | 14 | 12 | 12 | | 118 | | | | | | 貝・魚 | 19 前 | | | SK3 に切られる | |
| SK11 | A | 9 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK12 | A | 11 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK13 | A | 11 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK14 | A | 14 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK15 | A | 14 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK16 | A | 11 | 12、13 109 | 13 | | | | 133 | | 137 | 貝・哺乳 | VIIIa | | | | SX61-3、 SK139 を切る | |
| SE17 | A | 13 | | | | | | | | | | | 17 | | | | |
| SU18 | A | 14 | 13 14 | 14 15 | 116 | | 127 130 | | 132 | | 貝・魚・ 哺乳 | VI~VII | | | | SK3 を切る 寛保3年(1743)銘遺物 | |
| SK19 | A | 15 | | | | | | | | 137 | 哺乳 | 近代 (型紙銅版) | | | | SK3 を切る | |
| SK20 | A | 15 | | | 113 | | | | | | | | ? | | | | |
| SK21 | A | 15 | | | 115 | | | | | | | | 18 前葉 | | | SK3 を切る | |
| SK22 | A | 9 | 15、 16 | 16 | | | | | | | 貝・魚・ 哺乳 | | 19 中葉 | | | | |
| SK24 | A | 15 | | | | | | | | | 哺乳 | 近代(銅版) | | | | SK3、SK25 を切る | |
| SK25 | A | 15 | | | | 119 | 127 | | | 137 | 貝・鳥・ 哺乳 | | 18~19 前半 | | | SK3 を切り、SK24 に 切られる | |
| SP26 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | SP109 を切る | |
| SP27 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SP28 | A | 3 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SP29 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | SP30 に切られる | |
| SP30 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SP31 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SP32 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK33 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK34 | A | 15 | 16 | | | | | 133 | | | | | | 17 末 | | | |
| SK36 | A | 5 | 110 | 110 | | | 127 | | | 136 | 貝 | | | | | SU38 を切る | |
| SK37 | A | 12 | 16 | 16 | | | | | | | | | | 17 後~ 18 前 | | | |
| SU38 | A | 6、7 | 17 | 17 | 116 | | 131 | | | | 貝・哺乳 | | 18 中~ 後、近代 | | | SK36 に切られる | |
| SK39 | A | 8 | 17 18 | 19 | 115 | | | | | 137 | 魚 | | 19 前半 | | | SK50 を切る | |
| SK40 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK41 | A | 4 | | 19 | | | 125 129 131 | | | | | | | 明治 | | | SE83 を切る |
| SK42 | A | 8 | | | | | | | | | | | | 18 ? | | | SK50、SK51 を切る |
| SK43 | A | 4 | | 19 | | | | | | | | | | 18 前半 | | | |
| SK44 | A | 5 | | | | | | | | | | | | 18 ? | | | |
| SK45 | A | 5 | | | | | | | | | | | | ? | | | |
| SP46 | A | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK47 | A | 8 | | | | | | | | | | | | ? | | | |

II-1 表 検出遺構一覧表 (1)

第1節 遺構の概要

| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅱ-①) | 遺物図版(Ⅲ-②) | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|------|--|--|-----------|-----------|----------------|---|--------------------------|-----|-----|------------|--------------------------|-------------|----|--|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | | 骨角 ガラス | 年代 | | |
| SP48 | A | 8 | | | | | | | | | | | | |
| SK49 | A | 5 | | | | | | | | | | | | SB82と重複 |
| SK50 | A | 8 | | | | | | | | 貝 | 18前 | | | SK39に切られ、 SK42を切る |
| SK51 | A | 8 | | 19 | | | | | | | 18 | | | SK42に切られる |
| SK52 | A | 15 | | | | | | | | | 近代? | | | SB82と重複 |
| SK53 | A | 12 | | | | | | | | | 18前、 19前～中 | | | SK54、SB82を切る |
| SK54 | A | 12 | | | | | | | 138 | 貝・魚 | 17後～ 18前 | | | SK53に切られる |
| SK55 | A | 12 | | | | | | | | | | | | |
| SP56 | A | 12 | | | | | | | | | | | | |
| SP57 | A | 12 | | | | | | | | | | | | |
| SK58 | A | 13 | | | | | | | | | 明治(手 描き・銅版) | | | SK3、SK59を切る |
| SK59 | A | 13 | | 19 | | | | | | | | | | SK3を切り、SK58に 切られる |
| SK60 | A | 13 | 19 | | | | | | | 哺 | 18～19 (一部近代) | | | |
| SX61 | A | 9、11 | | | | | | | | | 18末～ 19前葉? | | | SU2に切られる |
| SU63 | B | 19 | 19～ 21 | 21～ 23 | | | 125 127 130 131 | | 132 | 136 138 | 貝 | Ⅳb～Ⅶ | | |
| SB64 | A B C ₁ C ₂ | 2、13、 16、17、 26、27、 33、47、 49、65、 68 | | | | | | | | | | 18前半? | | |
| SB65 | A B C ₁ C ₂ | 2、13、 16、17、 30、31、 33、34、 47、48、 49、50、 65、68 | | | | | | | | | | 18前半 | | |
| SK66 | B | 18 | 23 24 | 24 | | | | 135 | | | | 19中～ 明治初 | | SE173を切る |
| SK67 | A | 12 | | | | | | | | | | | | SK90、SK139を切る |
| SK68 | B | 22 | | | | | | | | | | | | |
| SP69 | B | 19 | | | | | | | | | ? | | | |
| SP70 | B | 19 | | | | | | | | | | | | |
| SP71 | B | 19 | | | | | 127 | | | | 17? | | | |
| SP72 | B | 19 | | | | | | | | | | | | |
| SP73 | B | 19 | | | | | | | | | | | | |
| SK74 | B | 22 | 24 | 24 | | | 130 | | | | 18 | | | |
| SK76 | B | 20 | | | | | | | | | | | | |
| SP77 | B | 20 | | | | | | | | | | | | |
| SP78 | B | 20 | | | | | | | | | | | | |
| SP79 | B | 20 | | | | | | | | | | | | |
| SK80 | B | 21 | | | | | 127 129 | | | | 18後半 (80・99で 取り上げ) | | | |
| SK81 | A | 12 | | | | | | | | | 17末 | | | SK86、SK87を切る |
| SB82 | A B | 5、8、 12、15 | | | | | | | | | 18後～ 19初 | | | 1-33 |
| SE83 | A | 4 | | | | | | | | | | | | SK41に切られる |
| SK84 | A | 14 | | | | | | | | | 18? | | | |
| SK85 | A | 14 | | | | | 127 | | | | | | | SK3、SK84に切られる |
| SK86 | A | 12 | 25 | 25 | | | 130 | | | | 18前 | | | SK81に切られ、SK87、 SK88、SK89を切る 86、87、88は不分離 |

Ⅱ-1表 検出遺構一覧表(2)

第Ⅱ章 遺 構

| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅱ-④) | 遺物図版(Ⅲ-④) | | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|-------|---|---------------|-----------|-----------|----------------|---|-----|-------------------|------------|-----------|----------|----------------|------------------|--------|---|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | 骨角 ガラス | | 年代 | 遺構間 接合 | | |
| SK87 | A | 12 | 25 | 25 | | | | 130 | 135 | | | 17 末 | | | SK81、SK86 に切られ、 SK88、SK89 を切る 86、87、89 は不分離 |
| SK88 | A | 12 | 25 | 25 | | | | 130 | | | | | | | SK86、SK87 に切ら れ、SK89 を切る 86、87、90 は不分離 |
| SK89 | A | 12 | | | | | 118 | 125 127 130 | | | 136 | 哺 | | | SK86、SK87、SK88 に切られる |
| SK90 | A | 12 | | | | | | | | | | 17 末～ 18 前葉 | | | SK67、SK89 に切ら れる |
| SK91 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP94 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SP95 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SK96 | B | 23 | | 25 | | | | | | | | 貝・魚 | 明治初 | | |
| SK97 | B | 28 | 25 | | | | | | | | | | 18 前 | | |
| SK98 | B | 25、27 | 26 | 26 | | | | | | | | | 18 後～ 19 初 | | |
| SK99 | B | 21 | 26 | 26 | | | | 127 | | | | | 18 後半 | 101 | 75 より編入 |
| SK100 | B | 28 | 26 27 | 27 | | | | 131 | 133 | | | 貝・哺 | 近代 | | SK111 を切る |
| SK101 | B | 26、27 | 27～ 32 | 32～ 35 | 113 115 | | | 129 130 131 | 133 135 | | 136 | 貝・鳥 | Ⅶa～Ⅶb (一部19中) | 99、176 | SK102、SK182 に切 られ、SK140 を切る |
| SK102 | B | 26 | | | | | | | | | | | | | |
| SP103 | A | 3 | | | | | | | | | | | | | |
| SP104 | A | 3 | | | | | | | | | | | | | |
| SK105 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SK106 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SP107 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SP108 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |
| SP109 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SK110 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SK111 | B | 28 | 35 | 35 | | | | | | | | | 19 前葉 | | SK100 に切られる |
| SP112 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SK113 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SP114 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SP115 | A | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| SP116 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |
| SP117 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP118 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | SP119 に切られる |
| SP119 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP120 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP121 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP122 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP123 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP124 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP125 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP126 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP127 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP128 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP129 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP130 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP131 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP132 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP133 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP134 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP135 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | 材痕有り |
| SP136 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |

Ⅱ-1 表 検出遺構一覧表 (3)

第1節 遺構の概要

| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅱ-④) | 遺物図版(Ⅲ-④) | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|-------|----------------|---------------|-----------|----------|----------------|-----|---------------------------------|------------|---|----------|--------------|--------------------------------|-------------------|---------------------------------------|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | | 骨角 ガラス | 年代 | | |
| SP138 | A | 5 | 35 | | | | | | | | 貝 | 17 後半 | | SP118、SP119 と重複 |
| SK139 | A | 11 | | | | | | | | | | | | SK16、SX61-3、SK67、SK90 に切られる |
| SK140 | B | 25、27 | 35 36 | 36 37 | 113 115 | | 126 127 129 130 131 | | | | 貝 | 19 前～ 中葉 18 後～ 19 中葉 | 174 293 | SK101 に切られる |
| SP141 | B | 28 | 37 | | | | | | | | | 19 前～ 中葉 | 142 | |
| SP142 | B | 28 | | | | | | | | | | 19 ? | 141 | |
| SP143 | B | 25 | | | | | | | | | | | | |
| SP144 | B | 25 | | | | | | | | | | | | |
| SK145 | B | 25 | | | | | | | | | | | | |
| SP146 | B | 25 | | | | | | | | | | | | |
| SP147 | B | 25 | | | | | | | | | | | | |
| SP148 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP149 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP150 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP151 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP152 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP153 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP154 | B | 28 | | | | | | | | | | 19 ? | | |
| SP155 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP156 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP157 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SP158 | B | 22 | | | | | | | | | | | | |
| SP159 | B | 22 | | | | | | | | | | | | |
| SP160 | B | 22 | | | | | | | | | | | | |
| SP161 | B | 22 | | | | | | | | | | | | |
| SP162 | B | 22 | | | | | | | | | | | | |
| SK163 | B | 23 | | | | | | | | | | | | |
| SP164 | B | 23 | | | | | | | | | | | | |
| SP165 | B | 23 | | | | | | | | | | 17 ? | | SK166 を切る |
| SK166 | B | 23 | | | | | | | | | | 19 前～ 中葉? | | |
| SP167 | B | 23 | | | | | | | | | | | | |
| SP169 | B | 23 | | | | | | | | | | | | |
| SP170 | B | 23 | 37 | | | | | | | | | | | |
| SP171 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SK172 | B | 28 | | | | | | | | | | | | |
| SE173 | B | 18 | | | | | | | | | | | | SK66 に切られる |
| SE174 | B | 23 | 38 | | | | | | | | 貝 | IVb (1703 下限) | 140 | ○ (元) |
| SK175 | B | 23 | | | | | | | | | | 18 前半 | | |
| SU176 | B | 24 | 39 40 | 40 | | 119 | 130 131 | | | | 貝 | IVb～V、 VIIa～VIIb (一部19中) | 101 188 358 | SK306、SK309、 SK320 を切る |
| SP177 | B | 23 | | | | | | | | | | | | |
| SK178 | B | 23 | | | | | | | | | | | | |
| SK179 | B | 20 | | | | | | | | | | | | |
| SK180 | B | 20 | | | | | 129 | | | | | 17 ? | | |
| SK182 | B | 25、27 | 41 | 41 | | | 127 | | | | | 18 前、 19 中葉 | | SK101 を切る |
| SK185 | C ₁ | 35 | 41 42 | | | | | | | | 貝 | 18 後半 | | |
| SK186 | C ₁ | 35 | 42 | 42 | 115 | | 126 | | | | 貝・魚 | 19 前半 | | |
| SK187 | C ₁ | 47 | | | | | | | | | | 18 | | |
| SK188 | C ₁ | 43 | 42 43 | 43 44 | 115 | 119 | 126 127 | 134 135 | | 137 | 貝・魚・ 鳥・哺乳 | VIIIb～VIIIc | 176 | SK245、SK252、SK258、 SK259、SK501 を切る |

Ⅱ-1 表 検出遺構一覧表(4)

第Ⅱ章 遺 構

| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅰ-②) | 遺物図版 (Ⅲ-②) | | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|-------|----------------|---------------|------------|----------|-------------------|---|--------------------------|-----|-----|------------|-------------|-----------------|-------------------|----|--------------------------------|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | 骨角 ガラス | | 年代 | 遺構間 接合 | | |
| SU189 | C ₁ | 40 | 45 46 | 46 47 | | | 126 127 130 | 135 | | | | 18末～ 19初 | | | |
| SP190 | A | 15 | | | | | | | | | | | | | |
| SP191 | B | 20 | | | | | | | | | | | | | |
| SK192 | B | 20 | | | | | | | | | | 17末? | | | |
| SP193 | B | 20 | | | | | | | | | | | | | |
| SK194 | B | 20 | 48 | 48 | | | | | | | 貝・哺 | 17末～ 18初 | 292 | | |
| SK196 | B | 28 | | | | | | | | | | | | | |
| SK197 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | | | SK275を切る |
| SE198 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | | | |
| SE199 | C ₁ | 38 | | 48 | | | | | | | | 近代 (型紙まで) | | | SK292、SK293、 SU295を切る |
| SK200 | C ₁ | 37 | 48 | 48 | 114 115 117 | | | | 132 | 136 138 | 貝・魚・ 鳥・哺 | 19～近代 (銅版まで) | 291 293 297 | | SU294、SU295、 SK297、SK298を切る |
| SP201 | A | 15 | | | | | | | | | | | | | |
| SP202 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP203 | A | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| SP204 | A | 8 | | | | | | | | | | | | | |
| SP205 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP206 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP207 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP208 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP209 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP210 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP211 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP212 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP213 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SP214 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SP215 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SP216 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SP217 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | 218を切る |
| SP218 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SP219 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SK220 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | SK163に切られる |
| SP221 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |
| SP222 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |
| SP223 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP224 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SK225 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | |
| SP226 | A | 11 | | | | | | | | | | | | | |
| SK227 | B | 25 | | | | | | | | | | | | | |
| SK228 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SK229 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SK230 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP241 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP242 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SK245 | C ₁ | 43 | 49 | 49 | | | 127 129 130 131 | 133 | | | 貝・魚・ 鳥・哺 | 18前 | | | SK188に切られる |
| SK246 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | | | | |
| SK247 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | | | | |
| SK248 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | 17? | | | |
| SK249 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | | | | |
| SK250 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | 18前～中葉 | | | |
| SP251 | B | 23 | | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |

Ⅱ-1表 検出遺構一覧表(5)

第1節 遺構の概要

| 遺構 | 区 | 図版番号 (I-@) | 遺物図版(III-@) | | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|-------|---------------------|---------------|-------------|-----------|-------------------|-----|-------------------|-------------------|-----|------------|----------|--------------|--------------------------------------|---|--|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | 骨角 ガラス | | 年代 | 遺構間 接合 | | |
| SK252 | C ₁ | 43 | 50 | 50 | | | 126 127 | | | | | 貝 | 19前 | 293 | SK188に切られる |
| SU254 | C ₁ | 45 | 50 | 50 | | | 127 | | | | | | 18前 | | |
| SK255 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | | 18前 (一部19) | | |
| SP256 | B | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| SP257 | A | 11 | | | | | | | | | | | | | |
| SK258 | C ₁ | 43 | | 50 | | | | | | | | 哺乳 | 19前 | 295、293 | SK188に切られる |
| SK259 | C ₁ | 43 | 50 | 50 | | | 127 | | | | | 哺乳 | 18後～ 19初 18後 (JCなし) | | SK188に切られる |
| SK260 | B | 29 | 51 | | | | 127 | | | | | | 19前～中葉 | | SK306を切る |
| SK275 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | 17中葉 | | SK197を切る |
| SK278 | C ₁ | 40 | | | | | | | | | | | | | |
| SP280 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | | | |
| SP281 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | | | |
| SP283 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | | | |
| SP290 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | | | |
| SK291 | C ₁ | 46 | 51 | 51 | 116 | | | | | | | 貝・魚・ 鳥・哺乳 | 19前～中 (18前含) | 200、292、 293、296、 402 | SK292を切る |
| SK292 | C ₁ | 46 | 52 109 | 52 53 | 115 116 | 119 | 126 128 | | | 137 138 | | 貝・魚・ 哺乳 | VIIa～VIIId | 194、291、 293、296 | SK296を切る。 SE199、SK291、 SK293に切られる。 |
| SK293 | C ₁ | 38 | 53～ 55 | 55～ 57 | 114 115 116 | | 128 129 130 | 133 134 135 | 132 | 138 | | 貝・魚・ 哺乳 | VIIa～VIIId (微量近代 含、銅版、 ゴム版) | 140、200、 252、258、 291、292、 294、295、 296、297、 358、402 | SK292、SU294、 SU295、SK299、 SK508を切る。 SE199、SK200に切 られる。 |
| SU294 | C ₁ | 38 | 57、58 | 58 | 115 | | 131 | 133 | | | | | V～VI | 293 | SK200、SK293に切られる |
| SU295 | C ₁ | 41、42 | 59～ 61 | 61 62 | 115 | | | | | 136 | | 貝・哺乳 | VIIId VII | 258、293、 296、298、 299、402 | SU295上を含む。 SE199、SK200、SK293、 SK321に切られる |
| SK296 | C ₁ | 46 | 62 | 62 | 115 | | | | | | | | 19前～中 | 291、292、 293、295、 402 | SP485を切る。 SK292に切られる。 |
| SK297 | C ₁ | 37 | 63 | 63 | | | | | | 138 | | 貝 | 19前～中 | 200 293 | SK200に切られる |
| SK298 | C ₁ | 37 | 63 64 | 64 | | | 128 | | | | | 貝・魚・ 哺乳 | 19前～中 | 295 | SK200に切られる |
| SK299 | C ₁ | 38 | 64 65 | 65 | | 118 | 126 128 129 | 134 | | 136 | | | 19前 | 295 348 | SK508を切る。 SK293に切られる。 |
| SE300 | B C ₁ | 24 | 65 66 | | | | | | 132 | | | 貝 | 17末 (少量19前) | | |
| SK301 | B | 29 | 67 68 | 68 | | | 126 128 | 135 | | | | | 19前 | | SK306、SP310に切 られる |
| SK302 | B | 33 | | | | | | | | | | | | | SK359に切られる |
| SP303 | A | 11 | | | | | | | | | | | 18後? | | |
| SP304 | A | 11 | | | | | | | | | | | | | |
| SP305 | A | 6 | | | | | | | | | | | | | |
| SK306 | B | 29 | 68 | 68 | | | | | | | | | 19前～中 | 309 | SU176、SK260に切られ、 SK301、SK308、SK309、 SP310を切る |
| SU307 | C ₁ | 39 | 69 | | | | | | | 136 | | 貝 | 18前～後 (広東なし) 18中～後 (広東なし) | | SK501に切られる |
| SK308 | B | 29 | | | | | | | | | | | 19前 | | SK306、SK309に切られる |
| SK309 | B | 29 | | | | | | | | | | | 19前 | 306 | SU176、SK306に切 られ、SK308を切る |
| SP310 | B | 29 | | | | | | | | | | | | | SK301を切り、 SK306に切られる |

II-1表 検出遺構一覧表(6)

第II章 遺 構

| 遺構 | 区 | 図版番号 (I-②) | 遺物図版(III-②) | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|-------|----------------|--------------------|-------------|-----------|----------------|---|--------------------------------------|------------|---|----------|------------|----------------------------|------------|-------------------------------------|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | | 骨角 ガラス | 年代 | | |
| SK311 | C ₂ | 54 | 69 | | | | | | | | 貝 | 19 前葉 | 312 | SK313 に切られ、 SK312 を切る |
| SK312 | C ₂ | 54 | | 69 | | | | 130 | | | | 19 前葉 | 311 | SK311、SK313 に切られる |
| SK313 | C ₂ | 54 | | | | | | | | | | 近代(型紙、銅版) | | SK311、SK312 を切る |
| SK314 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | 17 後半 | | SK348、SK401 を切る |
| SK316 | B | 23 | | | | | | | | | | 18 後 | | |
| SK317 | B | 23 | 69 | | 115 | | | | | | 哺乳 | 18 後 | | SK96 に切られる |
| SK318 | C ₂ | 64 | | | | | | | | | | 18 後～ 19 前葉 | | |
| SK319 | C ₂ | 64 | 69 | 70 | | | | | | | | 19 前～中 | | SK318、SK502、 SK504 を切る |
| SK320 | B | 24 | | | | | | | | | | 17 後半 | | SU176 に切られる |
| SK321 | C ₁ | 40,41(ボ イント)、42 | | | | | | | | | | 19 前～ 中葉 | | SU295 を切る |
| SK323 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | 18 | | |
| SK324 | C ₁ | 51 | | | | | | | | | | | | |
| SK325 | C ₁ | 51 | 70 | | | | 126 | | | | | 18～19 前 | | |
| SK326 | C ₂ | 51 | | | | | | | | | 貝・哺乳 | 17 ? | | SX334 に切られる |
| SU327 | C ₂ | 56、57 | 70 109 | | | | 130 | | | 136 | | 18 | | SK525 を切る |
| SE328 | C ₂ | 58、59 | | | | | | | | | | | | SK331、SK339 に切られる |
| SP329 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SK330 | C ₂ | 58、59 | 70～ 73 | 73～ 75 | | | 126 128 | 133 135 | | 136 | 貝・魚 | VII | | SE333、SK522 を切る |
| SK331 | C ₂ | 58、59 | 75 76 | 76 | | | 126 | | | | 貝・哺乳 | 18 前半、 19 後半 | | 明治7年一銭硬貨。 SE328、SK336 を切る |
| SK332 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SE333 | C ₂ | 58 59 | 76 | | | | | | | | | 17 末 | | ○ (元) SK330 に切られる |
| SX334 | C ₂ | 51 | 76 | | | | | | | | | 近代 19 中 (近代含) | | SK326 を切る |
| SU335 | C ₂ | 69 | 76 77 | 78 | | | 120 ～ 125 126 128 130 | | | | 貝・魚・ 哺乳 | 17 末 (1703 下 限)、19 前 | | ○ (元) SK481 を切る。 SK387 に切られる。 |
| SK336 | C ₂ | 58 | | | | | 128 129 | | | | | 18 ? | | SK331 に切られる |
| SK337 | C ₂ | 69 | 78 | 79 80 | | | 128 130 | 133 | | 137 | 貝・哺乳 | 18 後～ 19 前葉 | 338 382 | SK338 を切る |
| SK338 | C ₂ | 69 | 80 | 81 | | | 128 | | | | 貝・哺乳 | 19 前 | 337 | SK337 に切られる |
| SK339 | C ₂ | 58、59 | 81 | | | | | 133 | | | | 近代 | | SE328 を切る |
| SK340 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | 貝 | 18 前～ 中葉 | | |
| SK341 | C ₁ | 39 | | | | | | | | | | | | |
| SK342 | C ₁ | 39 | | | | | | | | | | ? | | |
| SP343 | C ₁ | 39 | | | | | | | | | | | | |
| SP344 | C ₁ | 39 | | | | | | | | | | | | |
| SK345 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | 19 前～ 中葉? | | |
| SK346 | C ₁ | 44 | | | | | | | | | | 19 前 | | SK348 を切る |
| SK347 | C ₁ | 48 | | | | | | | | | | 18 前～ 中葉 | | |
| SK348 | C ₁ | 44 | 81 | 82 | | | 129 | 134 | | | 貝 | 19 前～中 | 299 | SK314、SK346 に切られる |
| SK349 | C ₁ | 40 | | | | | | | | | | | | |
| SK350 | C ₁ | 49 | | | | | | | | | | 17 末～ 18 前葉 | | |
| SP351 | C ₁ | 40 | | | | | | | | | | | | |

II-1 表 検出遺構一覧表(7)

第1節 遺構の概要

| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅱ-①) | 遺物図版(Ⅲ-②) | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|-----------------|----------------|----------------|-----------------|-------------|----------------|---|--------------------------|------------|---|------------|-------------|---------------------------------|--------------------------|--|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | | 骨角 ガラス | 年代 | | |
| SP352 | C ₁ | 40 | | | | | | | | | | | | |
| SP353 | C ₁ | 40 | | | | | | | | | | | | |
| SP354 | C ₁ | 40 | | | | | | | | | | | | |
| SK356 | B | 30 | 82 | 82 | | | 128 131 | 135 | | | 貝・哺 | 近代(型紙・銅版) | 357 | SK393、SK395、SK397を切る |
| SK357 | B | 32 | 82 83 109 | 83 84 | | | 128 130 | | | | 貝 | 18後半～ 19前半 18後半 (JCなし) | 356 | SK393に切られる |
| SK358 | B | 33 | 84～ 87 | 87 | 115 116 | | 126 128 129 131 | | | 136 137 | 貝・魚・ 鳥・哺 | 明治中葉 (型紙・少量銅版) | 176 293 359 392 | SK359、SK394、SK391など全ての遺構を切る。 15、17年硬貨 |
| SK359 | B | 33 | 88 | 88 89 | | | | | | 137 | 貝 | 18末～近代(手描き) 18後・19 中～明治初 | 358 | SK358に切られ、SK360、SK391、SK394を切る |
| SK360 | B | 33 | 89 | | | | | | | | 魚 | 18前～中葉 | | SK359に切られる |
| SE371・ SU385 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | 18前～ 中葉 | | SU385と同一遺構。 SK386に切られる |
| SK372 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | | SK379、SP536を切る |
| SK373 | C ₂ | 62 | 89 | | | | 131 | | | | | 18 | | SK379、SK380を切る |
| SK377 | C ₂ | 65 | | | | | | | | | | 19前～ 中葉 | | |
| SK378 | C ₂ | 65 | 89 | 89 | | | | | | 136 | 貝 | 19前～ 中葉 | | |
| SK379 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | | SK600を切る。SK372、SK373に切られる |
| SK380 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | 381、385 | SK373に切られる |
| SU381 | C ₂ | 66、67 | 90 | 90 91 | | | 130 | | | 136 | 貝 | 18後～ 19初 | 380 385 | SU382を切る。 SK399に切られる |
| SU382 | C ₂ | 66、67 | 91～ 93 | 93 | 116 | | 130 | 133 134 | | | | Ⅵb～Ⅶ | 337、 381 | SK390を切る。 SU381に切られる |
| SK383 | C ₂ | 60、61 | 93 | | | 119 | 126 | | | | | 17末～ 18前葉 | | |
| SK384 | C ₂ | 68 | | | | | | | | | | 19? | | SU389に切られる |
| SU385 | C ₂ | 62 | 94 | 94 | | | 126 | 133 134 | | 137 | 哺 | 近代(型紙) 18後～ 19前 | 380 381 | SE371と同一遺構 |
| SK386 | C ₂ | 62 | 94 | | | | | 134 | | 137 | 鳥 | 近代 (型紙) | | SE371・SU385、SK387を切る |
| SK387 | C ₂ | 62 | 94 | 94 | | | | | | | | 19前半 | | SU335、SK388、SK600を切る。SK386に切られる |
| SK388 | C ₂ | 62 | 94 | 94 | | | 130 | | | | | 18中葉(広東なし) | | SK387に切られる |
| SU389 | C ₂ | 60、61 | 95 96 | 96 | 115 | | 128 131 | | | | 貝 | 18末～ 19初 | | SK383を切る |
| SK390 | C ₂ | 67、68 | 97 | | | | | | | | | 17末～ 18前葉 | | SU382に切られる |
| SK391 | B | 30、31 | 97 | | | | | | | | | 17末～ 18初頭、 19前半 | 392 | SK358、SK359、SU392、SK393、SU396に切られ、SK403を切る |
| SU392 | B | 30 31 32 | 97～ 100 | 100、 101 | | 111 112 113 114 115 116 117 | 128 129 130 131 | 135 | | 136 | 貝・魚・ 鳥 | Ⅷd | 358 391 396 | SK391、SK403を切る |
| SK393 | B | 30 31 32 | 101 | 101 | | | 131 | | | | | 18後半(広東碗含)～ 19前半 | | SK357、SK391、SK395に切られ、SU396を切る |
| SK394 | B | 33 | 101 | | | | | | | | | 18後半(広東碗含) | | SK358、SK359に切られる |
| SK395 | B | 30、 31、32 | | 101 | | | | | | | | 18前半 | | SK356、SK393に切られる |

Ⅱ-1表 検出遺構一覧表(8)

第II章 遺 構

| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅱ-①) | 遺物図版(Ⅲ-②) | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 | |
|-------|---------------------|---------------|------------|------------|--|-----|------------|------------|-----|----------|-----------|-----------------------|---------------------|----|-------------------------|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | | 骨角 ガラス | 年代 | | | 遺構間 接合 |
| SU396 | B | 30, 32 | 102 103 | 103 104 | 112 113 114 115 116 117 | | 128 131 | 134 135 | 132 | | 貝・魚・ 鳥 | VIIIc | 392 | | SK391、SK393を切る |
| SB397 | B C ₁ | 21、 29、33 | | 104 | | | 131 | | | | | ? | | | 1-16 604、605、606含む |
| SK398 | C ₁ | 47 | 104 | 104 | | | | | | | 貝・鳥・ 哺 | 18～ 19中 | | | SK187に切られる |
| SK399 | C ₂ | 66、67 | | 105 | | | | | | | 貝 | 19前～ 中 | | | SU381を切る |
| SK401 | C ₁ | 48 | | 105 | | | | | | | | 18前、 19前 | | | SK347に切られ、 SK402を切る |
| SK402 | C ₁ | 48 | 105 106 | 106 | | | | 133 134 | | | 貝・鳥・ 哺 | VII～VIII | 292、293、 295、296 | | SK401を切り、 SK250に切られる |
| SK403 | B | 30 | | | | | | | | | | ? | | | SK391、SU392に切 られる |
| SP404 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP405 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SK406 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP407 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP408 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | | |
| SK409 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP410 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | | |
| SK411 | C ₂ | 63 | | 106 | | 118 | | | | | 貝 | 17末～ 18前葉、 19前半 | | | SK482を切る。 SK340に切られる |
| SK412 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | 19前? | | | SK413を切る |
| SK413 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | 17末～ 18前葉 | | | SK412、SK414に切 られる |
| SK414 | C ₂ | 63 | | 106 | | | | | | | | 18末～ 19前葉 | | | SK413を切る |
| SK415 | C ₂ | 63 | 107 | 107 | | | | | | | 貝・鳥 | 17末～ 18前葉 | | | |
| SE416 | C ₂ | 58 | | 107 | | | | | | | | 近代(明治) | | | |
| SK417 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | 18～19 | | | |
| SK418 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | | |
| SK419 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP420 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP421 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SK422 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP423 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP424 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | | |
| SP425 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP426 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP427 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP428 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP429 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP430 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP431 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP432 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP435 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP438 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP439 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP440 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP441 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP442 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP443 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP444 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP445 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| SP446 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | | |

II-1表 検出遺構一覧表(9)

第1節 遺構の概要

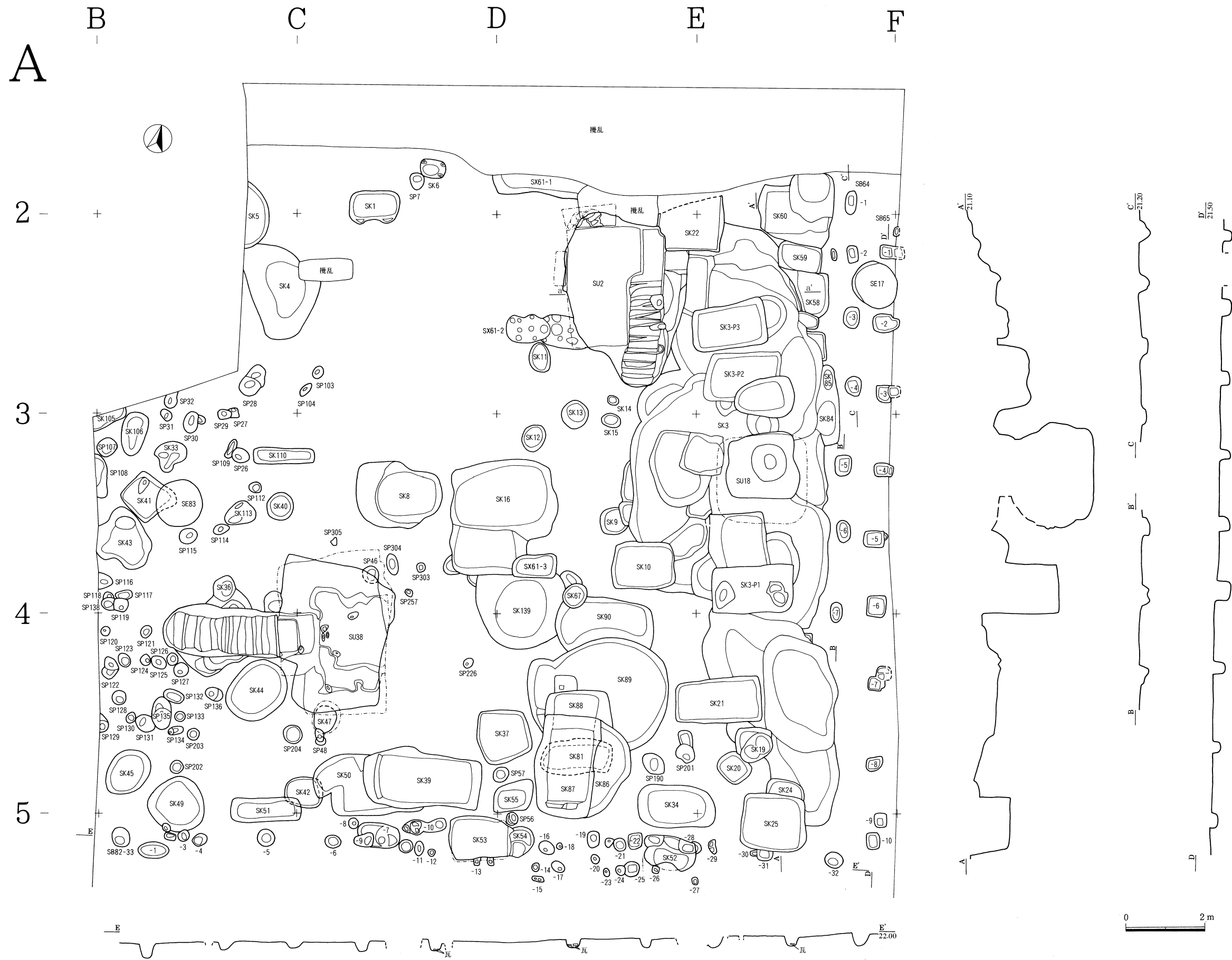
| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅱ-①) | 遺物図版(Ⅲ-②) | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火災 | 備考 |
|-------|----------------|---------------|-----------|-----|----------------|---|------------|---|---|----------|---------------|----|----|-------------------------------------|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | | 骨角 ガラス | 年代 | | |
| SP447 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP448 | C ₁ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP449 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP450 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP451 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP452 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | 18末～ 19前葉? | | | |
| SP453 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP454 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |
| SP455 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | |
| SP456 | C ₂ | 53 | | | | | | | | | | | | |
| SP457 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP458 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP459 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP460 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SK461 | C ₂ | 69 | 107 | | | | | | | | 19前～ 中葉 | | | |
| SK462 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP463 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP464 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP465 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP466 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP467 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP468 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SK469 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP470 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SK472 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP473 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP474 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP475 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP476 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP477 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP478 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP479 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SK480 | C ₂ | 69 | | 107 | | | 130 131 | | | 136 | 近代 (型紙) | | | SU335に切られる |
| SK481 | C ₂ | 69 | | | | | | | | | | | | SK411に切られる |
| SK482 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | 18? | | | |
| SK483 | C ₂ | 66、67 | | | | | | | | | 明治? | | | |
| SP484 | C ₂ | 66、67 | | | | | | | | | | | | |
| SP485 | C ₁ | 46 | | | | | | | | | | | | |
| SP486 | C ₁ | 46 | | | | | | | | | | | | |
| SP487 | C ₁ | 36 | | | | | | | | | | | | |
| SK488 | C ₁ | 38 | | | | | | | | | 19? | | | |
| SK501 | C ₁ | 39 | | | | | | | | | | | | SK188、SU307を切る |
| SK502 | C ₂ | 64 | | | | | | | | | 17? | | | SK319、SK504に切られる |
| SK504 | C ₂ | 64 | | | | | | | | | | | | SK502、SK506を切り、 SK318、SK319に切られる |
| SK506 | C ₂ | 64 | | | | | | | | | 18前～ 中葉 | | | |
| SK507 | C ₂ | 64 | 107 | | | | | | | | 19前～中 | | | SK504を切る |
| SK508 | C ₁ | 38 | | | | | | | | | | | | SK293、SK299に切られる |
| SP510 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP511 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP512 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP513 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP514 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SK515 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | 18? | | | |

Ⅱ-1表 検出遺構一覧表(10)

第Ⅱ章 遺 構

| 遺構 | 区 | 図版番号 (Ⅱ-②) | 遺物図版(Ⅲ-②) | | | | | | | 動物 遺体 | 遺物 | | 火 災 | 備 考 |
|-------|----------------|---------------|-----------|----|----------------|---|-----|---|---|----------|-----------|----|--------|--------------------------|
| | | | 陶磁器 | 人形 | 生産 関連 遺物 | 瓦 | 金属 | 石 | 木 | | 骨角 ガラス | 年代 | | |
| SP516 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP517 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP518 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SK519 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP520 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |
| SP521 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SK522 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | SK330 に切られる |
| SP523 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP524 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SK525 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP526 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | 柱痕はないが深い。 SU327 に切られる |
| SP527 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP528 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SP529 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | 柱痕有り |
| SP530 | C ₂ | 55、58 | | | | | | | | | | | | |
| SP531 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP532 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP533 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP534 | C ₂ | 60 | | | | | | | | | | | | |
| SP535 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | | |
| SP536 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | | |
| SP537 | C ₂ | 66 | | | | | | | | | | | | |
| SP538 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | | |
| SK539 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP540 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP541 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP542 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP543 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP544 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP545 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP546 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP547 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP548 | C ₂ | 51 | | | | | | | | | | | | |
| SK549 | C ₂ | 66 | | | | | | | | | | | | |
| SP550 | C ₂ | 66 | | | | | | | | | | | | |
| SP551 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | | |
| SP552 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP553 | C ₂ | 58 | | | | | | | | | | | | |
| SP554 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP555 | C ₂ | 63 | | | | | | | | | | | | |
| SP556 | C ₂ | 55 | | | | | | | | | | | | |
| SK557 | C ₂ | 52 | | | | | 129 | | | | | | | |
| SK600 | C ₂ | 62 | | | | | | | | | | | | SK379、SK387 に切られる |
| SK601 | C ₂ | 52 | | | | | | | | | | | | |
| SP602 | C ₁ | 35 | | | | | | | | | | | | |
| SP603 | C ₁ | 35 | | | | | | | | | | | | |

Ⅱ-1 表 検出遺構一覧表(11)



II-2 图 A区遺構配置図

第 2 節 A 区の遺構

SK1 (Ⅱ-3 図)

C1 グリッドに位置する遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、東西 120cm、南北 70cm、確認面からの深さ 68cm を測る。坑底はほぼ平坦に整形され、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、壁中位より確認面にかけてやや外傾する。南壁東西コーナー寄りに半円形のピットが存在するが、性格は不明である。

遺物は坑底直上よりひょうそくを伴って検出された瓦質の釣り灯籠 (Ⅲ-1 図 1、2) をはじめ、19 世紀前半の陶磁器類が二十数点出土している。

SU2 (Ⅱ-2、9、10 図)

D2 グリッドに位置する地下室である。東側で SK3、西側で SX61-2 と重複し、いずれの遺構よりも新しい。基本的な平面形態は長方形の室部の東側に階段が付設され、その昇降口が南壁から張り出す形態を呈している。規模は南北 (階段口から奥壁まで) 395cm、東西 240cm、確認面からの深さ 260cm を測る。階段部の全長は 260cm、幅は約 90cm、仰角 40° を測り、10 段のステップがロームの作り出しによって設けられている。各ステップ高は不規則で、ステップ前方が 1 段下がっていることから、各ステップの前方には板材もしくは石材による補強が施されていたと考えられる。また階段部東壁際には壁に沿って 3 箇所ピットが確認された。いずれも直径の半分ほど壁を掘りこんで作られている。階段東壁はロームを利用しており補強の必要性は低いこと、壁面は遺構確認面まで整形されており天井の崩落痕は認められないことより、階段部分は開口しており、その被い屋根に伴う柱穴と推定される。階段は室部南壁から約 100cm 南へ張り出して作出されているものの、室内にも約 160cm 張り出しており、地下室構築範囲が土地利用によって規制されていたことを窺わせる。

室部は、階段張り出し部分の存在により、L 字形を呈している。但し階段の延長から北壁に向かうエリアは床面から約 20cm 高いテラスを形成している。よって床面の範囲は南北 295cm、東西 150cm を測る長方形を呈している。壁面上部の観察から階段部以外には天井の崩落痕が認められ、本来は階段部のみが開口し、室部は全て地下部分に入っていたことが判明した。東壁には床面上 70cm に幅 90cm、高さ 50cm、奥行 30cm の棚状施設が設けられている。北壁にも幅 130cm、奥行 50cm の棚状施設が設けられているが、こちらは床面上約 20cm と低い。また、施設天井部には横方向の工具痕が全面的に認められ、天井部の崩落による再加工と推定される。一方底面約 2/3 には北東から南西方向に連続する工具痕が認められ、室部床面レベルまで下げようとして、途中で放棄した結果と推定される。

覆土は下層にロームブロックを多量に含み (8、10 層)、天井部を落として埋め戻された可能性も指摘できる。それを前提にすると、a-a' ラインにおける 6 層以降の覆土は、本遺構埋没後に形成された廃棄遺構として捉えられ、SK3 との重複部分 (階段東側のテラス) も本遺構本体ではなく、廃絶後の廃棄行為に関連して形成されたことが推定される。

遺物は覆土中 (1~6 層を中心に) より、東大編年Ⅷc 期の陶磁器・土器類、金属製品、骨角製品、ガラス製品、動物遺体が多量に出土しており、SK3 と遺構間接合が認められた。

SK3 (Ⅱ-2、10 図)

D2~E4 グリッドにかけて位置する遺構である。重複する SU2、SU18、SK19、SK21、SK24、SK25、SK58、SK59 より古く、SK9、SK10、SK84、SK85 より新しい。平面形は不整形を呈し、

その規模は最大で南北 15.2m、東西 5m を測る。壁面、坑底ともに凹凸が著しく、確認面から坑底までの深さは後述するピット 1～3 を除き、80～110cm を測る。本遺構は平面形態、複数の遺構の切り合いを彷彿させる坑底の様相から採土坑と考えられる。ただし、4 ライン南側と E ライン西側ではロームブロックを主体とした覆土が堆積し、E2～3 グリッド部分と覆土の性質が異なることから、前者が埋め戻された後に再び後者部分の掘削が行われた可能性が指摘される。前者を b、後者を a とする。b 部分はロームブロックを多量に含有するという覆土の性質と堆積状況から、短期間に埋め戻されたと推定され、遺物もほとんど含まれていなかった。それに対し、a 部分は暗褐色を主体とする覆土で、多量の遺物が含まれていたことから、最終的に廃棄土坑として利用されたと考えられる。なお本遺構と重複する遺構のうち SK19、SK21、SK24、SK25 は b 部分との重複である。

a 部分の坑底には P1～3 とした平面長方形を呈する掘り込みがある。P1 は東西 200cm、南北 120cm を測る長方形を呈し、SK3 坑底からの深さは 140～190cm を測る。坑底には不整形の浅い落ち込みが東西に並び 2 基存在する。覆土にはロームブロックを含む黒褐色土を有し、上部の覆土との間には時間差が存在するものと考えられる。P2 は東西 180cm、南北 120cm を測る平行四辺形を呈し、SK3 坑底からの深さは 80cm を測る。P3 は東西 185cm、南北 120cm を測る長方形を呈し、SK3 坑底からの深さは 30cm を測る。これらの掘り込み上部には a 部分の覆土が流入していることより、a 部分と同一遺構かそれよりも古い可能性があるが、確認することはできなかった。また後述するように本遺構出土遺物はⅧd 期を主体とするがⅥb 期に該当する遺物から含まれていること。重複する遺構の中で本遺構より新しい SU2、SU18 出土遺物がⅧc 期、Ⅵ～Ⅶ期に帰属することから、残念ながら調査時点では確認することができなかったが、本遺構は a、b 以外にも重複関係が存在したことが明らかである。

遺物は生産関連遺物を含む陶磁器・土器類、瓦、金属、石、木、骨角・ガラス製品、動物遺体が多量に出土し、その帰属年代は東大編年Ⅷd 期を主体とするが、東大編年Ⅵb 期段階の遺物から含まれ、それが遺構の重複によるものなのかは判断する術がないが、全体的な年代観としては幅が認められる。SK2 と遺構間接合が認められた。

SK4 (Ⅱ-3 図)

B2、C2 グリッドに位置する遺構である。重複する SK5 より新しい。平面形は不整形を呈し、東西 180cm、南北 240cm、確認面からの深さ 45cm を測る。覆土は焼土粒を微量に含む黒褐色土の単一層である。性格は不明である。

遺物は 17 世紀前半と 19 世紀の陶磁器、土器、金属製品が十数点出土している。

SK5 (Ⅱ-3 図)

B1、B2 グリッドに位置する遺構である。重複する SK4 より古い。遺構の西半分が調査区域外にあるため規模は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると推定される。覆土は北方向からの流入によって堆積しており、最上層の 2 層には焼土が含まれている。性格は不明である。

遺物は陶磁器が 1 点出土したにすぎない。

SK6 (Ⅱ-3 図)

C1 グリッドに位置する遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、東西 62cm、南北 48cm、確認面からの深さ 13cm を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。南西を除く各コーナーには小ピットが存在するが、性格は不明である。

遺物は 17 世紀前～中葉の陶磁器が数点出土している。

SP7 (Ⅱ-3 図)

C1 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、南北 40cm、東西 30cm、確認面からの深さ 22cm を測る。覆土は 2 層に分かれるが、その堆積状況から 1 層は柱の抜き取り穴と考えられる。

遺物は出土していない。

SK8 (Ⅱ-11 図)

C3 グリッドに位置する遺構である。平面形は隅丸長方形を呈しており、規模は東西 162cm、南北 130cm、確認面からの深さ 140cm を測る。坑底はほぼ平坦で壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土はほぼ水平に堆積しているが、特に 4、5 層には貝類が多量に廃棄されており、遺構廃絶後に廃棄土坑として転用されたことが窺われる。

遺物は 18 世紀後半の陶磁器が数十点の他、石製品、貝類が出土している。

SK10 (Ⅱ-14 図)

D3 グリッドに位置する遺構である。重複する SK3 より古い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東西 170cm、南北 125cm、確認面からの深さ 70cm を測る。坑底はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積を呈しており、3～7 層にかけて遺物が多量に出土した。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器、瓦、動物遺体がコンテナ約 3 箱出土している。

SK11 (Ⅱ-9 図)

D2 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、規模は東西 50cm、南北 70cm、確認面からの深さ 15cm を測る。性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK12 (Ⅱ-11 図)

D3 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、規模は南北 68cm、東西 55cm、確認面からの深さ 25cm を測る。覆土は黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積を呈している。性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK13 (Ⅱ-11 図)

D2、D3 グリッドに位置する遺構である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は 1 辺 68cm、確認面からの深さ 24cm を測る。坑底には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土にはロームブロックが多量に含まれ、短期間に埋め戻されたものと考えられる。性格は不明。

遺物は出土していない。

SK16 (Ⅱ-11 図)

C3、D3 グリッドに位置する遺構である。SX61-3、SK139 と重複し、それより新しい。平面形は不整 L 字状を呈し、東西に長い不整隅丸長方形部の南西に東西に長い長方形部が接続した形をとり、南北 290cm、東西 268cm、確認面からの深さ 132cm を測る。坑底は北側で凹凸が顕著な隅丸長方形を呈し、南側は 1 段テラス状に高く、平坦に整形されており、その差は 10cm を測る。覆土はレンズ状堆積を呈し、6 層からは貝類が多量に検出された。また、覆土全般にわたり炭化材が認められる。

遺物は 18 世紀末～19 世紀初頭の陶磁器、人形、石製品、骨角・ガラス製品、動物遺体などがコンテナ約 11 箱出土した。

SE17 (Ⅱ-13 図)

E2 グリッド位置する井戸跡である。平面形は直径 110×115cm を測るほぼ円形である。調査は安全上の理由から確認面下 160cm にて中止した。本遺構の周囲および壁面には、帰属する付属施設

は存在しない。覆土はほぼ水平堆積を呈しており、5層は井戸側の痕跡と考えられる。

遺物は17世紀代の陶磁器が数点出土している。

SU18 (II-14 図)

E3 グリッドに位置する遺構で、SK3 と重複関係にあり、それより新しい。本遺構は断面袋状を呈する地下室で、開口部の平面形は1辺約170cmを測る隅丸方形を呈する。竪坑部はほぼ垂直に立ち上がり、西壁では確認面下120cmで、東壁では70cmで天井部へ移行する。室部は北壁を除く3方向へ拡がりを見せ、室部床面の平面形は1辺220cmを測る隅丸方形である。床面、壁面ともに顕著な工具痕がみられ、床面に関しては壁から袋状を呈しているため平坦ではない。また中央部には浅い落ち込みが存在する。覆土は下層では緩やかな山状の堆積を呈し、上層ではレンズ状堆積に変化する。3層には動物遺体が多量に含まれ、同レベル付近よりイヌ1体が検出されている。

遺物は生産関連遺物を含む東大編年VI～VII期の陶磁器、土器、金属製品、木製品、骨角・ガラス製品、動物遺体が多量に出土している。

SK19 (II-15 図)

E4 グリッドに位置する遺構である。北東部でSK3 と重複し、それより新しい。平面形は不整形を呈し、東西90cm、南北85cm、確認面からの深さ35cmを測る。北西部に一段テラスを有し、坑底は∞状を呈している。遺物は銅版転写を施す近代の陶磁器、骨角・ガラス製品、動物遺存体が二十数点出土している。

SK20 (II-15 図)

E4 グリッドに位置する遺構である。平面形は1辺70cmを測る方形を呈し、確認面からの深さ20cmを測る。性格は不明である。

遺物は鞆の羽口が1点出土している。

SK21 (II-15 図)

E4 グリッドに位置する遺構で、東部でSK3 と重複し、それより新しい。平面形は長方形を呈し、東西185cm、南北115cm、確認面からの深さ20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底には著しい凹凸が認められる。性格は不明である。

遺物は18世紀前葉の陶磁器が十数点検出されている。

SK22 (II-9 図)

D2 グリッドに位置する遺構である。SU2 開口部との重複関係はない。遺構北半部は攪乱によって破壊されているので形態、規模ともに詳細は不明である。なお残存部における東西長は165cm、確認面からの深さは150cmを測る。覆土は西方向からの緩やかな流れ込みが認められる。全域にわたり焼土、炭化材が混入しているが、特に1、2層に集中していることから、埋没過程において火災による瓦礫整理遺構として利用された可能性もある。

遺物は19世紀中葉の陶磁器、土器、動物遺体がコンテナ6箱出土している。

SK24 (II-15 図)

E4 グリッドに位置する遺構である。SK3、SK25 と重複し、それらより新しい。平面形は1辺100cmを測る方形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。覆土は黒褐色土の単一層である。

遺物は近代(銅版転写)の陶磁器が二十数点出土している。

SK25 (II-15 図)

E4、E5 グリッドに位置する遺構である。重複するSK3 より新しく、SK24 より古い。平面形は長方形を呈し、東西160cm、南北145cm、確認面からの深さ100cmを測る。壁は垂直に立ち上が

り、床面も平坦であるが、部分的に工具痕が認められる。覆土はレンズ状堆積を呈し、3層下部にはイヌが、2層には多量の瓦が廃棄されていた。

遺物は18～19世紀前半の陶磁器、瓦、金属製品、骨角・ガラス製品、動物遺体がコンテナ2箱出土している。

SP28 (Ⅱ-3 図)

B2グリッドに位置する遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、南北75cm、東西50cm、確認面からの深さ20cmを測る。覆土の様相から2基の重複と考えられる。B2～B4グリッドにはピットが集中していることから、屋敷地内の境界などの性格が推定される。

遺物は出土していない。

SP30 (Ⅱ-4 図)

B3グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、南北55cm、東西32cm、確認面からの深さ22cmを測る。覆土は2層に分かれるが、1層は柱痕と考えられる。

遺物は出土していない。

SK33 (Ⅱ-4 図)

B3グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、東西80cm、南北80cm、確認面からの深さ15cmを測る。

遺物の出土はなく、年代、性格ともに不明である。

SK34 (Ⅱ-15 図)

D4、D5、E4、E5にかけて位置する遺構である。平面形は隅丸長方形を呈し、東西190cm、南北105cm、確認からの深さ70cmを測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が顕著に残っている。覆土の大半は1層が占め、短期間で埋め戻されたことが推定される。

遺物は17世紀末の陶磁器、石製品がコンテナ1箱出土している。

SK36 (Ⅱ-5 図)

C3、C4グリッドに位置する遺構である。SU38階段部分と重複し、それより新しい。形態は南北222cm、東西145cm、確認面からの深さ15cmを測る卵形部分に、東西55cm、南北76cm、確認面からの深さ32cmを測る楕円形の張り出し部分が接続する。卵形部分の坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、遺構内全面に厚さ約4cmの漆喰が貼られている。楕円形部分には瀬戸・美濃の甕(Ⅲ-110 図1)が口縁部をやや上方に向けた横位の状態で設置されており、卵形部分から続く漆喰で固定されていた。遺構内全面に漆喰を貼る事例は、池遺構、能舞台遺構で確認されているが、本遺構の場合、遺構形態、規模から能舞台でないことは明らかで、池遺構と判断される。そして遺構の一角に設置された甕は、魚の住処としての機能が考えられる。

遺物は陶磁器、金属製品、骨角・ガラス製品などが少量出土している。

SK37 (Ⅱ-12 図)

C4、C5グリッドに位置する遺構である。平面形は台形を呈し、長軸135cm、短軸125cm、確認面からの深さ15cmを測る。覆土はほぼ水平堆積を呈し、焼土を多量に含む。性格は不明である。

遺物は17世紀後半～18世紀前半の陶磁器、土器が十数点出土している。

SU38 (Ⅱ-6、7 図)

B3、B4、C3、C4に位置する地下室である。SK36と重複し、それよりも古い。東西方向の主軸を有し、室部西側に階段が付設されている。室部は南西角のみが二段角となる長方形を呈し、南北410cm、東西270cm、確認面からの深さ320cmを測る。天井部はほとんど崩落しているが、壁面

上に認められる天井の痕跡と、覆土として堆積したロームブロックの様相から、階段部付近を除く室部のほぼ全面が天井で被われていたと推定される。床面には南北 260cm、東西 180cm を測る不整形の浅い落ち込みが存在するが、その性格は不明である。一方、階段部は全長 400cm、幅 120～130cm を測り、10 段のステップを有する。これらのステップは盛土による貼り床を形成している。そのうち床面からの 2 段は室内に張り出し、奥行きが 40～45cm と他のステップと比して広くとられている。その他のステップの奥行きは平均 25cm を測る。また各ステップの最奥部を中心に直径数 cm の杭穴が多数確認され、一部に板材の痕跡も認められたことより、盛土によって形成されたステップの補強材として奥壁には板材が施されていたと考えられる。この盛土を外したところ、ロームを地山とする階段部からはステップの痕跡は消え、スロープが出現した。スロープと床面の境には 4 基の柱穴と 2 基の杭痕が存在した (Ⅱ-6 図下)。これらはいずれも床面に対し垂直に掘られているが (Ⅱ-7 図)、スロープとの関連を考えた場合、スロープ上に設けられた木製階段もしくは梯子を固定するための施設と推定される。即ち、本地下室は開口部からスロープ状施設を構築し、木製階段 (梯子) を付設し使用した段階と、スロープを廃し、盛土によって階段を形成し使用した段階への変遷を考えることができる。

遺物は 18 世紀中～後葉の陶磁器、土器、金属製品、動物遺体がコンテナ 3 箱検出された。一部近代の遺物も存在するが、天井陥没後の凹地に廃棄された資料と推定される。

SK39 (Ⅱ-8 図)

C4 グリッドに位置する遺構である。西側で SK50 と重複し、それより新しい。主軸は東西方向にあり、A、B 区境界遺構 SB82 に隣接する。平面形は長方形を呈し、規模は東西 295cm、南北 155cm、確認面からの深さ 95cm を測る。坑底、壁ともに凹凸が認められる。覆土は西方向からの流入によるレンズ状堆積を呈しているが、特に 3 層からは動物遺体、炭化材などが多量に出土し、廃棄土坑として利用されていたと考えられる。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器、骨角・ガラス製品、動物遺体が、コンテナ 5 箱出土している。

SK40 (Ⅱ-4 図)

B3 グリッドに位置する遺構である。平面形は直径約 70cm を測る円形を呈し、確認面からの深さは 20cm を測る。

遺物は出土していない。

SK41 (Ⅱ-4 図)

B3 グリッドに位置する遺構である。東側で SE83 と重複し、それより新しい。平面形は 1 辺 100cm を測る方形を呈し、確認面からの深さは 20cm を測る。北壁寄りに楕円形を呈する浅い落ち込みを有するが性格は不明である。覆土は暗褐色土の単一層であるが、瓦片を多量に含んでいた。

遺物は先述した瓦片を初め近代の陶磁器、人形、金属製品がコンテナ 1 箱出土している。

SK42 (Ⅱ-8 図)

B4、B5 グリッドに位置する遺構である。SK50、SK51 と重複し、それらより新しい。平面形は隅丸長方形を呈し、東西 100cm、南北 75cm、確認面からの深さ 10cm を測る。覆土は暗褐色土の単一層である。性格は不明。

遺物は 18 世紀と推定される陶磁器が数点出土しているにすぎない。

SK43 (Ⅱ-4 図)

B3 グリッドに位置する遺構である。西側が調査区域外に達するため詳細は不明であるが、平面形は不整形を呈し、南北 160cm、東西 (140cm)、確認面からの深さ 10cm を測る。覆土には焼土粒、

炭化物が多量に含まれているが、性格は不明である。

遺物は18世紀前半の陶磁器が二十数点出土している。

SK44 (Ⅱ-5 図)

B4 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、南北 160cm、東西 140cm、確認面からの深さ 20cm を測る。覆土にはロームブロックが多量に含まれている。性格は不明である。

遺物は18世紀と推定される陶磁器が数点出土している。

SK45 (Ⅱ-5 図)

B4 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、南北 125cm、東西 95cm、確認面からの深さ 15cm を測る。覆土には焼土粒、炭化物が多量に含まれている。性格、年代は不明である。

遺物は陶磁器が数点出土している。

SK49 (Ⅱ-5 図)

B4、B5 グリッドに位置する遺構である。南壁で SB82 と重複している。平面形は1辺約 140cm を測る不整形を呈し、確認面からの深さは 10cm を測る。坑底には凹凸が認められる。覆土には焼土粒が多量に含まれている。性格は不明であるが、B3、B4 グリッドに分布する類似遺構（不整形で浅い）とは覆土に多量の焼土が含まれている点でも共通している。

遺物は出土していない。

SK50 (Ⅱ-8 図)

C4 グリッドに位置する遺構である。重複する SK39 より古く、SK42 より新しい。東側を SK39 によって大きく切られているため、規模、形態の詳細は不明である。主軸は東西方向にあり、A、B 区境界遺構 SB82 に隣接する。残存部からは東西 280cm、南北 155cm、確認面からの深さ 70cm を測る不整形遺構と推定される。覆土は東側からの流入によるレンズ状堆積の様相を呈しているが、8 層には貝類の廃棄が認められ、遺構埋没過程で廃棄行為が行われたことが確認される。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器片がコンテナ 1 箱出土している。

SK51 (Ⅱ-8 図)

B4、B5 グリッド、A 区の南端部に位置する遺構である。SK42 と重複し、それより古い。主軸は東西方向にあり、A、B 区境界遺構 SB82 に隣接する。平面形は長方形を呈し、東西 180cm、南北 60cm、確認面からの深さ 25cm を測る。覆土は黒褐色土の単一層で、焼土粒、炭化物が少量含まれる。性格は不明である。

遺物は18世紀代の陶磁器、土器が三十数点出土している。

SK52 (Ⅱ-15 図)

D5 グリッドに位置する遺構である。SB82 と重複する。平面形は不整形を呈し、東西 130cm、南北 70cm を測る。坑底は北側に 1 段テラスを有し、確認面からの深さはテラス部で 20cm、南側の坑底で 30cm を測る。南壁は確認面から坑底へ約 25cm オーバーハングしている。覆土にはロームブロックが多量に含まれている。本遺構は A、B 区境界遺構 SB82 上に位置し、それと重複していることから、SB82 との関連も推定されるが詳細は不明である。

遺物は近代と推定される陶磁器が 3 点出土したにすぎない。

SK53 (Ⅱ-12 図)

C5、D5 グリッドに位置する遺構である。SK54、SB82 と重複し、いずれの遺構よりも新しい。平面形は東西方向に主軸を有する長方形を呈する。断面の観察から本来壁上方においてオーバーハングし、天井を有していたことが確認されたが、天井部のほとんどが崩落し、原形はとどめていなかった。

た。天井残存範囲での開口部規模は東西155cm、南北95cmを測る。坑底の規模は東西145cm、南北105cmを測り、確認面からの深さは65cmを測る。坑底、壁面ともに工具痕が残り、表面にはやや凹凸が存在する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁では坑底から35cmで、北壁では坑底から50cmで天井部へ移行する。覆土は下層(3、4層)では焼土粒、炭化物を多量に含む黒褐色土を基調とし、ほぼ水平に堆積しているのに対し、上層(1、2層)ではロームブロックを多量に含む暗褐色土が山状に堆積している。その様相から、火災後の瓦礫処理を行った後、ロームブロック主体の土で完全に埋め戻されたと推定される。

遺物は18世紀前半と19世紀前葉～中葉の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土している。

SK54 (II-12 図)

D5グリッドに位置する遺構である。西側でSK53と重複し、それより古い。平面形は楕円形を呈し、規模は南北90cm、東西70cmを測る。坑底は北側に三日月形のテラスを有し、南側に偏って存在する。

遺物は17世紀後半～18世紀前半の陶磁器、土器、骨角・ガラス製品、動物遺体が数十点出土している。

SK58 (II-13 図)

E2グリッドに位置する遺構である。SK3、SK59と重複し、それらより新しい。平面形は不整楕円形を呈し、最大長130cm、最大幅85cm、確認面からの深さ25cmを測る。坑底には工具痕による凹凸が残り、北壁に向い緩やかに下がっている。性格は不明である。

遺物は近代の陶磁器、土器が二十数点出土している。

SK59 (II-13 図)

E2グリッドに位置する遺構である。重複するSK3より新しく、SK58より古い。平面形は長方形を呈し、東西110cm、南北70cm、確認面からの深さ30cmを測る。坑底は丸みを帯び、中央部が最も低くなっている。

遺物は土製品が1点出土したのみである。

SK60 (II-13 図)

E1、E2グリッドに位置する遺構である。平面形は東西に長軸を持つ長方形部分と、その北東の方形の張り出し部分で構成されているが、張り出し部分の北側は工学部11号館基礎の攪乱によって破壊されているため、全容は不明である。長方形部分の規模は東西180cm、南北140cm、確認面からの深さ45cmを測る。方形張り出し部分の規模は東西110cm、南北残存長115cm、確認面からの深さ最大60cmを測り、坑底は北へ傾斜している。全体的に工具痕による凹凸が認められるが、特に長方形部東側から張り出し部分にかけて顕著である。

遺物は18～19世紀の陶磁器、土器、動物遺体が4層を中心にコンテナ2箱出土している。

SX61 (II-9、11 図)

南北に並ぶ3基の遺構で、D1～D3グリッドにかけて分布する。北から順に1からの枝番を振っている。まず各々について記載する。SX61-1はD1グリッドに位置し、北から東側にかけて攪乱を受け遺存状況は悪い。平面形は東西に伸びる長方形もしくは楕円形と推定され、残存値では最大長255cm、最大幅75cm、確認面からの深さ15cmを測る。覆土はロームブロック主体土で固く叩き締められている。SX61-2はD2グリッドに位置し、東側でSU2と重複し、それより古い。平面形は楕円形を東西に2つ並べた∞状を呈し、東西最大長200cm、南北80cmを測る。坑底は西側楕円部分では8cmと浅いが、東側楕円部分では32cmを測り、楕円形接続部分にて段差が生じている。

覆土は東側の深い部分には黒褐色土（4、5層）が堆積し、その上には暗黄褐色土、黒褐色土の互層に堆積している。特に3層から2層にかけて円形状の多数の凹みが存在し、その凹みに1層の暗黄褐色土が堆積している状態である。平面図における円形の分布はこの状態を表している。2、3層ともに全体に締まっているが、特に円形部分において顕著であることから、そこに強い圧力がかかっていたことが窺われる。SX61-3はD3グリッドに位置し、東西115cm、南北60cm、確認面からの深さは4cmと浅い。坑底には礎石と考えられる25～30cm大の扁平破砕礫が東西に2つ設置されている。礎石間は真々で45cmを測る。

3基の間隔は1、2が真々で390cm、2、3が真々で590cmを測り、各遺構間隔の関連性は薄い。また、形態的にも1、2の東西長が200cm以上に対して、3は115cmと大きくかけ離れている。1、2の覆土はローム主体土で強く叩き締められている点で共通するが、1には2に見られるような円形圧痕は確認されなかった。3は礎石が存在するものの、その周囲に1、2に見られるようなローム土による覆土は存在しなかった。以上の所見より、その方向性から調査時には同一遺構としたものの、3に関しては関連性が低いと推定される。1、2に関しては掘り方内をローム土によって叩き締める点で共通する点から、布掘り状の基礎遺構の可能性を指摘したい。

遺物は3基合わせても、18世紀末～19世紀前葉の陶磁器類が数点出土したにすぎない。

SB64（Ⅱ-2、13、16、17、26、27、33、47、49、65、68図）

Fライン西約1mを南北に伸びるピット列である。各々の平面形態は南北方向に長い楕円形もしくは隅丸長方形を呈す。規模は南北50～60cm、東西30～40cmが主体を成す。ピット間隔は真々で1と2の130cmなどの短い箇所もあるが、ほぼ180～200cm間隔で配置されている。断面観察から柱痕が確認されたピットもあり（1～7、9～11、17）、柱径は約10cmを測るものが主体的である。また柱痕が認められたピットのうち、11では坑底柱痕直下に、軒丸瓦の瓦当部を伏せた状態で礎石に転用していた（Ⅱ-26、27図）。この瓦の瓦当には加賀藩の家紋である梅鉢文が施されていた。16では根石に使用したと考えられる川原石が検出されているが（Ⅱ-33図）、本ピットは主軸を東西に有し、SB64のラインよりも若干東へずれていることから、別遺構の可能性もある。

本遺構には東側に隣接してSB65が平行して伸びている。ともに位置関係から組屋敷と加賀藩邸との境界施設と位置づけられる。加賀藩の家紋瓦が利用されていたこともそれを傍証する資料といえる。

遺物は18世紀代の陶磁器片が1点出土している。

SB65（Ⅱ-2、13、16、17、30、31、33、34、47～50、65、68図）

Fラインを南北に伸びるピット列である。各ピットの平面形は方形を主体とし、規模は1辺40～50cmを測る。各ピットは真々で170～190cm間隔で配置されている。検出されたピットのうち東西に重複する例が20例近く認められるが、そのうち18、19（Ⅱ-33図）、20（Ⅱ-47図）において新旧関係が確認でき、いずれも西側のピットが新しいことが確認された。断面観察において9例に直径10～15cmを測る柱痕が確認された。礎石を有するピットは間知石が転用された11（Ⅱ-16図）、破砕礫が利用された21（Ⅱ-47図）の他、26（Ⅱ-48図）では柱を固定するためにその脇に設置されたと考えられる破砕礫が検出されている。柱痕が残存するピットにおいても礎石が存在しないことから、本遺構は基本的に掘立柱構造物といえる。本遺構も先述したSB64同様、組屋敷と加賀藩邸の境界施設と考えられ、重複遺構の存在から少なくとも1回は建て替えが行われたことが判る。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器が、全体で十数点出土したにすぎない。

SK67（Ⅱ-12図）

D3グリッドに位置する円形を呈する小土坑である。南側でSK90、西側でSK139と重複関係に

あり、新旧は本遺構が新である。規模は南北50cm、東西55cm、確認面からの深度は最大16cmを計測する。壁は比較的フラットな坑底から緩やかに立ち上がっている。

遺物は出土していない。

SK81 (Ⅱ-12 図)

D4グリッドに位置する遺構である。SK86、SK87と重複し、いずれよりも新しい。平面形は不整楕円形を呈し、東西180cm、南北90cm、確認面からの深さ45cmを測る。坑底、壁面ともに凹凸が認められる。覆土は暗褐色土の単一層である。

遺物は17世紀末の陶磁器、土器が十数点出土している。

SB82 (Ⅱ-2、5、8、12、15 図)

5ライン南側で東西に伸びるピット列である。本遺構群として取り扱ったピットには形態、規模に多くのバリエーションが存在する。そのなかで直径30～40cmを測る円形のピットで、かつ同一ライン上に位置するものを抽出すると、西から33、4、5、6、11、16、21、28、31、32を見いだすことができる。これらのピットは真々でほぼ180cm間隔で配置されている。このうち5、6、11(Ⅱ-8 図)、16(Ⅱ-12 図)、21、31(Ⅱ-15 図)と半数以上のピットでは坑底から礎石に転用された瓦片が検出され、構築方法の共通性を見いだすことができる。本ピット列は組屋敷内での屋敷地の境界と推定され、9ライン北側で東西に伸びる同様のピット列までの距離は18m(10間)を測る。

遺物は18世紀後半～19世紀前半の陶磁器が数点出土したにすぎない。

SE83 (Ⅱ-4 図)

B3グリッドに位置する井戸跡である。SK41と重複し、それより古い。平面形は楕円形を呈し、長軸120cm、短軸115cmを測る。壁面には30～40cm間隔の足掛け穴が、三方に穿たれている。調査は確認面から2mまでで中止したが、覆土は黒色土の単一層で、短期間で埋め戻されたことを物語っている。開口部の直径から年代的には古いと推定されるが、詳細は不明である。

遺物は出土していない。

SK85 (Ⅱ-14 図)

E2グリッドに位置する遺構である。SK3、SK84と重複し、それらより古い。平面形は楕円形を呈し、南北70cm、東西40cm、確認面からの深さ10cmを測る。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土の単一層である。

遺物は金属製品(キセル)が1点出土したのみである。

SK86 (Ⅱ-12 図)

D4グリッドに位置する遺構である。重複するSK81より古く、SK87、SK88、SK89より新しい。平面形は不整円形を呈し、南北250cm、東西230cm、確認面からの深さ50cmを測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が著しく、坑底は壁際で低くなり、浅い落ち込みが環状に巡っている。その様相から植栽痕と推定される。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器、金属製品が十数点出土している。

SK87、SK88 (Ⅱ-12 図)

D4グリッドに位置する遺構である。

SK87は重複するSK81、SK86より古く、SK88、SK89より新しい。平面形は長方形を呈し、南北255cm、東西150cm、確認面からの深さ100cmを測る。坑底、壁面ともに比較的丁寧に整形されている。壁面は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、上方でハの字状に開いている。

SK88は重複するSK86、SK87より古く、SK89より新しい。南側のSK87との重複によって、

南部が残存していないので、詳細は不明である。規模は東西 170cm、確認面からの深さは残存部で 80cm を測る。覆土は中層（10、11 層）において多量のロームブロックを含む。

遺物は調査時に両遺構の明確な区別がつけられなかったことから、両遺構一括資料として取り上げざるをえなかった。17 世紀末の陶磁器、土器、金属製品がコンテナ 2 箱出土している。

SK89（Ⅱ-12 図）

D4 グリッドに位置する遺構である。重複する SK86、SK87、SK88 より古い。平面形は不整形を呈し、長軸 350cm、短軸 290cm、確認面からの深さ 40～50cm を測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が著しいが、壁際の工具痕が壁に沿って周回し、その部分の坑底が中央部よりも低くなっていることから、植栽痕と考えられる。

遺物は瓦片、金属製品、ガラス製品が出土している。

SK90（Ⅱ-12 図）

D4 グリッドに位置する遺構である。SK67、SK89 と重複し、それらより古い。平面形は SK89 との重複によって詳細は不明である。規模は残存値で長軸 245cm、短軸 110cm、確認面からの深さ 50cm を測る。坑底、壁面ともに工具痕が著しく、北壁において SK89 同様、壁に沿って工具痕が周回していることから、植栽痕の可能性が高い。

遺物は 17 世紀末～18 世紀前葉の陶磁器、土器が二十数点出土している。

SK105（Ⅱ-4 図）

調査区の北西端、A3、B3 グリッドに位置する遺構である。遺構の大半が調査区域外に及んでいるため、平面形、規模とも不明である。坑底、壁面ともに凹凸が著しい。年代、性格とも不明である。

遺物は出土していない。

SK106（Ⅱ-4 図）

B3 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、南北 115cm、東西 55cm、確認面からの深さ 15cm を測る。覆土は焼土粒、炭化物を含む黒色土を主体としている。年代、性格は不明である。

遺物は出土していない。

SP108（Ⅱ-4 図）

調査区の北西端、A3、B3 グリッドに位置する遺構である。遺構の大半が調査区域外へ及んでいるため平面形、規模の詳細は不明である。遺構ほぼ中央に幅 20cm を測る柱痕が断面に観察された。本遺構周辺には多数のピットが存在する。そのうち柱痕を有する SP116 とは真々で 270cm あり、またその同一直線上には屋敷地境界と位置づけた SB82-33 が 920cm 南に存在する。ただし、その間を結ぶピットが存在しないこと、このラインと SB82 の交差角は 95° と矩形を成していないことから、屋敷地内区画として断言することは控えたい。

遺物は出土していない。

SK110（Ⅱ-4 図）

B3 グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、東西 150cm、南北 40cm、確認面からの深さ 10cm を測る。覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土の単一層である。性格、年代は不明である。

遺物は出土していない。

SK113 (Ⅱ-4 図)

B3 グリッドに位置する遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸 80cm、短軸 60cm、確認面からの深さ 5cm を測る。坑底北側に深さ 10cm を測る小ピットを有する。性格、年代は不明である。

遺物は出土していない。

SP116 (Ⅱ-5 図)

B3 グリッドに位置する遺構である。遺構西側が調査区域外に及ぶため詳細は不明であるが、現存部の様相から平面形は楕円形を呈すると推定される。規模は南北 45cm、確認面からの深さ 40cm を測る。東壁に接して幅 15cm を測る柱痕が認められた。本遺構は先述したように SP108 を含めた屋敷地内境界の可能性もある。

遺物は出土していない。

SP135 (Ⅱ-5 図)

B4 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、南北 80cm、東西 50cm、確認面からの深さ 50cm を測る。西壁に接して幅 15cm を測る柱痕が認められた。本遺構周辺に関連する遺構は見いだせず、性格、年代ともに不明である。

遺物は出土していない。

SP138 (Ⅱ-5 図)

B3 グリッドに位置する遺構である。SP118、SP119 と重複している。平面形は楕円形を呈すると推定される。規模は南北 30cm、確認面からの深さ 20cm を測る。本遺構周辺には同規模のピットが多数分布しているが、関係は不明である。

遺物は 17 世紀後半の陶磁器、土器が十数点出土している。

SK139 (Ⅱ-11 図)

C3、C4、D3、D4 グリッドにまたがって位置する遺構である。重複する SK16、SX61-3、SK67、SK90 よりも古い。平面形は直径 220cm を測る円形を呈すると推定され、確認面からの深さは 50cm を測る。坑底、壁面ともに工具痕が著しく、その様相から植栽痕と考えられる。

遺物は出土していない。

SP190 (Ⅱ-15 図)

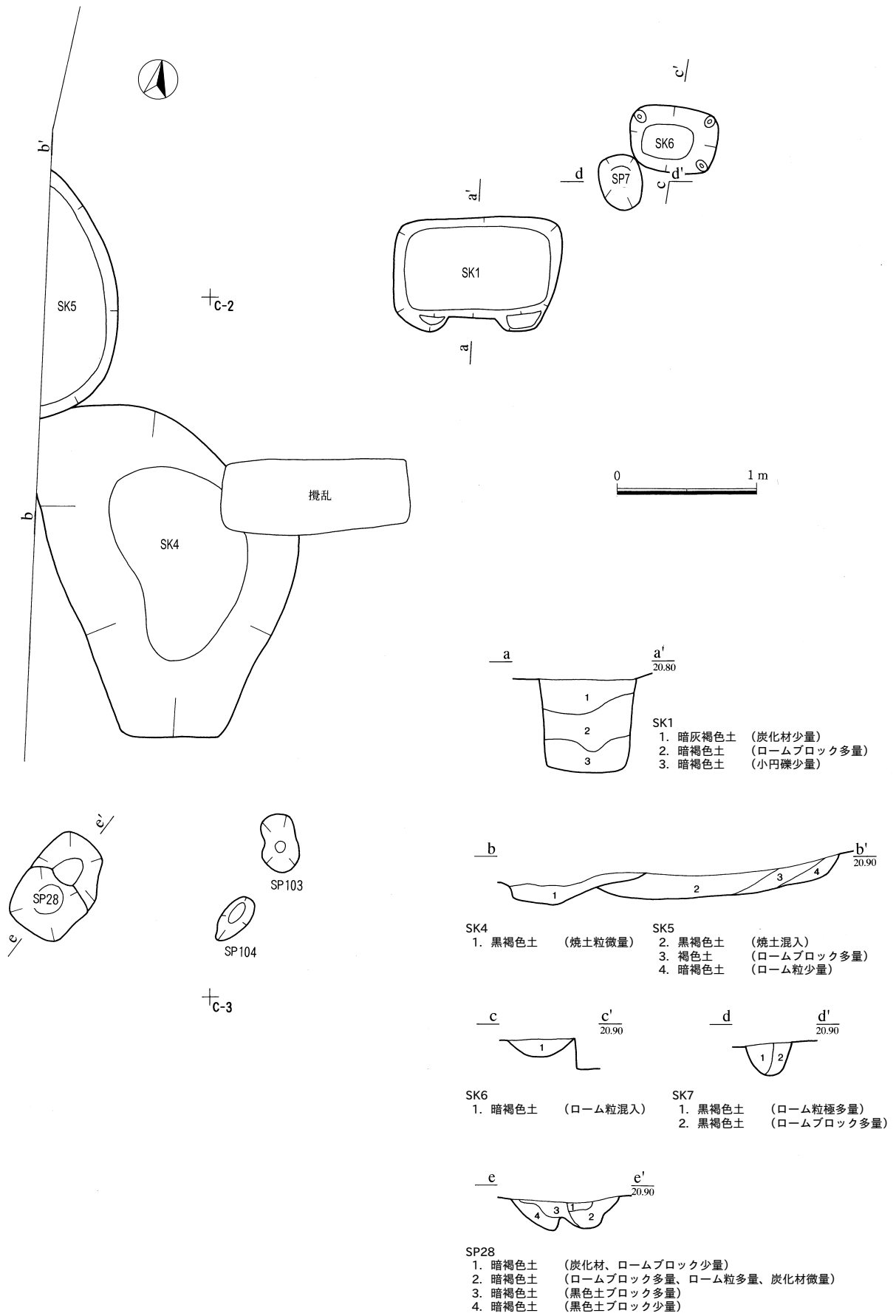
D4 グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸 60cm、短軸 50cm、確認面からの深さ 10cm を測る。覆土は焼土粒を多量に含む暗褐色土の単一層である。

遺物は出土していない。

SP201 (Ⅱ-15 図)

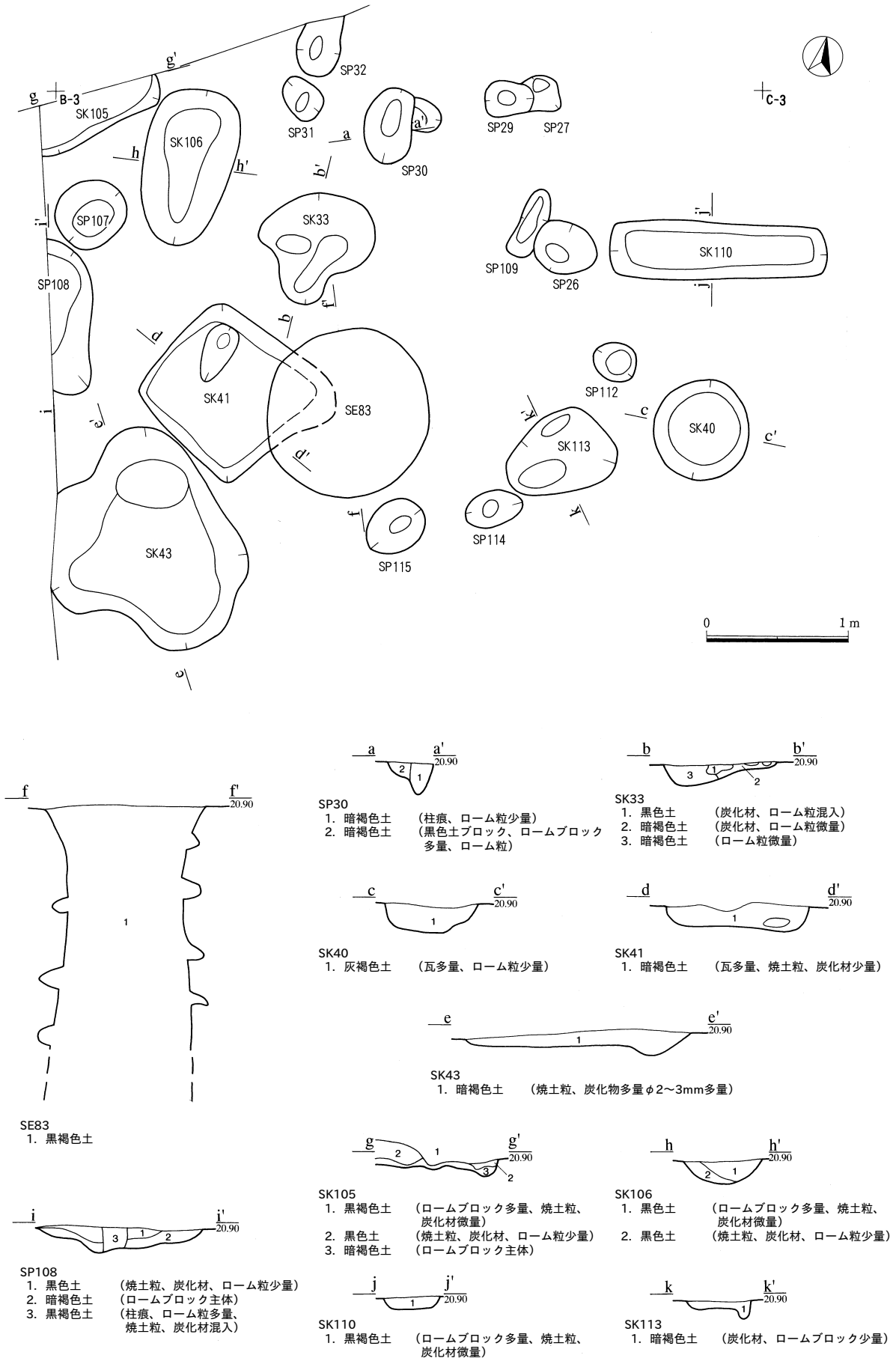
D4 グリッドに位置する遺構である。平面形は柄鏡形を呈し、北側が方形、南側が円形を呈している。規模は長軸 75cm、短軸は方形部で 35cm、円形部で 45cm、確認面からの深さは方形部で 10cm、円形部で 75cm を測る。年代、性格は不明である。

遺物は出土していない。

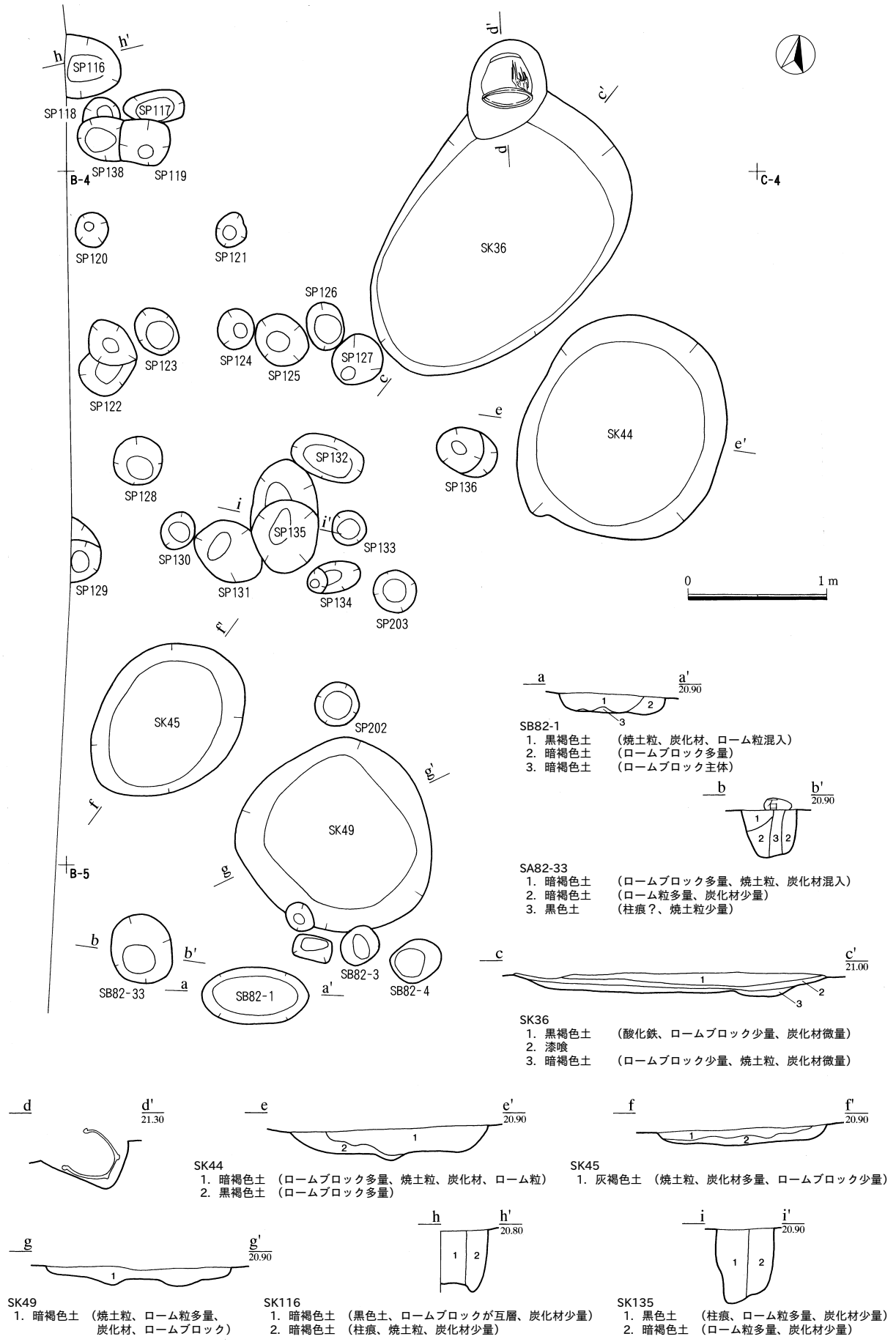


II-3 図 A区遺構 (1)

第2節 A区の遺構

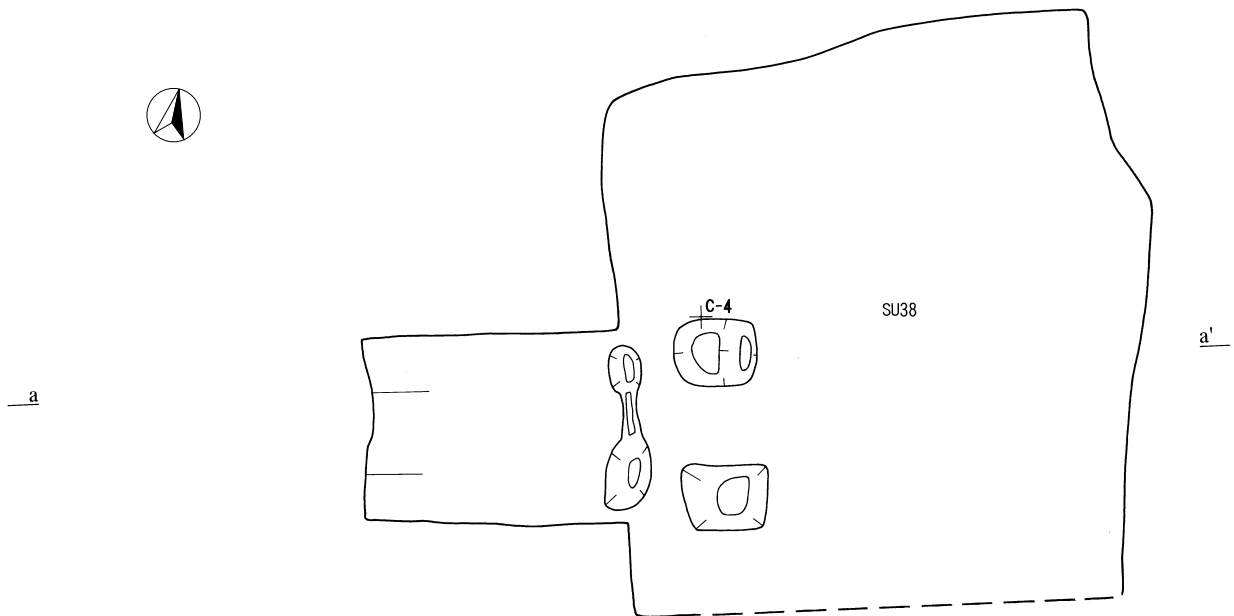
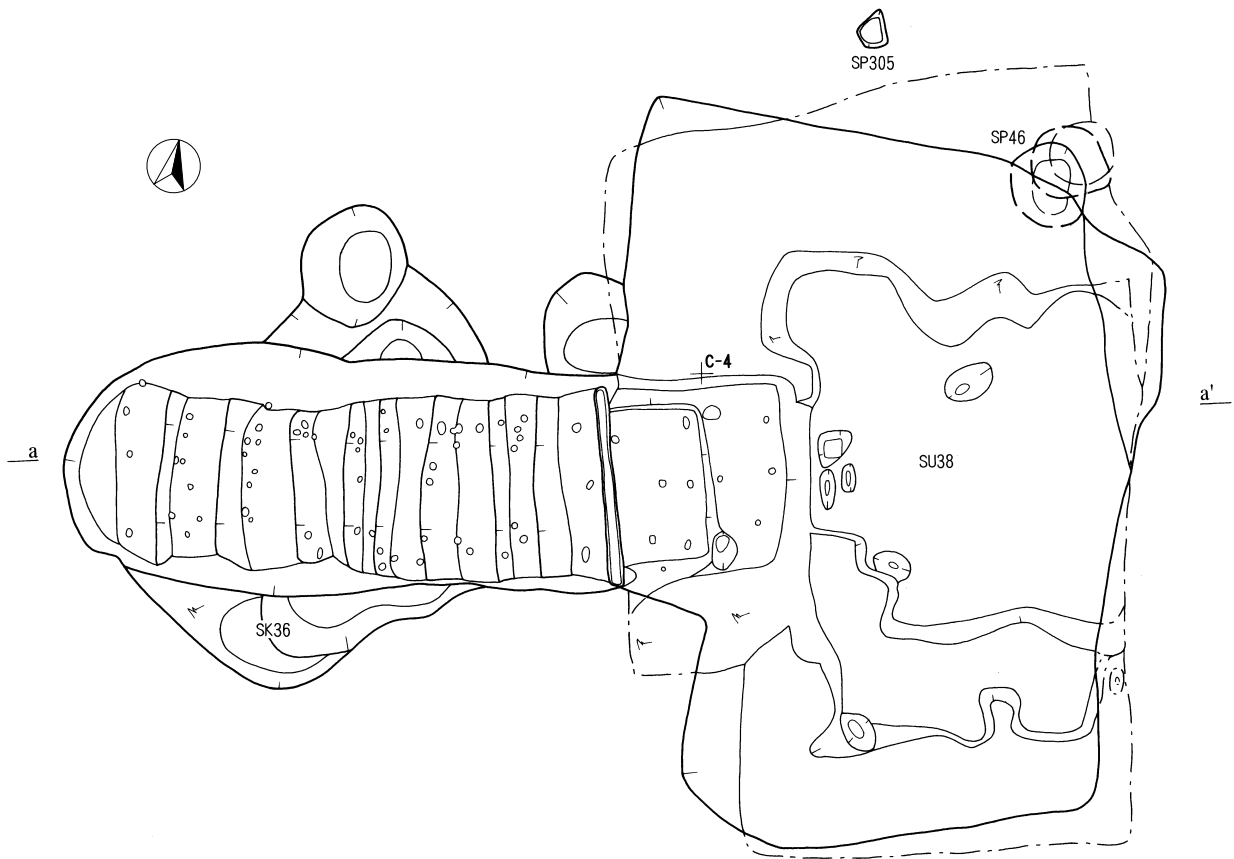


II-4 図 A区遺構 (2)



II-5 図 A区遺構 (3)

第2節 A区の遺構



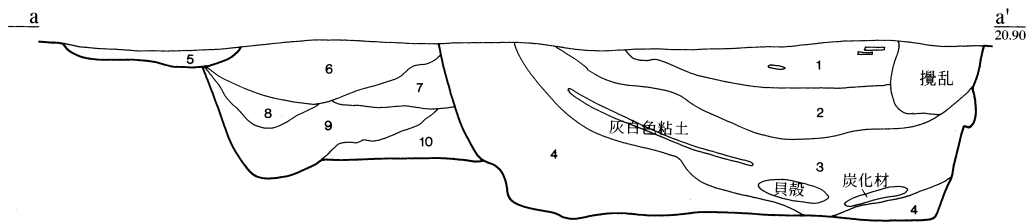
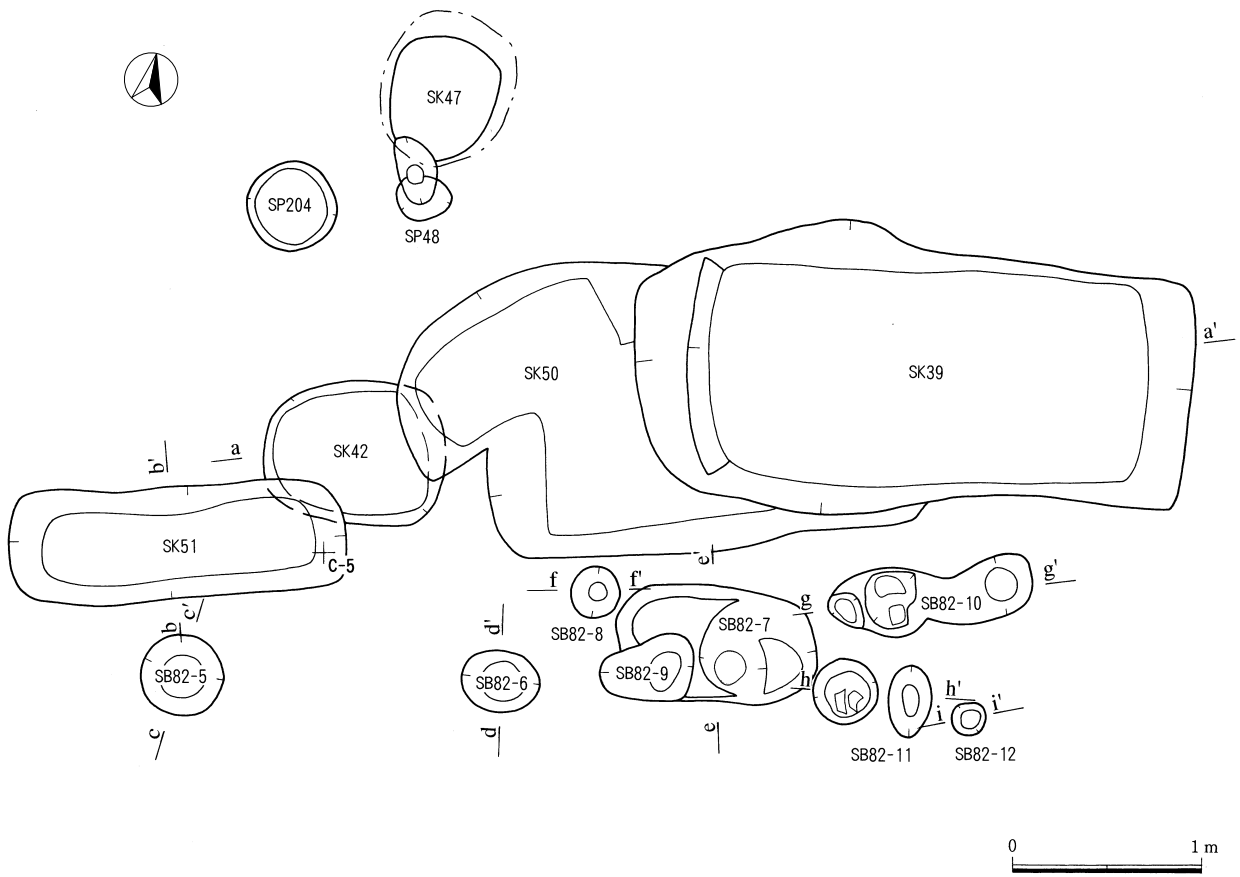
0 1 m

II-6 図 A区遺構 (4)

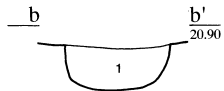


II-7 図 A区遺構 (5)

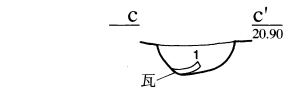
第2節 A区の遺構



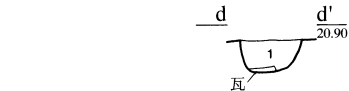
- | | | |
|--|---|---|
| <p>SK42</p> <p>5. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材微量)</p> | <p>SK50</p> <p>6. 暗褐色土 (炭化材、ローム粒微量)</p> <p>7. 暗褐色土 (ローム粒混入)</p> <p>8. 暗灰褐色土 (炭化材、貝殻混入)</p> <p>9. 暗褐色土 (炭化材少量)</p> <p>10. 褐色土 (炭化材、ローム粒微量)</p> | <p>SK39</p> <p>1. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ロームブロック、ローム粒少量)</p> <p>2. 暗褐色土 (ロームブロック少量、焼土粒、炭化材微量)</p> <p>3. 黒褐色土 (貝殻多量、炭化材多量、焼土粒、ロームブロック少量)</p> <p>4. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ロームブロック少量)</p> |
|--|---|---|



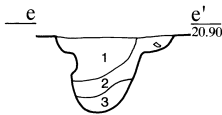
- SK51
1. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材少量、ロームブロック混入)



- SB82-5
1. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒多量、下部に瓦混入)



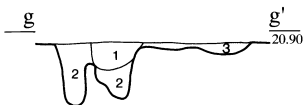
- SB82-6
1. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒多量、下部に瓦混入)



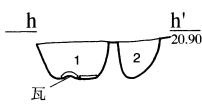
- SB82-7
1. 暗黄褐色土 (ロームブロック多量、焼土粒、ローム粒、炭化材混入)
2. 暗褐色土 (ローム粒多量、焼土粒、炭化材、ロームブロック少量)
3. 黒色土



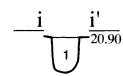
- SB82-8
1. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒少量)



- SB82-10
1. 暗褐色土 (ローム粒多量、焼土粒、炭化材混入)
2. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒少量)
3. 暗褐色土

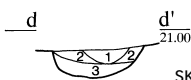
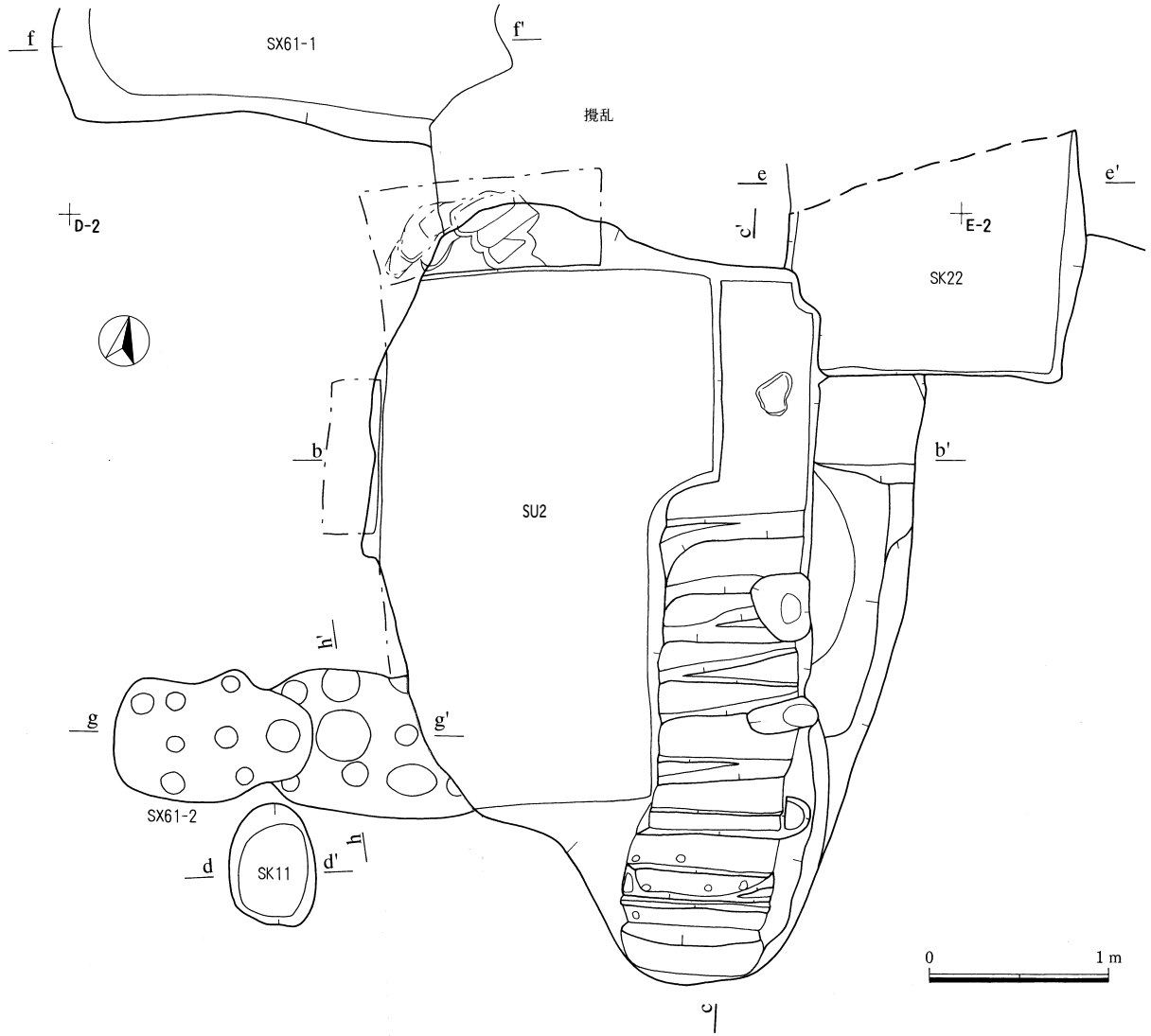


- SB82-11
1. 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒多量、焼土粒、炭化材少量)
2. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒少量)



- SB82-12
1. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒少量)

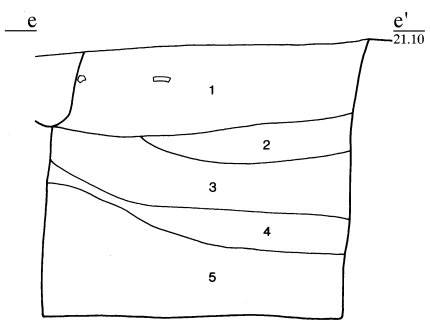
II-8 図 A区遺構 (6)



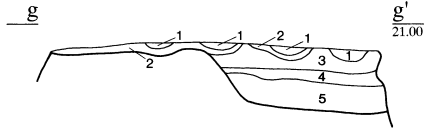
- SK11
1. 黒色土 (ローム粒混入)
 2. 暗黄褐色土 (ローム粒主体)
 3. 黒色土 (ローム粒多量)



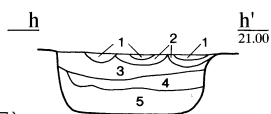
- SK61-1
1. 暗褐色土 (ロームブロック極多量、焼土粒、炭化材少量)
 2. 黒褐色土 (ロームブロック多量、焼土粒、炭化材少量)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック多量、焼土粒、炭化物混入)



- SK22
1. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材φ1~3cm多量、ローム粒少量、瓦多量)
 2. 暗茶褐色土 (焼土粒、ロームブロック多量、炭化材少量)
 3. 暗茶褐色土 (ロームブロック極多量、焼土粒、炭化材少量)
 4. 暗茶褐色土 (焼土粒、ローム粒少量、ロームブロック混入)
 5. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材少量、瓦多量)

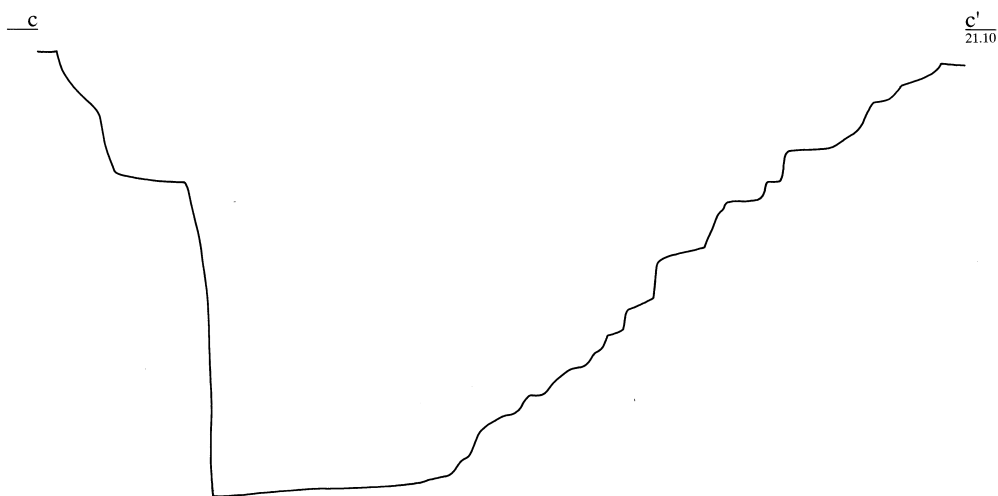
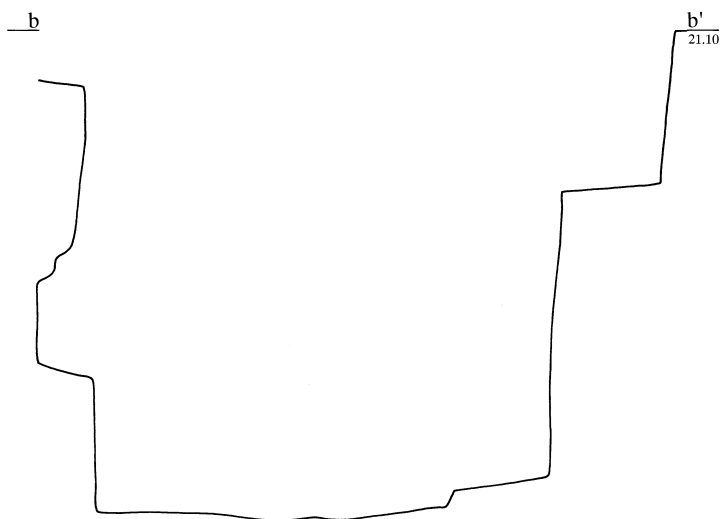
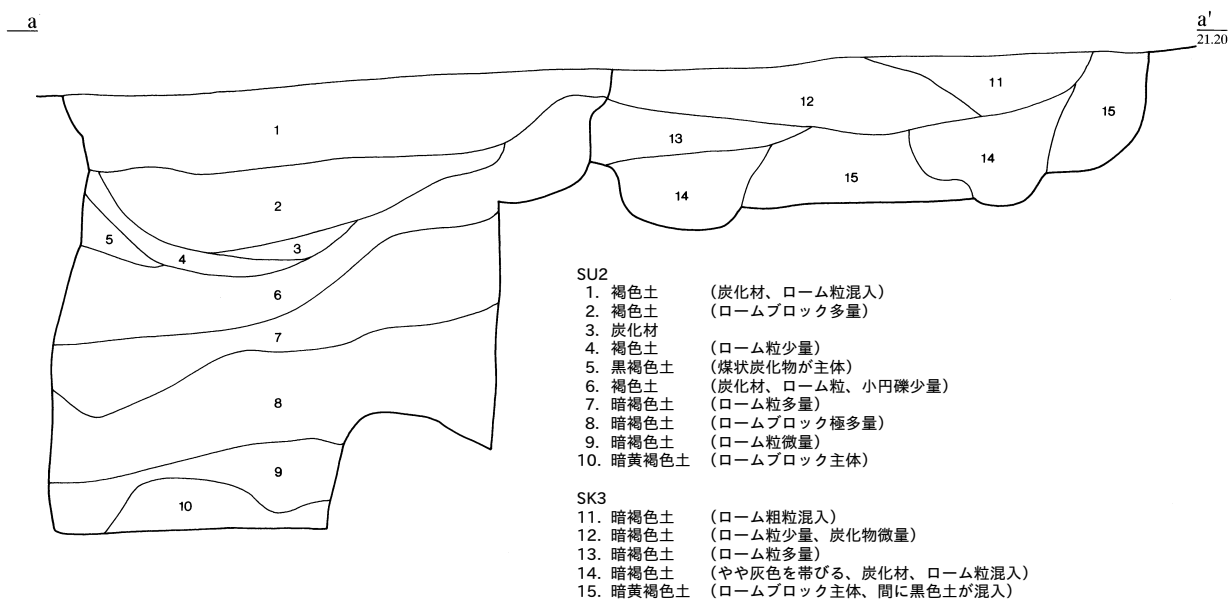


- SK61-2
1. 暗黄褐色土 (ロームブロック主体、焼土粒、炭化物微量)
 2. 黒褐色土 (ロームブロック極多量、焼土粒、炭化材少量)
 3. 暗黄褐色土 (ロームブロック主体)
 4. 黒褐色土 (炭化材、焼土粒微量、ロームブロック混入)
 5. 黒褐色土 (ロームブロック極多量、焼土粒、炭化材少量)

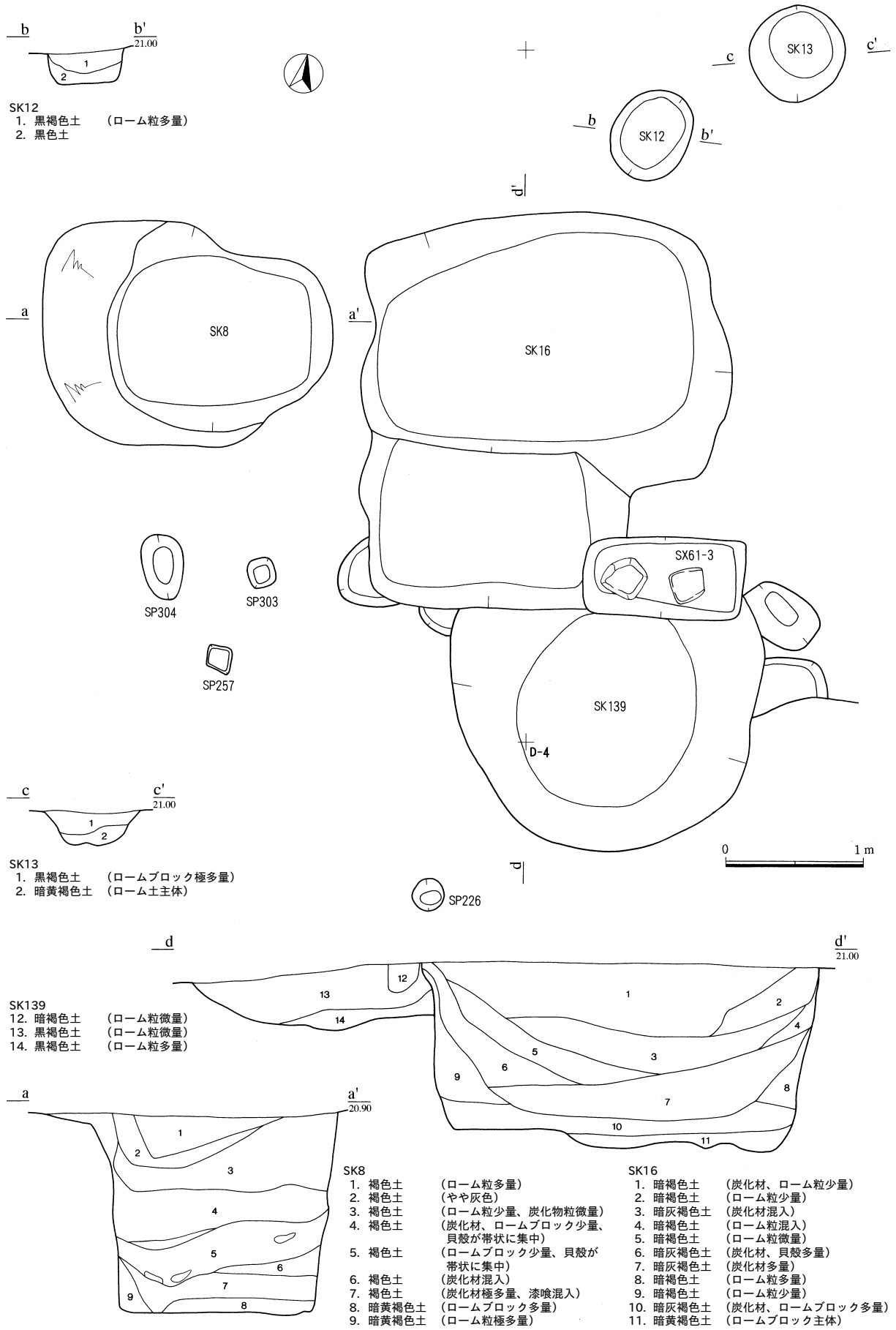


II-9 図 A区遺構 (7)

第2節 A区の遺構

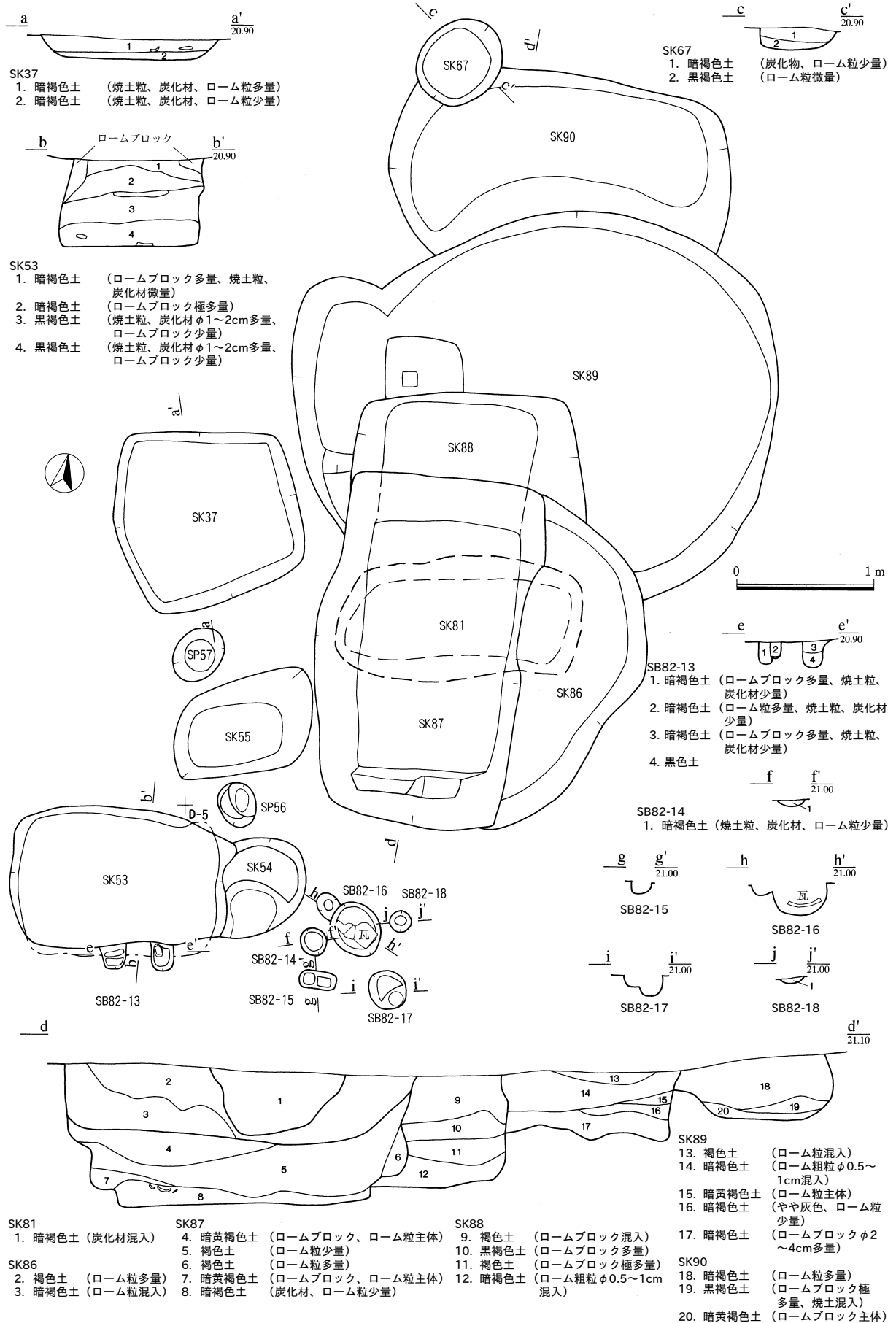


II-10 図 A区遺構 (8)

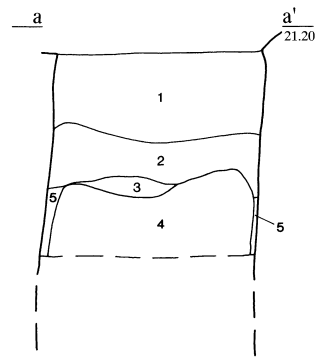
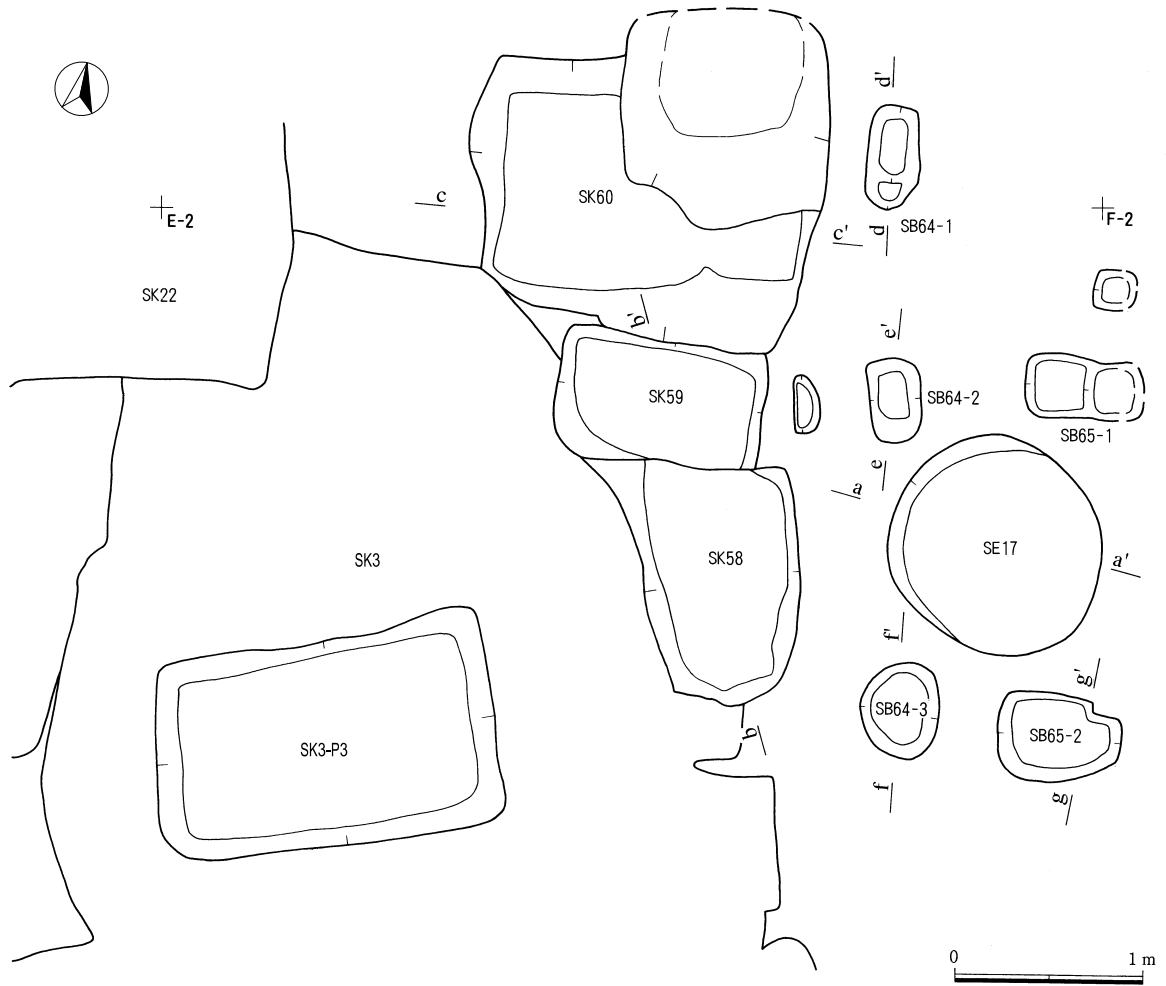


II-11 図 A区遺構 (9)

第2節 A区の遺構



II-12 図 A区遺構 (10)

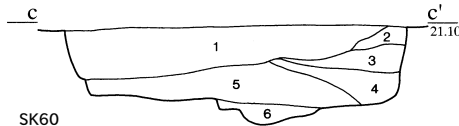


- SE17
1. 暗褐色土 (ローム粒少量)
 2. 暗褐色土 (小円礫混入)
 3. 暗褐色土 (ローム粗粒多量)
 4. 暗黄褐色土 (ローム粒混入)
 5. 暗褐色土 (ローム粒混入)

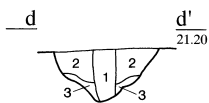


- SK58
1. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材多量、ロームブロック混入、灰褐色粘土層含む)
 2. 暗褐色土 (ロームブロック多量)

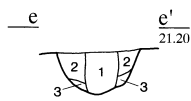
- SK59
3. 暗褐色土 (ロームブロック多量、焼土粒、炭化材少量)



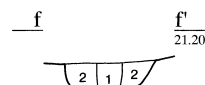
- SK60
1. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材、ロームブロック混入)
 2. 暗褐色土 (ロームブロック多量)
 3. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材少量、ローム粒混入)
 4. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材少量、ロームブロック混入)
 5. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材φ1~2cm、ロームブロック多量)
 6. 暗褐色土 (ロームブロック多量、炭化材少量)



- SB64-1
1. 黒褐色土 (柱痕、ローム粒多量)
 2. 黒褐色土 (ローム粒微量)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック主体)



- SB64-2
1. 黒褐色土 (柱痕、ローム粒多量)
 2. 黒褐色土 (ローム粒微量)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック主体)



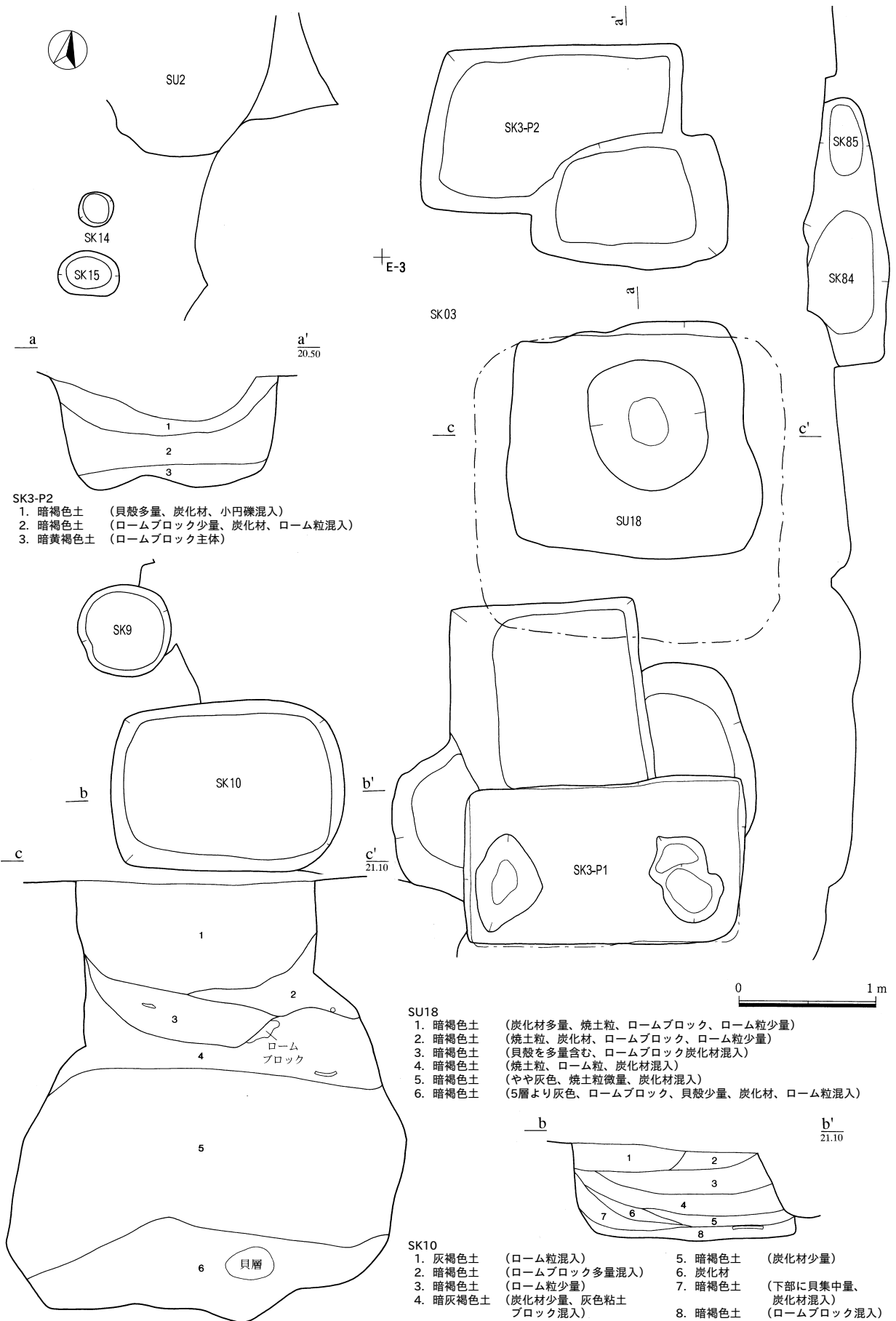
- SB64-3
1. 黒褐色土 (柱痕、ローム粒多量)
 2. 暗褐色土 (ロームブロック主体)



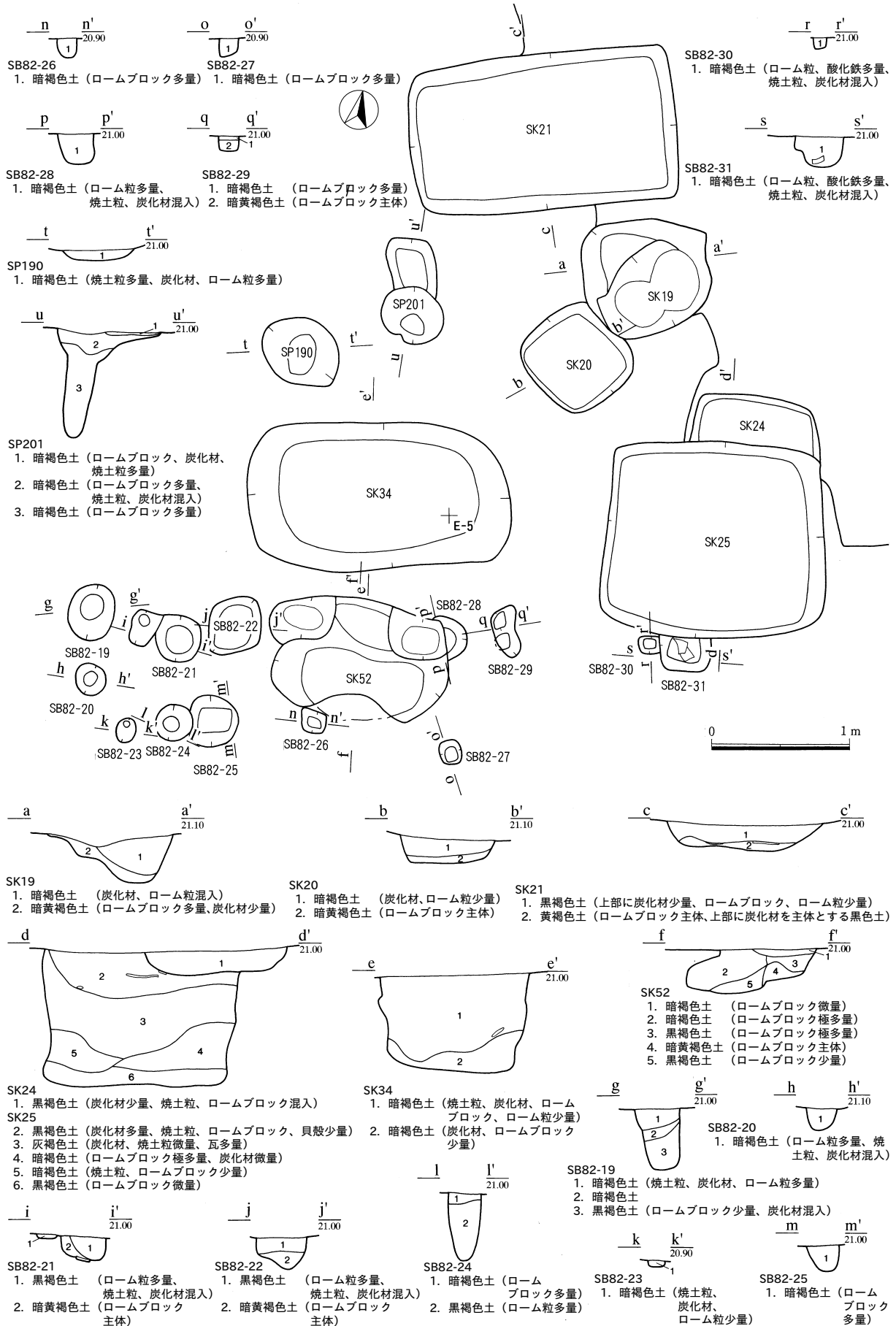
- SB65-2
1. 黒褐色土 (ロームブロック、炭化材微量)
 2. 暗褐色土 (ロームブロック、焼土、炭化材少量)

II-13 図 A区遺構 (11)

第2節 A区の遺構

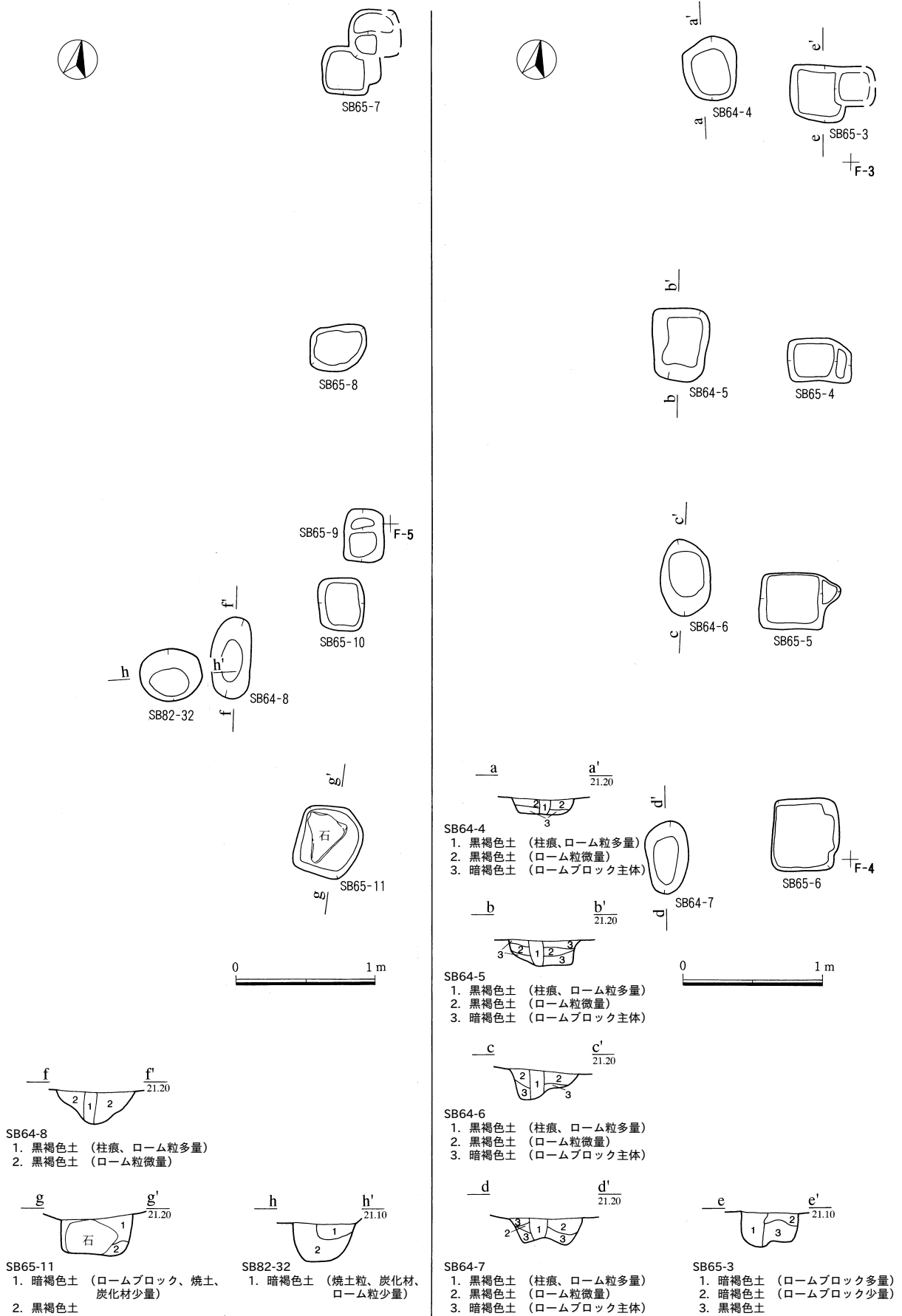


II-14 図 A区遺構 (12)

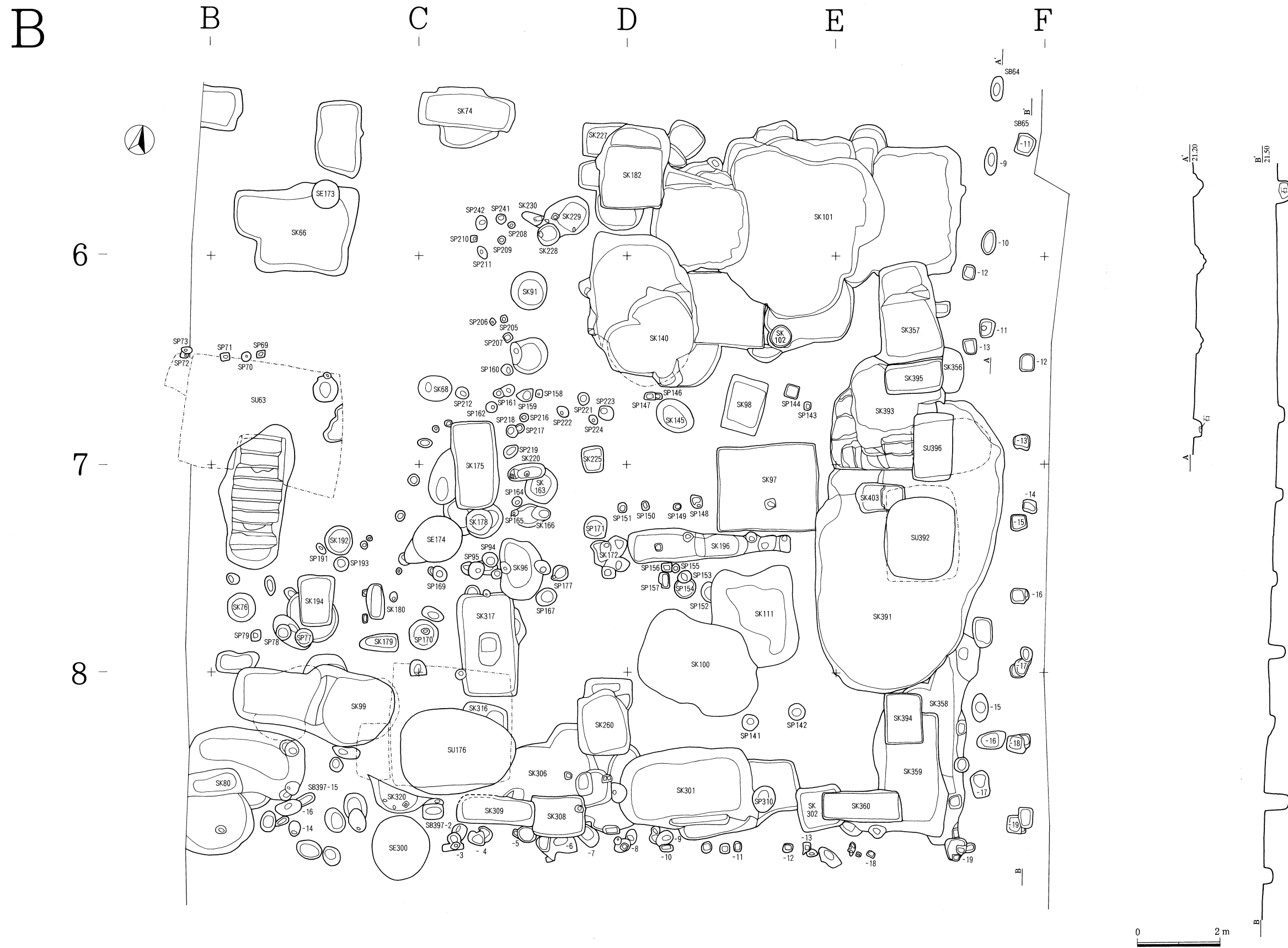


II-15 図 A区遺構 (13)

第2節 A区の遺構



II-16 図 A区遺構 (14)



II-17 図 B 区遺構配置図

第3節 B区の遺構

SU63 (Ⅱ-19 図)

A6、A7、B6、B7 グリッドに位置する地下室である。東西に主軸を有する長方形の室部とその南壁中央に取付けられた階段から構成される。階段は10段確認され、下3段は室部に張り出して構築されている。幅は室部でやや狭く約90cm、それ以上で110cm、ステップの奥行きは20～30cm、段の比高差は約30cmを計測する。段は室部ではやや傾斜を持って、それ以上ではほぼ垂直に構築されている。室部の西壁北側には高さ40cm、幅90cm、奥行き60cm程度のかまぼこ状の張り出しが取り付けられている。また、室部坑底北東隅付近には2箇所の小さな落ち込みが確認された。室部の規模は南北280cm、東西380cm、天井までの高さ150cm、確認面からの深さは340cmを計測する。壁、坑底、階段の各ステップなどは丁寧に平滑に調整されている。遺構の覆土は6層に分層されるが、2層の埋められた段階で天井部が崩落した様子が窺えた。また、最下層付近で貝が集中的に検出された。本遺構は他の階段付きの地下室が中山道（現在の本郷通り）からみて奥に位置しているのに対し、表に寄った位置に構築されている。

遺物は東大編年Ⅵ～Ⅶ期に該当する陶磁器、土器を中心に金属製品、木製品、骨角製品、自然遺物などが多量に確認されている。

SK66 (Ⅱ-18 図)

B5、B6、C5、C6 グリッドにまたがって位置する土坑である。SE173を切って構築されている。平面形は西側に張り出しを有するやや歪んだ方形を呈し、規模は南北210cm、東西290cm、確認面からの深さは最大30cmを計測する。坑底は中央南側に向かって緩やかな傾斜を有する。坑底、壁面は凹凸が認められた。覆土は単層で、炭化物の混入する暗褐色土を呈する。

遺物は、幕末から明治初期にかけての陶磁器・土器を中心にコンテナ箱に3箱程度出土している。

SK68 (Ⅱ-22 図)

C6 グリッドに位置する楕円形を呈する小土坑である。遺構の北東側上部を攪乱によって大きく削平されている。平面形は東西に主軸を持つ楕円形を呈し、規模は南北60cm、東西84cm、確認面からの深度は最大10cmを計測する。壁は比較的フラットな坑底から緩やかに立ち上がっている。

遺物は出土していない。

SP69～SP73 (Ⅱ-19 図)

A6～B6 グリッドにかけてほぼ一列に分布するピット群である。平面形はSP70が円形のほかに方形または方形に近い形状を呈している。ピットは一列に分布しているものの間隔は一定ではなく、一連の遺構群として位置づけられるかは不明である。規模は一辺または径20cm内外、確認面からの深さはSP69が10cm程度のほかは20cmあまりである。

遺物はSP69から陶磁器3点、SP71から陶磁器1点、キセルが1点出土している。

SK74 (Ⅱ-22 図)

C5 グリッドに位置する土坑である。平面形は東西に主軸を有する長方形の南側に半円形に張り出しが付属するような形状をしている。規模は南北220cm、東西140cm、確認面からの深さは最大38cmを計測する。長方形を呈する部分は一段深く、東西壁際から中央に向かって緩やかに傾斜を有していた。全体的に壁や坑底は平滑に調整されていた。覆土は単層で、粒子の細かい黒褐色を呈している。

遺物は18世紀の陶磁器、土器、金属製品などコンテナ箱に1箱程度出土している。

SK76 (II-20 図)

B7 グリッドに位置する円形の土坑である。規模は径 70cm、確認面からの深さは 40cm を計測する。壁および坑底は平滑に整形され、壁はフラットな坑底より、ほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は灰褐色粘土を含んだ粒子の細かい黒褐色を呈している。単独ではあるが、規模、構造、覆土の含有物などより便所である可能性があろう。遺構の年代は不明である。

遺物は確認されていない。

SK80 (II-21 図)

A8、B8 グリッドに位置する不整形の土坑である。北の隅丸長方形と南の円形の土坑が 2 基切り合うような平面形を呈する。西隅が調査範囲外に出ている。規模は南北 310cm、東西 270cm、確認面からの深さは最大 45cm を計測する。坑底や壁は凹凸を有している。覆土は 3 層に分層される。遺構形態から小規模な土採り穴であった可能性が考えられる。

遺物は 18 世紀後半の陶磁器、土器、金属製品がコンテナ箱に 1 箱ほど出土している。

SK91 (II-22 図)

C6 グリッドに位置する円形の土坑である。規模は径 90cm、確認面からの深さは 10cm を計測する。坑底は中央が最も深度を有し、壁際に向かって緩やかに立ち上がっている。覆土は単層で、ローム粒子を含むしまりの弱い暗褐色土を呈している。

遺物は出土していない。

SK96 (II-23 図)

C7 グリッドに位置する土坑である。平面形は北側がやや突き出した楕円形を呈し、東西の壁際には 2 基のピットが付帯する。確認面での規模は南北 150cm、東西 100cm、深さは土坑中央で 10cm、付帯するピットで 30cm を計測する。坑底や壁は凹凸が認められ、坑底から壁への立ち上がりは緩やかである。覆土は 4 層に分層される。

遺物は明治初期の陶磁器、土器が二十数点出土している。

SK97 (II-28 図)

D6、D7 グリッドにまたがって位置する方形の土坑である。規模は南北 210cm、東西 240cm、確認面からの深さは 20cm を計測する。坑底はフラットで、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。坑底には径 10cm 程度の小穴が多く確認されているが、位置は不規則で性格などの判断はできなかった。覆土は 2 層に分層される。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器、土器が十数点出土している。

SK98 (II-25、27 図)

D6 に位置する長方形の土坑である。規模は長辺 130cm、短辺 90cm、深さは確認面より 50cm を計測する。遺構の主軸方位は本遺跡の屋敷割りと対比して東に振れており、ほぼ真北を向いている。本遺構付近にはこの主軸方位の遺構は存在していない。比較的フラットな坑底から東西壁はほぼ垂直に、南北壁は東西壁より緩やかに立ち上がる。覆土は 5 層に分層され、その最下層に炭化物層があり、2、4 層には灰褐色土が充填されていた。竈などから出た灰を廃棄した痕跡であろうか？

遺物は 17 世紀後半の陶磁器、土器、金属製品などがコンテナ箱に 1 箱程度出土している。

SK99 (II-21 図)

B7、B8 グリッドに位置する土坑である。確認面での平面形は東西に主軸を有し、東側に円形の土坑、西側に長方形の土坑が接合しているような形状を呈している。規模は南北 180cm、東西 400cm、最大の深さは西側が 140cm、東側が 110cm を計測する。構築時の状況は判断し得なかつ

だが、東壁、西側南北壁はオーバーハングしている。遺構のレベルから勘案して遺構の上部にロームの天井が覆っていたとは考えにくく、特殊な形状を呈している。覆土は8層に分層されるが、おおむね西側から東側にむかって埋められており、その状況から東西が1基の遺構であると判断された。壁や坑底には凹凸が存在し、ややラフに整形されている。

遺物は18世紀後半の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱に2箱程度出土している。なお、本遺構出土遺物はSK101のものと遺構間接合しており、SK101の年代（東大編年Ⅷa～Ⅷb期）を考慮すると本遺構の最終廃棄年代は下がる可能性もある。

SK100（Ⅱ-28 図）

D7、D8 グリッドにまたがって位置する土坑である。北東側にSK111と重複しており、新旧関係が本遺構が新である。平面形は方形に近似した不整形を呈し、確認面での規模は南北210cm、東西280cm、深さは約50cmを計測する。坑底には小穴が不規則に百数十基確認されたが、本遺構に付帯するものかは判断できなかった。坑底は比較的フラットであるが、壁は凹凸が顕著で立ち上がりも一定ではない。覆土は3層に分層される。

遺物は明治前半の陶磁器、土器類を中心にコンテナ箱に3箱程度出土している。

SK101（Ⅱ-26、27 図）

D5、D6、E5、E6 グリッドにかけて位置する遺構である。重複するSK102、SK182より古く、SK140より新しい。平面形は不整形を呈し、東西745cm、南北570cm、確認面からの深さは最大135cmを測る。平面的には不整形の遺構が東西に3基並び、その周囲に複数の遺構が重複しているような形態を呈しているが、土層断面の観察から単一の遺構であることが明らかになった。坑底は工具痕による凹凸が著しく未調整であり、東の方形区画から西へ向かって階段状に深くなっている。壁面も凹凸が顕著で斜行して立ち上がっている。その様相から複数回の掘削によって形成され、同一時期に埋没した過程をみることができ、いわゆる採土坑と考えられる。

遺物は東大編年Ⅷa～Ⅷb期の陶磁器、土器、金属製品、石製品、ガラス製品が多量に検出され、埋没過程で廃棄遺構として利用されたことが窺える。SK99と遺構間接合が認められた。

SK111（Ⅱ-28 図）

D7 グリッドに位置する隅丸方形の土坑である。南西隅をSK100によって切られている。規模は南北230cm、東西200cm、確認面からの深さは最大50cmを計測する。坑底、壁には明瞭な凹凸が確認され、ラフに構築されている。比較的フラットな坑底から壁は角度を持って立ち上がるが、立ち上がりも一定ではない。覆土は3層に分層されるが、ほぼ水平堆積である。

遺物は19世紀前葉の陶磁器、土器などが二十数点出土している。

SK140（Ⅱ-25、27 図）

C5、C6、D5、D6 グリッドに位置する遺構である。SK101と重複し、それより古い。平面形は西側の楕円形に東側の方形の土坑が接続した不整形鏡形を呈す。規模は楕円形部分では南北335cm、東西250cm、確認面からの深さ最大210cmを測り、方形部分では1辺180cm、確認面からの深さ25cmを測る。楕円形部分の坑底は北側にテラスを有し、南側で1段下がる。坑底全体に工具痕が顕著に認められる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁に関しては坑底付近で約30cmオーバーハングしている。方形部分の坑底は平坦に整形され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。楕円形部分と方形部分は形態、深さ、整形の状態などに共通点は認められないが、覆土の観察から重複関係は認められない。本遺構周囲にはSK101、SK182、SK391、SK357など同時期の不整形遺構が多く分布し、屋敷地奥北東部が土採り行為などに利用されていた可能性がある。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器、瓦、金属製品がコンテナ1箱出土しており、SE174、SK293と遺構間接合が認められた。

SP141 (II-28 図)

D8グリッドに位置する小ピットである。平面形は円形を呈し、規模は径50cm、深さは約20cmを計測する。覆土は単層で、暗褐色土を呈する。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器類が十数点出土している。なお出土遺物は隣接するSP142と遺構間接合しており、また、両ピットが規模や覆土の類似性が認められることから同時存在している可能性が高い。

SP170 (II-23 図)

B7、C7グリッドに位置するピットである。平面形は円形を呈し、規模は径約70cm、確認面からの深さは約20cmを計測する。B区中央付近には同様もしくはこれより小さなピットがおおむね列状に並んでおり、屋敷内区画の痕跡であろうと推定している。個別の相伴関係は復元できなかったが、143～167、169～172、177～178、205～212、216～224、228～230、241～242などの遺構がこれに該当するものであろう。

遺物は図示された陶磁器が1点出土している。

SE173 (II-18 図)

B5グリッドに位置する井戸である。SK66の坑底から確認された。平面形は円形を呈し、規模は径約70cmを計測する。調査は安全のため確認面から130cm付近までしか行っていない。壁面の北東および南西側に相対して足掛けとみられる窪みが50cm程度の比高差をもって穿たれている。覆土は単層で、粒子の細かい黒褐色土を呈し、井戸側の痕跡は確認されない。小さい井戸径、足掛け、細かい黒褐色土の覆土などは、これまでの加賀藩邸の調査では17世紀前半期の井戸の特徴と共通している。

遺物は出土していない。

SE174 (II-23 図)

B7、C7グリッドにまたがって位置する井戸である。安全面を考慮し、確認面から約130cm付近までしか調査を行っていない。平面形は円形で、やや広がりながら深度を増している。規模は確認面で径115cmを計測する。壁面は丁寧に整形されている。覆土は調査深度までで3層に分層されるが、井戸側の痕跡は確認できなかった。

遺物は17世紀末～18世紀初頭に比定される陶磁器、土器を中心にコンテナ箱に7箱出土している。この中にSK140出土遺物と遺構間接合が認められた。SK140出土遺物群は19世紀の製品で構成されており、本遺構に何らかの要因で混入したものと推定される。

SK175 (II-23 図)

B7、C7グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、規模は南北210cm、東西110cm、深さは50cmを計測する。坑底、壁ともに平滑に調整され、フラットな坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は4層に分層され、レンズ状の堆積を示している。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器類がコンテナ箱に1箱出土している。

SU176 (II-24 図)

B7、B8、C7、C8グリッドにまたがって位置する地下室である。この位置はB区屋敷域の南端であり、選択的に屋敷際に地下室を構築したと推定できる。SK306、SK309、SK320を切って構築されている。

入口部は楕円形を呈し、室部の東南に寄った位置に作られている。形態や土層の堆積より室部は作

り替えが行われたことが推定でき、少なくとも2時期の存在が確認された。古い室部は方形を呈していた。その後、新しい室部構築のため約50cm埋められた(断面図13~15層)と同時に室部西南隅に奥へ70cmの張り出しが設けられ、断面図13層上面を床面に作り替えられた。断面図13層上面は著しく硬化されていた。

また、本遺構廃棄後天井のロームブロック一部が崩落し、崩落時あるいはその後に落ち込んだ部分に、1~3層の堆積がなされたと考えられる。これら土層の堆積状況から1~3層は本遺構廃棄時の埋土ではないことが推定できた。

遺構の規模は、入口部で南北210cm、東西270cm、古い坑底で南北300cm、東西290cm、新しい坑底で東西は360cm、深さは古期が330cm、新期が280cmを計測する。坑底や壁は丁寧に整形されている。

遺物は陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品など多量に出土するが、東大編年IVb~V期(17世紀末~18世紀前半)と東大編年VIIIa~b期(19世紀前半)の2時期にピークがある。これは地下室としての本遺構廃絶時に伴うもの(東大編年IV~V期)とそれ以降の廃棄(東大編年VIIIa~b期)に年代差がみられることによるものと判断される。調査時に一括で取り上げてしまったため詳細は不明であるが、実測図に図示したものはおおむね1~3層に伴う新しい時代の廃棄資料である。

SK180 (Ⅱ-20 図)

B7グリッドに位置する隅丸長方形の土坑である。規模は南北85cm、東西40cm、深さは10cmを計測する。坑底や壁面の凹凸は認められるもの顕著ではない。覆土は単層で、暗褐色土を呈している。

遺物は17世紀後半の陶磁器が出土しているが、点数が少なく当該年代に断定することは避けたい。

SK182 (Ⅱ-25、27 図)

C5、C6グリッドに位置する遺構である。東側でSK101と重複し、それより新しい。平面形は不整形を呈し、中央に方形部分、南北に半円形部分を有す。規模は南北260cm、東西170cm、確認面からの深さは北側半円形部分で115cm、方形部分で170cm、南側半円形部分で30cmを測る。南北とも半円形部分壁面は坑底から丸みを帯びて立ち上がり、方形部分壁面はほぼ垂直に立ち上がる。ともに粗い整形が施されている。

遺物は18世紀前半と19世紀中葉の陶磁器、土器、金属製品がコンテナ3箱出土している。

SK194 (Ⅱ-20 図)

B7グリッドに位置する土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北120cm、東西90cm、確認面からの深さは80cmを計測する。壁面や坑底は比較的丁寧に整形されている。覆土はいずれも灰褐色粘土が含まれ、3層に分層される。灰溜めあるいは便所遺構か?

遺物は17世紀末~18世紀初頭の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱に1箱出土している。

SK220 (Ⅱ-23 図)

C7グリッドに位置する遺構である。SK163と重複し、それより古い。平面形は楕円形を呈し、東西90cm、南北40cm、確認面からの深さ25cmを測る。西壁際に1段テラスを有し、テラス面、坑底中央部に各1基小ピットを有する。性格、年代は不明である。

遺物は出土していない。

SK260 (Ⅱ-29 図)

C8グリッドに位置する遺構である。南側でSK306と重複し、それより新しい。平面形は不整形長方形を呈し、南北180cm、東西125cm、確認面からの深さ90cmを測る。北側にはテラス状の張

り出し部を有し、坑底との段差は50cmを測る。壁面は北壁から東壁にかけて下半部がややオーバーハングし、坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が著しく、また坑底には根痕と考えられる小ピットが多数存在する。覆土は緩やかなレンズ状堆積を呈す。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器、金属製品がコンテナ1箱出土している。

SK301 (II-29 図)

D8グリッドに位置する遺構である。SK306、SP310と重複し、それより古い。平面形は不整長方形を呈し、東西430cm、南北190cm、確認面からの深さ60cmを測る。南壁東側には階段状の張り出しを有し、東側には台形状のテラスを有する。坑底は工具痕による凹凸が著しく、また根痕と考えられる小ピットが多数存在する。壁はハの字状に拡がりながら立ち上がり、壁面も坑底と同様、凹凸、小ピットが存在する。覆土はレンズ状に堆積している。性格は不明であるが、本遺構は屋敷地境界施設と考えられるSB397に隣接し、周辺にはSK308、SK309、SK360、SK302など長方形土坑が集中して分布する傾向が認められ、土地利用に目的、規制が存在したことが推定される。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器、金属製品、石製品がコンテナ約7箱出土している。

SK302 (II-33 図)

E8グリッドに位置する遺構である。SK359と重複し、それより古い。平面形は長方形を呈し、東西115cm、南北100cm、確認面からの深さ35cmを測る。覆土は黒色土の単一層である。

遺物は出土していない。

SK306 (II-29 図)

C8グリッドに位置する遺構である。重複するSK260より古く、SK301、SK308、SK309、SP310より新しい。また西側でSU176と重複しているが、これはSU176天井陥没後に生じた凹地と関わるもので、元来重複していたかは不明である。平面形は不整形を呈し、東西300cm、南北200cm、確認面からの深さ35cmを測る。坑底に根痕と考えられる小ピットが多数存在する。坑底、壁面ともに凹凸が著しく、壁面の立ち上がりも均一性がほとんど認められない。その様相から、採土坑として掘削された可能性が高い。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器がコンテナ約2箱出土しており、SK309と遺構間接合が認められた。

SK308 (II-29 図)

C8グリッドに位置する遺構である。重複するSK306、SK309より古い。平面形は長方形を呈し、東西125cm、南北100cm、確認面からの深さ35cmを測る。坑底には凹凸が認められるものの、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

遺物は19世紀前半の陶磁器が十数点出土したにすぎない。

SK309 (II-29 図)

C8グリッドに位置する遺構である。重複するSK306より古く、SK308より新しい。西側ではSU176とも重複しているが先述したように詳細は不明である。平面形は長方形を呈し、東西190cm、南北60cm、確認面からの深さ60cmを測る。坑底、壁面ともに比較的丁寧に整形されている。

遺物は19世紀前半の陶磁器がコンテナ1箱出土しており、SK309と遺構間接合が認められた。

SP310 (II-29 図)

D8グリッドに位置する遺構である。SK301より新しく、SK306より古い。直径50～60cmを測る円形のピット2基を本遺構としており、ピット間は真々で360cmを測る。但し本遺構以外に関連する遺構はなく、性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK317 (Ⅱ-23 図)

C7、C8 グリッドに位置する遺構である。北東角で SK96 と重複し、それより古い。平面形は長方形を呈し、南北 240cm、東西 140cm、確認面から貼り床までの深さ 45cm を測る。坑底、壁面ともに丁寧な整形が施されている。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。坑底中央には南北 80cm、東西 55cm を測る楕円形のピットが存在する。このピット中央から直径 10cm を測る柱痕が確認された。柱はロームブロックを主体とする暗黄褐色土によって固定されているが(4、5層)、このうち5層は坑底上にまで及び貼り床を形成している。ただし周辺に類似遺構は確認されず、本遺構の性格は不明である。

遺物は 18 世紀後半の陶磁器、生産関連遺物、動物遺体がコンテナ約 1 箱出土している。

SK356 (Ⅱ-30 図)

E6 グリッドに位置する遺構である。重複する SK393、SK395、SK397 より新しい。平面形は 1 辺 110cm を測る隅丸方形を呈すると推定され、確認面からの深さは 60cm を測る。壁はハの字状に立ち上がり、坑底、壁面ともに工具痕が認められる。遺物は明治後半の陶磁器、金属製品、石製品、煉瓦片などがコンテナ 5 箱出土している。一部 SK357 と混在して取り上げられた。

SK357 (Ⅱ-32 図)

E6 グリッドに位置する遺構である。SK393 と重複し、それより古い。平面形は不整長方形を呈し、南北 235cm、東西 115～150cm、確認面からの深さ 180cm を測る。北壁寄りに東西 95cm、南北 60cm、確認面からの深さ 110cm を測るテラスを有する。テラス南側に 1 辺 130cm を測る坑底が隣接する。テラスとの比高差は 70cm を測る。坑底南部には浅い落ち込みがあり、壁面は南壁および東西各壁南部においてはほぼ垂直に立ち上がっているが、テラスと隣接する北壁周辺では一旦ハの字状に立ち上がり、途中屈曲して垂直に変化している。この壁面垂直部分は丁寧な整形が施されているが、その他の壁面、坑底、テラスともに工具痕が顕著に認められる。覆土はテラス部より下位部分ではほぼ水平堆積を呈しているが、テラス面上位では、北側からの流入に変化しており、埋没時期の断絶が推定される。

遺物は「堺湊塩濱長左衛門」銘塩壺(Ⅲ-83 図 11)、三島手鉢(Ⅲ-83 図 8)、「高サキ」銘ヘラ書き徳利(Ⅲ-82 図 5、7) など 18 世紀中～後葉に位置づけられる製品をはじめ、19 世紀前半の陶磁器、土器や、金属製品がコンテナ約 5 箱出土している。SK393 との重複関係を考慮すると、19 世紀代に帰属する遺物のなかには混入も考えられる。

SK358 (Ⅱ-33 図)

E7、E8 グリッドに位置する遺構である。重複する SK359、SK394、SK391 など全ての遺構より新しく、出土遺物の年代観から明治中～後葉頃の廃絶と推定される。平面形は不定形を呈するが、規模ともに詳細は不明である。

遺物は型紙絵付を中心に銅版転写を少量含む染付を初め、陶磁器、土器、生産関連遺物、金属製品、ガラス製品、動物遺体などがコンテナ 10 箱出土している。SU176、SK293、SU392 と遺構間接合が認められた。

SK359 (Ⅱ-33 図)

E8 グリッドに位置する遺構である。重複する SK358 より古く、SK360、SK391、SK394 より新しい。平面形は L 字状を呈す遺構で、南北 365cm、東西 325cm、確認面からの深さ 60cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が顕著である。覆土は坑底直上にローム粒を含む褐色土が薄く堆積しているが(4層)、それ以外は暗褐色土(3層)が占めていることから、短期間で埋め戻されたと推定される。

遺物は18世紀末～近代を含む19世紀中葉の陶磁器、土器、ガラス製品がコンテナ10箱出土している。

SK360 (Ⅱ-33 図)

E8グリッドに位置する遺構である。SK359と重複し、それより古い。平面形は長方形を呈し、規模は東西185cm、南北75cm、確認面からの深さ170cmを測る。深い遺構にもかかわらず、覆土は褐色土の単一層で短期間で埋め戻されたと推定される。坑底はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっているが、唯一西壁のみが弓状の膨らみを有し、坑底壁際から12cm、SK359坑底面から22cmオーバーハングをしている。性格は不明である。

遺物は18世紀前～中葉の陶磁器、土器がコンテナ2箱出土している。

SK391 (Ⅱ-30、31 図)

D7、D8、E6～E8グリッドに位置する遺構である。重複するSK358、SK359、SU392、SK393、SU396より古く、SK403より新しい。平面形は不整楕円形を呈し、南北725cm、東西435cm、確認面からの深さ75cmを測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が顕著である。遺構中央部、SU392の南西部分の坑底はそれ以外より若干低く、その部分の凹凸が特に著しい。断面観察でもその部分に該当する4層は南側の覆土(1～3層)に対し、重複関係を窺わせるような立ち上がりを示していることから、残念ながら調査時において平面的認識には及ばなかったが、SU392に切られ、本遺構を切って構築された遺構が存在した可能性が高い。

遺物は17世紀末～18世紀初頭と、19世紀前半の陶磁器がコンテナ1箱出土しているが、うちわけは前者が主体を占めている。後者の遺物に関しては本遺構出土遺物として記録された遺物のうち重複するSU392と遺構間接合する資料が含まれることから調査時における出土遺構誤認の可能性が高い。

SU392 (Ⅱ-30～32 図)

E7グリッドに位置する遺構である。SK391、SK403と重複し、それより新しい。平面形は隅丸方形を呈し、断面フラスコ状を呈する地下室で、確認面での規模は南北195cm、東西170cm、深さ235cmを測る。坑底は隅丸長方形を呈し、南北230cm、東西180cmを測り、南北方向に大きくオーバーハングしている。覆土はほぼ水平に堆積し、全層序より炭化材が多量に出土している。さらに8層上部からは徳利(Ⅲ-99 図69)、植木鉢(Ⅲ-99 図77)、石皿(Ⅲ-98 図59、60)などが完形、半完形の状態で出土した。9層以下からも多量の遺物が出土しているが、特に鞆の羽口が数点出土している(Ⅲ-111 図1～3、112 図5、6、113 図7)。鞆の羽口は隣接するSU396からも多量に出土しており、両遺構における廃棄行為が同時期に行われたことを示唆しているとともに、本屋敷地内で生産活動が行われていたことを傍証する資料である。

遺物は東大編年Ⅷd期に属する陶磁器、土器、生産関連遺物、金属製品、石製品、ガラス製品、動物遺体などが多量に出土している。特に生産関連遺物では鍛冶行為に関連する鞆の羽口、碗形鉄屑をはじめ、ベンガラ生産の可能性が指摘される肩部穿孔徳利(Ⅲ-116 図70)がある(詳細は第Ⅴ章第5節を参照されたい)。また、これらの一括廃棄資料が陶磁器の年代観より東大編年Ⅷd期に帰属することから幕末の屋敷引き払い時に伴う廃棄行為と推定される。SK358、SK391、SU396と遺構間接合が認められた。

SK393 (Ⅱ-30～32 図)

E6グリッドに位置する遺構である。重複するSK357、SK391、SK395より新しく、SU396より古い。階段を有する遺構で、平面形は不整形を呈す。規模は南北270cm、東西265cm、確認面からの深さ155cmを測る。階段は西壁、南壁に付設され、西壁北側より壁に沿って下り、南壁で

屈曲、さらに南壁東角で北方向へ屈曲し、室部へ至る。各ステップの作りは非常に粗く、幅、奥行き、各段比高差も統一性がない。室部は北東部が東へ張り出すL字状を呈しているが、坑底、壁面ともに調整は粗く、壁面には天井の痕跡も認められなかった。その様相から採土坑の可能性が高い。

遺物は18世紀後半～19世紀前半の陶磁器、土器、金属製品がコンテナ7箱出土している。

SK394 (Ⅱ-33 図)

E8 グリッドに位置する遺構である。重複するSK358、SK359より古い。平面形は長方形を呈し、南北120cm、東西90cm、確認面からの深さ90cmを測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

遺物は18世紀後半の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土している。

SK395 (Ⅱ-30～32 図)

E6 グリッドに位置する遺構である。重複するSK356、SK393より古い。平面形は長方形を呈し、東西140cm、南北75cm、確認面からの深さ180cmを測るが、遺構上半部がSK393によって削平されているため詳細は不明である。残存部において壁はやや開き気味に立ち上がり、坑底から壁にかけては凹凸が顕著である。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土している。

SU396 (Ⅱ-30、32 図)

E6、E7 グリッドに位置する地下室である。重複するSK391、SK393より新しい。開口部の平面形は長方形を呈し、南北165cm、東西95cm、確認面からの深さ390cmを測る。壁面は東壁以外の3方はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁は確認面下100cmから斜行してオーバーハングし、確認面下200cmで「く」の字状に内曲し、奥行き25～30cmのテラスを形成する。テラス先端部は確認面での東壁ラインとほぼ一致し、垂直に立ち上がる壁面に棚状施設を掘削したと受け止めることもできる。さらに確認面下225cmから再びオーバーハングがはじまり、室部を形成する。室部は東壁がアーチを描く砲弾形を呈しており、規模は東西190cm、南北130cmを測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が著しい。奥壁(東壁)高は60cmを測り、東壁先端部からの奥行きは90cmを測る。

遺物は東大編年Ⅷc期の陶磁器、土器、金属製品、石製品、木製品、動物遺体がコンテナ11箱出土しているが、その特徴として鞆の羽口(Ⅲ-112 図4、113 図10、11)碗形鉄屑(Ⅲ-114 図15～17、19～25)、鉄分、赤色物付着陶磁器(Ⅲ-115 図28～30、36)肩部穿孔徳利(Ⅲ-116 図71、72)など生産関連遺物が多量に廃棄されていたことが掲げられる。生産関連遺物はSU392でも多量に出土していることはすでに触れたが、鉄分付着陶器碗のうちⅢ-115 図29はSU392との遺構間接合資料であり、両遺構が同時期に廃絶されたことを証左する資料であり、幕末期に本屋敷地内において盛んな生産活動が行われていたことが推定される。廃棄の要因としてはSU392同様、幕末の屋敷引き払いと考えられる。ただし、本遺構には被熱した痕跡など、生産関連遺物と直接結びつく様相は看取されなかったことより、遺構自体の性格は不明である。SU392と遺構間接合が認められた。

SB397 (Ⅱ-21、29、33 図)

8ライン南4m付近を東西に伸びるピット列で、屋敷地B、C区を区画する境界施設と考えられる。本遺構を跨ぐ遺構は廃絶年代が17世紀末に位置づけられるSE300のみで、それ以外の遺構は本ピット列を意識して構築されていることが窺える。すなわち、17世紀末以降に本境界が設定され、大学用地に組み込まれるまで本区画が踏襲されていたことが推定される。本ピット列はCライン以西には楕円形ピットが、Dライン以東に1辺20～25cmを測る方形のピットが分布し、C～Dライン内では両者が分布しており、東西でピットの形態が異なる傾向がある。両者が分布するC～D間では一部重複

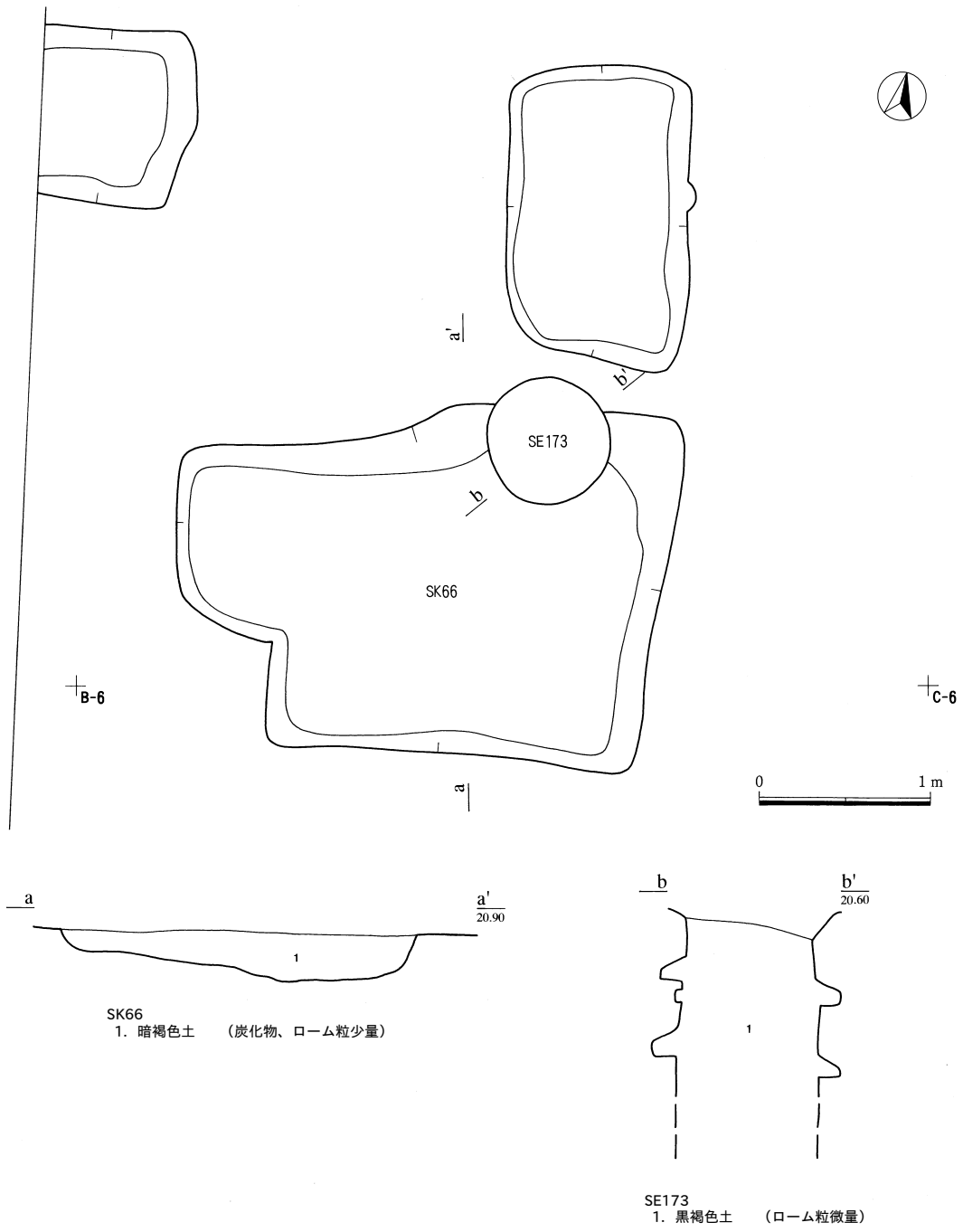
している例も認められ、両者間に時間的差異が存在することも示唆されるが詳細は不明である。

遺物は陶磁器、土器、金属製品が数点出土したにすぎない。

SK403（Ⅱ-30 図）

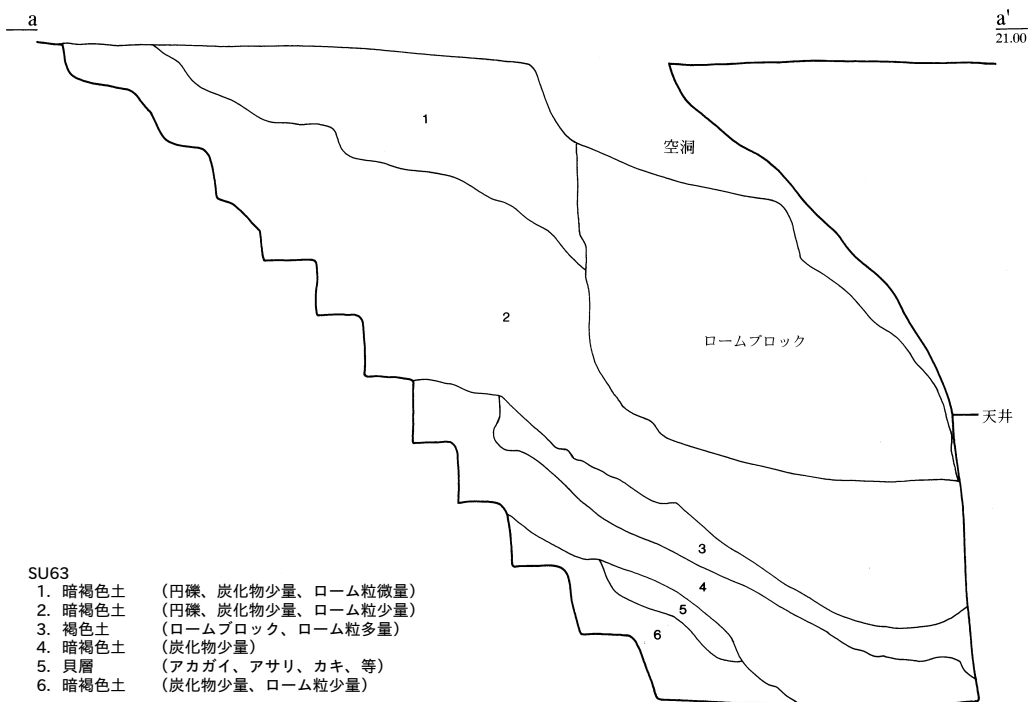
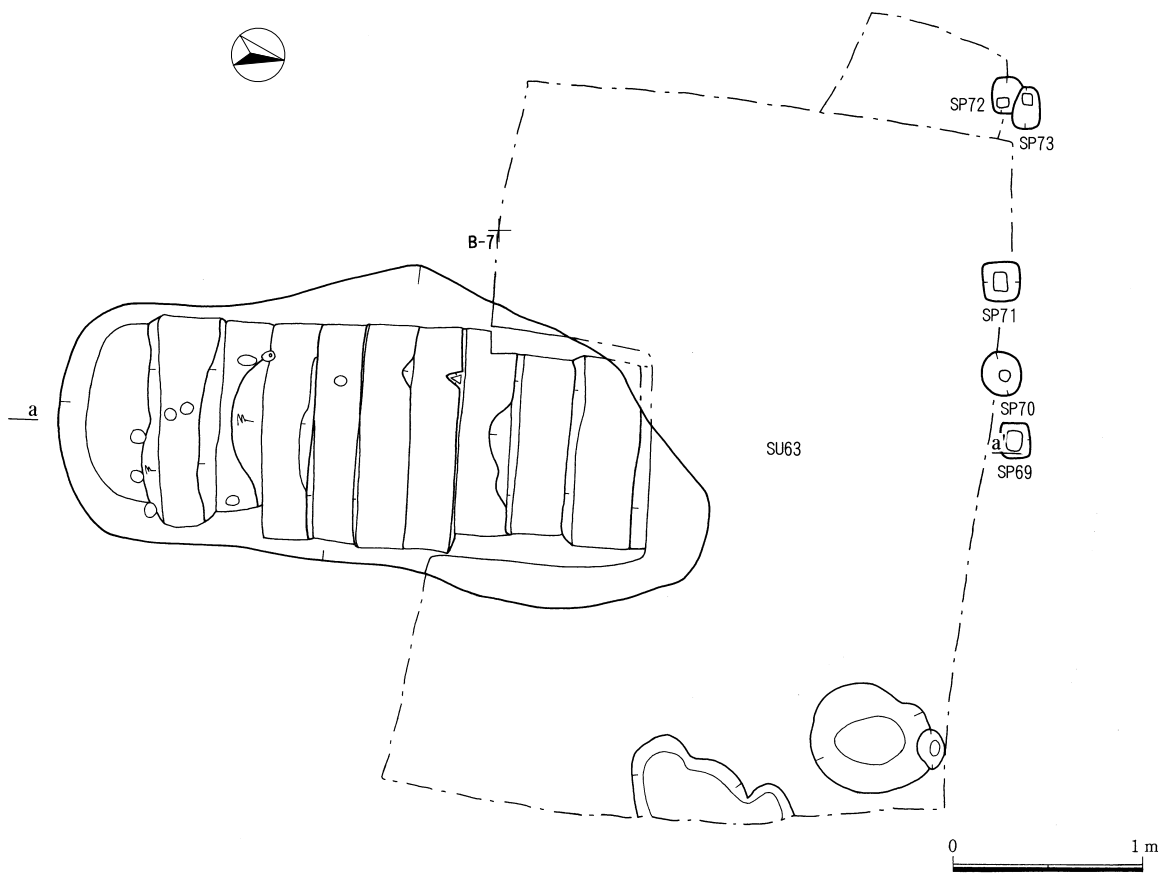
E7 グリッドに位置する遺構である。重複する SK391、SU392 より古い。SK391 坑底にて確認された。平面形は長方形を呈し、西側にテラスを有している。東西 120cm、南北 70cm、SK391 坑底からの深さは西側テラスまでが 20cm、東側坑底までは 30cm を測る。西側テラス部分は工具痕による凹凸が著しい。性格、年代は不明である。

遺物はかわらけを中心に十数点出土したにすぎない。

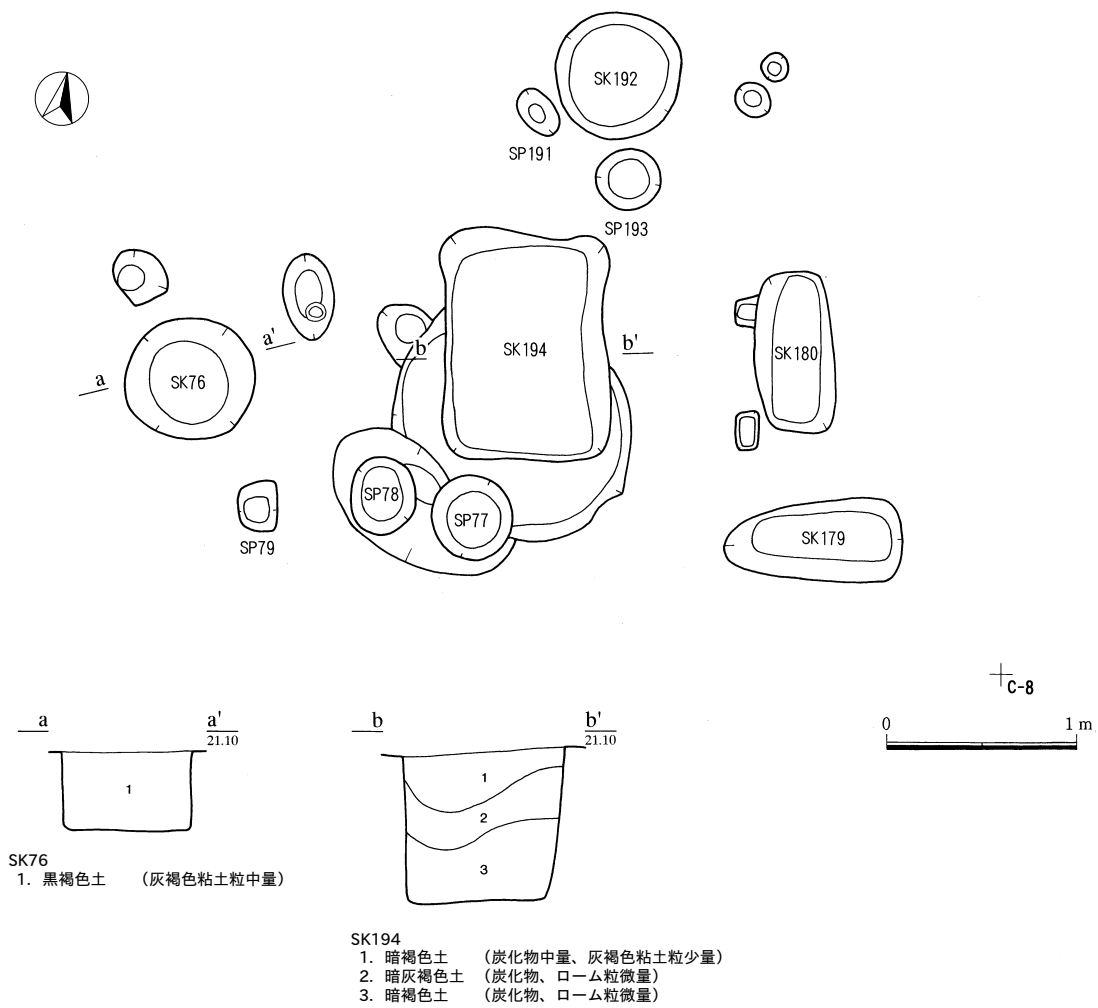


II-18 図 B区遺構(1)

第3節 B区の遺構

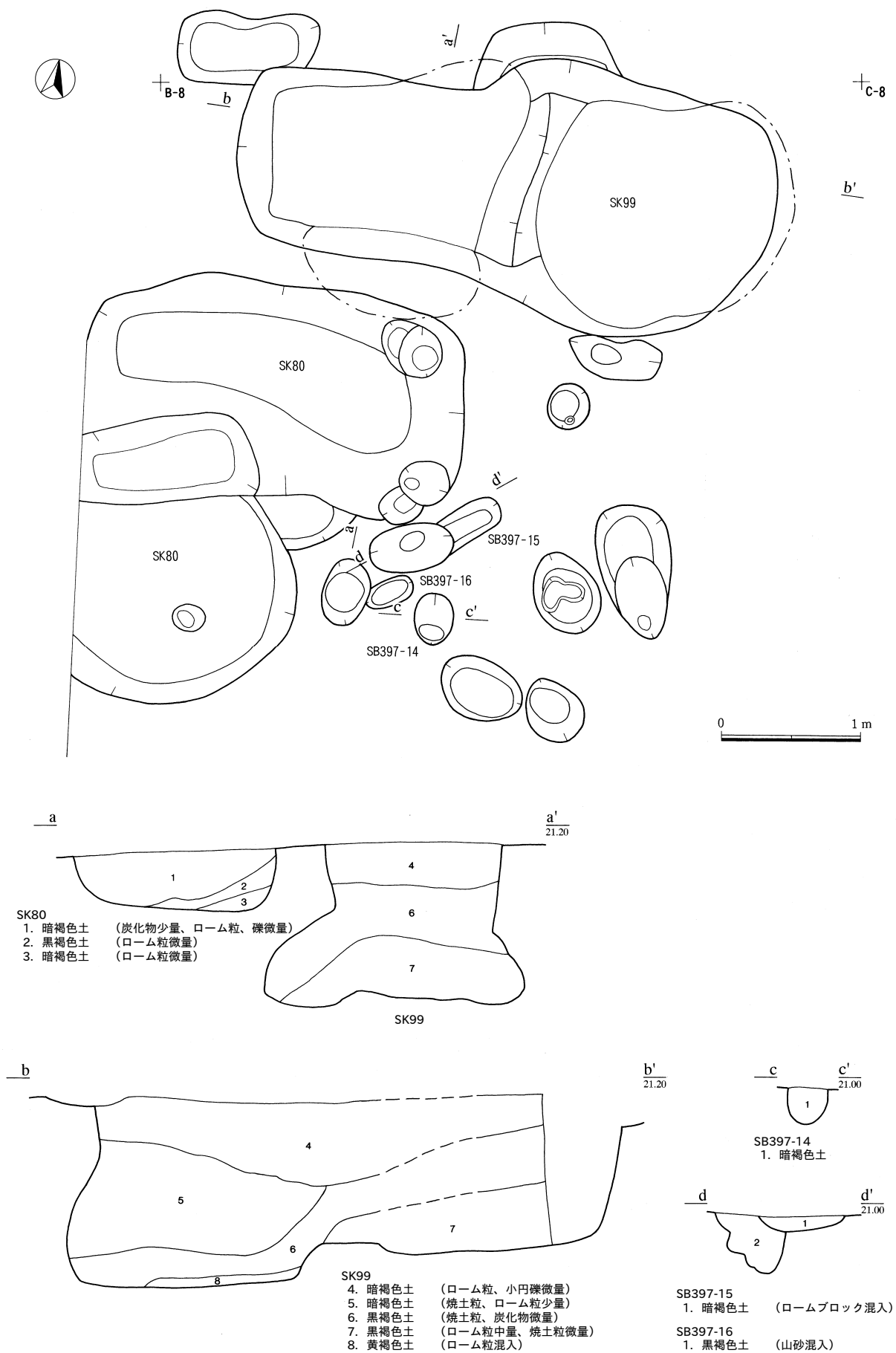


II-19 図 B区遺構 (2)

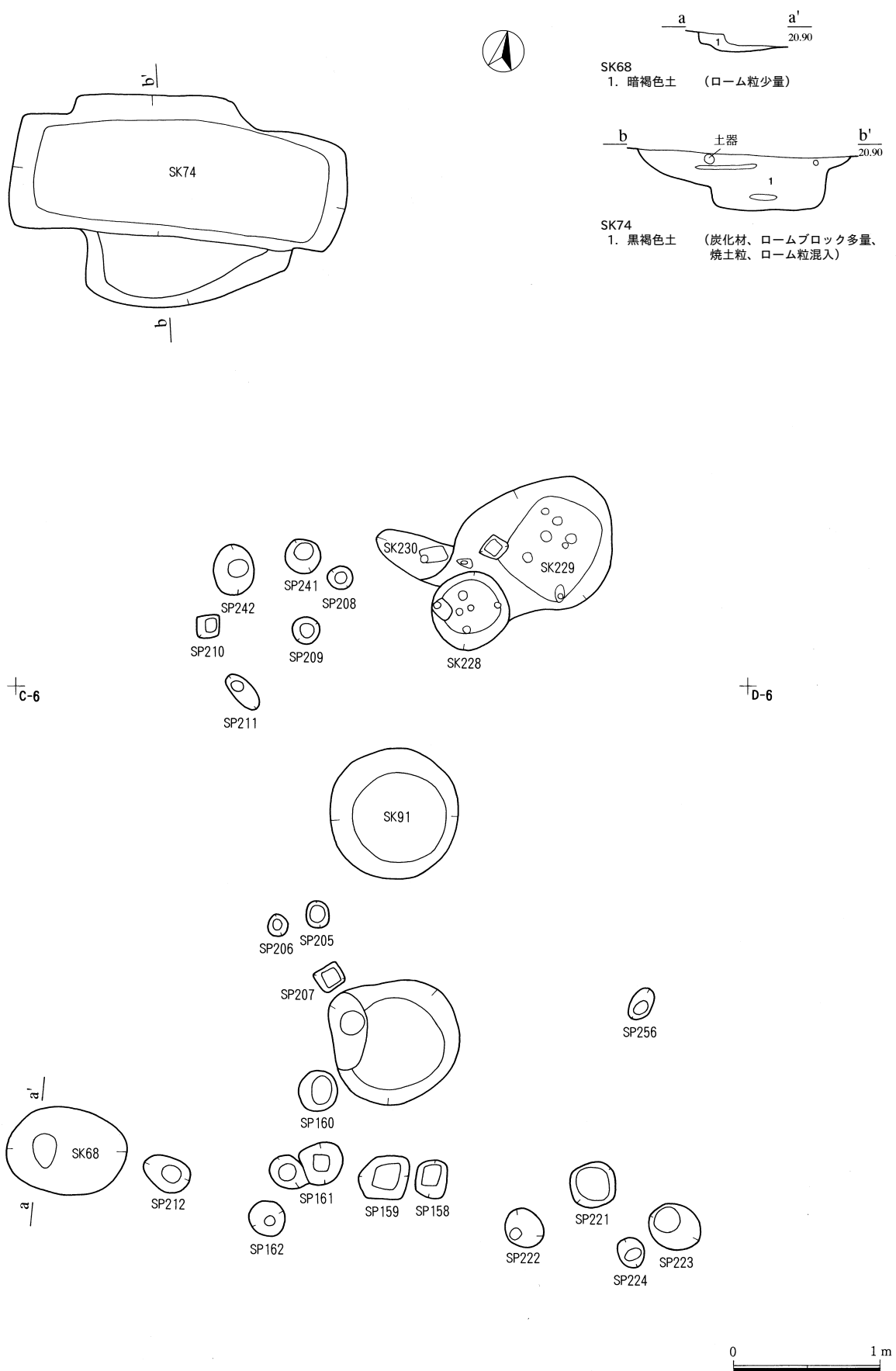


II-20 図 B区遺構 (3)

第3節 B区の遺構

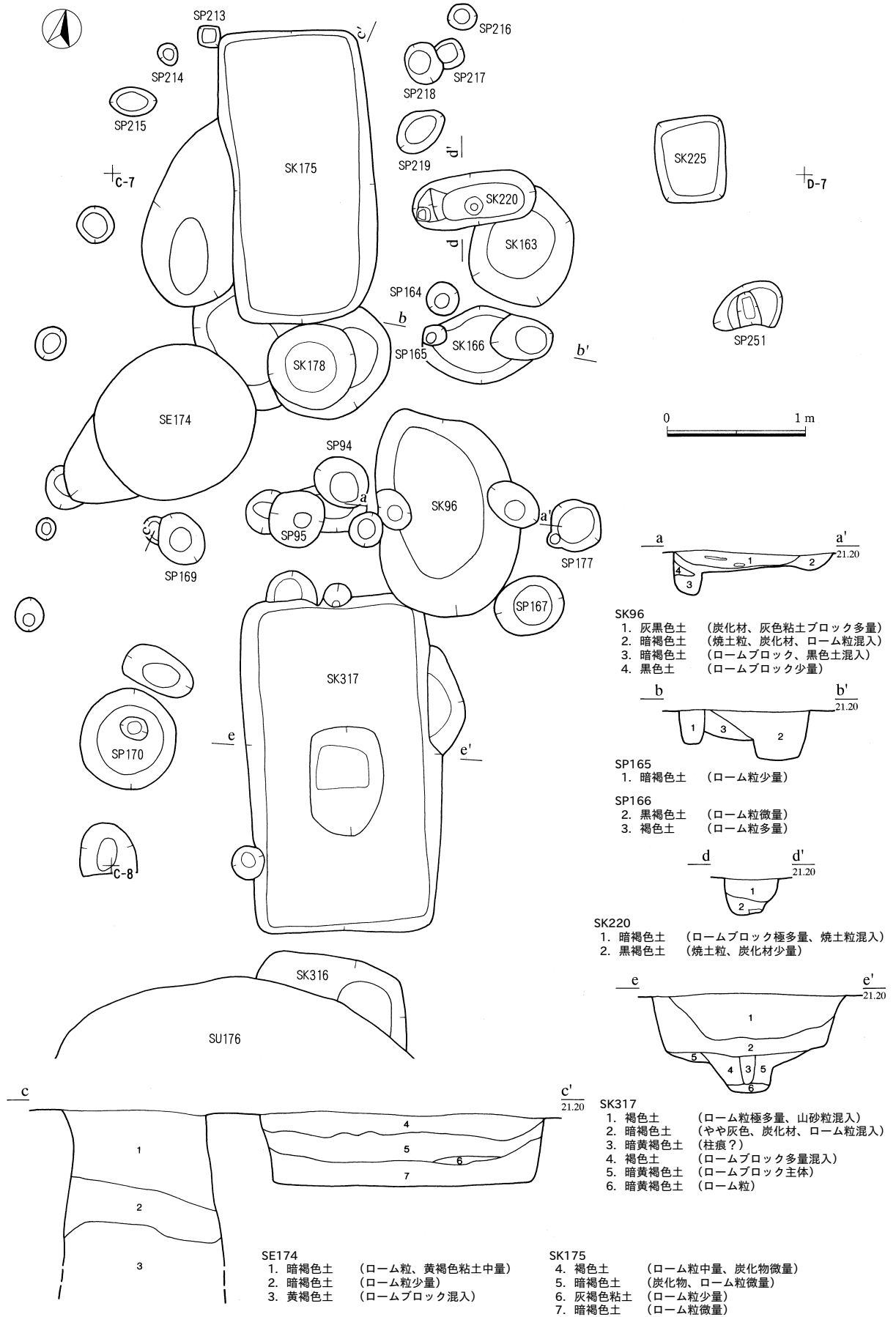


II-21 図 B区遺構 (4)



II-22 図 B区遺構 (5)

第3節 B区の遺構



- SK96
1. 灰黒色土 (炭化材、灰色粘土ブロック多量)
 2. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒混入)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック、黒色土混入)
 4. 黒色土 (ロームブロック少量)

- SP165
1. 暗褐色土 (ローム粒少量)

- SP166
2. 黒褐色土 (ローム粒微量)
 3. 褐色土 (ローム粒多量)

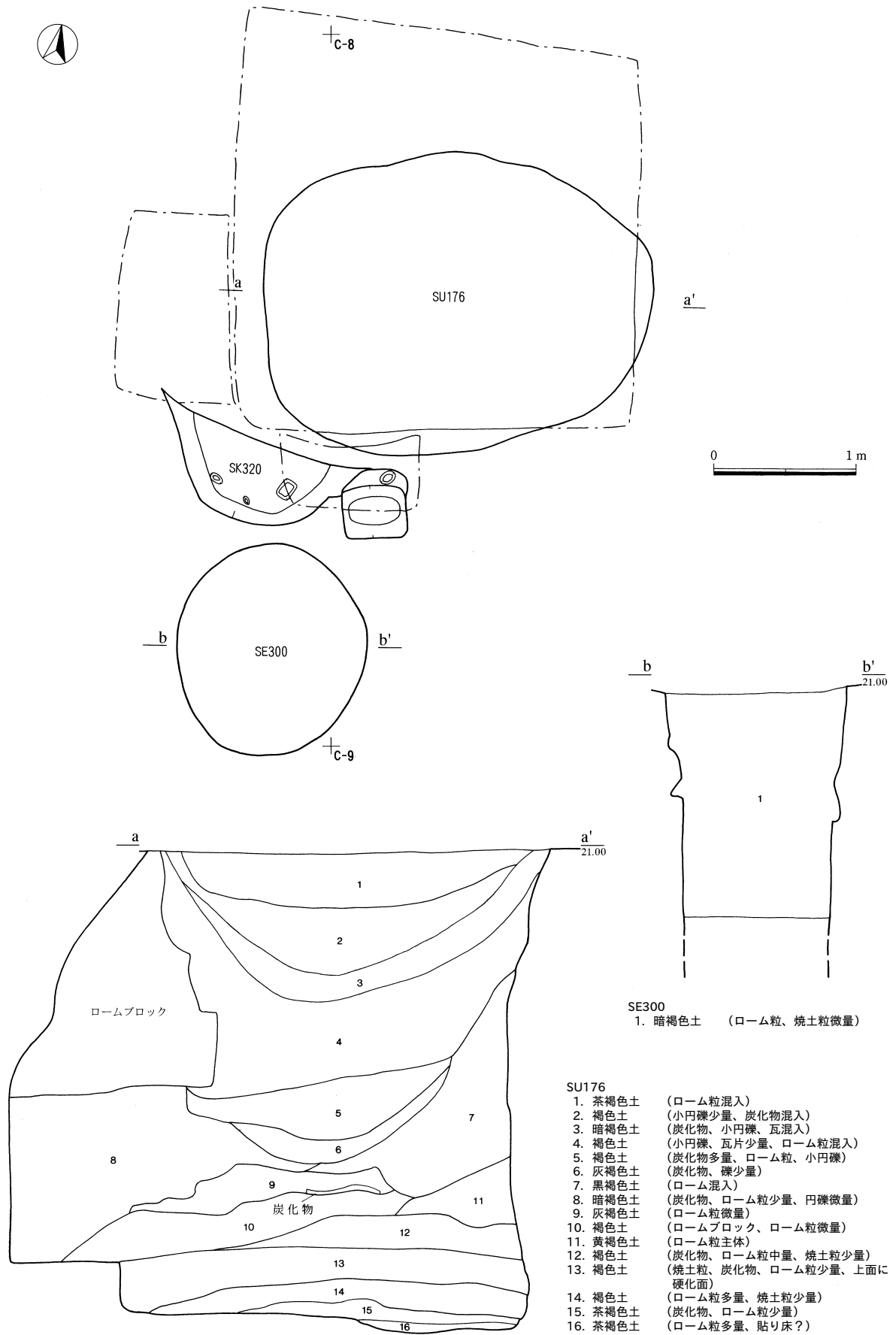
- SK220
1. 暗褐色土 (ロームブロック極多量、焼土粒混入)
 2. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材少量)

- SK317
1. 褐色土 (ローム粒極多量、山砂粒混入)
 2. 暗褐色土 (やや灰色、炭化材、ローム粒混入)
 3. 暗黄褐色土 (柱痕?)
 4. 褐色土 (ロームブロック多量混入)
 5. 暗黄褐色土 (ロームブロック主体)
 6. 暗黄褐色土 (ローム粒)

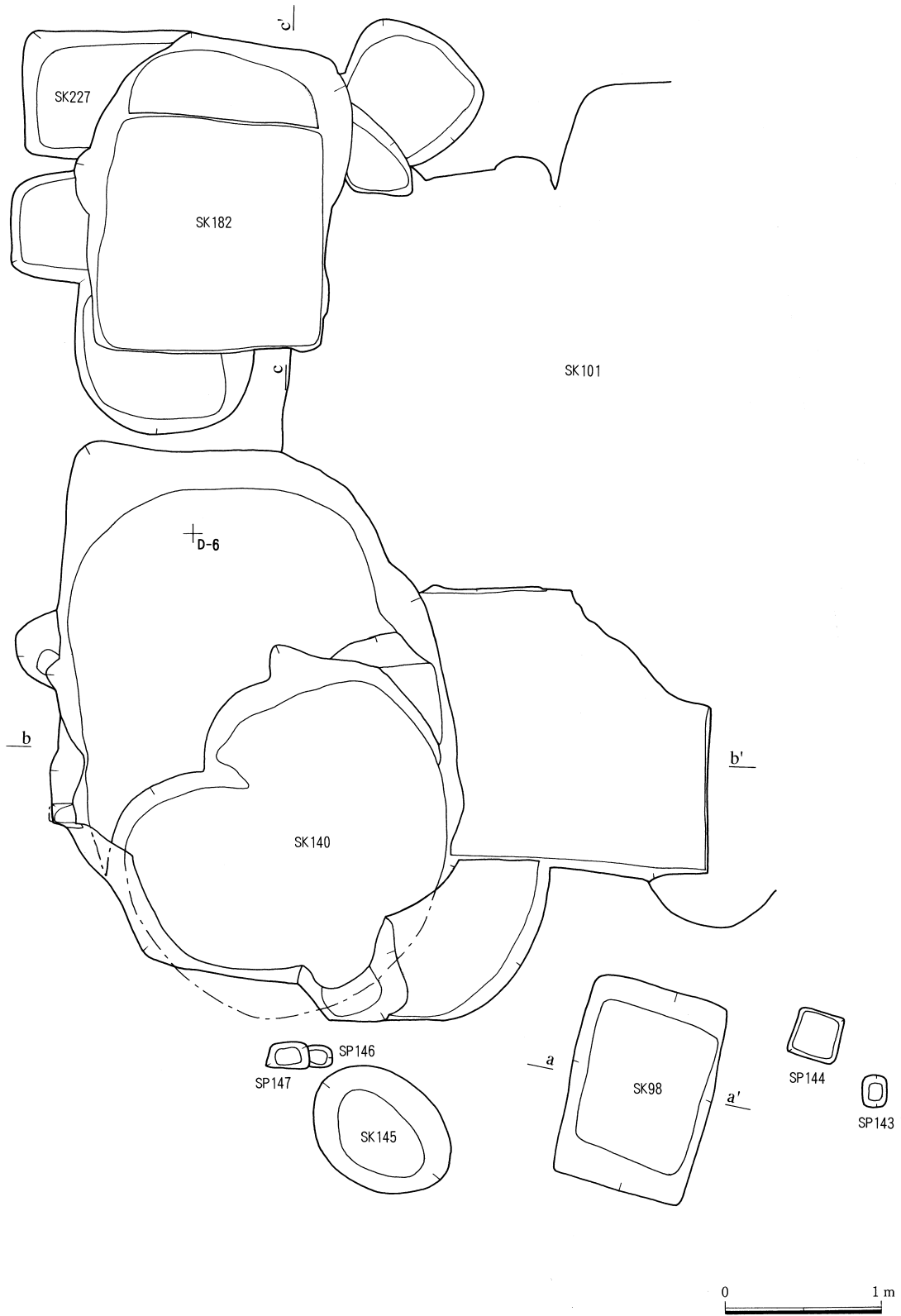
- SE174
1. 暗褐色土 (ローム粒、黄褐色粘土中量)
 2. 暗褐色土 (ローム粒少量)
 3. 黄褐色土 (ロームブロック混入)

- SK175
4. 褐色土 (ローム粒中量、炭化物微量)
 5. 暗褐色土 (炭化物、ローム粒微量)
 6. 灰褐色粘土 (ローム粒少量)
 7. 暗褐色土 (ローム粒微量)

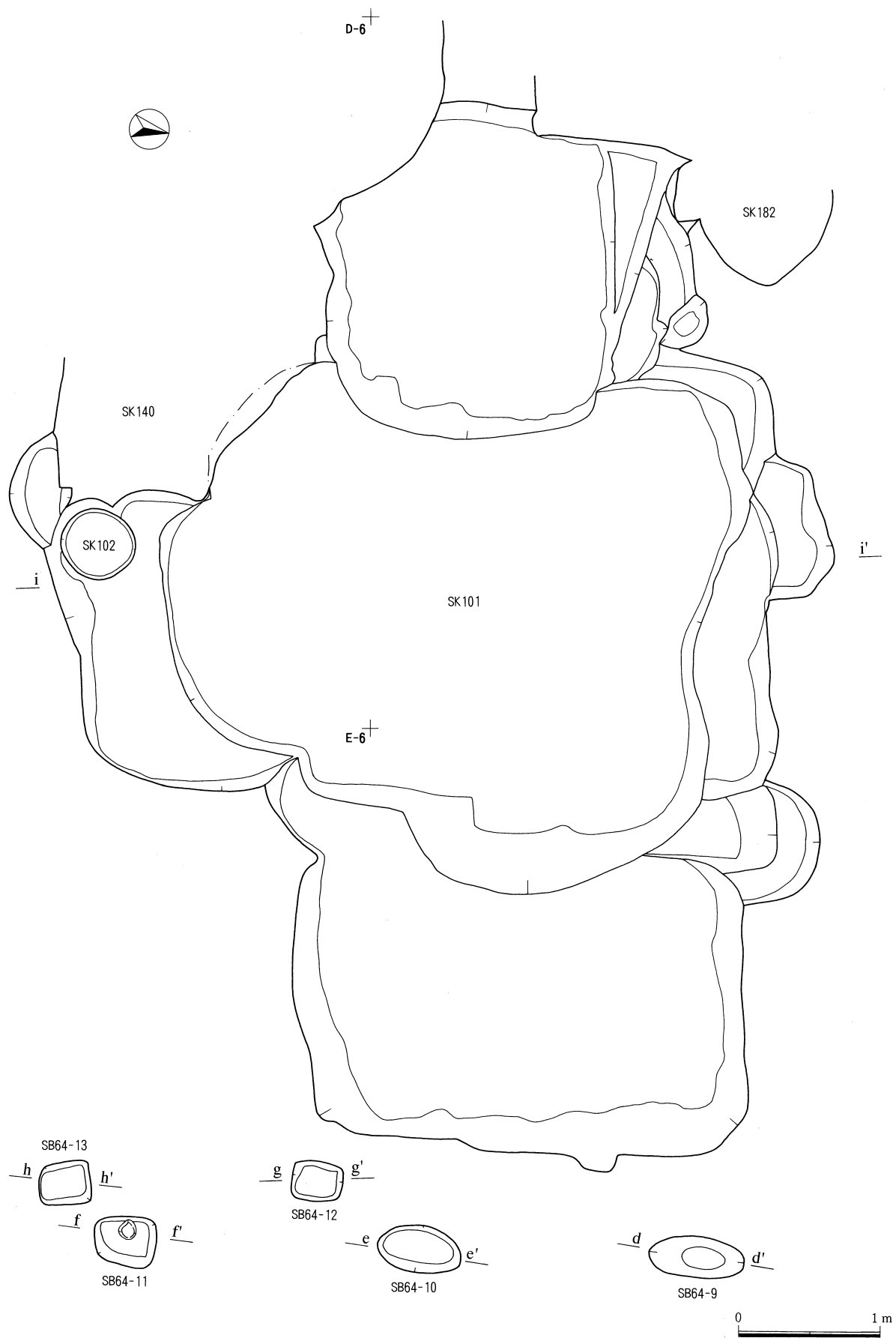
II-23 図 B区遺構 (6)



II-24 図 B区遺構 (7)

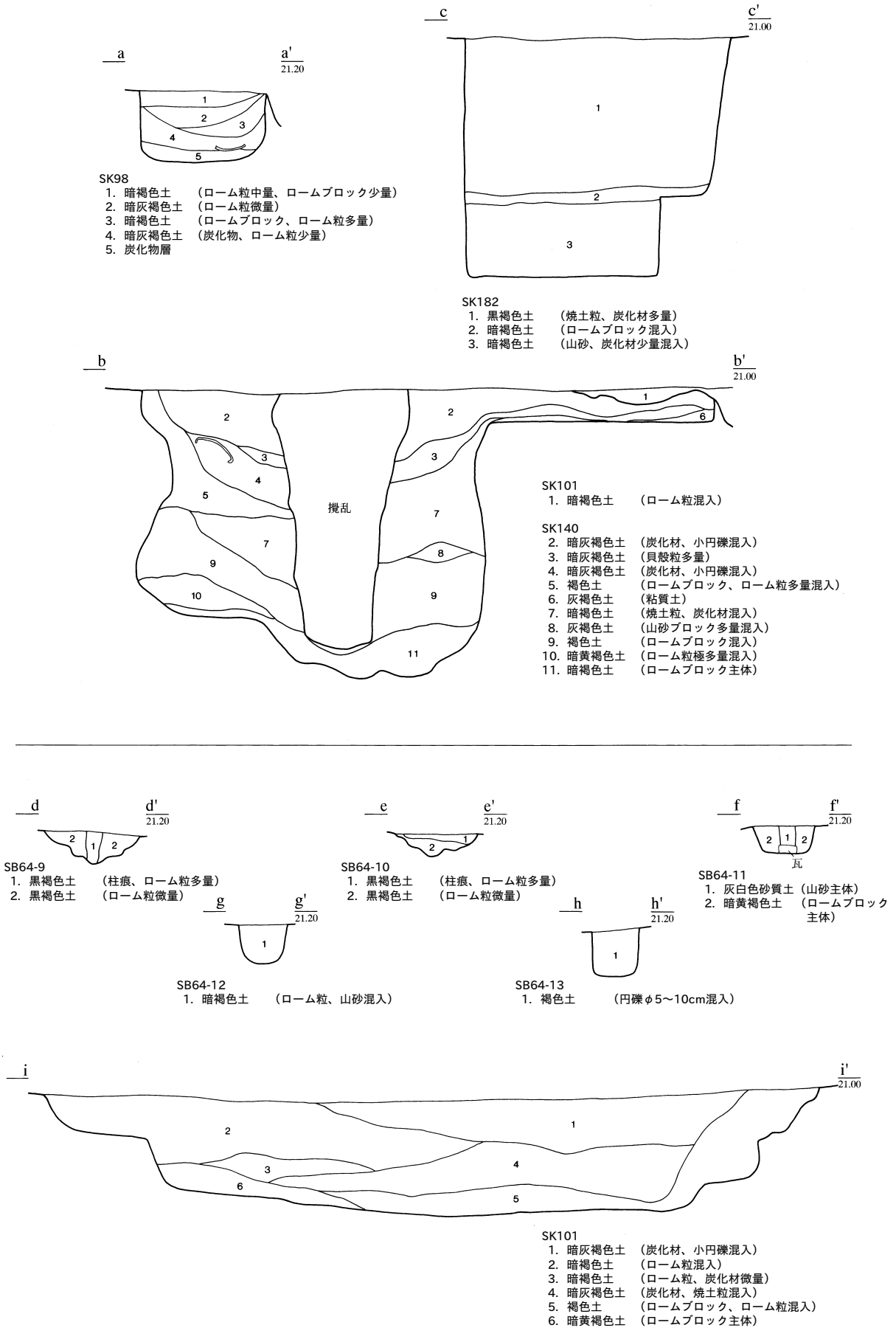


II-25 図 B区遺構 (8)

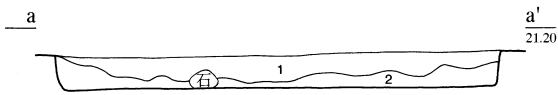
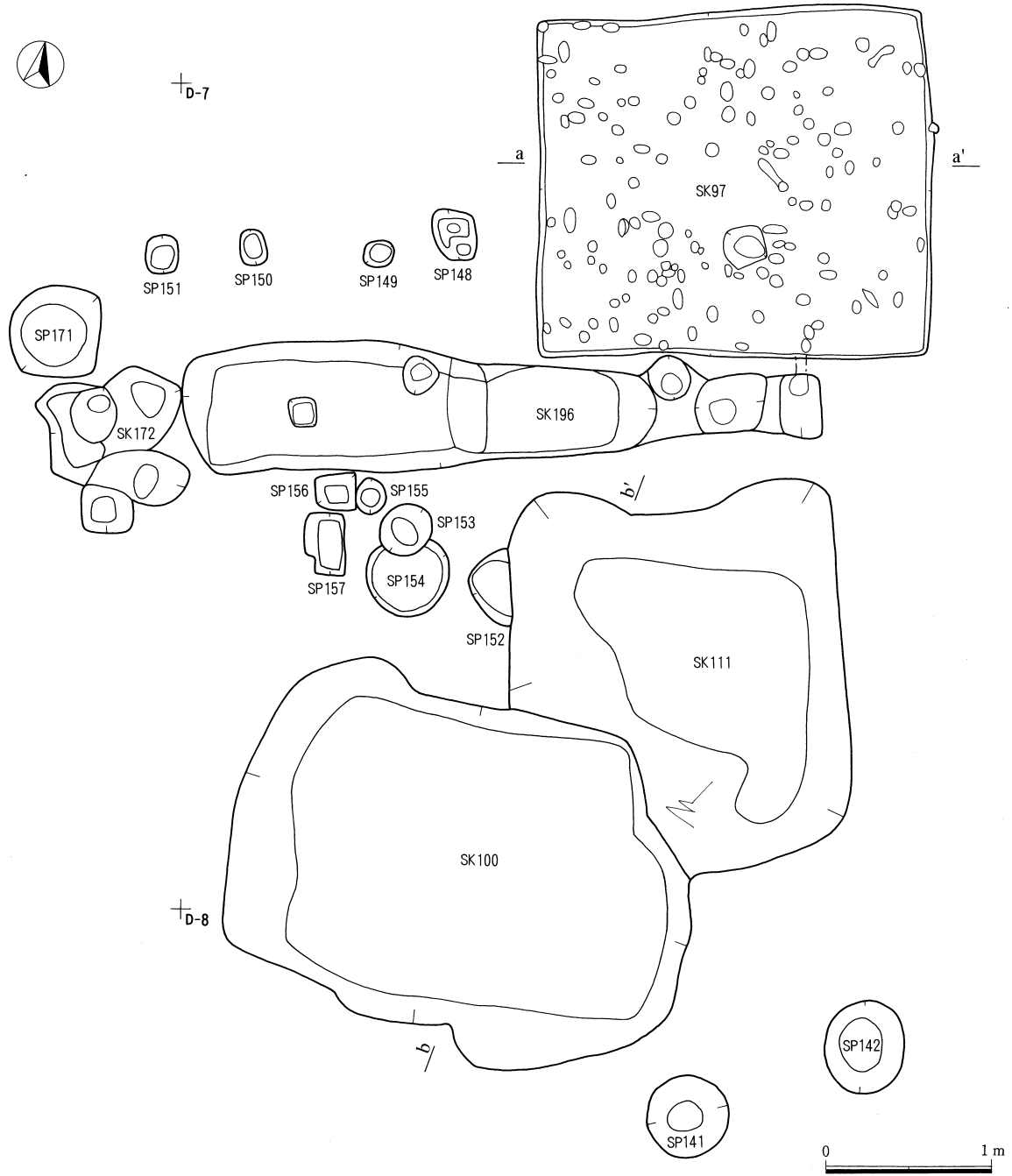


II-26 図 B区遺構 (9)

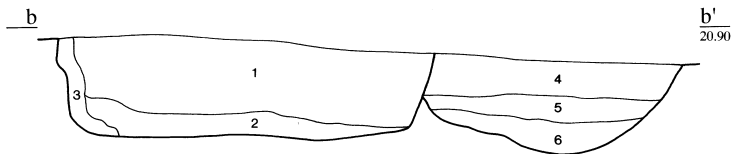
第3節 B区の遺構



II-27 図 B区遺構 (10)

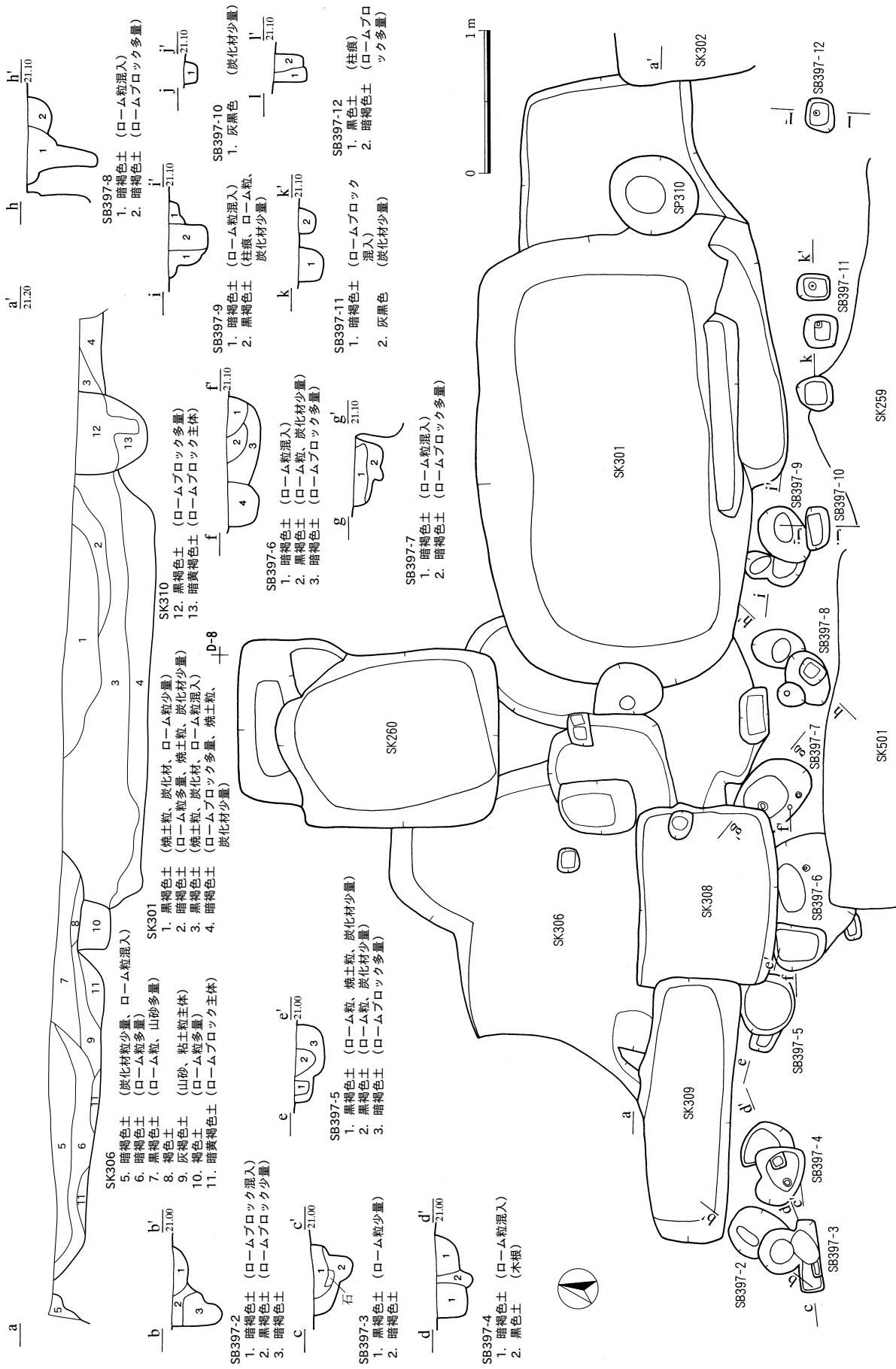


- SK97
 1. 暗褐色土 (炭化物、ローム粒少量)
 2. 褐色土 (ローム粒多量)

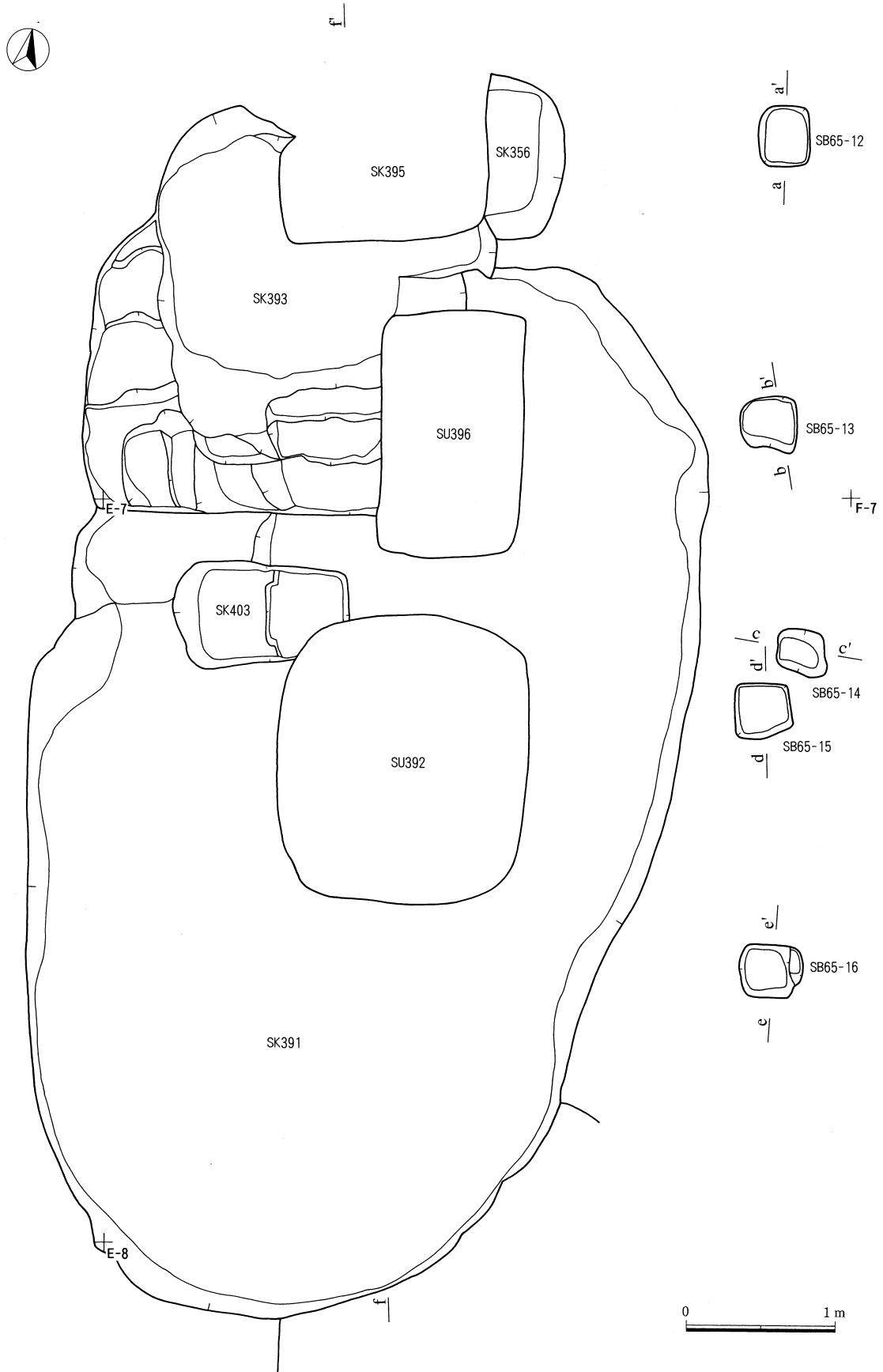


- SK100
 1. 暗褐色土 (炭化材、ローム粒少量)
 2. 黒褐色土 (ローム粒微量)
 3. 褐色土 (ローム粒多量)
- SK111
 4. 褐色土 (ローム粒中量、炭化物、小円礫微量)
 5. 暗褐色土 (ローム粒少量、炭化物微量)
 6. 暗褐色土 (ローム粒少量)

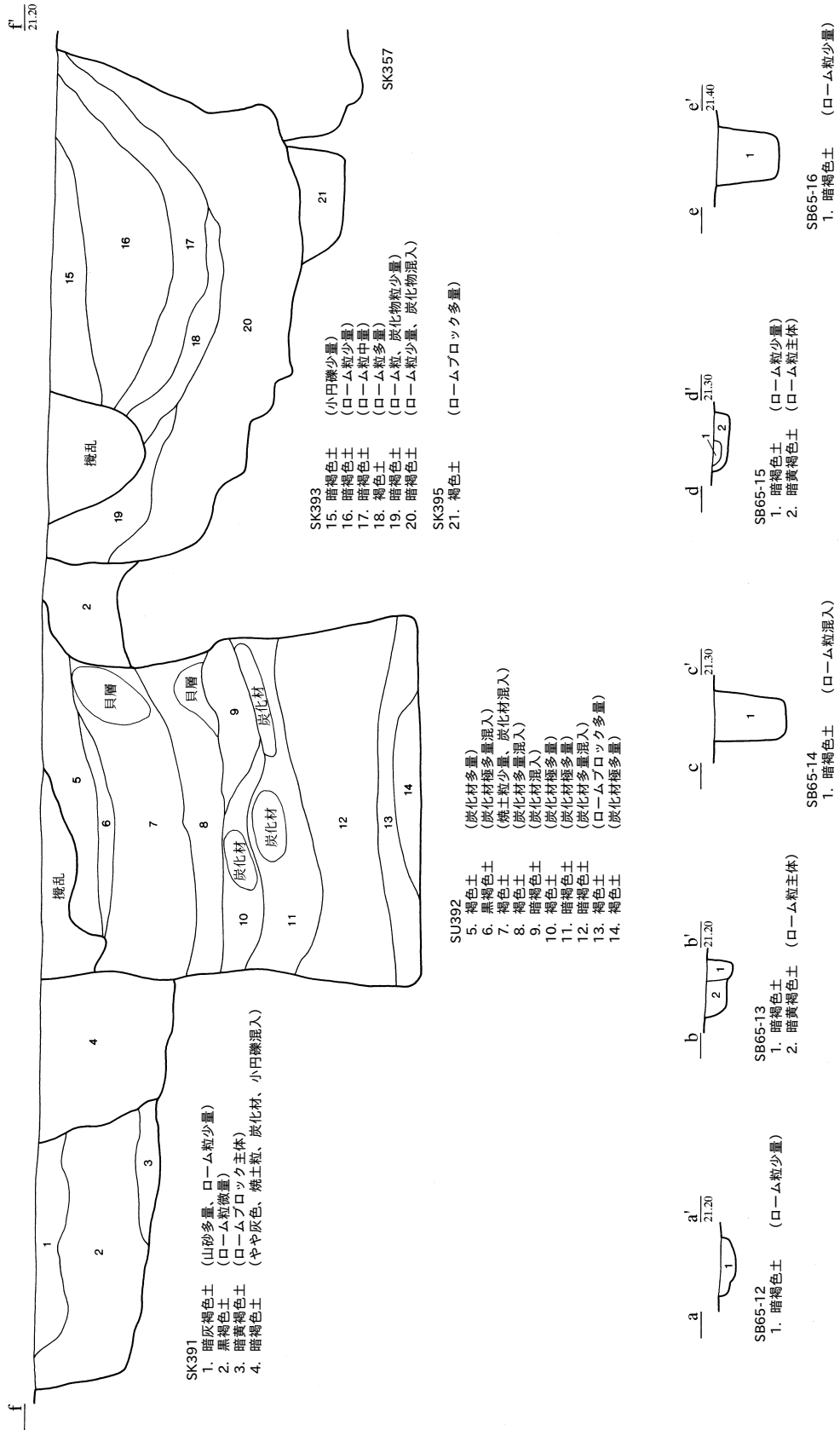
II-28 図 B区遺構 (11)



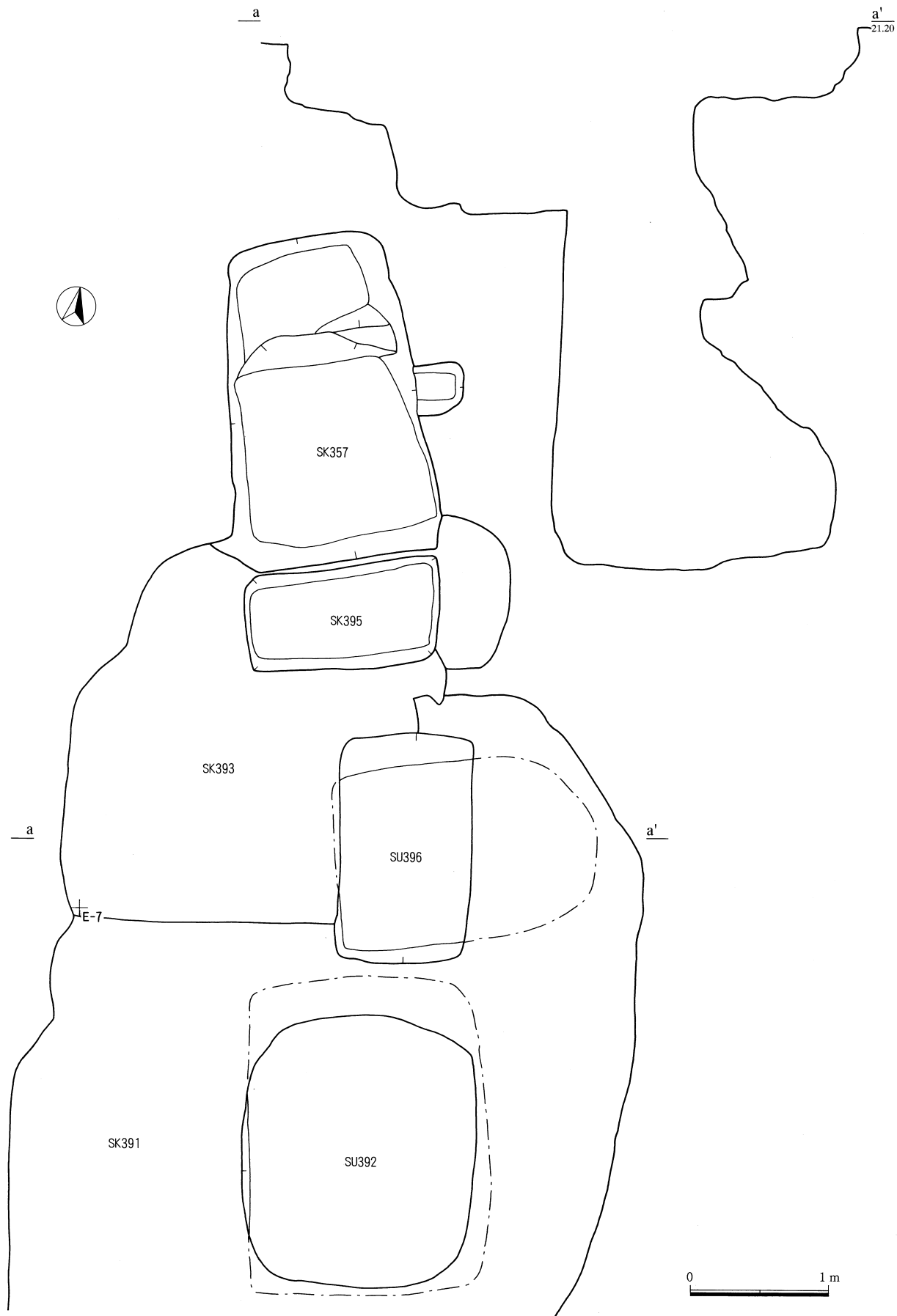
II-29 図 B区遺構 (12)



II-30 図 B区遺構 (13)

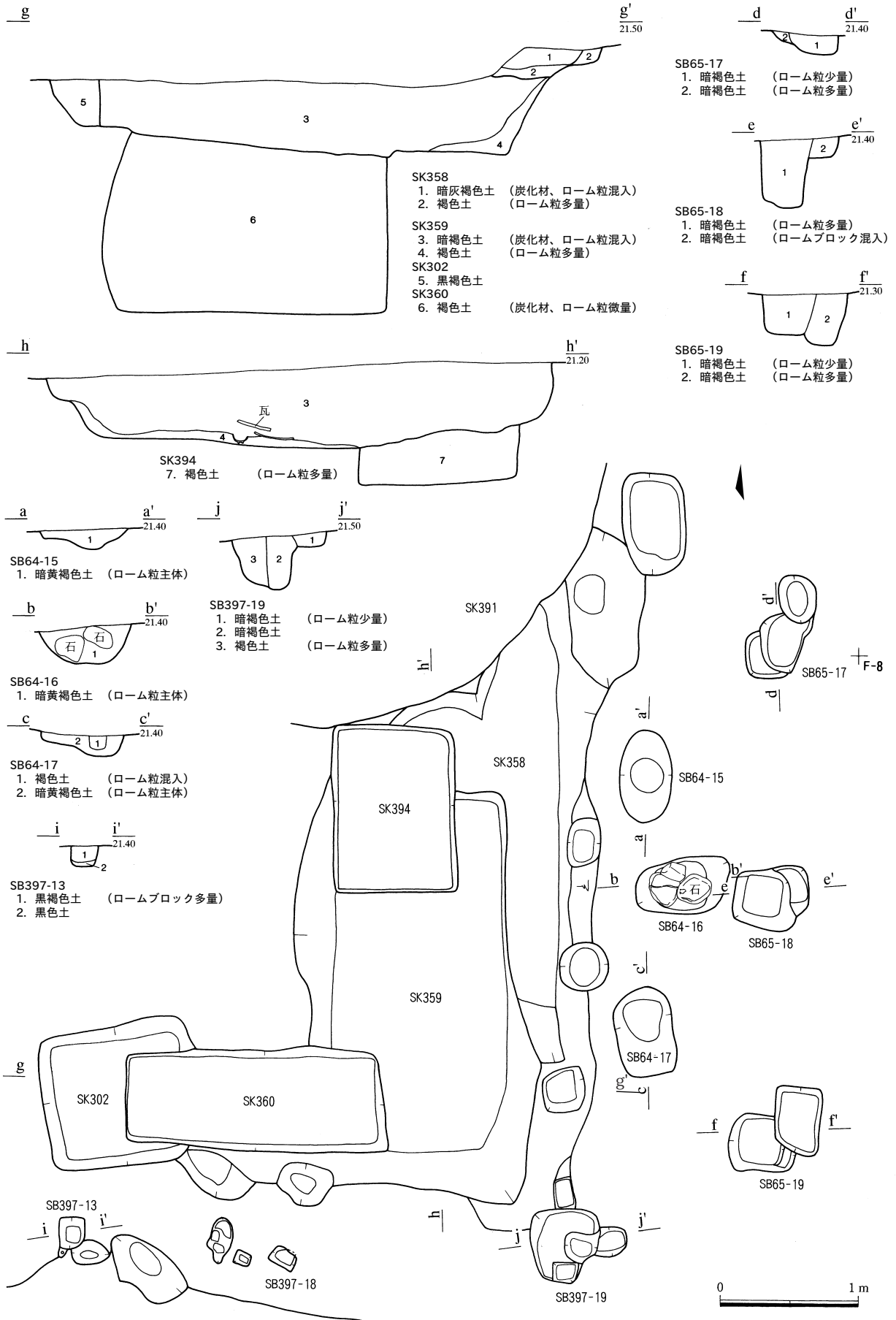


II-31 図 B区遺構 (14)



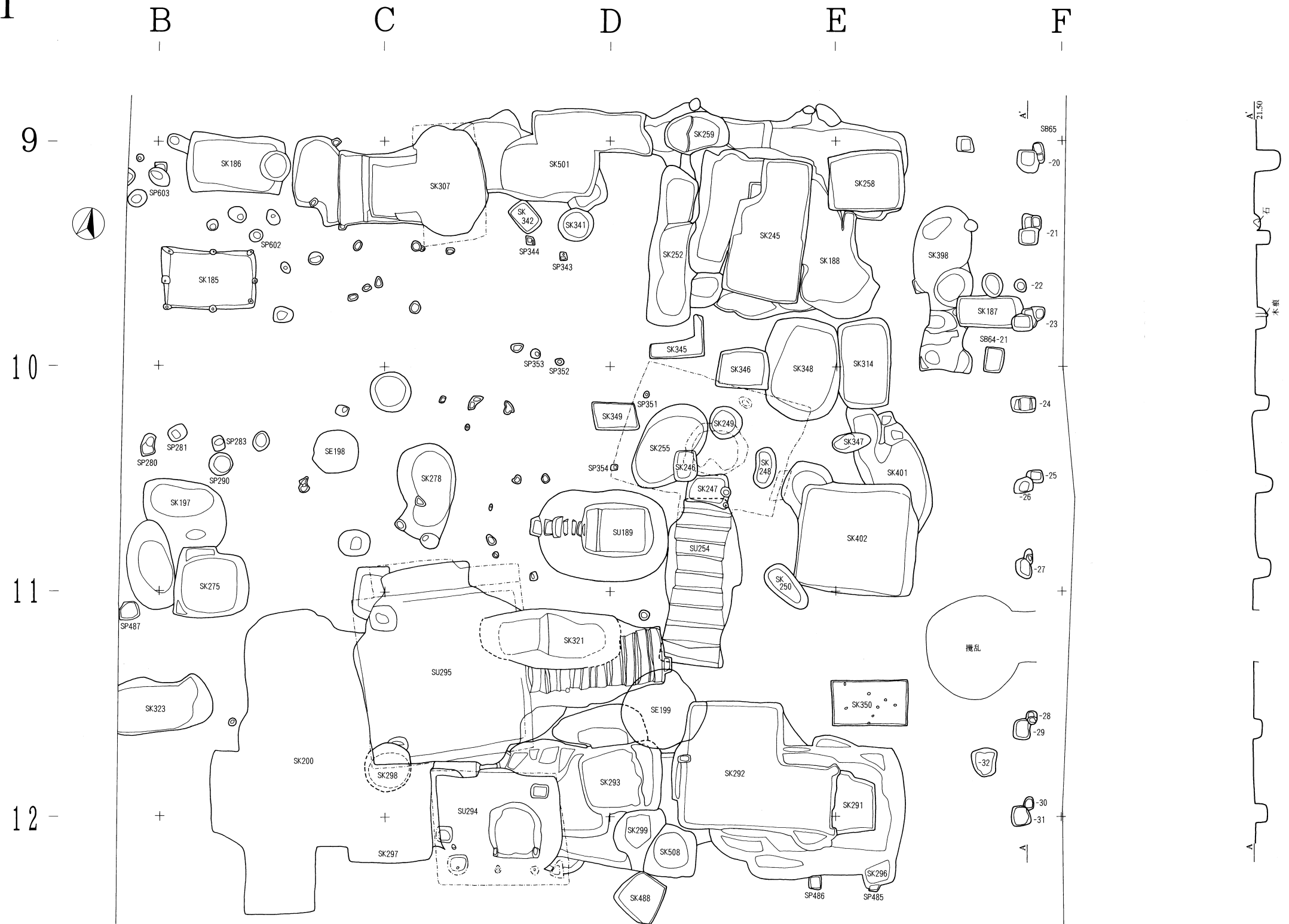
II-32 図 B区遺構 (15)

第3節 B区の遺構



II-33 図 B区遺構 (16)

C 1



II-34 図 C1区遺構配置図

第4節 C₁ 区の遺構

SK185 (Ⅱ-35 図)

B9 グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、東西 210cm、南北 130cm、確認面からの深さ 90cm を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、全体的に工具痕による凹凸が若干認められる。壁際にはコーナー 4 箇所と各壁中央部に 4 箇所小ピットが存在する。各ピットは埋設される柱の表面が壁面と揃うように、壁を掘り込んで掘削されている。壁際に板材などの痕跡は確認されなかったため、柱の性格については不明である。覆土はレンズ状に堆積しているが、2 層は貝、炭化材、人工遺物を含む暗灰褐色土で、その様相から本遺構の性格は廃棄遺構と推定される。

遺物は 18 世紀後半の陶磁器、土器がコンテナ 6 箱出土している。

SK186 (Ⅱ-35 図)

B9 グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、東西 230cm、南北 125cm、確認面からの深さ 50cm を測る。坑底、壁面ともに比較的丁寧に整形されている。断面形は鍋底状を呈し、坑底から壁にかけて丸味を帯びて移行する。東壁際に直径 65cm を測る掘り込みが存在するが性格は不明である。覆土はレンズ状堆積を呈し、特に最下層 (3 層) には炭化材、焼土が多量に含まれており、火災後の瓦礫整理に利用された可能性もある。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器、金属製品、動物遺体などがコンテナ 6 箱出土している。

SK188 (Ⅱ-43 図)

D9、E9 グリッドに位置する遺構である。重複する SK245、SK252、SK258、SK259、SK501 より新しい。平面形は不定形を呈し、南北 440cm、東西最大長 580cm、確認面からの深さ最大 75cm を測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が顕著に認められ、さらに掘削時の起伏が著しい。その様相から採土坑の可能性が高い。

遺物は東大編年 V～VI 期、東大編年 VIII b～c 期の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品などが多量に出土しており、廃棄遺構として利用されたことが窺える。SU176 と遺構間接合が認められた。また特筆すべき遺物として東壁際よりクレイパイプが出土している (Ⅲ-42 図 9)。

SU189 (Ⅱ-40 図)

C10、D10 グリッドに位置する遺構である。確認面での平面形は楕円形を呈し、規模は東西 300cm、南北 200cm を測る。坑底は東寄りに存在し、1 辺 95cm の方形を呈する。坑底西側には奥行き 25cm、坑底との比高差 30cm を測るテラスが設けられている。壁面はテラス部まではほぼ垂直に立ち上がっているが、そこよりハの字状に開いて立ち上がる。特に西壁ではその傾斜角が 40° と緩やかで、壁面には幅 30～40cm、奥行き 10～15cm を測る足掛け程度の簡易的なステップが 7 段作出されている。覆土は階段部方向から流れ込みによって堆積している。

遺物は 18 世紀末～19 世紀初頭の陶磁器、土器、金属製品、石製品がコンテナ 5 箱出土している。

SK197 (Ⅱ-36 図)

A10、A11、B10、B11 グリッドに位置する土坑である。平面形は不整形で、2 基の土坑が切り合うような形状を呈している。南東側にある SK275 を切って構築されている。規模は南北 290cm、東西 200cm、深さは深い南側で 45cm、浅い北側で 15～25cm を計測する。壁や坑底はやや凹凸が認められる。覆土は最下層に焼土を多く含む層を含めて、7 層に分層される。

遺物は出土していない。

SE198 (Ⅱ-36 図)

B10 グリッドに位置する井戸である。平面形は円形を呈し、規模は径約 100cm を計測する。調査は安全のため確認面から 150cm 付近までしか行っていない。壁面の東および西側に相対して足掛けとみられる窪みが 50cm 程度の比高差をもって穿たれている。覆土は 2 層に分層され、いずれも細かい粒子の黒褐色土で構成されている。井戸側の痕跡は確認されない。小さい井戸径、足掛け、細かい粒子の黒褐色土の覆土などは、これまでの加賀藩邸の調査では 17 世紀前半の井戸の特徴と共通している。

遺物は出土していない。

SE199 (Ⅱ-38 図)

D11 グリッドに位置する井戸である。SK292、SK293、SU295 を切って構築されている。平面形はやや歪な円形を呈し、井戸を中央に配するように井戸側と推定できる土坑が存在する。規模は井戸側が南北 180cm、東西 190cm、深さ 20cm、井戸は南北 100cm、東西 110cm を計測する。調査は安全のため確認面から 140cm 付近までしか行っていない。壁面は丁寧に整形されている。

遺物は明治期の陶磁器、土器を中心に四十数点出土している。なお、磁器の施文技術は型紙刷りまで確認できる。

SK200 (Ⅱ-37 図)

B11、B12、C11、C12 グリッドに位置する土坑である。東側に隣接する SU294、SU295、SK297、SK298 を切って構築されている。遺構は中央に東西に主軸を持つ長方形の土坑を挟むように北方に大形、南方に小形の方形土坑が配され、3 基の土坑が切り合ったような形状を呈しているが、土層の堆積状況からこれらは一度に埋められていることが確認された。長方形を呈する中央部は他より深く構築されている。南北壁の下方には 20～50cm 間隔で壁面の奥に向かって縦長の孔が穿たれている。これら孔の性格は不明である。また、坑底西壁沿いに長さ 130cm、幅 10cm 余、深さ坑底面より 20cm の壁溝状の施設が確認された。北方の方形土坑の北壁、東壁中央付近には壁面の奥に向かって約 70cm の円形の孔が穿たれている。南方の土坑は北方のものより小さく、坑底は南西の一部がテラス状に約 20cm ほど高く構築されている。土坑の坑底、壁面は丁寧に平滑に構築され、坑底はフラットに、壁は坑底より垂直に立ち上がっている。

これらを合わせた規模は南北 730cm、東西 490cm、深さは中央長方形土坑が坑底まで 180cm、北方方形土坑が 120cm、南方方形土坑が 100cm を計測する。覆土はロームを主にした土で構成され、上部にはレンガ片などが混入していた。

本遺構の性格は類似した遺構などが確認されていないため不明であるが、ガラス瓶に大正 5 (1916) 年発売の丸善のアテナインキ瓶が出土していることから、本遺構は東京帝国大学に伴う遺構であると考えられる。帝国大学は明治末年に本郷森川町にある当該地を大学用地として編入、利用を開始するが、本遺構付近に建物が建築されるのが大正 6、7 年で、その後一部増築されている。大正 12 (1923) 年構内配置図によると「電気実験室」と記されているが、増築以前に実験室であったかは不明である。そしてこれは昭和 30 年代まで使用されている。これらの遺物出土状況や土地利用の経緯から大正後半期に行われた建物増築に伴い、遺構が廃絶された蓋然性が高い。

遺物は陶磁器、土器を中心に金属製品、生産関連製品、木製品、ガラス製品、骨角製品などがコンテナ箱に 5 箱程度出土している。遺物は SK291、SK293、SK297 出土遺物と遺構間接合が認められる。いずれの遺構も本遺構近接することから、本遺構の廃棄過程で混入したものと推定される。

SK245 (Ⅱ-43 図)

D9 グリッドに位置する遺構である。重複する SK188 より古い。平面形は不整長方形を呈し、南

北 310cm、東西 250cm を測る。遺構西側はテラス状に 1 段高くなっている。テラスは北壁側で東へ張り出し平面形は逆 L 字状を呈する。またテラス部北壁には半円形状の張り出し部分を有する。坑底は北壁寄り 1/4 と南壁寄り 1/4 に比高差 40cm を測る平坦面を有し、緩斜面で接続されている。最深部の深さは確認面から 150cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底、壁面ともに比較的丁寧に成形されている。形態的に非常に特異な形状を呈しており、性格は不明である。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器、土器、金属製品、石製品、動物遺体がコンテナ 6 箱出土している。

SK252 (Ⅱ-43 図)

D9 グリッドに位置する遺構である。重複する SK188 より古い。平面形は不整長方形を呈し、南北 355cm、東西 105cm、確認面からの深さ 45cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が顕著である。性格は不明である。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器、金属製品、動物遺体がコンテナ 1 箱出土しており、SK293 と遺構間接合が認められた。

SU254 (Ⅱ-45 図)

D10 グリッドに位置する地下室である。南側に階段を北側に平面長方形の室部を有する。階段部は中央部がやや括れる撥形を呈する。ステップは 10 段を数え、幅は 100~130cm、奥行きは 25~35cm を測る。仰角は 36° と比較的緩やかである。確認面からの 2 段のみステップ奥壁に補強のための杭痕が複数存在するが、ソフトロームからハードロームへの移行部にあたるためと思われる。また室部へつながる最下段のステップ端はアーチ状に成形されている。室部は東西 370cm、南北 270cm、確認面からの深さ 240cm を測る。主軸は階段部に対し、N-99° -E と若干軸線がぶれている。天井高は 160cm を測り、室部全体が天井で覆われていた。床面中央部には排水関連施設と推定される東西 135cm、南北 115cm、床面からの深さ 20cm の不整楕円形の浅い落ち込みがある。東壁南寄り床面上 110cm には幅 70cm、奥行き 30cm の壁龕状施設が設けられている。覆土は階段部からの埋め戻しによる堆積を呈しているが、主体を成す 2 層はロームブロックによる覆土で、本遺構が廃絶後短期間で埋め戻されたことを示している。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器、土器、金属製品がコンテナ 1 箱出土している。

SK258 (Ⅱ-43 図)

E9 グリッドに位置する遺構である。重複する SK188 より古い。平面形は長方形を呈し、東西 170cm、南北 135cm、確認面からの深さ 90cm を測る。坑底はほぼ平坦であるが、東壁際で工具痕による凹凸が残存している。覆土は炭化材を多量に含む黒灰色の単一層である。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ 2 箱出土しており、SK295 と遺構間接合が認められた。

SK259 (Ⅱ-43 図)

D8、D9 グリッドに位置する遺構である。SK188 と重複し、それより古い。平面形は楕円形を呈し、東西 140cm、南北 90cm、確認面からの深さ 105cm を測る。全体的に粗い整形で、工具痕による凹凸も顕著である。

遺物は 18 世紀後半~19 世紀初頭の陶磁器、土器、金属製品、動物遺体がコンテナ 2 箱出土している。

SK275 (Ⅱ-36 図)

B10、B11 グリッドに位置する土坑である。平面形は隅丸方形を呈するが、北壁西側に階段状の張り出しを有する。規模は南北 160cm、東西 160cm、確認面からの深さは 80cm を計測する。フラットな坑底から壁はやや傾斜を持って立ち上がる。覆土は 5 層に分層されるが、いずれの層も焼

土あるいは炭化物が多く混入している。

遺物は17世紀中葉の陶磁器、土器類が十数点出土している。

SK278 (II-40 図)

C10 グリッドに位置する不整形の土坑である。南北に主軸有し、楕円状を呈するが、西壁の一部がくびれる。確認面での規模は南北210cm、東西120cm、深さは最大30cmを計測する。坑底、壁は凹凸が著しく、坑底もフラットではない。土坑の南側には3基のピットが確認されているが、本遺構に付属しているかは判断できなかった。覆土は2層に分層される。

遺物は出土していない。

SK291 (II-46 図)

D11、D12、E11、E12 グリッドに位置する土坑で、SK292を切って構築されている。平面形はやや歪んだ方形を呈し、規模は南北140cm、東西100cm、確認面からの深さは最大90cmを計測する。壁、坑底は比較的丁寧に調整されている。覆土は2層に分層されるが、全体的に陶磁器、瓦、貝殻などの遺物が多く含まれており、ゴミ穴として機能していた可能性が強い。本遺構出土遺物はSK200、SK292、SK293、SK296、SK402と遺構間で接合している。当該遺構はC₁区域の屋敷の縁辺部に当たると推定している。周囲には廃棄年代が近接する遺構が複雑に重複して確認されており、それらは調査の過程において遺構の認識、遺物の分類などが厳密になし得なかったことも否定できない。ただ、これらのうち近接していないSK402との接合は同一屋敷内における廃棄を考える際注意しなくてはならないだろう。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器、瓦などがコンテナ箱に5箱程度出土している。

SK292 (II-46 図)

D11、D12、E11、E12 グリッドに位置する土坑である。SE199、SK291、SK293、SK296と重複しており、新旧はSK296より新で、SE199、SK291、SK293より旧である。遺構の平面形は西側の鉤形を呈するものと東側の隅丸長方形を呈するものが切り合うような形状を呈しているが、土層断面の観察からこれらの廃棄が同時期であることが確認された。また、断面実測図11層は特異な堆積を示しているが、別遺構が存在した可能性は否定できない。ただ、短い時間幅の中でゴミ廃棄坑の掘削～埋立が行われていることは間違えなく、これらの過程の中で行われた頻繁な土の移動が、調査時において堆積土の相違を明確に分離できなかった要因になっていると思われる。したがって、後述する遺構間接合もこうしたことが要因であろうと考えている。遺構の規模は、南北390cm、東西520cm。確認面からの深さは最大100cmを計測する。坑底や壁は東側鉤形部分は丁寧に、西側部分はそれと比較するとややラフに整形されている。

本遺構出土遺物はSK194、SK291、SK293、SK296と遺構間接合している。東大編年Ⅷa～Ⅷd期に比定できる陶磁器、土器群をはじめ瓦、金属製品、骨角製品などが多量に出土している。

SK293 (II-38 図)

C11、C12、D11、D12 グリッドに位置する土坑である。平面形は方形あるいは円形を呈する数基の遺構が切り合うような形状を呈しているが、土層断面の観察からこれらの廃棄が同時期であることが確認された。坑底や壁は凹凸が極めて顕著に確認でき、これらの状況から土採穴であった可能性があろう。SE199、SK200、SK292、SU294、SU295、SK299、SK508と重複しており、新旧はSE199、SK200より旧で、他より新である。規模は最大で南北390cm、東西360cm、深さ160cmを計測する。

本遺構出土遺物はSK140、SK200、SK252、SK291、SK292、SU294、SU295、SK296、SK297、

SK358、SK402 と遺構間接合している。先述したが、屋敷境付近に位置する本遺構とその周囲は短い時間幅の中でゴミ廃棄坑の掘削～埋立が行われていることは間違えなく、これらの過程の中で行われた頻繁な土の移動が、調査時において堆積土の相違を明確に分離できなかった要因になっていると思われる。したがって、この高い遺構間接合の頻度もこうしたことが要因であろうと考えている。東大編年Ⅷa～Ⅷd 期に比定できる陶磁器、土器群をはじめ金属製品、石製品、木製品、骨角製品などが多量に出土している。

SU294 (Ⅱ-38 図)

C11、C12 グリッドに位置する地下室である。遺構の上部を SK200、SK293 によって切られており、全体の様子は復元できなかつた。残存部はやや歪んだ方形を呈し、規模は南北 260cm、東西 280cm、深さは 150cm を計測する。坑底はフラットで、壁はやや内傾しながら立ち上がる。坑底中央にははしご固定と思われる径 1m 強の浅い落ち込みを有し、また、遺構が削平されていない南側において天井の一部が確認されていることから天井部を有した地下室であろうと推定される。

遺物は東大編年Ⅴ～Ⅷb 期の陶磁器、土器を中心に金属製品、石製品などと微量の近代製品が出土している。これらは東大編年Ⅴ～Ⅵ期と東大編年Ⅷb 期と 2 時期にピークがあり、また、SK293 と遺構間接合がみられる。これは断面実測図 10 層のように新しい遺構の覆土の一部が沈み込み、調査時において本遺構の遺物として取り上げてしまったことが原因であろうと推定している。従って本遺構の廃棄年代は東大編年Ⅴ～Ⅵ期にある可能性が強く、遺物実測図には当該期の資料を中心に掲載した。

SU295 (Ⅱ-41、42 図)

B10、B11、C10、C11 グリッドに位置する階段付きの地下室である。SE199、SK200、SK293、SK321 と重複しており、すべてより旧である。階段は 10 段確認され、ステップ幅 110～130cm、ステップ奥行 30cm 内外、ステップの比高差は 30cm 程度である。各ステップ手前には板を貼るためと推定できる小さい段が確認でき、奥壁よりやや手前には土留め板固定のためと思われる小ピットが両側壁付近と中央付近に穿たれている。室部は方形を呈し、南北 380cm、東西 380cm の床と、北壁には床面より 60cm 上に奥へ向かって東側 40cm、西側 60cm ほどのテラス状の張り出しが付けられている。坑底の壁周囲には幅 20cm、深さ 10cm の溝が掘られ、水分を周囲に逃がす配慮がされている。坑底までの深さは確認面より 320cm を計測する。階段、坑底、テラスなどの施設は平滑に整形されており、丁寧に構築されている。覆土は最下層(室部 5 層)に天井崩落土と思われるローム層が確認され、以上 2 層までは本遺構廃棄時の埋土であろうと思われる。最上層の 1 層は遺物を多量に含み天井崩落ローム層の上層に堆積していることから 1 層に包含されている遺物の年代である幕末(東大編年Ⅷd 期)に天井が陥没し、1 層が新たに埋められたと推定できる。したがって、実測図には 1 層出土の本地下室の廃棄時に伴うものではない遺物を「SU295 上」、それ以下から出土した廃棄時に伴う遺物を「SU295」を分けて掲載した。量的には 2 層以下の遺物は少ない。

遺物は陶磁器、土器を中心として東大編年Ⅷd 期に比定できる 1 層出土資料が大部分を占める。以下の資料は 18 世紀後半に中心があり、陶磁器、土器などコンテナ箱に 2 箱程度出土している。

SK296 (Ⅱ-46 図)

E12 グリッドに位置する土坑である。遺構の北側を SK292 に切られ、全体を復元できなかつた。また、南側の SP485 を切って構築されていた。遺存している規模は南北 50cm、東西 80cm、深さは 20cm を計測する。遺構の壁や坑底はややラフに構築されている。覆土は単層で、遺物を多く含む暗褐色土を呈している。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器を中心に多く出土しているが、調査時において隣接するSK292のものの一部混った。SK291、SK292、SK293、SU295上層、SK402の出土遺物と遺構間接合をしている。屋敷境付近に位置する本遺構とその周囲は、短い時間幅の中でゴミ廃棄坑の掘削～埋立が行われていることは間違えなく、これらの過程の中で行われた頻繁な土の移動が、調査時において堆積土の相違を明確に分離できなかった要因になっていると思われる。したがって、この高い遺構間接合の頻度もこうしたことが要因であろうと考えている。

SK297 (II-37 図)

B12、C12グリッドに位置する土坑である。遺構の北側をSK200によって削平されており、東南、西南のコーナーは確認できたものの遺構全体の様子を窺うことができなかった。遺存している規模は南北40cm、東西180cm、確認面からの深さは80cmを計測する。坑底、壁は丁寧に平滑に調整されており、壁はフラットな坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は5層に分層されるが、上層に陶磁器類、自然遺物が多く含まれていた。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器を中心に自然遺物などがコンテナ箱1箱程度出土している。SK200、SK293出土遺物と遺構間接合している。

SK298 (II-37 図)

B11、C11グリッドに位置する円形と推定される土坑である。南側をSK200によって大きく削平され、全体の様子は窺えない。調査時にSU295天井部が崩落し、必要な図の作成を行うことができなかった。遺存している規模は南北40cm、東西100cm、深さは170cmを計測する。壁、坑底は丁寧に整形されている。覆土は3層に分層され、上層褐色土、中層褐色土、下層ローム土で構成されている。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器を中心にコンテナ箱1箱出土している。SU295上層出土遺物と遺構間接合している。

SK299 (II-38 図)

D11、D12グリッドに位置する土坑である。東側でSK508、西、北側でSK293と重複しており、新旧はSK293より旧、SK508より新である。平面形はやや歪な円形を呈し、遺存している規模は南北140cm、東西110cm、確認面からの深さは最大160cmを計測する。遺構の坑底、壁は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は遺物を多く含む暗褐色土を呈している。

遺物は19世紀前半の陶磁器を中心に、瓦、金属製品、石製品、骨角製品などコンテナ箱4箱出土している。SU295上層出土遺物と遺構間接合している。

SE300 (II-24 図)

B8、C8グリッドに位置する井戸である。調査は安全を考慮し、確認面下170cmのレベルまでしか行わなかった。平面形は円形を呈し、規模は南北150cm、東西130cmを計測する。壁には東西方向に相対して1対の窪みが作られている。これは最上部に1対確認されたのみで、足掛けではないと推定される。壁面は凹凸が確認されている。本遺構は位置的にB区、C₁区屋敷境の近辺に相当している。本遺跡が少なくとも元禄16(1703)年の火災で被災したことやそれ以前に地下室や井戸などが存在していたこと(SU335やSE173など)は事実であるが、本調査からは17世紀の遺構の密度は薄いことが確認されている。この区画が本遺構の推定廃棄年代である17世紀末以前から継続されていた確証は得られておらず、空間的な位置づけは確定できない。

遺物は17世紀末の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱2箱程度出土している。

SU307 (II-39 図)

B9、C9グリッドに位置する地下室である。SK501と重複し、それより古い。西側に開口部を有し、

2段のテラスを介して室部へ接続する。ただし、1段目のテラスは不定形を呈し、遺構構築時に作出されたかは疑問が残る。2段目のテラスは幅145cm、奥行き50cmを測り、坑底からの比高差は80～85cmを測る。テラス西側の坑底は開口しており、テラス直下の西壁と南北両壁際にはコの字状の1段が存在する。室部は南北270cm、東西140cmを測る長方形を呈する。天井部の大部分は崩落して現況を止めてはいないが、天井高は70cmと低い。壁面に残存する天井部の痕跡から長方形室部は全て天井に覆われていたことが窺える。覆土のうち最下層の6、9層はロームブロック主体土で天井の崩落による層序と推定される。その様相から本遺構は天井崩落によって遺構が廃絶され、その窪地を利用して、廃棄行為が行われていたといえる。SK501は本遺構上部の窪地埋没後に構築された遺構である。

遺物は18世紀前～後葉の陶磁器、土器、ガラス製品、動物遺体がコンテナ7箱出土している。広東碗は含まれていない。

SK314 (Ⅱ-44 図)

E9、E10グリッドに位置する遺構である。SK348、SK401と重複し、それよりも新しい。平面形は長方形を呈し、南北200cm、東西110cm、確認面からの深さ25cmを測る。坑底、壁面ともに凹凸が顕著である。

遺物は17世紀後半の陶磁器、土器が二十数点出土しているにすぎない。但し重複する遺構から19世紀代の遺物が出土していることから、本遺構出土遺物は覆土包含遺物として二次廃棄された可能性が高い。

SK321 (Ⅱ-40、41 (ポイント)、42 図)

C11、D11グリッドに位置する土坑である。SU295を切って構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、推定される規模は南北120cm、東西310cm、確認面からの深さは100cmを計測する。壁、坑底はやや凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。覆土は4層に分層される。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器が十数点出土している。

SK323 (Ⅱ-36 図)

A11、B11グリッドに位置する土坑である。平面形は東西に主軸を有する不整な長楕円形を呈すると推定されるが、西側は調査範囲外になっており、全体の様子は窺うことができなかった。調査できた規模は南北130cm、東西220cm、確認面からの深さは最大30cmを計測する。壁や坑底には凹凸が顕著に認められた。覆土は単層で、ロームを含む暗褐色土を呈している。

遺物は18世紀のかわらけを中心にコンテナ箱1箱出土している。

SK325 (Ⅱ-51 図)

A12、B12グリッドに位置する土坑である。平面形は東西に主軸を持つやや歪んだ楕円形を呈し、確認面での規模は南北70cm、東西130cm、深さは40cmを計測する。壁面、坑底は凹凸を有し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土はロームを多く含む茶褐色土単層である。

遺物はかわらけを中心に、18～19世紀前半の製品が数十点程度出土している。

SK341 (Ⅱ-39 図)

C9グリッドに位置する遺構である。直径75cmを測る円形土坑で、確認面からの深さは32cmを測る。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土の単一層である。

遺物は出土していない。

SK346 (Ⅱ-44 図)

D9、D10グリッドに位置する遺構である。SK348と重複し、それよりも新しい。平面形は長方形を呈し、東西115cm、南北90cm、確認面からの深さ20cmを測る。坑底は凹凸が顕著である。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器が二十数点出土している。

SK348 (II-44 図)

D9、D10 グリッドに位置する遺構である。重複するSK314、SK346 よりも古い。平面形は不整形楕円形を呈し、南北230cm、東西170cm、確認面からの深さ100cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が認められる。覆土は褐色土を基調とし、東西方向にレンズ状に堆積している。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、金属製品、石製品、動物遺体がコンテナ3箱出土している。SK299と遺構間接合をする遺物を含む。

SK349 (II-40 図)

C10、D10 グリッドに位置する遺構である。平面形は平行四辺形を呈し、長辺95cm、短辺60cm、確認面からの深さ10cmを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土の単一層である。

遺物は出土していない。

SK350 (II-49 図)

E11 グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、東西165cm、南北100cm、確認面からの深さ10cmを測る。坑底、壁面ともほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。坑底には杭痕が多数存在するが、規則性は認められず、性格は不明である。

遺物は17世紀末～18世紀前葉の陶磁器、土器が十数点出土したにすぎない。

SK398 (II-47 図)

E9 グリッドに位置する遺構である。重複するSK187 より古い。平面形は南北に主軸を有す不整形を呈し、最大長370cm、最大幅125cm、確認面からの深さ最大60cmを測る。坑底、壁面ともに凹凸が著しいが、断面観察において重複関係は認められず、単一遺構である。性格は不明である。

遺物は18～19世紀中葉の陶磁器、土器、動物遺体がコンテナ1箱出土している。

SK401 (II-48 図)

E10 グリッドに位置する遺構である。重複するSK347 より古く、SK402 より新しい。平面形は不整形を呈し、最大長320cm、最大幅140cm、確認面からの深さ55cmを測る。遺構北東部は曖昧なテラスを形成した緩斜面を成し、北西部から南半部にかけて坑底を有する。全体的に工具痕による凹凸が顕著である。性格は不明である。

遺物は18世紀前半と19世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土しているが、後者の新しい一群は重複するSK402からの混入の可能性が高い。

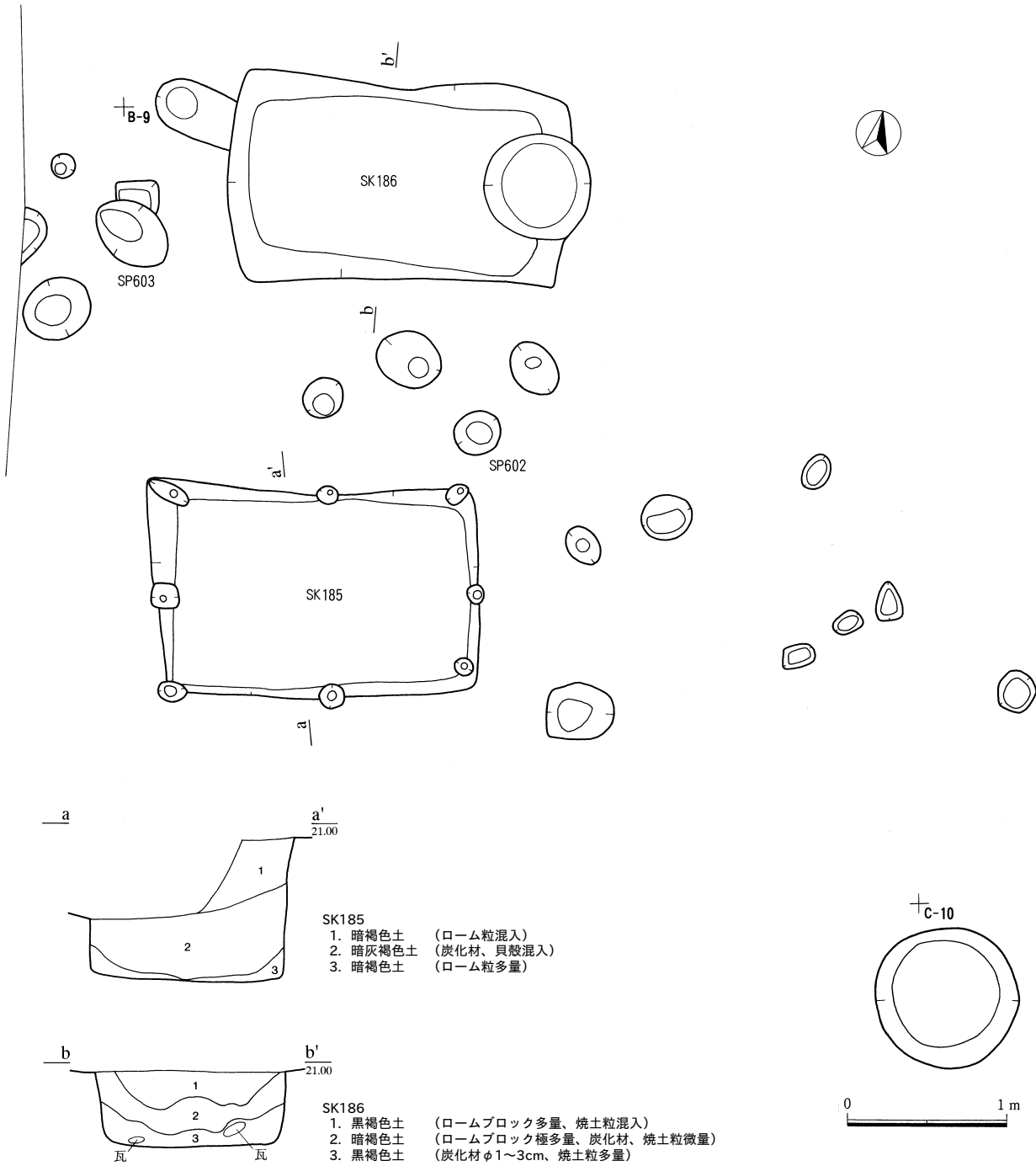
SK402 (II-48 図)

D11、E11 グリッドに位置する遺構である。重複するSK401 より新しく、SK250 より古い。平面形は方形を呈し、南北245cm、東西260cm、確認面からの深さ150cmを測る。覆土はほぼ水平に堆積しており、4～5層にかけて多量の焼土が含まれる。坑底、壁面ともに比較的丁寧な整形が施されている。

遺物は18世紀末～19世紀前葉の陶磁器、土器、石製品、動物遺体が多量に出土しており、SK292、SK293、SU295、SK296と遺構間接合が認められた。

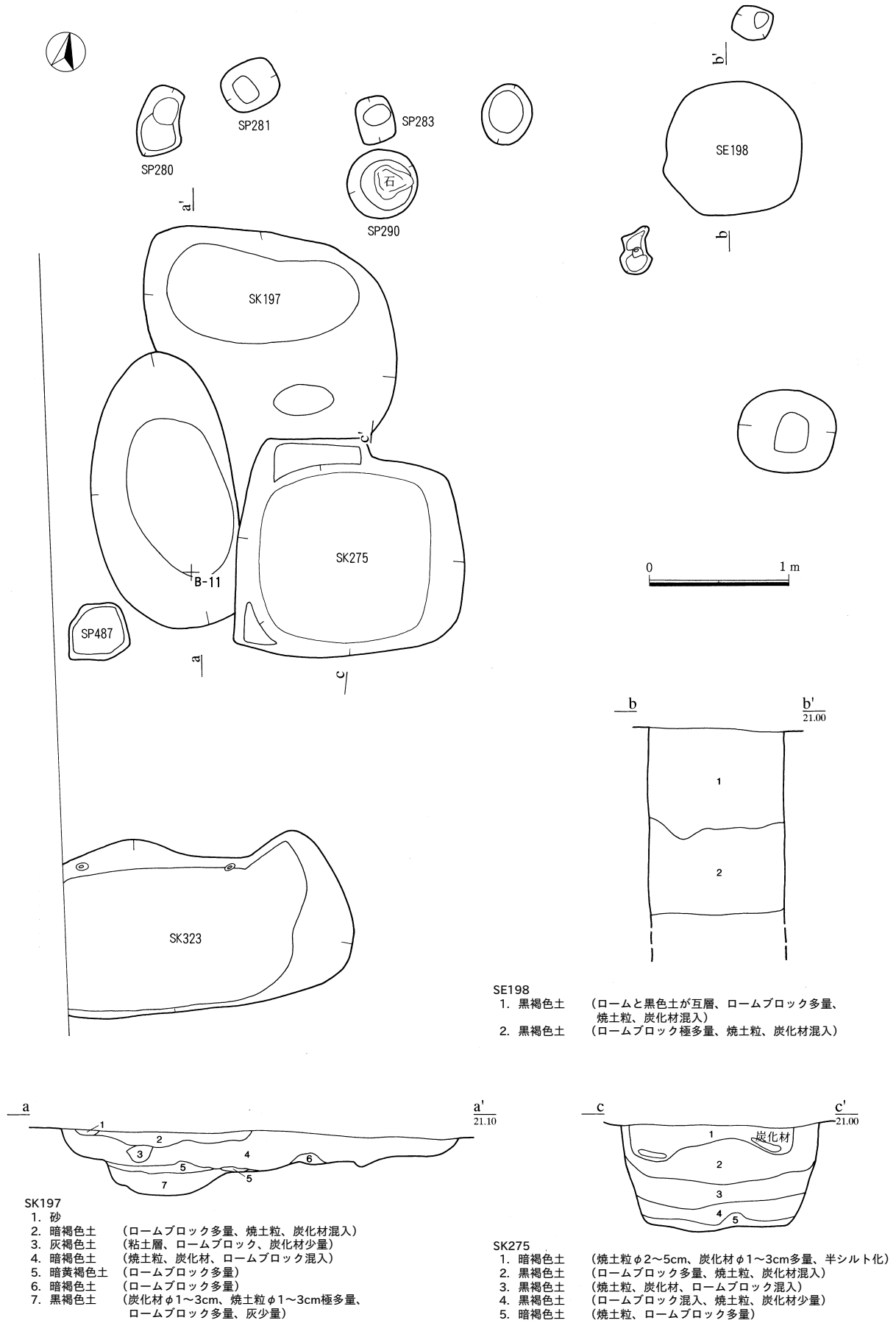
SK501 (II-39 図)

C8、C9、D8、D9 グリッドに位置する遺構である。重複するSK188、SU307 より新しい。平面形は全体的には不整形であるが、長方形土坑を2基筋違いに接合したクランク状部分とその周囲の不整形部分からなる。規模は最大長525cm、最大幅210cm、確認面からの深さ最大45cmを測る。長方形部分と不整形部分には重複関係は認められず、単一遺構として位置づけた。

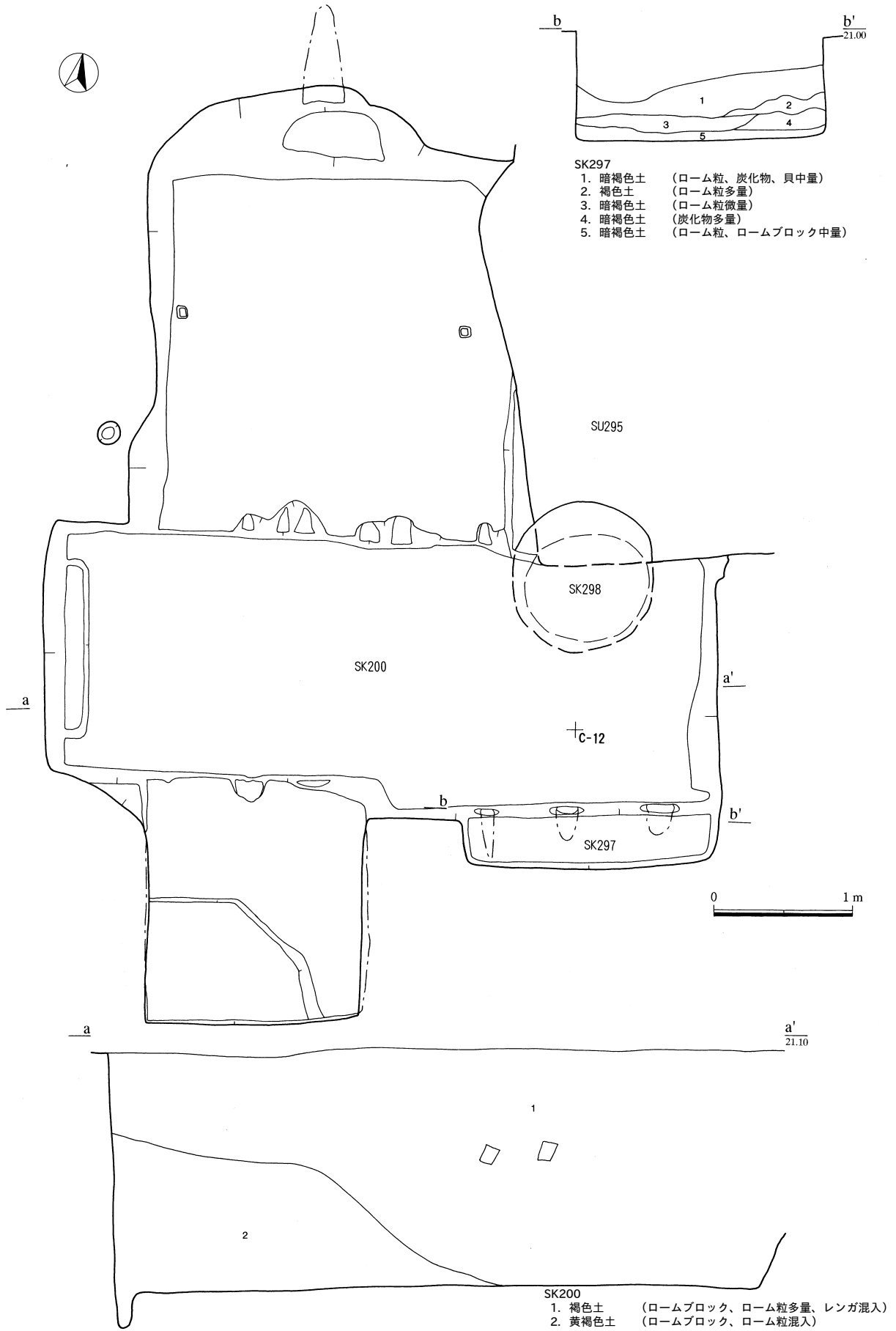


II-35 図 C₁ 区遺構 (1)

第4節 C₁区の遺構

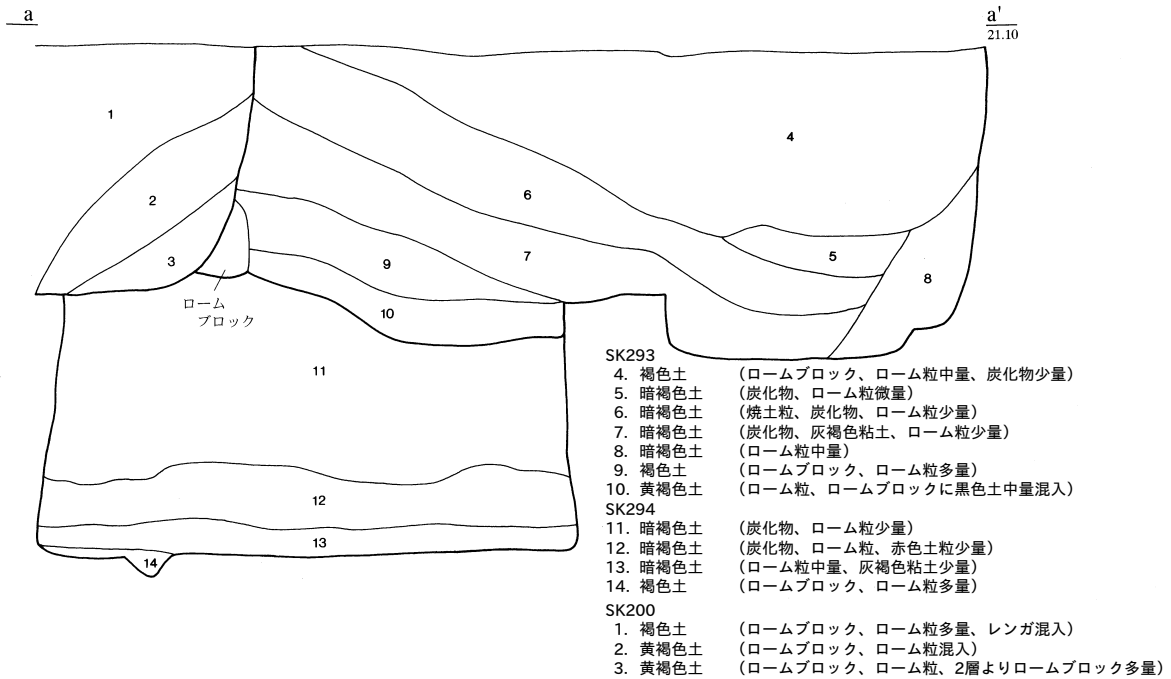
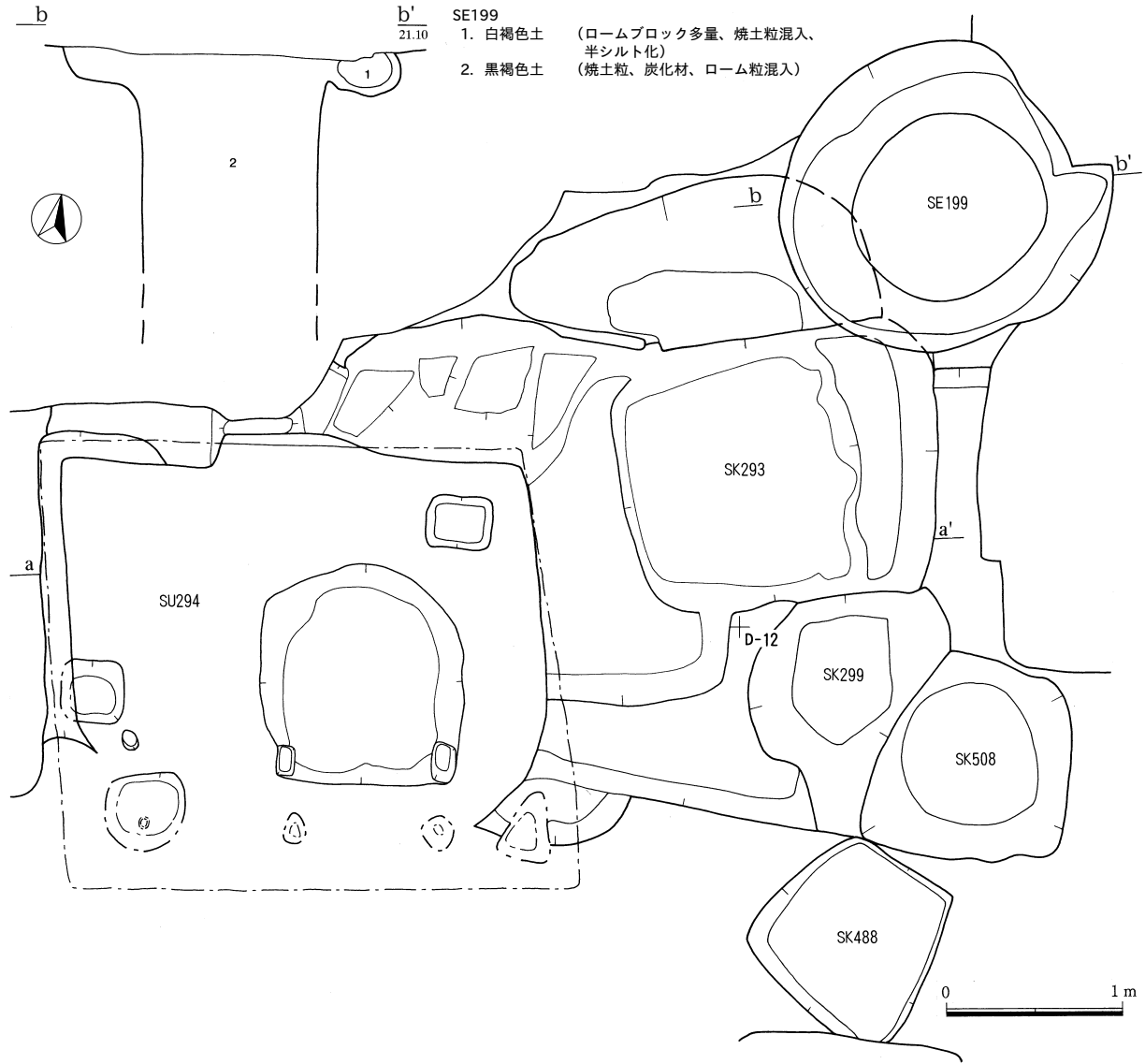


II-36 図 C₁区遺構 (2)

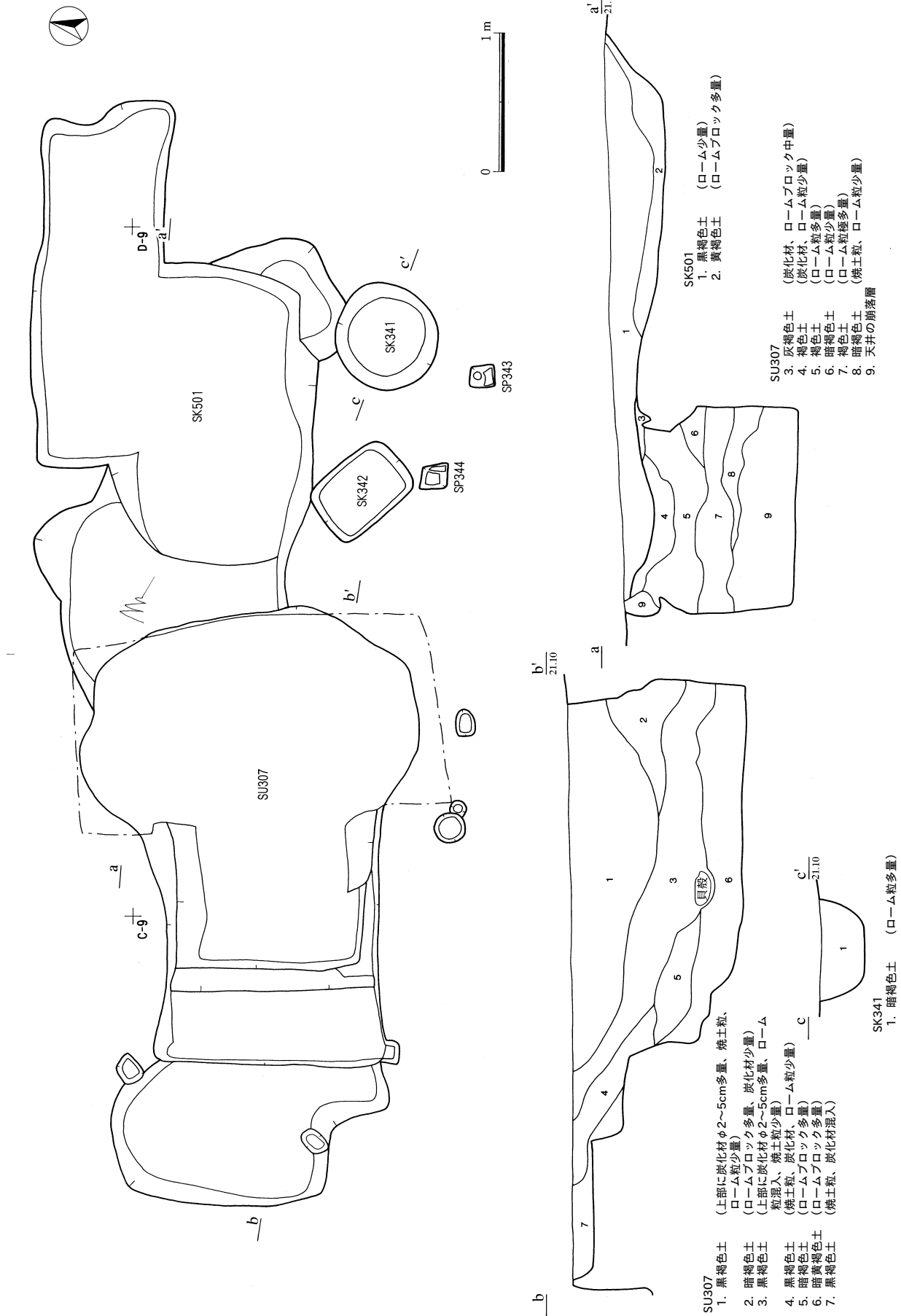


II-37 図 C1 区遺構 (3)

第4節 C₁ 区の遺構

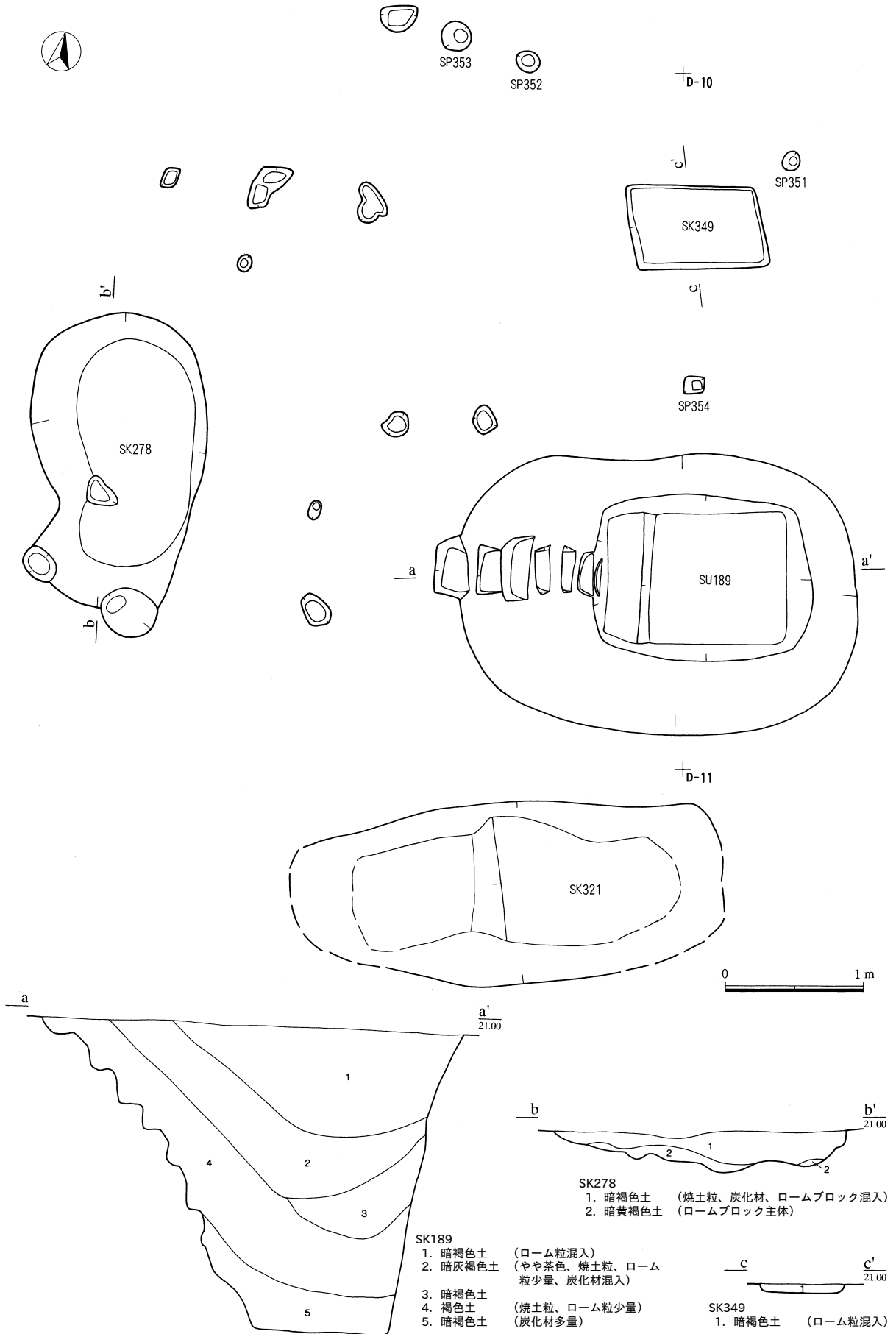


II-38 図 C₁ 区遺構 (4)

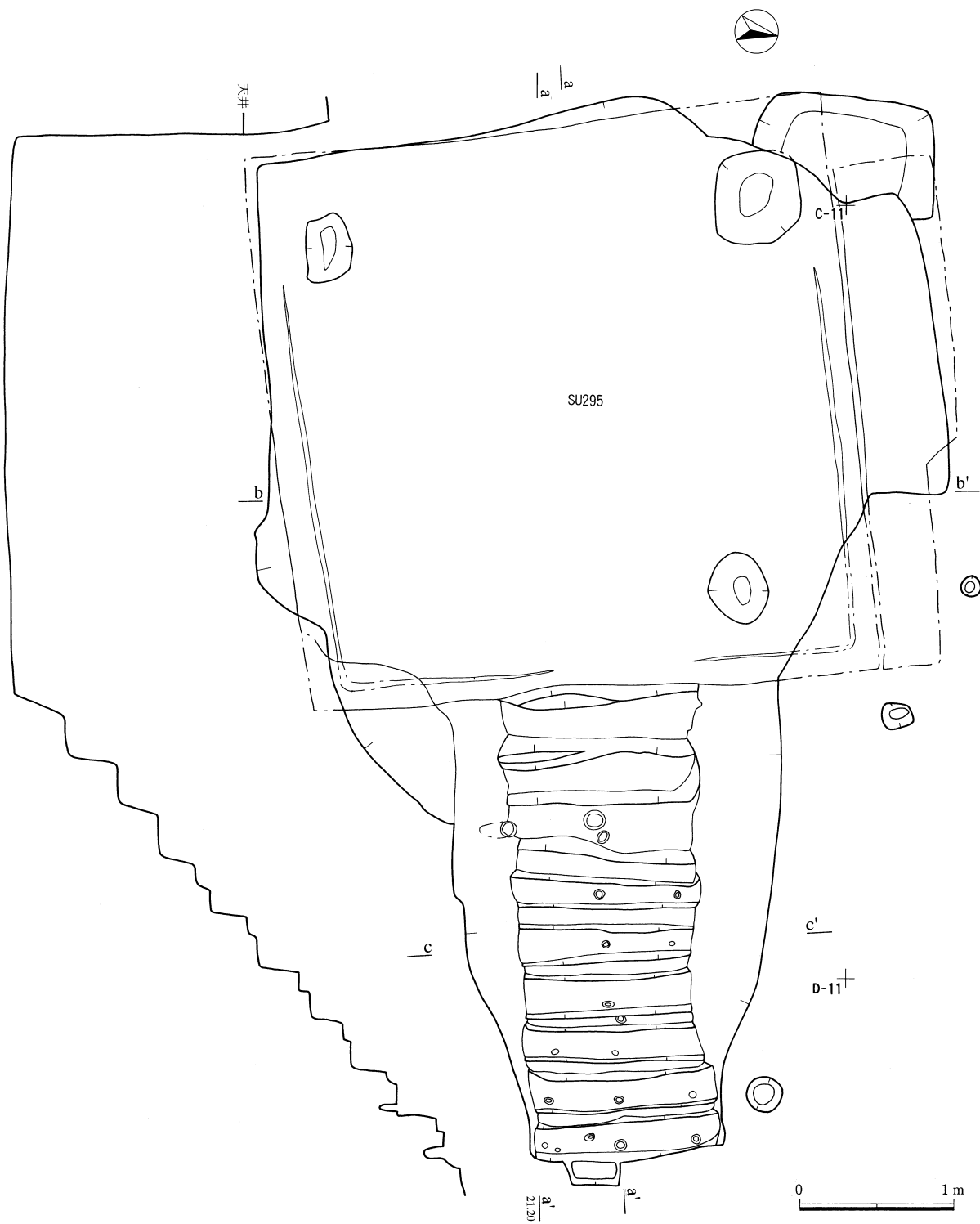


II-39 図 C1区遺構 (5)

第4節 C₁区の遺構

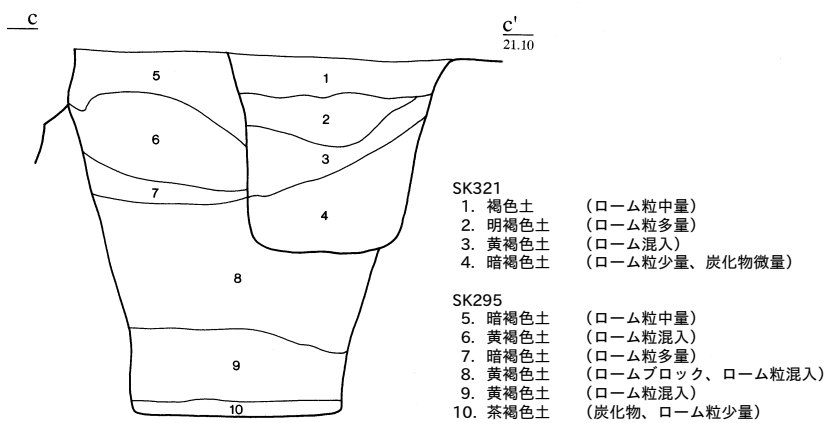
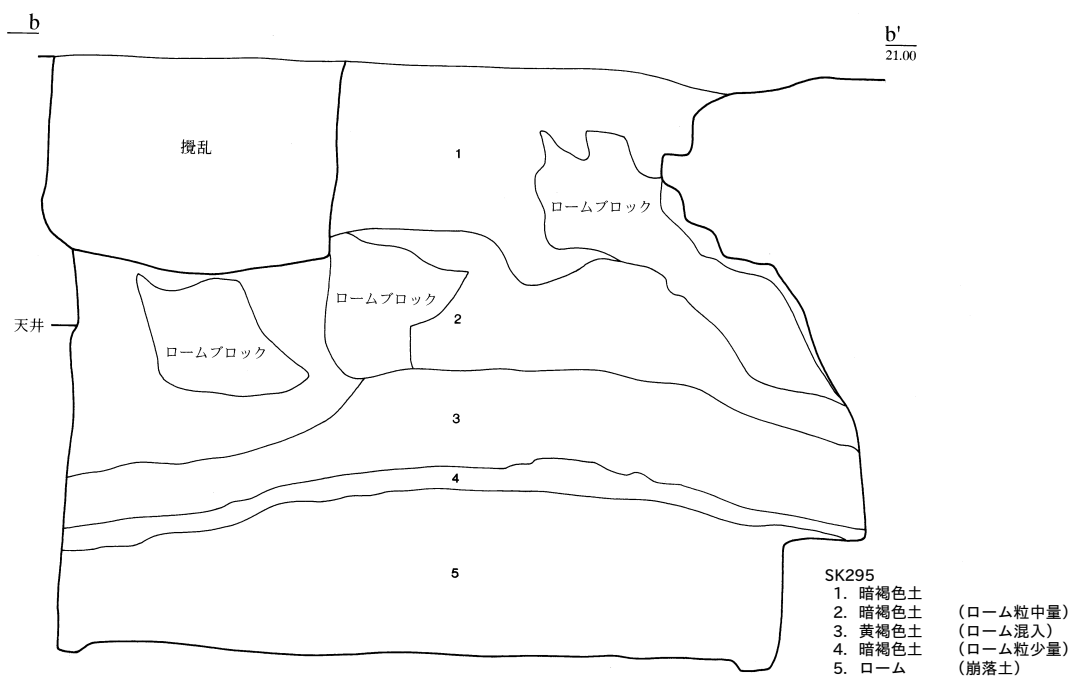


II-40 図 C₁区遺構 (6)

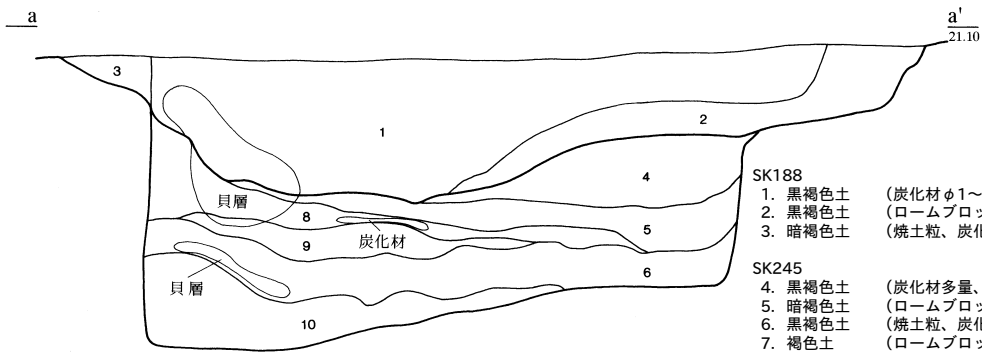
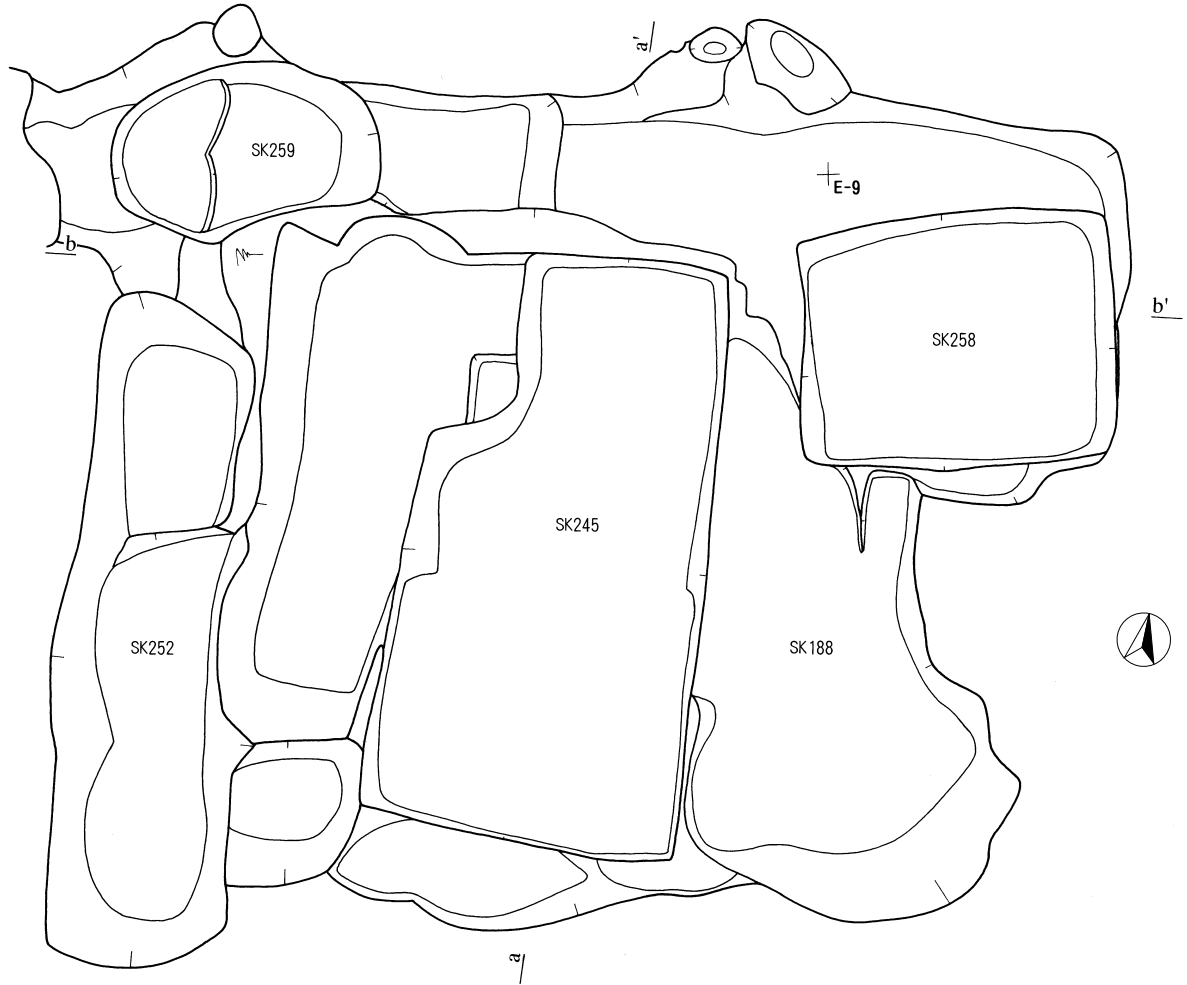


II-41 図 C₁区遺構(7)

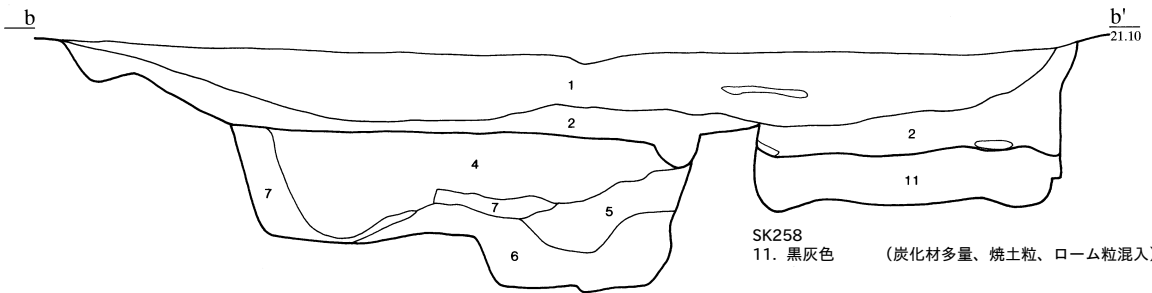
第4節 C₁区の遺構



II-42 図 C₁区遺構 (8)



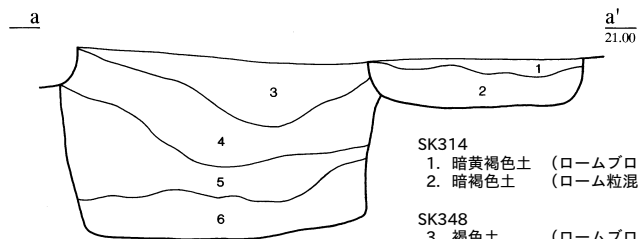
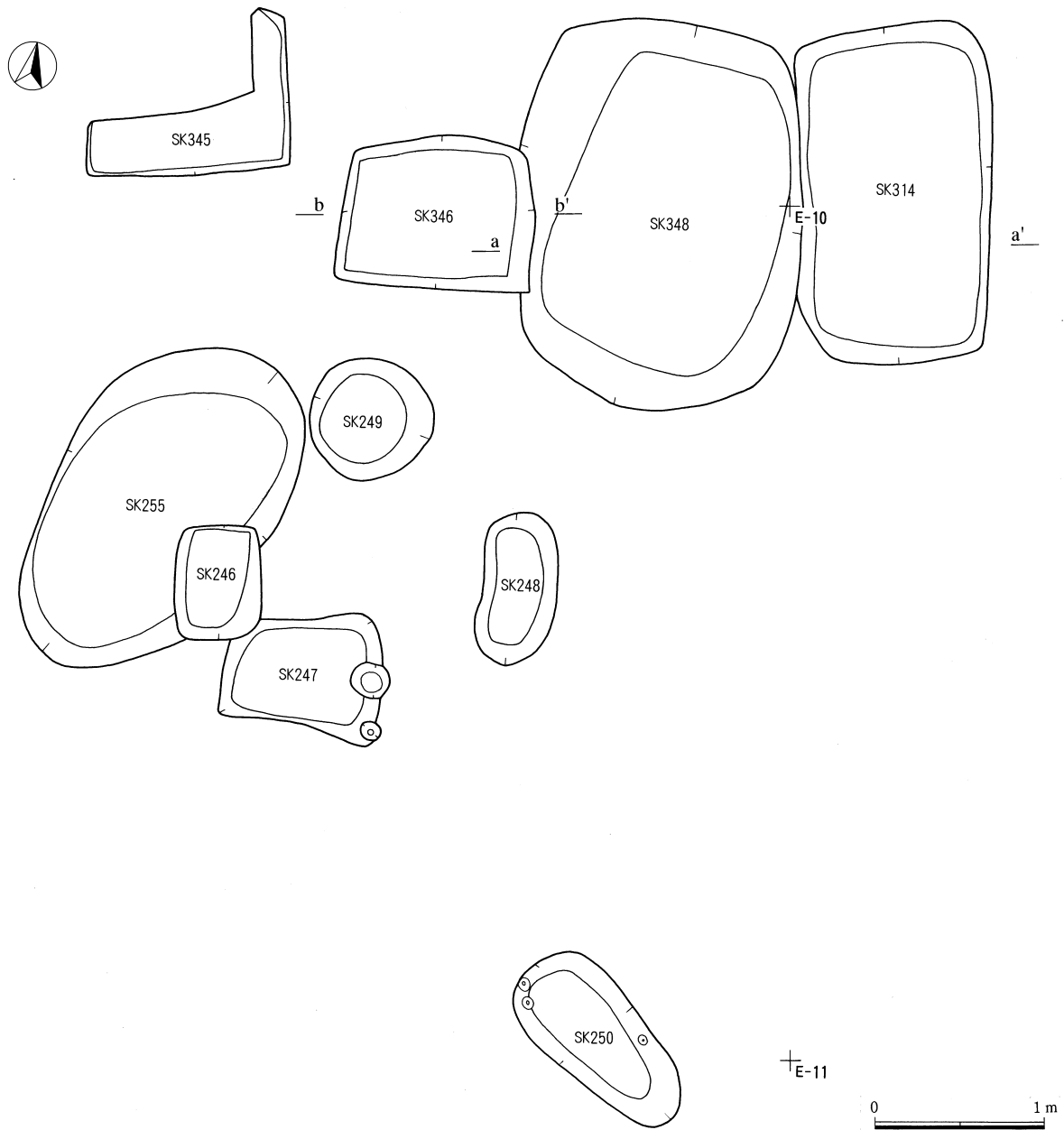
- SK188
- 1. 黒褐色土 (炭化材φ1~4cm極多量、焼土粒混入)
 - 2. 黒褐色土 (ロームブロック多量焼土粒、炭化材混入)
 - 3. 暗褐色土 (焼土粒、炭化材、ローム粒混入)
- SK245
- 4. 黒褐色土 (炭化材多量、焼土粒微量、ローム粒混入)
 - 5. 暗褐色土 (ロームブロック多量、焼土粒、炭化材混入)
 - 6. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材混入)
 - 7. 褐色土 (ロームブロック、ローム粒多量)
 - 8. 暗褐色土 (貝殻集中量、炭化材多量、焼土粒少量)
 - 9. 黒褐色土 (焼土粒、炭化材、ロームブロック少量)
 - 10. 灰褐色土 (炭化材、ロームブロック多量)



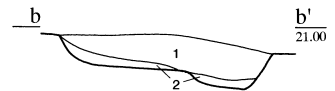
- SK258
- 11. 黒灰色 (炭化材多量、焼土粒、ローム粒混入)

II-43 図 C1区遺構(9)

第4節 C₁ 区の遺構

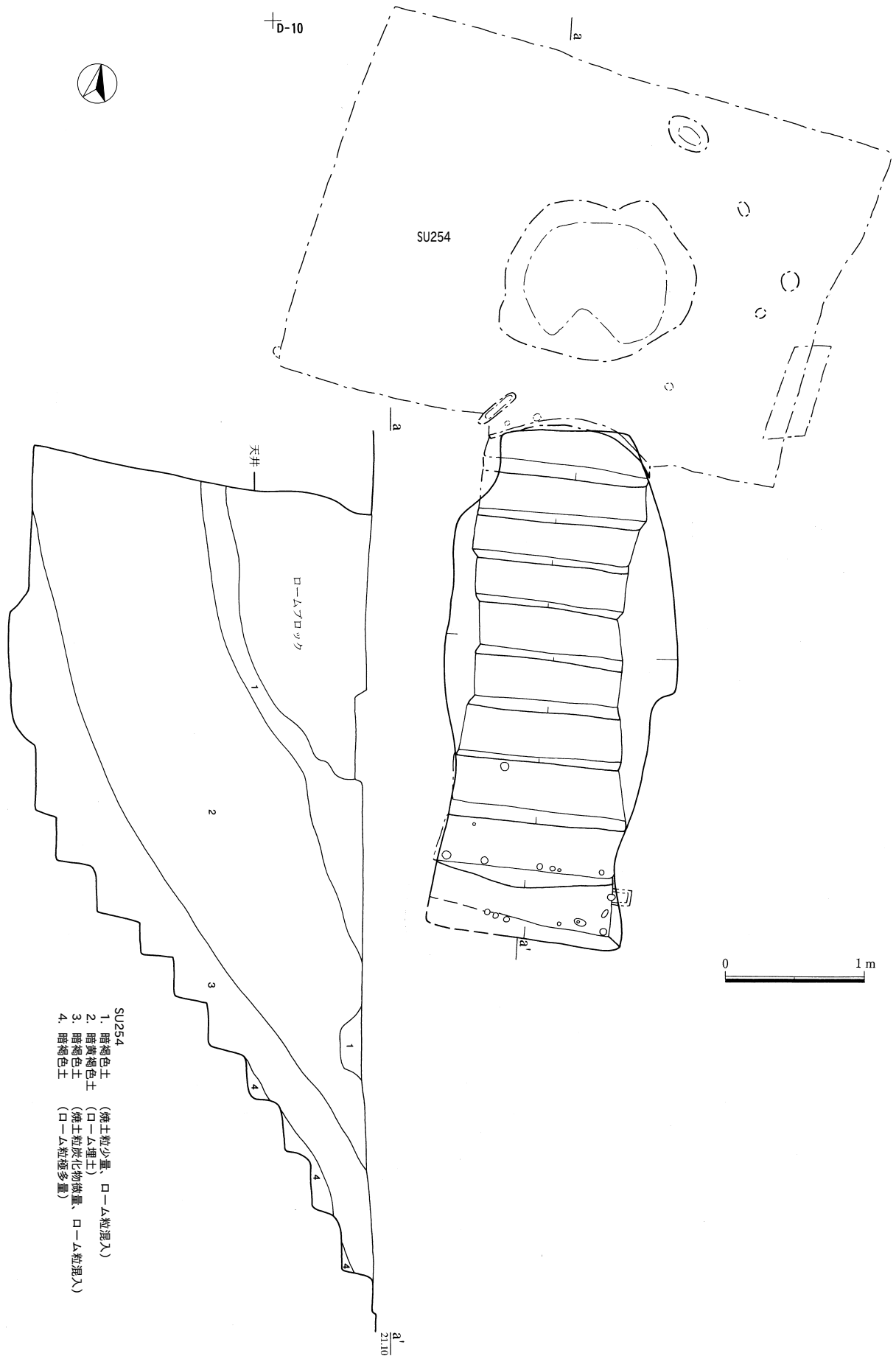


- SK314
1. 暗黄褐色土 (ロームブロック主体)
 2. 暗褐色土 (ローム粒混入)
- SK348
3. 褐色土 (ロームブロック多量)
 4. 褐色土 (ローム粒微量)
 5. 褐色土 (ロームブロック、ローム粒多量)
 6. 暗褐色土 (ローム粒少量、炭化物粒微量)



- SK346
1. 暗褐色土 (ローム粒微量)
 2. 暗黄褐色土 (ローム主体)

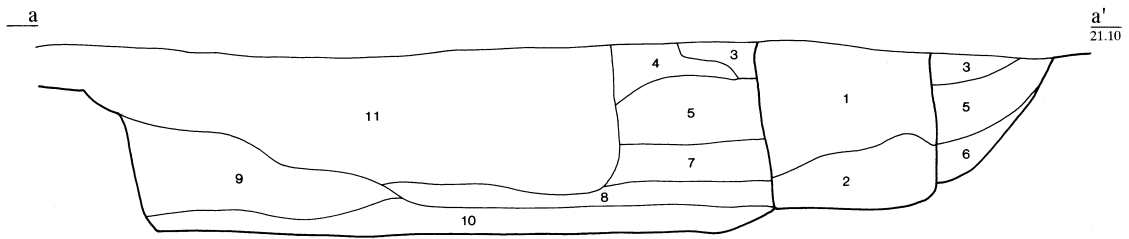
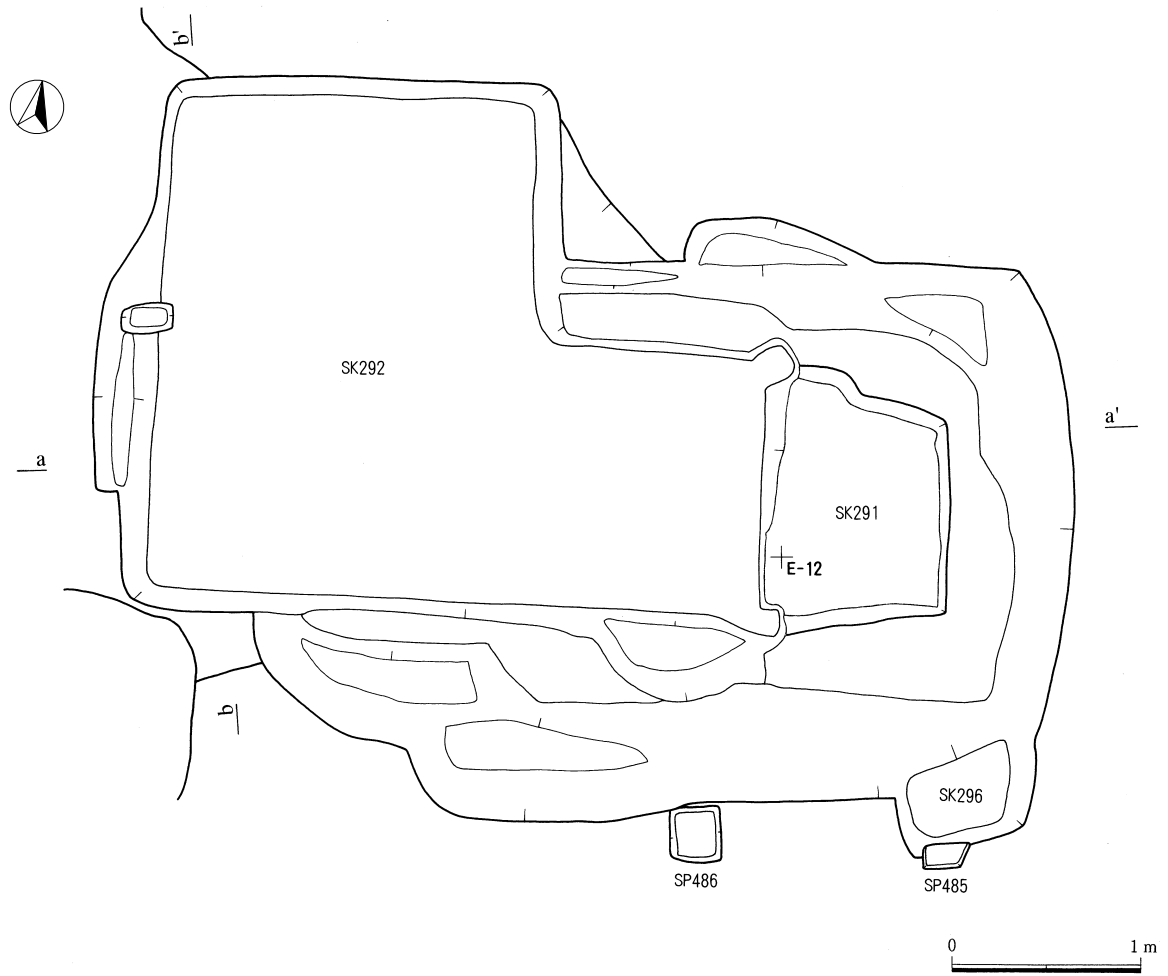
II-44 図 C₁ 区遺構 (10)



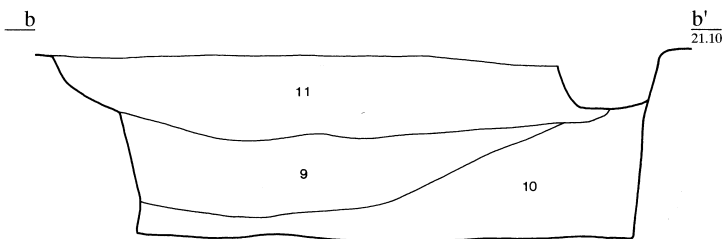
- SU254
1. 暗褐色土 (粘土粒少量、ローム粒混入)
 2. 暗黄褐色土 (ローム埋土)
 3. 暗褐色土 (粘土粒炭化物微量、ローム粒混入)
 4. 暗褐色土 (ローム粒微量)

II-45 図 C₁ 区遺構 (11)

第4節 C₁区の遺構

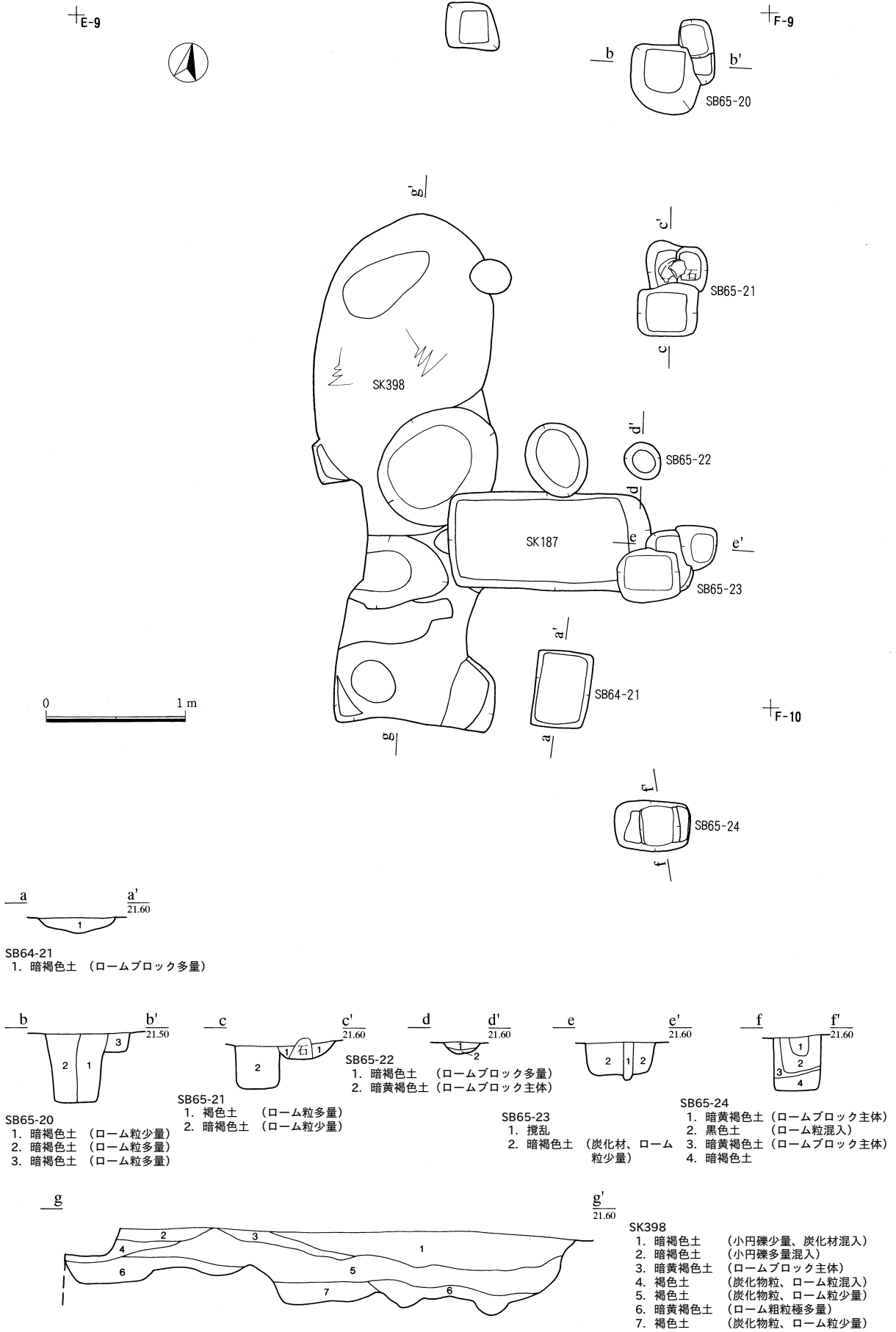


- SK291
 1. 暗褐色土 (炭化物、灰褐色粘土多量、貝混入)
 2. 暗褐色土 (瓦片、円礫、小円礫混入)



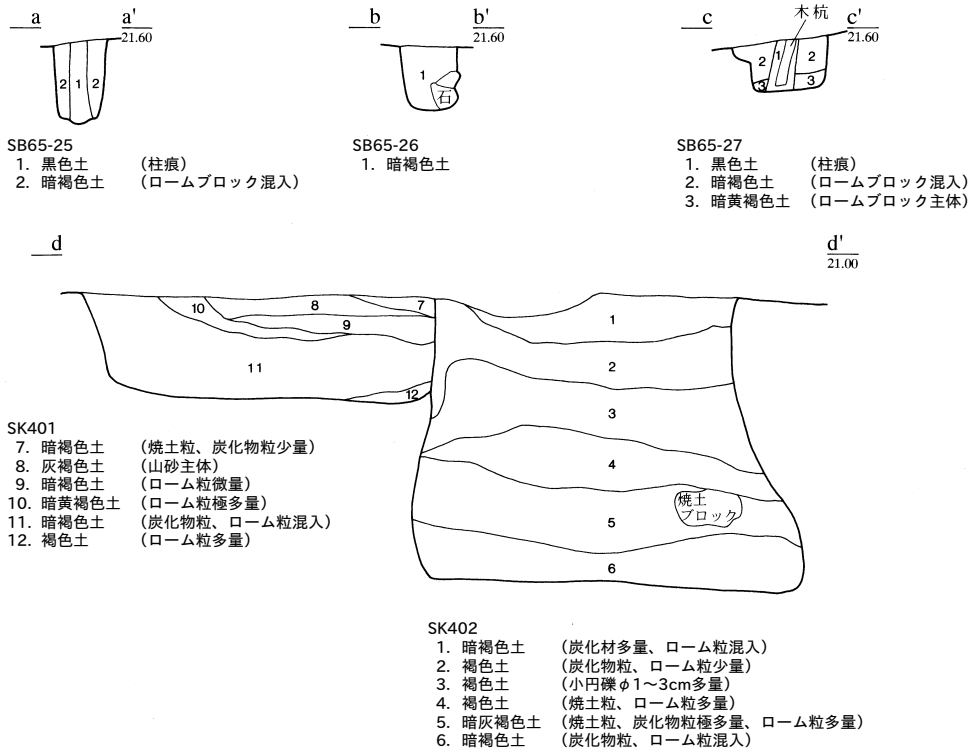
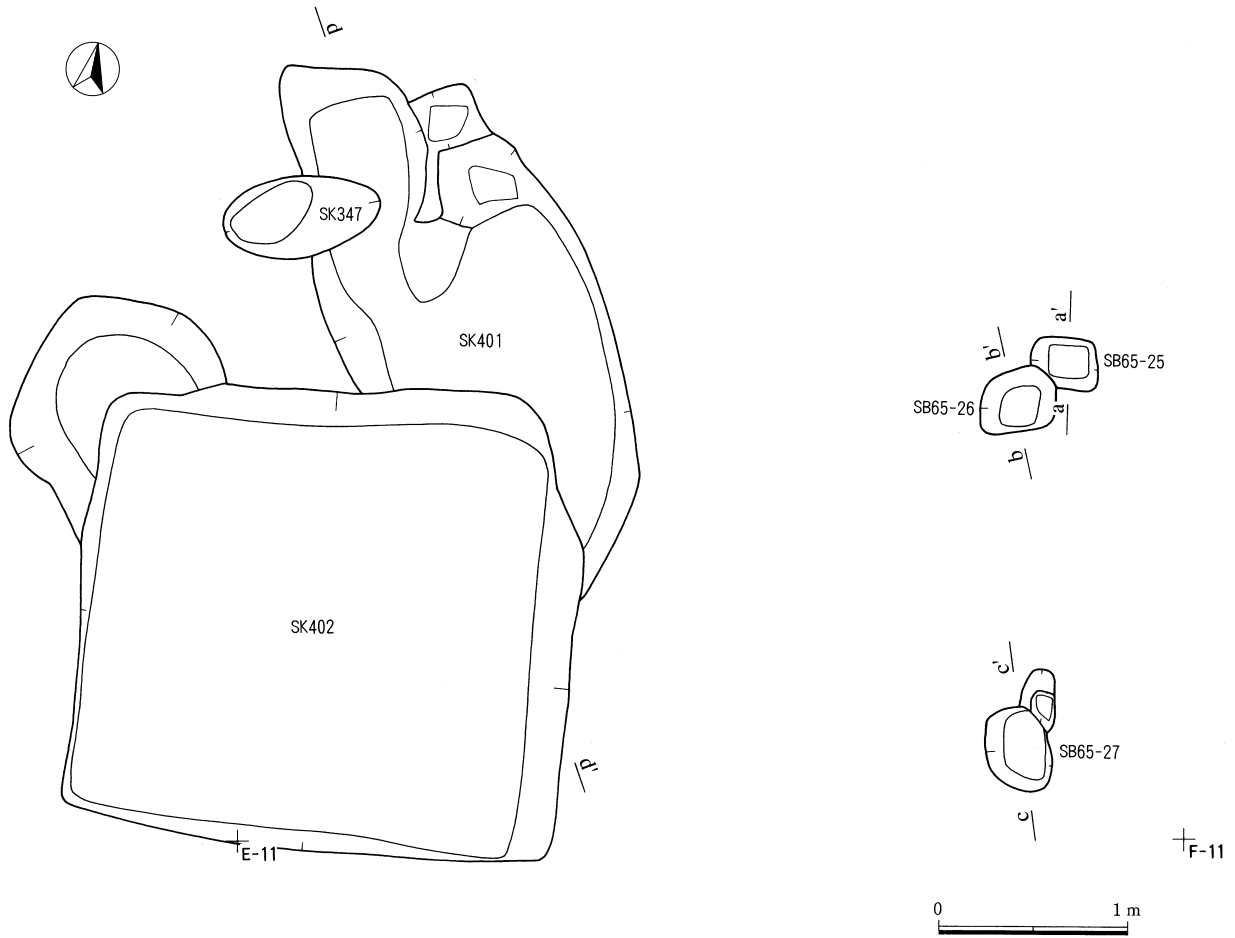
- SK292
 3. 暗褐色土 (焼土粒少量炭化物、ローム粒微量)
 4. 褐色土 (ロームブロック、ローム粒多量)
 5. 暗褐色土 (焼土粒中量、炭化物、ローム粒微量)
 6. 褐色土 (ローム粒中量)
 7. 暗灰褐色土 (炭化物少量、焼土粒、小円礫微量)
 8. 暗褐色土 (炭化物、ローム粒少量、焼土粒微量)
 9. 黄褐色土 (ローム粒混入)
 10. 暗黄褐色土 (ローム粒混入)
 11. 暗褐色土 (炭化物、ローム粒、小円礫少量、貝混入)

II-46 図 C₁区遺構 (12)

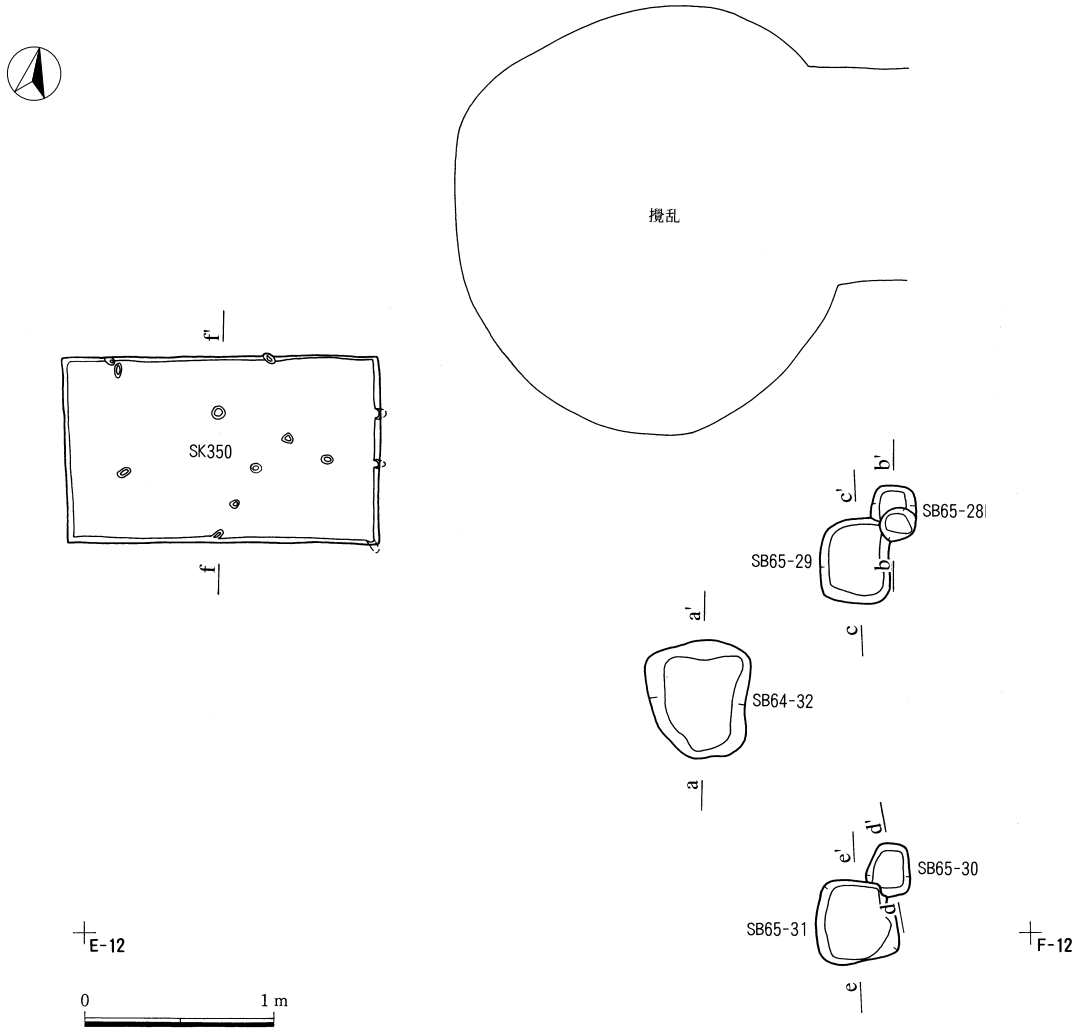


II-47 図 C1 区遺構 (13)

第4節 C₁区の遺構



II-48 図 C₁区遺構 (14)



a a' 21.60
 SB64-22
 1. 黒色土 (ロームブロック混入)
 2. 暗黄褐色土 (ロームブロック極多量)

b b' 21.60
 SB65-28
 1. 暗褐色土 (ロームブロック混入、柱痕?)
 2. 暗褐色土

c c' 21.60
 SB65-29
 1. 暗褐色土 (炭化材多量、柱痕)
 2. 暗褐色土 (ロームブロックと暗褐色土が互層)

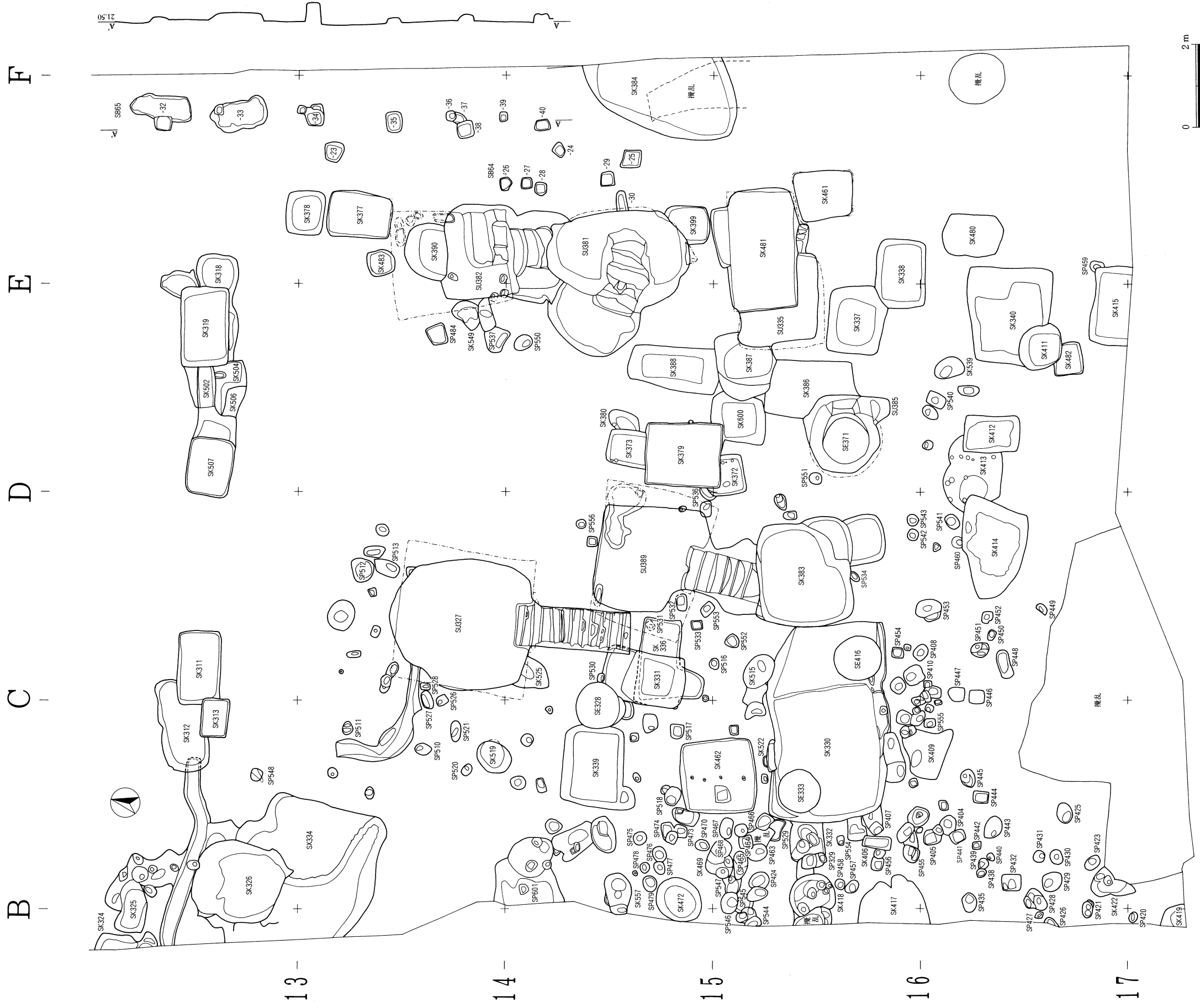
d d' 21.60
 SB65-30
 1. 暗褐色土

e e' 21.60
 SB65-31
 1. 黒色土 (炭化材φ1~2cm多量)
 2. 暗褐色土 (ロームブロック混入)
 3. 暗褐色土

f f' 21.60
 SK350
 1. 暗褐色土 (ローム粒混入)

II-49 図 C₁ 区遺構 (15)

C2



II-50 图 C2 区 遺構配置图

第 5 節 C₂ 区の遺構

SK311 (Ⅱ-54 図)

C12 グリッドに位置する遺構である。重複する SK313 より古く、SK312 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 75cm、南北 105cm、確認面からの深さ 45cm を測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が顕著である。

遺物は 19 世紀前葉の陶磁器、土器、動物遺体がコンテナ 1 箱出土しており、特に貝は 3、5 層に集中して確認している。

SK312 (Ⅱ-54 図)

B12、C12 グリッドに位置する遺構である。重複する SK311、SK313 より古い。平面形は不整形楕円形を呈し、東西 235cm、南北 110cm、確認面からの深さ 10cm を測る。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸と根跡が著しい。

遺物は 19 世紀前葉の陶磁器、土器、動物遺体がコンテナ 1 箱出土している。

SK313 (Ⅱ-54 図)

B12 グリッドに位置する遺構である。重複する SK311、SK312 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 95cm、南北 65cm、確認面からの深さ 30cm を測る。覆土中位から上位にかけて炭化材が多量に含まれている。

遺物は銅版転写を含む近代の陶磁器、土器が十数点出土している。

SK319 (Ⅱ-64 図)

D12 グリッドに位置する遺構である。重複する SK318、SK502、SK504 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 195cm、南北 115cm、確認面からの深さ 60cm を測る。坑底は比較的平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、全体的に工具痕による凹凸が著しい。

遺物は 19 世紀前～中葉の陶磁器、土器がコンテナ 3 箱出土している。

SK326 (Ⅱ-51 図)

A12、B12 グリッドに位置する土坑である。遺構の上部を SX334 に切られている。平面形はやや歪んだ円形を呈し、規模は南北 230cm、東西 200cm、深さは最大 50cm を計測する。壁、坑底には凹凸が顕著に確認され、覆土はロームが多く含まれる黒褐色土を呈している。平面形、規模、壁、坑底、覆土の状況から木の移植坑との共通性が認められる。

遺物は 17 世紀の陶磁器片が数点出土しているほか、南西壁付近に馬の頭骨が 2 個体分出土している（詳細は第Ⅳ章第 6 節参照）。

SU327 (Ⅱ-56、57 図)

C13、C14 グリッドに位置する階段付きの地下室である。SK525 を切って構築されている。階段は室部の南方に取り付けられており、最下の 2 段は室部に張り出して構築されている。階段は 12 段確認され、幅 90～100cm、ステップの奥行は約 20cm、比高差は 25cm 程度である。ステップはやや傾斜を有して次のステップに立ち上がっている。また、ステップの端はやや窪みがみられることや両壁にこれを固定すると考えられる瓦や石を伴う小穴が穿たれており、細い板などがステップを横断するように取り付けられていたと推定される。室部は方形を呈しており、1 辺 320cm、確認面からの深さは 350cm、天井までの高さは約 200cm を計測する。天井上部は崩落防止のため東西に 2 本の梁を渡したと思われ、東西壁上部に石を伴う小穴が相対して 2 対確認された。また、奥壁付近

は斜めに天井が作られ、これも崩落防止の対策であったと推定される。南壁上部には階段を挟んで両側に燭台を置くためと思われる窪みが設けられている。東壁のものは五角形で、間口 18cm、高さ 20cm、西壁のものは長方形で間口 25cm、高さ 17cm を測る。

坑底、壁、天井、階段などは平滑に整形されており、丁寧に構築されたことが窺える。南壁東側および東壁南側には構築時に彫って書かれた文字が確認できた。文字は南壁に「丑ノ九月廿四日初ノ同九月廿八日出来申候ノ内許」、東壁に「市郎兵衛ノ次郎兵衛ノ口久蔵ノ清兵衛」と書かれており、「丑」の年代は廃絶した 18 世紀前半以前と推定できる。この地下室を九月二十四日から掘り始めて二十八日まで、5 日間でできあがったことがわかる。また、東壁の名前は地下室を構築した職人あるいは職人頭の名前であろう。職人であるとしたなら延べ 20 人で作ったことになろうか。

覆土は 7 層に分層されるが、ローム土が主体を占め、廃棄時に天井部を壊したことが窺えた。また、断面実測図 1、2 層は廃棄時より後に陥没した際に埋められたと考えられ、19 世紀の遺物が含まれていた。

遺物は廃棄時に伴う 18 世紀前半のかわらけを中心とした一群と天井陥没時に新たに埋められた 1、2 層に含まれる 19 世紀の遺物が確認されている。

SE328 (II-58、59 図)

C14、C15 グリッドに位置する井戸である。東側で SK331、西側で SK339 に切られている。調査は安全のため、確認面下 160cm のレベルで中止した。平面形は円形を呈し、ほぼ垂直に構築されている。規模は南北 120cm、東西 110cm を計測する。壁は丁寧に平滑に整形されている。覆土は調査レベルまでで 5 層に分層されるが、井戸側の痕跡などは認められなかった。

遺物は出土していない。

SK330 (II-58、59 図)

B15、C15 グリッドに位置する土坑である。SE333、SK522 を切って構築されている。平面形はやや歪な方形を呈し、規模は南北 290cm、東西 320cm、確認面からの深さは最大 120cm を計測する。東側に本遺構と南北壁を共有するような形の浅い落ち込みが確認された。土層の堆積状態から本遺構に直接伴うものではないと推定されたが、SK330 の壁が、この落ち込みの底面レベルより上がっていることや落ち込みと同じように比較的粗い調整であることなどからあるいは作り替えの可能性も想定される。坑底、壁下半は比較的平滑に、壁上半はややラフに調整されている。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 7 層に分層され、中央が大きく窪む堆積状況を示している。中央に圧力がかかったためと推定している。上半を中心に遺物を多く含むことから、生ゴミなどの廃棄層が沈んだためであろうか？

遺物は東大編年 VII 期の陶磁器、土器を中心に多量に確認されているほか、金属製品、石製品、骨角製品などが出土している。

SK331 (II-58、59 図)

B14、C14 グリッドに位置する土坑である。SE328、SK336 を切って構築されている。平面形は南北に主軸を持つ長方形を呈し、南側が一段落ち込んでいる。規模は南北 200cm、東西 120cm、確認面からの深さは深い南側で 130cm、浅い北側で 20cm を計測する。壁や坑底は凹凸を有し、整形された様子は窺えなかった。

遺物は明治前半を中心とした陶磁器、土器がコンテナ箱 5 箱程度出土している。

SE333 (II-58、59 図)

B15 グリッドに位置する井戸である。遺構の上部を SK330 によって切られている。平面形は円形

を呈し、壁は若干径を減じながら落ちる。調査は安全のため確認面下 230cm のレベルまでしか行わなかった。規模は確認面で径 100cm、調査が行えた最下部で 80cm を計測する。覆土は 3 層に分層されたが、いずれも多く焼土や漆喰塊が出土しており、火災の後始末による廃棄であることが想定された。陶磁器の年代から元禄 16 (1703) 年の火災の蓋然性が最も高い。

遺物は 17 世紀末の陶磁器が十点程度出土している。

SX334 (Ⅱ-51 図)

A12、A13、B12、B13 グリッドに位置する不整形の落ち込みである。馬の骨が出土した SK326 を切って構築されている。西側が調査区域外であるため全体の様子を窺うことはできなかった。平面形は不整形を呈しており、坑底や壁は凹凸が顕著である。また、根の痕跡も確認されたことから大形樹木の痕跡であろうと考えている。規模は南北 6m、東西 3.5m 程度で、深さはもっとも深い B13 グリッド杭周辺で 60cm を計測する。覆土は 4 層に分層されるが、いずれもロームを多く含む茶褐色土であった。

遺物は近代の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱 1 箱程度出土している。

SU335 (Ⅱ-69 図)

D15、E15 グリッドに位置する地下室である。SK387、SK481 と重複しており、新旧は SK387 より旧、SK481 より新である。平面形はほぼ方形を呈し、壁は南、西側ではオーバーハングしているが、SK481 と重複する北、南側では認められなかった。坑底での規模は南北 220cm、東西 230cm、確認面からの深さは最大 120cm を計測する。遺構の壁、坑底は丁寧に平滑に整形されている。覆土は、5 層に分層されるが、天井部の崩落土と推定される最下層を除き、焼土、炭化物が多量に認められ、また、これに包含されている遺物も多くは二次的な火熱を受けており、火災の後始末の廃棄であることが推定された。

遺物は 17 世紀末～18 世紀初頭の陶磁器、土器を中心として、銭差が坑底からやや浮いて確認されている。前述のように遺物の多くは二次的な火熱を受けており、遺物の年代から元禄 16 (1703) 年の火災であることが推定された。銭は 3 条とそこから千切れるように散乱した状況で確認された。条の端部は銭中央の穴から糸状の炭化物が隣接する条へと繋がるように確認されていることから、この 3 条の銭差は 1 本のもので推定される。

SK336 (Ⅱ-58 図)

B14、B15 グリッドに位置する土坑である。平面形は東、南方向に張り出しを有する鉤形を呈すると思われるが、遺構の中央部を SK331 によって切られているため、全体の様子は復元できない。推定される規模は南北 160cm、東西 210cm、確認面からの深さは 20cm を計測する。壁、坑底はやや凹凸を有している。覆土は単層で、茶褐色土を呈している。

遺物は数点の陶磁器、金属製品が出土している。

SK337 (Ⅱ-69 図)

D15 グリッドに位置する土坑である。東南隅で SK338 を切って構築されている。平面形は東西に主軸を有する隅丸長方形を呈し、規模は南北 130cm、東西 160cm、確認面からの深さは 120cm を計測する。坑底や壁は凹凸を有し、壁は坑底からやや開いて立ち上がる。覆土は 5 層に分層され、覆土中層を中心に漆喰片が多く出土している。

遺物は 18 世紀後半～19 世紀前半の陶磁器、土器のほか金属製品、石製品、骨角製品、動物遺体などがコンテナ箱 6 箱程度出土している。本遺構出土遺物は隣接する SK338 および SU382 と遺構間で接合している。

SK338 (Ⅱ-69 図)

D15、D16、E15、E16 グリッドに位置する土坑である。西北隅を SK337 に切られている。平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈し、規模は南北 110cm、東西 160cm、確認面からの深さは 90cm を計測する。遺構の壁や坑底はややラフに構築されており、凹凸が確認される。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器を中心に金属製品、動物遺体などがコンテナ箱 1 箱出土している。また、隣接する SK337 と遺構間で接合している。

SK339 (Ⅱ-58、59 図)

B14 グリッドに位置する土坑である。東側にある井戸 SE328 を切って構築されている。平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈し、南西隅に浅い張り出しを有している。規模は南北 150cm、東西 190cm、確認面からの深さは 70cm を計測する。坑底、壁は凹凸を有し、ラフに作られている。覆土は 4 層に分層されるが、上層には焼土が充填されていた。

遺物は近代初頭の陶磁器、土器、金属製品が十数点出土している。

SE371・SU385 (Ⅱ-62 図)

D15 グリッドに位置する井戸である。東側にある SK386 に切られている。井戸側を入れたと推定できる円形土坑 (SU385) を付帯施設として持っており、東西方向に井桁の痕跡が確認できた。規模は円形土坑で南北 180cm、東西 200cm、深さ 120cm、SE371 本体で径 110cm を計測する。調査は安全のため確認面下 190cm 付近で取りやめた。円形土坑は、西壁がオーバーハングしてしているが、東側では角度を持って立ち上がっている。覆土は円形土坑では 7 層、SE371 本体では 3 層に分層されるが、井戸東側は井戸枠の痕跡が不明瞭ながら認められた。

遺物は 18 世紀後半～19 世紀初頭の陶磁器、土器を中心に金属製品、石製品などコンテナ箱 2 箱出土している。

SK372 (Ⅱ-62 図)

C14、C15、D14、D15 グリッドに位置する土坑である。SK379、SP536 を切って構築されている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北 90cm、東西 90cm、確認面からの深さは 20cm を計測する。遺構の主軸は他の遺構に比べてやや西に振れている。坑底や壁はやや凹凸を有するが、フラットな坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は単層で、褐色土を呈する。

遺物は出土していない。

SK373 (Ⅱ-62 図)

D14 グリッドに位置する土坑である。SK379、SK380 を切って構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北 170cm、東西 80cm、確認面からの深さは 30cm を計測する。坑底や壁はやや凹凸を有し、フラットな坑底から壁はやや角度を持って立ち上がっている。覆土は単層で、ロームを含む茶褐色土を呈す。

遺物は出土していない。

SK377 (Ⅱ-65 図)

E13 グリッドに位置する土坑である。平面形はやや歪な長方形を呈し、規模は南北 150cm、東西 110cm、深さは 30cm を計測する。壁、坑底は平滑に調整され、フラットな坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層されるが、ロームおよび焼土を多量に含む層が互層となって確認された。

遺物は 19 世紀前～中葉の陶磁器類が十数点出土している。

SK378 (Ⅱ-65 図)

E12、E13 グリッドに位置する土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北 90cm、東西 110cm、確認面からの深さは 60cm を計測する。壁や坑底はやや凹凸を有し、壁はやや開きながら立ち上がる。覆土は 4 層に分層される。

遺物は 19 世紀前～中葉の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱 1 箱出土している。

SK379 (Ⅱ-62 図)

D14、D15 グリッドに位置している土坑である。SK372、SK373、SK600 と重複しており、新旧は SK600 より新で、SK372、SK373 より旧である。平面形は南北に主軸を有する長方形を呈し、規模は 180cm、東西 150cm、確認面からの深さは最大 100cm を計測する。壁、坑底は平滑に整形されており、フラットな坑底より壁は垂直に立ち上がっている。覆土は 3 層に分層される。

遺物は出土していない。

SU381 (Ⅱ-66、67 図)

D14、E14 グリッドに位置する地下室である。重複する SK399 より古く、SU382 より新しい。室部西側に階段が付設されている。階段最上段には長軸 225cm、短軸 115cm、確認面からの深さ 30cm のテラスが設けられている。階段は幅 80～110cm、奥行き 20～30cm、仰角 48° を測る 5 段のステップから成り、やや弓なりに湾曲して室部へ接続するが、3 段目以下は室内へ張り出している。室部床面は南北 300cm、東西 180cm を測る楕円形を呈しているが、床面、壁面ともに工具痕による凹凸が著しく、階段を挟み南北の床面レベルにも 25cm の比高差が存在する。

遺物は 18 世紀後半～19 世紀初頭の陶磁器、土器、金属製品、ガラス製品、動物遺体がコンテナ 7 箱出土し、SK380、SU385 と遺構間接合が認められた。

SU382 (Ⅱ-66、67 図)

E13、E14 グリッドに位置する地下室である。重複する SU381 より古く、SK390 より新しい。羽子板状を呈する地下室で、南側に階段を北側に室部を有す。階段部上端は SU381 との重複によって存在しないため、段数、遺構全長は不明である。残存長は奥壁まで 435cm を測る。階段は室部外で 3 段残存しているが、各ステップの比高差が 40～50cm を測ることから、確認面までは後 2～3 段存在したと推定される。現存するステップ幅は 90～110cm、奥行きは 20～30cm を測り、現存 3 段目のステップ先端部が室部南壁に接続する。また 1、2 段目の先端部はアーチ状に弧を描いて成形されている。一方、室部内のステップは南東コーナーに位置し、大きく 2 段で構成されているが、上段のステップはさらに東から西に向けて 3 段の小段が付けられている。ステップ幅は東壁まで及ぶことから 120cm と広い。以上のような階段構成により、利用者が室部へ入る場合、まず北進して階段を下り、室部南壁に至り、一旦西へ折れ小段を小刻みに降り、再び北進し最後のステップを降りることになる。室部は奥行き 280cm、入口部の幅 215cm、奥壁幅 260cm の台形を呈する。壁面の観察から階段部には天井の痕跡はなく、階段下部まで開口していたことが窺える。室部天井高は奥壁で 170cm を測り、確認面から床面までの深さは 320cm を測る。覆土は階段部より埋め戻されているが、上部には焼土粒の含有が認められ（特に 10 層）埋没途中で火災が生じた可能性がある。全体的に丁寧に整形が施されている。

遺物は東大編年 VIb～VII 期の陶磁器、土器、金属製品、石製品が多量に出土している。

SK383 (Ⅱ-60、61 図)

C15 グリッドに位置する土坑である。遺構の北側で SU389 に切られている。遺構は東南隅がくぼむ方形の土坑とそこから階段状にのびる 2 段のテラスを有する落ち込みとで構成されている。規

模は土坑部が南北 220cm、東西 250cm、深さが 110cm、テラス部が南北 190cm、東西 110cm、深さは浅い 1 段目が 20cm、2 段目は 40cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著で、整形はラフである。覆土は 9 層に分層される。

遺物は遺構上層を中心に出土しており、17 世紀末～18 世紀前葉の陶磁器、土器、瓦、金属製品などがコンテナ箱 2 箱程度出土している。

SK384 (II-68 図)

E14、E15、F14、F15 グリッドに位置する土坑である。東半が調査区域外にあたり、また、調査途中で本遺構直下に走る下水管の埋穴部分が陥没し、遺構の全容は何えなかった。調査できた規模は南北 360cm、200cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。遺構の壁や坑底は凹凸が顕著で、壁と坑底の境なども不明瞭であった。覆土は 6 層に分層され、焼土を多量に含む層など確認された。

遺物は 1 点のみしか出土しなかった。

SK386 (II-62 図)

D15 グリッドに位置する長方形の土坑である。SE371、SK387 を切って構築されている。規模は南北 230cm、東西 130cm、深さは 20cm を計測する。壁や坑底は比較的丁寧に整形されており、フラットな坑底より壁はやや開いて立ち上がる。覆土は 2 層に分層され、遺物が一定量含まれていた。

遺物は近代の陶磁器、土器を中心に石製品、ガラス製品など数十点出土している。

SK387 (II-62 図)

D15 グリッドに位置する土坑である。SU335、SK386、SK388、SK600 と重複しており、新旧は SK386 より旧であるほかはすべてより新である。平面形はやや歪んだ方形を呈し、西側には浅いテラス状の張り出しを有する。周囲の他の遺構と比較して主軸が西方に振れている。規模は南北 140cm、160cm、確認面からの深さはテラス部分で 40cm、最大で 70cm を計測する。坑底、壁には凹凸を有し、丁寧に整形されてはいない。覆土は 4 層に分層される。

遺物は 19 世紀前半の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱 1 箱出土している。

SK388 (II-62 図)

D14、D15 グリッドに位置する土坑である。南壁を SK387 に切られている。平面形は南北に主軸を有する長方形を呈し、規模は南北 220cm、東西 110cm、深さは 50cm を計測する。坑底や壁には顕著ではないものの凹凸が認められる。壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は 18 世紀中葉の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱 3 箱出土している。

SU389 (II-60、61 図)

C14、C15、D14 グリッドに位置する地下室である。SK383 を切って構築されている。遺構は階段部と室部とで構成される。階段最下段は室部に構築されている。ステップの間口は 90cm、奥行は 25cm 内外、各段の比高差は 30～49cm である。ステップの先端には板で補強されていた痕跡が確認され、東壁には板留の固定穴が各段から検出された。また、最下段は階段廻りに木杭が打ち込まれた跡が巡り、補強していたことが看取された。室部は東西に主軸を有する長方形を呈するが、若干東側が広がっている。規模は東側で南北 270cm、西側で 220cm、東西 340cm、天井までの高さは約 180cm、確認面からの深さは 300cm を計測する。遺構の壁や坑底は非常に丁寧に平滑に調整されている。覆土は 5 層に分層されるが、上層から遺物が多量に出土している。

遺物は上層から 18 世紀末～19 世紀初頭の陶磁器、土器、瓦、金属製品、生産関連遺物、自然遺物などがコンテナ箱 10 箱程度出土している。

SK390 (Ⅱ-67、68 図)

C14 グリッドに位置する土坑である。南側を SU382 に切られている。遺存している平面形は半円形を呈し、規模は南北 100cm、東西 130cm、確認面からの深さは 40cm を計測する。壁や坑底にはやや凹凸が確認できる。覆土は単層で、褐色土を呈する。

遺物は 17 世紀末～18 世紀初頭の陶磁器が十数点出土している。

SK406 (Ⅱ-53 図)

B15 グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、南北 70cm、東西 30cm、確認面からの深さ 40cm を測る。本遺構周辺部には円形または方形のピットが多数存在するが、本遺構との関連性を認めることはできなかった。

遺物は出土していない。

SK409 (Ⅱ-53 図)

B16 グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、南北 110cm、東西 140cm、確認面からの深さ 40cm を測る。覆土にはロームブロックが多量に含まれ、植栽痕の可能性もある。

遺物は出土していない。

SK411 (Ⅱ-63 図)

E16 グリッドに位置する土坑である。SK340 と SK482 と重複しており、新旧は SK340 より旧で、SK482 より新である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北 100cm、東西 100cm、確認面からの深さは 130cm を計測する。壁や坑底はやや凹凸を有する。覆土は単層で、しまりがない褐色土である。

遺物は 17 世紀～18 世紀前半、19 世紀前半の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱 5 箱程度出土している。

SK412 (Ⅱ-63 図)

D16 グリッドに位置する土坑である。SK413 を切って構築されている。平面形は長方形を呈し、規模は南北 130cm、東西 90cm、確認面からの深さは 10cm を計測する。遺構の壁や坑底は不明瞭で、凹凸も顕著である。覆土は単層で、暗褐色土を呈している。

遺物は 19 世紀の陶磁器が 1 点出土しているのみである。

SK413 (Ⅱ-63 図)

C16、D16 グリッドに位置する土坑である。SK412、SK414 と重複しており、両遺構に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は南北 130cm、東西 190cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。坑底、壁は凹凸が多く確認され、本遺構に伴うかは断定できないが北側を中心に小ピットが散在している。覆土はロームブロックが多く混入する暗褐色土を呈している。遺構の形状、覆土の堆積状況から植木に関する遺構であろうと推定している。

遺物は 17 世紀末～18 世紀前葉の陶磁器類が十数点出土している。

SK414 (Ⅱ-63 図)

C16 グリッドに位置する土坑である。SK413 を切って構築されている。遺構は三角形に近似した形状を呈し、規模は南北 150cm、東西 250cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。壁や坑底は凹凸が顕著である。覆土もロームブロックが多く混入し、植木に関する遺構であろうと推定している。

遺物は18世紀末～19世紀前葉の陶磁器類が十数点出土している。

SK415 (Ⅱ-63 図)

D16、D17、E16、E17 グリッドに位置する土坑である。遺構の南側は調査区域外で、全体的様子は伺えなかった。遺存している部分の平面形は長方形を呈し、規模は南北100cm、東西190cm、確認面からの深さは50cmを計測する。壁や坑底はやや凹凸が認められる。覆土はローム粒を含む褐色土を呈する上層と暗褐色土で遺物を多く包含する下層とに分層される。

遺物は17世紀末～18世紀前葉の陶磁器、土器を中心にコンテナ箱2箱程度出土している。

SE416 (Ⅱ-58 図)

C15 グリッドに位置する井戸である。SK330の東側落ち込みを切って構築されている。平面形は円形を呈し、規模は南北115cm、東西105cmを計測する。壁面は若干凹凸を有し、ほぼ垂直に落ちている。覆土は焼土粒を含む暗褐色土を呈している。

遺物は明治期の陶磁器、土器を中心に二十数点出土している。

SK417 (Ⅱ-53 図)

A15、A16、B15、B16 グリッドに位置する土坑である。遺構の西半が調査区域外で調査を行うことができなかった。平面形は不整な円形を呈し、規模は南北170cm、東西120cm、確認面からの深さは最大35cmを計測する。坑底や壁には凹凸が顕著に確認でき、調整などが行われた痕跡は確認できなかった。覆土は7層に分層される。壁や坑底の様子などから植栽痕であろうと推定できる。

遺物は18～19世紀の陶磁器類を中心に二十数点出土している。

SK418 (Ⅱ-52 図)

A14、B14 グリッドに位置する土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、西壁を攪乱によって削平されている。規模は南北110cm、東西100cm、確認面からの深さは最大50cmを計測する。遺構は凹凸が顕著で、中央には小ピットが確認される。覆土は6層に分層される。

遺物は確認されていない。

SK461 (Ⅱ-69 図)

E15 グリッドに位置する土坑である。平面形は東にやや開いた方形を呈し、規模は東壁側で南北150cm、西壁側で130cm、東西120cm、確認面からの深さは最大60cmを計測する。壁や坑底はやや凹凸が確認され、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は3層に分層される。

遺物は19世紀前～中葉にかけての陶磁器、土器を中心にコンテナ箱1箱出土したほか、瓦片が多く出土している。

SK462 (Ⅱ-52 図)

B14、B15 グリッドに位置する土坑である。平面形は方形を呈し、規模は南北180cm、東西180cm、確認面からの深さは最大30cmを計測する。遺構は東側を中心に小ピットが散在し、坑底や壁は多少の凹凸が確認できる。また、中央やや西寄りに1辺30cm程度の方形の落ち込みが確認されている。これらの性格を断定できる材料はない。覆土は4層に分層される。

遺物は出土していない。

SK472 (Ⅱ-52 図)

A14、B14 グリッドに位置する土坑である。平面形は円形を呈し、規模は南北110cm、東西100cm、確認面からの深さは25cmを計測する。北側にテラス状の段を有するが、顕著ではない。壁、坑底には凹凸が認められる。覆土は3層に分層され、中層からは動物遺体が一定量出土してい

る。

遺物は貝を中心とした動物遺体が出土しているが、人工遺物は確認されていない。

SK480 (Ⅱ-69 図)

E16 グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、規模は南北 150cm、東西 100cm、確認面からの深さは 30cm を計測する。壁や坑底は凹凸が顕著である。覆土は単層で、ロームブロックを多く含む褐色土を呈している。

遺物は明治中葉の陶磁器、土器などを中心にコンテナ箱 2 箱程度出土している。型紙絵付の製品まで含まれている。

SK481 (Ⅱ-69 図)

D15、E15 グリッドに位置する土坑である。上部を攪乱に西側を SU335 に切られている。平面形は東西に主軸を持つ長方形を呈し、規模は南北 170cm、東西 290cm、確認面からの規模は 120cm を計測する。壁や坑底は平滑に調整されており、壁はフラットな坑底より垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層され、ロームが主体の層であった。

遺物は出土していない。しかし、切り合い関係より本遺構が切られている SU335 は元禄 16 (1703) 年の廃棄と推定されることから、本遺構の廃棄年代は 17 世紀以前であろうと考えている。

SK483 (Ⅱ-66、67 図)

E13 グリッドに位置する小形の土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北 65cm、東西 60cm、確認面からの深さは 10cm を計測する。壁、坑底は比較的平滑に構築されており、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は近代の陶磁器が数点出土している。

SK502 (Ⅱ-64 図)

D12 グリッドに位置する遺構である。重複する SK319、SK504 より古い。南北 45cm、東西は残存域で 95cm、確認面からの深さ 65cm を測る。性格、年代は不明である。

遺物は 17 世紀と推定される陶磁器、土器が数点出土したにすぎない。

SK504 (Ⅱ-64 図)

D12 グリッドに位置する遺構である。重複する SK502、SK506 より新しく、SK318、SK319 より古い。平面形は不整形を呈し、南北 145cm、東西は残存域で 95cm、確認面からの深さ 50cm を測る。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が顕著である。性格、年代は不明である。

遺物は出土していない。

SK507 (Ⅱ-64 図)

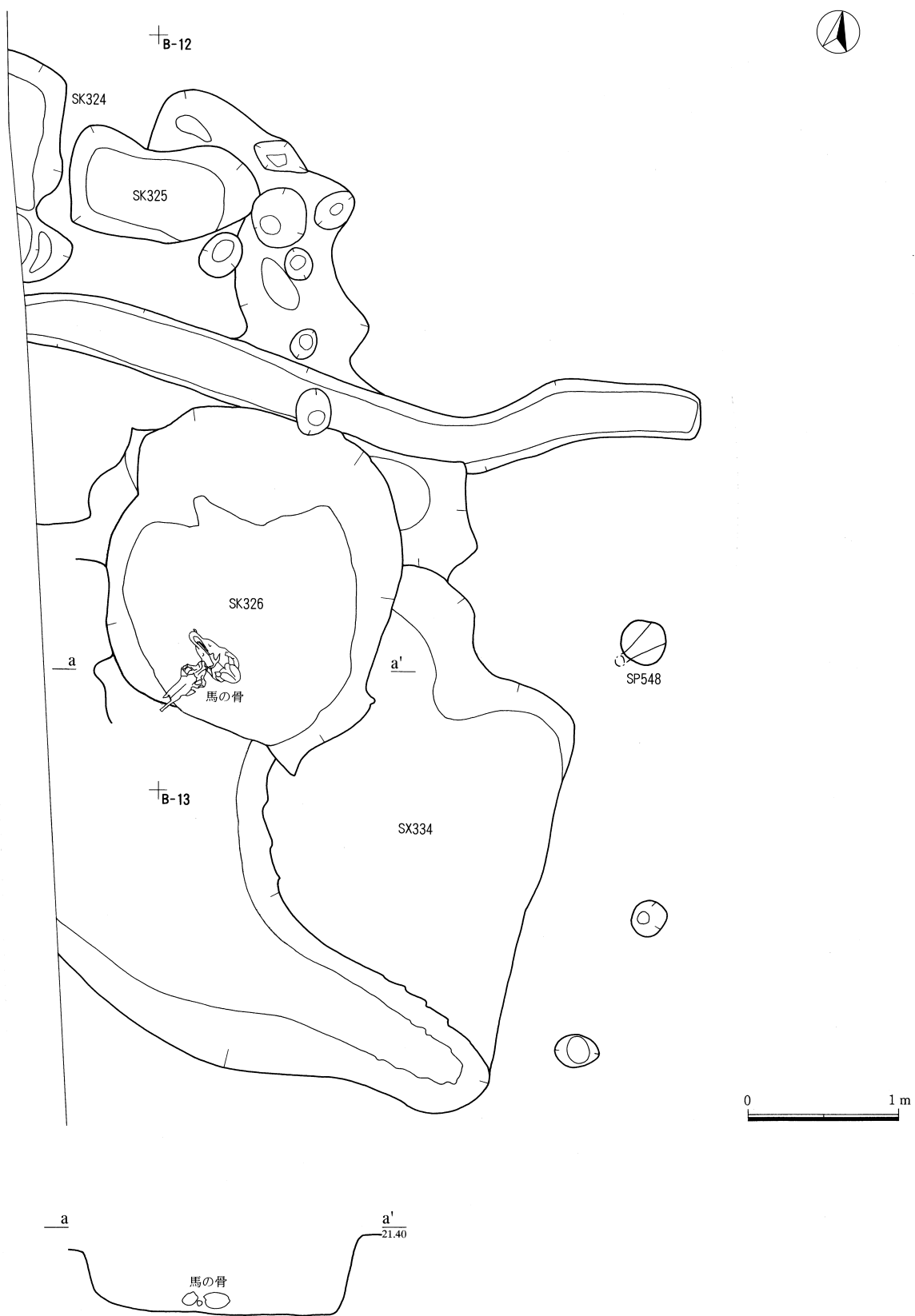
D12 グリッドに位置する遺構である。重複する SK504 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 130cm、南北 110cm、確認面からの深さ 245cm を測る。断面形は僅かながらハの字状に開く。南壁には 60cm 間隔で上下 2 段の足掛け穴が北壁には南壁上段より 20cm 高い位置に 1 箇所掘られている。壁は全体的に調整が粗く、縦方向の工具痕が残る。特に坑底付近で粗さが目立つ。

遺物は 19 世紀前～中葉の陶磁器、土器がコンテナ 1 箱出土している。

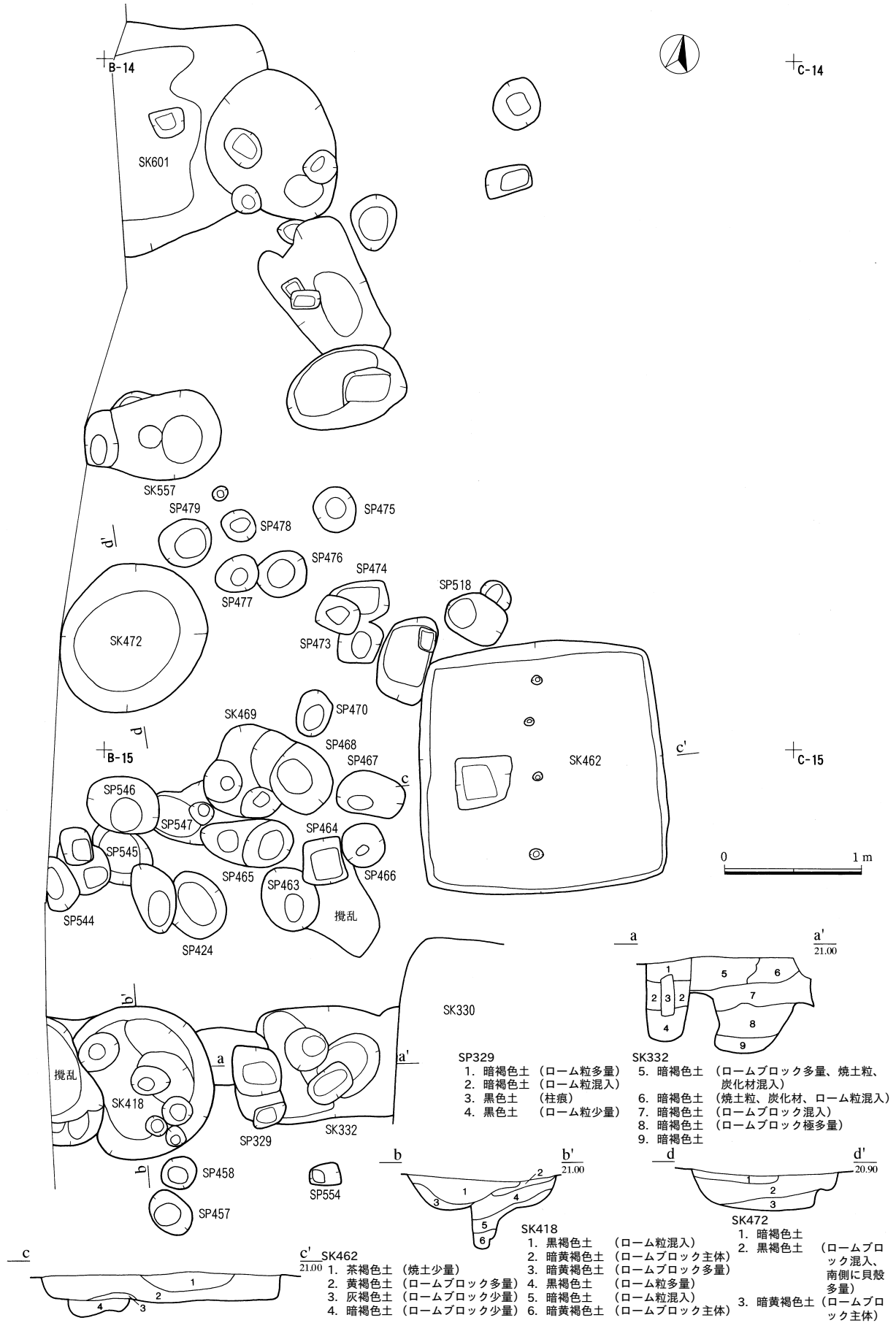
SK557 (Ⅱ-52 図)

A14、B14 グリッドに位置する土坑である。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は 60cm、東西 95cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。壁や坑底は凹凸が顕著で、中央には小ピット状の落ち込みがある。覆土はロームブロックが多量に含まれている褐色土単層である。

遺物は金属製品 1 点出土している。

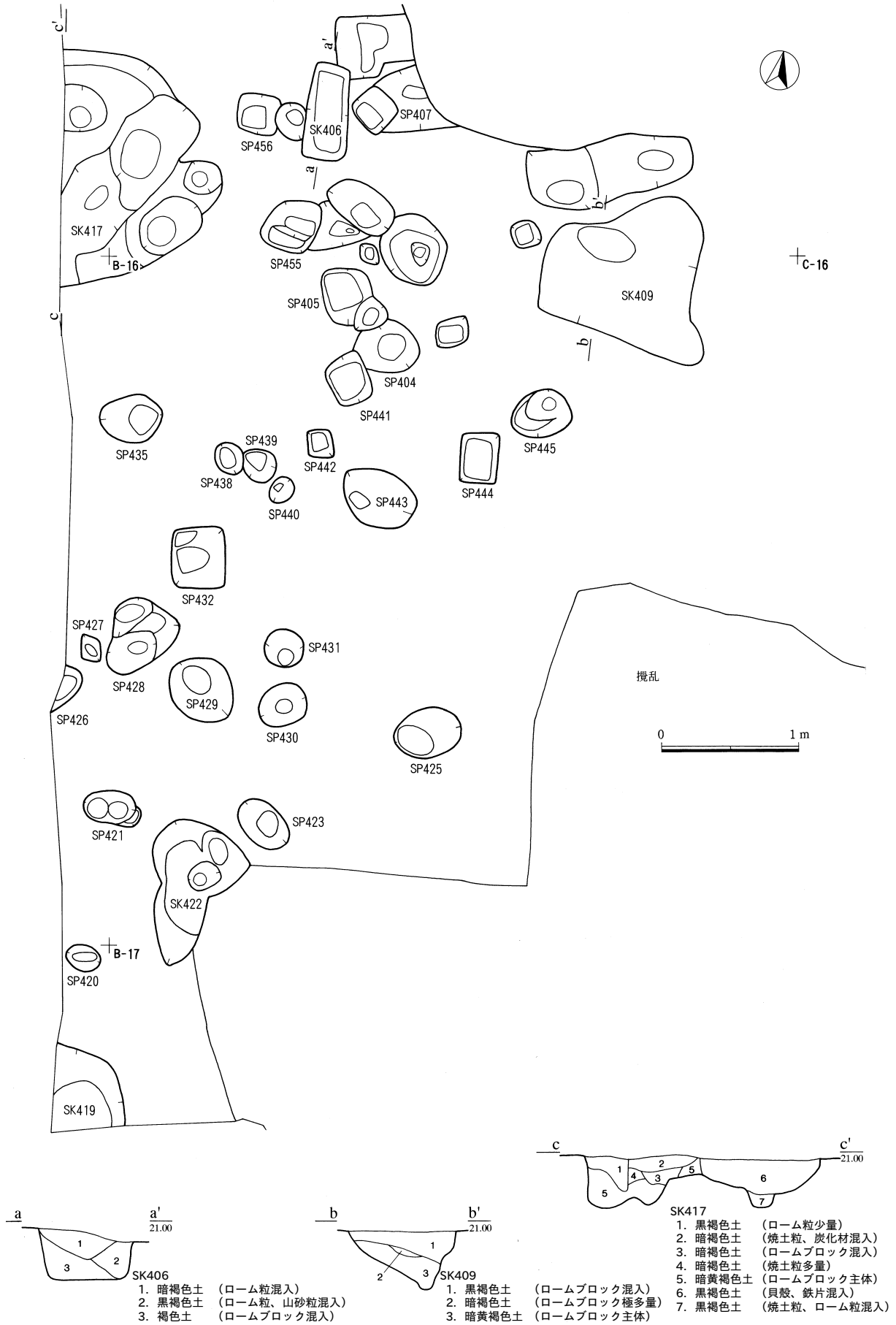


II-51 図 C₂ 区遺構 (1)



II-52 図 C₂ 区遺構 (2)

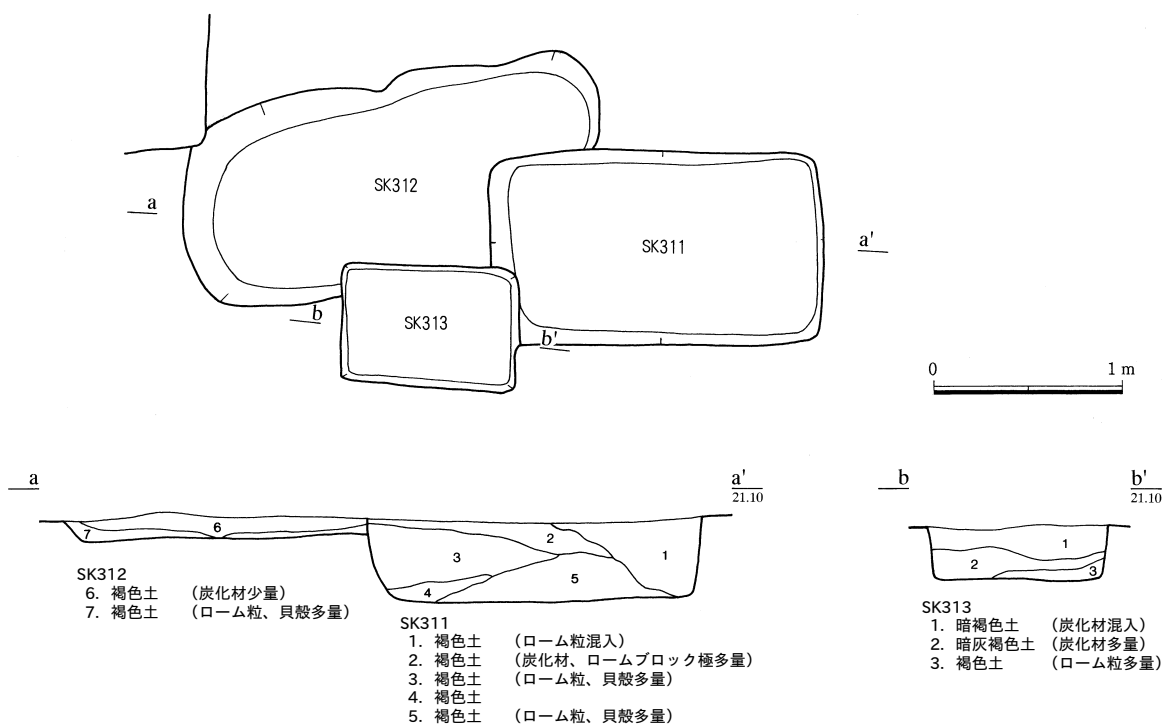
第5節 C₂区の遺構



II-53 図 C₂区遺構 (3)

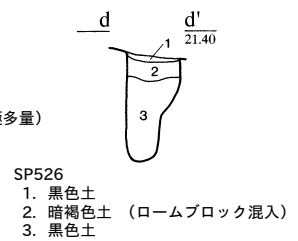
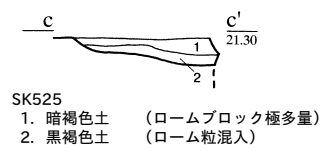
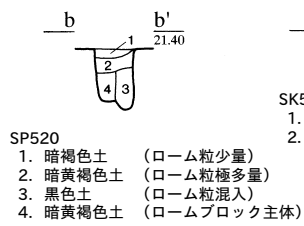
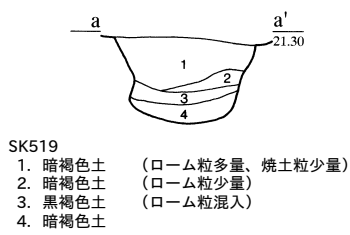
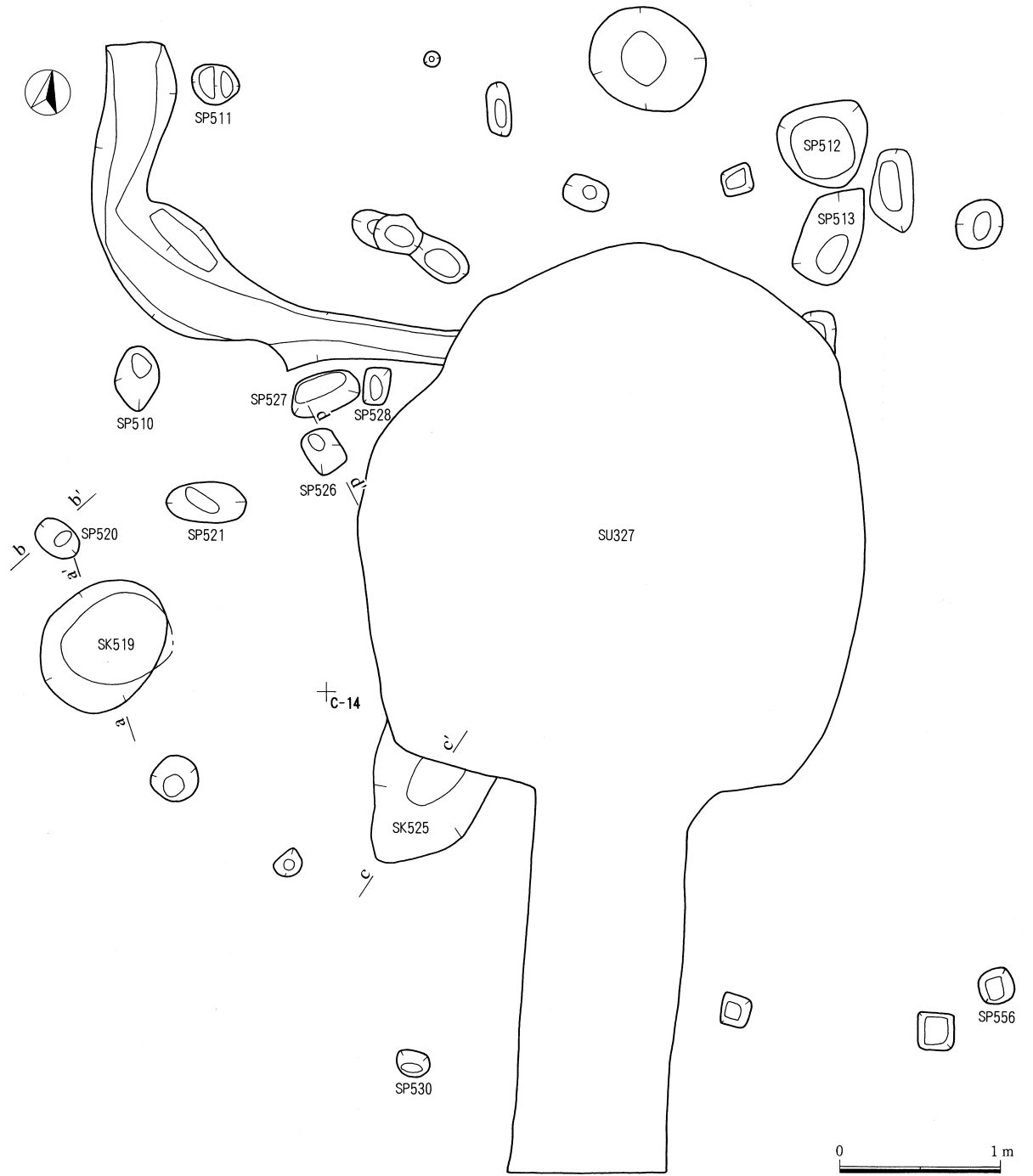


+C-12

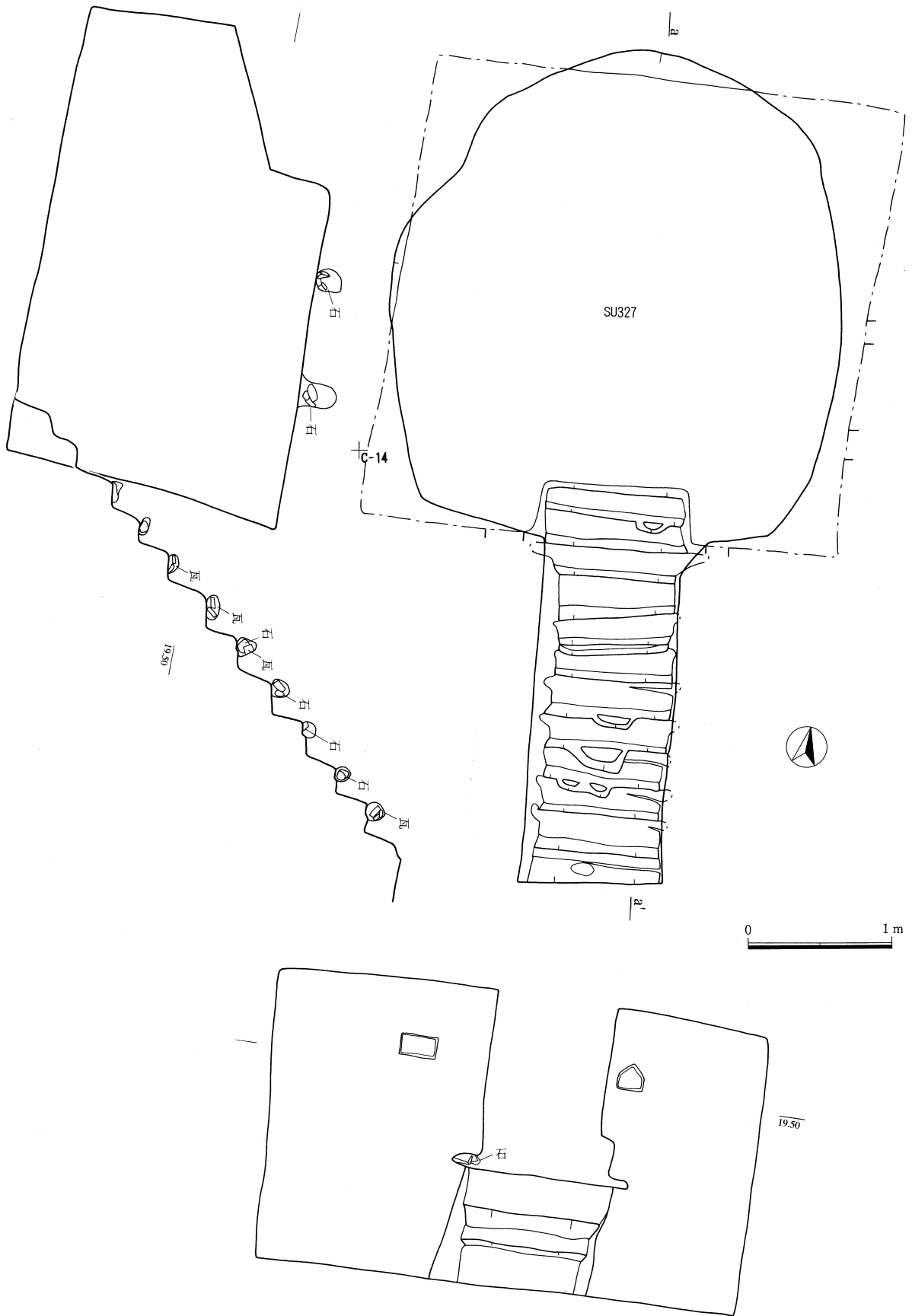


II-54 図 C₂ 区遺構 (4)

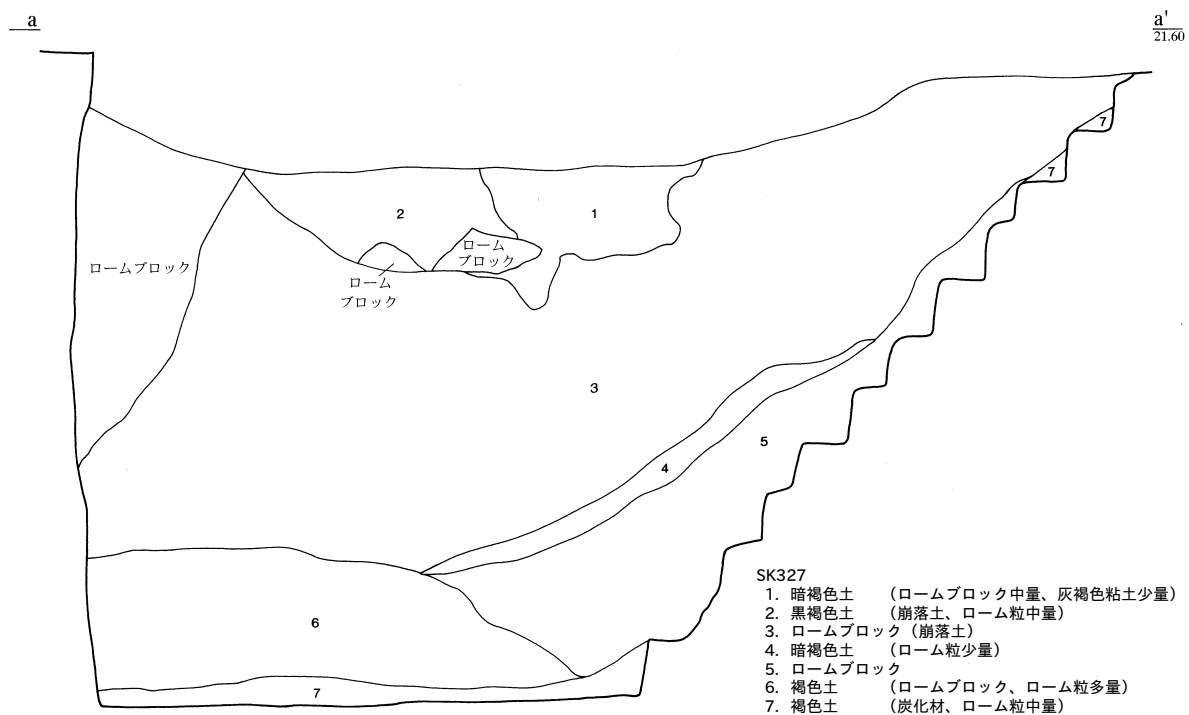
第5節 C₂区の遺構



II-55 図 C₂区遺構 (5)



II-56 图 C₂ 区遺構 (6)



南壁階段左側文字

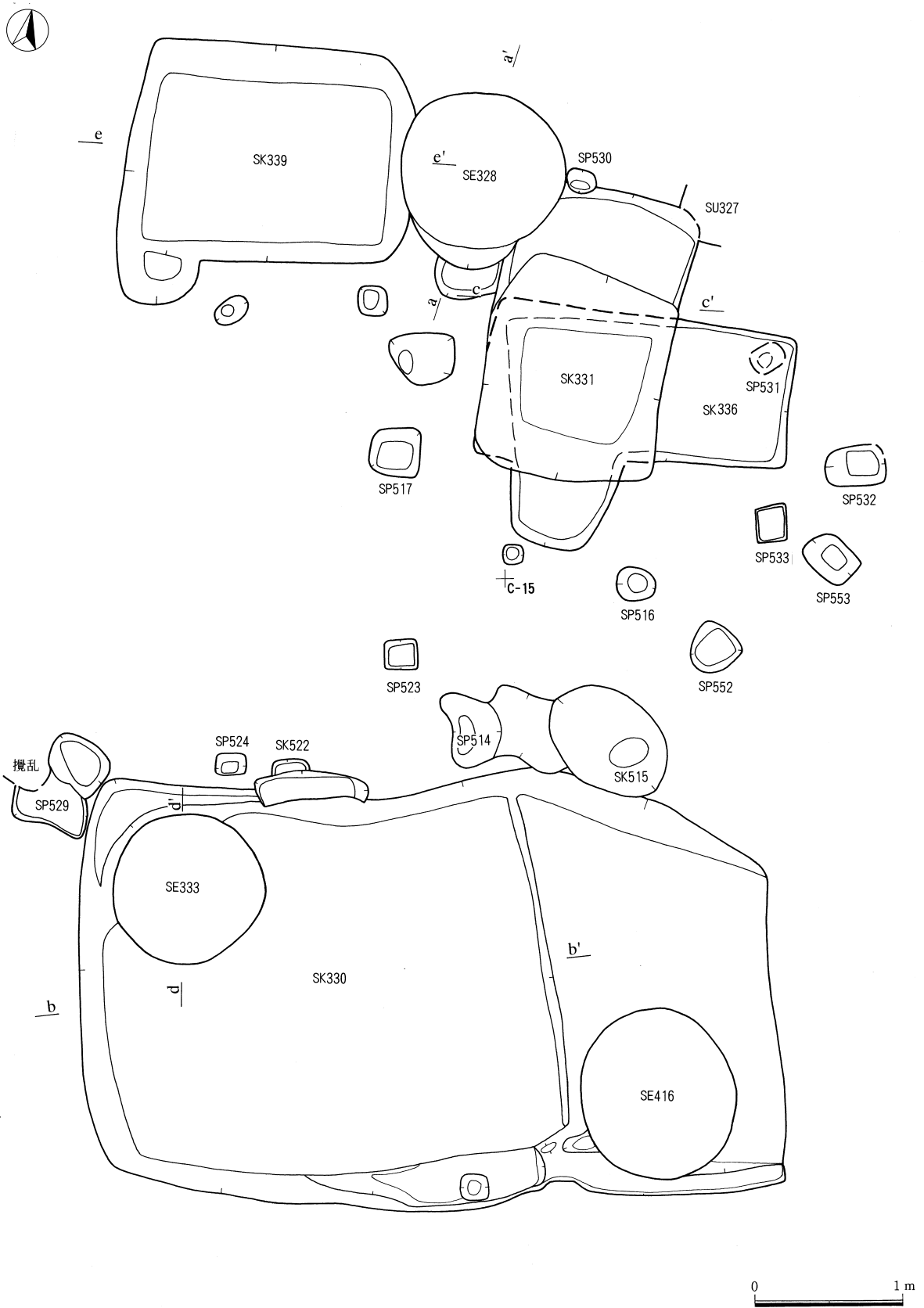


東壁文字

市郎兵衛
次郎兵衛
□久蔵?
清次郎

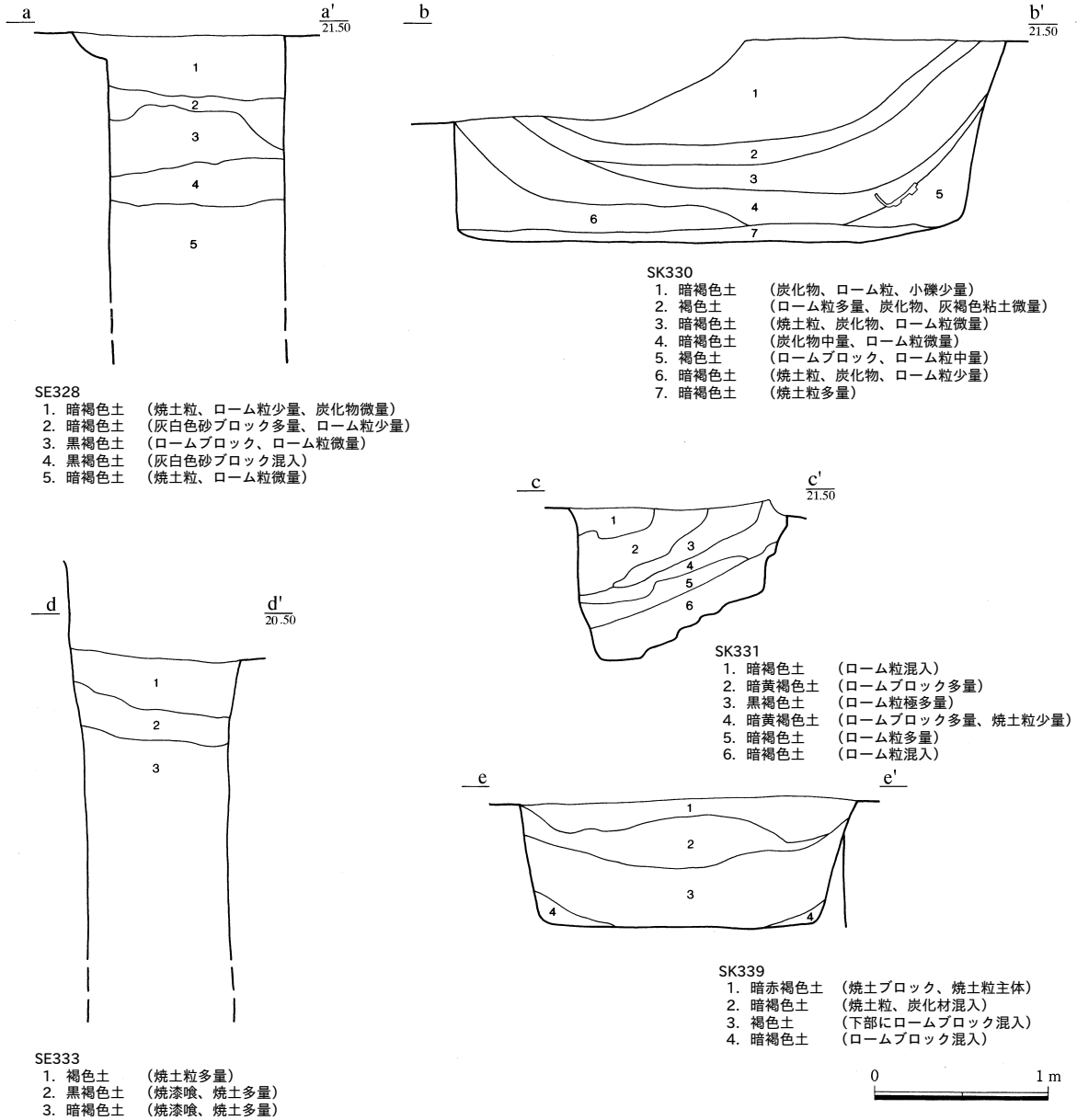
内許
同九月廿八日出來申候
丑ノ九月廿四日初

II-57 図 C₂ 区遺構 (7)

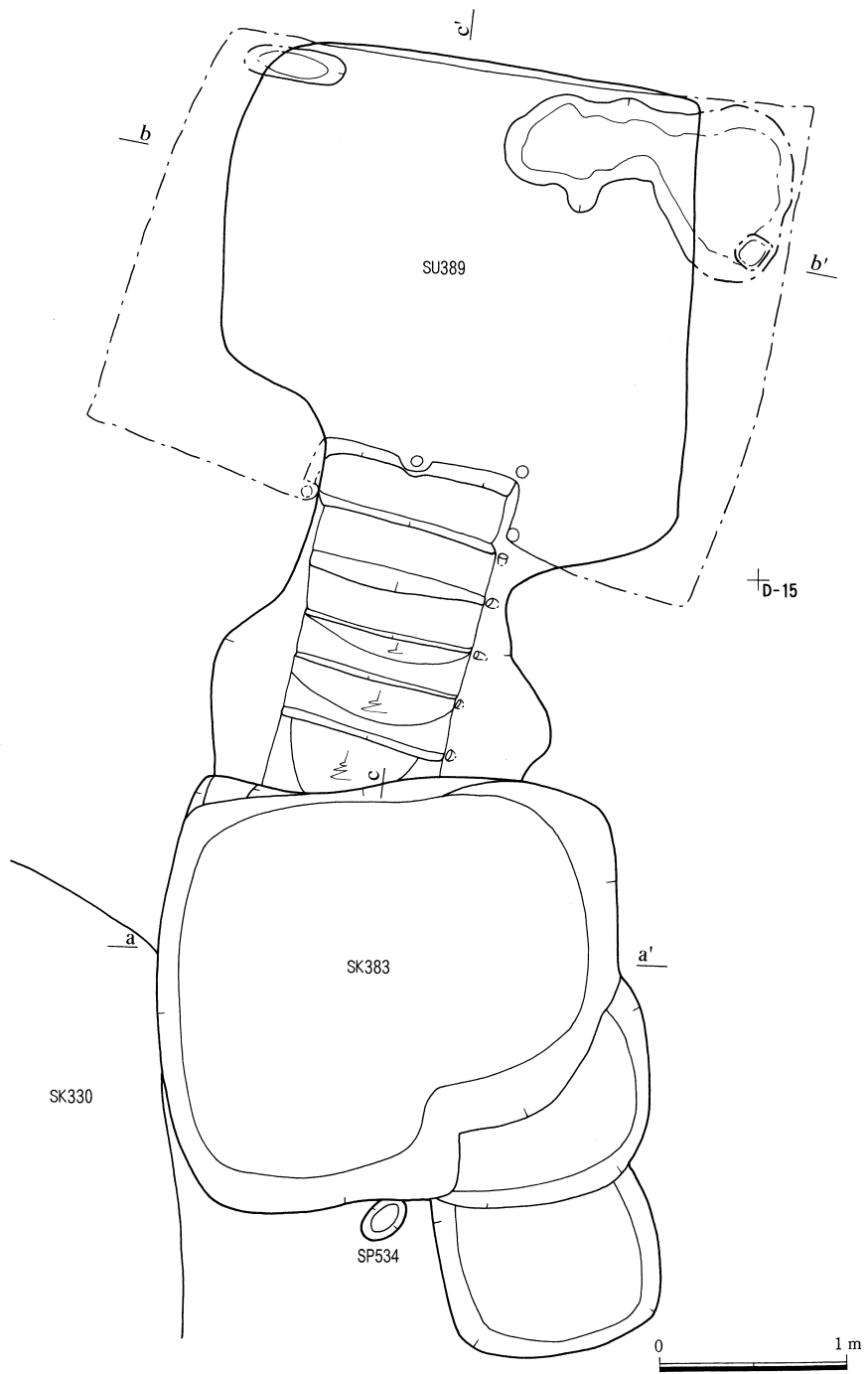


II-58 图 C₂ 区遺構 (8)

第5節 C₂ 区の遺構

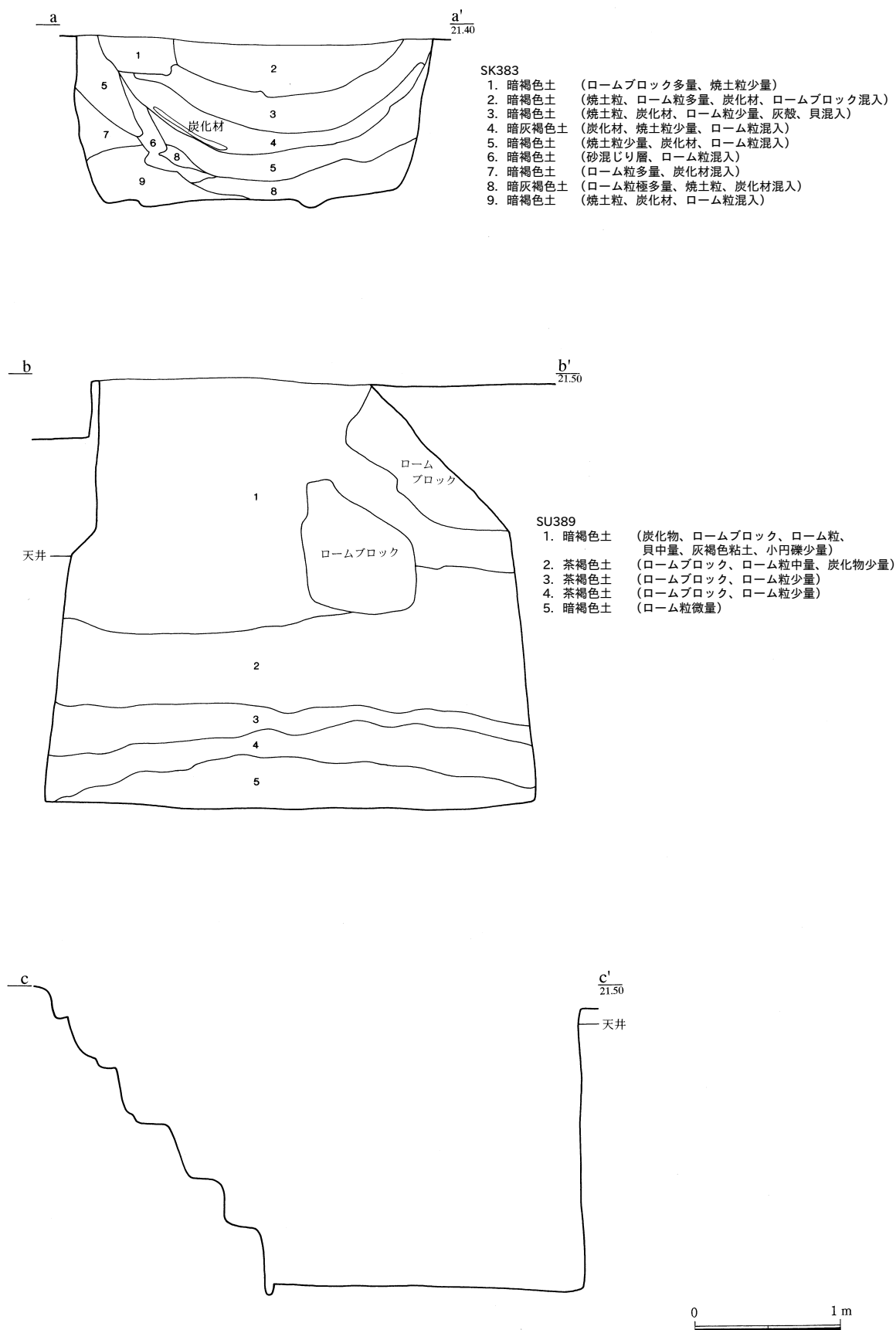


II-59 図 C₂ 区遺構 (9)

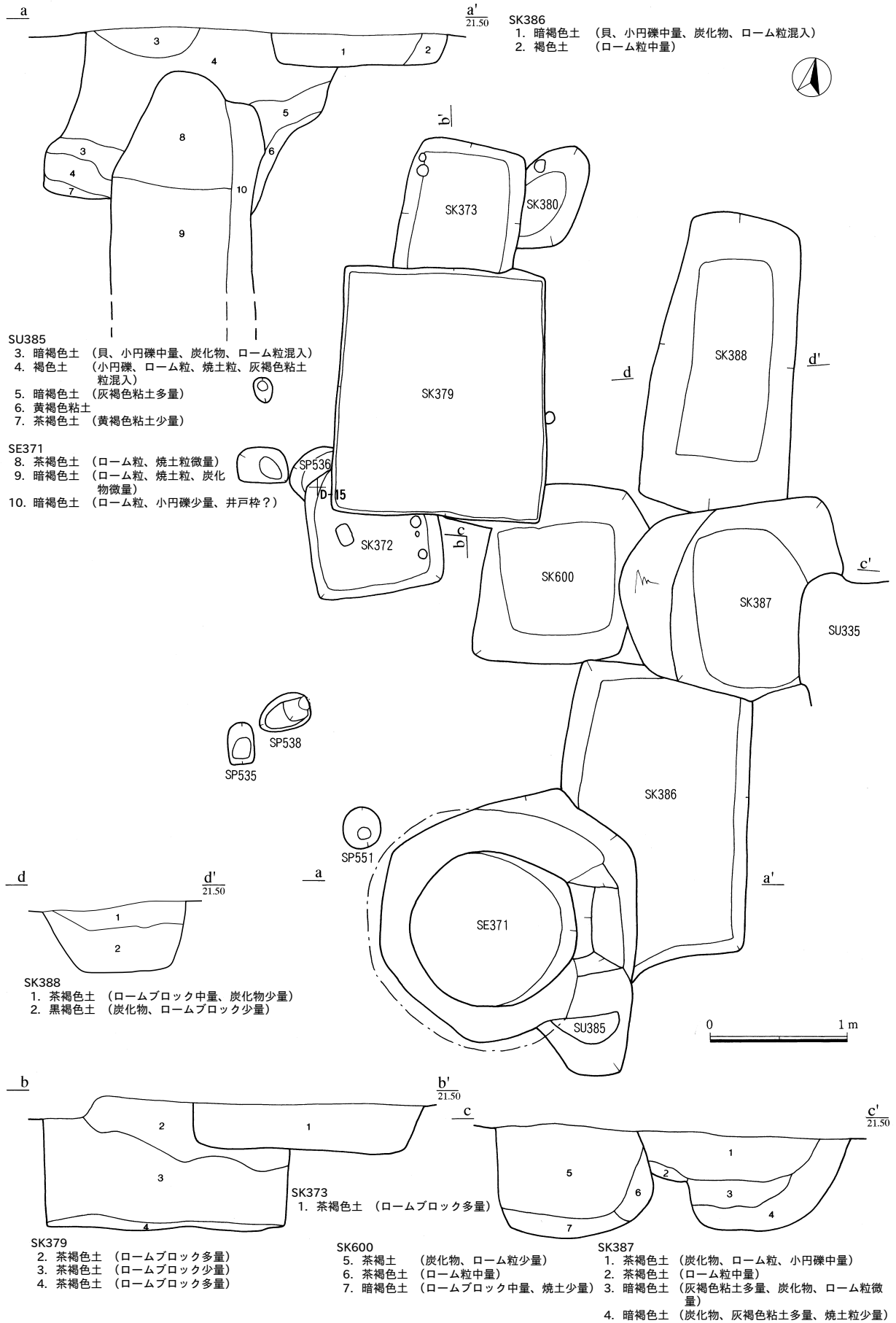


II-60 図 C₂ 区遺構 (10)

第5節 C₂区の遺構

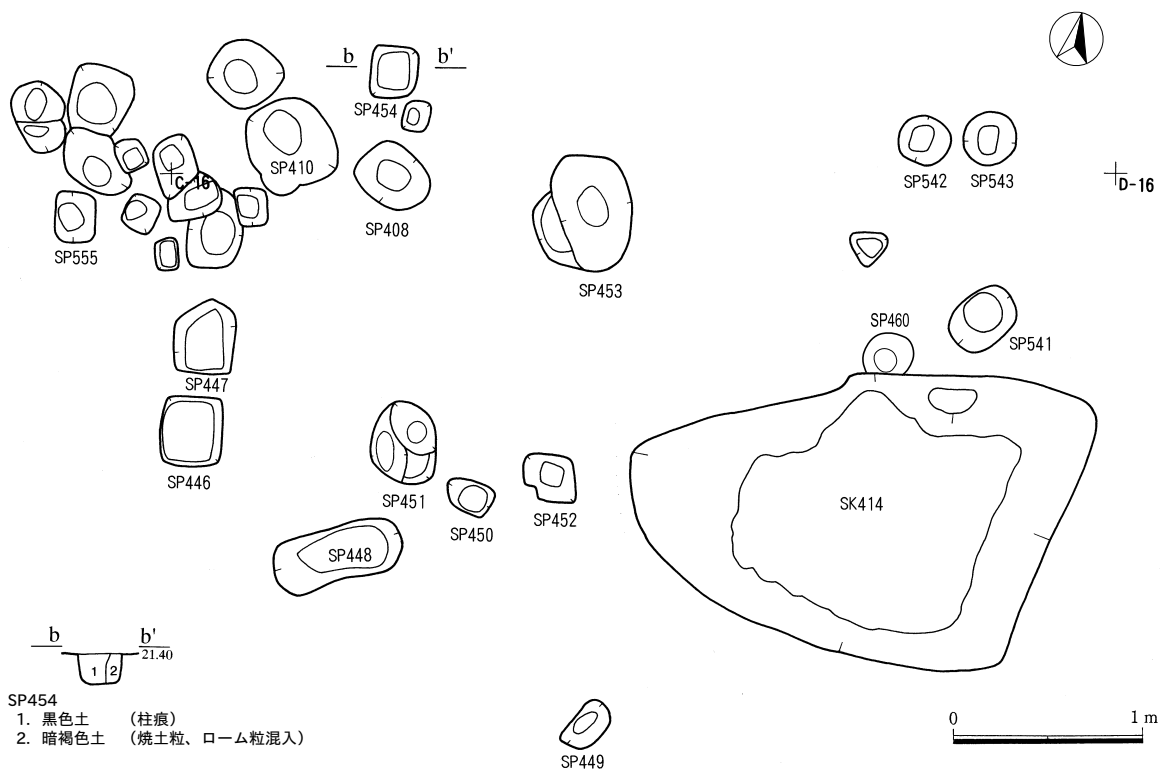
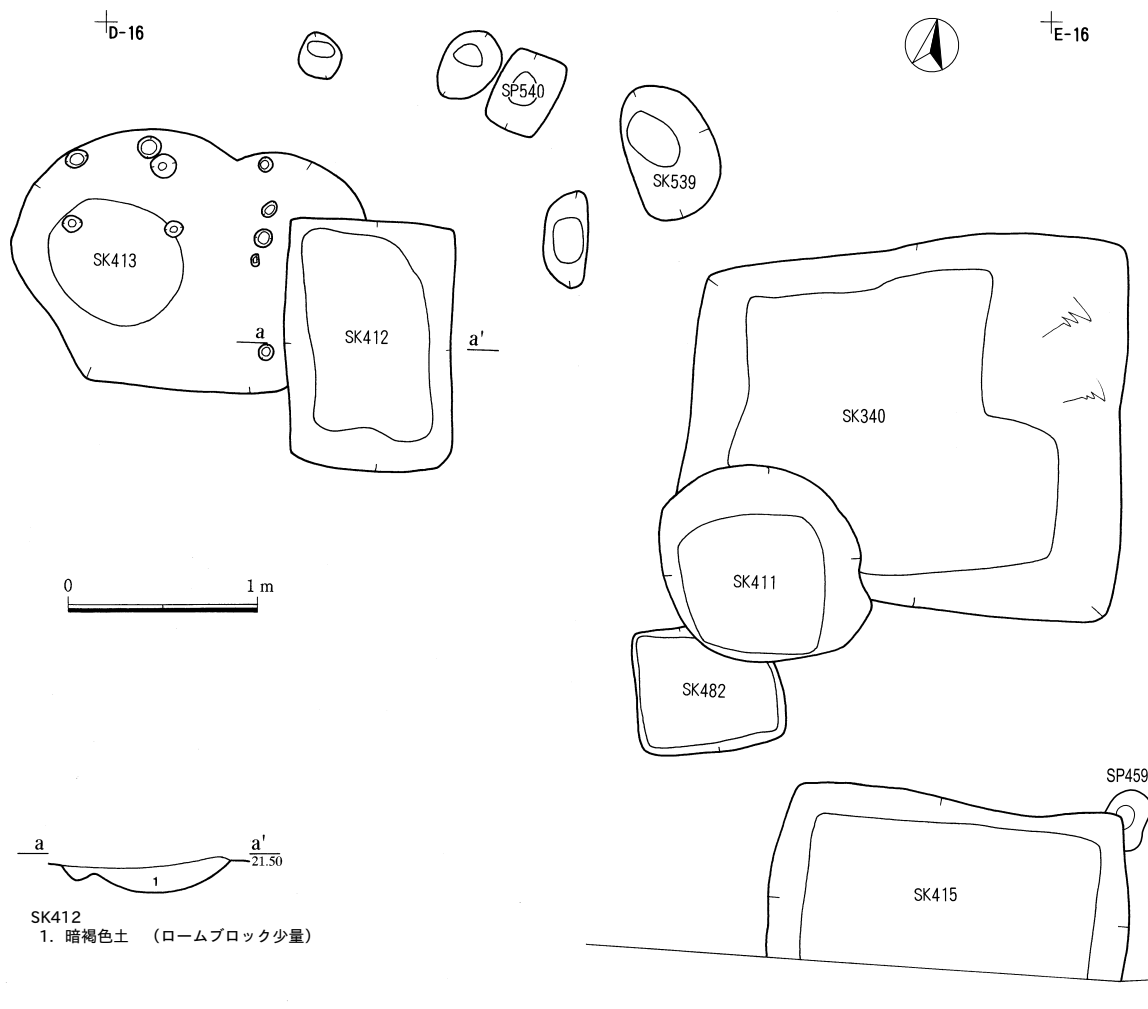


II-61 図 C₂区遺構 (11)



II-62 図 C₂ 区遺構 (12)

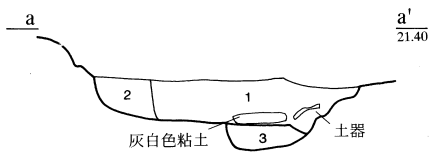
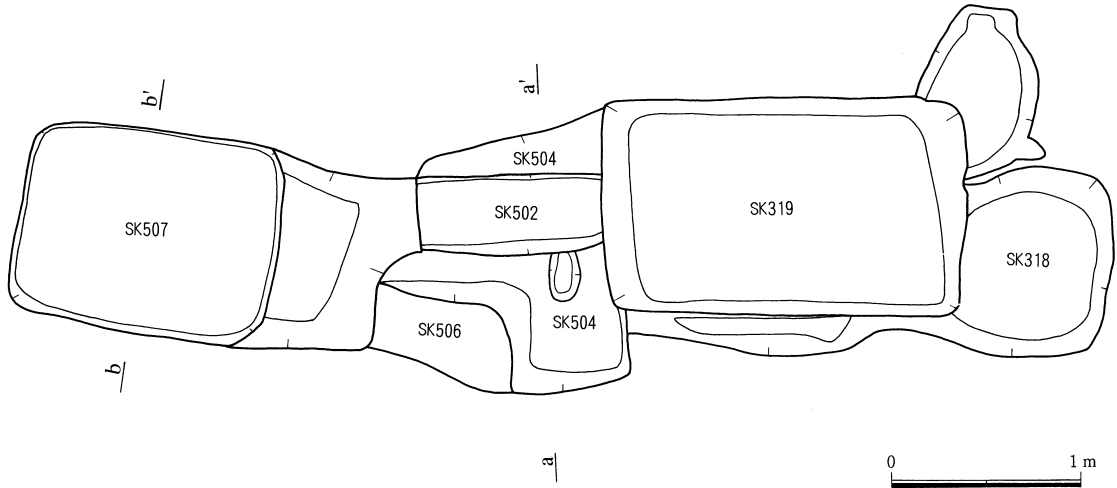
第5節 C₂区の遺構



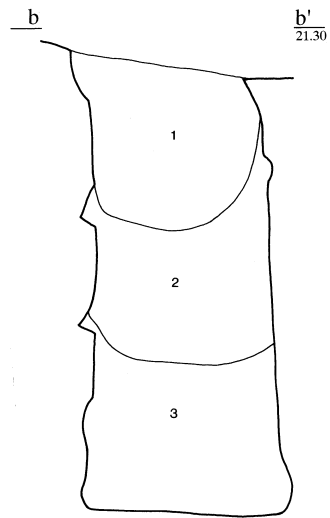
II-63 図 C₂区遺構 (13)

†D-12

†E-12



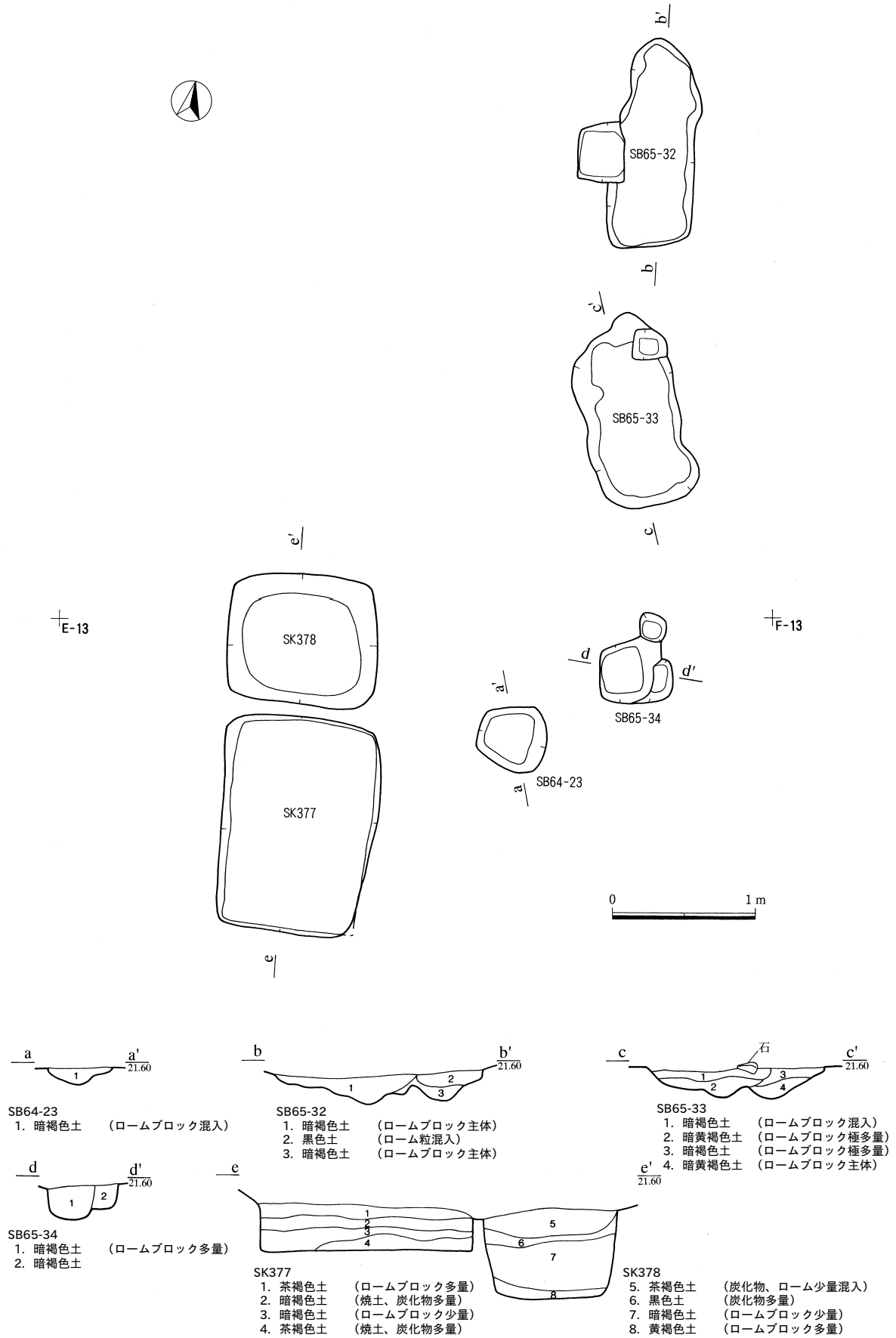
- SK504
1. 暗灰褐色土 (焼土粒、炭化材、灰色粘土粒、ローム粒混入)
 2. 暗褐色土 (ローム粒少量)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック多量)



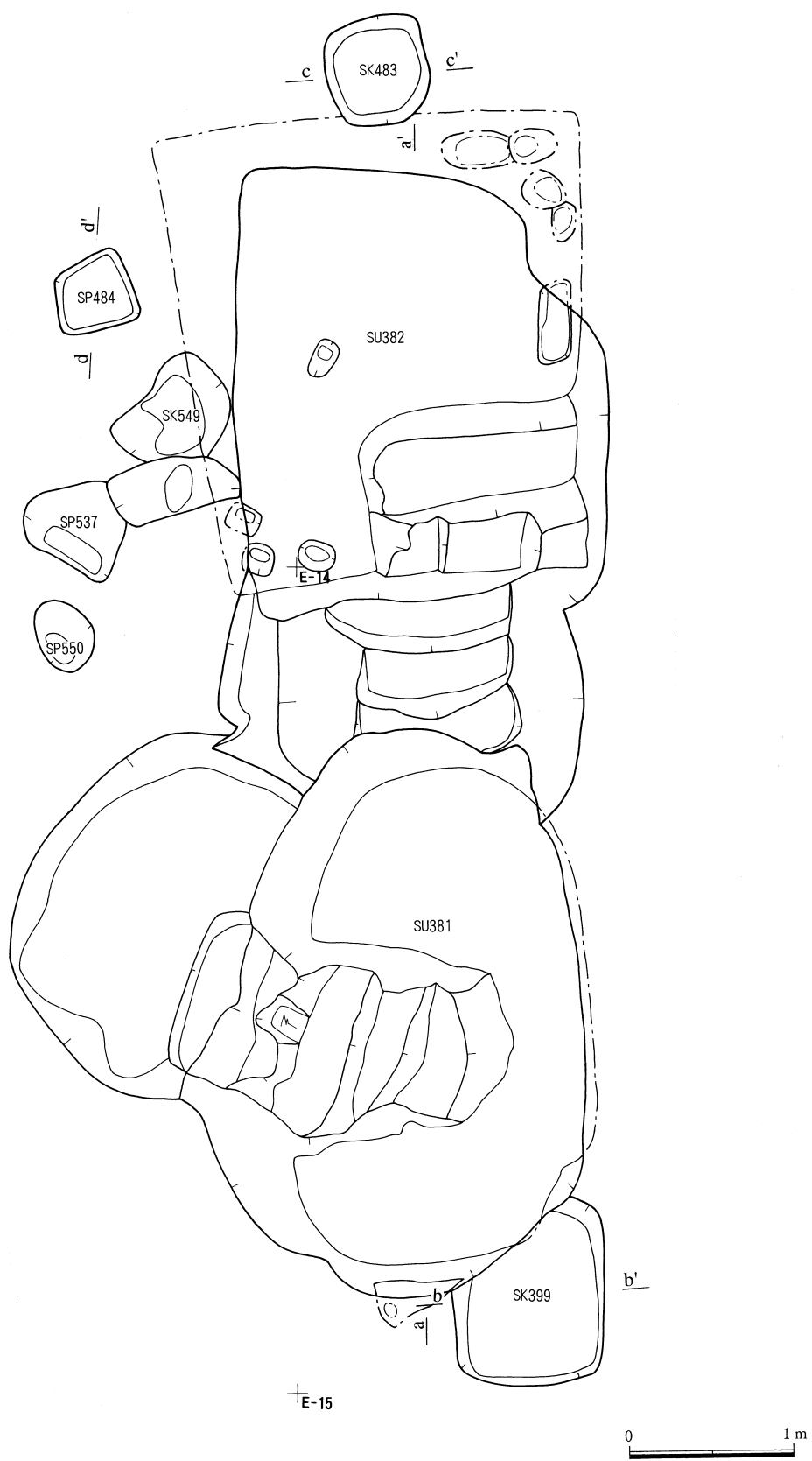
- SK507
1. 暗褐色土 (炭化材多量)
 2. 暗灰褐色土 (貝殻、炭化材混入)
 3. 暗灰褐色土 (ローム粒混入)

II-64 図 C₂ 区遺構 (14)

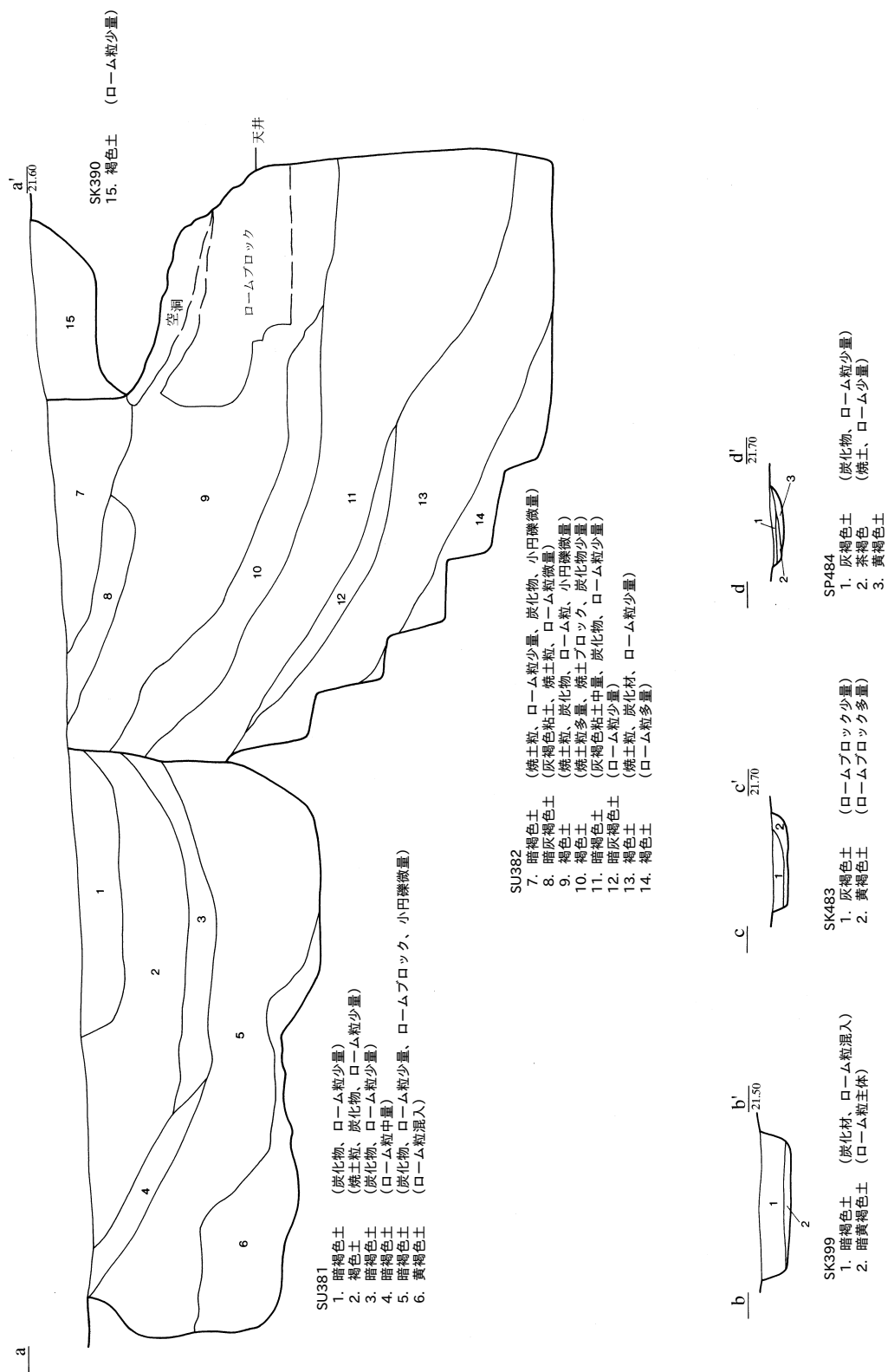
第5節 C₂区の遺構



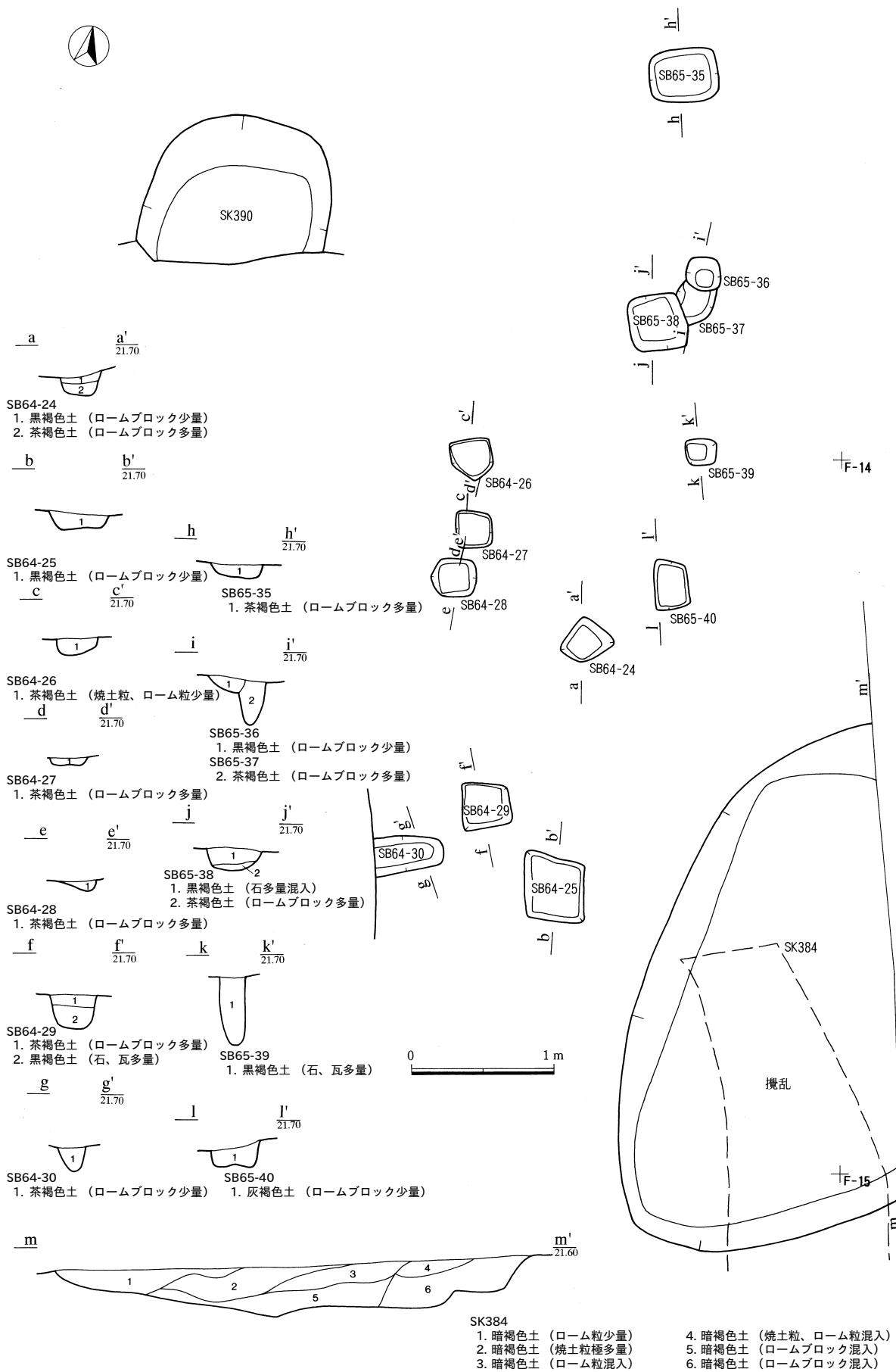
II-65 図 C₂区遺構 (15)



II-66 図 C₂ 区遺構 (16)

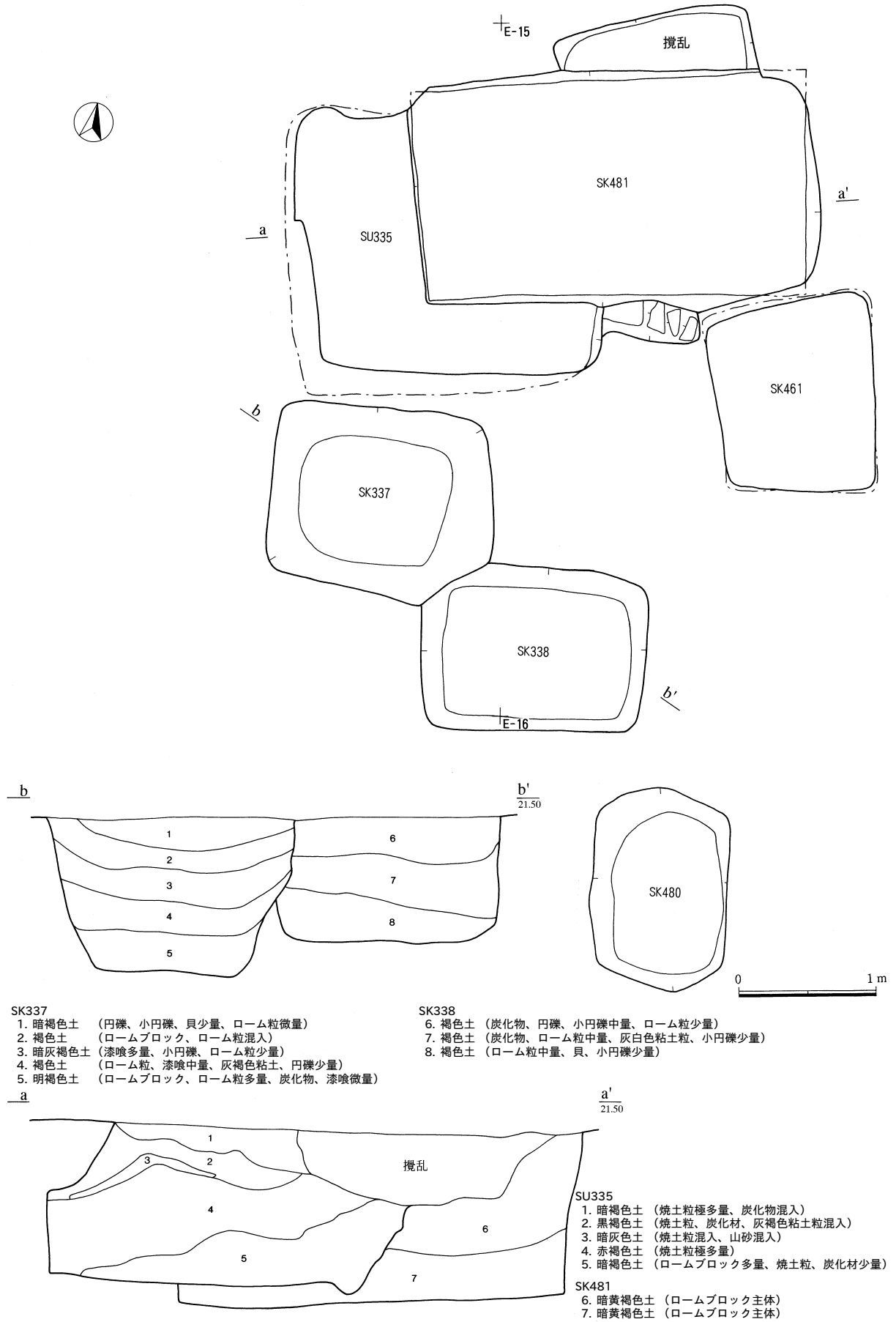


II-67 区 C₂ 区遺構 (17)



II-68 図 C₂ 区遺構 (18)

第5節 C₂ 区の遺構



II-69 図 C₂ 区遺構 (19)

第三章 人工遺物

第1節 磁器・陶器・土器

(1) 出土磁器・陶器・土器の概要

本地点からはコンテナ総数で約 740 箱の磁器・陶器・土器（人形、ミニチュア、遊戯具は含まない）が出土している。

埋蔵文化財調査室では、東京大学構内の各調査地点で 1 つの遺構あるいは 1 つの層から出土した磁器・陶器・土器の様相の把握を行い、分析の基礎資料としている。なおその際対象となりうる磁器・陶器・土器は遺構内における器種・産地組成の把握を行うこと、年代の判断材料を多く有することでその蓋然性を高めるという 2 つの理由により、遺物が多量に出土した遺構を分析対象としている。分類基準についての詳細は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）を参照し、実年代の推定については「東京大学構内の遺跡における年代的考察」（堀内秀樹 1997）に基づき分析をおこなった。

磁器・陶器・土器の数量分析をする際には前述の基準に基づき、基本的に以下の基準にて行った。

①底部糸切り痕の中心の数②底部が 1/2 以上残存するもの③注口の数など、各個体毎に 1 箇所しかない部位を、重複してカウント対象とならないよう配慮しカウントを実施した（Ⅲ-2 表）。また特定の部位が確認されないが、その個体が存在する場合には「0」で提示した。

以上のようなカウントを行い、総数が 100 個体以上となる遺構について数量分析を実施した。対象遺構は A 区では SU2、SK3、SK16、SU18、B 区では SU63、SK101、SU176、SK358、SU392、SU396、C₁ 区では SK188、SK292、SK293、SU294、SK402、C₂ 区では SK330、SU382 の計 17 遺構である。

本地点からは人形、ミニチュア、遊戯具は 2472 点出土している。ここでの遺物のカウント方法は形が把握できるものについては小片でも 1 点とし、同一個体と思われるものは複数でも 1 点として表示している。本地点は発掘区域を屋敷割りに沿って A～C₂ 区に分けているが、人形、ミニチュア類が最も多く出土したのは C₁ 区で次いで B 区、C₂ 区、A 区の順となる。しかし C₁ 区と B 区は遺構間接合するものが多くあった地区である。遺物の分類については人形は人と動物の形を表現したもの、ミニチュアは碗、皿、瓶、釜、カマドなどの食生活用具や塔、祠、橋、灯籠などの建造物、また硯や銭貨、御輿、太鼓などを小形化したものとした。遊戯具は競い合うものを対象とし泥面子、芥子面、碁石、碁石形土製品、土玉などで、面カタ、土鈴（五鈴鈴を含む）は別項目とした。石製の碁石は今回はこの項で取り上げている。また、釜形土製品についても今回は人形、ミニチュア、遊戯の中で取り上げている。

(2) 出土した磁器・陶器・土器

SK1（Ⅲ-1 図）

1、2 は土器である。1 は内外面に透明釉が施釉されたひょうそくで DZ-44-b に分類される。底

部には左回転糸切り痕がある。見込み中央の灯心用突起の先端に灯心痕が看取される。2は瓦質の釣灯籠形土製品である。六角柱形の胴部に宝珠を有する傘（屋根？）が付く。体部は板作り、傘は型作りである。体部は六角形に成形され、別作りの底部と接合している。底裏には手のひらの押圧痕が認められ、体部内側には、傘との境を横方向に強くなでて接合した痕跡が観察される。体部全面に亀甲形地文様を配し、6面それぞれが穿孔されている。すなわち図の正面のハート形の窓、その相対する位置に大小の円孔と三日月形を呈す穿孔、そしてこの2面の間の面には3個の円孔を有す。いずれも外側から穿孔されており、内側に粘土がはみ出している。傘部分の宝珠両脇に径約3mmの円孔を2個有す。吊すための穴か。なお本製品中に1のひょうそくが入った状況で出土しており、使用方法や用途を考える上で興味深い。

SU2（Ⅲ-1～5図）

総点数214点した（個体数）を数える一括資料である。磁器碗は端反形碗（JC-1-d、JB-1-n）が中心であるが、全体に器高が低く、口縁部の外反が緩やかなものが中心である。また端反碗に加えて、幅広の高台を有する碗（JB-1-s）なども認められる。磁器皿では瀬戸・美濃系磁器皿（JC-2）に陽刻が施された型皿（2-e）が看取される。以上のような遺物群の様相から東大編年Ⅷc期に比定される遺構一括資料と考えられる。なお陶器、土器ともに植木鉢の占める割合が高いが、出土器種全体を通じてもその割合が高い。

磁器（1～10、12～23、25～27） 1、2、4、6～8は染付碗、3、5はその蓋である。1、2、4、8は端反形碗である。1が景德鎮窯系青花で、JA1-1、2、4が瀬戸・美濃系でJC-1-d、8が肥前系でJB-1-nに分類される。絵付はいずれも筆書きであるが、8は全体に滲んでいる。1の口唇部には虫喰いが看取される。呉須の発色が良く、口縁部と腰部に墨弾きで如意頭文が、体部外面と見込みには細線描きで果実文が絵付けされる。底部には銘を有す。なお3が4の蓋でJC-00-b、5が6の蓋でJB-00-aに分類される。6は肥前系半球形碗でJB-1-f。器高も高台も低い。7は肥前系丸形碗でJB-1-e。口径に比して高台径が小さく、内湾気味である。高台高は低い。絵付は細線描きで施され、見込みの環状松竹梅文はかなり崩れたものになっている。9、10、12～16は坏である。9、10、13、15、16は瀬戸・美濃系（JC-6）、12、14は肥前系（JB-6）である。12は色絵、他は全て染付が施される。9、15は端反形坏でJC-6-b。9の口縁部の外反は弱い。内外面の絵付は筆描きで施され、釉には細かい気泡が多く看取される。15も外面に筆描きの絵付が施され、高台内には銘を有す。10は体部が直線的に開く坏でJC-6-f。口縁部は外反する。体部下半に大きめのシノギが看取される。高台内に銘を有す。12、14は丸碗形坏でJB-6-a。12は体部3箇所にて赤でエビが描かれる。14の口縁部は内傾し、肥厚している。高台は幅広高台状を呈し、畳付内側が外側より低い。絵付は筆描きによるものである。13、16は丸碗形坏でJC-6-a。ともに文様は線描きで施され、高台内に銘を有す。13の畳付は内側がさらに一段削り込まれ、階段状を呈す。16は畳付外周の釉が削りとられているなど、JC以外の他産地の製品である可能性がある。なお16には焼継痕が観察されるが、口唇部の焼継痕は鉛ガラスが厚く盛り上がる。17～20は皿である。17、18は肥前系染付皿でJB-2-q。17は口鏽が施され、白化粧が畳付までなされる。18は呉須が口鏽状に施される。焼継部分で欠損している。19は産地不明の青磁染付輪花皿でJZ-2。胎土は非常に緻密で白色を呈す。青磁釉は青緑色を呈し、ガラス質である。型打成形で、見込み以外の内面には陽刻が看取されるが、釉が厚く施釉されているため模様は明瞭ではない。見込みには呉須で文人画のようなものが描かれる。20は瀬戸・美濃系白磁方形型皿でJC-2-e。高台も方形を呈す。内面には花文と蛸唐草文の陽刻が看取される。高台内には楕円形の刻印のようなものが認められるが、鮮明ではない。21は肥前系染

付蓋物で JB-13。筒形の胴部中央が括れ、腰が張る。外面には筆書きで、「青」、「寿」、「福」の他 1 文字の計 4 文字の漢字と蝶が上下互い違いに描かれる。22 は肥前系染付御神酒徳利で JB-11-a。器高 10cm 弱と小さく、瓶子形を呈す。外面には崩れた松竹梅文のようなものが描かれ、呉須の発色は灰色味を帯びている。23 は肥前系染付鉢で JB-5-b。口径に比して底径が小さく、また器高も低い。口縁内側にはかなり崩れた算木文が施される。24 は景德鎮窯系の青花小瓶で JA1-15。型作りで、前後貼り合わせで成形される。扁壺状を呈し、胴部は方形、高台は高く、裾拡がりである。胴部前後には呉須で「朝暘堂」「閭門泰伯／廟橋南塊」とある。葉瓶か。25 は瀬戸・美濃系染付壺・甕で JC-15。型作りである。内面の肩部直下に繋ぎ目が観察されることから、この部分から上・下半の 2 パーツに分けて成形されたのであろう。出土時にはこの部分で欠損していた。26 は瀬戸・美濃系染付土瓶で JC-34。底部と口縁部内側付近は無釉である。注口部内側の穿孔は 5 個。底部は低く削り出され高台状を呈す。底裏には墨書が看取されるが、欠損しているため判読できない。27 は肥前系染付蓮花で JB-20。型作りである。畳付釉は拭きとられる。

陶器 (11、28～53) 11、28 は坏である。11 は産地不明の坏で TZ-6。胎土はやや粗く、灰白色を呈す。内外面白化粧され、外面はその上に染付される。畳付外周は面取りされる。高台内に「の」の字の削り込みがある。28 は大堀・相馬系灰釉坏で TJ-6。口縁部内側はやや釉が厚く施釉され白濁し、僅かに盛り上がる。体部外面には鉄で馬が描かれるが、かなり崩れたものである。畳付外周は面取りされる。29 は瀬戸・美濃系灰釉餌入れで TC-30。環状の把手を 1 箇所所有す。底裏外周はナデ調整されるが、中央には左回転糸切り痕が残る。30、31 は京都・信楽系灰釉灯明皿で TD-2-b。30 の見込みにはピン痕が 3 箇所ある。31 は口縁部外側にタール状の灯心痕が看取される。32 は京都・信楽系灰釉油受け皿で TD-40-a。受け部には小さな浅い U 字状のスリットを 1 箇所所有す。脚部に窯着痕が 1 箇所看取される。33 は瀬戸・美濃系柿釉丸形碗で TC-1。高台は外側に開き気味である。34、40、45、52 は壺・甕で、34、45、52 は瀬戸・美濃系 (TC-15)、40 は京都・信楽系 (TD-15) である。34 は TC-15-b。底部以外、内外面に柿釉が施釉され、口縁部付近には灰釉が流し掛けされる。口縁部外反は小さい。底裏には高台を削り出した際の粘土塊が付着している。45 はいわゆる赤津ハンドで TC-15-a に分類される。口唇部には団子状トチ痕が 4 箇所認められる。底裏には二次穿孔が 1 箇所看取され、その部分は丁寧にケズリ調整される。52 は飴釉が施釉された三耳壺で TC-15。内面と底部は無釉であるが、ほぼ内面全体に鉄分が付着し、底部は赤色化している。お歯黒壺として使用されたものか。40 はいわゆる腰白茶壺で TD-15-a。三耳壺で、上半には鉄釉、下半には灰釉が施釉されるが、頸部から肩の辺りは上半より濃い色の鉄釉が流し掛けされる。底裏 3 箇所に目跡が認められる。35～38 は土瓶である。35、38 は瀬戸・美濃系糸目土瓶の蓋と身である。35 が TC-00-g、38 が TC-34 に分類される。35 の裏側と 38 の底裏には「○」に「本」と「□」に「駄」の 2 つの刻印が押印される。38 の注口部内側の穿孔は 7 個。底裏にはススが付着している。36、37 はイッチン掛け灰釉土瓶の蓋と身である。36 は落とし蓋で TZ-00-i、37 が TZ-34-i に分類される。37 の注口は非常に細い鉄砲口であり、内側の穿孔は 3 個。39 は京都・信楽系灰釉爛徳利で TD-4。底部は無釉で、その外周は面取りされる。器面には鉄、緑、白土で草花文の上絵付が施される。41 は瀬戸・美濃系灰釉水滴で TC-19。型作りで、器面には桜の花びらと扇の陽刻がある。底裏無釉で、外周が僅かに面取りされる。なお底裏は非常に滑らかで、その上細かな傷のようなものも観察されることから、砥石に転用された可能性がある。42 は京都・信楽系色絵水注で TD-27。小瓶のような器形に、小さな蕨手状の把手を 1 箇所所有する。器壁は薄く、底部脇はケズリ調整される丁寧な作りのものである。体部には鉄、赤、白 (緑か) で草花文の上絵付が施

される。43、44、46は瀬戸・美濃系植木鉢でTC-21。43、44は鉄釉、46は灰釉が施釉される。いずれも底部には焼成前穿孔を1箇所有するが、43は穿孔部内側の周囲を二次調整し、孔を一回り大きくしている。46の畳付にはアーチ状の浅い削り込みが3箇所ある。47～49は瀬戸・美濃系瓶である。47は内外面に灰釉が施釉され、底裏には粗砂が僅かに付着している。体部3箇所に鉄で山に「上」、「練堀町」、「岡村屋」と書かれる。TC-10に分類される。48はいわゆるペコかん徳利でTC-10-g。全体に柿釉が施釉されるが、底裏は拭き取られる。体部2箇所が窪まされる。体部数箇所に窯着痕が看取される。49は一升徳利でTC-10-e。やや青味をおびた灰釉が施釉されるが、底部は拭き取られる。口縁部は算盤玉状を呈す。体部には山に「加」の点刻の釘書きがある。50、51は産地不明の鉢でTZ-5。50の胎土は粗く、淡灰白色を呈する。内外面に藁灰釉が施釉される。体部外面には草文状のしのぎが施されるが、その部分にも厚く釉が流れ込んでいる。底部は畳付以外は錆釉が薄く施釉される。見込みと畳付には目跡が6箇所認められる。51の胎土は緻密で、褐色を呈する。全面に鉄釉が施釉され、内面にはうのふ釉が流し掛けられる。底裏の釉は拭き取られる。縁帯部には菱形文が押印される。口唇部には2個の胎土目が、底裏外周には粗砂粒が環状に認められる。53は瀬戸・美濃系澁瓶でTC-28。内外面に柿釉が施釉されるが、底部外面付近のみ無釉である。上方に1cm幅の帯状把手を有す。底裏中央は浅く削り込まれ、畳付外周は面取りされる。

土器(54～72) 54～56は土器皿である。54、55は底裏に左回転系切り痕があるものでDZ-2-b。胎土はともににぶい橙色を呈す。55は見込み中央が二次的に1箇所穿孔され、その部分を中心に被熱し赤色化している。56は内外面施釉されたものでDZ-2-h。底裏には左回転系切り痕が看取される。57、58は土師質油受け皿で、57はDZ-40-b、58はDZ-40-aに分類される。ともに透明釉が施釉され、受け部には浅いU字状のスリットを1箇所有す。57の底裏には左回転系切り痕が看取される。58の脚部内側は左方向に削り込まれている。59～61はロクロ成形無印の塩壺でDZ-51-w。胎土は59はにぶい橙色、60、61は橙褐色を呈す。いずれも底裏に左回転系切り痕がある。59は口縁部内側が外側よりやや高いが、60、61はほぼ平らに成形されている。また59は内面のロクロ目が顕著であるが、60、61はナデ調整され比較的平滑である。62、64は植木鉢である。62は全面に黒釉が施釉されたものでDZ-21-c。胎土はにぶい橙色を呈す。底部には穿孔を1箇所有し、足が2個遺存する。64は瓦質でDZ-21-b。焼成不良で、胎土は灰白色を呈す。底裏には穿孔を1箇所有し、右回転系切り痕が看取される。63は土師質の端反鉢でDZ-5-a。胎土は橙褐色を呈す。底裏には系切り痕と、二次穿孔が1箇所看取される。植木鉢に転用されたのか。65は火消し壺蓋でDZ-00-h。胎土は橙褐色を呈す。側面のみミガキ調整され、上面はチヂレ目が認められる。内面には僅かにススが付着する。67、68は瓦質の箱庭道具でDZ-5-b。口縁部はともに鋸状を呈す。内側の仕切はいずれも欠損し、剥離した痕跡が認められる。68は底部に二次的穿孔が1箇所看取される。仕切部分が欠損した後、植木鉢に転用されたのか。69、70は火鉢であり、口縁部内側にはススが付着している。69は土師質丸火鉢でDZ-31-a。胎土は橙褐色を呈し、口唇部から体部外面はミガキ調整される。底裏には足が1個遺存する。70は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-d。口縁部と胴部中央はミガキ調整、その間は回転工具状のもので装飾される。底裏には足が2個遺存する。71は七輪部品のさなでDZ-48-d。胎土は橙褐色を呈す。底部には6個の穿孔を有す。内面は被熱し、白色化している。72は急須でDZ-16。いわゆるボウフラであろう。胎土は緻密で、白色を呈す。器壁は非常に薄い。外面はミガキ調整されるが、底裏は渦巻き状に削り込まれている。注口部内側の穿孔は3個。外面全体にススが付着するが、特に底裏は顕著である。

人形・ミニチュア・遊戯具(73～123) 本遺構から出土した亀乗り童子(102)がSK3出土の

ものと遺構間接合している。本遺構からは刻印がついたものが4点出土している。刻印がついたものはいずれも白色系の胎土である。73～75は笛でDZ-59に分類される。胎土はいずれも橙色系で、型押成形(上下合わせ)で全体に透明釉を施している。73は福良雀をモチーフとし顔と翼には白色を、さらに翼には緑色を重ね塗りしている。彩色は上面のみである。振ると音がでる構造になっている。74は鳩をモチーフとし両翼には梅花文を描き、花卉は白色で、花卉の間は茶で斑点を花芯は緑色で装飾している。彩色は頭部、胸部にも観察できる。翼の後方は白色でアーチ状に文様を描いている。75も鳩をモチーフとし、頭部は白色痕と両翼に白色と緑色が観察できる。振ると音がでる構造になっている。76～101はミニチュアである。76は磁器製の鉢でJB-61に分類される。型押しによる成形。高台脇から高台にかけ無釉であるが一部釉が垂れている。口縁部は輪花状で内面に松葉文様を描いている。77～80はいずれも京都・信楽系の陶器ミニチュア碗でTD-61に分類される。77、78、80の胎土は黄白色を呈するが、79は灰白色で硬質感がある。77はケズリ出し高台で高く、畳付の幅は不均一である。高台脇から高台にかけ無釉である。貫入が観察できる。口縁部は丸みがあり、外反している。78はケズリ出し高台で高台内中央が小さく突出し畳付の幅は不均一である。高台脇から高台にかけ無釉である。貫入が観察できる。口縁部はわずかに外反している。79はケズリ出し高台で高く、高台内中央が小さく突出している。胴下部から高台まで無釉である。貫入が観察できる。口縁部はわずかに外反している。80はケズリ出し高台で高台内中央は小さく突出し、畳付は面取りしている。貫入が観察できる。口縁部はわずかに外反している。81はミニチュアの銚子でDZ-61に分類される。白色系の胎土で、型押成形(上下合わせ)で注口と把手、脚3箇所は貼付けである。上面と胴部中央は濃い緑釉で装飾している。底部に「楓山」の刻印が押されている。82はミニチュアの角皿でDZ-61に分類される。81と同様の白色系の胎土である。型打成形で貼付高台である。内面は斜めに二分され、一つは麻の葉文様とし一方は白色に塗り、梅の枝を赤色と焦茶色で描き施釉している。83はミニチュアの水注でDZ-61に分類される。胎土は淡橙色を呈する。外面胴部は白色に塗り緑色で文様を描き施釉している。胴下部以下は無釉である。注口と把手は貼付けである。84、85はミニチュアの瓶でDZ-61に分類される。いずれも白色系の胎土で、型押成形で内面には指頭押圧痕が観察できる。六面に区分されたなかに麻葉文様が付けられ、濃い緑釉を施している。胴部中央付近から底部にかけ無釉である。85には二重亀甲の中に鏡文字で亀の字が刻印がついている。86は浅い注口部をもつミニチュアの瓶で、DZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈している。ロクロ成形で胴部に梅花文を描き花卉は白、花芯は緑、枝は焦茶色で彩色し施釉している。87は型押しされた瓶でDZ-61に分類される。胎土は81、84、85と同様の白色系で、濃い緑釉を施している。胴下部以下無釉である。胴部を親指大に凹ませ、中に布袋像を貼付している。85と同様二重亀甲形の中に亀の字がついている。88は瓢形の瓶でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。肩部に花文を描き、白と緑釉で彩色し施釉している。口縁部は摩耗している。89は瓶でDZ-61に分類される。胎土は86と同様の橙色系を呈し、ロクロ成形である。胴上部は白色で塗ったのち緑色で縦縞状に文様を描き施釉している。口縁部は丸みを有し、外反している。90はミニチュアの瓶と思われ、DZ-61に分類される。型押成形で施釉。91～94はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。いずれも型押成形で合い口は別作りで貼付けている。91、93、94の胎土は橙色系で、92のみ白色系である。91は無彩で施釉のみである。92の作りは粗く無数のひび割れがみられ、緑釉が僅かに観察できる。93、94は上面を白色で塗り、施釉している。95はミニチュアの瓶と思われDZ-61に分類した。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。底部脇は面取りされている。外面と底部に白色を塗り、胴下部と底部を除き施釉している。胴下部に文様と思われる赤色が観察できる。底部に小さな孔があるが粘土

に混ざった小石が取れて出来たものと思われる。96、97はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。いずれも胎土は橙色系でロクロ成形で施釉している。96の底部はケズリ出し高台で高台内は中央部と畳付脇を深く削っている。口縁部から内面全体を白色で塗り、緑色で梅花文を描き、花卉の間を焦茶色で装飾し、施釉している。97の口縁部は3箇所を内傾させている。内面に花と思われるものを描き、白色と緑色で彩色し、施釉している。98はミニチュアの皿でDZ-61に分類される。型打成形で、外面には指頭押圧痕が観察できる。胎土は橙色系である。内面には大きな牡丹花と斜格子文様を付し、花と口縁部は白、葉は緑色で彩色し、施釉している。99はミニチュアの城でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、白、緑色で彩色し、施釉している。型押成形で底部はドーム形に凹ませている、内面には指頭押圧痕が観察できる。100はミニチュアの御輿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で底部は開口している。御輿の台座部には担ぎ棒を差し込むための孔が2箇所、頭頂部には飾りを挿すための孔が穿たれている。101はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、底部の他内外面を赤く彩色している。ロクロ成形である。口縁は大きく外反して平坦面をつくる。口縁部際は擦れた為か彩色が剥落。肩から胴部にかけて、張り出している。102～116は人形である。102～104は白色系の胎土の人形で、いずれも型押成形で中空である。また、型離れ剤の雲母が顕著で、白色を塗った後に朱色と黒色を使用し、彩色している。102は亀乗り童子でDZ-60-mに分類される。童子の衣と亀の頭と足に朱色が観察される。亀の胸部には亀甲形に象形文字風の「亀」の刻印が押されている。103は虚無僧でDZ-60-kに分類される。衣を朱色で彩色し、目と眉は黒色で描いている。振ると音がでる構造になっている。104は鴛鴦でDZ-60に分類される。頭部と翼は朱色で尾翼と目は黒で彩色。105～123の胎土は橙色系を呈する。105は亀でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）中空で、振ると音がでる構造になっている。白色を塗り、後に緑と茶色で彩色し、全体を施釉している。106～123の胎土は橙色系である。106は大黒様でDZ-60-cに分類される。型押成形（前後合わせ）中空で内面には指頭押圧痕が観察できる。白色を塗ったのち、顔は薄い桃色、大黒帽子の縁取りは赤で中は焦茶色、襟部と袖部の一部は赤色、小槌は黄色で彩色し施釉している。107は力士でDZ-60に分類される。型押成形（前後合わせ）で中空である。髪は黒色で、全体を赤色で彩色している。108はお多福でDZ-60に分類される。型押成形（前後合わせ）である。底部の処理法が他のものと異なり、浅く凹ませている。底部には無数の指頭押圧痕が観察できる。この底部の処理法は同様の胎土で、農学部家畜病院地出土のやや大きい福助やお多福に観察できる。109は猫で、DZ-60に分類される。型押成形である。110は犬張り子形の犬で、DZ-60-iに分類される。僅かに赤色が観察できる。型押成形（左右合わせ）中空である。内面に指頭押圧痕が観察される。111は牛でDZ-60に分類される。型押成形（左右合わせ）である。僅かに赤色が観察される。112～114は型押成形で、裏面が平坦である。112は天神でDZ-60-bに分類される。貼り合わせのないタイプのもので、裏面には指頭押圧痕がみられ、底部には乾燥、彩色の為の穿孔が観察できる。113は恵比寿様でDZ-60-cに分類される。112同様貼り合せのないのもので、裏面には調整具の板目がみられ、上部には乾燥、彩色の為の浅い孔が2箇所観察できる。表には雲母と表裏に赤色痕が観察できる。114は燕でDZ-61に分類される。裏面には調整具痕が観察できる。115は槌乗り鼠でDZ-60に分類される。型押成形（前後合わせ）中空で、内面には指頭押圧痕が観察できる。小槌の叩き面は白色を塗った後、緑と茶色を重ね、鼠は白色で彩色し、全体を施釉している。116は達磨禪師でDZ-60に分類される。型押成形（前後合わせ）中空で、器壁は厚い内面には指頭押圧痕がみられ、底部には径6mmの穿孔が観察できる。全体を赤色で彩色している。図は縮尺4分の1で表示。117、118は基石形土製品でDZ-56に分類される。いずれも手捻りで掌握痕が表裏

に観察できる。119は土玉でDZ-57に分類される。手捻りであるがきれいに調整され掌握痕は観察できない。120～122は小判形でDZ-61に分類される。型押成形で全体に雲母がみられ、側面には型痕がみられが上下面はきれいに調整されている。123は泥面子でDZ-55に分類される。型押成形で側面には型痕が観察できる。モチーフは巴紋である。縁部は摩耗している。

SK3 (Ⅲ-6～11, 109 図)

総点数454点(個体数)を数える一括資料である。磁器碗は端反形碗(JB-1-n, JC-1-d)が多く、器高、口径ともに小型化傾向が進んだものや、外面に篆書文が施されたものが看取される。瀬戸・美濃系磁器皿(JC-2)に木型打込のもの(2-d)、陽刻あるいは陰刻が施された型皿(2-e, 2-f)などが看取される。また磁器坏には器壁が極薄いもの(JB-6-c, JC-6-d)が多く、それにはいわゆる白玉手の製品が目立つ。しかし肥前系磁器碗(JB-1)にいわゆる小広東碗(1-i)、筒形碗(1-l)、小丸碗(1-j)が比較的多い点、瀬戸・美濃系瓶(TC-10)の二合半のものに底部釉が拭き取りされたもの(10-a)と釉が浸け掛けされたもの(10-c)がほぼ同数である点、塩壺に板作成形とロクロ成形のものが混在する点など、東大編年VIb～VII期に比定されるような資料も含む。以上のような遺物群の様相からVIb～VIII期やや年代幅のある遺構一括資料と考えられる。なお本遺構からは施釉された油受け皿が多数出土しているが、その多くが完形ないしほぼ完形で出土しており、当時の灯明具の使用の仕方(あるいは廃棄の仕方)を考える上で注目される。

磁器 (1～31, 33, 51, 121) 1～5, 7, 8は碗である。1と4が瀬戸・美濃系(JC-1)、他は全て肥前系(JB-1)である。3が青磁染付、4が白磁、他はすべて染付が施される。1は端反形碗でJC-1-d。口縁部の外反は弱い。文様の具須はやや滲む。2はいわゆる小広東碗でJB-1-i。文様はいわゆる素描きで梵字が描かれる。3は半球形碗でJB-1-f。見込みの五弁花文は崩れた手描きの五弁花文である。高台内に二重角枠の渦福銘を有す。4は体部が直線的に開く碗でJC-1-f。高台もハの字に開き、豊付脇はケズリ調整される。5, 7はいわゆる広東碗でJB-1-m。絵付はともに筆描きで丁寧に施され、7は高台内に「大明年製」銘を有す。8は体部が直立する、いわゆる湯呑碗でJB-1-o。絵付は素描で、口縁部内側に雷文、外面には花文様が施される。高台内には銘を有するが、欠損しているため判然としない。「乾」の篆書体か。6, 26は蓋である。6は肥前系染付広東碗の蓋でJB-00-b。5の蓋である。摘み内に銘を有す。26は景德鎮窯系青花の蓋でJA1-00。合子の蓋か。絵付は素描である。受け部の両側がケズリ調整される。9, 28, 121は鉢である。9, 28は肥前系(JB-5)、121は景德鎮窯系(JA1-5)である。9は染付鉢でJB-5-b。口縁部は輪花状を呈す。外面にはみじん唐草、口縁内側には四方櫛、見込みには環状松竹梅文が配される。高台内には「成化年製」銘を有す。28は染付筒形鉢でJB-5。外面には山水文が丁寧に筆描きされる。底裏は無釉、口縁内側も釉が拭き取られる。121は青花丸碗形鉢である。外面と見込みに丁寧な絵付が施され、具須の発色も良い。豊付脇の釉はシャープに削られる。10～15は坏である。10は白土染付されたものでJZ-6。胴部と底部境の屈曲している部分に上下2段の面取りを施す。高台内は渦状を呈す。焼継痕がある。11は肥前系染付端反形坏でJB-6-b。器壁は薄い。口縁部内外面に圈線のみが描かれ、高台内には「大明成化年製」銘を有す。12～14は瀬戸・美濃系(JC-6)である。12は白磁丸碗形坏でJC-6-a。高台は低く、外側へ開き気味である。豊付は幅広に成形されている。口銹を有す。13, 14はいわゆる白玉手のものでJC-6-dに分類される。器壁はともに極めて薄い。13は腰が張った丸碗形を呈し、高台は豊付部分が外側へ開いている。見込みの文様には金彩も施される。高台内には角枠銘を有す。14は半球碗形を呈す。口縁部数箇所を内側へ小さく窪ませ、金彩が施される。高台内には角枠銘を有す。15は景德鎮窯系の青花でJA1-6。絵付は器面全体に施され、具

須の発色は良い。胴部と底部の境付近に虫喰いが看取される。口唇部外周がケズリ調整され、口錆が施される。高台内には二重角枠「福」字銘を有す。本遺構内に同手のものが他に1個体あることが確認されている。16、17、20～22、29～31、33は皿である。16、17、21は瀬戸・美濃系(JC-2)、33は淡路系(JP-2)、その他は肥前系(JB-2)である。20が色絵、21が白磁、33は黄釉、他は染付である。16は輪高台を有するものでJC-2-b。口縁部は緩やかに外反する。釉の中に細かい気泡が多く観察される。高台内に肥前の角福銘に類似した銘を有す。焼継痕がある。17、21は木型打込皿でJC-2-d。17は見込みに団龍文が陰刻され、その上に呉須でダミが施される。呉須の発色は悪く、黒ずむ。高台内には銘を有すが、欠損のため判読できない。焼継痕がある。21はいわゆる寿文皿で、見込みに「寿」字の陰刻がある。20はJB-2に分類される。胎土は淡灰白色土を呈す。色絵は見込みと口縁部内側に赤、緑、黒の3色で施されるが、見込み蛇ノ目釉剥ぎした部分も黒色で線描きし、緑色で塗り埋めている。上絵付された釉剥ぎ部分には重ね積みした痕跡が看取される。22、29、30はいわゆる蛇ノ目凹形高台を有するものでJB-2-i。22は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。見込みには線書きで山水文が絵付けされる。遺存部分に焼継痕跡はないが、高台内には焼継印の痕跡がある。29、30は口縁が輪花にされ、29のみ口錆を有する。29は白化粧されてから染付がなされるが、化粧掛けは高台内にまで及ぶ。30は内外面に絵付が施され、見込みの環状松竹梅文は崩れたものとなっている。高台内にはチャツ痕が看取され、「乾」の篆書体と思われる銘を有す。焼継痕があり、銘の上には焼継印「×」が看取される。31は平面形が船形を呈するものでJB-2-e。型打成形で、輪高台を有す。絵付は内外面にいわゆる素描きでなされる。高台内に「玩」の銘、見込みにも二重角枠「福」字銘を有す。焼継痕がある。33はJP-2。破片であるが、恐らく平面形は小判形を呈するものであろう。型押成形で見込みには団龍文の陰刻が看取される。器面全体が施釉され、底裏には径1mm程度のピン痕が1箇所認められる。18は肥前系染付丸碗形の蓋物でJB-13-a。体部外面に斜格子文と亀甲文が上下に配される。畳付に窯着痕が看取される。19は肥前系染付御神酒徳利でJB-11-a。蛸唐草文が描かれるが、呉須の発色は悪く黒ずむ。畳付に粗砂粒が多く付着している。23は肥前系染付香炉・火入れでJB-9-a。図のような絵付が体部3方に配される。底部には削り出しの円盤状高台と3足を有す。内面は無釉であるが、手痕が看取される。24、25は肥前系染付筒形合子の蓋と身で、24がJB-00-n、25がJB-18-bに分類される。25の底裏には墨書の痕跡があるが、判然としない。27は景德鎮窯系青花の蓮華でJA1-20。呉須はやや黒ずみ、滲む。底部はカンナ状のもので釉が削り取られる。51は肥前系染付壺・甕でJB-15。絵付は線描きとダミによって外面、口縁部内側、底部内面の3箇所施される。焼継痕がある。

陶器 (32、34～50、52～64、66～70) 32は口縁が盤口形を呈する産地不明の花生けでTZ-22。胎土は緻密で、淡灰白色を呈する。底部と内面を除き青緑釉が施釉される。口縁端部は内側に折り返し、短く立ち上がる。胴部と首部の内面境には凸部が看取されるが、両部位を貼付た際に生じたものであろう。高台は削り出し高台で、畳付外周は面取りされる。頸部下端に蕨手状の耳を2箇所有す。34～37、40、41は碗である。34、36は京都・信楽系(TD-1)、35、40、41は瀬戸・美濃系(TC-1)、37は萩系(TH-1)である。34はいわゆる小杉茶碗でTD-1-d。外面には鉄と呉須で若杉文が描かれる。高台内側の削り込みは浅く、脇は面取りされる。36は灰釉端反碗でTD-1-g。釉は比較的厚く施釉され、器面には粗い貫入が認められる。畳付外周は面取りされる。35はいわゆる腰錆碗でTC-1-uに分類される。内面および外面上半は灰釉、外面下半は鉄釉が掛け分けられる。全体的に矮小化しており、畳付も丸味を帯びている。40はかなり腰が張ったものであるが、いわゆる御室碗でTC-1-d。器高は低く、外面の呉須で描かれた山水文はかなり崩れたものになってい

る。41は灰釉碗でTC-1-c。体部は高台から腰張り気味にほぼ垂直に立ち上がる。高台は削り出し高台であるが、ケズリは雑である。37はいわゆるピラ掛け碗でTH-1-b。外面には鉄釉が斜格子状に流し掛けられ、内面と外面上半には藁灰釉が流し掛けられる。高台内は渦巻き状に削り込まれる。38、39は坏である。38は産地不明でTZ-6。胎土は非常に緻密で、にぶい橙色を呈す。平面形は隅丸方形を呈する。高台は付高台で、八角形を呈す。畳付およびその内側はシャープなケズリ調整がなされる。畳付を除き器面には朱漆を塗り、釉を流し掛けている。釉は変色しており、本来の色調は不明である。外面胴部下端にヘラガキ状のものが看取されるが、漆が入り込み判読できない。39は京都・信楽系でTD-6。内外面に灰釉が施釉され、畳付脇から底裏は無釉にされている。外面には詩句と人物が赤と黒で上絵付される。体部は高台から直立気味に立ち上がり、口縁下で僅かに括れる。畳付外周は面取りされる。42、48、50、63、64、70は鉢である。42、64、70は瀬戸・美濃系(TC-5)、48、50、63は産地不明(TZ-5)である。42、64はTC-5。42は丸碗形の鉢で内外面に鉄と呉須で交互に縦線が描かれる、いわゆる麦藁手の鉢である。口唇部は平らに成形され、口縁内側に稜を有す。高台は削り出し高台で、「ハ」の字状に開く。見込みには目跡が2箇所認められる。畳付には墨書がある。64は内外面に渦刷毛目が施される。口縁部数箇所が押さえられ、緩やかな輪花に成形される。見込みには径5mm程度の目跡が5箇所認められる。畳付の釉は拭き取られる。70は灰釉こね鉢でTC-5-1。見込みは円形に釉を5箇所拭き取り、その上に団子状トチをのせ焼成した痕跡が残る。無釉の底部全体にススが付着する。48の胎土は緻密で、灰白色を呈す。口縁部はいわゆるS字状口縁で強く外反し、1箇所を摘み注口状にしている。内面と外面上半には鉄釉に灰釉が流し掛けされる。畳付外周は面取りされる。見込みと高台脇にそれぞれ目跡が5箇所認められる。50の胎土は比較的緻密であるが、白色微砂粒を少量含む。全体的には暗灰色～暗茶褐色を呈す。ロクロ成形である。底部を除く内面と外面に鉄泥が施される。体部2箇所が外側から押圧され窪む。63の胎土は粗く、淡灰白色を呈す。底裏を除く内外面に厚めに藁灰釉が、3箇所に鉄釉が流し掛けされる。器面には大きめの貫入が看取される。見込みと底裏には目跡が8箇所認められる。底裏には墨書が看取される。43～45は皿である。43、45は瀬戸・美濃系でTC-2、44は産地不明でTZ-2に分類される。43は内外面に灰釉が施釉され、外面下半は拭き取られる。高台は碁筈底状を呈すが、その部分の釉は拭き残されている。見込みには箸と五徳などが鉄で描かれる。口唇部には錆釉が施される。45はいわゆる罌皿である。灰釉が施釉されるが、見込み中央の釉のみを残し、口縁付近まで大きく拭き取られる。44の胎土は緻密で、灰白色を呈す。口縁部は外側が強くナデ調整され、玉縁状を呈す。高台は削り出し高台で、断面形状は四角形を呈す。内面全体の1/3ほどに白土染付が施される。46、58はトビガンナが施された行平鍋でTZ-42-c。ともに内面には灰釉が施釉される。46は外面上半に錆釉を施釉し、トビガンナが施される。体部1箇所を円形に穿孔し、割竹形注口を貼付けている。58の外面は無釉で、トビガンナが施される。把手は型作りで、上面には「寿」の字の陽刻がある。底部にはススが付着している。47、49は油受け皿である。47は志戸呂系でTF-40、49は京都・信楽系でTD-40-aに分類される。47の底裏付近はケズリ調整される。受け部にスリットを1箇所有すが、欠損のため形状は不明である。底裏にはススが付着している。49は灰釉が施釉される。受け部口縁は非常に低く、Vの字に近いU字状のスリットを1箇所有す。52、55、57、59は急須である。いずれも産地は不明でTZ-16に分類される。52は白土染付されたもので、受け部付近を除く内面にも透明釉が施釉される。白化粧と透明釉は一部把手内面にまで及ぶ。注口部内側の穿孔は3個。55の胎土は非常に緻密な炆器質で、褐色を呈す。体部はロクロ成形である。注口は緩やかなS字状を呈し、その内側穿孔は7個。底部は浅く削り込まれる。備前系(TE-16)か。57の胎土

は緻密で、淡褐色を呈す。内面には指圧痕、外面の亀甲文の中には細かい布目跡、文様の周囲には指圧痕が観察されることから、型作り成形後、手で亀甲文状に器面上半を成形したのであろう。注口部と把手は別作りで貼り付けられる。注口部内側の穿孔は8個。底裏には細かい布目とススが認められる。59の胎土は非常に緻密で、淡黄褐色を呈す。無釉で、体部はロクロ成形、把手と注口部を貼り付けている。注口部と把手もロクロ成形である。注口部内側の穿孔は7個。把手付け根裏側に「道方」の刻印を1箇所所有す。ススは畳付に集中しているが、把手や注口部まで含め全体的に薄く付着している。54、56は土瓶である。54はいわゆる青土瓶でTZ-34-a、56は白土染付土瓶でTZ-34-bに分類される。54の注口部内側の穿孔は4個。底部全体にススが付着している。なお53はこの蓋でTZ-00-a。56の胎土は緻密で、灰白色を呈す。内面にも透明釉が施釉されるが、口縁部付近は無釉である。施釉の際、注口部から余分な釉を捨てたのであろう。外面は底部のみ無釉である。注口部内側の穿孔は3個。底部外周は小さく削られ、高台状を呈す。また底裏は渦状に削られている。底部内面には目跡状のものが3箇所認められる。底裏にはススが付着している。60、61は瀬戸・美濃系灰釉瓶(TC-10)である。60は二合半徳利でTC-10-c、61は一升徳利でTC-10-eに分類される。60の釉は浸け掛けされ、底部は無釉である。胴部には点刻の釘書きで「高サキ」とある。61の灰釉は黄色味を帯びる。底部釉は拭き取られる。胴部下半には、施釉前に縦方向にケズリ調整した痕跡が認められる。肩部付近に窯着痕が認められる。62、66、67は瀬戸・美濃系壺・甕(TC-15)で、62は灰釉三耳壺でTC-15、66、67は柿釉が施釉された、いわゆる赤津半胴でTC-15-aに分類される。62の底部は無釉で、ケズリ調整される。短い帯の両端を摘んだような形状の耳を頸部付近に3箇所所有す。無釉の内面には鉄錆のような物が全面に付着している。お歯黒壺として利用されたものか。66は底部脇が強くなでられ括れている。底部には二次的な穿孔が1箇所看取される。67の底部内面には団子状トチ痕が1箇所認められる。68、69は播鉢で、68が堺系でTL-29、69が肥前系でTB-29-aに分類される。68は無釉で、播目は9条1単位で施される。見込みの播目は摩滅が著しく鮮明ではないが、三角パターンか。底部外周が強くなでられている。底裏には焼台痕と粗砂粒が看取される。69は貼付高台を有し、底裏を除く全面に鉄釉が施釉される。口縁部は緩やかに外反する。播目は9条1単位で施されるが、体部から見込みまで一気にひかれる。見込みと畳付には胎土目痕が7箇所認められるが、畳付の胎土目痕は畳付外周まで及ぶ。

土器(65、71～92) 65は紐状把手付き施釉鍋でDZ-33-a。胎土は橙色を呈す。内面に透明釉、外面には鉛釉が施釉される。体部外面にトビガンナが施される。口縁部に紐状把手が1箇所遺存する。71、72、75～78は皿である。71、75、76は底裏に左回転糸切り痕があるものでDZ-2-bに分類される。71は口径が20cm近くある大振りなもので、器壁も厚い。胎土はにぶい橙色を呈す。底裏には離し糸切り痕が看取される。75、76も胎土はにぶい橙色を呈す。75は口縁部が僅かに外反し、76は内湾気味である。76の見込みは被熱し、赤色化している。72は底裏平滑のいわゆる上製かわらけで、見込みには金箔が施された「寿」字の陽刻がある。胎土はにぶい橙色を呈す。底裏にはススが付着する。DZ-2-jに分類される。77、78は透明釉が施釉されたものでDZ-2-h。ともに口縁部には僅かに灯心痕が看取される。底裏には左回転糸切り痕が認められる。73は土師質火消し壺の蓋でDZ-00-h。胎土は橙色を呈す。側面と上面の境のみケズリ調整される。内面にはススが付着している。74はほうろくでDZ-47-aに分類される。胎土は橙褐色を呈する。口縁部の立ち上がりは低く、内湾する。内面はナデ調整されるが、底部は縮れている。内外面ともにススが付着する。79～81はひょうそくである。79は土師質無釉のものでDZ-44-c、80、81は透明釉が施釉されたものでDZ-44-bに分類される。79の体部は垂直気味に立ち上がり、底部脇は強くなでられ

括れる。灯心用突起の先端付近にススが付着している。80、81の体部は丸碗形を呈す。80の灯心用突起は、79同様、突起先端から方形の切り込みが施されるタイプであるが、81は灯心用突起の中程を縦長の楕円形に穿孔するタイプである。灯心痕は80、81ともに灯心用突起の先端付近に認められる。82は土師質の花形でDZ-22。胎土は橙褐色を呈する。ロクロ成形で、口縁部から胴部外面には白土、内面と底裏には透明釉が施釉される。畳付外周は面取りされ、底裏中央は僅かに窪む。畳付付近には緑釉が部分的に観察されることから、本来は上絵付が施されたものであった可能性もある。83～85は油受け皿である。83は無釉のものでDZ-40-d。胎土はにぶい橙色を呈す。受け部にはU字状のスリットを1箇所所有す。底裏には左回転糸切り痕が看取される。84は透明釉が施釉されたものでDZ-40-b。皿部の立ち上がりは直線的で「ハ」の字状に開く。受け部立ち上がりは退化し低いものになり、浅いU字状のスリットを1箇所所有す。底裏には左回転糸切り痕が看取されるが、底裏脇にはその際の粘土がはみ出している。85は透明釉が施釉され、脚を有すものでDZ-40-a。受け部立ち上がりが短くなり、口縁の高さとほぼ同じになっている。受け部にはU字状のスリットを1箇所所有す。脚部裾は上方へ僅かに立ち上がる。底裏は無釉であり、その中央には三角錐状に削り込んだ痕跡が看取される。86、91は植木鉢である。86は土師質でDZ-21-a。胎土はにぶい橙色を呈す。口縁部内側に稜を有し、口唇部中央は僅かに窪む。底部には穿孔を1箇所所有すが、その周囲には粘土がはみ出す。底裏には左回転糸切り痕が看取される。91は黒釉が全面施釉されたものでDZ-21-c。底裏には穿孔を1箇所と3足を有す。体部外面に墨書がみられるが、欠損のため判読できない。87、88はロクロ成形無印の塩壺でDZ-51-w。ともに底裏に左回転糸切り痕が看取される。胎土は87は橙色、88はにぶい橙色を呈す。87の底部脇は強くなでられ括れる。また被熱のためか、全体に赤みを帯びる。88は口縁内側が外側より僅かに高く、受け部の痕跡が認められる。89は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-d。口縁部外面はミガキ調整、体部は回転工具状のもので施文されるが、器面が摩滅しているため文様は鮮明ではない。底裏には足が2個遺存するが、非常に小さく低い。内面中央部は被熱のためか、僅かに白色化している。90はロクロ成形の土師質鉢でDZ-5。胎土はにぶい橙色を呈す。体部と底裏の一部分は面取りされ、横断面が多角形を呈す。底裏には左回転糸切り痕が看取される。92は一辺が5.7cm、平面形が正方形の板状土製品である。胎土はにぶい橙色を呈す。型作りで、表面は丁寧にミガキ調整される。1面に白土が施された「福」字の陰刻がある。用途は不明。

人形・ミニチュア・遊戯具(93～120) SU2の亀乗り童子(102)と遺構間接合する。

93～102はミニチュアである。93～95は蓋で胎土は橙色系で、型押成形でDZ-61に分類される。いずれも裏面に指頭押圧痕がみられる。93は白色を塗ったのち施釉している。合い口(き)部分は手びねりで貼付け、歪みがある。96はミニチュアのお銚子でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(上下合わせ)である。内面には指頭押圧痕が顕著に観察できる。上部の文様は霰文で、底部を含め外面は赤色で彩色されている。脚は3個である。97、98は白色系の胎土のミニチュアの土瓶でDZ-61に分類される。いずれも型押成形(上下合わせ)で、文様は糸目と鋸歯文を連続して櫛描し、上部のみ緑釉を施している。注口部、把手、脚3足は別作りで貼付けている。内面の調整も丁寧に精緻な造作である。97は糸目文、鋸歯文、印花文を施している。底部に墨書。99はミニチュアの陶器の鍋でTZ-61に分類される。ロクロ成形で胴下部はケズリ調整されている。胴下部から底部にかけ無釉である。把手と脚3足は手捻りで貼付である。100はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。101はミニチュアの土鍋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。把手は別作りで貼付である。胴下部から底部にかけ無釉である。102はミニチュアの橋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で型押成形である。欄干の装飾は白を塗った上に緑色で

彩色し、施釉している。裏面は板で叩き調整している。103は土玉でDZ-57に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形である。104～106は基石形土製品でDZ-56に分類される。胎土は橙色系を呈し、手捻り成形である。いずれも掌握痕が観察できる。107～110・120は人形である。107は狐でDZ-60-jに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で底部は開口している。108は焼き締まった陶器の獅子でTD-60に分類される。胎土は淡い黄橙色で、ボディのみ型押成形（左右合わせ）で中空である。頭部、耳、前足部の鬘は別作りで貼付けている。体の文様は竹管文で、頭部の鬘、髭は櫛描である。口中は中空になっており、口は阿形である。目、鼻、耳は穿孔されている。後ろ臀部の近くに径5mmの穿孔。出土したものは阿形の獅子であるがおそらく阿吽の獅子で対の置物であったと思われる。手の込んだ造作のもので、置物としての人形だと思われる。109は桃持ち童子と思われるDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空である。内面には指頭押圧痕が観察できる。前身に白色と朱色が僅かに観察できる。底部に径6mmの穿孔。110は袷雛の姉様（女雛）でDZ-60-dに分類される。胎土はにぶい橙色系で、型押成形（前後合わせ）中空である。首部は別作りで貼り合わせている。111はでんでん太鼓か。DZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空で、内面には指頭押圧痕が顕著である。文様の巴部分は白色を塗り、その上に緑色で彩色し、全体を施釉している。頭頂部も白色で化粧されている。112～119は泥面子でDZ-55に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で、側面には型痕が観察できる。裏面には型ぬき時に生じたと思われる粘土のバクが縁に観察できる。112は家紋の轡で本地点内で最も小さい。113は蛇ノ目紋である。上面、縁部は摩耗している。114は宝珠か。上面は擦痕が観察できる。上面は赤色に彩色している。115は星梅鉢紋で、上下面とも摩耗している。上面には擦痕が観察できる。116は左三つ巴紋である。上面の一部は欠損摩耗している。117は三つ鱗紋である。右側縁部は内傾して△形が変形している。彫りは深く、黒色に彩色している。118は八つ菊紋である。縁部は摩耗している。119は丸に鶴紋である。本地点で最も大きいものである。120は蛙でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で中空で大きく脹らませている。浮き人形と云われ水に浮かべて遊ぶものである。腹部と背の中央と両脇、目を白色で、目の玉は黒色で彩色し全体を施釉している。

SK8（Ⅲ-11 図）

1～4は肥前系磁器（JB）で、全て染付が施される。1、2は碗である。ともに口縁内側、見込み、外面の3箇所絵付が施される。1はいわゆる広東碗でJB-1-m。高台内に角棒銘を有す。2はいわゆる小丸碗でJB-1-j。底部器壁が極めて厚い。見込みは手描きの五弁花文である。3は仏飯器でJB-8-c。呉須の発色は悪く黒ずむ。底部のえぐりは浅く、無釉である。4は鶴首形御神酒徳利でJB-11-b。畳付に白色砂粒が付着している。

5～8、12は陶器である。5、6は産地不明の碗でTZ-1。5は飴釉が施された端反形碗である。胎土は緻密で、白色を呈す。体部下半はロクロ目が顕著である。6はいわゆる軟質施釉陶器である。胎土はやや粗く、にぶい橙色を呈す。畳付以外透明釉が施され、白土と鉄で茶筌、火箸、柄杓、五徳、羽箒、環などの茶道具が描かれる。畳付外周は面取りされる。7、8は鉄釉土瓶の蓋と身であり、7がTZ-00-e、8がTZ-34-eに分類される。7の裏側には輪状の窯着痕が看取される。8は3足を有す。注口部内側の穿孔は4個。12は錆釉が施された瀬戸・美濃系播鉢でTC-29。口縁部縁帯は扁平で、やや幅広めのものになっており、口縁部内側の括れはほとんどない。播目は14条/1単位で施され、見込みは同心円とその中央に1条ひかれる。見込みと底裏には団子状トチ痕が4箇所看取される。また底裏には糸切り痕が残る。

9～11は土器である。9は透明釉が施された皿でDZ-2-h。底部には左回転糸切り痕が認めら

れる。口縁部には灯心痕が全周する。10は透明釉が施釉された油受け皿でDZ-40-b。受け部にはU字状のスリットを1箇所有す。底部には左回転糸切り痕が認められる。11はロクロ成形無印の塩壺でDZ-51-w。口縁部は短く外反し、口唇部は内傾する。底部には左回転糸切り痕が認められる。

SK10 (Ⅲ-12 図)

1、2は染付磁器碗で、1は肥前系(JB-1)、2は瀬戸・美濃系(JC-1)である。1は広東碗でJB-1-m。絵付はいわゆる素描で施され、高台の絵付は体部から一続きのものである。2は端反形碗でJC-1-d。器壁が非常に薄い。

3、4、6は陶器である。3、4は碗である。3は萩系の藁灰釉が施釉されたものでTH-1-a。口縁はやや歪み、平面形が隅丸方形に近い円形を呈す。高台内は渦状に削り込まれる。4は京都・信楽系の灰釉端反碗でTD-1-g。やや大きめの貫入が看取される。6は京都・信楽系の灰釉筒形水注でTD-27-d。外面には鉄で半菊文が描かれる。畳付外周は面取りされる。

5、7は土器である。5は透明釉が施釉された油受け皿でDZ-40-a。底部無釉で、その中央が円錐状に削り込まれる。受け部には浅いU字状スリットを1箇所有す。7は板作成形2ピースの無印の塩壺でDZ-51-ab。器面には金雲母が看取される。底部脇は押圧により弱く括れる。底裏には外側から入れられた粘土塊が僅かにはみ出す。内面には粗い布目と継ぎ目が観察される。

8~14は人形、遊戯具である。出土総数10点のうち6点は土玉であった。8は人形の福助でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)で中空である。肩の袷に赤色が観察される。底部に径4mmの穿孔。11~14は土玉でDZ-57に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で不整形である。大きさは二種類に分けられる。

SK16 (Ⅲ-12、13、109 図)

総点数153点(個体数)を数える一括資料である。肥前系磁器碗(JB-1)にはいわゆる小広東碗(1-i)や広東碗(1-m)、端反形碗(1-n)が、瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)には端反形碗(1-d)などが看取される。遺物群の様相から東大編年Ⅷa期に比定される遺構一括資料である。なお本遺構からもSK3と同様に油受け皿が多く出土し、土器(DZ)の1/3を占めるが、全て施釉されているものである。この施釉製品が多数を占める傾向は土器皿(DZ-2)でも同様であり、約9割が施釉された製品(2-h)である。

1~8、10、11は磁器である。1、3、5、6、8は碗である。1は肥前系染付のいわゆる広東碗でJB-1-m。2はその蓋でJB-00-bに分類される。絵付は線描きで施されるが、2はそれが摘みの中にまで及ぶ。1には焼継痕が看取され、高台内に矢印のような焼継印がある。3、6は景德鎮窯系青花端反形碗でJA1-1。ともに体部には焼継痕があり、高台内には焼継印が看取される。3は呉須の発色が良く、線描きとダミで山水と人物が描かれる。畳付外周の釉はシャープに削られている。6は内面に透明釉、外面は瑠璃釉と金彩が施される。口銹を有す。高台内には呉須の角椀銘を有す。5、8は瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)である。5は染付端反形碗でJC-1-d。絵付は滲み、釉の中に細かな気泡が多くみられる。高台は外側に開き気味で、畳付は肥厚してる。底裏に角椀銘を有す。8はいわゆる湯呑碗でJC-1-e。口縁部外面には呉須で雷文、体部には上絵付で文字と松葉が描かれるが、黒色化している。体部には焼継痕があり、底裏には焼継印なのか鉛ガラスで文字が2行にわたり書かれる。4は肥前系染付輪花鉢でJB-5-b。絵付は線描きで施されるが滲む。見込みには手描きの五弁花文、高台内には二重角椀渦福銘を有す。体部には焼継痕が看取される。7は肥前系染付皿でJB-2-i。蛇ノ目凹形高台の高台高の高いもので、高台内には朱書きの焼継印が看取される。被熱している。10は肥前系染付鶴首形御神酒徳利でJB-11-b。呉須の発色が悪く黒ずむ。畳付には白色砂粒が

少量付着する。11は肥前系染付油壺でJB-12。

9、12～18は陶器である。9、12は碗である。9は京都・信楽系灰釉端反形碗でTD-1-g。器面には細かい貫入がみられる。畳付外周の面取りは雑である。12は瀬戸・美濃系のいわゆる太白手の染付筒形碗でTC-1-i。胎土は灰白色を呈し、呉須は滲む。体部も高台もやや内傾気味である。13、14は瀬戸・美濃系灰釉壺・甕である。13は橋状の摘みを有する蓋でTC-00-b、14はその身でTC-15に分類される。13の裏側には右回転糸切り痕が認められる。14は橋状の耳を2箇所有す。15は青味を帯びた灰釉が施釉された行平鍋でTZ-42-a。受け部の釉は拭き取られ、底部は無釉である。体部には割竹形の短い注口と、陽刻が施された把手が1つ貼付られる。底部には3足を有し、全体的にススが付着する。16は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利でTC-10-c。釉は浸け掛けされ、底部付近は無釉である。底裏は幅が均一ではないが浅く削り込まれ、高台状にされる。胴部には点刻の釘書きで「高サキ」とある。17は鉄釉土瓶でTZ-34-e。胎土は緻密で、淡灰褐色を呈す。底部には3足を有し、ススが僅かに付着する。

18～27、39は土器である。18は香炉・火入れでDZ-9。胎土はやや粗く、橙色を呈す。ロクロ成形である。外面と口縁部内側は白化粧され、口縁部付近には緑釉が流し掛けられる。底部は輪高台状を呈す。口縁部に敲打痕が観察される。19は丸底のほうろくでDZ-47-a。胎土は橙色を呈す。口縁部は内傾する。体部と底部の境は削られ、小さな段が看取される。内面にはススが付着する。20は土師質の鉢でDZ-5。胎土は橙色を呈す。底部以外の内外面はナデ調整される。底部には左回転糸切り痕と、二次的な穿孔が2箇所看取される。植木鉢として利用されたのか。なお底部付近は被熱により赤色化している。21、39は涼炉でDZ-49。21の胎土は白色を呈し、径1～2mm大の白色小石や粗砂を多く含みやや粗い。ロクロ成形で体部は円筒形を呈す。外面と内面上半は回転ケズリ調整され、外面には斜めにその痕跡が看取される。意匠として故意に残したものか。下方に円孔を1箇所有す。底部は削り込まれ、外周に長方形の足を3箇所有す。口縁部内側に突起を1箇所有す。内側に口径より2まわりほど小さな円筒を有す二重構造となっている。内側円筒の口縁部は大きく開き、外側の円筒口縁部へ貼り付けられる。なお内側円筒の口縁付近には数個の円孔が看取され、その部分は被熱により白色化し、僅かにススも付着している。39の胎土は橙色を呈し、粗砂粒や金雲母をやや多く含む。全体的な形状はいわゆる舟竈に類似する。体部は開き気味に立ち上がり、口縁部には小さな受けが付く。欠損しているため形状は不明であるが、前面には口縁部から大きく開口するスリットを1箇所、両脇に径1cm大の円孔を各1箇所、背面に2箇所以上の円孔を有す。また胴部から舌状に突出する部分を有す。内側には大半が欠損しているが、目皿状のものが貼付られていた痕跡があり、二重構造となっている。底裏を除く外面は横方向に丁寧にミガキ調整されるが、それは舌状の突出部分の上面にまで及ぶ。底裏には断面台形を呈す足が2箇所、突出部両端に残る。スリットの両脇に角枠の刻印を2箇所有す。口縁部内側にススが付着している。22、23はともに透明釉が施釉された油受け皿で、22がDZ-40-b、23がDZ-40-aに分類される。ともに受け部は低く、U字状の浅いスリットを1箇所有す。23の脚部裏側は削り込まれるが、その平面形状は六角形を呈す。24、25は塩壺蓋である。24の内面には細かい布目があり、器面全体に金雲母が看取される。内面中央は外側より窪ませ蓋掛かり状を呈す。DZ-00-gに分類される。25の外面中央は手のひらで押圧されたような痕跡があり、わずかに窪む。DZ-00-dに分類される。26、27は塩壺である。26が板作成形2ピースの無印のものでDZ-51-ab。器面には金雲母が看取される。底裏には外側から内側へ粘土塊を挿入した痕跡があるが、その際の粘土が底部から僅かにはみ出している。内面には粗い布目と粘土の継ぎ目がみられる。27はロクロ成形無印のものでDZ-51-w。口唇部は平滑である。底部は被熱し、赤色化している。

28～38 は人形、ミニチュア、遊戯具である。28、29 は釜形土製品で DZ-5-c に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。28 は口縁が直立し、幅広の鐙をもち器高が高いものである。外面には銀彩の痕跡がみられ、見込みから胴部中程まで灰黒色の彩色または付着物が観察できる。29 は口縁部が窄まり袋状をなす茶釜タイプのもので、鐙の幅は狭く器高は低い。底部中央に径 10mm 弱のきれいな孔が穿たれている。30 はミニチュアの碗で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で内外面の調整は丁寧である。内面から外面胴部中央まで緑釉を施している。31、32 はミニチュアの鉢で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。31 は江戸遺跡のなかで比較的多く観察できるものである。32 は口縁部が外反するもので、植木鉢に類似する形態のものであるが他遺構で出土しているものにも穿孔はみられない。大きさも多種にわたる。33 はミニチュアの水注で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で、内面の指頭圧痕は顕著で底部にあたる場所は粘土を貼付け補強している。脚は 3 足。造作は粗い。34 はミニチュアの瓶で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。胴部は 3 箇所が指頭大に凹んでいる。35 は土玉で DZ-57 に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形である。36 はミニチュアの蓋で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で裏面には指頭押圧痕が観察できる。上面には緑を巡らしている。37 はミニチュアの蓋で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で合い口は手捻りで貼付けている。中央は指頭大に凹んでいる。上面のみ濃い緑釉を施す。38 は人形で台付きの馬で DZ-60-h に分類される。胎土は橙色系で型押成形（前後合わせ）である。台座の底面は大きく楕円状に凹ませている。

SU18 (Ⅲ-13～15 図)

総点数 347 点（個体数）を数える一括資料である。出土遺物の約 6 割が土器で占められ、その内 7 割以上が皿である。大半は実測図にある 2～3 寸のもので、口縁部などに灯心痕が看取されるものはほとんどない。肥前系磁器碗（JB-1）には半球形碗（1-f）、いわゆる小丸碗（1-j）やくらわんか碗（1-g）、小広東碗（1-i）、広東碗（1-m）などが、瀬戸・美濃系陶器碗（TC-1）には半筒形碗（1-l）、京都・信楽系陶器碗（TD-1）には半球形碗（1-b）などが目立つ。以上のような遺物群の様相から東大編年 VI～VII 期に比定される遺構一括資料である。なお実測されていないが、朱で「寛三癸亥」の暦が描かれた京都・信楽系色絵半球形碗（TD-1-b）の破片が出土している（第 V 章第 2 節・写真 1）。遺物群の様相を鑑み 18 世紀中葉以降、「癸亥」に該当する年号を検索すると「寛保 3」（1743）、「享和 3」（1803）、「文久 3」（1863）の 3 つが考えられる。年号の 1 文字が省略されることはよくあることであり、「寛三」は「寛保三」の「保」が省略されたものである可能性が高い。従ってこれが本遺構一括遺物の中では古い資料になるとと思われる。

1～6、15 は肥前系磁器（JB）である。1 は染付のいわゆる広東碗で JB-1-m に分類される。絵付は外面、口縁部内側、見込みの 3 箇所に施され、高台内には「太明年成」銘を有す。2～6、15 は皿である。3 は白磁、6 は薄瑠璃釉、他は染付が施される。2 は蛇ノ目凹形高台を有す、高台高の低い皿で JB-2-j に分類される。見込はへたり僅かに窪む。高台内に角椀銘を有す。3、4、15 は高台断面形がシャープな「U」字状を呈す皿で JB-2-e。3 は型打成形の輪花皿で、内面には菊花文の陽刻が 3 箇所ある。豊付には白色砂粒が付着する。4 は見込みに小机と花が生けられた壺が描かれており、当時の習慣や文化が垣間見える。底部にはピン痕が 1 箇所認められる。15 の体部は高台から横へ張り出し、ほぼ垂直に短く立ち上がる。高台内には二重角椀渦福銘を有す。5 は腰が張り、器高が低いもので JB-2-o。口縁部は緩やかな輪花にされる。見込みに環状松竹梅文、高台内には「富貴長春」銘とピン痕が 4 箇所看取される。見込みに焼継痕があり、高台内には焼継印も認められる。6 は糸切り細工の貼

付高台を有する皿で JB-2-r。見込みは白抜きにされ、その周囲は赤、白、青で上絵付が施される。

7～14、16～20、25 は陶器である。7、9～12 はいずれも京都・信楽系碗 (TD-1) である。7 の胎土はやや粗く、にぶい橙色を呈す。いわゆる天目形を呈し、口縁部付近は鉄釉が帯状に施釉され、そこに白土による絵付、体部は染付による絵付が施され、全体に灰釉が施釉される。口唇部は口錆が施される。器面にはやや大きめの貫入が看取される。高台内には「帛光山」の刻印を有す。TD-1 に分類される。9 は灰釉有段碗で TD-1-k。外面には赤、黄、緑色で上絵付が施される。高台内には反時計回りの渦状の削り込みがある。畳付外周は面取りされる。10 は半球形碗で TD-1-b。外面には上絵付が施されるが、折枝梅花文という構図がわかるのみで絵具の大半が飛散している。見込みにピン痕が1箇所認められ、それを隠すように上絵付が施される。高台内には「寶山」の刻印を有す。11、12 は筒形碗で TD-1-j。ともに畳付外周は面取りされる。11 の外面には「寿」字の篆書体と思われるものが、赤、黒、白(緑か)色で上絵付される。12 は錆絵染付と口錆が施される。高台内中央に浅い円圏が看取される。8、14 は香炉・火入れである。8 は瀬戸・美濃系のいわゆる御深井で、体部には鉄の摺絵が施される。TC-9-c に分類される。14 は京都・信楽系で TD-9。13 はこの蓋で TD-00 に分類される。ともに白土染付が施される。13 は菊花状の透かし彫りが施され、蓋掛かり部分は無釉である。14 の底裏はススが付着している。16 は産地不明の鉄釉瓶で TZ-10。胎土は緻密で、淡褐色を呈す。ロクロ成形で、体部四方が窪まされる。外面にはへら状のもので刺突文が施される。17、18 は志戸呂系鉄釉筒形蓋物である。17 は蓋で TF-00、18 が TF-13 に分類される。17 は鉤状の摘みを有す。18 の胴部には緩やかな凹凸が看取される。19 は備前系壺・甕で TE-15。胎土は橙褐色を呈し、やや粗い白色粗砂粒を少量含む。基本的にはロクロ成形であるが、底部のみ輪積成形されたような継ぎ目が観察される。口縁から外面には鉄泥が施される。底裏の鉄泥は拭き取られ、全体に溶着痕が看取される。20 は肥前系播鉢で TB-29-a。口縁部は僅かに肥厚し、外反する。口縁部1箇所を浅い注口状にしている。播目は17条1単位で、底部内面から体部まで一気にひかれる。畳付以外は鉄釉が施釉される。見込みと畳付に砂胎土目跡が6箇所認められる。25 は京都・信楽系の犬形水滴で TD-19。型作りで、左右別々に成形したものを貼り合わせており、継ぎ目が看取される。底裏以外は灰釉が施釉されるが、両目部分には鉄釉が施されたのか僅かに黒点がある。背中央と口の部分に穿孔を1箇所ずつ有す。

21～24、26 は土器である。21、22 は底裏に左回転糸切り痕がある皿で DZ-2-b。胎土はともににぶい橙色を呈す。22 の見込みと体部との境の窪みは比較的顕著である。23 は土師質の端反形鉢で DZ-5-a。胎土は橙色を呈す。ロクロ成形である。口縁下が強く撫でられ括れるが、その部分に焼成前穿孔が2個、それと相対する位置に1個ある。2個並んだ穿孔の外周が僅かに削れており、この穿孔部に何かを通して使用した痕跡の可能性もある。24、26 は七輪 (DZ-48) である。24 は風口で DZ-48-c。短辺側の側面に「△」に「二」の刻印を有す。内側および円孔部分は白色化している。26 は土師質丸形七輪で DZ-48-a。胎土は橙色を呈す。内外面ナデ調整されるが、底部内面の調整は雑である。また口縁部、胴部中央、底部下端の3箇所は帯状にミガキ調整される。底部には3足を有す。胴部の窓の形状や大きさなどから、24 の風口はこれに付属する可能性もある。

27～40 は人形・ミニチュア・遊戯具である。27 はミニチュアの磁器製の皿で JB-61 に分類される。型打成形で貼付高台で、無釉である。見込みには松葉散らしの文様が描かれている。28 はミニチュアの蓋で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で裏面には指頭押圧痕が顕著である。中央の花弁と摘みの彫りは深く、裏面の押圧も強い。上面のみ施釉で一部を緑釉で装飾している。29 はミニチュアの磁器製の碗で JB-61 に分類される。型押成形で高台脇から高台にかけ無釉である。

30～34、36～39 は人形である。30 は人形の背負い籠で DZ-60 に分類される。胎土は精製された白色系で、型押成形（左右合わせ）で無釉である。おそらく人形の草刈り童子に貼付けていたものと思われる。31 は人形の般若の面で DZ-60 に分類される。胎土は白色系で手捻り、手彫り成形である。彫りは精巧で、目、鼻は穿孔され、髪、歯は細い工具で線彫りしている。朱色の彩色が僅かに観察できる。裏面は工具痕を残し凹ませ、紐状の粘土を貼付け紐孔を作出している。32 は唐子坐像で DZ-60 に分類される。胎土は橙色で、型押成形（前後合わせ）で、中空で無釉である。丁寧な作出である。33 はミニチュアの鉢で DZ-61 に分類される。白色系で、ロクロ成形で褐色の濃い釉（柿釉に近い）が施されている。34 は釜形土製品で DZ-5-c に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。口縁がすぼまる茶釜タイプのものである。罫幅は広く底部径は大きい。35 はミニチュアで石製の型である。石は柔らかい軽石状のもので作られている。面形と同様の型抜き遊びに用いたものであろうか。モチーフは西行の後面か。36 はぶら人形で DZ-60-f に分類される。胎土は橙色系で型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。右足と下腹部に穿孔が観察できるが、下腹部の孔は性器を表現したものであろうか。37 は裸婦で DZ-60 に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形である。手足、首部は別作りで貼付けている。胸部は大きく張り出し、乳首や性器の表現もされている。背部はやや平坦であるが指頭大の凹みが観察できる。38 は陶器製の人形で TZ-60 に分類される。胎土は緻密な灰褐色で、型押成形（前後合わせ）中空で、底部は無釉である。右肩と背中に穿孔が観察できる。39 は狐で DZ-60-j に分類される。胎土は型押成形（前後合わせ）、中空で無釉である。40 は土鈴で DZ-58 に分類される。胎土は白色系で型打成形（左右合わせ）で表面調整痕が観察される。合わせる前に土玉を入れ、合わせた後上部を捻り摘み部を作り、紐孔を穿ち、胴部中央から切り込みを入れ、鈴状にしている。

SK22（Ⅲ-15、16 図）

1～3 は瀬戸・美濃系磁器（JC）で、1、2 は染付、3 は色絵が施される。1 は丸碗形坏で JC-6-a。2、3 は端反形碗で JC-1-d。2 は釉が生掛けされる。体部には焼継痕があり、高台内には朱の焼継印が看取される。3 は鉄で輪郭を描き、赤で塗り埋めている。口唇部も口錆状に赤で塗られる。4～6、8 は陶器である。4 は京都・信楽系灰釉皿で TD-2-b。見込みに 3 箇所ピン痕がある。無釉の底部には輪状の溶着痕がある。5 は瀬戸・美濃系灰釉餌入れで TC-30。環状把手を 1 箇所所有す。無釉の底部には右回転糸切り痕が看取される。6 は白土染付土瓶である。鉄砲口の注口裏側には、呉須で「道八」と京都・信楽系（TD）土瓶のような銘を有するが、胎土や絵付などの様子が TD とは異なるものであることから TZ-34-b に分類した。書かれる。注口部内側の穿孔は 3 個。無釉の底部全面にススが薄く付着する。8 は産地不明の播鉢で TZ-29。胎土は緻密で、暗灰褐色を呈す。ロクロ成形で、底部に輪状の溶着痕を有す。内面の播目は非常に細かい金櫛状の工具で施されているが、中央はナデ調整され播目はない。口唇部には楕円形に「丸い」の刻印を有す。7 は瓦質の植木鉢で DZ-21-b。ロクロ成形され、底部に穿孔を 1 箇所所有す。

9～16 は人形・ミニチュア・遊戯具である。9 は碁石形土製品で DZ-56 に分類される。胎土は橙色系で手捻り成形で、掌握痕が観察できる。10～12 は泥面子で DZ-55 に分類される。胎土は橙色で、型押成形でいずれも側面に型痕が観察できる。いずれも雲母がみられ、縁部は摩耗している。10 は「せ」組の纏である。比較的大きいものである。11 は星梅鉢である。12 は錨であろうか。13 はミニチュアの碗で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で施釉されているが底部は無釉。内面に 2 箇所白色で文様、見込み脇には付着物が観察できる。14 はミニチュアの瓶で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で施釉されている。白色で底部にも彩色を施している。15 は虚無僧の人形で DZ-60-k に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で、中

空で雲母がみられ、無釉である。朱色の彩色の痕跡が観察できる。小さな土の玉が中にはいっておりガラガラ状である。16は狸の人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。顔、背中、側面、上腕は暗赤色で彩色されている。現存する柳森神社で授与した親子狸である。

SK34（Ⅲ-16 図）

1、2は磁器である。1は景德鎮窯系青花皿でJA1-2。畳付の釉はシャープに削られる。口唇部にはいわゆる虫喰いが看取される。2は肥前系染付鉢でJB-5-b。口縁は緩やかに外反する。被熱している。3は瀬戸・美濃系褐釉水注でTC-27-a。高台内には円形に赤色化した痕跡が看取される。胴部には溶着痕が看取される。

SK36（Ⅲ-110 図）

1は瀬戸・美濃系陶器の柿釉が施釉された壺・甕でTC-15-b。外面には灰釉が流し掛けされる。底裏の釉は渦状に拭き取られる。底部内面には団子状のトチ痕が10箇所、畳付には8箇所看取される。2は瀬戸・美濃系白磁のいわゆる紅皿でJC-6-gに分類される。型作りで、外面にはタコ唐草の陽刻がある。

3、4はミニチュアである。3は白磁の碗でJC-61に分類される。口縁部は丸みを持ち、わずかに外傾する。高台は外反し段差を持ち、畳付は無釉である。虫喰いが観察できる。4は播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈し、ロクロ成形で播り目は櫛描である。胴下部から底部は無釉である。

SK37（Ⅲ-16 図）

1は京都・信楽系陶器の半球形丸碗でTD-1-b。外面の絵付は錆絵染付によるものである。畳付外周は面取りされる。

2は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。罫幅は狭く器高の低いタイプで、口縁部はわずかに内傾している。外面は赤色に彩色されており銀彩されていた痕跡がわずかに観察できる。

SU38（Ⅲ-17 図）

1、2は肥前系磁器（JB）であり、染付が施される。1はいわゆる広東碗でJB-1-m。口縁部が緩やかに外反する。絵付はいわゆる素描で、外面、口縁部内側、見込みの3箇所に施される。高台内には「太明年製」銘を有す。2は見込み蛇ノ目釉剥皿でJB-2-m。見込みにはコンニャク印判五弁花文が看取される。蛇ノ目釉剥ぎ部分には白土が施されるが、その部分に輪状のトチ痕が看取される。畳付には白色砂粒が付着する。3は底部に右回転糸切り痕がある土器皿でDZ-2-a。胎土は橙褐色を呈す。口径が20cm近くある大振りなものである。

4～11は人形・ミニチュア・遊戯具である。4、5は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。4は口縁が窄まる茶釜タイプで、罫幅はやや狭く器高は低い。5は罫幅が出土した釜形土製品のなかでも最も狭い。6はミニチュアの銚子でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。注口部は手捻りで貼付けている。縁部に濃い緑釉で斑点状に装飾し全体を施釉している。把手が付いていたとおもわれる。7はぶら人形でDZ-60-fに分類される。白色で彩色した痕跡が観察できる。8は朝鮮通信使の人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で雲母がみられ、中実である。9は亀の人形でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（上下合わせ）で、中実で無釉である。上面特に甲羅の表現は精緻である。10、11は泥面子でDZ-55に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で、側面に型の痕跡が観察できる。いずれも表裏縁部は摩耗している。10は獅子、11は九曜に右三つ巴紋である。

SK39 (Ⅲ-17~19 図)

1~11 は肥前系磁器 (JB) である。1、6 は染付鉢で JB-5-b。ともに体部は半球碗形を呈し、高台径は口径に比して小さい。また外面、口縁部内側、見込みの 3 箇所に見付けが施される。6 は高台内に「富貴長春」銘を有す。体部に焼継痕が看取される。2、4、5、9 は碗である。2 は染付端反碗で JB-1-n。3 はその蓋であり、JB-00-c に分類される。ともに薄作りである。2 の高台は「ハ」の字に開き気味である。4 は染付半球形碗で JB-1-f。呉須の発色は良好で、外面には馬、見込みには山水文が描かれる。体部には焼継痕、高台内には焼継印の「二」が看取される。5 は高台断面がシャープな「U」字状を呈すもので JB-1-e。いわゆる金欄手で、染付に、赤、緑、黒、金で上絵付が施される。9 はいわゆる小丸碗で JB-1-j。赤と黒で上絵付が施される。7、8 は染付皿で、7 は JB-2-g、8 は JB-2-o に分類される。7 はいわゆるくらわんか手で、器壁は厚く、呉須も滲む。見込みにコンニャク印判五弁花文、高台内には崩れた角椀渦福を有す。畳付には粗砂粒が付着する。8 は口縁が緩やかな輪花状を呈す皿で、腰が強く張り、口縁部は僅かに内傾する。高台内には「富貴長春」銘とハリ支えが 4 箇所ある。体部には焼継痕が看取される。10 は染付仏飯器で JB-8-c。底裏はごく浅く削り込まれるが雑である。11 は青磁花生で JB-22。胴部と頸部境に鳥が羽を広げたような形状の耳を 2 個有す。畳付には白色砂粒が付着する。

12~14、17、18 は陶器である。12 は京都・信楽系灰釉端反碗で TD-1-g。器壁はやや厚く、器面には粗い貫入が看取される。13、14 は瀬戸・美濃系の錆釉が施された蓋物で、13 は TC-00-h、14 は TC-13 に分類される。13 は釘状の摘みを 1 個有す。受け部に輪状の溶着痕が看取される。14 の内面と底部は無釉である。また口唇部から口縁内側の釉は拭き取られるが、雑である。削り出しの輪高台を有す。17、18 は瀬戸・美濃系瓶 (TC-10) である。ともに灰釉が施される。17 は二合半徳利で TC-10-c。口唇部に溶着痕が看取される。胴部には点刻の釘書きで「口」に「大」とある。18 は五合徳利で TC-10-d。灰釉は黄色味を帯びる。胴部には点刻の釘書きで「高サキ」とある。なお胴部 2 箇所には溶着痕があったようであるが、その部分を意図的に削り取っている。

15、16、19~22 は土器である。15 は透明釉が施された脚付油受け皿で DZ-40-a。受け部口縁が皿部分のそれより低い。受け部には U 字状スリットを 1 箇所有す。底裏に脚部中央を削り込んだ痕跡が残る。16 は内外面透明釉が施された行平鍋で DZ-42。口縁部に緑釉が流し掛けられる。胎土は橙色を呈す。口縁部 1 箇所を摘み、注口状にしている。短筒状の把手を 1 つ有し、その上面が 1 箇所小さく穿孔される。底部内面中央に「○」内に「仕入本」、「◇」に「大」とある。19 は土師質植木鉢で DZ-21-a。口縁部は僅かに外反する。底部中央に 1 箇所穿孔を有す。底裏には左回転糸切り痕が看取される。20、21 はロクロ成形無印の塩壺で DZ-51-w。胎土はともに橙色を呈し、底裏には左回転糸切り痕が看取される。20 の口縁部は短い錨状を呈し、底部は小さく括れる。21 の体部は底部から開き気味に直線的に立ち上がる。口唇部はほぼ平坦で、内側に小さな受けを有す。22 は輪積成形の硬質瓦質筒形製品である。口縁部と外面はミガキ調整、内面はナデ調整される。胴部 1 箇所に円孔ないし U 字状のスリットを有す。内面にはススが付着するが、胴部中央付近は帯状にススが付着していない箇所が観察される。使用法によってススの付着に違いが生じた可能性もある。

23 はミニチュアで DZ-61 に分類される。カボチャ形をしているもので片面のみの出土である。胎土は橙色系で、型押成形で、内面には指頭圧痕が観察できる。

SK41 (Ⅲ-19 図)

1 は釜形土製品で DZ-5-c に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。口縁部が窄まる茶釜タイプで、錨幅は狭い。

SK43 (Ⅲ-19 図)

1は狐の首人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空で無釉である。雲母が顕著に観察できる。底部は棒を差し込む為の孔が穿たれている。

SK51 (Ⅲ-19 図)

1、2は人形・ミニチュアである。1はミニチュアの祠でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、階段部分は型押成形で上部建物は粘土塊を削り抜き内部を作り出している。屋根はないが別作りで貼付けである。底部はドーム形に凹ませている、指頭圧痕が観察できる。僅かに朱色が観察される。2は祢人形でDZ-60-eに分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)で中空である。赤色が着物に観察される。祢雛といわれている。

SK59 (Ⅲ-19 図)

1は遊戯具の鉛面子である。鋳型成形、型に溶けた鉛を流し込み成形、モチーフ不明である。

SK60 (Ⅲ-19 図)

1、2は肥前系磁器(JB)である。1は染付仏飯器でJB-8-c。釉は生掛けされ、底裏には粗砂粒が付着する。2は白磁香炉・火入れでJB-9。底部はベタ底で、無釉である。輪状のトチ痕が看取される。底部外周に獣足を3個有し、その中央には二次穿孔が1箇所認められる。

3~5は陶器である。3は灰釉土瓶でTZ-34-g。底部は浅く削られ、ごく低い高台状に調整される。注口内側の穿孔は6個。4は三島手のいわゆる湯呑形碗でTZ-1。胎土は緻密で、淡灰褐色を呈す。削り出し輪高台を有す。5は瀬戸・美濃系の鉢でTC-5。型作りで、平面形は隅切りの方形を呈し、輪高台が貼付けられる。いわゆる再興織部の鉢で、体部外面には鉄絵が施されている。畳付全体にスス状のものが付着し、高台付近の器面が黒ずんでいることから灯明皿に転用された可能性もある。6はロクロ成形無印の塩壺でDZ-51-w。口縁部は外反し、短い齔状を呈す。外面の摩滅が著しい。

SU63 (Ⅲ-19~23 図)

総点数267点(個体数)を数える一括資料である。磁器に瀬戸・美濃系(JC)の製品は認められず、また土器(DZ)に施釉された製品がほとんどみられない。肥前系磁器碗(JB-1)には高台断面U字状の碗(1-e)、半球形碗(1-f)、いわゆるくらわんか碗(1-g)、小丸碗(1-j)、筒形碗(1-l)、小広東碗(1-i)が看取されるが、中心は1-e、1-f、1-gである。陶器碗は京都・信楽系(TD-1)と瀬戸・美濃系(TC-1)を中心に構成され、ともに器種の種類が比較的豊富である。TD-1の割合が高く、半球形碗(1-f)が6割近くを占め、他に小杉茶碗(1-d)、平碗(1-h)、筒形碗(1-j)などが看取される。TC-1には銹釉が斑状に施釉された碗(1-q)、刷毛目碗(1-s)、腰鏝碗(1-u)、天目形碗(1-a)などがある。瓶はほぼ瀬戸・美濃系(TC-10)で、二合半で底部釉拭き取りのもの(10-c)が6割強、五合(10-d)が2割強である。いずれも頸部が長く、釘書きは線刻されたものが大半である。以上のような陶磁器・土器の様相から東大編年IVb~VII期というやや年代幅のある遺構一括資料と考えられる。

磁器(1~24) 全て肥前系磁器(JB)である。1~6は染付碗である。1、3は半球形碗でJB-1-f。1は内外面ともに二重網目文、見込みには菊花文が施される。3は高台内に銘を有す。「太明成化年製」銘か。2はいわゆる小広東碗でJB-1-i。見込みに昆虫文が施される。4はいわゆるくらわんか手の丸形碗でJB-1-g。器壁は厚い。外面には二重網目文が施される。畳付に白色砂粒が付着する。5は筒形碗でJB-1-l。見込みにコンニャク印判五弁花文を有す。6はいわゆる小丸碗でJB-1-j。口縁部はやや内傾する。7~13は皿である。7は青磁染付の蛇ノ目凹形高台を有す皿でJB-2-j。外面は青磁、内面には染付が施される。高台内中央には染付の二重角枠銘を有す。8、10、11は高台断

面がシャープな「U」字状を呈すもので JB-2-e。8 が青磁染付、10、11 は染付が施される。8 は外面に青磁釉、内面は染付が施される。内面の雲形部分には吹墨技法が用いられる。口縁部はごく小さく外反する。高台内に「富貴長春」銘を有す。10 は見込みに手描きの五弁花文、高台内には二重角椀渦福文を有す。口銹が施される。11 の口縁部は緩やかな輪花状を呈す。見込みは手描きの五弁花文、高台内には二重角椀渦福文を有す。9 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿で JB-2-m。蛇ノ目釉剥ぎ部分にはハマの痕跡が残る。見込みにはコンニャク印判五弁花文と梅花繋ぎ文が施される。器壁は厚く、呉須は滲み黒ずむ。12 は高台断面三角形を呈す皿で JB-2-c。見込みの絵付は、線描き、ダミ、墨弾きの技法が用いられる。高台は低く、径は口径に比して大きい。13 は白磁の隅切り方形型皿で JB-2-r。糸切り細工貼付高台で、平面形は方形を呈す。器面には細かな布目跡が看取される。14～16、18 は坏である。14 は端反形坏で JB-6-b。いわゆる金欄手で、内外面に呉須、赤、金で絵付けが施される。15、18 は丸碗形坏で JB-6-a。15 は染付、18 は上絵付（赤）が施される。16 は染付坏で JB-6。体部は直線的で、「ハ」の字に開く。高台も「ハ」の字に開き、高台高は低い。絵付は丁寧で、見込みには手描きの五弁花文が施される。17、22、23 は蓋物である。17 は色絵、他は染付が施される。17、23 は丸碗形で JB-13-a、22 は筒形で JB-13-b に分類される。17 はいわゆる金欄手で、呉須、赤、金で絵付が施される。口縁部内側の釉は拭き取られる。23 も 17 と同じく口縁部内側の釉は拭き取られる。19 は輪高台を有する白磁猪口で JB-7-b。口銹が施される。20 は白磁壺・甕で JB-15。内面の釉は拭き取られる。21 は青磁花生で JB-22。頸部と体部境に獣面の外耳を 2 個有す。高台は錆釉が施され、畳付は拭き取られる。底部欠損部分の割れ口は非常に綺麗で、ほぼ円形に欠損していることから、意図的に穿孔したと推定される。24 は染付仏飯器で JB-8-c。釉は生掛けされる。

陶器（25～47） 25～34 は碗である。25～28、30 は瀬戸・美濃系（TC-1）、29、32～34 は京都・信楽系（TD-1）、31 は産地不明（TZ-1）である。25 は漆黒釉が施釉された天目形碗で TC-1-a。かなり矮小化し、器高も低い。26、28 は TC-1。26 の外面上半に糸目が看取される。内面は鉄釉、外面上半は鉄釉、下半は灰釉に鉄釉が施釉される。畳付は無釉であるが、一部胎土目状のものが付着する。見込みを除く内面 1/2 ほどに赤褐色の付着物が観察される。28 は鉄釉筒形碗である。口唇部には溶着痕が看取され、釉の剥落が目立つ。27 はいわゆる腰錆碗で TC-1-u。畳付に溶着痕がある。30 は刷毛目碗で TC-1-s。内外面に白土の打刷毛目が施される。29 は灰釉半筒形碗で TD-1-i。外面には鉄絵が看取されるが、欠損のため意匠は不明である。見込みにはピン痕が 3 箇所、高台脇にはケズリ調整時のカンナ痕が看取される。高台内には径 5mm 程のごく浅い円圈状の削り込みがある。32、33 は色絵半球形碗で TD-1-b。32 は外面に赤、青、金で菊花を、緑で葉を描いている。畳付外周は面取りされる。33 は外面に赤で花を、緑で葉、金で葉脈を描いている。緑は大半が剥落して、僅かに文様の縁に残る程度である。34 はいわゆる小杉茶碗で TD-1-d。比較的大振り、外面の若杉文も鉄と呉須で丁寧に描かれる。畳付外周は面取りされる。31 は半球形碗に近いが、やや腰張り気味である。口唇部は僅かに内傾する。胎土は緻密で、淡灰色を呈す。高台部を除き、いわゆる藁灰釉状のものが厚めに施釉される。35、37 は瀬戸・美濃系皿（TC-2）であり、35 は灰釉皿で TC-2、37 は柿釉皿で TC-2-o に分類される。35 の器壁は厚く、底部は碁筈底状に削り込まれる。37 は内外面ともに輪状の溶着痕が看取され、口縁部に灯心痕がある。36 は京都・信楽系灰釉筒形合子で TD-18-b。底裏と受け部は無釉である。38 は瀬戸・美濃系油受け皿で TC-40-c。底部を除き錆釉が施釉される。受け部には四角形のスリットを 1 箇所有す。底部には輪状の溶着痕と小さな陶片が付着している。39、40 は坏である。39 は瀬戸・美濃系灰釉丸碗形坏で TC-6、40 は京都・信楽系色絵半球形坏で TD-6 に分類される。40 の色絵には赤と緑が使われている。

41、42は京都・信楽系水滴でTD-19。41は高台部を除き灰釉が施釉されるが、半月状の蓋部分には鉄で半菊文が描かれる。畳付外周は面取りされる。42は型作りの人形の水滴である。底裏を除き灰釉が施釉されるが、髪、眉、眼、袖の一部は鉄で表現されている。右手にもつ瓢箪形徳利の口が注口となっており、背面には空気抜き用の穿孔を1箇所有す。43は志戸呂系鉄釉蓋物でTF-13。内面と高台付近は無釉である。高台は削り出し高台で、「ハ」の字状に開く。44は瀬戸・美濃系灰釉こね鉢でTC-5-1。口縁部断面形は方形を呈すが、内側が外側より僅かに高い。見込みにはトチ痕が3箇所認められる。45、46は瀬戸・美濃系灰釉瓶(TC-10)である。45は五合徳利でTC-10-d。底部釉は拭き取られる。胴部には線刻の釘書きで「口」に「松」とある。46は二合半徳利でTC-10-a。口縁部は折り返され頸部に密着する。底部釉は外周のみ拭き取られる。体部には線刻の釘書きで「門」とある。47は瀬戸・美濃系鉄釉壺・甕でTC-15-a。いわゆる赤津半胴である。口唇部には団子状トチ痕が1箇所認められる。底部1箇所が二次穿孔される。

土器(48~60) 48、49は土師質無釉のひょうそくでDZ-44-c。底裏にはともに左回転糸切り痕が残る。48の体部は「ハ」の字状に開いて立ち上がり、底部脇はやや括れる。灯心用突起部には灯心痕が看取される。49の体部は丸碗形を呈す。内面は二次的に放射状の線刻がなされ、灯心用突起部下の底部が穿孔され貫通している。50~53は底裏に左回転糸切り痕が認められる皿でDZ-2-b。胎土は50~52はにぶい橙色を、53は橙色を呈す。50、51は底部外面と体部との境に小さな段を有す。また50の見込みと体部との境は浅い溝状を呈す。見込みは僅かに凹凸が看取される。52の口縁部には灯心痕が看取される。54、55は油受け皿である。54は透明釉が施釉されたものでDZ-40-b、55は無釉でDZ-40-dに分類される。ともに底裏には左回転糸切り痕が残る。55の受け部には灯心痕が1箇所看取される。56、59は蓋である。56は土師質火消し壺の蓋でDZ-00-h。内面にはススが付着する。59は塩壺蓋でDZ-00-c。内面に細かい布目が看取される。また二次的に放射状に線彫りされている。57は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。内耳のないタイプである。底部は内外面ともにススが付着する。60は土師質の鉢でDZ-5-a。口縁部は僅かに外反する。底裏には左回転糸切り痕が残る。

人形・ミニチュア・遊戯具(62~90) 人形では西行法師が4点と多くまた、釜形土製品が2点、柚でんぼや塔や祠等が出土しており、他の遺構のものに比べ古い様相を示すものが多い。陶磁器は東大編年IVb~VII期に比定されるが、人形、ミニチュアも陶磁器と同様である。62、63はミニチュアでDZ-61に分類される。62は皿で胎土は白色系で、ロクロ成形である。透明釉を施し内面に緑釉で装飾している。63は碗で、胎土は橙色系でロクロ成形である。内外面鉄釉を施している。64はミニチュアの磁器の碗でJB-61に分類される。胎土は灰褐色を呈しロクロ成形である。高台脇から高台にかけ無釉である。貫入が観察できる。65はミニチュアの磁器の皿でJB-61に分類される。胎土は灰白色を呈し、型打成形である。体部下半から高台にかけ無釉。66~68はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土はいずれも橙色系である。型押成形で、裏面には指頭押圧痕が観察できる。66は上面には雲母がみられ、松葉文様を付けている。67は上面に三柘紋を施している。歌舞伎役者の家紋であろうか。因みに三柘紋は初代市川團十郎の定紋である。68は上面に文様を施している、一つは三柘で、もう一つは円の中に「玉」を施している。裏面は墨で何か描いている。69、70は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。69は口縁部が窄まる茶釜型タイプで、肩部から口縁にかけ緩やかに立ち上がる。70は羽釜タイプで、口縁部は内傾している。71、72はミニチュアの柚でんぼの蓋と身でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形でいずれも指頭押圧痕がみられ、総釉である。71の柚でんぼの蓋は、葉は緑釉で彩色

している。72の身は型押成形（上下合わせ）で、内面にはナデ調整が観察できる。73はミニチュア
の天目台でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈し、ロクロ成形で鉄釉を施している。74はミ
ニチュアの播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈し、ロクロ成形で無釉である。内外面す
べて赤で彩色している。75、76は面形でDZ-62に分類される。75は粘土を抜くと車輪形となり、
76は堂内天神（狛犬付き）となる。77～79は石製の基石か。77は灰色で加工されている。78、79
はにぶい橙色系で自然石と思われる。78はハート形である。79は縁部を打ち欠いており、欠いた周
辺には無数の傷が観察できる。80～84は西行法師の人形でDZ-60-aに分類される。胎土は橙色系
で、型押成形（前後合わせ）でいずれも底部は大きく開口している。また、雲母が観察できる。80、
83、84の頭部は別作りで差し込み、貼付けている。また、内面はナデ調整している。81の西行は
頭部まで同一の型で起こしている。82の後頭部に開けられた孔（径18mm）はおそらく編笠を差し
込むためのものと思われる。丁寧な作出である。83は高さが240mmと大きいもので頭部、手、網
笠は別作りで貼付けている。図の向かって右の袖口には深さ26mmの凹みが穿たれている、手を差
し込む為のものであろうか。内外面にナデ調整が多い。本遺構で出土した西行法師の人形は4点と
も姿態が異なる。85は虚無僧でDZ-60-kに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）
で中実である。非常に小さい人形であるが作出は細部まで精緻である。86は太鼓持ち唐子の人形で
DZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空で細部には雲母が顕著に観察
できる。振り上げた手は穿孔されておりおそらく太鼓の撥を差し込んだものと思われる。彫りも深く
精緻な作出である。87は獅子持ち童子でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合
わせ）で中実、雲母が観察できる。獅子には赤色の彩色が観察される。88は袴人形の男雛であらう
か。DZ-60-eに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中実、雲母が観察できる。
底部から首部まで穿孔されている。18世紀中葉以降出土する中空の袴雛とは趣が異なるものであ
る。89、90はミニチュアの祠と塔でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。雲
母が観察できる。89の祠は基壇、建物と屋根2箇のパーツから成る。底部はアーチ状に凹んでおり
指頭圧痕、ヘラ状工具によるナデ調整が観察できる。屋根の裏面中央はヘラ状工具で回しながら粘土
を抉り取り、円錐状になっている。90の三重塔は4箇のパーツからなる。屋根の中央には九輪を挿
入する為と思われる孔が穿たれている。底部は中央を丸く残し指頭で押圧している。

SK66（Ⅲ-23、24 図）

1～17は磁器である。1～8、14は碗である。2、8が肥前系（JB-1）、他は全て瀬戸・美濃系（JC-
1）である。1、3、5は丸形碗でJC-1-a。1は色絵、3、5は染付が施される。1の色絵は、赤、
青、緑、黄、黒色で施され、口唇部は赤色で口銹状にされる。3は釉の中に細かな気泡が目立つ。5
の外面には算木文が描かれる。口銹が施され、高台内には角椀銘を有す。4、7、14は染付端反形碗
でJC-1-d。4は釉の中に細泡が多く看取される。7の高台はやや幅広く、畳付外側より内側の方が
若干低い。14は蛇ノ目高台で、高台内に角椀銘を有す。6はいわゆる飯碗でJC-1-f。体部は直線的
に「ハ」の字に開く。また高台も外側へ「ハ」の字に開き気味である。染付は線描きとダミで、外面
と口縁部に施される。体部には焼継痕が看取され、高台内には焼継印がある。2は染付丸形碗でJB-
1-e。高台高が低い。外面と内面ワンポイントに線描きとダミで鶴が描かれる。8はいわゆる広東碗
でJB-1-m。色絵で、見込みと体部外面に赤、緑、金の絵付が施される。9、10、12は染付皿であ
る。9、12は肥前系（JB-2）、10は瀬戸・美濃系（JC-2）である。9はJB-2-e。腰張り気味で、器
高が低い。口銹が施され、見込みに角椀銘を有す。12は蛇ノ目凹形高台輪花皿でJB-2-i。無釉の蛇
ノ目部分には「安」という墨書が看取される。10はいわゆる木型打込皿でJC-2-d。見込みは陰刻

に呉須のダミが施され、陰刻が鮮明である。11は瀬戸・美濃系染付鉢でJC-5。蛇ノ目凹形高台を有し、無釉の蛇ノ目部分にはケズリ調整時のカンナ痕が看取される。焼継には鉛ガラスに青色を混ぜたものを使用している。また高台内中央にある焼継印も鉛ガラスに緑色を混ぜたものである。13は瀬戸・美濃系染付端反形坏でJC-6-b。染付はコバルト顔料を使用し、鮮やかな藍色を呈す。高台は蛇ノ目高台状で、底裏は無釉である。高台脇にはカンナ痕が看取される。15は瀬戸・美濃系仏飯器でJC-8。外面は瑠璃釉、内面は透明釉が施釉される。16は肥前系染付蓋物の蓋でJB-00-f。絵付はいわゆる素描で、竜と雲が描かれる。受け部には白土が施される。器面には焼継痕、裏側には朱書が看取される。17はヨーロッパ(JA8)のいわゆるプリントウェアのカップ&ソーサのカップである。コバルト顔料による銅板プリントで、外面には山をバックに乗馬する人々と草を食む山羊(羊?)と家が、口縁内側には花文様が看取される。この文様はLittle Kidと呼ばれるオランダ・マーストリヒトのペトゥルス・レグウート窯の製品パターンに酷似する。窯印が確認出来ないため断定はできないが、この窯の製品であるとすればこのパターンは1860年頃に使用されたものである。

18~26は陶器である。18は瀬戸・美濃系掛分端反形碗でTC-1-ae。口縁部は瑠璃釉、体部下半は灰釉が施釉される。なお外面には鉄絵も描かれているようだが、欠損のため意匠は不明である。19、22、24は皿である。19は備前系型皿でTE-2。口縁から内面に鉄泥が施される。口縁は細かい輪花にされ、見込みには陽刻の笹文と斜格子文が看取される。22は瀬戸・美濃系刷毛目皿でTC-2。器面には渦状刷毛目が看取されるが、高台内は刷毛目が認められない。畳付は無釉である。24は京都・信楽系灰釉丸皿でTD-2-b。口縁部外面には灯心痕が全周している。20、21は土瓶である。20は白土染付されたものでTZ-34-b、21は鉄釉が施釉されたものでTZ-34-eに分類される。20の注口部内側の穿孔は3個。21の肩部付近にはうのふ釉が流し掛けされる。また底部外面や内面まで錆釉が施釉される。底裏には輪状の溶着痕が看取される。23は急須でTZ-16。いわゆるボウフラであろう。胎土は非常に緻密で、黄白色土を呈す。注口部内側の穿孔は7個。外面全体にススが付着するが、とりわけ底裏と把手裏側は顕著である。25、26は京都・信楽系灰釉油受け皿で、25はTD-40-a、26はTD-40-bに分類される。ともに受け部の口唇の釉は拭き取られる。受け部には浅いU字状スリットを1箇所有す。25の底裏には輪状のトチン痕が看取される。26の受け部1箇所に灯心痕が認められる。

27~31は土器である。27は透明釉が施釉されたひょうそくでDZ-44-b。灯心用突起部に歪なV字状のスリットを1箇所有す。底裏には上方まで貫通していない穿孔が1箇所ある。灯心用突起部には灯心痕が看取される。28は丸底ほうろくでDZ-47-a。内耳は無く、口縁部立ち上がりも低いものである。口縁外周にススが全周する。29は土師質の筒形鉢でDZ-5。内外面に鉛釉が施釉される。ベタ底の底部外周はケズリ調整され、手痕が看取される。30は土師質鍋でDZ-33。内外面に鉛釉が施釉され、胴部外面にはトビガンナが施される。口縁部にはヒダ状の把手が1箇所残る。31は土師質丸火鉢でDZ-31-a。口縁部が内側へ大きく張り出す。底部脇はやや強くケズリ調整される。底裏にはかなり矮小化した断面円形の足が2個残る。

32は遊戯具で、坂田金時をモチーフとした芥子面でDZ-55に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で、裏面はややふくらんでおり指頭押圧痕が観察される。

SK74 (Ⅲ-24 図)

1は肥前系染付筒形碗でJB-1-l。外面と口縁部内側には輪宝文が筆描される。2は硬質瓦質角火鉢でDZ-31-g。口縁部はミガキ調整され、体部は回転工具状のもので施文される。底部には足が2個遺存する。3は万古系植木鉢でTI-21。口縁部と外面には鉄泥、口縁部には緑釉が施される。外面

には白土象嵌が施される。無釉の底裏には3足と、二次的な穿孔が1箇所認められる。また「萬古」の刻印が看取される。

4、5は人形である。4は犬(羽衣狎)でDZ-60-iに分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)で中空である。頭頂部中央と臀部、尾は黒色に彩色している。振ると音がでる構造になっている。5は大黒様でDZ-60-cに分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)で中空である。顔、手、袋には白色を彩色し顔以外は緑色を重ね塗りし、大黒頭巾、目、眉は焦茶色、口は赤で描き施釉している。

SK86・SK87・SK88(Ⅲ-25図)

1~3、7は肥前系磁器(JB)である。1が色絵、他は全て染付が施される。1、2は碗(JB-1)である。1はいわゆる柿右衛門様式の色絵碗でJB-1-c。大振りの碗で、高台断面形は三角形を呈す。濁手生地に輪郭線を黒色で、その中を青、赤、黄で塗り埋めている。2は高台径が大きく、器高が高い碗でJB-1-d。外面の雨降り文は型紙摺によるものである。上手のものである。3は高台断面形が三角形を呈する皿でJB-2-c。口縁部は小さく外反するが、口唇部は平坦で、内側が外側より若干低くなっている。絵付は呉須で輪郭線を描き、その中を呉須の濃淡で丁寧に塗り埋めている。呉須の発色も良好な上手のものである。高台内には「大明成化年製」銘とハリ支えが5箇所ある。7は香炉・火入れでJB-9-c。径の大きい輪高台を有し、暈付は無釉である。胴部の4箇所を縦にくぼめ、ごく緩やかな輪花状を呈す。

4~6、8、9は陶器である。4、5は肥前系(TB)、6、8、9は瀬戸・美濃系(TC)である。4はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。暈付には目跡が3箇所看取される。5は青緑釉輪剥皿でTB-2-a。見込みの蛇ノ目剥ぎ部分はシャープに削られ、くぼむ。また釉剥ぎ部分に目跡が2箇所看取される。6は灰釉仏飯器でTC-8。8は錆釉播鉢でTC-29。縁帯はやや丸味を帯び、注口部の張り出しは小さい。口縁部内側に稜を有す。播目は12条1単位で、見込みは半円を描いた後、放射状に2単位入れられるが、全体的に摩滅している。底裏には右回転系切り痕と団子状トチ痕が3箇所看取される。9は灰釉片口鉢でTC-23-b。外面には緑釉が流し掛けされる。底部付近のケズリはやや雑である。底部内面には団子状トチ痕が3箇所看取される。

10~12は土器である。10、11は皿で、10はDZ-2-b、11はDZ-2-iに分類される。10の胎土は橙色を呈す。見込みの凹凸がやや目立つ。底裏はひどく摩滅しているが、左回転系切り痕が残る。11は焼成前穿孔が底部に2箇所ある。胎土は橙色を呈す。底裏孔付近には穿孔時についたと考えられる溝状の工具痕が看取される。見込みは被熱のため赤色化している。12は塩壺蓋でDZ-00-c。胎土はにぶい橙色を呈す。外面1箇所が被熱し、赤色化している。

13は獅子の面でDZ-60に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形で表裏とも施釉している。胎土も釉の色調も医学部附属病院中央診療棟地点のF34-11から出土した施釉された猿等の人形に類似している。

SK96(Ⅲ-25図)

1はミニチュアの土鍋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。

SK97(Ⅲ-25図)

1は京都・信楽系鉄釉香炉・火入れでTD-9-a。上絵付が施されるが、鉄の輪郭線のみが遺存する。体部は型打成形により方形にされる。底部外周に足が4個削り出される。

SK98(Ⅲ-26図)

1、2とも陶器である。1は堺系播鉢でTL-29。底部には焼台痕が残る。播目は9条1単位で、見

込みの播目は三角パターンである。口縁部注口は両側を指で押さえている。2は瀬戸・美濃系灰釉壺・甕でTC-15-c。器面には緑釉が流し掛けられる。底部内面には団子状トチ痕が4箇所看取される。

3はミニチュアの灯籠でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形で無釉である。

SK99 (Ⅲ-26 図)

1、2は肥前系磁器(JB)であり、ともに染付が施されるが、呉須は黒ずむ。1は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿でJB-2-l。蛇ノ目釉剥ぎ部分には輪状の溶着痕が看取される。畳付全体に粗砂粒が付着している。2は仏飯器でJB-8-c。器壁は厚く、呉須は滲む。碗形の見込みにはコンニャク印判五弁花文がある。

3～5は陶器である。3は京都・信楽系半球形坏でTD-6。畳付外周は面取りされる。外面には赤と緑で上絵付が施される。また見込みにも目跡を隠すような上絵付の痕跡が看取される。4は志戸呂系皿でTF-2。外面のケズリが顕著である。口縁部には部分的に灯心痕が看取される。5は柿釉が施された把手付鍋でTZ-33-a。口縁部に紐状把手を2個有す。底部には三角錐状の足を3個有す。無釉の底部全体にススが付着する。

6～8は土器である。6は土師質火消し壺の蓋でDZ-00-h。外側面から内面は丁寧にナデ調整されるが、上面はチヂレ目が看取される。なお部分的に板目状の圧痕も認められる。7、8はともにロクロ成形の塩壺で、底裏には左回転糸切り痕が看取される。7は楕円形の椀に「御壺塩」の刻印を有するものでDZ-51-r。口唇部はほぼ平坦であるが、内側へやや突出している。内面のロクロ目は顕著であり、外面のナデも雑である。8は無印のものでDZ-51-w。口唇部は平坦であるが、外側へ小さく張り出す。内外面ともにナデ調整されるが、雑である。

9～15は人形、ミニチュア、遊戯具である。共伴した陶磁器は18世紀後半に比定されるが、東大編年Ⅷa～Ⅷb期(一部19世紀中葉)とされるSK101と遺構間接合する。人形をみるとSK101と同年代のものが半分を占めている。9は白磁の碗でJB-61に分類される。型押成形である。体部には桜花を胴下部高台脇までは菊花文様を施している。畳付から高台内まで無釉である。10は土鈴でDZ-58に分類される。胎土は白色系である。型打成形で、頭頂部を捻り把手を形成し紐孔を開けている。頭頂部の捻りには指頭と布目が観察できる。11は鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈するが赤い鉄分、黒色の粒子を多く含む粗い土であった。ロクロ成形である。12は座猫の人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形(前後合わせ)で中空、無釉である。赤色の顔料が所々に観察できる。底部に穿孔がある。13はお札でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形で、紐孔をもつ。表面には分銅と文字「寿福 長者」とあり、裏面にも年号らしき文字「…永九…」、二文字判読出来たのみである。14は天神と狛犬でDZ-60-bに分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形(前後合わせ)中実で無釉である。表裏の所々に赤色の顔料が観察される。15は狛犬でDZ-60に分類される。胎土は浅黄橙色系を呈し、型押成形(前後合わせ)中実で無釉である。表裏に所々に朱色の顔料が観察される。

SK100 (Ⅲ-26、27 図)

1～4は瀬戸・美濃系磁器(JC)である。2以外は染付が施されるが、いずれもコバルト顔料が使用される。1、2は碗である。1は染付丸形碗でJC-1-a、2は色絵端反形碗でJC-1-dに分類される。1の外面には草花文、口縁内側に四方禳文、見込みには環状松竹梅文が描かれる。2の色絵は赤、青、茶(黒か)で施される。口唇部には細い口銹を有す。3は輪高台を有する皿でJC-2-b。畳付は無釉であるが、その両端はシャープに釉切りされる。高台内に角棒銘を有す。4は端反形坏でJC-6-b。体部下半は7箇所が面取りされる。高台内に銘を有す。

5～9は陶器である。5は京都・信楽系灰釉脚付油受け皿でTD-40-a。受け部口縁が皿部口縁よりかなり低い。受け部口縁には浅いU字状スリットを1箇所有す。6は端反形鉢でTZ-5。胎土は緻密で、淡灰色を呈す。口縁部は強く外反し、口唇部は肥厚する。高台は削り出し高台で、高台幅は広く、脇は面取りされる。外面上半から内面は灰釉が施釉されるが、内面は雲形に白土を施し、そこに鉄と呉須で絵付がなされる。7、8は急須である。7は8の蓋でTZ-00-s、8はTZ-16に分類される。胎土は非常に緻密で、黄白色を呈す。外面はミガキ調整される。7の摘みは笠を下にしたキノコが2個並ぶものであるが、一方は胎土と同色、もう一方は茶褐色を呈す。8の底部は碁笥底状を呈す。注口部内側の穿孔は9個。9は植木鉢でTZ-21。胎土は緻密で、暗褐色を呈す。口縁部から外面に厚めに緑釉が施釉される。平面形は横長の六角形を呈す。底裏には平面形が長方形の足が四隅に配され（3個のみ遺存）、その中央が1箇所穿孔される。

10～13は人形、遊戯具である。10は杵持ち兎でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で、無釉である。11、12は河童と鮎でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で無釉である。2点とも頭頂部に微小の孔2箇所が観察されるが、おそらく乾燥や彩色の際の孔とおもわれる。裏面には板目の調整痕が観察できる。12の鮎には赤色の顔料が観察できる。13は泥面子でDZ-55に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。側面には型痕がみられ、縁部は摩耗。狐をモチーフとしている。

SK101（Ⅲ-27～35 図）

総点数603点（個体数）を数える一括資料である。磁器が5割近くを占め、器種としては碗、坏、皿、御神酒徳利などが多い。肥前系磁器碗（JB-1）にはいわゆる広東碗（1-m）、端反形碗（1-n）、小丸碗（1-j）が、瀬戸・美濃系磁器碗（JC-1）には端反形碗（1-d）、いわゆる広東碗（1-c）、湯呑碗（1-o）が看取される。また景德鎮窯系端反形碗（JA1-1）も同手のものが数個体認められる。磁器坏は極薄い器壁のもの（JB-6-c、JC-6-d）が目立つが大半は染付を有するもので、いわゆる白玉手のものは認められない。陶器の約4割は瀬戸・美濃系瓶（TC-10）であり、それに産地不明の土瓶（TZ-34）が続く。土器（DZ）には皿（DZ-2）、油受け皿（DZ-40）、ひょうそく（DZ-44）が多く、大半が施釉されたものである。以上のような遺物群の様相から東大編年Ⅷa～b期の遺構一括資料と考えられる。ただし瀬戸・美濃系磁器（JC）の木型打込皿（JC-2-d）や明治時代と考えられるものが認められるなど、若干年代が下る遺物も含む。

磁器（1～67、74） 1～33は碗とその蓋である。1～9は景德鎮窯系青花碗（JA1-1）とその蓋（JA1-00）で、1、7、8がJA1-00、2～6、9はJA1-1に分類される。1～8は端反形碗とその蓋である。1は2の蓋である。1は口縁付近に、2は胴部下部に稜を有す。また1は摘み内に、2は高台内に「大清嘉慶年製」銘を有す。2は焼継痕が顕著である。3、4は内外面に、5は外面に仙芝祝寿文が描かれるが、いずれも呉須が滲む。また3～5は高台内に二重圏線と銘を有す。5のみ焼継痕が看取される。6は外面に牡丹唐草文が描かれる。呉須が口錆状に施される。高台内には角椀銘を有す。7の外面には線描きで菊と竹が描かれる。8は呉須の発色が良い。摘み内には二重圏線と二重角椀銘を有す。9は大振りの丸碗である。釉の中に細かい気泡をやや多く含む。高台内には二重圏線と二重角椀銘を有す。畳付付近の釉はシャープに削られるが、畳付には溶着した痕跡が看取される。10～14、16～18、20、21、28、30は肥前系の碗（JB-1）と蓋（JB-00）である。13、30が色絵、他は全て染付が施される。10、11、13は高台断面形がU字形を呈するものでJB-1-e。10は器壁が厚い。呉須の発色は良く、図示した文様が4単位施される。11は呉須が带状に口縁付近と高台付近に施される。口錆を有するが、ムラがある。焼継痕が看取される。13はいわゆる金欄手

の碗で、呉須と赤と金で絵付が施される。高台内に「大明年製」銘を有す。12は高台が「ハ」の字に開くものでJB-1-q。高台内はアーチ状に削り込まれる。体部は腰張り気味である。14はいわゆる小広東碗でJB-1-i。高台高がやや低い。染付は外面、口縁部内側、見込みの3箇所施される。16、17はいわゆる小丸碗でJB-1-j。ともに呉須は黒ずむ。16の暈付に白色砂粒がやや多く付着する。17の見込みには、かなり崩れた手描き五弁花文が看取される。18はいわゆる広東碗でJB-1-m。口唇部はいわゆる虫喰いのように釉が飛散している。体部には焼継痕が看取される。20は広東碗の蓋でJB-00-b、21は丸形碗の蓋でJB-00-aに分類される。28はJB-1-n。高台がやや外側へ開き気味である。体部は腰張り気味で、口径も比較的大きなものである。絵付は丁寧に線描きとダミで施される。30は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた碗でJB-1-x。胎土は灰白色を呈し、器壁は厚い。体部は高台から腰張り気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。外面は圏線のみを呉須で、花文と七宝文は赤と黒と緑(黄か)で上絵付が施される。蛇ノ目釉剥ぎ部分もそれを隠すように、黒と緑で上絵付が施される。15、19、22~27、29、31~33は瀬戸・美濃系碗(JC1-1)と蓋(JC-00)である。15、25は白磁、他は全て染付が施される。15、24は丸形碗でJC-1-a。15の高台は正円でなく、高台高は高い。器壁は厚く、暈付には砂粒が付着する。釉ムラもあり粗製のものである。24は亀甲文の染付が他の染付部分より盛り上がる。暈付付近の釉はシャープに削り取られる。高台内には角椀銘を有す。19はいわゆる広東碗でJC-1-c。22、23、25~27、29は端反形碗でJC-1-d。22の胎土はガラス質で、釉の中に細かい気泡が多く看取される。23は大振りなものである。呉須の発色が淡い。25の外面には棒状工具で梅花文のような文様が施される。26は器面も胎土も淡灰白色を呈す。釉は生掛けされる。27の体部は腰張り気味で、器高がやや低い。内外面に仙芝祝寿文が施される。口銹を有す。29の口縁はラツパ状に大きく外側へ開き、高台径は小さい。高台内に「成化年製」銘を有す。31は端反形碗の蓋でJC-00-b。内面には「成化年製」銘、摘み内にも角椀銘を有す。32、33はいわゆる湯呑形碗でJC-1-e。ともに絵付は筆描きで施されるが、32の呉須は黒ずむ。33は釉の中に細かな気泡が多く看取される。暈付幅がやや広く、外周がシャープに削られる。34~45、74は皿で、34~41は肥前系(JB-2)、42~45は瀬戸・美濃系(JC-2)、74はヨーロッパ(JA8-2)である。34は色絵、43、45は白磁、他は全て染付である。34はJB-2-e。染付に赤で上絵付を施す。暈付には白色砂粒が付着している。高台内に「大明成化年製」銘とハリ支えが3箇所看取される。35、36、39~41は蛇ノ目凹形高台を有す皿である。35、36は高台高の低いものでJB-2-j。35の蛇ノ目釉剥ぎ部分には白土が施される。36は腰が張り、口縁はやや内傾する。口唇部は玉縁状を呈す。絵付は内外面に施され、見込みには環状松竹梅文が描かれる。39~41は高台高が高いものでJB-2-i。いずれも口縁部が輪花状を呈す。40は口唇部が平坦で、口銹が施される。暈付脇は強くケズリ調整される。絵付は芙蓉手風のもの内外面に施される。高台内に「成化年製」銘を有す。焼継痕が看取される。41も口唇部が平坦で、口銹が施される。高台内に「富貴長春」銘を有す。焼継痕が器面全体に及ぶ。37は器高が低く、腰が張る小振りな皿でJB-2-o。見込みには手描き五弁花文がある。38は口縁部が輪花に成形され、見込みに一枚絵が描かれた皿でJB-2-q。口銹を有す。42はいわゆる木型打込皿でJC-2-d。見込みには陰刻と呉須のダミが施される。43は白磁型皿でJC-2-e。型作りで、見込みに陽刻が看取される。高台の平面形も口縁同様、方形を呈す。44は蛇ノ目高台を有す皿でJC-2-c。腰が張り、器高が低い。高台内に角椀銘を有す。45は陰刻皿でJC-2-f。口縁部は緩やかに外反し、口銹が施される。口銹は滲んだり、欠失している箇所がある。見込みには団竜文の陰刻が看取される。74はヨーロッパ磁器皿でJA8-2。胎土はガラス質で、淡灰白色を呈す。黄色味を帯びた透明釉の中には非常に細かい気泡が多くみられる。型押成形

で、底部には粗い布目が残る。底裏の釉は拭き取られるが、体部と境の釉はシャープに削り取られている。平面形は楕円形か隅丸方形であり、破片から口縁部が部分的に輪花状を呈することが明らかとなっている。絵付は黒ずんだ呉須で施される。一見すると銅版プリント風であるが丁寧な手描きである。見込みは大半が欠損しているが、中央には主文様で楼閣山水文が、周囲は花文や亀甲文などで縁取りしている。46 は型打成形された肥前系染付大皿で JB-3-b。八角皿と思われる。絵付はいわゆる素描で見込み全面に、側面にも崩れた唐草文が施される。高台内に角枠銘とハリ支えが1箇所看取される。47 は瀬戸・美濃系染付爛徳利で JC-4。口縁部に鳶口を1箇所有す。48～52 は染付坏で、50 は景德鎮窯系 (JA1-6)、他は肥前系 (JB-6) である。48、49 は器壁が極めて薄い端反形坏で JB-6-c。ともに焼継痕がある。48 は高台内まで絵付を施す。49 の絵付には墨弾きの技法が用いられる。50 は青花の坏である。体部は直線的に「ハ」の字状に開き、口縁部外側には稜を有す。高台は削り込み高台である。透明釉は暈付以外施されるが、高台内には指痕が残る。また全体に青味を帯びている。絵付は見込み、口縁内側、外面に施されるが、雑で呉須も滲む。51 は JB-6。体部は筒形を呈し、口縁は僅かに外反する。高台高は高く、高台内は無釉である。絵付は内外面と見込みにいわゆる素描で丁寧に施される。高台内には焼継印がある。52 は半球形坏で JB-6-f。高台径が非常に小さい。53 は肥前系染付猪口で JB-7-a。底部は蛇ノ目凹形高台状を呈す。54、55 は染付仏飯器である。54 は瀬戸・美濃系で JC-8。碗部分が非常に浅い。脚部中央は円錐形状に大きく削り込まれる。呉須は滲み、釉の中には細かな気泡が看取される。55 は肥前系で JB-8-c。やや厚めに施釉され、ムラがある。56 は肥前系染付筒形合子で JB-18-b。57、58 は肥前系染付筒形段重で JB-13-c。ともに段重の最下段にあたるものであろう。57 は輪高台を有す。絵付は線描きとダミで施される。58 の底部はベタ底で、無釉である。底部脇の釉はシャープに削り取られる。絵付はいわゆる素描でなされる。59～61 は瓶である。59、60 は肥前系 (JB-10)、61 は景德鎮窯系 (JA1-10) のものである。59 は大形の染付長頸瓶で JB-10-a。内面まで透明釉が施釉される。60 は JB-10。底部脇の帯状文様が呉須、それ以外は赤、黒、緑で上絵付が施される。底裏には焼成時にできたと思われるヒビを隠すように上絵付が施される。61 は景德鎮窯系の粉彩の瓶である。外面には針金彫りの線刻の地紋様が施され、いわゆる粉彩技法により黄色で塗り埋め、その上に黒色で輪郭線を描いたピンクの花を所々に配している。62 は瀬戸・美濃系染付御神酒徳利で JC-11-b。鶴首を有す。器面の調整が雑で、凹凸が目立つ。63、64 は肥前系染付油壺で JB-12。ともに絵付は筆描きで施される。64 の胎土は灰白色を呈し、呉須も淡灰色に近いものである。器面の調整も雑で、やや凹凸が目立つ。65 は染付の急須で JZ-16。胎土はややガラス質で、白色を呈す。絵付は比較的丁寧な筆描きで施されるが、呉須はくすむ。口縁部以外、内面まで透明釉が施釉される。注口部内側の穿孔は7個。66 は瀬戸・美濃系染付植木鉢で JC-21。底部は輪高台状にされ、無釉である。暈付には墨書が看取される。67 はヨーロッパのいわゆるフロウブルーのプリントウェアである。カップであろうか？。器面全体に濃い藍色で銅版プリントがされる。文様は外面には楼閣山水文と樹木、内側には花唐草文と樹木が看取される。

陶器 (68～73、75～111、113) 68～71 は碗である。68 は京都・信楽系平碗で TD-1-h。見込みには銹絵染付がワンポイントとピン痕が2箇所看取される。暈付外周は小さく面取りされる。高台内にごく浅い円圏と「清閑寺」銘を有す。69 は産地不明の端反形碗で TZ-1。胎土はやや粗く淡褐色を呈し、白色細砂粒を少量含む。器面には灰釉が施釉され、暈付は拭き取られる。口銹を有し、外面全面に鉄と白土で絵付が施される。70 は大堀・相馬系の碗で TJ-1。体部3箇所が窪みされ、外面に流水と貝の浮文が施される。内面は灰釉、外面は青緑釉が厚めに施釉される。71 は瀬

戸・美濃系のいわゆる腰鍔碗で TC-1-u。器高はかなり低く、口縁部も内傾し、矮小化が進んだものである。72 は瀬戸・美濃系灰釉こね鉢で TC-5-l。口縁部は短く折り返される。見込みは釉が円形に5箇所拭き取られ、その中に団子状トチ痕が看取される。底裏には線刻の釘書きで「×」とある。73、85、105 は皿で、73、85 は瀬戸・美濃系 (TC-2)、105 は京都・信楽系 (TD-2) である。73 は灰釉のいわゆる石皿で TC-2-f。口縁は短い鐙状を呈す。外面に稜線を数条有す。見込みには団子状トチ痕が4箇所看取される。85 は灰釉皿で TC-2。口縁部付近の内外面と見込み中央のみ施釉される。無釉の見込み部分と高台内には墨書がある。105 は灰釉皿で TD-2-a。見込みには櫛目、径1cm弱の円盤状のもの、ピン痕3箇所が看取される。口縁部裏側に灯心痕が半周する。75 は灰釉爛徳利で TZ-4。胎土は硬質で、白色を呈す。器面には細かい貫入が看取される。胴部1箇所に鉄絵が施される。底部外周は面取りされ、中央には墨書が看取される。本製品と類似したものが信楽の漆原 C 遺跡などで出土している。76 は瀬戸・美濃系灰釉餌入で TC-30。胴部に環状の把手を1箇所有す。底部には右回転糸切り痕が看取される。77、78 は坏で、77 は大堀・相馬系 (TJ-6)、78 は京都・信楽系 (TD-6) である。77 の外面には流水の浮文が施される。内面には灰釉、外面には青緑釉が施釉され、見込みにはいわゆるはしり駒が鉄で描かれる。78 の胎土は磁器質で、白色を呈す。灰釉が施釉される。外面には鶴が1羽ずつ相対する位置に鉄で描かれる。高台は割高台でV字状のスリットを3箇所有し、無釉である。なお本製品と酷似する坏が信楽の漆原 C 遺跡で出土している。79～84 は瓶で、83 が産地不明 (TZ-10)、他は全て瀬戸・美濃系灰釉瓶 (TC-10) である。79、80、84 は二合半徳利で TC-10-c。いずれも釉は浸け掛けされる。79 は口唇部の釉が拭き取られる。胴部には溶着痕が2箇所看取され、点刻釘書きで「高サキ」とある。80 も胴部には点刻釘書きで79同様「高サキ」とある。84 は底部脇が面取りされる。胴部には点刻釘書きで「八」に「五」とある。また無釉の底部脇と底裏にも、墨書で「八」に「五」と書かれている。81 は一升徳利で TC-10-e。内面にまで灰釉が施釉される。底部釉は拭き取られる。胴部には溶着痕が1箇所、点刻釘書きで「口サキ」とある。「高サキ」か。82 は五合徳利で TC-10-d。底部釉は拭き取られるが、細砂粒が付着している。胴部には2箇所点刻の釘書きを有し、一方が「高サキ」、もう一方は判読できない。83 は灰釉瓶で TZ-10。胎土は緻密で、灰色を呈す。灰釉は緑味を帯びる。胴部は四方から押され、隅丸方形に近い。底部は強くケズリ調整され、平滑である。86、93 は壺・甕で、86 は産地不明で TZ-15、93 は瀬戸・美濃系で TC-15-a に分類される。86 の胎土は粗く橙褐色を呈し、透明白色の小石を少量含む。また鉄分を多く含み、黒色の点が多くみられる。輪積成形で、肩部に最大径をもつ。外面が強く被熱しており、表面の剥離が著しい。底部には釉などの溶解物が多量に付着するが、内面には認められない。93 はいわゆる赤津半胴で、底部外面を除き錆釉が施釉される。口唇部には団子状トチ痕が3箇所看取される。底部中央が二次的に穿孔される。87、88 は京都・信楽系イッチン掛けの急須である。87 は蓋で TD-00、88 は TD-16 に分類される。ともに胎土は緻密で、淡褐色を呈す。器壁は極めて薄い。87 は空気抜き孔を1箇所有す。裏側中央は図示したように6方が面取りされる。88 の外面は山と詩句がイッチンで描かれ、無釉である。内面は口縁部付近以外、透明釉が施釉される。注口部内側の穿孔は3個。底部脇には「いが」の銘がある。『日本古陶銘款集』や『日本やきもの集成』にある伊賀焼の刻印と酷似するものであり、本品も伊賀焼である可能性が高い。89、90 は瀬戸・美濃系灰釉筒形合子で、89 は蓋で TC-00-f、90 は TC-18 に分類される。90 の底部は碁笥底状に浅く削り込まれる。91 はいわゆる焼締め陶器の水注で TZ-27。胎土は炆器質で、褐色を呈す。器形は胴部が張った小壺のようである。注口を1箇所有す。ただし注口部形状は欠損のため不明。施釉されていたが、その大半は飛散している。底部外周には溶着痕がある。

92、94、95 は植木鉢で、92 は産地不明で TZ-21、94、95 は瀬戸・美濃系で TC-21 に分類される。92 は口縁部から外面に染付が施され、灰釉が施釉される。畳付は浅いアーチ状に 3 箇所削られる。底部には二次的穿孔が 1 箇所看取される。94、95 は灰釉が施釉される。ともに口縁は鐙状を呈す。94 は底部に 1 箇所穿孔を有し、畳付がアーチ状に 4 箇所削られる。95 は鉄と緑釉が流し掛けされる。底部には焼成前穿孔を 4 箇所有し、さらに中央に二次的な穿孔が看取される。94 同様、畳付はアーチ状に 4 箇所削られる。96 は柿釉把手付き鍋で TZ-33-a。口縁部に紐状の把手が 2 個、底部に足を 3 個有す。底部内面には目跡が 3 箇所看取される。底部外面全体にススが付着している。97 は堺系播鉢で TL-29。口縁部から内面に鉄泥が施される。縁帯の 1 箇所を内から外へ指で押し、その部分の両側を挟み注口を作り出す。底部には植物繊維状の圧痕と多量の砂粒が付着する。口唇部には斜線状の圧痕が数箇所に看取される。内面には 10 条 1 単位の細かい播目を有すが、見込みの播目は申し訳程度のものである。98～101 は土瓶である。98 は銹絵染付土瓶で TZ-34-m。内面にはやや雑に灰釉が施釉される。注口部内側の穿孔は 1 個。胎土や釉調などから京都・信楽系の可能性もある。99 はいわゆる青土瓶で TZ-34-a。外面には青緑釉、内面にも口縁部以外、灰釉が施釉される。底部には足を 3 個有す。注口部内側の穿孔は 4 個。底部全体に薄くススが付着する。100 は京都・信楽系で TD-34。外面は白化粧され銹絵染付が、内面は口縁部付近以外には灰釉が施される。注口部裏側には染付で「道八」とある。注口部内側の穿孔は 3 個。底部は全体的に薄くススが付着する。101 はうのふ釉が施釉されたもので TZ-34-k。注口部内側の穿孔は 3 個。底部には足を 3 個有し、全体にススがやや厚く付着する。なお、底部脇と一方の把手付け根に二次的な穿孔が 1 箇所ずつ看取される。102～104 は蓋である。102 は鉤状把手が付く蓋で TZ-00。胎土は緻密で、淡灰白色を呈す。表側は青、緑、白（白土か）の盛絵具によって絵付が施され、裏側は受け部を除き白化粧される。103、104 は土瓶の蓋である。ともに蓋上に空気孔を 1 箇所有す。103 が京都・信楽系で TD-00-d。表側は白土染付され、摘みは狛犬形を呈す。裏側には「◎」に「亀亭」の銘がある。この銘款は『日本古陶銘款集』によると和気亀亭のものとしてされている。新宿区の『筑土八幡町遺跡』558 号遺構（新宿区筑土八幡町遺跡調査団 1996）でも本製品と酷似する白土染付土瓶の蓋が出土しており、やはり裏側に「亀亭」銘を有す。104 は三彩土瓶の蓋で TZ-00-c。摘みは動物状のものである。上面にピン痕が 3 箇所看取される。106～109 は油受け皿で、106、107 は瀬戸・美濃系（TC-40）、108、109 は京都・信楽系（TD-40）である。106 は高い受け部を有するもので TC-40-e。受け部の口唇部は釉が拭き取られる。底部は蛇ノ目凹形高台状を呈し、無釉である。受け部口唇部には灯心痕が付着する。107 は TC-40-c。錆釉が施釉されるが、底部は拭き取られる。受け部口縁が皿部口縁より低いものである。受け部には方形のスリットを 1 箇所有す。108 は TD-40-b。受け部口縁は皿部口縁より低いものである。受け部には浅い U 字状のスリットが 1 箇所あり、口唇部の釉は拭き取られる。109 は TD-40-a。受け部と皿部の口縁がほぼ同じ高さである。受け部には U 字状のスリットを 1 箇所有すが、片側のケズリが雑で歪な U 字状を呈す。110 は京都・信楽系のカンテラで TD-46。口唇部と底部を除き、灰釉が施釉される。把手を 1 箇所有すが、大半が欠損している。注口部の上面に長方形の孔を 1 箇所有す。注口先端に灯心痕が看取される。111 は脚付のひょうそくで TZ-44 に分類される。胎土は非常に緻密で、灰色を呈す。底部を除き灰釉が施釉される。碗形のほぼ中央に舌状の灯心支えを有す。底裏中央に焼成前穿孔を 1 箇所有し、その周囲にナゲが施され、他は回転糸切り痕が残る。113 は陶胎に染付されたもので、器種は不明。胎土は緻密で、灰白色を呈す。受け部の周囲に呉須で絵付が施される。受け部口唇部の釉は拭き取られる。皿形の見込みに径 2.5×高さ 9mm の円筒状の受け部を有す。底部は削り出され輪高台状を呈し、無釉である。畳付

外周は面取りされる。器台か。

土器 (112、114～130) 112は施釉土器で、器種は不明である。胎土はやや粗く、乳白色を呈す。型作りで、2枚の植物の葉と断面が「U」字状の帯の3つのパーツからなる。植物の葉の一方には白土、もう一方には緑釉が施釉される。帯部分の内外面には透明釉が施釉される。なお葉のようなものの隅に径2mmほどの焼成前の穿孔を有す。114、116は透明釉が施釉された油受け皿である。114はDZ-40-b、116はDZ-40-aに分類される。114の底部には左回転糸切り痕が看取される。116の脚部裏側の削り込みは時計回りに施される。115は透明釉が施釉されたひょうそくでDZ-44-b。灯心用突起の中程に歪な窓状のスリットを1箇所有し、突起先端には灯心痕が看取される。117、118は皿である。117は透明釉が施釉されたものでDZ-2-h。口唇部の釉は全て飛散し、所々に灯心痕が看取される。底部には左回転糸切り痕が残る。118は底部に左回転糸切り痕があるものでDZ-2-b。胎土はにぶい橙色を呈す。口縁部には局所的に灯心痕が看取される。119は直径約14cm、高さ約1cmの皿形製品である。胎土は橙色を呈し、底裏を除き白土が施される。口縁と底部外周が面取りされている。底裏はケズリ調整され、釉が拭き取られたような痕跡がある。何かの台座か。120は土師質の筒形製品である。ロクロ成形で、底裏と底部脇はケズリ調整される。また底部脇には押圧痕が数箇所看取される。器面には透明釉が施釉され、底部釉は拭き取られる。DZ-5に分類される。121は土師質火鉢でDZ-31。ロクロ成形で、底部は輪高台状に削り込まれる。底部の平面形はほぼ正円であるが、口縁部のそれは楕円形に近い形状を呈す。胴部の2方向に擦過痕があり、使用過程で円筒であったものが変形した可能性もある。底部を除き外面はミガキ調整され、底部と内面はナデ調整される。胴部には断面「V」字形を呈す二次的な紐状の削り込みが看取される。底裏には「大平」の刻印と墨書があり、底部内面には僅かにススが付着する。この「大平」の刻印について小川望は、たぼこ盆に入れられたと思われる円筒形の火入れや涼炉にみられることがあるものの、現在のところこれ以外の器種にはみられず、江戸在地系土器の生産者に関する資料として注目すべきものとしている(江戸遺跡研究会編2001)。122は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-d。外面はひどく摩滅しているが、口縁部と胴部中央付近を帯状にミガキ調整、その間を回転工具状のもので施文している。底部にはかなり低い円形の足が1個残る。口縁部内側は被熱し、帯状に白色化している。123、124は植木鉢である。123は土師質でDZ-21-a、124は瓦質でDZ-21-bに分類される。ともにロクロ成形で、口縁部は緩やかに外反する。また底部には穿孔が1箇所と左回転糸切り痕が看取される。125、126は塩壺である。125はロクロ成形無印のものでDZ-51-w。胎土は橙色を呈し、底部には左回転糸切り痕が看取される。126は板作成形無印のものでDZ-51-ab。胎土はにぶい橙色を呈し、金雲母を含む。内面には横位の継ぎ目が2箇所と布目が観察される。また内面には細砂粒がやや多く付着している。127、128は火消し壺の蓋でDZ-00-h。127は土師質、128は硬質瓦質である。128の外面は口縁部を除きミガキ調整後、回転状工具で細かい格子文様が施される。口縁部と内面はナデ調整される。なお内面にはススが付着している。129、130は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。129は内耳はないが、口縁は比較的高さがあるものである。内面底部に「○」に「一」の刻印を有し、ススが僅かに付着する。130の口縁部は短く内傾し、口唇部は肥厚している。

人形・ミニチュア・遊戯具 (131～182) 本地点の中で最も多く人形、ミニチュアが出土した遺構である。ミニチュアでは「楽」と「亀」の刻印が陽刻された皿と瓶、また焔炉や風炉、土瓶などが出土している。人形では、女雛やぶら人形や天神様をはじめ、歌舞伎「彦山権現」を題材とした人形、遊興の場のお座敷で流行った狐拳の人形や相撲見立て人形など様々な人形が出土している。131はミニチュアの碗でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で内面に指頭押圧痕が観察で

きる。外面全体は白色で彩色し、施釉している。132～134 はミニチュアの陶器の碗で TD-61 に分類される。いずれもロクロ成形である。133 と 134 は貫入が観察できる。132 は高台の小さいもので高台脇から高台にかけ無釉である。133 は口縁部が厚く外反している。高台は高さが均一でないため傾いている。高台は無釉である。134 の体部は厚く口縁部で急激に薄くなり外反する。高台内のケズりは浅い。高台の高さが均一でないため傾いている。高台は無釉である。135 はミニチュアの鉢で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。外面の文様は成形後に工具で押し描いている。内面は施釉後縞状に緑釉で描き、外面上部までは緑釉で彩色している。霰文様部分から高台にかけ無彩で無釉になっている。136 はミニチュアで底部のみである。DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で貼付高台である。高台内に丸に「楽」の刻印が陽刻されている。見込みの下半分は白色を塗り萩と思われる赤い花を描き、施釉している。137 はミニチュアの蓋で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で上面は透明釉に緑釉が流しかけられている。裏面は指頭押圧痕がみられ、無釉である。138 はミニチュアの土鍋で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。体部下半から底部にかけ無釉である。底部にススと思われるものが付着している。口縁部が欠損しているため把手の有無は判からない。139 はミニチュアの瓶で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で胴部を 3 箇所指頭大に凹ませている。無釉である。140、141 はミニチュアの六角瓶で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）中空である。140 の文様は、梅花は赤で枝は焦茶色で描かれ施釉、胴下部から底部にかけ無釉である。141 は各区画に麻の葉の文様が付されている。肩部の一つに二重亀甲に「亀」の刻印が陽刻されている。緑釉が施されているが、体部下半から底部にかけ無釉である。内面はナデ調整されている。142 はミニチュアの盤か。DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。143 はミニチュアの壺で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で外面は鉄釉が施されている。精緻な作りである。144 はミニチュアの水注で DZ-61 に分類される。胎土は浅黄橙色で、ロクロ成形で、注口と把手は別作りで貼付けている。外面は白色を塗り鉄釉で文様を描き施釉している。高台は高く、高台内のみ無釉である。精緻な作りである。145 はミニチュアの土瓶で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、型打成形（上下で合わせ）、注口と把手は別作りで貼付けている。上部は白色に塗り緑釉で装飾している。底部は無釉である。146 はミニチュアの陶器の土鍋で TZ-61 に分類される。胎土は灰褐色で、ロクロ成形で、体部はケズリ調整している。内面から外面胴部中央まで鉄釉を施している。脚 3 足と把手は貼付である。147～149 は釜形土製品で DZ-5 に分類される。3 点とも羽釜タイプで、胎土は橙色系で、ロクロ成形である。147 は鐙が広く器高が高く胴部は細い。底部は摩耗している。内面特に見込みにススが付着している。148 は胴部がやや膨れる、口縁部は僅かに内傾している。149 は鐙から下が低いタイプで、口縁部は内傾している。150 は六角形をしたミニチュアの焜炉で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（左右合わせ）で、内面は指頭押圧痕が顕著である。151 はミニチュアの行平鍋で DZ-61 に分類される。胎土は鮮やかな橙色で、ロクロ成形で注口部と把手は貼付である。内外面施釉で外面には鉄釉を施す。152 はミニチュアの火鉢か。DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。胴下部と高台は鉄釉で胴部と内面の一部には透明釉を施す。153 は風炉で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系を呈し、ロクロ成形で口縁部は波状にカットし、底部は 3 箇所を凹ませている。外面は白色に塗り、緑釉を流し掛けしている。154 はミニチュアの鉢で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。155 は基石形土製品で DZ-56 に分類される。156 は土玉で DZ-57 に分類される。157、158 はミニチュアの南鐙二朱銀貨で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、両面型押成形

で雲母が観察できる。157は彩色が全体に観察できる。実際の銭貨には「比南録八片換小判一兩」、「銀座常是」とある。明和9(1772)年～文政7(1824)年に鑄造されたものと、文政7(1824)年～天保元(1830)年に鑄造されたものがある。銭貨の模倣と思われる。159は泥面子でDZ-55に分類される。渦巻き右巴紋である。歌舞伎役者の九代目市村羽左右衛門(1725～1785)の家紋である。若い時の名前の亀蔵から「亀蔵小紋」といわれ当時流行の文様であった。160は布袋様でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空、無釉である。左手あたりに穿孔があり、おそらく払子を挿していたと思われる。161、162はぶら人形でDZ-60-fに分類される。163、164はぶら人形の手足でDZ-60-fに分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形である。ぶら人形は当時高級であった三折れ人形を模倣して作られたと思われ、布か紙で手足を繋ぎ可動するようになっていた。165は猿でDZ-60-gに分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で手と頭部は別作り貼付けている。後頭部には笠を付けていた痕跡が観察できる。底部に穿孔。166は着物狐でDZ-60-jに分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形(前後合わせ)で、無釉である。赤色が観察される。167は鞠乗り猫と思われDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空で、無釉である。底部に穿孔あり。168は達磨乗り童子でDZ-60に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形(前後合わせ)中空で、無釉である。169は女虚無僧でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空、無釉である。歌舞伎「彦山権現」お園を題材に作られた人形と思われる。170は相撲見立ての人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空で、無釉である。右足に穿孔あり。相撲の決まり手の「河津掛け」ともいわれている人形である。171は姉様(女雛)でDZ-60-dに分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形(前後合わせ)中空で、指頭押圧痕が顕著である。無釉である。172は天神様でDZ-60-bに分類される。胎土は白色系で、型押成形(前後合わせ)で、台座は別作りで貼付けている。台座はアーチ状に凹んでいる。衣は焦茶色に彩色されている。底部内面を残し施釉している。173は狛乗り童子でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形(前後合わせ)中空、施釉されている。犬の斑点と童子の眉と目は焦茶色で描かれている。各所に黒く残存しているのは顔料の定着をよくするために入れる膠であると思われる。犬の腹部に穿孔あり。174は西行法師でDZ-60-aに分類される。型押成形(前後合わせ)であるが、頭部は別作りで差込み貼り付けるタイプである。175は狛抱き童子でDZ-60-lに分類される。胎土は白色系で、型押成形(前後合わせ)で中空で、施釉されている。犬の斑点は焦茶色に彩色されている。底部はやや凹んでいる。173と同様、江戸遺跡では多く出土する人形である。176～178はお座敷遊びから流行した狐拳遊びの「三すくみ」狐、獵師、庄屋である。3点とも胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空で、施釉されている。いずれも内面に指頭押圧痕があり、粘土を付け足し補強している。176は狐でDZ-60-jに分類される。体部全体を白色で塗り、羽織は鉄釉、耳、衣の縁は緑釉、目と口は鉄釉で描いている。177は獵師でDZ-60に分類される。体部と鉄砲は白色を塗り、獵銃はさらに緑釉で彩色している。ほそく頭巾と脚絆は赤茶色で彩色、目は176の狐と同様と思われる。178は袴を着けた人形でDZ-60に分類される。全体を白色で塗り、袴は緑釉で彩色している。目は焦茶色、口は朱色で描いている。179は犬でDZ-60-iに分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空で、無釉である。180はミニチュアの御輿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(対角線合わせ)中空で、無釉である。181は獅子頭でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で後面が無いタイプで、無釉である。両目と上の歯の中央は穿孔されている。内面はきれいに調整されている。182はミニチュアの灯籠の台座でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で表面は石を表現している。上面中央に接合の痕

跡が観察できる。

SK111 (Ⅲ-35 図)

1、2は磁器染付碗である。1は瀬戸・美濃系端反形碗でJC-1-d。釉はやや黒ずみ、細かい気泡が多く看取される。焼継痕がある。2は肥前系のいわゆる小丸碗でJB-1-j。胎土は灰白色を呈し、呉須も黒い。器高がかなり低くなっている。見込みには崩れた手描きの五弁花文が看取される。

3は瀬戸・美濃系陶器である。いわゆる汁次で、蓋がTC-00-c、身がTC-27-bに分類される。柿釉が施釉されるが、身の内面は施釉後拭き取られる。蓋の摘みは鉤状を呈し、表面に縦にしのぎを数条入れ、菊花のようにしている。蓋の裏側は幅を変えてケズリ調整される。身の底部には輪状の溶着痕が看取される。4は透明釉が施釉された油受け皿でDZ-40-b。受け部に浅いU字状のスリットを1箇所有す。底部には左回転糸切り痕が看取される。

5、6はミニチュアと遊戯具である。5はミニチュアの土瓶でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(上下合わせ)で、注口と把手、脚3箇所は貼付である。外面は赤色で彩色され施釉、体下部から底部にかけ無釉である。6は泥面子でDZ-55に分類される。渦巻き右巴紋である。

SP138 (Ⅲ-35 図)

1は右回転糸切り痕が認められる皿でDZ-2-a。底裏の糸切り痕はやや粗い。胎土はにぶい橙色を呈す。体部は底部から外側へ開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し稜を有す。底部脇は強くなでられ窪む。

SK140 (Ⅲ-35~37 図)

1~3、6、7は磁器で、1、6は瀬戸・美濃系(JC)、2、3、7は肥前系(JB)である。1~3、6は染付皿である。1は蛇ノ目凹形高台を有するものでJC-2-a。白化粧され染付が施されるが、白化粧は蛇ノ目釉剥ぎ部分にまで及ぶ。また蛇ノ目釉剥ぎ部分には輪トチ痕が看取される。6は方形型皿でJC-2-e。高台の平面形状も方形を呈す。口縁部四隅は縦に切り込みが入れられる。見込みには陽刻が看取される。2は型打成形の木瓜形皿でJB-2-e。高台は輪高台にされ、その中に角枠銘を有す。「彌」か。3は輪花皿でJB-2-q。口唇部は平らにされ、口銹が施される。見込みには一枚絵が描かれる。7は染付長頸瓶でJB-10-a。器面全体が青味を帯び、呉須の発色はやや黒ずむ。口縁部は玉縁状を呈す。器面全体の調整が雑で、凹凸が顕著である。畳付には砂粒が付着する。

4、5、8、9~16は陶器である。4、8は碗である。4は京都・信楽系半球形碗でTD-1-b。外面には金と緑で上絵付が施される。畳付外周は面取りされる。8は瀬戸・美濃系のいわゆる尾呂茶碗でTC-1-o。器面には灰釉が施釉され、底部付近の釉は拭き取られる。口縁部にはうのふ釉が浸け掛けされる。5は志戸呂系皿でTF-2。口縁部外側に稜を有す。底部付近は強くケズリ調整される。9は京都・信楽系鉢でTD-5。体部は猪口のように直線的に立ち上がり、口縁部は細かい輪花状を呈す。畳付を除き緑味を帯びた灰釉が施釉される。外面には銹絵染付が看取される。10は瀬戸・美濃系柿釉壺・甕でTC-15-b。外面には灰釉が流し掛けされる。内面底部には団子状トチ痕が4箇所看取される。11は瀬戸・美濃系の肩衝茶入れでTC-26。外面に黒釉、内面にも錆釉が施釉される。口縁部は短く外反する。底裏には右回転糸切り痕が看取される。12は京都・信楽系灰落としてTD-24。外面には灰釉、内面にもそれより薄い灰釉が雑に施釉される。口縁部に鉄絵が施されるが、その部分には敲打痕が看取される。13は瀬戸・美濃系のいわゆるぺこかん徳利でTC-10-g。底裏を除き錆釉が施釉される。胴部2箇所に窪みを有す。底裏中央は僅かに窪むが、その部分に指紋が残る。頸部と底部外周に溶着痕が看取される。14は柿釉が施釉された把手付き鍋でTZ-33-a。把手は紐状を呈す。内面底部には目跡が3箇所看取される。底部には足を3個有し、ススが僅かに付着する。15、

16は京都・信楽系灰釉油受け皿で、15はTD-40-b、16はTD-40-aに分類される。ともに受け部口唇の釉は拭き取られる。

17～25は土器である。17は土師質の脚付油受け皿でDZ-40-c。外面には銀彩の痕跡が看取される。受け部口縁にはU字状のスリットを1箇所有す。18～21は皿である。18は瓦質、それ以外は全て土師質のものである。18、21は底部に左回転糸切り痕が認められるものでDZ-2-b。18は表面摩滅が著しい。口縁部には灯心痕がタール状に厚く全周する。21の胎土にはぶい橙色を呈し、表面に金雲母が散見される。口縁部には灯心痕が1箇所に集中する。19は透明釉が施釉されるものでDZ-2-h。口縁部付近の釉は大半が飛散し、そこに灯心痕が看取される。底部には左回転糸切り痕がある。20はいわゆる磨きかわらけでDZ-2-d。底部は平滑である。内ぐもりの製品で、底部内外面は黒色化している。22は透明釉が施釉されたひょうそくでDZ-44-b。体部は丸碗形を呈し、灯心用突起は上方から方形の切り込みが入れられる。底部には左回転糸切り痕が、突起部分先端には僅かに灯心痕が看取される。23は瓦質の植木鉢でDZ-21-b。ロクロ成形で、底部には左回転糸切り痕が看取される。底部中央に1箇所穿孔を有す。口縁から胴部上半が帯状に白色化している。意匠として意図的に施されたものか。24は板作成形2ピースで「泉川麻玉」の刻印を有す塩壺でDZ-51-l。胎土は橙色を呈し、外面には金雲母が看取される。底裏には外側から内側へ粘土塊を押し込んだ際の窪みが残るが、内側は平坦にされる。胴部内側に粗い布目と粘土の継ぎ目が観察される。25は土師質丸底のほうろくでDZ-47-a。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。遺存する破片に内耳は看取されない。

26～46は人形、ミニチュア、遊戯具である。本遺構は他の遺構の人形と異なり、型押成形の人形は46をのぞき中実のものが大半で、中空のものは未掲載資料に数点あるのみで、他は重量感のある手捻り成形のものであった。26はミニチュアの碗でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。内面は緑釉で装飾し外面は口縁部付近の一部を除き無釉である。27はミニチュアの陶器の碗でTD-61に分類される。貫入が観察できる。28、29は土瓶と急須でDZ-61に分類される。胎土は2点とも白色系で型打成形（上下合わせ）で、把手と注口部は貼付けである。透明釉をかけ緑釉で装飾している。30はミニチュアの銚子でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）である。注口と把手は貼付けである。底部をのぞき全体を茶色で彩色し、さらに上部4箇所は白色と緑色で装飾し施釉している。31は土鈴でDZ-58に分類される。胎土は白色系である。茶巾形タイプである。32～34はミニチュアの祠と塔でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（対角線合わせ）で、無釉である。32の堂内は成形後割り抜いている。基壇と堂内は一体で屋根は貼付けている。33、34の屋根の頭頂部には穿孔があり、おそらく九輪を挿入したものと思われる。35、36は型抜き遊びの面形でDZ-62に分類される。胎土は橙色系で、型打成形で外面には指頭押圧痕が観察できる。35は鍾馗か。36は象である。37は蟬でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形である。裏面は少し凹ませ紐孔を形成している。紫色に彩色している。38は陶器の犬でTD-61に分類される。胎土は淡褐色で、手捻り成形である。目、鼻、耳は鉄釉で描いている。腹部は無釉である。39、40は天神様でDZ-60-bに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）中実で無釉である。39の天神は全体に赤色が観察される。40の天神様の台座は高く、台に陽刻されている梅の枝と薄縁の文様、また天神も精緻である。衣部分に赤色が観察される。41、42は狛犬でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）中実で施釉されている。41は身体の一部を緑釉で装飾している。底面のみ無釉である。42は眉、目は焦茶色で描いている。43は象と思われる。DZ-60に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で、耳、尾、鼻は貼付けで無釉である。全体にナデ調整が観察できる。44は足を踏ん張る人物でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形

である。手足、肩当て、禪?は貼付けである。45は猿でDZ-60-gに分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で、手足、頭部、帽子、ホラ貝は貼付けである。底部に穿孔あり。46は獺師でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で雲母が顕著に看取される。器壁は厚く底部は開口している。右手は径8mmの穿孔がみられ、左手は剥がれている。ほそく頭巾は赤茶色に彩色している。

SP141 (Ⅲ-37 図)

1は景德鎮窯系青花の坏でJA1-6。高台は兜巾高台状を呈す。口銹を有す。

SP170 (Ⅲ-37 図)

1は肥前系磁器の染付半球形碗でJB-1-f。文様は丁寧到手描きされ、呉須の発色も良い。

SE174 (Ⅲ-38 図)

遺物群の様相から元禄16(1703)年の火災により被熱した遺構一括資料と考えられる。

1~4は肥前系磁器(JB)で、全て染付が施される。1は高台断面がU字状を呈し、高台高が高い大振りな碗でJB-1-d。絵付は手描きで草花文が丁寧に描かれるが、呉須はやや黒ずみ滲む。2は仏飯器でJB-8-c。高台の削り込みは雑である。釉は生掛けされる。3、4は壺・甕である。3は蓋でJB-00-g、4はJB-15に分類される。器面には一重網目文が描かれる。4は口縁部付近を除き、内面にも透明釉が施釉される。

5~14は陶器である。5、6は肥前系の碗(TB-1)である。5はいわゆる京焼風陶器平碗でTB-1-c。見込みには鉄で楼閣山水文が丁寧に描かれる。高台内には浅い円圈と、その中に行書の「清水」の刻印を有す。6はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。体部は高台から腰張り気味に、ほぼ垂直に立ち上がる。7、8は皿である。7は備前系皿でTE-2。底部外周はケズリ、他はナデが施される。底部中央に右回転系切り痕が看取される。口縁部には紐状のものの両端を貼り合わせ、丸形にした小さな把手を1個有す。外面には火轆が看取される。8は瀬戸・美濃系灰釉鉄絵皿でTC-2。口縁部は緩やかに外反する。口縁部内側に鉄絵が施される。9は肥前系丸碗形坏でTB-6。高台を除き、褐釉がやや厚めに施釉される。高台脇は強くなでられ括れる。10は肥前系のいわゆる京焼風陶器の鉢でTB-5-c。口縁部は緩やかな鰐状を呈す深めの鉢である。口縁部内側に染付が施されるが、呉須は黒ずむ。高台内には刻印を有す。被熱している。11は肥前系のいわゆる京焼風陶器の香炉・火入れでTB-9-b。外面には黒ずんだ呉須で絵付けが施されるが、意匠が判然としない。高台は蛇ノ目高台状を呈し、内傾する。畳付にはチャツ痕が看取される。被熱している。12は丹波系播鉢でTK-29。縁帯部断面形はほぼ正三角形を呈す。播目は7条1単位で、見込みには円と横位の条線1単位が施される。体部には斜方向に指頭圧痕が多数看取される。底裏には焼台痕が認められる。13は備前系瓶でTE-10。いわゆる「伊部手」といわれるもので器面には塗り土がなされる。肩部には自然釉が掛かる。紐作りのロクロ成形製品で、内面底部と胴部境などに継ぎ目が観察される。胴部下端はケズリ調整痕が顕著に認められる。底裏には円形の焼台痕が看取される。内面底部付近にはスス状のものが付着し、黒色化している。14は志戸呂系のいわゆる由右衛門徳利でTF-10。頸部には鉄釉、胴部には鉄泥が施されるが、底部付近は無釉である。底裏は同心円状にケズリ調整される。

SU176 (Ⅲ-39、40 図)

総点数238点(個体数)を数える一括資料である。磁器が約4割を占めるが、そのうち約8割は肥前系(JB)である。肥前系磁器碗(JB-1)は高台断面がシャープな「U」字状で高台高が低いもの(1-e)、高台断面がシャープな「U」字状で高台高が高くやや小振りなもの(1-d)、梅寿文が描かれた粗製の碗(1-v)、瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)は端反形碗(1-d)などで構成される。肥前系磁器皿(JB-2)は高台断面がシャープな「U」字状のもの(2-e)、いわゆるくらわらんか手(2-g)、高

台断面がシャープな「U」字状を呈し、見込みに一枚絵が描かれる小形のもの(2-q)などが多く、いわゆる蛇ノ目凹形高台の皿は少ない。なおJB-1、JC-1ともにいわゆる湯呑碗(JB-1-o、JC-1-e)があり、またJBに志田窯の皿(2-p)や瀬戸・美濃系(JC)の陽刻を有する型皿(2-e)なども認められる。しかしJB-1のいわゆる小丸碗(1-j)、小広東碗(1-i)、瀬戸・美濃系陶器碗(TC-1)の柳茶碗(1-g)や刷毛目碗(1-s)、京都・信楽系半球形碗(TD-1-b)などは極少ない。以上のような遺物群の様相から東大編年IVb～V期・Ⅷa～b期の遺構一括資料であると考えられる。

磁器(1～15) 1、2、4、5、10は碗で、1は景德鎮窯系(JA1-1)、2は瀬戸・美濃系(JC-1)、他は肥前系(JB-1)である。1は瑠璃釉に金彩が施され、他は染付が施される。1は端反形碗でJA1-1。口銹が施される。内面と高台内には透明釉が施釉され、高台内には呉須で「大清乾隆年製」銘を有す。焼継痕が看取される。被熱している。2はいわゆる湯呑碗でJC-1-e。高台内には点刻の釘書きがある。4はJB-1-e。いわゆる素描で矢羽根文が描かれるが、呉須の発色は淡い。高台内に二重角椀渦福銘を有す。5はいわゆる広東碗でJB-1-m。文様は筆描きで、外面、口縁部内側、見込みの3箇所には施される。10は端反形碗でJB-1-n。器壁は極薄い。体部は腰張り気味に直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。口径に比して高台径が大きく、「ハ」の字に開いている。器高もやや低めである。3、13は蓋である。3は景德鎮窯系(JA1-00)、13は瀬戸・美濃系(JC-00)である。3は青花端反形碗の蓋でJA1-00。釉の中に細かい気泡が多数看取される。呉須はきれいなコバルトブルーに発色するが、やや滲む。摘み内に銘を有す。13は壺・甕の染付蓋でJC-00-e。裏側の円筒状の部分と蓋部分は別作りである。内面は無釉で、横方向に擦れたような痕跡が認められる。焼継痕が看取される。6、12は肥前系染付丸形杯でJB-6-a。6の器面には大きめの貫入が目立つ。12はコバルトブルーに近い呉須の発色や文様など、いわゆる古染付を意識したもののか。高台内の銘款も「大清乾隆年製」の「乾」の字を模したものである。7、8は染付皿で、7は瀬戸・美濃系(JC-2)、8は肥前系(JB-2)である。7は八角皿でJC-2-e。型作りで、内外面に陽刻、見込みにはダミが施される。高台は輪高台で、暈付の釉はシャープに削り取られる。8はいわゆる志田皿でJB-2-p。口縁部は輪花を呈す。全体に白化粧され、見込みには線描きと墨弾きの技法で染付が施される。器面全体が青味を帯び呉須が滲む。底裏にはハリ支え痕が4箇所看取される。9は肥前系のいわゆる八角鉢でJB-5-eに分類される。外面、口縁部内側、見込みに染付が施されるが、呉須は滲む。焼継痕が看取される。11は肥前系の輪高台を有する猪口でJB-7-b。染付で現在の盆栽のようなものが描かれており、この頃の風俗を知る上で興味深い資料である。高台内には「大明年製」銘を有す。14、15は肥前系染付御神酒徳利でJB-11-bに分類される。ともに鶴首を有す。14は15と異なり器面全体が灰白色を呈し、呉須も黒ずむ。また高台内側に白色砂粒が付着している。

陶器(16～26) 16、17は碗で、16は瀬戸・美濃系(TC-1)、17は肥前系(TB-1)である。16はいわゆる小杉茶碗でTC-1-w。底部を除き灰釉が施釉され、体部には3本線に単純化された杉文が鉄で描かれる。17はいわゆる京焼風陶器の平碗でTB-1-c。見込みは目跡状の無釉部分があり、それを隠すように黒、緑(青か)、赤で山水文と思われる上絵付が施される。この京焼風陶器の平碗の見込みには鉄や呉須で山水文が描かれるものが一般的で、これは希有な例である。高台内には径1cm弱の浅い円圈と刻印が看取される。18は瀬戸・美濃系壺・甕でTC-15。外面上半には印花文、下半には龍が貼り付けられる。内面は灰釉に緑釉流し掛け、外面は緑釉、底部は錆釉が施釉され、口唇部と暈付は無釉である。胴部下端1箇所に団子状の注口が貼り付けられ、その内側の穿孔は1個。底部内面と暈付には団子状トチ痕が4箇所看取される。19は京都・信楽系灰釉皿でTD-2-a。見込みには2本の櫛目と3箇所のピン痕が看取される。底部には輪状の溶着痕とタール状のス

すがほぼ全体に認められる。20は備前系油徳利でTE-41。鉄泥が施されるが、最大径のある胴部から下半は拭き取られる。頸部脇に空気孔を1箇所有す。底裏には「○」に「吉」の刻印がある。21は瀬戸・美濃系灰釉水盤でTC-5-f。口縁部1箇所が内側に窪む。底部は削り込まれ、碁笥底状を呈す。見込みにはトチ痕が3箇所看取される。22は瀬戸・美濃系灰釉香炉・火入れでTC-9-a。底部は削り出し高台で碁笥底状にされるが、ケズリが雑で畳付に段差が生じている。底裏中央には二次的な穿孔を1箇所有すが、その孔の周囲は丁寧に調整されている。23は京都・信楽系脚付き油受け皿でTD-40-aに分類される。受け部にU字状のスリットを1箇所有す。底部を除き内外面に灰釉が施釉される。口唇部の釉は拭き取られる。24は土瓶でTZ-34。内外面に灰釉を施釉し、外面には藁灰釉と青緑釉を胴部上半に交互に流し掛けている。注口部内側の穿孔は4個。底部には足を3個有す。底裏から1cmほど上の辺りに僅かに段差があり、その上に帯状にススが付着する。また段差から下は被熱し白色化していることから、火に掛けられる際に当たっていた部分が段差付近であったとの推定がなされる。25は堺系播鉢でTL-29。播目は9条1単位で、見込みには三角パターンで施される。播目は口縁内側まで引かれたようであるが、口縁部調整時になで消された痕跡が認められる。底裏には焼台痕と植物繊維状のものが看取される。26は瀬戸・美濃系のいわゆるぺこかん徳利でTC-10-g。錆釉が施釉され、底裏釉は拭き取られる。胴部2箇所に窪みを有す。頸部と底裏に輪状の溶着痕が看取される。

土器(27~35) 27~29は皿である。27、29は底部に穿孔を有するものでDZ-2-i。ともに底部には左回転系切り痕が看取される。27は底部と体部の境の相対する位置に1個ずつ計2個、29は底部中央に1個穿孔を有すが、灯心痕は認められない。28は透明釉が施釉されるものでDZ-2-h。内面の透明釉は大半が飛散している。口縁部2箇所に灯心痕が看取される。30は土師質の植木鉢でDZ-21-a。口縁部は外反する。口唇部は平滑で、内側が外側より低くなっている。底部中央に穿孔を1箇所有す。31は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-d。口縁部はミガキ調整、外面は回転状の工具で施文される。底部外周はケズリ調整される。足を3個有す。32は土師質の円筒状製品である。輪積成形で、内面は回転ナデ調整され、下端から1/3あたりに庇状の凸帯が巡る。外面は筋を入れ、図のように段々状を呈す。ミガキ調整後、赤色顔料(ベンガラか)が塗布される。この顔料は内側上半にまで及び、外面同様塗布された部分はミガキ調整される。円筒部下端の相対する位置に低いアーチ状のスリットを2箇所有す。ススなどの付着物はないが口縁部内側に擦痕があることから、中に器物を入れて使用していたことが想定される。33は板作成形2ピースで大枠「泉州麻生」の刻印を有する塩壺でDZ-51-iに分類される。内面には斜方向に粘土を絞ったような痕跡がある。外面の上1/3ほどには圏線が数条看取される。34は塩壺蓋でDZ-00-d。胎土は赤橙色を呈し、一方の面に砂粒が付着している。35は透明釉が施釉された油受け皿でDZ-40-b。受け部は低く、浅い「U」字状のスリットを1箇所有す。

人形・ミニチュア・遊戯具(36~50) 特異なものでは男性の性器を模した陽物が出土している。36はミニチュアの播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で彩色、施釉されている。口縁部は厚く、外反している。見込みには花を描き、白色に塗り緑色で装飾している。中央の斑点は赤茶色で描く、播り目部は灰緑色をしている。37、39はミニチュアの陶器の碗と鉢でTD-61に分類される。37は貫入が観察できる。高台脇を削り、畳付はやや角張っている。39の鉢は口縁部がやや厚く外反している。高台はハの字に開き、面取りしている。38はミニチュアの磁器の皿でJB-61に分類される。胎土は灰色である。内面は虫喰いが観察できる。高台内側はハの字に開いて、丸みがある。40は天神様でDZ-60-bに分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わ

せ) 中空で彩色、施釉されている。顔は白色で目、口は焦茶色で描いている。笏と直衣は白色に塗り緑色を重ね、冠、指貫は茶色に彩色している。41は陽物でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形である。頭頂部と下部中央に穿孔が観察できる。42～45は泥面子でDZ-55に分類される。42は獅子、43は宝珠か、44、45意匠は不明、45は手捻りのような作りである。46は土玉でDZ-57に分類される。47～49は基石形土製品でDZ-56に分類される。50は石製の基石(自然石の可能性もある)。暗赤褐色である。

SK182 (Ⅲ-41 図)

1～3は肥前系磁器(JB)である。1、2は碗(JB-1)である。1は染付半球形碗でJB-1-f。高台高は低く、内傾気味である。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた白磁碗でJB-1-x。見込みは釉剥ぎ部分を隠すように、赤、緑、黄、黒で上絵付が施される。この釉剥ぎ部分には輪状の溶着痕が観察され、また畳付には見込みの絵具と同色の絵具が付着していることから、直重ね焼成されたものと思われる。3はいわゆる染付八角鉢でJB-5-e。体部は高台から垂直気味に立ち上がり、口縁部は外反する。蛇ノ目凹形高台を有し、釉剥ぎ部分にはチャツ痕が看取される。また高台内中央には線刻の釘書きがある。

4～7は陶器である。4は肥前系のいわゆる京焼風陶器の平碗でTB-1-c。体部はほぼ垂直に腰張り気味に立ち上がる。見込みには鉄絵の山水文、高台内には「小松吉」の刻印を有す。5、6は京都・信楽系灰釉水注である。5は蓋でTD-00-c、6はTD-27-dに分類される。5は菊花状の摘みを有す。6は割竹形の注口を有し、その内側に円孔を1個有す。底部外周は面取りされる。7は瀬戸・美濃系の柿釉壺・甕でTC-15-b。胴部には灰釉が数箇所流し掛けされる。底部内面には団子状トチ痕が4個看取される。

8～10はミニチュアと釜形土製品である。8、9はミニチュアの皿でDZ-61に分類される。いずれも型打成形で、指頭押圧痕が外面に観察できる。8は内面体部に四方禳文、9は櫛状の文様を入れ、見込みの花文様は白色に塗りさらに緑色で彩色し全体を施釉している。10は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。体部はやや湾曲し、口縁部は内傾している羽釜タイプである。

SK185 (Ⅲ-41、42 図)

1、2は磁器皿で、1は肥前系(JB-2)、2は景德鎮窯系(JA1-2)である。1は蛇ノ目凹形高台を有し、高台高が低い皿でJB-2-j。体部は腰張り気味に低く立ち上がり、口縁部は小さく外反する。いわゆる金欄手で、染付に赤と金の上絵付が施される。口唇部も口銹状に金彩が施される。高台内には「大明嘉靖年製」銘を有す。焼継痕が看取される。2は青花皿でJA1-2。口唇部のいわゆる虫喰いが顕著である。畳付の釉は雑に削られ、外周に砂粒が付着する。漆継痕が看取され、その部分が欠損している。

3～6は陶器である。3は産地不明の端反碗でTZ-1。胎土はやや粗く、にぶい橙色を呈す。鉄分を多くみ、器面に暗茶褐色の小さな斑点が目立つ。畳付を除き灰釉が施釉され、口縁部には青緑釉が浸け掛けされる。見込みには鉄で花文が描かれる。4は瀬戸・美濃系錆釉播鉢でTC-29。底部内外面は釉が拭き取られる。播目は10条1単位で施され、見込みは渦状にされる。底裏には溶着痕が看取される。5は瀬戸・美濃系のいわゆる御深井皿でTC-2-e。畳付は内側が外側より低い。高台を除き灰釉が施釉される。見込みは僅かに低くされ、鉄の摺絵で竹と鳥が描かれるが、竹の葉の一部分は呉須を使用し手描きで葉を描き足している。6は京都・信楽系の白土染付が施された花生でTD-22。内面も透明釉が施釉されるが、口縁部付近は白化粧された上に施釉される。竹を模したらしく、胴部下半に節のような稜が看取される。胴部下端に雲形の支脚を3方に有す。底裏は白化粧のみ施され、「洛東山」の刻印を有す。

7、8は土器である。7はロクロ成形無印の塩壺でDZ-51-w。胎土は赤橙色を呈し、底裏には左回転系切り痕が看取される。8は透明釉が施釉された筒形の香炉・火入れでDZ-9。胎土は橙褐色を呈し、口縁部外面には緑釉が流し掛けられる。内面も口縁部付近に透明釉が施釉される。高台は削り出され、輪高台を有す。口唇部には敲打痕が看取され、釉が飛散している。

SK186 (Ⅲ-42 図)

1は瀬戸・美濃系磁器染付端反形碗でJC-1-d。器面全体が青味を帯び、釉の中に細かな気泡が多く看取される。絵付はいわゆる毛彫りと線描きとダミで施される。

2~4は陶器である。2、3は京都・信楽系(TD)、4は瀬戸・美濃系(TC)である。2、3は長筒形ちろりである。2は灰釉が施釉されたものでTD-36-a、3は透明に近い灰釉が施釉されたもので蓋がTD-00-f、身がTD-36-aに分類される。いずれも横手1個、注口1個を有す。2の外面は白、緑、青、茶で、3の外面は白、緑、青、黒、黄で色絵が施されるが、ともに色絵部分が器面より盛り上がる。なお内面にも灰釉が施釉される。3の蓋も表側のみに灰釉が施釉される。細紐状の摘みを1個有し、裏側には「寶山」の刻印が看取される。4はいわゆる馬ノ目皿でTC-2-g。釉ムラがあり、厚く施釉された部分が白濁している。見込みにはトチ痕が4箇所看取される。

5はミニチュアの銭貨でDZ-61に分類される。「南鐐二朱銀」の模倣銭貨である。

SK188 (Ⅲ-42~44 図)

総点数260点(個体数)を数える一括資料である。磁器、陶器、土器の比率はほぼ1:1:1の割合となっている。出土数が多いのは碗、皿、瓶、坏である。肥前系磁器碗(JB-1)には半球形碗(1-f)、端反形碗(1-n)、量的には少ないがいわゆる小丸碗(1-j)や小広東碗(1-i)も含む。瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)には端反形碗(1-d)が圧倒的に多いが、全体的に小振りの物が目立つ。また僅かにいわゆる湯呑碗(1-e)も看取される。陶器碗で多いのは肥前系(TB-1)と京都・信楽系(TD-1)で、TB-1には刷毛目碗(1-g, h)が、TD-1には半球形碗(1-b)が多い。またTD-1は比較的器種がバラエティーに富んでおり、半球形碗の他に端反形碗(1-g)、平碗(1-h)、小杉碗(1-d)、半筒形碗(1-l)などが認められる。瀬戸・美濃系陶器碗(TC-1)も灰釉薄掛け碗(1-d)、いわゆる御室碗(1-d)、せんじ碗(1-l)、刷毛目碗(1-s)、腰鏝碗(1-u)、半筒掛け分け碗(1-v)など器種のバラエティーに富むが、出土量はさほど多くない。皿は土器皿(DZ-2)が多いが、施釉されたもの(2-h)は極少ない。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)が主体である。容量五合のものが中心で、肩が張るタイプと紡錘形を呈すいわゆる尾呂徳利のようなタイプが混在する。なお二合半のものに底部釉拭き取りの製品(10-a)は認められない。磁器坏には肥前系(JB-6)、瀬戸・美濃系(JC-6)とともに器壁が極薄いものが多く、染付といわゆる白玉手の製品が混在する。以上のような遺物群の様相から東大編年V~VI、VIIIb~c期の遺構一括遺物群と考えられる。なお本遺構と切り合い関係のあるSK245からは東大編年V~VI期に比定される遺物が出土しており、SK188出土遺物で当概期に比定される一群はSK245の遺物である可能性も考えられる。

1~5は磁器である。1~3は瀬戸・美濃系(JC)、4、5は肥前系(JB)である。5が青磁染付、他は染付が施される。1、2は端反形碗でJC-1-d。1は口縁部外反がごく弱い。2の絵付は毛彫りと線描きとダミで施されるが、部分的に呉須が厚く盛り上がる。3は端反形碗の蓋でJC-00-b。器面全体が青味を帯びる。摘み内に角棗銘を有す。4は油壺でJB-12。畳付に白色砂粒が多く付着する。5は高台断面が「U」字状を呈す鉢でJB-5-b。口縁部は強く外反する。内面は染付、外面は青磁釉、高台内の釉は拭き取られ、チャツ痕、焼継印が看取される。焼継痕が認められるが、口縁部欠損箇所の一部は欠損部位を完全に鉛ガラスで充填している。

6～10は陶器である。6は産地不明の丸碗形坏でTZ-6。胎土は緻密で、淡灰白色を呈す。高台は高く、「ハ」の字に開き気味である。また体部との境に焼成前穿孔が1箇所ある。内面には透明釉、外面は底部付近のみ緋色の釉(?)が施釉される。また大半が欠損しているが、口縁部下に鉄で文字のようなものが描かれる。畳付は溶着し、釉が剥がれている。本製品と同手と思われるものが新宿の南町遺跡第26号遺構(新宿区南町遺跡調査団1994)から複数個体出土しており、それらも高台と体部境に穿孔を有すものである。またその中に「高口(重か?)山」の刻印を有するものがあると報告されている。7は備前系のいわゆる伊部手の蓋物でTE-13。受け部から内面は無釉である。8は三彩土瓶でTZ-34-c。内面も口縁部付近を除き透明釉が施釉されることから、口縁部から釉を入れ、注口部から排出したのだろう。注口部内側の穿孔は3個。底部には足を3個有す。なお底部には2字ないし1字の墨書が看取され、ススが付着している。9はクレイパイプの火皿である。胎土は非常に緻密で、白色を呈す。表面は縦方向に丁寧に磨かれ、口縁部直下には刺突が巡る。かかと底部のトレードマークは「王冠」の下に「57」、かかと両側面のホールマークは「S」の下に隅丸長方形の中に星を6個配したものである。このトレードマークはゴダ市で1729～1805年まで使用されていたものであり、ホールマークは1750～1775年まで使用されたものである(D.H.DUCO 1982)。なお本製品のような磨かれたクレイパイプは主に贈答用として用いられたようである(小林1991)。10は京都・信楽系の急須でTD-16。無釉で、外面は丁寧にケズリ、ナデ調整される。注口部内側の穿孔は4個。把手の裏側には亀甲形に「清」の行書の刻印が看取される。『日本古陶銘款集』(陶器全集刊行会1941)によると清水六兵衛のものとする刻印と酷似する。

11～16は土器である。11は底部が平滑ないわゆる上製かわらけでDZ-2-d。底部には二次的な穿孔が3箇所看取される。12は土師質植木鉢でDZ-21-a。口縁部は外反し、内側に小さな稜を有す。底部の穿孔は1箇所である。底裏には左回転糸切り痕が看取される。13は土師質の火鉢でDZ-31。輪積成形で、口縁は方形、底部は円形を呈する。胴部には口の両側が穿孔された獣面の外耳を2個有す。なお獣面の口部分の穿孔が貫通しているのは片側のみである。胴部上半は回転工具状のもので施文される。底部には足が3個ある。15は火消し壺の蓋でDZ-00-h。側面と内面はナデ調整、上面はチズレ目が看取される。16は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。体部の立ち上がりが短く、内傾気味であり、内耳はないタイプである。底部には細砂粒が多く付着する。外面の体部と底部の境付近にススがやや厚く付着し、内面は底部に薄く付着する。

17～49は人形、ミニチュア、遊戯具である。本遺構は人形よりミニチュアが多く出土している。17はミニチュアの陶器の鉢でTD-61に分類される。口縁部は外反し、高台外周は面取りしている。内外面に貫入が観察できる。胴下部から高台にかけ無釉である。18はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形である。上部は欠損している。内外面は緑釉で装飾している。外面には菊花が、高台脇には剣菱の連続文様が付されている。高台脇から高台にかけ無釉である。高台内には「万」の刻印が陰刻されている。19～21はミニチュアの皿と鉢でDZ-61に分類される。いずれも胎土は橙色系である。19のミニチュアの皿は型打成形で外面には指頭と掌握痕が顕著に観察される。口縁部は白色、牡丹と蝶は白色と緑色で装飾している。20の口縁部は8箇所、21は7箇所内側に折り込み、波状にしている。2点ともロクロ成形である。20の松葉状のものは緑色、丸い実は赤茶色で描いている。21の芭蕉葉は赤茶色で縁取り、所々に緑色で装飾している。22はミニチュアの手つき皿でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型打成形で、把手と高台は貼付である。把手と縁取りの剣菱文様、葉は緑釉で、牡丹は白色で彩色し施釉している。底部は無釉である。23、24はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で、

合い口部は貼付である。23はミニチュアの釜蓋で上面は鉄釉で装飾し、裏面は無釉である。24は無釉である。25はミニチュアの瓢形の瓶でDZ-61に分類される。胎土は浅黄橙で、ロクロ成形である。外面には笹文様を描き、笹は白で彩色し更に緑釉で装飾、竹は焦茶で描き施釉している。26は巾着形の土鈴でDZ-58に分類される。胎土は白色系で、型打成形したのち、手捻りで巾着形にし紐孔と開口部を作っている。内面は丁寧にナデ調整しており、外面には掌握痕や指頭痕が観察できる。27はオシドリでDZ-60に分類される。胎土は白色系である。28～32の胎土は橙色系で、型押成形である。30以外は無釉である。28は犬でDZ-60-iに分類される。29は蟬でDZ-60に分類される。30はふくら雀形の土笛でDZ-59に分類される。全体を白色に塗り上面の翼は緑色で装飾、目、嘴は焦茶色で描き施釉している。31は旅姿した人形でDZ-60に分類される。右手は穿孔されている。羽織、股引きを着け着物は尻端折り、左手には荷をもっている。32はネズミでDZ-60に分類される。尾部には孔が観察できる。33～37は泥面子でDZ-55に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で、いずれも側面には型の痕跡があり、雲母が観察できる。33は海老に柙で役者名である。上面は摩耗している。34は忠臣蔵。35は丸に三つ扇。36は左三つ巴。37は三つ割り菊。38～46は基石形土製品でDZ-56に分類される。いずれも胎土は橙色系で、手捻り成形で掌握痕が観察できる。39と45には黒色の彩色が観察できる。47は石製の基石で灰赤色を呈している。48、49は半球形の製品でDZ-61に分類される。2点とも胎土は橙色系で、型押成形と思われ、雲母が表裏にみられ、裏面には穿孔がある。

SU189 (Ⅲ-45～47 図)

磁器 (1～21) 1～8、13は碗である。1～3は瀬戸・美濃系(JC-1)、4～8、13は肥前系(JB-1)である。4が色絵、他は染付が施される。1～3は端反形碗でJC-1-d。1は釉の中に細かい気泡が多くみられ、畳付に砂粒が付着する。焼継痕が看取される。2は外面に仙芝祝寿文、見込みにワンポイント、口縁部内側に帯状の文様が施される。器面全体が白濁し、呉須の発色はにぶい。また器面には陶器のような細かな貫入が看取される。3は器面全体に仙芝祝寿文が施され、高台内に角椀銘を有す。4はいわゆる小丸碗でJB-1-j。色絵は赤、金、青で施される。5はいわゆる小広東碗でJB-1-i。外面と見込みのワンポイントは線描きで施される。6、13はいわゆる広東碗でJB-1-m。6の高台端部は僅かに内傾し、歪な円形を呈す。絵付は線描きで、外面と見込みにワンポイントが施される。13は体部が腰張り気味に立ち上がり、口縁は外反する。高台径は大きく「ハ」の字に開き気味である。また高台高も高い。絵付は外面、見込み、口縁部内側に線描きとダミで施される。7、8は端反形碗でJB-1-n。7の体部は焼継されるが、器面の剥離部分は鉛ガラスで充填される。8の体部は腰張り気味である。高台径がやや大きく「ハ」の字に開く。絵付はいわゆる素描で施される。9は肥前系染付いわゆる広東碗の蓋でJB-00-b。摘みはやや歪な円形を呈し、端部に溶着痕がある。10～12は肥前系皿(JB-2)である。10、11は染付、12は色絵が施される。10はJB-2-o。器壁が厚く、呉須の発色も黒ずむ。口縁部割れ口に厚く灯心痕が看取される。口縁部が欠損したことで灯明皿に転用したのか。11はJB-2-e。口縁部直下が僅かに括れる。輪高台を有すが、歪な円形を呈す。12はJB-2。口縁は型打成形により細かな輪花状を呈す。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされるが、その部分に黄と黒で上絵付が施される。また見込み中央には赤で手描き五弁花文が描かれる。14は肥前系染付鉢でJB-5-e。口縁部は緩やかな輪花状を呈し、外反する。高台外周はシャープに釉が削られ、稜を有す。口縁部内側は墨弾き、見込みと外面は線描きとダミで絵付が施される。体部に焼継痕が看取される。15、16は肥前系染付猪口でJB-7-b。ともに輪高台を有するが、15は高台内側が深く削り込まれ高い高台となっている。釉ムラがあり、一部釉が厚く施釉され白濁してい

る。畳付には白色砂粒が少量付着する。16は底部外周の釉がシャープに削り取られる。体部には焼継痕が、底裏には焼継印が看取される。17、18は肥前系坏（JB-6）である。17は色絵半球形坏でJB-6-f。見込みには赤で「□なら□」、外面には赤と茶（黒か）で交互に「□見せ□ 知る人ぞ知る 梅の花」の五・七・五調の文字が書かれる。『新古今和歌集』の紀友則の歌に「君ならで 誰にか見せん 梅の花 色をも香をも 知る人ぞ知る」というものがあり、この坏の見込みの句、第3句、第5句と一致する。前述したように坏の句は赤と茶で交互に書かれており、まず赤で書かれた句を、次に茶で書かれた句を詠むと、欠損部分があるものの紀友則のこの和歌に酷似する。いわゆる「散らし書き」のように句がバラバラに書かれたものか。新宿の南町遺跡第133号遺構（新宿区南町遺跡調査団1994）からも本製品と同等と思われる坏が出土しているが、やはり見込みと外面に赤と茶で書かれていると報告されている。18は染付丸碗形坏でJB-6-a。器壁は厚く、器面全体が青味を帯びる。畳付には白色砂粒が多く付着する。19～21は御神酒徳利である。19は肥前系（JB-11）、20、21は瀬戸・美濃系（JC-11）で、いずれも染付が施される。また畳付に砂粒が付着する。19は瓶子形を呈するものでJB-11-a、20、21は鶴首を有すものでJC-11-cに分類される。

陶器（22～32） 22、23は京都・信楽系碗（TD-1）である。22はいわゆる小杉茶碗でTD-1-d。外面にはかなり崩れた杉文が鉄で描かれる。23は端反形碗でTD-1-g。ガラス質の灰釉が施釉され、器面には粗い貫入が看取される。高台外周は小さく面取りされる。24は瀬戸・美濃系壺・甕でTC-15。口縁付近は印花文、胴部には雲文と龍文が貼り付けられる。内面は灰釉に緑釉が流し掛けられ、外面は緑釉が施釉される。胴部下端に団子状の注口部を1箇所有すが、注口部先端は無釉で、その内側の穿孔は1個。底部内面には団子状トチ痕が4箇所看取される。なお本製品と同等のものがSU176の18であるが、18の注口部先端は無釉ではなく、注口部の孔も丁寧に穿孔されている。また高台形状も施釉の仕方も異なる。25、26は京都・信楽系灰釉筒形合子である。25は蓋でTD-00-i、26は身でTD-18-bに分類される。25の表側には錆絵染付が施される。26の底部外周はシャープに釉が削られ、稜を有す。また底裏には径1cm大の目跡が3箇所看取される。27は瀬戸・美濃系灰釉餌入でTC-30。環状把手を1箇所有す。底部には左回転糸切り痕と、生乾きの時に擦ったような痕跡が看取される。またわずかに墨書も認められる。28、29は瀬戸・美濃系のいわゆる汁次で、柿釉が施釉される。28は蓋でTC-00-c、29はTC-27-bに分類される。28は裏側に墨書で「文化四卯／年□／三月□〔吉力〕日／千□□□□□／外山」とある。文化4（1807）年3月、千□□で外山という者が購入したということを書いたものか。29は内面まで柿釉が施釉され、拭き取られる。30、31は鍋である。ともに柿釉が施釉される。30は把手付鍋でTZ-33-a。口縁部には紐状把手1箇所と、底部には3足を有す。口縁部を除き内面全体に赤色の付着物が看取される。31はTZ-33。口縁部に注口1箇所、底部に足を1個有す。30同様、内面底部付近に赤色の付着物が看取される。32は鉄釉土瓶でTZ-34-e。内面も薄く施釉されるが、口縁部内側は意図的に帯状に鉄釉が施釉される。底部には3足を有す。

土器（33～41） 33は透明釉が施釉された皿でDZ-2-h。底部には左回転糸切り痕が看取される。34は透明釉が施釉された脚付き油受け皿でDZ-40-a。受け部には浅いU字状のスリットを1箇所有す。35は透明釉が施釉されたひょうそくでDZ-44-b。灯心用突起には上方から方形のスリットが入れられる。灯心痕は突起部分の先端付近と碗形の口縁部1/3ほどに看取される。36、40は蓋である。36は塩壺蓋でDZ-00-c。胎土は赤橙色を呈す。内面には掌の腹で押圧したような窪みが看取される。40は火消し壺の蓋でDZ-00-h。側面と上面の境はケズリ、以下は内面までナデ調整される。上面にはチヂレが看取される。37は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-d。胴部には斜方向

の雷文、底部脇は格子文が回転工具状のもので施文される。口縁部は磨かれる。底部には3足を有するが、その先端は一部摩滅している。また底部は局所的に被熱による白色化が認められる。38、39は土師質火消し壺でDZ-31-i。38は輪積、39はロクロ成形である。38は底裏に3足を有す。足の周囲はナデ調整されるが、他はスタレ状圧痕や砂粒が観察される。ススが内面上半と底裏に看取されるが、内面のものは一部タール状を呈す。39の底部外周付近は面取りされる。口縁部外側は擦れたような痕跡が看取される。内面胴部下半の一部にススが付着している。41は土師質丸底のほうろくでDZ-47-a。口縁部は短く、内傾気味である。また底部との境はやや強くなでられ括れる。底部は内外面ともに全体的にススが薄く付着している。

人形・ミニチュア・遊戯具(42~59) 42、43、45はミニチュアの碗、鉢、蓋でDZ-61に分類される。3点の胎土はいずれも白色系で、型押成形、高台および合い口は貼付けている、また濃い緑釉で装飾されている。42は碗で口縁部は平坦である。口縁から内面にかけ彩色。43の鉢は口縁部が輪花状になって外反している。外面から口縁部は緑釉で彩色し、内面は縞状に流しかけている。45は麻の葉文様の蓋で、上面のみ彩色されている。44はミニチュアの播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で無釉である。雲母が顕著である。46、47は基石形土製品でDZ-56に分類される。48、49は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。2点とも羽釜タイプである。48は器高が高く、内面の体部幅は狭く深い。49の内面にはスス状のものが付着している。50は犬でDZ-60-iに分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で耳と尾は貼付けている。尾の下部に穿孔。51は筒状製品不明であるがDZ-61に分類した。胎土は橙色系である。内側に接合の痕が観察できることから、棒状の工具に粘土を巻き付け、貼合わせ、転がして成形したものと思われる。外面と底部は白色に塗り更に緑色で装飾し施釉している。上部が欠損しているため正確な形はわからない。52はミニチュアの播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。口縁部は厚く外面に段差を有し、浅い注口部には指頭痕が観察できる。赤色が僅かに観察できる。53~56、58、59の胎土は橙色系で、型押成形で(前後合わせ)中空で無釉である。53は裨猿でDZ-60-gに分類される。内面には指頭押圧痕が顕著で強く押圧されている。礼者猿ともいわれる、礼者とは年賀の挨拶に回る人のことを云う。54は犬でDZ-60-iに分類される。赤色の彩色が僅かに観察できる。腹部に穿孔が観察できる。55は桃持ち童子でDZ-60に分類される。56はぶら人形でDZ-60-fに分類される。57は鳩笛でDZ-59に分類される。胎土は白色系で、型押成形(左右合わせ)中空である。嘴と尾は焦茶色で翼の一部は黄色で彩色し施釉している。58は亀持ち童子でDZ-60に分類される。両耳の上部の穿孔は髪(麻苧)を挿すためのものと思われる。羽織に白色と赤色の彩色が観察できる。59はぶら人形でDZ-60-fに分類される。判読出来ないが腹部内面に墨書が観察される。

SK194(Ⅲ-48図)

1は肥前系白磁仏飯器でJB-8-b。釉ムラがあり、高台内に砂粒がやや多く付着する。2は肥前系のいわゆる京焼風陶器碗でTB-1-b。外面には鉄で山水文が描かれる。高台内には浅い円圏と刻印が看取される。

3~5は人形、ミニチュアである。図示した3点は他の遺構にくらべ古い様相を呈する。また未掲載の人形も医学部附属病院中央診療棟地点F34-11(東大編年IVa期)(東京大学遺跡調査室1990)から出土した施釉の馬乗り猿と同様のものが出土している。3、4はミニチュアの碗でJB-61に分類される。型押成形で、高台は貼付けている。3は貫入がみられ、高台の貼付は粗い。胴下部から高台にかけ無釉である。4は器壁の薄いミニチュアの白磁の碗で、高台は無釉である。5は座る西行法師でDZ-60-aに分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)で、底部は大きく開口している。

器壁は厚く硬質感がある。同一個体と思われる裾の内側に墨書が観察されるが判読は出来なかった。

SE199 (Ⅲ-48 図)

1 はミニチュアの鉢で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。内面は上部を残し白色を塗り緑色で梅花文を描き施釉。また、内面上部から外面上部は赤橙色で彩色し施釉している。彩色していない外面と底部は無釉である。共伴した陶磁器から近代に比定される。

SK200 (Ⅲ-48 図)

1～6、9 は磁器である。1、2 は染付碗で、1 は肥前系 (JB-1)、2 は瀬戸・美濃系 (JC-1) である。1 はいわゆる飯碗で JB-1-p。絵付は線描きとダミで施され、口銹を有す。2 は端反形碗で JC-1-d。局所的に呉須の部分が器面より盛り上がる。3 は肥前系染付丸碗形蓋物で JB-13-a。外面には線描きとダミで絵付が施される。畳付外周の釉は削り取られ、稜を有す。4 は白磁の蓋で、JC に分類される。受け部分は無釉である。上面には鹿の絵と、「鹿印」「煉齒磨」の文字が緑でプリントされる。5 は瀬戸・美濃系染付極薄坏で JC-6-d。腰部に稜を有し、畳付は階段状を呈す。見込みには鉛ガラスを青く彩色したものでススキの穂と「武蔵野」という文字が描かれる。高台側面の文様と高台内の角枠銘は染付で、また高台内には赤で「根岸」の上絵付が施される。6 は瀬戸・美濃系のいわゆるクロム青磁皿で JC-2-b。内外面にクロム釉が、高台内には透明釉が施釉される。見込みには鉄と緑で上絵付が施される。9 はヨーロッパ系磁器のボウルと考えられるもので JA8。胎土は軟質で、白色を呈す。高台内には「Maastrichts」、「Petrus.Regout」というプリントされた窯印があり、本製品がオランダ・マーストリヒトのベトゥルス・レグアウト窯の製品であることがわかる。いわゆるコバルトブルーのプリントウェアで、見込みには樹下人、口縁部内側にはリボン状の文様と窓絵があったと考えられる。また外面には風車と流水が看取される。この絵柄は「Gleaners」というパターンで、この窯では 1858～1885 年の製品まで使用されていたことが明らかとなっている。なお、この窯印のすぐ横に線彫りされた刻印が看取されるが、詳細は不明である。

7、8 は陶器である。7 は京都・信楽系灰釉油受け皿で TD-40-b。受け部に浅い U 字状のスリットを 1 箇所有す。口縁部裏側 1 箇所に灯心痕が看取される。8 は白土染付土瓶で TZ-34-b。内面にも受け部付近以外、透明釉が施釉される。注口部内側の穿孔は 3 個。

10～14 は人形、ミニチュア、遊戯具である。10、14 は急須と瓶で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で彩色、施釉されている。10 の急須は、注口部と把手は貼付けている。口縁部から底部まで白色を塗り、さらに緑色で装飾し施釉している。14 は瓶で底部を残し、全体に白色を塗り、2 箇所に梅花文様を描き、花卉は桃色、花芯は緑色で彩色し施釉している。11 は何か掲げている童子背面で DZ-60 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で、内面は指頭押圧痕が顕著で雲母が多く残存している。朱色の彩色が観察できる。亀甲の中に「亀」と思われる刻印が付されている。12 は碁石形土製品で DZ-56 に分類される。13 は福助で DZ-60 に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形 (前後合わせ) 中空である。

SK245 (Ⅲ-49 図)

1、2 は肥前系磁器染付碗で、1 は JB-1-f、2 は JB-1-v に分類される。1 は薄く丁寧に作られている。釉薬は青色に発色している。2 はいわゆる梅樹文のくらわんか碗で、胎土の質、成形、呉須の発色など不良である。3 は青磁染付碗で、JB-1-d に分類される。見込み中央には手描きの五弁花が描かれている。青磁はやや釉むらが観察される。4 は染付碗で、JB-1-w に分類される。文様の松部分はコンニャク印判で、その他は手で描かれている。5 は染付糸切り細工の型皿で、JB-2-r に分類される。胎土の色調、呉須の発色ともに良好である。6 は白磁見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2 に分

類される。底部には釉が施されている。7、8は染付輪花皿で、7がJB-2-e、8がJB-2-fに分類される。両者は器形、文様などに共通点が多いが、見込み中央の五弁花は7が手描き、8がコンニャク印判、銘款は7が二重角枠内渦福、8が崩れた「大明年製」、裏文様は7が枠線あり、8が一本線、胎土は7が白色、8が灰白色など7の方が質的に高い。

9は灰釉呉須絵碗いわゆる御室碗で、TC-1-dに分類される。文様は図示されている裏にも簡略なものが確認できる。10は灰釉鉄釉掛け分け碗いわゆる腰鎔碗で、TC-1-uに分類される。鉄釉は不透明な柿釉で、器高もあり同器種では古手の製品であろう。9、10とも見込みに顕著な擦痕は認められない。11は灰釉擦絵皿で、TC-2-eに分類される。文様は呉須で描かれている。表面は釉が十分に溶解しておらず、焼成不足であろうと考えられる。12は灰釉蛇ノ目釉剥ぎ鉢で、TB-5-dに分類される。肥前嬉野の内野山窯の製品であると思われる。高台脇にはカンナ痕が明瞭に観察できる。畳付外周は面取りされている。13は鉄釉片口鉢でTC-23-bに分類される。うのふ釉が若干流し掛けられている。見込みには3箇所の特チン痕が確認できる。14は五合のいわゆる尾呂徳利で、TC-10-dに分類される。頸部から肩部の一部にはうのふ釉が掛けられている。器面相對する側に釘書きで「区」と「三」が刻まれている。15は鎔釉の鉢で、TC-5に分類される。体部はロクロ目が顕著に残り、2箇所窪みが作られている。見込みには3箇所の特チン痕が確認できる。16は灰釉呉須絵の鉢で、TC-5に分類される。口縁部は輪花状に成形されている。17は褐釉香炉・火入れでTC-9-dに分類される。器面には半菊状のシノギが2箇所に確認できる。底部には脚が3箇所に貼付されている。

18は鉛釉が施された土師質ひょうそくで、DZ-44-fに分類される。釉は濃茶褐色を呈し、表面は二次的な火熱を受けている。受けのサイズに比べて灯心立てが小振りである。19は土師質の塩壺蓋でDZ-00-cに分類される。胎土は明褐色を呈し、金雲母が散見される。内面には布目痕が観察される。20、21はかわらけで、DZ-2-bに分類される。20は口縁部3/4程度遺存するが、ほぼ全周にわたりススが付着している。22、23は土師質火消壺蓋で、DZ-00-hに分類される。22の内面はススの付着が顕著に認められる。24は土師質の丸底ほうろくで、DZ-47-aに分類される。内面ほぼ中央には○に「一」の刻印が押印されている。内面はやや黒色化している。

25～28は人形、ミニチュア、遊戯具である。25はミニチュアの碗でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。内外面黄釉で施釉している。一部火を受けている。上質の作りである。26は碁石形土製品でDZ-56に分類される。27、28は立ち西行でDZ-60-aに分類される。胎土は橙色系である。27の西行は手捻り成形で首部は差し込み方式、手足、荷も貼付けている。28の西行は型押成形（前後合わせ）底部は開口している。雲母が顕著である。

SK252 (Ⅲ-50 図)

1、2は瀬戸・美濃系染付碗で、JC-1-dに分類される。1は白色の胎土に濃紺色の地呉須で文様が施されているのに対し、2は灰白色の胎土に淡青色の呉須で圏線が描かれている。2の高台は幅広に成形されるが、接地面は高台外周にある。底部無釉である。3は柿釉灰釉流しの壺・甕で、TC-15-bに分類される。4は土師質の皿でDZ-2に分類される。通常のかわれけと比較すると口唇部が立ち上がっている、表面に赤彩（あるいは釉薬か？）の痕跡が観察されるなどの相違が認められる。5は内ぐもりの磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。器面は丁寧に研磨されている。6は板作りの塩壺で、DZ-51-abに分類される。

7～15は人形、ミニチュア、遊戯具である。SK293出土の飯事道具3点にも「と」の墨書があることから、遺構は離れて存在するが同一屋敷内の遺構であることから同一人物の飯事道具であったと推測される。7はミニチュアの片口でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形で注口部

は貼付け、内面から外面肩まで柿釉が施されている。高台内に墨書で「ト」とある。8はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。上面には梅花文を描いている。花卉は白色で塗り、花卉中央を緑色で装飾し施釉している。9はミニチュアの碗でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で裏面は指頭押圧痕顕著である。また、表裏に雲母が顕著に観察される。10、11はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色で、型押成形で合口は貼付である。11は火を受けている。緑色の彩色が観察できる。12は黒の碁石で那智黒といわれているものである。13はミニチュアの播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。底部に「と茂」と墨書されている。SK293と遺構間接合している。14はミニチュアの皿でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形後に型打成形をし、陽刻文様を施している。外面には前工程のロクロ目が観察される。底部は中央に向かい凹んでいる。皿は六角形で見込みには鳳凰、6区画された側面には、橘と飛雲が浮文されている。鳳凰には赤色と焦茶色の彩色が観察される。上質の皿である。内外面施釉している。15は壺掲げ聖人かDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）中実である。衣は緑釉、壺と髭は鉄釉で彩色されている。底部は僅かに凹み穿孔されている。

SK254（Ⅲ-50 図）

1は肥前系磁器染付碗で、JB-1-dに分類される。文様は型紙刷り及び手で描かれている。2は灰釉色絵半球碗で、TD-1-bに分類される。胎土は堅緻な灰褐色を呈し、文様は緑、赤絵具で笹文が描かれている。高台外周は面取りしている。

3は行平でDZ-61に分類される。胎土は鮮やかな橙色系を呈し、ロクロ成形で注口は貼付けている。内面は透明釉、外面は鉄釉で施釉している。

SK258（Ⅲ-50 図）

1～3は人形とミニチュアである。1はミニチュアの磁器碗でJB-61に分類される。型押成形で、外面には蓮弁を付している。口縁部は厚く平坦である。2はミニチュアの磁器の蓋でJB-61に分類される。型押成形で、摘みは貼付けている。文様の葉は金色で縁どられ、青緑に塗られている。裏面の縁部幅は均一でなく、滑り難くするため釉を剥ぎ取っている。3は兎でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）中空で、無釉である。両耳、尾は差し込み式と思われ径5～6mmの孔が穿たれている。SK293と遺構間接合している。

SK259（Ⅲ-50 図）

1は肥前系磁器染付皿で、JB-2-oに分類される。胎土は灰白色を呈し、呉須の発色もやや不良である。

2は遊戯具の土玉でDZ-57に分類される。

SK260（Ⅲ-51 図）

1は景德鎮窯系磁器粉彩十錦手碗で、JA1-1に分類される。黄緑の地に紅、白、黄緑で草花文が上絵付けされている。2は瀬戸・美濃系碗で、JC-1-dに分類される。文様は濃紺色の地呉須を使用し描かれている。3は肥前系染付磁器碗蓋で、JB-00-aに分類される。「成化年製」の銘款が書かれている。4は染付磁器香炉・火入れで、JB-9に分類される。高台、内面下半は釉が拭き取られている。見込み中央はまき砂が施されている。中央は植木鉢に再利用するため穿孔しようとして破損した後に、パーツとなった3つ部品それぞれに異なる調整が加えられた後、焼継によって接合されたと思われる。5は瀬戸・美濃系染付磁器水注で、JC-27に分類される。呉須は明るい青に発色しており、文様も緻密に描かれている。6は瀬戸・美濃系柿釉徳利で、TC-10-gに分類される。法量は二

合半と推定される。底部は釉が拭き取られている。7は灰釉脚付き油受け皿で、TD-40-aに分類される。8は透明釉の油受け皿で、DZ-40-bに分類される。9はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。器面には部分的にススが付着している。

SK291 (Ⅲ-52 図)

1は肥前系染付碗で、JB-1-oに分類される。文様は素書で丁寧な施されている。胎土は白色である。2は瀬戸・美濃系染付碗で、JC-1-aに分類される。呉須は鮮明な青色に発色している。3は染付散り蓮華で、JB-20に分類される。

4は京都・信楽系の灰釉碗で、TD-1-bに分類される。高台は丸く削り出され、底部も施釉されている。丁寧な作りである。5は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利で、TC-10-cに分類される。胴部には「三キ」?と列点状の釘書きが刻されている。ひび、欠損もない完形である。6は土瓶の蓋でおそらくTI-00に分類されると考えられる。型作りの蓋に獅子のつまみが貼り付けられている。7は柿釉油受け皿で、TC-40-cに分類される。ひび、欠損もない完形である。8は灰釉脚付き油受け皿で、TD-40-aに分類される。表面はややざらざらしており、二次的な火熱を受けたことが推定される。

9は橙褐色を呈する土師質の鉢で、DZ-5-aに分類される。

10~18は人形、ミニチュア、遊戯具である。10、11はミニチュアの挿鉢、焜炉でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で彩色、施釉されている。10の内面は白色で彩色し、梅花の花芯は緑色で描き全体を施釉している。11の焜炉の内部構造は、サナは別作りで貼付けている。またサナには鍋や薬缶を置くための爪が3箇所は貼付けられている。風口はヘラで切り取り開口している。外面2箇所に桃色と緑色で梅花文様を描いている。また所々に同様の色彩の花弁を散らしている。サナ部と底部をのぞき施釉している。12は釣り人を乗せた蛙でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(上下合わせ)中空で、目、手足は貼付である。目は白と焦茶で描いている。腹部は大きな穿孔があり、白色で、背中と足の部分は緑色で彩色されている。背中に釣り人を貼付けていた痕跡が観察される。13はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、白色と施釉の痕跡が観察される。14は泥面子でDZ-55に分類される。丸に二引き歌舞伎役者の片岡家家紋か。15は急須でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形(上下合わせ)で、注口、把手、脚3箇所は貼付である。外面は全体を白色で塗り、体部に赤色と焦茶で梅の枝を描き施釉している。16は犬でDZ-60-iに分類される。17の人形はDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)中空で、無釉である。体部に白色が観察される。右手に何か抱えており手習い娘人形か。18は鯛乗り恵比寿でDZ-60-cに分類される。胎土は白色系で、型押成形(前後合わせ)で中空、振ると音がでる構造である。雲母が顕著で朱色の彩色が僅かに観察できる。

SK292 (Ⅲ-52 図)

1は染付の鍋島七寸皿で、JB-2-nに分類される。裏文様は牡丹唐草文で、ややラフに描かれている。大橋氏によると裏文様牡丹唐草文は幕府への月次献上品であると推定されており(大橋2001)、また、文様の描き方から後期の製品であろうと思われる。2は景德鎮窯系坏で、JA1-6に分類される。体部には生地を透かしにし、釉で透かし部分を埋めるいわゆるホタル手の技法で作られている。「成化年製」の銘款が書かれている。

3はピラ掛けの小碗で、TH-1-bに分類される。高台は右回転の渦巻高台である。4は半筒のせんじ碗で、TD-1-iに分類される。体部には鉄絵で松文?が描かれている。見込み中央には3箇所のピン痕が確認できる。高台外周は面取りされている。5、6は京都・信楽系の灰釉碗で、5がTD-1、6がTD-1-gに分類される。5は全体に釉むらがあり、京都・信楽系陶器にしては全体が緑がかって

いる。肥前産の可能性もあるか？。法量、器形が肥前磁器半球碗（JB-1-f）に近似している。ともに細かい貫入が確認できる。7、8は型作りの急須の蓋と身で、TZ-16に分類される。胎土は堅緻な暗灰色を呈し、器面は灰褐色の砂が付着したような不透明の釉薬が施されている。注口の取り付け部には小穴が3箇所穿たれている。

9、10は白色土師質の急須の蓋と身で、9はDZ-16、10はDZ-00に分類される。器面は非常に丁寧に研磨されており、胴部中位に8行にわたり漢字で書かれている。欠損、表面の剥落で全部の文字の判読はできないが、「新茶」、「山春」などが確認できる。底部は熱効果を高めるためか渦巻状に溝が付けられている。底部、体部下端にはススが付着している。蓋は内面を多角形様にケズリ調整を加えている。11はろうそく状のひょうそくで、DZ-44-dに分類される。灯心立て頂部に灯明痕が確認できる。12、13は土師質の器台状製品で、DZ-40-fに分類される。

14～30は人形、ミニチュア、遊戯具である。SK194とSK293と遺構間接合する。14、15はミニチュアの型皿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系である。14はミニチュアの六角鉢で型押成形で、彩色施釉されている。内外面は白色で塗り、見込みに赤色で文様を描き口縁部に緑釉を散らし装飾している。15は長皿で、型打成形され、外面には指頭痕が観察できる。無釉である。16はミニチュアの土瓶でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で注口、把手は貼付である。全体を白色で塗り、山水文様の山や舟を黒色で描き緑釉を流し掛けしている。17、18はミニチュアの焼締め陶器の播鉢で、TE-61に分類される。胎土は灰赤褐色を呈し、ロクロ成形である。口縁部は内傾する。18の胎土は鮮やかな赤褐色を呈している。外面は縁帯下の釉を消し取り、体部には布目の文様を付している。見込み中央は横に一の字に描き、一の中央あたりに4本短い櫛目を入れている。20～23はミニチュアでDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。20はミニチュアの鉢で、口縁部は幅があり段差をもつ。内面は白色に塗り焦茶色で「いろ」と書かれており、また緑釉を散らして装飾し、内外面施釉している。21はミニチュアの天目台で、ロクロ成形後に中央の粘土を切り取って孔を開けている。白色で釘抜き文を二つ重ね描いている。全体に施釉している。台の上下面は擦れて釉が剥がれている。22、23はミニチュアの鉢で口縁部は大きく張り出し、22は赤色を塗っている。肩部は張り口縁にむかい内傾する。内部口縁際は擦れている。無釉である。釜形土製品同様、飯事道具の範疇ではないものの一つと思われる。24はミニチュアの南鐐二朱銀の銭貨でDZ-61に分類される。25は三味線弾きでDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で釉、帯、三味線、首部は貼付である。三味線の上部に竿を挿す孔が穿たれている。体部に白色が観察できる。底部は窪み穿孔されている。26～30の人形はDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）中空である。26は瘡瘡避けの「笹野才蔵」人形とおもわれる。26は拳遊びのダルマである。全体を赤く塗っていた痕跡が観察される。28は軍配持ち唐子である。頭部、軍配、手、舞掛け、衣の裾は白色で塗り緑色を重ね塗りしている。底部をのぞき施釉している。背面腰に「樂口」の刻印が押されている。29は犬でDZ-60-iに分類される。30は坐猫である。

SK293（Ⅲ-53～57図）

本遺構からは多量の陶磁器、土器、金属製品、生産関連遺物、石製品、木製品、ガラス製品などが出土している。また、SK140、SK200、SK252、SK258、SK291、SK292、SU294、SU295、SK296、SK297、SK358、SK402など多数の遺構と遺構間で接合関係にあり、SK293を含めたその周囲、年代に頻繁な土の動きがあったことを窺わせる。年代的には瀬戸・美濃系磁器幅広高台碗（1～4）、篆書文碗（5）、肥前系磁器蛇ノ目凹形高台皿（11、12）などの存在から下限は東大編年Ⅷd期にあたるが、肥前系磁器蛇ノ目凹形高台皿で高台高の低いタイプ（10）、瀬戸・美濃系端反碗の

高台高の高いタイプや銘款が入るものなど(9、16)などⅧa期に多く出土する器種や器形の製品も多く含まれており、陶磁器群は広い年代幅を有する。

磁器(1~20、26) 1は徳化窯系白磁碗で、JA3-1に分類される。口唇部は釉剥ぎされている。高台には型作りによるちぢれが確認され、無釉である。2~4は瀬戸・美濃系染付磁器端反碗で、JC-1-dに分類される。いずれも高台外周が接地面とする幅広高台に成形されている。4は高台の内側が施釉されている。2、3は透明感のある淡青色、4は濃紺色の呉須で文様が施されている。5は篆書文の染付碗でJB-1-dに分類される。6は小形の瀬戸・美濃系染付磁器広東碗で、JC-1-cに分類される。地呉須を使用している。7、8は染付端反碗で、JC-1-dに分類される。法量から飯碗として利用された可能性がある。ともに東大編年Ⅷc期以降に多く見られる文様である。9は染付端反碗の蓋で、JC-00-bに分類される。つまみ内には角銘が付けられており、本類では初期的な特徴が認められる。10~12は蛇ノ目凹形高台皿で、10がJB-2-j、11、12がJB-2-iに分類される。10、11は焼継で補修されており、底部裏には上絵で焼継屋のマークと思われる印が確認できる。13は白磁の型作りの紅皿で、JB-6-eに分類される。14、15は肥前系磁器染付皿で、14がJB-2-q、15がJB-2に分類される。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎされており、釉剥ぎ部には白色泥土が塗布されている。16は染付鉢で、JB-5-bに分類される。口唇部は波状に成形されている。口唇部帯文には墨弾きで櫛状文が白抜きされている。17、18は薄手坏で、JC-6-dに分類される。17は上絵で「魚重」と書かれている。18は鮮明な青色に発色する呉須で染付が施されている。19は肥前系染付磁器御神酒徳利で、JB-11-bに分類される。20は染付仏飯器で、JB-8-cに分類される。胎土はやや褐色がかっている。26は染付爛徳利で、JC-4に分類される。文様の花文中央には白土が使用されている。

陶器(21~25、27~38、40) 21は薄手の型作りのカップで、TA8に分類される。胎土は堅緻で、明褐色を呈する。文様は型でレリーフ状に細かく付けられている。器面全体に暗茶褐色の顔料が塗布されている。国内での類例は管見の限り確認できなかった。22は灰釉呉須絵のいわゆる御室碗で、TC-1-dに分類される。図示した文様部位の反対側にもわずかではあるが呉須の痕跡が確認できる。23は白土と鉄で折枝梅花文が描かれた端反碗で、TC-1-zに分類される。胎土は明褐色、内面には白土を塗布している。24は灰釉鉄絵碗いわゆる小杉碗で、TD-1-dに分類される。外面には簡略した松文様が描かれている。25は灰釉鳥餌入で、TC-30に分類される。底部裏と口唇部は無釉である。27は灰釉藁灰釉流し爛徳利である。型で作られており、胴部は不規則に凹凸が確認される。底部裏には布目痕があり、胴部下端には底部を接合した痕跡が認められる。胎土は堅緻な灰褐色を呈し、いわゆる大堀相馬系陶器の砂焼のように所々鉄分が吹き出している。底部には楕円枠に「まいこ」の刻印が確認でき、播磨舞子焼であることが推定できる。釉は内面にも施されている。28は焼締めの徳利で、TE-10に分類される。胴部には3箇所の窪みがあり、その一つに布袋が貼り付けられていることから、布袋徳利といわれるものである。胎土は赤褐色を呈し、焼成はそれほど良好ではない。器面には泥土が塗布され、より赤っぽくなっている。底部裏には実測図の様な刻印が押印されている。29は灰釉二合半徳利で、TC-10-cに分類される。胴部には列点状の釘書きで「高サキ」と刻まれており、本郷追分の高崎屋のものであると確認できる。全く欠損のない完形である。30は灰釉一升徳利で、TC-10-eに分類される。31は灰釉双耳壺で、TC-15に分類される。32は銹絵染付香炉・火入でTD-9-cに分類される。文様は練込風の鉄絵に鉄と呉須で松原が描かれている。底部には「錦光山」が刻印されている。また、「小」と墨書されているのが確認できる。内面下半および見込み中央にはススが付着している。33、34は鉄釉半胴甕で、TC-15-aに分類される。ともに底部中央には外面からの打撃によって孔が穿たれ、植木鉢として利用したことが看取できる。

33 は口唇部に推定 4 箇所（遺存 3 箇所）、34 は口唇部に推定 5 箇所（遺存 4 箇所）、見込み 3 箇所のトチンの痕跡が確認できる。35 は褐釉片口鉢で、TC-23-b に分類される。表面の釉は焼成不良のため、釉がやや不透明になっている。見込みに 3 箇所のトチン痕が確認できる。36 は鉄釉土瓶の蓋で、TZ-00-e に分類される。胎土は堅緻で、暗赤茶色を呈している。表面は細かい凹凸が付けられ、外面に釉が施されている。内面には「陶和吉」の刻印が押されている。37 は横手の急須で TD-16 に分類される。茶葉蒸し用途の急須にしては法量が大きいこと、底部には明瞭な被熱痕が認められることなどから、土瓶風の直接火にかけるような使用が想起される。胎土は極めて緻密で黄白色を呈し、器面には細かい貫入が確認できる。文様は呉須、鉄、白土、緑釉で流水、芦原、鴨が描かれている。底部裏には隅丸角枠内に「寶山」の刻印が認められる。口唇部、底部、注口端部は無釉である。蓋受けの一部には張り出し、身の口唇部の一部には切り欠きを設け、蓋が使用時に落ちないように工夫されている。38 は堺系焼締め播鉢で、TL-29 に分類される。見込みにはややラフであるが、3 条の櫛目が確認され、いわゆる三角パターンの崩れたものと判断できる。40 は灰釉脚付き油受け皿で、TD-40-a に分類される。焼成不良のせいか釉の一部が白濁している。

土器 (39、41～52) 39 は鉛釉の行平鍋で DZ-42 に分類される。胎土は軟質で橙褐色を呈し、透明な低火度釉が施されている。底部には光沢の無い釉が施され、底部脇 3 箇所に短い脚が貼り付けられている。被熱の痕跡が認められる。41 は硬質瓦質の風炉火鉢で DZ-31-h に分類される。口唇部には上からの切り込みがされ、内面上位には 3 基の円錐状の張り出しが付けられている。また、底部には半球形の脚が 3 基貼り付けられている。器面は横方向の沈線によって文様帯が区画され、ミガキ、押形文などが施文されている。内面の一部には火を受けた痕跡が認められる。42 は白色土師質かわらけで、DZ-2 に分類される。見込みには松と翁が型によって陽刻されている。同手の製品は SK330 から出土している。断定するには慎重を要すると思われるが、生産資料としては高知の尾戸窯から類例が確認されている。裏面には「玉子焼」と墨書されている。体部内外面には横方向のナデ、底部は一定方向のケズリ調整がされている。43 は土師質の鉢で DZ-5 に分類される。底部には径 10mm の孔がおそらく二次的に穿たれている。44 はロクロ作り、45 は板作りの塩壺で、44 は DZ-51-w、45 は DZ-51 に分類される。45 の胴部下半はすぼめられており、底部は一つの粘土塊でラフに作られている。胎土には金雲母が多く含まれている。46 は塩壺の蓋で、DZ-00 に分類される。内面は指頭による調整で、外周が受け状に張り出している。47 は土師質の小壺で、DZ-15 に分類される。底部は左回転の糸切り離し。胎土は江戸在地系のかわらけなどの製品一般に見受けられる明褐色を呈する。48 は土師質の鉢で DZ-5-a に分類される。49 は土師質の筒形製品である。ロクロ目は内面下半に顕著で、その他は平滑に調整されている。底部は糸切りはナデ調整によって消され、外周にはわずかに高台風の段が確認できる。50 は火消し壺の蓋で、DZ-00-h に分類される。外側面の一部には判読はできないが、墨書が確認できる。51 は土師質、52 は瓦質の植木鉢で、それぞれ DZ-21-a、DZ-21-b に分類される。52 の外面上半はやや黒ずんでいる。

人形・ミニチュア・遊戯具 (53～114) SK252 出土の播鉢と SK358 出土の皿が遺構間接合している。SK252 と接合した播鉢の底部には「と茂」と墨書されている。また、同一人物のものと思われる「と」と墨書された飯事道具が 3 点ある。他に男子の名で「三吾」と墨書された箱庭道具の石垣が出土している。刻印では亀甲の中に文字（判読不可）付された飾り馬が出土している。飯事道具の多くは白色系の胎土のものが多い。また本遺跡で基石形土製品が最も多く出土した遺構である。53、54 はミニチュアの磁器の碗で JB-61 に分類される。55、56 はミニチュアの碗で DZ-61 に分類される。2 点とも胎土は白色系で内面は緑釉で彩色されており、高台内に「と」と墨書されてい

る、56の体部には「六ツ口」と墨書されている。ツの下の文字は判読できない。SK252から出土した片口「ト」、播鉢「と茂」の墨書と関連するものと思われる。57、58はミニチュアの碗でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。2点とも口縁が内傾している。58は欠けた穴の周辺を擦って加工している。59はミニチュアの磁器の皿でJB-61に分類される。畳付は無釉である。60はミニチュアの型皿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型打成形で彩色、施釉されている。8つに区切られた内面は格子文様で、見込みには緑と白色に彩色された重ね扇が付されている。61～63はミニチュアの型皿でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型打成形で高台は貼付けである。裏面には掌握痕が顕著に観察できる。61は見込みには煎茶道具尽くしの文様が付され赤色、焦茶色の彩色が観察でき、上面のみ施釉している。62は菊若しくは向日葵形をした皿で、上面は緑釉と黄釉で彩色され、裏面はナデ調整と底部脇3箇所を重ね焼の痕が観察できる。施釉されている。63は把手付き六角皿で、縁には連続文を付け丸文を意識した中に菊は黄色に葉と縁はヨモギ色に彩色し上面のみ施釉している。裏面は押圧痕が顕著である。64はミニチュアの播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈しロクロ成形で、無釉である。65～67はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。65の胎土は白色系で、型押成形である。彩色は緑釉を散らし上面のみ施釉。66、67の胎土は橙色系で、型押成形で無釉である。66は五弁花の文様が施された蓋である。68、69は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。68は孔をもつもので、内面の孔の周りは僅かに高くなっている。ススは内面器壁に付いている。70はミニチュアの釜でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。内側の縁はヘラで調整している、内部底部は指頭圧痕、内外面に彩色時の下地に使用した白色が観察できる。作りは粗く歪んでいる。71、72はミニチュアの銚子でDZ-61に分類される。胎土は白色で、型押成形（上下合わせ）で、内面に指頭圧痕が観察できる。注口と把手、脚は貼付である。71の外表面は霰文様で無釉である。底部に「と」と墨書。72は上面、外面上部に印花文が施され透明釉で施釉されているが、上面の4箇所はさらに緑釉で装飾している。73、74はミニチュアの瓶でDZ-61に分類される。73の胎土は橙色系で、ロクロ成形である。体部上部は白色に塗り、黄色、緑色、焦茶色で文様を描いている。口縁部は摩耗して釉が剥がれている、底部は無釉である。74の胎土は白色系で、型作りである。胴部3箇所は親指大に凹ませ、その1箇所には布袋様が付され緑釉で彩色している。胴下部はケズリ調整し無釉である。75はミニチュアの硯でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型打成形で、上面には雲母が多く観察できる。また海、陸部全体に赤色が、陸部には擦痕、側面には型痕が観察できる。76は釣り猿でDZ-60-gに分類される。手捻り成形で、頭部、笠、手は貼付けである。右手にある孔は釣り竿を差し込むためと思われる。笠を貼り付けた痕が観察される。77は犬でDZ-60-iに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（左右合わせ）中空で足は貼付で、無釉である。78はぶら人形でDZ-60-fである。79は飾り馬でDZ-60-hに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（左右合わせ）で中空、無釉である。亀甲の中に文字の刻印が陽刻されている。80は狐でDZ-60-jに分類される。81は浮人形の鴛鴦でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で中空である。彩色は全体を白色に塗り羽は緑色と焦茶、頭部、嘴、目は焦茶色で描き施釉している。軽量である。82は唐子でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。83は御輿担ぎ童子でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、径9mmの土玉が入っている。白色と朱色の彩色が観察できる。84はミニチュアの灯籠でDZ-61に分類される。胎土は灰黒色（瓦質）で、底部が開口している。85はミニチュアの石垣の階段でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形で底部は大きくアーチ状を呈している。アーチ状の天井部に「三吾」と墨書。全体に透明釉を

施し所々を緑釉で装飾している。86は土鈴でDZ-58に分類される。型打成形で、摘み部は合わせた後捻り作出、開口部はヘラで切り取り作出している。87～90は泥面子でDZ-55に分類される。87は火焰宝珠、88は大極上、89は二番組ろ組の町火消しで「銚に駒」、90は「纏」文字である。91はミニチュアの二朱銀の銭貨でDZ-61に分類される。92は土玉でDZ-56に分類される。93～114は基石形土製品でDZ-56に分類される。94～95、102、110には黒色の彩色が観察できる。

SK294 (Ⅲ-57、58 図)

本遺構からは東大編年V～VI期とⅧb期の年代の遺物群が認められた。第Ⅱ章にも書いた理由により、本遺構の廃棄時に伴う遺物はV～VI期である可能性が高い。

1は肥前系染付磁器碗で、JB-1-fに分類される。胎土、成形、文様などから上質の製品である。2は染錦の筒形碗で、JB-1-lに分類される。器面には染付に緑、赤、金で文様が描かれている。器形が口唇まで直立すること、やや大振りであること、高台脇や見込み文様などから本類では古手の製品であると考えられる。3は二重網目文の染付碗で、JB-1-gに分類される。胎土は灰色がかり、呉須も発色が不良である。4は染付貼付高台の型皿で、JB-2-rに分類される。文様は摺絵と手描きを併用して花竹垣文が描かれている。型に糸切り細工によって高台が貼り付けられている。6は染付輪花皿で、JB-2-fに分類される。胎土は白色を呈し、呉須は鮮青色に発色している。見込み中央五弁花は手描きである。7は染付鉢で、JB-5-bに分類される。胎土はやや灰色がかり、呉須もくすんでいる。円枠に「金」の銘款が書かれている。

5は銚絵染付の小皿で、TD-2-cに分類される。見込みには白土、鉄、呉須で花文様が描かれている。高台はやや幅広で、外周を面取りしている。8は色絵碗で、TD-1に分類される。釉薬は不透明な灰白色で厚く施され、いわゆるひび焼風の貫入が全体に認められる。文様は草花文と銘款風のものの上絵で施されるが、呉須、赤、黄の他は剥落が激しく確認できない。胎土は緻密で、やや黄味がかかった白色を呈している。高台外周は面取りされている。9は灰釉呉須絵、鉄絵平碗で、TC-1-nに分類される。内面には敲打による釉の剥落が顕著に認められる。10は灰釉鉄絵の筒形碗で、TC-1に分類される。文様は柳文が描かれ、いわゆる柳茶碗に胎土、釉調、鉄絵具の色調などが類似している。内野正氏が分類したYⅢ形式に該当する製品であろう(内野2005)。11は灰釉鉄絵せんじ碗で、TC-1-lに分類される。12はいわゆる柳茶碗で、TC-1-gに分類される。文様や器形から本例は先述した内野氏の分類ではYI-1型式あるいはYI-2型式あたりに該当しようか?。13は色絵碗で、TD-1-kに分類される。器形は異なるが、釉調や文様の描法などは8に近似する。体部はロクロによる段が明瞭に付き、中位では3箇所凹みを設けている。釉薬は不透明な灰白色で厚く施され、いわゆるひび焼風の貫入が全体に認められる。草花文、銘款風の文様が上絵で施されるが、呉須、赤、黄、緑の顔料が確認できる。胎土は緻密で、やや黄味がかかった白色を呈している。高台外周は面取りされており、高台内は左回転の渦巻高台風に削られている。14、15は灰釉銚絵碗で、TD-1-bに分類される。ともに畳付外周面取りされている。16は灰釉緑釉流しのいわゆる黄瀬戸鉢で、TC-5-iに分類される。櫛描、緑釉流しもラフに施されている。見込みには4箇所のトチンを置くための円形の釉剥ぎが確認できる。17は灰釉二合半徳利で、TC-10-aに分類される。口唇部の折り返しは頸部と一体化していない。18は灰釉植木鉢で、TC-21に分類される。19は灰釉鉄釉掛け分け仏花器で、TC-22-bに分類される。20、21は京都・信楽系陶器の銚絵染付銚子で、20はTD-00、21はTD-27-aに分類される。文様は鉄、呉須、白土で笹、梅花文が描かれている。底部は二次的な被熱の痕跡が認められる。22は志戸呂の鉄釉油受け皿で、TF-40に分類される。

23、24は土師質のかわらけで、DZ-2-bに分類される。25は小形の土師質の火鉢で、DZ-31-a

に分類される。底部は基筒底を呈し、胴部は押型文が巡る。口縁部は丁寧に研磨されている。26は土師質の円筒形の火鉢で、DZ-31-1に分類される。器面には押型文が巡り、口縁部は丁寧に研磨されている。内面上半から口唇部にかけてはススが付着している。また、口唇部内側はほぼ全周にわたり敲打痕が確認できる。27は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。28は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が確認される。29は「泉湊伊織」の刻印を有する板作りの塩壺で、DZ-51-gに分類される。体部には相対して下半に径10mmと上位に径3mmの孔が2箇所穿たれている。30はロクロ成形の塩壺で、DZ-51に分類される。刻印の存在は確認できるものの表面が全体的に剥落しており、判読できない。31はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。口唇部内側に受け状の突帯があり、ロクロ成形塩壺のうち古いタイプであろう。

32～35はミニチュアである。32、33はミニチュアの陶器の碗でTD-61に分類される。胎土は黄白色を呈している。また、いずれも貫入がみられる、高台は無軸である。33は外面に鉄絵で文様が描かれている。34はミニチュアの土製の碗でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。内外部とも緑釉で装飾されているが、高台は無軸である。35はミニチュアの磁器の皿で、JB-61に分類される。胎土は光沢感のある灰色で、内外面に貫入がみられる。畳付は無軸である。

SU295 (Ⅲ-59 図)

本遺構の覆土は埋没過程に違いが認められた。最下層から2層までは本遺構廃棄時の埋土。最上層の1層は天井崩落ローム層の上層に堆積していることから、1層に共伴する遺物の年代である東大編年Ⅷd期段階に天井が陥没し、1層が新たに埋められたと推定できる(Ⅱ-41、42図参照)。遺物実測図は、このような状況から1層出土の本地下室の廃棄時に伴うものではない遺物を「SU295上」、それ以下から出土した廃棄時に伴う遺物を「SU295」に分けて掲載した。

1はいわゆる腰鍔碗で、TC-1-uに分類される。器形、鍔釉の状況から本類でも古いタイプになると考えられる。2は灰釉脚付きの油受け皿で、TD-40-aに分類される。3は白土を塗布した上に文字が書かれている皿で、DZ-2に分類される。4は「泉州磨生」の刻印が押されている板作りの塩壺で、DZ-51に分類される。内面には布目痕が明瞭に残る。5は瓦質の箱庭道具で、DZ-5-bに分類される。見込み間仕切りは欠損している。

SU295上 (Ⅲ-59～62 図)

1は肥前系磁器染付碗で、JB-1-tに分類される。文様は非常に緻密に描かれている。焼継している。2～4は染付端反碗で、JC-1-dに分類される。3の花文様は筆ではない印判様の道具によって付けられていると思われる。4は幅広高台で、釉薬が青みがかっている。5は染付湯呑碗で、JC-1-eに分類される。葉およびコウモリ文様は毛彫りの上に呉須でダミを施している。6、7は染付碗の蓋で、6がJC-00-b、7がJB-00-aに分類される。8は染付皿で、JC-2-bに分類される。文様は細かく描かれ、呉須は鮮青色に発色している。9～14は肥前系染付皿で、9がJB-2-q、10が志田大皿でJB-3-e、11、12がJB-2-e、13がJB-2-j、14がJB-2-iにそれぞれ分類される。11は焼継によって補修されている。15は染付杯で、JC-6-aに分類される。文様は細かく描かれ、呉須は鮮青色に発色している。焼継によって補修されている。16は小形の御神酒徳利で、JB-11に分類される。17は薄手の坏で、JC-6-dに分類される。見込みには「江戸一」、「高寄政」などの文字が赤、黒で書かれ、駒込追分町の高崎屋の酒杯であることが看取できる。また、口唇には口銹風に黄色の顔料が塗布されている。18は染錦の段重で、JB-13-cに分類される。文様は染付の圏線と赤、金で描かれている。焼継による補修痕が確認できる。

19～21は京都・信楽系灰釉陶器碗で、19がTD-1-g、20、21がTD-1-bに分類される。20、

21 は典型的な本類と比較するとやや大振りであり深い。胎土は非常に堅緻で、灰白色を呈している。22 は褐釉碗で、TF-1 に分類される。口唇や体部には凹みが付けられている。底部裏には長方形枠の中に「志戸呂」の刻印が確認できる。23 は灰釉摺絵皿で、TC-2-e に分類される。文様は鉄で施され、見込みには3箇所の特チン痕が確認できる。24 は灰釉餌入れで、TC-30 に分類される。底部裏は外周のみ糸切り痕をナデ消している。25 は灰釉の土瓶で、TZ-34-g に分類される。把手は山形のもの貼り付けられており、注口はいわゆる鉄砲口である。底部は二次的な被熱を受けている。26 は灰釉呉須絵いわゆる太白手皿で、TC-2-t に分類される。蛇ノ目凹形高台である。27 は灰釉灯明皿で、TD-2-a に分類される。見込みには3本で1条のひっかきが確認できる。また、ピン痕が3箇所に認められる。裏面一面にススが付着している。28 は灰釉香炉・火入れで、TC-9-a に分類される。ひびもなく、全く欠損していない。底部脇に輪状の窯着痕が確認できる。29 は灰釉鉄絵爛徳利で、TD-4 に分類される。30 は灰釉二合半徳利で、TC-10-c に分類される。胴部には列点状の釘書きが確認される。31 は柿釉糸目土瓶の蓋で、TC-00-g に分類される。受け内には長方形枠に「駄知」の刻印があり、美濃の駄知で生産されたものと知られる。32 は焼締め土瓶の蓋で、TZ-00 に分類される。宝珠状の摘みがつく、落とし蓋である。裏面には「八十文」の墨書が認められる。33、34 は格子状のシノギに鉄、呉須、白土で梅花文が描かれる蓋物で、33 は TD-13-d、34 は TD-00-h に分類される。

35 は土師質の涼炉で、DZ-49 に分類される。胎土のきめはやや粗く、褐色がかかった白色を呈している。器面は丁寧なナデ、底部はヘラケズリである。胴部下半には風口があげられ、風口の上の頸部には「清風自在」と一文字ずつの刻印が押されている。内部は二重構造になっているが、内側の大部分は欠損している。口唇は平縁に成形されており、内面には3基の支えが取り付けられている。口唇および内面上位にはススが付着している。36 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。37 は DZ-52-b に分類される。中央に径3mmの孔が確認できる。38 は透明釉の油受け皿で、DZ-40-b に分類される。表面は釉の剥落が顕著に認められる。39 は口縁部を輪花状に変形させた磨きかわらけで、DZ-2 に分類される。胎土は緻密で、褐色を呈している。見込みには墨、白土で、梅花文が描かれている。底部裏は平滑に研磨されている。40 は瓦質の鉢で、DZ-5 に分類される。口唇部は端反っており、中央に穿孔はないものの植木鉢としての用途が想定される。41 は瓦質の植木鉢で、DZ-21-b に分類される。底部中央には外側より径12mmの孔が穿たれている。42 は土師質の丸底ほうろくで、DZ-47-a に分類される。口縁部の立ち上がりが浅く、19世紀以降の製品であろう。43 は大形の火消し壺で、DZ-31-i に分類される。内面中位付近を中心にススが付着している。

44～80 は人形、ミニチュア、遊戯具である。本地点の中では人形、ミニチュア類が二番目に多く出土した遺構で、子どもを対象としたものが多いなか、64のように女性性器を表現した笑いものの人形なども出土している。44 はミニチュアの白磁の碗で JB-61 に分類される。45、46 はミニチュアの碗と鉢で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、型打成形である。45 は内外面を全て白色に塗り、見込みに赤色で文様を描き、口縁部3箇所に緑色を付け施釉。胴下部から高台を白色に塗ったあと灰色を塗重ねしている。46 は内外面を白色に塗り、外面に白色と黒色で蝶を描き施釉している。47 は陶器の碗で TD-61 に分類される。高台は高く、畳付は広く無釉である。細かい貫入が観察される。48、49 はミニチュアの皿と播鉢で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系である。48の変形皿は型打成形で、彩色、施釉されている。口縁部を白色に塗り、内面には草花文様が付され白と緑色で彩色している。49の播鉢はロクロ成形で総釉、見込みの播目は緑色に彩色されている。50 はミニチュアの銚子で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形（上下合わせ）で注口と

把手、脚3足は貼付である。透明釉を施釉したのち上面部と注口に緑釉を散らして装飾している。胴部中央から底部にかけ無釉である。底部中央には文字が墨書されている。51はミニチュアの瓶でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で全体を白色に彩色し、赤と緑色で草花文様を描き施釉している。52、53はミニチュアの瓶でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）である。52は柿釉が施されているが、胴下部から底部は無釉である。器壁は薄く内面は指頭押圧痕が観察できる。53は濃い緑釉で装飾されている。54はミニチュアの陶器の蓋でTZ-61に分類される。胎土は灰色と褐色が混在したもので、型押成形で合い口は貼付で無釉である。55はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形である。上面には菊を赤と緑色で彩色し施釉、底面は無釉である。56はミニチュアとしDZ-61に分類する。胎土は橙色系で、型押成形で、5箇所穿孔がある。器種は明確でないがおそらく、焜炉やカマドなどに置く五徳同様のものと思われる。上面には雲母が観察でき、裏面には指頭痕が観察される。57はミニチュアの焜炉かDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。穿孔された把手は貼付で無釉である。僅かに黒色が観察できる。把手が付いていることから移動式の道具であろう。また、内部には受けが付いている。58は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。胴部は丸く、底部は低く鍔は下方に傾いている。59は恵比寿様でDZ-60-cに分類される。胎土は橙色系で、型押成形で裏面は平坦である。60は焚き口が二つのミニチュアのカマドでDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で、上部施設は貼付である。台の内面は指頭押圧痕が顕著でナデ調整痕がみられる。作りは粗いが硬質感がある。61は三味線弾き人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）中実である。全体を白色で塗り、帯は貼付で赤と白色の縞模様、着物は緑色、三味線の竿は黄色で彩色し施釉している。底部は穿孔されている。62は不明の人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で無釉である。大きな尾をもつ動物と思われ、被っている四角い枱の上部に穿孔があり、銅線の断片が残っていた。裏面は凸凹で、孔は斜め下から穿っている。白色の彩色が観察できる。63は馬でDZ-60-hに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。台の底部はドーム状に凹ませている。64は笑いものの人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）中空で無釉である。親子で排尿の姿態の人形で性器の表現もある。母親の着物の腰部は四方襷文様で白色と赤色の彩色が観察でき、また他の部位にも白色が観察できる。65は魚でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）中空である。全体に雲母がみられ、赤色の彩色が観察できる。振ると音がでる構造になっている。66は福助でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。白色や朱色の彩色が観察できる。67は泥面子でDZ-55に分類される。「纏」の文字。68～80は基石形土製品でDZ-56に分類される。

SK296（Ⅲ-62図）

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器を中心に多く出土しているが、調査時において隣接するSK292と一部混在した。

1、2は肥前系磁器染付碗で、1はJB-1-e、2はJB-1-iに分類される。1は焼継による補修痕が確認できる。3は白磁の輪花皿で、JB-2-dに分類される。見込み側面には型抜きの唐花状の浮文が付けられている。見込みには不定方向の擦痕が多く認められる。焼継による補修痕が確認されるが、本例の生産年代は17世紀末～18世紀前葉と考えられることから伝世したものが、後に破損、補修したものと考えられる。4は染付御神酒徳利で、JB-11に分類される。5は京都・信楽系の筒形碗で、TD-1に分類される。器面は白土を施した上に鉄、呉須で文様が描かれている。高台は幅広に成

形されている。6、7は色絵の急須で、TZ-16に分類される。白土の上に鉄、緑釉、褐釉で風景を描いている。また、把手付近には「道八」の文字が書かれている。

8はミニチュアの扇形をした型皿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型打成形である。内面中央に橘が施され、白色で彩色したのち右側を緑色で重ね塗りし施釉している。

SK297 (Ⅲ-63 図)

1は肥前系磁器染付碗で、JB-1-eに分類される。胎土はやや灰色がかっている。2~6は瀬戸・美濃系磁器碗で、2~4はJC-1-d、5、6はJC-1-eに分類される。加色法は2は青磁染付、3~5は染付、6が色絵である。2の見込みには木型打込の後、ダミが施されている。4の高台は幅広に成形されている。5の花文様は毛彫りの後、ダミが施されている。7は染付輪剥皿で、JB-2に分類される。胎土はやや灰がかり、呉須の発色もくすんでいる。8、9は瀬戸・美濃系染付皿で、8はJC-2-b、9はJC-2-cに分類される。8は木型打込の後、ダミが施されている。

10は灰釉鉄釉掛け分けのいわゆる腰鍔碗で、TC-1-uに分類される。器高も低く、本類の中でも年代が下がる製品であろう。11は灰釉坏で、TC-6に分類される。高台脇の一部に赤色顔料が付着している。12は灰釉灯明皿で、TD-2-bに分類される。口唇部の一部に灯心痕が確認できる。13は小形の鉄釉徳利で、TC-10-gに分類される。釉、露胎部がややくすんでおり、二次的な火熱を受けている可能性がある。ひび、欠損もない完形である。14は外面錆釉にトビガンナ、内面灰釉の鍋で、TZ-33に分類される。外面体部には相対して上に刻みが入った板状の把手が貼り付けられている。底部には全面にススが付着している。15は鉄釉糸目土瓶で、TC-34に分類される。器面の鉄釉は一般的な糸目土瓶よりやや黒ずんでおり、二次的な火熱を受けた可能性がある。注口は根本に近い部位から欠損しているが、欠損部には焼継の痕跡が認められ、陶器での焼継例として珍しい。底部脇には角枠内に「駄」、丸枠内に判読不能の2つの刻印が確認でき、美濃の駄知で生産されたことが推定できる。茶葉留めの穴は3箇所確認できる。16はやや小形の三彩土瓶で、TZ-34-cに分類される。文様は白土の上に鉄、緑釉、黄釉で描かれている。底部付近では二次的な火熱を受けた痕跡が認められる。17は堺系の焼締め播鉢で、TL-29に分類される。見込みの播目は三角パターンである。18は小形の瀬戸・美濃系錆釉播鉢で、TC-29に分類される。胎土には鉄分が吹き出した黒斑が認められ、赤津の製品であろうと推定できる。

19は口クロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。器形からおそらく無印であろうと思われる。20は土師質の鉢で、DZ-5に分類される。表面には鉛釉が施されているが、灯明皿などの製品より透明感が少ない。口唇の一部には灯心痕が確認でき、灯火具に利用されていたことがわかる。また、見込みには赤色顔料が付着している。

21、22はミニチュアと人形である。21は梅花形した型皿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈し、型打成形である。内面は下地に白色を塗り、緑色を重ね塗りし施釉している。外面は無彩、無釉である。22は天神様でDZ-60-bに分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形(前後合わせ)で中空である。台座は赤色、袍と指貫には黒色が観察される。

SK298 (Ⅲ-63、64 図)

1は瀬戸・美濃系染付磁器碗で、JC-1-dに分類される。高台は幅広で、無釉である。呉須は鮮青色に発色しており、瀬戸・美濃の地呉須とは異なったものである。同手の製品は、SK252、SK293などからも出土しており、これらの遺構では遺構間の接合関係も多頻度である。本例もセットで所有したものと推定できる。2は染付坏で、JC-6-fに分類される。呉須は西洋コバルトを用いており、近代初頭の製品であろう。3はいわゆる江戸絵付の坏で、JC-6-dに分類される。高台、底部の

銘款は染付、見込みは上絵付けである。4は三彩土瓶で、TZ-34-cに分類される。文様は鉄、緑釉で描かれている。注口部には、3個の小穴が穿たれている。紐状の把手が付けられている。5、6は手付きの鍋で、5はTZ-00、6はTZ-33に分類される。外面は白土の上に呉須で文字が書かれており、内面は灰釉が掛けられている。底部はススが付着している。7は鉄釉土瓶でDZ-34に分類される。胎土はやや粒子の粗い褐色を呈し、土師質である。釉はおそらく低火度釉で、全面に掛けられている。8は緑釉の瓶掛で、TC-31-aに分類される。頸部はシノギ、胴部は押型と獣面把手の貼り付け、底部脇は押型で文様が付けられている。内面と底部裏は錆釉が化粧掛けされ、底部裏には3箇所、刺突がされている。見込みには7箇所のトチン痕と、底部裏には輪状の窯着痕が認められる。口唇内側はキセルによると思われる敲打痕が巡っている。

9、10はミニチュアと人形である。9は基石形土製品でDZ-56に分類される。黒色が観察される。10は人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形（前後合わせ）中空で、無釉である。内面には指頭押圧痕と布目が観察される、おそらく布を指に巻き押圧したものと思われる。刻印と思われるものが付されている。

SK299（Ⅲ-64図）

1は白濁色を呈する型吹きガラス製の坏である。器面はマットな感じの微細な凹凸があるが、内面は光沢がありきわめて平滑である。口唇部は平面に調整されている。内面は若干銀化している。

2～8は磁器である。2は粉彩の坏で、JA1-6に分類される。器面は黄地にひだ状文の掻き取り、桃色の花が上絵付されている。高台内は染付で角椀銘が書かれている（判読不能）。上絵の剥落が著しい。3、4は瀬戸・美濃系碗で、3はJC-1-e、4はJC-1-dに分類される。3の文様は連続した横方向の沈線に、文様の周囲をダミ付けするように白抜きで梅花と文字を描いている。4は毛彫りで施文されている。5は肥前系染付皿でJB-2-jに分類される。蛇ノ目凹形高台の器高が低いタイプである。6は染付植木鉢で、JB-21に分類される。7は染付八角鉢で、JB-5-eに分類される。焼継で補修されており、高台内には「本口」？と赤色の文字が書かれている。8は薄手の坏でJC-6-dに分類される。内面には赤、黄、青、金で桔梗文が上絵付されている。口唇部には金で覆輪が施されている。

9～13は陶器である。9は瀬戸・美濃系碗で、TC-1-zに分類される。絵付、成形、施釉ともラフに作られている。10は京都・信楽系の油受け皿でTD-49-bに分類される。油の流入部の切り欠きがわずかに欠損している他は完形である。11は京都・信楽系のおそらく茶漉しであろうと推定される。釉は内外面下半に灰釉が施されるほかは無釉である。体部下半から底部には外から内に向かって径2～4mm程度の孔が密に穿たれている。12は瀬戸・美濃系鉄釉徳利で、TC-10-gに分類される。口唇部がわずかに欠損している他は、完形である。13は堺系焼締め播鉢で、TL-29に分類される。見込みの播目は放射状に施されている。

14～17は土器である。14～16の胎土は褐色から橙褐色、17は白色を呈する。14は土師質の鉢でDZ-5-aに分類される。底部の穿孔はない。15は無銘のロクロ成形の塩壺でDZ-51-wに分類される。胎土は橙褐色を呈する。16は土師質のひょうそくで、TZ-44-cに分類される。口縁部下稜を有する部位に相対して径1mm程度の孔が穿たれており、孔の周囲には内外面に黄褐色の付着物が確認できる。17は堅緻な白色土師質の涼炉でDZ-49に分類される。器面は丁寧にナデが施されている。脚は多角形にカットされたものが貼り付けられている。口唇部には若干ススが確認できるが、顕著ではない。

18～26は人形、ミニチュア、遊戯具である。18はミニチュアの城でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（斜め合わせ）で中実、作りは粗い。白色が観察される。19は鳩笛でDZ-59に分類される。胎土は白色系で、型押成形で内面の翼部分は指大に凹ませている。息を吹き込む

部分は細い工具で突いて空けている。頭部は緑色、翼は緑色と黄色、尾翼と嘴は焦茶色で彩色し施釉している。20～26は碁石形土製品でDZ-56に分類される。21のみ黒色が観察される。24は赤みがかっている部分と褐色の部分になっている。裏面も同様である。

SE300 (Ⅲ-65、66 図)

1～7は肥前系磁器である。1～6は碗で、1、2、6はJB-1-d、3、4はJB-1-g、5はJB-1-fに分類される。1、2は「大明年製」の崩れた銘款が書かれている。1は主文様の松、梅花がコンニャク印判で描かれている。3、4は胎土、絵付ともラフである。7は坏でJB-6-aに分類される。松葉は手描き、花はコンニャク印判で描かれている。

8～16は陶器である。8はいわゆる京焼風陶器でTB-1-bに分類される。器面の釉は高台際まで施されている。9は刷毛目碗で、TB-1-gに分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、いわゆる打刷毛目である。10は輪壳の長石釉皿で、TC-2-mに分類される。高台は貼付高台である。11は灰釉皿でTC-2に分類される。底部は無釉である。検出時に図のように鉄滓が張り付いていた。何らかの生産に関係する用途が想定できる。12は志戸呂系鉄釉皿で、TF-2に分類される。胎土は堅緻で明茶褐色を呈する。底部は無釉である。13は瀬戸・美濃系摺絵の鬘水入れで、TC-25に分類される。文様は鉄絵具で施されている。14は鉄釉藁灰釉流しの五合徳利でTC-10-dに分類される。いわゆる尾呂徳利である。体部下方に焼成時に着いたと思われる溶着痕が確認できる。15、16は三島手の鉢でTB-5-bに分類される。胎土は堅緻で、15はやや赤みがかかる暗茶褐色、16は暗赤褐色を呈する。見込みは砂・胎土目積みの跡が15が7箇所、16が5箇所確認できる。15、16とも高台外周は深く面取りがされている。16は体部下半にも鉄釉が施されている。15の底部のケズリはロクロ右回転で行われた痕跡が認められる。

SK301 (Ⅲ-67、68 図)

1～17、19、20は磁器である。1～4は景德鎮窯系青花碗で、JA1-1に分類される。おそらく揃いの一括廃棄であろう。生地は白色を呈し、堅緻である。釉は肥前のものに比較すると青みが強い。銘は1、2は二重角枠銘、3、4は判読はできないが、四字文字銘である。5は瀬戸・美濃系染付端反碗でJC-1-dに分類される。焼継で補修されており、底部には薄く焼継屋の印を書いた痕跡と思われる赤色顔料が観察できる。6、7は肥前系の端反碗で、JB-1-nに分類される。ともに生地も白色を呈し、絵付も丁寧にされている。7には焼継による補修が確認できる。8は瀬戸・美濃系湯呑碗で、JC-1-eに分類される。高台外周は面取りされている。焼継による補修痕が確認できる。9、11は肥前系の広東碗で、JB-1-mに分類される。11の内面には三足ハマの痕跡が確認できる。10、12は端反碗の蓋で、JB-00-cに分類される。文様の類似性と法量的な整合から10は6の、12は7の蓋であろうと考えられる。13は瀬戸・美濃系端反碗の蓋で、JC-00-bに分類される。14は肥前系白磁皿で、JB-2-eに分類される。ロクロ成形の後、型打成形である。15は肥前系蓋物で、JB-13-aに分類される。生地、文様とも丁寧に作られている。16、17は瀬戸・美濃系御神酒徳利で、JC-11-bに分類される。17は欠損していない。19は肥前系蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2-lに分類される。文様は簡単に描かれている。20は蛇ノ目凹形高台の皿で、JB-2-jに分類される。

18、21～26は陶器である。18は京都・信楽系端反碗で、TD-1に分類される。胎土は堅緻で明茶褐色を呈する。文様は白泥と緑、黄絵具で梅花文が描かれている。見込みには3箇所のピン痕が確認できる。21はTD-1-cに分類される。変形文字が上絵付されている。一般的な同手灰釉端反碗より器壁が厚い。22は灰釉土瓶で、TZ-34-gに分類される。底部にはススが付着している。23は青緑釉の爛徳利で、TD-4に分類される。器面は釉の銀化が著しい。24は瀬戸・美濃系灰釉植木鉢で

TC-21 に分類される。25 は急須で TZ-16 に分類される。器面は、無釉に白泥で文字が書かれている。内面下半に灰釉が掛けられている。器面には下半を中心にススが付着している。26 は鉄釉油受け皿で、TC-40-c に分類される。受けの切り欠きは、両端を切れめを入れた後に中央を取る行程で行われている。口唇部の一部に小さな剥落が認められる他は欠損していない。

27～33 は土器である。27～29 は透明釉が施された油受け皿で、27、28 が DZ-40-b、29 が DZ-40-a に分類される。28 の底部中央には、径 6mm の二次的な穿孔が確認できる。30 は堆朱風の鉢形土製品で、DZ-5 に分類される。内型、外型で作ったものを表裏に貼り合わせ、型で作った脚を 3 基取り付けている。全面に赤漆を塗布している。浮文様は比較的凹凸があり、非常に丁寧に作られている。生地は緻密で橙褐色を呈する。漆による補修痕が観察される。31 は瓦質の植木鉢で DZ-21-b に分類される。32 は無銘のロクロ成形塩壺で DZ-51-w に分類される。33 は土師質のほうろくで DZ-47-a に分類される。内外面にはススが付着している。

34～48 は人形、ミニチュア、遊戯具である。亀甲の中に「亀」字が陽刻されている鉢と「てつ」と墨書された狛乗り童子が出土している。鶏や犬、兎、馬、猿などの動物の人形が多く出土している。34 はミニチュアの白磁の碗で JB-61 に分類される。シノギの間に 3 箇所菊花が付されている。型押成形で、高台は無釉である。35 はミニチュアの陶器の蓋で TZ-61 に分類される。胎土は灰褐色を呈し、型押成形で、合口は貼付である。白色で塗ったあと施釉している。貫入がみられる。裏面は無釉である。36 はミニチュアの蓋で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で、合口部は貼付である。37 は型皿で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型打成形で、高台は貼付である。高台内に二重亀甲に「亀」字の刻印が陽刻されている。外面には指頭痕が観察される。口縁部は輪花状で文様を施し、見込みには赤色に塗られた蟹が付されている。38 はミニチュアの磁器製の瓶で JB-61 に分類される。型押成形で、内面は指によるナデ調整が観察される。外面には白色で梅花と青色で唐草が描かれている。口縁部は厚く外反する。注口部は工具で刺し開けている。39 はミニチュアの瓶で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。頸部から大きく張り出した肩部にかけ緑釉を流しかけしている。胴部に指で摘んだ痕が 3 箇所みられる。底部は欠損している。40 は土玉で DZ-57 に分類される。本地点で出土した土玉の中で最も大きいものである。41 はミニチュアの蓋で DZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロと型打成形で作られている。無釉である。火消し壺の蓋と類似する。42 は狛乗り童子で DZ-60 に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、彩色、施釉されている。狛の斑と目、鼻、童子の眉、目、髪は焦茶色で描いている。着物と狛の首輪には朱色が観察される。狛の腹部に「てつ」と墨書。43、44 はぶら人形の手足で DZ-60 に分類される。45 はぶら人形で DZ-60-f に分類される。46、47 は不明製品であるがミニチュアとして DZ-61 に分類した。胎土は橙色系で、型押成形で内面には指頭圧痕とナデが顕著にみられる。47 の胴部には穿孔があり、おそらく 46 も同様と思われる。上下が開いたものである。48 は犬で DZ-60-i に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中実、無釉である。口は貼り合わせたのち空けている。腹部に穿孔が観察される。

SK306 (Ⅲ-68 図)

1 は肥前系蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2 に分類される。このタイプは波佐見の中尾、三股等の窯で生産されている（長崎県窯業試験場 1985）。2 は京都・信楽系の片口鉢で TD-23 に分類される。器面には呉須絵で山水文が、口唇部には鉄で口錆が施されている。胎土は堅緻で、灰褐色を呈する。3 は瓦質の植木鉢で DZ-21-b に分類される。外面は体部下端から底部にかけて土師質になっている。4 は低下度釉が掛かる軟質陶の合子で、DZ-18 に分類される。底部左端に刻印があり、楕円圏に「麒口

山」と読める。胎土は灰褐色から橙褐色を呈する。5は瀬戸・美濃系の灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。体部には列点状に「高サキ」と彫られている。口唇部の一部がわずかに欠損しているほかには、破損箇所はない。

6はミニチュアの白磁の碗でJB-61に分類される。7は釜形土製品でDZ-5-cに分類される。罅は欠けてなく、欠け部分は数箇所あるが、同様の割れ方であることから意図的に打ち欠たものであろうか。

SK307 (Ⅲ-69 図)

1は肥前系染付磁器朝顔形の碗で、JB-1-rに分類される。文様はコンニャク印判で牡丹文が三方に施されている。2は染付鉢でJB-5に分類される。3は京都・信楽系陶器碗でTD-1-bに分類される。文様は鉄で描かれている。4は瀬戸・美濃系の水瓶で、TC-15-cに分類される。器面はヘラ状工具によって流水状の文様を彫り、施釉後に鉄と緑釉を交互に流し掛けしている。口唇部内面の突帯の一部には敲打痕が認められる。

SK311 (Ⅲ-69 図)

1は景德鎮窯系青花皿で、JA1-2に分類される。釉薬はやや青み掛かり、呉須は濃い青に発色している。口唇部は所々に虫喰いが認められる。「乾隆年製」が崩れたと推定される銘が書かれている。2は肥前系磁器端反碗の蓋で、JB-00-cに分類される。3は瀬戸・美濃系陶器灰釉植木鉢で、TC-21に分類される。

SK312 (Ⅳ-69 図)

1～3は人形とミニチュアである。1は馬でDZ-60-hに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。背に何か乗っていたと思われる。白色の彩色痕が観察される。台座の裏は深さのことなる指頭圧痕が2箇所観察される。2はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で合口は貼付である。上面は褐色に彩色した後施釉している。裏面は無彩、無釉である。3はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。

SK317 (Ⅲ-69 図)

1は京都・信楽系灰釉水滴でTD-19に分類される。2は京都・信楽系の段重でTD-13-bに分類される。最下段である。器面は呉須、鉄、白土により梅花が描かれている。3は磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。底部と体部の稜は顕著ではない。

SK319 (Ⅲ-69、70 図)

1、2は瀬戸・美濃系染付磁器碗で、1がJC-1-d、2がJC-1-eに分類される。2は漆継ぎによる補修痕が認められる。3は備前系型皿でTE-2に分類される。鯉形に成形されている。4、5は土師質の鉢で、TZ-5に分類される。4は体部上位に径2mm程度の孔が2箇所穿たれている。位置関係より三方に穿孔があったと推定できるが、1箇所は欠損のため確認できない。6、7、10は瓦質の植木鉢で、DZ-21-bに分類される。10は6、7と比較して丁寧に作られており、底部、外面、内面上位は丁寧に研磨されている。また、外面上位には文様として褐色土師質の部分を残している。8はロクロ成形の塩壺で、胎土はやや軟質で赤褐色を呈する。DZ-51-wに分類される。9は丸底のほうろくでDZ-47-aに分類される。立ち上がりは浅く、幕末から明治初期の製品であろうと推定できる。

11～14は人形、ミニチュア、遊戯具である。11はミニチュアの橋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で裏面は圧痕もなく丁寧に調整している。橋板部分に赤色が観察される。12は基石形土製品でDZ-56に分類される。13は浮き人形の蛙でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で中空、彩色、施釉されている。腹部、背中の斑点と目は白色に塗っ

た後、青緑色を重ね塗りし施釉している。14は亀でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で首部、足、尾は貼付けている。甲羅の表現も巧く、器壁も薄いもので、すべて施釉している。

SK325（Ⅲ-70 図）

1は肥前系青磁染付筒形碗で、JB-1-lに分類される。内面の五弁花は手描きである。裏銘は「筒江」と書かれ、筒江窯の製品であることが判る。全体的に焼成不足で、釉が白濁している。2は京都・信楽系色絵筒形碗で、TD-1-jに分類される。竹文の銹絵染付に草花文が上絵付されている。腰部の稜も竹節状に成形されている。3はかわらけで、DZ-2-bに分類される。

SU327（Ⅲ-70 図）

1～3は肥前系染付磁器である。1は碗で、JB-1-dに分類される。2は八角鉢で、JB-5-eに分類される。焼継による補修痕と底部には焼継屋の記したと思われるマークが確認できる。3は皿で、JB-2-eに分類される。器形は罽皿状を呈し、罽部の文様は墨弾きの技術がが用いられている。17世紀末から18世紀初頭頃の製品であろうと推定できる。4は手付きの鍋で、TZ-33に分類される。底部にはススが付着している。5はいわゆる山水土瓶で、TZ-34-cに分類される。把手は紐状を呈し、白土を塗布した上から鉄絵具、緑釉、褐釉で山水文を描いている。底部にはススが付着している。内面は鉄釉の化粧掛け。6は三彩土瓶の蓋で、TZ-00-cに分類される。5の蓋であると考えられる。

SK330（Ⅲ-70～75 図）

本遺構からは多量の遺物が出土している。年代的にはJB-1-i（小広東碗、6～10）が多く含まれていること、それより後出するJB-1-m（広東碗、16、18）の初現的なタイプが少量混じることから、本遺構出土の遺物群は東大編年Ⅶ期に該当する。また、遺物群に焼継された例が見あたらないことから、廃棄の最終が1780年代頃で大過ないだろう。

磁器（1～38） 1～3は肥前系磁器薄手碗で、JB-1-fに分類される。1、2は青磁染付、3は染付である。1、2とも五弁花は手描き、1にのみ二重角枠内渦福が書かれている。4、5は粗製の染付碗で、JB-1-gに分類される。5は菊文がコンニャク印判で描かれている。6～10は染付小広東碗で、JB-1-iに分類される。文様はいずれも初期の広東碗にも付される文様で、1770～1780年代頃に生産されたものと考えられる。11～13は染付小丸碗で、JB-1-jに分類される。胎土、絵付、成形などから12がやや質的に高い製品であろう。文様はいわゆる素描で描かれている。14は粗製の青磁染付筒形碗で、JB-1-lに分類される。五弁花はコンニャク印判である。15は染付碗で、JB-1に分類される。見込みの文様パターンなど広東碗との共通性が高く、同年代の製品であろうと推定される。器面の文様は丁寧に描かれている。16～18、20は広東碗で、16、18がJB-1-m、17、20がJB-00-bに分類される。16の文様は7の小広東と同様である。17、18は文様、器形の共通性から同一個体であろうと思われる。これらの広東碗は、銘款の存在、口唇部の外反など古手の広東碗に多く見られる特徴が確認できる。19、25は朝顔形の染付碗で、19がJB-1-r、25がJB-00-jに分類される。19は胎土も白く、文様も比較的丁寧に描かれている。25は胎土が灰褐色を呈し、ラフに文様が描かれおり、より粗製である。21、22、24は高台が「ハ」の字状に開く碗で、21、22がJB-1-q、24がJB-00-eに分類される。22はこのタイプでは大振りであり、銘款も伴っている。23はJB-00-aに分類される。25は青磁染付丸碗の蓋で、JB-00-aに分類される。生地も白色に近く、文様も丁寧に描かれている。口唇は口銹が施されている。

26～28、30は、肥前系染付坏で、26がJB-6-f、27がJB-6-a、28、30がJB-6-bに分類される。26は口唇部がわずかに欠損している他は、破損していない。紅皿か？。27は器形から年代的

に古い製品と思われる。28は高台が幅広である。29は染付蓋物で、JB-13-aに分類される。31～33は染付皿で、31がJB-2-o、32がJB-2-e、33がJB-2-jに分類される。31の五弁花は手描き、32の文様は内外面コンニャク印判で描かれている。33は生地も白色を呈し、また、文様も精緻に描かれ、上質の製品であると思われる。高台は蛇ノ目凹形高台であるが、蛇ノ目無釉部の幅が狭く、染付例としては年代的に古くなるものであろう。34は染付の小形の猪口でJB-7-bに分類される。35は染付仏飯器で、JB-8-cに分類される。36は粗製の染付油壺で、JB-12に分類される。絵付はややラフで、胎土の色調も灰がかっている。37は型作りの白磁猪口（紅皿）で、JB-6-eに分類される。釉は白濁しており、焼成不良であると思われる。38は染付御神酒徳利で、JB-11-bに分類される。文様はラフに描かれている。

陶 器 (39～68) 39は瀬戸・美濃系刷毛目碗でTC-1-sに分類される。文様はいわゆる打刷毛目で、高台脇は削り込まれている。40は瀬戸・美濃系柳茶碗でTC-1-gに分類される。高台外周は面取りされており、文様も比較的丁寧に描かれている。41、42は京都・信楽系灰釉半球碗で、TD-1-bに分類される。高台外周は面取りされている。43は井戸風の灰釉碗で、TD-1であろうと推定される。胎土は白色でやや軟質、高台は開き気味に、豊付は幅広に削り込まれている。高台内は左回転の渦巻が確認される。豊付を除いて全釉されている。44は瀬戸・美濃系せんじで、TC-1-lに分類される。体部には簡略な文様が呉須で描かれている。45は京都・信楽系碗で、TD-1-mに分類される。器面には松、宝珠、木槌などが上絵で描かれている。46は灰釉のこね鉢でTC-5-lに分類される。見込みにトチンの痕跡が確認できる。47、48は灰釉坏で、47がTD-6、48はTC-6に分類される。47の豊付外周は面取りされている。49は瀬戸・美濃系灰釉徳利で、TC-10-aに分類される。個体はヒビ、欠損もない完形である。50は柿釉灯明油受け皿で、TC-2-oに分類される。見込み中央には円状の溶着痕が確認される。51は鶴首状の灰釉瓶で、TC-10-hに分類される。個体はヒビ、欠損もない完形である。52は灰釉摺絵皿で、TC-2-eに分類される。文様は呉須で梅文が摺絵されている。53は錆釉・灰釉流し猪口で、TD-7に分類される。胎土は堅緻で、暗灰褐色を呈する。釉は薄く施され、流し掛けられた灰釉は釉溜りが白色化している。高台内は無釉である。54は灰釉小壺で、TC-15に分類される。個体はヒビ、欠損もない完形である。55は灰釉・緑釉鉄釉流し流水文甕で、TC-15-cに分類される。流水文は比較的丁寧に施されている。見込みにはトチンの痕跡が4箇所確認できる。56は錆釉半胴甕でTC-15-aに分類される。胎土には茶色の斑点が多く確認でき、いわゆる赤津ハンドと称される製品と推定される。口唇部は5箇所のトチン痕が認められる。57は灰釉の壺の蓋で、TC-00-bに分類される。裏面は無釉である。58は灰釉蓋物で、TC-13に分類される。59は灰釉錆絵柄杓で、TD-32に分類される。内面中位に横方向の圈線が施されている。高台はやや幅広に成形され、豊付外周は面取りされている。把手の装着部はかまぼこ形に成形され、木などを通し上から下に釘などの固定具が貫通できるように穿孔されている。60は灰釉摺絵の水注で、TC-27-cに分類される。文様は松に竜田川文である。内面は灰釉が化粧掛けされている。61は灰釉土瓶で、TZ-34-gに分類される。内面も施釉されるが、釉ダレが下から上に向かって流れている。注口取り付け部には4箇所の小穴が穿たれている。62はやや厚手の鉄釉土瓶で、TZ-34-eに分類される。胎土はやや粗い赤褐色を呈し、白色や褐色の粗砂粒が多く混入する。内面は鉄釉が化粧掛けされている。注口取り付け部の穴は単孔である。63～68は柿釉手付鍋で、63、64はTZ-33-a、65～68はTZ-61に分類される。63、64、67は底部にススが付着している。内面には63が5箇所、64、66～68が3箇所のピン痕が確認される。63は過火度のためか器面の所々に発泡したような隆起がみられる。65の底部には墨書がみられる。

土器 (69～91) 69 は白色のかわらけで、DZ-2 に分類される。見込みには松と翁が型によって陽刻されている。同手の製品はSK293 から出土している。本例の生産地を断定するには慎重を要すると思われるが、生産資料としては高知の尾戸窯から類例が確認されている。70 は底部中央に穿孔されたかわらけで、DZ-52-b に分類される。孔は焼成前に内側から貫かれており、裏面孔周囲には穿孔時の胎土の盛り上がり確認できる。71 は小形の土製ひょうそくで、DZ-44-c に分類される。中央灯心立て外周上端には使用時の油痕が観察できる。72～74 はかわらけで、72、73 はDZ-2-b、74 はDZ-2 に分類される。72 の裏面には「中」の墨書が書かれている。74 は内面の研磨、体部立上りの内湾、体部下端の調整などがいわゆる江戸式のものとは異なっている。75、76 は鉢形の土師質土製品でDZ-5-a に分類される。底部は左回転の糸切り離し痕が観察でき、口縁部は外反している。77 は鏝状に開く口縁部を有する土師質鉢で、DZ-5 に分類される。底部は糸切り痕が確認でき、穿孔はされていない。78 は土師質の油受け皿で、DZ-40-d に分類される。内外面にはいわゆる銀彩が部分的に確認される。79 は透明釉が施された脚付油受け皿で、DZ-40-a に分類される。見込み中央は穿孔され、脚部と貫通している。脚下端部は内側に面取り状に調整されており、また、受け部に切り欠きもつけられてはいない。これらの形態は江戸遺跡で多く認められる脚付油受け皿とは様相が異なる。80 は透明釉が施されるひょうそくで、DZ-44 に分類される。把手、中央部の一部は欠損しているが、中央部内側には使用時の油痕が観察できる。81～85 は塩壺で、84 が板作り2ピースの製品でDZ-51-ab、その他はロクロ成形でDZ-51-w に分類される。81、83 はロクロ目が顕著である。刻印はいずれのものも確認できない。84 の胎土はやや粗く、白色粗砂粒が混入した褐色を呈するが、他は緻密な胎土で、橙褐色を呈する。86 は火消し壺の蓋で、DZ-00-h に分類される。87～91 は塩壺の蓋で、87 がDZ-00-c、他はDZ-00-d に分類される。90 を除くものには内面外周に若干かかりがあり、中央は布目痕が確認できる。87、89 は径3～4mm程度の穿孔が確認できる。

人形・ミニチュア・遊戯具 (92～133) 釜形土製品8点と焚口が異なるカマドが多く出土した遺構である。ミニチュアは陶器製の土瓶や焼締めのかまどが出土している。人形や箱庭道具は小さいものが多く出土している。他の遺構とは様相が異なる遺構である。

92 はミニチュアの陶器の蓋でTZ-61 に分類される。胎土は黒い粒子を含む褐色を呈し、ロクロ成形である。上面を白色で彩色し上面のみ施釉している。虫喰いと貫入がみられる。裏面中央に墨書がある。93 はミニチュアの碗でDZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で、内面と外面口縁部下を緑釉で装飾している。94 はミニチュアの陶器の土瓶でTD-61 に分類される。胎土は灰白色を呈し、ロクロ成形で青みがかかった灰釉を施し貫入がみられる。把手は貼付である。口縁部と底部は無釉である。底部に墨書があるが判読できない。接合できないが同一個体と思われる胴部には、鉄釉で蕨状の文様が観察される。95、96 はミニチュアの焼締め陶器のかまどで、TE-61 に分類される。胎土は赤褐色を呈する。二卓とも拵目は6条一単位である。97 はミニチュアの鉢でDZ-61 に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。98 はミニチュアの瓶でDZ-61 に分類される。いわゆる六角徳利である。99、100 は素焼きのミニチュアの蓋でDZ-61 に分類される。100 の上面には松葉文様が付されている。また、僅かであるがススと思われるものが観察される。101～108 は釜形土製品でDZ-5-c に分類される。101 は小さい茶釜形で口縁部と鏝は欠けているが、鏝は意図的に欠いたものか。102 は器高の低いタイプと思われる。103 は内外面にスス状のものが点在している。104 は内面にスス状のものが点在している。105 は器壁が厚く、内外面にスス状のものが僅かにみられる。106 の内外面の一部に銀彩が観察される。107 は外面に僅かにスス状

のものが点在している。109は焚き口が二つのミニチュアのカマドでDZ-61に分類される。板作りで上部は貼り合わせている。ヘラでのナデ調整が隅にみられる。内面右隅に突き抜けない孔がある。外面は丁寧であるが内面の調整は粗い。110は不明であるがミニチュアとしてDZ-61に分類した。胎土は橙色系で、型押成形である。裏面には指頭押圧痕と雲母、またスス状のものが僅かに観察される。孔が3箇所観察されるがおそらく6箇所あったと思われる。カマドや焔炉に載せる五徳状のものか。111は福祿寿でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、彩色、施釉されている。目、眉、髭は鉄釉で描き、軍配と衣の斑は緑釉で彩色している。白色が観察される。112は婦人座像でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。髪の毛の部分に黒色が観察できる。頭部や膝の深い凹みの内面には細かく指頭押圧痕が観察される。113は小便小僧かDZ-60に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形で雲母が全体にみられる。手は貼付けている。下腹部に穿孔があり臀部に突き抜けている。114はぶら人形でDZ-60-fに分類される。115は力士かDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で底部が開口している。底部の縁に穿孔がある。116～119、121の胎土は白色系で、型押成形で中実、無釉である。小さいが彫りが深く丁寧である。116は天神でDZ-60-bである。袖口には朱色が観察でき、所々に黒色がみられる。底面には二箇所穿孔がある。117は恵比寿様でDZ-60-cに分類される。118は天神でDZ-60-bに分類される。119は虚無僧でDZ-60-kに分類される。朱色が観察される。120は恵比寿様でDZ-60-cに分類される。胎土は橙色系で、型押し（前後合わせ）で、雲母が顕著に観察される。赤色が観察できる。121は飾り馬でDZ-60-hに分類される。僅かに朱色が観察される。122は鹿かDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で、足と尾は貼付である。頭部に4つの穿孔がある。角や耳を挿すための孔と思われる。123、130、131はいずれも小さく。123は火焰太鼓でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形で無釉である。124は蛙でDZ-60に分類される。胎土は橙色系を呈し、手捻り成形で、目と足は貼付けている。背は鉄釉、腹部は白色を塗り更に緑釉を施している。125、126は魚でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。雲母が顕著である。127～129は器種は不明であるがDZ-61に分類した。胎土は橙色系で、型押成形である。127の中央にちかい溝は二次的に加工されたものである。雲母が観察される。128、129は花形をしている。130、131はミニチュアの建造物でDZ-61に分類される。いずれも白色系の胎土で、型押成形で無釉である。130は五重塔、131は灯籠で朱色が観察できる。132はミニチュアの鳥居でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中実、無釉である。赤色と雲母が観察される。133はミニチュアの太鼓でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で内面には指頭押圧痕が観察できる。雲母と彩色の赤色が観察できる。

SK331（Ⅲ-75、76図）

1は色絵の瀬戸・美濃系磁器丸碗でJC-1-aに分類される。赤、黄、緑、黒絵具で、花文が描かれている。2は瀬戸・美濃系染付碗で、JC-1-fに分類される。文様は型紙刷りで花、紅葉文が描かれている。3は染付磁器鉢でJC-5に分類される。文様は銅版転写と手描きを併用して施されている。底部は蛇ノ目凹形高台である。4は白磁碗でJC-1、5は染付坏で、JC-6-fに分類される。5は銅版転写で文様が施されている。6、7は瀬戸・美濃系口縁部鐔状に開く磁器皿で、JC-2-bに分類される。6は白磁、7は口縁部にクロム、コバルトで圈線が巡っている。生地は完全に磁胎である。8は肥前系染付鉢で、JB-5-bに分類される。全体的にやや黄味がかっている。9は薄手の坏で、JC-6-dに分類される。見込みには白玉の上絵で文様が施されている。

10は灰釉の灯明上皿で、TD-2-bに分類される。口唇部には灯心の痕跡がほぼ全周にわたり確認

できる。11は灰釉蓋物で、TD-13-cに分類される。口唇部は平縁で、内側に張り出しており、縁は露胎している。見込みには3箇所のピン痕が確認できる。12は灰釉油受け皿で、TD-40-bに分類される。13は土瓶の蓋で、TZ-00-bに分類される。器面は白土の上に酸化コバルトを用いて草花文様が描かれている。5箇所のピン痕が確認できる。14は焼締めいわゆる布袋徳利で、TE-10に分類される。上半には自然釉が掛かっている。15は褐釉双耳壺でTC-15に分類される。16はやや黄味がかかる灰釉の澆瓶で、TC-28に分類される。17は長方形の植木鉢で、TC-21に分類される。底部を除く内外面には白土が塗布され、鋸状の口縁には酸化コバルトで、斜線文が描かれている。脚は底部四隅に鍵状に貼付されている。また、見込み四隅には円形のトチンの痕跡が確認できる。

18は土師質の角七輪で、DZ-48-bに分類される。器面、上面は丁寧に研磨されている。風口の扉部分には「□州 / 製造元 / 新川町 / 中根杓太郎」と刻印されている。火を受ける内側内面は二次的な被熱が顕著に確認される。19は鉄釉の施された軟質の植木鉢で、DZ-21-cに分類される。3箇所に脚が貼り付けられている。20は瓦質植木鉢で、DZ-21-bに分類される。21はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。22は鉛釉の施された手付鍋で、DZ-33に分類される。見込みにはやや開く円筒状のものが貼り付けられている。現在の湯豆腐やおでんなどを食する鍋に中央につけ汁やみそなどを置くものがあるが、これと同様の用途が推定できる。内面は茶褐色、外面は黒色の釉が全釉されている。23は土師質のほうろくで、DZ-47-aに分類される。口縁部の立ち上がりは極端に短い。

24、25は遊戯具の碁石形土製品でDZ-56に分類される。

SE333 (Ⅲ-76 図)

1は肥前系磁器型皿で、JB-2-rに分類される。口唇部は口錆が施されている。

SX334 (Ⅲ-76 図)

1は瀬戸・美濃系染付端反形碗で、JC-1-dに分類される。口径に比べて、器高が低く同類の中ではやや後出的な特徴を持っている。2はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。3は瓦質の釣灯籠で、DZに分類される。表面には赤色顔料の痕跡が確認できる。SK1の2と同様の製品であろう。

SU335 (Ⅲ-76～78 図)

1は粉彩の端反形碗で、JA1-1に分類される。器面は黄、赤、青、白の上絵で、見込みは釉裏に呉須で花唐草文が描かれている。口唇部は虫喰いが確認できる。2～4は肥前系磁器碗で、2はJB-1-f、3はJB-1-u、4はJB-1-gに分類される。2は丸文を呉須、薄瑠璃、色絵で内外面に施文している。3はコンニャク印判と手描きを併用して施文されている。いずれも二次的な火熱を受けている。5は色絵坏でJB-6-a、6は染付坏でJB-6-fに分類される。6は「大明年製」銘が染付されている。5、6とも二次的な火熱を受けている。7は染付鉢で、JB-5-bに分類される。見込み縁文は墨弾き、側面はコンニャク印判、中央五弁花と外側面文様は手で描かれている。8～10、12、13は仏飯器である。8は白磁、その他は染付である。いずれも二次的に火を受けている。8、11、12はJB-8-b、9、10はJB-8-c、13はJB-8に分類される。14は染付蓋物で、JB-13-aに分類される。二次的に火を受けている。11、15は青磁の香炉・火入れで、11がJB-9、15がJB-9-bに分類される。いずれも二次的に火を受けている。16、17は筒形の蓋物で、16がJB-00-g、17が、JB-13-bに分類される。文様、法量などから同一個体であろう。二次的に火を受けている。

18は一升の瀬戸・美濃系のいわゆる尾呂徳利で、TC-10-eに分類される。内外面は二次的な火による剥落が顕著である。19は灰釉蛇ノ目釉剥ぎの鉢で、TB-5-dに分類される。釉剥ぎ部には鉄が塗布されている。高台は無釉である。二次的に火を受けている。20は三島手の鉢でTB-5-bに分類される。高台外周はわずかに面取りされている。二次的に火を受けている。21、22は鉄釉の蓋物で、

21はTC-00-h、22はTC-13に分類される。体部上半に横位の圈線を巡らせている。蓋裏と底部を除き鉄釉が施され、一部にうのふ釉が流し掛けられている。形態、釉調などから水指であろう。二次的に火を受けている。23、24は備前のいわゆる献上徳利で、TE-10-aに分類される。23は胴部最大径以上に24は胴部下位の稜以上に糸目が認められる。23は泥の塗布により器面には光沢がある。24は底部に「○」の中に「井」の刻印が押印されている。いずれも二次的に火を受けている。

25は土師質の手焙りで、DZ-38に分類される。器面は丁寧に研磨され、いわゆる銀彩が施されている。胴部下半に横楕円形の口が穿たれ、これと正対する位置に小孔が確認できる。底部脇は面取りされている。26は土師質のほうろくで、DZ-47-aに分類される。

27～34は人形、ミニチュアである。共伴資料の陶磁器は17世紀末から18世紀初頭（下限1703）と19世紀前葉のもので構成されるが、人形やミニチュアの大半は19世紀前葉に比定されるものである。

27、28はミニチュアの鉢と皿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、彩色、施釉されたものである。27の鉢はロクロ成形である。高台は削って作り出しているが、高台の中央と畳付けの高さは同じである。また、高台外周をケズリ段差が生じている。内面のみ白色に塗り緑色で市川團十郎の三栞文、焦茶色で「一代目」の文字を描き施釉している。外面は無彩で高台を残し施釉している。28は型打成形の六角皿で、外面には指頭押圧痕が顕著に観察される。口縁部と朝顔の花は白色で葉は青緑色を塗り、内外面施釉している。内側壁面は斜格子文を付している。丁寧な作りである。29はミニチュアの土瓶でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形で彩色、施釉している。30、31はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。いずれも口縁部は大きく外反している。30は口縁部から外面にかけ青灰色が観察される。32はミニチュアの陶器の蓋でTZ-61に分類される。胎土は灰褐色を呈している。33は布袋様でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。左手あたりを大きく穿孔している、おそらく払子を差し込む為のものと思われる。34は猿廻しでDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中実、無釉である。人物の左肩には猿が乗っている。着物は朱色、猿は赤色で彩色されている。

SK337（Ⅲ-78～80図）

1は染付筒形碗で、JB-1-1に分類される。底部裏には「筒江」銘が確認できる。器形または高台脇や見込み中央の文様などから本類では古手の製品であろうと思われる。2は景德鎮窯系の色絵小皿で、JA1-2に分類される。いわゆる十錦手の一部であろう。焼継の痕跡が明瞭に観察される。3は染付蛇ノ目凹形高台皿で、JB-2-jに分類される。器高が低く、腰が張る形態はJB-2-oと共通性が窺える。4は輪花の染付皿で、JB-2-eに分類される。文様は丁寧に描かれている。焼継の痕跡が明瞭に観察される。5は染付坏で、JC-6-aに分類される。呉須の色調はややくすむが、瀬戸・美濃で多用される地呉須とは異なっている。

6は灰釉餌入れて、TC-30に分類される。底部は回転ヘラ調整され、糸切りを消している。7は色絵碗で、TD-1-mに分類される。上絵で印章や花押様の文様が描かれている。高台の調整などは丁寧にされている。8は灰釉の二合半徳利で、TC-10-cに分類される。胴部下半は焼成時の過火度のためか歪んでいる。胴部には列点状の釘書きで三ツ鱗が彫られている。9はおそらく急須の蓋で、TD-00に分類される。器面は蟬形の摘みを貼付け、白土に鉄で簡単な文様をつけている。裏は無釉で鉄で「道八」と書かれている。

10はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。胎土は緻密で、赤褐色を呈する。11は土師

質の鉢で、DZ-5-aに分類される。12は瓦質の小形仕切り盤で、DZ-5-bに分類される。見込みの間仕切りは欠損している。13は硬質瓦質の風炉と思われる。DZ-31-hに分類される。器面は丁寧に研磨されている。製品の上半が欠損しているため詳細は窺えないが、一部に窓とその正対する位置に径12mmの孔が確認できる。また、このほかに二次的に径3～4mm程度の孔が数箇所穿たれている。孔の場所には、いずれも縦方向の目印と思われる刻みがつけられており、何らかの目的で再加工したものと考えられる。

14～38は人形、ミニチュア、遊戯具である。人形の出土は少なく、施釉された箱庭道具が多く出土している。35の灯籠には「樂正」の刻印が観察される。SU382で掲載している60の橋が遺構間接合している。14、17はミニチュアの片口と挿鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で彩色、施釉されたものである。14は片口で、口縁部は厚く外反する。内面は花卉5枚が描かれ白色に塗ったのち青緑色で彩色し、施釉している。15はミニチュアの土鍋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で双耳は貼付で、無釉である。しっかりとした焼成で硬質感がある。口縁部は首部から大きく張り、内傾する。16はミニチュアの土瓶でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で内面に指頭押圧痕が顕著にみられる。また、上下を貼付た箇所には補強用の粘土を入れ、ナデ調整している。注口、把手、脚は貼付である。外面には白色の彩色が観察される。17はミニチュアの挿鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で、彩色、施釉されている。口縁部は外反する。見込みは梅花を描き、花卉は白色に塗りさらに青緑色を重ね、花芯は赤で彩色し内外面施釉している。18はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で摘みと合口は貼付ている。上面は白色に塗り、菊花の縁取りは赤色で描き施釉している。裏面は白色と赤色が垂れ込んだように残存している。19はミニチュアの陶器の鉢でTD-61に分類される。胎土は浅黄澄色を呈し、ロクロ成形である。内面と外面の一部は白化粧し施釉している。畳付から内側は無釉で、中に墨書が付されている。貫入がみられる。20はミニチュアの陶器の瓶でTD-61に分類される。胎土は緻密な灰白色を呈し、ロクロ成形である。釉調は灰褐色に青緑色が流しかけられている。底部外周は面取りし無釉である。21はぶら人形でDZ-60-fに分類される。本地点から出土したぶら人形の中で最も小さいものである。雲母が観察される。22、23は面形でDZ-62に分類される。胎土は橙色系で、型打成形で裏面は指頭押圧痕が観察される。器壁は厚くしっかりとした焼成である。22は烏帽子を着けた猿、23は鍾馗（しょうぎ）である。24は中腰の童子でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。雲母が顕著に観察される。口は穿孔され、おそらく何か差し込んだものと思われる。右耳下に孔があるが、他の遺跡のものをみると穿孔はされていないのでおそらく二次的に穿たれたものと思われる。穿たれた孔を吹くと笛になる。底部の穿孔は乾燥や彩色用とわれる。25は笛でDZ-59に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、彩色施釉されている。当時流行った目玉と舌が動く絡繰り玩具をモチーフとしている。髪と烏帽子は茶色で、舌、帽子の文様と縁は白色に塗り青緑を重ね塗りし、施釉している。また、目は白色と鉄釉で表現している。26～29は碁石形土製品でDZ-56に分類される。26は黒色、27は白色が観察される。30は石製の碁石である。31、32は芥子面、33、34は泥面子でDZ-55に分類される。31は般若、32は水滴、33は「田」の字、34は「亀」の字である。35、36はミニチュアの灯籠でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中実、笠は貼付である。35は石製の灯籠を意識している表現である。笠と竿は白色に青緑を重ね塗りし、施釉している。火袋は満月と三日月文様。底部はアーチ状に凹んでいる。竿に「樂正」と刻印。36は笠は蕨手、火袋は丸と四角が表現されている。中台は六角形、基礎は蓮弁

文様が付されている。笠と基礎の一部は、白色に青緑を重ね塗りし施釉している。底部は大きくアーチ状に開口している。37はミニチュアのお堂でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形、屋根は貼付である。後面が無いタイプである。屋根は縁と棟を白色で塗り棟はさらに緑釉で施釉している。堂の扉と石段は白色、基礎部は白色に緑色を重ね塗りし施釉している。38はミニチュアの鳥居でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）中空である。笠木と島木、額束、貫、台石は白色を塗り青緑を重ね塗りし全面を施釉している。39は不明であるが、ミニチュアとしてDZ-61に分類した。SK330からも出土している。

SK338（Ⅲ-80、81 図）

1、2は染付端反碗で、1がJB-1-n、2がJC-1-dに分類される。2は文様全体に毛彫りを行った後、濃淡のダミが施されている。ともに焼継されている。3は染付水滴でJB-19に分類される。型成形で貼付高台である。焼継されている。4は染付蓋物で、JB-13-aに分類される。生地は灰がかり、呉須もややくすんでいる。

5は灰釉双耳壺で、TC-15に分類される。6は胴部下半釉拭き取りの灰釉二合半徳利でTC-10-aに分類される。胴部には列点状の釘書きが認められる。

7は透明釉が施された灯明上皿で、DZ-2-hに分類される。口唇部に一部に灯心痕が認められる。8、9は脚付の油受け皿で8がDZ-40、9がDZ-40-aに分類される。8は無釉で、本類ではあまり類例のないものである。ともに口唇部に一部に灯心痕が認められる。10は瓦質の植木鉢でDZ-21-bに分類される。11は外面濃い暗茶褐色、内面茶褐色の鉛釉が全施された土師質の土鍋で、DZ-33-aに分類される。底部は釉がややくすみ、火を受けたと推定される。12は土師質のほうろくで、DZ-47-aに分類される。口縁部の立ち上がりは短く、年代的に新しい製品である。

13～15は人形、ミニチュアである。13は臥牛でDZ-60に分類される。胎土は瓦質で、型押成形で、底部は開口している。下顎部と頭部の大黒様と宝珠は貼付している。鼻と肩は穿孔されている。14は蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色系である。15はミニチュアの垣根と庭石でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、板作りと手捻りしたものを貼付している。垣根と台の縁、瀧岩、松は白色を塗り青緑を重ね塗りして施釉している。底部のみ無釉。

SK339（Ⅲ-81 図）

1、2は把手付きの灰釉鉄絵の土鍋で、1はTM-00、2はTM-33に分類される。胎土は堅緻で、褐色を呈する。蓋と身が接触する合わせの部分は、釉剥ぎされている。蓋には径5mm程度の空気孔が穿たれている。蓋、身とも内面には数箇所のピン痕が輪状に確認できる。本例と胎土、把手の貼付、形態などが類似する製品は、益子の大西窯や根古屋大塚窯などで確認されている。底部にはススが付着する。

SK348（Ⅲ-81、82 図）

1は染付皿で、JB-2-oに分類される。「大明成化年製」銘が書かれている。2は青磁小皿で、JC-2に分類される。陰刻で鳳凰が施されている。3、4は染付蓋物で、両者は共通の法量、文様から同一個体であろう。3はJB-00-f、4はJB-13-aに分類される。

5は灰釉丸碗で、TD-1-bに分類される。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。器面には細かい貫入が全体に認められる。6は柿釉・灰釉流しのひょうそくで、TC-44に分類される。全く欠損していない。7は柿釉半胴甕で、TC-15-aに分類される。胎土には鉄分が浮き出ており、いわゆる赤津ハンドと称される製品である。底部には径16mmの孔が穿たれ、植木鉢として利用されたことが推定できる。8は鉄釉土瓶で、TZ-34-eに分類される。内面には鉄釉の化粧掛けが施されている。底部

はススの付着が顕著である。9は灰釉の一升徳利で、TC-10-eに分類される。体部下半から底部にかけては釉が拭き取られている。胴部には山笠に「小」の釘書きが認められる。

10～22は人形、ミニチュア、遊戯具である。10は天神様でDZ-60-bに分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）中空である。袍と指貫は焦茶色に塗り施釉している。笏と太刀、手、杵は無彩で施釉のみである。底面に台座を付けた痕が観察される。11はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。無彩、無釉である。12はミニチュアの瓶でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。外面と底部を白色に塗り施釉している。13はミニチュアの急須でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で注口部と把手は貼付である。体部には松竹梅の文様が押されている。14はミニチュアの花籠でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。外面には雲母が観察される。中央3箇所穿孔は、造花を挿す為のものである。15はミニチュアの七輪でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形である。上部構造と風口、脚4箇所は貼付である。彩色は一面のみ緑釉を流し掛けしている。底部をのぞき施釉している。底部中央に「と口」墨書されているが文字の一部は欠損している。右側面は欠損して大きく開口しており、割れ口を磨いている。また、上部の灰落としも欠損。16はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。17～20は基石形土製品でDZ-56に分類される。21、22は泥面子でDZ-55に分類される。21は魚か、22は梅鉢が付いた太鼓で、赤色が観察される。

SK356（Ⅲ-82図）

1は染付碗で、JC-1-fに分類される。酸化コバルトで手描き絵付されている。2は染付植木鉢で、JC-21に分類される。器面は白土の上に酸化コバルトで草花文が染付されている。内面と底部は無釉である。3は二合半の灰釉鉄絵徳利で、TC-10-cに分類される。胴部には鉄絵で、「森川…」、「伊勢…」と書かれている。「森川」は調査区を含み、現在の本郷通りを挟んで西に広がる地番である。「伊勢」は類例から「伊勢屋」あるいは「伊勢金」であろうと思われる。

4～6は人形、ミニチュアである。4はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。彩色は焦茶色で内外施釉されている。精緻な作りである。5はミニチュアの陶器の瓶でDZ-61に分類される。釉調は銅緑釉で、底部は無釉である。底部外周は面取りしている。6は磁器の人形で、JC-60に分類される。学童か。鞆は赤、帽子の縁は朱、洋服は青緑、牡丹は金色が観察される。射的人形ともいわれているものである。瀬戸市西茨第1号窯操業明治15～明治18（1882～1885）年の窯跡から磁器の人形が多数出土している（瀬戸市歴史民俗資料館1987）が、本遺構のものはなかった。

SK357（Ⅲ-82～84図）

1は染付碗で、JB-1-eに分類される。文様の表二重網目、裏菊花と一重網目文の組み合わせは、肥前長与窯などに多く認められる構成である。2は染付仏飯器で、JB-8-cに分類される。

3は鉛釉が全釉する碗で、TZ-1に分類される。胎土は土師質で、橙褐色を呈する。器壁は薄く作られており、表面には雁（あるいは鳳凰か）と思われる飛鳥が、三単位で浮文され、一部には鳥を上絵で装飾している痕跡も確認できる。鉛釉は銀化が著しく、元の状態を窺うことはできない。4は灰釉の小瓶で、TC-10-hに分類される。胴部の灰釉の一部が剥落している。5～7は灰釉徳利で、5が二合半、6、7が五合である。それぞれTC-10-c、TC-10-dに分類される。胴部には「高サキ」の文字が入り、5、7が釉裏に棒状工具による沈線、6が列点状の釘書きで施される。8は三島手の壺・甕で、TB-15に分類される。底部内面には砂目の痕跡が確認できる。口縁部は折り返して、平縁に成形されるが、波状の平行沈線文が施されている。

9は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目の痕跡が確認できる。10はDZ-51-wに分類される。11は板作りの塩壺で、胴部には「堺湊塩濱長左衛門」の刻印が認められる。DZ-51-afに分類される。この刻印の塩壺は本遺跡では類例がないが、汐留遺跡6J-037と6K-0102で出土例がある。内面は布目が確認できる。胴部上端は横方向のナデが施されている。底部はリング状および団子状の粘土で作られており、いわゆる3ピースで構成される。12は七輪の風口で、DZ-48-cに分類される。円形の窓の外周面および内面は二次的な火熱により白化している。扇状にすぼまる口部分には実測図のような刻印が押されている。13は土師質の罌を有する角火鉢で、DZ-31-cに分類される。14は土師質の七輪で、DZ-48-aに分類される。口唇部および折り返した口縁部内面は丁寧に研磨されている。

15～20は人形、ミニチュア、遊戯具である。15は西行の顔でDZ-60-aに分類される。胎土は橙色系で、型押成形で中実である。体部に差し込んで使用されたものである。16はぶら人形でDZ-60-fに分類される。17はミニチュアのカマドでDZ-61に分類される。焚口が二つのカマドで胎土は橙色系で、板作りで三つのパーツで構成されている。18は花を持つ童子でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空である。衣全体に薄緑色が観察される。透明釉をかけさらに鉄釉と緑釉を流し掛けしている。内面には補強用の粘土が観察される。19は陶器の童子でTD-60に分類される。胎土は淡褐色で、型押成形（前後合わせ）である。目は鉄釉で描いている。貫入がみられる。着物の裾から底部は無釉である。背の孔は斜め上方から穿っている。20は面形でDZ-62に分類される。鍾馗である。内面に雲母が観察される。21はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。

SK358（Ⅲ-84～87図）

本遺構からは多量の陶磁器・土器類が出土している。陶磁器の年代的様相では、磁器の施文技法が型紙刷り、銅版転写の製品が多く認められ、また、これ以降に出現する吹き絵が認められないことから、明治時代後半を下限とする一括資料であると考えていいだろう。

磁器（1～41） 1は高台無釉の青花碗で、JA1-1に分類される。高台はやや内傾する幅広高台である。釉薬はやや青味がかっている。2～5は染付端反形碗で、2、3、5はJC-1-d、4はJB-1-nに分類される。4は丁寧な素描で施文されており、焼継が観察される。5は見込み中央団籠文、外面葵文は木型打込の後にダミが施されている。6は大振りの碗で、JC-1-aに分類される。文様は花唐草と鳥が、鮮明な青に発色する呉須を用いて描かれている。高台裏には、「白雲堂周口」と書かれている。7～10、12～14は直線的に開く碗で、JC-1-fに分類される。7～10、12は型紙刷り、13は手描き、14は銅版転写で酸化コバルトを用いて施文されている。11は型紙刷りの染付丸碗で、JC-1-aに分類される。15～20は皿で、16がクロム青磁、20が白磁の他は、染付である。15がJC-2-c、16、17、21がJC-2-b、18がJB-2-i、19がJB-2-j、20がJC-2-dに分類される。16はいわゆる盛り絵を型紙と手描きを併用して白土、正円子、緑、黒の顔料を用いて描いている。17は銅版転写、21は手描きで酸化コバルト、15、18、19は呉須を用いて施文されている。また、19の見込みには三足ハマの痕跡が認められる。20はいわゆる寿文皿である。22は青磁鉢で、JB-5-dに分類される。23は染付鉢で、JC-5に分類される。酸化コバルトで施文されている。高台裏には釘書きで文字が書かれるが、判読できない。24～26、30～34は坏で、24～26がJC-6-b、34がJC-6-f、30、33がJC-6-a、31、32がJC-6-dに分類される。24～26、30、34は酸化コバルトを用いて手描きで施文されている。26、33はクロム青磁、31はいわゆる江戸絵付、32は白磁である。31は「二葉楼」と書かれている。27～29は筒形の坏で、JC-6-cに分類される。27は酸化コバルトによる型紙刷り、28はクロム青磁に盛り絵、29は酸化コバルトの手描き

で施文されている。35は白磁の紅皿で、JC-6-gに分類される。型作りである。高台裏には判読できないが松葉杵に文字のようなものが浮文されている。内面のみ施釉。36は黄釉の坏で、JZ-6に分類される。生地は光沢のある磁胎で、畳付を除き施釉されている。見込みおよび外側面は針状工具によって、雲龍文が彫られている。釉調は淡路焼に類似するが、生地や手による陰刻など異なる点も認められ、産地は不明である。37は色絵碗で、JB-1-fに分類される。草花、鳥などを赤、黄、緑を用いて絵付されている。内側にも赤で上絵付されるが、これはキズ隠しであろうと思われる。38は小形の御神酒徳利で、JC-11に分類される。39、40は染付蓋物で、JB-13に分類される。39は型紙刷り、40は呉須で手描きの文様が施される。41は染付散蓮華で、JC-20に分類される。内面は銅版転写で文様が描かれている。

陶器 (42~56) 42は灰釉皿で、TD-2-bに分類される。見込みには3箇所ピン痕が認められる。裏面口縁部付近は灯心痕が密に観察できる。43は宜興窯の焼締め急須で、TA5-16に分類される。底部には二重角杵内に「萬豊順記」の刻印が認められる。44は灰釉の茶漉しで、分類は設定していない。注口部には茶葉止めの小穴が7箇所穿孔されている。底部には「朝日」の刻印が確認できることから、京焼であろう。蓋の受部、底部は無釉である。45は灰釉脚付油受け皿で、TD-40-aに分類される。46、47は型作りの練り込みの急須で、TI-16に分類される。46は茶葉止めの小穴が多数穿たれている。48は形態から筒形の湯呑茶碗であろうか？。生産地、器種とも不明である。樹木形に型作りされており、表面、底部は若草色、内面は暗茶色の釉が掛けられている。器面には文字が浮文されているが、「葉」が判読できるのみである。胎土は暗灰色を呈し、堅緻である。白色の細砂粒が少量混入する。49、50は灰釉鉄絵の二合半徳利で、TC-10-cに分類される。胴部には49は「升本」、「森川町」、50は「三河屋」、「駿河臺」の文字が鉄で書かれている。「森川町」は本郷森川町で、本地点および現在の本郷通りを挟んで向側、「駿河臺」は現在の御茶ノ水駅南側の町名である。51は器面鉄釉、見込み白濁釉の鉢で、TM-5に分類される。やや焼成不良である。同手の製品は益子の大西窯、須田ヶ池加藤窯、大羽・須藤窯などで確認されている。見込みには方形の焼台の溶着痕が輪状に認められる。縁帯にはおそらく草花文が貼り付けられている。52、53は土瓶で、52がTZ-34-b、53がTZ-34-cに分類される。52は器面白土の上に染付され、注口裏には「道八」の銘が確認できる。内面は錆釉。53は白土の上に三彩で山水文を描いている。胎土は堅緻で明るい褐色を呈し、益子の製品に類似性が高い。底部はススが密に付着している。54、55は柿釉の播鉢で、TC-29に分類される。双方とも鉄櫛で播目が入り、蛇ノ目高台に成形している。近代の製品であろう。55の内面は錆釉の色調が濃い。56は柿釉・灰釉流しの澁瓶で、TC-28に分類される。内面には石化したカルシウムが付着している。

土器 (57~69) 57はロクロ成形の塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。内面には布目の痕跡が認められる。58~63は土師質のかわらけで、DZ-2-bに分類される。いわゆる江戸式である。61、63の口唇部には灯心痕が認められる。64、65は瓦質の植木鉢で、DZ-21-bに分類される。66は瓦質の仕切り盤で、DZ-5-bに分類される。67は硬質瓦質の角火鉢で、DZ-31-fに分類される。口唇から外面にかけて丁寧に研磨されている。外面は連続した押形文が施されている。脚は磨れて、わずかに遺存しているにすぎない。68、69は丸形の七輪で、DZ-48-aに分類される。68はこの七輪のパーツで、サナ受けであろう。口唇部と器面は丁寧に研磨され、器面と扉には連続した押形文が施されている。内面上位と口縁部にはススが付着している。

人形・ミニチュア・遊戯具 (70~79) SK176の鉢とSK293の皿が遺構間接合している。70は陶器の土鍋でTZ-61に分類される。胎土は赤褐色で、ロクロ成形で把手は紐状タイプで脚は手捻

りで貼付けている。鉄釉を施しているが外面胴部中央から底部にかけ無釉である。71、72は播鉢と鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系を呈し、ロクロ成形で彩色、施釉されている。71は内面胴部に白色で梅鉢を描き、その上に緑色で装飾し施釉している。72は口縁部の一部を僅かに内傾させ輪花状にしている。内面は白色に塗り青緑色で装飾し施釉している。外面は口縁部周辺のみ施釉している。73は芥子面でDZ-55に分類される。河童の顔である。74は八角形鉢でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形で、彩色施釉している。口縁部周辺の内外面は黄色に塗り、さらに焦茶色で内面のみ重ね塗りしている。見込みには焦茶色で枝、赤で花を描き施釉。外面は口縁部周辺のみ施釉している。75は鉢でDZ-61に分類される。胴部にヘラ先の刺突が観察される。76は瓶でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形である。麻の葉文様を付け緑釉を施す。77、78は泥面子でDZ-55に分類される。79は鳩の笛でDZ-59に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形で、無釉である。赤色と青色が観察される。

SK359 (Ⅲ-87~89 図)

1は染付広東碗の蓋で、JB-00-bに分類される。2は白磁のいわゆる寿文皿で、JC-2-dに分類される。木型打込皿である。3は蛇ノ目凹形高台の染付猪口で、JC-7に分類される。顔料は酸化コバルトを用いている。高台裏には墨書が認められるが、判読できない。4は色絵の段重で、JB-13-cに分類される。色絵は剥落が顕著で、呉須、赤の他には確認できない。

5は端反の色絵碗で、TD-1に分類される。内面は白土の上に灰釉、外面は錆釉の上から白土で文様を施し、白土の上を青、茶で色を付けている。6は鉄絵・染付の端反形碗で、TC-1-yに分類される。朝顔の花を呉須、蔓を鉄で描いている。7は色絵の土瓶で、TZ-34に分類される。器面は酸化コバルトの薄瑠璃で、白土、クロム、コバルトで花蔓草が描かれている。内面も同釉を化粧掛けしている。8は柿釉播鉢で、TM-29に分類される。外面と内面上位に柿釉が掛けられている。播目は細かい金櫛で入れられている。ベタ底の高台裏には全周、見込みには1箇所スリットが入る焼台の痕跡が明瞭に確認できる。ベタ底で同手の製品は益子の大平・滝沢窯で類例がある。9は焼締めの甕で、TG-15に分類される。平縁の口縁部には「○」の刻印が押されている。口唇部と胴部上半には自然釉が認められる。胴部下半はやや焼成不良で、胎土は赤褐色を呈する。

10~20は人形、ミニチュア、遊戯具である。10~12はぶら人形と手足でDZ-60-fに分類される。13は春駒童子でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空である。駒のたてがみと目は焦茶色で描き、また体部に白色、朱色、緑色と施釉の痕が観察される。底部中央は穿孔による段差が生じている。14はミニチュアの白磁の碗でJB-61に分類される。体部には蓮弁を施している。内面、口縁部下に沈線。15は碁石形土製品でDZ-56に分類される。16は菊花形のミニチュアの水滴でDZ-61に分類される。型押成形である。菊花は白色、葉は青緑に彩色し施釉している。底部は無釉である。17は芥子面でDZ-55に分類される。お高祖頭巾の女性である。胎土は白色系で、型押成形、無釉である。指頭大に裏面を凹ませている。橙色系の胎土の芥子面とは異なり裏面はしっかり凹ませている、文献『喜遊笑覧』喜多村信節・文政13(1830)年にある芥子面はこの形態とおもわれる。18は鶏でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（左右合わせ）で無釉である。向かって右側羽と尾の下に、径が約1cmの穿孔がある。19はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。20は童子でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。器壁は厚い。

SK360 (Ⅲ-89 図)

1は染付筒形碗で、JB-1-1に分類される。焼成不足で上釉が白濁している。文様はコンニャク印

判と手描きでラフに描かれている。2は灰釉の段を持つ碗で、TD-1-kに分類される。3は灰釉丸碗で、TD-1-bに分類される。4は鉄釉灯明皿である。受けがないので、油受け皿には該当しない。胎土、釉調から肥前陶器(TB)であろうと思われる。5は「泉湊伊織」の刻印を有する板作りの塩壺で、DZ-51-gに分類される。内面には布目が認められる。

SK373 (Ⅲ-89 図)

1は褐釉・緑釉掛け分けのいわゆる鎧茶碗で、TC-1-rに分類される。2は土師質の端反の鉢で、DZ-5-aに分類される。同類ではやや大形である。3は軟質瓦質の七輪で、DZ-48に分類される。胴部下半の窓やサナ受けの形態などは、19世紀中葉から出土する硬質瓦質の丸形七輪に類似するが、これに先行する製品の可能性もある。外面胴部中位に渦巻の連続文帯が認められる。

SK378 (Ⅲ-89 図)

1は青磁染付の筒形碗で、JB-1-lに分類される。胎土、呉須ともに不良である。2は灰釉鉄絵のいわゆる柳茶碗で、TC-1-gに分類される。見込みには回転擦痕が認められる。3は灰釉小瓶で、TC-10に分類される。胴部は相対して凹ませている。胴部には山笠に「長」が釘書きされている。

4~9は人形、ミニチュアである。4、5はミニチュアの銚子と釜でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(上下合わせ)である。4の把手、注口は貼付である。上面は4箇所を白色に塗り、さらに緑釉で装飾し施釉している。底部は無釉である。5の釜には白色の彩色が観察される。6はミニチュアのカマドでDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、板作りである。焚口は一つで、三つのパーツから構成されており、接合部の調整は丁寧である。7は行水人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)で中空、無釉である。体部に白色と髪には黒色が観察される。8はミニチュアの風炉でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で開口部は篋で施す。底部は歪んでいる。9は坐猫でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(前後合わせ)で中空である。胴部と腰には梅花文様を描いている。頭部と首、花卉は白色で、花卉はさらに青緑と赤茶色、首は青緑、尾は焦茶色で彩色し施釉している。

SU381 (Ⅲ-90、91 図)

1~4は肥前系磁器染付碗とその蓋で、1は梅樹文碗JB-1-v、2は広東碗JB-1-m、3は小丸碗JB-1-j、4は広東碗蓋JB-00-bに分類される。2は焼継の痕跡が確認できる。5は染付大皿で、JB-3-bに分類される。裏面には二重角枠内渦福銘、5箇所のハリ支え痕が確認できる。6は染付皿で、JB-2-gに分類される。見込み中央にはコンニャク印判五弁花が押されている。裏面には二重角枠内渦福銘が書かれている。7は染付猪口で、JB-7-bに分類される。底部中央にはまき砂が付着している。8は仏飯器でJB-8-cに分類される。9は染付御神酒徳利で、JB-11-bに分類される。全く欠損のない完形である。12は褐釉香炉・火入れで、JB-9-bに分類される。底部は蛇ノ目凹形高台に成形されている。

10は土灰釉の段がつく萩系陶器碗で、TH-1-aに分類される。高台は右回転の渦巻高台に作られている。11は灰釉色絵の坏で、TD-6に分類される。赤、緑?で上絵付されている。13はいわゆる小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。鉄で簡略化した松文が描かれている。形態、文様の書き方などから新しい時期の製品であろうと推定される。14は灰釉端反形の小碗で、TD-1-gに分類される。15、16は黒色の鉛釉が掛けられた土瓶で、15はDZ-00-n、16はDZ-34に分類される。胎土は軟質で、橙褐色を呈する。17は柿釉のいわゆる銭甕で、TC-15-aに分類される。底部は二次的に穿孔されている。口縁部は釉剥ぎされている。18は鉄釉ひょうそくで、TC-44-aに分類されている。底部中央には小穴が確認できる。19は土師質の油受け皿で、DZ-40-dに分類されている。

20 はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-w に分類される。

21～34 は人形、ミニチュア、遊戯具である。33 の橋がSU385 と遺構間接合している。21 はミニチュアの白磁の碗でJB-61 に分類される。型押成形である。連弁文様で口縁部幅は不均一である。22、23 はミニチュアの陶器の鉢でTD-61 に分類される。胎土は浅黄色を呈し、ロクロ成形である。2色の釉を掛け分けている。22 は内面と外面の一部を黄白色で、外面は紫がかった灰色の釉で装飾している。口縁部は厚く、外反している。裾から高台にかけ無釉である。23 の口縁部は内側に僅かに段をもち、厚く外反する。内面と外面の一部は黄白色で、外面は灰褐色で装飾しているが艶がなく劣化が観察される。胴下部から高台は無釉で、高台外周は僅かに面取りしている。24、25 は瓢形をした瓶でDZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形（左右合わせ）で中空、緑釉で装飾している。外面には葡萄唐草と駆けている馬を付けている。胴下部から底部にかけ無釉である。26 は姉様（女雛）でDZ-60-d に分類される。27、28 は基石形土製品でDZ-56 に分類される。29 はミニチュアの土瓶でDZ-61 に分類される。30、31 は猫と鳩でDZ-60 に分類される。胎土は浅黄橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中実、無釉である。小さな人形で底部に穿孔がある。31 は全体に雲母が観察される。32 は鳩でDZ-60 に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（左右合わせ）で中空であるが尾の部分は中実である。左翼の下に穿孔。33 はミニチュアの橋でDZ-61 に分類される。SU385 と接合している。胎土は褐灰色を呈する瓦質で、型押成形である。34 はミニチュアの灯籠でDZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形（対角線合わせ）で中実である。

SU382（Ⅲ-91～93 図）

1～3 は染付半球碗で、JB-1-f に分類される。4、5 は染付小丸碗で、JB-1-j に分類される。5 は見込み手描き五弁花が描かれている。6～8 は筒形碗で、JB-1-l に分類される。6、7 は染付、8 は青磁染付である。6、8 は見込みコンニャク印判、7 は手描き五弁花が描かれている。7 は「筒江」銘が確認される。9 は染付碗で、JB-1-q に分類される。10～12 は染付皿で、10 がJB-2-m、11 がJB-2-e、13 がJB-2-j に分類される。10 は胎土、呉須の発色ともに悪い。11 は底部裏に二重角枠内渦福銘が書かれ、ハリ支え痕が4箇所確認できる。12 は底部蛇ノ目釉剥ぎ部の幅が狭く、銘款の一部が確認されることから本類の中でも古手であると推定できる。13 は白磁の坏で、JB-6-a に分類される。14 は染付猪口で、JB-7-b に分類される。漆継ぎの痕跡が認められる。15 は染錦の香炉・火入れで、JB-9 に分類される。染付に赤、金で上絵付されている。

16 は土灰釉の段がつく萩系陶器碗で、TH-1-a に分類される。高台は右回転の渦巻高台に作られている。17 は刷毛目碗で、TC-1-s に分類される。いわゆる打刷毛目である。18 は灰釉丸碗で、TC-1-c に分類される。見込み中央付近は不定方向に直線的な擦痕が確認される。19 は色絵碗で、TD-1-m に分類される。印章文様が上絵で描かれている。高台の調整は丁寧にされている。20 は灰釉色絵の半球碗で、TD-1-b に分類される。上絵は赤、緑色が使用されている。21 は灰釉鉄絵皿で、TC-2-e に分類される。見込みには鉄で、笹文が摺絵されている。3箇所が目跡が観察される。22 はいわゆる笠原鉢で、TC-5-a に分類される。釉調はやや黄味がかり、文様もラフに施されている。見込みには焼成時の溶着痕がいくつか認められる。23 は灰釉輪禿鉢で、TC-5-c に分類される。24 は灰釉・鉄釉掛け分け仏花器で、TC-22-b に分類される。底部は釉を拭き取っている。25 は信楽のいわゆる腰白茶壺で、TD-15-a に分類される。体部上半はやや透明感のある褐釉が施されている。26 は灰釉坏でTC-6 に分類される。27 は灰釉鉄絵の香炉・火入れでTC-9-c に分類される。文様は摺絵で描かれている。28 は灰釉呉須絵の油壺で、TC-12 に分類される。文様は地呉須で描かれている。29 は褐釉の一升徳利で、TC-10-e に分類される。胴部には実測図のような釘書きが書かれてい

る。高台に一部が欠損しているのみで、完形である。30は錆絵染付灰落として、TD-24に分類される。底部は6箇所のアーチ状のえぐりがつけられている。器面と内面上位には白土が施され、その上から錆絵染付で枝文を描いている。31は焼締め油受け皿で、TE-40に分類される。裏面にはいわゆる火だすき痕が確認できる。32は鉄釉蓋物で、TF-13に分類される。内面および底部は無釉で、見込み中央には輪状の溶着痕が確認できる。33は灰釉の器種不明製品で、胎土、釉調の特徴から京都・信楽系製品であろうと思われる。碁笥底風の底部で、体部は上位で張り出しが作られ、口唇部には相対して山形の把手が付けられている。底部および内面上位以下は無釉である。34は灰釉漫瓶で、TC-28に分類される。35は柿釉手付鍋で、TZ-33-aに分類される。底部にはススが付着している。

36は孔が穿たれているかわらけで、DZ-2-iに分類される。37～39は土師質のかわらけでDZ-2-bに分類される。口唇部には灯心痕が認められる。40～42は油受け皿である。40、41が透明釉が施される製品でDZ-40-b、42は無釉の製品でDZ-40-dに分類される。40は釉が剥落し、胎土も淡褐色を呈するなど本類の典型的な製品とは異なる。43、44は透明釉が施される皿で、DZ-2-hに分類される。45は土師質の鉢で、DZ-5に分類される。底部は回転糸切り、体部内面は丁寧に研磨されている。46は透明釉が掛かるひょうそくで、DZ-44-eに分類される。口縁の一部には灯心痕が認められる。47は土師質のひょうそくで、DZ-44-cに分類される。完形である。48は土師質の脚付油受け皿で、DZ-40-cに分類される。49、50は土師質の瓦燈で、DZ-45に分類される。胎土や法量などの特徴の一致から同一個体であろうと思われる。基部中央の受けはススの付着が顕著である。51は土師質のほうろくで、DZ-47-aに分類される。内面にはススが付着している。52は板作りの塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。胎土は赤褐色を呈している。53は「イツ口 / 花焼口 / ツタ口」の刻印を有する塩壺の蓋で、DZ-00-eに分類される。54はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。

55～62は人形、ミニチュアである。60のミニチュアの橋がSK337と遺構間接合している。55はミニチュアの箱庭道具でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、池は型打成形で行い洲浜状に変形させ、松枝や脚は貼り付ている。指頭押圧痕が顕著である。池の縁は鉄釉と緑釉で、松枝と滝は濃い緑釉と鉄釉で彩色し施釉している。56は狐の面形でDZ-62に分類される。胎土は橙色系で、型打成形で、彫りが深い。内面の目と耳に色をつけている、また外面には狐の顔と思われるものが描かれている。57はミニチュアの磁器の碗でJB-61に分類される。畳付は無釉である。58は茶釜でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で無釉である。59は組角力でDZ-60に分類される。頭部は型押成形で、他は手捻りである。禪はヘラで切り込みを入れ表現している。髪と目は焦茶で描いている。体部には白色と緑色と施釉の痕が観察される。60はミニチュアの橋でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、橋板は板作りで、欄干は手捻りである。欄干の上面は濃い緑釉で彩色されている。底部の一部を残し他は施釉している。欄干の支柱には指頭痕、橋板の裏面は調整具の板目が観察される。SK337と遺構間接合したものである。61は猿でDZ-60-gに分類される。胎土は橙色系で、顔は型押し、体部は手捻り成形で貼付けている。62はミニチュアの五鈷鈴でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で、底部は開口しており、無釉である。五鈷鈴は密教の法要の際用いられる法具である。

SK383 (Ⅲ-93 図)

1は白磁の碗で、JB-1-fに分類される。口唇部には口錆が施されている。2は染付碗で、JB-1-dに分類される。胎土、呉須の発色とも良好である。口唇部には口錆が施されている。3は染付坏で、JB-6-bに分類される。角枠内角福銘が書かれている。4は白磁の端反形碗で、生産地不明である。胎土は光沢のない白色を呈するやや軟質な半磁胎で、器面には白色の粗砂粒や気泡が多く確認でき

る。高台脇には削り出しの際についたカンナ痕が観察できる。高台は丸く削りだし、右回転の渦巻高台に成形している。見込み中央は円形に一段下げ、茶溜まりを作っている。その外側には小さなピン痕が3箇所（欠損のため実際は4箇所であったと推定される）確認できる。5は青緑釉碗で、TB-1-iに分類される。嬉野町内野山窯の製品である。高台裏には実測図のような釘書きが認められる。6は刷毛目の片口鉢で、TB-23-aに分類される。口唇部は釉を拭き取っている。7、8は土師質のかわらけで、DZ-2-bに分類される。口唇部の一部に灯心痕が付着している。9は板作りの塩壺で、DZ-51-iに分類される。二段角の「泉州麻生」印が押されている。内面は布目、底部は輪状および団子状の粘土を用いて作られている。

SU385（Ⅲ-94 図）

1は染付碗で、JB-1に分類される。体部、高台とも「ハ」の字状に直線的に開く。銘は小丸碗など多くつくもので、18世紀後半～19世紀初頭頃の製品であろうと考えられる。2は底部無釉の青花坏で、JA2-1に分類される。福建・広東の製品であろう。

3～6は人形、ミニチュアである。SU381で掲載した33の橋が遺構間接合している。3は壺持ち聖人かDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空である。上衣は緑色、壺は緑の上に黒色を重ね塗りし施釉している。底部は無釉である。4は十二単の人形でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、無釉である。立て膝で、扇を持っている。5はぶら人形の足でDZ-60-fに分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形である。6はミニチュアの陶器の瓶でTZ-61に分類される。胎土は灰黄褐色を呈し、型押成形（前後合わせ）で中空である。体部は鉄釉が施され、胴下部から底部にかけ無釉である。

SK386（Ⅲ-94 図）

1はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、無釉である。共伴した陶磁器は18～19世紀前葉に比定される。

SK387（Ⅲ-94 図）

1は蛇ノ目凹形高台の低いタイプの染付皿で、JB-2-jに分類される。見込みには不定方向の擦痕が認められる。2は型作りの変形皿で、TE-2に分類される。見込みは型で、菖蒲文が浮文されている。3は小形の焼締め播鉢で、TL-29に分類される。見込みの播目は三角パターンである。胎土は赤褐色を呈し、白色の細砂粒が少量混入している。

4～6は人形、ミニチュア、遊戯具である。4は天神様でDZ-60-bに分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空である。底部に穿孔あり。冠と纓（えい）は黒色で、袍は白色、膝下には朱色が観察される。5はミニチュアの庵でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、板作りで、戸や窓は彫って表現している。櫛描き状の戸は黄色に、丸く開いた窓と両側面の壁は白色に彩色されている。上面には屋根などを貼付たあとが観察される。6は基石形土製品でDZ-56に分類される。

SK388（Ⅲ-94 図）

1、3は灰釉壺で、1は蓋でTC-00-b、3はTC-15に分類される。法量の一致から同一個体である可能性がある。2は鉛釉が施された鉢で、生産地不明である。胎土は淡灰色を呈し、堅緻である。見込み中央と側面には播鉢様の播目が付けられ、上位には軽く沈線が巡っている。高台は丁寧に削り出され、高台内には鉄釉が施されている。4は火消し壺蓋で、DZ-00-hに分類される。5は透明釉が施された水注で、DZ-27に分類される。6はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。7は土師質の鐙状の折り返し口縁を有する鉢で、DZ-5に分類される。

8と9は人形とミニチュアである。8は蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形

で、摘みと合い口は貼付けである。上面はオリーブ色で施釉されている。9は蛙でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、手捻り成形で足は貼付けである。上面のみ緑釉で彩色している。

SU389 (Ⅲ-95、96 図)

1～18は磁器で、15が白磁である他は染付である。1は丸碗でJB-1-e、2は小広東碗でJB-1-i、3は小丸碗でJB-1-jに分類される。2はやや胎土も灰色がかり、呉須の発色も悪い。4～6は広東碗で、JB-1-mに分類される。4、5は焼継されており、底部には「△」が二つの同じマークが入る。7～11は端反形碗とその蓋で、7がJC-1-d、8、9、11がJB-1-n、10がJB-00-cに分類される。8と9は揃い、10と11は同一個体であると思われる。7～9、11は焼継されており、底部には9は二つ、他は一つの「△」マークが入る。12、13は広東碗蓋で、JB-00-bに分類される。12は細線書きのいわゆる素書きで文様が描かれている。14は端反碗蓋で、JB-00-cに分類される。焼継されており、摘み内には「△」マークが入る。15は白磁の台付皿で、JB-2に分類される。口唇部の一部に黒ずんだ部分が確認でき、灯火具として使用された製品と推定できる。16、17は仏飯器で、JB-8-cに分類される。18は輪花皿で、JB-2-eに分類される。高台裏にはハリ支え痕が5箇所確認できる。

19～36は陶器である。19は小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。釉葉はやや青味がかり、鉄と呉須で文様を描いている。20は灰釉端反碗で、TD-1-gに分類される。21はTD-1に分類される。器面から高台は無釉であるが、文字は彫られた後に釉が充填されている。内面は白土を施した上に施釉されている。見込みには3箇所のピン痕が認められる。22は灰釉鉄絵の皿で、TD-2-cに分類される。鉄絵は薄く簡略した文様が描かれている。23は灰釉で菊の小文が貼り付けてある皿で、TD-2-aに分類される。24は碗に半円状の小穴を開けたものを貼り付けた製品で、茶漉しであろうか？。灰釉に瑠璃釉が流し掛けられている。高台裏には楕円枠に「春山」の刻印が押されている。胎土から瀬戸・美濃系の製品であろう。25、26は灰釉二合半徳利で、施釉法の相違から25がTC-10-c、26がTC-10-aに分類される。両者列点状の釘書きが認められる。27は灰釉五合徳利でTC-10-dに分類される。列点状の釘書きが認められる。28は鉄釉輪花鉢で、生産地は不明である。胎土は暗灰色～橙褐色を呈し、堅緻である。見込みには小さなピン痕が4箇所認められる。高台外周は面取りされている。29は柿釉半胴甕で、TC-15-aに分類されている。底部中央は二次的に穿孔されている。口唇部にはトチンの痕跡が確認できる。30は灰釉植木鉢で、TC-21に分類される。あらかじめ穿孔された底部の孔をさらに広げている。31は黄釉・緑釉流しの蓋物で、TZ-13に分類される。胎土は軟質で、明褐色を呈する。体部下端には二重楕円内に「財棧」の刻印が認められる。32は鍍釉油徳利で、TC-41に分類される。肩部には油落ちの受けと小孔が取り付けられている。33、35は青緑釉の、いわゆる青土瓶で、TZ-34-aに分類される。33は胴部に明確な稜を有するそろばん玉状を呈するのに対し、35はややふくらみを持つ球状を呈する。ともに注口部には3箇所の茶葉止めの小穴が確認できる。底部にはススの付着が認められる。34は練り込めの土瓶で、TZ-34に分類される。見込みには3箇所のピン痕が確認できる。底部はススが付着している。36は灰釉手付き鍋で、TZ-33に分類される。底部にはわずかにススが付着している。

37～48は土器である。37は透明釉が施された皿で、DZ-2-hに分類される。口唇部には、ほぼ全周灯心痕が認められる。38は瓦質の鉢で、DZ-5に分類される。底部は回転糸切り離しである。39は七輪のサナである。内面は二次的な火熱により白化している。40は瓦質火鉢の蓋でDZ-00に分類される。表面はトビガンナ部分以外には丁寧に研磨されている。径10mmの孔がおそらく6箇所開けられていると思われる。内面はススの付着が著しい。41は円筒状の硬質瓦質の火鉢で、DZ-31-jに分類される。表面は丁寧に研磨され、底部にはおそらく4箇所の面取りが施されているもの

と思われる。底部裏には楕円内に「新兵衛」の刻印が押されている。42は土師質の涼炉で、DZ-49に分類される。胎土は灰白色を呈し、非常に堅緻である。脚は3基あり、多角形に削り出されている。表面上位に「人我樂」、底部裏に刻印が押されている。43は七輪の風口で、DZ-48-cに分類される。円形の孔周囲は、若干被熱による白化が認められる。44～46は塩壺で、44、45はロクロ成形DZ-51-w、46は板作り成形DZ-51-abに分類される。46は内面布目が認められる。47は土師質の丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。底部中央には内側から小孔が穿たれている。植木鉢などに転用したものであろうか？。見込みには右回転の渦巻状沈線が認められる。48は瓦質六角形の七輪で、DZ-48に分類される。口縁部縁帯は丁寧に磨かれている。

49～54はミニチュアと遊戯具である。49はミニチュアの磁器の碗でJB-61に分類される。型押成形で、蓮弁文様が施されている。50～53は基石形土製品でDZ-56に分類される。52は黒色が観察される。54は石製の基石である。

SK390 (Ⅲ-97 図)

1は土師質の円筒形の火鉢で、DZ-31-jに分類される。表面は丁寧に研磨され、波状の押形文が施されている。胎土は橙褐色を呈し、やや厚い器厚を持つ。

SK391 (Ⅲ-97 図)

1は瓦質の香炉・火入れで、DZ-9に分類される。器面はちぢれ風の文様が付けられ、脚を3箇所持つ。底部は二次的に径5mm程度の穿孔が4箇所認められる。

SU392 (Ⅲ-97～101 図)

本遺構から多量の遺物が出土している。年代的には木型打込みの製品(17、28、43など)が含まれ、また、酸化コバルトで文様を付けられている製品が確認できないことから、幕末を下限とする東大編年Ⅷd期に比定できる資料群である。

磁 器 (1～58) 1は仙芝祝寿文の青花碗で、JA1-1に分類される。2は染付薄手半球碗で、JB-1-fに分類される。呉須は淡い青に発色している。3～5は染付丸碗とその蓋で、3、4はJB-1-e、5はJB-00-aに分類される。文様の共通性から4と5は同一個体であろう。3、4は焼継されている。6～11は染付端反碗で、JC-1-dに分類される。8、11は鮮明な青色に発色する呉須で施文されているが、他は瀬戸・美濃の地呉須が使用されている。11は幅広の高台を持つ。12～16は湯呑碗で、12、15がJB-1-o、他はJC-1-eに分類される。13が白磁の他は、染付である。14は毛彫りの後、ダミで埋めている。17は染付丸碗の蓋で、JC-00に分類される。表面は毛彫り、内面は木型打込みの後にダミで埋めている。18、19は体部直線的に開く碗とその蓋で、JC-1-f、JC-00-cに分類される。文様、法量から両者は同一個体であると思われる。20～23は色絵皿で、JB-2-eに分類される。21～23はともに南蛮人絵で、「大清乾隆年製」の高台裏銘を持ち、揃いであろうと推定される。実測図にあげた他にも2個体別絵で類似する製品が出土している。21は焼継で補修されている。高台裏には焼継屋が入れたと思われる「ウ」、「小」の赤絵が見られる。24は蛇ノ目凹形高台染付皿で、JB-2-jに分類される。やや粗雑な作りである。25は染付皿で、JC-2-cに分類される。26は染付皿で、JB-2-qに分類される。内面には不定方向の擦痕が確認できる。27は青磁皿で、JC-2-bに分類される。高台裏は透明釉で、「問田」？の銘が書かれている。28は白磁木型打込のいわゆる寿文皿で、JC-2-d、29、30は型皿で、JC-2-eに分類される。29は染付、30は白磁である。31、32は染付蛇ノ目凹形高台皿で、JC-2-aに分類される。文様は地呉須で描かれている。33は染付蛇ノ目凹形高台鉢で、JB-5-dに分類される。34は染付爛徳利で、JC-4に分類される。文様は山水文で、鮮明な青に発色している。35、36は染付坏で、JB-6-fに分類される。37～44は坏で、37がJB-

6-b、38 が JC-6-a、39～42 が JC-6-d、43 が JC-6-e、44 が生産地不明である。37、38 は染付、39～42 はいわゆる江戸絵付、43 は寿文の木型打込の白磁、44 が青磁である。39 は江戸絵付に金彩が施されている。44 は高台裏に棒状工具によって「東山」と記されている。京都・信楽系か？。45 は染付御神酒徳利で、JC-11-b に分類される。松竹梅、たこ唐草文が鮮明な呉須で描かれている。46 は JC-11-a に分類される。47 は小形の染付御神酒徳利で、JB-11-b に分類される。胎土、呉須の発色は悪い。48 は大形の段重で、JB-13-c に分類される。49、50 は染付急須で、49 は JD-16、50 は JD-00 に分類される。呉須の発色は鮮明で、細かい線で、花鳥、唐船、唐人などを描いている。把手の下側に「道八」の銘が確認できる。底部の被熱の痕跡は明瞭ではない。51～53 は染付蓋物で、51 が JC-18、52、53 が JB-18 に分類される。51 は花唐草文が鮮明な呉須によって描かれている。52 は焼継が認められる。54 は染付、55 は瑠璃釉急須で、JC-34 に分類される。54 の底部は渦巻状に条線が入っており、ススの付着が顕著である。56、57 は染付筒形合子で、56 は JB-00-n、57 は JB-18-b に分類される。文様、法量の一致から両者は同一個体であると思われる。58 は染付散り蓮華で、JB-20 に分類される。柄および匙部先端に呉須が認められる。

陶器 (59～76、78～97) 59、60 は灰釉石皿で、TC-2-f に分類される。見込みには 59 は 8 箇所、60 は 6 箇所のトチン痕が確認できる。59 は中央に見込み側から径 5mm 程度の孔が穿たれている。植木鉢に二次利用されたか。60 は高台裏に「下坂」の釘書きの中に墨で書き込まれた文字が認められる。61 は青緑釉爛徳利で、TD-4 に分類される。62、63 は灯明皿で、62 は灰釉、63 は柿釉が施されている。62 は TD-2-b、63 は TC-2-o に分類される。62 はほぼ全周口縁部外側に灯心痕が付着している。62 には 3 箇所のピン痕、63 には輪状の溶着痕が確認できる。64～66 は焼締め壺で、TZ-15 に分類される。いずれも内面に鉄釉が横方向に施されている。胎土は堅緻で、64、65 は暗茶褐色、66 は赤褐色を呈する。66 は焼成不足であろう。64 の器面は二次的な火熱を受けている。67 は横位渦巻状の刷毛目鉢で、TC-5 に分類される。見込みには小さなピン痕が 3 箇所確認できる。68 は隅丸方形の灰釉鉄絵の香炉・火入れで、TD-9 に分類される。器面は相対する両面に白土の上に鉄で風景が絵付けされている。残る二面には輪状の貼付が認められる。口唇の一部には敲打痕が認められる。底部裏には「ナヤ□□」の墨書が認められる。内面は無釉である。69～72 は瀬戸・美濃系徳利で、69 は灰釉二合半徳利 TC-10-c、70、72 は錆釉徳利 TC-10-g、71 は灰釉徳利 TC-10 に分類される。69 は列点状の釘書きが認められる。70～72 は胴部に凹みがつけられている。73 は焼締め布袋徳利で、TE-10-a に分類される。胴部には自然釉が顕著に見られ、3 箇所に布袋が貼り付けられている。74 は灰釉鉄絵の瓶で、TD-10 に分類される。胴部には俵に乗った大黒が型成形され、頸部、胴部上半、胴部下半の 3 ピースを接合して成形されている。布袋の頭、腕、脛部分には鉄で彩色されている。75 は柿釉半胴甕で、TC-15-a に分類される。胎土には鉄が吹き出しており、いわゆる赤津ハンドと呼ばれる製品である。底部中央は二次的に穿孔され、植木鉢として使用されていたと推定される。底部内面には 3 箇所のトチン痕が認められる。76 は柿釉・灰釉流しの壺・甕で、TC-15-b に分類される。内面中央には 4 箇所のトチン痕が確認できる。78 は灰釉餌入で、TC-30 に分類される。79、80 は灰釉片口鉢で、TC-23 に分類される。79 の口唇部には鉄が施されている。80 の見込みは 3 箇所のトチン痕が認められる。81 は柿釉鍋で、TZ-33-a に分類される。底部にはススが付着する。胎土は赤褐色を呈し、底部脇には小さい段がついている。蓋受け部内側は釉剥ぎしている。82 は柿釉鍋のミニチュアで、TZ-61 に分類される。脚は 3 箇所つけられ、その間には白土が付着している。83 は手付鍋で、TZ-33 に分類される。内面、体部上半には錆釉、蓋受け部には白土が塗布されている。底部にはススが付着している。84、85 は呉須絵急須と

その蓋で、TZ-16、TZ-00-sに分類される。全体は無釉であるが、呉須絵が描かれている部分は、白土の上から施文、透明釉が施されている。蓋は蟬をかたどった摘みがつけられている。86は醤油指しの蓋でTZ-00に分類される。表面は灰釉緑釉掛け分け、内面は無釉である。87は鉄絵急須で、TZ-16に分類される。表面は白土の上に鉄絵が描かれ、胴部上位には緑釉が掛け分けられている。胴部下端、底部は白土、内面は灰釉が施されている。88～90、92～94は土瓶とその蓋で、88は鉄釉土瓶TZ-34-e、89はその蓋TZ-00-e、90は青土瓶TZ-31-a、93、94は糸目土瓶TC-34、92はその蓋TC-00-gに分類される。88、90、93、94の底部にはススが付着している。92の裏には「タチ」の刻印が認められ、美濃の駄知の製品であることが判る。91は焼締め急須の蓋で、TZ-00-sに分類される。95は灰釉行平鍋で、TZ-42-aに分類される。把手には「宮田」の浮文が認められる。底部にはススが付着している。96はトビガンナにイッチンの鍋蓋で、TZ-00-lに分類される。内面には鉄釉が施される。イッチン文様や胎土の特徴から飯能焼であると推定される。97は灰釉油受け皿で、TD-40-bに分類される。口縁部裏面には灯心痕がほぼ全周にわたり確認できる。

土器(77、98～116) 77は鉛釉植木鉢で、DZ-21-cに分類される。内面、底部には白土が施されている。底部裏には「トウ」の墨書が書かれている。98～103は土師質のかわらけで、98、99、101、102は無釉DZ-2-b、100、103は透明釉DZ-2-hに分類される。100の口縁部の一部には灯心痕が認められる。104は瓦質鉢で、DZ-5に分類される。底部は二次的に穿孔されている。105～107は瓦質の植木鉢で、DZ-21-bに分類される。口唇部は内ソギ状になっている。108は素焼きの植木鉢で、DZ-21に分類される。きわめて堅緻な胎土で、焼成も良好である。体部はヘラ彫りで文様がつけられている。109は透明釉が施された油受け皿で、DZ-40-bに分類される。口縁部には灯心痕が見られる。110、111はロクロ作りの塩壺で、DZ-51-wに分類される。111の内面および外面上位にはススの付着が見られる。112、113は塩壺蓋で、DZ-00-dに分類される。内面は布目が認められる。114は土師質七輪のサナである。表面は熱により白化している。瓢箪枠内に「今三」の刻印が押されている。115は土師質の火消し壺の蓋で、DZ-00-hに分類される。大形の製品である。116は土師質ほうろくで、DZ-47-aに分類される。内外面にはススが付着している。

人形・ミニチュア・遊戯具(117～139) 117はミニチュアの白磁の碗でJB-61に分類される。型押成形である。口縁部は平坦で幅が広く、全体的歪みが多く、釉にムラが多い。118、119はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系である。118はロクロ成形で、内外面を白色に塗り、見込みに赤色で文様を描き施釉している。119は八角鉢で型押成形で、内面のみ白色と青緑で彩色し施釉している。120はミニチュアの白磁の蓋でJB-61に分類される。型押成形で、摘みと合口は貼付である。裏面は無釉。121～128はミニチュアの碗と鉢、瓶、皿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系である。121は型押成形(前後合わせ)で、首部と底部をのぞき白色に塗り、赤色で丸に一の文字を描き施釉している。122はロクロ成形で、内面の一部を白色に塗り、焦茶と緑色で文様を描き、全面を施釉している。123はロクロ成形で、内面に梅花文様を白色で描き全体を施釉している。124はロクロ成形で、内面を白色に塗り梅花文を青緑と焦茶色で描き、底部を残し施釉している。125はロクロ成形で、外面体部は白色と青緑で梅花文を描き、底部を残し施釉している。126はロクロ成形で、内外面を白色で彩色し施釉している。127は型押成形で、内面は指頭押圧痕が顕著で、内外面に白色が観察される。128は型打成形で、口縁部は白色に、花と葉は白色と青緑で彩色し施釉している。129はミニチュアの長皿でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型打成形で貼付高台である。皿を斜めに区切り一方は側面と同じに麻の葉地文様を付け、一方は白色に塗り青緑色を散らし梅木を赤色と焦茶色で塗り、全面を施釉している。130～133は泥面子

でDZ-55に分類される。130は波と朝日、131は三つ扇、132は渦巻き右巴、133は青海波である。134～138は人形で135をのぞいてDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（前後合わせ）で中空である。134は兎で、全体に白色が観察される。135は犬でDZ-60-iに分類される。全面を白色で塗りさらに青緑を重ね塗りし、斑と鼻を茶色で、口と耳、目は焦茶色で描き施釉している。136は稚児で、体部に桃色が観察される。137は行水人形で、白色が観察される。伝世品をみると体部は白色で、両乳は薄茶色、手拭いは青緑で髪と目は黒色、口は赤で彩色している。138は禿で白色が観察される。139はミニチュアの船でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で中央は削り抜いて船底を作っている。全面を赤色で彩色し施釉している。

SK393 (Ⅲ-101 図)

1、2は染付小広東碗で、JB-1-iに分類される。3は内面刷毛目碗で、おそらくTD-1に分類される。葉状の型紙の上から刷毛によって白土が施されている。4は柿釉ひょうそくで、TC-44に分類される。口縁内面付近に小さい段を有し、段以上は釉剥ぎしている。5は灰釉二合半徳利で、TC-10-cに分類される。器面には列点状の釘書きを有する。6は灰釉瘦瓶で、TC-28に分類される。7は灰釉植木鉢でTC-21に分類される。全く欠損のない完形である。8は土師質かわらけで、DZ-2-bに分類される。9は土師質鉢で、やや口縁の端反が弱いDZ-5-aに分類される。10は透明釉が施されたひょうそくで、DZ-44-bに分類される。灯心立ての先端はススが付着している。11は透明釉が施された油受け皿で、DZ-40-bに分類される。口縁部の一部には灯明痕が認められる。12はロクロ作りの塩壺で、DZ-51-wに分類される。

13、14は遊戯具である。13は基石形土製品でDZ-56に分類される。14は石製の基石である。

SK394 (Ⅲ-101 図)

1は端反の色絵碗で、TD-1に分類される。内面は白土の上に灰釉、外面は錆釉の上から白土で文様を施し、白土の上を青、茶で色を付けている。

SK395 (Ⅲ-101 図)

1はミニチュアの瓶でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で高台は貼付している。六角形を呈し、体部には檜梅文様を白色と青色、焦茶色で描き施釉している。高台脇から底部は無釉である。内面は首部から肩までは施釉され見込みに釉溜まりが観察される。共伴した陶磁器は18世紀前半に比定される。

SU396 (Ⅲ-102～104 図)

本遺構からは多量の遺物が出土した。年代的には、酸化コバルトで絵付されたの製品、木型打込製品などが含まれていないこと、JC-2-e (型皿、15)、素描の製品 (7、8など) の存在など東大編年Ⅷc期に比定できる。

磁器 (1～23) 1～11は碗とその蓋で、3、9、10が色絵で、その他は染付である。1、4、5は端反碗でJC-1-dに、2、6、8、9は丸碗でJC-1-aに、3は広東碗でJC-1-cに、7、11は丸碗蓋でJC-00-aに、10は碗蓋でJA1-00にそれぞれ分類される。6は毛彫りの上にダミを乗せている。4、5、6は瀬戸・美濃の地具須を使用している。10はつまみ内に「大清乾隆年製」銘が書かれている。12は染付蛇ノ目凹形高台皿で、JB-2-iに分類される。底部には「成化年製」が書かれている。焼継されている。13は染付蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2に分類される。釉剥ぎ部の径が高台径より小さいため、皿と異なる製品を重ね積みしていた可能性がある。13の文様は砥部の製品に多く使われており、本例も砥部である可能性もある。14は幅広高台の染付皿で、JB-2-qに分類される。口唇部は波状に成形されている。15は染付型皿で、JC-2-eに分類される。16は染付蛇ノ目

凹形高台鉢で、JB-5-dに分類される。焼継されている。17～19は坏で、17、18がJC-6-d、19がJC-6-aに分類される。17はいわゆる江戸絵付で、青の白玉と金で上絵付されている。18、19は染付である。19は焼継されており、高台裏にそのマークが認められる。20は外面瑠璃釉、内面透明釉の仏飯器で、JC-8に分類される。21は染付御神酒徳利で、JB-11-bに分類される。22は染付段重で、JB-13-cに分類される。23は染付散り蓮華で、JC-20に分類される。匙部の成形などやや浅く中国風に作られている。

陶器 (24～47) 24は柿釉に上絵付されている脚付の坏で、TI-6に分類される。上絵付は、赤、黄を用いて花唐草を描いている。脚裏に瓢箪杵に「万古」の刻印が押されている。25は馬ノ目皿で、TC-2-gに分類される。見込みには3箇所の特チン痕が確認できる。26は灰釉石皿で、TC-2-fに分類される。見込みには6箇所の特チン痕が確認できる。27は白土の上にたんぼぼの上絵付がされた爛徳利で、TD-4に分類される。顔料は剥落しているが、赤、黄、金は確認できる。また、赤で「有山」と書かれている。28～30は灰釉灯明皿で、TD-2-bに分類される。すべてに3箇所の特チン痕が認められる。すべての口唇部の一部に灯心痕が確認できる。31は焼締め型皿で、TE-2に分類される。32は灰釉一升徳利で、TC-10-eに分類される。肩部には二次的に孔が穿たれている。33～36は柿釉灰釉流し壺・甕で、TC-15-bに分類される。33には3箇所、34、35には5箇所の特チン痕が認められる。37は灰釉餌入れで、TC-30に分類される。38、39は銹絵染付壺・甕とその蓋で、TD-13-d、TD-00-hに分類される。文様は白土、呉須、鉄で描かれている。見込みには4箇所の特チン痕が確認できる。40～42は灰釉油受け皿で、40がTD-40-a、41、42がTD-40-bに分類される。41、42の口唇の一部には灯心痕が確認できる。43は柿釉の植木鉢で、TC-21に分類される。内面には輪状の他製品との溶着痕が認められる。高台には1箇所アーチ状のえぐりが入られている。44は鉄釉壺・甕で、TD-15に分類される。胎土は灰白色を呈し、気泡、白色砂粒が多く認められ、TD-15-a(腰白茶壺)の胎土に類似している。外面は黒色鉄釉、内面は錆釉が施されている。45～47は糸目土瓶とその蓋で、47がTC-34、45、46がTC-00-gに分類される。46には長方形枠内に「タチ / 八兵」、47には長方形枠内に「タチ / 丸源」の刻印が押されている。47の底部にはススが付着している。

土器 (48、49) 48は瓦質の植木鉢で、DZ-21-bに分類される。49は硬質瓦質の風炉で、DZ-31-jに分類される。器面はトビガンナとミガキと交互に文様帯を作っている。えぐりの裏、胴部上位には、径16mmの孔が2箇所穿たれている。内面上位には円錐状の突起が3箇所に取り付けられている。

人形・ミニチュア・遊戯具 (50～65) 50はミニチュアの土瓶でDZ-61に分類されている。胎土は白色系で、型押成形(上下合わせ)で、注口、把手は貼付である。注口の先、把手、体部に緑釉で装飾し全面を施釉している。51はミニチュアの急須でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(上下合わせ)、注口は貼付、把手は長いまま差し込み、内面反対側まで達している。外面を白色に塗り花卉を赤色で描き施釉している。52は恵比寿様でDZ-60-cに分類される。胎土は橙色系で、型押成形で裏面は平坦である。非常に小さいもので、雲母が観察される。53はミニチュアの蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形、摘みは貼付で、上面は緑釉で装飾している。裏面はスス状のものが付着している。54、55はミニチュアの鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。55の体部に赤色の彩色が観察される。56～59は泥面子でDZ-55に分類される。56は丸の内に二つ引き、57は役者嵐吉三郎、58は十六菊、59は星付き金銅である。60はミニチュアの長皿でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型打成形で、高台は貼り付

けている。内面は斜めに区切り一方を麻の葉地模様、一方を白色に塗り青緑色を散らし梅木を赤色と焦茶色で描き全面を施釉している。61はミニチュアの陶器の瓶でTD-61に分類される。胎土は浅黄橙色でロクロ成形で、外面は銅緑釉を施し底部は無釉である。62はミニチュアの焼き締め陶器の風炉でTD-61に分類される。胎土は浅黄橙色を呈し、ロクロ成形で窓と高台はヘラでケズリ成形している。口縁部は厚くやや外反する。63は臥牛でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、型押成形で底部は開口している。寒紅のおまけに付けた臥牛と思われる。64は鳩笛でDZ-60に分類される。胎土は橙色系で、全面に白色が観察されるが釉は見られない。65は鯉でDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、内面は指頭押圧痕と雲母が顕著である。外面全体に朱色が観察され、目は白色と黒色を塗っている。

SB397（Ⅲ-104 図）

1、2はミニチュアの土瓶と蓋でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形である。いずれも緑釉で装飾している。1の土瓶は胴部より上のみを施釉している。後方把手の痕には2つの穿孔が観察されるが、同地点で出土した同様の土瓶を観察しても穿孔は観察できなかった。

SK398（Ⅲ-104 図）

1は染付端反碗で、JB-1-nに分類される。2は小形の染付御神酒徳利で、JC-11に分類される。焼成不足で、釉は白濁し、呉須も鮮明に発色していない。3はロクロ作りの塩壺で、DZ-51-wに分類される。胎土は赤褐色を呈する。

4～7は人形、ミニチュアである。4はミニチュアの播鉢でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。見込みは白色に塗り青緑色で梅花文を描き、花卉との間に赤茶色で斑を描き底部をのぞき施釉している。5は三味線弾きでDZ-60に分類される。胎土は白色系で、型押成形（前後合わせ）で中空、振ると音がでる構造になっている。全体に白色が観察され、着物は朱色、三味線の竿は黒色に彩色されている。背には亀甲に「亀」字の刻印が陽刻されている。6、7はミニチュアの皿と蓋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形である。6の皿の内面は、白色に塗り赤色で花？を描き青緑色で斑を描き施釉している。7の蓋の外面は、赤色を塗り青みがかかった白色の釉を施している。

SK399（Ⅲ-105 図）

1は焙烙頭巾被った袴大黒様の人形で、DZ-60に分類される。胎土は橙色系を呈し、型押成形（前後合わせ）で中空である。全身は白色に塗られており、頭巾は赤色、両耳の上には朱色が観察される。後面は白色が観察される。共伴した陶磁器は19世紀前葉～中葉に比定される。

SK401（Ⅲ-105 図）

1はミニチュアの銚子で、DZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形（上下合わせ）で、注口と把手、脚は貼付である。上面は鋸歯文が付され鉄釉と緑釉で文様を描き施釉している。

SK402（Ⅲ-105、106 図）

本遺構からは多量の遺物が出土している。年代的には木型打込の製品（8）などの存在と、酸化コバルト絵付されている製品が確認できないことから、東大編年Ⅷd期に比定できる。

磁 器（2～12） 2～5は染付碗で、2はJB-1-o（湯呑碗）、3、4はJC-1-d（端反碗）、5はJC-1-e（湯呑碗）に分類される。3、5の文様は鮮明に発色する呉須で染め付けられている。6、7は蛇ノ目凹形高台皿で、JB-2-iに分類される。6が染付、7が白磁である。ともに口唇部に口錆が施されている。6は焼継されており、高台裏にはそのマークが付けられている。8は木型打込のいわゆる白磁寿文坏で、JC-6-eに分類される。9は染付蛇ノ目凹形高台猪口で、JB-7-aに分類される。10は染付段

重で、JB-13-cに分類される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。焼継されている。二次的な被熱が確認できる。11は青磁香炉・火入れで、JB-9に分類される。12は青磁花生で、JB-22に分類される。

陶器 (1, 13~26) 1は陶胎染付筒形碗で、TB-1-fに分類される。器面雲鶴文の鶴、見込み中央の五弁花はコンニャク印判でつけられている。13は灰釉端反碗で、TD-1-gに分類される。畳付外周は面取りされている。14は灰釉灯明皿で、TD-2-bに分類される。見込みには3箇所ピン痕が確認できる。15は銹絵染付平碗で、TD-1-hに分類される。断面に漆継の痕跡が認められる。高台内の削り出しの際のヘラ痕は、右回転である。16は太白手の皿で、TC-2-tに分類される。底部は蛇ノ目凹形高台風に削られているが、全面施釉されている。口縁部に敲打痕が認められる。17は灰釉二合半徳利で、TC-10-cに分類される。ヒビ、欠損の全くない完形である。18は錆釉徳利で、TC-10-gに分類される。本例もヒビ、欠損の全くない完形である。19は灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。列点状の釘書きが確認できる。20は灰釉植木鉢で、TC-21に分類される。高台にはアーチ状のえぐりが1箇所見られる。21は大形の灰釉・鉄釉掛け分け花生で、TC-22-bに分類される。内面は器面上半と同様の灰釉が施されている。22は後手の水注で、TD-27に分類される。器面は白土、緑釉、褐釉、呉須で山水文が描かれている。内面は灰釉、高台無釉である。23は焼締め播鉢で、TL-29に分類される。胎土は白色砂粒を含む赤褐色を呈し、いわゆる赤物である。見込み播目は放射パターンで、明石産の可能性もある。24はうのふ釉土瓶で、TZ-34-kに分類される。内面はうのふ釉が化粧掛けされている。底部にはススが付着している。25、26は灰釉脚付油受け皿で、TD-40-aに分類される。

土器 (27~36) 27は透明釉が施された皿で、DZ-2-hに分類される。灯心痕が認められる。28、29は土師質のかわらけで、DZ-2-bに分類される。30は土師質の鉢で、DZ-5-aに分類される。30は瓦質植木鉢で、DZ-21-bに分類される。32、33は透明釉の脚付油受け皿で、DZ-40-aに分類される。ともに口唇の一部に灯心痕が認められる。34は透明釉の油受け皿で、DZ-40-bに分類される。35は透明釉のひょうそくでDZ-44-bに、36は土師質のひょうそくでDZ-44-cに分類される。35の灯心立て上部には、灯心痕が認められる。

人形・ミニチュア・遊戯具 (37~47) 37はミニチュアの土鍋でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形で把手は貼付である。小豆色した釉が内外面に施されている。38はミニチュアの白磁の皿でJB-61に分類される。ロクロ成形で、畳付は無釉で、熔着を防ぐための砂が付着している。39はミニチュアの陶器の土瓶でTD-61に分類される。胎土は鈍い橙色系で表面がざらつきがある。型押成形(上下合わせ)で注口と紐状の把手は貼付である。上下の接合部は細かく押さえた指頭痕が観察される。外面は地模様を施しイッチン描きで装飾している。釉調は灰褐色である。40はミニチュアの釜でDZ-61に分類される。胎土は白色系で、型押成形(上下合わせ)である。内面から外面の鏝まで緑釉を施す。41はミニチュアの茶釜でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(上下合わせ)で、無釉である。42は瓶でDZ-61に分類される。白色の胎土で、緑釉が施された六角徳利である。おそらく破損したものを二次的に使用したものと思われ、楕円形に穴を空け断面を磨いている。43は土瓶でDZ-61に分類される。胎土は白色系を呈し、型押成形(上下合わせ)で、緑釉を所々に流し掛けし装飾している。44は急須でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(上下合わせ)である。内面には雲母が顕著に観察される。注口、把手は差し込んで貼付けている。外面はすべて白色に塗り赤と焦茶、青緑色で梅枝を描き施釉している。45は袖垣かDZ-61に分類される。垣は櫛描きしている。長頸状のものの上は穿孔されている。彩色は所々を白色と青緑色で施し施釉している。46、47は基石形土製品でDZ-56に分類される。46には黒

色痕が僅かに観察される。

SK411 (Ⅲ-106 図)

1 は亀で、DZ-60 に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（上下合わせ）で中空、頭部は手捻りで貼付である。口は穿孔されている。甲羅は丁寧に表現され器壁は薄く、施釉されている。

SK414 (Ⅲ-106 図)

1 はミニチュアの碗で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、ロクロ成形である。胴下部は段差をもち、口縁部は僅かに外反する。胴部に赤色で文様を描く。共伴した陶磁器は 18 世紀末～19 世紀前葉に比定される。

SK415 (Ⅲ-107 図)

1 は色絵薄手半球碗で、JB-1-f に分類される。文様は染付と赤、金で鶉が描かれている。2 は染付碗で、JB-1-u に分類される。文様はコンニャク印判で描かれている。3 は染付碗で、JB-1-e に分類される。高台内には二重角枠内渦福銘が書かれている。胎土、呉須の発色とも良好である。4 は染付皿で、JB-2-e に分類される。見込み文様はコンニャク印判、裏文様は手で描かれている。5 は刷毛目碗で、TB-1-g に分類される。胎土は堅緻で、黒褐色を呈する。刷毛目はいわゆる打刷毛目である。6 は土師質かわらけで、DZ-2-b に分類される。7 は土師質油受け皿で、DZ-40-d に分類される。口唇の一部に灯心痕が確認できる。8、9 は板作りの塩壺で、8 が「泉州磨生」銘 DZ-51-j、9 が「泉州麻生」銘 DZ-51-i に分類される。ともに内面には布目痕が確認できる。10 は塩壺の蓋で、DZ-00-c に分類される。内側には布目痕が確認できる。

11～13 は人形である。人形のみ出土した遺構である。11 は舟乗り猿で DZ-60 に分類される。胎土は橙色系で、舟も猿も手捻り成形で、無釉である。舟は全体に器壁が厚く、指頭圧痕が観察される。猿は膝を立て坐っている。12 は瓢箪から駒で DZ-60 に分類される。胎土は橙色系で、型押成形（左右合わせ）で中実で全体に雲母が観察され、堅緻である。13 の人形は DZ-60 に分類される。胎土は白色系で、手捻り成形で施釉されている。釉調はやや緑がかった灰色である。後面にある垂れた部分は狩衣の一部と思われる。尾張藩上屋敷跡遺跡（東京都埋蔵文化財センター 1998）の報告では鷹狩りの人形としている、頭部は帽子を着け右手を左手にかけているもので、おそらく同様のものと思われる。

SE416 (Ⅲ-107 図)

1 は人形で DZ-60 に分類される。太鼓に凭れかかっているものである。胎土は白色系で、型押成形（左右合わせ）で中空、足は貼付である。太鼓の胴部は赤色、太鼓の側は焦茶色、太鼓の打面の三つ巴には白色、人物の手と衣は白色と青緑色で彩色され、施釉の痕が観察される。共伴した陶磁器は近代に比定される。

SK461 (Ⅲ-107 図)

1 は染付磁器小丸碗で、JB-1-j に分類される。2 は瓶子形の染付御神酒徳利で、JB-11-a に分類される。3 は染付鉢で、JB-5-b に分類される。胎土、呉須の発色ともに良好である。4 は瓦質植木鉢で、DZ-21-b に分類される。

SK480 (Ⅲ-107 図)

1 と 2 は人形とミニチュアである。1 はミニチュアの鉢で DZ-61 に分類される。胎土は白色系で、型押成形で底部に雲母が観察される。施釉されている。2 は臥牛で DZ-60 に分類される。胎土は灰黒色の瓦質で、型押成形で底部は開口している。内部の縁には指頭痕、内外面にはナデ調整痕が観察される。眉間の大黒様と宝珠は貼付である。共伴した陶磁器は近代に比定される。

SK507 (Ⅲ-107 図)

1は柿釉油受け皿で、TC-40-cに分類される。ヒビもない完形である。2は透明釉の灯明皿で、DZ-2-hに分類される。ヒビもない完形である。口唇部に灯明痕が認められる。

SK507 (Ⅲ-107 図)

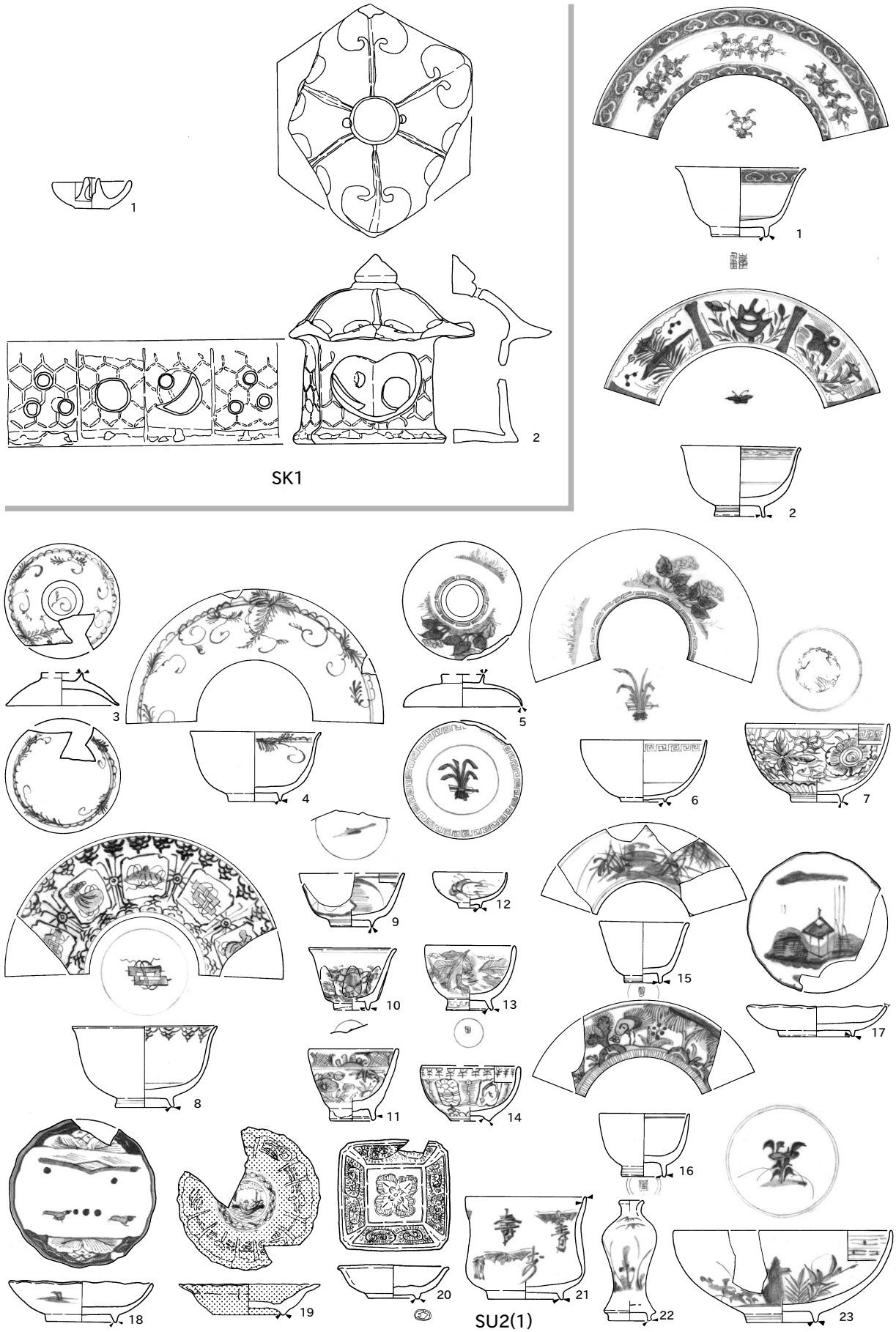
1は染付磁器碗で、JB-1-uに分類される。文様はコンニャク印判(紅葉)と手描きで描かれている。

遺構外 (Ⅲ-108 図)

1は青花坏で、JA1-6に分類される。釉薬はやや青味がかっている。2は染付碗で、JB-1-uに分類される。文様は型紙刷りで描かれている。3は染付花生で、JC-22に分類される。文様は鮮明に発色する呉須で描かれている。4は江戸絵付の色絵坏で、JC-6-dに分類される。見込みには瓢箪形の枠に「高崎」と書かれている。本郷追分にある高崎屋のことであろう。5は染付丸碗の蓋で、JC-00-iに分類できる。内面には木型打込で団龍文が押され、ダミが施されている。6は陶胎染付筒形碗で、TB-1-fに分類される。器面雲鶴文の鶴、見込み中央の五弁花はコンニャク印判でつけられている。7は鉄絵行灯皿で、TC-2に分類される。文様は濃茶色、淡茶色とで風景文が描かれている。見込みには6箇所ピン痕が認められる。裏は高台は付けられず、蛇ノ目釉剥ぎされている。裏面はススが付着している。8、9は白土の上に呉須絵が描かれる土瓶とその蓋で、TZ-34-b、TZ-00-bに分類される。内面は灰釉が化粧掛けされている。10、12は灰釉鉄絵二合半徳利で、JC-10-cに分類される。10には「森川町」、「三河屋」、12には「森川町」、「伊勢金」と書かれている。森川町は本地点と現在の本郷通りを挟んだ位置にあった本郷森川町である。11は土師質の釜形の土製品で、DZ-5-cに分類される。口縁部やや下方には、横位の沈線が二条巡る。12は硬質瓦質の七輪で、DZ-48に分類される。口縁帯表面は丁寧に研磨され、体部はちぢれ状の押形文が施されている。口縁部には被熱した痕跡が認められる。

14~24は人形、ミニチュア、遊戯具である。25はおそらく実用品の器台と思われる。14はぶら人形でDZ-60-fに分類される。15は西行法師でDZ-60-aに分類される。胎土は白色系で、手捻り成形で足、笠、荷は貼付である。荷と笠は緑釉と鉄釉で彩色され施釉している。底部は足が貼付けられ首部まで穿孔されている。16は三味線弾きでDZ-60に分類される。胎土は白色系で、背に亀甲に「亀」の字の刻印が陽刻されている。SK398出土の三味線弾きと同様である。17は釣猿でDZ-60-gに分類される。胎土は橙色系で、手捻り成形で顔、手、帽子は貼付である。右手は穿孔されている。18は「梅鉢」の泥面子でDZ-55に分類される。19は基石形土製品でDZ-56に分類される。20はミニチュアの御輿でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、型押成形(対角線上)で中実、底部の穿孔は突き抜けている。21はミニチュアの七輪でDZ-61に分類される。胎土は手捻り成形である。全体を白色で塗った上に黒色を塗っている。22は器台でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、上部は型打ち、脚部は型押成形である。雲母が顕著である。23はミニチュアの壺でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。器壁は厚く、全体を白色に塗り、赤色と黒色で吉祥文様を描き施釉している。24はミニチュアの瓶でDZ-61に分類される。胎土は橙色系で、ロクロ成形である。口縁部は厚く外反している。胴部に丸のなかに文様を描く。丸の中は白色に塗り緑色と茶色で植物を描き施釉している。口縁部は摩耗している。

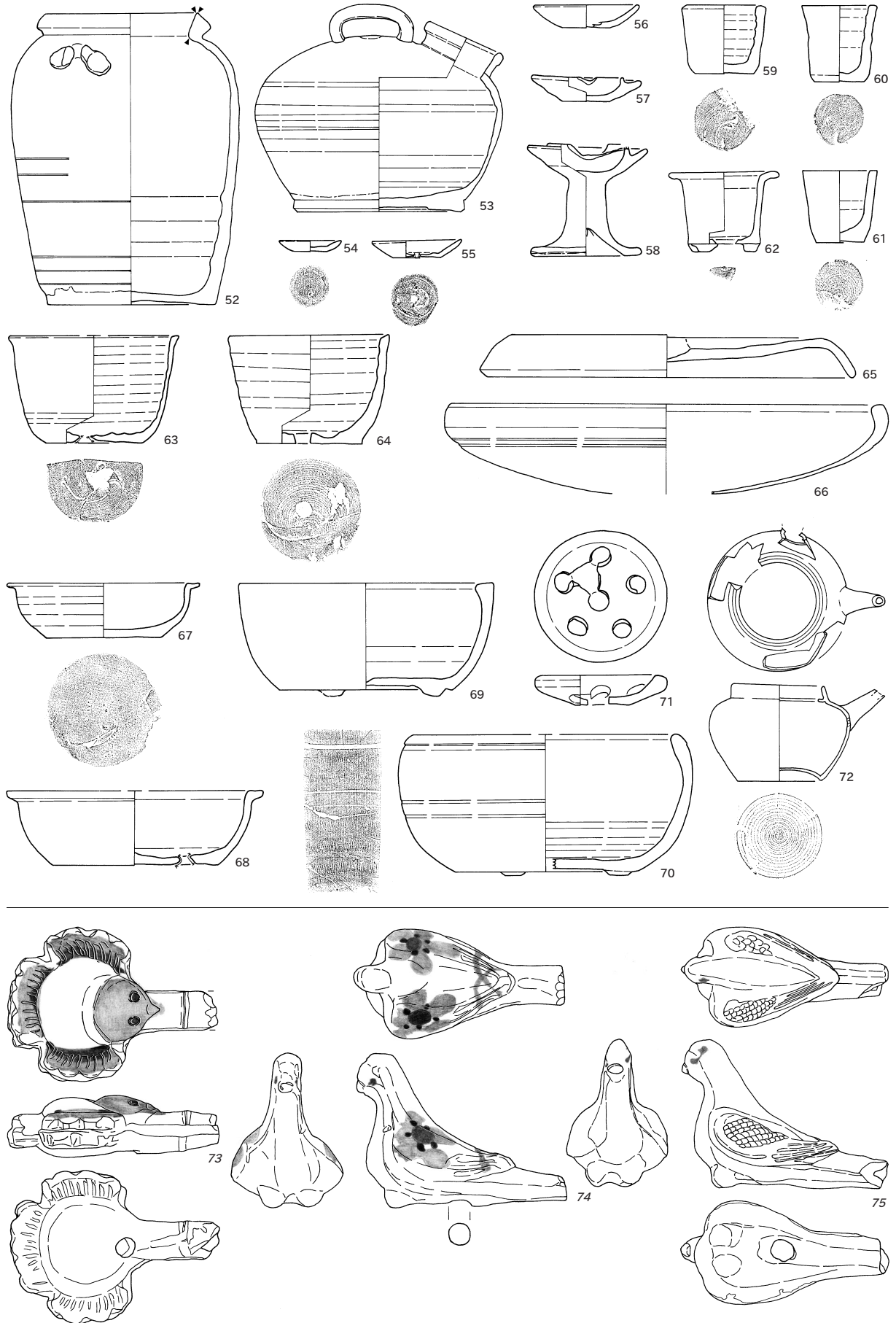
25は油受け皿でDZ-40-fに分類される。これはミニチュアではなく一般の生活用具と思われる。胎土は橙色系で、ロクロ成形で無釉である。ロクロ成形したのち中央の開口部を作る。高台外周には沈線がみられ、雲母とスス状のものが観察される。



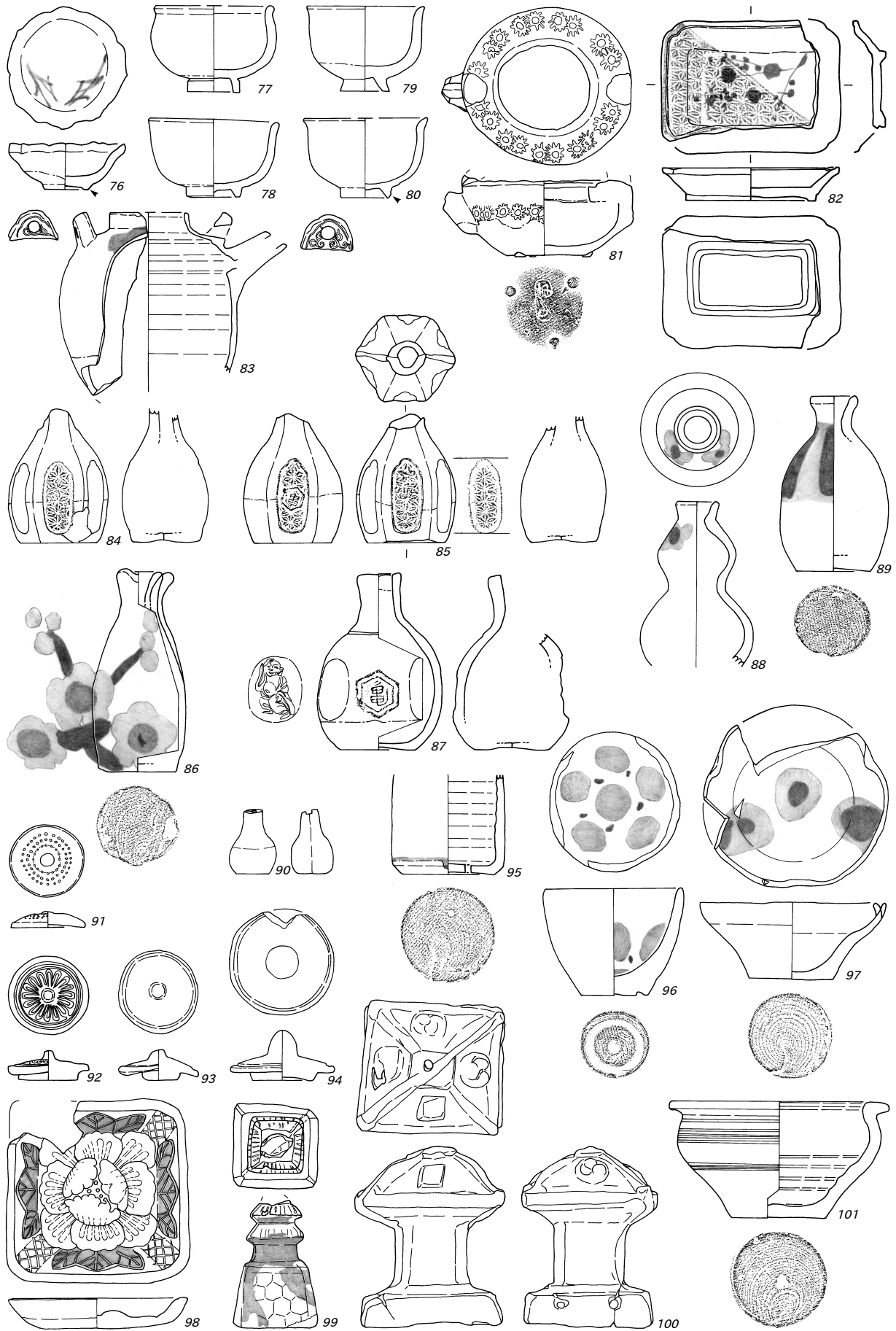
III-1 图 SK1 · SU2 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



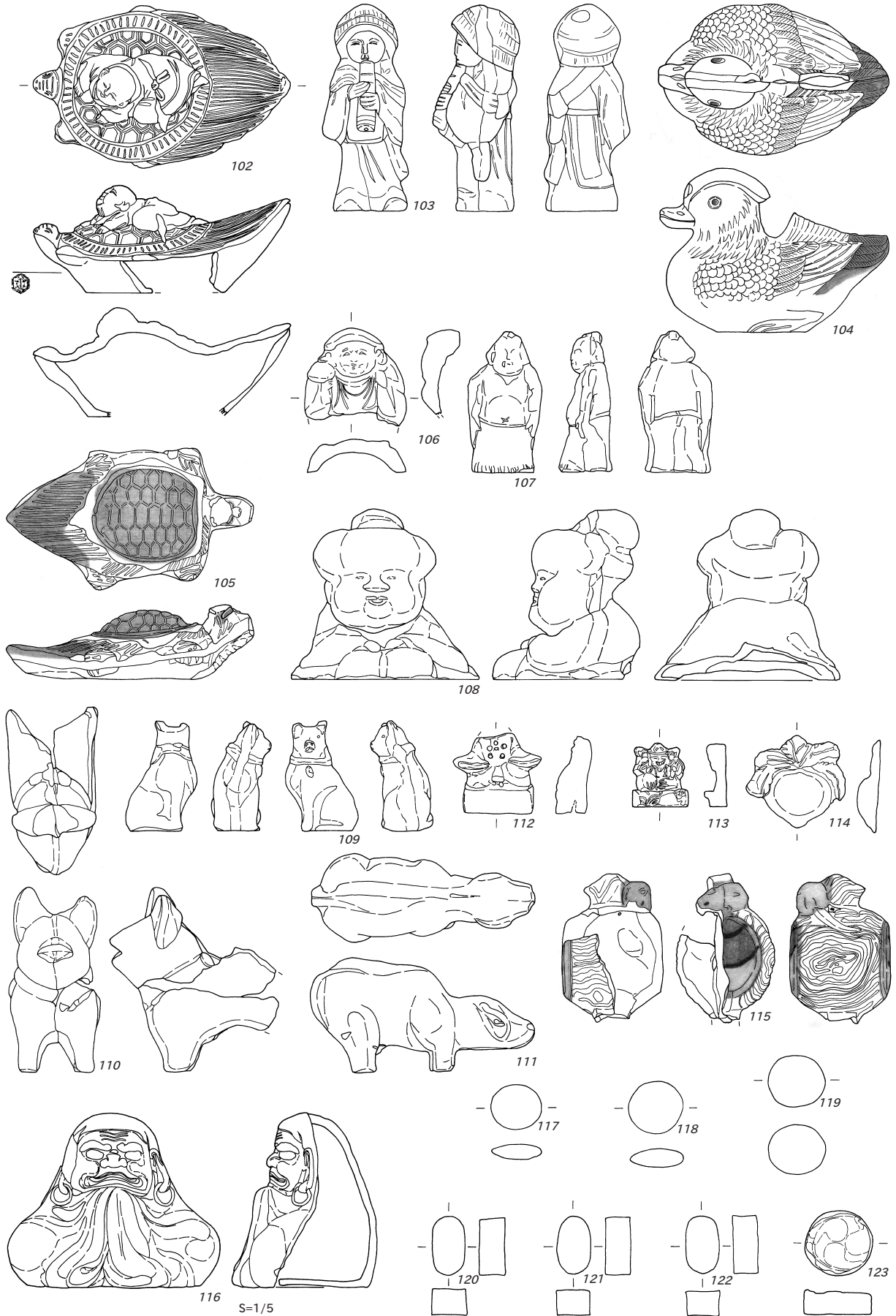
III-2 図 SU2 (2) 磁器・陶器・土器



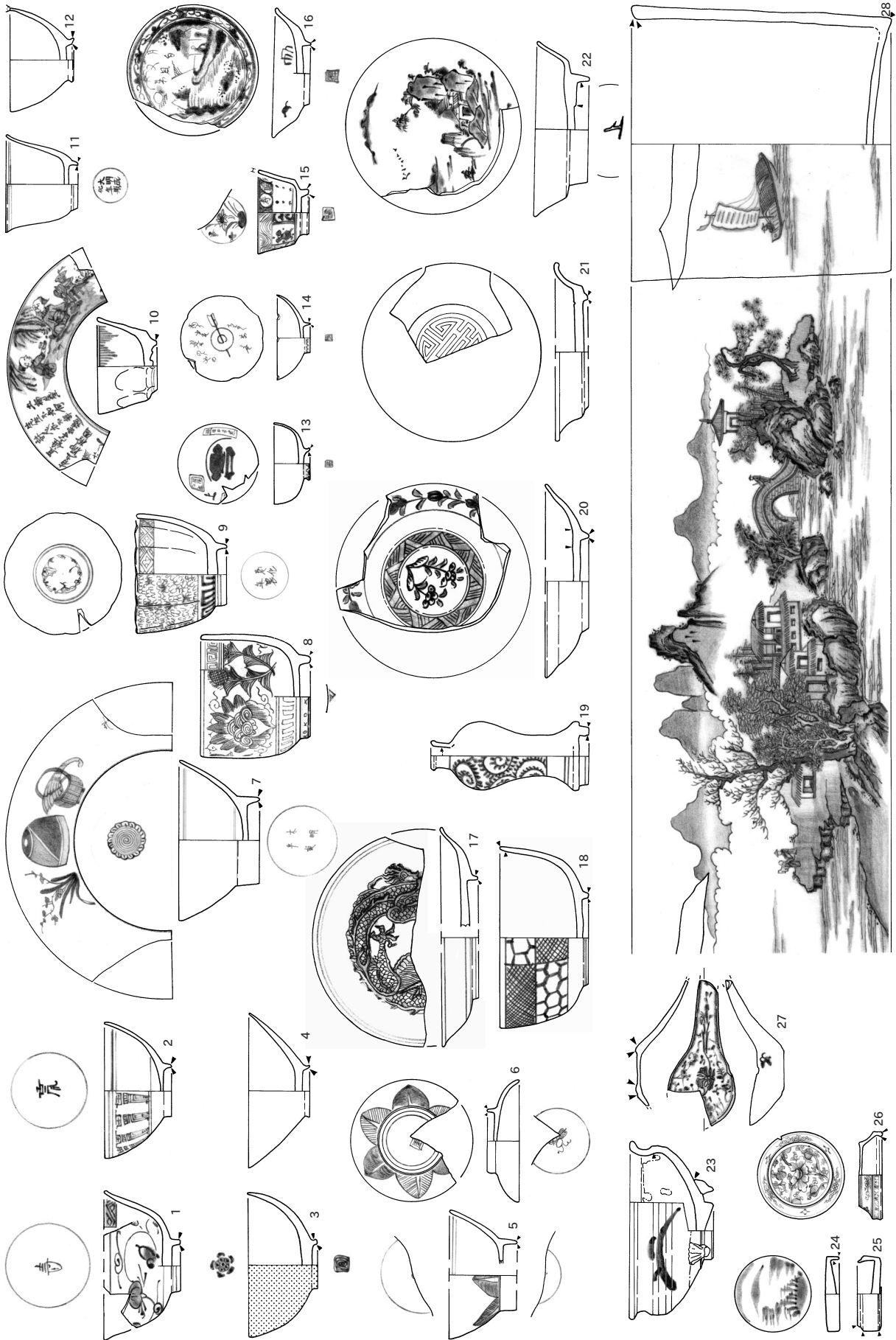
III-3 圖 SU2 (3) 磁器・陶器・土器



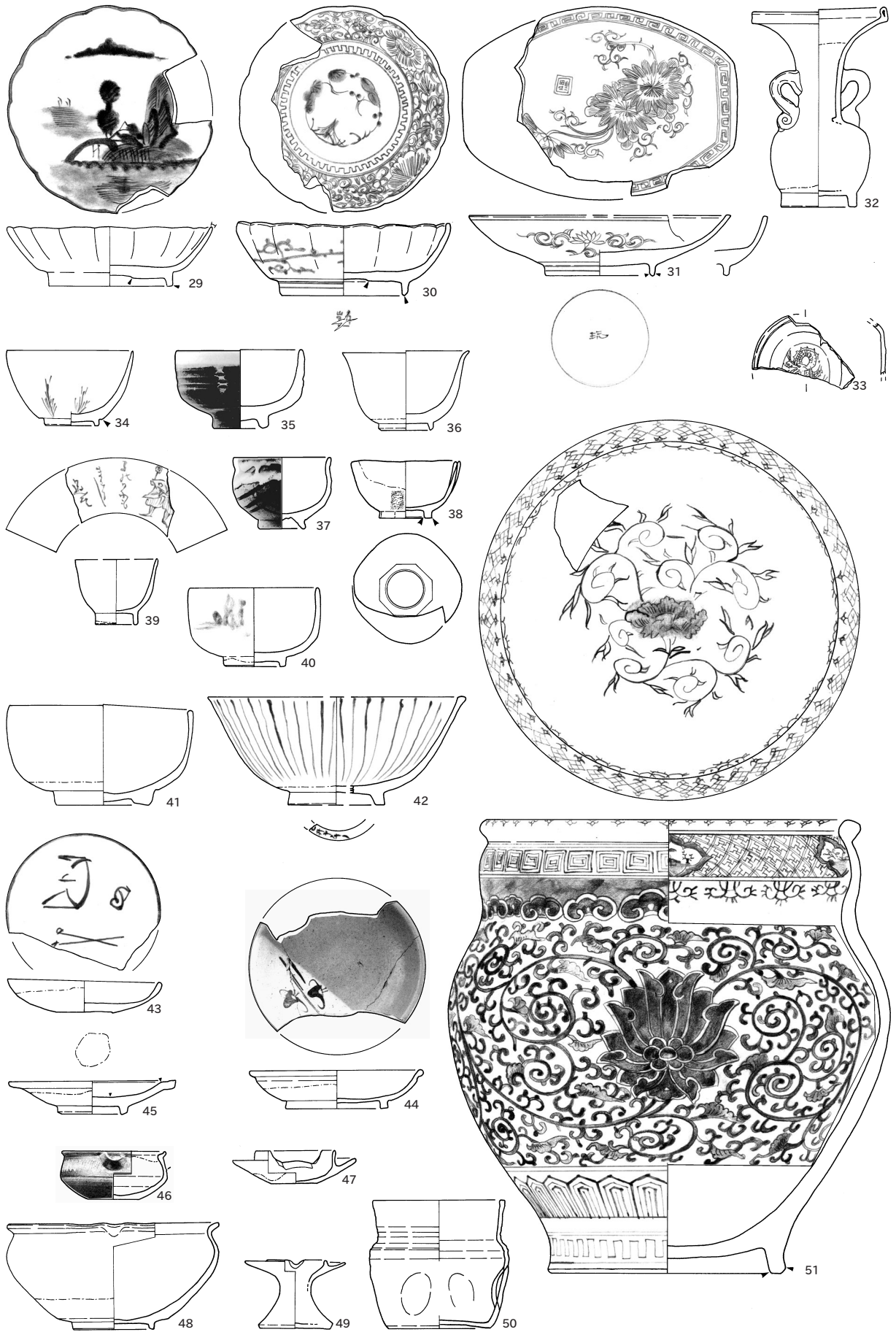
III-4 圖 SU2 (4) 磁器·陶器·土器



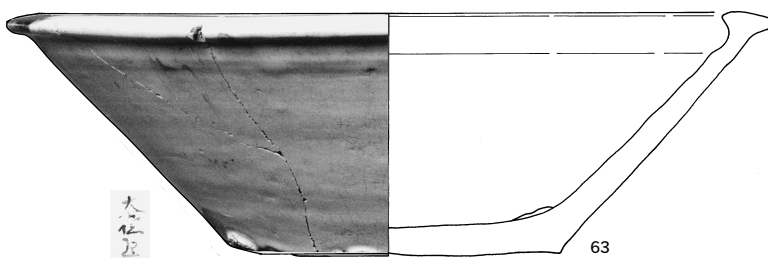
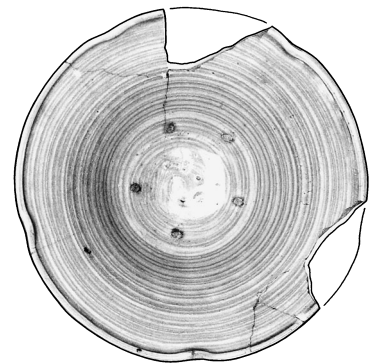
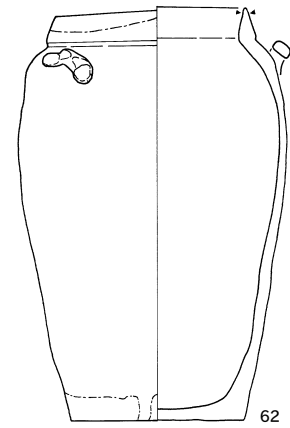
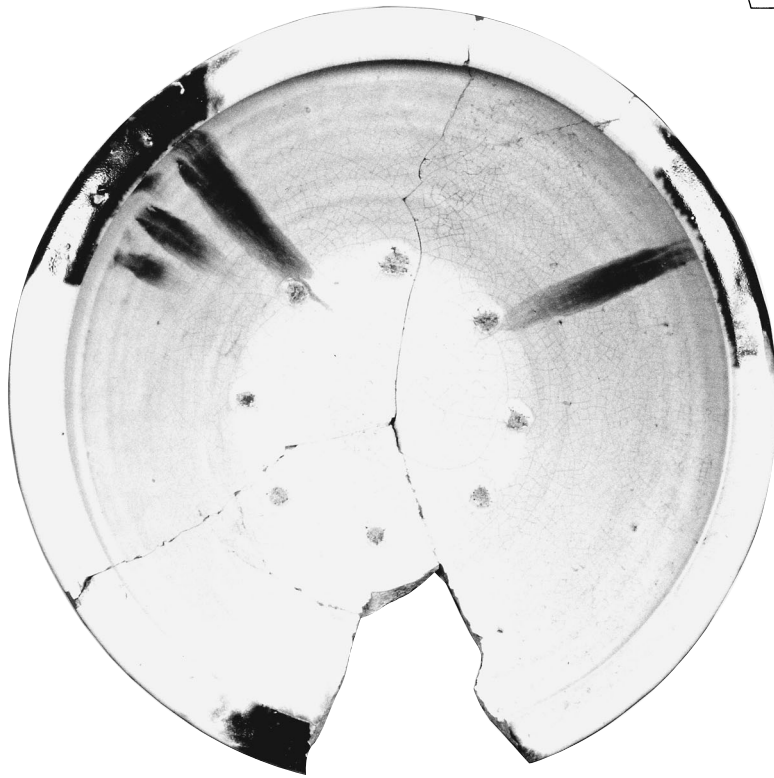
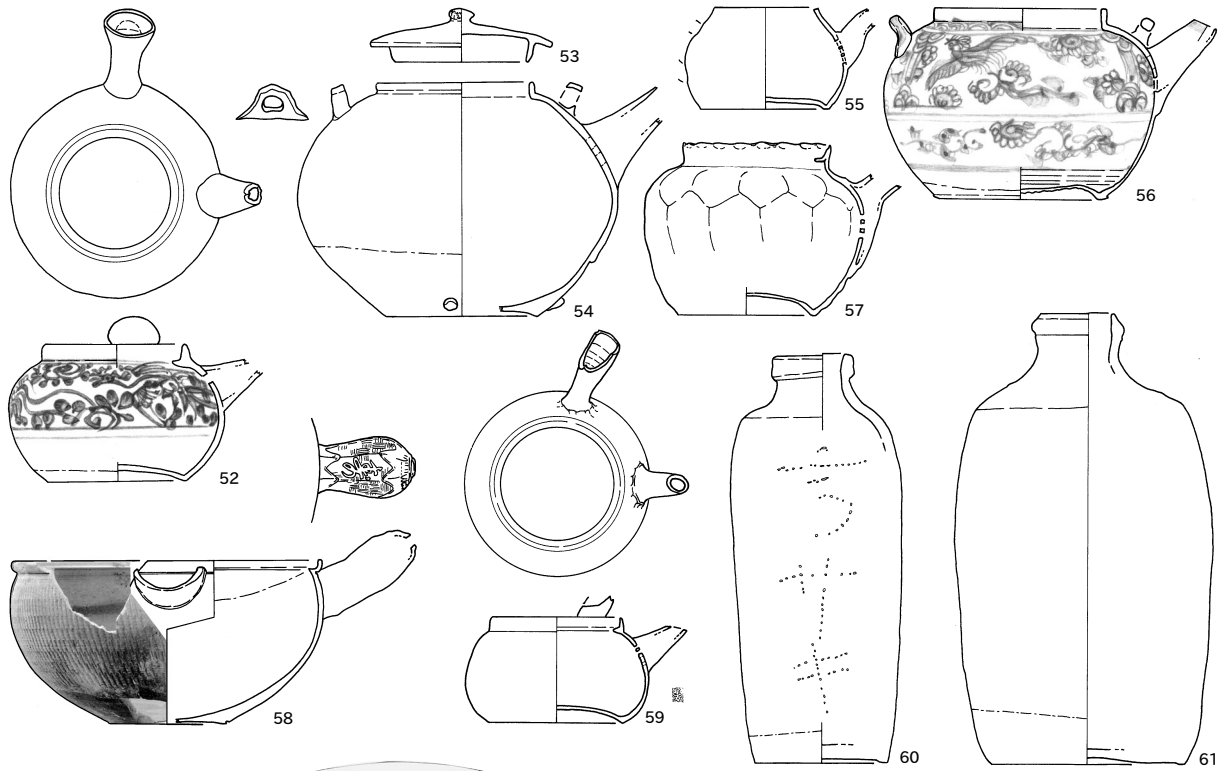
III-5 圖 SU2 (5) 磁器·陶器·土器



III-6 图 SK3 (1) 磁器·陶器·土器

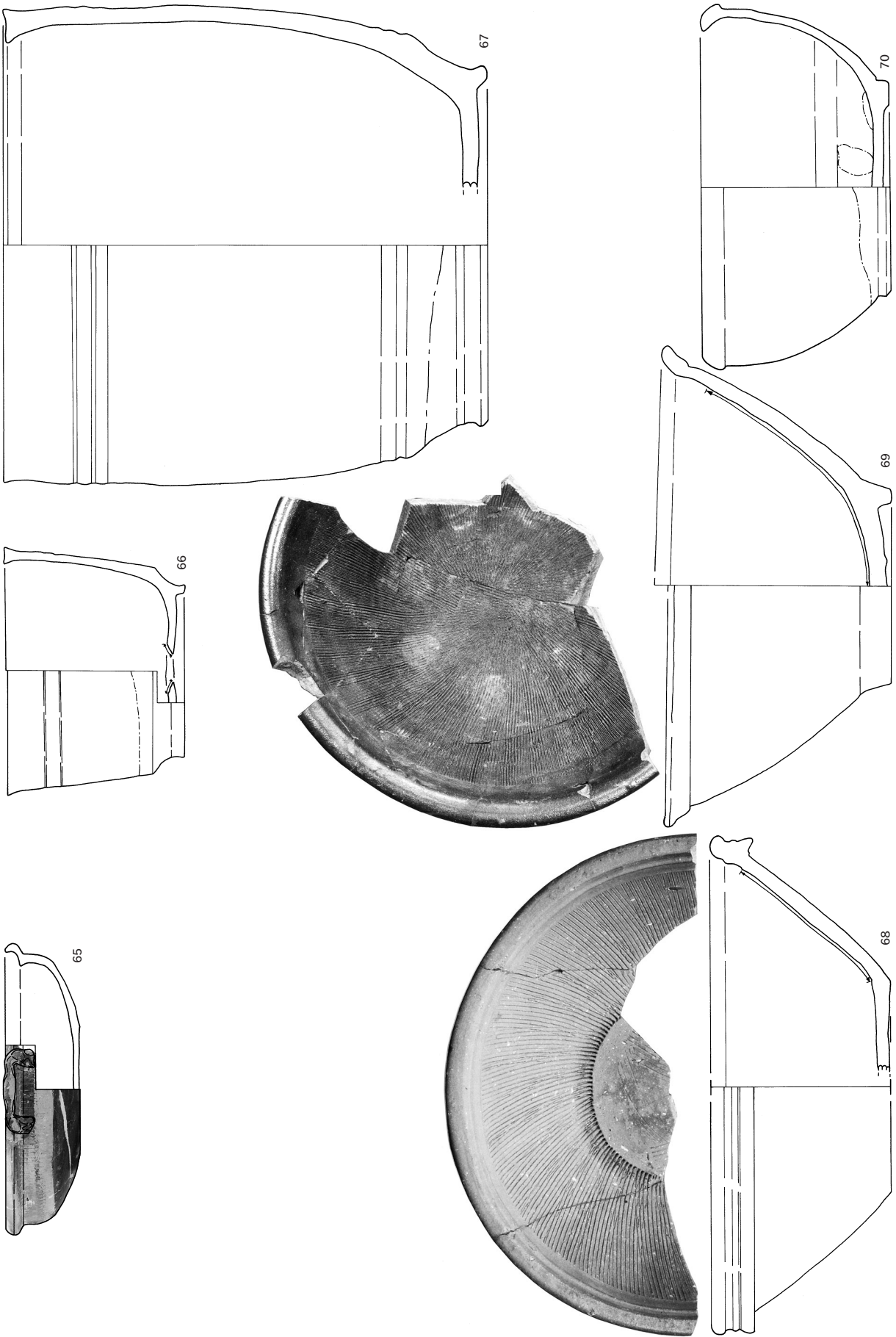


III-7 圖 SK3 (2) 磁器·陶器·土器



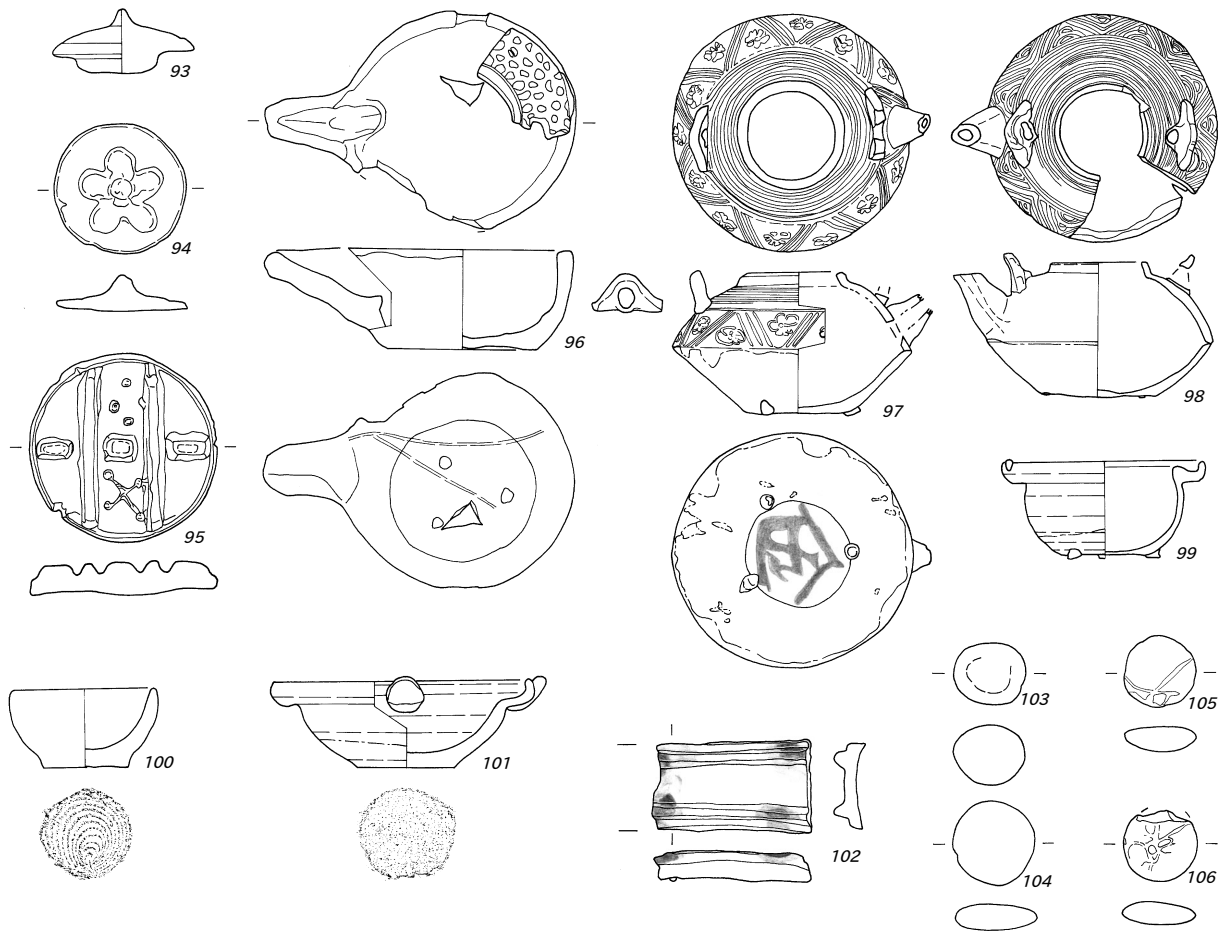
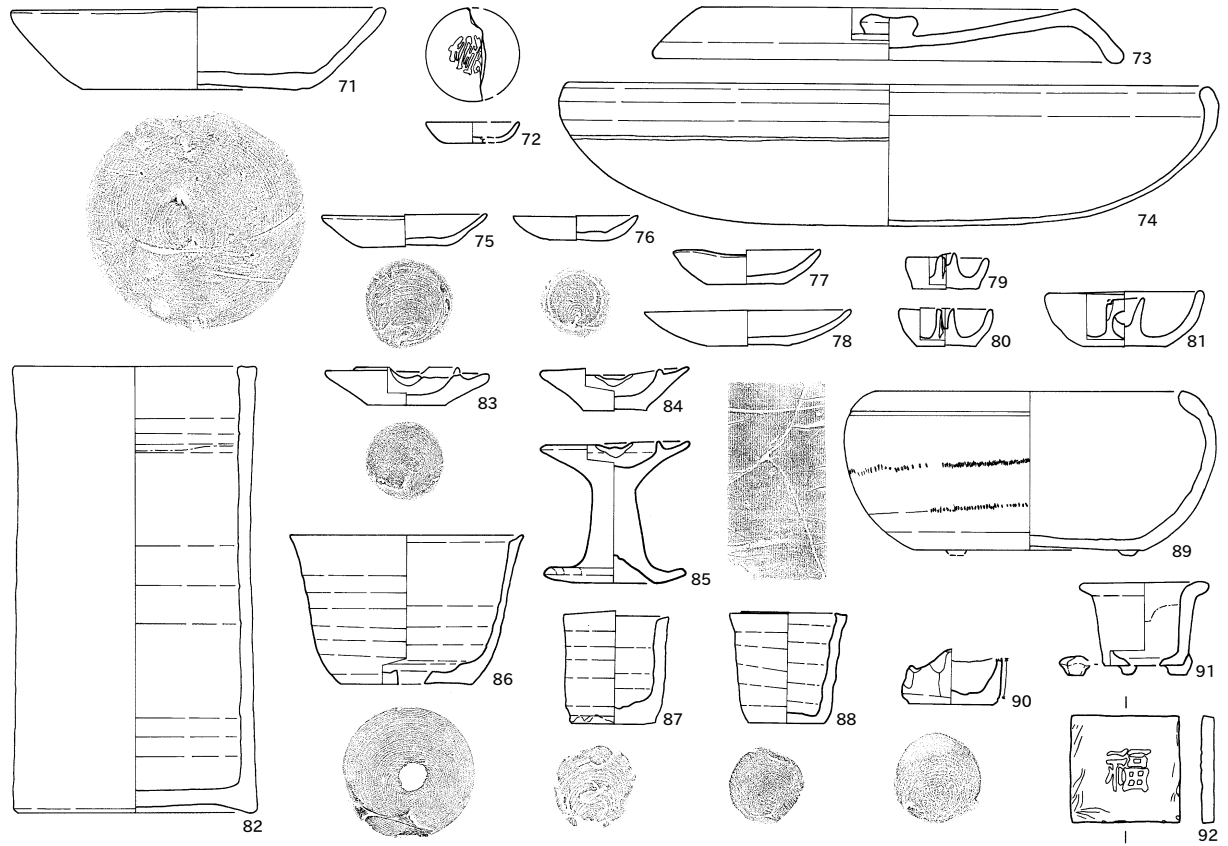
大正

Ⅲ-8 図 SK3 (3) 磁器・陶器・土器

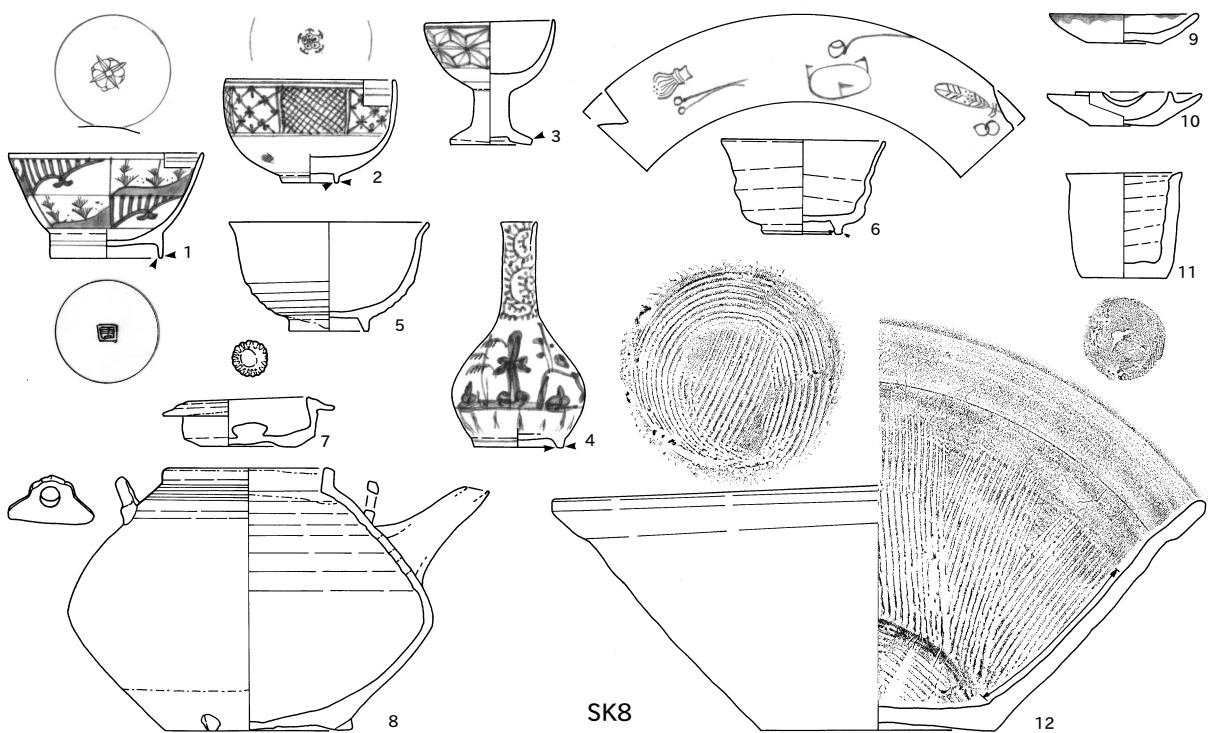
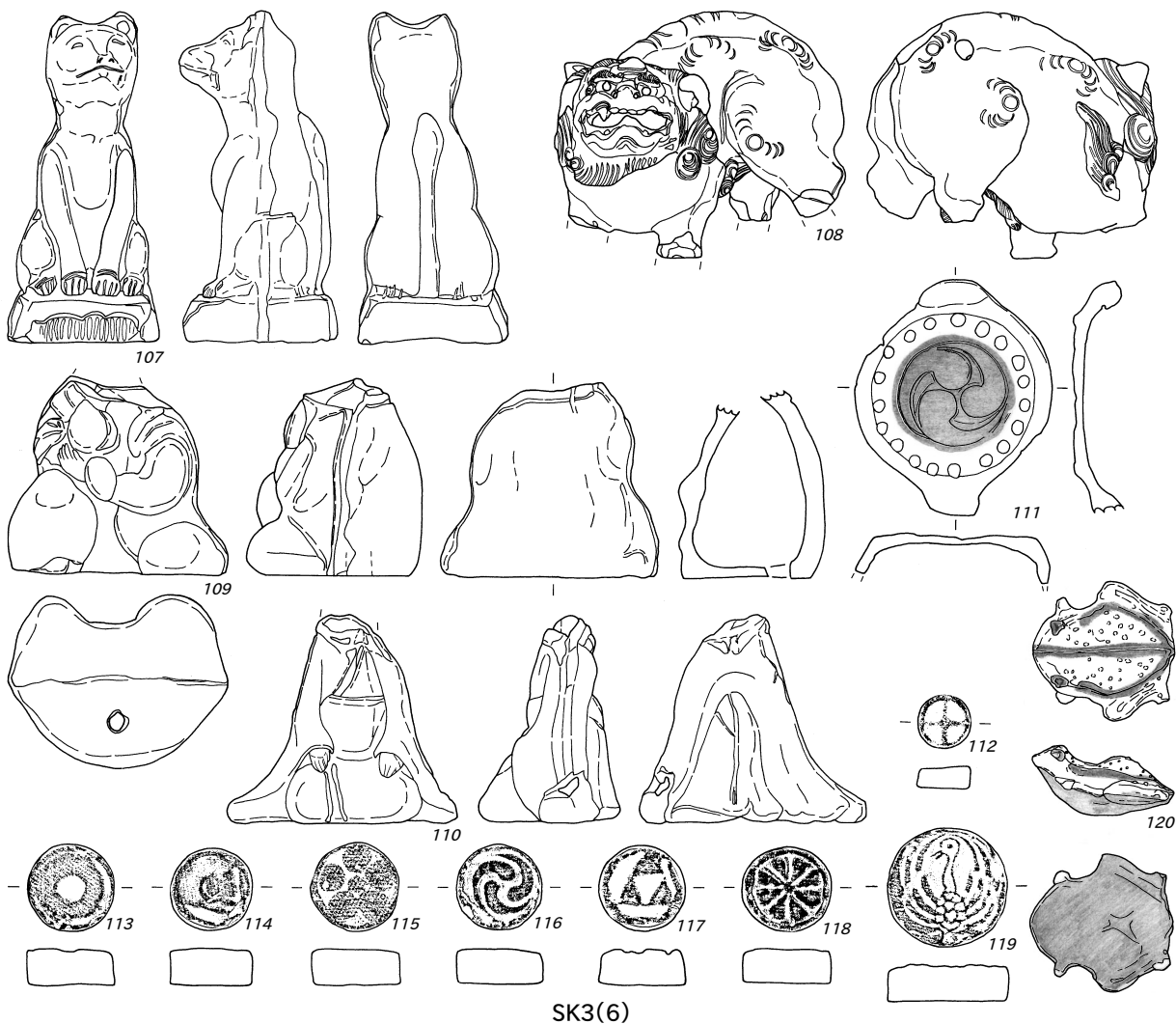


Ⅲ-9 図 SK3 (4) 磁器・陶器・土器

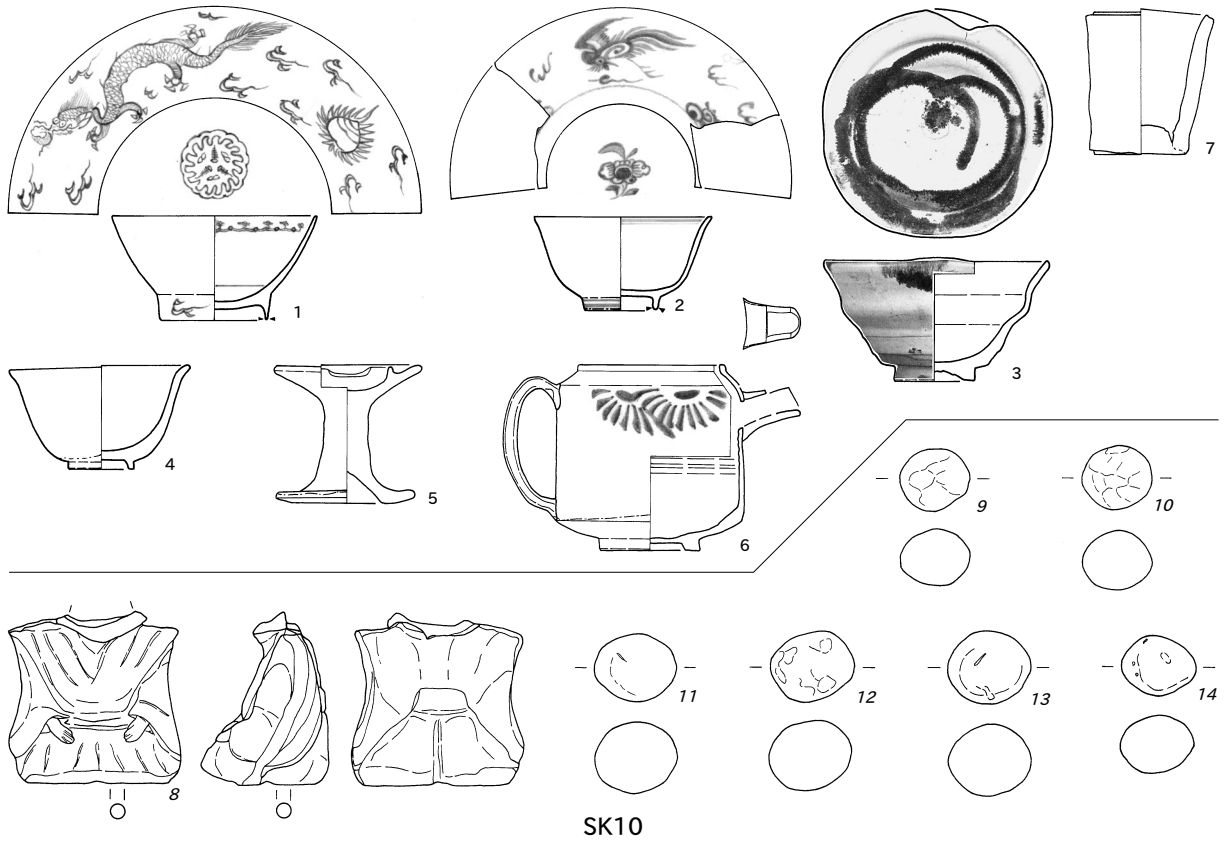
第1節 磁器・陶器・土器



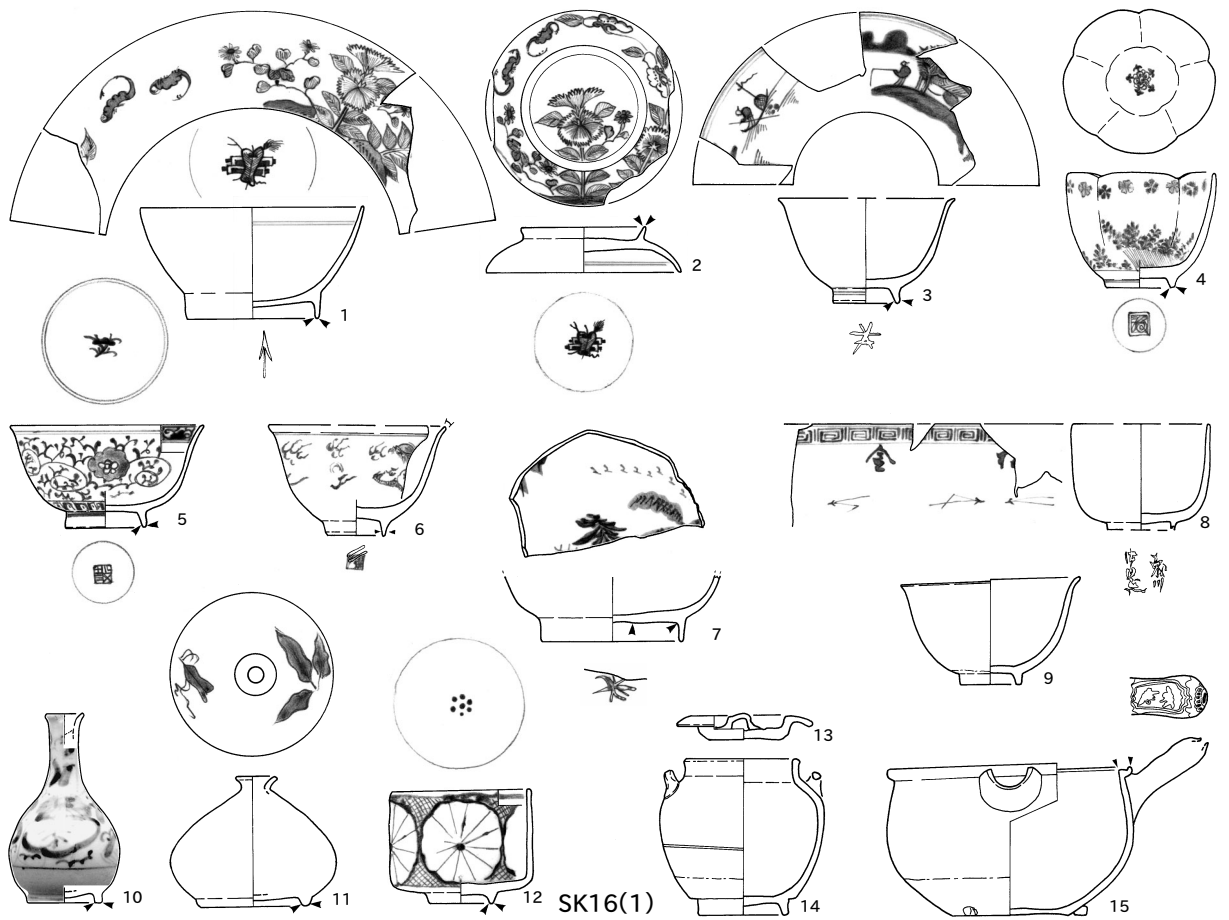
III-10 圖 SK3 (5) 磁器・陶器・土器



III-11 图 SK3 (6) · SK8 磁器 · 陶器 · 土器

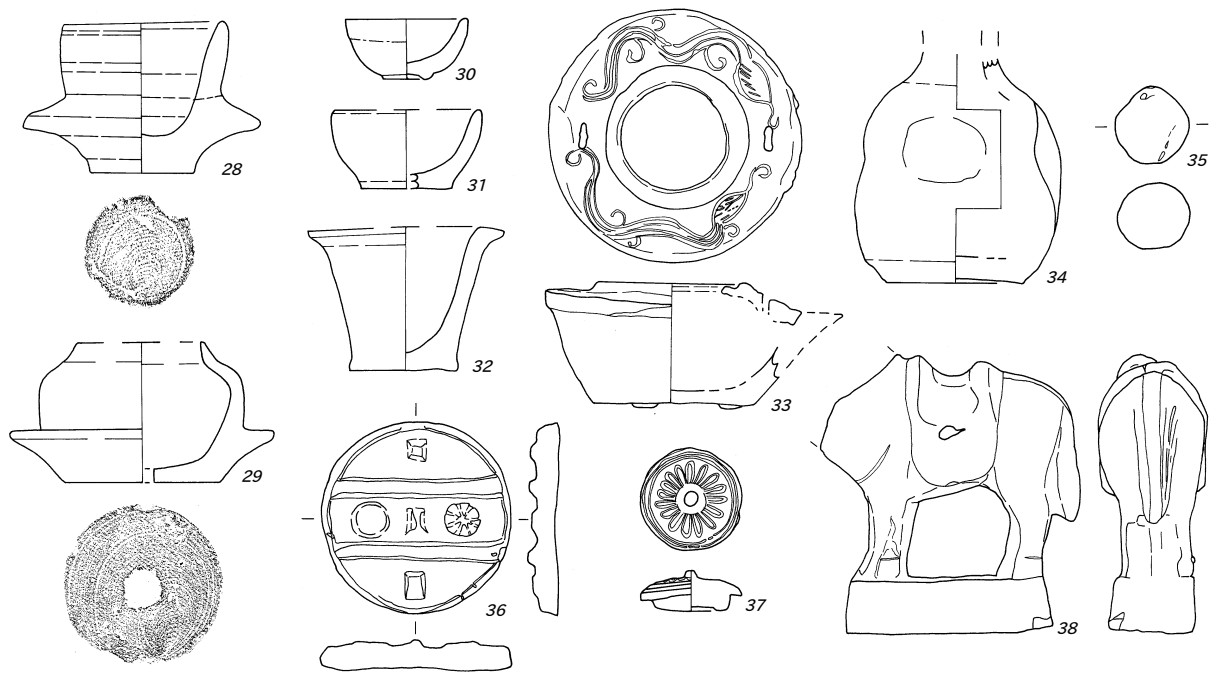
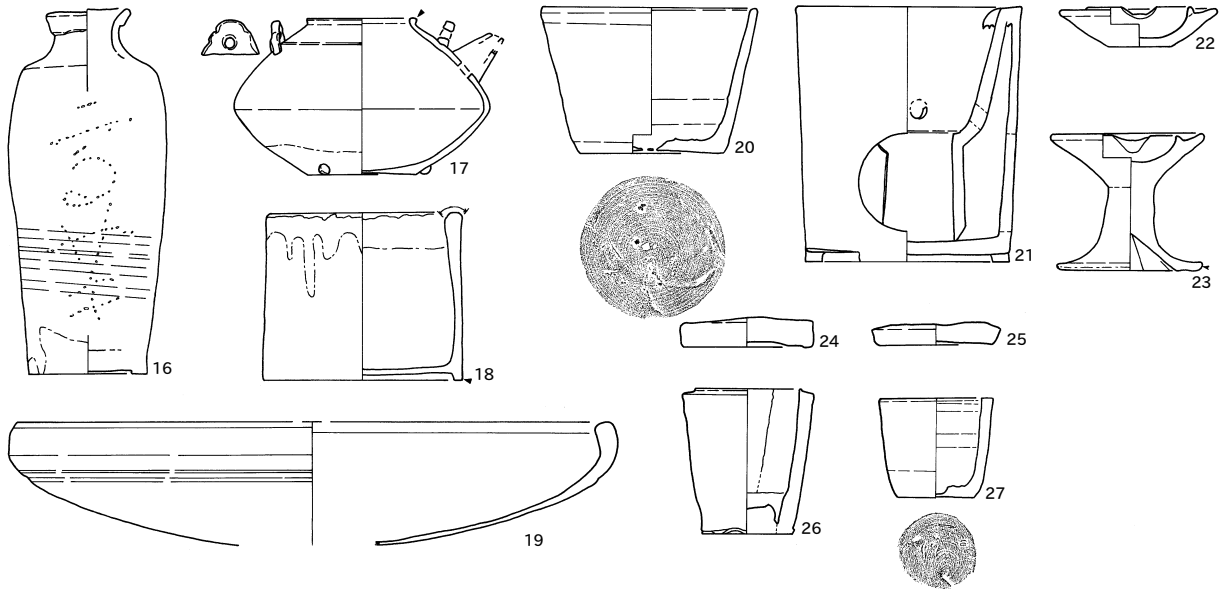


SK10

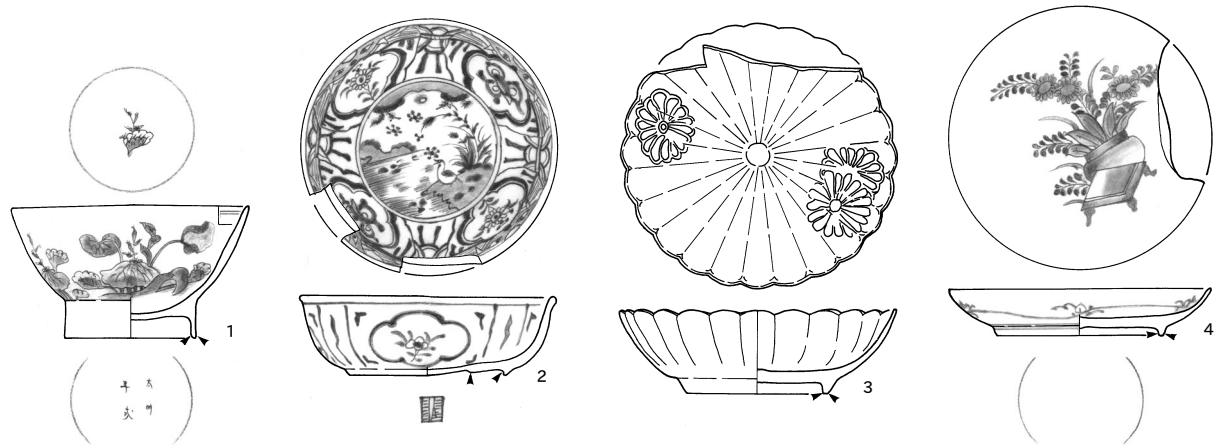


SK16(1)

Ⅲ-12 図 SK10・SK16(1) 磁器・陶器・土器



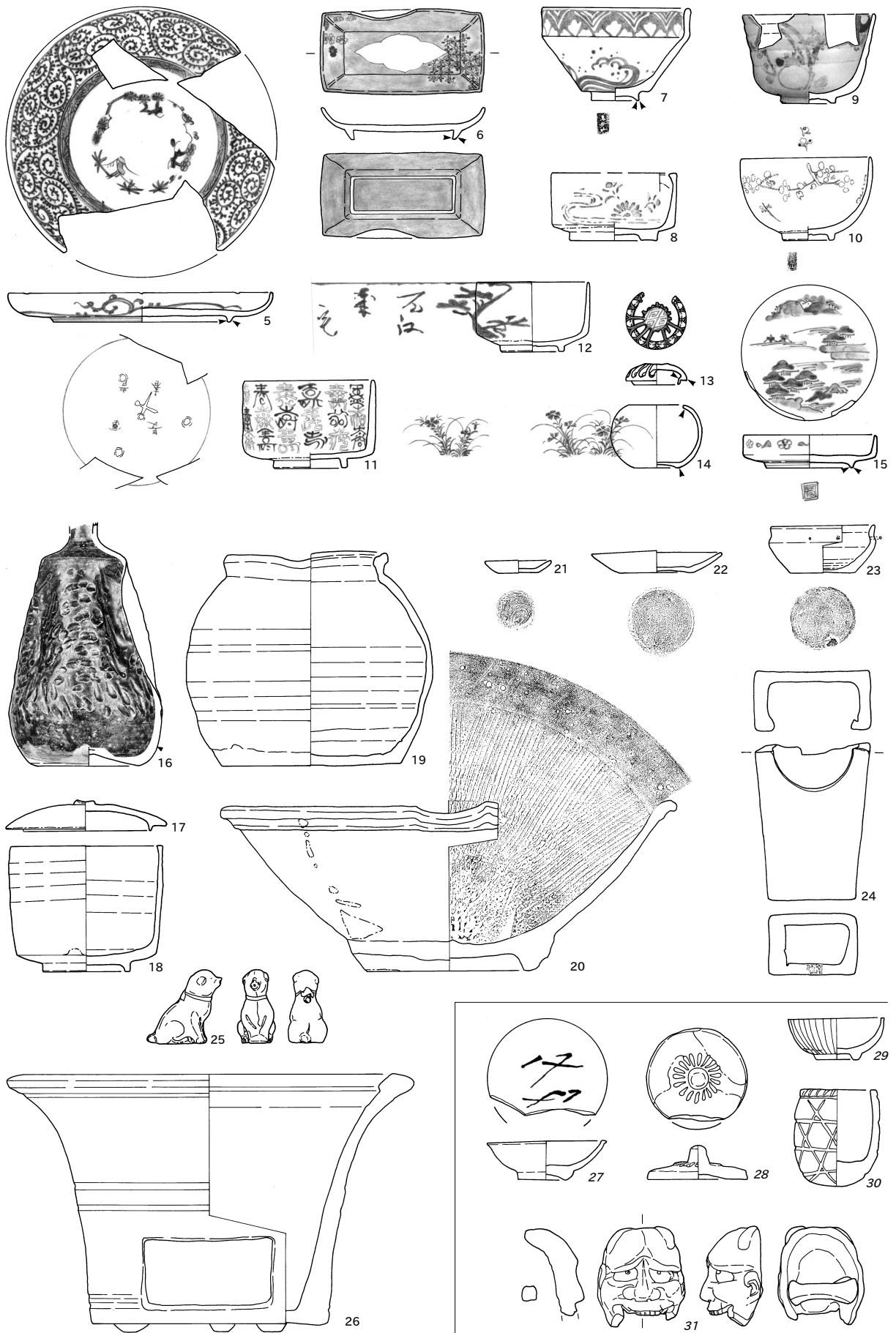
SK16(2)



SU18(1)

III-13 図 SK16 (2) · SU18 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

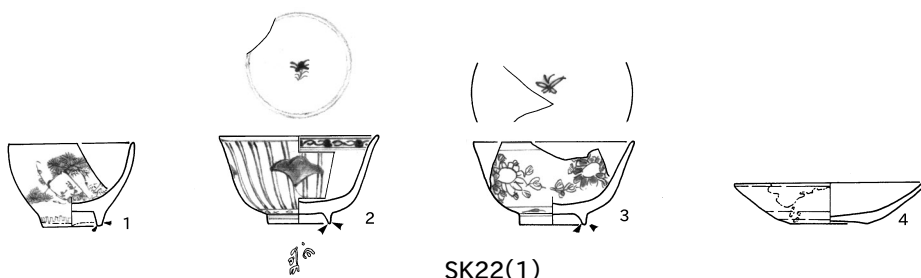
第1節 磁器·陶器·土器



III-14 图 SU18 (2) 磁器·陶器·土器

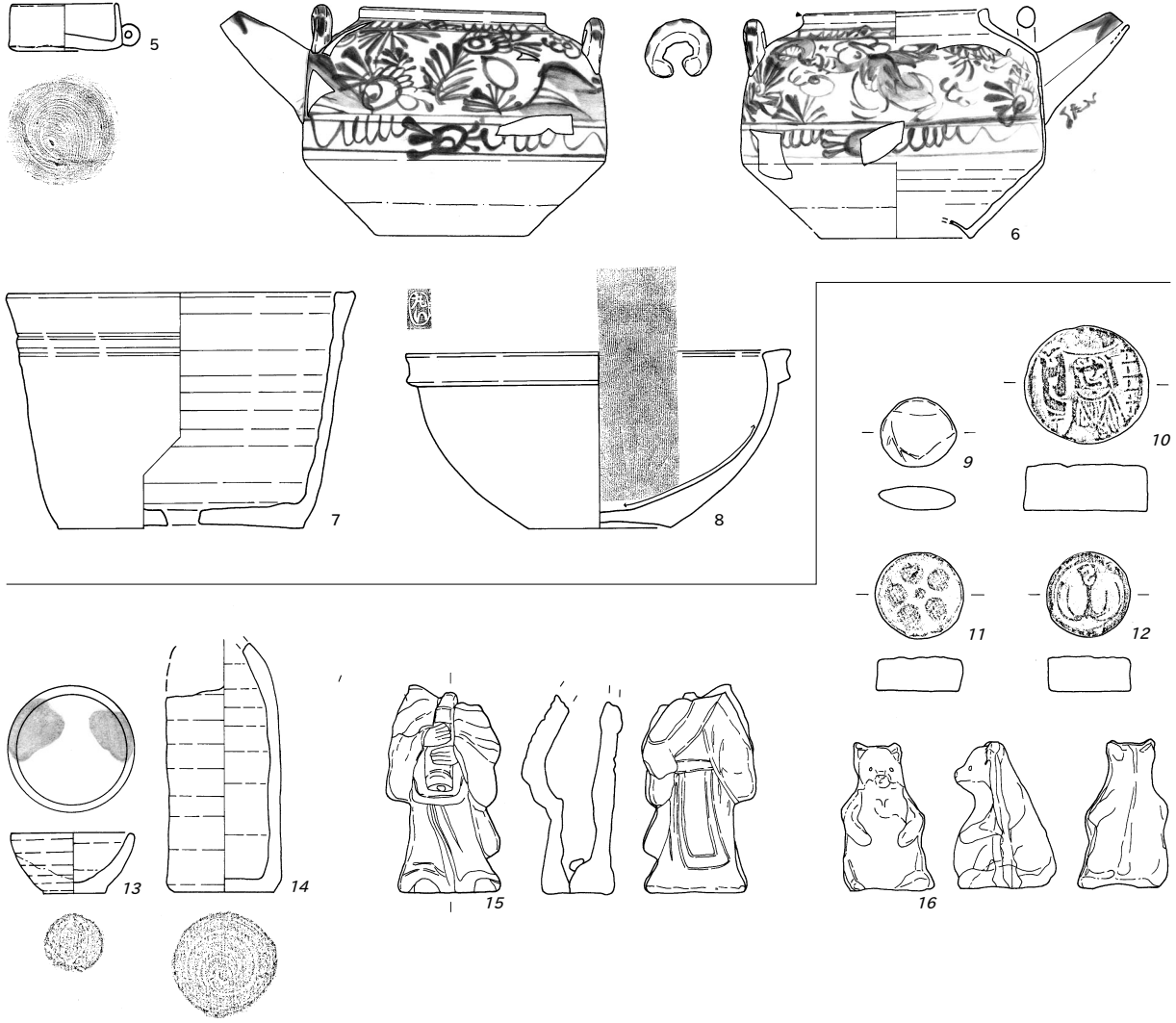


SU18(3)

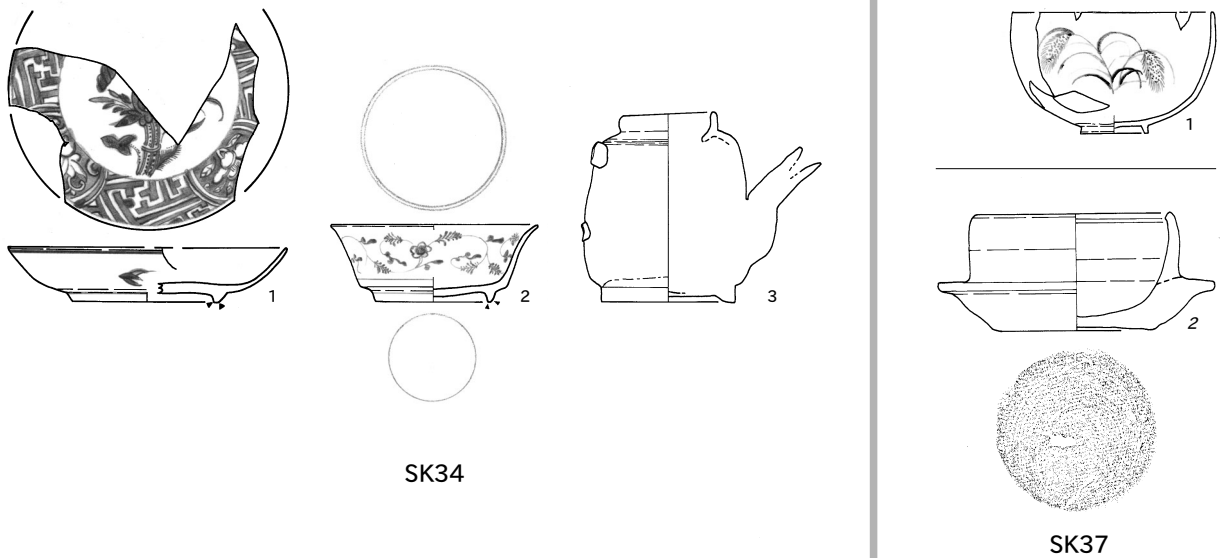


SK22(1)

III-15 圖 SU18 (3) · SK22 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



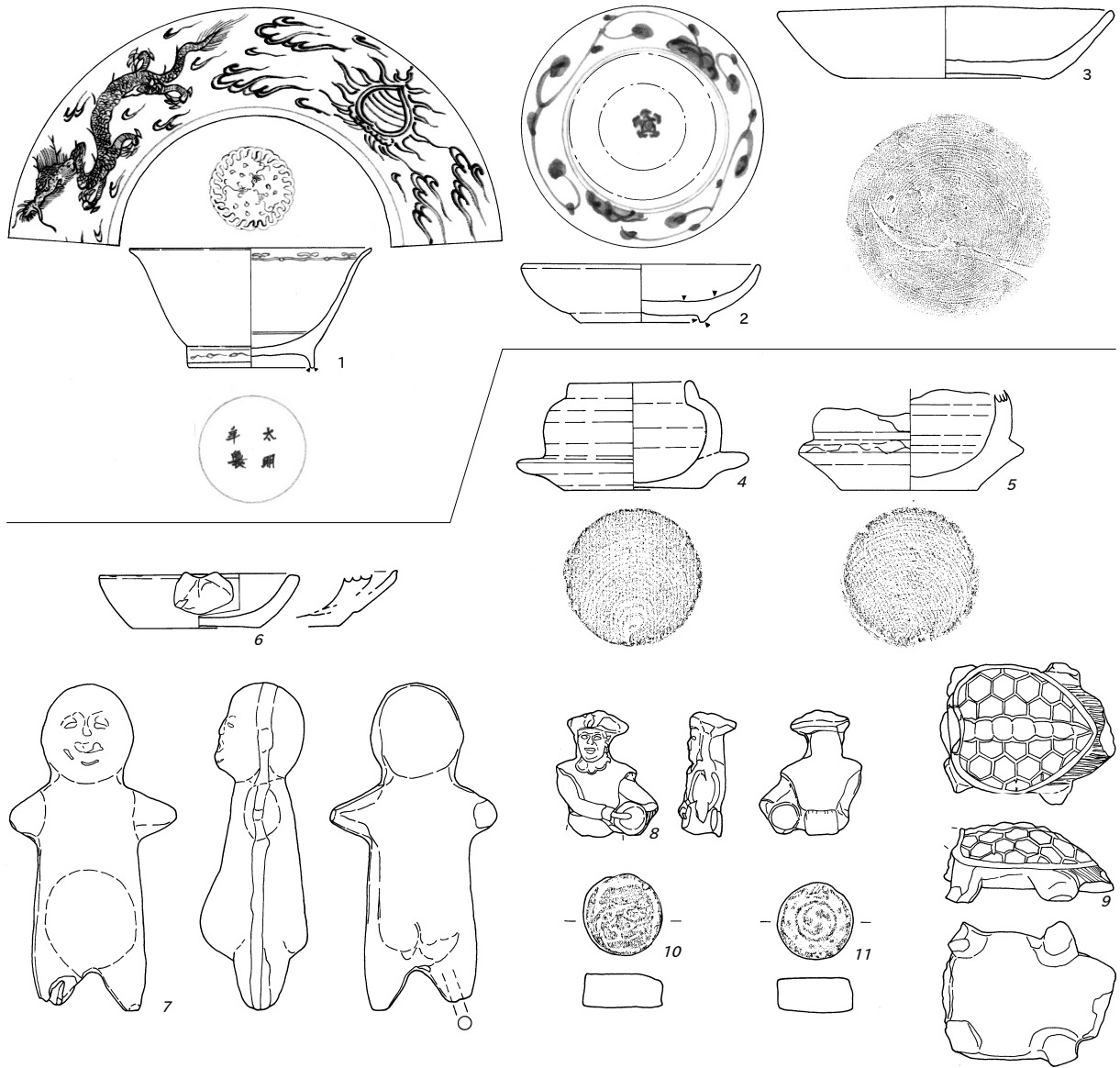
SK22(2)



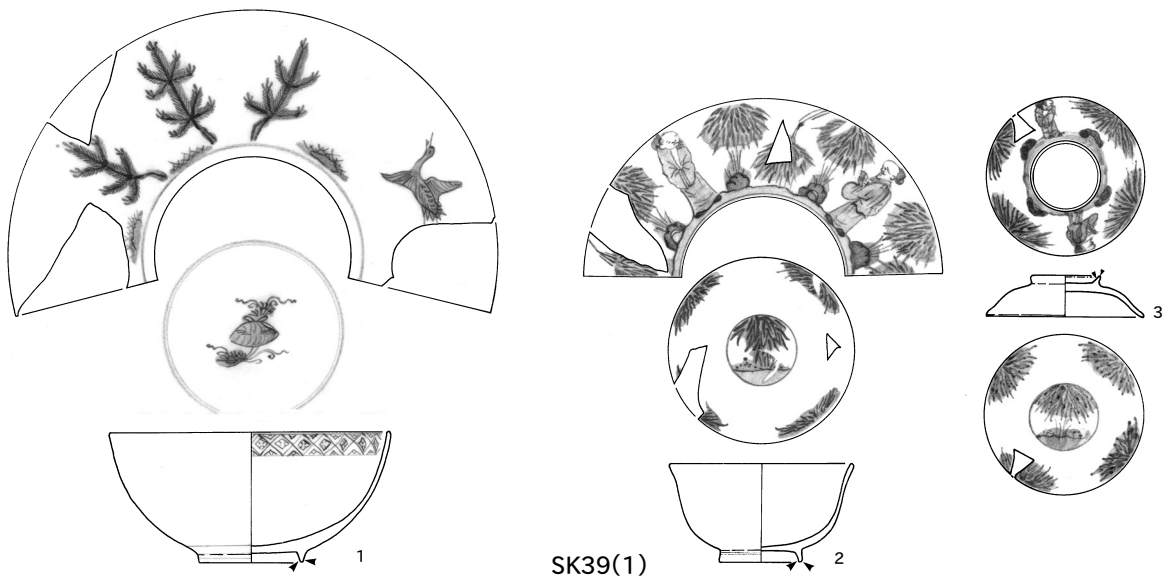
SK34

SK37

III-16 圖 SK22 (2)・SK34・SK37 磁器・陶器・土器

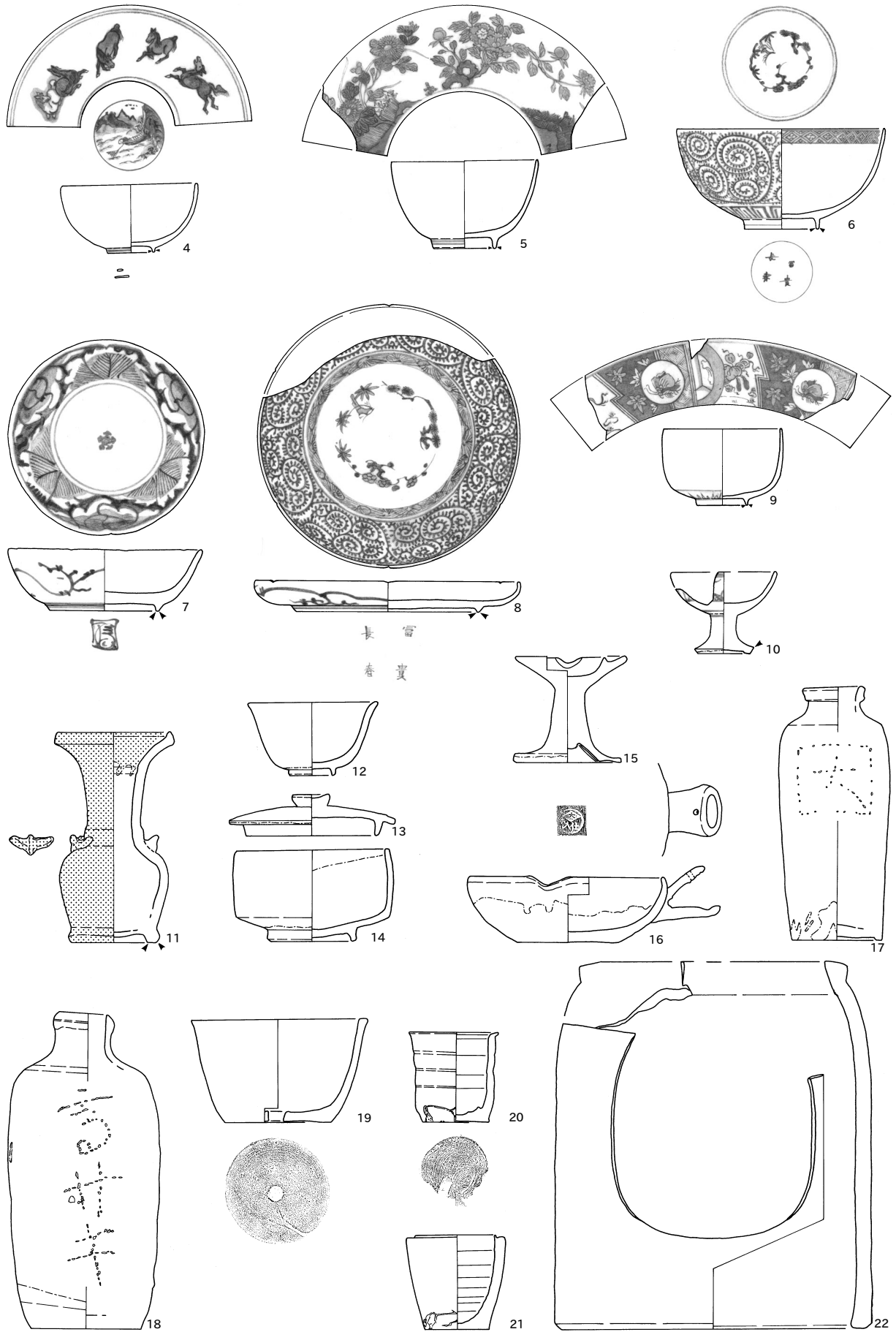


SU38

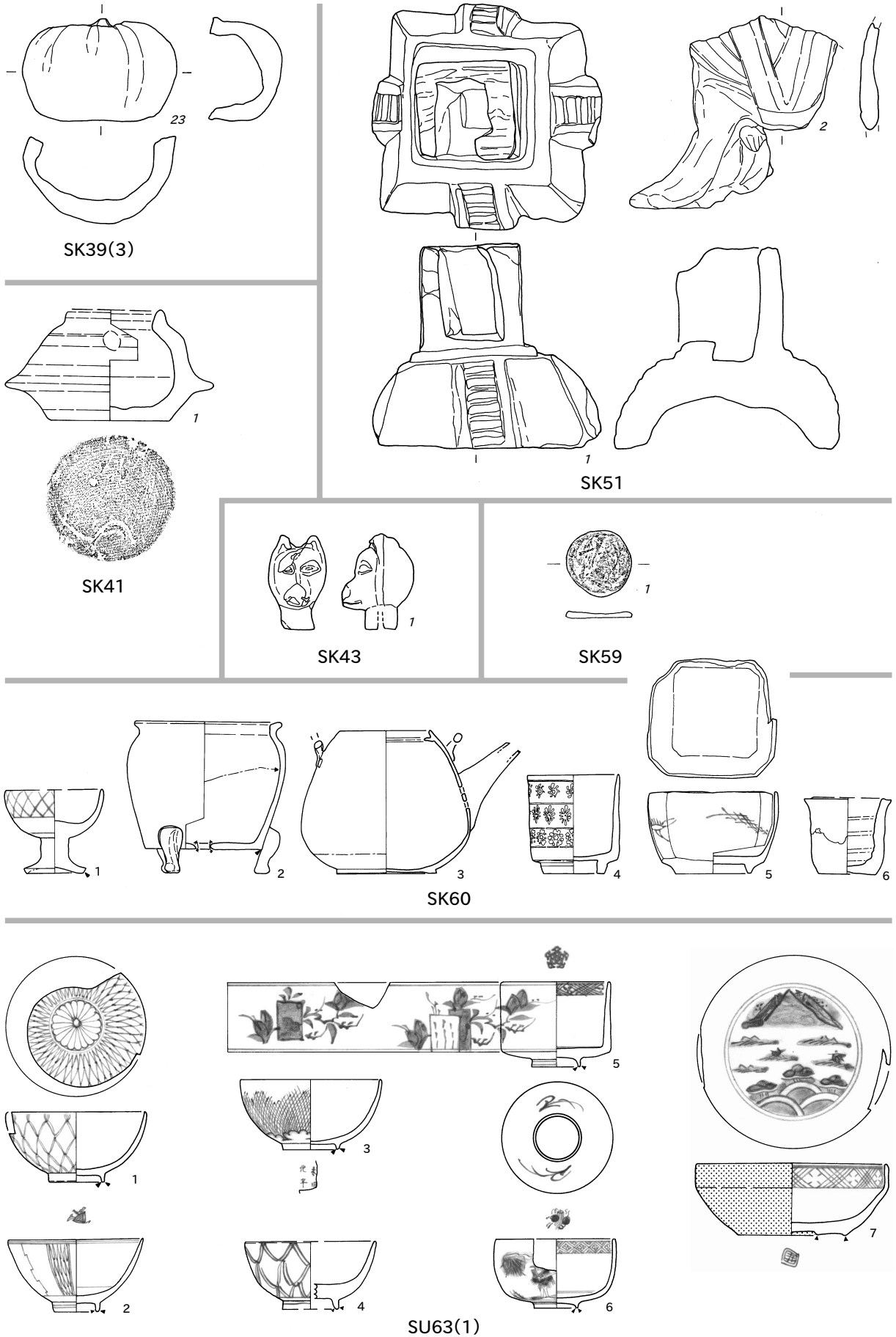


SK39(1)

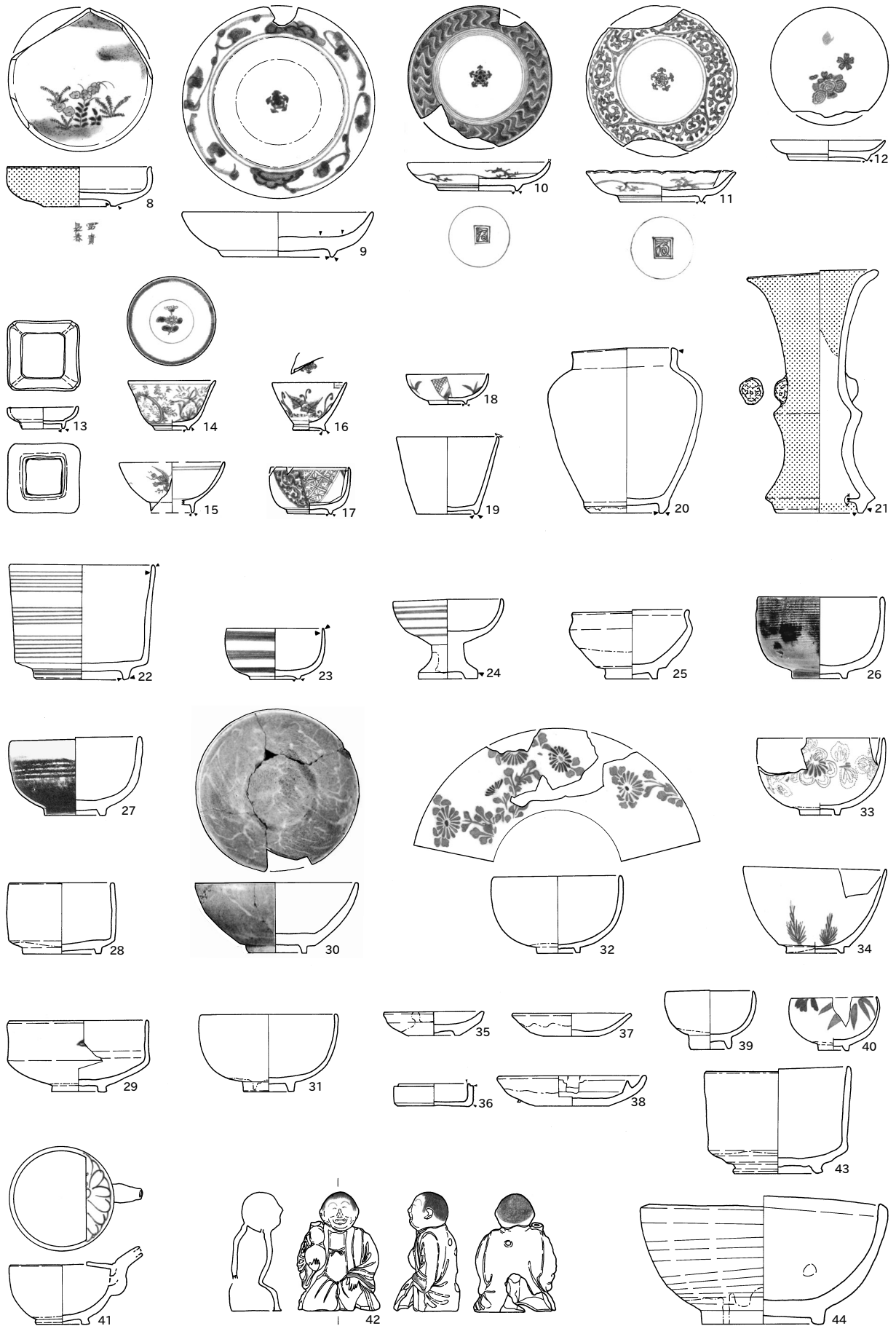
III-17 圖 SU38 · SK39 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



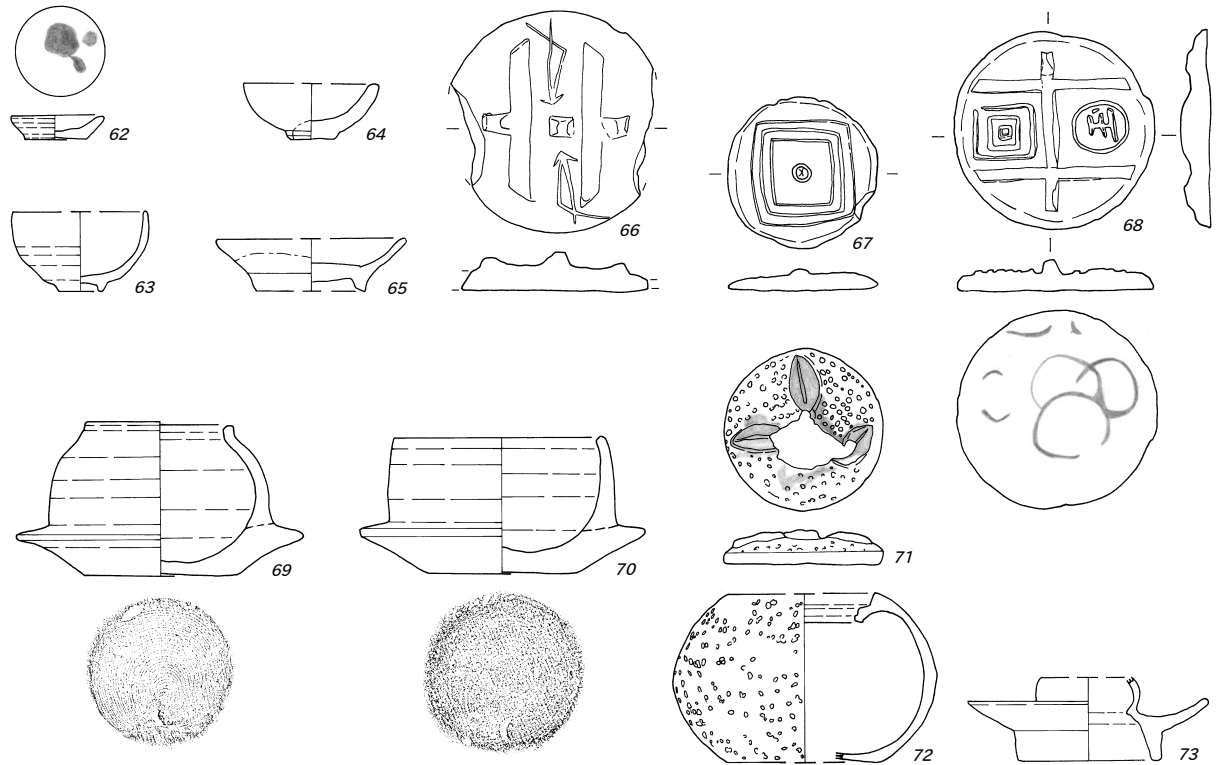
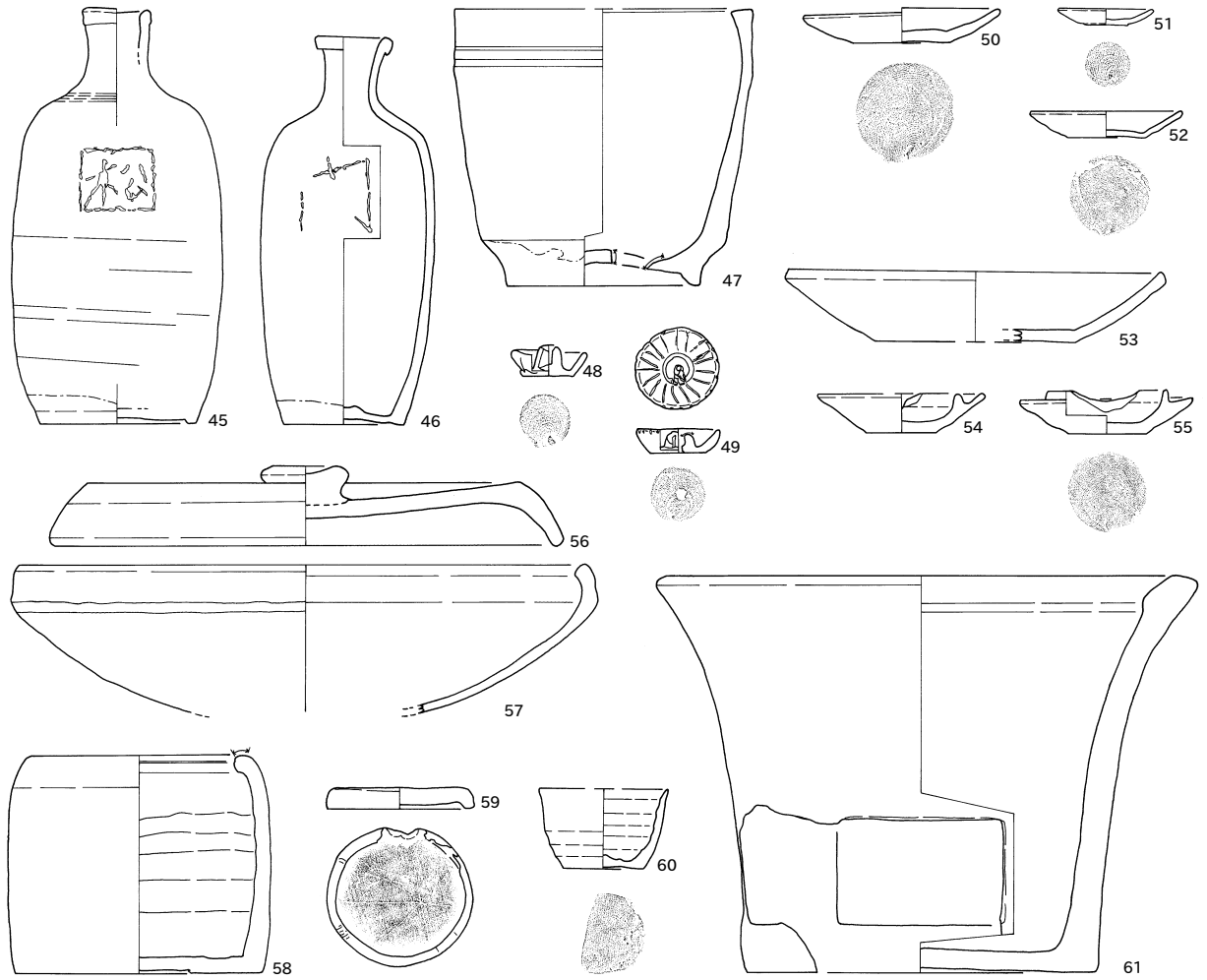
III-18 圖 SK39 (2) 磁器·陶器·土器



III-19 圖 SK39 (3) · SK41 · SK43 · SK51 · SK59 · SK60 · SU63 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



III-20 圖 SU63 (2) 磁器・陶器・土器

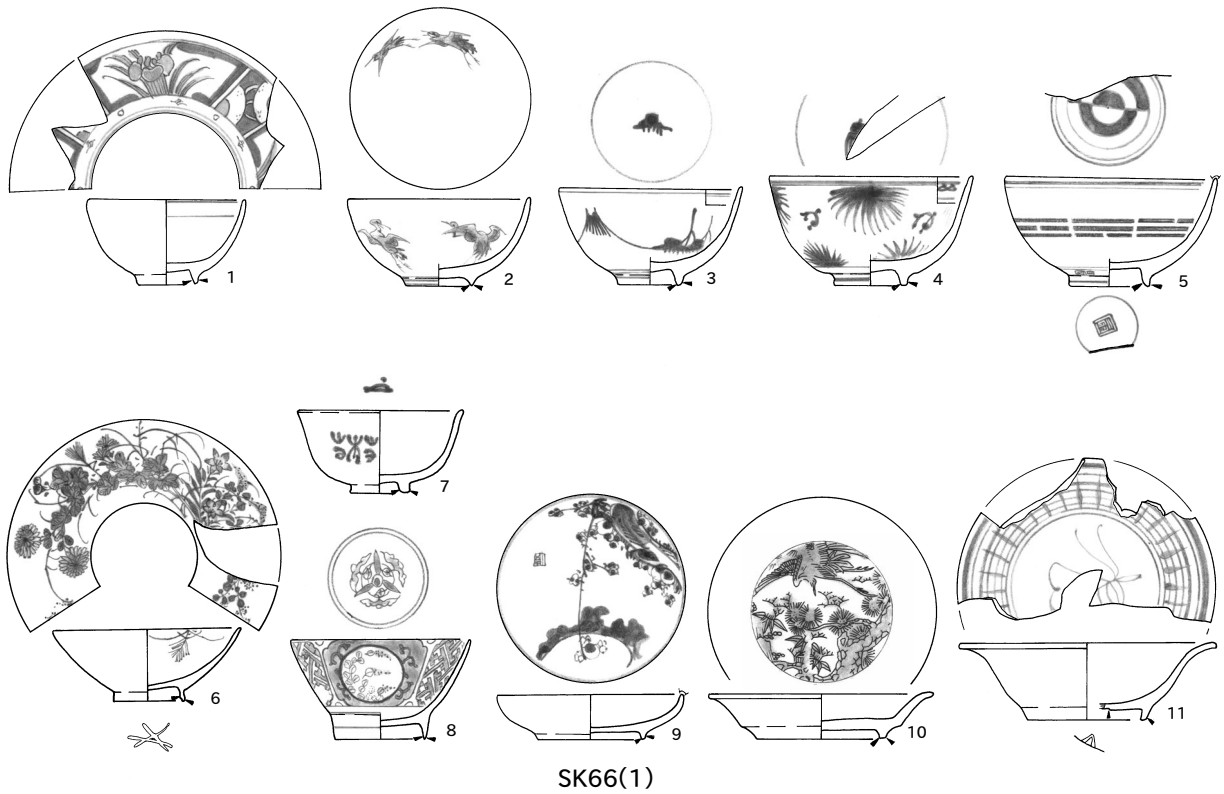
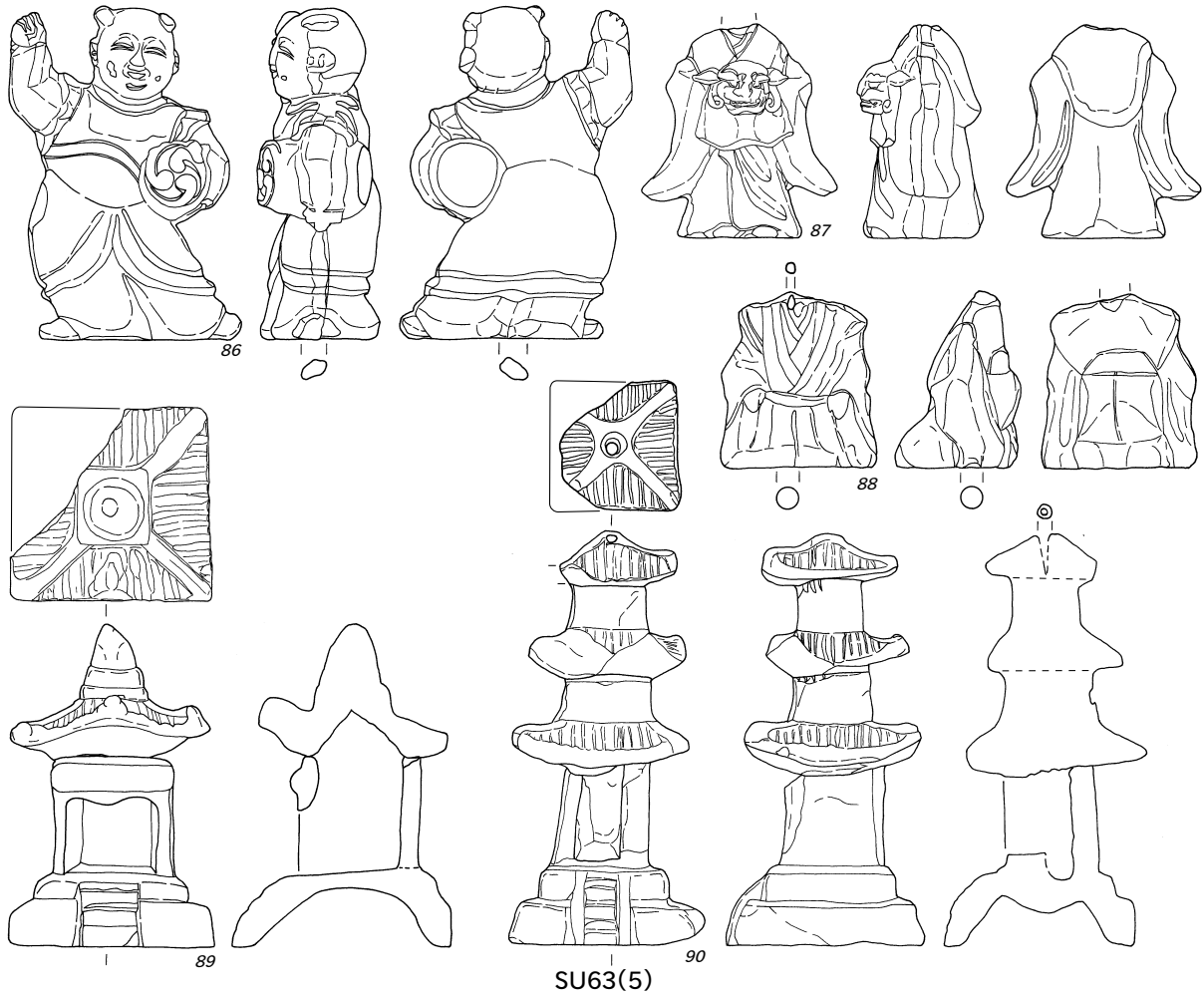


III-21 图 SU63 (3) 磁器·陶器·土器

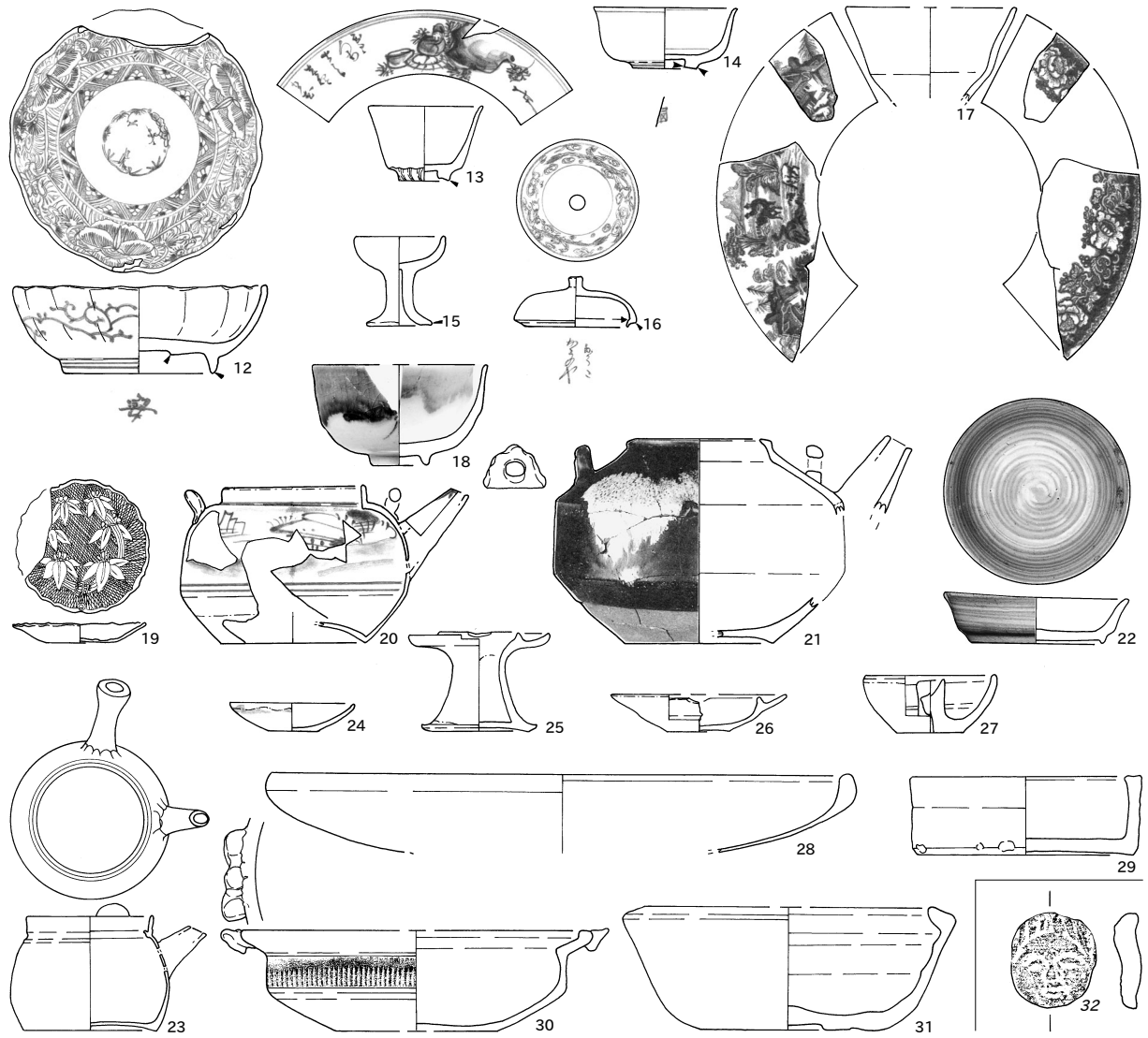
第1節 磁器・陶器・土器



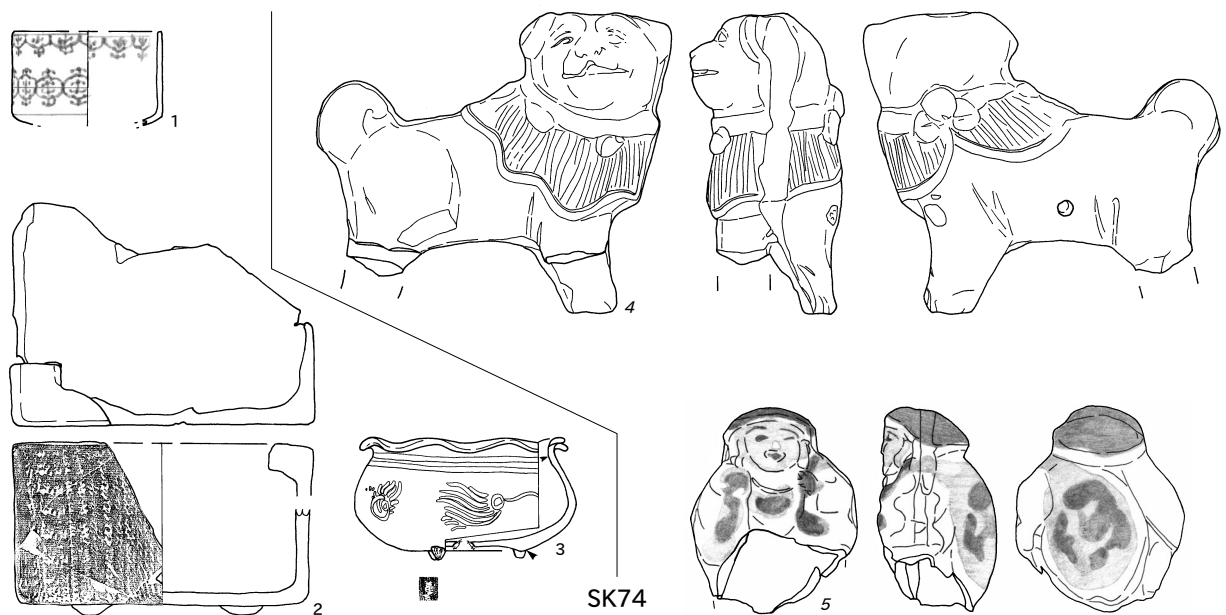
III-22 圖 SU63 (4) 磁器・陶器・土器



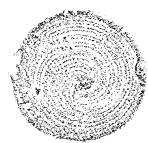
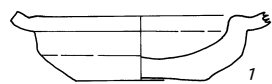
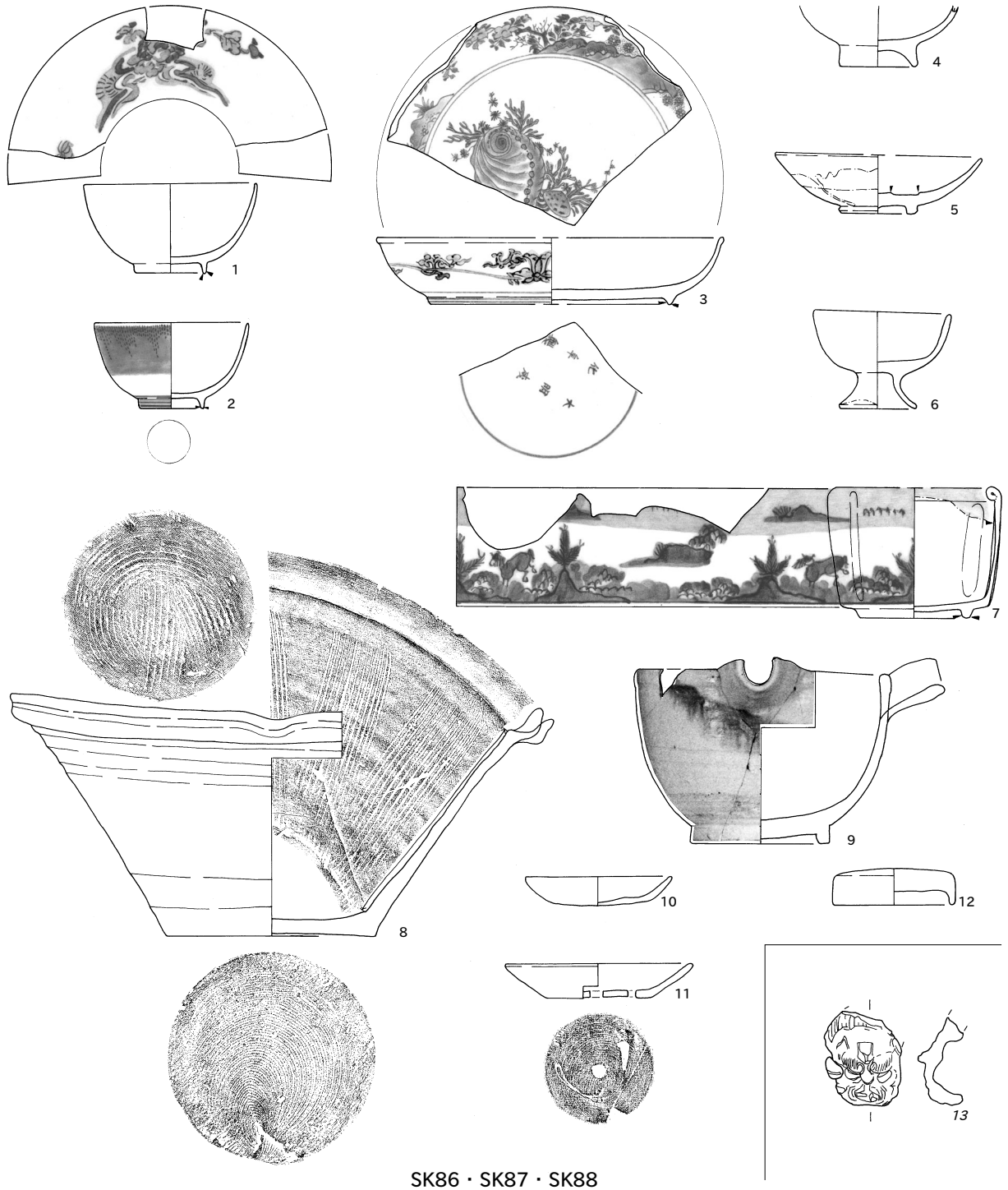
III-23 圖 SU63 (5) · SK66 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



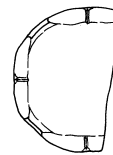
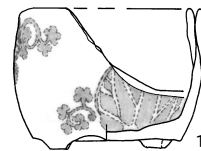
SK66(2)



Ⅲ-24 図 SK66 (2)・SK74 磁器・陶器・土器



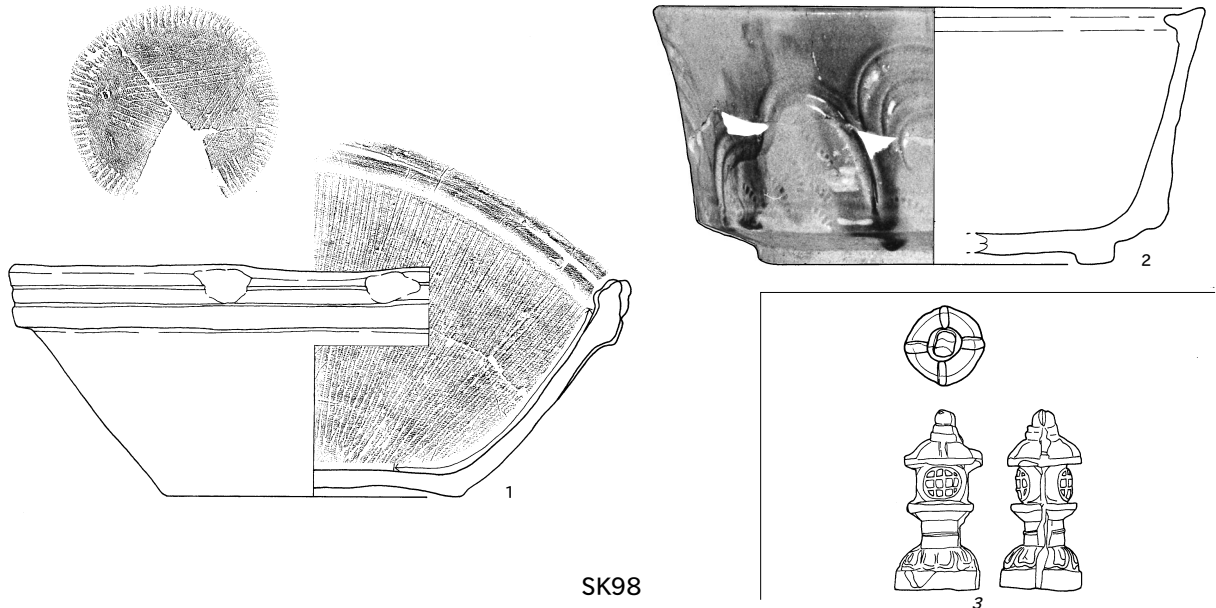
SK96



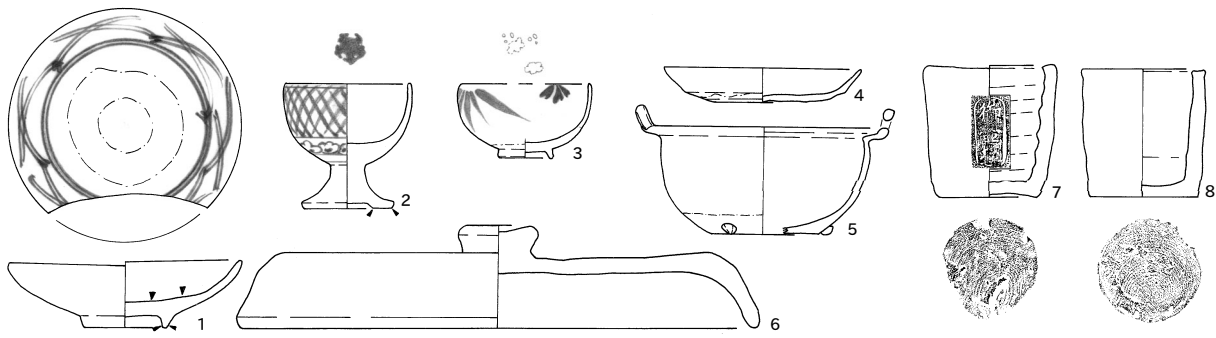
SK97

III-25 圖 SK86 · SK87 · SK88 · SK96 · SK97 磁器 · 陶器 · 土器

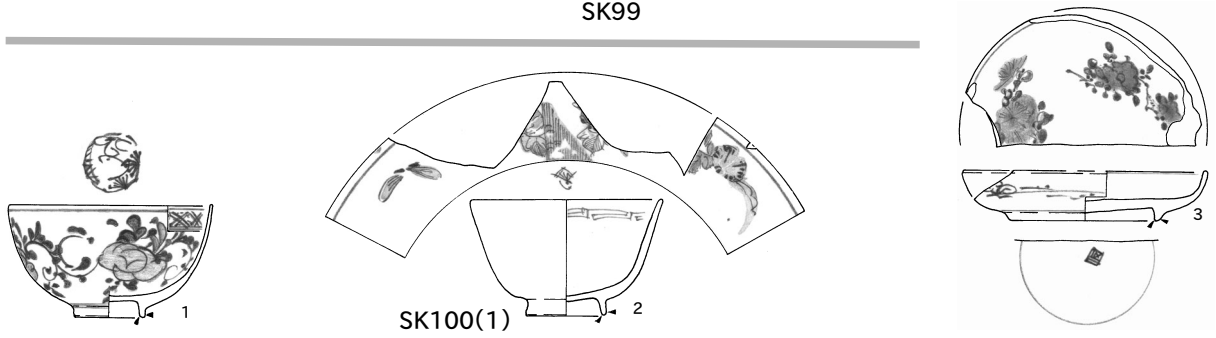
第1節 磁器・陶器・土器



SK98

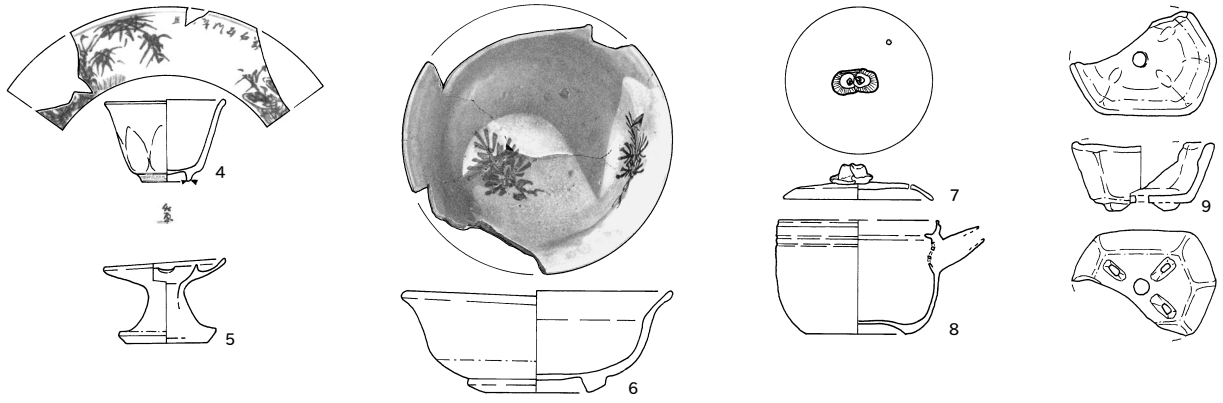


SK99

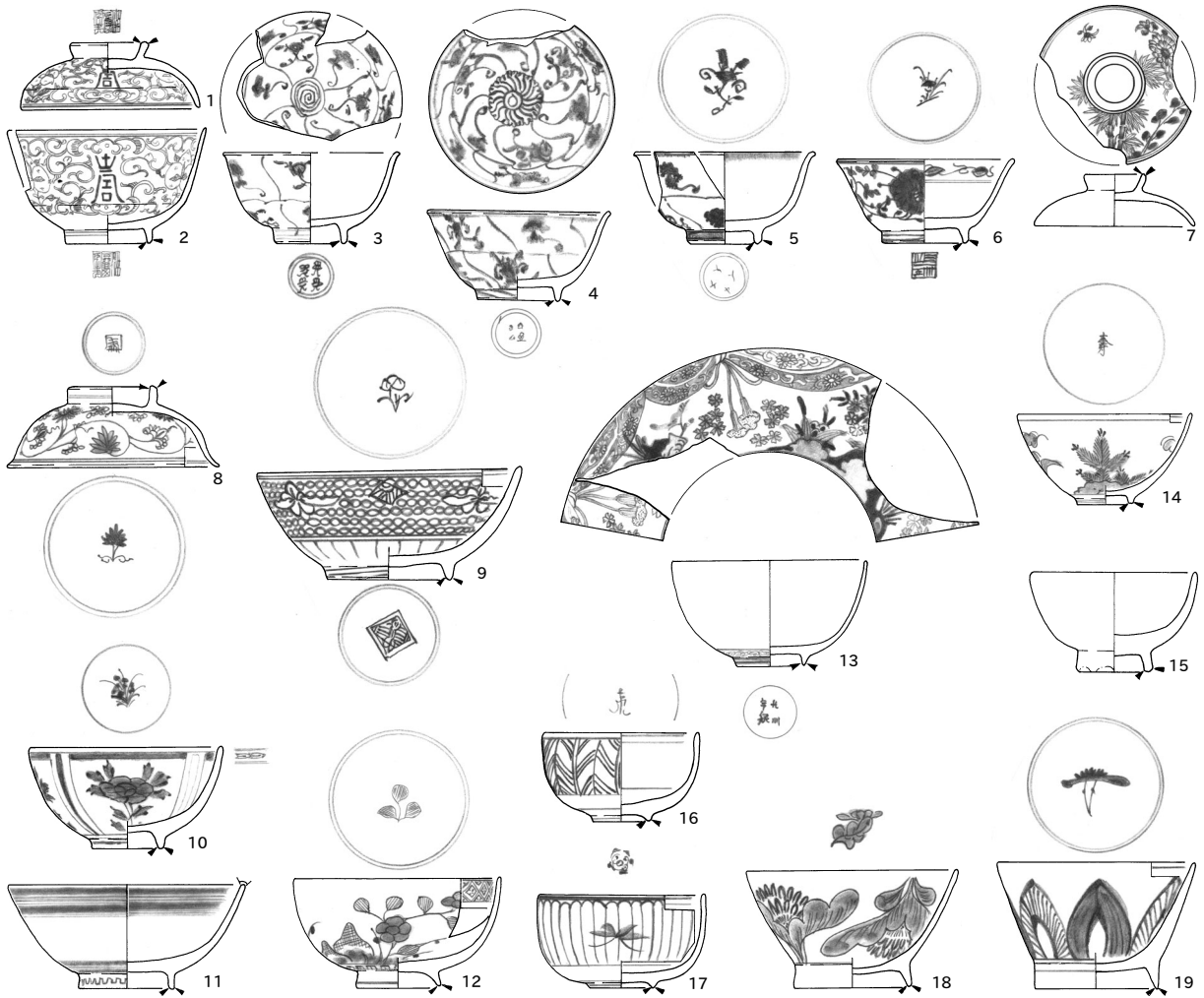


SK100(1)

III-26 圖 SK98・SK99・SK100(1) 磁器・陶器・土器



SK100(2)



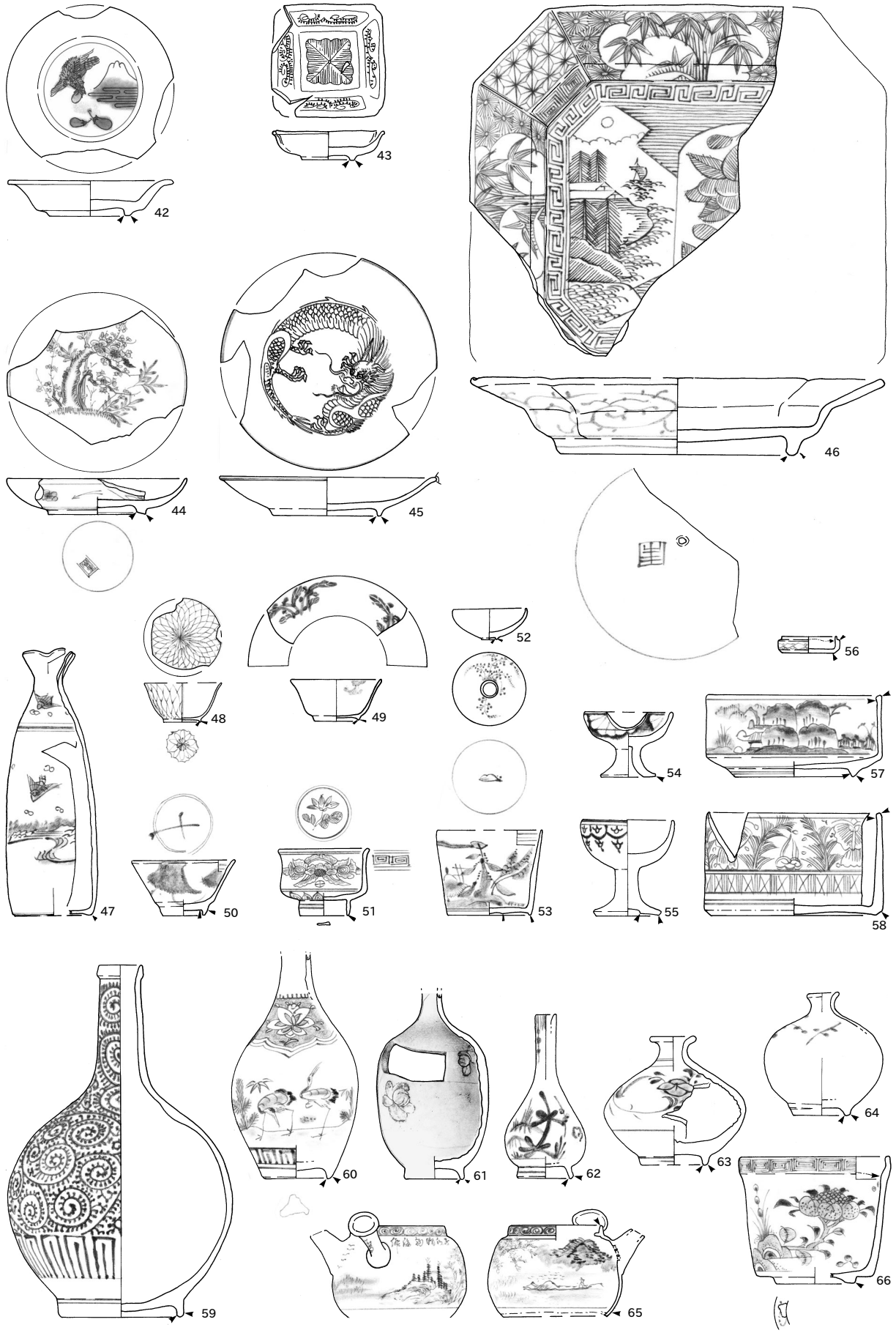
SK101(1)

Ⅲ-27 图 SK100 (2) · SK101 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

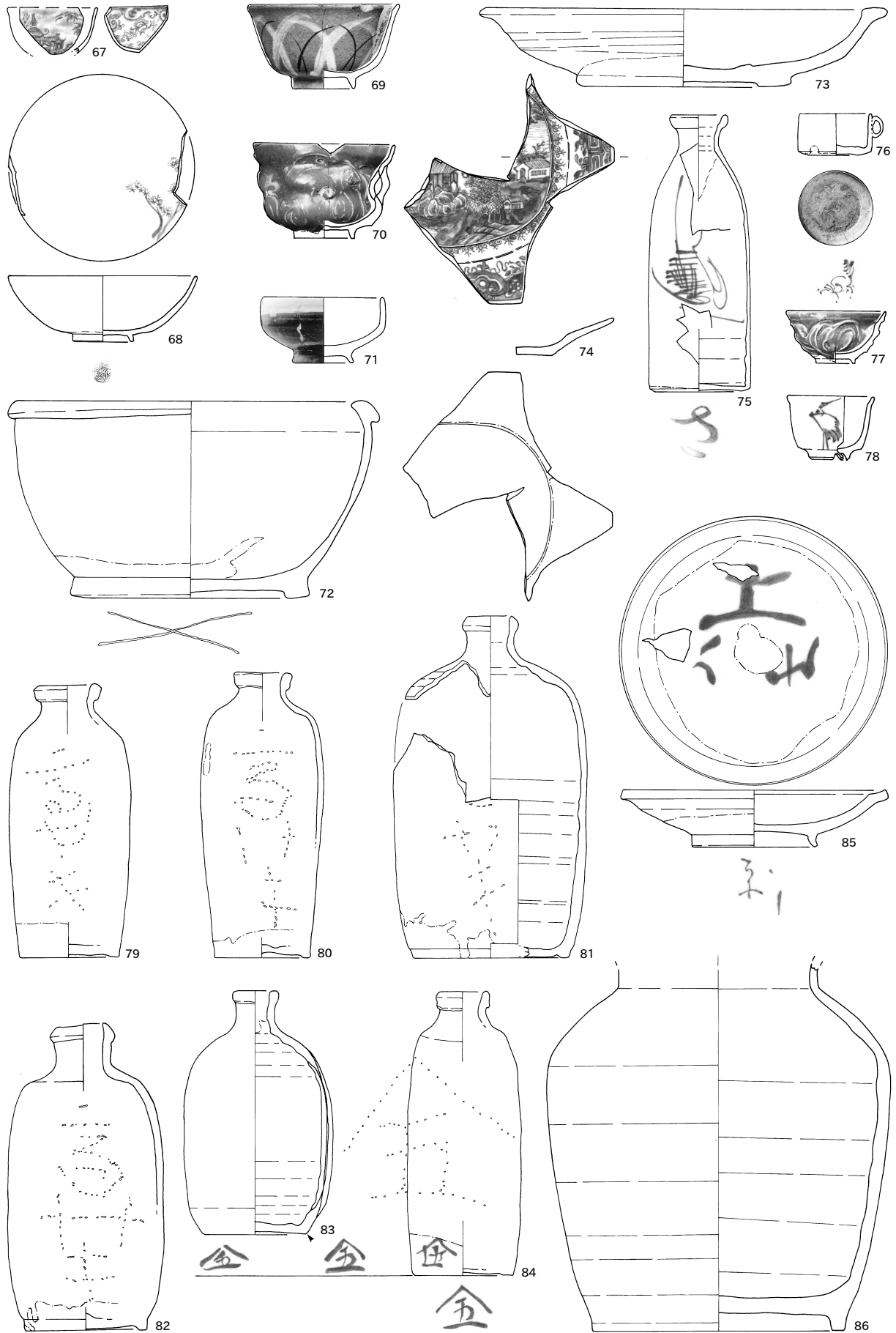
第1節 磁器·陶器·土器



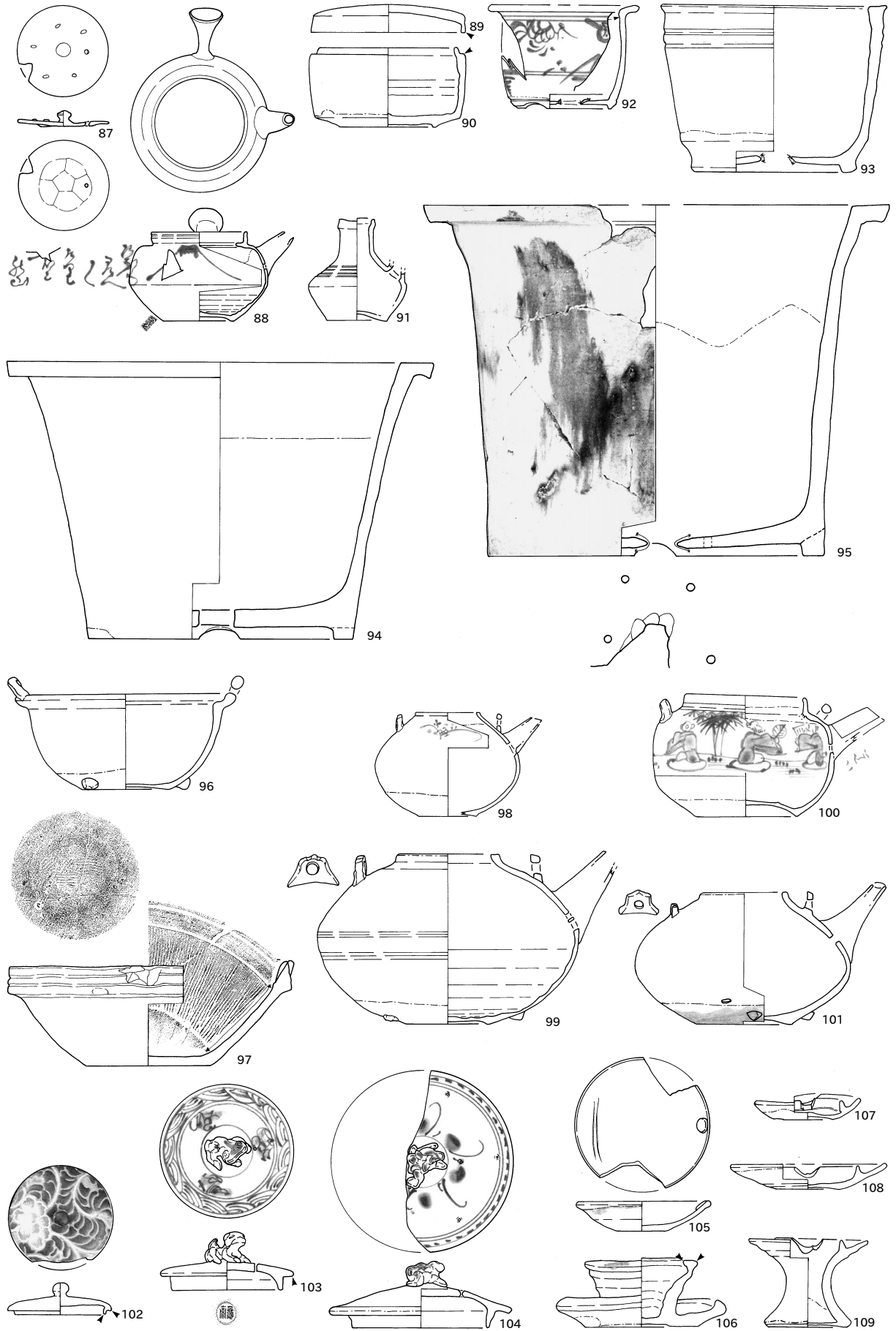
III-28 图 SK101 (2) 磁器·陶器·土器



III-29 圖 SK101 (3) 磁器·陶器·土器

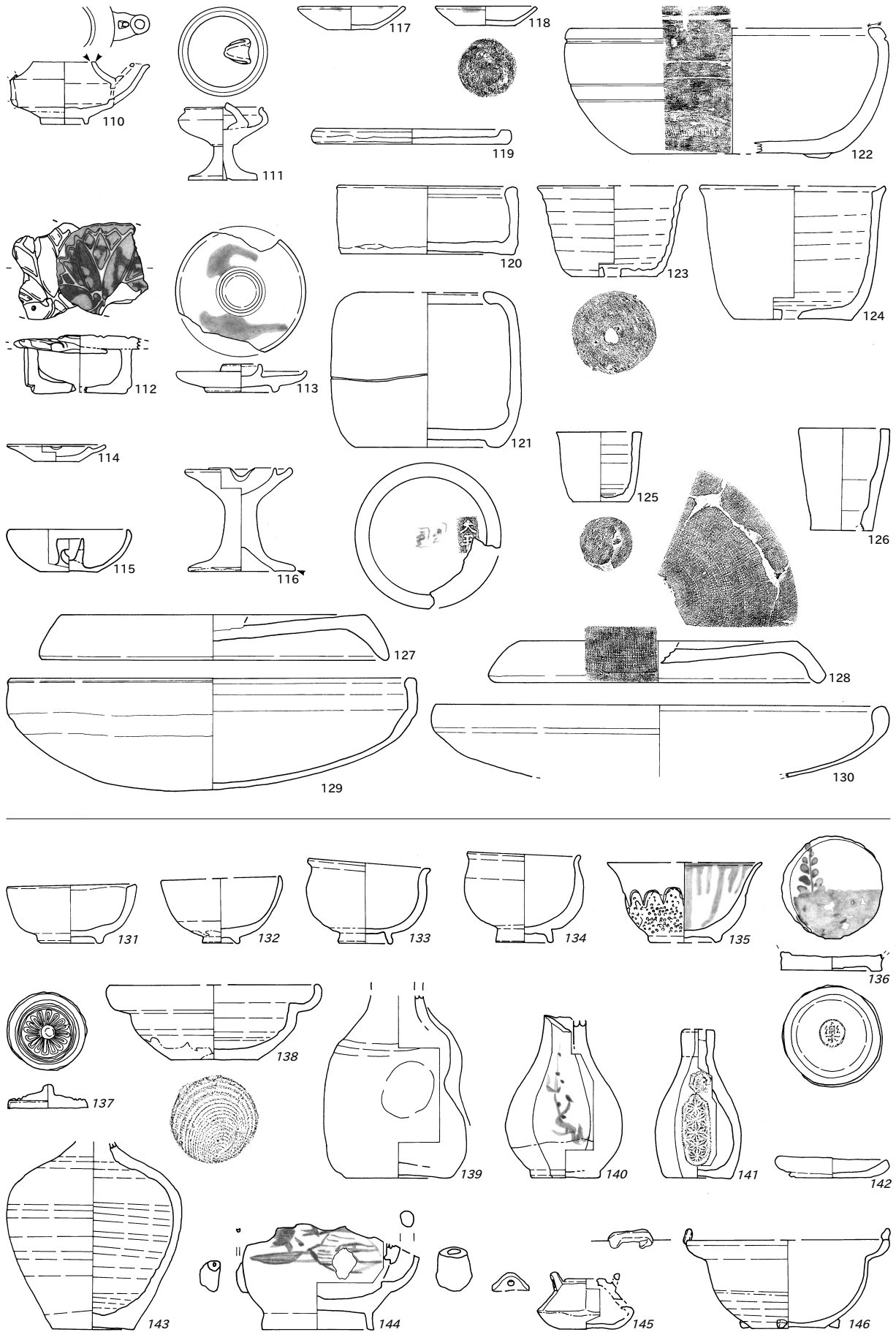


Ⅲ-30 図 SK101 (4) 磁器・陶器・土器

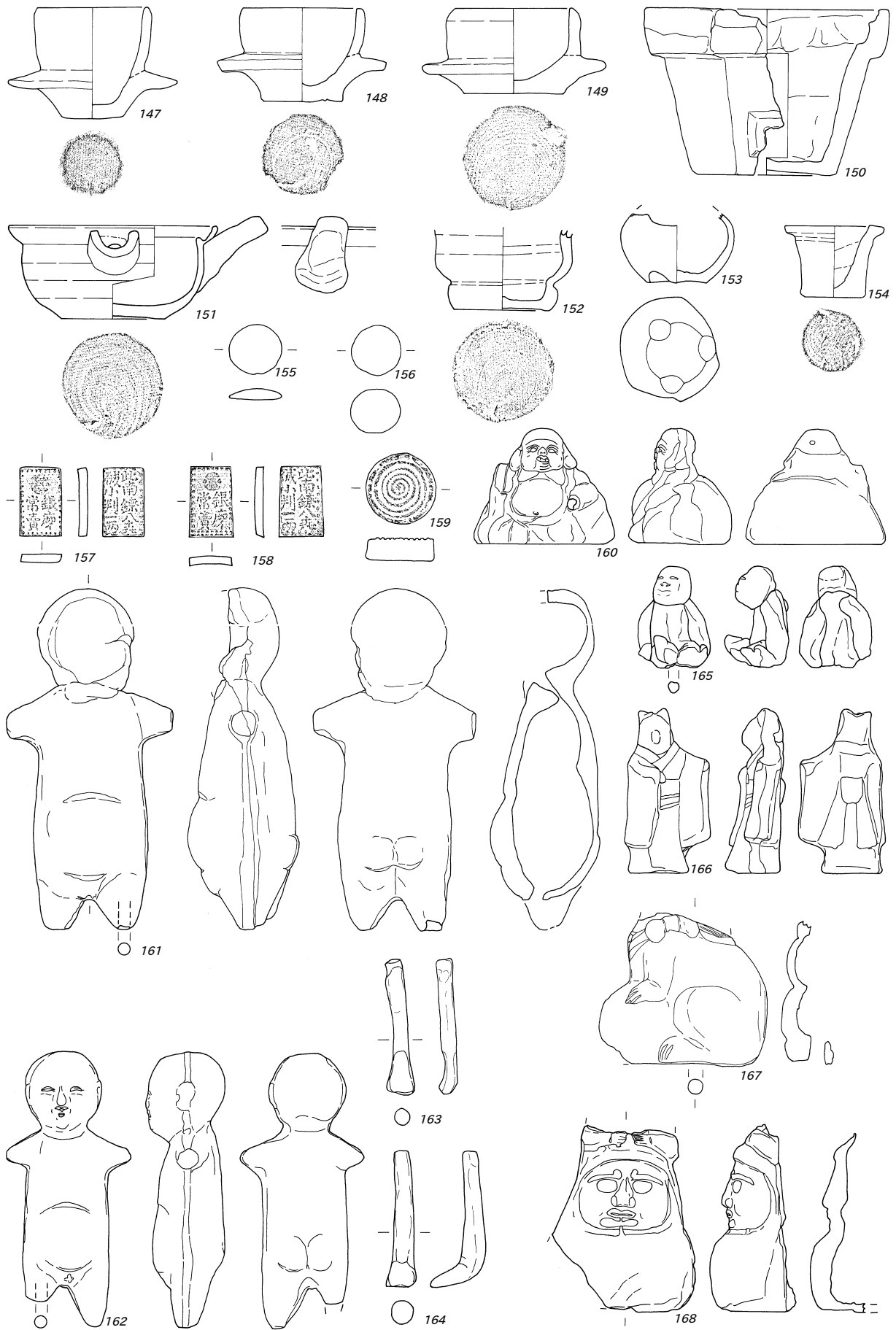


III-31 图 SK101 (5) 磁器·陶器·土器

第1節 磁器・陶器・土器



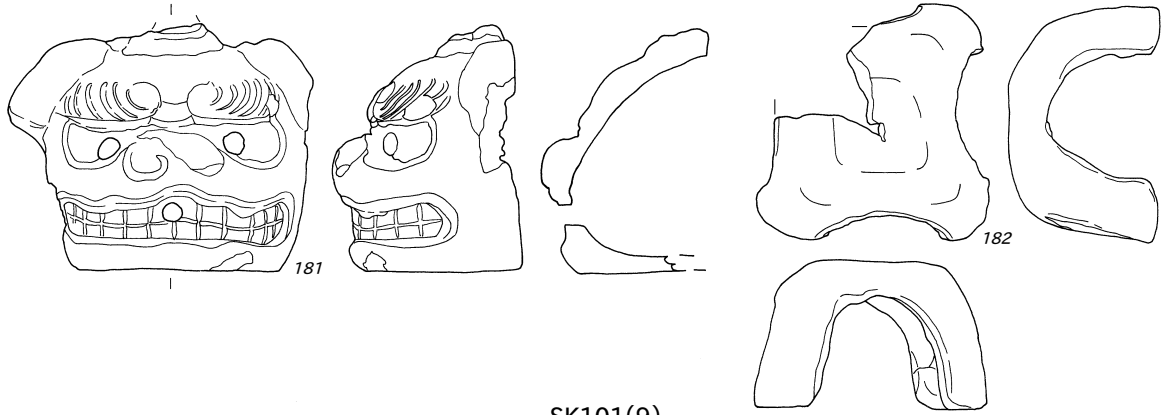
III-32 図 SK101 (6) 磁器・陶器・土器



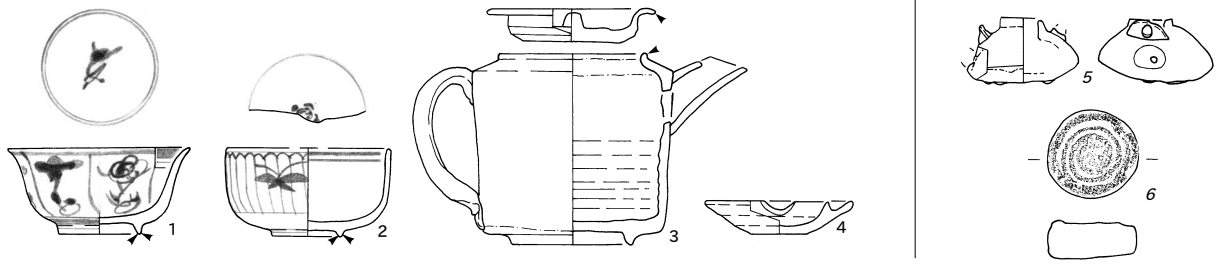
III-33 图 SK101 (7) 磁器·陶器·土器



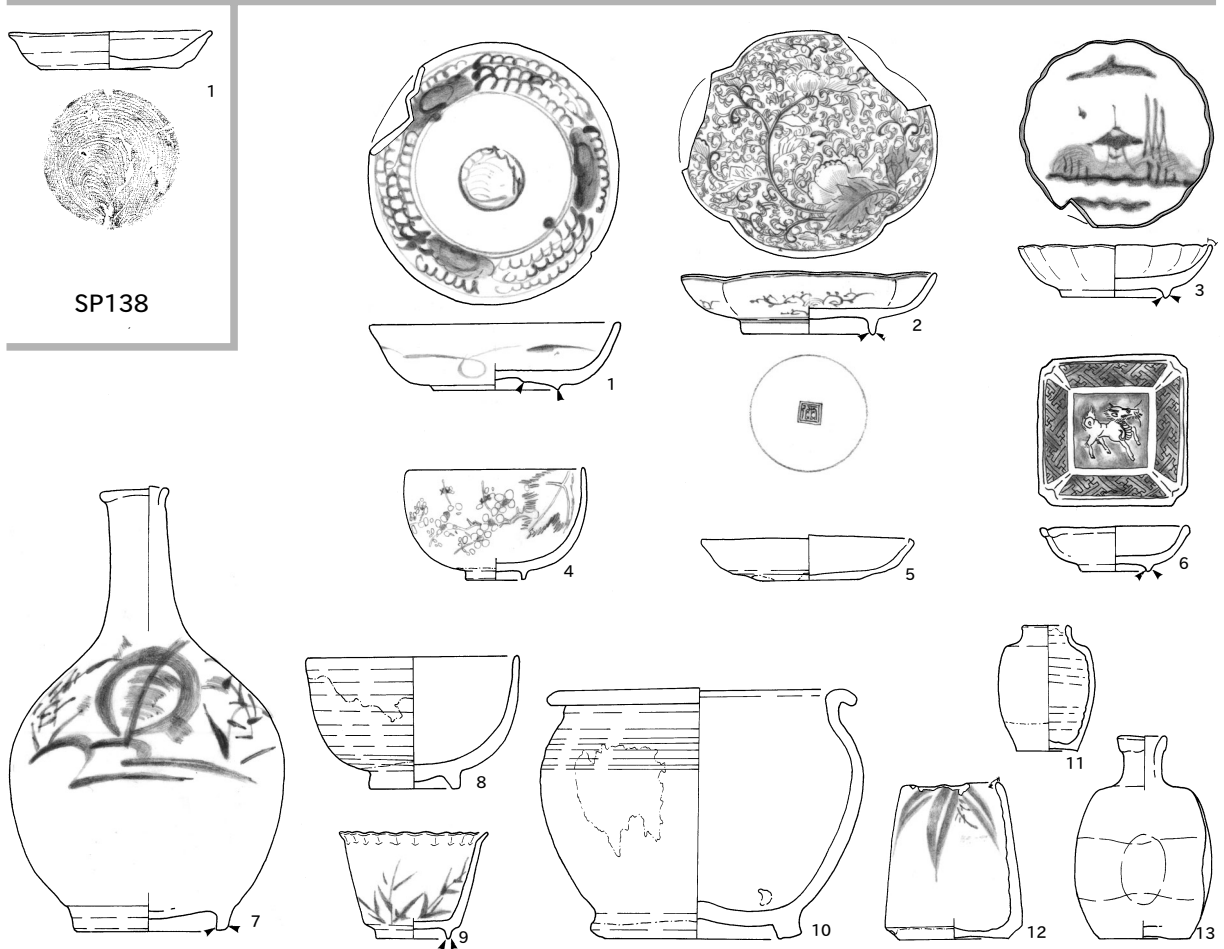
III-34 図 SK101 (8) 磁器・陶器・土器



SK101(9)



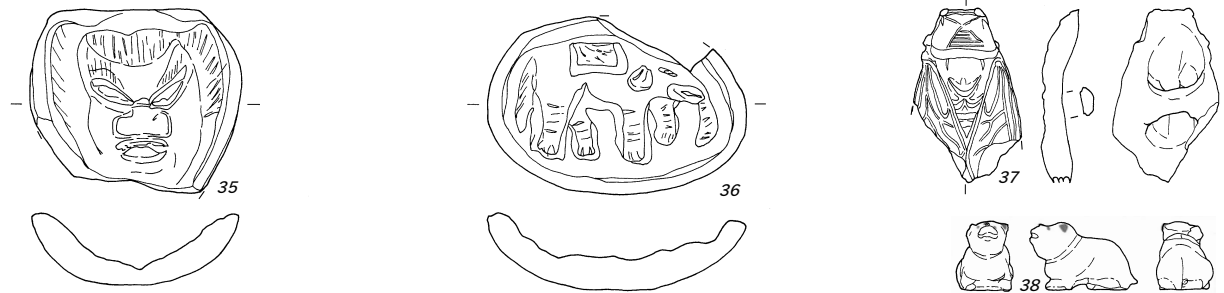
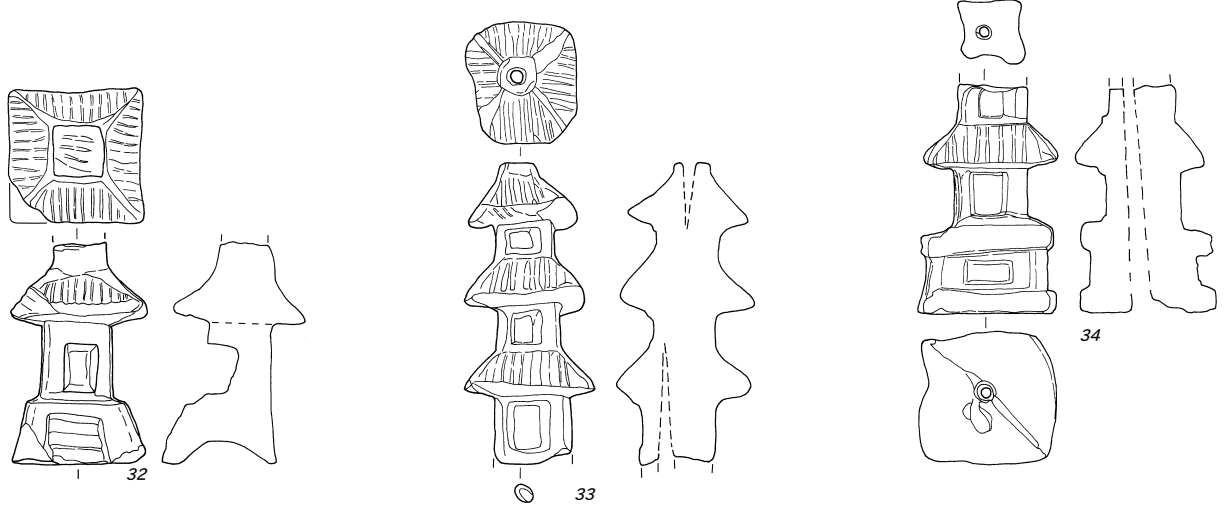
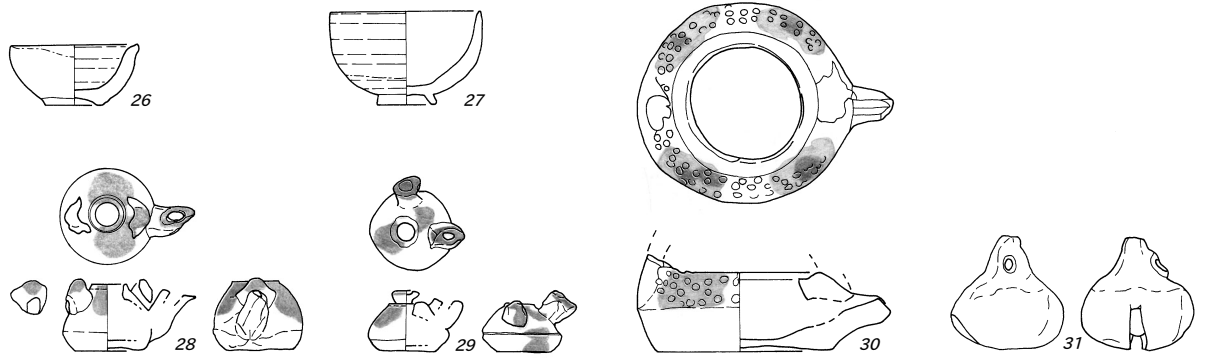
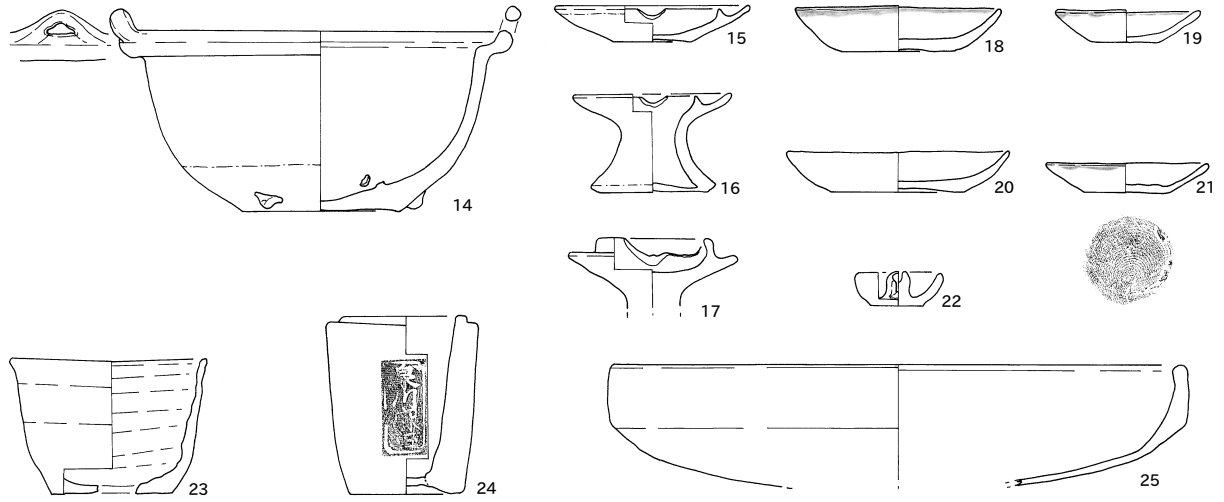
SK111



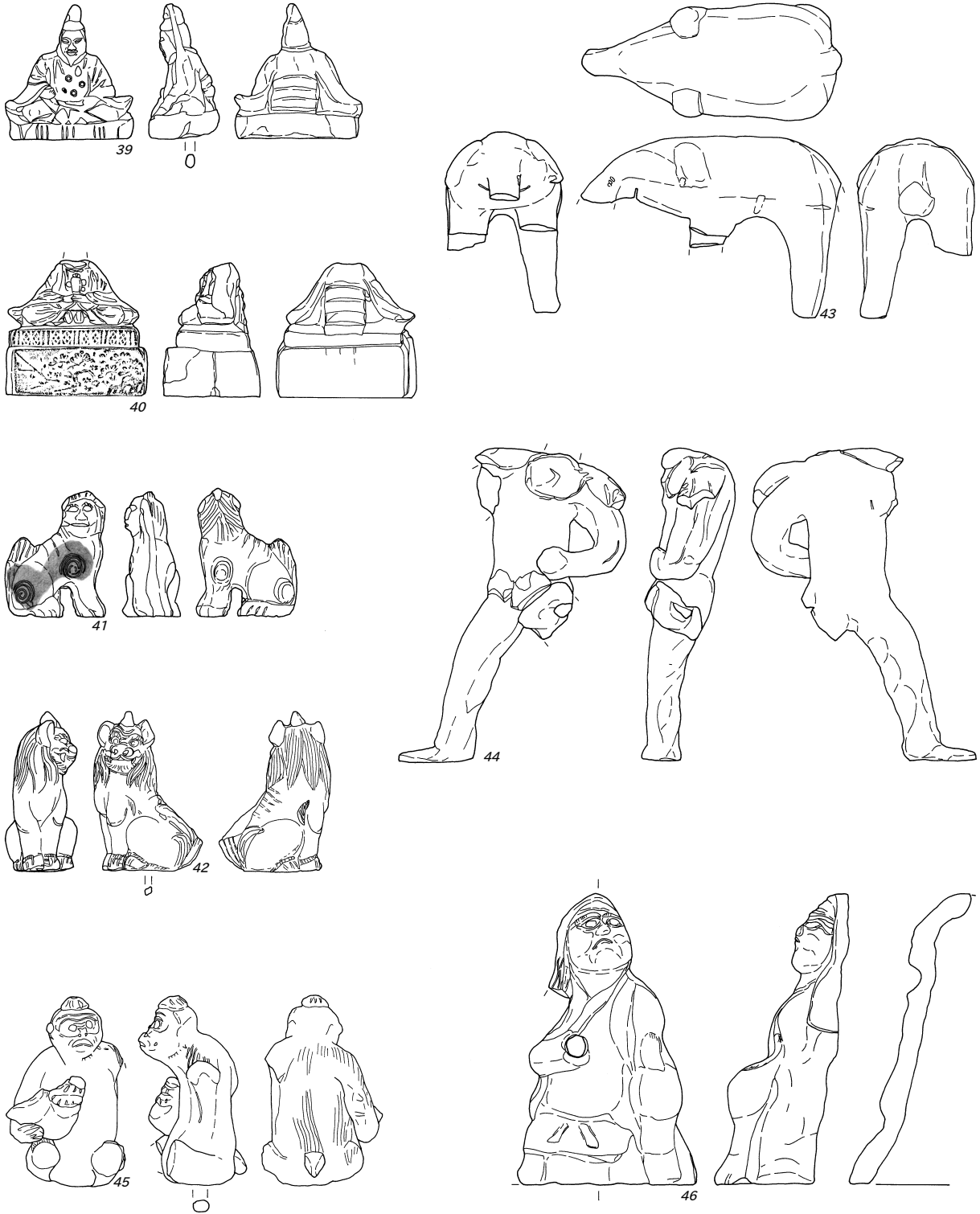
SK140(1)

Ⅲ-35 図 SK101 (9) · SK111 · SP138 · SK140 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

第1節 磁器・陶器・土器



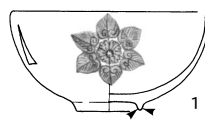
III-36 図 SK140 (2) 磁器・陶器・土器



SK140(3)

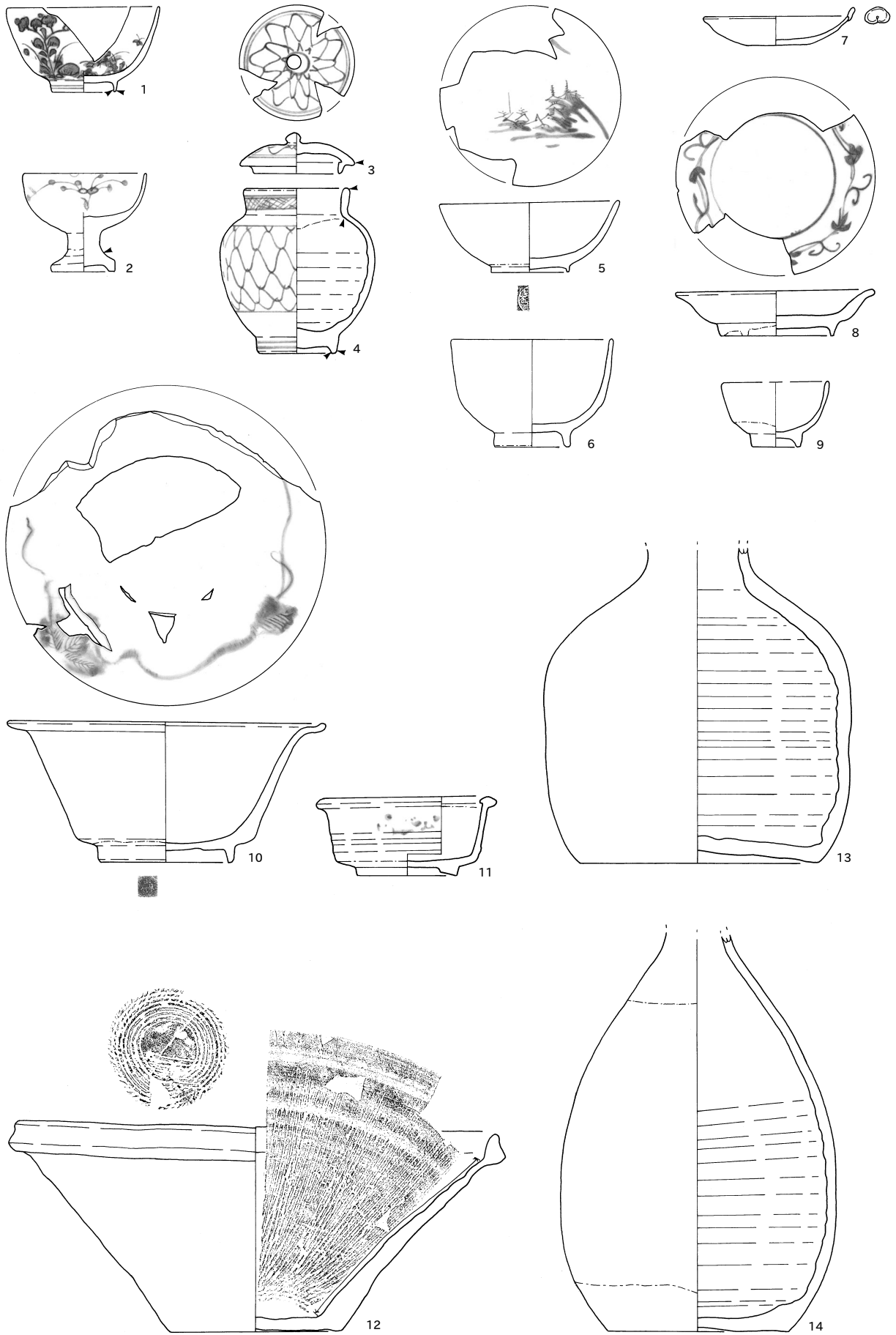


SP141

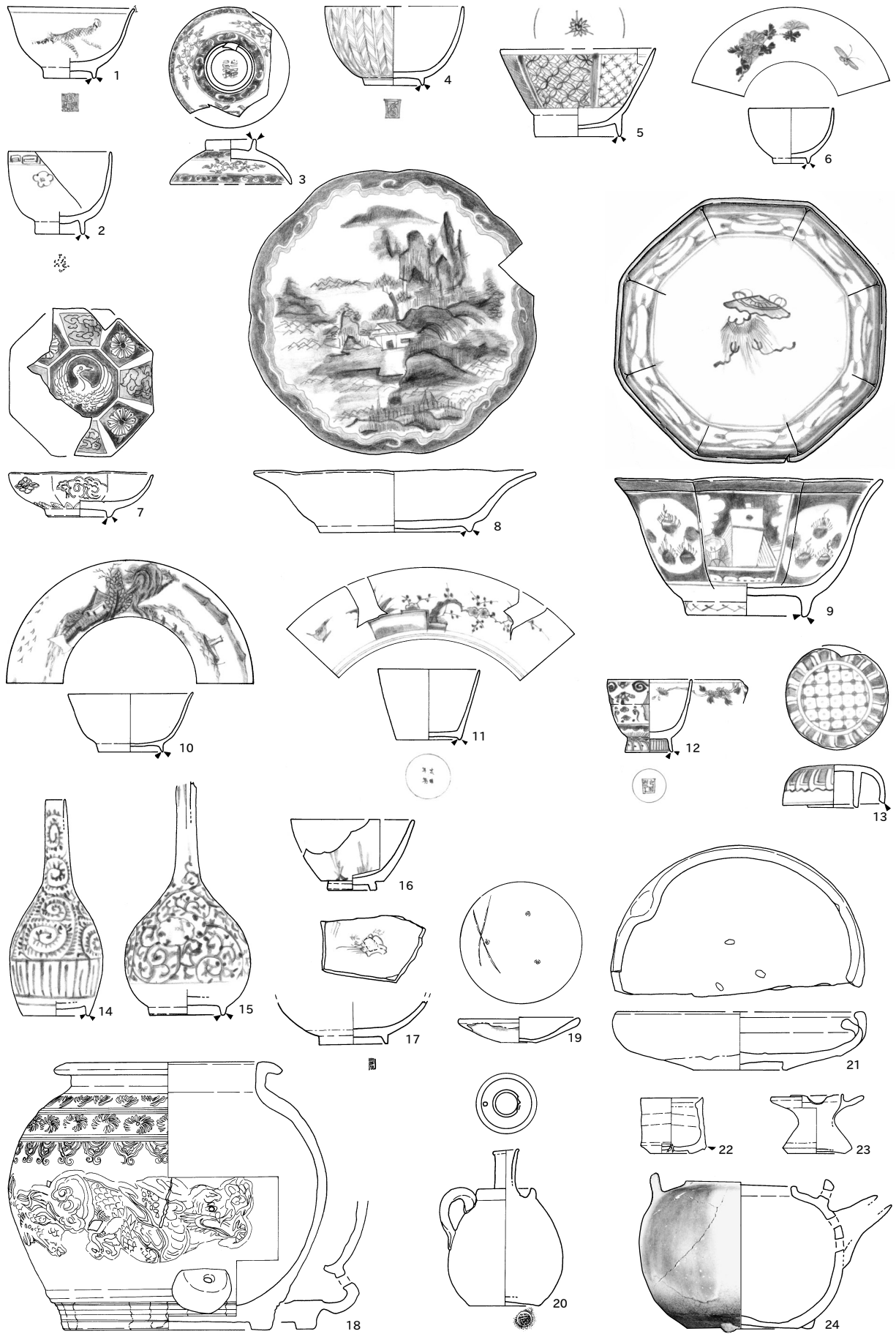


SP170

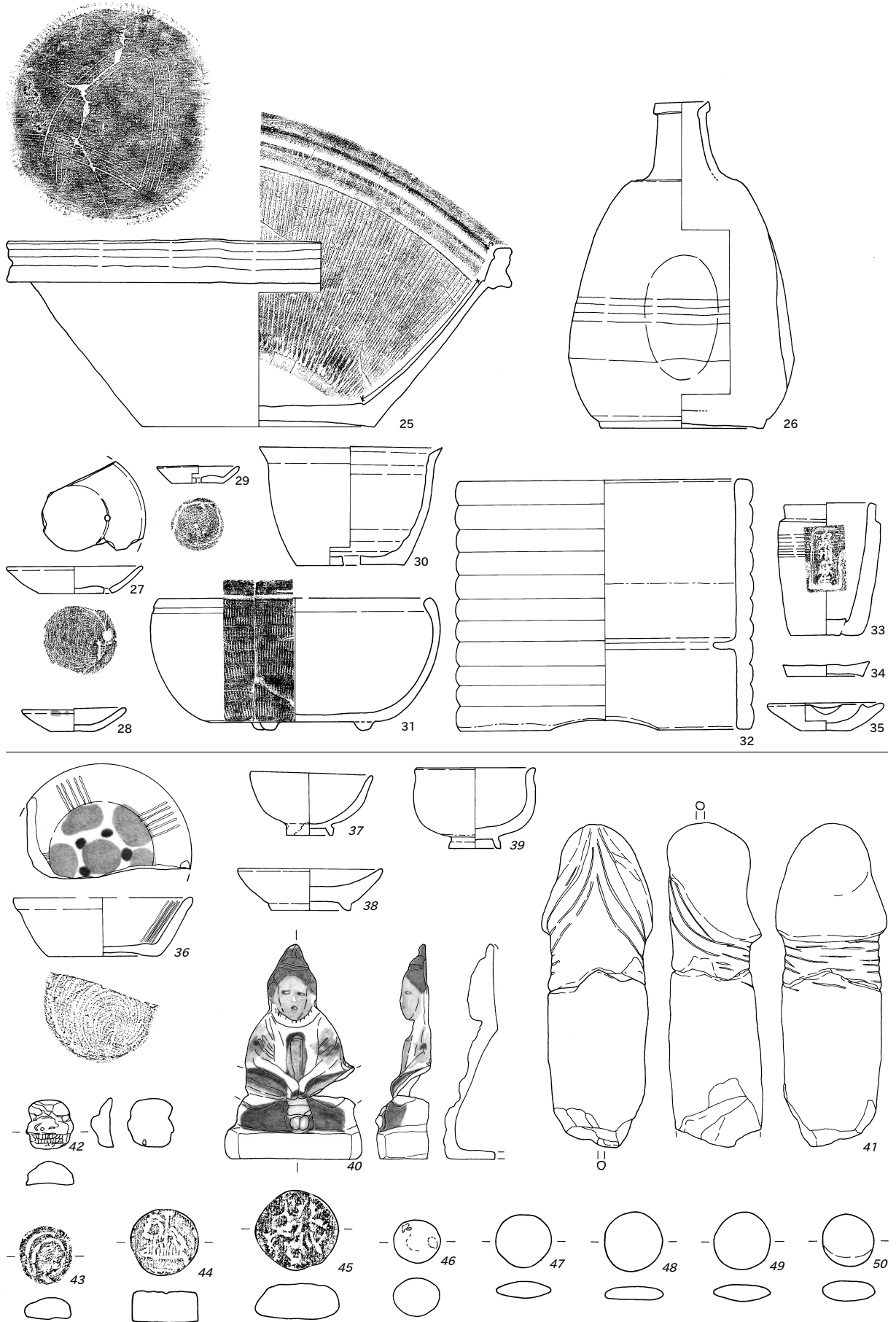
III-37 図 SK140 (3) · SP141 · SP170 磁器 · 陶器 · 土器



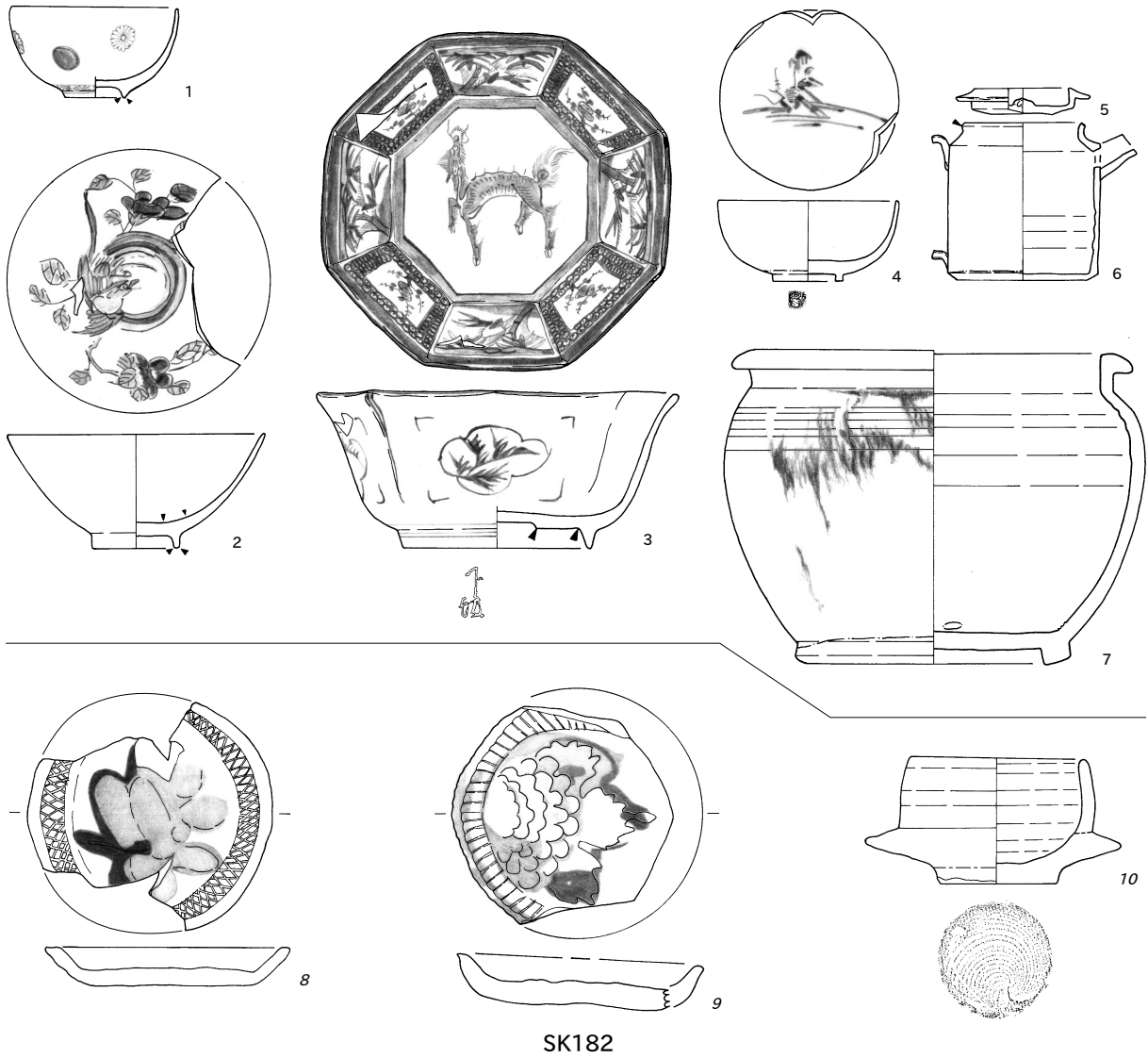
Ⅲ-38 Ⅲ SE174 磁器・陶器・土器



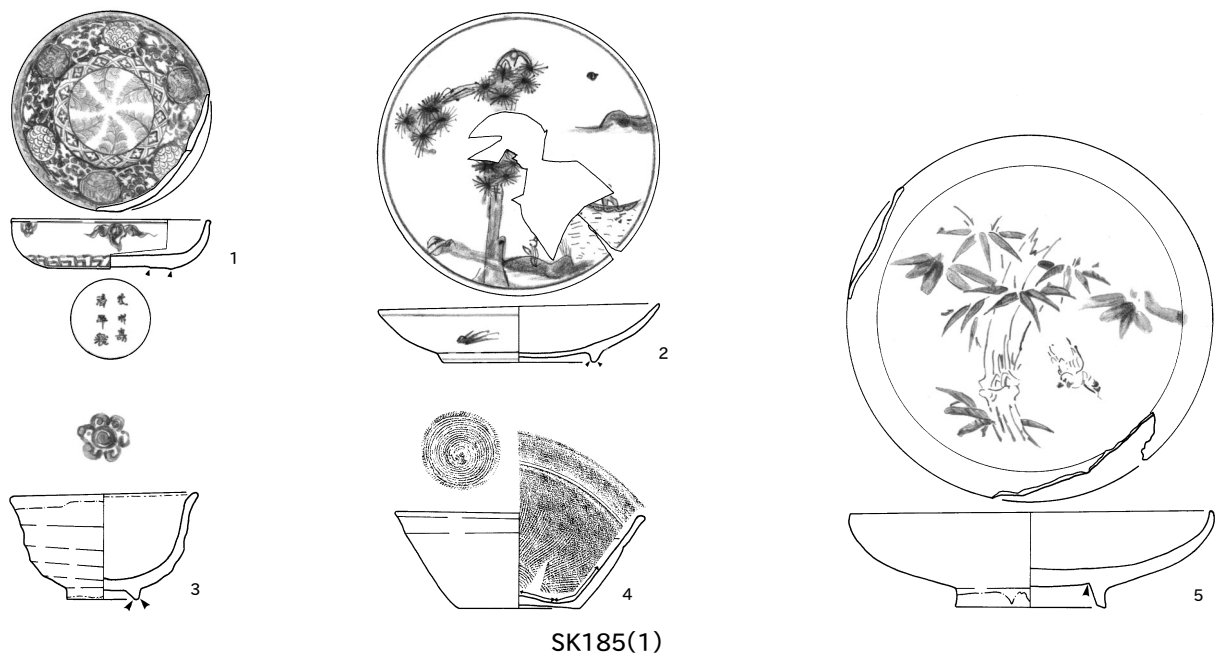
III-39 圖 SU176 (1) 磁器·陶器·土器



III-40 圖 SU176 (2) 磁器・陶器・土器

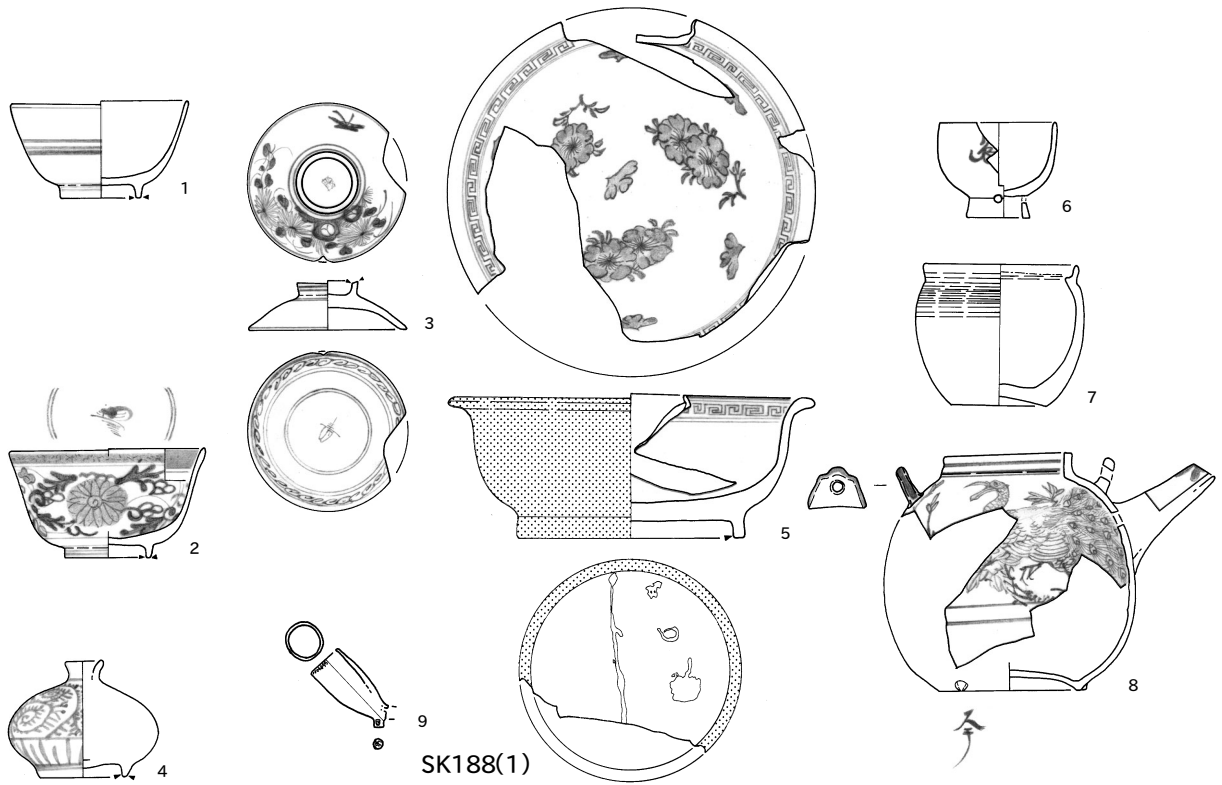
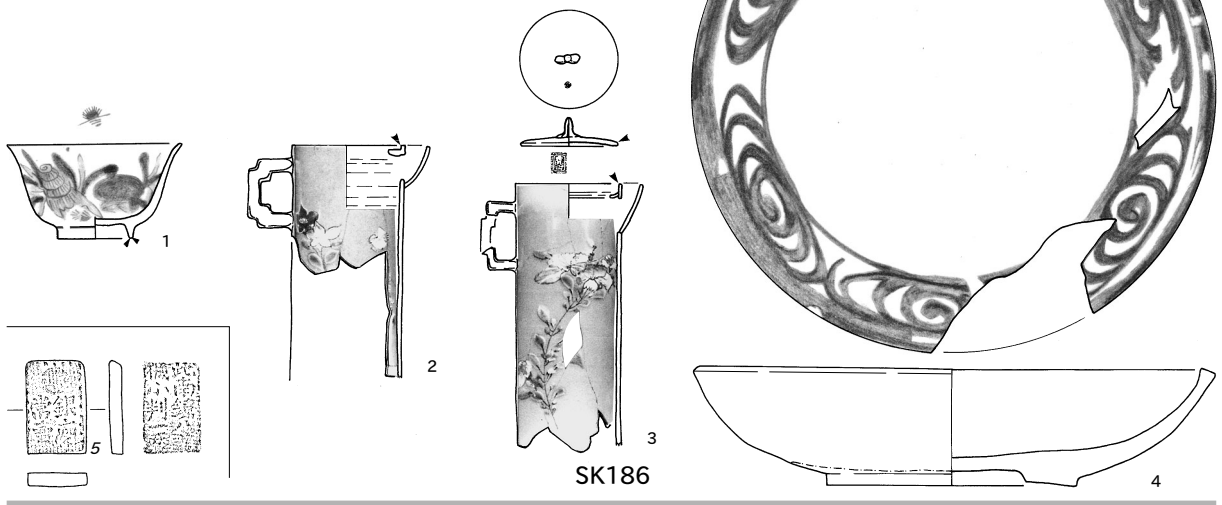
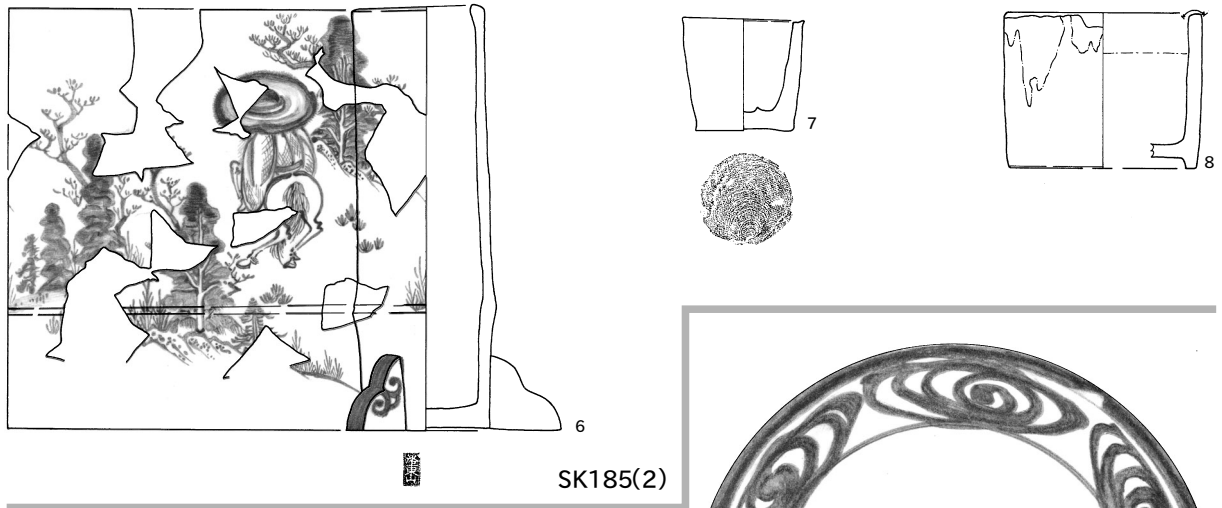


SK182

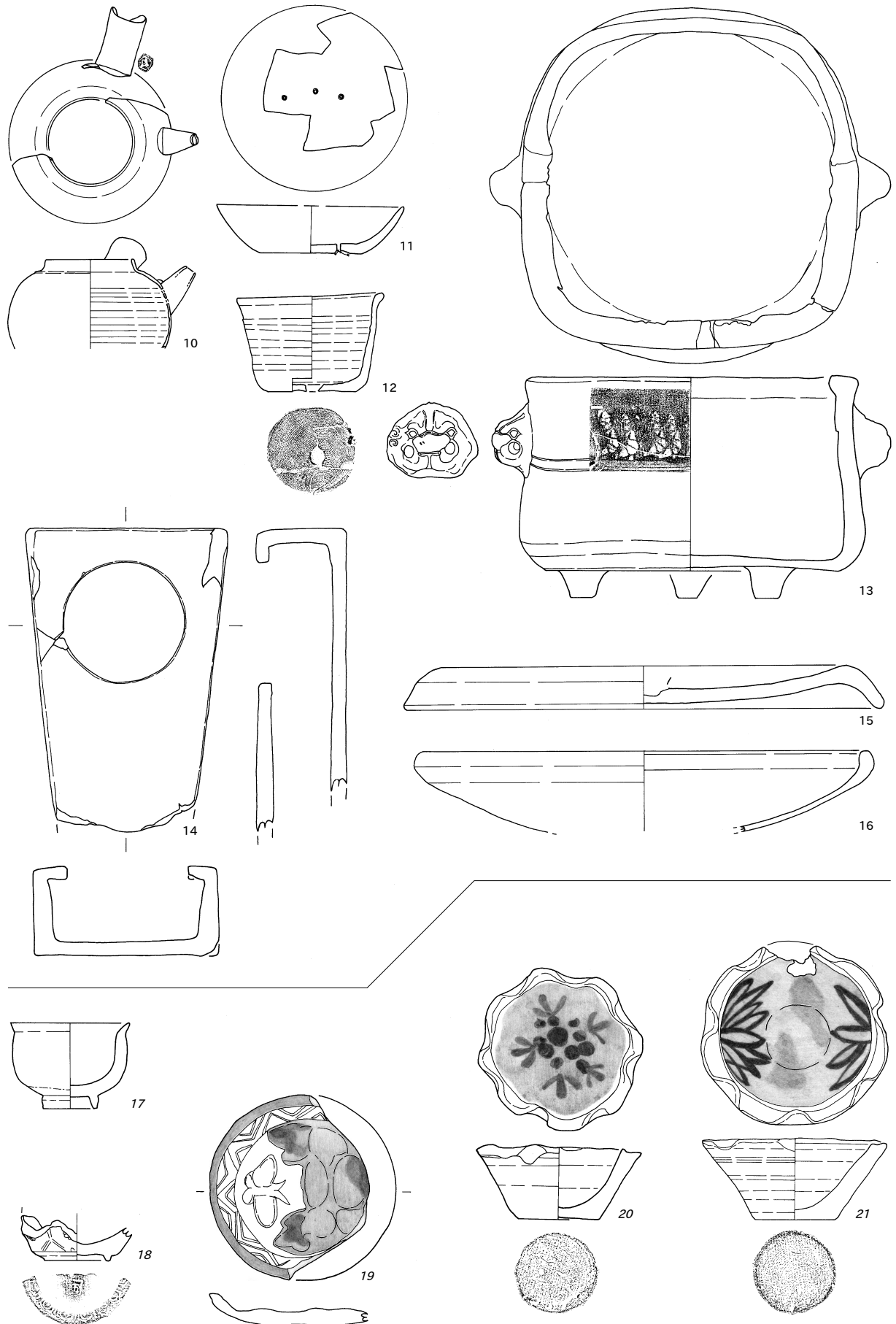


SK185(1)

III-41 图 SK182 · SK185 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



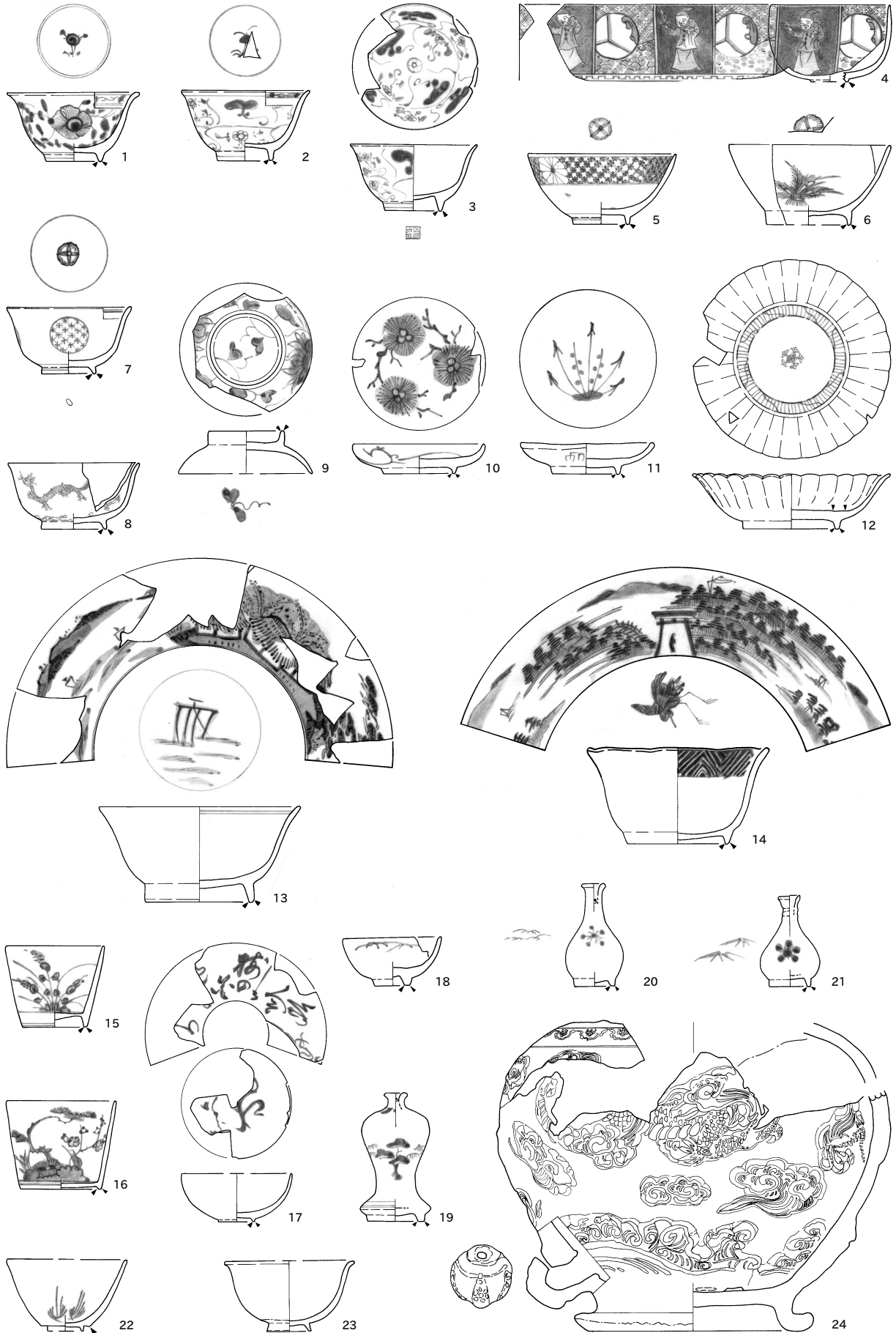
III-42 圖 SK185 (2) · SK186 · SK188 (1) 磁器·陶器·土器



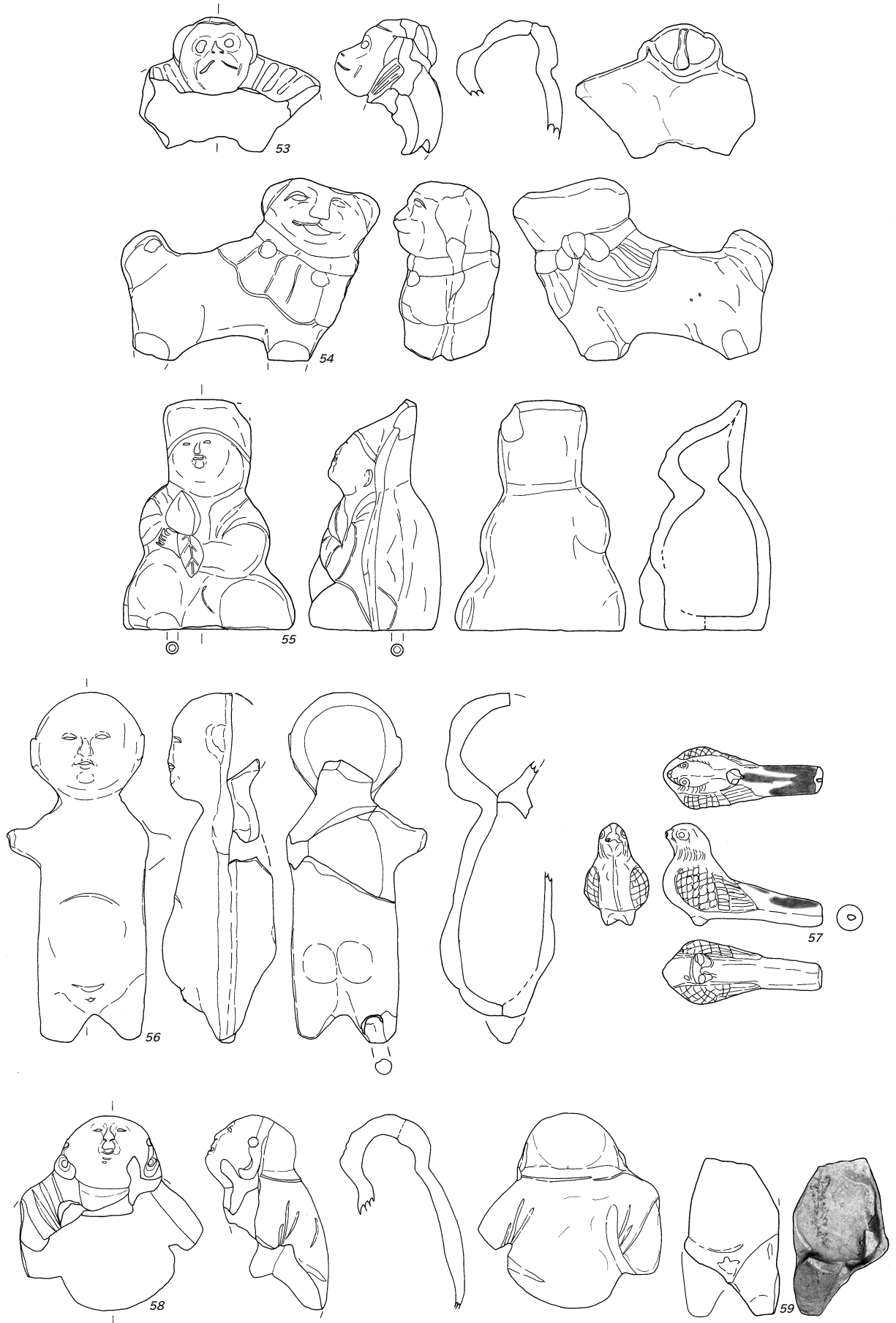
III-43 圖 SK188 (3) 磁器・陶器・土器



III-44 図 SK188 (3) 磁器・陶器・土器

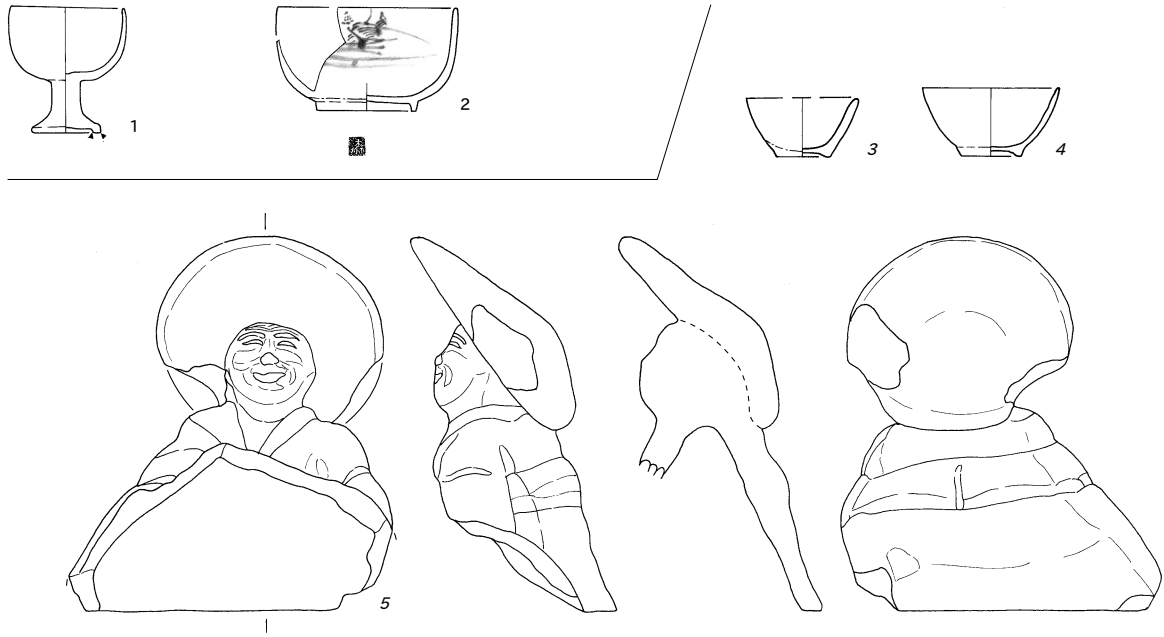


III-45 圖 SU189 (1) 磁器・陶器・土器



III-47 圖 SU189 (3) 磁器・陶器・土器

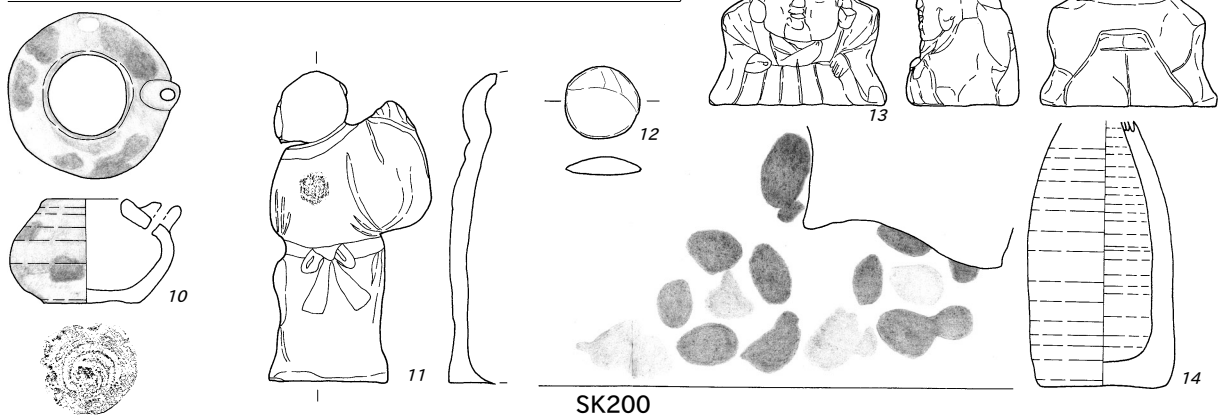
第1節 磁器・陶器・土器



SK194

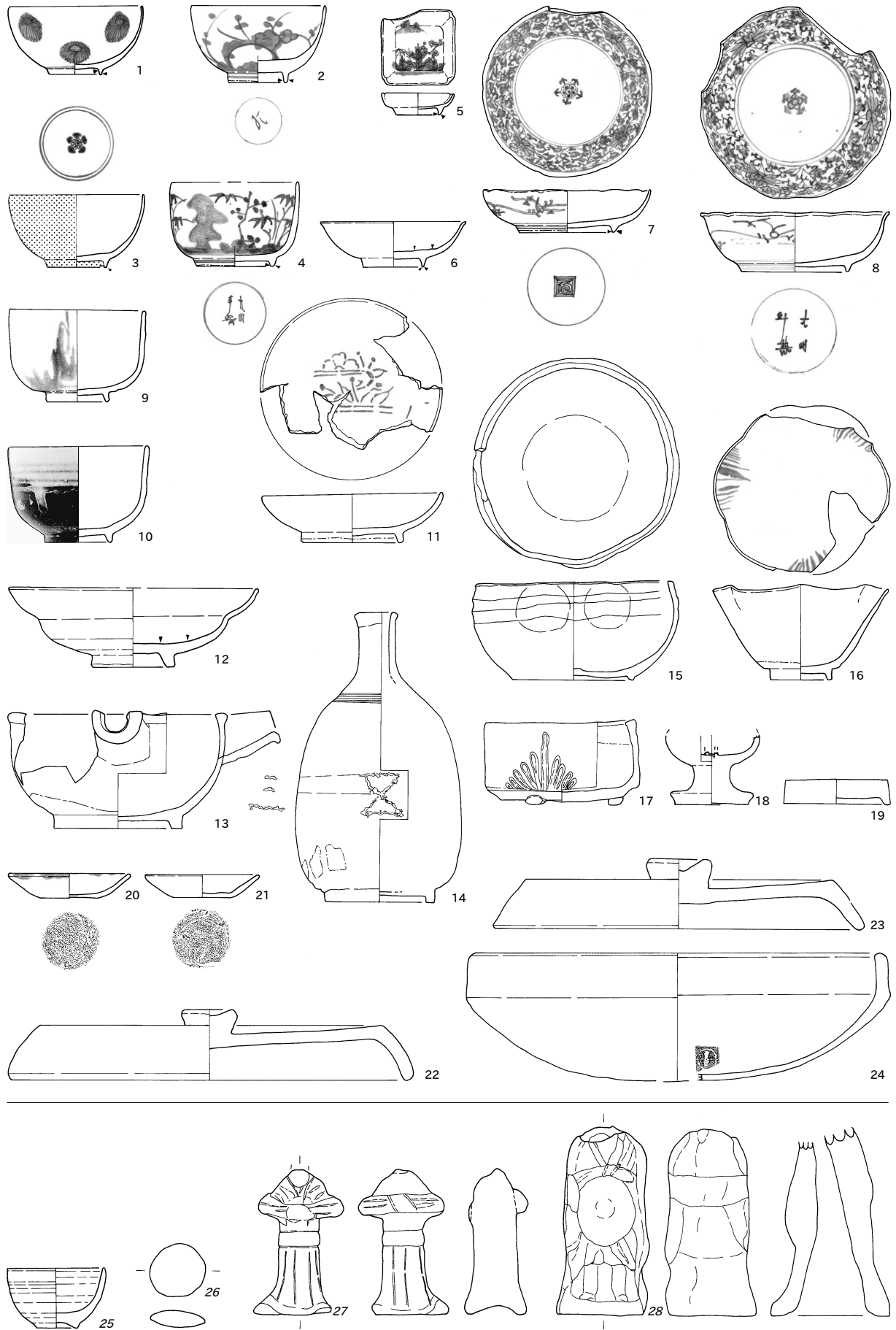


SE199



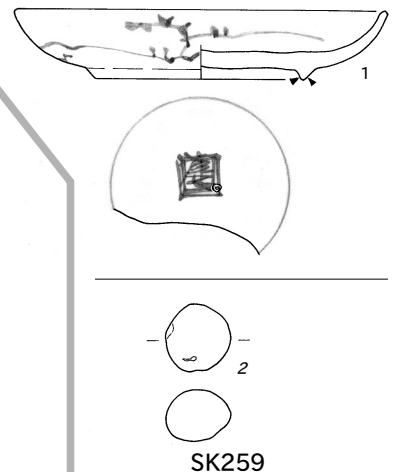
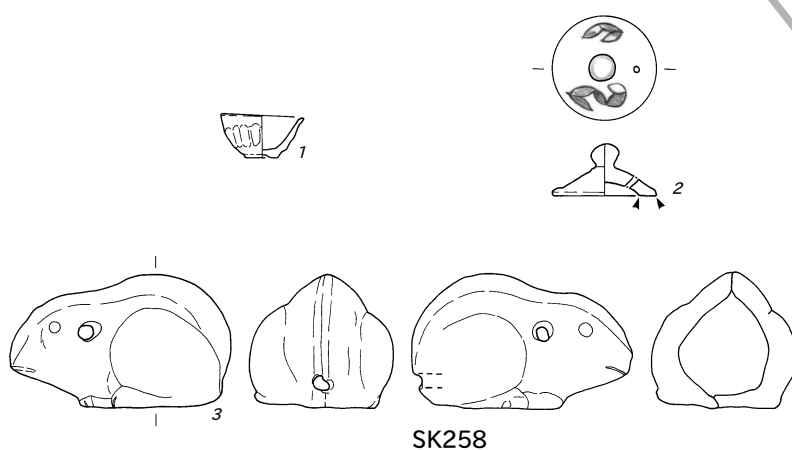
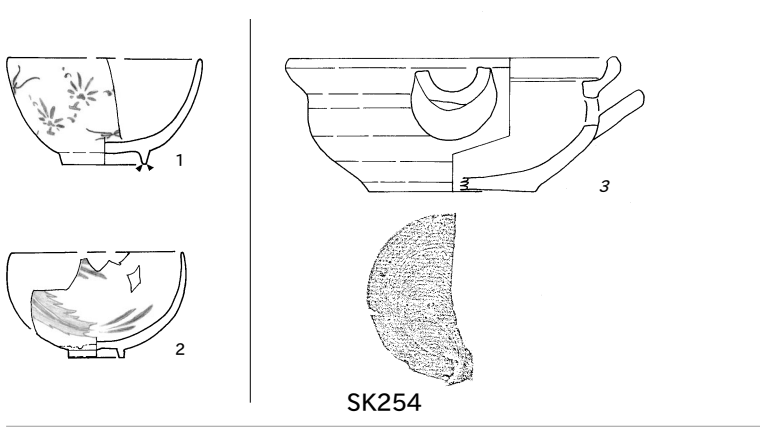
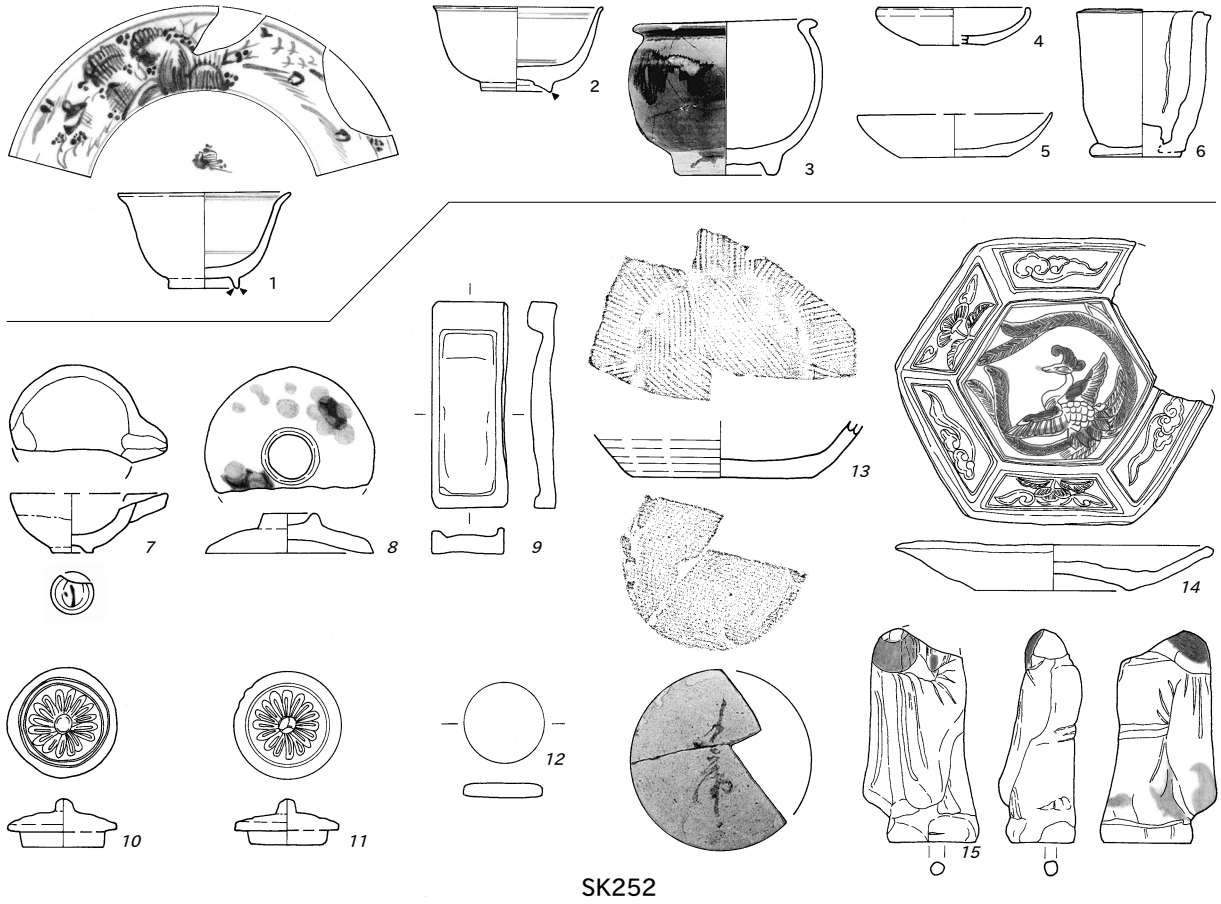
SK200

III-48 図 SK194・SE199・SK200 磁器・陶器・土器

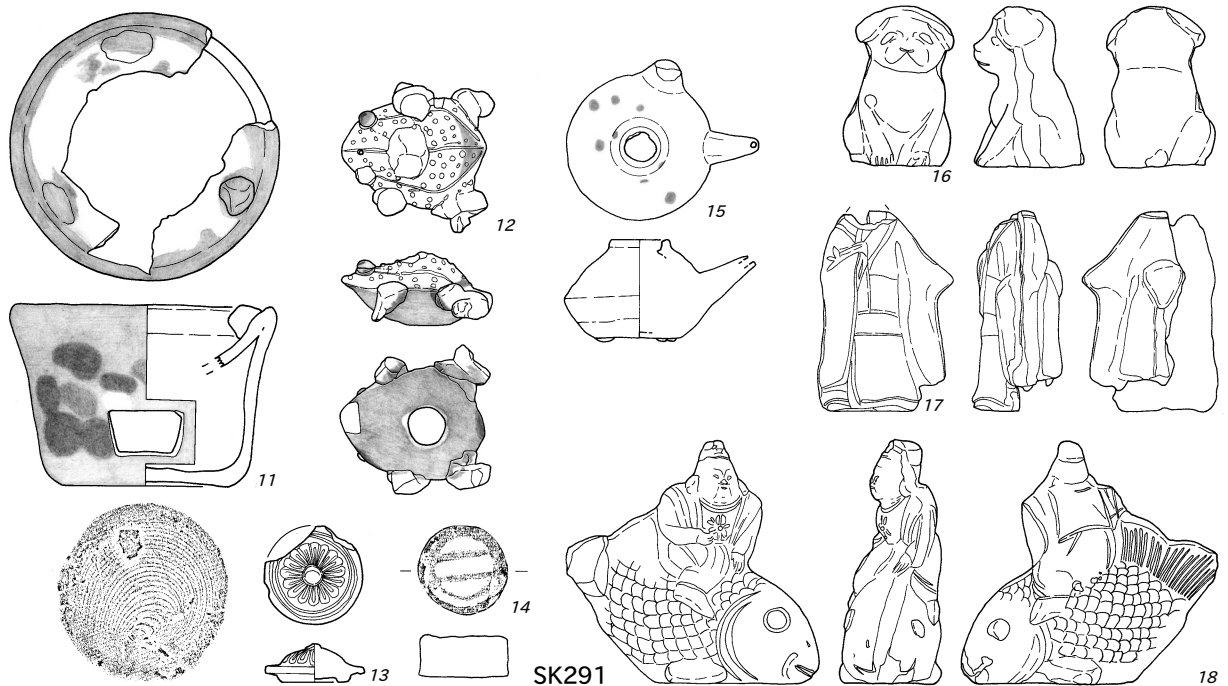
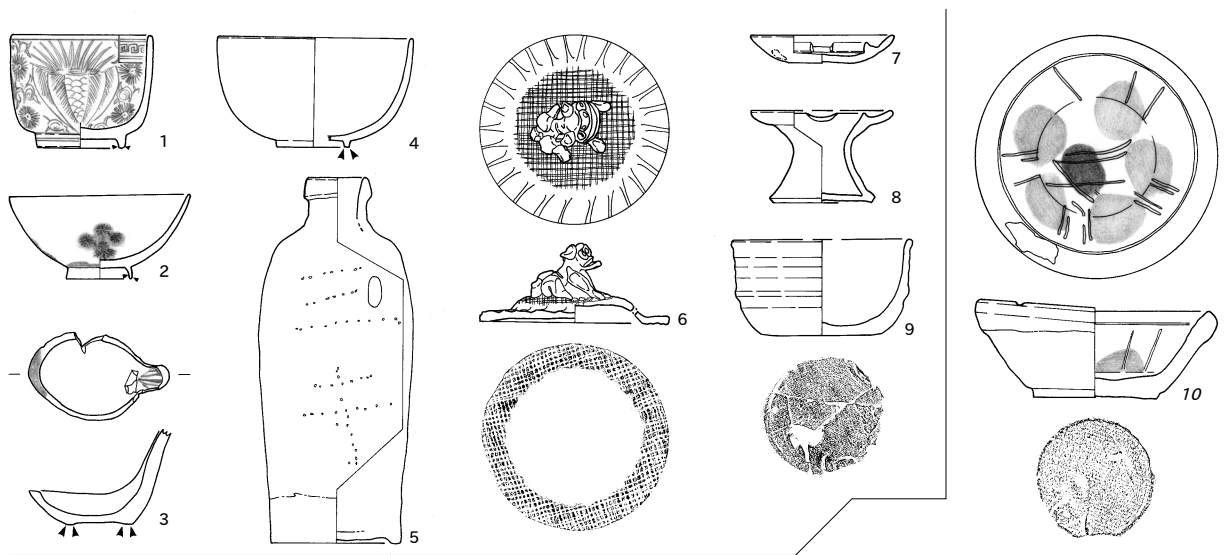
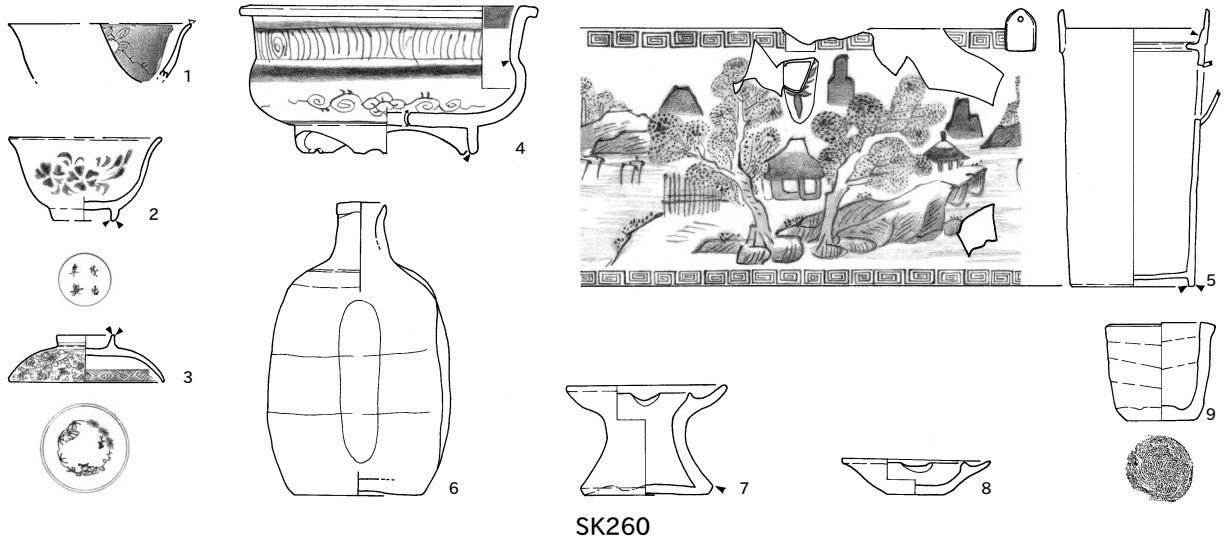


Ⅲ-49 图 SK245 磁器·陶器·土器

第1節 磁器·陶器·土器

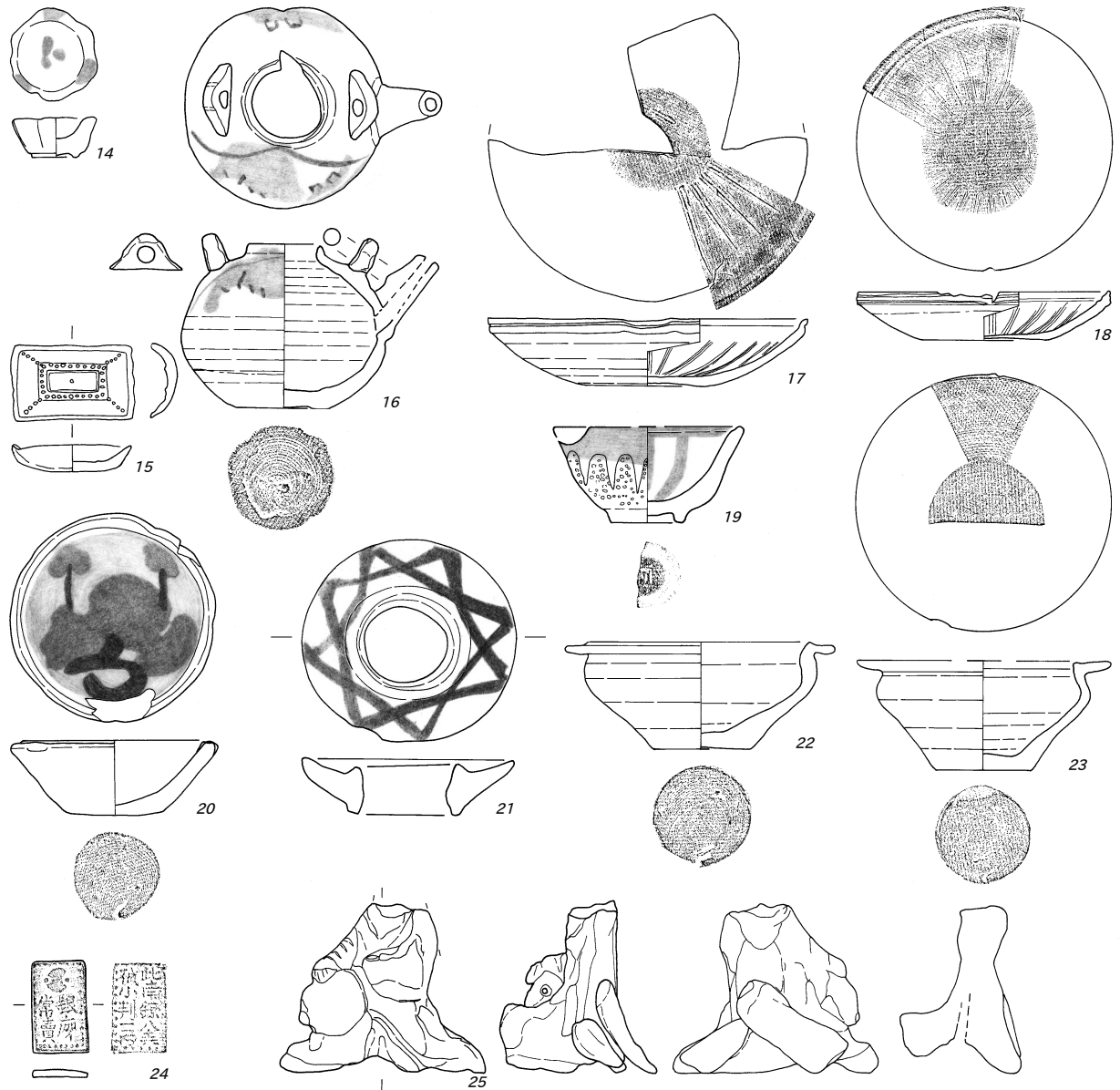
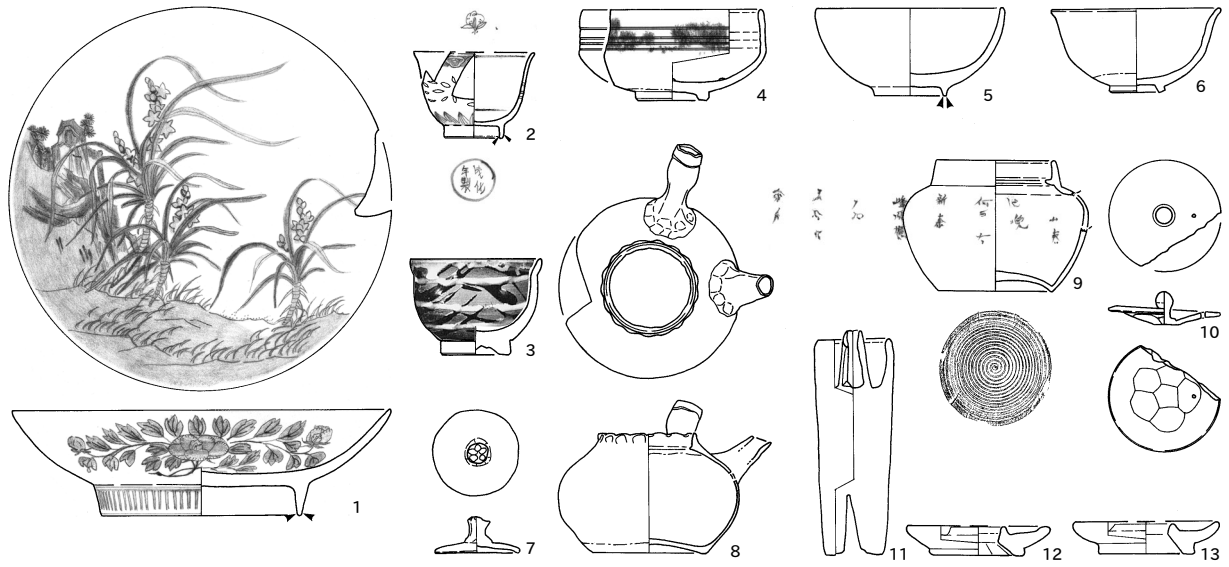


III-50 圖 SK252 · SK254 · SK258 · SK259 磁器 · 陶器 · 土器

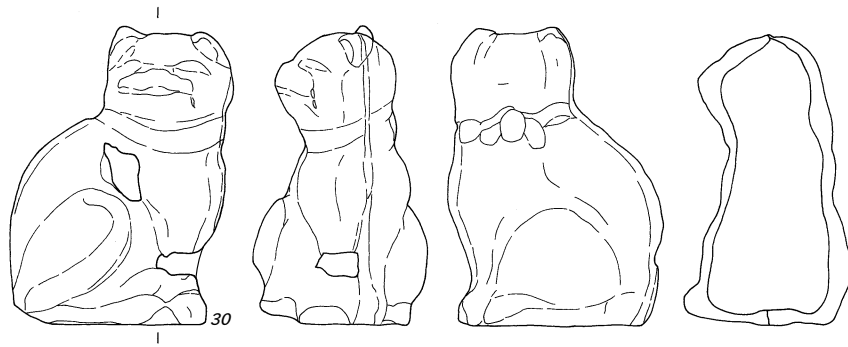
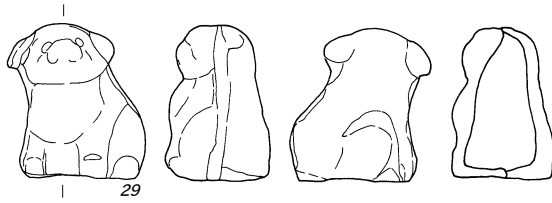
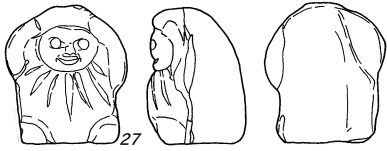
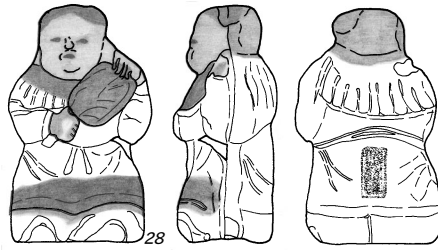
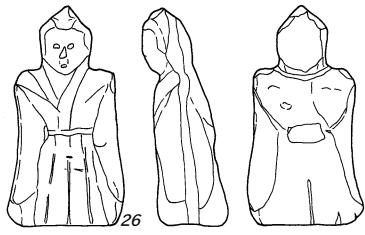


III-51 图 SK260·SK291 磁器·陶器·土器

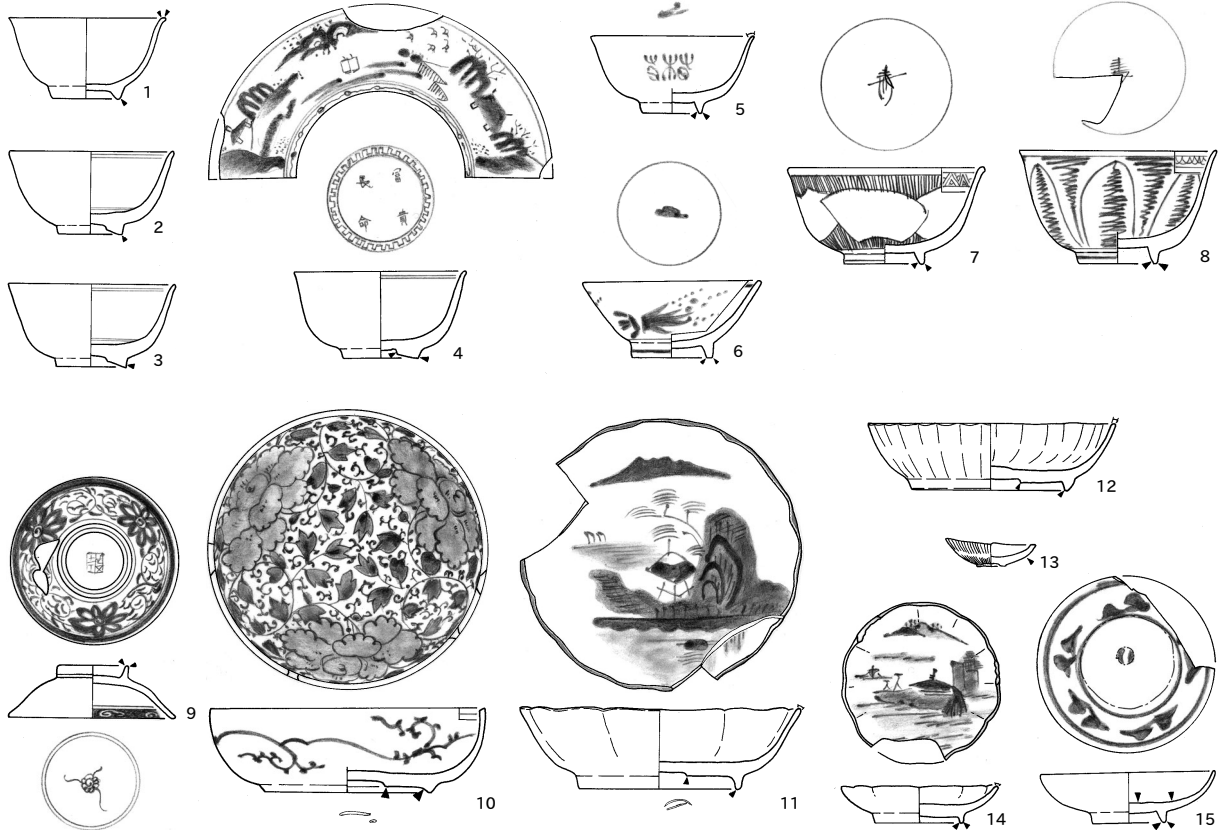
第1節 磁器・陶器・土器



III-52 図 SK292 (1) 磁器・陶器・土器



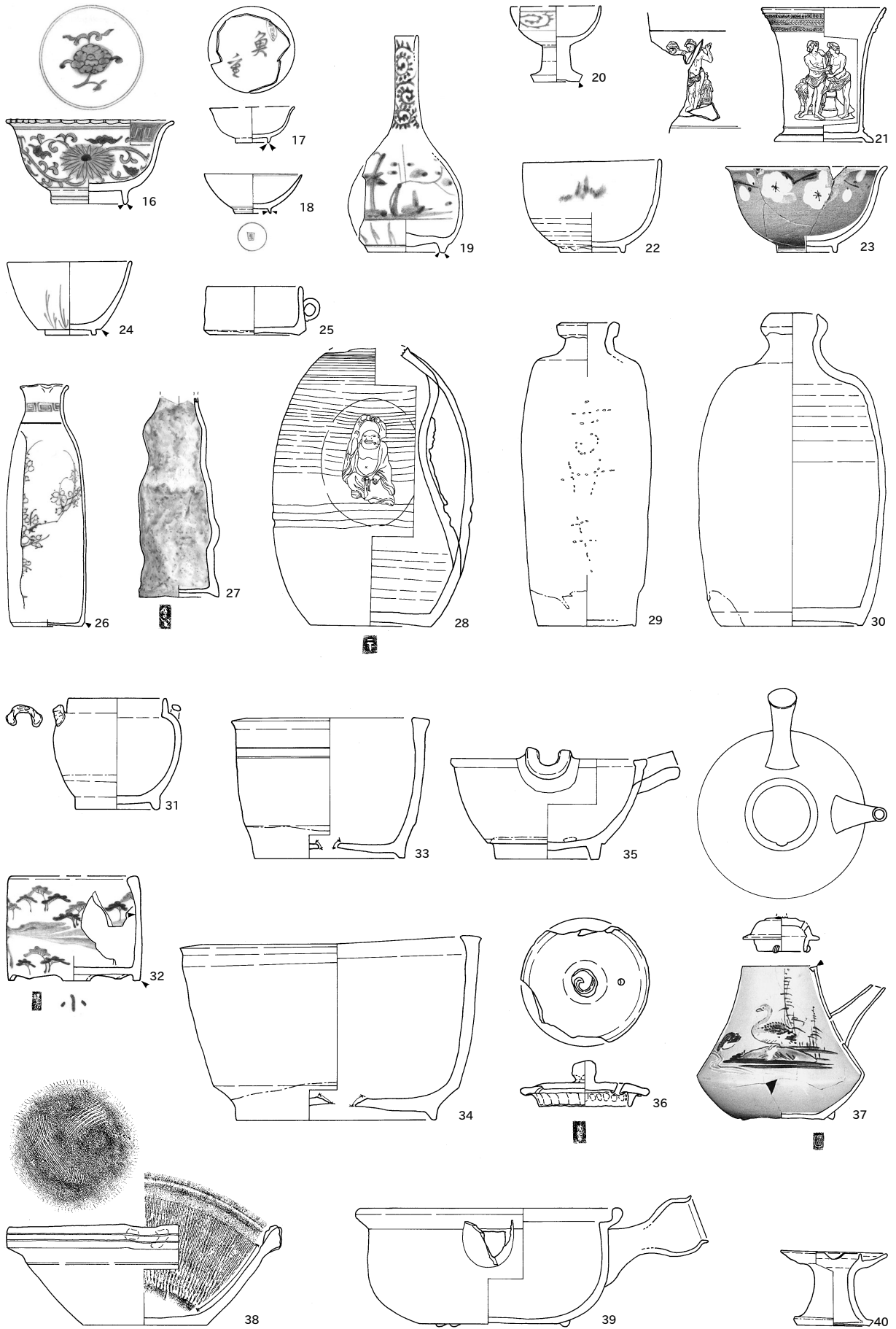
SK292(2)



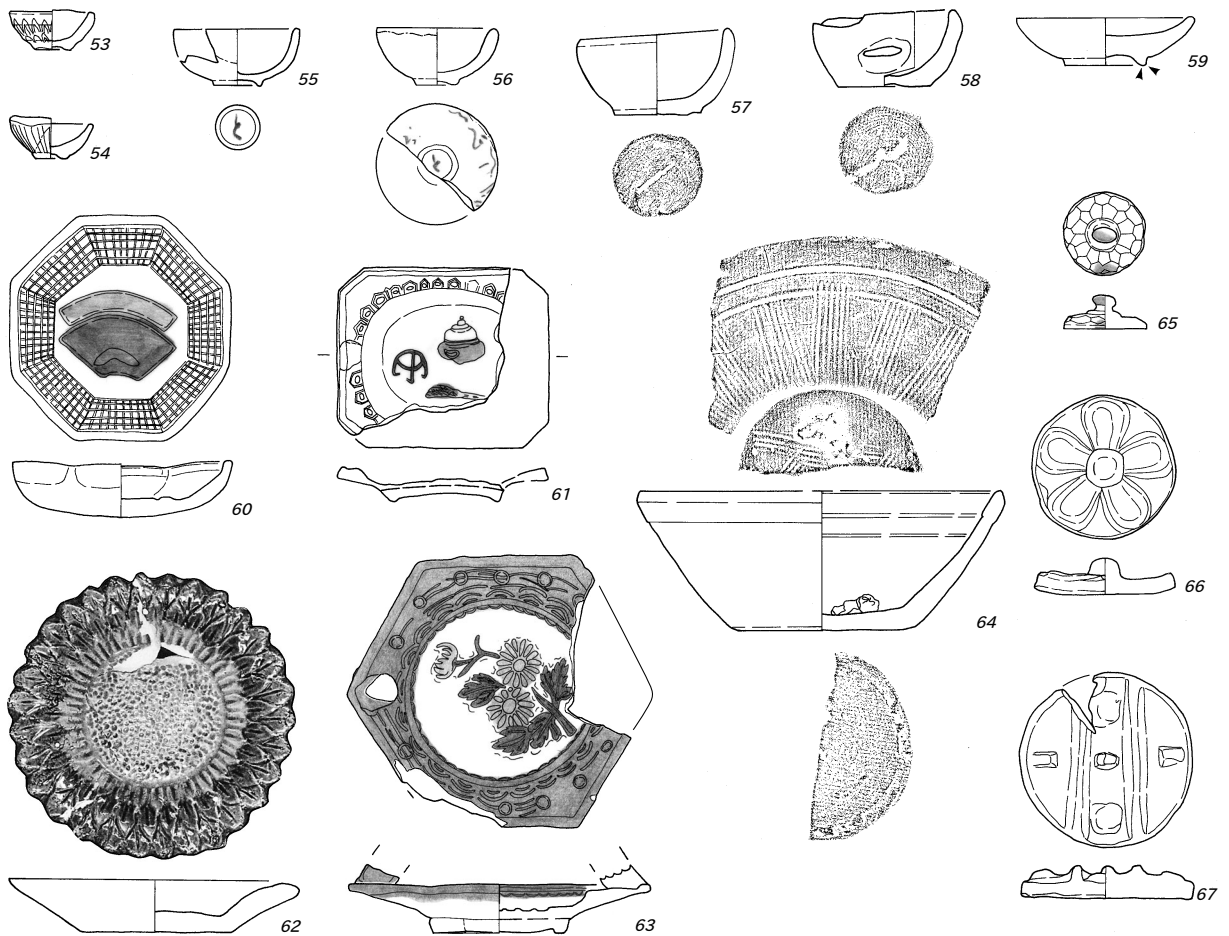
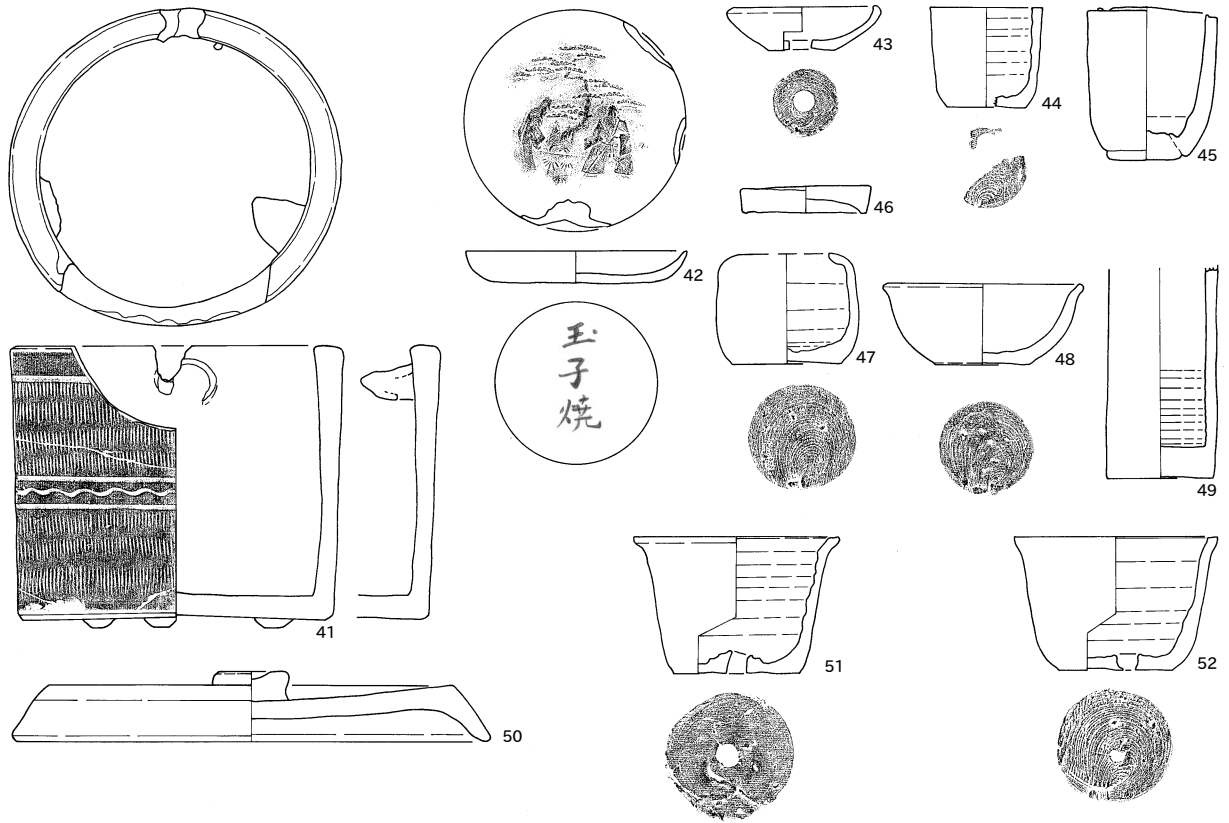
SK293(1)

III-53 圖 SK292 (2) · SK293 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

第1節 磁器·陶器·土器



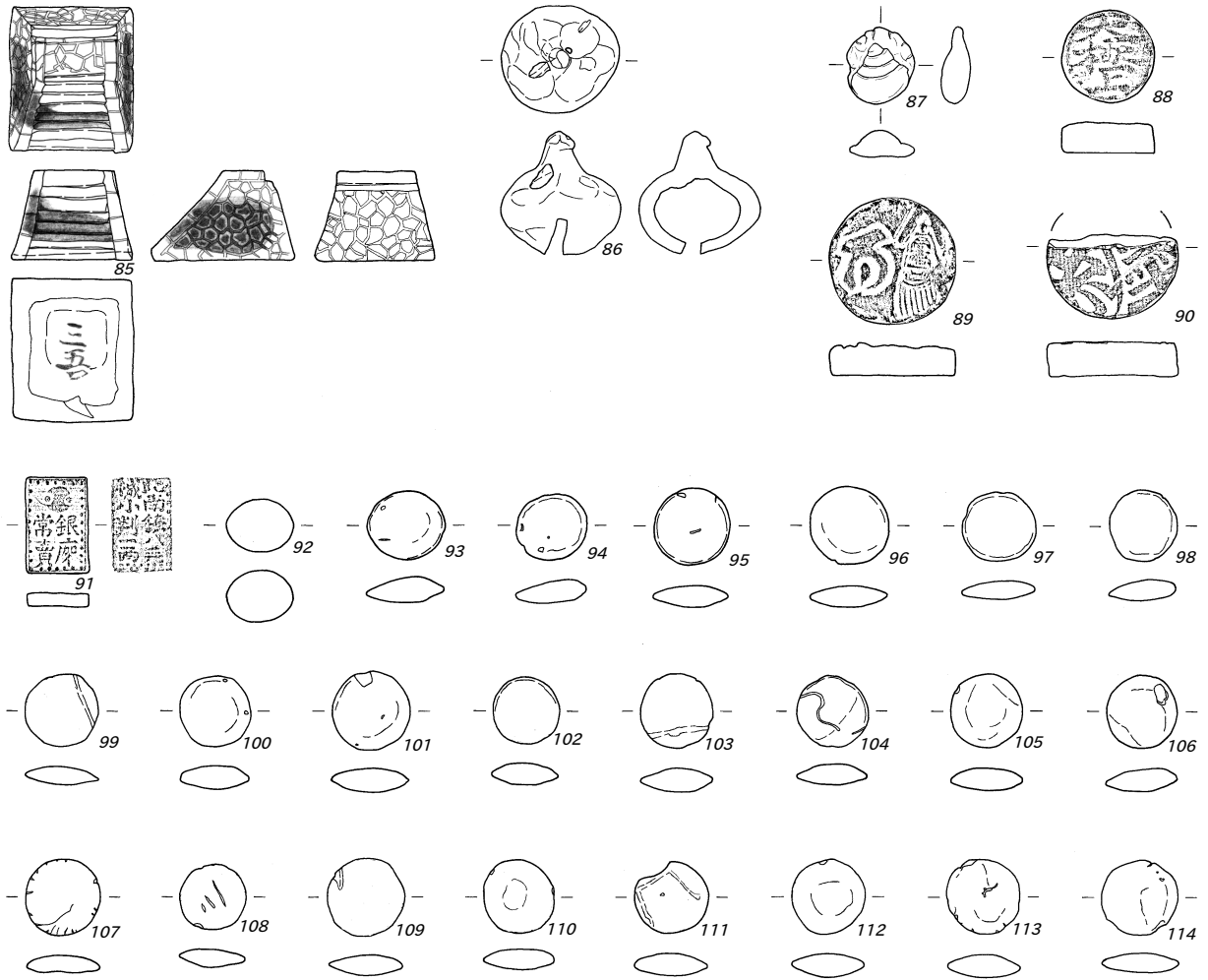
III-54 圖 SK293 (2) 磁器·陶器·土器



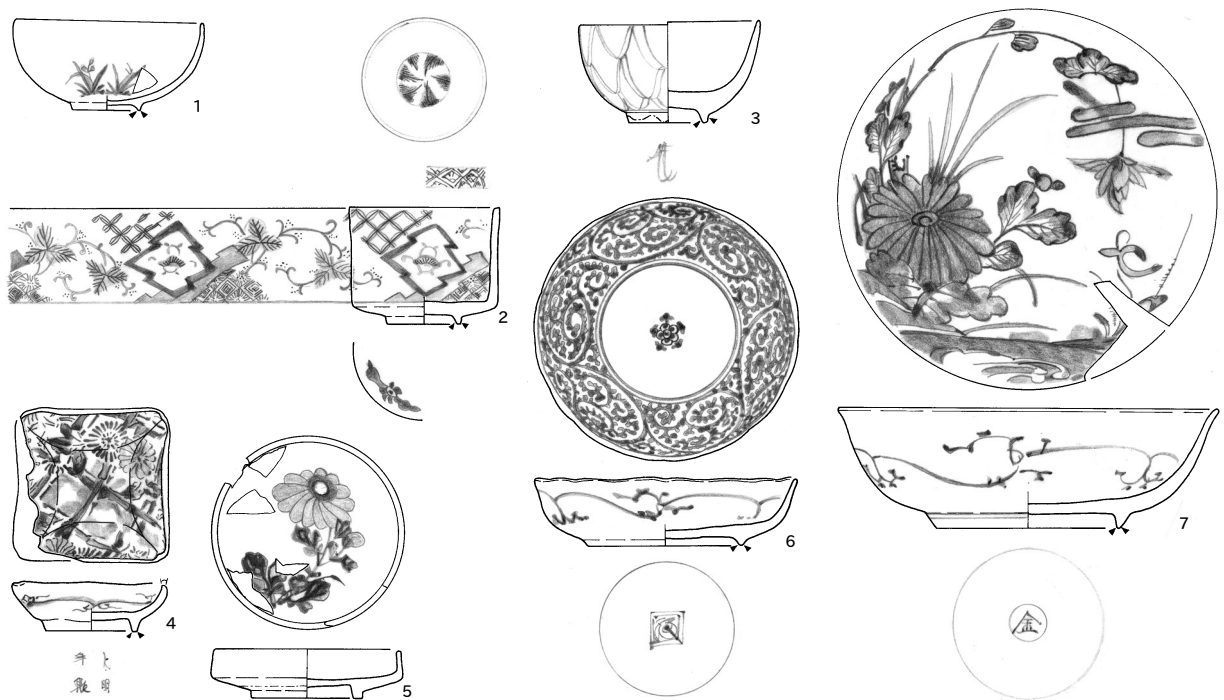
III-55 圖 SK293 (3) 磁器・陶器・土器



III-56 圖 SK293 (4) 磁器·陶器·土器



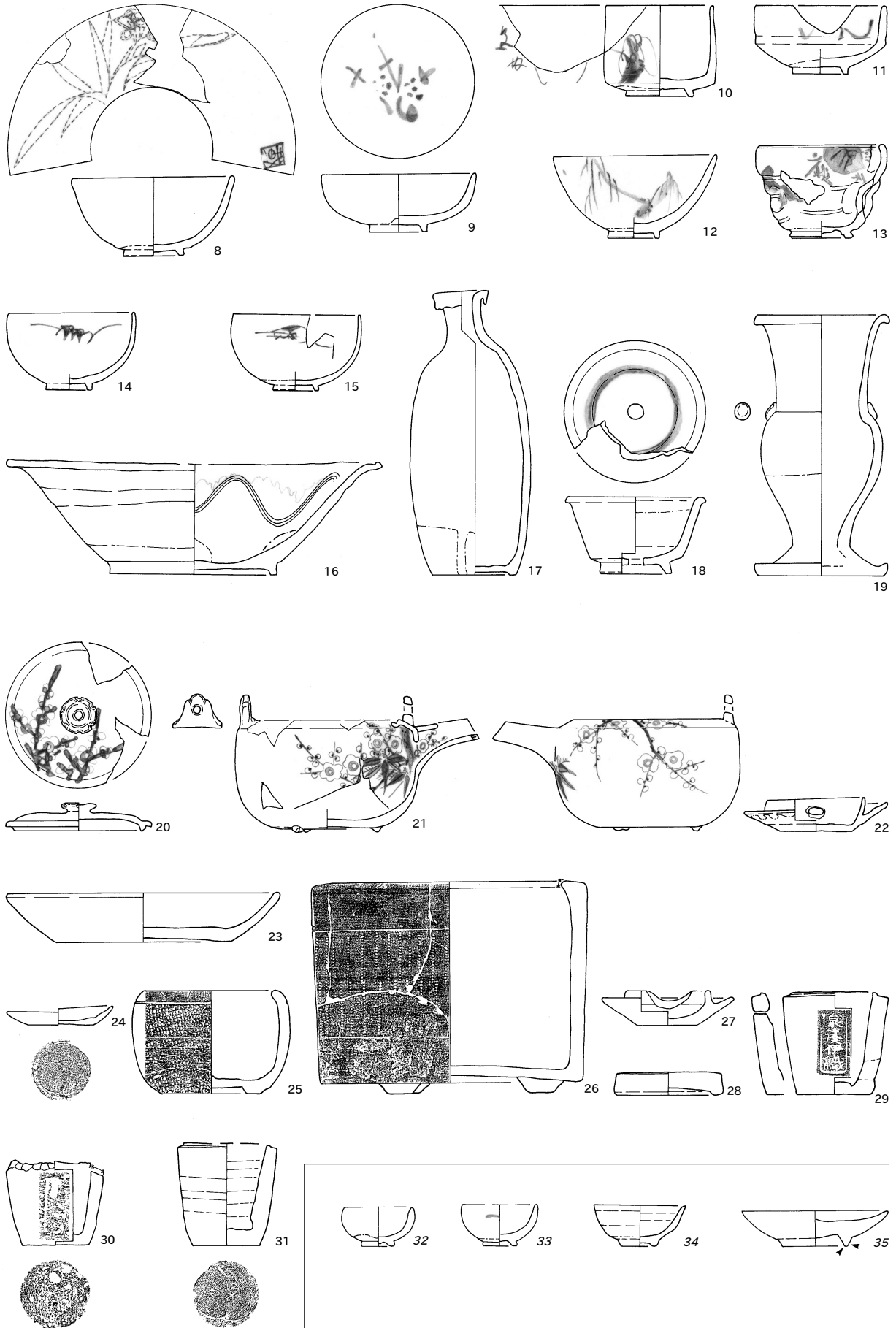
SK293(5)



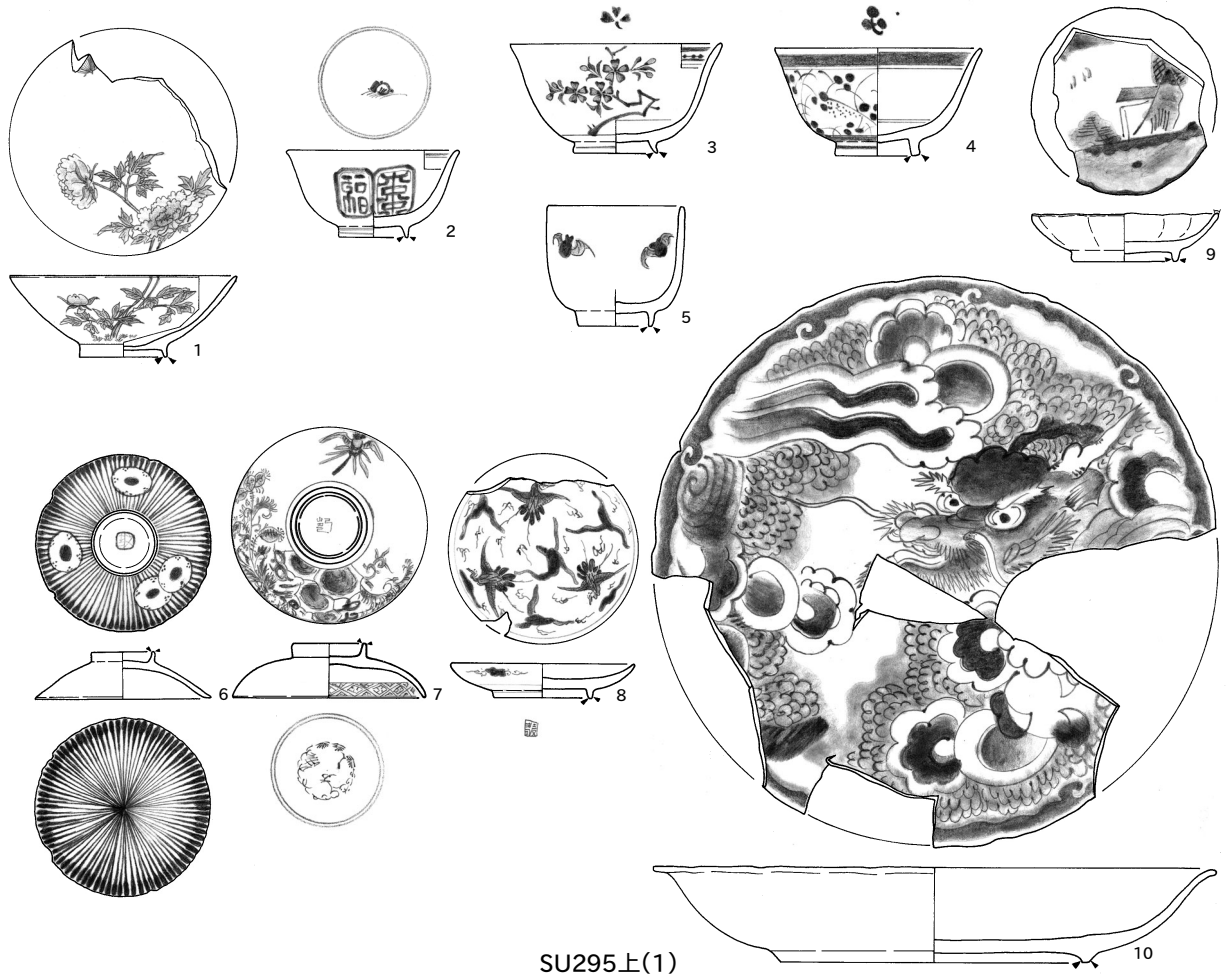
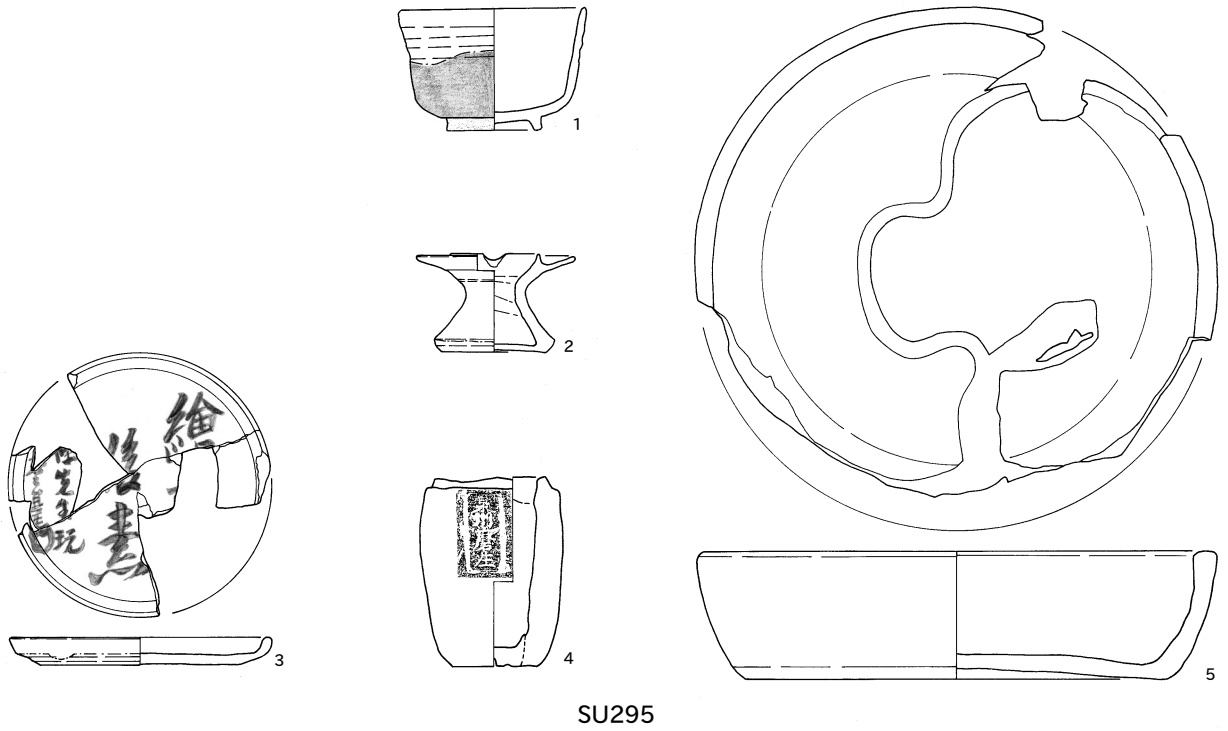
SU294(1)

III-57 图 SK293 (5) · SU294 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

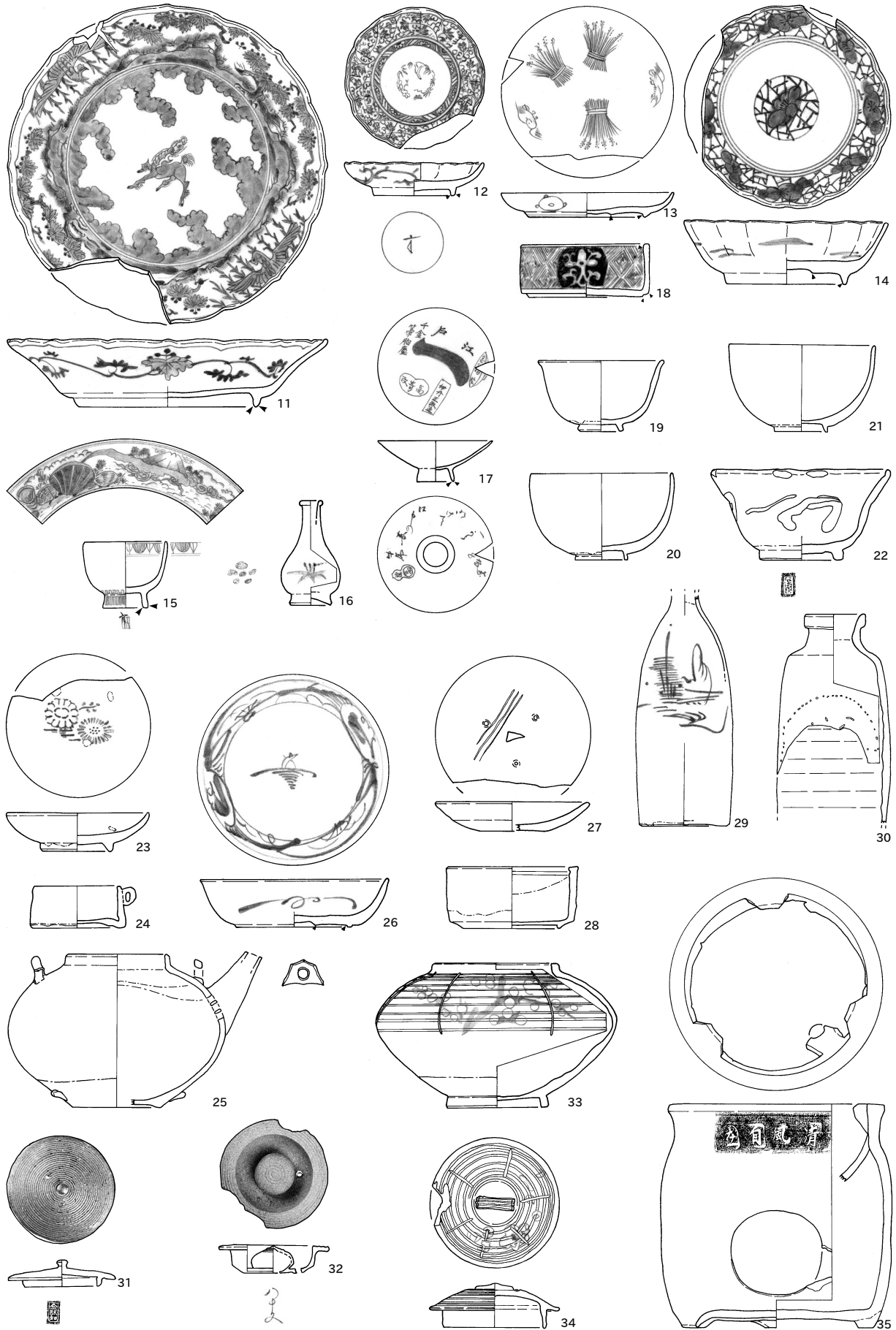
第1節 磁器・陶器・土器



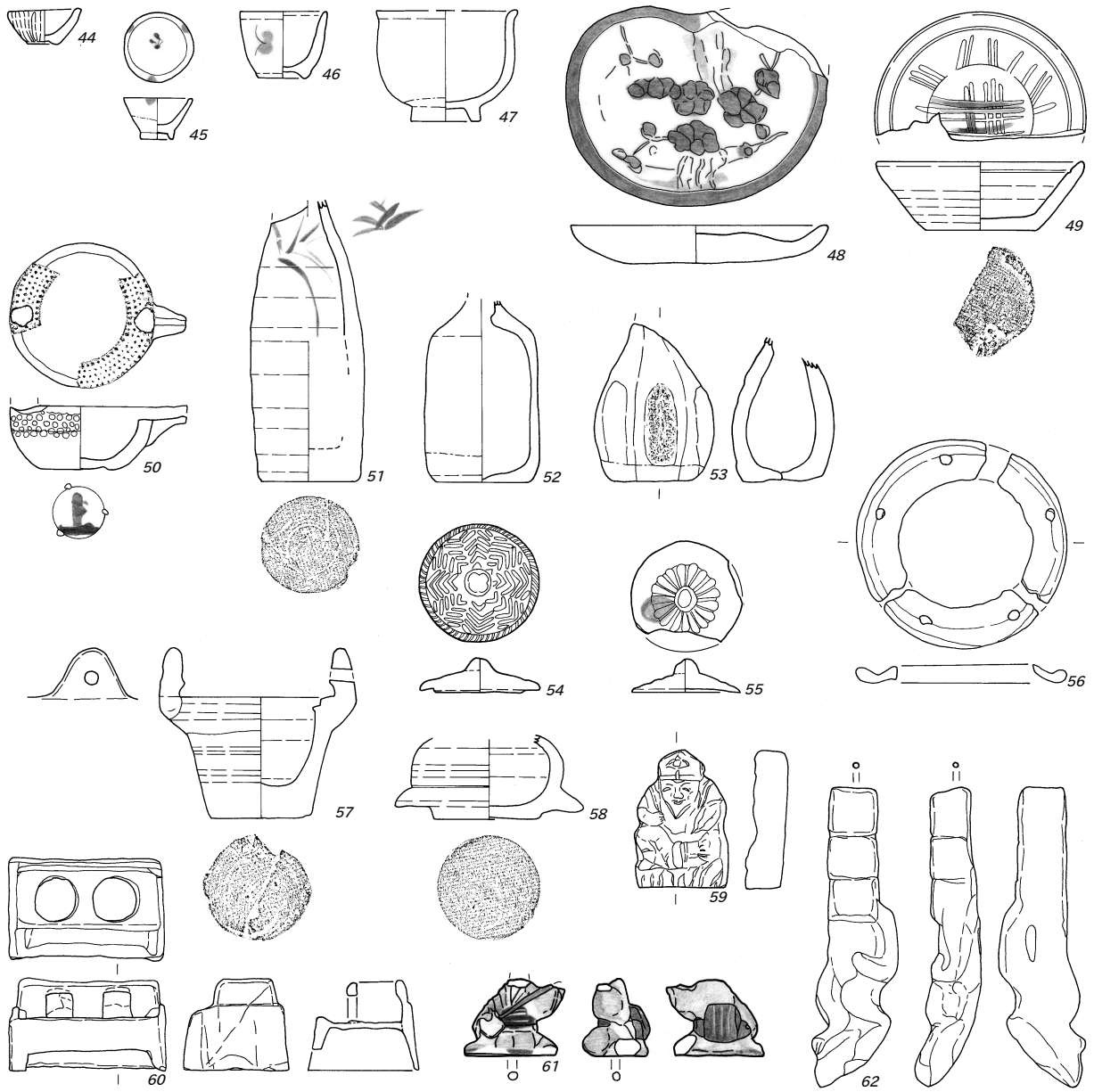
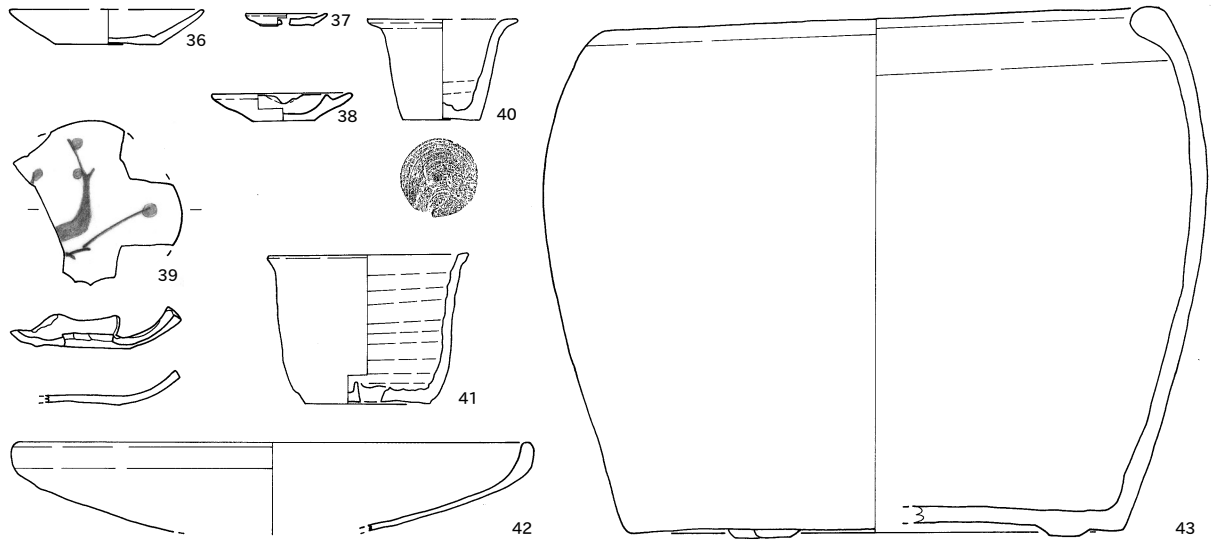
III-58 圖 SU294 (2) 磁器・陶器・土器



III-59 圖 SU295 · SU295 上 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

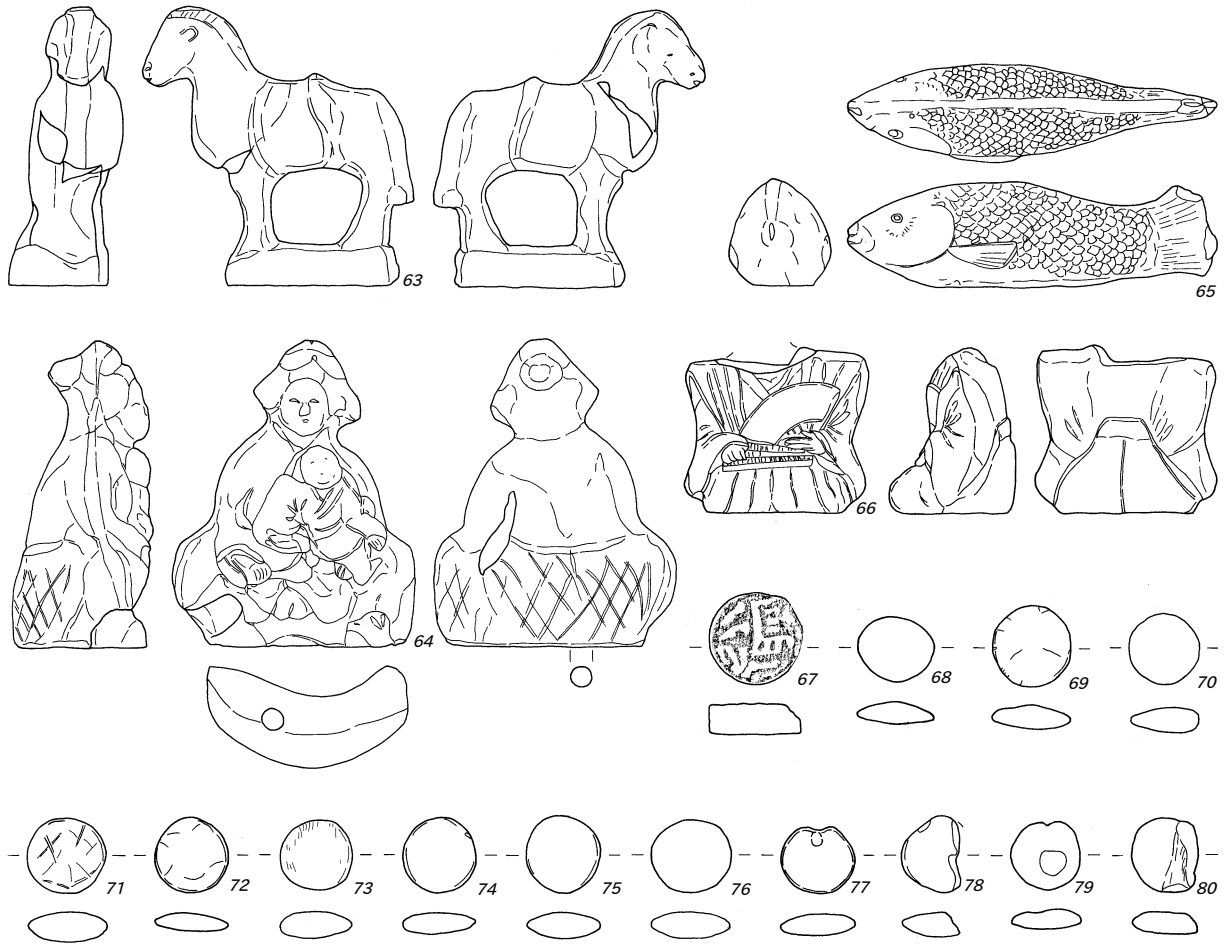


III-60 圖 SU295 上 (2) 磁器・陶器・土器

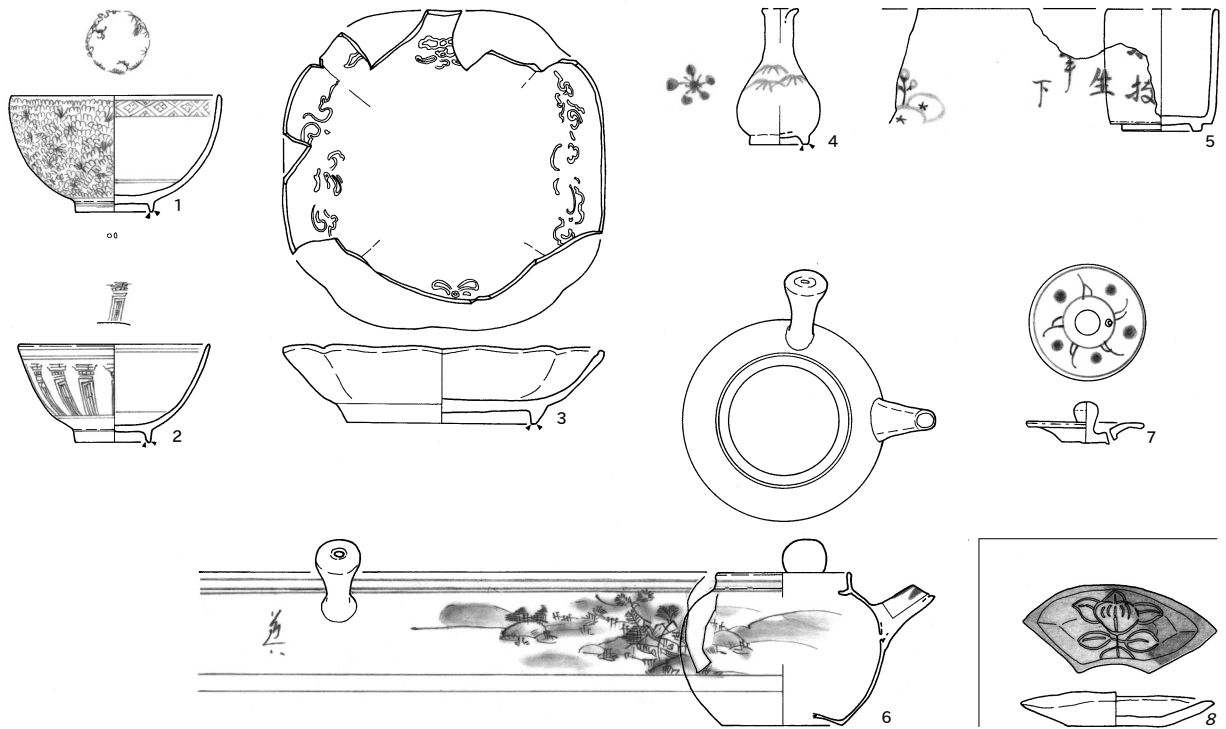


III-61 圖 SU295 上 (3) 磁器・陶器・土器

第1節 磁器·陶器·土器



SU295上(4)



SK296

Ⅲ-62 図 SK295 上 (4) · SK296 磁器·陶器·土器

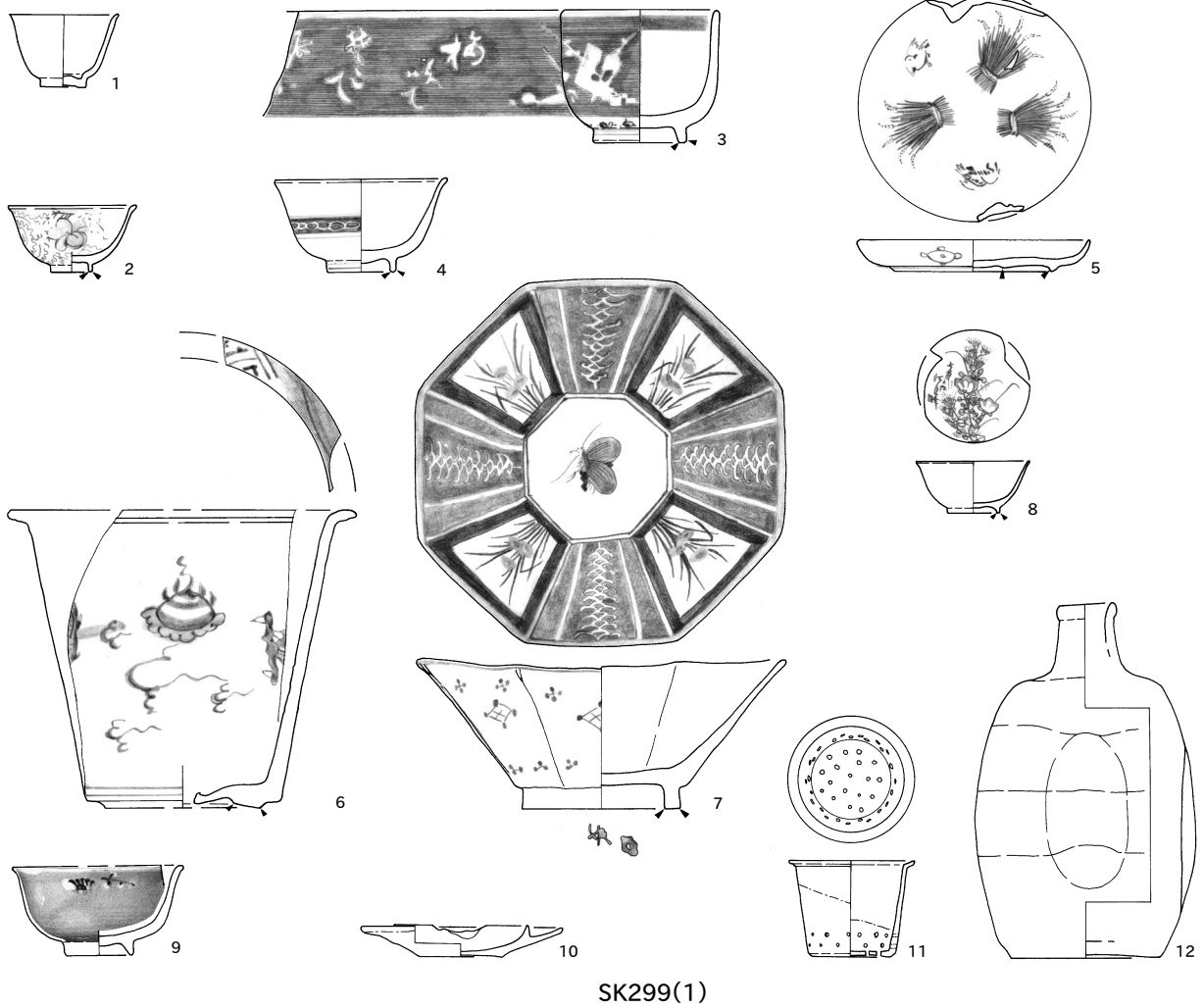
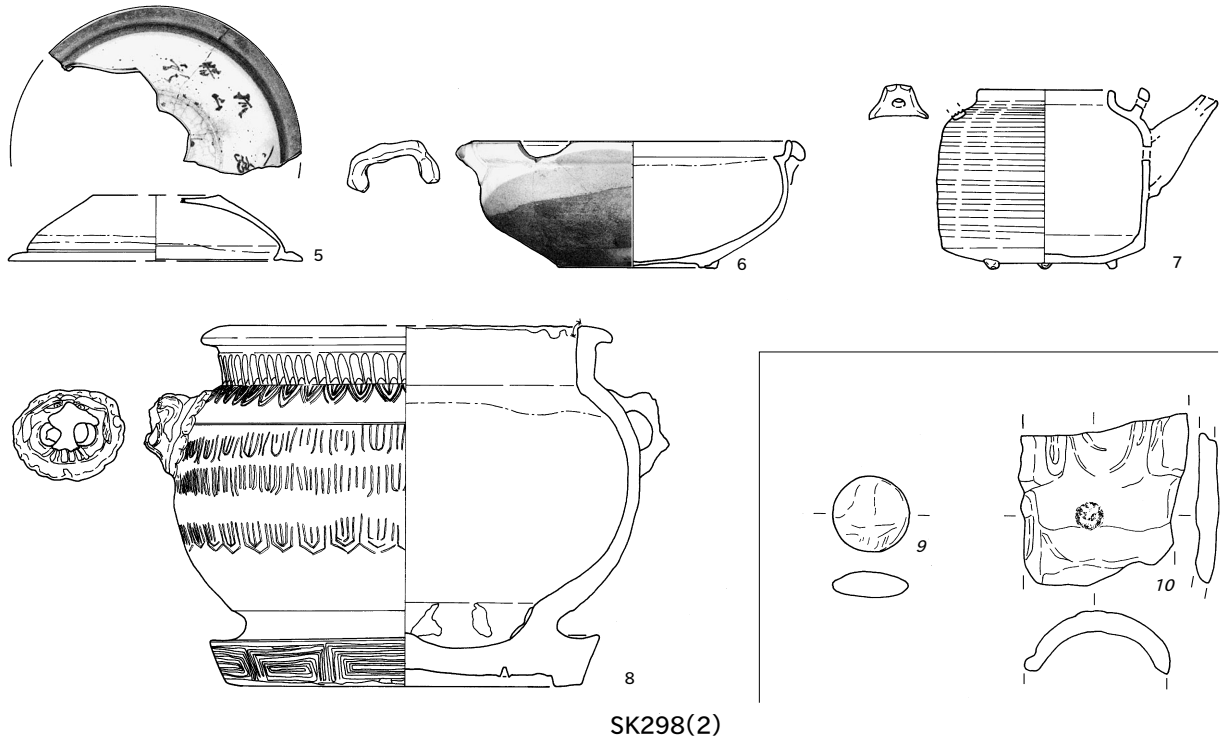


SK297

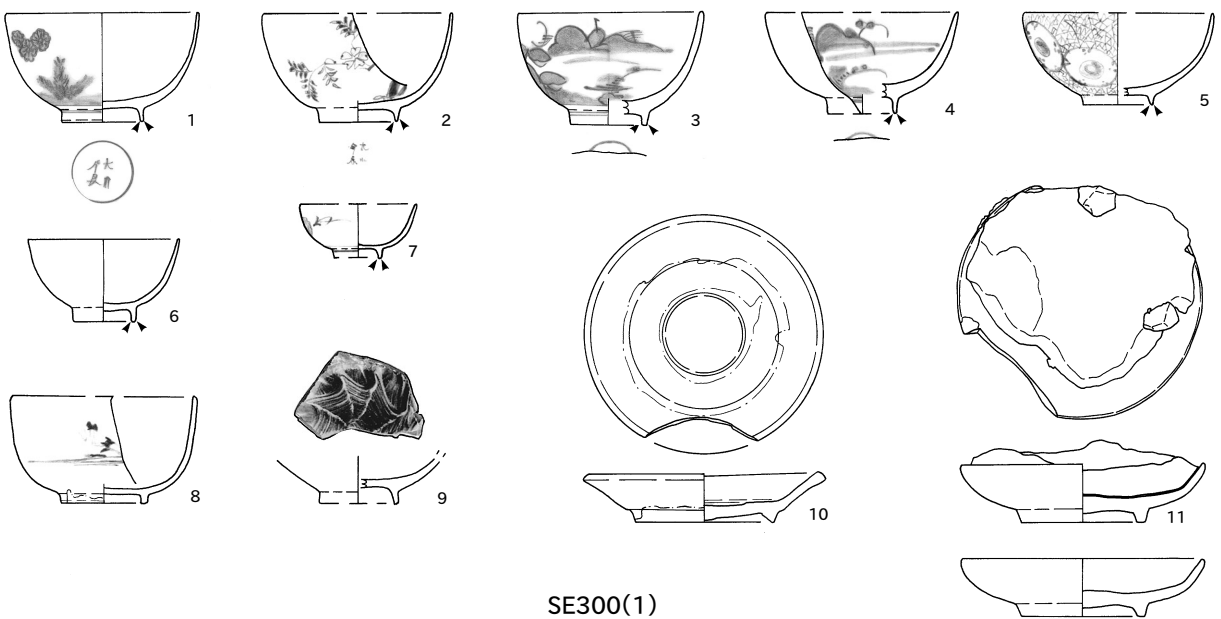
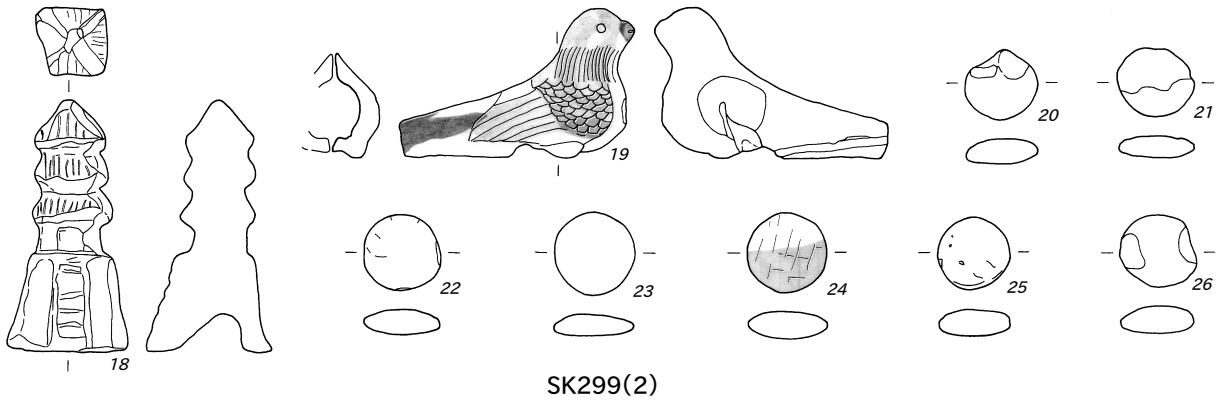
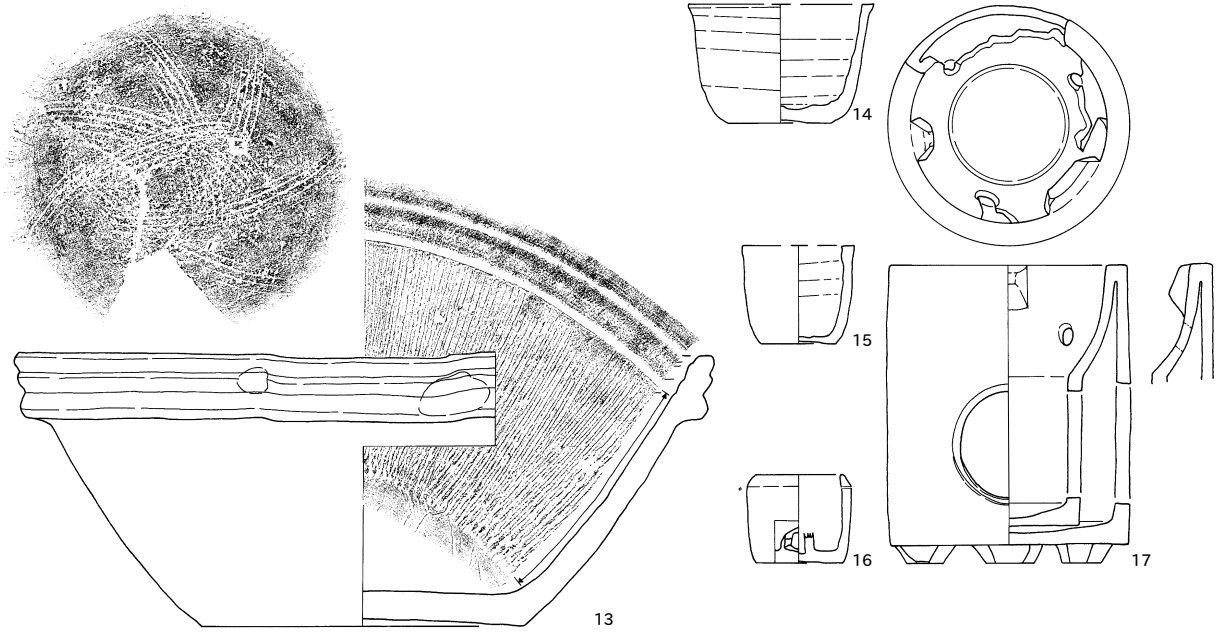
SK298(1)

III-63 圖 SK297 · SK298 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

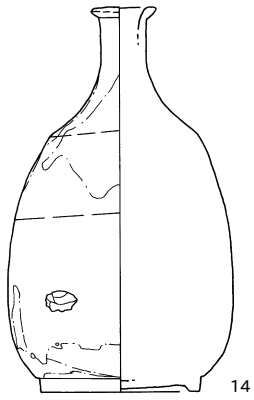
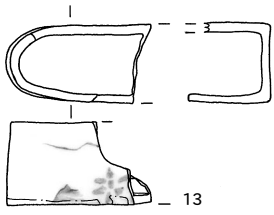
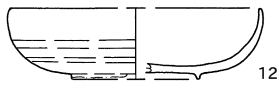
第1節 磁器・陶器・土器



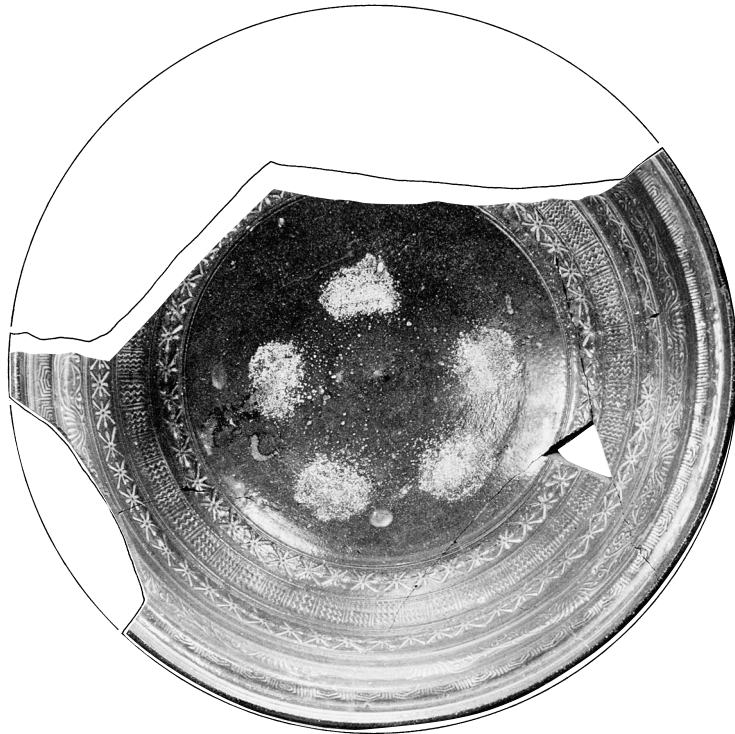
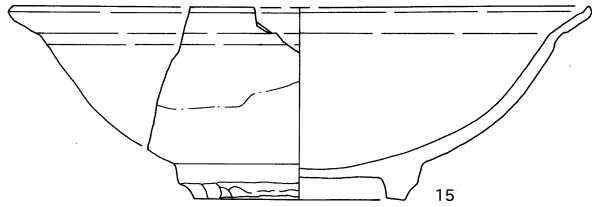
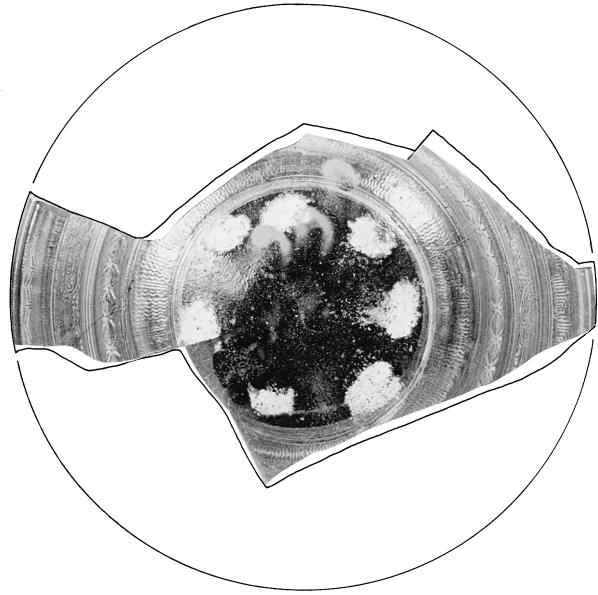
III-64 図 SK298 (2)・SK299 (1) 磁器・陶器・土器



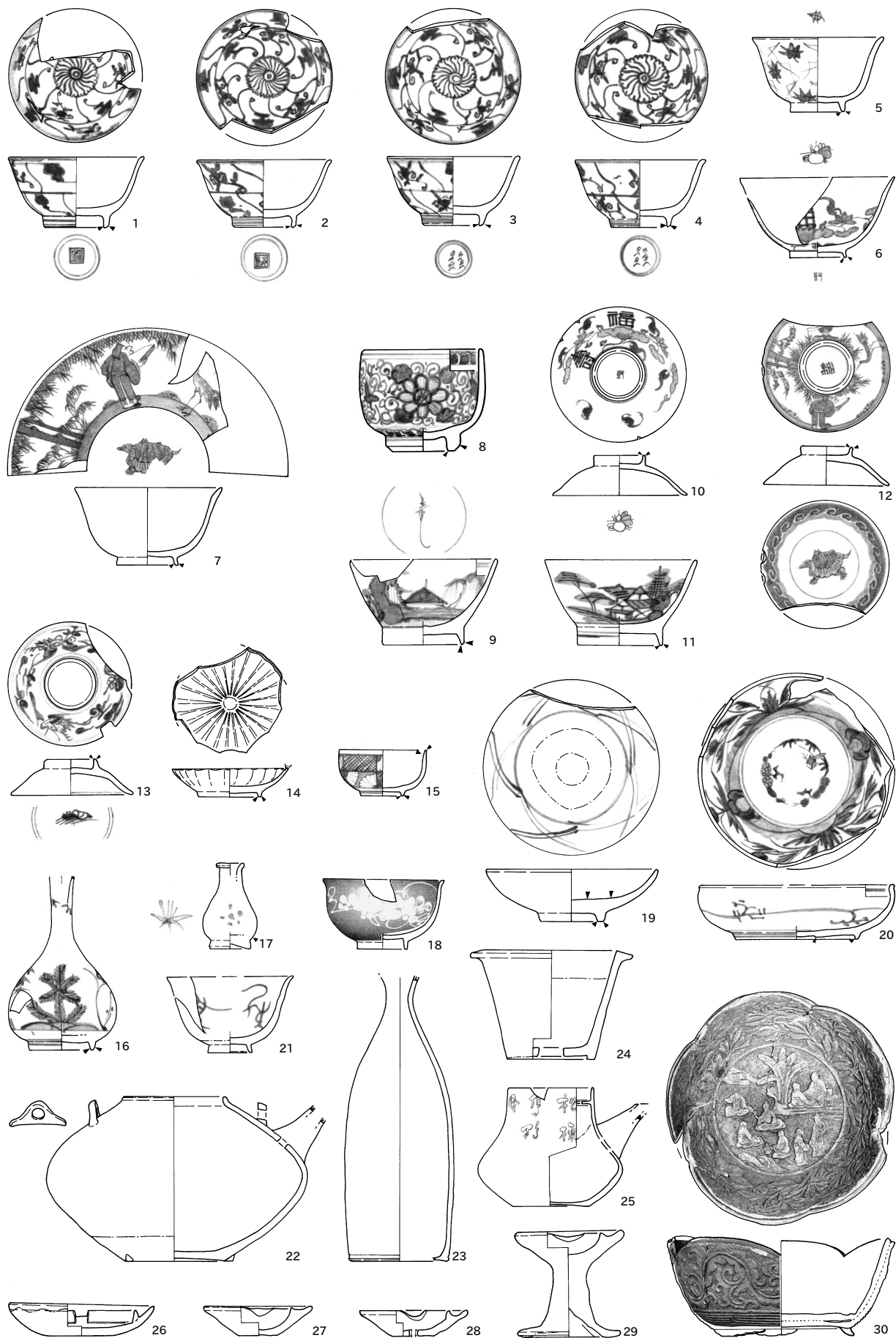
III-65 圖 SK299 (2) · SE300 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



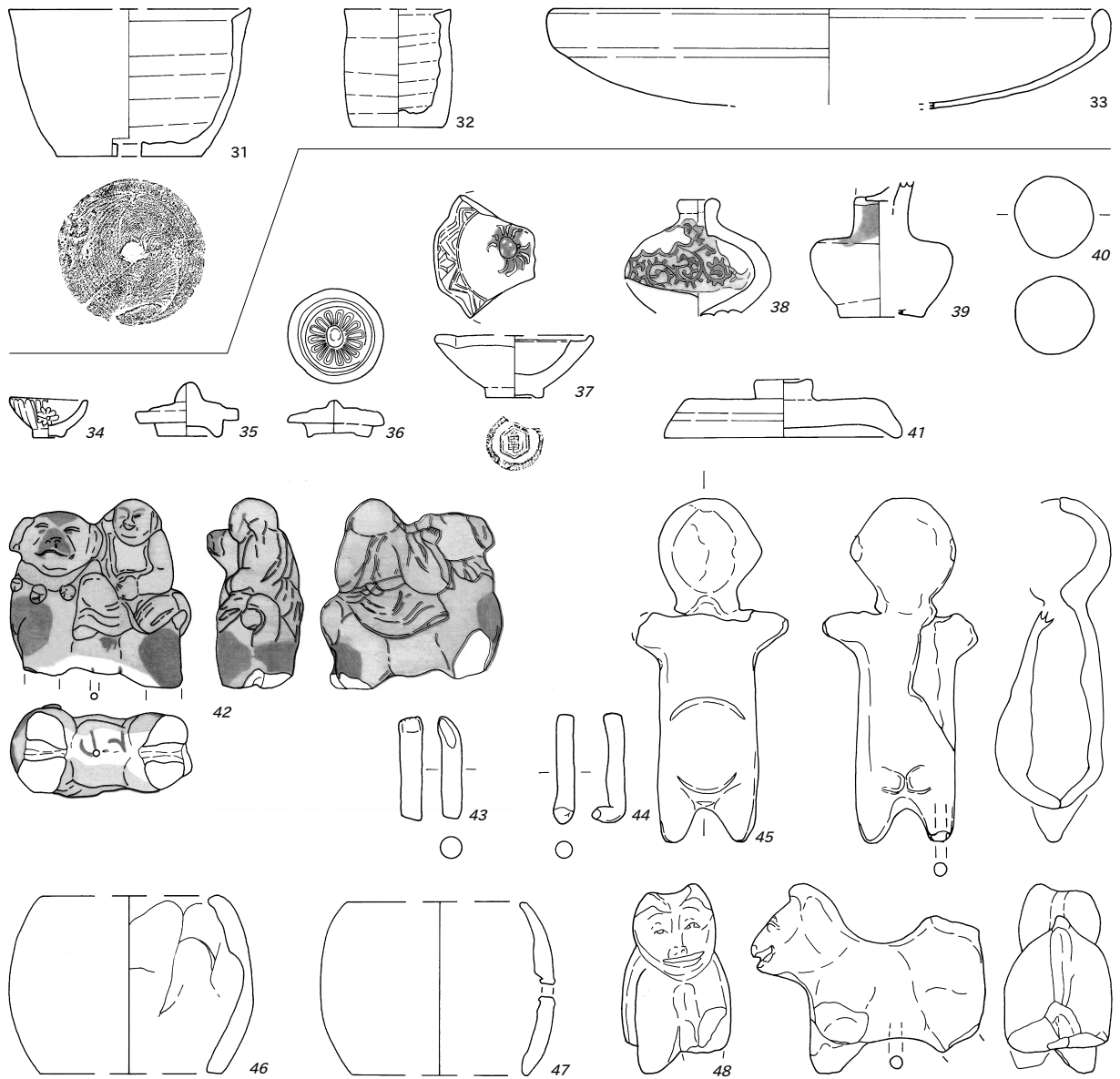
井



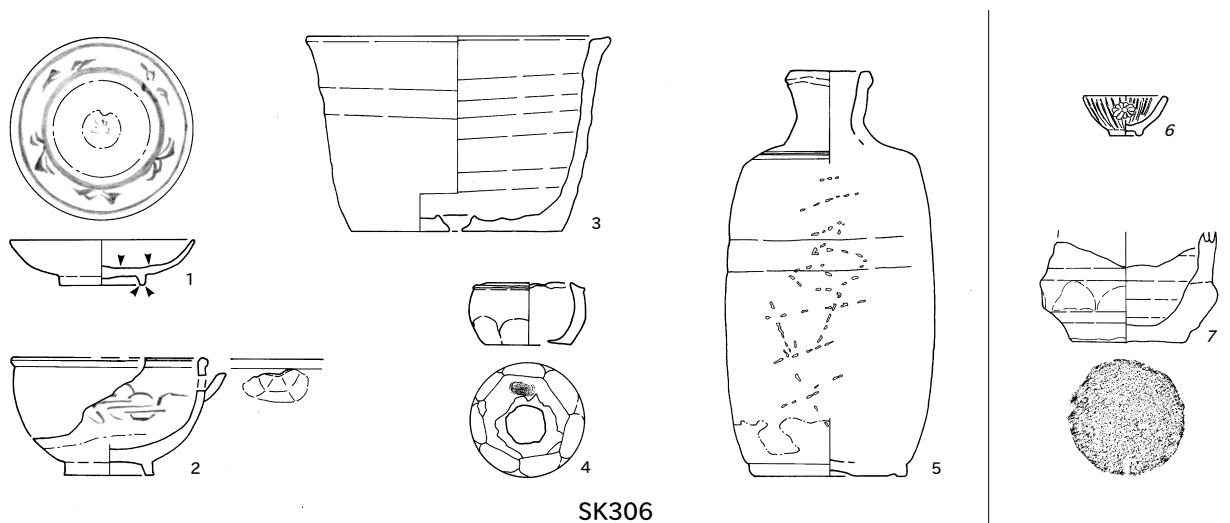
Ⅲ-66 図 SE300 (2) 磁器・陶器・土器



III-67 圖 SK301 (1) 磁器·陶器·土器

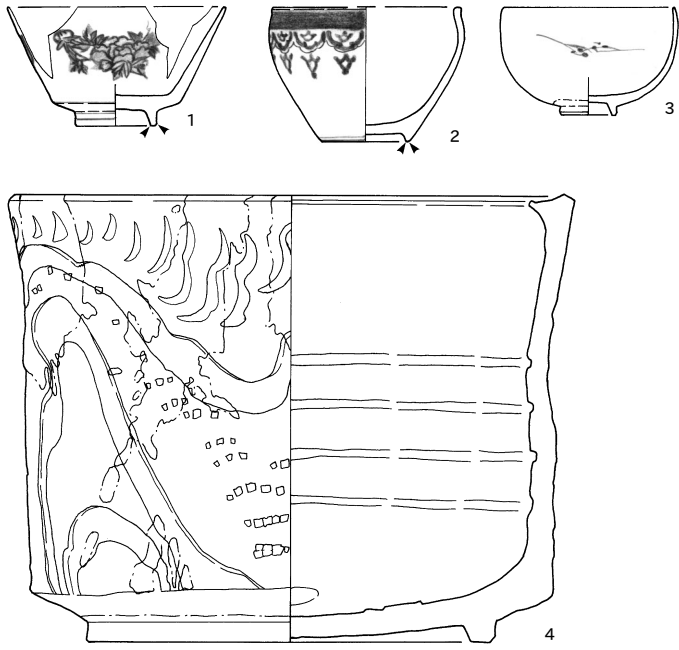


SK301(2)

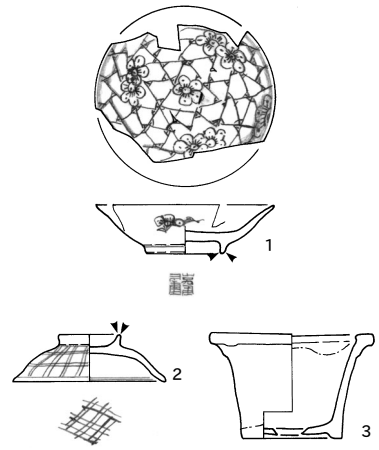


SK306

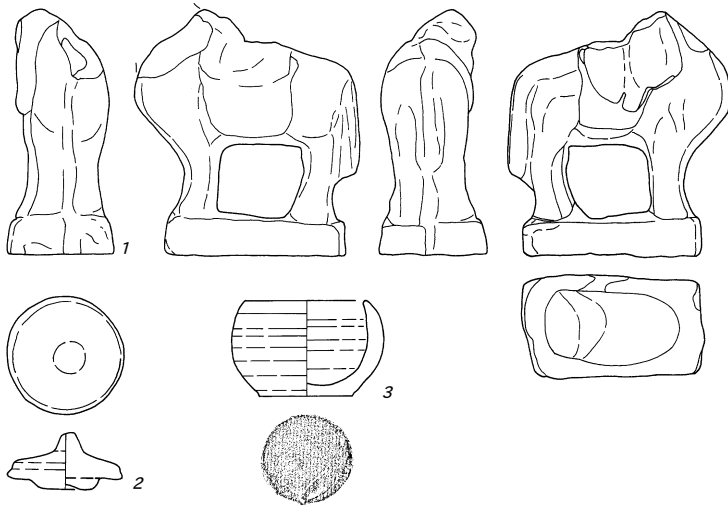
III-68 図 SK301 (2)・SK306 磁器・陶器・土器



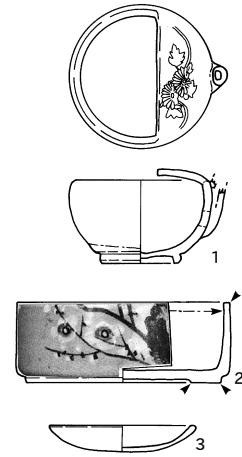
SK307



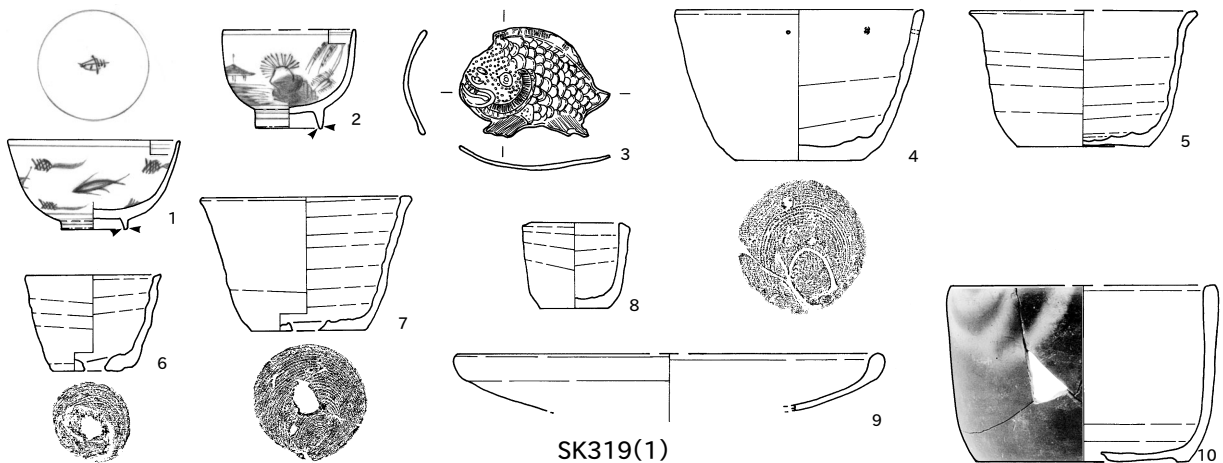
SK311



SK312



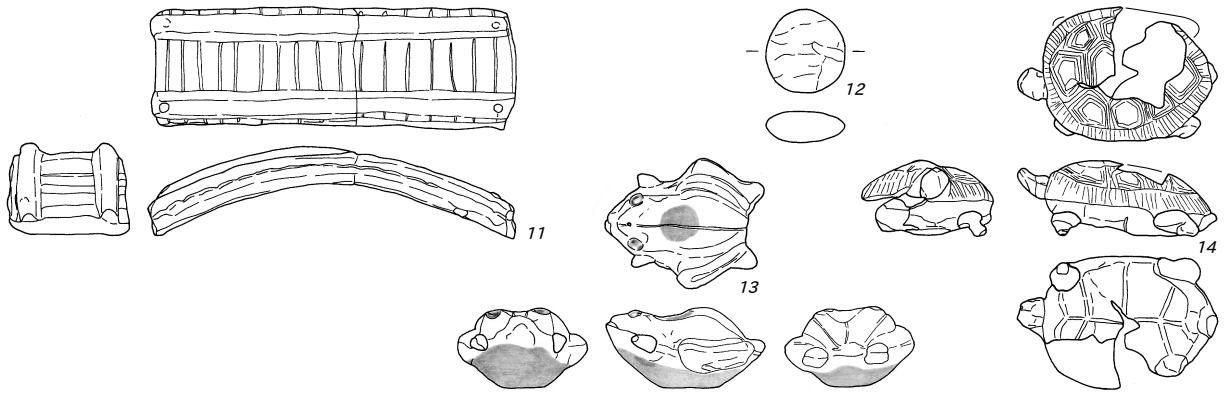
SK317



SK319(1)

III-69 圖 SK307 · SK311 · SK312 · SK317 · SK319 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

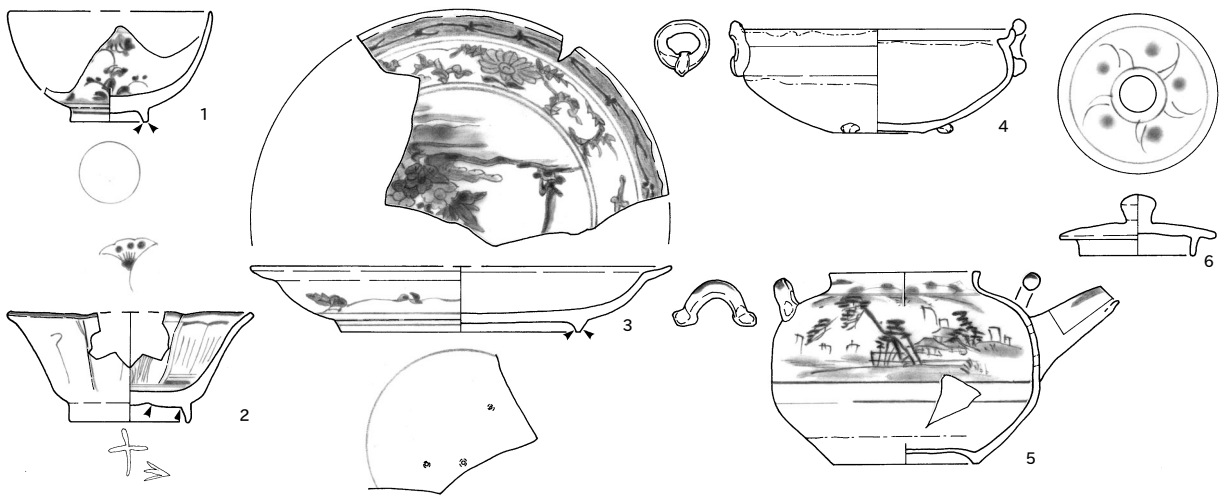
第1節 磁器・陶器・土器



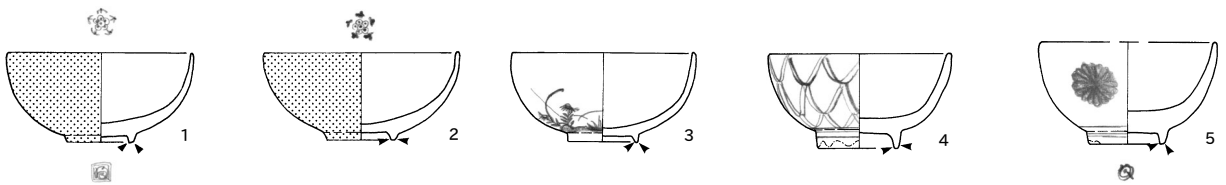
SK319(2)



SK325

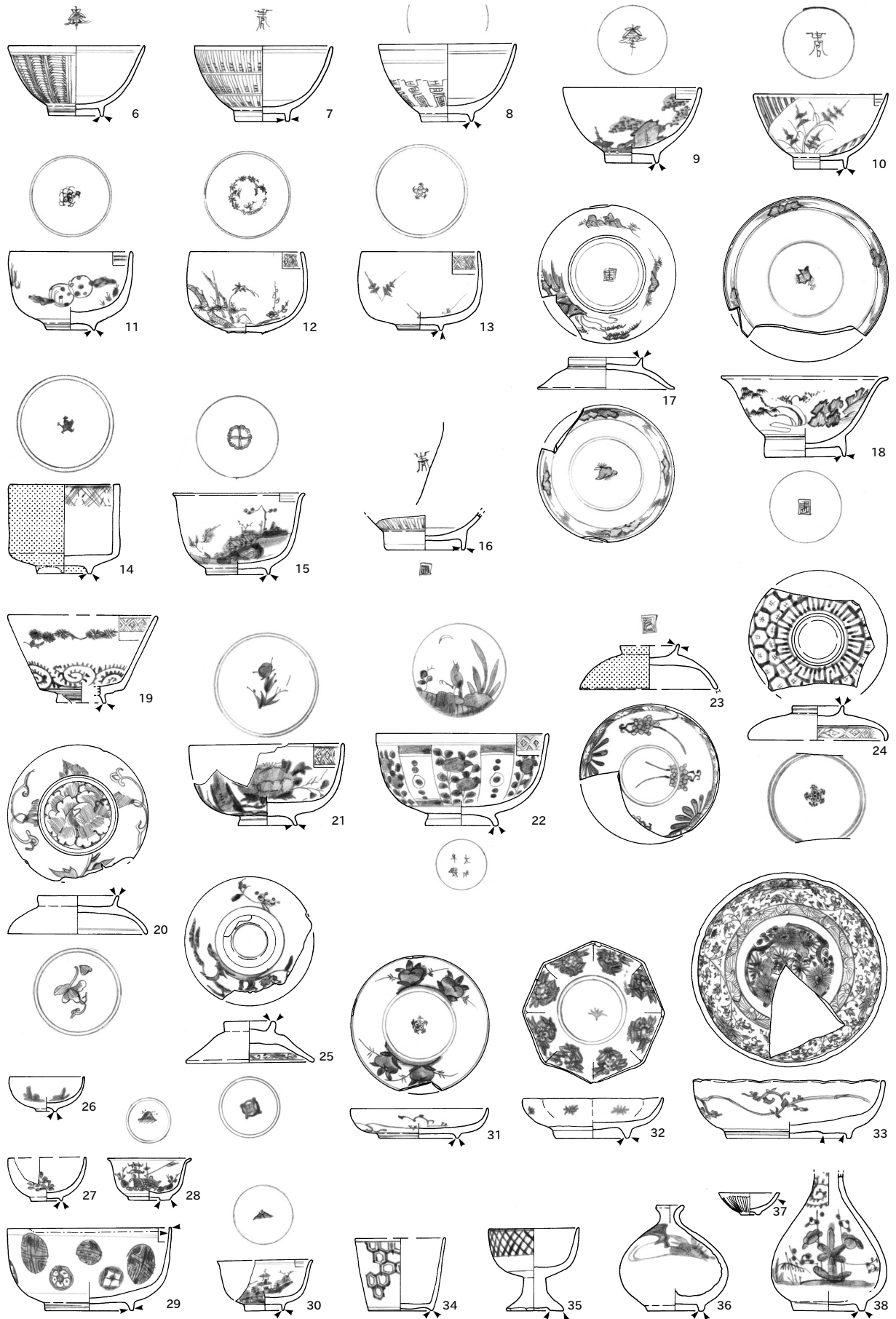


SU327



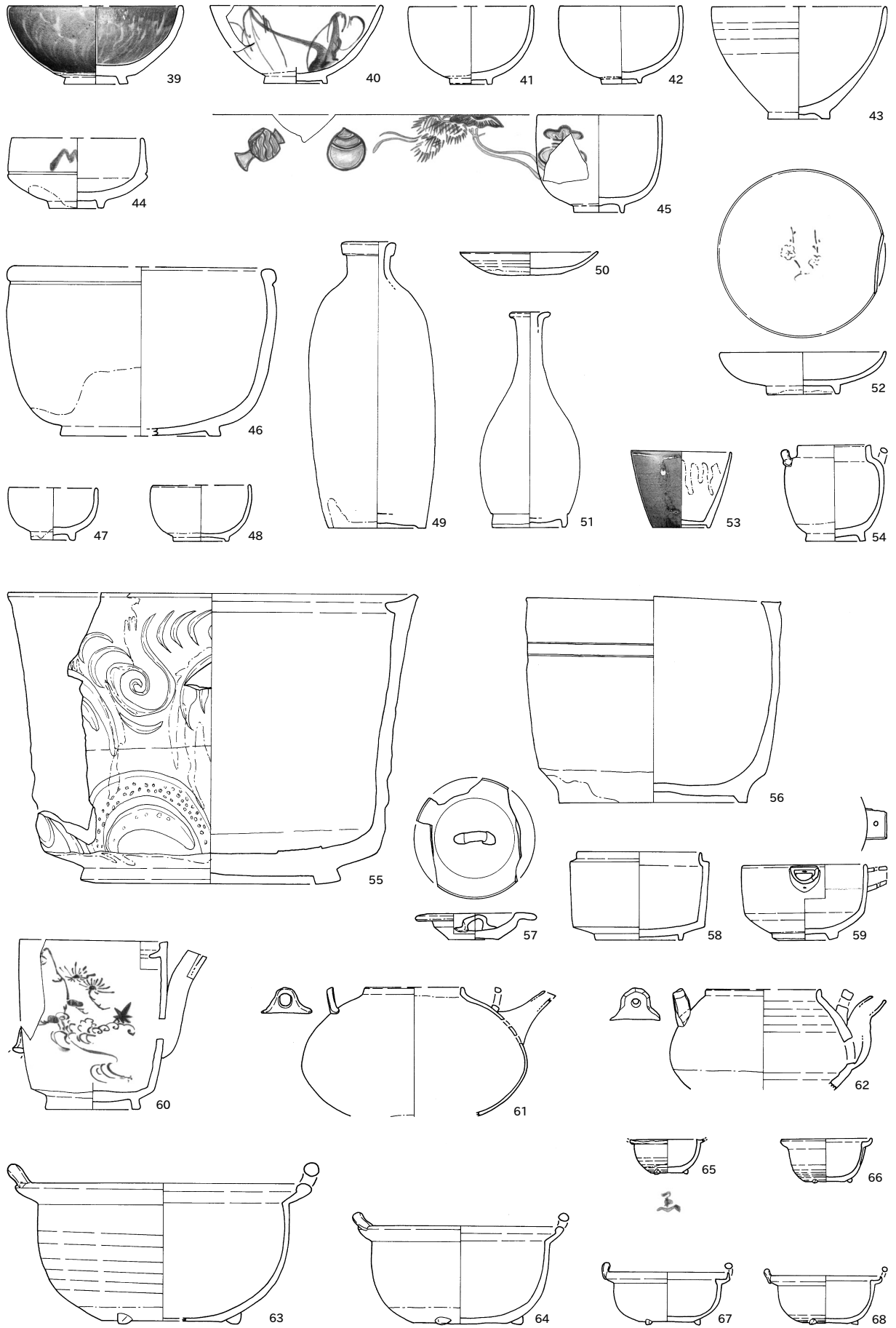
SK330(1)

III-70 圖 SK319 (2)・SK325・SU327・SK330 (1) 磁器・陶器・土器

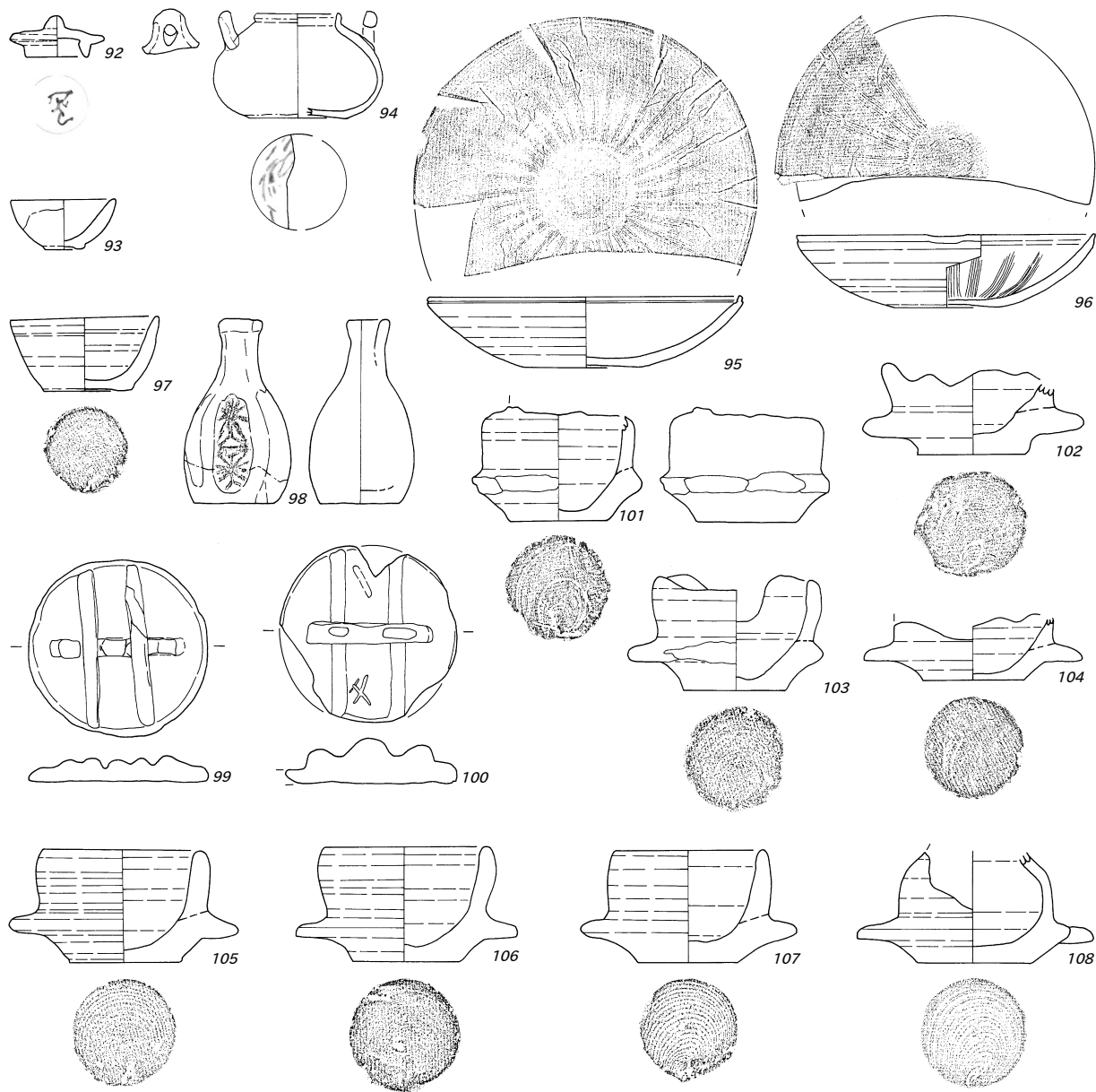
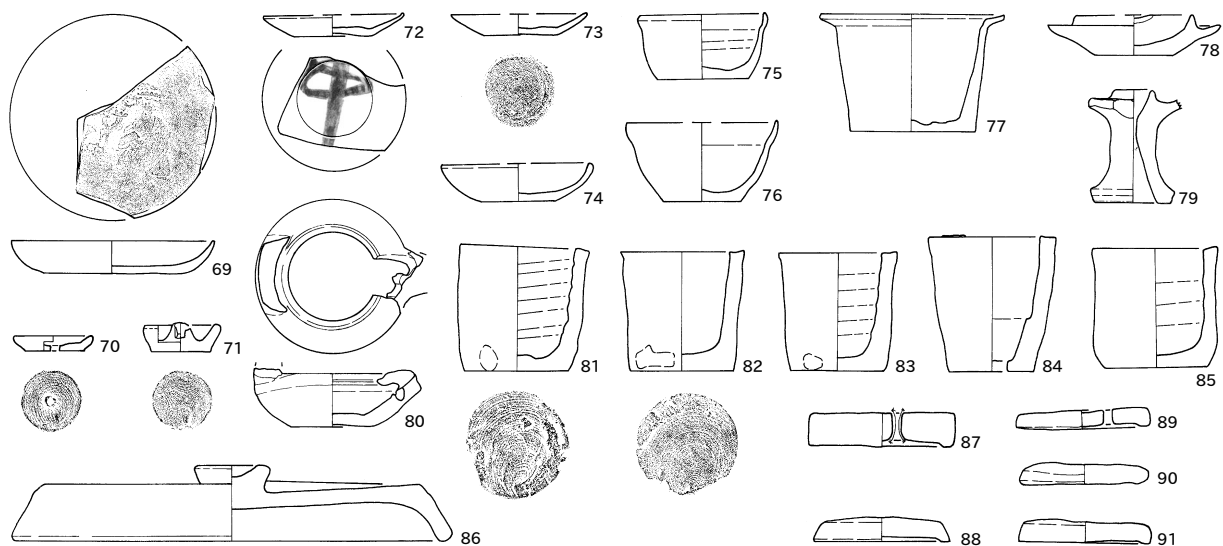


III-71 图 SK330 (2) 磁器·陶器·土器

第1節 磁器・陶器・土器



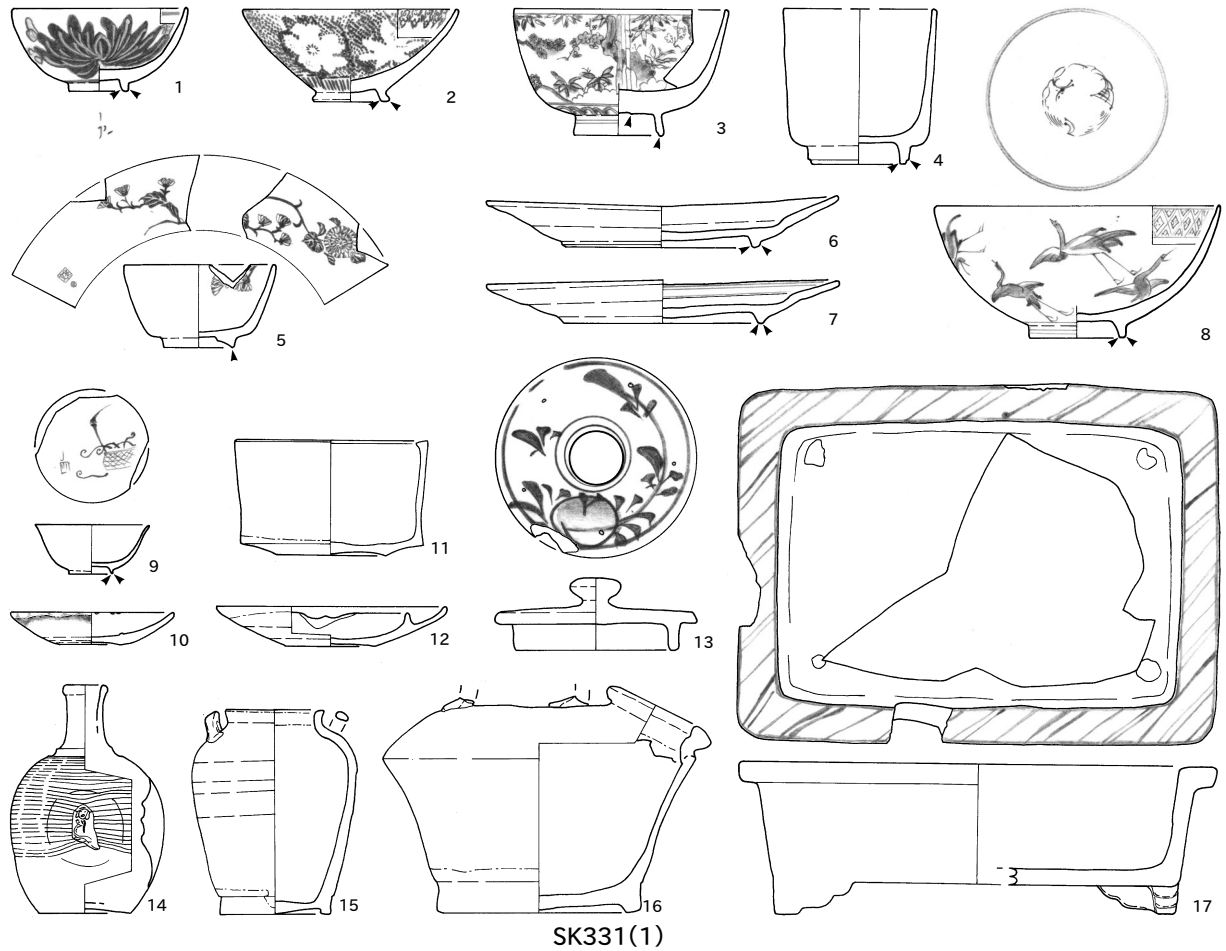
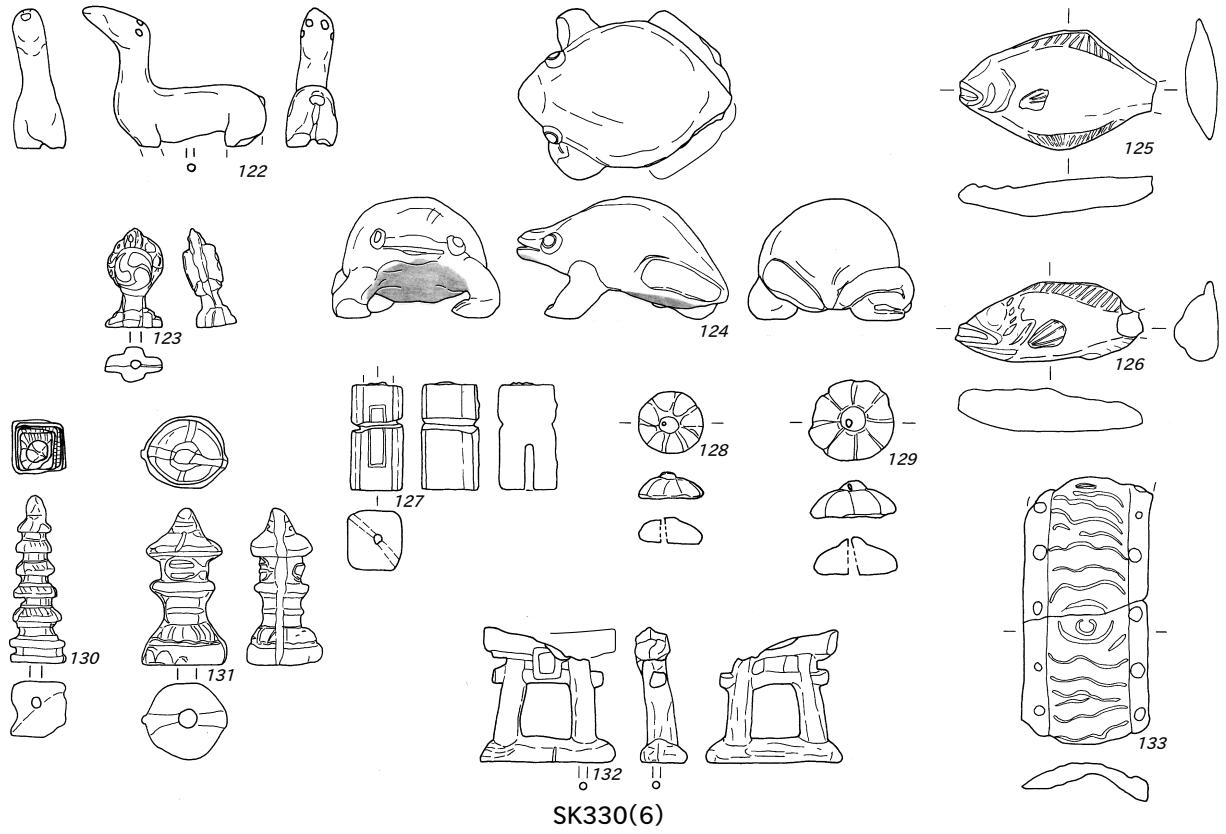
Ⅲ-72 図 SK330 (3) 磁器・陶器・土器



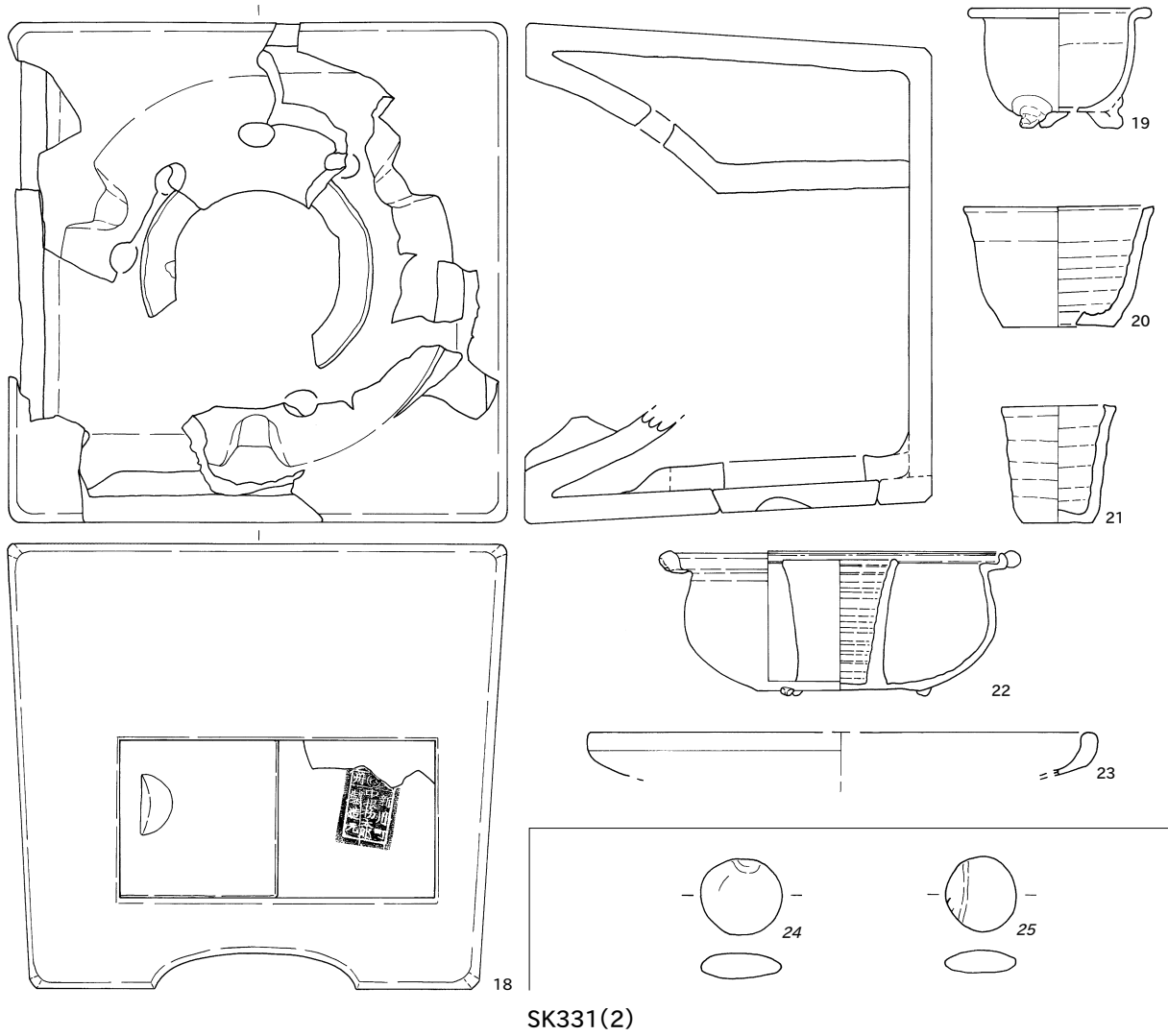
III-73 圖 SK330 (4) 磁器・陶器・土器



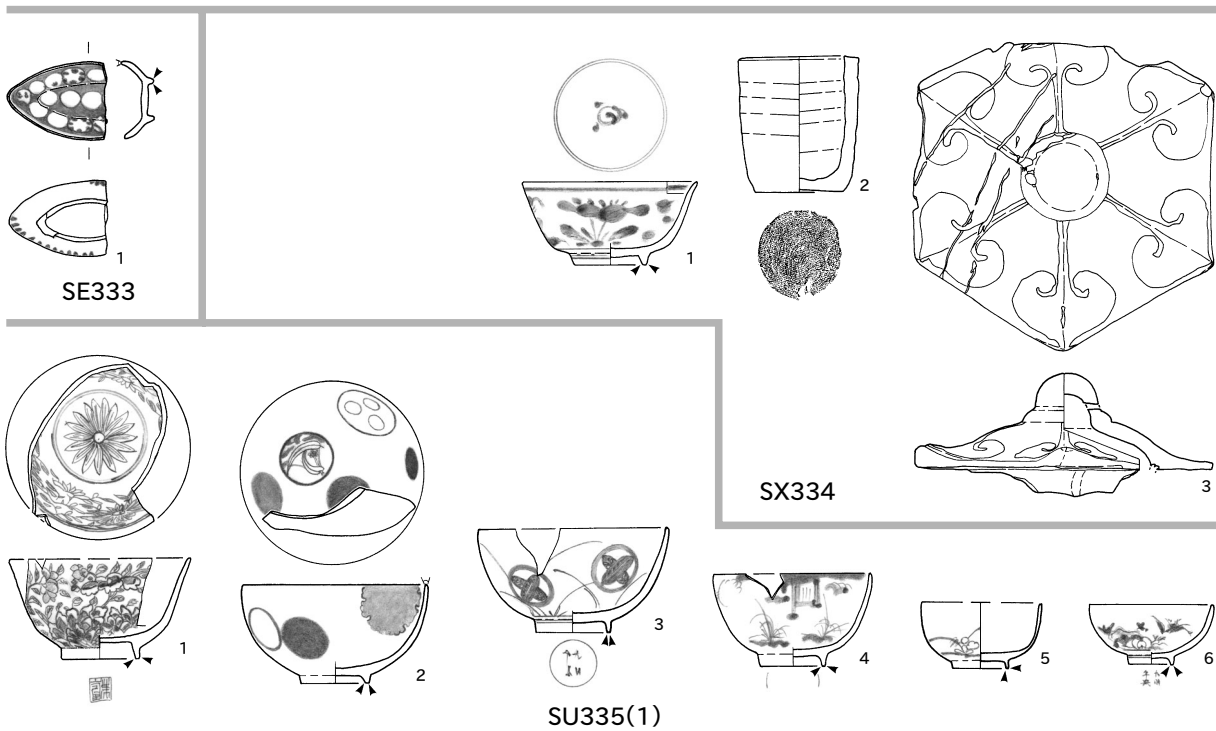
III-74 圖 SK330 (5) 磁器・陶器・土器



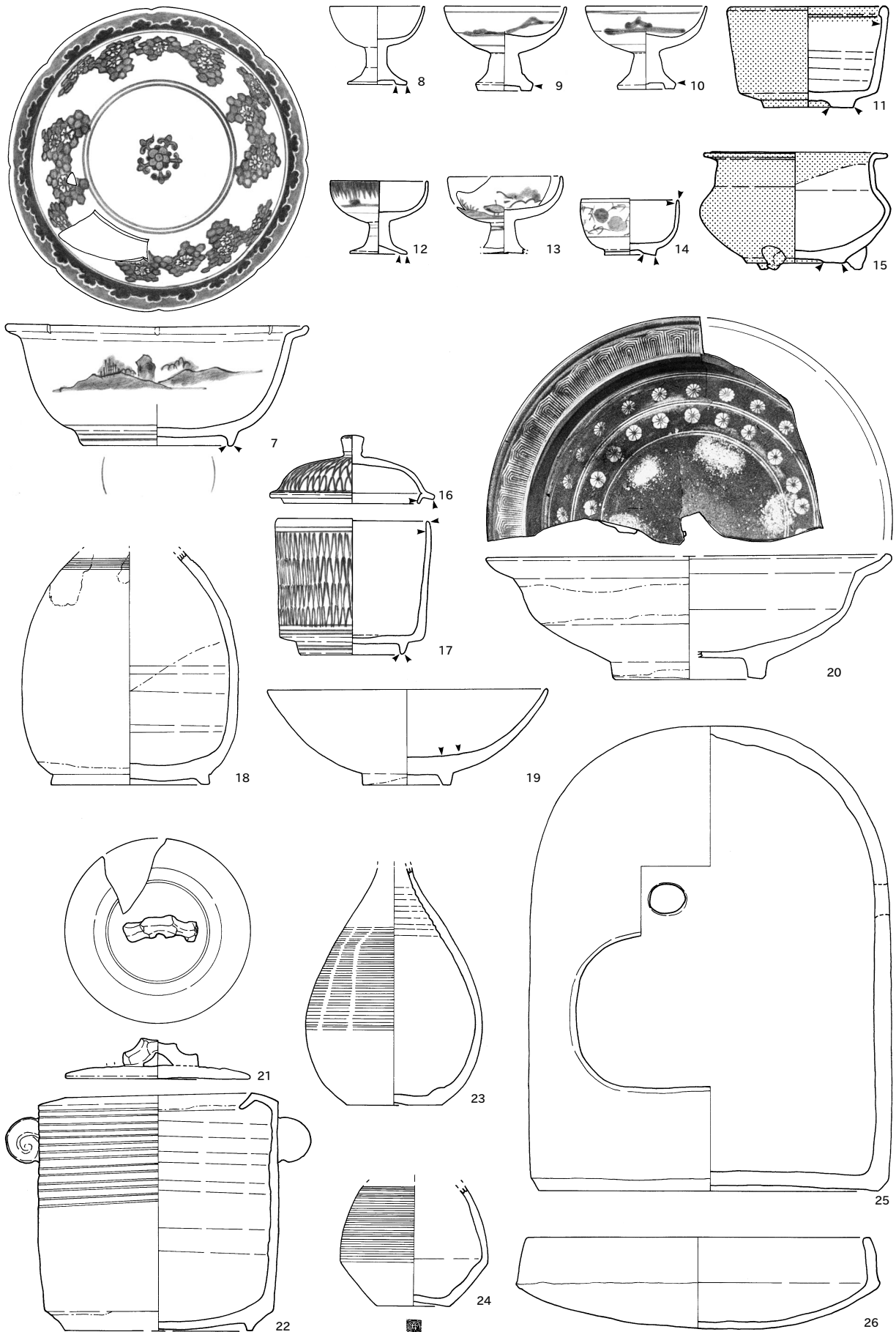
III-75 圖 SK330 (6) · SK331 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



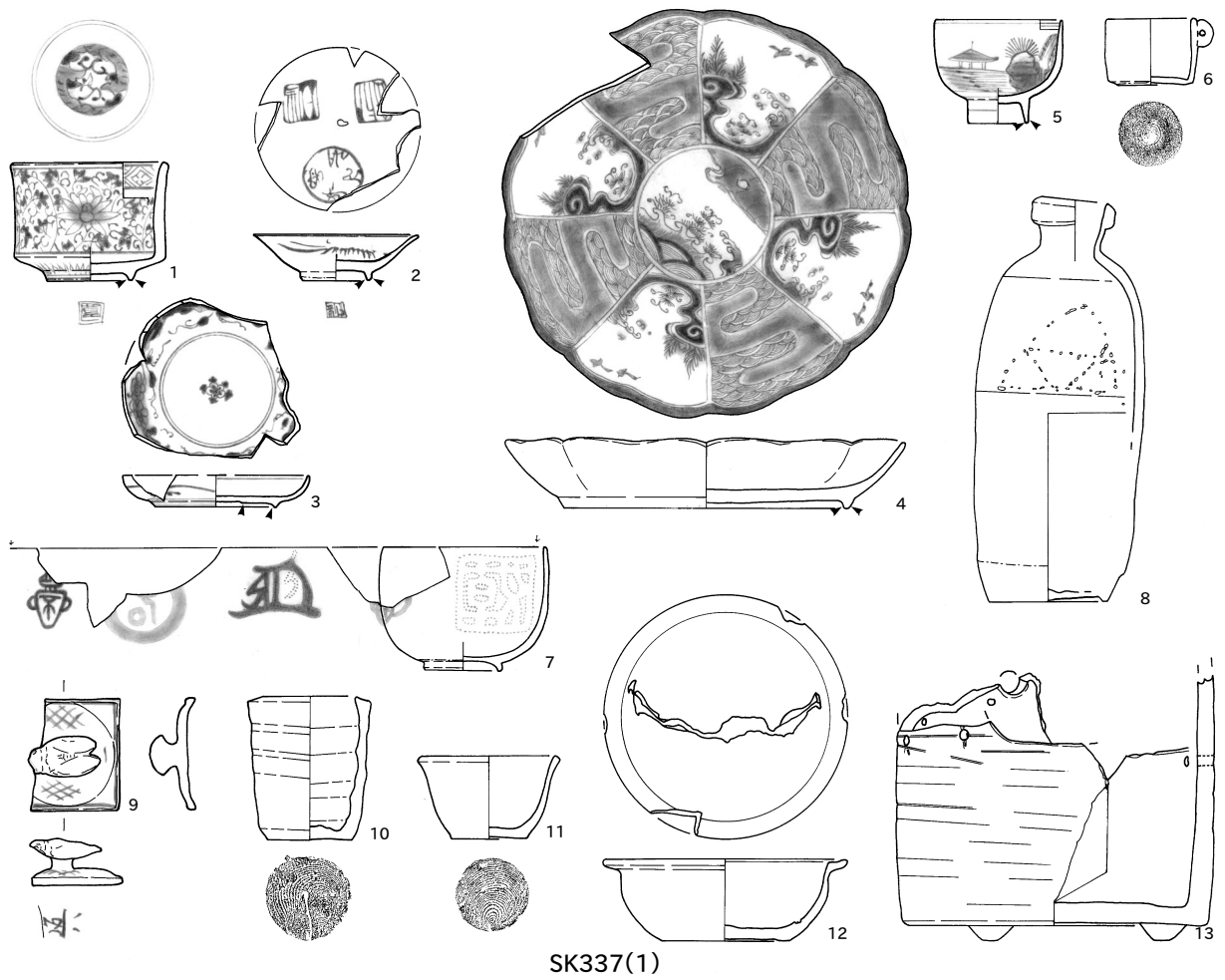
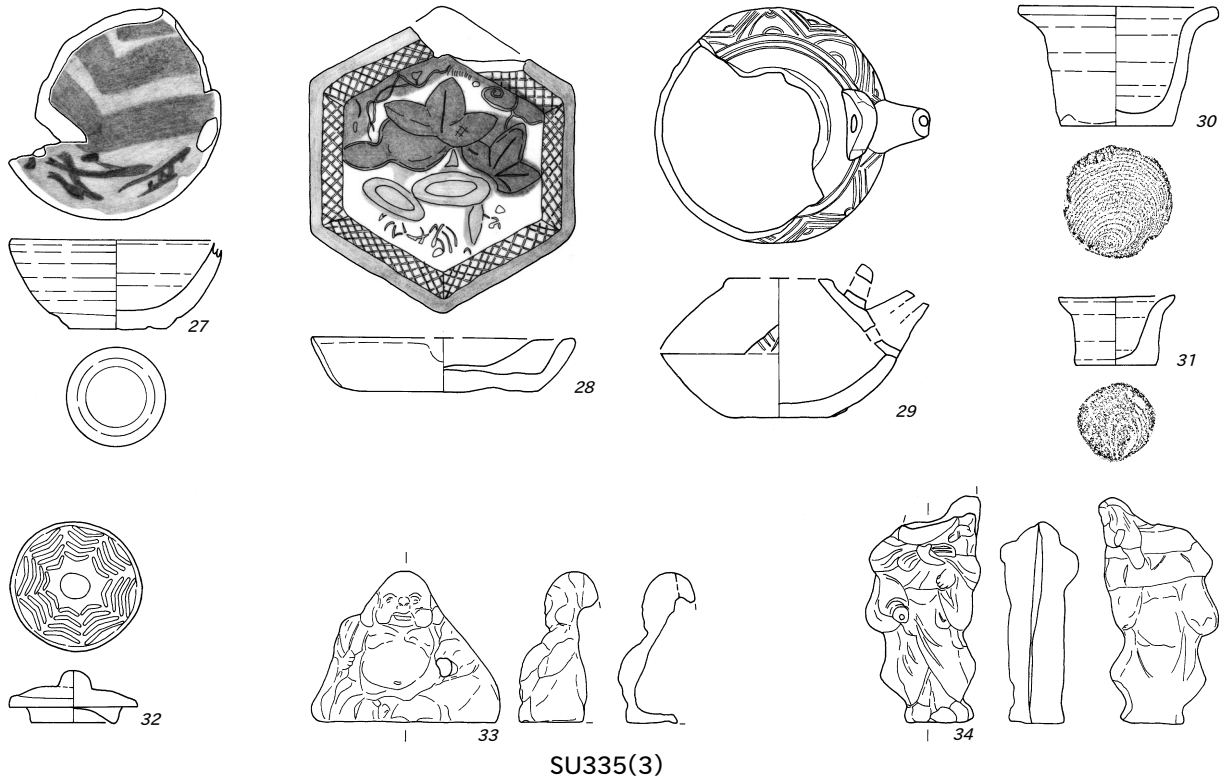
SK331(2)



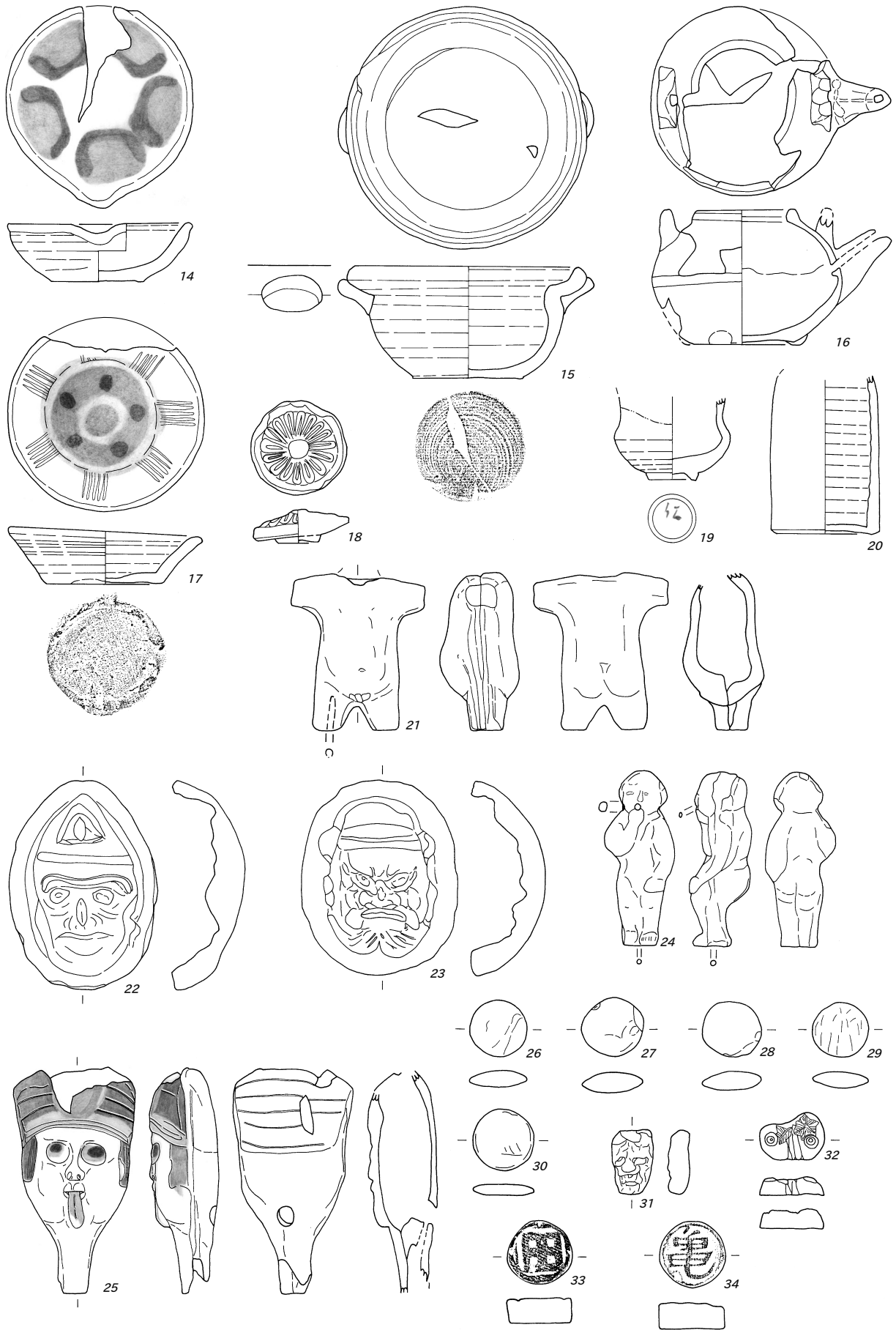
Ⅲ-76 図 SK331 (2)・SE333・SX334・SU335 (1) 磁器・陶器・土器



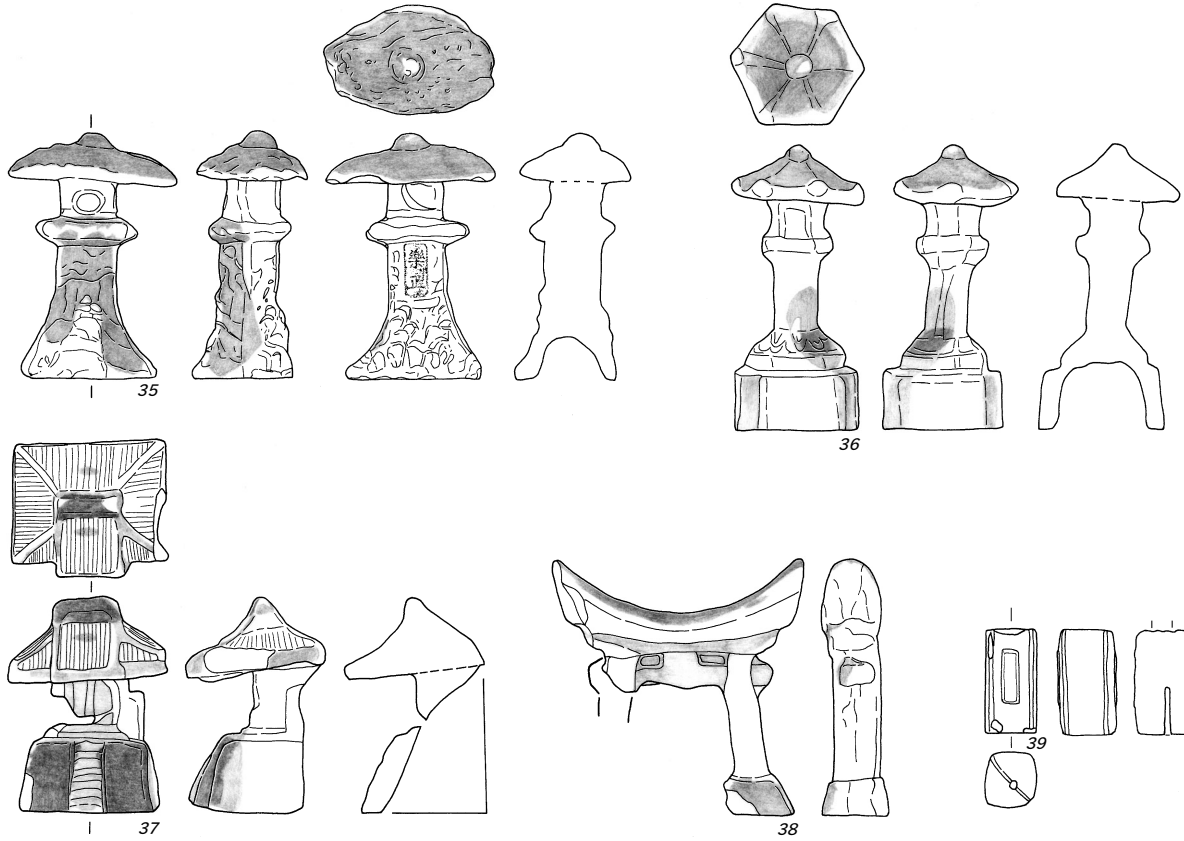
III-77 圖 SU335 (2) 磁器・陶器・土器



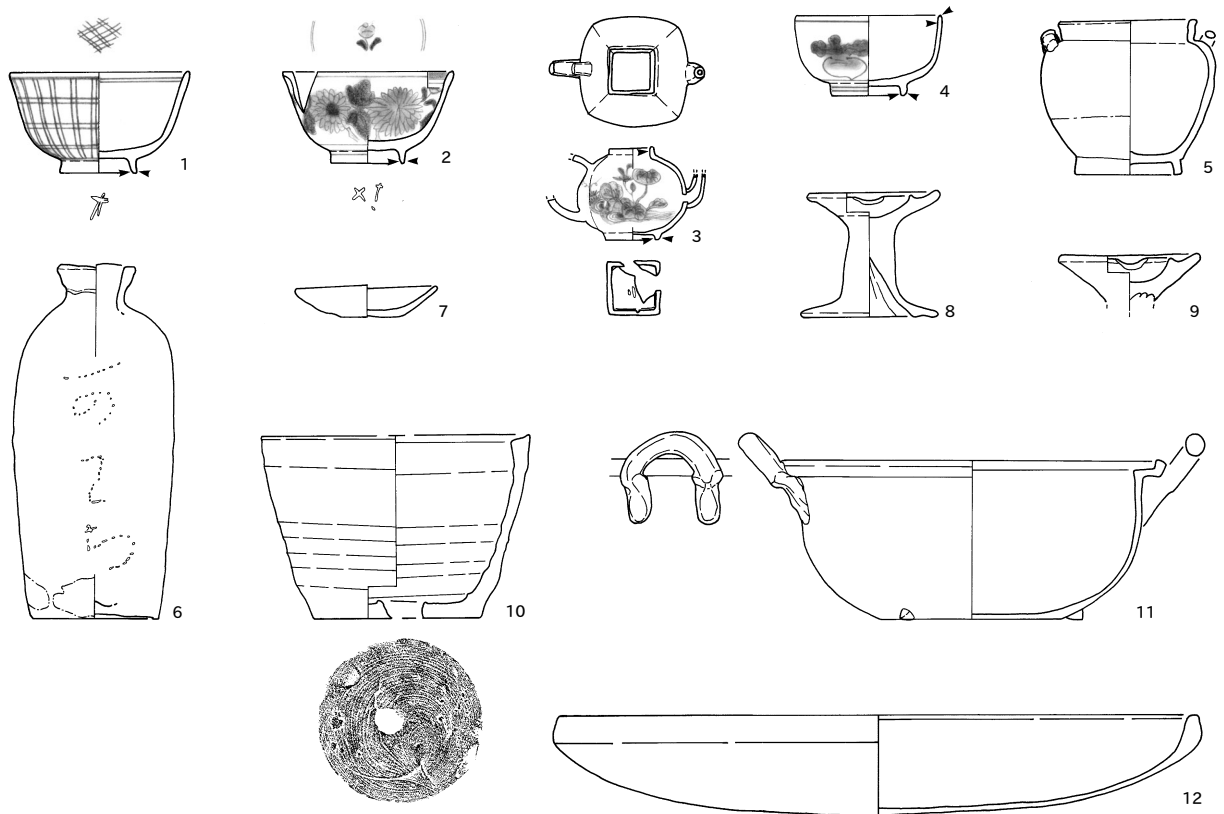
III-78 圖 SU335 (3) · SK337 (1) 磁器·陶器·土器



III-79 圖 SK337 (2) 磁器・陶器・土器

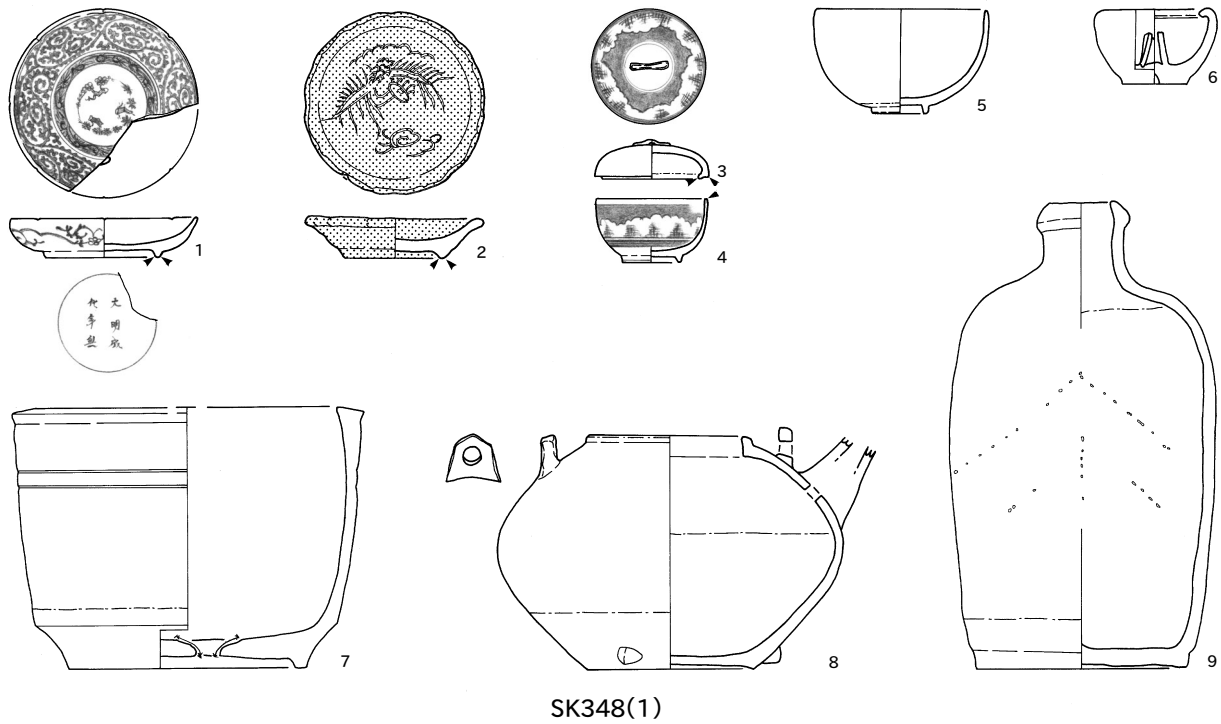
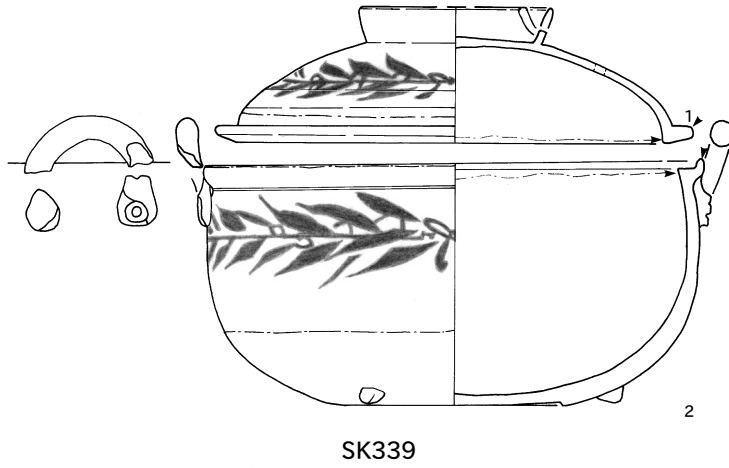
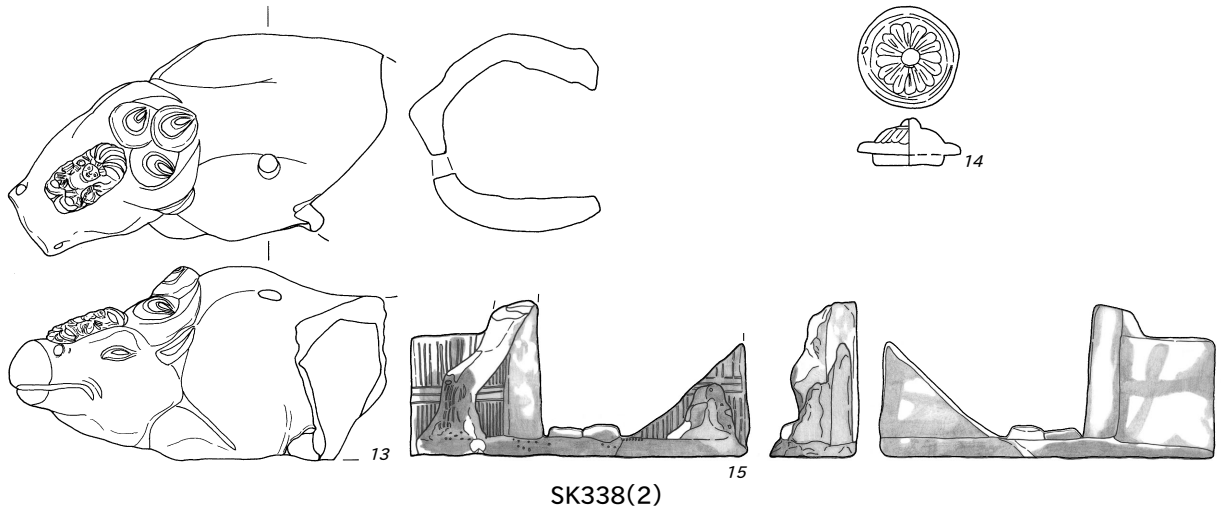


SK337(3)



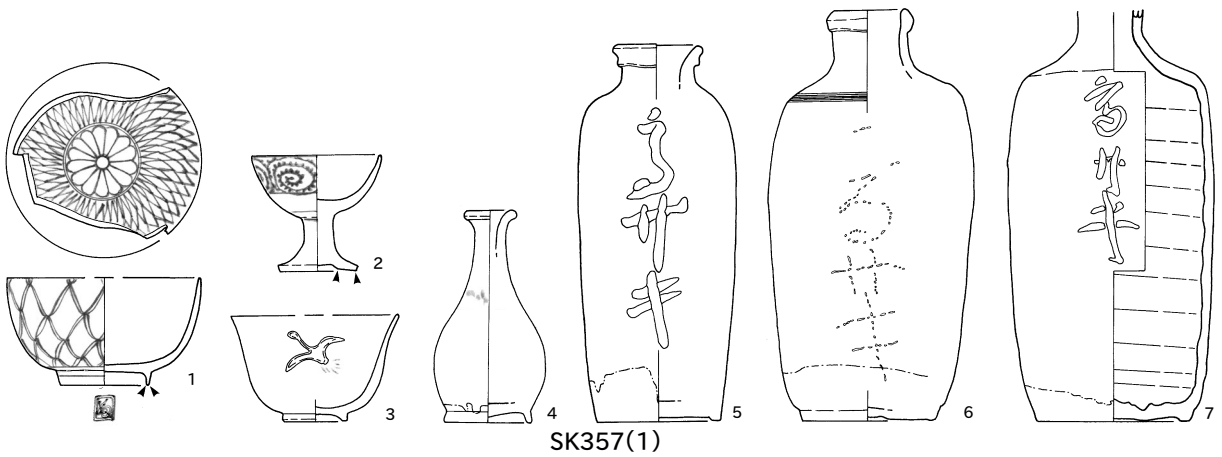
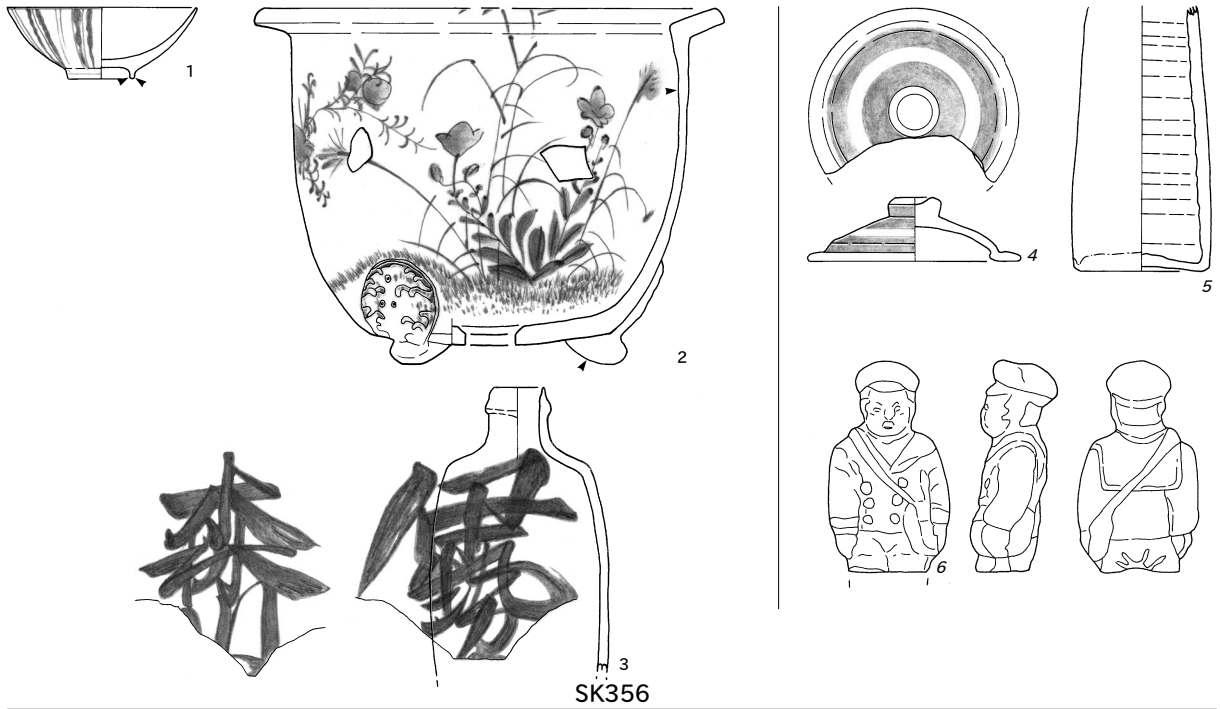
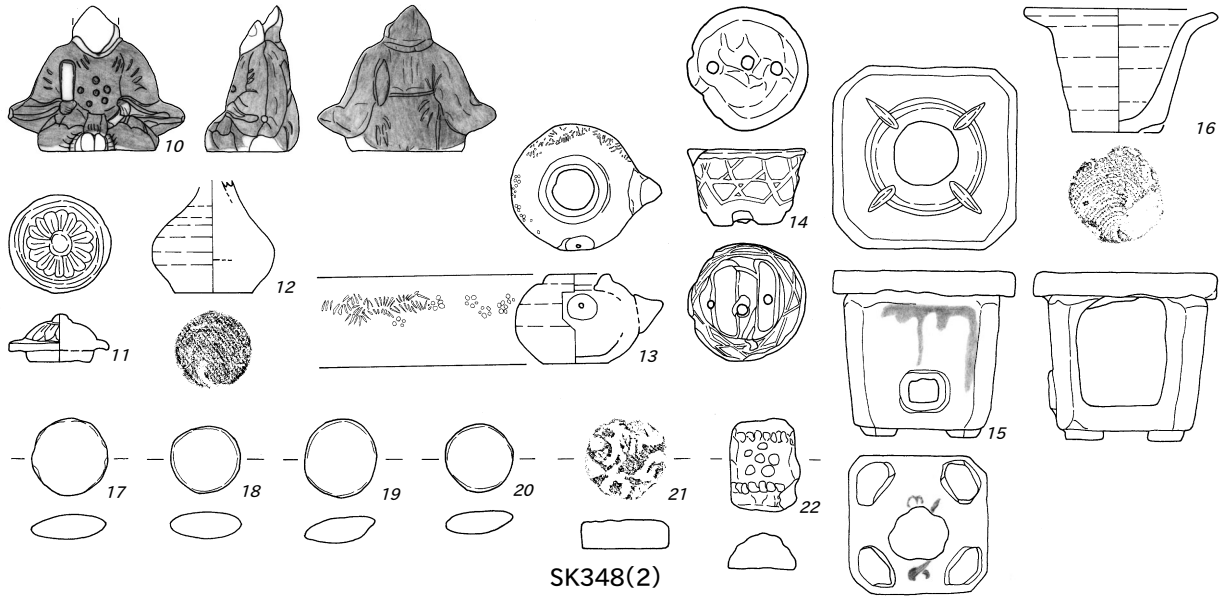
SK338(1)

Ⅲ-80 図 SK337 (3)・SK338 (1) 磁器・陶器・土器

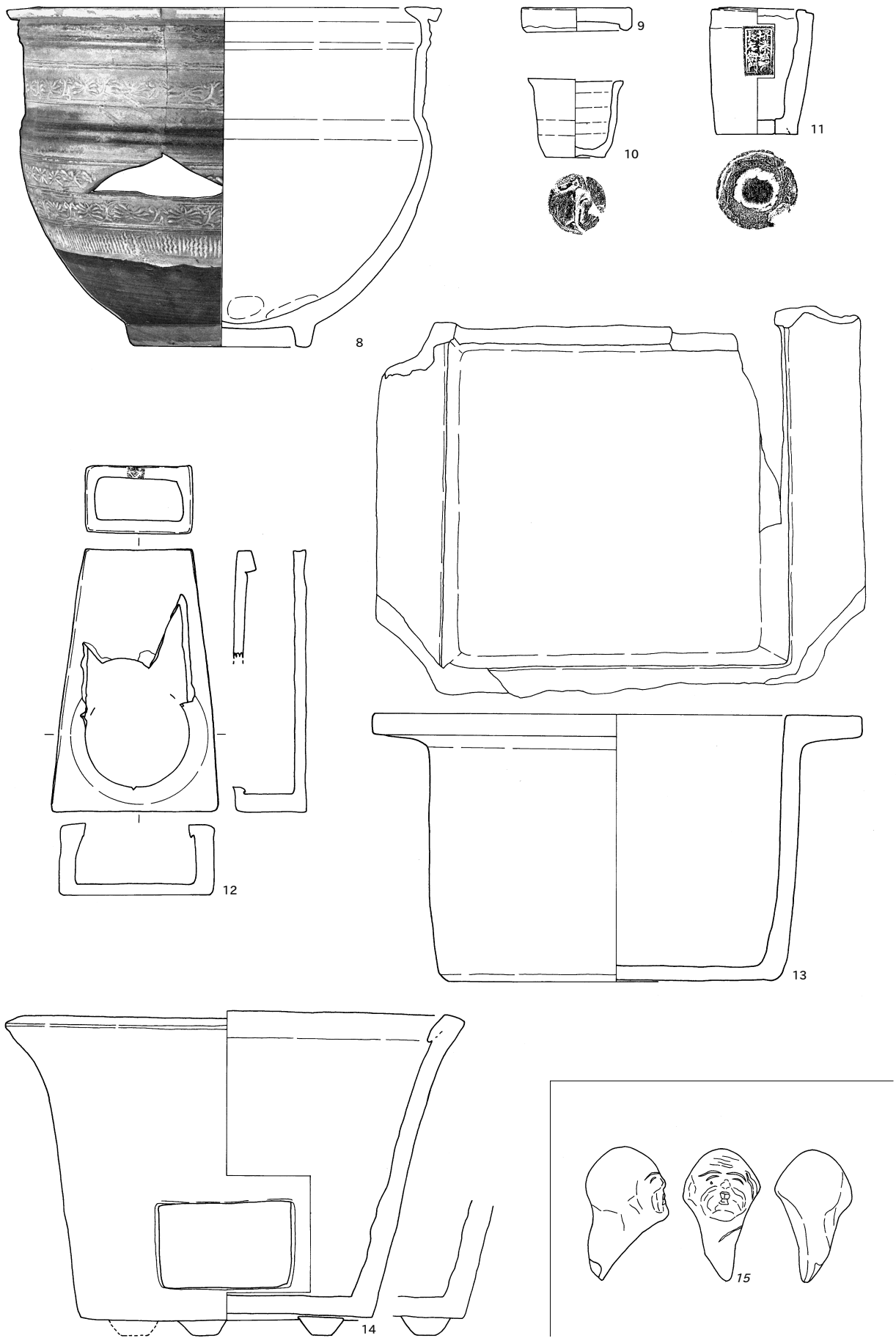


III-81 圖 SK338 (2) · SK339 · SK348 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

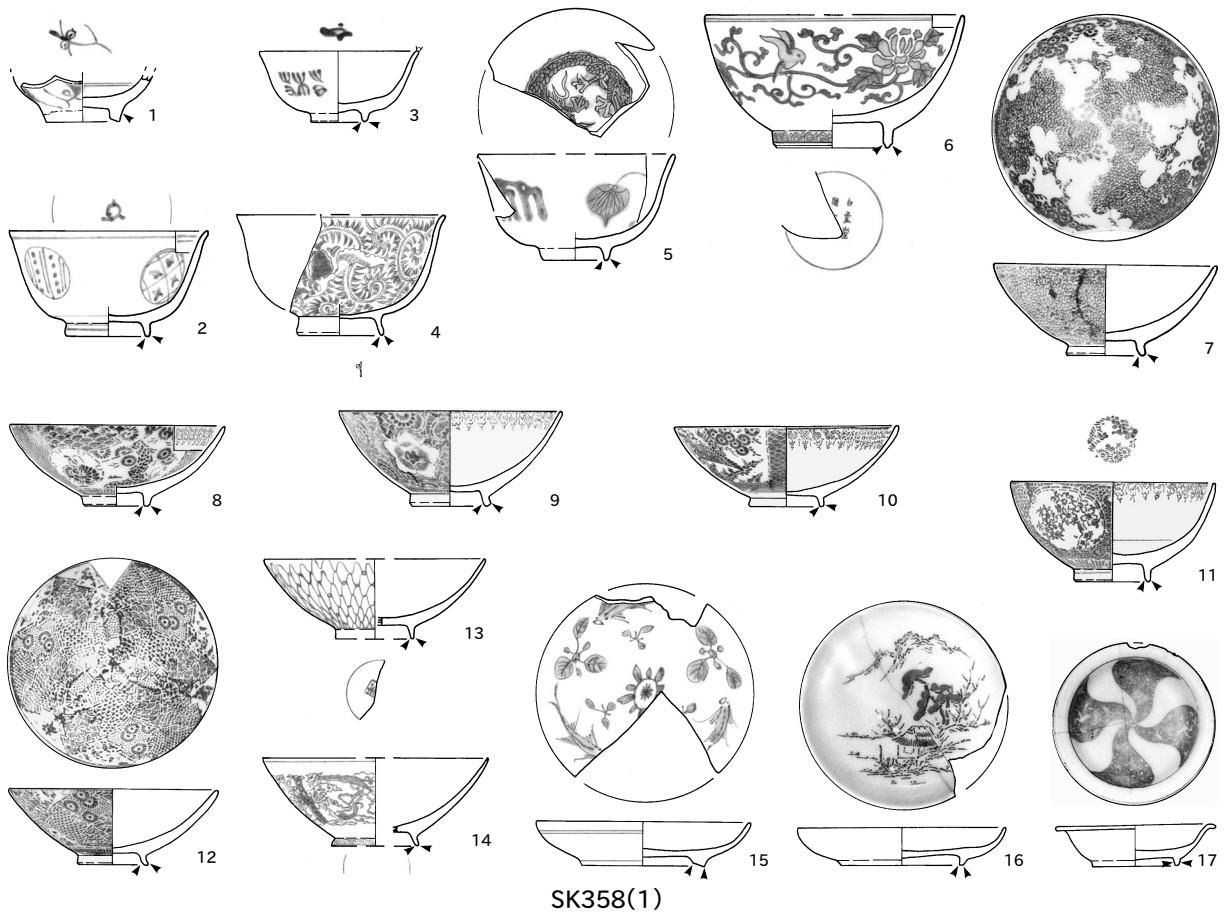
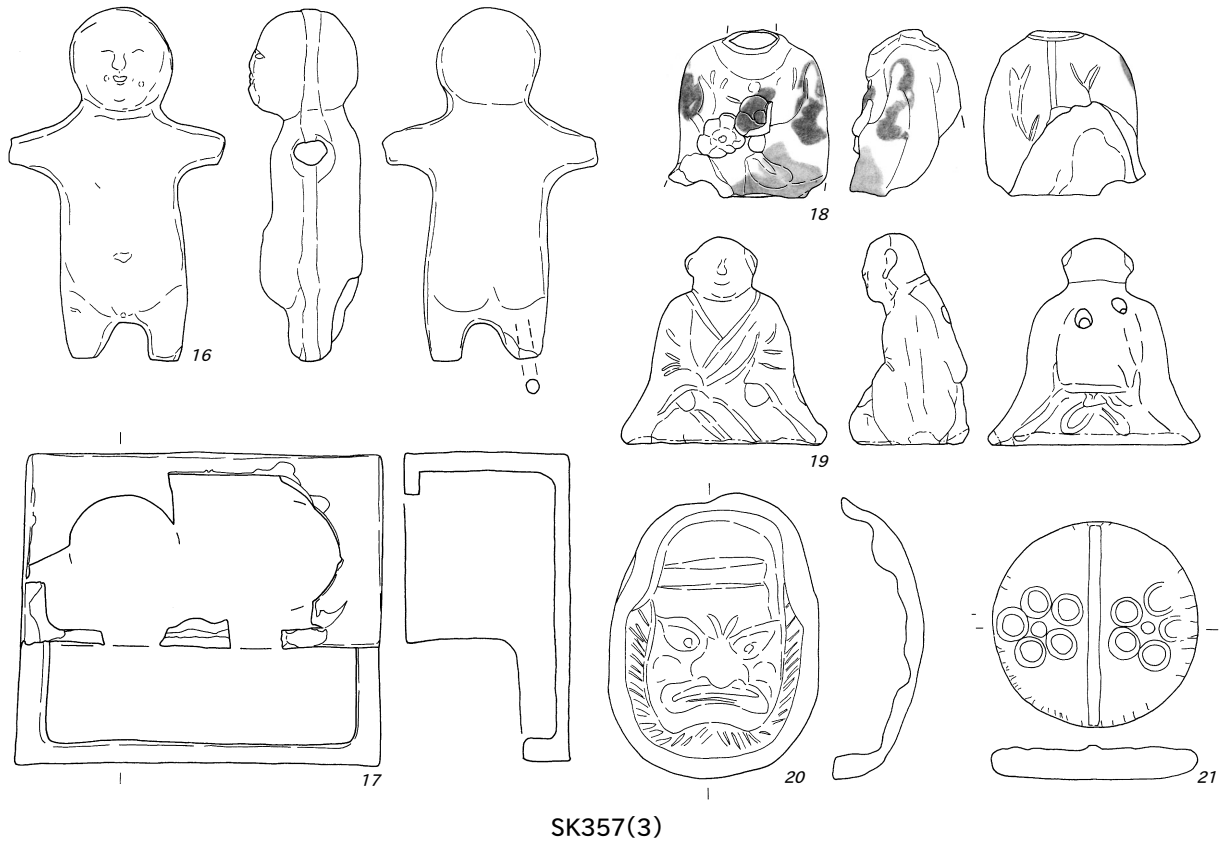
第1節 磁器・陶器・土器



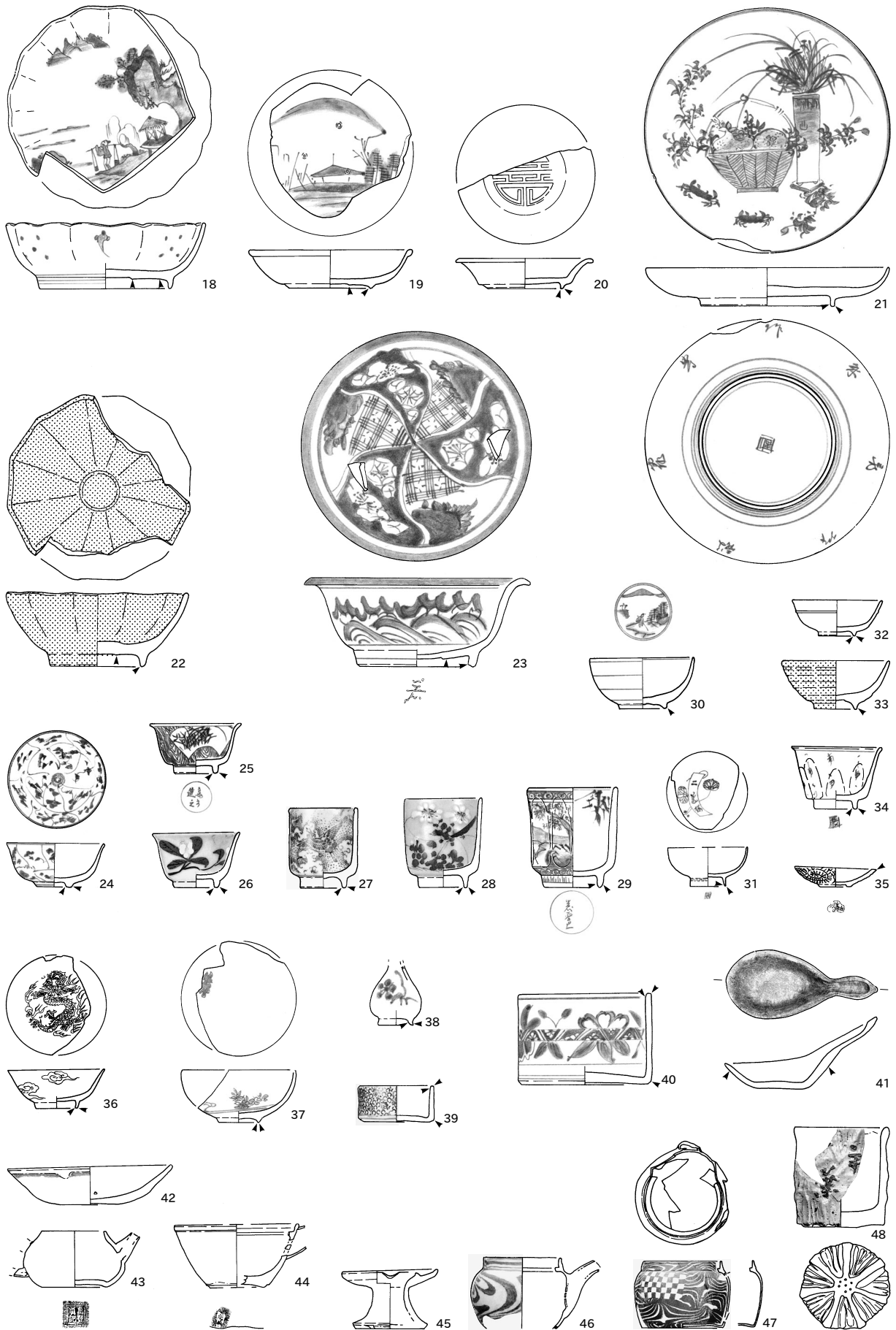
Ⅲ-82 図 SK348 (2)・SK356・SK357 (1) 磁器・陶器・土器



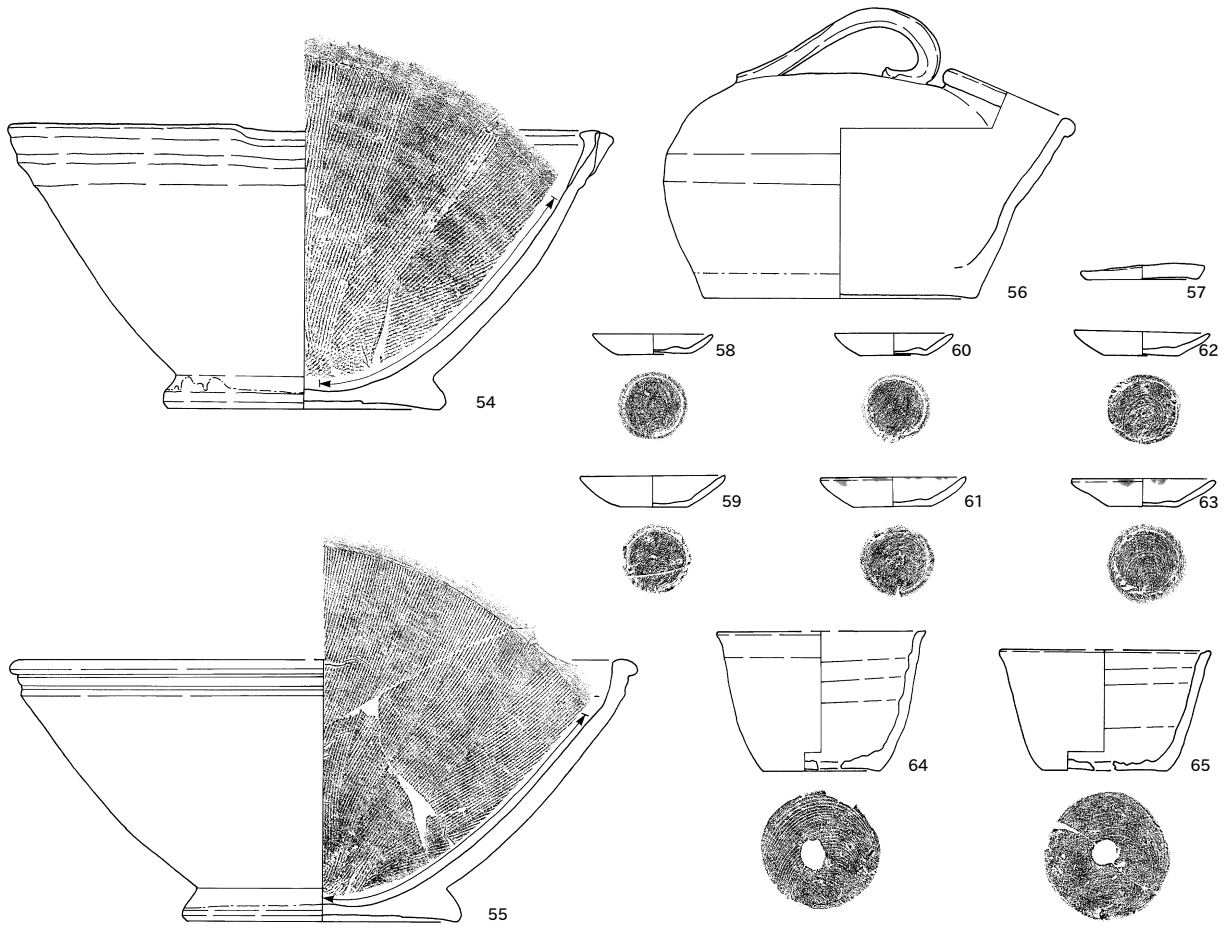
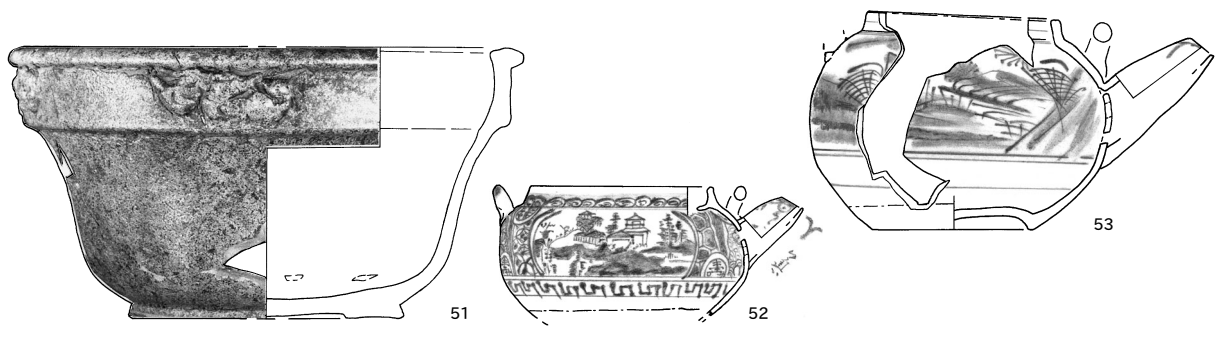
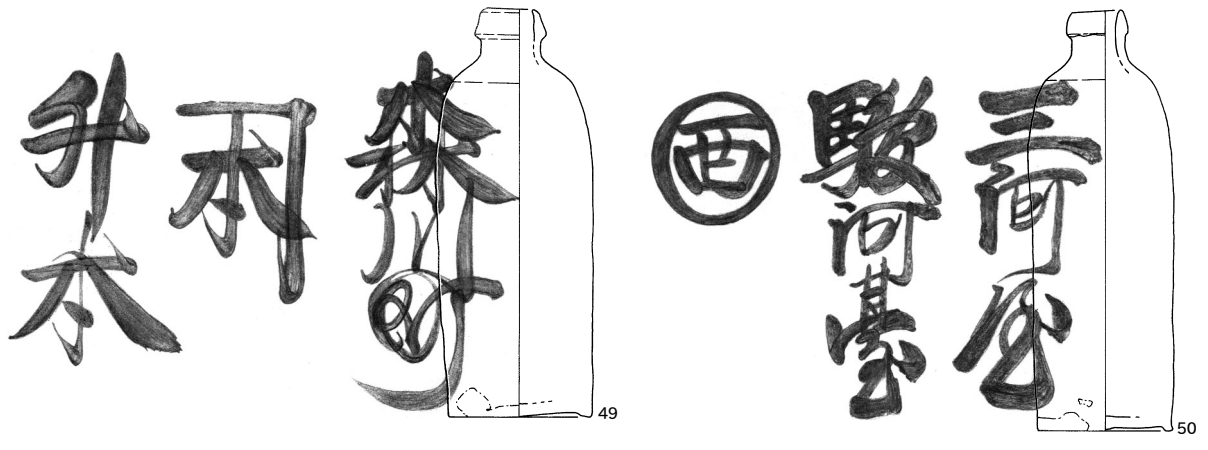
III-83 图 SK357 (2) 磁器·陶器·土器



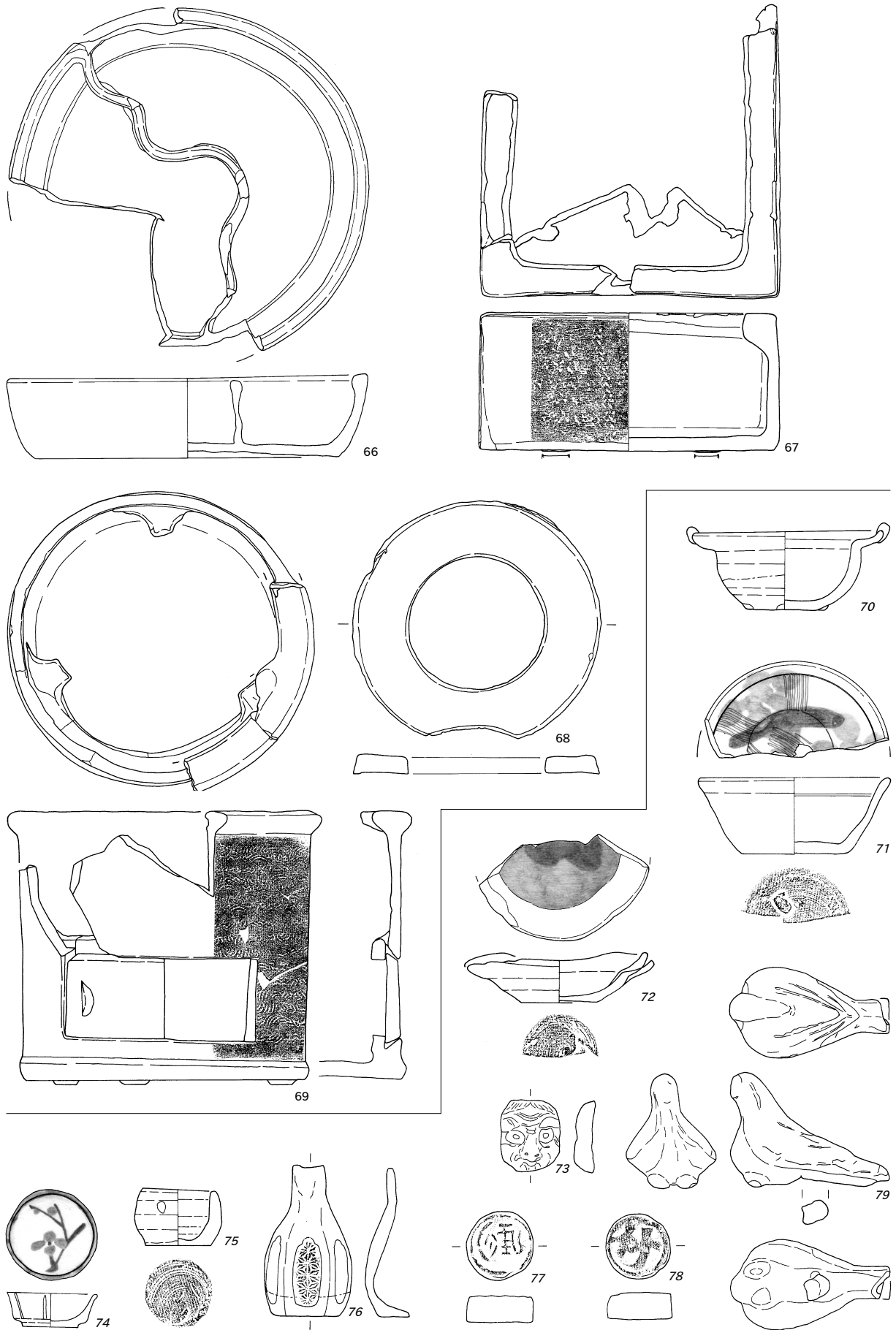
Ⅲ-84 図 SK357 (3)・SK358 (1) 磁器・陶器・土器



III-85 圖 SK358 (2) 磁器・陶器・土器

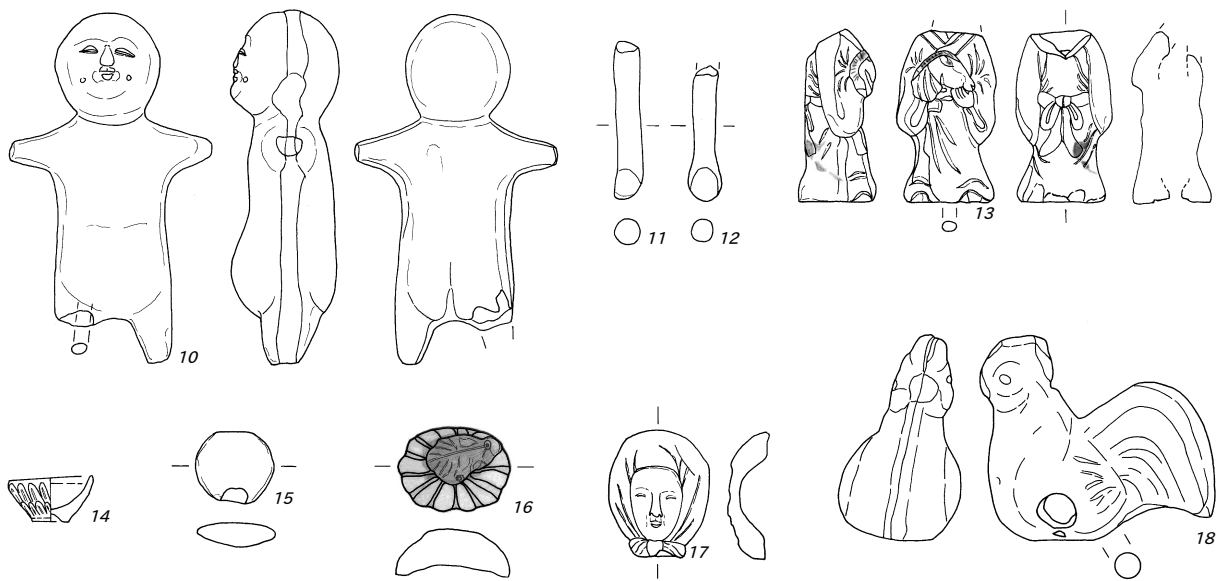
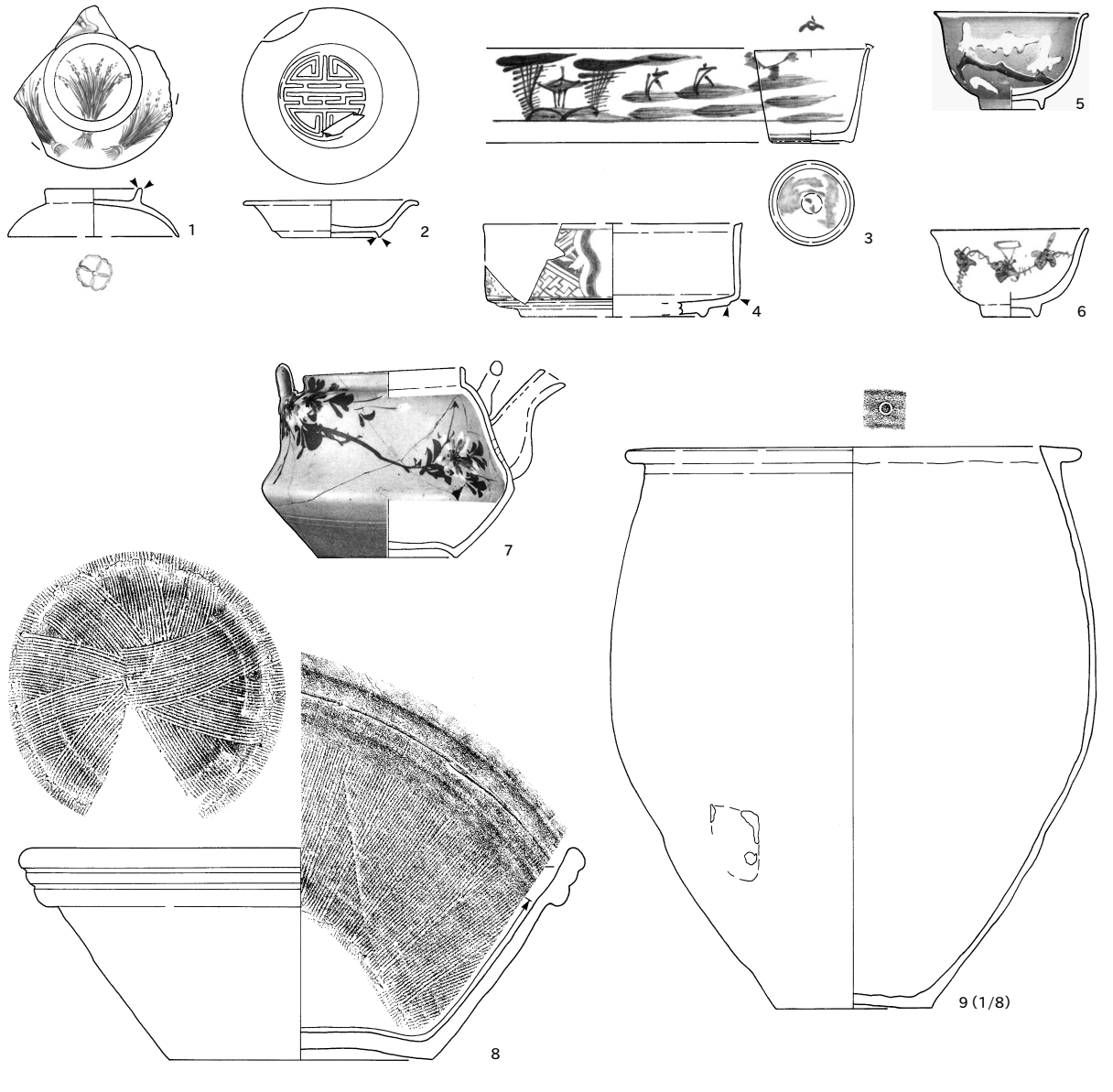


III-86 圖 SK358 (3) 磁器·陶器·土器

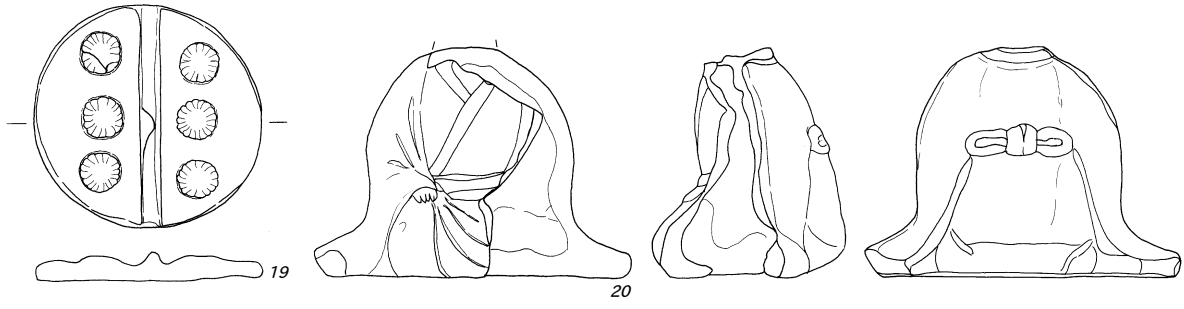


III-87 图 SK358 (4) 磁器·陶器·土器

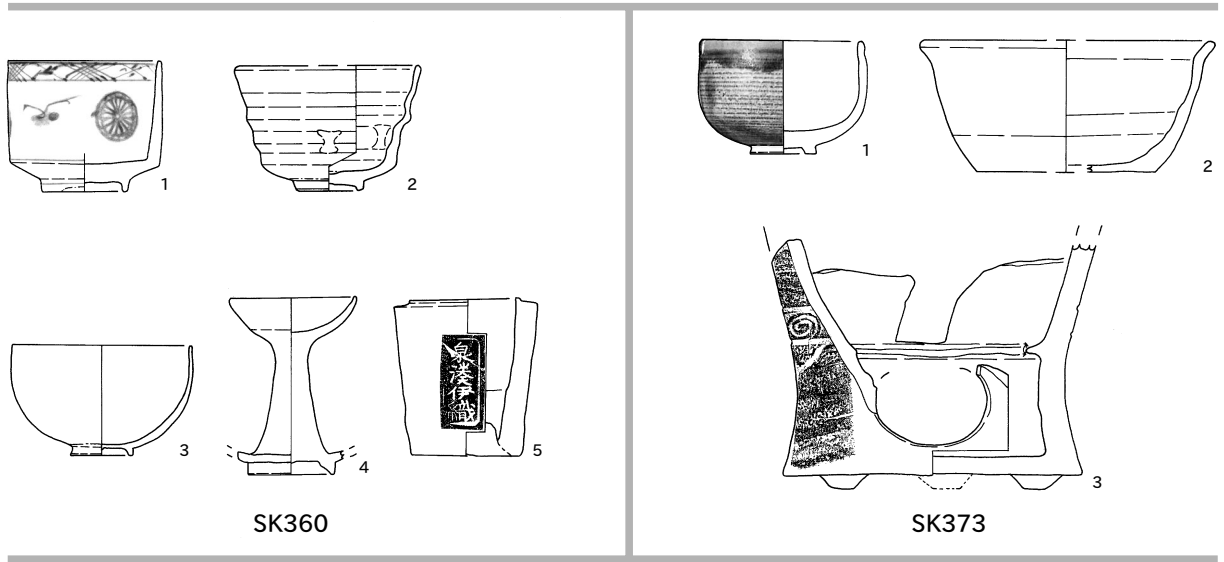
第1節 磁器·陶器·土器



III-88 圖 SK359 (1) 磁器·陶器·土器

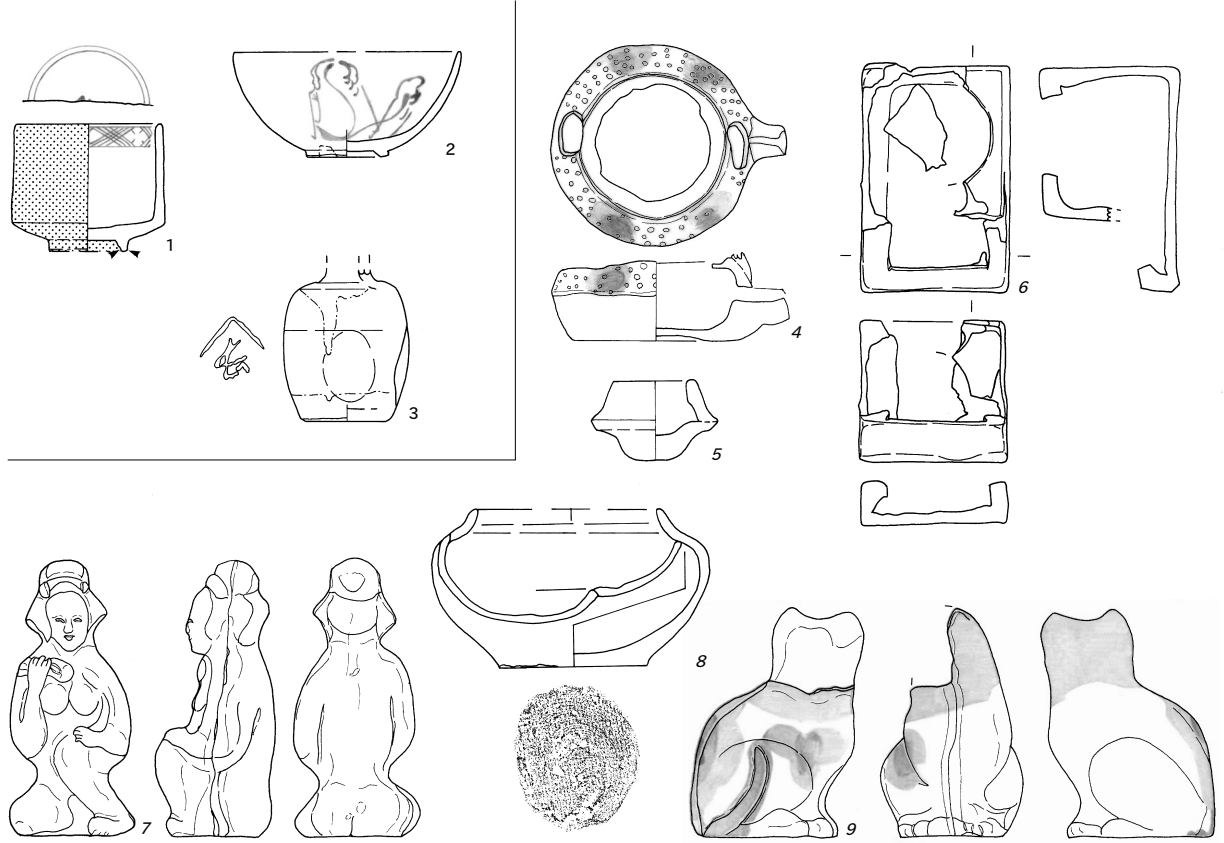


SK359(2)



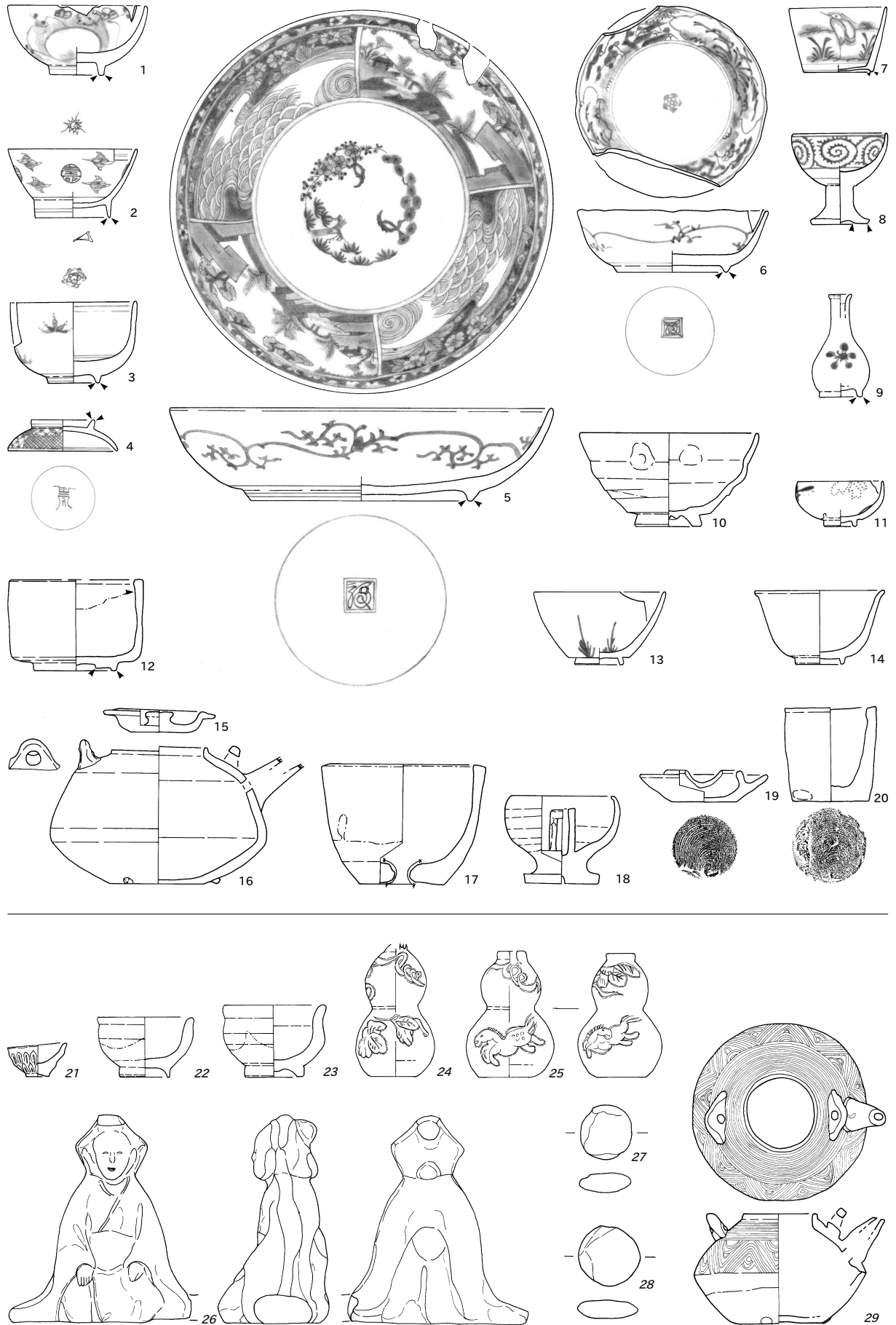
SK360

SK373

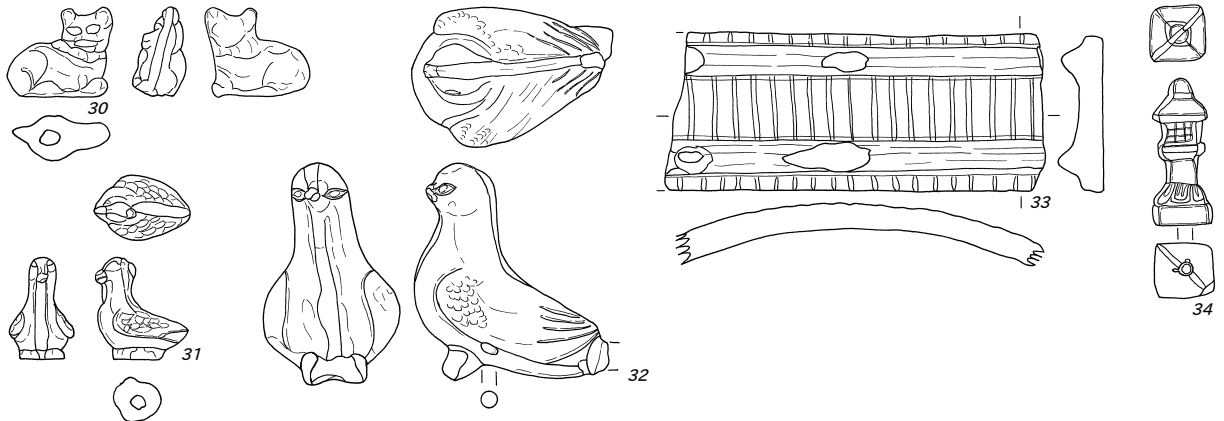


SK378

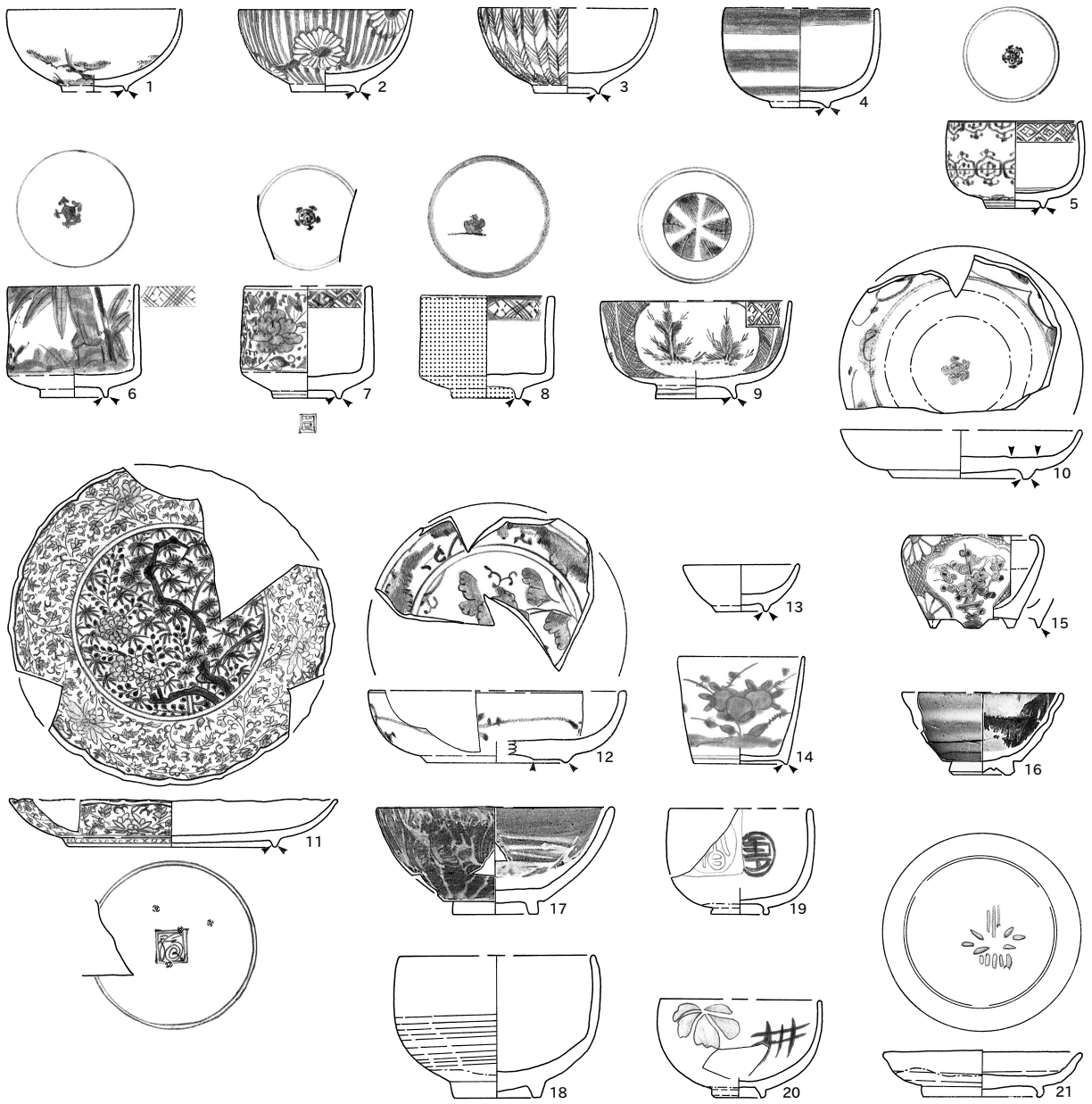
Ⅲ-89 圖 SK359 (2) · SK360 · SK373 · SK378 磁器 · 陶器 · 土器



III-90 圖 SU381 (1) 磁器·陶器·土器

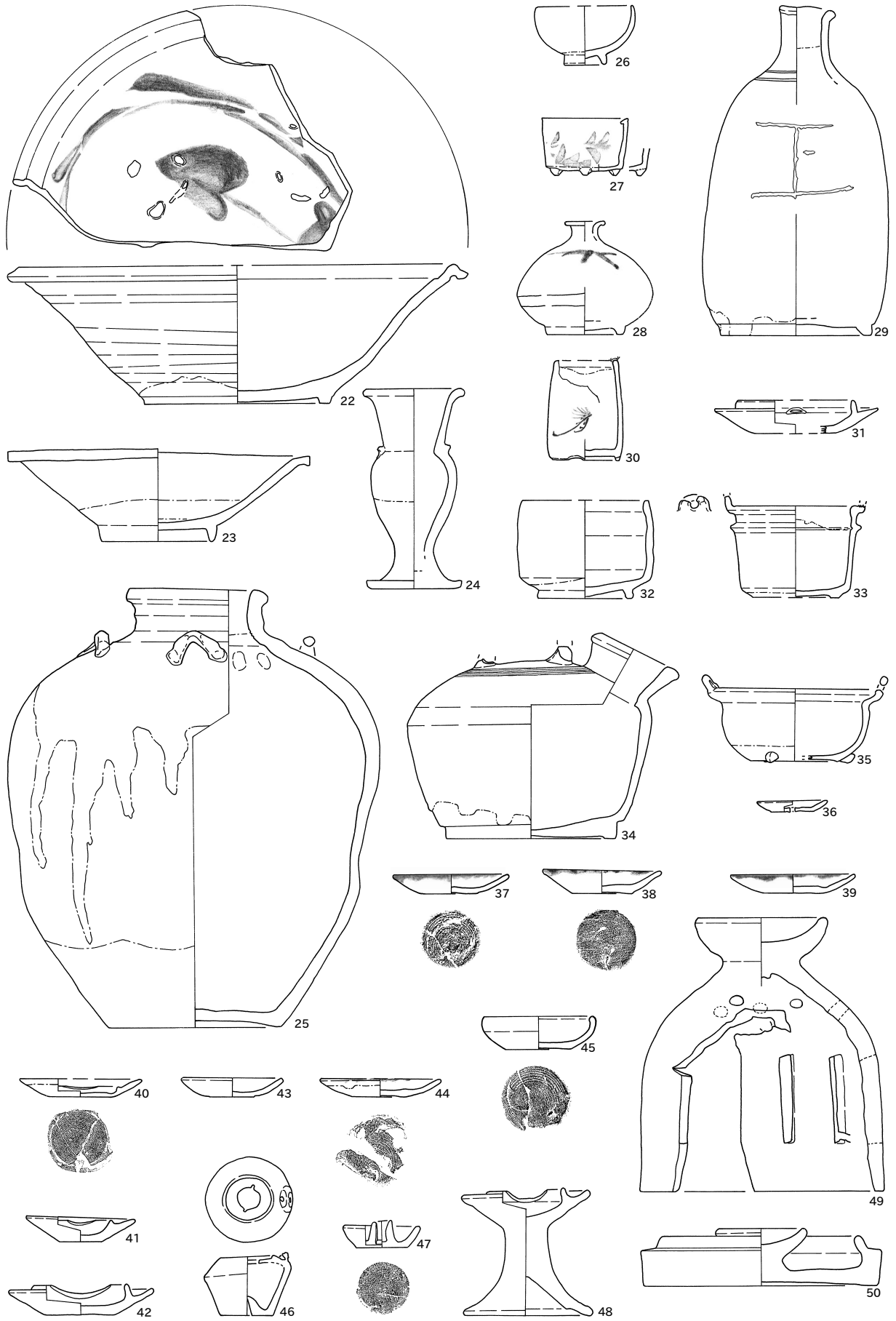


SU381(2)

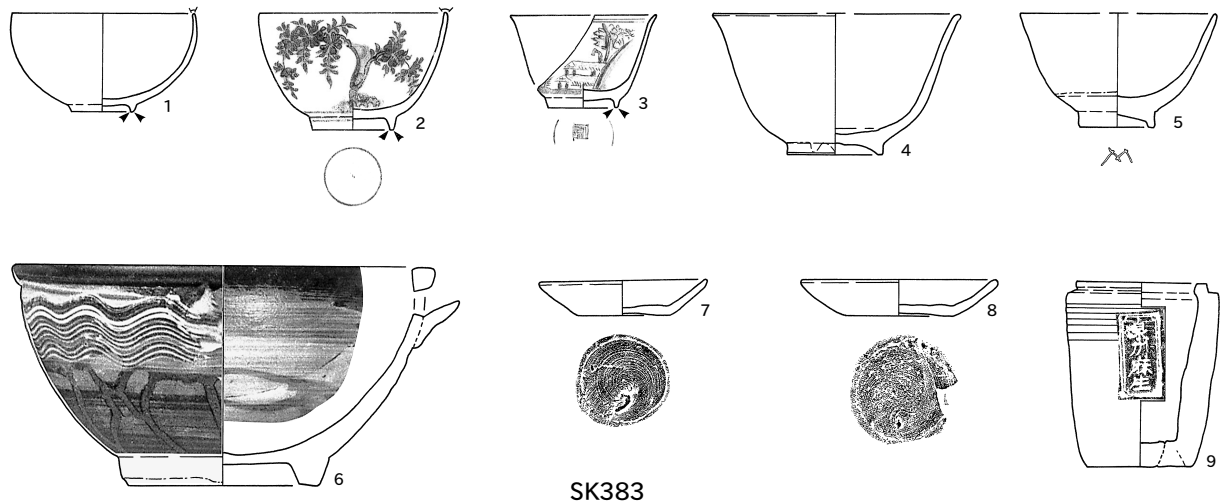
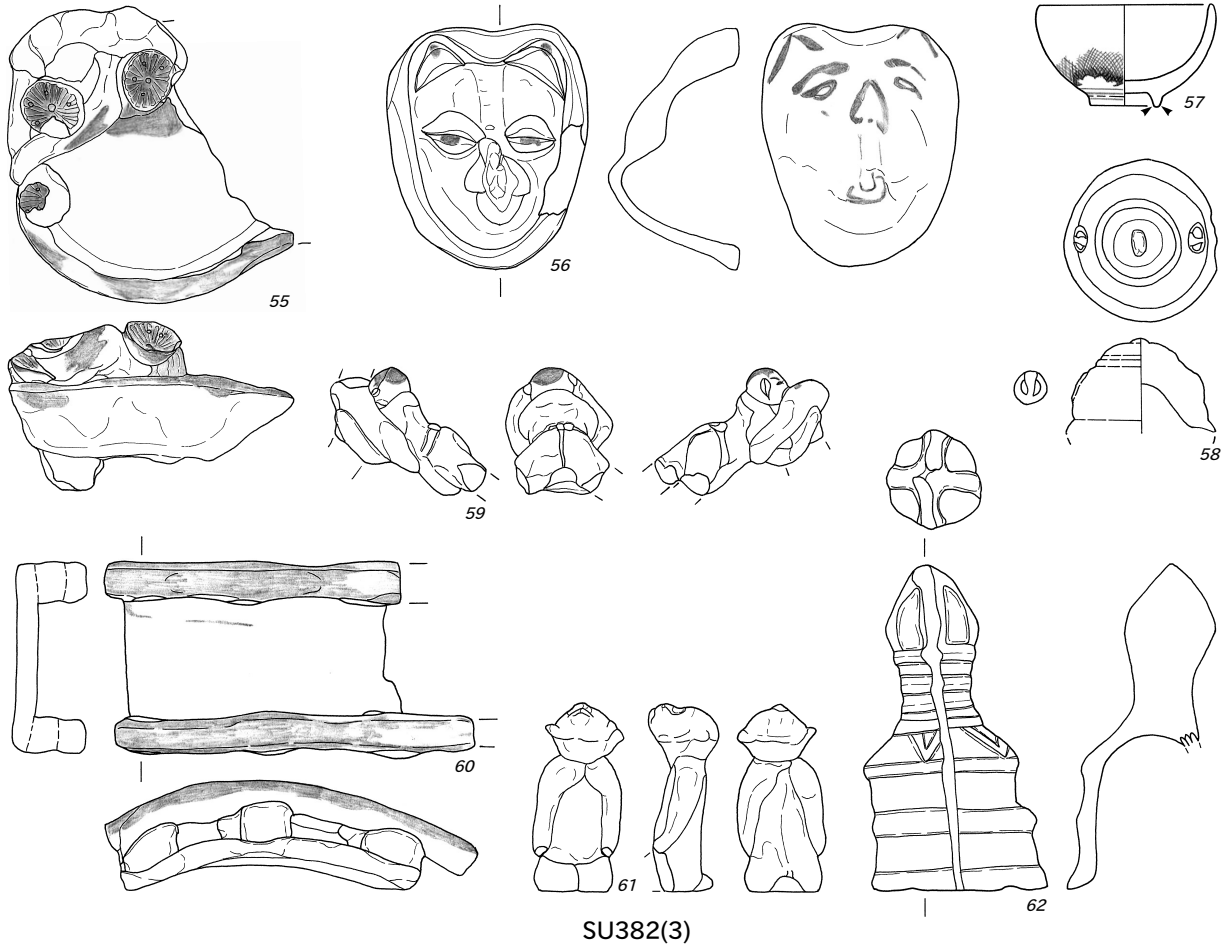
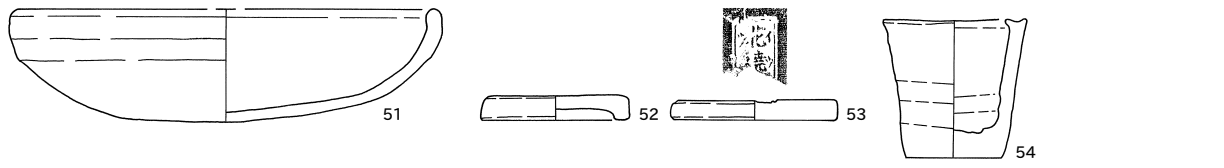


SU382(1)

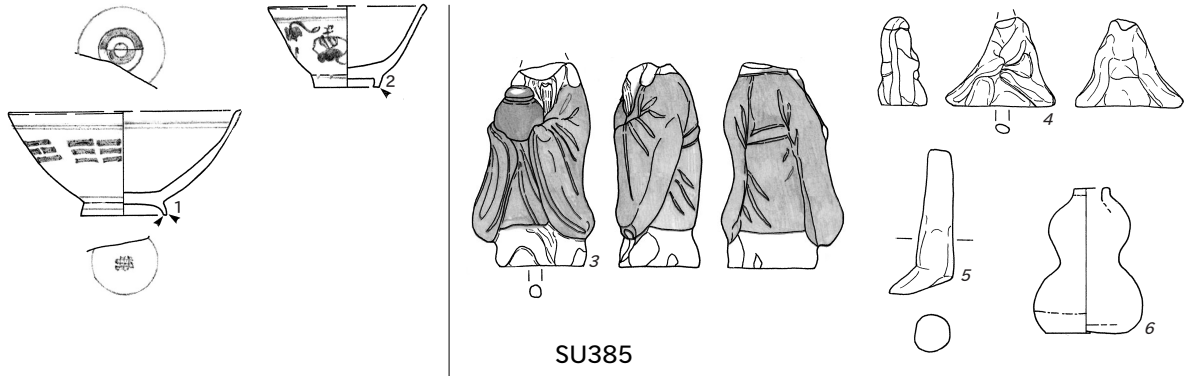
III-91 图 SU381 (2) · SU382 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



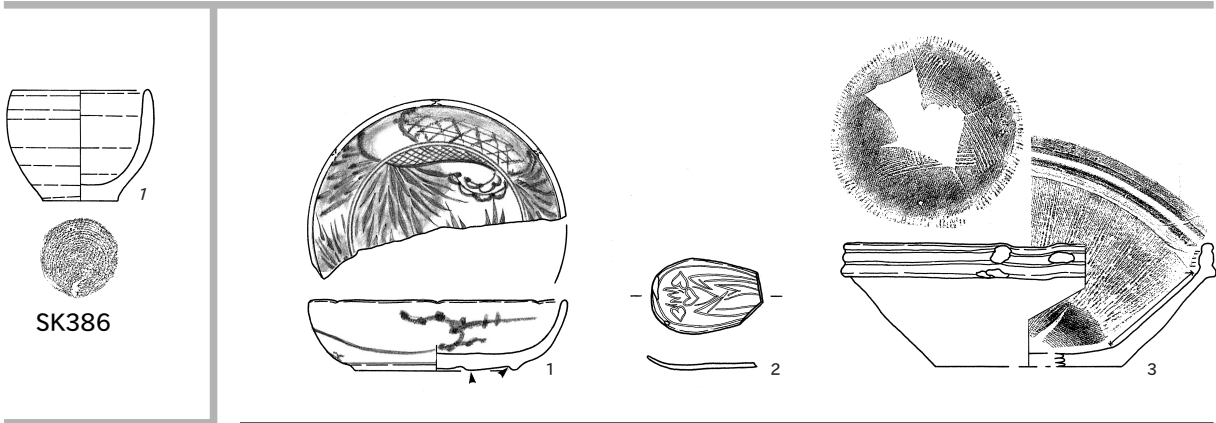
III-92 圖 SU382 (2) 磁器・陶器・土器



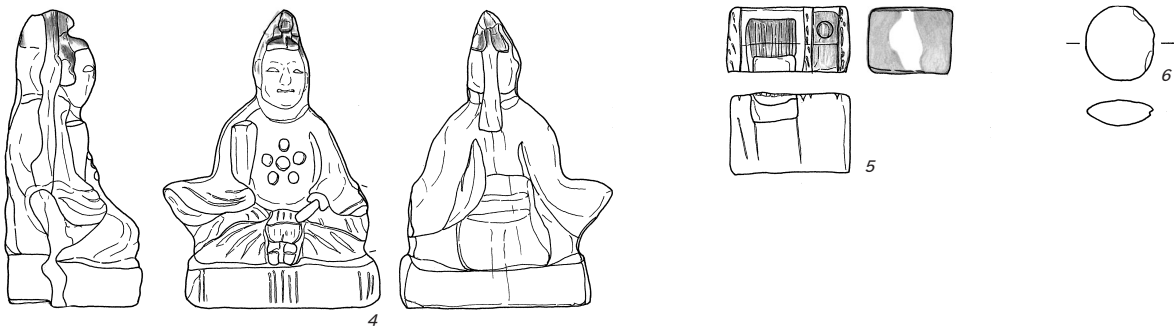
III-93 圖 SU382 (3) · SK383 磁器 · 陶器 · 土器



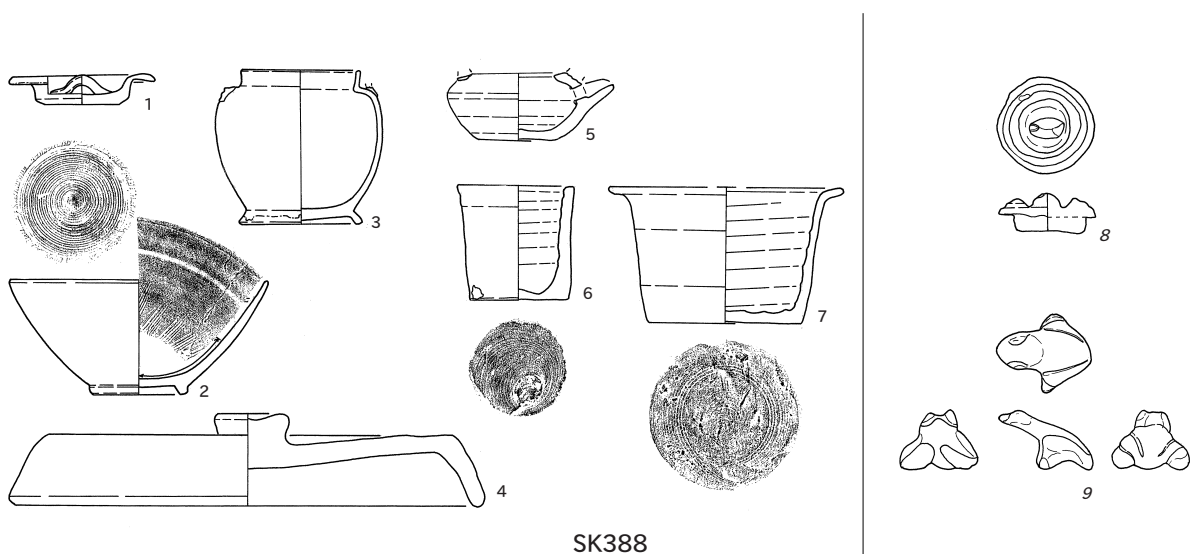
SU385



SK386



SK387



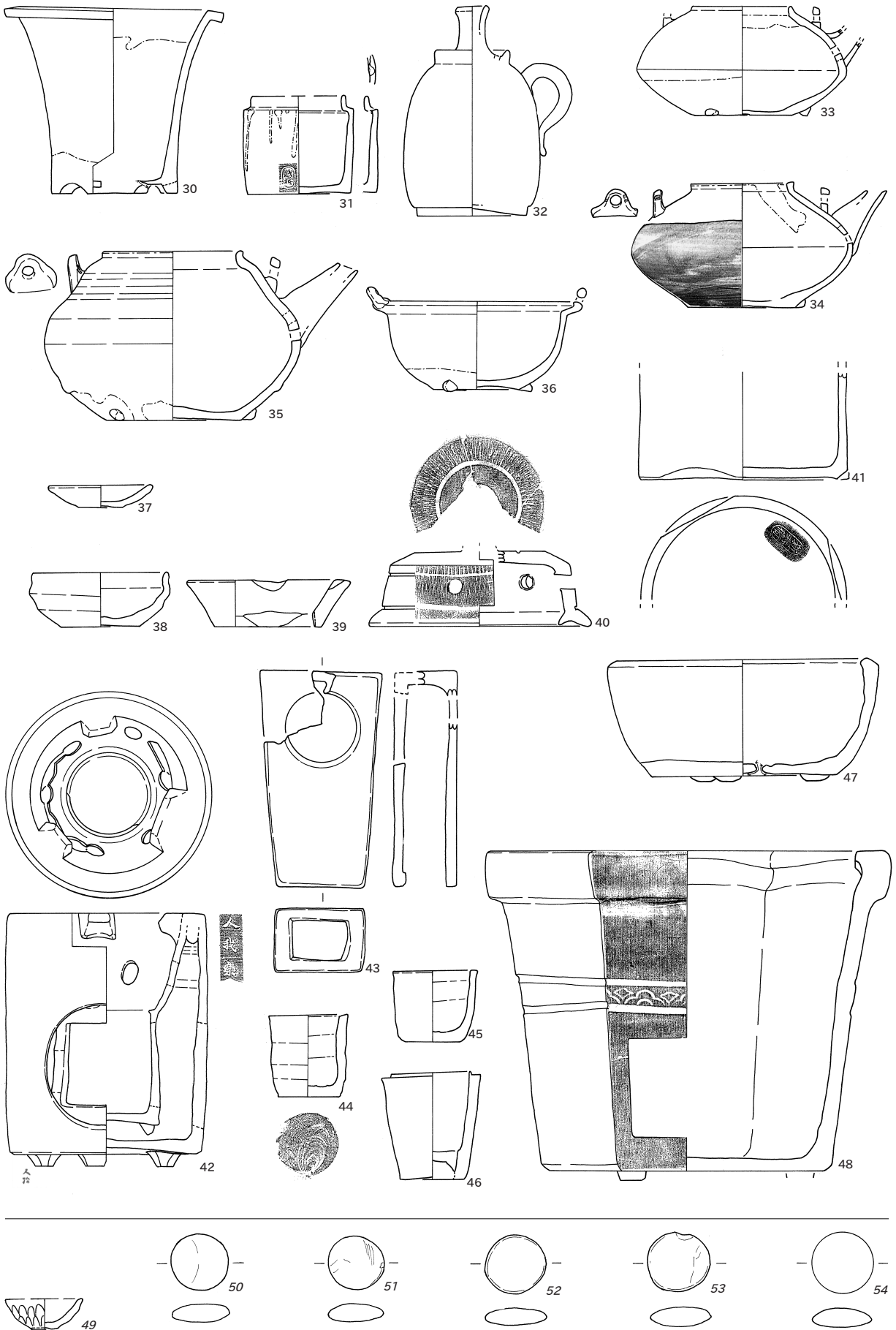
SK388

III-94 圖 SU385・SK386・SK387・SK388 磁器・陶器・土器



III-95 圖 SU389 (1) 磁器・陶器・土器

第1節 磁器・陶器・土器



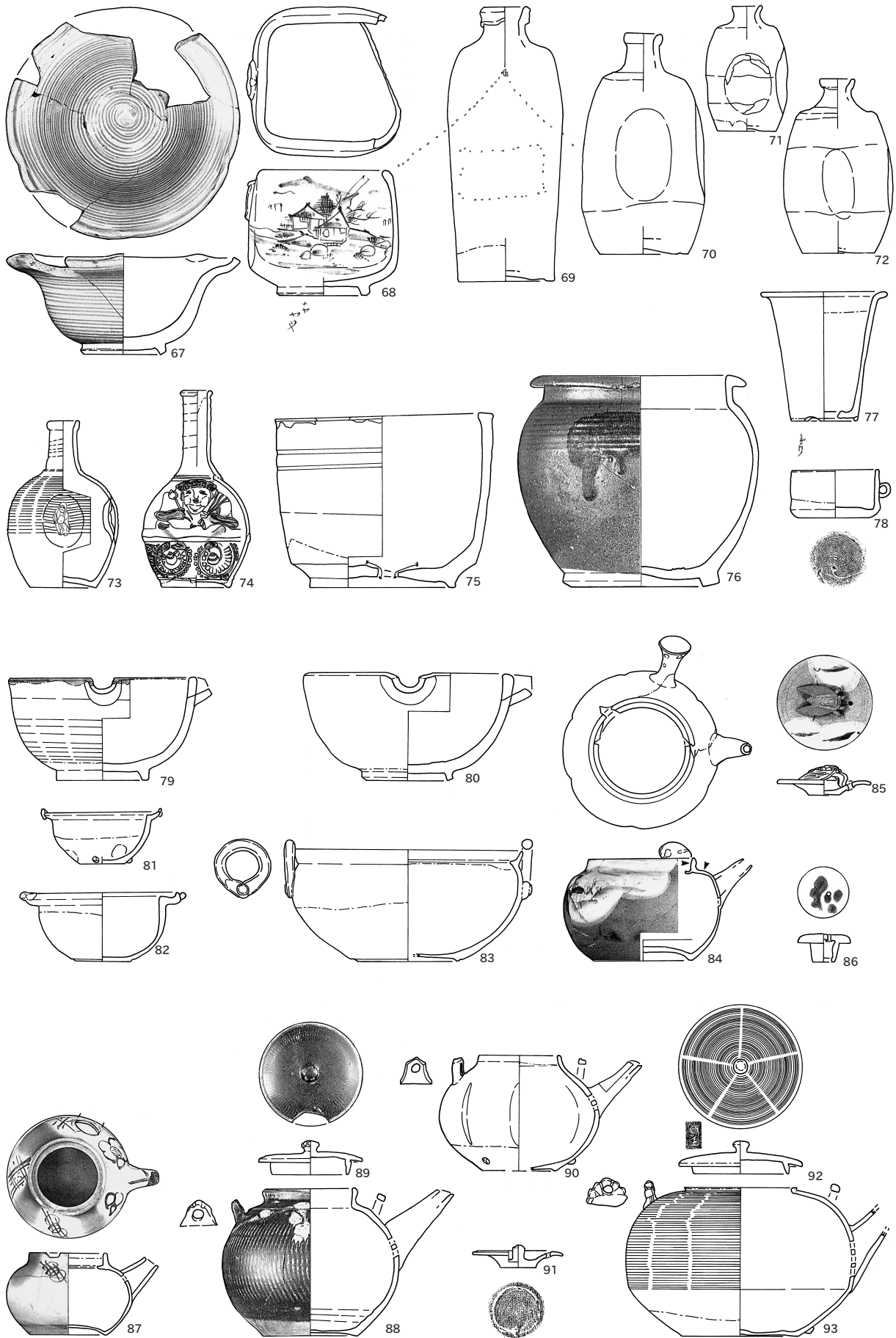
III-96 圖 SU389 (2) 磁器・陶器・土器



III-97 圖 SK390 · SK391 · SK392 (1) 磁器 · 陶器 · 土器



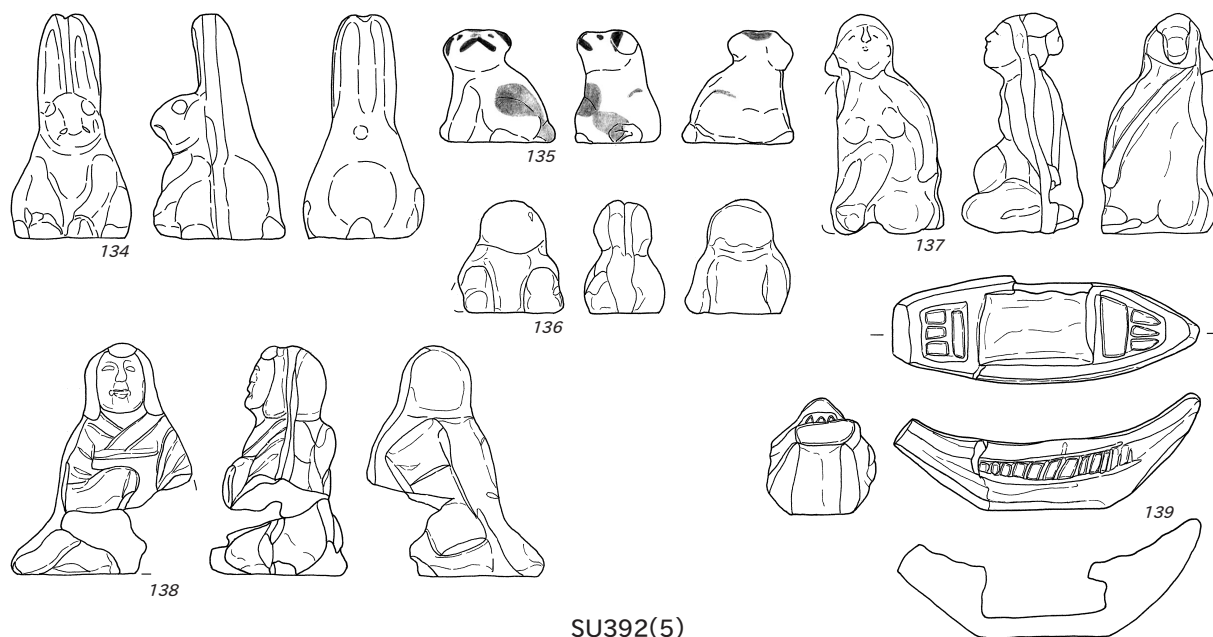
III-98 圖 SU392 (2) 磁器·陶器·土器



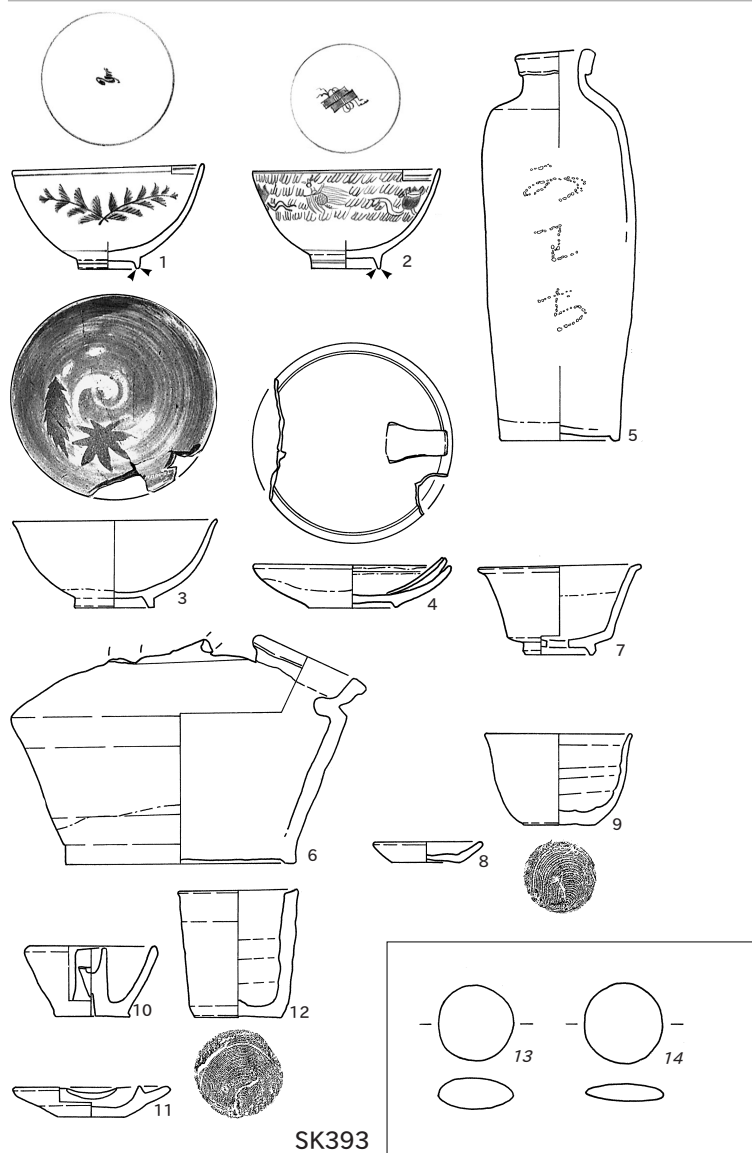
III-99 圖 SU392 (3) 磁器・陶器・土器



III-100 圖 SU392 (4) 磁器・陶器・土器



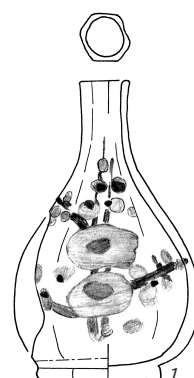
SU392(5)



SK393



SK394



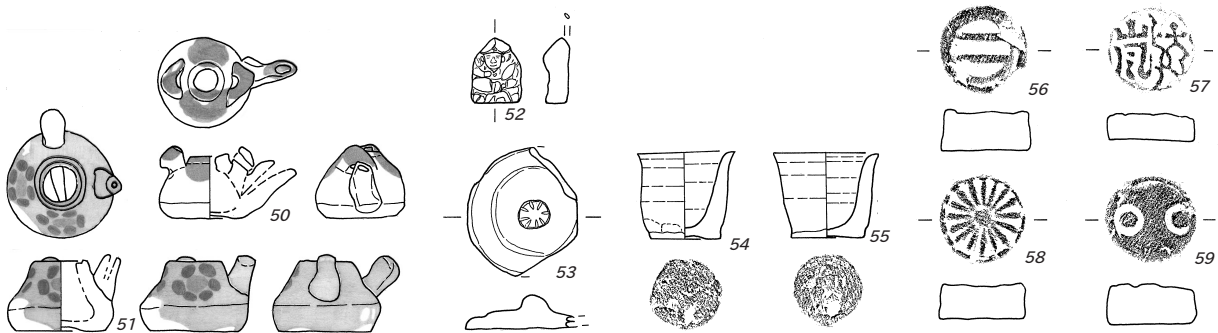
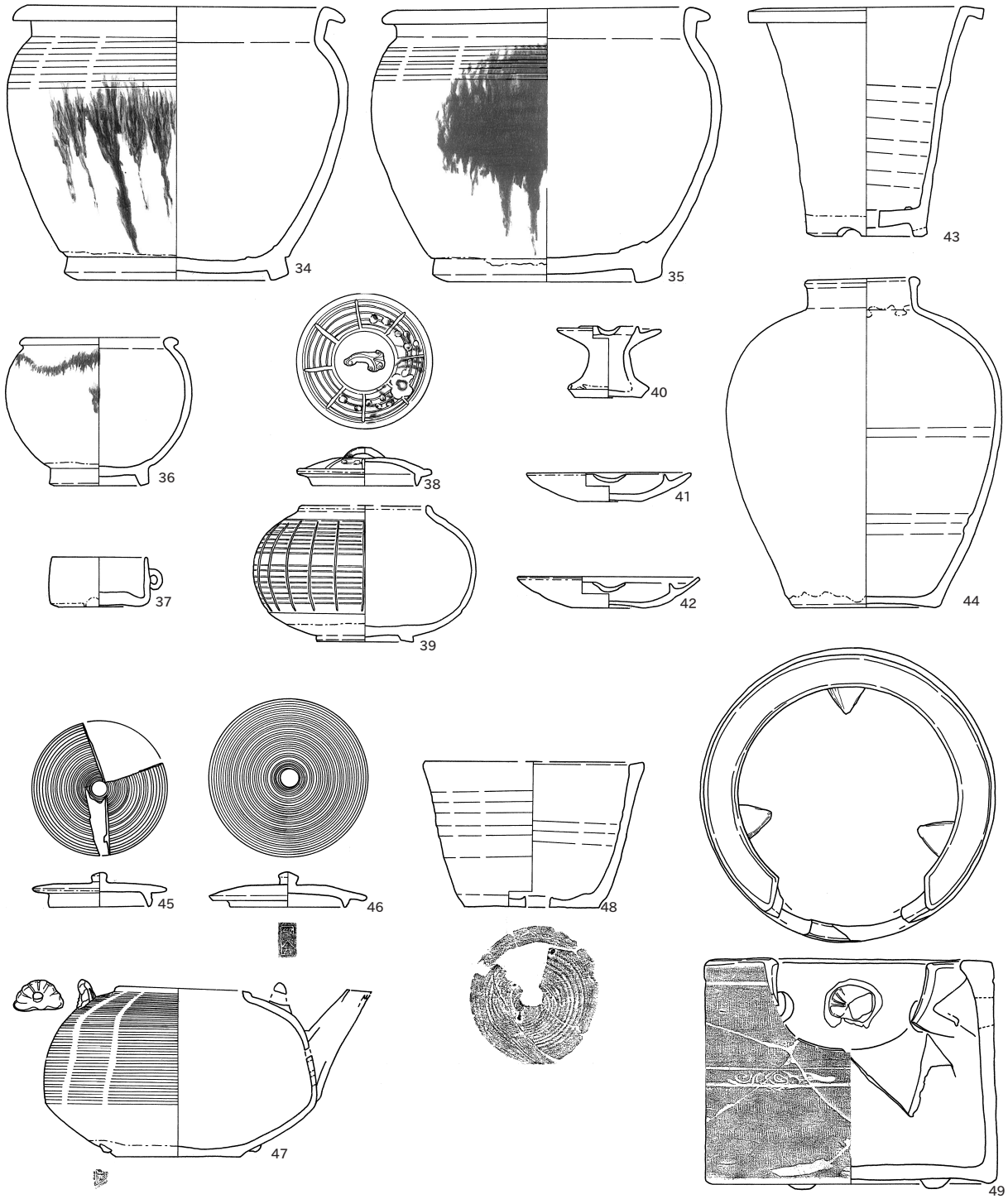
SK395

III-101 図 SU392 (5) · SK393 · SK394 · SK395 磁器 · 陶器 · 土器

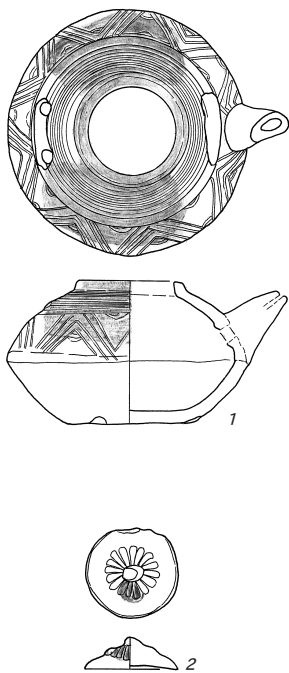
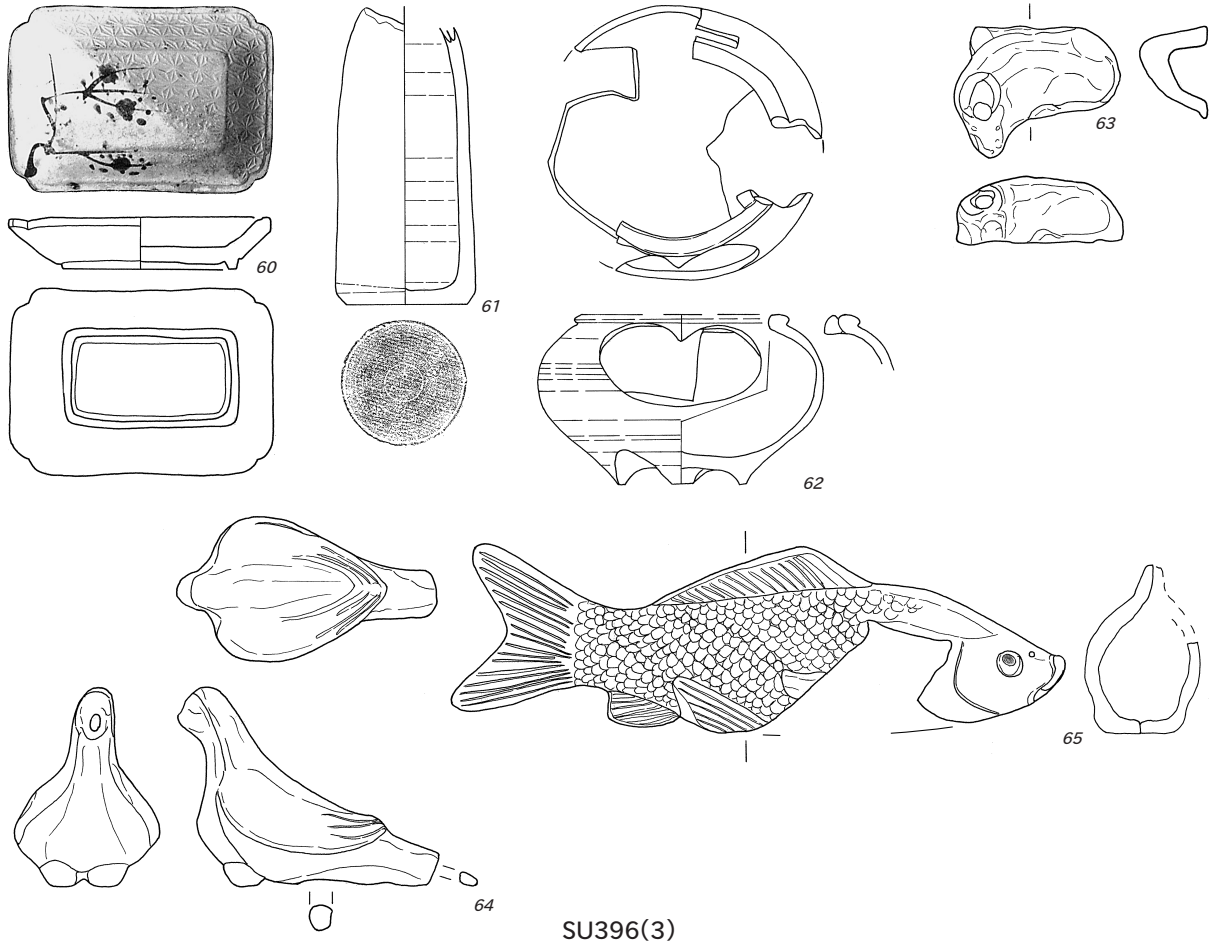
第1節 磁器·陶器·土器



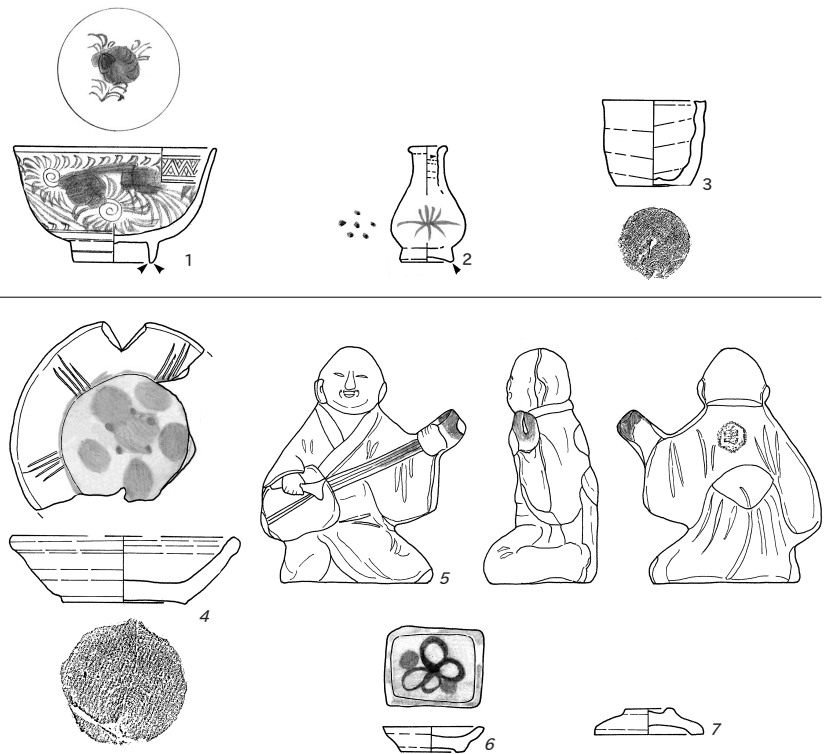
III-102 图 SU396 (1) 磁器·陶器·土器



III-103 圖 SU396 (2) 磁器・陶器・土器

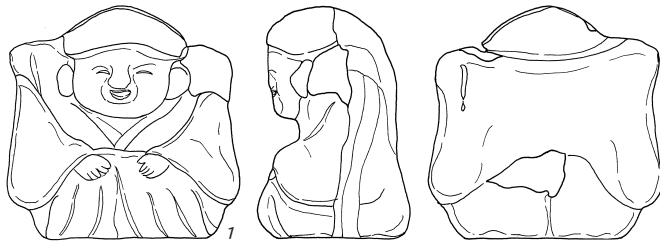


SB397

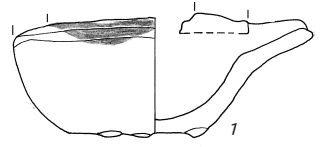
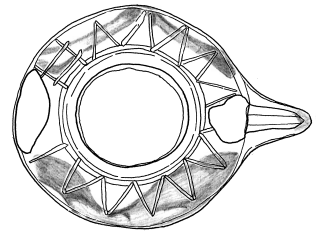


SK398

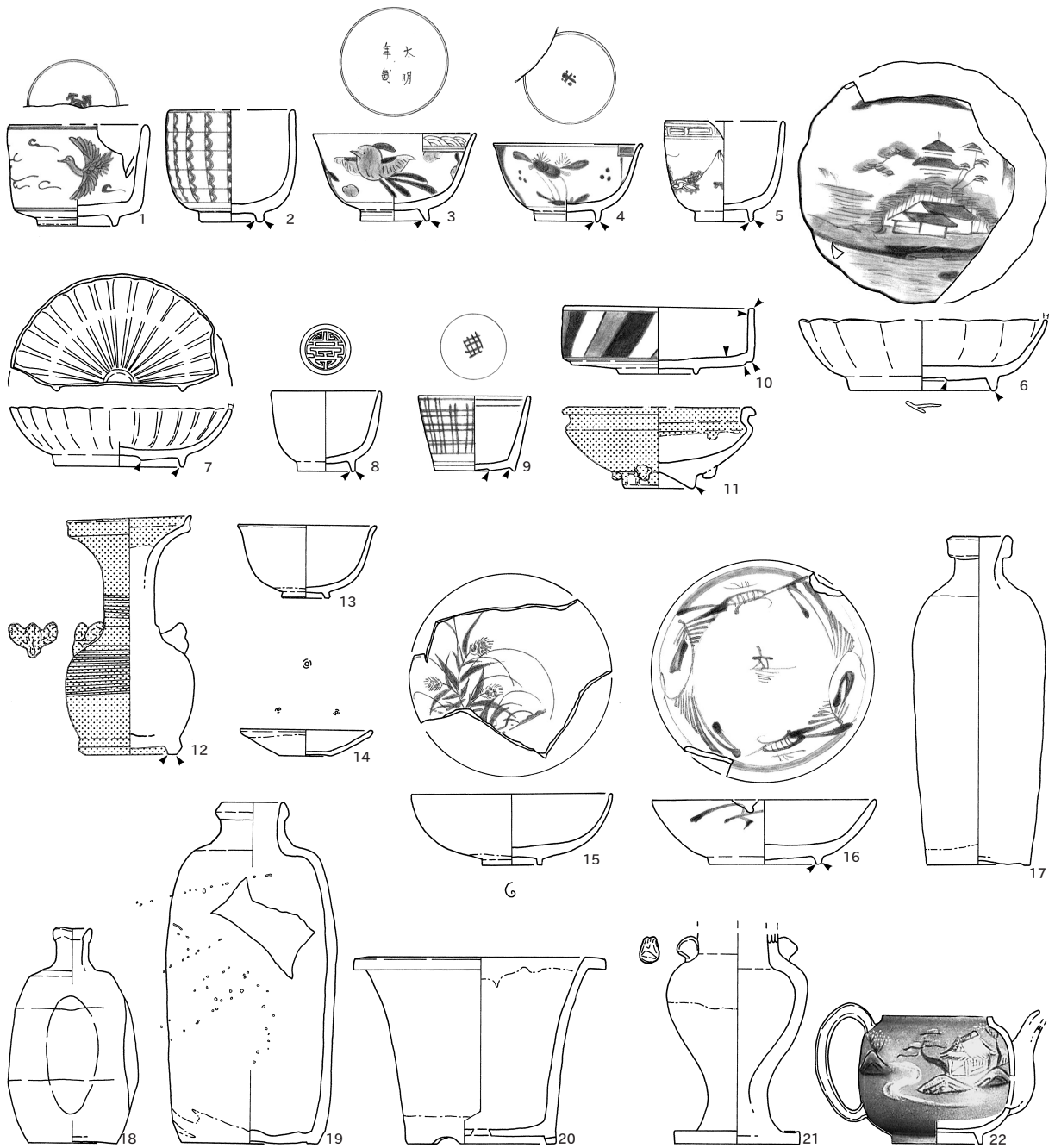
III-104 圖 SU396 (3) · SB397 · SK398 磁器・陶器・土器



SK399



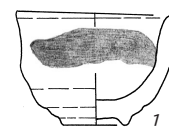
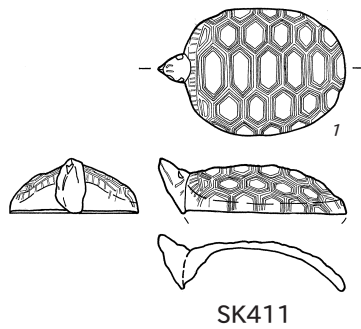
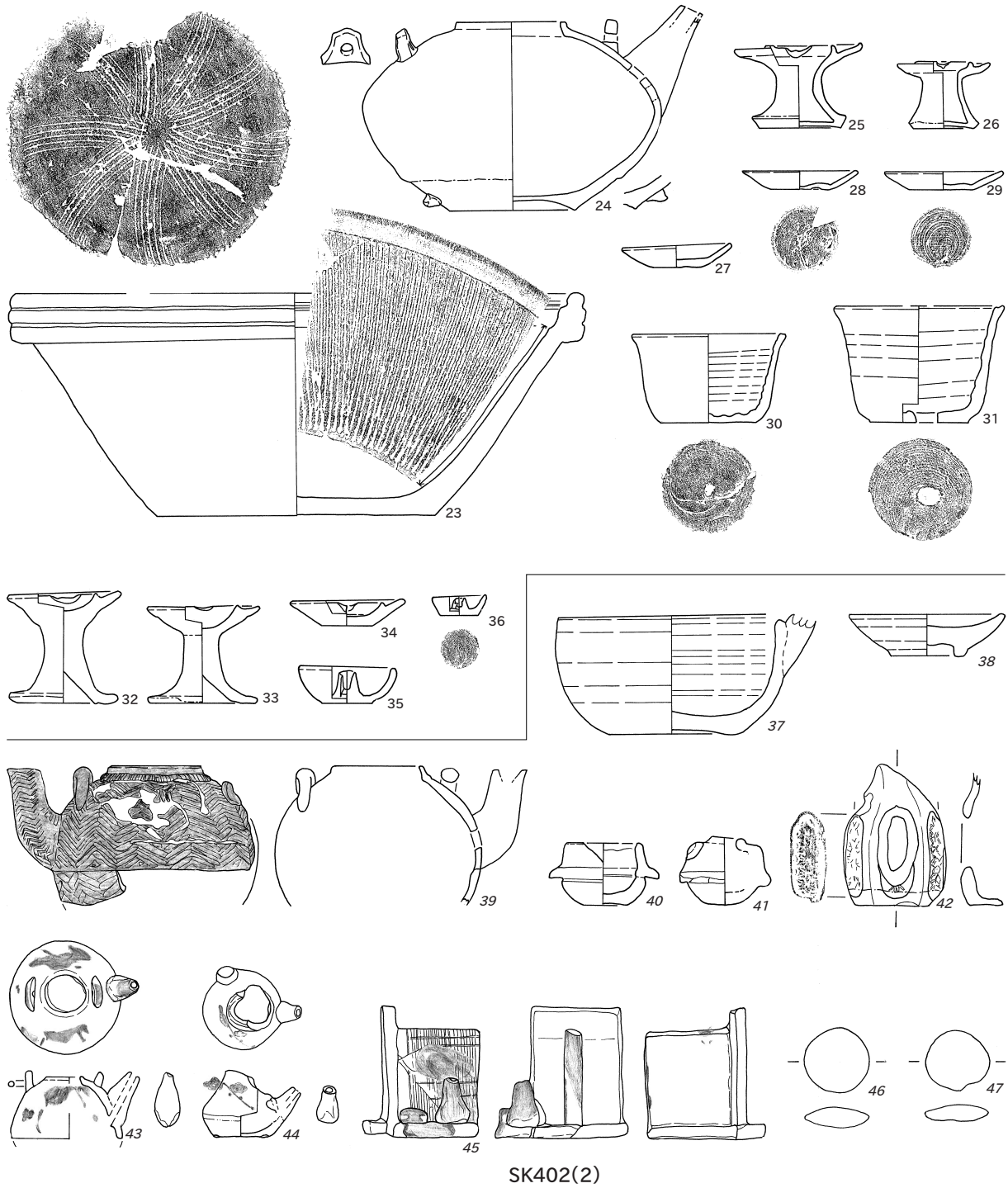
SK401



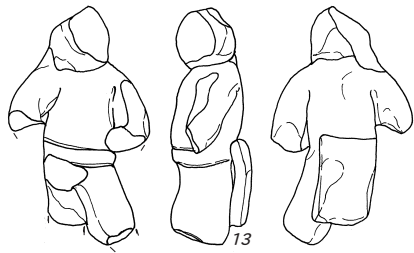
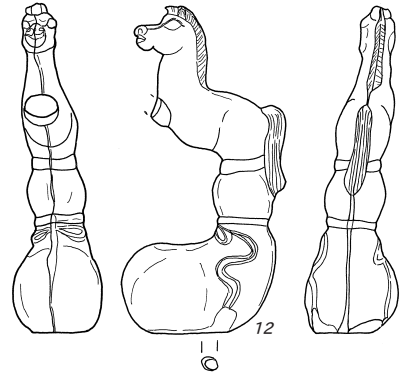
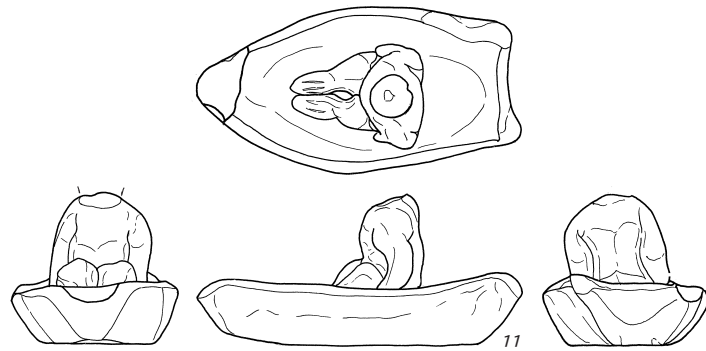
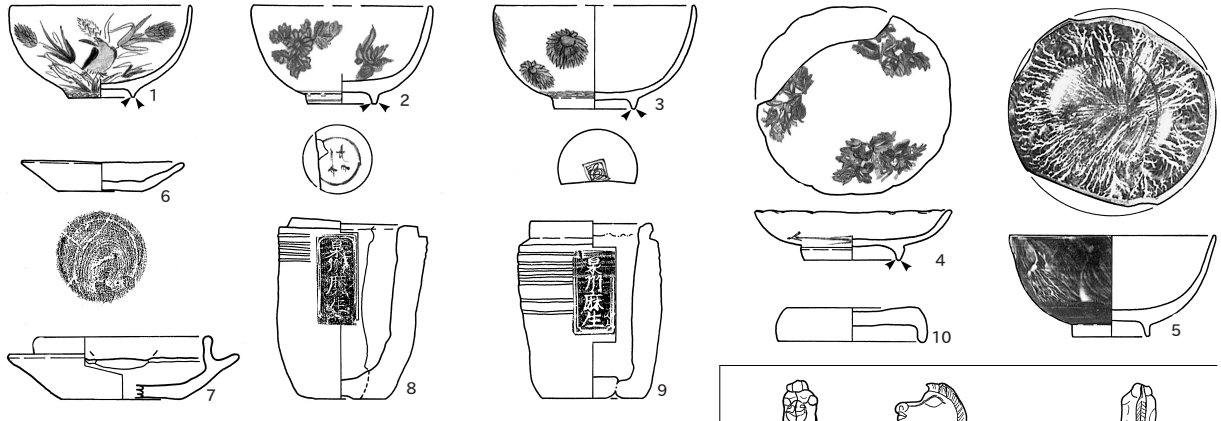
SK402(1)

III-105 图 SK399 · SK401 · SK402 (1) 磁器 · 陶器 · 土器

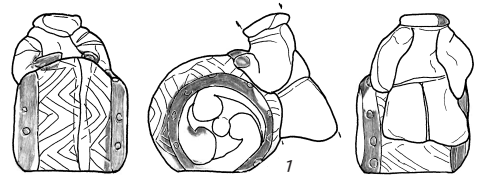
第1節 磁器·陶器·土器



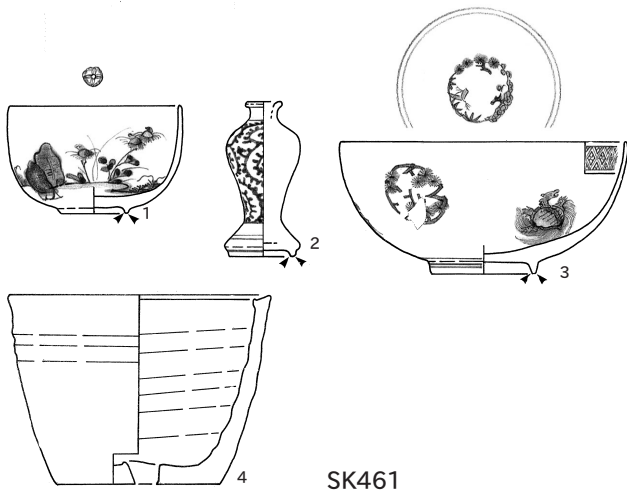
III-106 圖 SK402 (2) · SK411 · SK414 磁器·陶器·土器



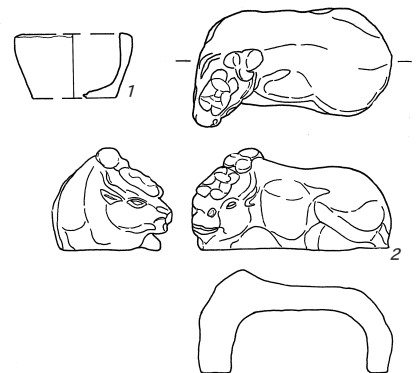
SK415



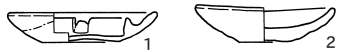
SE416



SK461



SK480



SK507

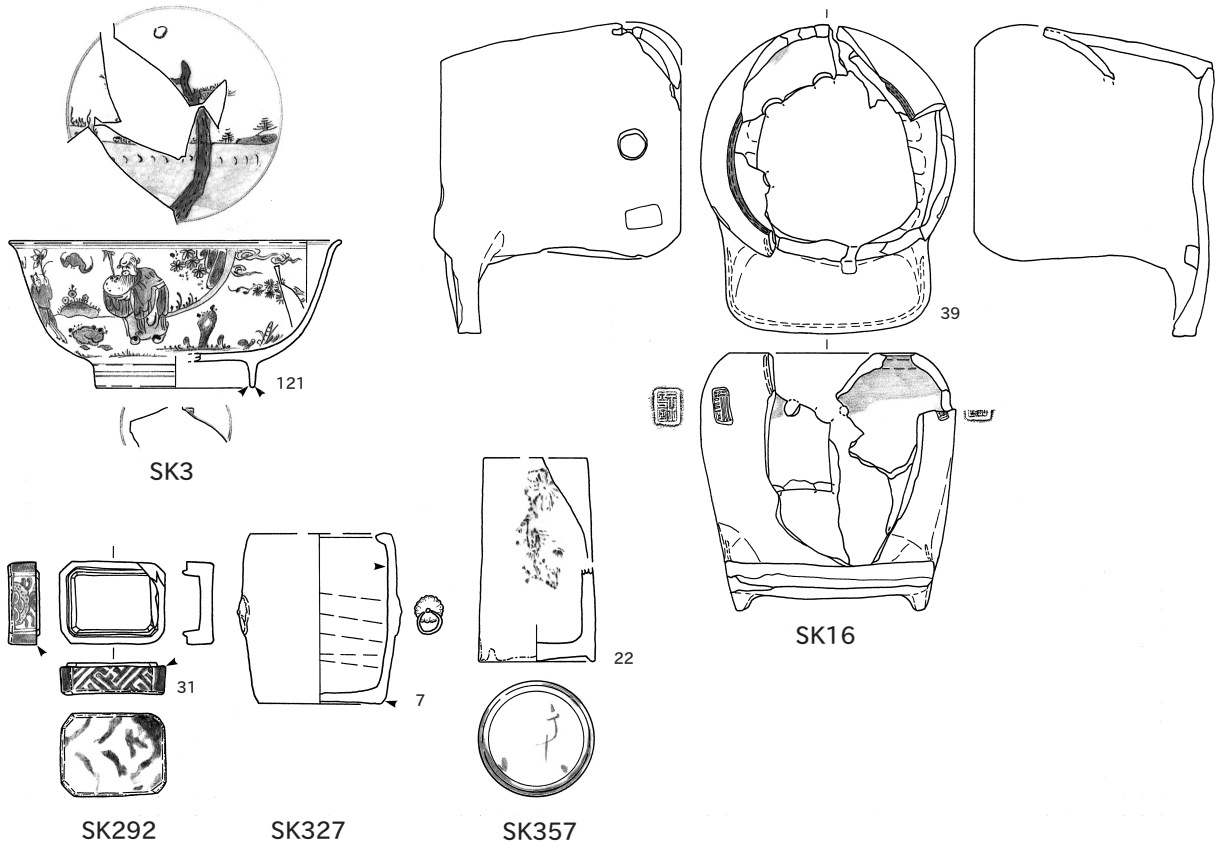
III-107 圖 SK415 · SE416 · SK461 · SK480 · SK507 磁器 · 陶器 · 土器



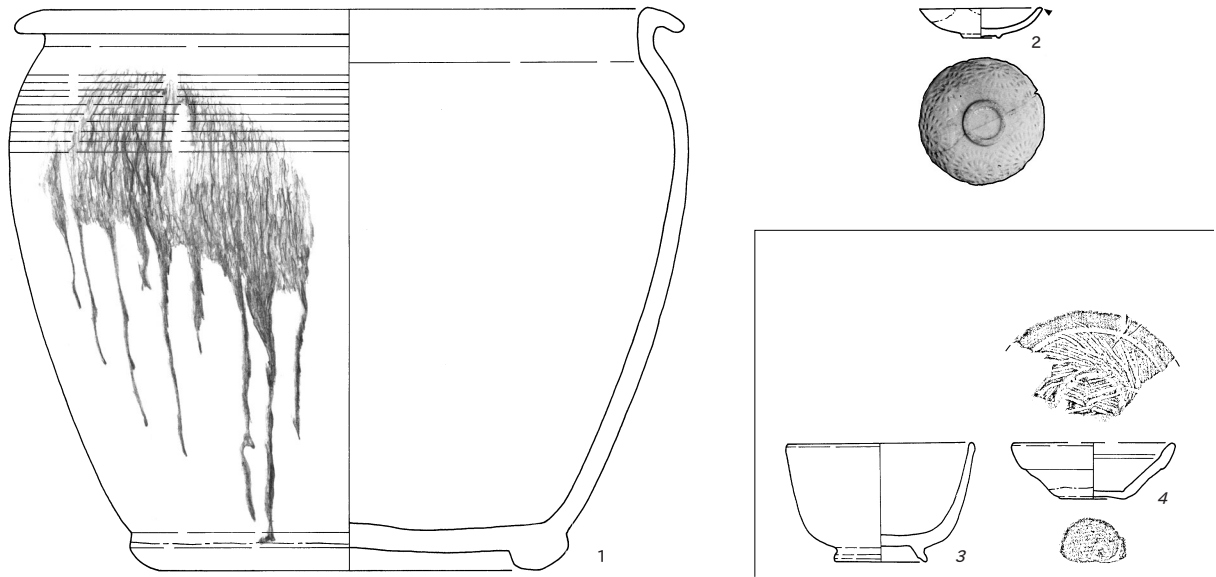
III-108 圖 遺構外 (1) 磁器·陶器·土器



遺構外(2)



III-109 図 遺構外(2)・遺構追加磁器・陶器・土器



Ⅲ-110 図 SK36 磁器・陶器・土器

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

| | |
|------------|------------|
| A - 輸入陶磁器 | E - 備前系 |
| A1 景德鎮窯系 | F - 志戸呂系 |
| A2 漳州窯系 | G - 常滑系 |
| A3 徳化窯系 | H - 萩系 |
| A4 龍泉窯系 | I - 万古系 |
| A5 宜興窯系 | J - 大堀・相馬系 |
| A6 朝鮮 | K - 丹波系 |
| A7 ベトナム | L - 堺系 |
| A8 ヨーロッパ | M - 益子・笠間系 |
| B - 肥前系 | N - 九谷系 |
| C - 瀬戸・美濃系 | O - 壺屋系 |
| D - 京都・信楽系 | P - 淡路系 |
| | Z - 不明 |

○器種

| | | | | |
|-----------|----------|---------|-----------|-------------|
| 1. 碗 | 2. 皿 | 3. 大皿 | 4. 爛徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 爛鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 洩瓶 | 29. 播鉢 | 30. 餌入 |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 葉研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | 55. 泥面子・芥子面 |
| 56. 碁石形製品 | 57. 玉 | 58. 鈴 | 59. 笛 | 60. 人形 |
| 61. ミニチュア | 62. 面形 | | | 00. 蓋 |

Ⅲ-1 表 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (略)

| 段階 | 胎質・産地 器種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------------|---|---|---|---|---|--------|----|---|-----|---|---|-------|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|----|
| | JB (胎前系磁器) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2 (皿) | | | | | | 3 (大皿) | | | 4 | | | 5 (鉢) | | | | | | | | | | | | |
| | k | l | m | n | o | p | q | r | 他 | 小計 | a | b | c | d | e | f | g | h | 小計 | | | | | | |
| Ⅷc | | | | | | | 5 | | | 7 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷd | | | | | | | | | 1 | 16 | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | |
| SK3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | |
| Ⅷa | 1 | | | | | | | 1 | | 4 | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| Ⅷf~Ⅷi | | | | | | | | 4 | | 18 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU18 | | | | | | | | | 2 | 14 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷe | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU63 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷa~b | 1 | | | | | | 4 | | | 22 | | | | | | | | | 2 | | | | | | |
| SU101 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷc | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU176 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷa~b | 1 | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| SU188 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷb~c | 1 | | | | | | | | | 14 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU292 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SK293 | | | | | | | | | | 18 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU294 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| V~Ⅵ | | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅶ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SK330 | | | | | | | | | | 8 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| 明治中葉 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SK358 | | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷe | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU382 | | | | | | | | | | 7 | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| Ⅷd | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SU392 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷd | | | | | | | | | | 6 | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| SU396 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷc | | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| SK402 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Ⅷe~Ⅷi | | | | | | | | | | 6 | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| 合計 | 3 | 4 | 4 | 1 | 4 | 1 | 21 | 12 | 5 | 171 | 0 | 3 | 0 | 1 | 1 | 0 | 5 | 0 | 23 | 0 | 6 | 3 | 1 | 2 | 35 |

| 段階 | 胎質・産地 器種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------------|----|----|--------|---|----|---------|-----|---|------------|---|----|--------|---|----|---|----|----|---|---|---|---|----|---|---|---|----|
| | JB (胎前系磁器) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 6 (杯) | | | 7 (猪口) | | | 8 (仏飯器) | | | 9 (香炉・火入れ) | | | 10 (瓶) | | | | | | | | | | | | | | |
| | a | b | c | d | e | f | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | | | | |
| Ⅷc | 3 | 3 | 4 | | | | | 13 | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU2 | 4 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷb~Ⅷd | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SK3 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷa | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SK16 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷf~Ⅷi | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU18 | 5 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷb~Ⅷe | 5 | 4 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU63 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷa~b | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SK101 | 1 | 3 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷb~Ⅷc | 1 | 3 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU176 | 7 | 2 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷ | 5 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SK188 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷb~c | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU292 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷ | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU294 | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷ | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SK330 | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| 明治中葉 | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SK358 | 5 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷb~Ⅷe | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU382 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷd | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU392 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷc | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SU396 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| Ⅷe~Ⅷi | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| SK402 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | | |
| 合計 | 55 | 22 | 27 | 0 | 8 | 25 | 10 | 147 | 6 | 17 | 0 | 23 | 3 | 0 | 21 | 3 | 27 | 0 | 2 | 2 | 2 | 1 | 2 | 8 | 1 | 0 | 15 |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表(2)

| 段階 | JB (肥前系磁器) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|------------|-----|----|-------|---|---|-----------|----|----|----|----|---|--------|---|---|----|---|----|----|---|---|--------|----|---|----|---|---|----|---|---|----|---|----|----|---|---|----|--|--|--------|--|--|
| | 胎質・産地 | | | 10(瓶) | | | 11(御神酒德利) | | | 12 | | | 13(蓋物) | | | 15 | | | 16 | | | 18(合子) | | | 19 | | | 20 | | | 21 | | | 22 | | | 24 | | | 27(水注) | | |
| | 器種 | 小分類 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | | | | | | | | | |
| Ⅷc | SU2 | 0 | 2 | 2 | 1 | 1 | 4 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷd | SK3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 5 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | |
| Ⅷa | SK16 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SU18 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅷ | SU63 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | |
| Ⅷa~b | SK101 | 2 | 5 | 5 | 1 | 4 | 11 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅷ・Ⅷa~b | SU176 | 0 | 9 | 9 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | |
| Ⅷb~c | SK188 | 3 | 1 | 2 | 2 | 4 | 6 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | | | | | | | |
| Ⅷ | SK292 | 1 | 2 | 2 | 0 | 1 | 4 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | 0 | 4 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | | | | | | |
| V~Ⅷ | SU294 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| Ⅷ | SK330 | 0 | 3 | 3 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU382 | 0 | 4 | 4 | 0 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | |
| Ⅷd | SU392 | 0 | 2 | 2 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | |
| Ⅷc | SU396 | 0 | 4 | 4 | 1 | 2 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SK402 | 5 | 4 | 4 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | | | | | | |
| 合計 | | 16 | 3 | 46 | 0 | 0 | 49 | 6 | 31 | 17 | 16 | 3 | 67 | 5 | 1 | 3 | 6 | 2 | 11 | 4 | 3 | 1 | 6 | 0 | 1 | 6 | 0 | 1 | 6 | 0 | 1 | 6 | 0 | 1 | 6 | | | | | | | |

| 段階 | JB (肥前系磁器) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | JC (瀬戸・美濃系磁器) | | | | | | | | | | | |
|-----------|------------|-----|----|----|----|----|----|----|---|----|---|---|-------|---|----|---|---|----|----|---|-----|------|-------|----|---|----|-----|---------------|---|----|----|---|----|---|----|---|----|---|--|
| | 胎質・産地 | | | 29 | | | 34 | | | 35 | | | OO(蓋) | | | 他 | | | 合計 | | | 1(碗) | | | a | | | b | | | c | | | d | | | e | | |
| | 器種 | 小分類 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | | | | | | |
| Ⅷc | SU2 | 0 | 2 | 2 | 1 | 1 | 4 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 3 | 6 | 47 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | |
| Ⅷb~Ⅷd | SK3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 5 | 3 | 3 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | |
| Ⅷa | SK16 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SU18 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | |
| Ⅳb~Ⅷ | SU63 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | |
| Ⅷa~b | SK101 | 2 | 5 | 5 | 1 | 4 | 11 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | |
| Ⅳb~Ⅷ・Ⅷa~b | SU176 | 0 | 9 | 9 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | |
| Ⅷb~c | SK188 | 3 | 1 | 2 | 2 | 4 | 6 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | | |
| Ⅷ | SK292 | 1 | 2 | 2 | 0 | 1 | 4 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | | |
| Ⅷ | SK293 | 0 | 4 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | 1 | 4 | |
| V~Ⅷ | SU294 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | |
| Ⅷ | SK330 | 0 | 3 | 3 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | |
| 明治中葉 | SK358 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU382 | 0 | 4 | 4 | 0 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅷd | SU392 | 0 | 2 | 2 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅷc | SU396 | 0 | 4 | 4 | 1 | 2 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅷ~Ⅷ | SK402 | 5 | 4 | 4 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | 2 | 6 | 1 | 3 | |
| 合計 | | 0 | 0 | 3 | 26 | 26 | 27 | 1 | 9 | 23 | 6 | 1 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 7 | 135 | 1 | 1,126 | 23 | 2 | 12 | 186 | 20 | 1 | 14 | 14 | 1 | 14 | 1 | 14 | 1 | 14 | | |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表(3)

| 段階 | 胎質・産地 | | JC (瀬戸・美濃系磁器) | | | JN (九谷系磁器) | | | JP (淡路系磁器) | | | JZ (産地不明) | | | | | | 磁器 合計 | | | | | | |
|-----------|-------|----|---------------|----|-----|------------|---|---|------------|---|---|-----------|---|----|----|---|---|-------|----|----|---|----|-----|-------|
| | 器種 | 小計 | 他 | 合計 | 1 | 2 | 6 | 他 | 合計 | 2 | 6 | 20 | 他 | 合計 | JD | 1 | 2 | 6 | 16 | 18 | 他 | 合計 | | |
| Ⅷc | SU2 | 3 | | 25 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | 3 | | | | | 3 | 78 | |
| Ⅷb~Ⅷd | SK3 | 8 | | 52 | | | | 0 | | 0 | | | | 0 | | | | 1 | | | | 1 | 140 | |
| Ⅷa | SK16 | 1 | | 19 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 47 | |
| Ⅷ~Ⅷ | SU18 | 0 | | 0 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 70 | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU63 | 0 | | 0 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 74 | |
| Ⅷa~b | SK101 | 7 | | 99 | | | | 0 | | | | | | 0 | | 1 | | | 1 | | | 2 | 278 | |
| Ⅷb~Ⅷ・Ⅷa~b | SU176 | 1 | | 18 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 97 | |
| Ⅷb~c | SK188 | | | 5 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 95 | |
| Ⅷ | SK292 | 6 | | 37 | | | | 0 | | | | | | 0 | | 2 | | | 1 | | | 1 | 133 | |
| Ⅷ | SK293 | 4 | | 60 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 171 | |
| V~Ⅷ | SU294 | 0 | | 1 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 33 | |
| Ⅷ | SK330 | 0 | | 0 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 69 | |
| 明治中葉 | SK358 | 4 | | 52 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | 1 | | | | 1 | 87 | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU382 | 1 | | 1 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 53 | |
| Ⅷd | SU392 | 1 | | 72 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | 1 | | | | 1 | 123 | |
| Ⅷc | SU396 | 4 | | 38 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 80 | |
| Ⅷ~Ⅷ | SK402 | 4 | | 24 | | | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | 0 | 86 | |
| 合計 | | 3 | 58 | 0 | 530 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 3 | 3 | 1 | 1 | 0 | 9 | 1,714 |

| 段階 | 胎質・産地 | TB (肥前系陶器) | | | | | | | | | | 2 (皿) | | | | | 5 (鉢) | | | | | | | |
|-----------|-------|------------|-----|-----|-----|---|----|---|---|---|---|-------|---|---|---|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|
| | | TA5 | TA6 | TA7 | TA8 | 他 | 合計 | a | b | c | d | f | g | h | i | 他 | 小計 | a | b | | | | | |
| Ⅷc | SU2 | | | | 1 | | 0 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | | |
| Ⅷb~Ⅷd | SK3 | | | | | | 0 | 2 | | | 1 | | | | | | 4 | | | | 0 | | | |
| Ⅷa | SK16 | | | | | | 0 | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | 0 | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SU18 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU63 | | | | | | 0 | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | 0 | | | |
| Ⅷa~b | SK101 | | | | | | 0 | | | 1 | | | | | 1 | | 2 | | | | 0 | | | |
| Ⅷb~Ⅷ・Ⅷa~b | SU176 | | | | | | 0 | 1 | 1 | 3 | | | | | | | 5 | | | | 0 | | | |
| Ⅷb~c | SK188 | | | | | | 0 | 1 | 1 | | | | 2 | | | | 8 | | | | 0 | | | |
| Ⅷ | SK292 | | | | | | 0 | | | 1 | | | | | | | 1 | | | | 0 | | | |
| Ⅷ | SK293 | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | 3 | | | | 0 | | | |
| V~Ⅷ | SU294 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | | |
| Ⅷ | SK330 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | | |
| 明治中葉 | SK358 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | 0 | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU382 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | | |
| Ⅷd | SU392 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | | |
| Ⅷc | SU396 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | 0 | | | | 0 | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SK402 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | 2 | | | | 0 | | | |
| 合計 | | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 2 | 4 | 5 | 5 | 3 | 5 | 2 | 1 | 0 | 27 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表 (5)

| 段階 | 胎質・産地 器種 小分類 | TB (肥前系陶器) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|--------------------|------------|---|---|----|------------|---|---|---|---------|---|---|---|----|---|---|---|----------|---|---|---|---------|---|---|---|--------|---|---|---|
| | | 5 (鉢) | | | | 9 (香炉・火入れ) | | | | 13 (蓋物) | | | | 15 | | | | 23 (片口鉢) | | | | 29 (播鉢) | | | | OO (蓋) | | | |
| | | c | d | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | 他 | 小計 | a | b | 他 | 小計 | a | b | 他 | 小計 | a | b | 他 | 小計 | a | b | |
| Ⅷc | SU2 | | | 1 | 2 | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵb~Ⅷd | SK3 | | | 1 | 1 | 2 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa | SK16 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa~b | SK101 | | | 1 | 1 | 1 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅴ・Ⅷa~b | SU176 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~c | SK188 | | | | | 0 | | 0 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK292 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | | | 1 | 1 | 1 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| V~Ⅵ | SU294 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ | SK330 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵb~Ⅶ | SU382 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷd | SU392 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷc | SU396 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ~Ⅷ | SK402 | | | | | 0 | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 1 | 2 | 1 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

| 段階 | 胎質・産地 器種 小分類 | TC (瀬戸・美濃系陶器) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|--------------------|---------------|---|----|----|---|---|----|---|---|---|---|---|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|
| | | TB (肥前系陶器) | | | | | | | | | | | | | 1 (碗) | | | | | | | | | | | | | |
| | | OO (蓋) | 他 | 小計 | 合計 | a | b | c | d | f | g | h | i | j | k | l | m | n | o | p | q | r | s | u | v | w | x | |
| Ⅷc | SU2 | | | 0 | 0 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵb~Ⅷd | SK3 | | | 0 | 7 | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | 1 | 0 | | | | | | 0 |
| Ⅷa | SK16 | | | 0 | 1 | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | | | 0 | 1 | 2 | | | 1 | | 1 | | | | 3 | | 1 | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | | 0 | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | 2 | | 1 | | | | | 1 |
| Ⅷa~b | SK101 | | | 0 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| Ⅳb~Ⅴ・Ⅷa~b | SU176 | | | 0 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| Ⅷb~c | SK188 | | | 0 | 9 | | | 1 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| Ⅷ | SK292 | | | 0 | 1 | | | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| Ⅷ | SK293 | | | 0 | 4 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| V~Ⅵ | SU294 | | | 0 | 0 | | | | | 1 | | | | 1 | 2 | | 1 | | | | 0 | | | | | | | 1 |
| Ⅶ | SK330 | | | 0 | 0 | | | 0 | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 明治中葉 | SK358 | | | 0 | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| Ⅵb~Ⅶ | SU382 | | | 0 | 0 | | | | 3 | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | 5 |
| Ⅷd | SU392 | | | 0 | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| Ⅷc | SU396 | | | 0 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| Ⅶ~Ⅷ | SK402 | | | 0 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | 1 |
| 合計 | | 0 | 0 | 0 | 35 | 3 | 0 | 10 | 6 | 0 | 3 | 0 | 2 | 1 | 1 | 7 | 1 | 3 | 0 | 0 | 5 | 1 | 4 | 12 | 2 | 2 | 0 | |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表(6)

| 段階 | 胎質・産地 器種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------------|---|----|----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|
| | 1 (碗) | | | | | | | | | | | | | 2 (皿) | | | | | | | | | | | | | |
| | y | z | aa | ab | ac | ad | ae | af | 他 | 小計 | a | b | c | e | f | g | h | i | j | k | l | m | n | o | p | q | |
| Ⅶc | SU2 | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~Ⅶd | SK3 | | | | | | | | 5 | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶa | SK16 | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | | | | | | | 1 | 11 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | | | | | | 3 | 9 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| Ⅶa~b | SK101 | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅴ・Ⅶa~b | SU176 | | | | | | | | 1 | 2 | | | | 0 | 1 | | | | | | | | | | 1 | | |
| Ⅶb~c | SK188 | | | | | | | | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| Ⅷ | SK292 | | | | | | | 1 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | | 1 | | | 0 | | 1 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| V~Ⅵ | SU294 | | | | | | | 1 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| Ⅶ | SK330 | | | | | | | | 3 | | | | 1 | | 0 | | | | | | | | | | | 4 | |
| 明治中葉 | SK358 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~Ⅶ | SU382 | | | | | | | 1 | 11 | | | | 2 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| Ⅶd | SU392 | | | | | | | | 2 | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | 1 | |
| Ⅶc | SU396 | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ~Ⅷ | SK402 | | | | | | | | 4 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 5 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 12 | 1 | 0 |

| 段階 | 胎質・産地 器種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------------|---|---|---|----|----|---|---|---|---|---|---|---|-------|----|----|----|---|----|---|---|---|---|---|---|---|------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | 2 (皿) | | | | | | | | | | | | | 5 (鉢) | | | | | | | | | | | | | 9 (香炉・火入れ) | | | | | | | | | |
| | r | s | t | 他 | 小計 | a | c | f | h | i | j | k | l | 他 | 小計 | 6 | 8 | a | b | c | d | e | f | g | h | 他 | | | | | | | | | | |
| Ⅶc | SU2 | | | | 0 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~Ⅶd | SK3 | | | 2 | 4 | | 0 | | | | | | 2 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶa | SK16 | | | | 0 | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | | | | 1 | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | | | 3 | | | | | | | | 1 | 0 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶa~b | SK101 | | | | 1 | | 1 | | | | | | 2 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅴ・Ⅶa~b | SU176 | | | | 4 | | 1 | | | | | | 1 | 2 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~c | SK188 | | | | 2 | | | | | | | | 2 | 3 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK292 | | | | 0 | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | | | 1 | 2 | 7 | | 1 | | | | | 2 | 3 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| V~Ⅵ | SU294 | | | 1 | 1 | | 0 | | | 1 | | | 1 | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ | SK330 | | | | 5 | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | | | | 0 | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~Ⅶ | SU382 | | | 1 | 4 | | 1 | 3 | | | | | 1 | 1 | 6 | 4 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶd | SU392 | | | | 4 | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶc | SU396 | | | | 3 | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ~Ⅷ | SK402 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | 2 | 2 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 0 | 0 | 3 | 11 | 44 | 0 | 1 | 6 | 2 | 0 | 3 | 0 | 9 | 8 | 29 | 13 | 1 | 14 | 0 | 3 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | | | | | |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表 (7)

| 段階 | 胎質・産地 器種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------------|----|--------|-----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|----|----|----------|---|---|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---------|----|----|---|----|---|---|
| | 9 | | 10 (瓶) | | | | | | 12 | | | | | | 15 (壺・甕) | | | | | | 17 | | 18 | | 19 | | 21 | | 22 (花生) | | 他 | | | | |
| | 小計 | 小計 | a | b | c | d | e | f | g | h | k | 他 | 小計 | a | b | c | d | 他 | 小計 | a | b | c | d | 他 | 小計 | a | b | c | d | 他 | | | | | |
| Ⅲc | SU2 | 0 | 4 | 1 | 2 | 2 | 1 | 10 | 1 | 10 | 1 | 10 | 4 | 1 | 3 | 8 | 1 | 10 | 1 | 10 | 1 | 10 | 1 | 10 | 1 | 10 | 1 | 10 | 1 | 10 | | 1 | 10 | 1 | |
| Ⅳb~Ⅳd | SK3 | 2 | 15 | 14 | 6 | 2 | 0 | 37 | 0 | 37 | 0 | 37 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 1 | |
| Ⅴa | SK16 | 0 | 7 | 2 | 1 | 0 | 10 | 10 | 0 | 10 | 0 | 10 | 2 | 1 | 4 | 7 | 1 | 4 | 7 | 1 | 4 | 7 | 1 | 4 | 7 | 1 | 4 | 7 | 1 | 4 | 7 | 1 | 4 | 7 | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | 3 | 3 | 13 | 1 | 1 | 18 | 1 | 18 | 1 | 18 | 1 | 18 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | 1 | 10 | 6 | 1 | 16 | 1 | 16 | 1 | 16 | 1 | 16 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅴa~b | SK101 | 0 | 5 | 41 | 19 | 2 | 3 | 71 | 3 | 71 | 3 | 71 | 7 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 12 | 4 | 4 | 6 | 1 | 12 | 4 | 4 | 6 | 1 | 12 | 4 | 4 | 6 | 2 | 1 | |
| Ⅳb~Ⅶ・Ⅴa~b | SU176 | 2 | 2 | 7 | 6 | 4 | 2 | 21 | 4 | 21 | 2 | 21 | 1 | 1 | 0 | 4 | 6 | 1 | 4 | 6 | 1 | 4 | 6 | 1 | 4 | 6 | 1 | 4 | 6 | 1 | 4 | 6 | 1 | 4 | |
| Ⅴb~c | SK188 | 3 | 4 | 11 | 0 | 3 | 18 | 3 | 18 | 3 | 18 | 3 | 18 | 1 | 1 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 3 | 1 | |
| Ⅷ | SK292 | 0 | 1 | 8 | 1 | 2 | 12 | 1 | 12 | 2 | 12 | 1 | 12 | 3 | 4 | 0 | 0 | 1 | 8 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅷ | SK293 | 2 | 13 | 40 | 27 | 6 | 89 | 6 | 89 | 3 | 89 | 10 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 7 | 21 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | |
| V~Ⅵ | SU294 | 1 | 1 | 2 | 10 | 1 | 13 | 1 | 13 | 1 | 13 | 1 | 13 | 1 | 1 | 1 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 3 | |
| Ⅶ | SK330 | 0 | 3 | 5 | 3 | 1 | 7 | 1 | 7 | 1 | 7 | 1 | 7 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| 明治中葉 | SK358 | 0 | 5 | 2 | 2 | 2 | 9 | 2 | 9 | 0 | 9 | 2 | 9 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 6 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| Ⅳb~Ⅶ | SU382 | 2 | 3 | 1 | 9 | 3 | 16 | 3 | 16 | 0 | 16 | 3 | 16 | 3 | 7 | 3 | 7 | 3 | 13 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 3 | 6 | 1 | 1 |
| Ⅳd | SU392 | 0 | 2 | 11 | 5 | 1 | 29 | 1 | 29 | 9 | 29 | 3 | 7 | 4 | 4 | 4 | 4 | 1 | 5 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| Ⅲc | SU396 | 1 | 2 | 4 | 5 | 1 | 12 | 1 | 12 | 1 | 12 | 1 | 12 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 5 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| Ⅳ~Ⅷ | SK402 | 1 | 4 | 5 | 6 | 4 | 24 | 4 | 24 | 5 | 24 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 5 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 2 |
| 合計 | | 18 | 61 | 144 | 136 | 34 | 412 | 34 | 412 | 30 | 412 | 2 | 1 | 43 | 23 | 4 | 0 | 42 | 112 | 0 | 5 | 2 | 32 | 0 | 12 | 0 | 12 | 0 | 12 | 0 | 12 | 0 | 12 | 3 | |

| 段階 | 胎質・産地 器種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------------|----|----------|----|---|---|----|---|----------|---|----|----|---|---|---------|---|----|---|---|----|----|----|---------|---|----|---|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 22 | | 23 (片口鉢) | | | | | | 24 (灰落し) | | | | | | 27 (水注) | | | | | | 30 | | 31 (火鉢) | | 33 | | 34 | | | | | | | | | |
| | 小計 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | | 小計 | a | b | c | 他 | | | | |
| Ⅲc | SU2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | |
| Ⅳb~Ⅳd | SK3 | 1 | 2 | 1 | 3 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 0 | 1 | 3 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| Ⅴa | SK16 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅴa~b | SK101 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅳb~Ⅶ・Ⅴa~b | SU176 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅴb~c | SK188 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅷ | SK292 | 1 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅷ | SK293 | 1 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| V~Ⅶ | SU294 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| Ⅶ | SK330 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 明治中葉 | SK358 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Ⅳb~Ⅶ | SU382 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| Ⅳd | SU392 | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| Ⅲc | SU396 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| Ⅳ~Ⅷ | SK402 | 2 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 合計 | | 15 | 0 | 15 | 5 | 0 | 20 | 0 | 20 | 0 | 20 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 2 | 6 | 2 | 10 | 16 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 |

Ⅲ-2 表 磁器・陶器・土器組成表 (8)

| 段階 | TC (瀬戸・美濃系陶器) | | | | | | | | | | | | | | | 合計 | | | | | | | | | |
|-----------|---------------|-----|----|----|---|----|----|---|---|-----------|---|---|----|---|----|----|------------|---|---|--------|----|---|---|-----|-----|
| | 胎質・産地 | | | 38 | | | 39 | | | 40 (油受け皿) | | | 41 | | | | 44 (ひょうそく) | | | OO (蓋) | | | 他 | | |
| | 器種 | 小分類 | 小計 | a | b | c | d | e | 他 | 小計 | a | b | c | d | e | | f | g | h | 他 | 小計 | a | b | c | |
| Ⅶc | SU2 | | 0 | | | | | | 0 | | 1 | | 2 | | | | | | | 3 | | | | 41 | |
| Ⅶb~Ⅶd | SK3 | | 0 | | | | | | 0 | | 3 | | | 2 | | | | | | 5 | | | | 73 | |
| Ⅶa | SK16 | | 0 | | | | | | 0 | | 2 | | 1 | | | | | | | 3 | | | | 23 | |
| Ⅶ~Ⅶ | SU18 | | 0 | | | | | | 0 | | | | | 1 | | | | | | 1 | | | | 44 | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | 1 | | | | | | 1 | | 1 | | | 2 | | | 1 | | | 4 | | | | 42 | |
| Ⅶa~b | SK101 | | 1 | | | | | 1 | 2 | 1 | 4 | | | 1 | 2 | | | | | 7 | | | | 112 | |
| Ⅳb~Ⅶ・Ⅶa~b | SU176 | | 0 | | | | | | 0 | | 3 | | | | | | | | | 3 | | | | 44 | |
| Ⅶb~c | SK188 | | 1 | | | | 1 | | 2 | | | | | | | | | | | 0 | | | | 42 | |
| Ⅶ | SK292 | | 3 | | | | | | 3 | | 1 | | | | 1 | | | | | 2 | | | | 40 | |
| Ⅶ | SK293 | | 3 | | | | 2 | | 5 | | 4 | | | 2 | | | | | | 6 | | | | 149 | |
| V~Ⅶ | SU294 | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | 0 | | | | 36 | |
| Ⅶ | SK330 | | 0 | | | | | | 0 | | 2 | | | | | | | | | 2 | | | | 26 | |
| 明治中葉 | SK358 | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | 0 | | | | 17 | |
| Ⅶb~Ⅶ | SU382 | | 1 | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | 1 | | | | 56 | |
| Ⅶd | SU392 | | 0 | | | | | | 0 | | 1 | | | | | 1 | | | | 2 | | | | 57 | |
| Ⅶc | SU396 | | 0 | | | | | | 0 | | | | | | | 2 | | | | 3 | | | | 30 | |
| Ⅶ~Ⅶ | SK402 | | 1 | | | | | | 1 | | 2 | | | | | | | | | 2 | | | | 51 | |
| 合計 | | | 0 | 0 | 0 | 11 | 3 | 1 | 0 | 15 | 1 | 0 | 0 | 0 | 25 | 0 | 0 | 4 | 7 | 6 | 1 | 1 | 1 | 44 | 883 |

| 段階 | TD (京都・信楽系陶器) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|---------------|-----|----|---|----|---|----|----|---|---|-------|---|---|----|-----|----|----|---|---|----|-------|---|----|---|---|---|---|---|----|---|------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | 胎質・産地 | | | | | | | | | | 1 (碗) | | | | | | | | | | 2 (皿) | | | | | | | | | | 9 (番付・火入れ) | | | | | | | | | |
| | 器種 | 小分類 | b | c | d | e | g | h | i | j | k | l | m | 他 | 小計 | a | b | c | 他 | 小計 | 4 | 5 | 6 | 9 | a | b | c | 他 | 小計 | | | | | | | | | | | |
| Ⅶc | SU2 | | 2 | | 4 | | 2 | | | | | | | 0 | 0 | 6 | | | | 6 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~Ⅶd | SK3 | | | | | | | | | | | | | 8 | 1 | 1 | | | | 1 | | 1 | | | 1 | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | |
| Ⅶa | SK16 | | | | 3 | 1 | 1 | | | | | | | 5 | | | | | | 0 | | 1 | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| Ⅶ~Ⅶ | SU18 | | 11 | | 3 | | | | 4 | 1 | | | 1 | 20 | | | | | | 0 | | | | | | | | | 2 | 2 | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | 11 | | 3 | | 2 | | 2 | | | | 1 | 19 | | | | | | 0 | | | | 2 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| Ⅶa~b | SK101 | | 1 | | | | 2 | | | | | | | 3 | 2 | 2 | 1 | | | 5 | | | | 4 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅶ・Ⅶa~b | SU176 | | 0 | | 0 | | 1 | | | | | | | 1 | 5 | 1 | | | | 6 | | | | | | | | | 2 | 2 | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~c | SK188 | | 5 | | 0 | | 2 | 1 | 0 | | | | | 8 | 1 | 1 | | | | 2 | 1 | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| Ⅶ | SK292 | | 5 | | 1 | | 2 | | 2 | | | | 1 | 9 | 3 | | | | | 3 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | |
| Ⅶ | SK293 | | 2 | | 5 | | 10 | 1 | | | | | | 18 | | | | | | 0 | 1 | | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | |
| V~Ⅶ | SU294 | | 5 | | | | | | | | | | 1 | 6 | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | |
| Ⅶ | SK330 | | 4 | | 1 | | 2 | 1 | | | | 1 | 1 | 10 | | | | | | 0 | | 1 | | 1 | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | 3 | | | | 3 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| Ⅶb~Ⅶ | SU382 | | 3 | | 0 | | 2 | | 1 | | | 2 | | 8 | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | |
| Ⅶd | SU392 | | 1 | | | | | | | | | | | 0 | 2 | 4 | | | | 2 | 1 | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | |
| Ⅶc | SU396 | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | 2 | 4 | | | | 6 | 1 | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| Ⅶ~Ⅶ | SK402 | | 2 | | 1 | | 3 | 1 | | | | | | 7 | 1 | 1 | | | | 2 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | |
| 合計 | | | 53 | 0 | 20 | 1 | 19 | 12 | 3 | 7 | 1 | 0 | 3 | 5 | 124 | 11 | 24 | 3 | 0 | 38 | 9 | 3 | 12 | 1 | 0 | 0 | 3 | 7 | 11 | | | | | | | | | | | |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表 (9)

| 段階 | 胎質・産地 | | | | TM (空閑・益子系陶器) | | | | | | | | | | TO (壺屋系陶器) | | | | | | | | | | TZ (生産地不明) | | | | | | | | | |
|-----------|-------|---|----|----|---------------|----|----|----|----|---|----|----|---|---|------------|---|---|---|----|----|----|----|----|----|------------|----|----|----|--|--|--|--|--|--|
| | 器種 | 5 | 33 | 29 | 他 | 合計 | 10 | 15 | OO | 他 | 合計 | 1 | 2 | 4 | 5 | 6 | 7 | 9 | 10 | 12 | 13 | 15 | 16 | 17 | 19 | 20 | 21 | 22 | | | | | | |
| Ⅷc | SU2 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | | 2 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷd | SK3 | | | | | 0 | | | | | 0 | 2 | 1 | | 5 | 1 | | | 2 | | | | 7 | | | | | 1 | | | | | | |
| Ⅷa | SK16 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SU18 | | | | | 0 | | | | | 0 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅷ | SU63 | | | | | 0 | | | | | 0 | 1 | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa~b | SK101 | | | | | 0 | | | | | 0 | 4 | | 1 | | | | 3 | | | | 1 | 0 | 1 | | | | 1 | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅷ・Ⅷa~b | SU176 | | | | | 0 | | | | | 0 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~c | SK188 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | | 3 | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK292 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | | 1 | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | 2 | 1 | | | 1 | | | | 1 | 3 | | | | | | | | | | | |
| V~Ⅷ | SU294 | | | | | 0 | | | | | 0 | 1 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK330 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | 1 | 0 | | | 0 | | | | | 0 | | | 1 | | | | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU382 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷd | SU392 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | 3 | | | | | | | | 3 | 2 | | | | | | | | | | | |
| Ⅷc | SU396 | | | | | 0 | | | | | 0 | 1 | | | | | | | 0 | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SK402 | | | | | 0 | | | | | 0 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 11 | 1 | 8 | 11 | 6 | 1 | 1 | 1 | 12 | 1 | 8 | 15 | 1 | 3 | 0 | 2 | 1 | | | | | | |

| 段階 | 胎質・産地 | | | | TZ (生産地不明) | | | | | | | | | | 42 (行平鍋) | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------|----|----|----|------------|----|--------|---------|----|----|---|----|---|----|----------|----|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|--|
| | 器種 | 23 | 24 | 27 | 29 | 32 | 33 (鏝) | 34 (土瓶) | 合計 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | | |
| Ⅷc | SU2 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷd | SK3 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa | SK16 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SU18 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅷ | SU63 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa~b | SK101 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅷ・Ⅷa~b | SU176 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~c | SK188 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK292 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| V~Ⅷ | SU294 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK330 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~Ⅷ | SU382 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷd | SU392 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷc | SU396 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ~Ⅷ | SK402 | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 1 | 1 | 2 | 0 | 0 | 32 | 2 | 34 | 13 | 7 | 10 | 5 | 23 | 0 | 19 | 0 | 1 | 2 | 2 | 0 | 8 | 90 | 3 | 1 | 7 | 0 | | | | | | |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表 (12)

| 段階 | 胎質・産地 | | DZ (生産地不明) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-------|----|------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--|
| | 器種 | 50 | 51 (壺壺) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 小分類 | a | b | c | d | e | f | g | h | i | j | k | l | m | n | o | p | q | r | s | t | u | v | w | x | y | | | |
| Ⅷc | SU2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵb~Ⅷd | SK3 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa | SK16 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | | | | | 6 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | | | | 3 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa~b | SK101 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅴ・Ⅷa~b | SU176 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~c | SK188 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK292 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅴ~Ⅵ | SU294 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ | SK330 | | | | | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵb~Ⅶ | SU382 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷd | SU392 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷc | SU396 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ~Ⅷ | SK402 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |

| 段階 | 胎質・産地 | | 51 (壺壺) | | | | | | | | | | | | | 52 (燗台) | | | 54 | | | | | | | | | | |
|-----------|-------|---|---------|----|----|----|----|----|----|----|---|----|---|---|---|---------|--------|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|--|--|
| | 器種 | z | aa | ab | ac | ad | ae | af | ag | ah | 他 | 小計 | a | b | 他 | 小計 | OO (蓋) | | | | | | | | | | | | |
| 小分類 | a | b | c | d | e | f | g | h | i | j | k | l | m | n | o | p | q | r | s | t | u | v | w | x | y | | | | |
| Ⅷc | SU2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵb~Ⅷd | SK3 | | 4 | | | | | | | | | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa | SK16 | | 3 | | | | | | | | | 11 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵ~Ⅶ | SU18 | | 1 | | | | | | | | | 10 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅶ | SU63 | | 1 | | | | | | | | | 9 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷa~b | SK101 | | 3 | | | | | | | | | 11 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅳb~Ⅴ・Ⅷa~b | SU176 | | 2 | | | | | | | | | 12 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷb~c | SK188 | | 2 | | | | | | | | | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK292 | | 2 | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷ | SK293 | | 3 | | | | | | | | | 13 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅴ~Ⅵ | SU294 | | 2 | | | | | | | | | 16 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ | SK330 | | 2 | | | | | | | | | 36 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 明治中葉 | SK358 | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅵb~Ⅶ | SU382 | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷd | SU392 | | | | | | | | | | | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅷc | SU396 | | | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅶ~Ⅷ | SK402 | | | | | | | | | | | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | |

Ⅲ-2表 磁器・陶器・土器組成表 (15)

第2節 生産関連遺物(Ⅲ-111~117 図)

工学部 14 号館からは、鞆の羽口、椀形滓、陶器製の碗、鉢を転用した坩堝などの他、ベンガラ製造に関連する遺物(第V章第5節)などの生産関連遺物が出土した。ここでは、羽口、鉄滓、坩堝の他、付着物がある陶磁器などを図化した。

鞆の羽口(1~14)

鞆の羽口は、鞆から炉へ風を送る送風管で、鞆と羽口は木製の桐口で接合される。羽口の製作方法について、『鐵山必要記事(鐵山秘書)』の「火口取やふの事」に、「土を堅ねり一つ玉にて髓抜をさしたゝき堅めて棒を抜くなり」とある⁽¹⁾。出土した羽口の外側の横断面は多角形である。内側の横断面はほぼ円形である。側面には指圧痕が認められることから、出土した羽口の製作方法は、棒に粘土を突き刺し、敲き伸ばしてから棒を抜き取り、焼成したと考えられる。羽口は瓦質土器製で鞆側は暗灰色、先端部近くは焼成のため、明褐色を呈する。先端部はガラス化しており赤褐色を呈する。破片も含めて先端部はすべてガラス化し、胴部は二次焼成を受けていることから、使用后廃棄されたものと考えられる。鞆接合部分の内側には、打ち欠きが認められる。鞆を羽口に接合する際に行われたと考えられる。出土遺構は、SK20、SK66、SK100、SK101、SK140、SK182、SK200、293、SK292、SK306、SK309、SK357、SK358、SK359、SU396、SU392である。羽口の出土点数は、完形7点、先端部32点、鞆接合部42点、破片数220点で、最小個体数は49個体(完形の羽口と鞆接合部の合計)である。大小2種類が出土した。大形の羽口は、長さ36.3~45.8cm、鞆接合部分の外径7.4~8.8cm、先端部内径2.5~3.4cmである。小形の羽口(14)は1点の出土で、長さ36.3cm、鞆接合部分の外径5.3cm、先端部内径1.8cmである。羽口は先端部のガラス化部分の観察から、上下を判断し図化した。1、7、10は炉の一部と考えられる粘土が溶着している。1、3、4、10、13はガラス化した部分に磁器片が溶着している。1、3、7、10に磁石を近づけたところ、羽口の先端部下で反応が認められた。

| 遺物番号 | 遺構番号 | 分類 | 先端部内径(cm) | 長さ(cm) | 鞆接合部 | | |
|------|-------------|----|-----------|--------|--------|--------|--------|
| | | | | | 内径(cm) | 外径(cm) | 器厚(cm) |
| 1 | SU392 | 羽口 | 3.0 | | | | |
| 2 | SU392 | 羽口 | 3.1 | 38.9 | 5.7 | 7.9 | 1.2 |
| 3 | SU392 | 羽口 | 3.2 | 45.8 | 5.6 | 7.7 | 1.2 |
| 4 | SU396 | 羽口 | 3.0 | 44.7 | 5.7 | 7.8 | 1.3 |
| 5 | SU392 | 羽口 | 2.7 | 44.5 | 5.7 | 7.9 | 1.2 |
| 6 | SU392 | 羽口 | 2.8 | 40.5 | 5.8 | 8.0 | 1.1 |
| 7 | SU392 | 羽口 | 2.9 | | | | |
| 8 | SK101 | 羽口 | 2.8 | | | | |
| 9 | SK101 | 羽口 | 2.9 | | | | |
| 10 | SK396 | 羽口 | 2.5 | | | | |
| 11 | SK396 | 羽口 | 2.9 | | | | |
| 12 | SK140 | 羽口 | 2.9 | | | | |
| 13 | SK20 | 羽口 | 3.0 | | | | |
| 14 | SK200・SK293 | 羽口 | 1.8 | 36.3 | 3.8 | 5.3 | 0.6 |

Ⅲ-3表 羽口観察表

(1) 下原重伸 1978 元禄4(1691)『鐵山必要記事(鐵山秘書)』狩野亨吉・小倉金之助・桑木或雄・新村出監修、三枝博音編纂 1978『復刻 日本科学古典全書5 採鋇冶金Ⅱ』朝日新聞社発行 pp.202-203

鉄滓 (15～24)

鉄滓が出土した遺構は、SK66、SK140、SK275、SK291、SK331、SK359、SU392、SU381、SU396、SK480である。鉄滓の出土点数は、完形 74 点、破片数 203 点、総重量 81,146g であった。鉄滓の長軸は、9.3～17.5cm、厚みは 2.4～9.9cm である。鉄滓には、木炭片が認められる。15～25 は完形、21～24 は羽口、焼成した粘土が付着している。18 に磁石を近づけたところ、鉄滓の上面の外周部分で反応が認められた。21 では羽口の先端下で反応が認められた。

| 遺物番号 | 遺構番号 | 分類 | 長径 (cm) | 短径 (cm) | 高さ (cm) | 重量 (g) | 備考 |
|------|-------|-----|---------|---------|---------|--------|---------|
| 15 | SU396 | 椀形滓 | 13.3 | 11.1 | 4.1 | 645 | |
| 16 | SU396 | 椀形滓 | 17.5 | 14.2 | 6.0 | 1,590 | |
| 17 | SU396 | 椀形滓 | 16.4 | 11.3 | 6.4 | 750 | |
| 18 | SU392 | 椀形滓 | 14.8 | 14.5 | 6.4 | 665 | |
| 19 | SU396 | 椀形滓 | 16.8 | 15.8 | 9.9 | 1,340 | |
| 20 | SU396 | 椀形滓 | 11.4 | 10.9 | 6.2 | 564 | |
| 21 | SU396 | | | | 6.3 | 569 | 羽口付着 |
| 22 | SU396 | | 13.2 | 10.6 | 6.8 | 941 | 炉壁、羽口付着 |
| 23 | SU396 | | | | 4.9 | 195 | 羽口付着 |
| 24 | SU396 | | 12.6 | 9.1 | 3.9 | 209 | 羽口付着 |

Ⅲ-4 表 鉄滓観察表

坩堝 (25～46)

25～45 は陶磁器を転用した坩堝である。釉薬が溶けており、部分的に素地が出ている。内面には、緑青やガラス化した溶着物が付着物している。緑青の表面錆を除去すると粒状の金属（付着金属粒と仮称する）が残っている資料がある。そういった資料は金属地金色調を観察した。材質分析は今後行いたい。25 は小形の香炉・火入れ。TC-9-c に属する。内面には、緑青、ガラス化した黒色の溶着物がある。26～30 は碗。そのうち 28、29 はいわゆる腰錆碗である。TC-1-u に属する。本来、内面・外面上半灰釉、外面下半鉄釉であるが、加熱により釉薬が溶解し、緑色や赤色に変色している。また、釉薬が溶解し、素地の一部が現れている。26 の内面には、緑青、ガラス化した赤褐色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は赤色を呈する。27 の内面には、ガラス化した暗灰色の溶着物が付着している。28 の内面には、緑青、ガラス化した黒色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は黄色を呈する。29、30 は溶着物の状況から、底部が使用時抜けたと考えられる。内面には、緑青、ガラス化した赤褐色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は赤色を呈する。31 は肥前磁器碗。JB-1-w に属する。染付の碗である。内面には、緑青、ガラス化した黒色の溶着物が付着している。外面の釉薬が赤色に変色している。32～41、43 は小形の壺・甕、42、44 は中形の壺・甕を転用した坩堝である。TC-15-b に属する。本来、柿釉灰釉流し、底部および器面下端露胎であるが、釉薬が溶解し黒色や暗緑色に変色している。36 は外面・内面の釉薬は本来の色調で茶褐色を呈する。内面に黄白色の付着物が溶付している。33 の内面には、緑青、ガラス化した暗紫色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は黄色味を帯びた赤色を呈する。34 の内面には、緑青、ガラス化した暗紫色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は赤色を呈する。38 の内面には、ガラス化した暗紫色の付着物が溶着している。39 の内面には、緑青、ガラス化した暗紫色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は黄色を呈する。41 の内面には、緑青、ガラス化した暗紫色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は赤色を呈する。43 の内面には、ガラス化した暗紫

第2節 生産関連遺物

| 遺物番号 | 遺構番号 | 器種 | 分類 | 口径 (cm) | 底径 (cm) | 高さ (cm) | 備考 |
|------|--------------------|------------|---------|------------|------------|------------|--------------------|
| 25 | SU396 | 香炉 | TC-9-c | 3.7 | 2.6 | 3.8 | 付着金属粒地金色 赤色 |
| 26 | SU392 | 碗(埴埴に転用) | TC-1-u | 8.8 | 4.1 | 4.6 | 付着金属粒地金色 赤色 |
| 27 | SU396 | 碗(埴埴に転用) | TC-1-u | | | | |
| 28 | SU392・SU396 | 碗(埴埴に転用) | TC-1-u | 9.0 | | | 付着金属粒地金色 黄色 |
| 29 | SU392 | 碗(埴埴に転用) | TC-1-u | 8.0 | | | 付着金属粒地金色 赤色 |
| 30 | SU396 | 碗(埴埴に転用) | TC-1-u | | 4.0 | | 付着金属粒地金色 赤色 |
| 31 | SU392 | 碗(埴埴に転用) | JB-1-w | 11.0 | | | |
| 32 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 10.2 | 6.0 | 7.0 | |
| 33 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 10.9 | 5.8 | 7.4 | 付着金属粒地金色 黄色味を帯びた赤色 |
| 34 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 11.0 | 5.5 | 8.4 | 付着金属粒地金色 赤色 |
| 35 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 10.0 | | | |
| 36 | SU396 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 11.6 | 6.0 | 9.3 | |
| 37 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 10.3 | | | |
| 38 | SK358・SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 10.2 | | | |
| 39 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 10.8 | | | |
| 40 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 10.8 | | | |
| 41 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | | | | 2個体が溶着、付着金属粒地金色 赤色 |
| 42 | SK140・SK293 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 16.6 | 11.3 | 14.7 | |
| 43 | SU392 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | | 6.0 | | |
| 44 | SK101 | 壺・甕(埴埴に転用) | TC-15-b | 16.4 | | | |
| 45 | SU392 | 半胴甕(埴埴に転用) | TC-15-a | 14.2 | | | 内面付着物(赤色) |
| 46 | SU392 | 半胴甕(埴埴に転用) | TC-15-a | 13.4 | | | |
| 47 | SU294 | 壺・甕 | TC-15 | | 7.4 | | 内面付着物(サビ) |
| 48 | SK21 | 瓶(五合德利) | TC-10-d | | 6.8 | | 内面付着物(サビ) |
| 49 | SK3 | 碗 | JC-1-e | 7.4 | 4.0 | 6.0 | 内面付着物(赤色) |
| 50 | SK292 | 碗 | TD-1-b | | 2.8 | | 内面付着物(サビ) |
| 51 | SK188 | 瓶 | TC-10-h | | 4.7 | | 内面付着物(サビ) |
| 52 | SU294 | 坏 | JB-6-f | 7.5 | 3.0 | 3.0 | 内面付着物(サビ) |
| 53 | SK293・SU295上・SK296 | 瓶(船德利) | TC-10-f | | 13.0 | | 内面付着物(サビ) |
| 54 | SK200 | 瓶(二合半灰釉德利) | TC-10-c | | 7.5 | | 内面付着物(サビ) |
| 55 | SU294 | 瓶(五合德利) | TC-10-d | | 7.0 | | 釘書「井」、内面付着物(サビ) |
| 56 | SU294 | 瓶(二合半灰釉德利) | TC-10-a | | 7.0 | | 内面付着物(サビ) |
| 57 | SK39 | 瓶(五合德利) | TC-10-d | | 7.5 | | 釘書、内面付着物(サビ) |
| 58 | SK186 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | | 10.2 | | 釘書、内面付着物(サビ) |
| 59 | SU389 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | | | | 釘書、内面付着物(サビ) |
| 60 | SK317 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | | 10.6 | | 釘書「万セ」、内部に鉄 |
| 61 | SK101 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | | 10.2 | | 釘書「長」、内部に鉄 |
| 62 | SU18 | 瓶 | TC-10-g | | 10.3 | | 内面付着物(サビ) |
| 63 | SK358 | 土瓶 | TZ-34-h | 9.2 | 8.0 | 11.2 | 内部に鉄 |
| 64 | SK38 | 壺・甕 | TC-15 | 8.8 | 7.1 | 10.1 | 内面付着物(サビ) |
| 65 | SU382・SU392 | 壺・甕 | TC-15 | 8.8 | 9.8 | 13.5 | 内面付着物(サビ) |
| 66 | SK291・SK292・SK293 | 壺・甕 | TC-15 | | 9.6 | | 内面付着物(サビ) |
| 67 | SU396 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | 2.7 | 10.9 | 23.3 | 内部ベンガラ |
| 68 | SU396 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | | | | 内面付着物(赤色) |
| 69 | SU392 | 瓶(二合半德利) | TC-10-c | | 3.6 | | 釘書、肩部穿孔 |
| 70 | SU392 | 瓶(二合半德利) | TC-10-c | 3.1 | 7.2 | 19.9 | 肩部穿孔、釉薬剥離 |
| 71 | SU396 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | 3.8 | 9.4 | 24.2 | 肩部穿孔、釉薬剥離 |
| 72 | SU396 | 瓶(1升德利) | TC-10-e | | 10.5 | | 肩部穿孔、釉薬剥離 |
| 73 | SU396 | 急須 | TZ-16 | 7.2 | 6.2 | 8.2 | 内面付着物(黒色) |
| 74 | SK200 | 塩壺 | DZ-51 | 7.0 | 5.7 | 8.2 | 内面付着物(黒色) |
| 75 | SU392 | 塩壺 | DZ-51-w | 4.7 | 3.6 | 4.7 | 焼成受ける |
| 76 | SU396 | 火入れ | | 7.6 | 5.8 | 5.0 | 内面付着物(黒色) |
| 77 | SK3 | 網の錘の鋳型 | | 9.4 | 5.9 | 2.6 | 石製 |

Ⅲ-5表 転用埴埴他観察表

色の溶着物が付着した上に、サビが厚く付着している。42の口縁部外面・内面の釉薬は、本来の色調で茶褐色を呈する。内面、外面には、灰白色の付着物が溶着している。44の内面には茶褐色の付着物が溶着している。外面には暗緑色の溶着物が付着している。45、46はいわゆる、赤津半胴・銭甕である。TC-15-aに属する。本来、柿釉、底部および器面下端露胎であるが、加熱により釉薬が溶解し、暗赤色、暗灰色に変色している。45の内面には、緑青、ガラス化した暗紫色の溶着物が付着している。付着金属粒地金色調は赤色を呈する。外面は暗灰色に変色している。46の内面には、ガラス化した暗紫色の溶着物が付着している。外面は暗灰色に変色している。

ベンガラ製造に関連する資料 (43、47～69)

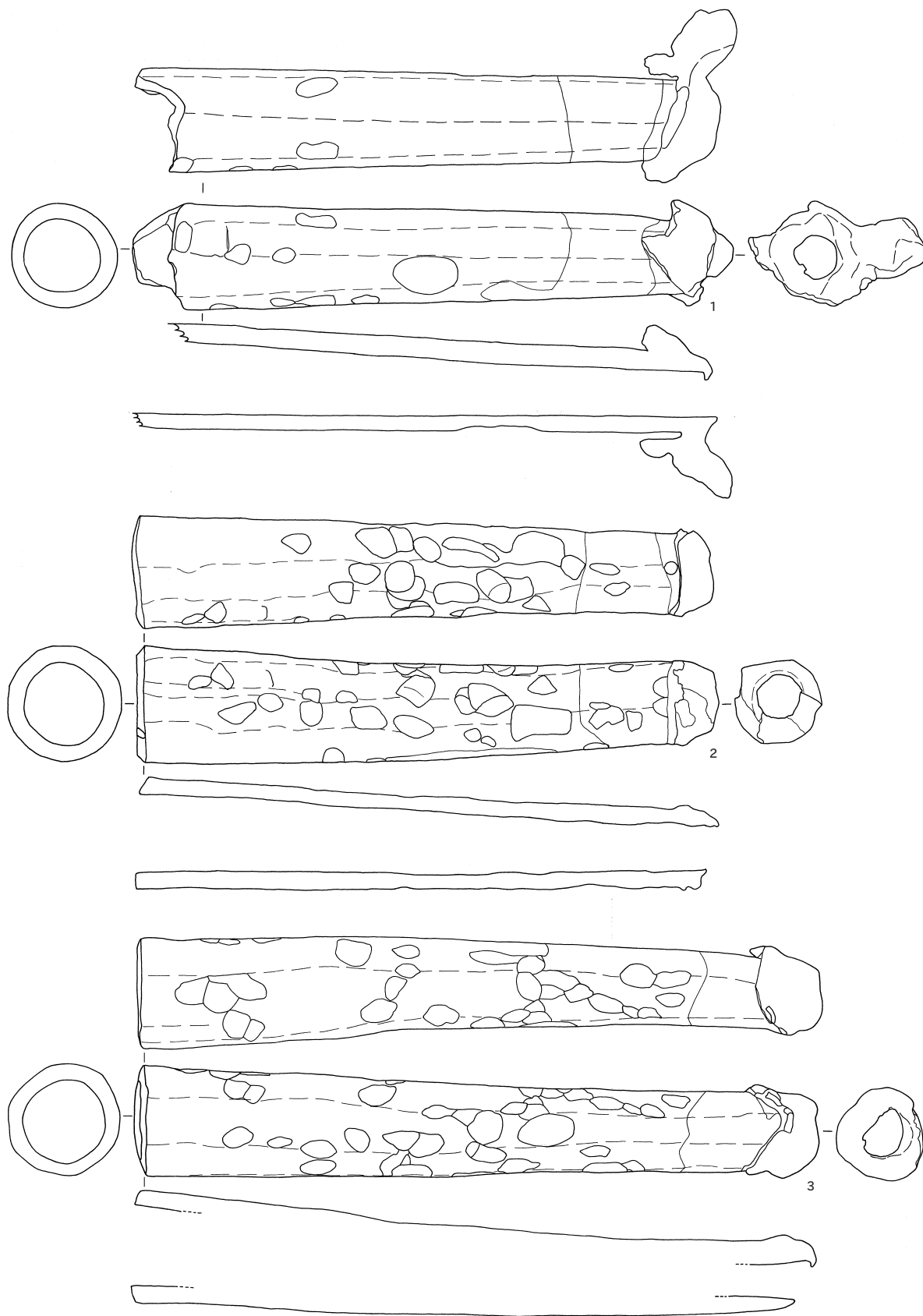
43、47～69はベンガラ製造に関連すると考えられる資料である(第V章第5節参照)。鉄漿容器、鉄漿液を加熱してベンガラを製造した容器、サビや赤色の付着物がある陶磁器類を図化した。43は、壺・甕を坩堝に転用したものであるが、内面にサビが厚く付着していることから、坩堝に使用した後、再利用したと考えられる。47、50～66は内面にサビが付着している資料。49、67～69は内面に赤色の付着物がある資料である(67、68はベンガラ)。47は壺・甕。TC-15に属する。高台内に墨書がある。48は瓶(五合徳利)。TC-10-dに属する。49は碗。JC-1-eに属する。染付と上絵付の施された資料である。内面に染付、外面に染付、赤、緑、青、黄、茶の上絵付で植物が描かれる。内面に赤色の付着物がある。50は碗。JC-1-eに属する。51は瓶。TC-10-hに属する。52は坏。JB-6-fに属する。染付で文様が描かれる。53は瓶。いわゆる船徳利で、柿釉が掛けられている。TC-10-fに属する。54は瓶(二合半灰釉徳利)。TC-10-cに属する。55～62は瓶の口縁部、肩部分を打ち欠いた資料である。55は瓶(五合徳利)。TC-10-dに属する。胴部に「井」の釘書きがされている。56は瓶(二合半灰釉徳利)。TC-10-aに属する。57は瓶(五合徳利)。TC-10-dに属する。胴部に「欠」の釘書きがされている。58は瓶(一升徳利)。TC-10-eに属する。胴部に釘書きがされている。59は瓶(一升徳利)。TC-10-eに属する。60は瓶(一升徳利)。TC-10-eに属する。胴部に「万セ」の釘書きがされている。内部に鉄が残っている。61は瓶(一升徳利)。TC-10-eに属する。胴部に「長」の釘書きがされている。62は瓶。柿釉徳利、献上備前写しである。TC-10-gに属する。63は土瓶。TZ-34-hに属する。内部に鉄が残っている。64は壺・甕。TC-15に属する。65は壺・甕。TC-15に属する。66は壺・甕。TC-15に属する。67、68は瓶(一升徳利)。TC-10-eに属する。内部にベンガラが入っている。釉薬が白色に変色している。二次焼成を受けたと考えられる。鉄漿液をベンガラに加工した加熱容器である。69は瓶(二合半徳利)。TC-10-cに属する。内面に赤色の付着物がある。

蒸留容器 (70～72)

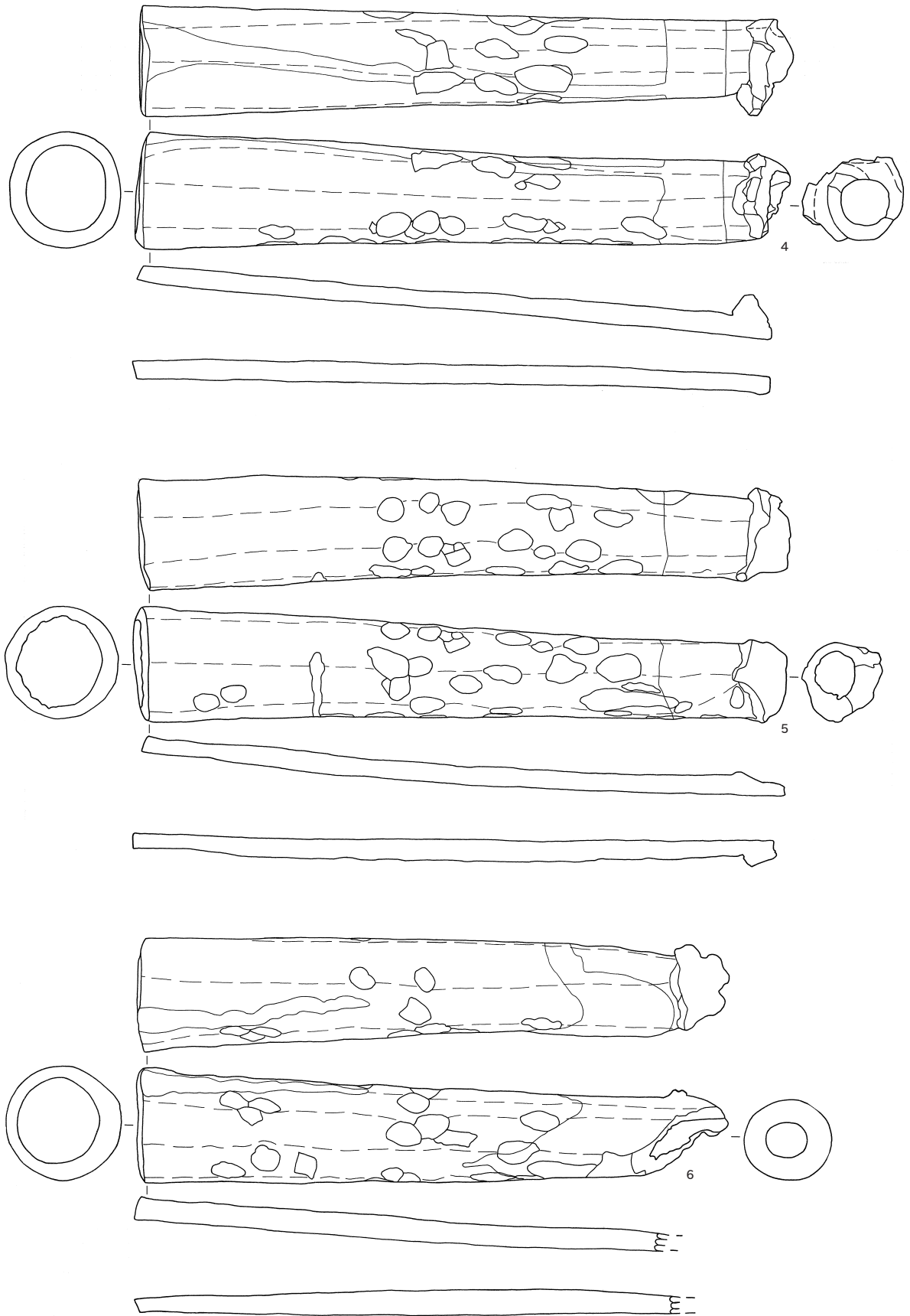
70～72は肩部に穿孔されている。釉薬の状況から二次焼成を受けたと考えられることから、蒸留に用られた容器と考えられる。70は瓶(二合半徳利)。TC-10-cに属する。胴部に「越」の釘書きがされている。釉薬は白色に変色し、一部剥離している。71、72は瓶(一升徳利)。TC-10-eに属する。釉薬が剥離している。

その他 (73～77)

73～76は内面に内面に黒色の付着物がある。73は急須。TZ-16に属する。74は塩壺。内面に布目が残る。DZ-51-adに属する。75は塩壺。DZ-51-wに属する。76は小形の火入れ。77は錘の鋳型で石製である。

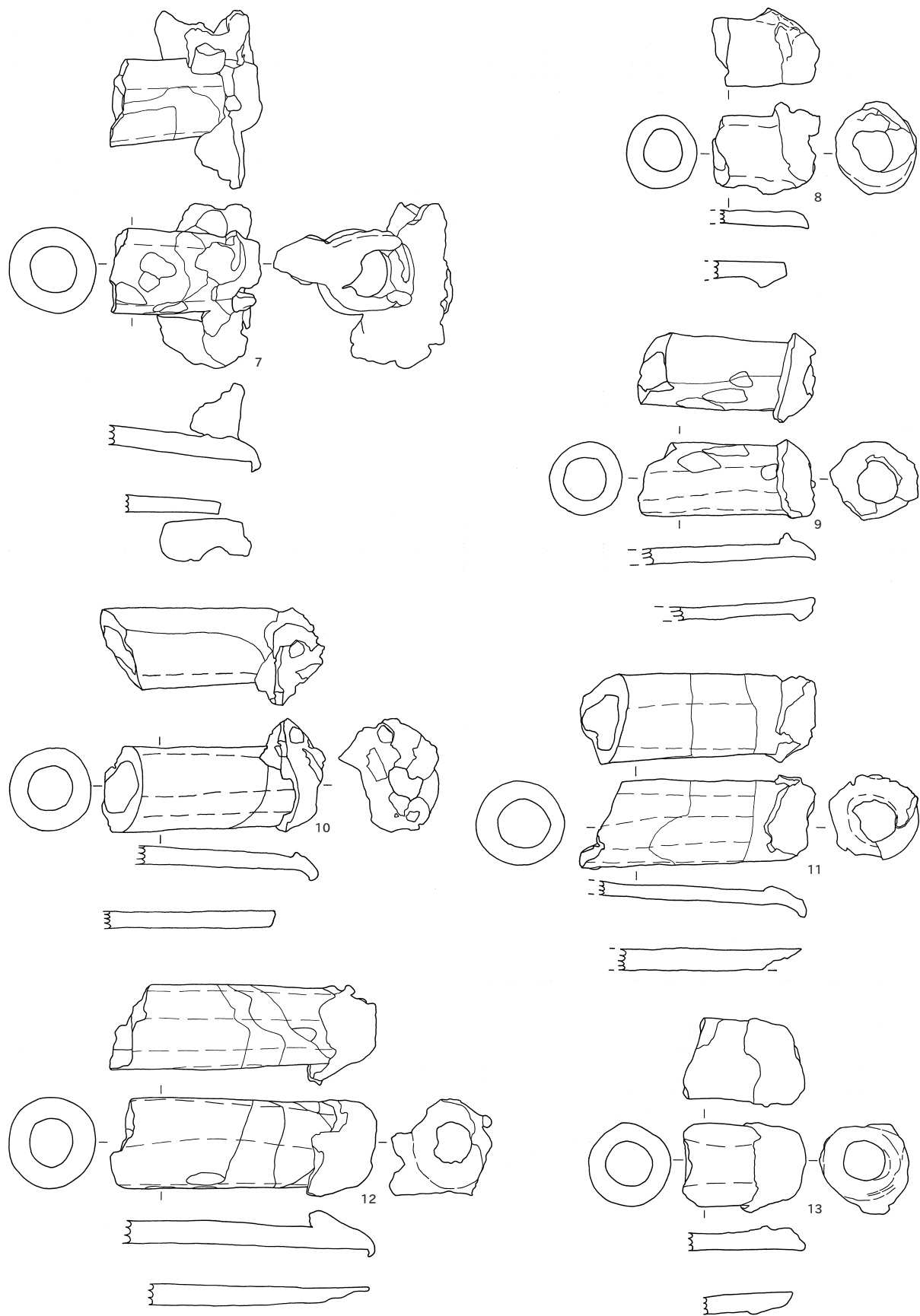


Ⅲ-111 図 生産関連遺物 (1)

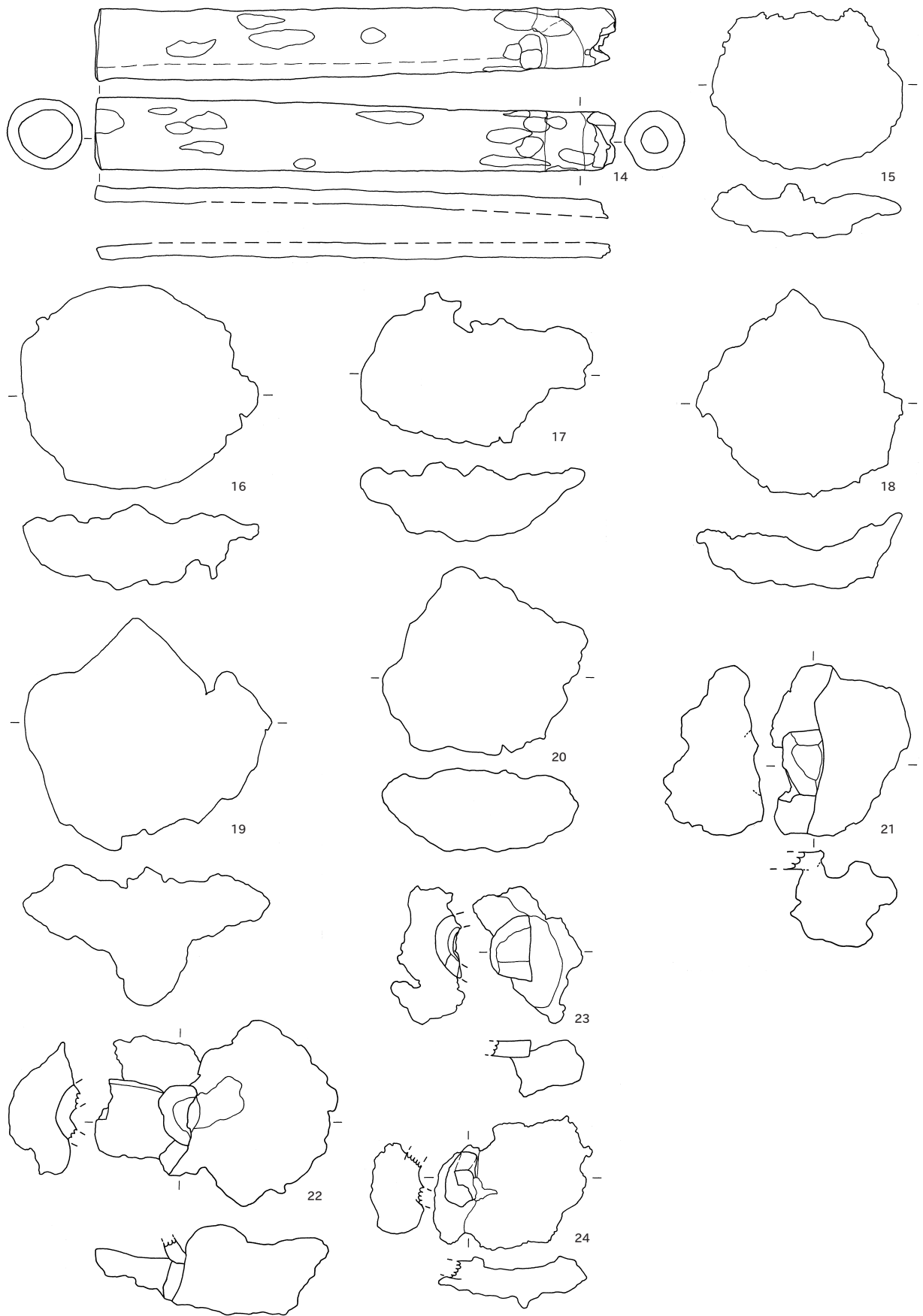


0 10cm

Ⅲ-112 図 生産関連遺物 (2)

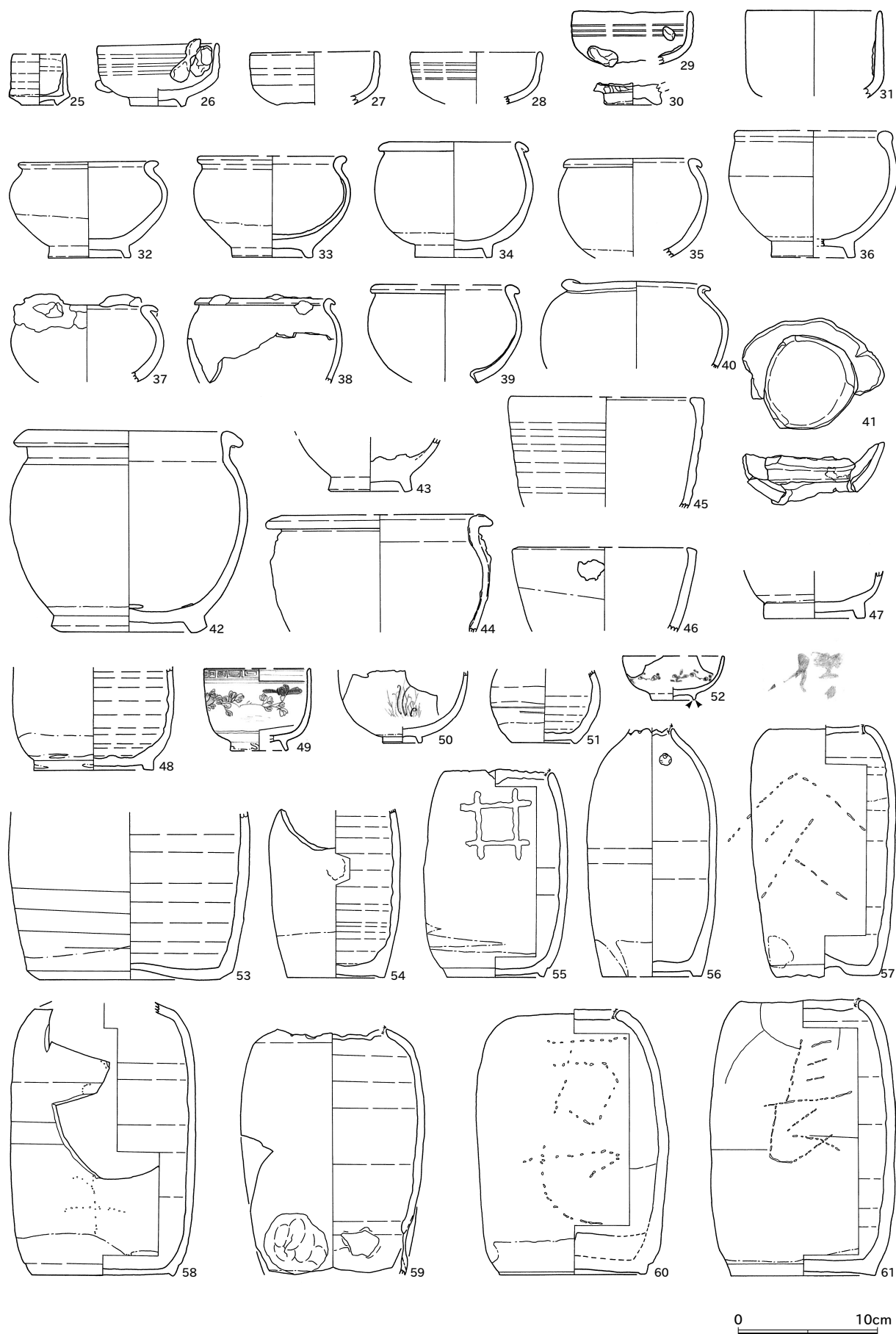


Ⅲ-113 図 生産関連遺物 (3)



0 10cm

III-114 図 生産関連遺物 (4)



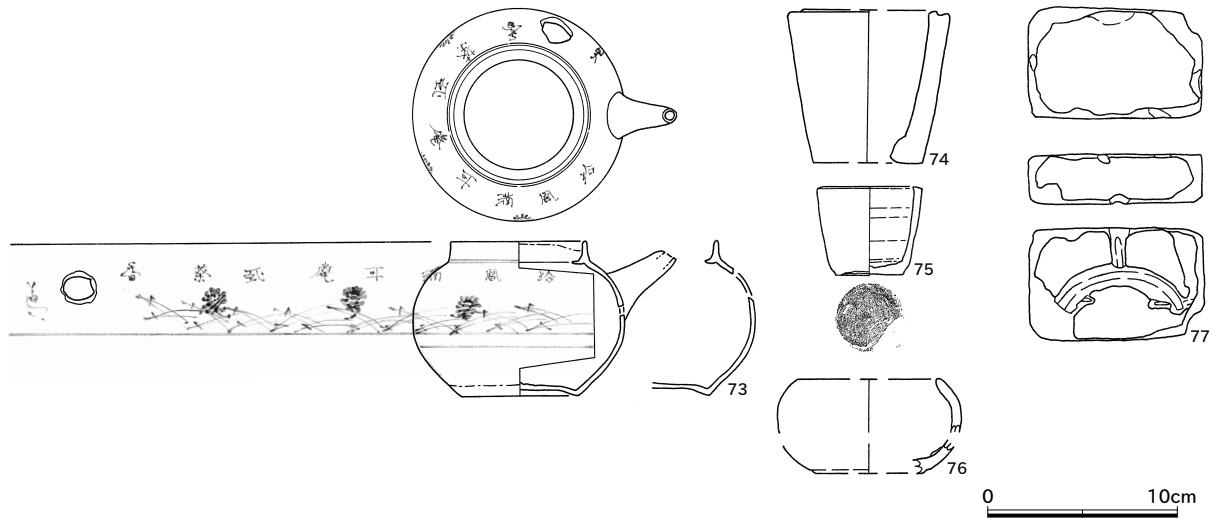
Ⅲ-115 図 生産関連遺物 (5)



0 10cm

Ⅲ-116 図 生産関連遺物 (6)

第2節 生産関連遺物



Ⅲ-117 図 生産関連遺物 (7)

第3節 瓦 類 (Ⅲ-118、119 図)

まとまって良好な状態で見つかったものがないため、いくつかを紹介するにとどめる。

1はSK3出土。連珠をもつ巴文の軒丸瓦である。凹面には粗い布目痕が残り、凸面には縦方向のヘラ調整跡がめだつ。瓦当面には剥離のための砂の痕跡が顕著である。2はSK299出土。剣梅鉢の軒丸瓦である。凹面に粗い布目跡、凸面に縦方向のヘラ調整が残る。3はSK89出土。梅鉢文の軒丸瓦である。丸瓦部は接合面から剥落している。接合部分はヘラ状のもので刻み目を入れているが、構造上弱いこの部分で剥離するものが多い。瓦当面は范型を離れやすくするための砂の痕跡が顕著である。

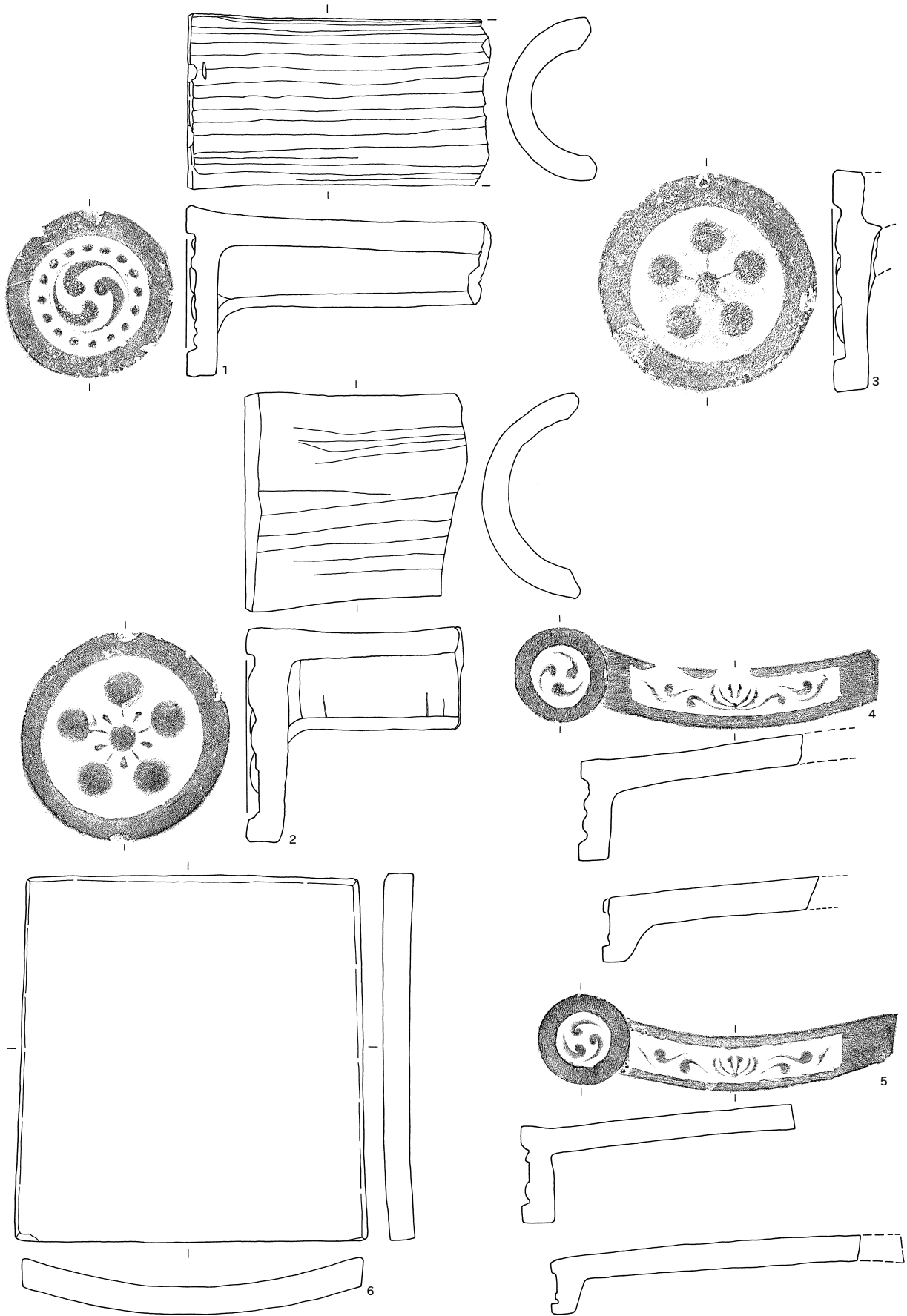
4、5(ともにSK411)は軒棧瓦である。成形の手順はよくわからないが、軒平部分を作った後に軒丸部分を貼りつけている。5は一部尾部まで残っており、軒平部部分での長さが25.5cmである。6(SK10)は完形の平瓦。長さ約26cm、狭端面(屋根に葺いた状態で軒側)の幅23.7cm、広端面幅25cmである。

9は完形の丸瓦である。全長約26cm、幅は11.2cm、凹面には粗い布目跡、凸面には丁寧なヘラ削りの跡が認められる。

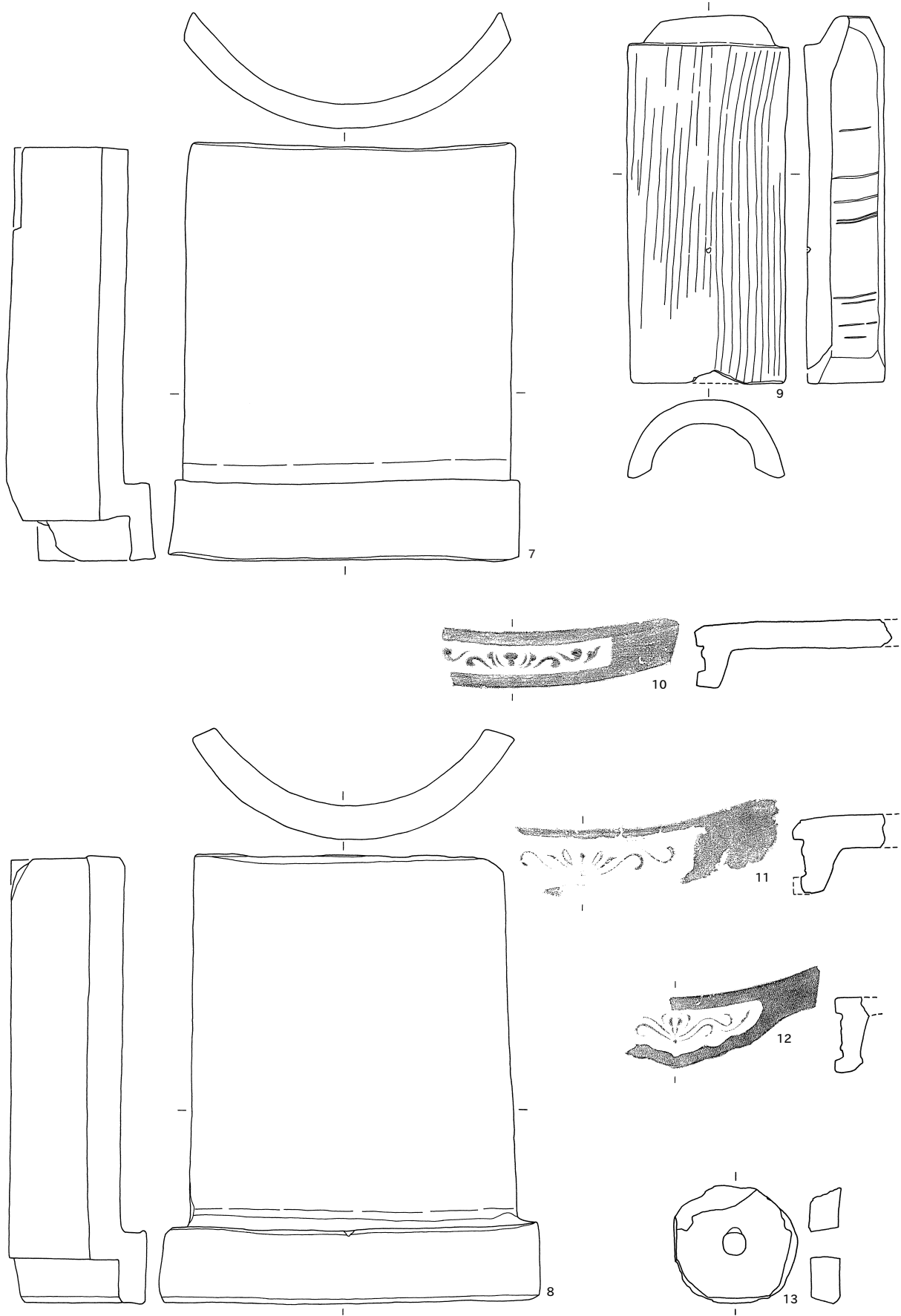
10(SK292)、11(SK383)、12(SK188)はともに軒瓦の破片である。12では、瓦当の下中央が水切り状にデザインされている。

7、8(ともにSU176)は本体部分の直径30cmほどの土管状のものを縦に三等分したものに、継ぎ手をつけたものである。長さは継ぎ手込みで7が約29cm、8が約32cmである。凸面から側面に移行する角度が鋭角のものと鈍角のものがあり、組み合わせて用いたものだろう。屋根に葺くものではなく、水まわりなどの用途に用いたものと考えられる。

13(SK292)は瓦片を再利用して紡錘車状の形を作ったものである。中心の穿孔部分は円筒状にきれいに磨いて整形しているが、外周は本来の平瓦の側面と端面を一部残しており、他は打ち欠いただけの粗いつくりである。弾み車のようなものであろうか。



Ⅲ-118圖 瓦 (1)



Ⅲ-119 瓦 (2)

第4節 錢 貨 (Ⅲ-120~126 図、Ⅲ-1 表)

本遺跡からは、439 枚の銭が出土している。特出すべきは SU335 から検出された 401 枚の銭差で、他の遺構からは多くても 4 枚の検出がみられる程度であった。銭種の詳細は日本貨幣協会的小林茂之氏のご教授による。また、『新寛永通寶図会』((株)ハドソン・東洋鑄造貨幣研究所編 1998)、『古寛永泉志(改訂版)』(増尾 1976)を参考とした。

SU335 (Ⅲ-120~125 図)

SU335 は C₂ 区にある地下室で、陶磁器・金属製品などが検出されている。陶磁器は 17 世紀末と 19 世紀前葉の 2 時期に比定されている。銭は床面約 1cm のところから、焼土に埋もれ銭差状で 401 枚検出された。紐は炭化しており、銭と銭には被熱による溶着がかなりみられた。おそらく、この地下室に直接保管されていたものではなく、火災の後片付けのために焼土とともにここに廃棄されたものであろう。この火災は、共伴している陶磁器から元禄 16 (1703) 年に比定されている。この銭差状の銭は大きく 3 列に並んでいた。その 3 列がつながって 2 本またはそれ以上の本数になっていたかどうかは不明であるが、溶着状況から見て、一箇所に保管されていたと考えて良いであろう。

401 枚の銭の銭種は次のようである。渡来銭 6 枚、古寛永通寶 84 枚、文銭 46 枚、新寛永通寶 265 枚(四ッ寶銭 254 枚、旧猿江銭 8 枚、不旧手 1 枚、萩原銭 1 枚・不明 1 枚)である。一番数多く検出されている四ッ寶銭を細分類すると勁永 63 枚、勁永広寛 102 枚、広永 89 枚となる。四ッ寶銭の中のそれぞれの比率は 25%、40%、35%となる。四ッ寶銭は肥字系(広永・勁永・広寛勁永)、細字系(跳永・俯頭糸・座寛)とに分類されているが、その内のいずれも肥字系とされているもののみが検出されている。

銭差状の銭の順番をできうる限り復元し検証してみたが、銭種や裏表の順番などに恣意的なものは認められなかった。

四ッ寶銭・旧猿江銭・不旧手はそれぞれが、銭譜などでは享保期や宝永期の鑄造とされていたが、近世遺跡での出土状況から、元禄期鑄造の可能性が極めて高いことが指摘されている((株)ハドソン・東洋鑄造貨幣研究所編 1998)。本銭差は、元禄 16 (1703) 年下限であり、四ッ寶銭 254 枚・旧猿江銭 8 枚・不旧手 1 枚が含まれていることなどから、いずれも元禄期鑄造の可能性が極めて高いことを裏づける良好な資料であろう。

銭差以外では 429 新寛永通寶 四ッ寶銭、勁永、430 新寛永通寶 四ッ寶銭、勁永の 2 枚が検出された。いずれも上記のように初鑄年は元禄期推定とされている。共伴している陶磁器から 17 世紀末に比定されておりその年代観と合致する。

その他の遺構からはあまりまとまって銭は検出されていない。

SU2 (Ⅲ-125 図)

SU2 は A 区にある地下室で、陶磁器・金属製品などが検出されている。銭は 402 古寛永通寶 称・水戸銭、広永、403 新寛永通寶 寛保期足尾小字、404 新寛永通寶 四文銭 明和期俯永、405 新寛永通寶 四ッ寶銭(?)の 4 枚が検出された。想定される初鑄年が寛保期以前の銭種で構成される。共伴している陶磁器から東大編年Ⅷc 期に比定されており、その年代観と合致する。

SK3 (Ⅲ-125 図)

SK3 は A 区にある土坑で、陶磁器・金属製品・生産関連遺物など多くの遺物が検出されている。

銭は406新寛永通寶 享保期(仙台)異書長通、407新寛永通寶四文銭 明和期俯永の2枚が検出された。想定される初鑄年が明和期以前の銭種で構成される。共伴している陶磁器から東大編年VIb~VIII d 期に比定されておりその年代観と合致する。

SK41 (III-125 図)

SK41 は A 区にある土坑で、金属製品などが検出されている。銭は408新寛永通寶四文銭 明和期俯永が検出された。共伴している陶磁器から明治期に比定されておりその年代観と合致する。

SU63 (III-125 図)

SU63 は B 区にある地下室で、陶磁器・金属製品など多くの遺物が検出されている。銭は409新寛永通寶 不旧手、進永の1枚が検出された。上記のように初鑄年は元禄期推定とされている。共伴している陶磁器から東大編年IVb~VII 期に比定されておりその年代観と合致する。

SK89 (III-125 図)

SK89 は B 区にある土坑で、金属製品などが検出されている。銭は410新寛永通寶 文銭、正字背文が検出された。遺構の年代は近代に比定されている。

SK140 (III-126 図)

SK140 は B 区にある土坑で、陶磁器・金属製品・生産関連遺物など多くの遺物が検出されている。銭は、411新寛永通寶 享保期(仙台)異書が検出された。初鑄年は享保期と推定されている。共伴している陶磁器から19世紀前~中葉に比定されておりその年代観と合致する。

SK186 (III-126 図)

SK186 は C₁ 区にある土坑で、陶磁器・金属製品・生産関連遺物などが検出されている。銭は、412新寛永通寶?、413新寛永通寶 享保期(仙台)異書長通、414新寛永通寶四文銭 明和期俯永の3枚が検出された。想定される初鑄年が明和期以前の銭種で構成される。共伴している陶磁器から19世紀前半に比定されておりその年代観と合致する。

SK188 (III-126 図)

SK188 は C₁ 区にある土坑で、陶磁器・金属製品・生産関連遺物など非常に多量の遺物が検出されている。銭は415新寛永通寶四文銭 明和期俯永、416新寛永通寶文銭 細字背文の2枚が検出された。想定される初鑄年が明和期以前の銭種で構成される。共伴している陶磁器から東大編年VIII b~c 期に比定されておりその年代観と合致する。

SU189 (III-126 図)

SU189 は C₁ 区にある地下室で陶磁器・金属製品・生産関連遺物などが検出されている。銭は417新寛永通寶四文銭 明和期俯永が検出された。初鑄年は明和5(1768)年と推定されている。共伴している陶磁器から18世紀末~19世紀初頭に比定されておりその年代観と合致する。

SK252 (III-126 図)

SK252 は C₁ 区にある土坑で陶磁器・金属製品などが検出されている。銭は418古寛永通寶 称・鳥越銭、419新寛永通寶 四ツ寶銭、勁永の2枚が検出された。上記のように初鑄年が元禄期以前に想定される銭種で構成される。共伴している陶磁器から19世紀前葉に比定されており、その年代観と合致する。

SK292 (III-126 図)

SK292 は C₁ 区にある土坑で、陶磁器・金属製品・生産関連遺物など非常に多量の遺物が検出されている。銭は420文久永寶 真文が検出された。初鑄年は文久3(1863)年とされている。共伴している陶磁器から東大編年VIII a~VIII d 期に比定されておりその年代観と合致する。

SK299 (Ⅲ-126 図)

SK299 は C₁ 区にある土坑で、陶磁器・金属製品・生産関連遺物などが検出されている。銭は 421 新寛永通寶四文銭 明和期俯永、422 新寛永通寶 不旧手・狭目寛、423 新寛永通寶 寛保期高津背元、424 新寛永通寶四文銭 明和期俯永の 4 枚が検出された。想定される初鑄年が明和期以前の銭種で構成される。共伴している陶磁器から 19 世紀前葉に比定されておりその年代観と合致する。

SK301 (Ⅲ-126 図)

SK301 は B 区にある土坑で、陶磁器・金属製品などが検出されている。銭は 425 新寛永通寶元文期十万坪手が検出された。初鑄年は元文元 (1736) 年と推定されている。共伴している陶磁器から 19 世紀前葉に比定されておりその年代観と合致する。

SK325 (Ⅲ-126 図)

SK325 は C₁ 区にある土坑で、陶磁器・金属製品などが検出されている。銭は 426 新寛永通寶元禄期荻原銭・厚肉高寛が検出された。元禄期鑄造と推定されている。共伴している陶磁器から 18～19 世紀前葉に比定されておりその年代観と合致する。

SK330 (Ⅲ-126 図)

SK330 は C₂ 区にある土坑で、陶磁器・金属製品など多量の遺物が検出されている。銭は 427 新寛永通寶四文銭 明和期正字が検出された。初鑄年は明和 5 (1768) 年と推定されている。共伴している陶磁器から東大編年Ⅶ期に比定されておりその年代観と合致する。

SK331 (Ⅲ-126 図)

SK331 は C₂ 区にある土坑で、陶磁器・金属製品などが検出されている。銭は 428 一銭 (明治 7 年) が検出された。共伴している陶磁器から 18 世紀前半・19 世紀後半に比定されておりその年代観と合致する。

SK358 (Ⅲ-126 図)

SK358 は B 区にある土坑で、陶磁器・金属製品・生産関連遺物などが検出されている。銭は半銭 (明治 15 年)、半銭 (明治 17 年)、文久永寶の 3 枚が検出されている。共伴している陶磁器から明治中葉に比定されておりその年代観と合致する。

SK383 (Ⅲ-126 図)

SK383 は C₂ 区にある土坑である。銭は 434 新寛永通寶 元禄期荻原銭・草点永、435 新寛永通寶 四ツ寶銭・広永、436 新寛永通寶 四ツ寶銭・勁永広寛の 4 枚が検出された。いずれも上記のように初鑄年は元禄期推定とされている。共伴している陶磁器から 17 世紀末～18 世紀前葉に比定されておりその年代観と合致する。

SU385 (Ⅲ-126 図)

SU385 は C₂ 区にある地下室である。銭は 437 新寛永通寶 不旧手・高寛潤縁が検出された。共伴している陶磁器から近代に比定されておりその年代観と合致する。

第三章 人工遺物

| 番号 | 出土遺構 | 銭名 | 銭種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|----|-------|------------|------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 銭径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 1 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.8 | 18.7 | 5.8 | 0.9 | 2.05 | 3.15 |
| 2 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・高田錢. 笹手永 | 24.3 | 18.9 | 5.6 | 1.1 | 2.7 | 2.69 |
| 3 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.8 | 18.7 | 5.3 | 0.9 | 2.05 | 2.41 |
| 4 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | 18.6 | 6.1 | 0.9 | 2.25 | 2.83 |
| 5 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | 18.3 | 6.4 | 0.9 | 2.4 | 2.92 |
| 6 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 18.6 | 6.3 | 1.1 | 2.35 | 2.51 |
| 7 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江錢. 正字 | 23 | 18.9 | 6 | 0.9 | 2.05 | 3.28 |
| 8 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 18.5 | 6 | 1.1 | 2.45 | 3.26 |
| 9 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 18.9 | 6.1 | 0.9 | 2.05 | 3.29 |
| 10 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23 | 18.7 | 6.2 | 0.9 | 2.15 | 2.28 |
| 11 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 正字背文 | 25.3 | 20 | 5.2 | 1.2 | 2.65 | 3.75 |
| 12 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知錢. 太細 | 24.3 | 19.5 | 5.3 | 0.9 | 2.4 | 3.42 |
| 13 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23 | 18.2 | 6.2 | 0.9 | 2.4 | 3.22 |
| 14 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 18.6 | 6.1 | 1 | 2.35 | 3.29 |
| 15 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.5 | 18.7 | 6.5 | 0.6 | 1.9 | 1.92 |
| 16 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.7 | 18.6 | 6.3 | 0.8 | 2.05 | 2.35 |
| 17 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.7 | 18.2 | 6.2 | 0.9 | 2.25 | 2.71 |
| 18 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 18.9 | 5.5 | 0.9 | 2 | 3.02 |
| 19 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江錢. 小字 | 22.8 | 18.3 | 5.4 | 1.1 | 2.25 | 3.18 |
| 20 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 18.6 | 6.6 | 1.1 | 2.15 | 3.2 |
| 21 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 18.7 | 5.8 | 0.9 | 2.35 | 3.2 |
| 22 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 中字背文 | 25.2 | 20.4 | 5.3 | 0.8 | 2.4 | 2.79 |
| 23 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 22.8 | 17.9 | 5.6 | 1.2 | 2.45 | 3.29 |
| 24 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 18.8 | 6.3 | 1.1 | 2.3 | 3.27 |
| 25 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・水戸錢. 星刮去 | 24.3 | 19.8 | 5.3 | 0.8 | 2.25 | 3.92 |
| 26 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 18.5 | 5.7 | 0.7 | 2.25 | 2.3 |
| 27 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 18.8 | 6.3 | 1 | 2.1 | 2.96 |
| 28 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 正字背文 | 24.7 | 20 | 5.3 | 1.2 | 2.35 | 3.46 |
| 29 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.2 | 18.6 | 6.5 | 0.9 | 2.3 | 2.9 |
| 30 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 19.2 | 6.4 | 0.9 | 1.9 | 2.72 |
| 31 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 18.9 | 6.6 | 0.8 | 2.05 | 2.53 |
| 32 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.1 | 20.2 | 5.4 | 1 | 2.45 | 3.03 |
| 33 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 18.7 | 6.1 | 1.1 | 2.1 | 3.58 |
| 34 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.9 | 18.6 | 6.5 | 1 | 2.15 | 2.77 |
| 35 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越錢 | 24.1 | 19.5 | 5.4 | 1.6 | 2.3 | 5.89 |
| 36 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝錢. 二草点 | 24.1 | 19.5 | 5.7 | 1 | 2.3 | 3.57 |
| 37 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 正字背文 | 24.9 | 20.2 | 5.8 | 1.1 | 2.35 | 3.39 |
| 38 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杳谷錢. 明曆期 | 24.9 | 19.9 | 5.1 | 0.9 | 2.5 | 3 |
| 39 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 22.9 | 18.7 | 6 | 0.9 | 2.1 | 2.97 |
| 40 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越錢 | 24.1 | 20 | 6.2 | 0.9 | 2.05 | 2.66 |
| 41 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山錢. 俯永 | 23.9 | 19.5 | 5.2 | 0.9 | 2.2 | 3.33 |
| 42 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.2 | 18.7 | 6.2 | 1.1 | 2.25 | 3.48 |
| 43 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 18.8 | 6.7 | 0.9 | 2.05 | 2.63 |
| 44 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知錢. 力永 | 24.7 | 19.5 | 5.4 | 1.1 | 2.6 | 4.28 |
| 45 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 縮字背文 | 24.7 | 19.4 | 5.4 | 1.1 | 2.65 | 3.68 |
| 46 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 中字背文 | 25.2 | 20.2 | 5.6 | 1.1 | 2.5 | 3.56 |
| 47 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 18.6 | 5.6 | 1.2 | 2.35 | 3.56 |
| 48 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越錢 | 24.3 | 19.4 | 5.6 | 1.2 | 2.45 | 3.83 |
| 49 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 19 | 6.2 | 1 | 2.15 | 2.82 |
| 50 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝錢. 不草点 | 24.2 | 19.5 | 5.5 | 0.8 | 2.35 | 2.6 |
| 51 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 18.7 | 6.1 | 0.7 | 2.2 | 2.04 |
| 52 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | 18.5 | 6.3 | 1 | 2.3 | 3.36 |
| 53 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23.1 | 18.5 | 6.4 | 0.9 | 2.3 | 3 |
| 54 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 19.1 | 6.5 | 0.9 | 2 | 2.99 |
| 55 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝錢. 二草点 | 24.7 | 19.6 | 5.3 | 1 | 2.55 | 3.41 |
| 56 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.8 | 18.9 | 6.5 | 0.9 | 1.95 | 2.84 |
| 57 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 19 | 6.3 | 0.7 | 1.95 | 2.28 |
| 58 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字小文 | 25 | 19.9 | 6 | 1.2 | 2.55 | 3.8 |

III-6 表 銭貨観察表 (1)

第4節 錢 貨

| 番号 | 出土遺構 | 銭名 | 銭種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|-----|-------|------------|------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 銭径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 59 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江銭, 小字 | 22.7 | 18.7 | 5.6 | 1.1 | 2 | 3.08 |
| 60 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.4 | 18.9 | 6.9 | 0.9 | 1.75 | 2.83 |
| 61 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.9 | 18.9 | 6.7 | 0.8 | 2 | 2.63 |
| 62 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 長門? | 24.6 | 20 | 5.4 | 1.1 | 2.3 | 3.53 |
| 63 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 藤沢銭, 不旧手 | 23 | 18.5 | 6.2 | 0.8 | 2.25 | 2.37 |
| 64 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 不旧手? | 23.7 | 18.3 | 5.6 | 1.1 | 2.7 | 2.7 |
| 65 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.4 | 19 | 6 | 1.1 | 2.2 | 3.43 |
| 66 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 22.5 | 19.1 | 6.2 | 1.1 | 1.7 | 2.9 |
| 67 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.8 | 18.9 | 5 | 1.1 | 1.95 | 2.54 |
| 68 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 22.7 | 18.7 | 5.9 | 0.9 | 2 | 2.58 |
| 69 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 長門銭, 奇永 | 24.6 | 18.6 | 5.5 | 0.8 | 3 | 3.91 |
| 70 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.4 | 19.2 | 5.5 | 0.9 | 2.1 | 2.96 |
| 71 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.1 | 18.9 | 5.9 | 0.9 | 2.1 | 2.78 |
| 72 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭, 伸寛 | 23.7 | 19.8 | 5.1 | 1.2 | 1.95 | 3.54 |
| 73 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.5 | 18.7 | 6 | 0.9 | 1.9 | 2.87 |
| 74 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.8 | 18.9 | 6 | 0.9 | 1.95 | 2.61 |
| 75 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.9 | 18.8 | 6.1 | 0.8 | 2.05 | 2.35 |
| 76 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.3 | 19 | 5.9 | 1 | 2.15 | 2.72 |
| 77 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 23.3 | 18.6 | 5.6 | 1 | 2.35 | 3.01 |
| 78 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 23 | 19 | 6 | 0.9 | 2 | 2.33 |
| 79 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.5 | 18.8 | 5.9 | 1 | 2.35 | 3.3 |
| 80 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.9 | 18.5 | 6.3 | 0.8 | 2.2 | 2.6 |
| 81 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺銭 | 25.1 | 20 | 5.8 | 1.2 | 2.55 | 3.85 |
| 82 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.8 | 19.2 | 6.3 | 0.8 | 1.8 | 3.23 |
| 83 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭, 細字小文 | 24.6 | 19.5 | 5.5 | 1 | 2.55 | 2.81 |
| 84 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・水戸銭, 放永 | 24.9 | 19.3 | 5.4 | 1 | 2.8 | 3.28 |
| 85 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 22.8 | 18.8 | 6.1 | 1.2 | 2 | 3.54 |
| 86 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.3 | 18.9 | 5.9 | 0.9 | 2.2 | 3.01 |
| 87 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.4 | 19.1 | 5.9 | 1.1 | 2.15 | 3.19 |
| 88 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 22.7 | 18.8 | 6.7 | 1 | 1.95 | 2.81 |
| 89 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 23 | 19 | 6.8 | 0.9 | 2 | 2.42 |
| 90 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭, 正字背文 | 25.3 | 20.3 | 5.3 | 1.1 | 2.5 | 3.54 |
| 91 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 23.4 | 18.9 | 6 | 1.1 | 2.25 | 2.34 |
| 92 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 23 | 18.9 | 6.5 | 0.9 | 2.05 | 3.69 |
| 93 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭, 正字背文 | 25.5 | 20.3 | 5.8 | 1.1 | 2.6 | 2.74 |
| 94 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.3 | 19.9 | 6 | 1.1 | 1.7 | 3.2 |
| 95 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭, 細字背小文 | 25.1 | 19.7 | 5.6 | 1 | 2.7 | 3.55 |
| 96 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 23.3 | 18.8 | 6 | 1 | 2.25 | 3.12 |
| 97 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.7 | 18.7 | 6.3 | 0.9 | 2 | 2.51 |
| 98 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23 | 18.8 | 5.7 | 0.9 | 2.1 | 2.7 |
| 99 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.7 | 19 | 6 | 1 | 2.35 | 3.18 |
| 100 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.8 | 18.8 | 5.8 | 0.9 | 2 | 2.84 |
| 101 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 23 | 18.8 | 6.1 | 1 | 2.1 | 3.08 |
| 102 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 22.9 | 18.9 | 6.4 | 0.8 | 2 | - |
| 103 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭, 太細 | 24.1 | 19.9 | 5.3 | 1.1 | 2.1 | 3.35 |
| 104 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺銭 | 24.9 | 19.8 | 5.7 | 1 | 2.55 | 2.91 |
| 105 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.3 | 19 | 6.5 | 1 | 2.15 | 3 |
| 106 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 23.1 | 18.9 | 6 | 0.8 | 2.1 | 2.36 |
| 107 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 22.8 | 18.9 | 5.7 | 0.8 | 1.95 | 2.39 |
| 108 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 22.8 | 18.9 | 6.5 | 0.9 | 1.95 | 2.52 |
| 109 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.1 | 18.8 | 5.8 | 1.2 | 2.15 | 2.64 |
| 110 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭, 太細 | 24.3 | 20.3 | 5.2 | 4.1 | 2 | 3.53 |
| 111 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 22.8 | 18.2 | 6 | 1.2 | 2.3 | 3.32 |
| 112 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 23.3 | 19.4 | 5.5 | 1 | 1.95 | 2.58 |
| 113 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.5 | 18.8 | 6 | 0.9 | 2.35 | 2.57 |
| 114 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永広寛 | 23.3 | 18.6 | 5.9 | 1 | 2.35 | 2.86 |
| 115 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 広永 | 23.7 | 18.9 | 5.7 | 1 | 2.4 | 2.97 |
| 116 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭, 勤永 | 22.7 | 18.5 | 5.9 | 0.8 | 2.1 | 2.39 |

III-6 表 銭貨観察表 (2)

第三章 人工遺物

| 番号 | 出土遺構 | 銭名 | 銭種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|-----|-------|------------|------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 銭径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 117 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺銭 | 25.2 | 19.5 | 5.5 | 1.2 | 2.85 | 3.22 |
| 118 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 18.5 | 6 | 1 | 2.2 | 2.93 |
| 119 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.2 | 18.6 | 5.5 | 1 | 2.3 | 3.09 |
| 120 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 18.7 | 6.2 | 0.8 | 2.1 | 2.36 |
| 121 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.4 | 19.2 | 5.9 | 1.4 | 2.1 | 3.91 |
| 122 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.8 | 6.3 | 1 | 2.1 | 2.76 |
| 123 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23.1 | 19 | 6.2 | 0.8 | 2.05 | 2.38 |
| 124 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.3 | 6.5 | 1 | 2.35 | 2.96 |
| 125 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背文 | 25.1 | 20 | 5.2 | 1.1 | 2.55 | 3.69 |
| 126 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23.1 | 18.5 | 6.2 | 0.9 | 2.3 | 2.68 |
| 127 | SU335 | 天聖元寶 (北宋) | | 24.5 | 20.1 | 6.7 | 1 | 2.2 | 2.8 |
| 128 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.1 | 18.9 | 5.9 | 1 | 2.1 | 3 |
| 129 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23.1 | 18.7 | 5.7 | 0.9 | 2.2 | 2.65 |
| 130 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永 | 23.1 | 18.6 | 6 | 0.9 | 2.25 | 2.52 |
| 131 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 松本銭. 斜宝 | 24.7 | 19.7 | 6.3 | 1.2 | 2.5 | 3.54 |
| 132 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.4 | 20 | 5.6 | 1.1 | 2.2 | 3.83 |
| 133 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭. 俯永伸寛 | 24.5 | 20 | 5.6 | 1.1 | 2.25 | 4.09 |
| 134 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭. 俯永 | 24.4 | 19.8 | 5.2 | 1.2 | 2.3 | 3.52 |
| 135 | SU335 | 元祐通寶 (北宋) | | 24 | 20.1 | 6.9 | 0.9 | 1.95 | 2.93 |
| 136 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.7 | 19.5 | 5.9 | 1.1 | 2.1 | 2.97 |
| 137 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 18.9 | 6.5 | 0.9 | 2 | 2.3 |
| 138 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.8 | 5.9 | 1 | 2.1 | 2.98 |
| 139 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 22.8 | 19 | 6.6 | 0.8 | 1.9 | 1.92 |
| 140 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23 | 18.5 | 5.8 | 0.9 | 2.25 | 2.47 |
| 141 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永 | 23 | 18.6 | 6.4 | 0.9 | 2.2 | 2.62 |
| 142 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字小文 | 25.3 | 19.7 | 5.6 | 1.3 | 2.8 | 3.38 |
| 143 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永 | 22.9 | 18.7 | 6.2 | 0.9 | 2.1 | 2.7 |
| 144 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 22.8 | 18.5 | 6.4 | 0.9 | 2.15 | 2.34 |
| 145 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.5 | 6.4 | 1 | 2.25 | 2.61 |
| 146 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江銭. 小字 | 22.9 | 18 | 5.5 | 1 | 2.45 | 2.83 |
| 147 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.9 | 6.4 | 1.2 | 2.05 | 3.27 |
| 148 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永 | 23.2 | 18.6 | 5.8 | 1 | 2.3 | 2.88 |
| 149 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.4 | 18.7 | 6.1 | 1 | 2.35 | 3.1 |
| 150 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.3 | 19.1 | 5.9 | 1.1 | 2.1 | 2.99 |
| 151 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 太細 | 24.4 | 20 | 5.3 | 1.2 | 2.2 | 3.8 |
| 152 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.2 | 6.4 | 0.9 | 2.4 | 2.49 |
| 153 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 19 | 6.4 | 0.8 | 1.95 | 2.54 |
| 154 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杓谷銭. | 24.7 | 19.4 | 5.9 | 1 | 2.65 | 2.67 |
| 155 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭. 俯永 | 24.3 | 20 | 5.6 | 1.1 | 2.15 | 3.32 |
| 156 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 力永 | 24.6 | 20 | 5.8 | 1 | 2.3 | 3.6 |
| 157 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杓谷銭. | 25 | 19.8 | 5.3 | 1 | 2.6 | 3.62 |
| 158 | SU335 | 寛永通寶 (古) | ? | 24 | 18.9 | 5.3 | 1.3 | 2.55 | 4.13 |
| 159 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 退点文 | 25.3 | 20 | 5.5 | 1 | 2.65 | 3.45 |
| 160 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永 | 23.2 | 19 | 6.3 | 0.9 | 2.1 | 3.06 |
| 161 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杓谷銭. | 24.4 | 19.5 | 5.2 | 1 | 2.45 | 3.88 |
| 162 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 太細 | 24.1 | 20.1 | 5.3 | 1.4 | 2 | 4.7 |
| 163 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.7 | 5.7 | 1 | 2.3 | 3.13 |
| 164 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.3 | 19.1 | 5.7 | 1 | 2.1 | 3.34 |
| 165 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 水戸銭. 長永 | 24 | 19.6 | 5.5 | 1 | 2.2 | 2.68 |
| 166 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永 | 22.7 | 18.7 | 6 | 0.9 | 2 | 2.79 |
| 167 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字小文 | 25.4 | 19.7 | 5.4 | 1.1 | 2.85 | 3.73 |
| 168 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字小文 | 25.3 | 20.1 | 5.5 | 1.1 | 2.6 | 3.45 |
| 169 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.4 | 19.5 | 5.6 | 1 | 2.45 | 3.47 |
| 170 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背小文 | 25.5 | 20.3 | 5.3 | 1.1 | 2.6 | 3.72 |
| 171 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 勤永 | 22.9 | 19 | 5.6 | 1.2 | 1.95 | 3.28 |
| 172 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.4 | 18.9 | 6 | 1.1 | 2.25 | 3.15 |
| 173 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭. 広永 | 23.3 | 19.2 | 6 | 1.1 | 2.05 | 3.15 |
| 174 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 太細 | 24.2 | 19.5 | 5.5 | 1.1 | 2.35 | 3.08 |

Ⅲ-6表 銭貨観察表 (3)

第4節 錢 貨

| 番号 | 出土遺構 | 錢名 | 錢種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|-----|-------|------------|------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 錢径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 175 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.8 | 18.7 | 6 | 0.8 | 2.05 | 2.64 |
| 176 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 19.1 | 5.8 | 1 | 2.1 | 3.06 |
| 177 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.8 | 18.7 | 6.2 | 0.9 | 2.05 | 2.54 |
| 178 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.9 | 18.5 | 5.6 | 1 | 2.2 | 3.11 |
| 179 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 22.9 | 19.2 | 6.3 | 0.9 | 1.85 | 2.75 |
| 180 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23.3 | 18.8 | 5.8 | 1.1 | 2.25 | 2.91 |
| 181 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | 18.9 | 5.9 | 1 | 2.1 | 3.04 |
| 182 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23 | 18.9 | 6 | 1 | 2.05 | 3.35 |
| 183 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 18.9 | 6.5 | 0.5 | 2.05 | - |
| 184 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 18.5 | 6.9 | 0.8 | 2.2 | 2.6 |
| 185 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.2 | 19.3 | 6.4 | 0.9 | 1.95 | 2.88 |
| 186 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・水戸錢. 星刮去 | 24.2 | 19.5 | 5.2 | 1.2 | 2.35 | 4.32 |
| 187 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 正字背文 | 25.1 | 20.1 | 5.7 | 1 | 2.5 | 3.19 |
| 188 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.2 | 19.2 | 6.2 | 0.9 | 2 | 2.58 |
| 189 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山錢. 小字 | 24 | 19.5 | 5.2 | 0.9 | 2.25 | 3.15 |
| 190 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.3 | 19 | 6.3 | 0.9 | 2.15 | 2.42 |
| 191 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 18.8 | 6.5 | 0.9 | 2.1 | 2.86 |
| 192 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 19.8 | 6.2 | 1 | 1.55 | 2.72 |
| 193 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知錢. 力永 | 24.5 | 19.9 | 5.2 | 1.1 | 2.3 | 4.12 |
| 194 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.8 | 19 | 6.2 | 0.9 | 1.9 | 2.47 |
| 195 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23 | 18.8 | 6 | 1 | 2.1 | 2.75 |
| 196 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23 | 19 | 6 | 0.9 | 2 | 2.89 |
| 197 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺錢 | 25.1 | 19.9 | 6.1 | 1.1 | 2.6 | 3.5 |
| 198 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山錢. 俯永 | 24 | 19.9 | 6.1 | 1.2 | 2.05 | 3.82 |
| 199 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山錢. 小字 | 24.4 | 19.8 | 5 | 0.9 | 2.3 | 3.16 |
| 200 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 正字背文 | 24.6 | 19.4 | 5.6 | 1.2 | 2.6 | 3.5 |
| 201 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 18.9 | 5.8 | 0.9 | 2.2 | 2.99 |
| 202 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 18.8 | 6.2 | 1.1 | 2.3 | 3.49 |
| 203 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺錢 | 25.1 | 19.7 | 5.8 | 1.1 | 2.7 | 4.01 |
| 204 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23.1 | 18.5 | 6 | 1.1 | 2.3 | 3.21 |
| 205 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知錢. 力永 | 24.5 | 19.8 | 5.3 | 0.9 | 2.35 | 3.31 |
| 206 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝錢. 不草点 | 24 | 19.5 | 5.3 | 1.1 | 2.25 | 3.34 |
| 207 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23 | 19 | 5.6 | 0.9 | 2 | 2.6 |
| 208 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23.2 | 18.5 | 6.3 | 1.1 | 2.35 | 3.17 |
| 209 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 22.9 | 18.5 | 6.2 | 1 | 2.2 | 2.7 |
| 210 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺錢 | 25 | 19.4 | 5.7 | 0.9 | 2.8 | 3.27 |
| 211 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山錢. 伸寛 | 24.3 | 19.9 | 5.7 | 0.9 | 2.2 | 2.55 |
| 212 | SU335 | 熙寧元寶 (北宋) | | 23.4 | 20.3 | 7 | 0.9 | 1.55 | 1.94 |
| 213 | SU335 | 熙寧元寶 (北宋) | | 22.5 | 19.4 | 6.6 | 0.9 | 1.55 | 3.11 |
| 214 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | 18.8 | 5.7 | 0.9 | 2.15 | 2.77 |
| 215 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 19 | 5.7 | 1 | 2.2 | 3.18 |
| 216 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 19 | 5.9 | 1.1 | 2.15 | 3.31 |
| 217 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越錢 | 24.4 | 19.5 | 5.2 | 1 | 2.45 | 3.53 |
| 218 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.1 | 19.7 | 5.4 | 1 | 2.7 | 3.37 |
| 219 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.5 | 18.8 | 6.9 | 0.9 | 1.85 | 2.7 |
| 220 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 18.8 | 6.1 | 1.1 | 2.25 | 3.51 |
| 221 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 18.7 | 6.4 | 1 | 2.2 | 3.02 |
| 222 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.3 | 19.5 | 5.7 | 1.2 | 2.9 | 3.58 |
| 223 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.5 | 18.6 | 6.8 | 0.8 | 1.95 | 2.44 |
| 224 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.8 | 18.7 | 5.6 | 1 | 2.05 | 2.9 |
| 225 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越錢 | 24.7 | 19.5 | 6.2 | 1 | 2.6 | 2.46 |
| 226 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山錢. 良恕手 | 23.4 | 18 | 5.3 | 1 | 2.7 | 3.03 |
| 227 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.9 | 18.6 | 6.4 | 0.8 | 2.15 | 2.61 |
| 228 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | 19 | 6.1 | 0.9 | 2.05 | 2.75 |
| 229 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 18.9 | 6.4 | 0.8 | 2.2 | 2.79 |
| 230 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・高田錢. 降宝 | 24.7 | 19.8 | 5.5 | 1 | 2.45 | 3.79 |
| 231 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.8 | 18.6 | 6.1 | 0.7 | 2.1 | 2.33 |
| 232 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 19.1 | 5.8 | 0.9 | 2.1 | 2.42 |

III-6 表 錢貨觀察表 (4)

第三章 人工遺物

| 番号 | 出土遺構 | 銭名 | 銭種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|-----|-------|------------|------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 銭径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 233 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 19.2 | 6 | 1 | 1.9 | 2.53 |
| 234 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23.1 | 19 | 6 | 0.7 | 2.05 | 2.24 |
| 235 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.6 | 18.5 | 6.1 | 1 | 2.05 | 2.87 |
| 236 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭. 縮字 | 24.1 | 19.5 | 5.4 | 1 | 2.3 | 2.71 |
| 237 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23.3 | 19 | 6.2 | 0.8 | 2.15 | 2.49 |
| 238 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭. 俯永 | 24.8 | 20.1 | 5.2 | 1.5 | 2.35 | 4.19 |
| 239 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 19 | 5.9 | 0.9 | 2.15 | 2.82 |
| 240 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭. 小字 | 24.3 | 19.3 | 5.4 | 1 | 2.5 | 3.06 |
| 241 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 正字背文 | 25.2 | 20.4 | 5.4 | 1.1 | 2.4 | 3.26 |
| 242 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江銭. 小字 | 23 | 18.7 | 5.6 | 0.9 | 2.15 | 2.84 |
| 243 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.9 | 5.9 | 1 | 2.2 | 2.94 |
| 244 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.5 | 18.9 | 6 | 0.8 | 1.8 | 2.39 |
| 245 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.6 | 18.3 | 6.1 | 0.9 | 2.15 | 2.68 |
| 246 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.7 | 18.5 | 5.5 | 0.8 | 2.1 | 2.58 |
| 247 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.6 | 18.7 | 6 | 0.8 | 1.95 | 2.94 |
| 248 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23.2 | 18.9 | 6.3 | 1 | 2.15 | 3.11 |
| 249 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.5 | 18.6 | 6.6 | 0.8 | 1.95 | 2.2 |
| 250 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23 | 18.8 | 5.8 | 0.9 | 2.1 | 3.04 |
| 251 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 19.1 | 5.3 | 1.2 | 2.1 | 3.64 |
| 252 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.8 | 18.9 | 6.1 | 0.8 | 1.95 | 2.67 |
| 253 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 長門銭. 奇永 | 24.8 | 19.5 | 5.4 | 1 | 2.65 | 3.12 |
| 254 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江銭. 正字 | 22.6 | 18.8 | 5.6 | 1.1 | 1.9 | 3.15 |
| 255 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 19 | 6 | 0.8 | 2 | 2.31 |
| 256 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝銭. 不草点 | 24.2 | 19.7 | 5.2 | 1.1 | 2.25 | 3.86 |
| 257 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 19 | 6 | 0.8 | 2 | 2.53 |
| 258 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 18.9 | 6 | 0.9 | 2 | 2.85 |
| 259 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.3 | 5.9 | 1.1 | 2.5 | 3.13 |
| 260 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.5 | 18.8 | 6 | 0.9 | 1.85 | 2.92 |
| 261 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23.1 | 18.9 | 6.1 | 0.8 | 2.1 | 2.77 |
| 262 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.6 | 18.5 | 6.4 | 0.7 | 2.05 | 2.21 |
| 263 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.8 | 18.4 | 6 | 0.8 | 2.2 | 2.53 |
| 264 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.5 | 6.3 | 0.9 | 2.25 | 2.78 |
| 265 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.2 | 19.3 | 6.5 | 0.9 | 1.95 | 2.77 |
| 266 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.1 | 18.8 | 6.3 | 1 | 2.15 | 2.92 |
| 267 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背文 | 25 | 20.1 | 5.7 | 1.1 | 2.45 | 2.87 |
| 268 | SU335 | 治平元寶 (北宋) | | 23 | 18.3 | 6 | 0.9 | 2.35 | 2 |
| 269 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.8 | 18.6 | 6.2 | 0.9 | 2.1 | 2.78 |
| 270 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 18.5 | 6.5 | 0.8 | 2.2 | 2.42 |
| 271 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 18.7 | 6.5 | 1.2 | 2.1 | 2.97 |
| 272 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23 | 18.5 | 6.2 | 0.8 | 2.25 | 2.35 |
| 273 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23 | 18.5 | 6.1 | 0.8 | 2.25 | 2.6 |
| 274 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背文 | 24.8 | 19.5 | 5.5 | 1.2 | 2.65 | 3.37 |
| 275 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.8 | 18.5 | 6.2 | 0.9 | 2.15 | 2.6 |
| 276 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 水戸銭. 長永 | 24.6 | 19.2 | 5.1 | 1 | 2.7 | 2.94 |
| 277 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23 | 18.5 | 6.3 | 1.1 | 2.25 | 3.6 |
| 278 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 力永 | 24.2 | 19.3 | 5.4 | 0.9 | 2.45 | 2.86 |
| 279 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.2 | 18.3 | 5.1 | 0.9 | 2.45 | 2.69 |
| 280 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝銭. 不草点 | 23.9 | 19.4 | 5.4 | 0.9 | 2.25 | 2.68 |
| 281 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 19.1 | 6.1 | 0.9 | 1.95 | 2.91 |
| 282 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.4 | 18.7 | 6.2 | 0.9 | 1.85 | 2.26 |
| 283 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 正字背文 | 25.3 | 20 | 5.3 | 1.1 | 2.65 | 3.35 |
| 284 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 正字背文 | 25.3 | 19.7 | 5.1 | 1.1 | 2.8 | 3.08 |
| 285 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.2 | 18.8 | 5.7 | 1.1 | 2.2 | 3.1 |
| 286 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.9 | 18.8 | 6.1 | 1.3 | 2.05 | 3.64 |
| 287 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 22.7 | 19 | 6 | 0.9 | 1.85 | 2.51 |
| 288 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.7 | 19 | 5.8 | 1 | 1.85 | 2.89 |
| 289 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 正字背文 | 25.3 | 20 | 5.4 | 1.3 | 2.65 | 3.46 |
| 290 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23.1 | 18.9 | 6.5 | 0.8 | 2.1 | 2.36 |

Ⅲ-6表 銭貨観察表 (5)

第4節 錢 貨

| 番号 | 出土遺構 | 銭名 | 銭種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|-----|-------|------------|-------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 銭径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 291 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.8 | 6.5 | 1 | 2.1 | 2.95 |
| 292 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23 | 18.8 | 5.9 | 1.1 | 2.1 | 3.15 |
| 293 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭. 伸寛 | 24.3 | 19.5 | 5.1 | 1.2 | 2.4 | 3.23 |
| 294 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.9 | 5.9 | 1 | 2.2 | 2.93 |
| 295 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23.1 | 18.1 | 5.9 | 1.3 | 2.5 | 3.75 |
| 296 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.7 | 5.5 | 1 | 2.3 | 2.93 |
| 297 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 中字背文 | 25.2 | 20.1 | 5.3 | 1.2 | 2.55 | 3.18 |
| 298 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.5 | 19.9 | 5.5 | 1.1 | 2.3 | 3.35 |
| 299 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝銭. 二草点 | 24.7 | 19 | 5.3 | 1.2 | 2.85 | 3.22 |
| 300 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23.1 | 18.7 | 6.1 | 1.1 | 2.2 | 3.21 |
| 301 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杓谷銭. | 25 | 19.6 | 5.5 | 1 | 2.7 | 3.01 |
| 302 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背文 | 25.3 | 20 | 5.2 | 1.3 | 2.65 | 4.24 |
| 303 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杓谷銭. | 24.7 | 19.8 | 5.4 | 1.2 | 2.45 | 4.12 |
| 304 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23.1 | 18.5 | 6.3 | 1 | 2.3 | 2.82 |
| 305 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.5 | 18.9 | 5.5 | 1.1 | 2.3 | 3.52 |
| 306 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.1 | 18.8 | 5.7 | 1.2 | 2.15 | 3.46 |
| 307 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背文 | 25.2 | 19.8 | 5.3 | 1.1 | 2.7 | 2.68 |
| 308 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 19.1 | 5.9 | 0.9 | 2.1 | 2.69 |
| 309 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.9 | 19.1 | 6.6 | 0.8 | 1.9 | - |
| 310 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 19.1 | 5.9 | 0.9 | 1.95 | 2.77 |
| 311 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背小文 | 25.1 | 19.8 | 5.8 | 1.1 | 2.65 | 3.36 |
| 312 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 正字背文 | 25.1 | 20.2 | 5.5 | 1.1 | 2.45 | 3.1 |
| 313 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺銭 | 25.4 | 19.8 | 6.4 | 1 | 2.8 | 3.07 |
| 314 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23.1 | 18.7 | 6 | 1 | 2.2 | 2.99 |
| 315 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.8 | 18.4 | 6 | 1 | 2.2 | 2.93 |
| 316 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.3 | 19.4 | 6.5 | 1 | 2.45 | 3.17 |
| 317 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.8 | 18.7 | 6.5 | 0.9 | 2.05 | 2.52 |
| 318 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背文 | 25.2 | 20.4 | 5.4 | 1.3 | 2.4 | 3.4 |
| 319 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.7 | 18.5 | 5.9 | 0.9 | 2.1 | 2.55 |
| 320 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23.1 | 18.8 | 5.6 | 0.9 | 2.15 | 3.02 |
| 321 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・建仁寺銭 | 25.5 | 19.5 | 5.9 | 1.1 | 3 | 3.66 |
| 322 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背小文 | 25.2 | 19.3 | 5.5 | 1.2 | 2.95 | 3.79 |
| 323 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・芝銭. 二草点 | 24 | 19.4 | 5.2 | 1 | 2.3 | 3.71 |
| 324 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.4 | 18.5 | 5.9 | 1 | 2.45 | 3.04 |
| 325 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杓谷銭. | 24.6 | 19.6 | 5.7 | 1 | 2.5 | 2.71 |
| 326 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背文 | 25.3 | 19.9 | 5.6 | 1.2 | 2.7 | 3.54 |
| 327 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.2 | 18.6 | 5.4 | 1.1 | 2.3 | 3.59 |
| 328 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.8 | 18.6 | 5.9 | 1 | 2.1 | 2.73 |
| 329 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.9 | 18.6 | 6.2 | 1 | 2.15 | 2.74 |
| 330 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 19 | 6.1 | 1 | 2.15 | 2.78 |
| 331 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・高田銭. 縮通 | 23.2 | 18.4 | 5.3 | 1 | 2.4 | 3.34 |
| 332 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.9 | 6.1 | 1 | 2.2 | 3.35 |
| 333 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・吉田銭. 狭永小字 | 24.1 | 18.8 | 5.1 | 1 | 2.65 | 3.44 |
| 334 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭. 細字背小文 | 25.2 | 19.6 | 5.5 | 1 | 2.8 | 2.54 |
| 335 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.4 | 18.7 | 5.9 | 1 | 2.35 | 2.7 |
| 336 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.8 | 19.8 | 5.9 | 1.2 | 2.5 | 33.39 |
| 337 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.4 | 5.8 | 1 | 2.45 | 3.12 |
| 338 | SU335 | 開元通寶 | | 23.3 | 18.7 | 7.1 | 0.7 | 2.3 | 2.23 |
| 339 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 太細 | 24.8 | 19.4 | 5.2 | 1.1 | 2.7 | 3.69 |
| 340 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 22.7 | 19.4 | 6.4 | 1 | 1.65 | 2.94 |
| 341 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.3 | 18.8 | 6 | 1 | 2.25 | 2.97 |
| 342 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 22.9 | 18.5 | 6.2 | 1.1 | 2.2 | - |
| 343 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永 | 23 | 18.5 | 6.1 | 0.9 | 2.25 | 2.48 |
| 344 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23 | 18.9 | 5.9 | 0.9 | 2.05 | 2.55 |
| 345 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.8 | 19.3 | 5.3 | 1.1 | 2.75 | 3.16 |
| 346 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 広永 | 23.4 | 18.4 | 5.8 | 1.1 | 2.5 | 3.34 |
| 347 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.3 | 19.5 | 6 | 1 | 2.4 | 2.98 |
| 348 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶銭. 勤永広寛 | 23.2 | 18.2 | 5.9 | 0.9 | 2.5 | 2.66 |

Ⅲ-6表 銭貨観察表 (6)

第三章 人工遺物

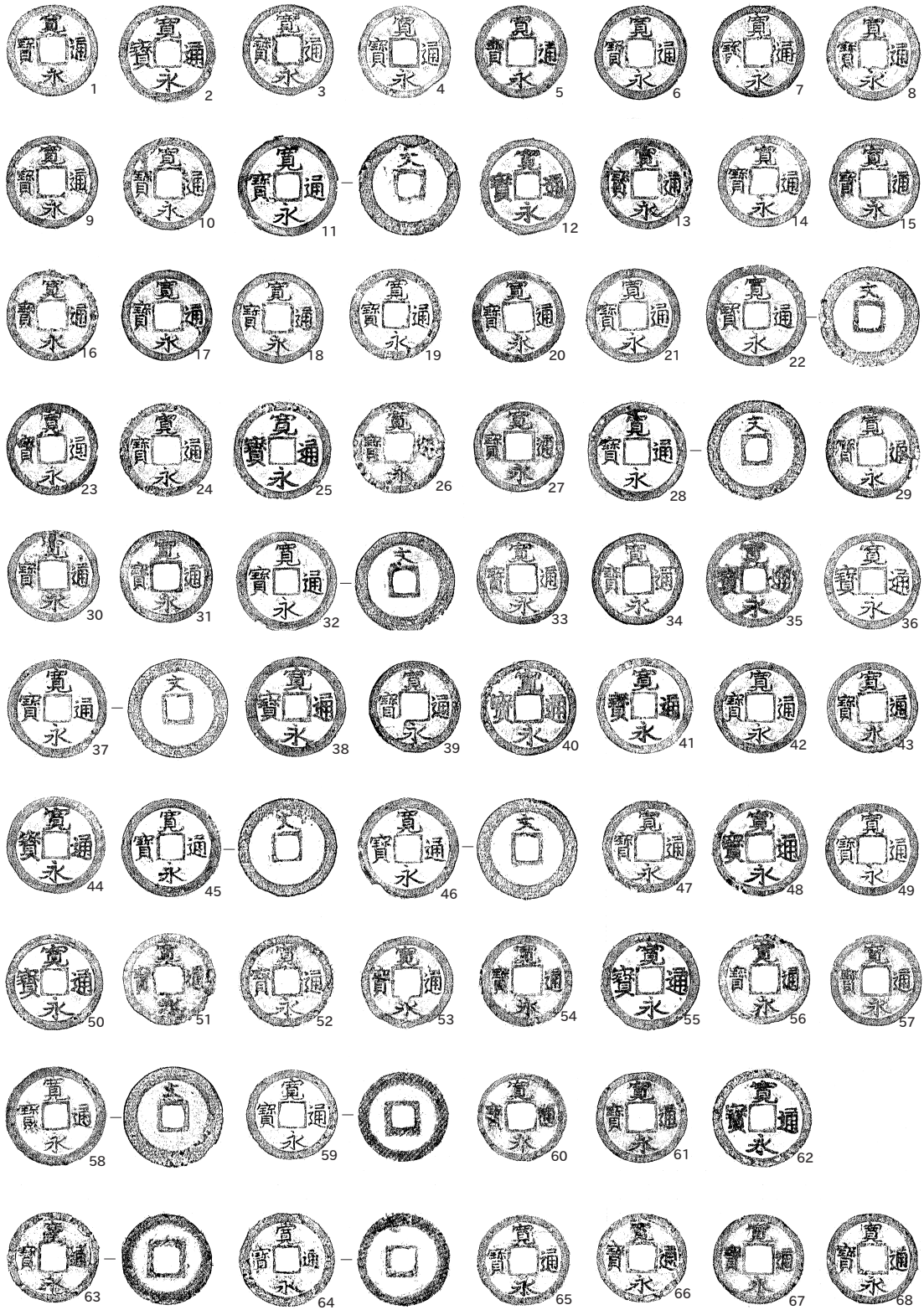
| 番号 | 出土遺構 | 銭名 | 銭種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|-----|-------|------------|-----------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 銭径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 349 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.8 | 18.5 | 6 | 0.9 | 2.15 | 2.73 |
| 350 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.7 | 18.7 | 6 | 0.9 | 2 | 2.57 |
| 351 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.7 | 19 | 5.9 | 0.8 | 1.85 | 2.58 |
| 352 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.1 | 20.1 | 5.3 | 1.3 | 2.5 | 3.84 |
| 353 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | 18.8 | 5.7 | 1 | 2.15 | 2.88 |
| 354 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 18.7 | 5.8 | 0.9 | 2.1 | 2.62 |
| 355 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.2 | 19.9 | 5.6 | 1.2 | 2.65 | 3.11 |
| 356 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 18.8 | 6.4 | 0.8 | 2.15 | 2.42 |
| 357 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 岡山銭 | 24.5 | 19.7 | 5.4 | 1 | 2.4 | 2.92 |
| 358 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.2 | 18.3 | 6.4 | 0.9 | 2.45 | 2.37 |
| 359 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杏谷銭. | 24.9 | 19.5 | 4.9 | 1 | 2.7 | 2.95 |
| 360 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江銭. 小字 | 23.2 | 18.3 | 5.5 | 1.4 | 2.45 | 2.66 |
| 361 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 19.2 | 6.1 | 1 | 2.05 | 2.84 |
| 362 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.9 | 18.9 | 5.5 | 1 | 2 | 3.25 |
| 363 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.9 | 18.8 | 6.3 | 1.1 | 2.05 | 2.85 |
| 364 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23.2 | 18.4 | 6 | 1 | 2.4 | 2.75 |
| 365 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背小文 | 25.4 | 20 | 5.4 | 1.2 | 2.7 | 3.76 |
| 366 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23.1 | 18.9 | 5.5 | 1.1 | 2.1 | 3.16 |
| 367 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.7 | 18.5 | 6.5 | 1 | 2.1 | 2.48 |
| 368 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 19.2 | 5.5 | 1 | 2.1 | 2.98 |
| 369 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.9 | 19.1 | 5.7 | 1 | 1.9 | 3.49 |
| 370 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.9 | 19.8 | 5.7 | 1.2 | 2.55 | 3.75 |
| 371 | SU335 | 寛永通寶 (古) | ? | 24.6 | 19.3 | 5.1 | 0.9 | 2.65 | 2.65 |
| 372 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 正字背文 | 25.6 | 20.3 | 5.1 | 1.3 | 2.65 | 3.38 |
| 373 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 18.8 | 5.9 | 0.8 | 2.15 | 2.58 |
| 374 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.1 | 19.8 | 5.2 | 1.1 | 2.65 | 3.91 |
| 375 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23.3 | 19.3 | 5.6 | 1 | 2 | 3.18 |
| 376 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 19.1 | 5.9 | 0.8 | 2 | 2.09 |
| 377 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.5 | 20 | 5 | 1.1 | 2.75 | 3.41 |
| 378 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 19 | 6.2 | 0.9 | 2.05 | - |
| 379 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・水戸銭. 放永 | 23.8 | 19.4 | 5.1 | 0.9 | 2.2 | 2.74 |
| 380 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 力永 | 24.3 | 19.5 | 5.3 | 1.1 | 2.4 | 3.56 |
| 381 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 22.7 | 19 | 5.6 | 1 | 1.85 | 2.93 |
| 382 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背小文 | 25.2 | 19.9 | 6 | 1.1 | 2.65 | 3.62 |
| 383 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23.1 | 18.8 | 6.3 | 0.9 | 2.15 | 2.29 |
| 384 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23 | 18.5 | 6.2 | 1.4 | 2.25 | - |
| 385 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 23 | 18.9 | 6 | 1.1 | 2.05 | 3.11 |
| 386 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 18.9 | 6.2 | 0.9 | 2.25 | 2.53 |
| 387 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.2 | 18.9 | 5.7 | 1 | 2.15 | 2.77 |
| 388 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.4 | 18.2 | 5.7 | 0.9 | 2.6 | 3.05 |
| 389 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 旧猿江銭. 正字 | 23.2 | 18.9 | 5.7 | 1 | 2.15 | 2.75 |
| 390 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背小文 | 25.3 | 20.1 | 5.6 | 1.2 | 2.6 | - |
| 391 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 23 | 18.5 | 5.9 | 0.9 | 2.25 | 2.66 |
| 392 | SU335 | 寛永通寶 (新・文) | 文錢. 細字背文 | 25.4 | 20.3 | 5.9 | 1 | 2.55 | 3.11 |
| 393 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 肥永小字 | 23.5 | 18.4 | 5 | 0.9 | 2.55 | 2.81 |
| 394 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 称・杏谷銭. | 24.8 | 19.7 | 5.2 | 1.2 | 2.55 | 2.97 |
| 395 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永 | 22.7 | 18.8 | 5.8 | 0.8 | 1.95 | 2.5 |
| 396 | SU335 | 寛永通寶 (古) | 不知銭. 力永 | 24.7 | 19.7 | 5.6 | 1.1 | 2.5 | 3.2 |
| 397 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.2 | 18.5 | 5.9 | 1.1 | 2.35 | 3.18 |
| 398 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.3 | 18.5 | 6.2 | 1.1 | 2.4 | 3.1 |
| 399 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 勤永広寛 | 22.6 | 18.7 | 6.1 | 1.1 | 1.95 | 3.24 |
| 400 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢. 広永 | 23.1 | - | 5.8 | 1.2 | - | - |
| 401 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 元禄期荻原銭. 草点永進永治水 | 23.4 | 18.6 | 5.8 | 1.1 | 2.4 | 2.92 |
| 402 | SU2 | 寛永通寶 (古) | 称・水戸銭. 広永 | 24 | 19.6 | 5.6 | 0.9 | 2.2 | 2.48 |
| 403 | SU2 | 寛永通寶 (新) | 寛保期足尾小字 | 22 | 17 | 5.9 | 0.7 | 2.5 | 1.81 |
| 404 | SU2 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 28 | 21 | 5.9 | 1 | 3.5 | 4.15 |
| 405 | SU2 | 寛永通寶 (新) | 四ツ寶錢 (?) | 23.2 | 18.8 | 6 | 1.1 | 2.2 | 2.94 |

III-6 表 銭貨観察表 (7)

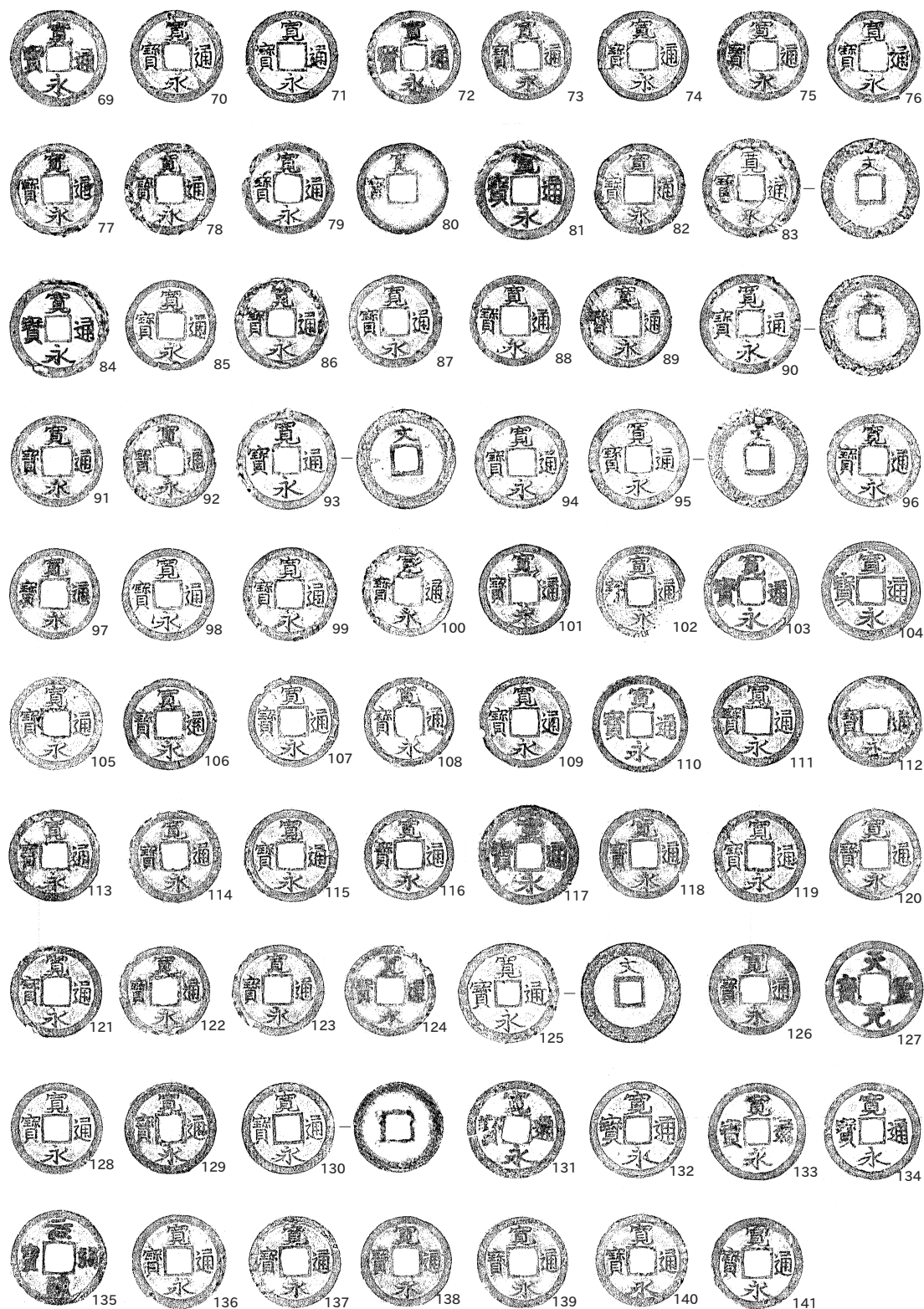
第4節 錢 貨

| 番号 | 出土遺構 | 錢名 | 錢種 | 寸法 (mm) | | | | | 重量 (g) |
|-----|-------|------------|---------------|---------|------|-----|-----|------|--------|
| | | | | 錢径 | 内径 | 穿径 | 厚さ | 縁 | |
| 406 | SK3 | 寛永通寶 (新) | 享保期 (仙台) 異書長通 | 23.9 | 19.9 | 5.6 | 1.2 | 2 | |
| 407 | SK3 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 27.7 | 21.4 | 6.7 | 1.2 | 3.15 | |
| 408 | SK41 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 28.2 | 20.8 | 5.9 | 1.2 | 3.7 | 4.65 |
| 409 | SU63 | 寛永通寶 (新) | 不旧手。進永 | 24.1 | 19.5 | 5.6 | 0.9 | 2.3 | 1.95 |
| 410 | SK89 | 寛永通寶 (新・文) | 文銭。正字背文 | 25.4 | 20 | 5.3 | 1.2 | 2.7 | 3.53 |
| 411 | SK140 | 寛永通寶 (新) | 享保期 (仙台) 異書 | 24.3 | 19.7 | 5.7 | 1.1 | 2.3 | 1.99 |
| 412 | SK186 | 寛永通寶 (新) | ? | 22.4 | 18.6 | 6.7 | 0.7 | 1.9 | 1.21 |
| 413 | SK186 | 寛永通寶 (新) | 享保期 (仙台) 異書長通 | 24.6 | 18.6 | 5.5 | 1 | 3 | 2.28 |
| 414 | SK186 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 28.6 | 20.4 | 6.2 | 1.3 | 4.1 | 4.15 |
| 415 | SK188 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 28.1 | 21.4 | 6 | 1.1 | 3.35 | 3.58 |
| 416 | SK188 | 寛永通寶 (新・文) | 細字背文 | 24.6 | 19.5 | 5.2 | 1.1 | 2.55 | 2.52 |
| 417 | SK189 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 28.1 | 20.6 | 6.2 | 1.1 | 3.75 | 4.47 |
| 418 | SK252 | 寛永通寶 (古) | 称・鳥越銭 | 24.3 | 19.6 | 5.6 | 0.9 | 2.35 | 2.21 |
| 419 | SK252 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭。勤永 | 23 | 18.9 | 6 | 0.8 | 2.05 | 2.12 |
| 420 | SK292 | 文久永寶 | 真文 | 26.8 | 20.3 | 6.5 | 0.9 | 3.25 | 3.47 |
| 421 | SK299 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 28 | 20 | 6 | 1.2 | 4 | 4.69 |
| 422 | SK299 | 寛永通寶 (新) | 不旧手。狭目寛 | 23.9 | 18.7 | 5 | 0.6 | 2.6 | 2.26 |
| 423 | SK299 | 寛永通寶 (新) | 寛保期高津背元 | 22.6 | 17.3 | 5.8 | 1 | 2.65 | 2.08 |
| 424 | SK299 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期俯永 | 28.2 | 20.6 | 5.4 | 1.1 | 3.8 | 4.71 |
| 425 | SK301 | 寛永通寶 (新) | 元文期十万坪手 | 23.4 | 18.5 | 5.8 | 0.9 | 2.45 | 1.78 |
| 426 | SK325 | 寛永通寶 (新) | 元禄期荻原銭。厚肉高寛 | 23.1 | 17.6 | 5.7 | 0.8 | 2.75 | 2.13 |
| 427 | SK330 | 寛永通寶 (新・四) | 明和期正字 | 28.4 | | 6.9 | 1.1 | 1.42 | 2.28 |
| 428 | SK331 | | 一銭 (明治7年) | 27.8 | | | 1.3 | 1.39 | 6.78 |
| 429 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭。勤永 | 23.1 | 18.4 | 5.8 | 1.1 | 2.35 | 2.51 |
| 430 | SU335 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭。勤永 | 22.9 | 18.3 | 6.2 | 0.7 | 2.3 | 1.98 |
| 431 | SK358 | | 半銭 (明治15年) | 22.1 | | | 1.1 | 1.10 | 3.28 |
| 432 | SK358 | | 半銭 (明治17年) | 22 | | | 1.1 | 1.1 | 3.3 |
| 433 | SK358 | 文久永寶 | | 27.4 | 19.8 | 5.6 | 0.8 | 3.8 | 3.01 |
| 434 | SK383 | 寛永通寶 (新) | 元禄期荻原銭。草点永 | 23.5 | 19 | 5.8 | 0.8 | 2.25 | 2.05 |
| 435 | SK383 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭。広永 | 23.4 | 18.8 | 6.2 | 0.9 | 2.3 | 2.4 |
| 436 | SK383 | 寛永通寶 (新) | 四ッ寶銭。勤永広寛 | 22.9 | 17.7 | 5.9 | 1 | 2.6 | 2.5 |
| 437 | SU385 | 寛永通寶 (新) | 不旧手。高寛潤縁 | 24 | 18.2 | 5.5 | 0.8 | 2.9 | 1.94 |
| 438 | 遺構外 | 寛永通寶 (新・文) | 細字背文 | 25.2 | 19.3 | 5.3 | 1.2 | 2.95 | 3.27 |
| 439 | 遺構外 | | | 25 | 20.6 | 5.8 | 1 | 2.2 | 3.82 |

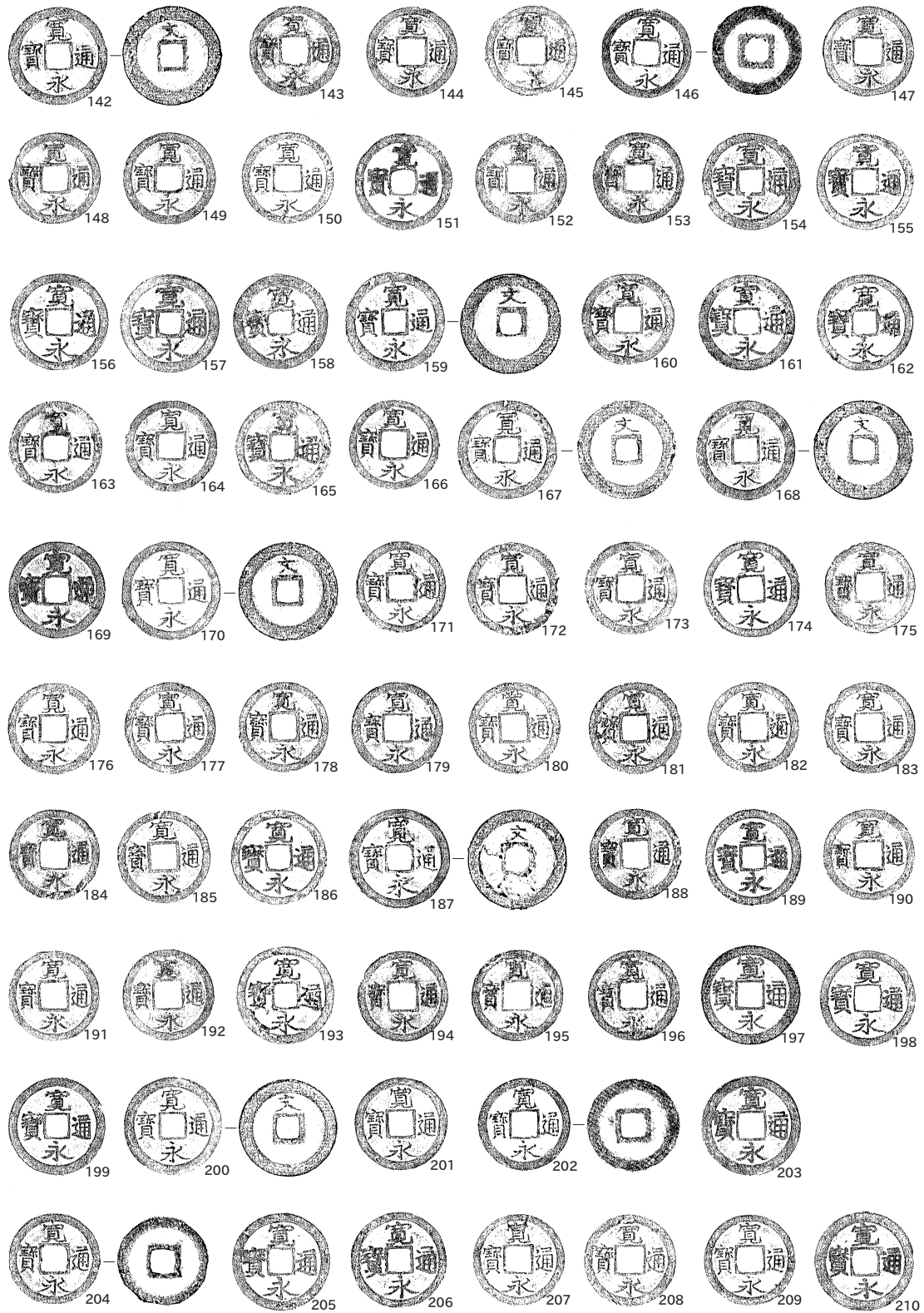
Ⅲ-6 表 錢貨観察表 (8)



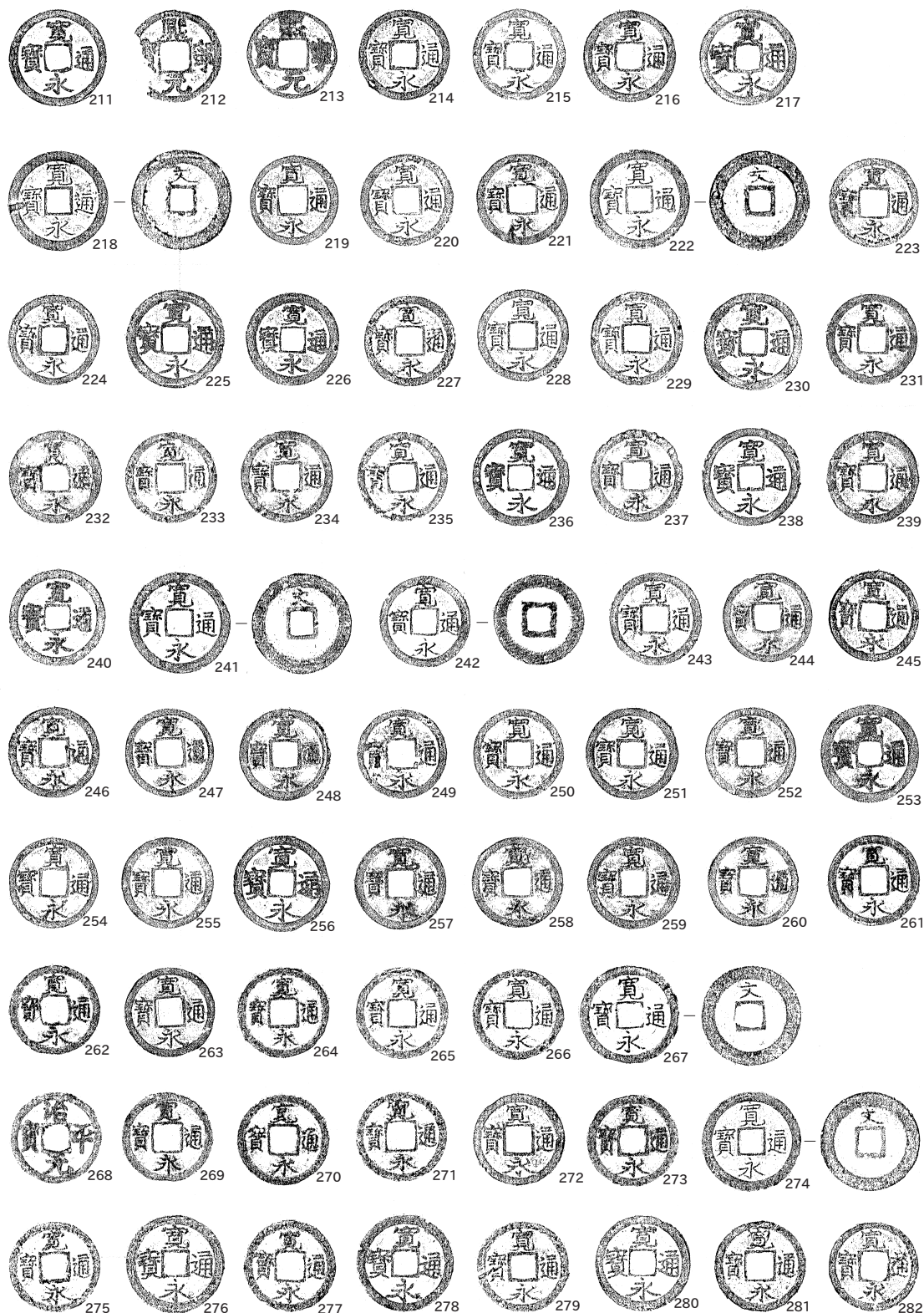
III-120 圖 SU335 (1) 錢 (S=2/3)



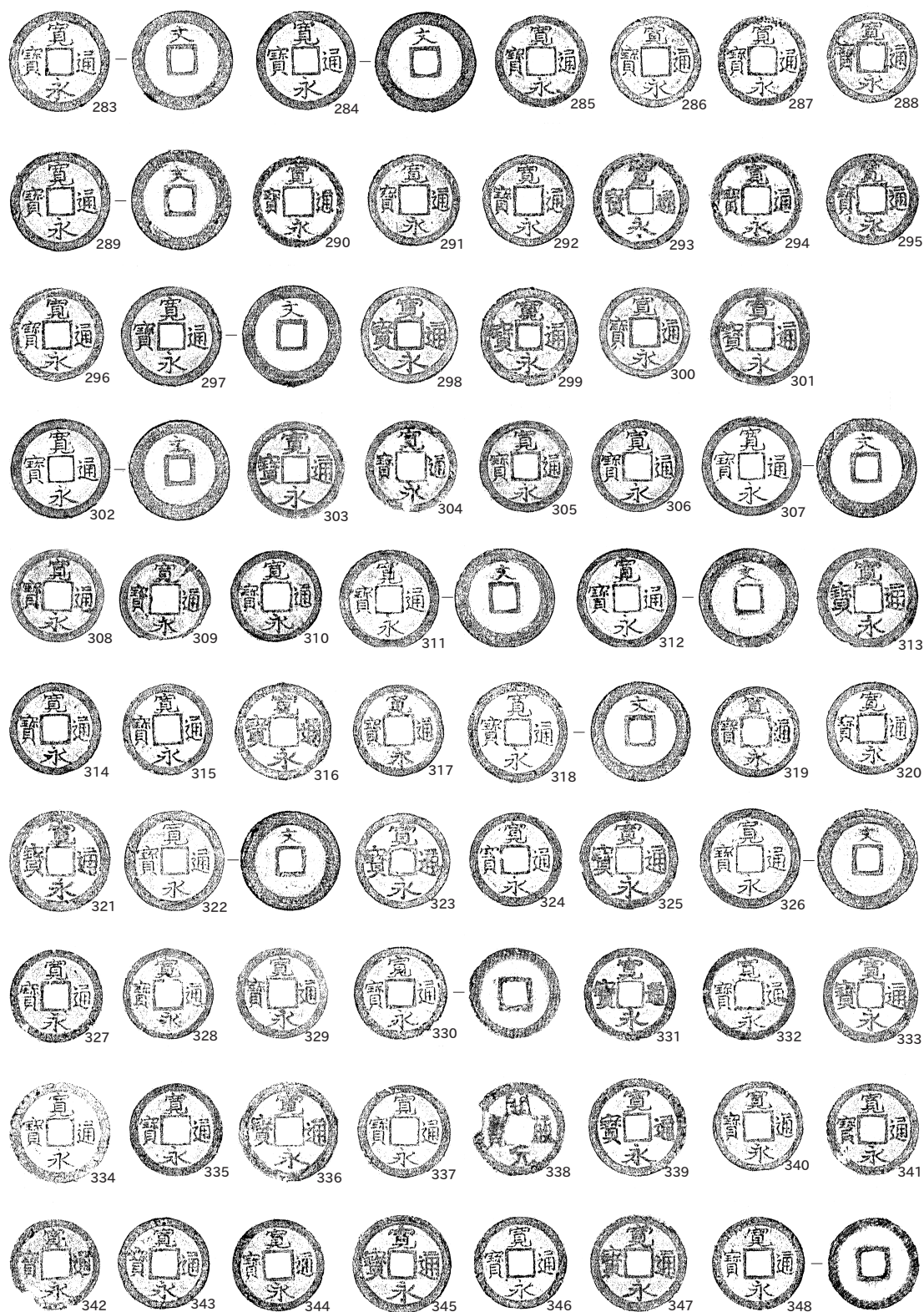
III-121 圖 SU335 (2) 錢 (S=2/3)



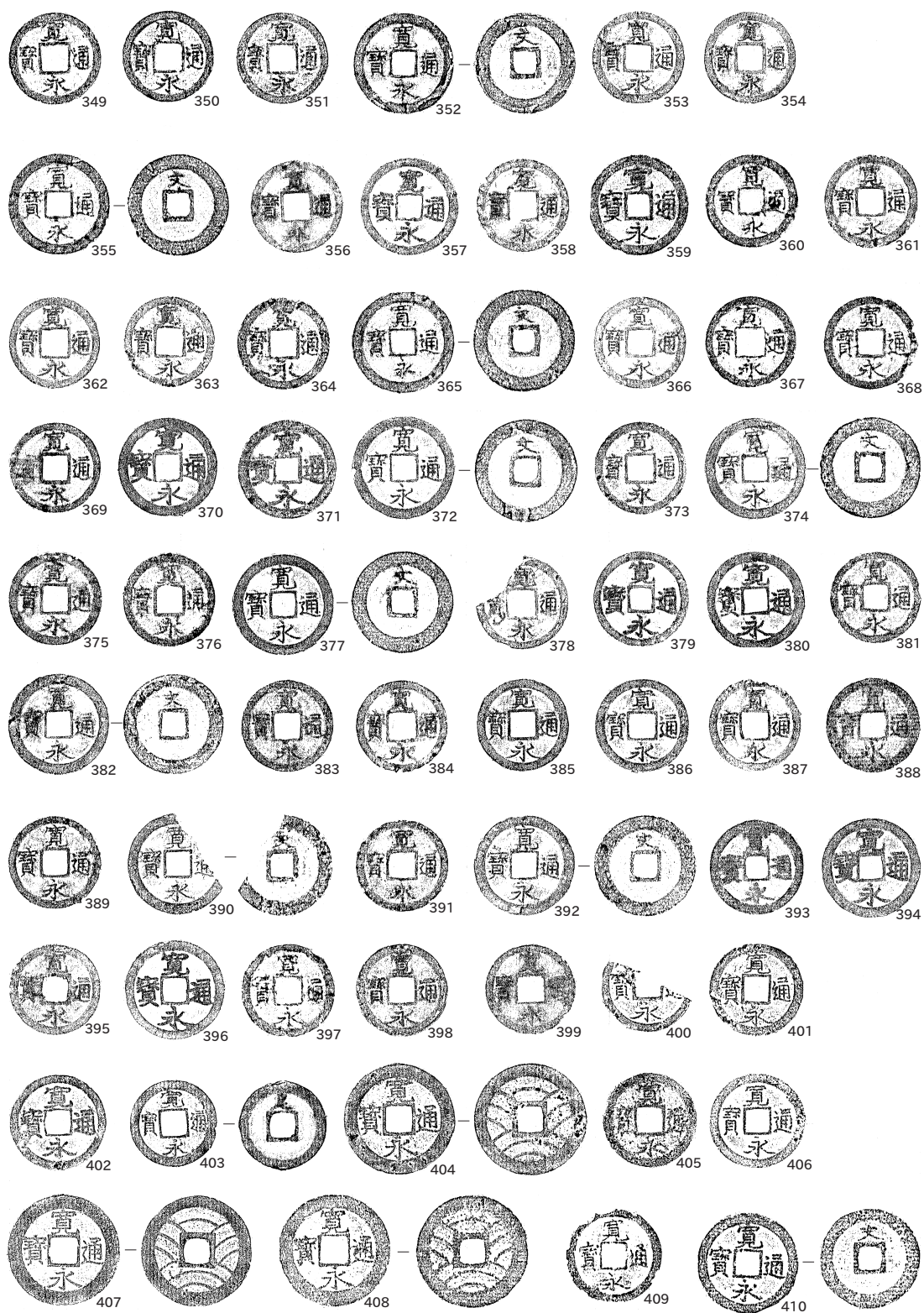
III-122 圖 SU335 (3) 錢 (S=2/3)



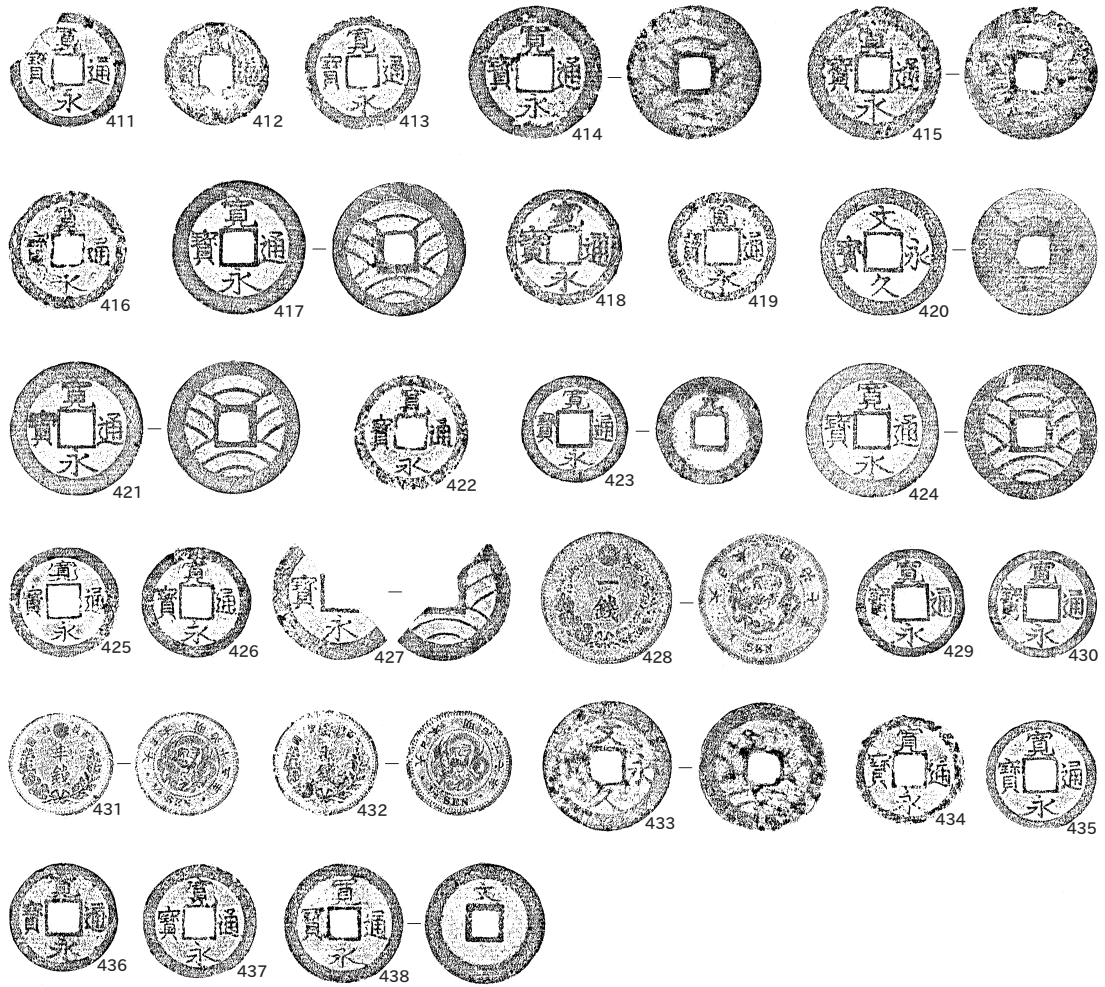
III-123 圖 SU335 (4) 錢 (S=2/3)



III-124 圖 SU335 (5) 錢 (S=2/3)



Ⅲ-125 図 SU335 (6) · その他の遺構 (1) 銭 (S=2/3)



Ⅲ-126 図 その他の遺構 (2) 銭 (S=2/3)

第5節 金属製品 (Ⅲ-127~132 図)

前近代の銅製品の材質は(1)純銅、(2)青銅(銅-錫合金)、(3)砒素青銅(銅-砒素合金)、(4)真鍮(黄銅、銅-亜鉛合金)に分類される。また金属加工技法は、「鍛造」と「铸造」の二種類に大別される⁽¹⁾。近世遺跡から出土する金属製品の材質分析は、サビを肉眼観察した、「色調材質分析」が行われているのが大部分である。緑色サビの遺物は銅、茶色サビの遺物は鉄で、この二種が報告書に記載される金属の主なものである。真鍮製煙管は、サビの状況によっては赤褐色のサビを生じていることがあり、真鍮製の煙管であっても鉄製と記載される事がある。腐食の進行した煙管の緑色サビを除去すると、赤褐色サビが現れ、さらにサビを除去すると真鍮製であれば黄色の金属が現れる。また、洗浄するとサビが進行するとして、泥がついたまま乾燥し、袋に入れられていることもある。洗浄・乾燥した状態でも、収蔵中にサビが進行し金属製品ではなく、「サビ製品」となり非常に脆くなっている。形状は考古学にとっては重要な点で有るが、「サビ製品」となってしまうと、金属技術を解明するための材料は、失われてしまう。金属の材質に関する知識が必要であると実感した遺物に、金属鏡がある⁽²⁾。この遺物には砒素が含まれているため、サビの除去には十分な安全管理を行う必要が有る。しかし、作業員が鏡のサビ除去を、マスクなしで何の養生も行わずに行っているのを実見したことがある。作業員に指示を行なった調査員は事故が起こった場合、どう責任をとるのであろうか。「銅製だと思って指示した」といっても責任は逃れられないのである。また、後に体調に影響が出たとしても、原因はわからないのである。この他、砒素を含む製品に、明和期に铸造された寛永通宝真鍮四文銭がある。この貨幣は真鍮貨幣で、色調は黄色で「青銭」と呼ばれていた。貨幣の材料は、銅、亜鉛と白鐵が加えられていたことが『真鍮銭吹方一件』(国会図書館蔵)に記述されている。材質分析の結果、「白鐵」は砒素を含んだ铸造添加剤であることが明らかになった⁽³⁾。真鍮であっても砒素が添加されている製品もあるのである。

科学的な材質分析を行った場合であっても、非破壊分析を優先し、サビの除去を行わないで材質分析を行うことが多い。材質分析結果にサビや埋蔵環境の影響があり、本来の材質を示さないデータが示されているものがある。「近世の技術史を検討する上で重要なデータである、データを積み重ねたい。」などと結ばれていることが多いが、分析結果に、サビや埋蔵環境の影響が含まれていては、金属製造技術の問題を明らかにする事ができない。報告書に掲載された元素記号やスペクトル図は、学際的雰囲気醸し出すが、トンチンカンなデータが掲載されているのである。意味を成さないデータであれば、高額な分析費用をかけ分析を行う必要は無い。文化財科学では、サビや埋蔵環境の影響を受けたデータから、本来の材質を明らかにする、というのが研究テーマの一つで、サビの除去は御法

-
- (1) 伊藤博之 1999「日本出土の銅合金」『第1回考古科学シンポジウム発表要旨』pp.23-29 東京大学原子力研究総合センター、東京大学アイソトープ総合センター、東京大学埋蔵文化財調査室
- (2) 原 祐一、小泉好延、伊藤博之、小林紘一 2000「東京大学本郷構内出土の金属遺物」『第2回考古科学シンポジウム発表要旨』pp.18-84 東京大学原子力研究総合センター、東京大学アイソトープ総合センター
- (3) 伊藤博之、小泉好延、原 祐一 2000「江戸期四文銭の科学的研究」産業考古学会第24回大会(2000年度)総会研究発表講演集 pp.21-24、原 祐一、小泉好延、伊藤博之 2000「近世の真鍮四文銭における亜鉛の研究 -製造および亜鉛輸入文献による考察-」産業考古学会第24回大会(2000年度)総会研究発表講演集 pp.25-27

度であると聞いたことがある。はたして、そのようなデータで微量元素の検討や、「金属技術」を明らかにできるのだろうか。以前、筆者等は、御殿下記念館地点出土キセルの材質分析を、サビを除去せずに行った。煙管の材質は、古いものが純銅製、新しいものは真鍮製で、年代が新しくなるにつれて亜鉛濃度が高まるとした。しかし、真鍮の亜鉛成分が失われた部分の分析から、銅製と判断してしまっただけである⁽⁴⁾。しかし、サビを除去して材質分析を行ったところ、銅製としていた煙管はすべて真鍮製であった。真鍮の亜鉛濃度の差は材料差であったことが、後に、医学部附属病院病棟地点SK3の煙管の材質分析結果から明らかになった⁽⁵⁾。

今回、金属製品の材質分析を行っていないため、遺物の一部分でサビを除去し、金属色の観察を行った。鉄は、磁石によって鉄であるかを判断した。材質分析は今後行いたい。前述の寛永通宝真鍮四文銭には、裏文様が21波と11波の2種がある。材質分析を行なった結果、11波には、亜鉛量が約18%（21波も同値）で地金が黄色のもの、亜鉛量が約7%で地金が赤色のものに分かれた。『真鍮銭吹方一件』（国会図書館蔵）の検討の結果、黄色銭が明和期～天明期鑄造、赤色銭が文政期鑄造である事が明らかになった⁽³⁾。報告書を実現した範囲では、11波はすべて明和期～天明期鑄造とあり。デザインのみによる判断となっている。本遺跡からも真鍮四文銭が出土しているが、デザインのみでの分析では文政期真鍮四文銭を見落とす可能性がある。なお、21波真鍮四文銭の伝世品100枚の地金色調を観察したところ、数枚であるがやや赤色を帯びた資料があったが、分析結果は黄色銭と大差無かった。一般に、銅は赤色、黄色は真鍮であると思われるが、真鍮（銅-亜鉛合金）の場合、銅と亜鉛の比率等によって金属の色調が変化するので、必ずしも色調が材質を示すとは限らないことを付け加えておく。

（1）煙管（Ⅲ-128、129 図）

江戸時代から煙管の製造を行っていた村田煙管の製作工程は⁽⁶⁾、

- （1）十分に鍛造された板金を型に合わせ切挟で切る。
- （2）吸口と雁首を丸めて鑢付けする。
- （3）鉄の芯金を入れ、金床上で金槌で十分に叩き、原型を作り鍛造し、硬度を高める。これを「地金を締める」という。品質の良否は、この叩き具合により左右される。
- （4）雁首の皿と胴を鑢付けする、雁首の咽喉首の曲げた部分はできるだけ細くなるように作る。
- （5）吸口の先端は内側に折り返しヤニ止めができるように作る。

金属製の煙管は、上記工程で金属板を鍛造、溶接することによって製造される。工学部14号館の煙管はすべて鍛造、溶接によって製作されていた。近世の遺跡から出土した煙管は、これまで詳細な分類、分析が行われてきた。分類上は16～17世紀に製造されたとされる、いわゆる「水口煙管」が、18、19世紀の遺構から出土することがある。報告書ではこれらを「伝世品」とするが、この点については、煙管の材質、部品の検討、溶接方法、出土状況、居住者、遺跡の性格を十分検討した上

（4）原 祐一、小泉好延、伊藤博之、寺島孝一 1999「東京大学本郷構内遺跡（旧加賀藩邸）から出土したキセルの材質分析」日本文化財科学会第16回大会ポスターセッション

（5）原 祐一 1999「東大構内遺跡出土のキセル材質および亜鉛輸入」『第1回考古科学シンポジウム発表要旨』pp.39-42 東京大学原子力研究総合センター、東京大学アイソトープ総合センター、東京大学埋蔵文化財調査室

（6）進藤俊爾 1983「10喫煙具の鑢付け」『鑢付と溶接の話』論創社 pp.99-113

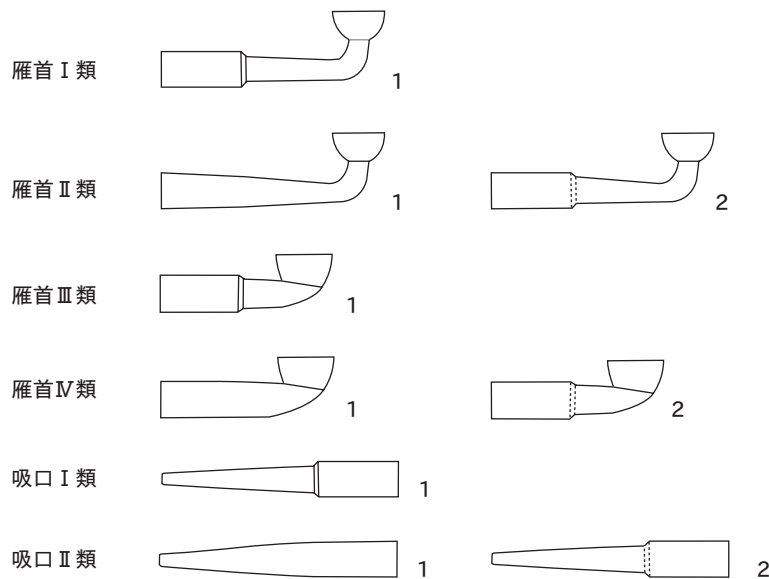
で「伝世品」とする必要がある。医学部附属病院病棟地点 SK3 から出土した煙管の材質分析の結果では、1683 年頃と考えられる煙管は、銅製 1 点を除いて、すべて真鍮製で、鍛造、溶接した製品であった。この年代で、煙管は鍛造、溶接によって造られているのである。日本において、鍛造技術、溶接技術が、これ以前にあったことは、工芸史からも明らかである。つまり、技術と材料があれば、古いとされる形の煙管が製造できるのである。煙管は嗜好品であり、煙管の種類が多様であったのは文献史料から明らかで、材料、材料使用量、部品数と溶接箇所、表面装飾、色揚げ等によってキセルの値段が決められていたと考えるのが一般的である。詳細な分類は、年代を示すのではなく「江戸時代にどんな煙管があったのか」を示す煙管カタログとなってしまう可能性がある。そのため、煙管の分類を単純化した。本分類は今後、材質、溶接方法を元に再検討を行う予定である。年代を示すとされる補強帯の有無は分類に反映していない。なぜならば、現段階では補強帯が単なる装飾で有るのか、火皿と首を溶接するために必要不可欠な「補強」帯であるかがはっきりしないためである。部品の溶接方法を明らかにした上で分類に加えたい。火皿と首の接合部の細い帯を補強帯とする報告があるが、これは補強帯ではなく火皿の接合部分を帯状に鍛造しているもの、もしくは、溶接材で補強はしているが「補強帯」ではない。雁首の首に溶接される補強板についても分類に加えていない。観察表には部品数、表面色調（地金表面に施された表面色調、材質と鍍金であるかは検討していない）、地金色調、溶接部地金色調を記載した。計測値は雁首、吸口の長さで、ラウの長さは加えていない（Ⅲ-7 表）。

煙管（雁首・吸口）の分類（Ⅲ-127 図）

- | | |
|--------|--|
| 雁首Ⅰ類 | 火皿-首-肩の3部品からなる。各部品は溶接により接合されている。脂返しがり湾曲する。 |
| 雁首Ⅱ類-1 | 火皿-首の2部品からなる。各部品は溶接により接合されている。脂返しがり湾曲する。 |
| 雁首Ⅱ類-2 | 肩がある雁首であっても、首を鍛造して肩としているものは雁首Ⅱ類-2とした。 |
| 雁首Ⅲ類 | 火皿-首-肩の3部品からなる。各部品は溶接により接合されている。脂返しの湾曲がほとんど無い。 |
| 雁首Ⅳ類-1 | 火皿-首の2部品からなる。各部品は溶接により接合されている。脂返しの湾曲がほとんど無い。 |
| 雁首Ⅳ類-2 | 首を鍛造して肩としているものは雁首Ⅳ類-2とした。 |
| 吸口Ⅰ類 | 吸口-肩の2部品からなる。各部品は溶接により接合されている。 |
| 吸口Ⅱ類 | 吸口Ⅱ類-1 吸口、1部品からなる。 |
| 吸口Ⅱ類-2 | 吸口を鍛造して肩としているものは吸口Ⅱ類-2とした。 |

工学部 14 号館地点から出土した煙管は金属製で、雁首と吸口をラウで接続する羅宇煙管である。54 点を図化した。雁首の首や肩には灰落としの際についた凹みが、ほとんどの資料で確認されている。溶接部分の金属色調は、確認できたものはすべて黄色で、本体と同じ色調であった。板材と溶接部分の色調から、使用時は溶接部分が目立たなくなっていたと考えられる。6 点の資料の表面が銀色で、これらの金属地金の色調は黄色で、他の報告書では銀製のキセルとする報告がみられるが銀製のキセルではない。

1 は首の断面が正方形である。2 は火皿と首からなる。首を鍛造して肩としている。表面色調は銀色、地金は黄色、溶接部の地金は黄色である。雁首 3、21、27、36、37、吸口 48 も同様で表面色



III-127 図 煙管の分類

調は銀色である。5、35、40、50、51、52は肩部分に筋が入っている。29は肩部分が蛇腹になっている。21の地金の金属色は赤色である。31、41は肩の断面が六角形である。31は肩に彫金が施されている。13、14、18、23、39、41は火皿と首の接合部分に細い帯が巡っている。補強帯と報告されることもあるが、これは溶接材、もしくは火皿を鍛造した帯であり、補強帯ではない。37は別個体の煙管の雁首と吸口を組み合わせたものである。48は植物が彫金されている。出土した煙管は、すべて、羅宇を内側に嵌め込む煙管だが、44は羅宇の内側に雁首を嵌め込む煙管である。火皿には穴が開けられている。火皿冠である。30は首の上面に補強板が溶接されている。補強板は箱状のものがあるが、本資料の補強板は金属板を溶接している。6は本来、吸口に羅宇を嵌め込んであったものを、羅宇に吸口を嵌め込んでいる。7は先端部が欠損しているため、雁首と吸口の区別が不明である。いわゆる「水口煙管」に良く似た形状である。肩は別部品で断面が六角形の管が溶接されている。18、31、41は肩の断面が六角形である。32は首の断面が六角形である。吸口20、47、48、50、54の先端は、内側に折り返されている。これはヤニ止めである。

(2) その他の金属製品 (III-130~132 図)

1~49は、地金の色調から銅および銅合金と考えられる材質の製品である。1~3は切羽である。2は表面に彫金が施されている。魚子(ななこ)と呼ばれる彫金の技法の一つで、金属面に粟粒を並べたように細粒を凸起させている。3は表面に魚子が施され、笠が象嵌されている。4、5は刀の鐔である。4の地金の色調は赤色で、表面は黒色に色揚げされている。両面に彫金で貝文様が施される。文様は黄色(金色)である。5は地金の色調は黄色である。6、7は目貫もしくは煙草入れの金具である。8は小柄である。金属板を鍛造し溶接し柄とし、刃を取り付けている。彫金で文様が施されている。9は硯箱に収められる水滴である。底面、側面注ぎ口、注入口の部品を溶接している。注入口は2部品からなる。10は容器の蓋である。形状は蜜柑をモチーフとしていると考えられる。表面は銀色で地金の色調は赤色である。内面に紙状の繊維が付着している。11は用途不明の金具である。地金の色調は赤色で、表面は黒色に色揚げされている。12はランプの部品である。13は容器である。地金の色調は赤色で、表面色調は銀色である。彫金で七宝文様、宝文様が施される。14は

風鈴である。地金の色調は銀色で、表面は黒色に色揚げされている。15は柄鏡である。16は耳搔が付いた簪である。17は筭で、地金の色調は赤味を帯びた銀色で、表面色調は銀色である。表面には緑青が生じている。18は簪である。19は先端部と柄部分、上部の飾りからなる。柄は板材を鍛造し溶接している。板材の地金の色調は赤色。溶接部の地金は黄色である。21～23は火箸である。22は面に文様が施されている。24は釘状の金具である。上面に模様が施されている。25、26は釘である。27は調度金具である。28の地金の色調は赤色で、表面は金色である。30は襖の引手である。31は板材に筋が入った製品で、金属は残存していない。32は底部、上部、釘状の部分からなる。底部と上部の間には紙状のものが挟まれている。33は鋳である。34～36は調度の摘みである。36は5つの部品からなり、固定した板材が残っている。菊花状の部品の上に固定される小形の円盤の地金色調は黄色である。他の部品の地金色調は赤色である。37、38、41、42は鉤状金具である。37は板状で、両面に彫金で七宝文が施される。39は金具で取手と考えられる。地金の色調は赤色。表面の色調は銀色である。40は卸金である。43は鱗口である。44、45、47はお玉である。45は木製の柄を固定している。46はシャベル状製品で、炉の灰をすくうものであろうか。48は籠状製品で地金の色調は黄色である。49は鎖である。

50～61は鉄製品である。50は容器の蓋である。51は蹄鉄である。固定のための釘が残っている。52、53は用途不明である。調度もしくは建物の金具であろうか。54は鎌の羽である。55、56は包丁の刃である。57は刃の厚みがあり、鉞の刃である可能性がある。58は鋌である。59は炭かきと考えられる。木の柄を固定するための釘が残っている。60は板材に固定されていた釘である。61は流しのごみ取りだろうか。

62～68は地金の色調は銀色である。表面は腐食し白色となっている。62は板状の製品で桔梗をモチーフとしている。63、64は鉄砲玉である。65は半球状製品である。66は網の錘と考えられる。67は円錐を引っくり返した形状である。68は中央に穴が開いた円盤を折り曲げている。

第三章 人工遺物

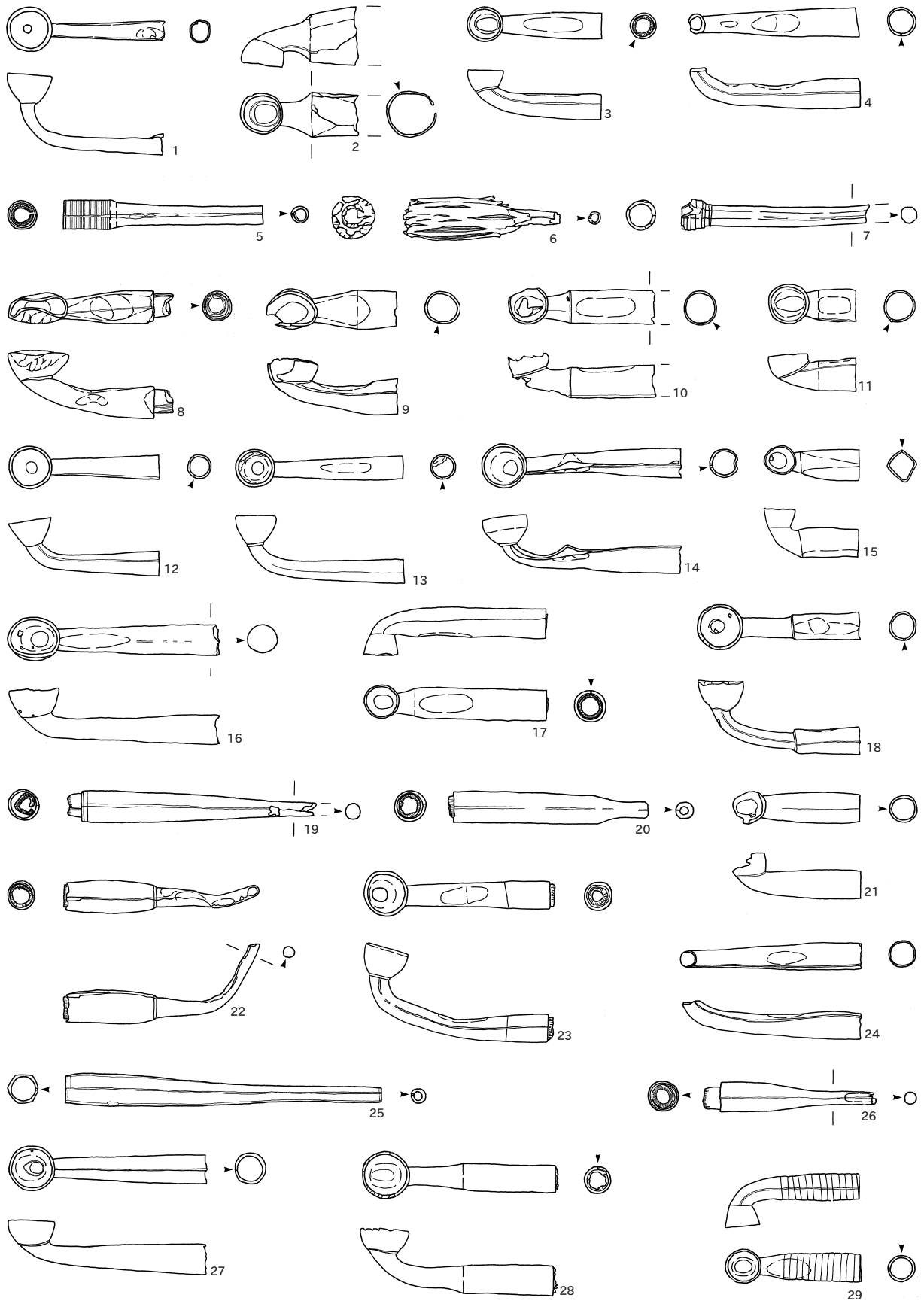
| 遺物番号 | 遺構番号 | 分類 | | 部品数 | 表面色調 | 地金色調 | 溶接部地金色調 | 長さ (cm) | 高さ (cm) | 火皿径 (cm) | ラウ接合部径 (cm) | 備考 |
|------|-----------|----|----|-----------------|------|------|---------|---------|---------|----------|-------------|--------|
| | | 雁首 | 吸口 | | | | | | | | | |
| 1 | SU2 | Ⅱ類 | | 不明 | | 黄色 | 不明 | 5.5 | 2.8 | 1.6 | | 首断面四角形 |
| 2 | SU18 | Ⅳ類 | | 2 | 銀色 | 黄色 | | 4.3 | 2.3 | 1.5 | | |
| 3 | SU189 | Ⅲ類 | | 2 | 銀色 | 黄色 | 黄色 | 4.3 | 1.8 | 1.3 | 0.9 | |
| 4 | SK36 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | | | | 1.0 | |
| 5 | SK25 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 7.2 | 7.2 | | 1.0 | |
| 6 | SK25 | | | 不明 | | 腐食 | 腐食 | | | | | 管断面六角形 |
| 7 | SP71 | | Ⅰ類 | 2 | | 黄色 | 腐食 | | | | | |
| 8 | SU63 | Ⅲ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | | | | 1.2 | |
| 9 | SU63 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 黄色 | | | | 1.4 | |
| 10 | SU63 | Ⅳ類 | | 3 | | 黄色 | 黄色 | | | | 1.3 | |
| 11 | SK80・SK99 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 黄色 | 3.2 | 1.6 | 1.4 | | |
| 12 | SK85 | Ⅱ類 | | 2 | | 腐食 | 腐食 | 5.3 | 2.0 | 1.5 | 0.9 | |
| 13 | SK89 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 黄色 | 6.0 | 2.4 | 1.4 | | |
| 14 | SK140 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 7.0 | 2.4 | 1.6 | | |
| 15 | SK188 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 3.3 | 1.7 | 1.2 | | |
| 16 | SK182 | Ⅲ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 7.4 | 2.0 | 1.8 | 1.0 | |
| 17 | SK182 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 黄色 | 6.5 | 1.8 | 1.4 | 1.2 | |
| 18 | SK188 | Ⅰ類 | | 3 | | 黄色 | 黄色 | 5.7 | 2.6 | 1.6 | 1.0 | 肩断面六角形 |
| 19 | SU189 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | | 1.2 | | 1.2 | |
| 20 | SK182 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 7.0 | | | 1.2 | |
| 21 | SK245 | Ⅲ類 | | 2 | 銀色 | 黄色 | 腐食 | | | | 1.0 | |
| 22 | SK189 | | Ⅰ類 | 2 | | 黄色 | 黄色 | | | | 1.0 | |
| 23 | SK245 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 6.8 | 3.4 | 1.6 | | |
| 24 | SK245 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 黄色 | | | | 0.9 | |
| 25 | SK252 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 11.2 | 11.5 | | 1.0 | |
| 26 | SU254 | | Ⅱ類 | 2 | | 黄色 | 黄色 | 5.5 | 1.5 | | 1.0 | |
| 27 | SK259 | Ⅲ類 | | 2 | 銀色 | 黄色 | 黄色 | 7.0 | 1.9 | 1.6 | 1.0 | |
| 28 | SK259 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 6.8 | 2.4 | 1.6 | 1.1 | |
| 29 | SK260 | Ⅳ類 | | 2 | | 赤色 | 腐食 | 4.8 | 1.9 | 1.2 | 1.0 | |
| 30 | SK292 | Ⅱ類 | | 3 (火皿・首・補強板) | | 黄色 | 腐食 | 1.3 | 1.3 | | 1.1 | |
| 31 | SK293 | Ⅲ類 | | 3 | | 黄色 | 黄色 | | 1.2 | | 1.2 | 肩断面六角形 |
| 32 | SK293 | Ⅲ類 | | 2 | | 黄色 | 黄色 | | 1.8 | | 0.9 | 首断面六角形 |
| 33 | SK293 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 黄色 | 6.5 | 1.3 | | 1.3 | |
| 34 | SK299 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 5.4 | 0.9 | | | |
| 35 | SK298 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 3.8 | 1.5 | 1.6 | 0.9 | |
| 36 | SK301 | Ⅳ類 | | 2 | 銀色 | 黄色 | 腐食 | | 1.7 | | 1.1 | |
| 37 | SK330 | Ⅲ類 | | 3 | 銀色 | 黄色 | 黄色 | | 1.9 | | | |
| 38 | SK330 | Ⅲ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 4.9 | 1.8 | 1.6 | 1.2 | |
| 39 | SU335 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 7.3 | 3.2 | 1.5 | 0.9 | |
| 40 | SU335 | Ⅲ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 4.3 | 1.9 | 1.5 | 1.1 | |
| 41 | SK336 | Ⅰ類 | | 3 | | 黄色 | 腐食 | | | | 1.0 | 肩断面六角形 |
| 42 | SK336 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 5.2 | 2.3 | 1.4 | 0.9 | |
| 43 | SK336 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 黄色 | 6.6 | 2.2 | 1.4 | 0.9 | |
| 44 | SK338 | Ⅱ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 4.2 | | 1.5 | 0.7 | |
| 45 | SK337 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 黄色 | | 0.9 | | 0.8 | |
| 46 | SK356 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 黄色 | 6.1 | 1.1 | | 1.0 | |
| 47 | SK358 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 5.9 | 1.4 | | 1.2 | |
| 48 | SK357 | | Ⅱ類 | 1 | 銀色 | 腐食 | 腐食 | 6.7 | 1.3 | | 1.0 | |
| 49 | SU389 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | | 0.9 | | 0.9 | |
| 50 | SU392 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 5.9 | 0.9 | | 0.9 | |
| 51 | SU392 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 3.6 | 1.5 | 1.1 | 0.9 | |
| 52 | SU392 | Ⅳ類 | | 2 | | 黄色 | 腐食 | 5.8 | 1.9 | | 1.0 | |
| 53 | SU396 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 9.6 | 1.1 | | 1.0 | |
| 54 | SU396 | | Ⅱ類 | 1 | | 黄色 | 腐食 | 4.4 | 1.2 | | | |

Ⅲ-7 表 煙管観察表

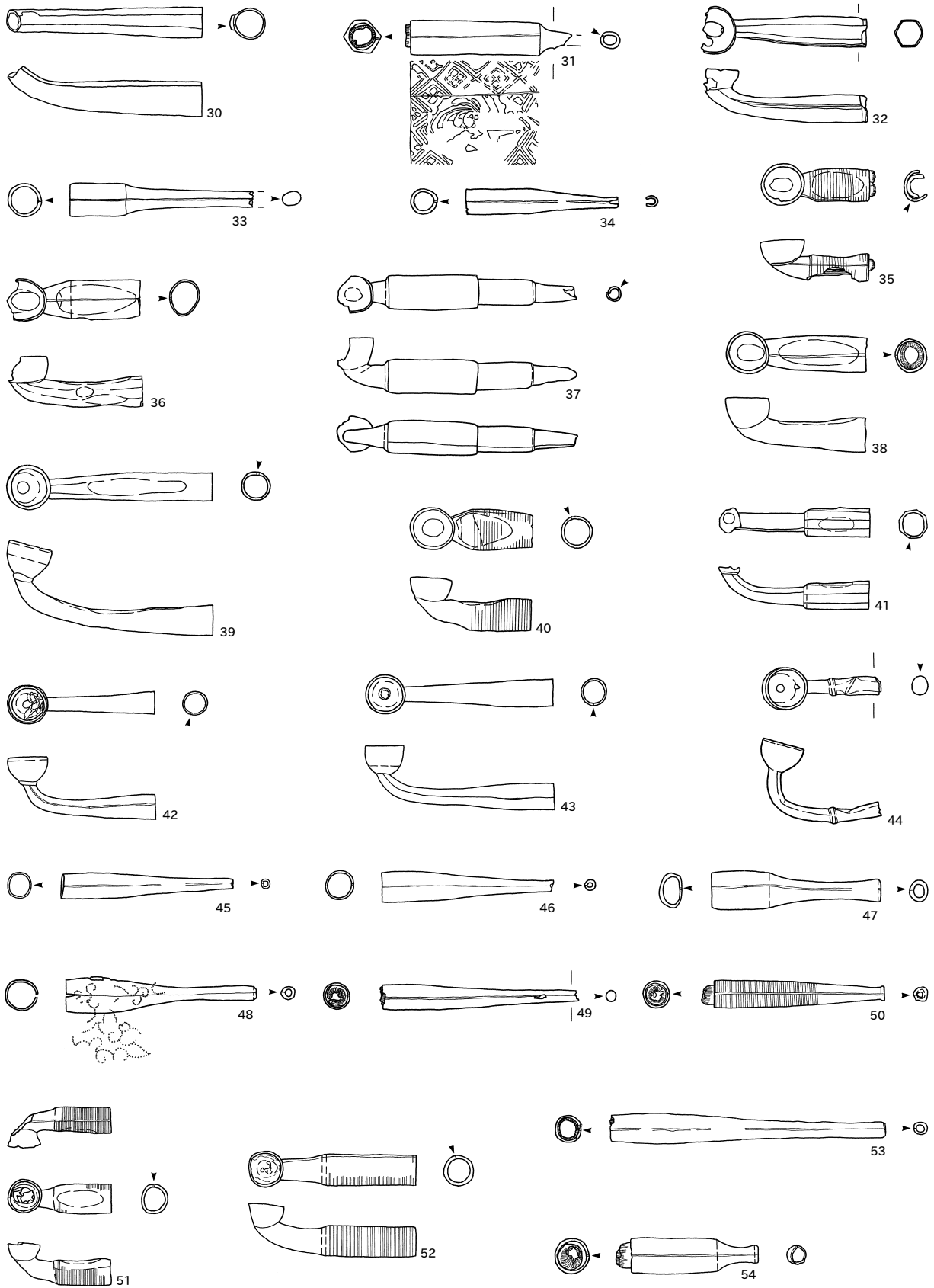
第5節 金属製品

| 遺物番号 | 遺構番号 | 分類 | 材質 | 表面色調 | 地金色調 | 溶接部地金色調 | 文様モチーフ | 文様色調 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 高さ(cm) | 備考 |
|------|----------------|---------------|----|------|----------|---------|------------|------|--------|-------|-------------|--------|
| 1 | SK80・SK99 | 切羽 | | 金色 | 赤色 | | | | 3.0 | 1.8 | 0.8 | |
| 2 | SK336 | 切羽 | | | 赤色 | | | | 4.3 | 2.6 | 1.2 | |
| 3 | SK101 | 切羽 | | | 赤色 | | 笠 | 金色 | 3.7 | 2.8 | 1.3 | |
| 4 | SK348 | 鏝 | | 黒色 | 赤色 | | 貝(鮑・栄螺・巻貝) | 金色 | 2.4 | 2.4 | 0.2 | |
| 5 | SK180 | 鏝 | | | 黄色 | | | | 5.7 | 5.6 | 0.4 | |
| 6 | SK293 | 目貫もしくは煙草入れの金具 | | | 黄色 | | 花 | | 4.4 | 3.0 | 0.6 | |
| 7 | SK299 | 目貫もしくは煙草入れの金具 | | | 黄色 | | 龍 | | 5.6 | 2.7 | 0.6 | |
| 8 | SK557 | 小柄 | | | 赤色 | | 不明 | | 10.7 | 1.4 | 0.6 | |
| 9 | SK336 | 水滴 | | | 赤色 | | | | 5.0 | 3.0 | 1.5 | |
| 10 | SU392 | 容器蓋 | | 銀色 | 赤色 | | 蜜柑 | | 5.2 | 5.3 | 1.2 | |
| 11 | SK245 | 金具 | | 黒色 | 赤色 | | | | 4.5 | 4.3 | 3.1 | |
| 12 | SK41 | ランプ部品 | | | 黄色 | | | | 4.0 | 3.9 | 3.8 | |
| 13 | SK358 | 容器 | | 銀色 | 赤色 | | 七宝文様・宝文様 | | 9.8 | 6.5 | 4.0 | 表面(銀色) |
| 14 | SK245 | 風鈴 | | 黒色 | 銀色 | | | | | 3.0 | 3.1 | |
| 15 | SK140 | 柄鏡 | | | 赤色 | | | | | | 0.5 | |
| 16 | SK337 | 簪 | | | 赤色 | | | | | 0.2 | | |
| 17 | SK357 | 筭 | | 銀色 | 赤味を帯びた銀色 | | | | 10.8 | 1.5 | | |
| 18 | SK140 | 簪 | | | 黄色 | | | | 12.8 | 0.3 | | |
| 19 | SK293 | 不明 | | | 赤色 | 黄色 | | | 14.4 | 0.5 | | |
| 20 | SK392 | 簪 | | | | | | | | 1.0 | | |
| 21 | SU335 | 火箸 | | | 赤色 | | | | 17.0 | 0.5 | 0.3 | |
| 22 | SU189 | 火箸 | | | 黄色 | | 不明 | | | 0.7 | 0.5 (厚さ) | |
| 23 | SK86・SK87・SK88 | 火箸 | | | 黄色 | | | | | | | |
| 24 | SK03 | 釘状金具 | | | 黄色 | | | | | 1.1 | | |
| 25 | SU382 | 釘 | | | 赤色 | | | | 3.4 | | 0.8 | |
| 26 | SK74 | 釘 | | | 赤色 | | | | 4.7 | 0.9 | | |
| 27 | SU381 | 調度金具 | | | 赤色 | | 唐草文様・幾何学文様 | | 12.8 | 1.5 | 0.4 | |
| 28 | SK03 | 金具 | | 金色 | 赤色 | | 丸に矢羽 | 金色 | 3.0 | 3.0 | 0.1 | |
| 29 | SU327 | 金具 | | | 赤色 | | | | 3.2 | | 0.5 | |
| 30 | SK480 | 襖の引手 | | | 赤色 | | | | | 5.1 | 1.0 | |
| 31 | SK312 | 金具 | | | | | | | | | 0.1 (厚さ) | |
| 32 | SK03 | 金具 | | | | | | | 2.0 | | 1.8 | |
| 33 | SK89 | 鉾 | | | 赤色 | | | | 1.4 | 1.7 | | |
| 34 | SK245 | 金具 | | | | | | | 1.3 | 1.3 | 1.4 | |
| 35 | SK3 | 金具 | | | | | | | 1.8 | 1.8 | 1.3 | |
| 36 | SK101 | 金具 | | | 赤色・黄色 | | | | 2.0 | 2.8 | | |
| 37 | SU176 | 鉤状金具 | | | 赤色 | | 七宝文様 | | 8.3 | 4.8 | 0.2 | |
| 38 | SU63 | 鉤状金具 | | | 黄色 | | | | 5.6 | 2.3 | 0.4 | |
| 39 | SK388 | 金具 | | 銀色 | 赤色 | | | | 6.0 | 3.4 | 1.1 | |
| 40 | SK89 | 卸金 | | | 赤色 | | | | 24.1 | 12.2 | 0.9 | |
| 41 | SU18 | 鉤状金具 | | | 赤色 | | | | 6.9 | 6.5 | 0.4 | |
| 42 | SU176 | 鉤状金具 | | | 赤色 | | | | 8.3 | 4.2 | 0.5 | |
| 43 | SK245 | 鯛口 | | | 黄色 | | | | 10.6 | 2.6 | | |
| 44 | SU63 | お玉 | | | 赤色 | | | | 34.0 | 5.8 | 2.0 | |
| 45 | SB397 | お玉 | | | 赤色 | | | | 15.8 | 10.0 | 1.2 | |
| 46 | SK101 | シャベル状製品 | | | 赤色 | | | | 22.0 | 4.5 | 1.0 | |
| 47 | SK100 | お玉 | | | 赤色 | | | | 16.0 | 8.3 | 2.0 | |
| 48 | SK480 | 籠状製品 | | | 黄色 | | | | 21.4 | 5.0 | 3.0 | |
| 49 | SK3 | 鎖 | | | 赤色 | | | | 46.8 | 1.8 | | |
| 50 | SK358 | 容器蓋 | 鉄 | | | | | | 11.0 | 3.0 | | |
| 51 | SK356 | 蹄鉄 | 鉄 | | | | | | 12.0 | 2.1 | 0.8 | |
| 52 | SK41 | 金具 | 鉄 | | | | | | 9.4 | 6.9 | | |
| 53 | SK41 | 金具 | 鉄 | | | | | | 9.3 | 3.8 | | |
| 54 | SU63 | 鎌 | 鉄 | | | | | | 12.4 | 9.2 | | |
| 55 | SU176 | 包丁 | 鉄 | | | | | | 13.4 | 5.3 | 0.7 | |
| 56 | SU396 | 包丁 | 鉄 | | | | | | 16.3 | 4.8 | | |
| 57 | SU389 | 包丁 | 鉄 | | | | | | 23.9 | 6.5 | 3.0 | |
| 58 | SK245 | 鏝 | 鉄 | | | | | | 11.5 | 4.3 | 0.8 | |
| 59 | SU396 | 炭かき | 鉄 | | | | | | 40.8 | 2.8 | 4.6 | |
| 60 | SU389 | 金具 | 鉄 | | | | | | 5.4 | 4.5 | 4.5 | |
| 61 | SU392 | 金具 | 鉄 | | | | | | 13.6 | 8.7 | 1.4 | |
| 62 | SK480 | 金具 | | | 銀色 | | | | 2.7 | 2.6 | 2.0 | 表面腐食 |
| 63 | SK4 | 鉄砲玉 | | | 銀色 | | | | 1.5 | 1.5 | | 表面腐食 |
| 64 | SK373 | 鉄砲玉 | | | 銀色 | | | | 1.3 | 1.2 | | 表面腐食 |
| 65 | SU38 | 半球状製品 | | | 銀色 | | | | 1.7 | 1.4 | | 表面腐食 |
| 66 | SK140 | 網の鏝 | | | 銀色 | | | | 2.8 | 0.7 | | 表面腐食 |
| 67 | SU294 | 不明 | | | 銀色 | | | | 3.4 | | 1.5 | 表面腐食 |
| 68 | SK393 | 不明 | | | 銀色 | | | | 2.7 | 1.8 | | 表面腐食 |

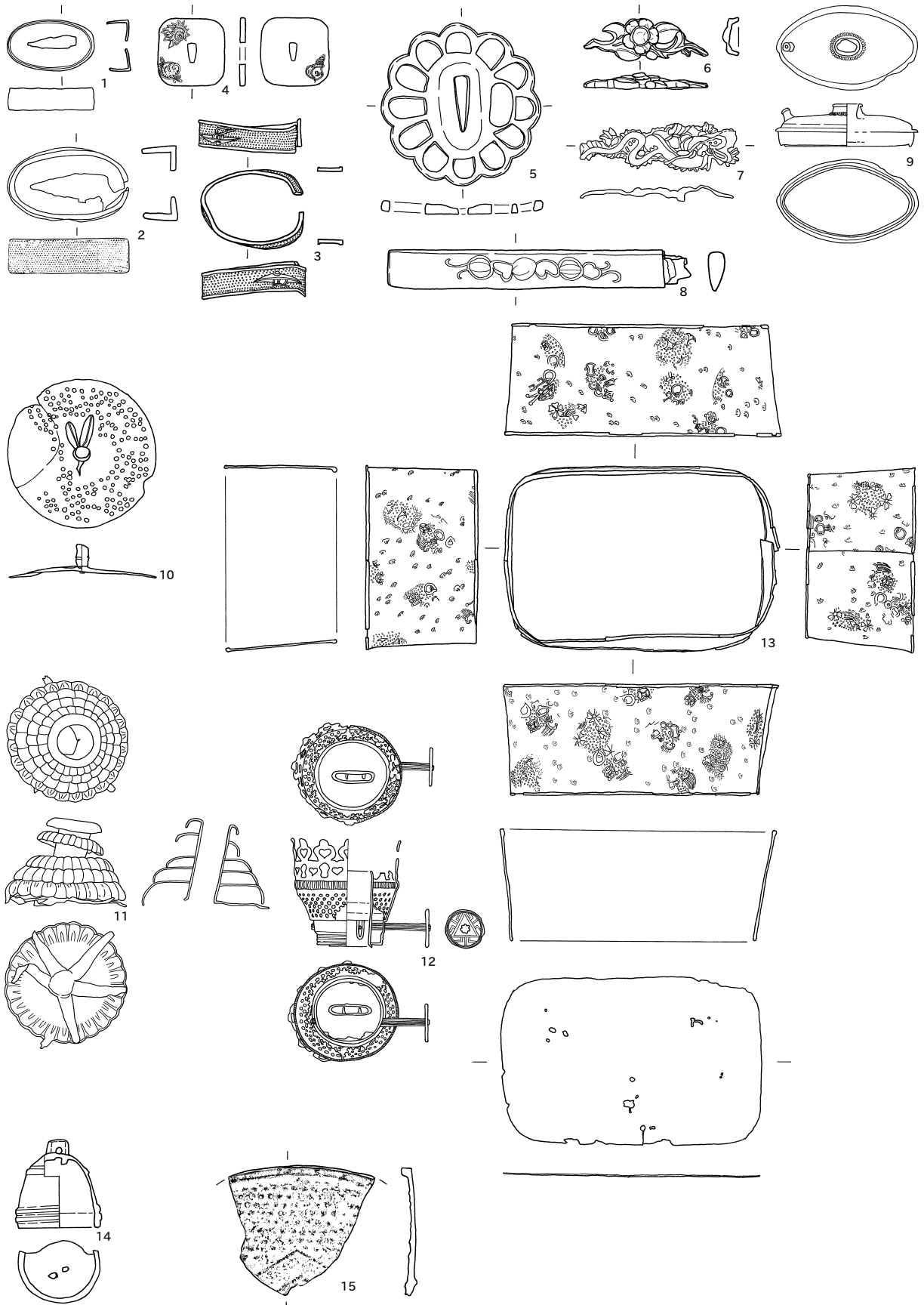
Ⅲ-8表 金属製品観察表



III-128 烟管 (1)

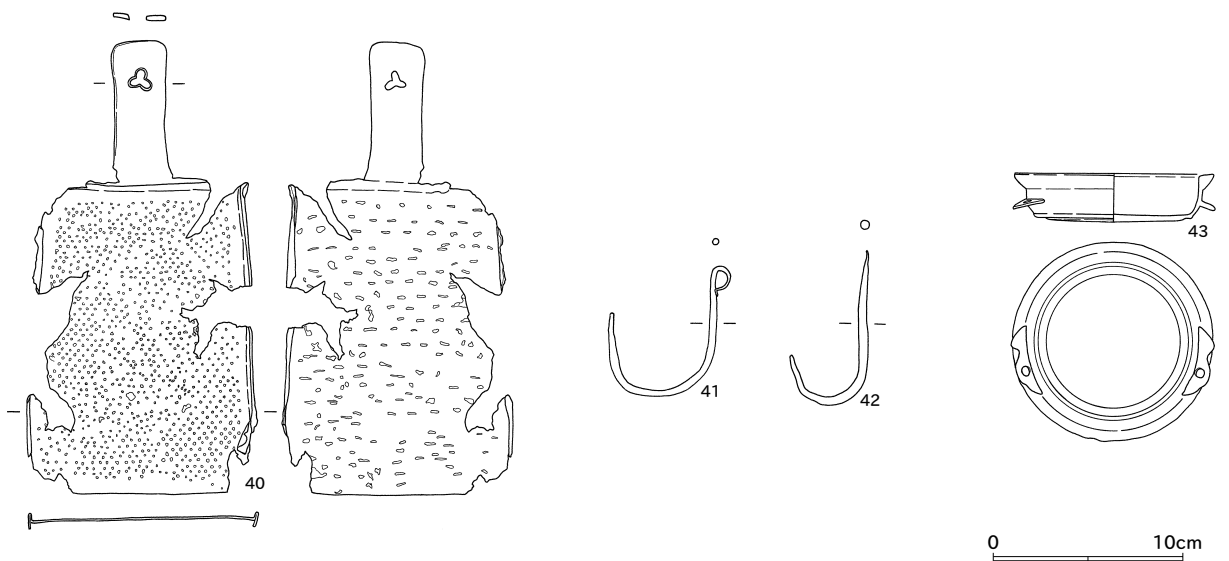
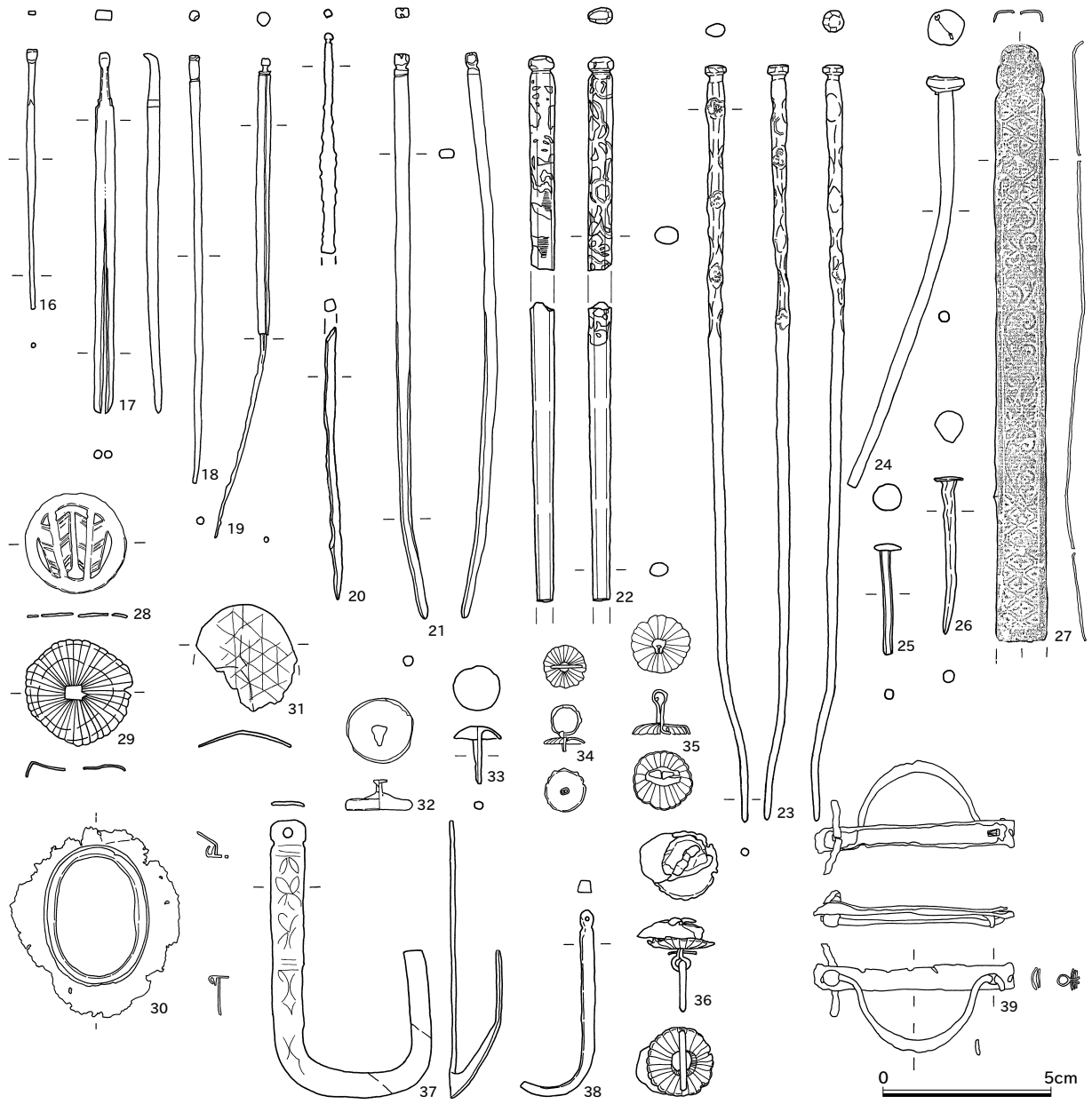


III-129 圖 煙管 (2)

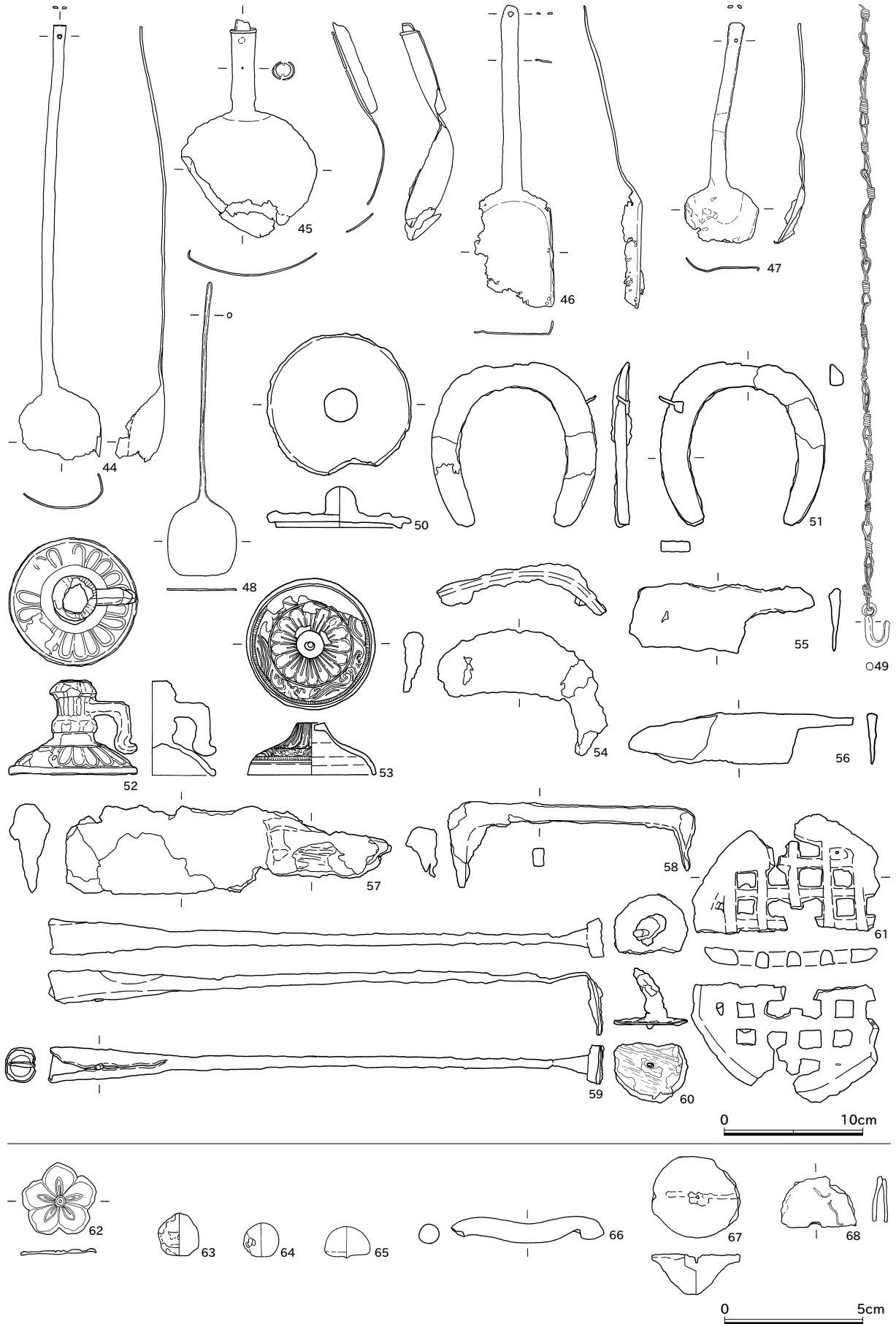


0 5cm

III-130 図 その他の金属製品 (1)



Ⅲ-131 図 その他の金属製品 (2)



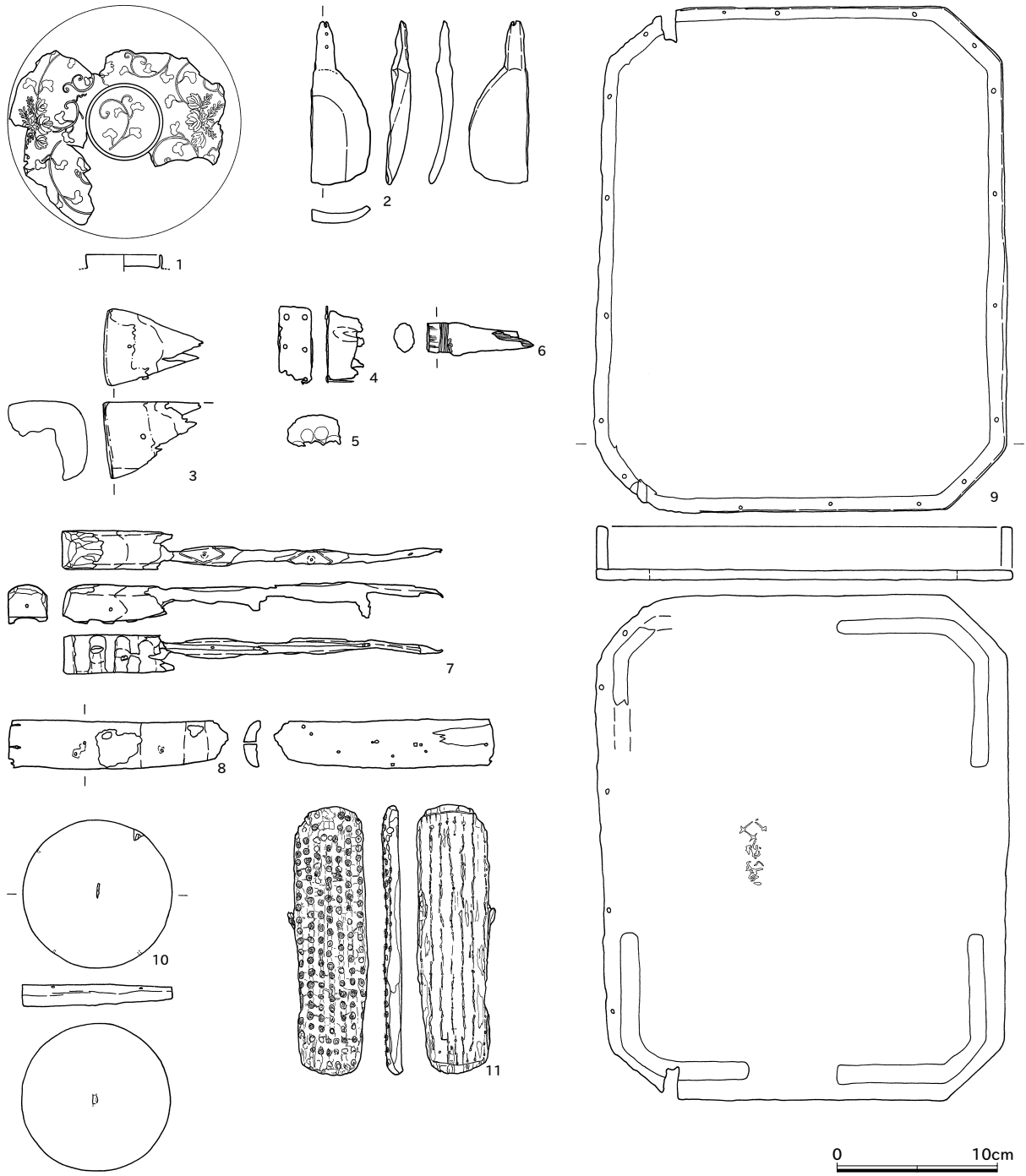
Ⅲ-132 図 その他の金属製品 (3)

第6節 木製品(Ⅲ-133 図)

木製品は、井戸、地下室から出土している。漆碗は、数点が出土したが木地が腐食しており、漆膜のみの出土であった。残存率が高い近世の木製品を中心に、近代の木製品も図化した。1は平碗の蓋である。漆膜のみの出土で木地は腐食している。漆膜は乾燥により変形しているため、図は復元実測による。内面は赤色、外面は黒色の漆が塗られている。外面の文様色調は金色で、桐と唐草が描かれている。漆膜を観察すると、下地に布目が残っており、布着せが施された漆碗であったと考えられる。木地が腐食したものの、漆膜が残っていたのは上質な漆碗であったためと考えられる。2は匙である。内面・外面は赤色の漆が塗られている。3は調度品の部材と考えられる。小口以外の部分に黒色の漆が塗られている。端部には金具を固定した釘(緑色)が打たれている。4は調度品の部材と考えられる。端部に金具が固定されている。5は碗蓋の高台内である。木地は腐食しており漆膜のみである。文様色調は金色で八曜が描かれている。6は柄で先端部に金属(鉄)が残存している。固定のための銅線が巻かれている。7は調度品の部材と考えられる。黒色の漆が塗られている。端部と上面には金具を固定した釘の跡がある。8は柄である。柄に巻きつけた金具(緑色)と固定のための釘穴がある。2枚の板で金属を挟み、金属を巻いて釘で固定したものと考えられる。9は蝶足膳である。底板と側板が出土している。底板の脚部の接合部分から蝶足膳とした。内面は赤色、外面は黒色の漆が塗られている。底部に赤色漆で文字が書かれている。10は小形の樽の底板と考えられる。側面に側板を固定するための釘穴が4箇所確認できる。11はブラシである。毛を固定するための銅線、毛が残存している。

| 遺物 番号 | 遺構番号 | 分類 | 色調 (内・外) | 文様 | | | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 高さ (cm) | 備考 |
|----------|-------|-------|-------------|----|----|------|-----------|----------|---------|--------|
| | | | | 色調 | 位置 | モチーフ | | | | |
| 1 | SU396 | 平碗蓋 | 赤色・黒色 | 金色 | 上面 | 桐・唐草 | 14.6 (底径) | 4.8 (摘径) | | 布着せ |
| 2 | SE300 | 匙 | 赤色・赤色 | | | | | | | |
| 3 | SU18 | 調度品部材 | 黒色 | | | | | | | |
| 4 | SK3 | 調度品部材 | | | | | | | | 金具が残る |
| 5 | SU396 | 碗蓋 | 黒色 | 金色 | 摘内 | 九曜 | | | | |
| 6 | SK293 | 柄 | | | | | | | | |
| 7 | SU18 | 調度品部材 | 黒色 | | | | | | | |
| 8 | SU63 | 柄 | | | | | | | 3.0 | |
| 9 | SP30 | 蝶足膳 | 赤色・黒色 | | | | 31.8 | 25.8 | 3.6 | 文字(赤色) |
| 10 | SE300 | 樽底板 | | | | | 8.4 | | 1.3 | |
| 11 | SK200 | ブラシ | | | | | 16.8 | 4.4 | 1.0 | |

Ⅲ-9 表 木製品観察表



Ⅲ-133 図 木製品

第7節 石製品

砥石 (Ⅲ-134 図 1~13、15)

1 (SK330)、2 (SK34) はきめの粗い、砂岩とおもわれるものである。とくに1は表面が粗く、また擦痕のある面が窪んでいるため、刃物など直線的なものを研いだものとは考えにくい。2は1面に平坦な擦痕が残るので、荒砥として用いられたのかもしれない。

3 (SK16)、4 (SK101)、7 (SU382) は硯にもつくれそうな粘板岩系の石材である。いずれも薄い褐色を呈する。このうち4は一部が欠けているもののほぼ原形をとどめており、長さ17.4cm、幅5.8cm、厚さ1cmである。3、7は長さはわからないが、幅は4と同じであるから、本来4のサイズで売られていたものが多かったようだ。ただ4であっても、使用面の裏面は剥離面を軽く調整したのみである。仕上砥として用いられたものだろう。6 (SU385)、11 (SK339)、12 (SU294) は淡褐色から褐色の縞目のはいった石で、同一の産地であろう。6はほぼ完全な形で研磨による摩耗の最も少ない端部をみると、一寸半の柱状にして売られたようだ。長さは20cm弱だから、六寸半といったところだろう。隣接する2面のみがよく使用されているが、ほかの2面は殆ど使われていない。11、12は据置で用いていたものが折れたために、手持ちの砥石として使ったものと思われる。これは、全ての面が摩耗し、特に木口の部分が斜めに斜めに磨り減っていることから推定されるのである。5 (SU402) は全体に灰色を呈するきめのこまかな砥石で、表裏両面がよく使いこまれ、中央が大きく窪んでいる。幅は最も広い端部で7.7cmだから二寸半の規格のものが売られていたのかもしれない。8はSK293から出土している。9 (SK100) は灰白色で全面に擦痕が認められる。砥石の破片を再利用したものだろう。10 (SU382) も破片であるが、1面のみが砥石として利用されているのみである。全体に黒灰色を呈する。13 (SK337) は瓦片を再利用した砥石で、全面に擦痕が認められる。15 (SK245) はやや緑がかった灰色の砥石で、擦痕は1面のみ認められる。

不明石製品 (Ⅲ-134 図 14、SK3)

一見砥石にもみえるが、成形・調整時の擦痕以外には、擦ったあとがない。一部が欠けているが、本来五角形であったようにもみえる。残っている4本の稜線のうち、2本で面取りが行われている。片面が剥離しているため元々の厚さはわからないが、将棋の駒のような形であったのだろうか。全体に黒色を呈している。

硯 (Ⅲ-135 図)

16は、長さ18.3cm、幅7.6cm、厚さは2.7cm(「緑」を含む)である。垣内光次郎さんが紹介した『明治十二年高嶋硯見本簿』をみると、長さ六寸、巾二寸五分の規格にほぼ相当しそうである。海・岡(陸)ともに墨の付着がかすかに認められる。岡の海に近い部分居に僅かな摩耗がみられる。またその部分は墨によったものとしては粗い擦痕が認められる。岡の裏面には硯の安定を保つためのごく浅い抉りが施されている。やや緑がかった暗灰色である(SK299)。17は岡の部分のみの破片。幅は8cmで、二寸五分よりやや広い。背に釘状のもので文字などの書きこみがみられる。黒色～暗褐色である(遺構外)。18は幅3.1cm、海部分は欠けているが、二寸五分程のものであったと推定される。全体に白色で、一部に黒色の斑が入り、大理石のような感をいだかせる(SU396)。19は

長さ 15cm、幅 6cm、厚さは 2.1cm である。『硯見本簿』の長さ五寸、巾二寸に相当するものだろう。岡の中央部分は極端に摩耗している。海には墨の痕跡が認められる。背には長方形の袢りが施されている。全体に灰色を呈する (SK386)。20 は幅 6.6cm、岡から海へかけての破片である。背面に「上」「木」とも読める文字らしきものがみられるが、鑿状のもので彫りこんだにしては不自然で、ヘラあるいは藁状のものへの圧痕ともみえる。側面にもこのような圧痕がみられ、重さが他の硯に比べて、ずいぶん軽いこともふくめて、瓦などと一緒に焼かれたものとも考えられる。全体に灰色を呈している (SK402)。21 は長さ 7.7cm、幅 4.7cm である。全体に赤褐色を呈している。岡から海にかけて墨の痕跡が認められる (遺構外)。22 は長さ 9.1cm、幅 3.1cm である。全体にやや緑がかかった灰色である。岡と海のはっきりとした境はなく、直線的に深くしている。朱墨の痕跡が僅かに認められる。背面に「道口上久文金」とごく浅く刻まれている (SK293)。23 は幅 6cm で海の部分を欠く硯であるが、破損の後、海を拙い手で彫りこんでいる。岡の部分の背面には浅い袢りを施しており、その中央に「本高嶋青石」と彫りこんでいる。この彫りこみは比較的深く、また字体も整っており、生産地で彫られたものかとも考えられる。『硯見本簿』の規格でみると、長さ四寸、巾二寸のものに相当すると推定される。ちなみに、割れ口近くに彫られている「本高嶋青石」は、字も乱れ彫りこみもごく浅く、所有者が戯れに書いたものと考えられる。全体に暗灰色を呈し、背面にはこまかな黒い斑がみられる (遺構外)。24 は幅 6.7cm で二寸よりやや大きく高嶋の『硯見本簿』の規格からははずれるようだ。岡の背面には浅く袢りをいれ、その中央に文字が刻まれる。一部読みにくい部分があるが、他の硯を参考にすれば「極上高嶋石」とよめる。彫りはごく浅く、所有者の戯書のようにも思えるが、おなじ書体でかかれた類例があることから、産地あるいは販売者によるものとも考えられる。やや緑色がかかった灰色で、黒い斑がわずかに認められる (SU382)。25 は長さ 9.1cm、幅 4.2cm で、『硯見本簿』にみえる最小規格 (長さ三寸、巾一寸半) よりやや小ぶりである。二面硯で、左側の海の部分には朱墨の痕跡がわずかに認められる。全体に灰色で、黒い斑がわずかにみられる。背面の文字は「寿」と読むのだろうが、全体に稚拙の感がある (SU385)。26 は長さ 10.4cm、幅 4.2cm で、『硯見本簿』の「三寸半×一寸半」の規格より一回りほど小ぶりである。岡の背面に浅い袢りを施している。またその中央に「泉」とよめる線刻がある。岡と海の隅に、朱墨の痕跡が認められる。全体に黒色を呈している (SK348)。27 は長さ 9.1cm、幅 3cm である。『硯見本簿』の規格にはないが、三寸×一寸である。背面に袢りはなく、「上」ともよめる刻線が二箇所認められる。全体に黒色を呈し、海部の隅に、朱墨の痕跡が認められる (SK348) 28 は長さ 12.7cm、幅 3.7cm。縦長の硯である。背面に袢りはなく文字も書かれていない。やや褐色がかかった灰色である (SK188)。

温石 (Ⅲ-136 図 29・30)

29 (SK293) は破片で、全ての面に墨書がみられる。両側面のものが「二文」とも読めるが、他は判読不能である。30 (SK101) はほぼ完形である。いずれも淡褐色を呈する。

おんしやくを淋しく禿焼て居る ふくれこそすれ 々

「川柳評万句合」明和二年十月廿五日開き

火打ち石 (Ⅲ-136 図 31～37)

31 (SK66)、32 (SK293)、33 (SK101)、34 (SU396)、35 (SK188)、36 (SK301)、37 (SU389)とも、剥離した稜線に顕著な打ち欠きの痕跡がみられる。いずれも半透明乳白色の長石である。

角トひしがあつていゝのハ火打石 『誹風柳多留』三〇編
火打石としまになると火か留り 『誹風柳多留』五二編
丸いほとなを腹の立火打石 『誹風柳多留』九一編

文鎮? (Ⅲ-136 図 38)

SU396 出土。半ばほどから折れている。一つの面に唐草様の文様が線刻されている。文鎮かとも思われるが定かでない。淡褐色を呈する。

印章 (Ⅲ-136 図 39、40)

39 は SU392、40 は SK189 出土。篆刻による印章と考えられる。東京印章協同組合常務理事技術部長の前田照男氏および同組合技術顧問の岩本博幸氏に判読していただいたところ、39 が「長安无(無)片月」、40 が「嘉舎口香美」(口部分は、印に付着した汚れのため判読不能)と刻まれていた。いずれも稚拙で、専門家の手になるものではなかろうという御指南をいただいた。39 が半透明のわずかに縞をもつ淡褐色を呈し、40 は灰白色である。40 の裏面には「上」字が刻まれている。

軽石 (Ⅲ-136 図 41)

SK330 出土。軽石である。他につけ加えることはない。

不明石製品 (Ⅲ-136 図 42、43)

42 (SK8) はやや光沢のある淡灰褐色の石材である。切断・穿孔しようとして失敗したものか?。43 (遺構外) は淡灰色のやや光沢のある石材を用いている。簪状のものが折れ、割れ口を、両側ともみが見えようにも見えるが用途は不明である。

スレート? (Ⅲ-136 図 44)

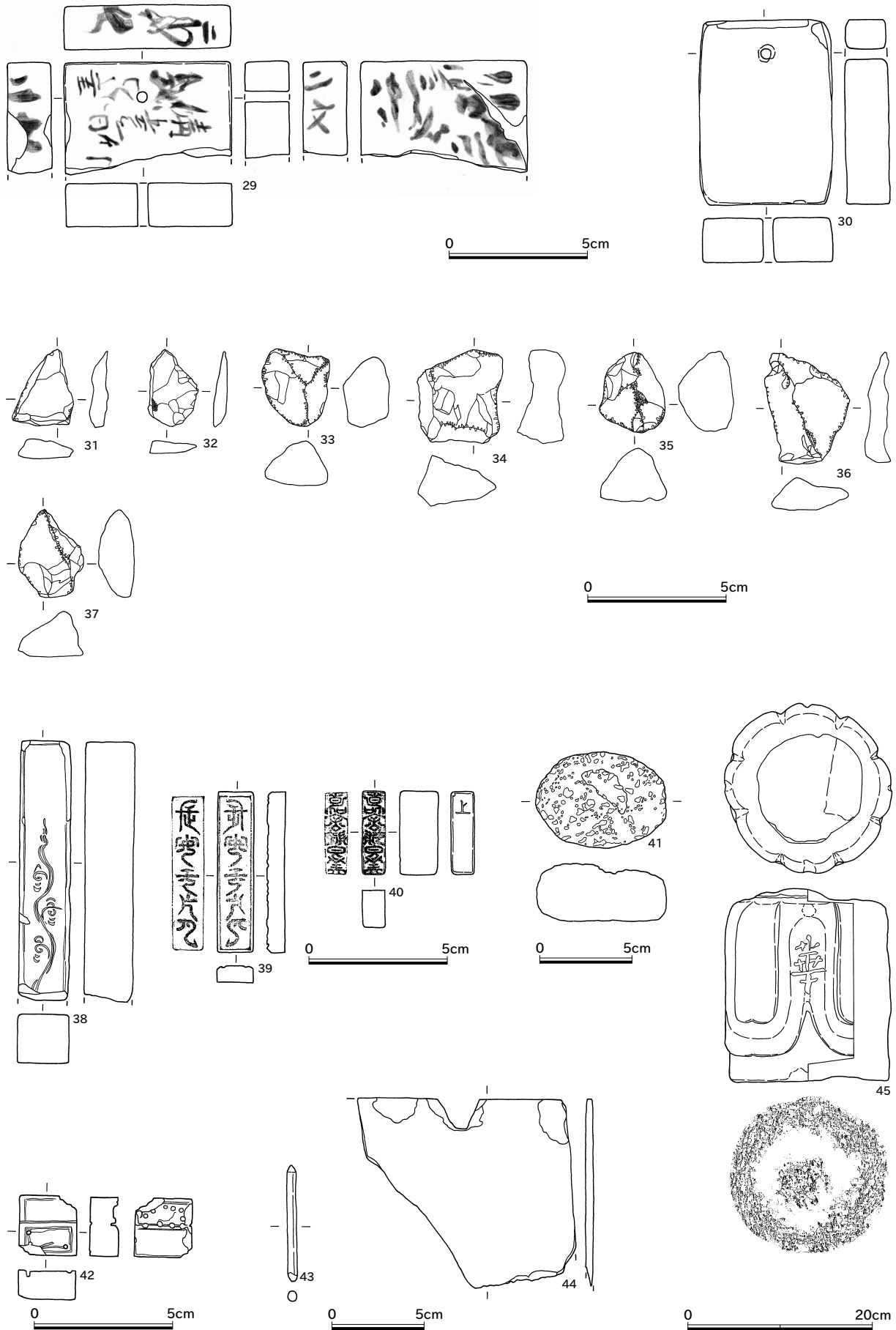
SK356 出土。一見屋根材のスレートのように見える。両面を鏡面のように仕上げている。

宝塔 (Ⅲ-136 図 45)

SK87 出土。宝塔の一部と思われ、蓮華の浮き彫りのなかに「華」の字が刻んである。



Ⅲ-134 図 石製品 (1)



Ⅲ-136 図 石製品 (3)

第8節 ガラス製品(Ⅲ-137 図)

本地点では60遺構および遺構外より214点のガラス製品が出土している。出土したものの中で最も多い器種は瓶類で、特にワイン等の酒瓶であった。瓶について多いのは小形棒状製品で簪や筭、筆巻きなどに使われたガラス棒であった。本地点は近代に位置づけられる遺構も多くありその特徴としてランプのホヤ(火舎)やインク瓶、機械栓を使用した牛乳瓶なども出土している。なお小形棒状製品31点と既に刊行した『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』(東京大学埋蔵文化財調査室2005)の小形棒状製品31点については蛍光X線分析を行った。分析は新潟県立歴史博物館の西田泰民氏、東京大学総合研究博物館の吉田邦夫氏が行い、報告については第V章第6節に掲載している。

1はインク瓶である。左右に型吹き成形(型を使用して成形)の型痕が観察される。色調は青色透明で細かい気泡がみられる。口縁部は不整形で厚くわずかに外反している。口縁部の形態から栓方式の蓋であったと推測される。胴部に三角形のなかに「O」字を中心に上に「B」、左に「S」、右に「M」の字が陽刻されている。SU2出土で共伴資料の陶磁器は東大編年Ⅷc期に位置づけられる。

2、3はインク瓶である。2は左右に型痕が観察される。色調は淡緑色がかった透明で細かな気泡がみられる。長頸で口縁部は厚く、注口を意識したとおもわれ一部がわずかに外反している。口縁部内側付近に赤色が付着している。口縁部の形態から栓方式の蓋であったと考えられる。底部に「M」の文字が陽刻されている。丸善インクの「M」と考えられる。3は大形のインク瓶で2と同様に型痕が観察される。色調は無色透明で、気泡や首部の付け根には成型時に出来たキズが観察される。口縁部は厚く注口をもつもので、蓋は栓方式の形態を呈する。胴部後面には横縞が加飾されている。横縞のない部分はラベルを貼るためのものである。肩部に「MARUZEN'S INK」、底部には「M」の文字が陽刻されている。丸善の沿革史をみると大正5(1916)年に万年筆用の「丸善アテナインキ」を発売するとある。伝世品の資料で丸善アテナインキ瓶は本遺構のものと同じものであった。当時の万年筆は付けペン状のものである。以上のことからこれらのインク瓶は東京帝国大学で使用されたものと考えられる。SK200出土で共伴資料の陶磁器は19世紀～近代までに位置づけられる。

4は小形の香水瓶と考えられる。左右に型痕が観察される。色調は無色透明で気泡がみられる。口縁部は厚く丸みがあり歪んでいる。肩部に「PARIS CTPIVER」の文字が陽刻されている。内部には固化したものが付着している。瓶全体に虹彩がみられる。SK36出土である。共伴資料の陶磁器が出土していない遺構のため年代は不明である。

5は小形の瓢形瓶である。左右に型痕が観察される。色調は淡緑色がかった透明で気泡がみられる。口縁部の調整が粗くざらついている、また蓋は栓方式の形態を呈する。首部にわずかな段差が観察され、器壁は薄いものである。SK307出土で共伴資料の陶磁器は18世紀前～後葉に位置づけられる。

6は小形の目薬瓶である。色調は無色透明で気泡が多く胴部に「目薬」と「布田」の文字が陽刻されている。陽刻の凹凸はあまく、器壁は厚いものである。SK480出土で共伴資料の陶磁器は近代に位置づけられる。

7は小形の長頸瓶である。左右に型痕、底部にはポンテ痕(ポンテ竿から切り離す際につく痕)が観察される。色調は無色透明である。遺構外出土である。

8、9はワイン瓶である。8の色調は黒褐色不透明で、胴部には陶磁器でいう虫食い、首部のつけ根には多くの皺が観察される。口縁部はわずかに脹れ、口部は溝をはさみ大小の突帯で形成され、蜜蝋栓の装着痕がみられる。頸下部はわずかに脹らみ、肩部は張るタイプである。底面の断面は三角形を呈し段差をもつ。9の色調は緑褐色透明で大きな気泡や、口から肩部にかけてうねった皺が観察される。また胴部には小石塊が混入している。口縁部はわずかに脹れ段差をもつ、口部は一つの突帯をもつものである。底面中央は半球状に脹らみ、澱溜まりは高い。頸部は垂直形で肩部は張るタイプである。9と同型のものが他に1点出土している。また、細長い円筒形でないワイン瓶が出土している。瓶は胴下部と底部の一部であるが色調は緑褐色透明で、腰部が張り澱溜まりは半球状を呈するものである。本遺構出土のワイン瓶はヨーロッパ製のものと考えられる。その他にはカットガラスの中皿や、首部が短く肩部が張っている小瓶と共栓も出土している。いずれもSK101出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年Ⅶa～Ⅶb期に位置づけられる。

10は化粧瓶と考えられる。色調は無色透明で四隅は面取りされたもので、器壁の厚さは均一である。胴部二箇所に「…DE COLOGNE」「…THEREE」の文字が陽刻されている。内部底面は半球状に脹らんでいる。内部には固化し銀化した白色の付着物が観察される。遺構外出土である。

11は脚付き坏である。色調は無色透明で、気泡のない精緻なものである。内部底面はわずかに脹らんでいる。外面は9面にカット加飾されている。他に1点11面にカット加飾された脚付き坏が出土している。長崎市勝山町遺跡（長崎市教育委員会2003）のⅥ期（19世紀後半廃棄）の遺構から、11と同形のものが出土しておりイギリス製としている。海外の発掘資料でオランダの遺跡から11と同様の脚付き坏（カット10面）が出土しており、産地はオランダとし、製作年代1880～1913年と報告している。11はヨーロッパ製の舶載品であろうか。SK89出土であるが、本遺構は重複遺構の新旧関係から17世紀末以前の廃絶年代が想定される遺構であることから、混入の可能性が高い。

12は、円形状ガラスである。色調は無色透明で中央はわずかに脹らんでいる。同形のものがもう1点出土している。2点とも側面は凸凹でざらついている。眼鏡のレンズか。SK358出土で共伴資料の陶磁器は明治中葉に位置づけられる。

13は、ビー玉である。色調は淡青色で気泡が多い。型吹き成形。ポンテ痕があり、周りには皺が観察される。SK36（A区）出土である。

14は、花卉状製品である（分析資料番号K14-13）。色調は青色透明で、気泡がみられる。側面にはポンテ痕が観察される。型押し成形か。SU327（C₂区）出土で、共伴資料の陶磁器は19世紀に位置づけられる。

15は、お弾き状製品である。色調は淡緑色透明で、気泡が多数みられる。上面には霰状の縁飾りが巡り二羽の蝶が、側面と底面は縦縞の文様が陽刻されている。側面にはポンテ痕が観察される。遺構外出土である。

16は、角柱状製品である（分析資料番号K14-3）。色調は無色透明で、断面は正方形の箸と考えられる。先端に向かいわずかに細くなっている。SK378（C₂区）出土で、共伴資料の陶磁器は19世紀前～後葉に位置づけられる。

17は、扁平棒状製品である（分析資料番号K14-03）。色調は褐色透明を呈し、断面は扁平状楕円形の簪である。頭部は結んで装飾としている。頭部は引物成形と考えられる。引き物成形は吹竿や鉄棒に巻き取ったガラス種を鋏で挟んで引き伸ばしたりして作る方法である。SK63（A区）出土である、共伴資料の陶磁器は東大編年Ⅳ～Ⅶ期に位置づけられる。

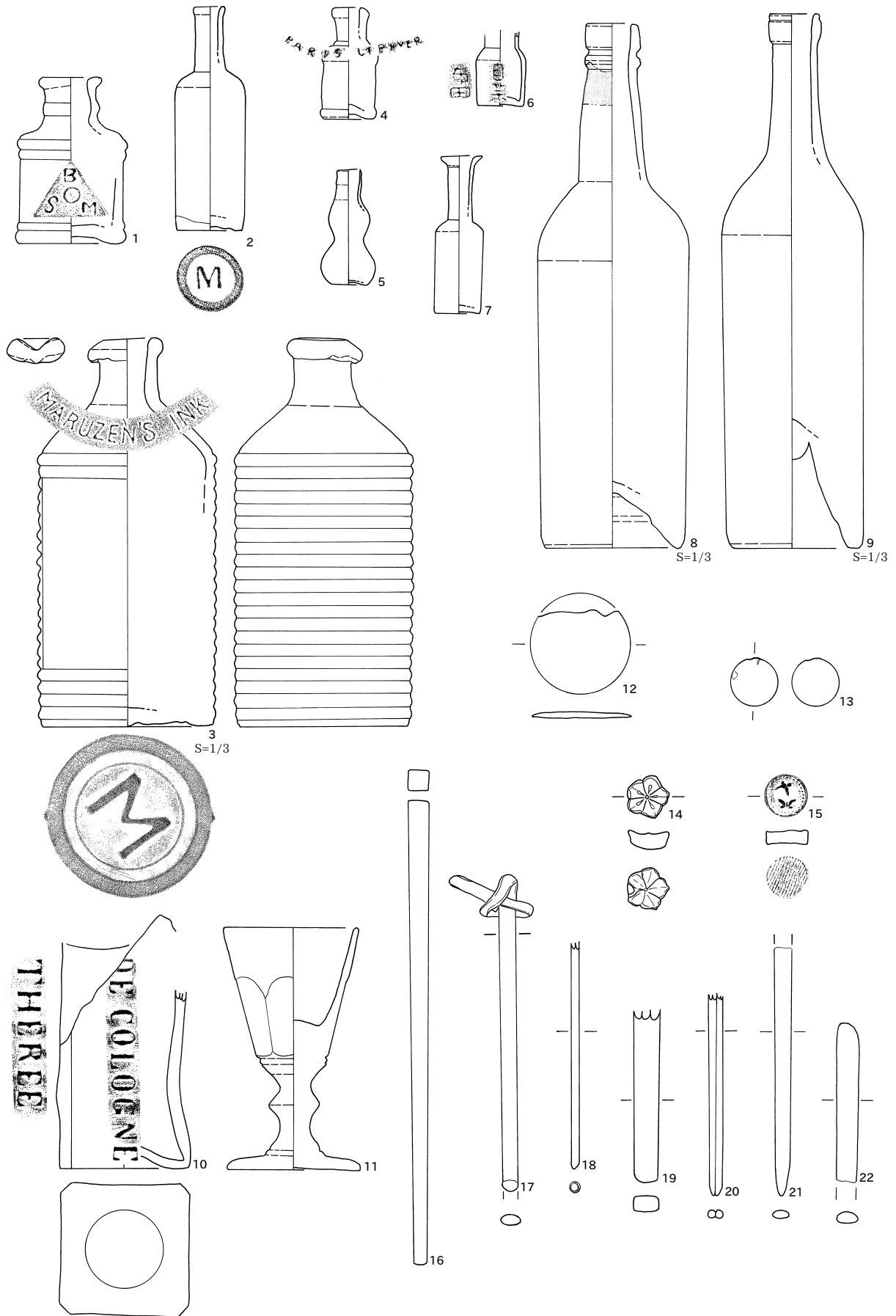
18は、管状製品である（分析資料番号K14-09）。色調は褐色透明で、管状であるが先端は窄まり塞

がっている。引物成形と考えられる。他に1点白色不透明を呈する端反碗が出土しているが陶磁器の図版(Ⅲ-64図1)に掲載している。SK299(C₁区)出土で、共伴資料の陶磁器は19世紀前葉である。

19は、角柱状製品である(分析資料番号K14-14)。色調は無色透明で、断面はやや丸みのある長方形で筭と考えられる。先端の始末は粗い。SK330(C₂区)出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VII期に位置づけられる。

20は、合わせ棒状製品である(分析資料番号K14-18)。色調は淡緑色透明で、二本のガラス棒を貼り合わせた簪の足部と考えられる。先端は尖っている。SK381(C₂区)出土で、共伴資料の陶磁器は18世紀後葉～19世紀初頭に位置づけられる。

21、22は、偏平棒状製品である(分析資料番号K14-25)。21の色調は褐色透明を呈し、断面が偏平楕円形の簪と考えられる。先端は尖っている。22の色調は褐色透明を呈し、断面は偏平状楕円形の筭と考えられる。SK392(B区)出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VII d 期に位置づけられる。



Ⅲ-137 図 ガラス製品

第9節 動物製品

(1) 骨角製品 (Ⅲ-138 図)

本地点からは骨角製品が30点出土している。骨角製品の出土状況はA区12点、B区6点、C₁区4点、C₂区5点で遺構外から3点であった。出土遺構の最も古いものは東大編年VI～VII期に位置づけられるSU18(A区)出土で、ウシまたはウマの四肢骨で作られた筭であった(CD-ROM写真参照)。そのほかのものは18世紀後葉～近代のものであった。材質の同定は国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏のご教示による。

1、2はブラシと柄である。同一個体と思われる。材質は大形哺乳類のウシもしくはウマの四肢骨で作られたものである。1の植毛孔は4列で、孔は突き抜けていないものである。植毛の様子が櫛払いと異なる。2の柄は断面が丸みを帯びている。SU2(A区)出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VIIIc期に位置づけられる。

3は籠状をした化粧道具と考えられる。材質は大形哺乳類のウシもしくはウマである。SK3(A区)出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VIIId期に位置づけられる。

4は環状製品で、材質は中形哺乳類のシカなどの大腿骨と考えられる。上面の縁には切断痕が観察される。器壁の厚さは均一ではない。SK16(A区)出土で、共伴資料の陶磁器は18世紀末～19世紀初頭に位置づけられる。

5は握柄と考えられる。材質は中形哺乳類のシカと考えられる。底部は削り込んで高台状を呈し、開口部は不整形である。口縁部は段差を持ち擦痕が観察されることから、何かを差し込んで使用したと考えられる。外面は竹の節状で握り易くなっている。SK19(A区)出土で、共伴資料の陶磁器は近代に位置づけられる。

6、7はセットである。6は7の蓋で、大変薄いものである。7は軸先と考えられる。材質は2点とも中形哺乳類のシカと考えられる。7は蓋をのせることが出来るのは片方のみである。上下の孔口は歪んでいる。巻物などの軸先であろうか。SK25(A区)出土で、共伴資料の陶磁器は18世紀末～19世紀前半に位置づけられる。

8、9はセットである。SK25から出土した6、7と同様の製品と考えられる。材質は中形哺乳類のシカと考えられる。8の蓋は上面径がやや大きく裏面は丸みを持たせている。9は軸先か、上下の縁幅が異なり、さらに下部の縁幅も不揃いである。内側の割りぬきはロクロ成形か、ロクロ目状のものが観察される。SK39(A区)出土で、共伴資料の陶磁器は19世紀前半に位置づけられる。

10はシカの角である。表面は磨き角特有の凹凸を消している。底面には鋸の切断痕が観察される。先端部は摩耗している。SK188(C₁区)出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VIIIb期に位置づけられる。

11は籠である。材質はクジラの下顎骨である。SK292(C₁区)出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VIIIa～VIIId期に位置づけられる。

12はコハゼか。材質は家畜用哺乳類の骨である。現代の足袋に使用するコハゼと同型である。喜田川守貞、嘉永6年(1853)『守貞謾稿卷之十五 男服』項の手甲、腕貫、足袋に「…コハゼガケアリ」とある。材質については触れていないため、同じ物とは断言出来ない。薄手の骨角製は強度は弱

いと考えられるので、むしろ袋物などの留め具とした可能性もある。SK298 (C₁区) 出土で、共伴資料の陶磁器は19世紀前～中葉に位置づけられる。

13は髪搔きか。材質は大形哺乳類の四肢骨である。下部の一部は緑色になっている。櫛払いなどにも観察される。SK337 (B区) 出土で、共伴資料の陶磁器は18世紀後葉～19世紀前葉に位置づけられる。

14は装飾品と考えられる。材質は大形鳥類のツル、サギ等の骨と考えられる。先端は尖り、向かって左側面の折断面には鋸痕が斜め筋状に同間隔で観察される。SU357 (B区) 出土で、共伴資料の陶磁器は18世紀後半～19世紀前半に位置づけられる。

15は筭もしくは髪搔きと考えられる。材質は哺乳類の四肢骨である。螺旋状の文様が施されている。SK358 (B区) 出土で、共伴する陶磁器は明治中葉に位置づけられる。

16、17は簪である。16は簪の足と考えられる。切断面に鋸痕が観察される。暗赤色の漆がわずかに観察される。17は耳搔き付き簪である。材質は中形哺乳類のシカもしくはイノシシと考えられる。肩がやや張るもので足は2本である。全体の所々に暗赤色の漆が観察される。内側面には鋸痕が観察される。16の簪と同一製品と思われる。SK358 (B区) 出土で、共伴する陶磁器は明治中葉に位置づけられる。

18は洋傘の轆轤である。材質はクジラの肋骨で頭骨もしくは上顎骨である。骨の多い和傘と異なり轆轤が小さい、女性がもつパラソルであろうか。精緻な作りである。SK358 (B区) 出土で、共伴する陶磁器は明治中葉に位置づけられる。

19は蓋と考えられる。材質は中形哺乳類骨のシカか。上面、側面の研磨は丁寧である。裏面中央には三重の圏線がみられ、白褐色の付着物が観察される。付着物は、20の内面に付着しているものと同一と考えられる。20の柄 (SK385) の底面に収まる。他の共伴遺物は遺構間接合していない。SK358 (B区) 出土で、共伴する陶磁器は明治中葉に位置づけられる。

20は握柄である。材質は哺乳類のシカと考えられる。胴部には文様が刻まれている。底部内側は蓋をするために段状に削られている。口縁部外面は僅かにケズリ段差をつけ、脹らみをもたせる部分を作るため深くケズリをいれている。ケズリはロクロを使用している。内面は白褐色の塗布痕がみられる。精緻な作りである。SU385 (C₁区) 出土で、共伴資料の陶磁器は近代に位置づけられる。

21は緒締めか。材質はクジラで下顎骨と考えられる。研磨成形。SU385 (C₁区) 出土で、共伴資料の陶磁器は近代に位置づけられる。

22は器種不明である。材質は大形哺乳類のウマもしくはウシの四肢骨と考えられる。図の上部右隅に小さな穿孔がみられる。左側面から斜めに切込みがあり、切込みの上下に無数の傷が観察される。切込みから2cm下まで青緑色がみられる。下部中央には僅かな凹みがあり擦れており、何か可動させるための道具であろうか。SU385 (C₁区) 出土で、共伴資料の陶磁器は近代に位置づけられる。

23はカミソリ等の柄と考えられる。材質はクジラの下顎骨と考えられる。残存部での穿孔は3箇所である。裏面には金属片が残っており孔を通し釘で固定されている。また裏面には鋸痕が無数観察される。下部孔周りは青緑色をしている。隅丸台形をしている。SK386 (C₂区) 出土で、共伴資料の陶磁器は18～19世紀前葉に位置づけられる。

(2) 漆が付着した貝殻 (Ⅲ-139 図)

本地点から漆が付着した貝殻は14点出土している。A区3点、B区3点、C₁区8点であった。

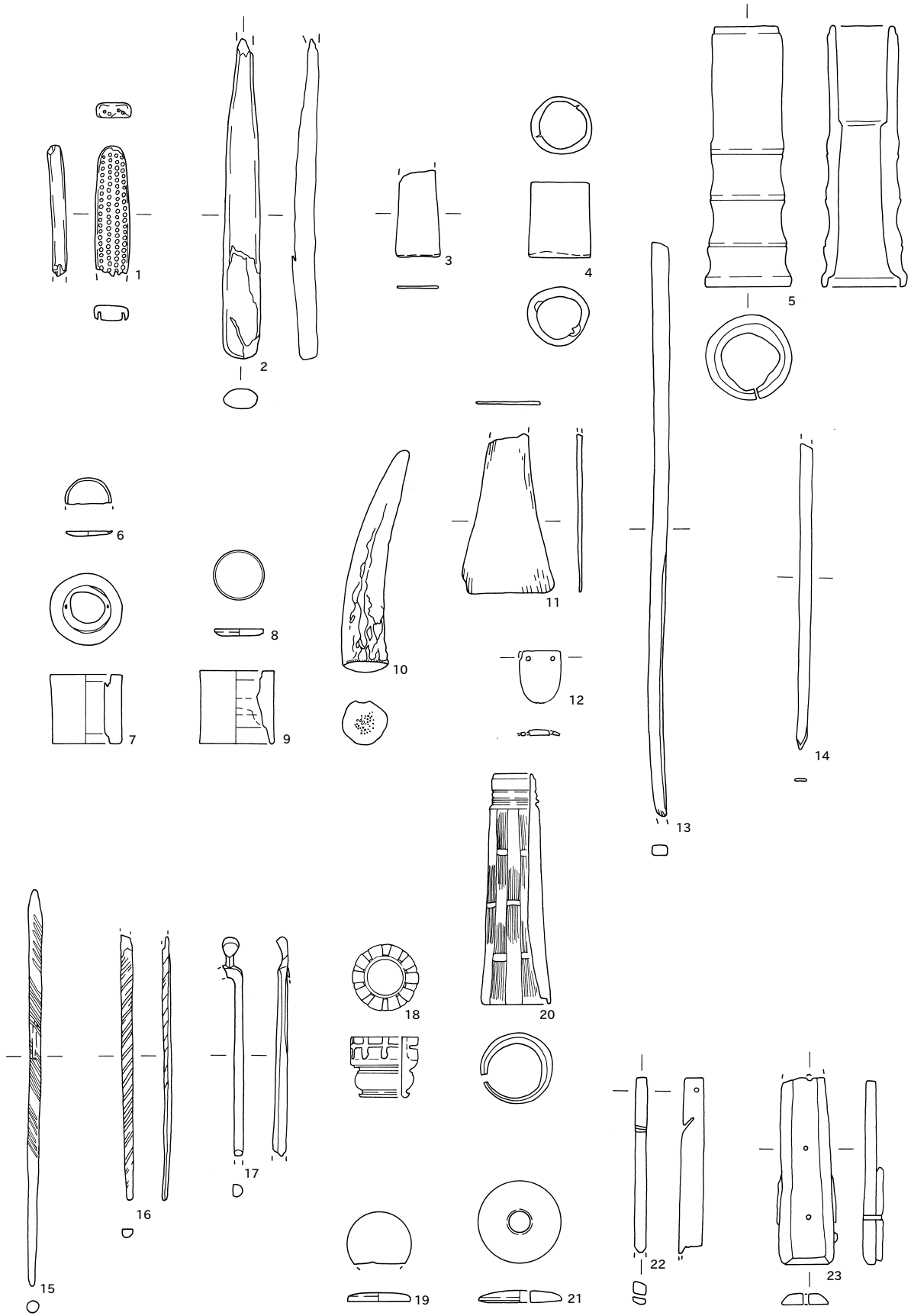
貝種をみると14点のうち10点はアカガイで、3点はハマグリ、1点がアカニシであった。アカガイ10点のうち9点には漆が付着していたが1点は痕跡のみであった。ハマグリ3点は漆が付着している。アカニシ1点には、透明で光沢のあるものが塗られている。

1はハマグリ（右殻）である。固化した黄褐色の漆が殻頂部の奥まで丁寧に薄く塗布されている。漆はひび割れ捲れている。他の貝殻とは異なる様相を呈する。漆を塗布した製品の可能性も示唆される。SK54（A区）出土で、共伴資料の陶磁器は17世紀後葉～18世紀前葉である。

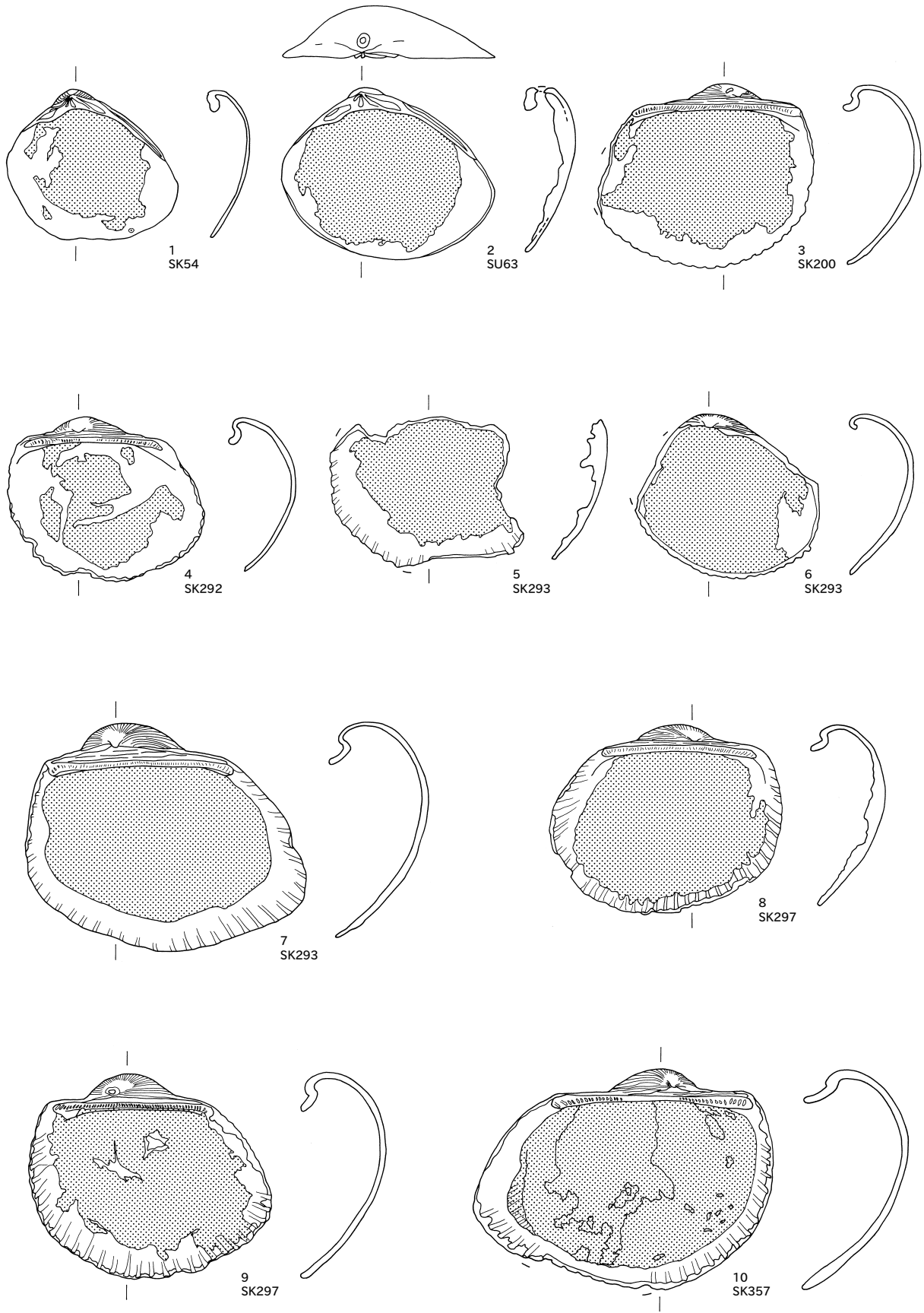
2はハマグリ（左殻）である。ハマグリの殻頂部には径3mmの穿孔がみられる。穿孔はアカニシやツメタガイの肉食の貝類によって開けられたものと推測される。固化した黄褐色の漆は盛り上がった状態を呈している。共伴した陶磁器のなかに漆継ぎされた皿3点と漆が付着した蓋物の陶器碗が出土している。SU63（B区）出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年IVb～VII期に位置づけられる。

3～10はアカガイである。3は左殻である。貝殻には固化した淡い黄褐色と暗赤褐色を呈した漆が縮み皺となっている。一部に赤色漆が観察される。SK200（C₁区）出土で、共伴資料の陶磁器は19世紀～近代に位置づけられる。4は右殻である。固化した淡い黄褐色の漆が殻頂部から貝殻に沿ってうねっている。わずかに暗赤褐色の漆が観察される。SK292（C₁区）出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VIIIa～VIIId期に位置づけられる。5の殻には固化した赤色漆と黒色漆が観察される。漆は縮み大きくうねり空洞を作っている。6の殻には固化した黄褐色の漆が全体に薄く塗布されており、一部は縮み皺となっている。8の殻は3点の中では最も大きいもので、暗赤褐色と黄褐色のものが薄く塗布されている。SK293（C₁区）出土で、共伴資料の陶磁器は東大編年VIIIa～VIIId期に位置づけられる。8は左殻、9は右殻である。8の殻には赤色漆が固化し縮みうねって空洞を作っている。9の殻の漆は黄褐色で裏面は赤色した漆である。固化した漆は大きくうねって空洞を作っている。殻頂部に径2mmの穿孔が観察される。孔は2より小さく不整形であるが肉食の貝類によって開けられたものと推測される。SK297（C₁区）出土で、共伴資料の陶磁器は19世紀前～中葉に位置づけられる。10は左殻である。固化した漆は一部を残し剥落しているが痕跡は観察される。漆の表面は灰褐色で裏面は暗赤褐色を呈し、大きくうねったあとが観察される。SU357（B区）出土で、共伴資料の陶磁器は18世紀後半～19世紀前半に位置づけられる。

本地点において、最も古い出土事例はSK54で、17世紀後葉～18世紀前葉に位置づけられる遺構である。次いでやや年代幅があるSU63で東大編年IVb期～VII期に位置づけられる。その他は18世紀後半～19世紀前半、東大編年VIIIa～VIIId期に帰属するものであった。本地点は与力、同心の組屋敷地跡であることから、公務ではなく個人で家のものを修理修繕していたのか、または微禄である下級武士の内職であったとも考えられる。本地点からはベンガラを生成していたと考えられる遺物も出土している。



III-138 骨角製品



Ⅲ-139 図 パレット状貝製品

第IV章 自然遺物

第1節 工学部14号館地点出土の動物遺体の概要

阿部 常樹

工学部14号館地点から出土した動物遺体は、56分類群である。内訳として、貝類遺体が25分類群、魚類が16分類群、鳥類が6分類群、哺乳類が9分類群である。しかし、これらの資料は、すべて現場にて肉眼で確認のできたもののみを任意で採集したものであり、必ずしも、調査地点内に居住していた人々の当時の生活の実態を正確に反映しているものとはいえない。なお、それぞれの遺構の出土傾向は、図1と表1に示した。

動物遺体は、①食物残滓として廃棄されたもの、②骨角貝製品もしくは未製品、またはその製作段階で排出されたもの(残片)、③愛玩動物や家畜もしくは野良などの遺体が埋葬もしくは廃棄されたもの、④習俗的な儀式に関連して埋納されたものであるなどの可能性が想定される。調査地点全体の傾向を概観すると、貝類、魚類、鳥類は食物残滓として廃棄されたものがほとんどであるのに対して、哺乳類遺体は以上の4つの可能性それぞれに当てはまるものが含まれている。

イヌやネコをはじめ哺乳類遺体のほとんどは、廃棄された契機が明確ではないものが多いが、SK200より出土したイヌや19世紀代のいくつかの遺構より出土したウシ、ウマなどの資料において人為的な傷や切断痕を有するものも見られる(第6節)。SK200のイヌは、報告者の新美氏によって食物残滓であることが指摘されており(第6節)、また、ほとんどのウシやウマは、骨製品の製作段階で排出されたものであることが想定される。なお、魚類および鳥類遺体においても調理に関わるものと想定される人為的な傷や切断痕を有する資料が含まれている(詳細は、第4節および第5節)。

さて、ウシとウマの骨は、ウシが8点、ウマが4点出土している(ウシかウマか明確ではない資料を除く)。また、ウマ4点の内、C₂区SK326から出土している頭蓋骨2点は、傷や切断痕や脳頭蓋の破損など人為的な傷が観察されていないこと、遺構の廃絶時期が他のウシやウマの出土している遺構が19世紀から近代であるのに対して、出土遺物が少ないため廃絶時期を確定できないが17世紀である可能性が高いことを考え合わせると、他の遺構より出土したウシやウマとは異なる背景を有するものであることが推測される。なお、大八木謙司氏は、御府内(江戸朱引内)において、ウマの頭蓋骨が埋納されている事例が17世紀代を中心に見られ、本資料も含めたそれらの資料が雨乞習俗の儀式に関連するものである可能性を示唆している(大八木2001)。

C₂区SK326以外から出土したウシやウマは、時期が19世紀もしくは近代のものがほとんどである。また、出土した遺構は、まず、A区では北側からほとんどのものが出土しているが、南側のSK24やSU38からも1点ずつ出土している。C₁区では2基の遺構からそれぞれ1点ずつではあるが、南側に固まっている。それに対して、B区は、東側に集まるがA区やC₁区のように出土している遺構が一箇所に固まらない。C₂区は先述したウマの頭蓋骨2点以外に出土していない。これらの遺構からは生産関連遺物(貝殻製の漆パレットも含む)が共伴している、もしくは、それらが含まれる遺構と隣接している。

なお、A区SU2からは、ウシやウマの他に加工痕を持つ哺乳類資料として、ハクジラ類(オキゴ

ンドウ?)の歯が出土している。クジラの骨もウシやウマと同様に、近世において骨製品に用いられることが多く、SU2のハクジラ類の歯と直接的には関連性はないと思われるが、本調査地点においても、クジラの骨を用いた骨製品が出土している。また、その他に、シカの角やヒツジの焼骨が出土している。なお、ヒツジの焼骨には、加工痕が認められなかったとされており、廃棄された契機は不明である。

貝類遺体においても、漆パレットなど貝製品として報告されているものの他に、食物残渣以外の可能性が想定されうるものが含まれている。B区SU63とC₁区SK292より大量に出土したマガキである。このようなマガキが大量に出土する事例は、他の御府内の遺跡においても見られ、これらは、食物残渣の他に、「蠣殻葺」に使用した後に廃棄したものであることが指摘されている(西田1990、井汲・成田1994など)。しかし、本調査地点の2基の遺構の資料において、ともに漆喰の付着(西田1990)のある資料がみられないだけでなく、カキ礁に着生するウネナシトマヤガイや、当時御府内においては食品としては流通していなかったイボキサゴやウミニナ類が混入しているなど、比較的、採集したままの状態を保っており、「蠣殻葺」として使用した後に廃棄されたものとは考えづらい様相を示している(詳細は第2節)。食物残渣や「蠣殻葺」の他に想定されうる可能性として、哺乳類遺体において、骨製品を作成した際に排出されたものが含まれていることと関連付けて考えると、漆喰の原料となる蛎殻灰や、胡粉、薬などの材料として集めたものである可能性も想定しうる。2基の遺構ともに、1点ずつではあるが、漆パレットが共伴しており、C₁区SK292に関しては、さらに生産関連遺物が共伴していることから、以上のような可能性を想定する必要があるかもしれない。特に蛎殻灰の生産は、近世において廃棄された貝殻を原料に少ない元手で始められる仕事の1つであり、蛎殻灰を含む石灰の需要は、18世紀以降の土蔵造りの流行によって増加したことが指摘されている(川勝2004)。いずれにしても、大量のマガキが出土する要因については、今後、他の遺跡の事例も精査して、あらゆる可能性から検討する必要がある。

謝 辞

本報告を執筆するにあたって、日本学術振興会特別研究員の石神裕之氏と國學院大學大学院の鳥越多工摩氏にはご教示を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

【参考文献】

- 井汲隆夫・成田涼子 1994 「近世南町遺跡居住者の生活史」『南町遺跡』p.245-283 新宿区南町遺跡調査団
 大八木謙司 2001 「近世における斃牛馬処理空間の変化 —江戸および周縁部の考古学的事例を中心に—」『ツンドラから熱帯まで —加藤晋平先生古稀記念論集—』(『博望』第2号)p.153-162 東北アジア古文化研究所
 川勝守生 2004 「近世江戸石灰市場の形成と会所制」『史学雑誌』第113編第4号p.71-95 山川出版社
 西田泰民 1990 「遺構から出土した蛎殻について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点第1分冊 山上会館地点の調査』p.200-202 東京大学埋蔵文化財調査室

第IV章 自然遺物

| 地区 | 遺構名 | 貝類 (基本的には出土数が上位 5 位以上のもの) | 魚 類 | 鳥 類 | 哺乳類 |
|-------|------------------------|---|------------------------------|-----------|-------------------------------|
| A | SK1 | ハマグリ(2)、アワビ類(1) | マグロ類 | | |
| | SU2 | ヤマトシジミ(51)、アサリ(35)、サザエ(12)、アカガイ(3)、ハマグリ(2)他 | マダイ、マダイ亜科 | 同定不能 | ウシ、ウマ、ウシ or ウマ、シカ、ヒツジ、オキゴンドウ? |
| | SK3 | ハマグリ(150)、サザエ(8)、シオフキ、ヤマトシジミ(各4)、アワビ類、アカガイ(各3)他 | マグロ類? | カモ類 | ネコ |
| | SK3a | ヤマトシジミ(326)、アサリ(232)、ハマグリ(32)、サザエ(7)他 | タイ型、カレイ科 | カラス類、同定不能 | |
| | SK3pit2 | ハマグリ(121)、アサリ(71)、サザエ(7)、アカガイ(6)他 | | | |
| | SK3pit3 | ハマグリ(48)、サザエ(4)、アサリ(2)他 | マダイ、マダイ亜科、タイ科、タイ型、ブリ属 | | |
| | SK8 | ハマグリ(53)、サザエ(10)、ヤマトシジミ(2)、タイラギ(1) | | | |
| | SK10 | ヤマトシジミ(152)、ハマグリ(10)、アワビ類、アカガイ、シオフキ(各1)、サルボウガイ片 | カツオ | | |
| | SK16 | ハマグリ(35)、ヤマトシジミ(4)、アカガイ(3)、サザエ(2)、アサリ(1) | | | イヌ、陸獣 |
| | SU18 | ハマグリ(74)、アサリ(3)他 | マグロ類 | | イヌ、ヒト or 家畜、陸獣 |
| | SK19 | | | | ブタ? |
| | SK22 | アワビ類、サザエ、海産微小貝類(各1)、アカガイ片 | マグロ類 | | シカ、ウシ、ウシ or ウマ |
| | SK24 | | | | ウシ |
| | SK25 | サザエ(4) | | キジ類 | イヌ、陸獣 |
| | SK36 | アカガイ(8)、ヤマトシジミ(6)、サザエ(5)、アワビ類、ハマグリ(各3)他 | | | |
| | SU38 | ヤマトシジミ(32)、サザエ(5)、サルボウガイ、ハマグリ(各1)、アワビ類片、アサリ片 | | | ウシ or ウマ |
| | SK39 | | マダラ | | |
| | SK50 | アカガイ(6)、ハマグリ(4)、マガキ(1) | | | |
| | SK54 | ヤマトシジミ(24)、ハマグリ(15)、アサリ(4)、サザエ、アカガイ(各1) | 真骨類・同定外 | | |
| | SX60 | | | | ウシ、ウシ or ウマ |
| SP138 | ヤマトシジミ(2)、サザエ、ハマグリ(各1) | | | | |
| A・B | SK89 | | | | 不明 |
| B | SU63 | マガキ(213)、アサリ(23)、シオフキ(12)、ハマグリ(11)、イボキサゴ(10)他 | | | |
| | SK96 | アワビ類片 | ヒラメ | | |
| | SK100 | サザエ(1) | | | ウシ |
| | SK101 | サザエ(1)、アカガイ片、マガキ片、ハマグリ片 | | 同定不能 | |
| | SK140 | ハマグリ(125)、ヤマトシジミ(52)、サザエ(3)、パイ、アサリ、シオフキ(各1) | | | |
| | SE174 | ヤマトシジミ(6)、アカガイ(5)、ハマグリ(3)、サザエ、パイ、アサリ(各1) | | | |
| | SU176 | アサリ(76)、ハマグリ(14)、サザエ(4)、シオフキ(3)、アカニシ(1) | | | |
| | SK194 | サザエ(1) | | | ネコ、陸獣 |
| | SE300 | サザエ(2) | | | |
| | SK317 | | | | イヌ、陸獣 |
| | SK356 | アワビ類片 | | | ウシ |
| | SK357 | サザエ(1)、ヤマトシジミ(1) | | | |
| | SK358 | ハマグリ、アサリ(各4)、ヤマトシジミ(2)、サザエ、シオフキ(各1) | マアジ、タラ科 | カモ類 | イヌ、ネコ、ブタ、ウシ、ウマ |
| | SK359 | ヤマトシジミ(6) | | | |
| | SK360 | | 真骨類・同定不可 | | |
| | SU392 | ハマグリ(113)、ヤマトシジミ(62)、アサリ(3)、アカガイ(2)他 | マダイ、ホウボウ科、フサカサゴ科、タラ科 | キジ類 | |
| | SU396 | ハマグリ(4) | ブリ属、マグロ類 | サギ類 | |
| C1 | SK185 | アサリ片 | | | |
| | SK186 | サザエ、アカニシ(各1) | マグロ類 | | |
| | SK188 | ハマグリ(51)、ヤマトシジミ(34)、アサリ(28)、サザエ、マガキ、シオフキ(各3)他 | マダイ、マダイ亜科、タイ科、タイ型、フサカサゴ科、コチ科 | カモ類、キジ類 | イヌ・陸獣 |
| | SK200 | サザエ(2)、ハマグリ(1)、アカガイ片 | | カモ類 | イヌ、ウシ or ウマ |
| | SK200 西表 | ハマグリ片 | ヒラメ | | イヌ、ブタ |
| | SK245 | ハマグリ(27)、アサリ(14)、アカガイ(5)、シオフキ(2)、ウミナナ類、マガキ(各1) | ホウボウ科 | カモ類、ガン類 | イヌ |

表 1 工学部 14 号館地点出土動物遺体一覧 (1)

第1節 工学部14号館地点出土の動物遺体の概要

| 地区 | 遺構名 | 貝類 (基本的には出土数が上位5位以上のもの) | 魚 類 | 鳥 類 | 哺乳類 | |
|----------------|----------------|---|-------------------|------|-------------|----|
| C ₁ | SK252 | ハマグリ(5) | | | | |
| | SK258 | | | | イヌ, ネコ | |
| | SK259 | | | | イヌ | |
| | SK291 | サザエ(5)、ハマグリ(3)、アカガイ、ヤマトシジミ(各1)、アワビ類片 | ブリ属 | カモ類 | イヌ | |
| | SK292 | マガキ(413)、ヤマトシジミ(27)、アサリ(22)、ウネナシトマヤガイ(12)、サザエ(5)他 | マダイ亜科 | | イヌ、陸獣 | |
| | SK293 | アサリ(182)、ハマグリ(23)、ヤマトシジミ(13)、サザエ(9)、アカガイ(6)他 | イサキ | | イヌ、ウシ or ウマ | |
| | SK293 下層 | ヤマトシジミ(264)、アサリ(1)、ハマグリ片 | | | | |
| | SU295 | サザエ(3)、アサリ、ヤマトシジミ(各1)、アワビ類片、不明片 | | | イヌ、陸獣 | |
| | SU295 上 | サザエ蓋、アカガイ(1)、アサリ片 | | | | |
| | SK297 | アサリ(18)、ハマグリ(16)、サザエ、ヤマトシジミ(各2) | | | | |
| | SK298 | アサリ(1) | ヒラメ | | イヌ | |
| | SK307 | サザエ、アカニシ(各1)、アワビ類片 | | | | |
| | SK348 | アカニシ片 | | | | |
| | SK398 | ハマグリ(26)、サザエ(1)、不明片 | | ニワトリ | イヌ、陸獣 | |
| | SK402 | アワビ類片、ハマグリ片、アサリ片 | | カモ類 | イヌ | |
| | C ₂ | SK311 | ハマグリ(36)、アサリ(1) | | | |
| | | SK326 | アカニシ(1) | | | ウマ |
| SK330 | | サザエ(1)、アカニシ(1) | スズキ、カツオ | | | |
| SK331 | | ハマグリ片 | | | ネコ | |
| SU335 | | ハマグリ(38)、ヤマトシジミ(30)、アワビ類(4)、アカガイ、シオフキ(各1) | カツオ、カツオ?、マグロ類、ヒラメ | | イヌ | |
| SK337 | | ハマグリ(13)、ヤマトシジミ(9)、サザエ(4)、ダンベイキサゴ、アカガイ、アサリ(各1) | | | ウサギ | |
| SK338 | | ハマグリ(65)、アワビ類、サザエ蓋(各1) | | | ネコ | |
| SK340 | | ハマグリ(37)、アサリ(1) | | | | |
| SK378 | | ハマグリ(1) | | | | |
| SU381 | | アワビ類片 | | | | |
| SU385 | | | | | ネコ | |
| SK386 | | | | キジ類 | | |
| SU389 | | ハマグリ(21)、サザエ、ヤマトシジミ(各3)、アカガイ(2) | | | | |
| SU389 下 | | サザエ、アカガイ、ハマグリ(各1) | | | | |
| SK399 | | ヤマトシジミ(13) | | | | |
| SK411 | | アワビ類(11)、サザエ蓋、ヤマトシジミ(各1) | | | | |
| SK415 | | サザエ(6)、ハマグリ(1) | | カモ類 | | |

表1 工学部14号館地点出土動物遺体一覧(2)

※貝類遺体のカッコ内の数字は最小個体数。

第2節 工学部14号館地点出土の貝類遺体

阿部 常樹

はじめに

工学部14号館地点から出土した貝類遺体は、25分類群、4,104個体（最小個体数）である。これらの資料は、すべて現場にて肉眼で確認のできたもののみを任意に採集したものである。

1. 貝種組成（表1、2、図1～3）

計数方法と概要

貝種組成は最小個体数で表している。なお、計数方法は以下のとおりである。巻貝類は殻柱が2分の1以上、アワビ類とキクスズメは殻頂部分が残存している資料を計数対象としている。二枚貝類は、殻頂部分の残存している資料を計数対象としている。それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数し、そのうち多いほうを最小個体数としている。以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱っている。なお、各サンプルの各分類群内において、計数対象資料が残存せず、「破片」のみである場合は、一括して1個体として計算をおこなっている。

以上の方法で計数した結果は、以下のとおりである。本調査地点においてハマグリ（29.8%）とヤマトシジミ（27.8%）が最も多く、この2種で全体の約60%を占める。ついで、アサリ（17.9%）、マガキ（15.5%）が多く出土しており、その他に出土率が10%を超えるものはない。また、大形貝類では、サザエが最も多く（3.6%）、ついでアカガイ（1.7%）、アワビ類（1.0%）が多く出土している（表2）。

貝種ごとに見る出土傾向とそれらが廃棄されるまでの来歴

次に、貝種ごとに出土傾向を概観する。なお、ハマグリ・アサリ・ヤマトシジミの出土傾向は、ここでは割愛する。

アワビ類 調査地点全体で、42個体が出土している。そのうち、C2区のSK411から調査地点全体の26%にあたる11個体が出土している。その他からは、多くても4個体で、ほとんどが1個体もしくは破片のみが出土している。区画で比較すると、C2区が最も多く40.5%で、次いでA区から35.7%が出土している。なお、種まで同定できたものの中で、クロアワビが最も多い。

サザエ 調査地点全体で、148個体が出土している。10個体以上出土している遺構は、A区のSU2（12個体）とSK8（10個体）のみで、その他に5個体以上出土している遺構は、A区のSK3・SK3a・SK3pit2、SK36、SK38、C₁区のSK291、SK292、SK293、C₂区のSK415である。なおC₁区の3基の遺構は隣接している。区画間で比較すると、特にA区で多く、全体の49.3%が本区画から出土している。

また、本調査地点出土のサザエはすべて、殻に棘を有するものであった。

アカニシ 調査地点全体で、13個体が出土している。A区のSK36で2個体が出土している他は、11基の遺構から、1個体ずつ出土している。

アカガイ 調査地点全体で、71個体が出土している。8個体出土しているA区のSK36が最

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda

古腹足目 Order Vetigastropoda

ミミガイ科 Family Haliotidae

メガイアワビ *Halitosis (Nordotis) gigantea*

マダカアワビ *Haliotis (Nordotis) madaka*

クロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus*

ニシキウズガイ科 Family Trochidae

イボキサゴ *Umbonium moniliferum*

ダンベイキサゴ *Umbonium giganteum*

サザエ科 Family Turbinidae

サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*

盤足目 Order Discopoda

カワニナ科 Family Pleuroceridae

カワニナ *Semisulcospira reiniana*

ウミナナ科 Family Batillariidae

属種不明 *gen. et sp. indet.*

スズメガイ科 Family Hipponicidae

キクスズメ *Hipponix acuta*

タマガイ科 Family Naticidae

ツメタガイ *Glossaulax didyma*

新腹足目 Order Neogastropoda

アクキガイ科 Family Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

エゾバイ科 Family Buccinidae

バイ *Babyronia japonica*

二枚貝綱 Class Bivalvia

フネガイ目 Order Arcoida

フネガイ科 Family Arcidae

アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*

サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*

ウグイスガイ目 Order Pterioidea

ハボウキガイ科 Family Pinnidae

タイラギ *Atrina (Servatrina) pectinata*

カキ目 Order Ostreoida

イタヤガイ科 Family Pectinidae

イタヤガイ *Pecten albicans*

イタボガキ科 Family Ostreidae

マガキ *Crassostrea gigas*

マルスダレガイ目 Order Veneroida

バカガイ科 Family Mactridae

シオフキガイ *Mactra veneriformis*

ミルクイ *Tresus keenae*

ニッコウガイ科 Family Tellinidae

イチョウシラトリ *Pistris capsoides*

フナガタガイ科 Family Trapezidae

ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum*

シジミガイ科 Family Cobicalidae

ヤマトシジミガイ *Corbicula japonica*

マルスダレガイ科 Family Veneridae

カガミガイ *Phacosoma japonicum*

アサリ *Tapes (Ruditapes) philippinarum*

ハマグリ *Meretrix lusoria*

オキシジミ *Cyclina sinensis*

オオノガイ科 Family Myodae

オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai*

表 1 工学部 14 号館地点出土貝類遺体種名表

| 地区 | 遺構名 | アワビ類 | | | サザエ | | アカニシ | | アカガイ | | サルボウガイ | | マガキ | | ハマグリ | | アサリ | | シオフキガイ | | ヤマトシジミ | | マウナヤガイ | | その他 | 合計 | その他の内訳 | クワター分析結果 | | |
|-------|---------|--------|-------|--------|-----|----|------|----|------|---|--------|-----|-----|-----|------|-----|-----|----|--------|---|--------|---|--------|---|-----|------|--------|-----------------------------|--|----|
| | | メガイアワビ | クロアワビ | マダカアワビ | 種不明 | 殻 | 蓋 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | | | | | 右 | |
| A | SK1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 0.1% | | | | |
| | SU2 | 1 | | | | 12 | 2 | 1 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 107 | 2.6% | ツメタガイ(1) | Eb | |
| | SK3 | | 3 | | | 8 | 2 | 1 | 3 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | 3 | 179 | 4.4% | タイラギ(1)、イタヤガイ(右1)、カガミガイ(左1) | Cb | |
| | SK3a | | 1 | | | 7 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 626 | 15.3% | カワニナ(1) | Eb | |
| | SK3pit2 | | 2 | 1 | | 7 | 1 | 6 | 6 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 217 | 5.3% | キクスズメ(1)、タイラギ(片)、カガミガイ(左1) | Bb | |
| | SK3pit3 | | | | | 4 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 59 | 1.4% | | Cb | |
| | SK8 | | | | | 10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 66 | 1.6% | タイラギ(1) | Cb | |
| | SK10 | | 1 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 166 | 4.1% | | Ea | |
| | SK16 | | | | | 2 | 1 | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 45 | 1.1% | | Cb | |
| | SU18 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 82 | 2.0% | カガミガイ(片) | Cb | |
| | SK22 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 4 | 0.1% | 海産微小貝類(1) | |
| | SK25 | | | | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 0.1% | | | |
| | SK36 | | 3 | | | 5 | 5 | 2 | 2 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 30 | 0.7% | バイ(1)、ミルクガイ(左1) | D |
| | SU38 | | | | | 5 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 41 | 1.0% | | Ea | |
| | SK50 | | | | | | | | 6 | 2 | | | | 1 | 3 | 4 | | | | | | | | | | 11 | 0.3% | | | |
| | SK54 | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | 15 | 9 | 3 | 4 | | | | | | | | | 45 | 1.1% | | Ca | |
| | SPI38 | | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 4 | 0.1% | | | |
| | A区小計 | | 2 | 10 | 1 | 2 | 68 | 5 | 35 | 4 | | | 6 | 575 | 352 | 8 | 607 | | | | | | | | | 13 | 1,689 | 41.2% | | |
| SU63 | | | | | 4 | 1 | 3 | 2 | | | 1 | 213 | 140 | 11 | 5 | 23 | 19 | 12 | 8 | 3 | 1 | | | | 1 | 21 | 294 | 7.2% | イホキサゴ(10)、ウミノナ類(6)、オキシジミ(左1)、カガミガイ(片)、イチョウソラトリガイ(右1)、不明(片)、海産微小貝類(1) | A |
| SK96 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.0% | | | |
| SK100 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.0% | | | |
| SK101 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 0.1% | | | |
| SK140 | | | | | 3 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 183 | 4.5% | バイ(1) | Ca |
| SE174 | | | | | 1 | | | 3 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 17 | 0.4% | バイ(1) | |
| SUI76 | | | | | 4 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 98 | 2.4% | | Ba | |
| SK194 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.0% | | | |
| SE300 | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 0.1% | | | |
| SK356 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 0.0% | | | |
| SK357 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 0.1% | | | |
| SK358 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 12 | 0.3% | | | |
| SK359 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 6 | 0.1% | | | |
| SU392 | | | | | 1 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 183 | 4.5% | | Ca | |
| SU396 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 0.1% | | | |
| B区小計 | | | | | 3 | 20 | 2 | 11 | 1 | | | 215 | 275 | 108 | 18 | 132 | | | | | | | | | 23 | 809 | 19.7% | | | |

(○：破片のみ、△：小破片もしくは破片少量)

表2 工学部14号館地点出土貝類遺体組成表(1)

も多く、その他に5個体以上出土しているのは、A区のSK3pit3、SK50、B区のSK174、C₁区のSK245、SK293である。区画間で比較すると、サザエと同様にA区で多く、全体の50.0%が本区画から出土している。

マガキ 調査地点全体で638個体が出土している。しかし、B区のSU63で213個体、C₁区のSK292で413個体、つまり、調査区全体の約98%のマガキがこの2基の遺構から出土している。その他の遺構は、1個体、多くて3個体しか出土していない。つまり、大量に出土している2基の遺構以外は、ハマグリやアサリなどを採集した際に混獲されたものであるか、他のマガキを廃棄した場所から流出して、雨水や人為的な土の移動などに伴って混ざり込んだものであるなどの可能性が推測される。なお、先の2基の遺構出土のマガキについての詳細は、後述する。

サルボウガイ 調査地点全体で、7個体が出土している。なお、7基の遺構から、1個体ずつしか出土していない。また、アカガイの代用として使われたこと(篠田1996)が彷彿されるような殻長50mm以上のものはなく、いずれも40mm未満の大きさであることから、共伴するハマグリやアサリなどを採集した際に混獲されて、取り除かれることなくとも持ち込まれたものである可能性が高い。

シオフキガイ 調査地点全体で32個体が出土している。しかし、B区のSU63で12個体出土している以外に、4個体以上出土する遺構はない。サルボウガイと同様に共伴するハマグリやアサリなどを採集した際に混獲されて、取り除かれることなくとも持ち込まれたものである可能性が高い。

ウネナシトマヤガイ C₁区のSK292では、ウネナシトマヤガイが12個体と調査地点内で、最も多く出土している。SK292以外は、B区のSU63とA区のSK3でそれぞれ1個体ずつ出土するのみである。SK292とSU63は、ともにマガキが大量に出土している遺構であり、本種は、カキ礁に着生する微小貝類でもあることから、マガキとともに持ち込まれたものであると考えられる。

「その他」 調査地点全体で5個体に満たないか、5個体以上出土しているものの1基の遺構からしか出土していない貝種を「その他」としている。なお、「その他」に含まれる貝種は、14分類群である。イボキサゴが10個体、ウミナナ類が6個体(ともにSU63)出土している他は、遺構内で1個体、もしくは破片が出土するのみである。その内、パイ、ダンベイキサゴ、タイラギ、ツメタガイ、ミルクイなど単体もしくは少数個体で一つの料理となりうるものと、イタヤガイなど貝柄杓に使われたものを除いた8分類群は、サルボウガイやシオフキガイと同様に、生息域を同じくする主要な貝種を採集した際に混獲され、取り除かれることなくとも持ち込まれたものである可能性が高い。なお、その8分類群は、キクスズメ、イボキサゴ、ウミナナ類、カワナナ、イチョウシラトリガイ、カガミガイ、オキシジミ、オオノガイである。

以上から、遺構によって若干異なるが、本調査地点で種を認識して料理に使用するために持ち込まれた可能性のあるものは、25分類群中、アワビ類、サザエ、アカニシ、アカガイ、マガキ、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミ、パイ、タイラギ、ダンベイキサゴ、ツメタガイ、ミルクイの13分類群であると考えられる。

遺構別にみた貝種組成(図1、2)

次に、遺構別に貝種組成を概観する。概観するに当たって、組成における遺構間の類似性または相違性の程度を抽出するために、群平均法クラスター分析をおこなった。その際のデータは、サンプル内(遺構内)で割合を計算した上で、さらに arc-sin 変換し正規分布に近似させたもの(埴原1992)

を用いている。なお、その分析には、資料の取り上げ方法の問題を鑑みて、2分類群以上出土し、さらに調査地点内で0.5%（21個体）以上貝類遺体が出土している遺構のみを対象とした。以上の基準をクリアして分析に用いることのできたサンプルは、68サンプル中29サンプル、全体の43%であった。

その結果、AからEまでの5つのクラスターに分類された（図1）。さらに、クラスターB・C・Eは、それぞれ2つのサブクラスターに分類された（a・b）。以下に、クラスターおよびサブクラスターごとに傾向を示す。

クラスターA（図2（1））

マガキを主体とし、その出土率がともに70%以上を占める。このクラスターに属するのは、SU63とSK292の2基の遺構のみである。SU63は18世紀後半でB区に属し、SK292は19世紀前半から後半でC₁区に属している。つまり、時期・区画ともに2基の遺構間に共通性は見出せなかった。

マガキ以外の組成を概観すると、SK292においてウネナシトマヤガイが12個体と地点内で最も多く出土している。なお、ウネナシトマヤガイは、SK292以外にSU63とクラスターCbに属するSK3でそれぞれ1個体ずつ出土するのみである。先述したように、本種は、カキ礁に着生する種であることから、マガキとともに持ち込まれたものであると考えられる。一方、SU63は、「その他」（7.5%）に属する貝種の出土率が、地点内で最も多い。その内容は、イボキサゴ（10個体）、ウミノナ類（6個体）など、当時、田畑の肥料として利用され、「食料品」としては御府内に流通することのなかった種類（筑紫2000など）が多く含まれている。おそらく、同じ場所を生息域とするハマグリ、アサリ、マガキのいずれかを採集した際に混獲され、そのまま持ち込まれたものであると考えられる。しかし、他のハマグリやアサリを主体とする遺構からはこれらの種がほとんど見ることが出来ないことや、他の御府内の遺跡において、このようなマガキが多く出土する遺構より頻繁に出土するオキシジミの左

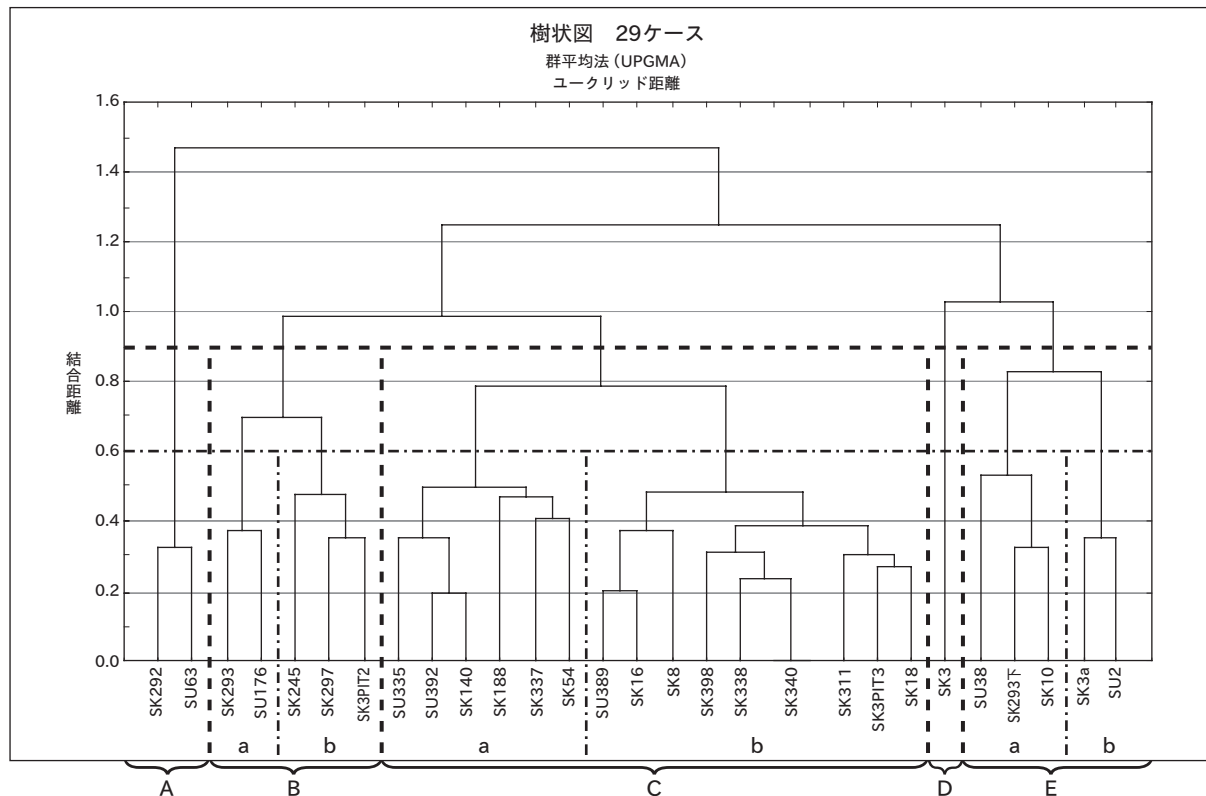


図1 貝類遺体組成に関するクラスター分析の結果

殻が1点含まれていることを鑑みると、これらの「その他」に属する貝種のほとんどがマガキに伴って、持ち込まれたものであると推測される。

クラスター B (図 2 (1))

アサリとハマグリを主体とする遺構が含まれる。本クラスターに含まれる遺構 5 基の内、3 基は C₁ 区に含まれ、その他は A 区と B 区に 1 基ずつ含まれる。このクラスターは、アサリとハマグリの出土傾向の違いによって 2 つのサブクラスターに分かれる。以下にサブクラスターごとに説明を加える。

サブクラスター Ba アサリが 75%以上出土し、ついで、ハマグリが多く出土しているが、出土率は 10%前後にとどまる。その他の分類群は 5%に満たない。このサブクラスターに属するのは、19 世紀前半で B 区に属する SU176 と、19 世紀中ごろで C₁ 区に属する SK293 である。この 2 基は、時期・区画共に特に共通性は見出せず、距離も比較的離れている。あえて、共通性を見出すならばともに 19 世紀代に属する点のみである。なお、SK293 の下層は、ヤマトシジミを主体とするクラスター Ea に属する。

サブクラスター Bb アサリとハマグリを主体とし、この 2 種が同程度出土している。また、この 2 種で 80%以上を占める。他の貝種の出土率は、サブクラスター Ba ほど顕著に少なくはないが、SK245 のアカガイが 10.0%出土している他は、10%を超えない。このサブクラスターに属する遺構は、19 世紀中ごろで A 区に属する SK3pit2、18 世紀前半で C₁ 区に属する SK245、19 世紀後半

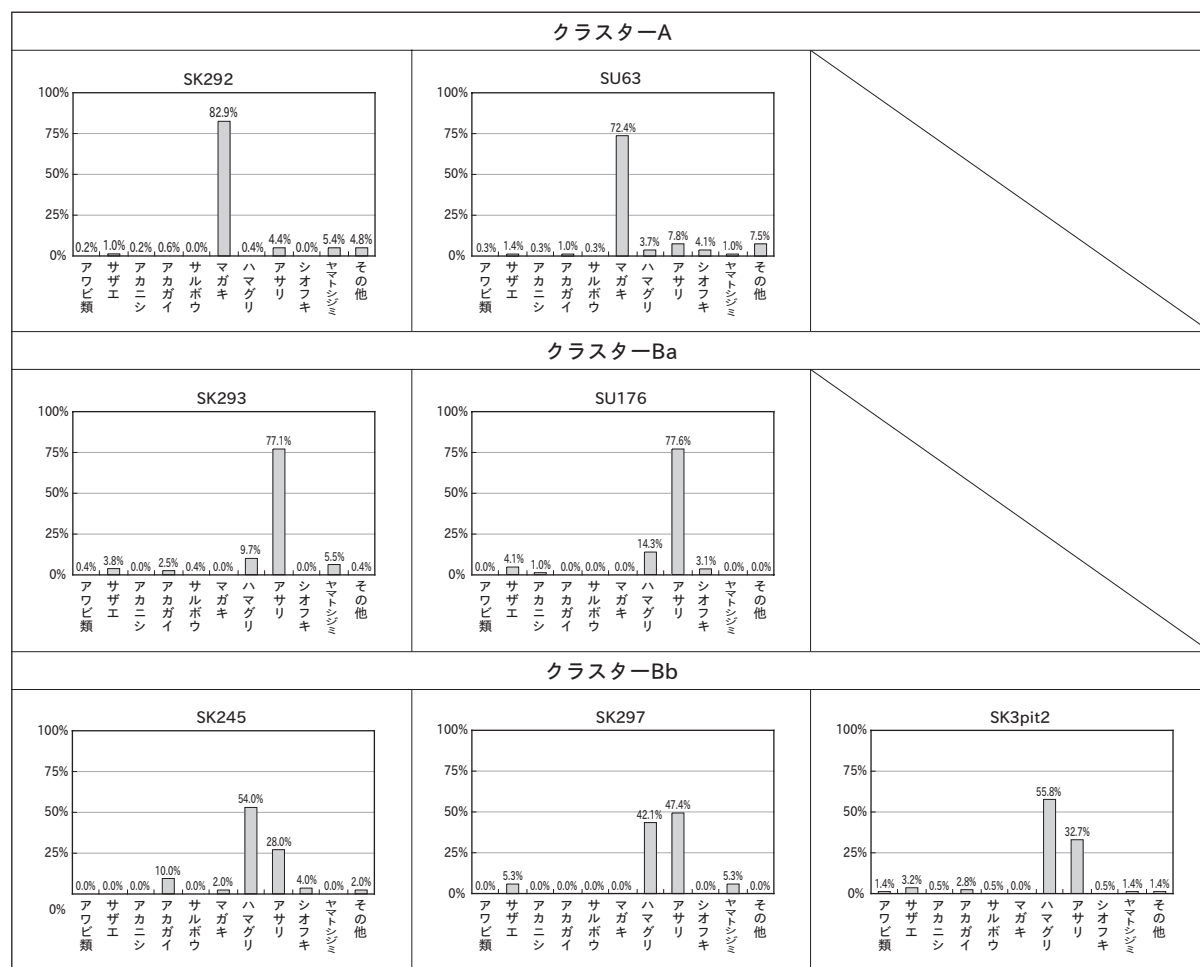


図 2 遺構別貝類遺体組成グラフ (1)

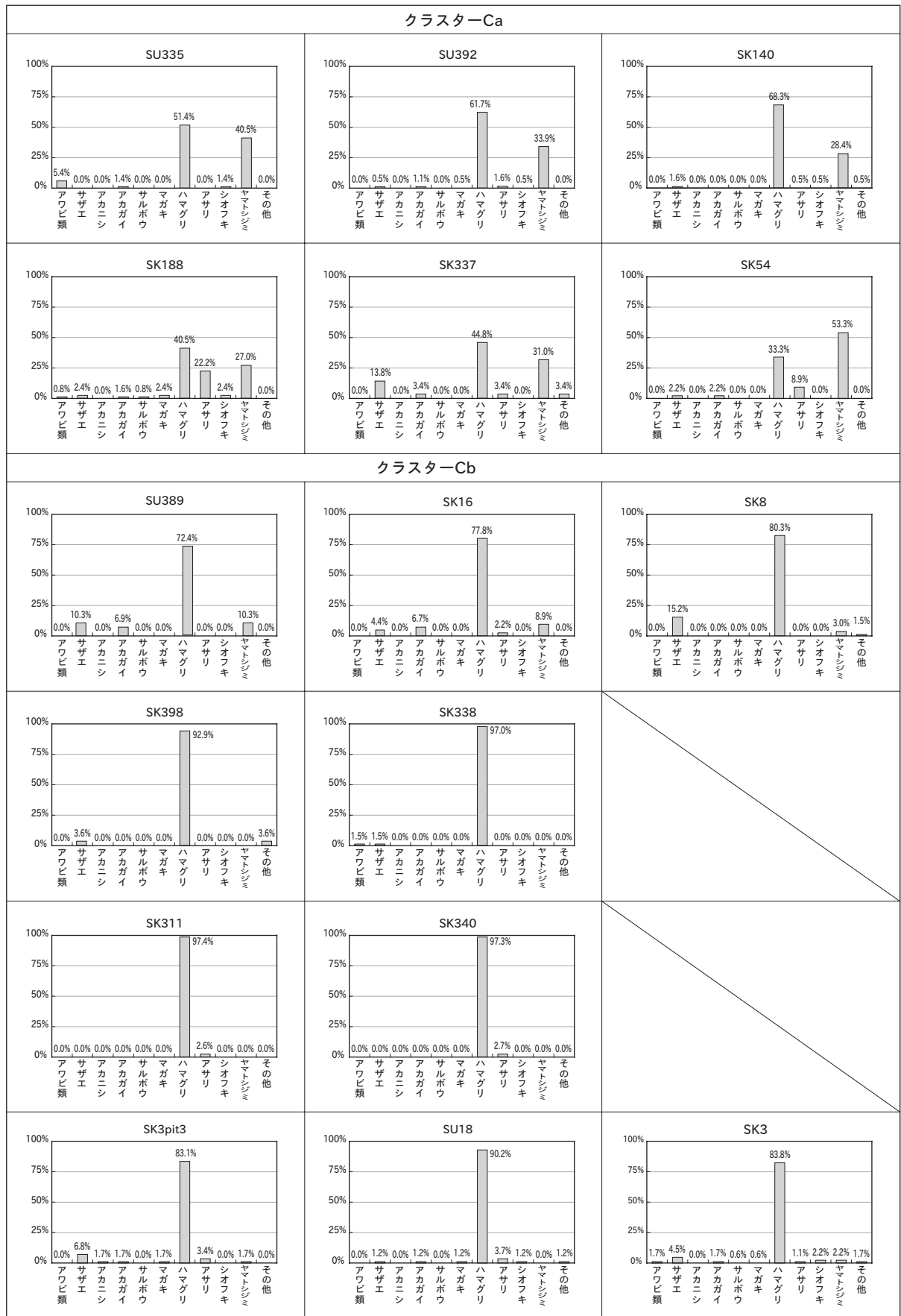


図2 遺構別貝類遺体組成グラフ(2)

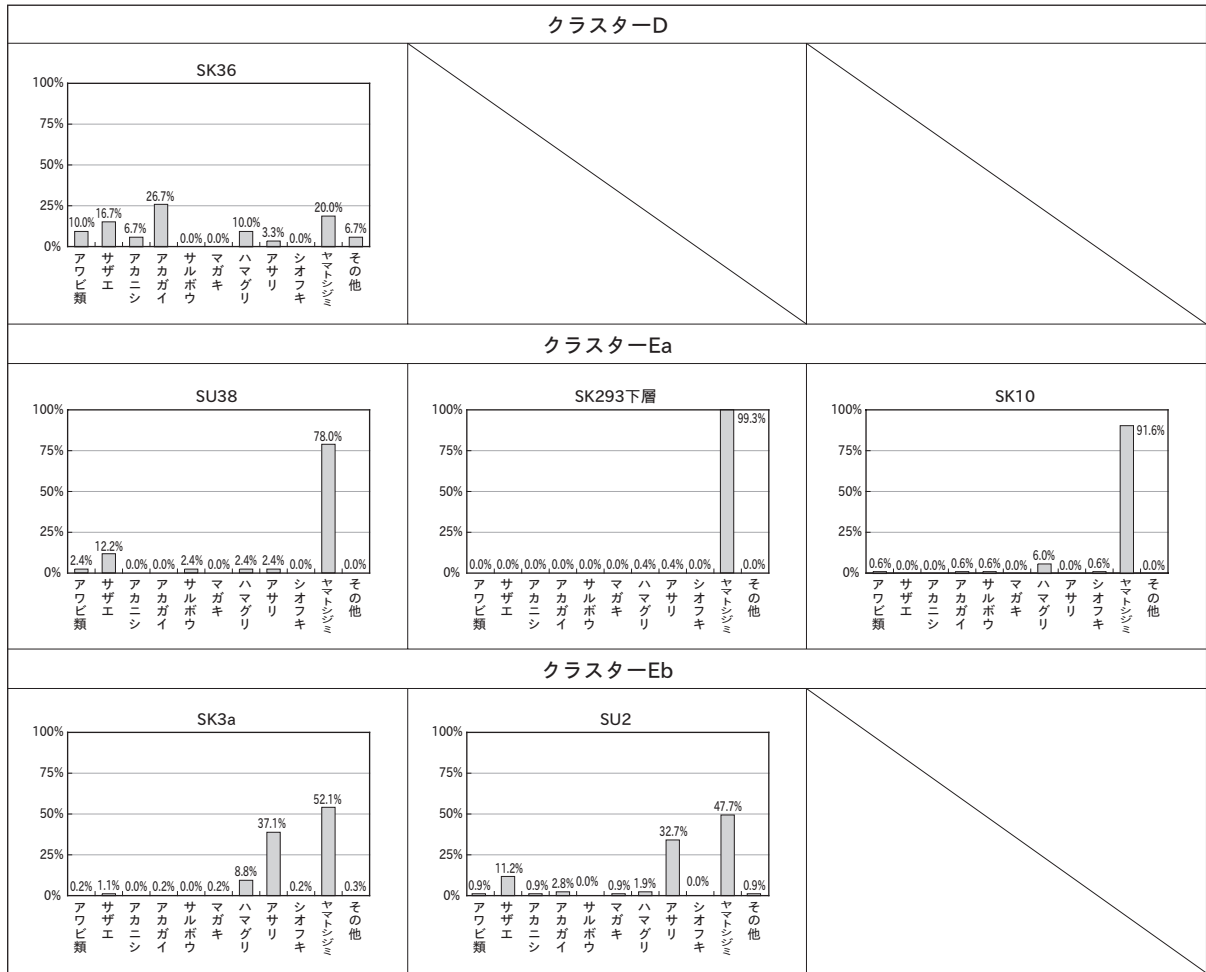


図2 遺構別貝類遺体組成グラフ (3)

でC₁区に属するSK297である。SK245とSK297が同じ区画に属するものの、時期において共通性は見出せなかった。

クラスターC (図2 (2))

ハマグリを主体とする遺構が含まれる。本クラスターに含まれる遺構は、15基と他のクラスターに比べて多い。区画ごとに見ると、B区とC₁区がそれぞれ2基であるのに対して、A区が5基、C₂区が6基と2つの区画に集中する傾向を示す。特にC₂区は、本クラスターに分類される遺構しか含まれていない。一方、時期について、傾向は見出せない。なお、このクラスターは、ハマグリ出土傾向の違いによって2つのサブクラスターに分かれる。以下にサブクラスターごとに説明を加える。

サブクラスターCa ハマグリとヤマトシジミを主体とし、この2種は同程度出土している。また、ほとんどの遺構においてこの2種で80%以上を占める。その他の分類群の出土率は10%を超えない。この2種で80%を超えない遺構は、SK188とSK337であり、SK188はアサリが22.2%、SK337はサザエが13.8%出土し、それぞれハマグリとヤマトシジミについて多く、また、それ以外の種は、10%を超えない。本サブクラスターに属する遺構は合計6基である。それぞれ所属する区画・時期は、以下のとおりである。

- A 区：SK54 (時期不明)
- B 区：SK140、SU392 (ともに19世紀中ごろ)
- C₁ 区：SK188 (19世紀前半～中ごろ)

C₂区：SU335（18世紀前半）・SK337（19世紀前半）

なお、B区の2基の遺構は時期が同じ、C₂区の2基の遺構は距離的に隣接している。

サブクラスター Cb ハマグリが主体で75%以上出土している。その他の分類群の出土率は5%を超えない。本サブクラスターに属する遺構は10基で、クラスターおよびサブクラスターの中で最も多い。なお、それぞれ所属する区画・時期は、以下のとおりである。

A区：SK3、SK3pit3（ともに19世紀中ごろ）、SK8、SK16（ともに19世紀前半）、SU18（18世紀後半～19世紀初め）

C₁区：SK398（19世紀中ごろ）

C₂区：SK311、SU389（ともに19世紀前半）、SK338（19世紀前半～中ごろ）、SK340（時期不明）

つまり、本サブクラスターに分類された遺構は、A区とC₂区に集中している。また、A区はそれぞれ時期が異なるのに対して、C₂区は時期不明のSK340を除くとほぼ19世紀前半に属する。

クラスター D（図2（2））

本クラスターに属する遺構はA区のSK36のみである。他のクラスターに属する遺構において1種から2種の出土率が極めて高いのに対して、SK36は、30%を超える種はない。特にアカガイ（26.7%）、サザエ（16.7%）、アワビ類（10.0%）など大形のものが目立つ。しかし、SK36は、地点内での出土率が0.7%で、分析に用いたもののなかでも資料数が比較的少ないことや、分析から除外された0.5%未満の遺構のほとんどが、本遺構と同様に大形貝類のみ、もしくは、多く含むことから、資料の取り上げ方法の問題を考慮に入れる必要がある。

なお、SK36は、ヤマトシジミの出土率が20.0%とアカガイについて多いことから、比較的、隣接するSU38（サブクラスターEa）と似た傾向を示しているともいえる。

クラスター E（図2（2））

ヤマトシジミが主体である。本クラスターに含まれる遺構5基の内、C₁区に属するSK293下層を除く4基すべてがA区に属する。さらに、A区の中において、これらの遺構は、SU38を除く3基がSK3aを中心に北東に集中している。なお、このクラスターは、ヤマトシジミの出土傾向の違いによって2つのサブクラスターに分かれる。以下にサブクラスターごとに説明を加える。

クラスター Ea ヤマトシジミを主体とし、その出土率が75%以上を占める。その他の分類群はSU38のサザエ（12.2%）を除いて、5%に満たない。本サブクラスターに属する遺構は、A区に属するSK10（19世紀前半）とSU38（18～19世紀）、さらに本クラスターのなかで唯一A区以外に属すSK293下層（C₁区：19世紀中ごろ）の3基である。なお、A区に属する2基の遺構間は、距離が離れている。また、SK10はサブクラスターEbに属するSK3aと切り合い関係にある。時期は、SK3aが19世紀中ごろで、SK10のほうが古い。

クラスター Eb ヤマトシジミが主体で、50%前後出土しており、ついで、アサリが35%前後出土している。本サブクラスターに属するのは、SU2（19世紀後半）とSK3a（19世紀中ごろ）の2基とともにA区に属する。時期は異なるものの、この2基は隣接している。

区画ごとの貝種組成の様相（図3）

5つのクラスターの内、クラスターAやクラスターDなど特異な傾向を示すものを除くと、ハマグリ、アサリ、ヤマトシジミなど日常の生活のなかで頻繁に食されたものと想定される主要な3種の出土率の違いによって、大きく3つに分類された。これらの傾向の違いは、本調査地点においては、ほとんど18世紀後半から19世紀後半の短い期間のもののみであったこともあり、時期的な違いは

抽出することが出来なかった。一方で、4つの区画それぞれで異なる傾向を抽出することが出来た。次に区画ごとにその様相を概観する。

A 区

ヤマトシジミを主体とする遺構（クラスターE）が集中していることが特徴の一つといえる。また、その他に、ハマグリが飛びぬけて多く出土する遺構（サブクラスターCb）が目立つのも特徴の一つといえる。一方で、アサリのみを主体とする遺構はなく、ヤマトシジミとハマグリ of いずれかがともに主体種となる。それらの遺構においては、アサリの出土率がこれらの2種の出土率を上回ることはない。また、大形貝類が他の区画よりも多く出土している。まず、サザエとアカガイは、他の区画よりも多く、ともに調査地点全体の5割近くが出土している。また、アワビ類も、最も多く出土しているC2区について多く調査地点全体の36%が出土している。

B 区

4つの区画のなかで分析に用いることのできた遺構がもっとも少なく、4基である。そのうちSU63は、マガキを主体とした特殊な組成を示す（クラスターA）。その他は、SU176がアサリを主体とする（サブクラスターBa）のに対して、SK140とSU392は、ハマグリとヤマトシジミを主体とする（サブクラスターCa）。特にSK140とSU392は、クラスター分析において分析に用いた遺構間で最も結合距離が短いことから、他の遺構間に比べて組成が極めて似ていることが示されている。時期がともに19世紀中ごろであることから、何かしらの関連性が窺える。なお、SU63が18世紀後半、SU176が19世紀前半であり、サブクラスターCaに属する2基の所属時期より古い。

C₁ 区

A区のほかに唯一、分析に用いた遺構の中で、ヤマトシジミを主体とするものを有する区画である。その遺構はSK293下層である（サブクラスターEa）。なお、「SK293」とされるサンプルは、アサリを主体とするサブクラスターBaに分類されている。ともに主体とする貝種が75%を超え、さらに、その他の貝種が10%を超えないことから、「SK293」とされるサンプルが上層と仮定すると、上層と下層で全く異なる組成を示していることになる。B区のSU63と同様にマガキを主体とした特殊な組成を示しているSK292（クラスターA）を有するほかは、ほとんど、アサリかハマグリ、もしくは両種を主体とする遺構が占めている。なお、時期的な傾向は見られない。

C₂ 区

ハマグリを主体とするクラスターCに分類される遺構のみである。しかし、分析に用いられていないSK399よりヤマトシジミのみ13個体出土している。また、SK411からはアワビ類が11個体出土し、その他にサザエとヤマトシジミが1個体ずつ、SK415からはサザエが6個体出土し、その他にハマグリが1個体しか出土していないなど、ほとんど1つの分類群のみが大量に廃棄される遺構が目立つ。その傾向は、分析に用いたもののなかにも見ることができる。つまり、サブクラスターCbに分類されているSK311とSK340は、ともにハマグリが35個体以上出土している他は、アサリが1個体しか出土していないが、その傾向は、他の遺構においても同様で、ほとんどの場合、1つから2つの分類群のみが極端に多く出土する傾向を示している。このような、分類群が限定される傾向を示す要因として、各遺構に含まれるそれらが、1回もしくは比較的少ない回数 of 廃棄行為によって形成されたものであることが推測される。C₂区は、4箇所の区画の中で最も貝類遺体の出土量が少ないことから以上の可能性が指摘できる。また、SK311が北側にあるほかは、区画の南東側に貝類が多く廃棄された遺構が集まっている。なお、時期的な傾向は見られない。

第2節 工学部14号館地点出土の貝類遺体

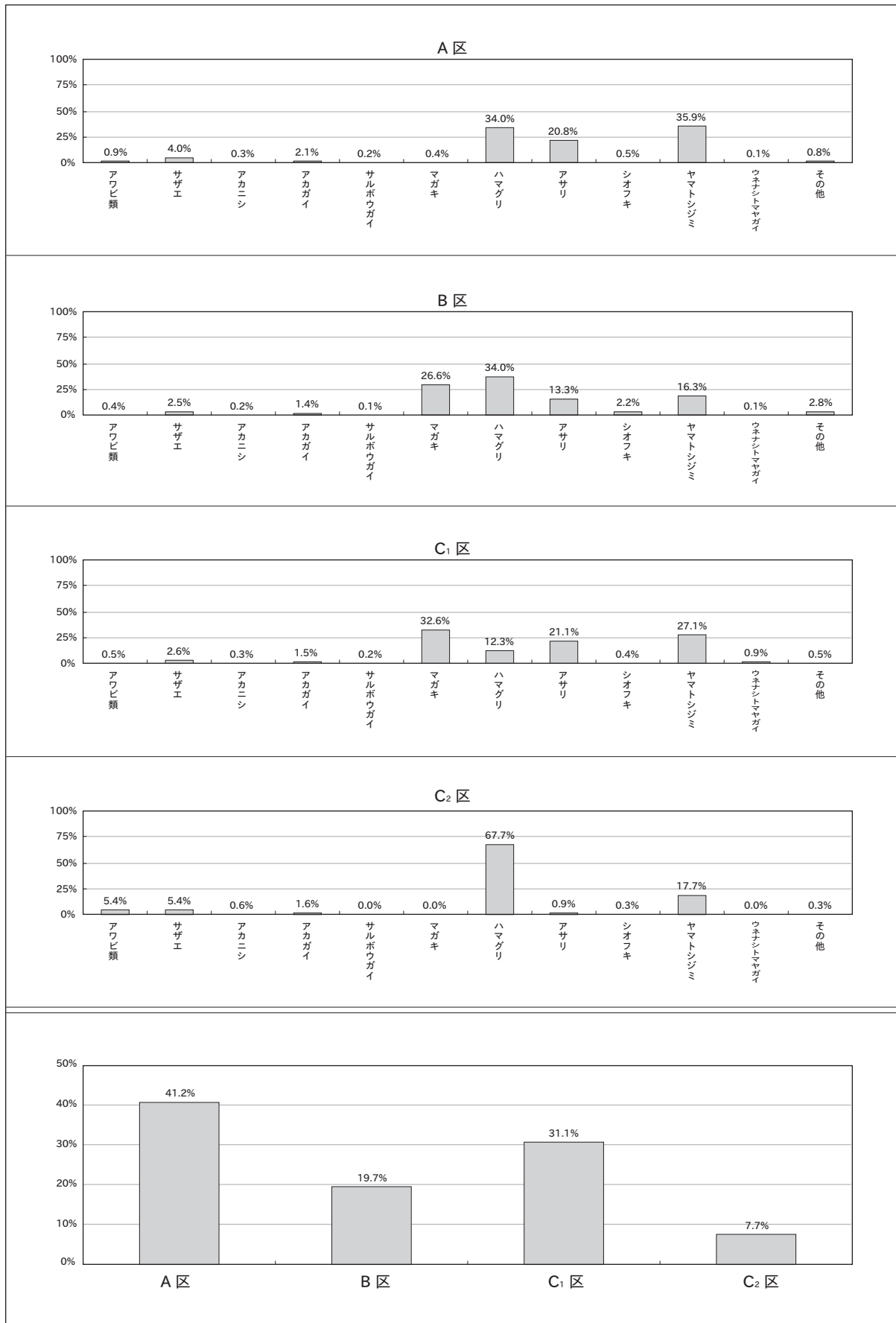


図3 調査区別貝類遺体組成グラフおよび出土率比較グラフ (2)

2. 主要貝種のサイズ分析 (表3~6、図4~7)

次に主要貝種のサイズについて、時期・空間両側面から調査地点内の傾向を概観する。

分析方法

可能なものすべての貝種について、計測作業をおこなった(計測定義は、本章第3節を参照)。計測結果は、CD-ROM表4~10を参照されたい。そのうち、計測することのできた資料が多かったハマグリ、アサリ、ヤマトシジミ・マガキについては、記述統計量とヒストグラムによって、遺構ごとにサイズ組成の傾向を示した(図5~7、記述統計量はCD-ROM表1~3、なおマガキはともに表6)。さらに、以上の4種の内、マガキを除く主要3種については、遺構間の殻長における平均値の差の統計学的な有意性について最小有意差法を用いて検定をおこなった(表3~5)。その際に、ハマグリに関しては、破損が激しく、主要部位である殻長がほとんど計測できない遺構もあることから、回帰・相関分析を用いて外靱帯溝長から殻長を推定する為の式を導出した(図4)。分析の結果、ダービンワトソン比が、1.86で多次関数よりも2に近いことから、1次直線回帰がサイズ推定に有効であると判断された。また、決定係数をみると、0.96と非常に高く、この式の精度が非常に高いことが確認された。さらに、分散分析の結果をみても1%水準で有意であった。したがって、この式によって、外靱帯溝長から殻長を推定することが、比較的有効であることが示された。なお、導出された式は、 y (殻長) = $3.12 \times x$ (外靱帯溝長) + 6.18である。以上の式によって推定された殻長は、「推定殻長」として報告する。

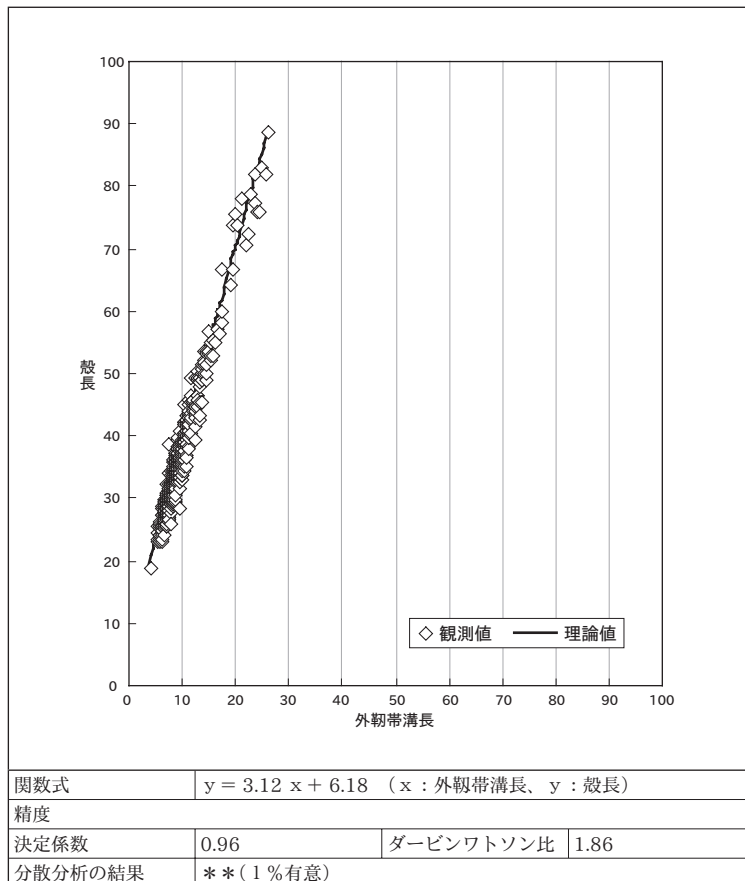


図4 ハマグリ の殻長と外靱帯溝長間における一次回帰分析の結果 (単位: mm)

| 遺構 | 時期 | 平均値 | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | | | |
|---------|--------|-------|-------|-------|-------|---------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | | SK188 | SU63 | SU176 | SK3pit2 | SK292 | SK3a | SK297 | SU2 | SK293 |
| SK188 | 19c前～中 | 37.70 | 37.70 | 34.87 | 34.24 | 31.98 | 31.75 | 29.84 | 29.70 | 27.52 | 26.78 |
| SU63 | 18c後 | 34.87 | n.s. | n.s. | n.s. | * | n.s. | ** | ** | ** | ** |
| SU176 | 19c前 | 34.24 | ** | n.s. | ** | * | ** | ** | ** | ** | ** |
| SK3pit2 | 19c中 | 31.98 | ** | * | ** | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | ** | ** |
| SK292 | 19c前～中 | 31.75 | ** | n.s. | * | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | * | ** |
| SK3a | 19c中 | 29.84 | ** | ** | ** | ** | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | ** |
| SK297 | 19c後 | 29.70 | ** | ** | ** | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | * |
| SU2 | 19c後 | 27.52 | ** | ** | ** | ** | * | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. |
| SK293 | 19c中 | 26.78 | ** | ** | ** | ** | ** | ** | * | n.s. | n.s. |

** : 1%有意, * : 5%有意, n.s. : 有意差無 / 平均値単位 : mm / 反転している遺構 : 表7 (ハマグリ)において検定がおこなわれているもの、①～⑥ : 表7の番号と対応

表3 アサリの殻長サイズに関する遺構間の平均値の差の検定結果 (最小有意差法)

分析の結果と傾向

分析の結果、ハマグリ、ヤマトシジミはともに、時期的にも空間的にも何かしらの傾向を見出すことは出来なかった。それに対して、アサリは、時期がより新しいもののほうが、平均値が小さくなる傾向を示した。以上のアサリのサイズ分析に用いられた遺構出土のハマグリとヤマトシジミのデータのみ抽出すると、ハマグリは、アサリとほぼ同様に、時期がより新しいもののほうが小さくなる傾向がみられる。それに対して、ヤマトシジミは、特に時期的な傾向を見出すことは出来なかった。なお、ハマグリについて、殻長45mm未満のもの(中小型ハマグリ)を対象に再分析をおこなった結果、全てのサイズで分析をおこなった際と同様に、時空間ともに明確に傾向が抽出できなかったものの、18世紀前半に属する遺構2基ともに平均殻長32mm未満の遺構のものよりも有意に大きく、18世紀後半から19世紀初頭に属するSU188も平均殻長30mm未満の遺構よりも有意に大きいことが示された。以上と同様の結果は、新宿区内の資料を中心に分析した際(阿部2004)や新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡(阿部2006)内において分析をした際にも見られた。しかし、本調査地点における資料の取り上げ方法の問題や、結果として明確な変化が抽出されなかったことから、本報告では詳細な議論は控え、分析結果から見られた傾向を提示するに留める。

さて、マガキを主体とするSU63においてハマグリが平均59.8mm、アサリが平均34.9mmとサイズがともに本地点のなかで、きわめて大きいことが示された。特にハマグリは、25mm台のものが1点含まれるほかは40mm以上と大形のものである。平均値の差の検定の結果でも、SK50(平均68.9mm)と差の有意性が認められない他は、すべての遺構のものよりも有意に大きいことが示されている(表4)。マガキを主体とする遺構から出土するハマグリやアサリのサイズが比較的大きいという傾向は、本遺跡山上会館地点12号遺構、69号遺構(金子1990b)、新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡第5号遺構(第1次調査:阿部2002)、第81号遺構、第82号遺構(ともに第2次調査:阿部2006)などにおいても見ることができる。一方、もう一つのマガキを主体とするSK292で、SU63と異なる傾向を示す。アサリは平均31.8mmと本調査地点内だけではなく御府内遺跡出土資料のなかでも比較的、平均的な値を示している。ハマグリにいたっては、26.7mmと極めて小さいものが1点出土しているのみである。しかし、計数および計測対象であるハマグリがその1点しか出土していないことや、破片として分類されているハマグリのサイズが殻長50mm以上と予想される大形のものであること、さらに付け加えるなら、SU63においても、25mm台のサイズのもものが1点含まれていることから必ずしも、それをもって特異な例として提示することはできない。なお、SK292より出土しているヤマトシジミの平均値は23.7mmで、区画内では比較的サイズの大きいものである。マガキを主体とした遺構から出土するハマグリやアサリが大形である要因については、次項において

| 遺構 | 時期 | 平均値 | SU335 | SK359 | SK54 | SU2 | SK292 | SU389 | SK188 | SK16 | SK140 | SK293 | SK36 | SK3a | SK337 | SK399 | SU392 | SK10 | SK3pit2 |
|---------|---------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| | | | 26.20 | 25.44 | 25.14 | 24.98 | 23.73 | 23.54 | 22.06 | 21.64 | 21.55 | 21.01 | 21.01 | 20.89 | 20.75 | 20.74 | 20.53 | 19.44 | 18.43 |
| SU335 | 18c 前 | 26.20 | | n.s. | n.s. | n.s. | ** | n.s. | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** |
| SK359 | 19c 中 | 25.44 | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | * | n.s. | ** | ** | * | ** | ** | ** | ** | ** | ** |
| SK54 | (不明) | 25.14 | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | ** | * | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** |
| SU2 | 19c 後 | 24.98 | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | ** | * | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** |
| SK292 | 19c 前~中 | 23.73 | ** | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | ** | ** | * | ** | ** | ** | ** | ** | ** |
| SU389 | 19c 前 | 23.54 | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | * |
| SK188 | 19c 前~中 | 22.06 | ** | * | ** | ** | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | * | ** | * |
| SK16 | 19c 前 | 21.64 | ** | n.s. | * | * | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. |
| SK140 | 19c 中 | 21.55 | ** | ** | ** | ** | ** | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | ** | n.s. |
| SK293 | 19c 中 | 21.01 | ** | ** | ** | ** | ** | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | ** | n.s. |
| SK36 | (不明) | 21.01 | ** | * | ** | ** | * | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. |
| SK3a | 19c 中 | 20.89 | ** | ** | ** | ** | ** | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | ** | n.s. |
| SK337 | 19c 前 | 20.75 | ** | ** | ** | ** | ** | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. |
| SK399 | (不明) | 20.74 | ** | ** | ** | ** | ** | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | | n.s. | n.s. | n.s. |
| SU392 | 19c 中 | 20.53 | ** | ** | ** | ** | ** | n.s. | * | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | * | n.s. |
| SK10 | 19c 前 | 19.44 | ** | ** | ** | ** | ** | ** | ** | n.s. | ** | ** | n.s. | ** | n.s. | n.s. | * | n.s. | n.s. |
| SK3pit2 | 19c 中 | 18.43 | ** | ** | ** | ** | ** | * | * | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. | n.s. |

*: 1%有意, *: 5%有意, n.s.: 有意差無 / 平均値単位: mm

表5 ヤマトシジミの殻長サイズに関する遺構間の平均値の差の検定結果(最小有意差法)

貝種組成分析の結果も含めて論じる。

3. 御府内遺跡におけるマガキの出土傾向と当時の採集方法・流通過程との関連性

本調査地点からマガキを主体とする遺構が2基抽出された(クラスターA)。この2基の遺構は、単にマガキを主体とするだけでなく、貝種組成においては他の遺構のものよりもバラエティがあり、且つ、その貝種もカキ礁に着生するウネナシトマヤガイをはじめ、イボキサゴやウミニナ類など御府内においては食料品として流通することのなかったものも多く含まれている。また、SU63はハマグリやアサリのサイズが、他の遺構出土のものよりも大きいことが示されている。

さて近世江戸湾においてマガキは、蛸桁網や蛸挟などでカキ礁の一部を破壊して、それをそのまま採集する方法がとられていた。つまり、採集の方法から、カキ礁に着生するウネナシトマヤガイやカキ礁およびその周辺に生息する貝種が採集の際に混獲された可能性はきわめて高い。イボキサゴやウミニナ類などがマガキとともに採集されてそのまま持ち込まれたものであると仮定するならば、採集後、採集されたままの状態、消費地である本地点に持ち込まれた可能性も推測される。

さて、以上のような採集方法と流通過程を前提とした場合、マガキを主体とするこれらの遺構出土のハマグリやアサリも、それら自体が食物残渣ではなく、イボキサゴやウミニナ類と同様にマガキとともに採集され、そのまま持ち込まれたものである可能性が推測される。そして、アサリとハマグリの殻が他の遺構のものよりもサイズが大きい要因として、これらがカキ礁内に生息していたことによるものとも推測される。カキ礁に生息することでアサリやハマグリは採集されづらく、その為、採集対象にはならず十分に成長することが出来たことにより、極めて大形に成長することができたと推測される。また、カキ礁によって、減耗や活力低下の要因となる「海底砂の過剰な流動」や海水温の変動(千葉県2004)からも保護されたことによるものとも推測される。その他に、大形のもの、死んで殻のみの状態のものであった可能性なども想定される。なお、ヤマトシジミも感潮域生息種であることから、カキ礁内もしくはその近辺に生息していたものであることも想定される。

さて、このようなマガキを主体に貝殻が廃棄されている事例は、本遺跡内においても法学部4号館地点D11-1号溝(金子1990a)、医学部附属病院中央診療棟建設地点E34-2号遺構(新美1990)、山上会館地点12号遺構、34号遺構、69号遺構(金子1990b)がある。いずれも、大縄地である本

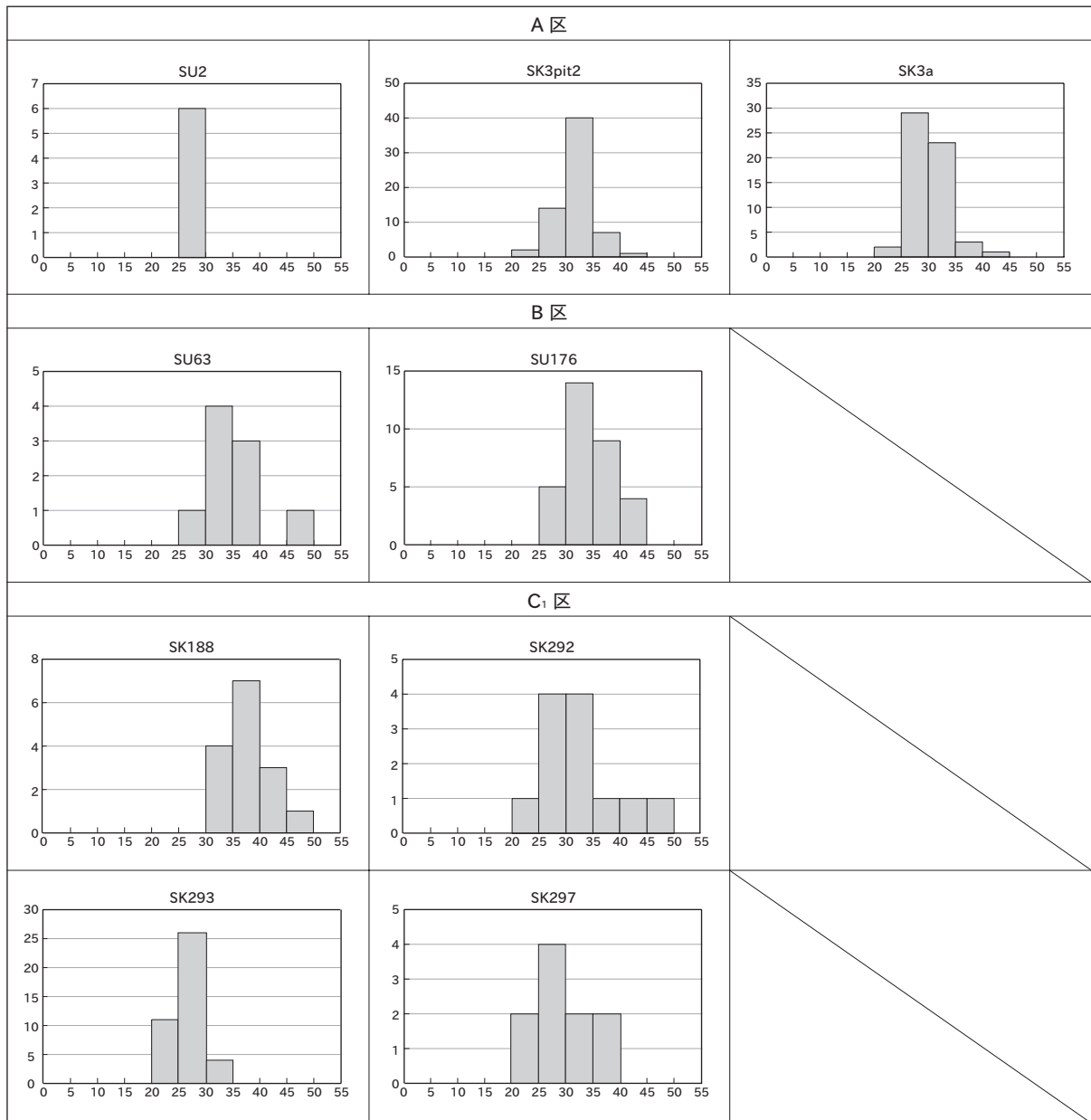


図5 アサリの殻長に関するヒストグラム（縦軸：個体数、横軸：サイズ（単位：mm））

第2節 工学部14号館地点出土の貝類遺体

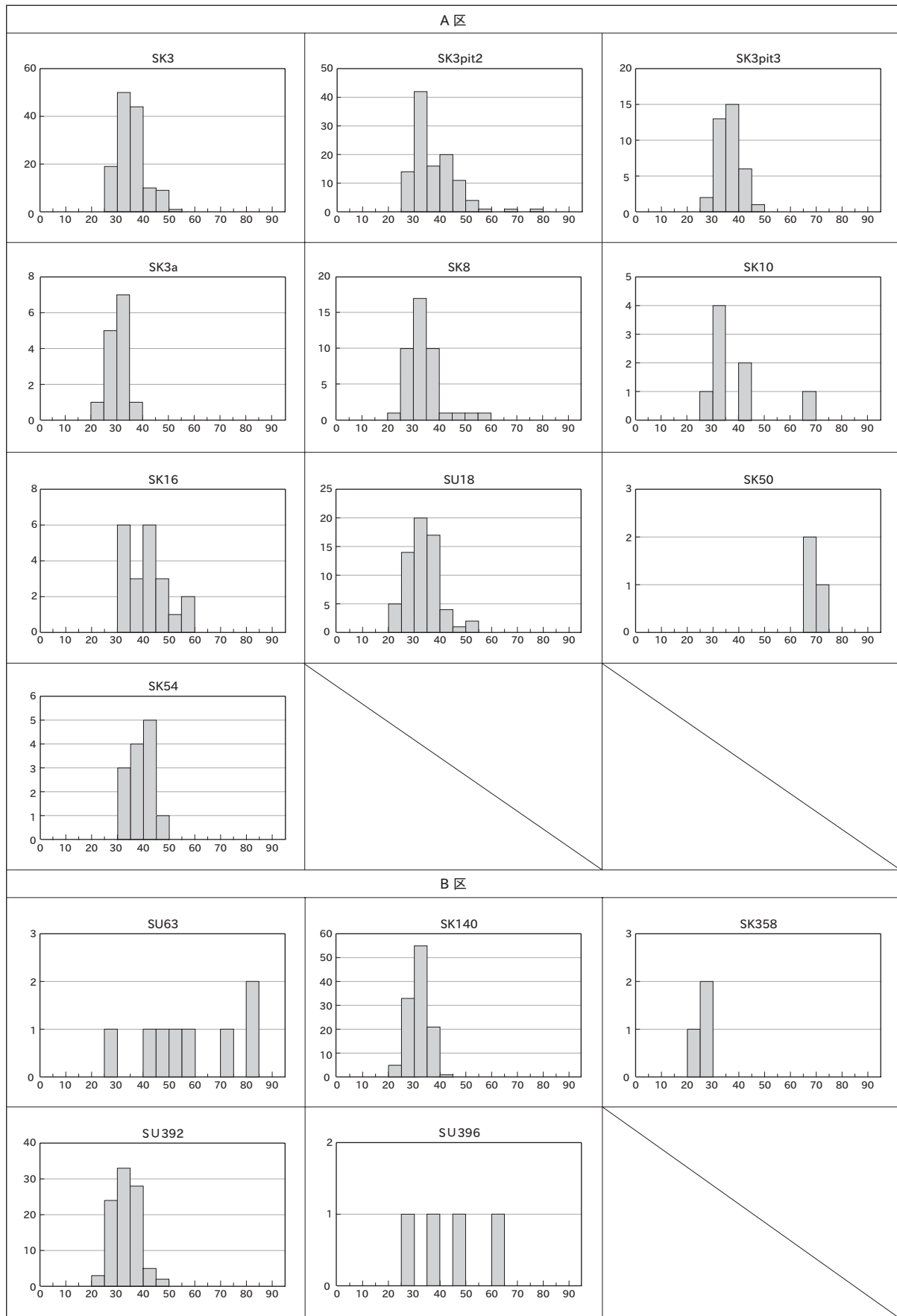


図6 ハマグリノ殻長に関するヒストグラム(1)(縦軸:個体数、横軸:サイズ(単位:mm))

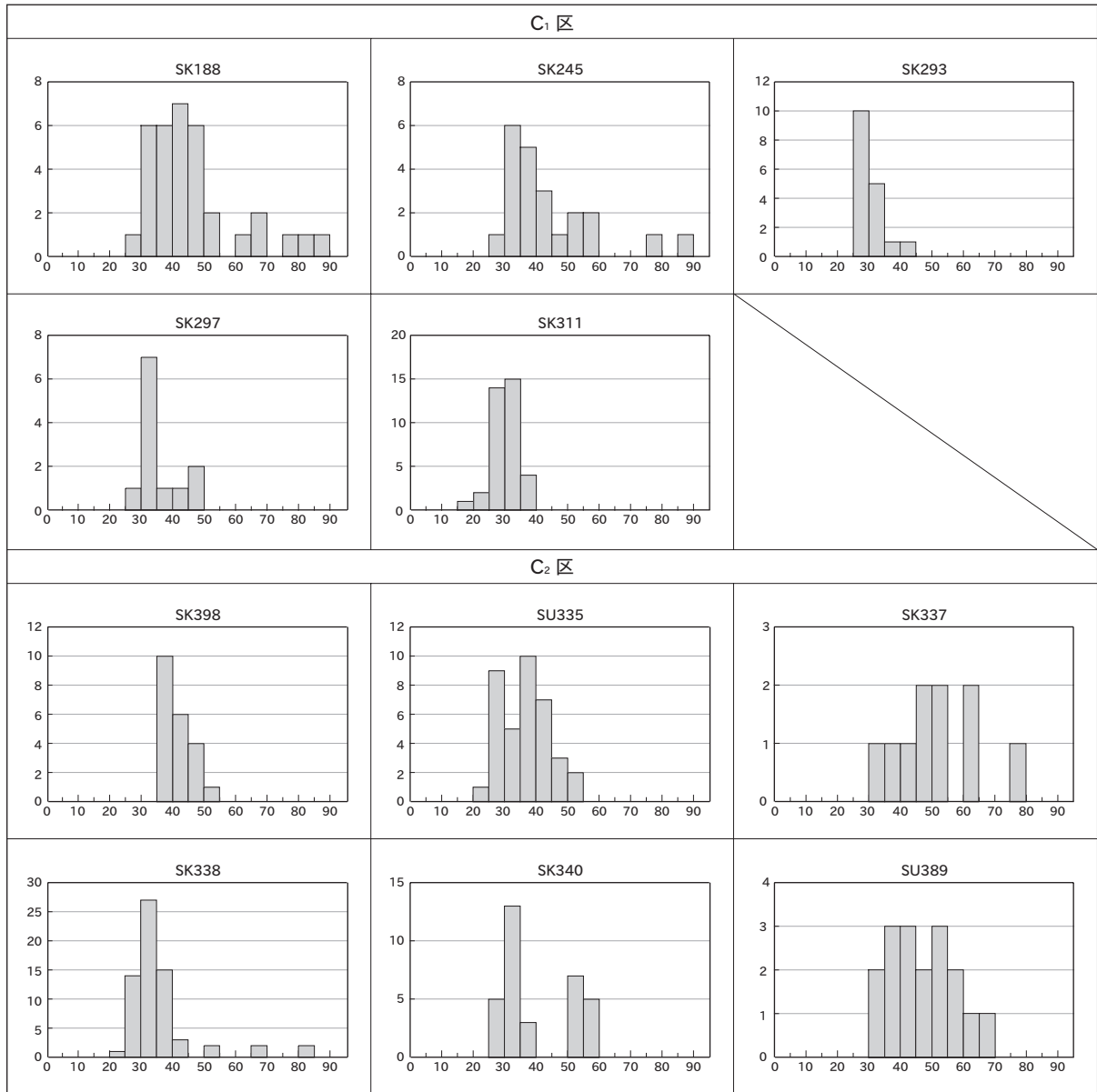


図6 ハマグリノ殻長に関するヒストグラム(2)(縦軸:個体数、横軸:サイズ(単位:mm))

調査地点とは異なり、加賀藩上屋敷内に属する。その内、山上会館地点 69 号遺構（以下、“山上 69 号遺構”と略す）のものは、マガキの一部に漆喰が付着していることや大量の釘が共伴していることから、「蠣殻葺」に使用したものである可能性が指摘されている（西田 1990）。しかし、山上 69 号遺構と本調査地点の 2 基の遺構も含む他の事例において、マガキが主体であることや共伴するハマグリが大形であるなどの共通点はいくつか見られるものの、山上 69 号遺構は、貝種が 7 分類群に限られていることや、ウネナシトマヤガイやイボキサゴ、ウミノナ類などが 1 点も含まれていないなどの異なる点がある。また、マガキの出土量も他の遺構が 1,000 個体超えないのに対して、山上 69 号遺構は推定で 20,000 個体と非常に多い。以上のことから、山上 69 号遺構のものは、特殊な事例と考えるべきである。

近世においてマガキの殻は、「蠣殻葺」の他に漆喰の材料となる「蠣殻灰」や薬、胡粉など様々なものに利用されている。つまり、食物残渣として廃棄された可能性の他にも、これらの材料として集めたものの一部を廃棄したものである可能性も含めて今後、検討していく必要があると考える。

| 遺構 | 基本統計量 | | | ヒストグラム・殻高 |
|------|-------|--------|-------|-----------|
| | 項目 | 殻高 | 殻長 | |
| SU63 | サンプル数 | 26 | 24 | |
| | 平均値 | 52.85 | 30.92 | |
| | 標準偏差 | 14.93 | 5.28 | |
| | 分散 | 222.75 | 27.83 | |
| | 範囲 | 64.04 | 19.33 | |
| | 最小値 | 20.35 | 22.74 | |
| | 最大値 | 84.39 | 42.07 | |
| | 中央値 | 52.92 | 30.32 | |
| | 尖度 | -0.15 | -0.63 | |
| | 歪度 | 0.06 | 0.26 | |
| | 標準誤差 | 2.99 | 1.10 | |
| | 変動係数 | 0.29 | 0.17 | |
| | SK292 | サンプル数 | 94 | |
| 平均値 | | 48.30 | 26.78 | |
| 標準偏差 | | 19.54 | 8.88 | |
| 分散 | | 381.75 | 78.93 | |
| 範囲 | | 94.31 | 39.21 | |
| 最小値 | | 13.14 | 8.55 | |
| 最大値 | | 107.45 | 47.76 | |
| 中央値 | | 48.53 | 27.04 | |
| 尖度 | | -0.27 | -0.54 | |
| 歪度 | | 0.39 | 0.12 | |
| 標準誤差 | | 2.03 | 0.91 | |
| 変動係数 | | 0.41 | 0.33 | |
| SK50 | | 計測値 | 55.38 | 38.78 |

表6 マガキ（右殻）のサイズに関する記述統計量およびヒストグラム（値の単位：mm）

まとめ

他の御府内遺跡出土の貝類遺体でみられた傾向が本地点でも抽出された。傾向をまとめると、以下の通りである。

- ①アサリとハマグリに関して時代が新しくなるにつれて小形のものが多く含まれる。
- ②マガキを主体とする遺構内には、ウネナシトマガイやイボキサゴなど食料品として流通したものではなく、マガキを採集した際に混獲され、それらとともに持ち込まれたと考えられるものが多く含まれる。
- ③マガキを主体とする遺構より出土するアサリやハマグリが比較的大形のものが多く含まれる。

それらの傾向は、当時の漁撈活動における社会的な背景、採集方法やその採集物の流通の過程に見られる選別方法などが反映しているものと推測される。また、組成において、本地点内で明確な时期的な違いを見ることができなかったが、区画ごとの違いが抽出された。これらの違いが区画ごとに居住していた人々の何に反映されているものであるかは、他の動物遺体や人工遺物の出土状況、文献史料による調査と併せて検討するべきである。しかし、現場での取り上げ方法などの問題から、これらの資料が、本地点における貝類遺体の実態を必ずしも反映しているとは言い切れない部分が多々ある。

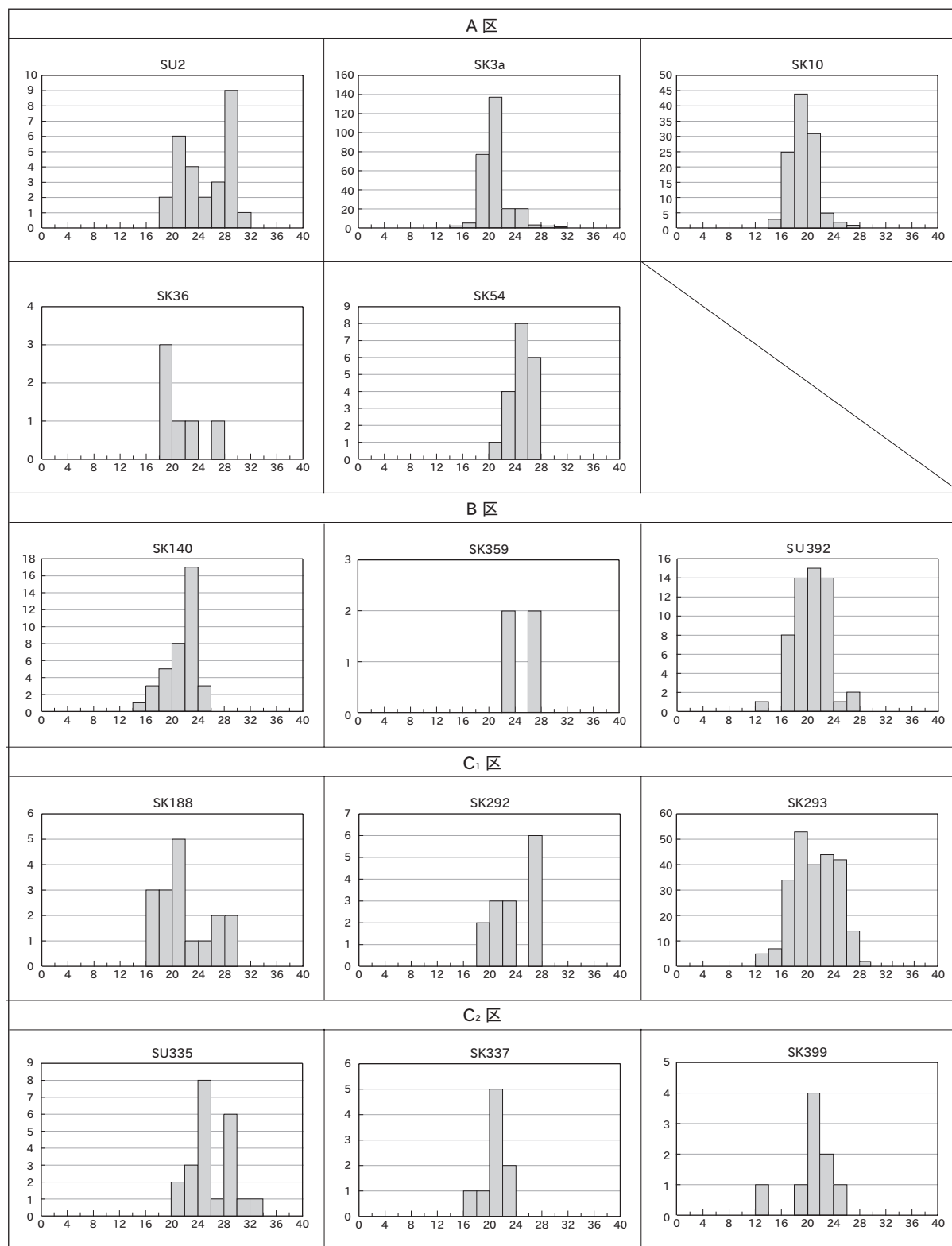


図7 ヤマトシジミの殻長に関するヒストグラム（縦軸：個体数、横軸：サイズ（単位：mm））

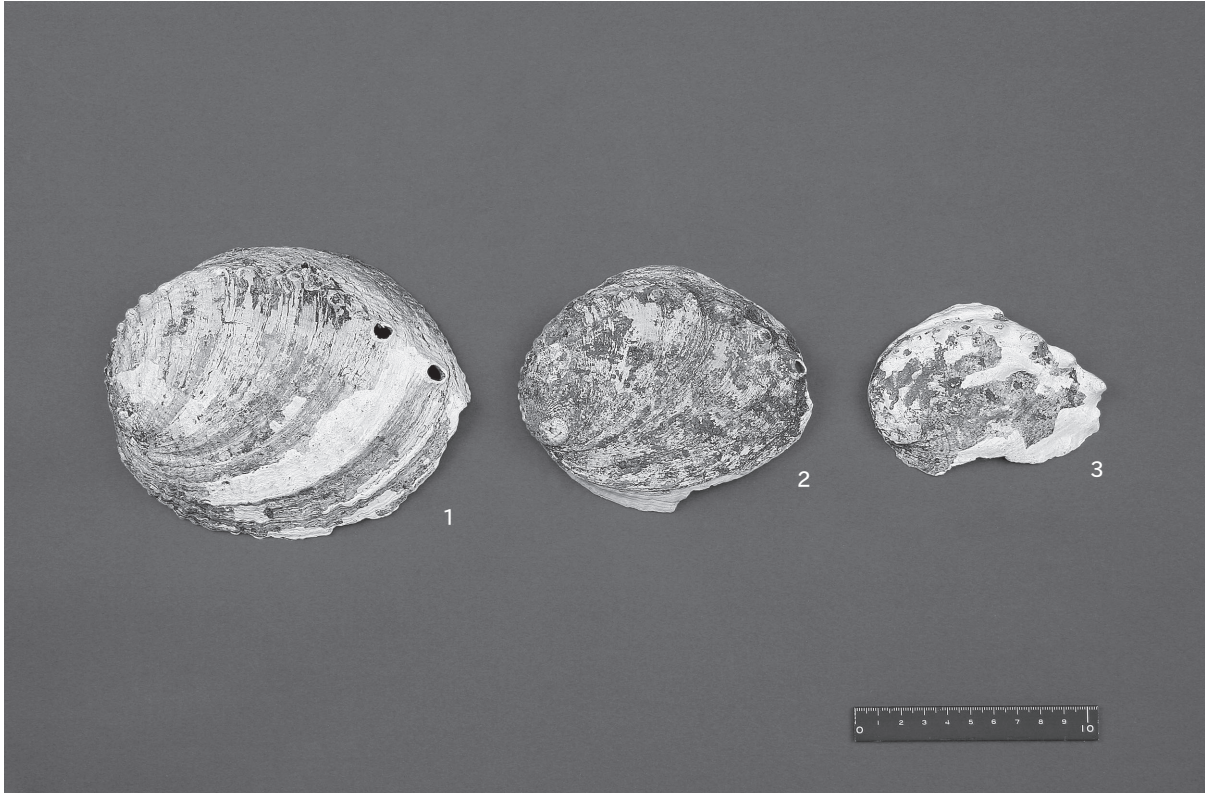
CD-ROM に収録したデータ

サイズに関する計測データおよび記述統計量は CD-ROM に収録した。そのデータは、以下のとおりである。

- 表1 ハマグリのサイズに関する記述統計量
- 表2 アサリのサイズに関する記述統計量
- 表3 ヤマトシジミのサイズに関する記述統計量
- 表4 巻貝に関する計測値データ
- 表5 アカガイに関する計測値データ
- 表6 ハマグりに関する計測値データ
- 表7 アサリに関する計測値データ
- 表8 ヤマトシジミに関する計測値データ
- 表9 マガキ(右殻)に関する計測値データ
- 表10 その他の二枚貝類に関する計測値データ

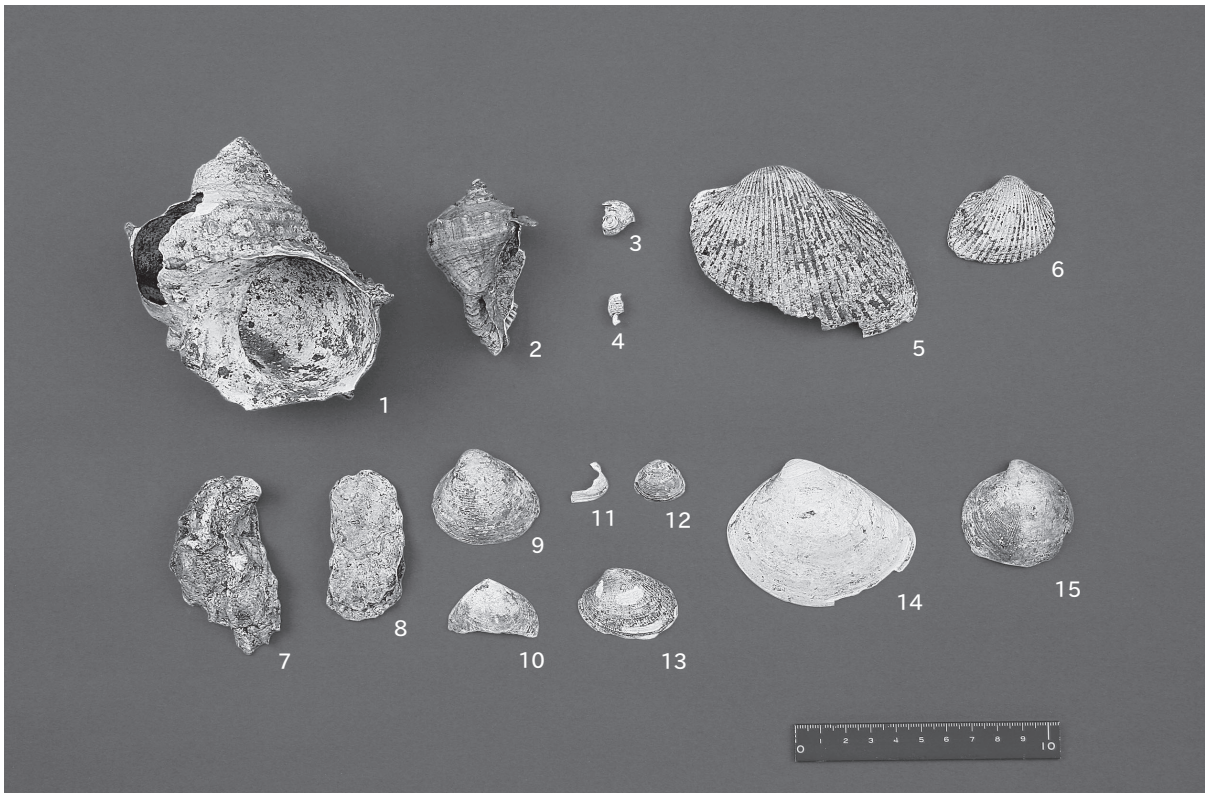
[参考文献]

- 阿部常樹 2002 「第5号・第300号出土の貝類遺体」『市谷砂土原町三丁目遺跡』p.79-80 財団法人新宿区生涯学習財団
- 阿部常樹 2004 「19世紀における江戸府内遺跡出土の主要貝類遺体の大きさの変化とその歴史的背景」『國學院大學考古学資料館紀要』第20輯 p.1-19 國學院大學考古学資料館
- 阿部常樹 2006 「市谷砂土原町三丁目遺跡(第2次調査)出土の動物遺体」『市谷砂土原町三丁目遺跡Ⅱ』(p.46-60) 大成エンジニアリング株式会社
- 金子浩昌 1990a 「動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』p.482-526 東京大学遺跡調査室
- 金子浩昌 1990b 「山上会館・御殿下記念館出土の動物遺体」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』p.244-361 東京大学埋蔵文化財調査室
- 篠田 統 1996 「かいるい 貝類」『図説江戸時代食生活事典』p.51-52 雄山閣
- 筑紫敏夫 2000 「海辺の村」『千葉県の歴史』p.218-228 山川出版社
- 千葉県 2004 『平成15年度三番瀬自然環境総合解析「三番瀬の現状」報告書』
- 新美倫子 1990 「医学部附属病院地点出土の動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点 - 医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点 -』p.912-922 東京大学遺跡調査室
- 西田泰民 1990 「遺構から出土した蛎殻について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点第1分冊 山上会館地点の調査』p.200-202 東京大学埋蔵文化財調査室
- 埴原和郎 1992 『歯と人類学の話』医歯薬出版



P.L.1 C₂ 区 SK411 より出土したアワビ類

1. メガイアワビ 2. クロアワビ 3. マダカアワビ



P.L.2 B 区 SU63 より出土した貝類遺体

1. サザエ 2. アカニシ 3. イボキサゴ 4. ウミナナ類 5. アカガイ 6. サルボウガイ 7. マガキ・左殻 8. マガキ・右殻 9. シオフキ
10. イチョウシラトリガイ 11. ウネナシトマヤガイ 12. ヤマトシジミ 13. アサリ 14. ハマグリ 15. オキシジミ (5・9・12～15は左殻、
6・10・11は右殻)

第3節 貝類遺体のサイズに関する計測方法

阿部 常樹

はじめに

定量データを提示するに際して、その詳細な計測方法の定義の提示は、データの相互互換など研究者間のデータの共有の意味でも重要である。実際に、ほとんどの動物遺体において特にサイズの計測方法の定義は、詳細に示されており (Driesch 1976、斉藤 1963、茂原 1986 など)、報告をおこなう際も基準とする定義の提示がされている。しかし、貝類遺体のサイズに関する計測方法の定義は、特に考古学において提示されることは少ない。その背景には、他の動物遺体と比べて形態が単純であることと、動物考古学研究者間において、それらの定義を共有しているという暗黙の前提があることによる。しかし、論文や報告において図示されている場合に、計測方法の定義が曖昧なものも散見される。また、埋蔵文化財調査において貝類遺体は、他の動物遺体と異なり、専門家以外の者によって整理・分析がおこなわれることが多い。その場合、計測方法の定義が明確でないことによって、計測の仕方が微妙に異なっていることや、場合によっては同じ部位名であっても異なる箇所を計測している場合も想定せざるを得ない。特に二枚貝類は、その形状によって適宜、定義が異なることがある。また、図鑑などに掲載されているものは、1つの図で全ての形態のものをカバーされている上、計測に際しての基準が明記されていないために、具体的な定義を見出すことが困難な場合も多い。

そこで、本節においては、本報告の計測方法の詳細な定義を示すとともに、計測マニュアルとして提示することを目的とする。計測方法の定義に関して、報告者らが今まで提示してきたもの (阿部 1999、阿部・加藤 2003 など) をベースに、詳細な定義が示されていた横川浩治氏のホームページを参考にした⁽¹⁾。なお、部位の名称は、『日本近海産貝類図鑑』(奥谷編著 2000) に準じている。

1. 巻貝類 (図 1)

巻貝類は、形状によって大きく2つの計測方法が想定される。

(1) 皿形および笠形を呈する巻貝類⁽²⁾

殻口部分が広く、殻の形状が皿形もしくは笠形を呈する巻貝類を対象とする。

殻口を下にしておいた際に、殻の前後で最も長い箇所を基準軸とする。

殻長 (長径) : 殻の前後で最も長い箇所の幅 (基準軸上の殻の幅)。

殻径 (短径) : 基準軸に対して平行な2本の直線によって挟まれた殻の幅。

殻高 (殻幅) : 殻口の接する面と、その面に対して水平な面によって挟まれた殻の幅。その際に、呼水孔を伴う管状部分の高さは除く。

本報告では、アワビ類を計測する際に用いている。

(1) 横川浩治『西表島貝類館』(http://www.kanpira.com/iriomote_museum/shell/)

(2) 計測部位名の後にある括弧内の名称は、本遺跡・医学部附属病院外来診療棟地点 (野々村・江田・阿部 2005) をはじめ、報告者らが今まで報告の際に用いていたものである。

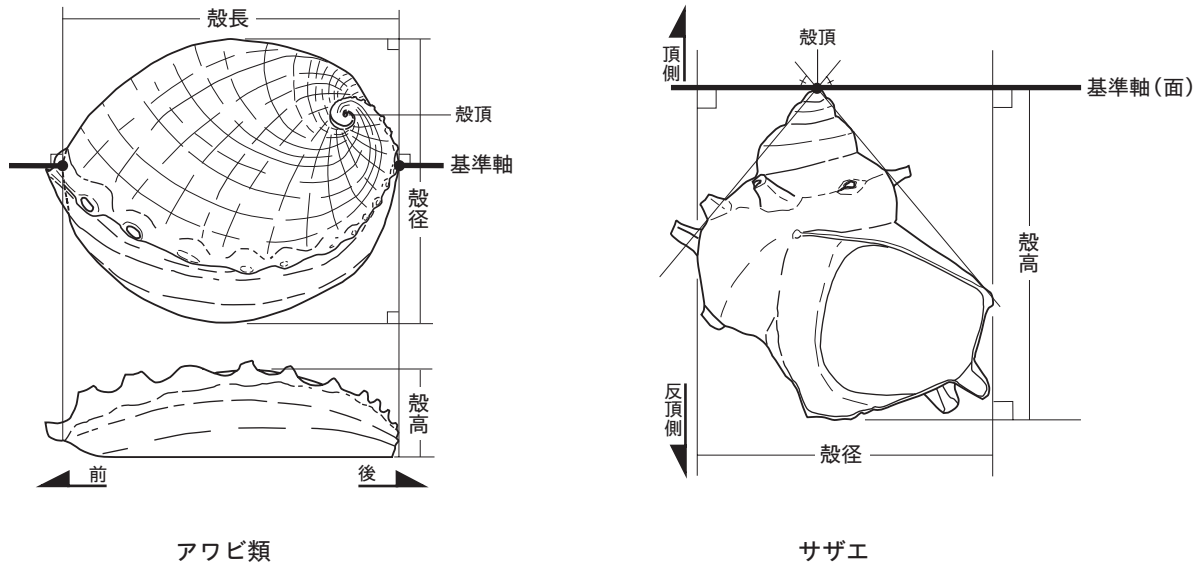


図1 巻貝類計測凡例

(2) その他の巻貝類

一般的な巻貝類の計測方法である。

基準面を殻頂部に接するように設定する。基準面に殻頂部を設置する際に、基準面と殻頂部の間に出来る隙間の角度がどの箇所においても等しくなるようにする。

殻 高：基準面と、基準面に対して水平な反頂側の面によって殻を挟んだ際のその幅。

殻径(殻幅⁽³⁾)：殻口が正面になるように置いた上で、基準面から垂直に降ろした2つの面によって殻を挟んだ際のその幅。なお、サザエのように殻表に棘を有する場合、その部分を除いて、計測をおこなう。

本報告では、アワビ類以外の巻貝類を計測する際に用いている。

2. 二枚貝類 (図2)

二枚貝類は形状によって、4つの計測方法が想定される。

(1) 計測法A⁽⁴⁾

殻頂部付近の部位を基準軸として計測する方法を計測法Aとする。この計測法を用いる貝類はさらに2つに分けられる。1つには、イタヤガイ科などの殻頂部に耳状の平らな突起(翼耳)を有するもの(計測法A-1)、もう1つには、アカガイ類などの蝶番部分(鉸歯部分)が一体化しているもの(計測法A-2)である。

計測法A-1 翼耳部分背面を基準軸とする。

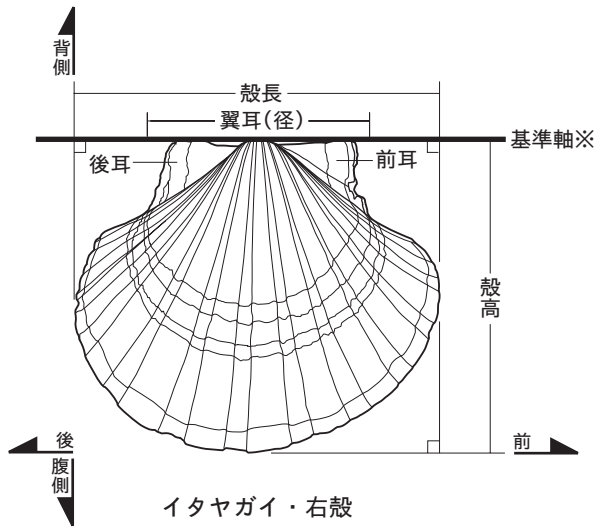
殻 長：基準軸に直交する2本の直線によって挟まれた殻の幅。

殻 高：基準軸に対して平行な2本の直線に挟まれた殻の幅。

本報告では、この方法による計測対象資料はなかった。

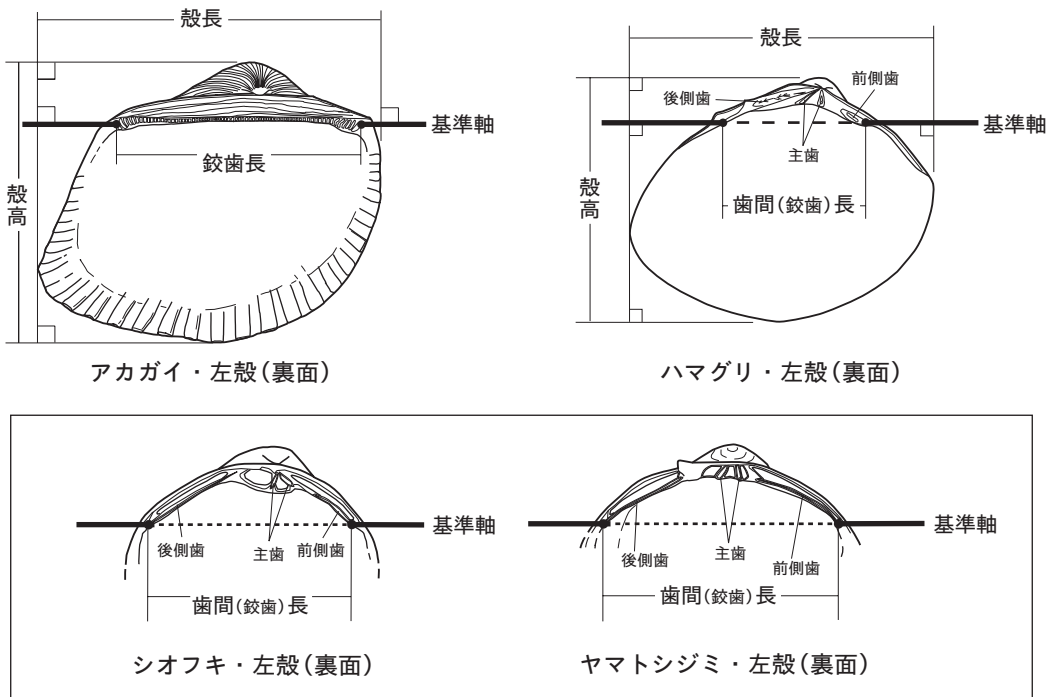
(3) 殻径に関して、『日本近海産貝類図鑑』(奥谷編著 2000)においては「殻幅」と表記されている。しかし、一般的に「殻径」とされることが多いため(波部・小菅 1967 など)、本報告では「殻径」とする。

(4) 報告者らが、「殻長A」および「殻高A」として提示してきた定義はこの計測法Aにあたる。



※実際には、殻頂部分が、耳状部分背面よりやや外側に突出している。図が複雑になることを避けるために便宜的に殻頂部を基準軸に乗せている。

計測法A-1



計測法A-2

図2 二枚貝類計測凡例(1)

計測法 A-2 前・後側歯の外側端部(アカガイ類などにおいては鉸歯の両端)を結んだ線を基準軸とする。

殻 長: 基準軸に直交する2本の直線によって挟まれた殻の幅。

殻 高: 基準軸に対して平行な2本の直線に挟まれた殻の幅。

本報告では、アカガイ類であるアカガイ、サルボウガイを計測する際に用いている。その他に、シオフキ、ヤマトシジミも本報告ではこの方法を用いている。シオフキとヤマトシジミは、一般的に後述する計測法 B が用いられるが、形状がおにぎり形であり、また、遺跡出土資料は完存でないこと

が多く、特に殻長部分が破損している場合、基準軸となる最大長部分が捉えにくい。その反面、この2種は、前・後の側歯が長く、基準として捉えられやすいことから、便宜的にこの方法を用いている。

(3) 計測法 B⁽⁵⁾

二枚貝類の計測方法で、一般的に最も多く用いられる方法である。主に前後方向に長い形状（横長）の二枚貝類に用いる。

まず、基準軸は、殻の前後（横軸）で最も長い箇所とする。

殻 長：殻の前後（横軸）で最も長いところの幅（基準軸上の殻の幅）。つまり、“最大長”である。

殻 高：基準軸に対して平行な2本の直線に挟まれた殻の幅。

本報告ではアサリ、ハマグリ、カガミガイ、オキシジミ、オオノガイを計測する際に用いている。

(4) 計測法 C

主に背腹方向に長い形状（縦長）の二枚貝類に用いる方法を計測法 C とする。

まず、基準軸は、殻の背と腹の間（縦軸）で最も長い箇所とする。

殻 長：基準軸に対して平行な2本の直線に挟まれた殻の幅。

殻 高：殻の背と腹の間（縦軸）で最も長いところの幅（基準軸上の殻の幅）。

本報告では、マガキを計測する際に用いている。

(5) その他の計測箇所

殻 厚：殻の厚さで最も大きい部分の幅。計測の際は、絞歯など蝶番部分を除いて計測をおこなう。また、「殻幅」という名称が用いられることもある（佐藤・松島2000など：図4）。報告者もいまままで、「殻幅」のほうを用いてきた。しかし、厳密には、二

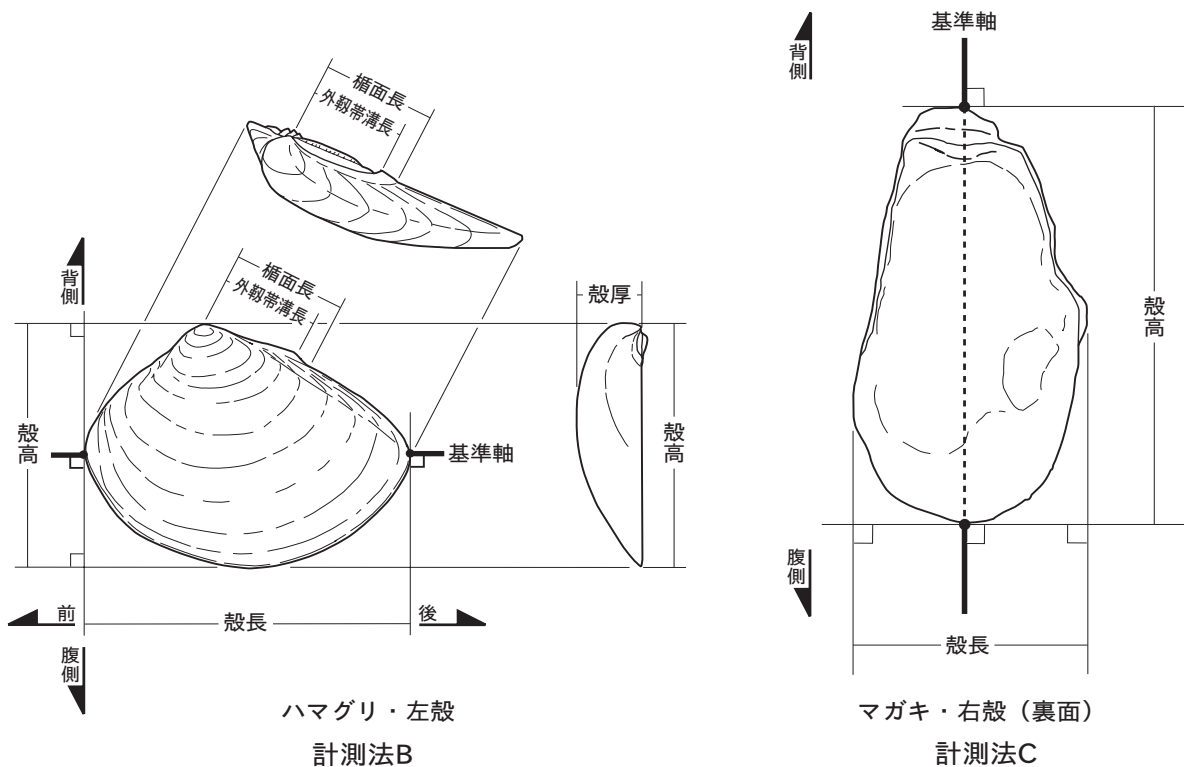


図2 二枚貝類計測凡例 (2)

(5) 報告者らが、「最大長」および「殻高 B」として提示してきた定義はこの計測法 B にあたる。

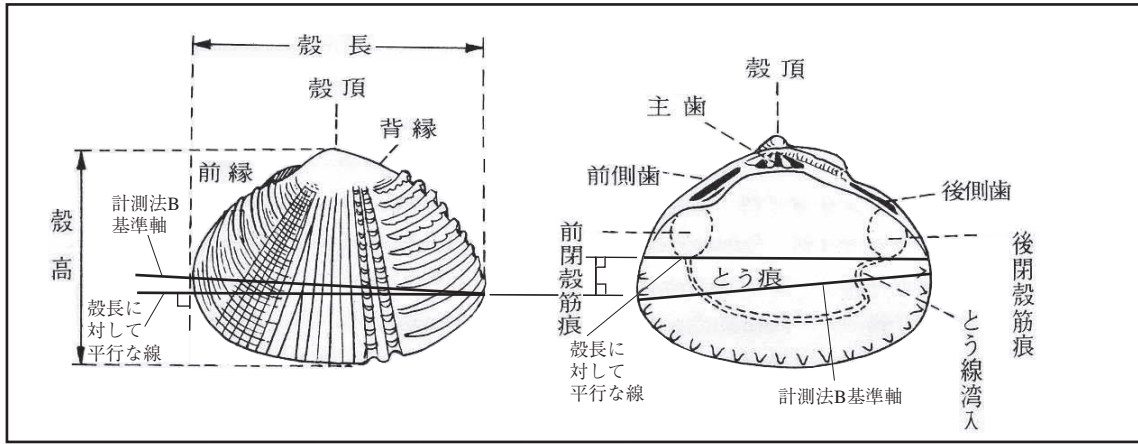


図3「貝殻各部の名称」(波部・小菅1967)
 ※一部削除。殻長に対して平行な線と計測法B基準軸(最大長計測軸)を加筆。

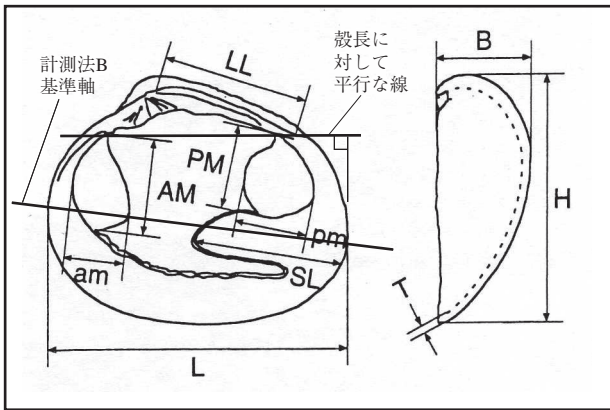


図4「ウチムラサキガイ (*Saxidomus purpurata*)
 殻体の計測部位」(佐藤・松島 2000)
 ※殻長に対して平行な線
 と計測法B基準軸(最大長計測軸)を加筆。

L=殻長, H=殻高, B=右殻の殻幅, T=腹縁部における殻厚, LL=靱帯長, SL=套線湾入長, AM=前閉殻筋痕の最大軸長, am=前閉殻筋痕の短軸長, PM=後閉殻筋痕の最大軸長, pm=後閉殻筋痕の短軸長. [L,H,B],[AM,am],[PM,pm]がそれぞれ直交。

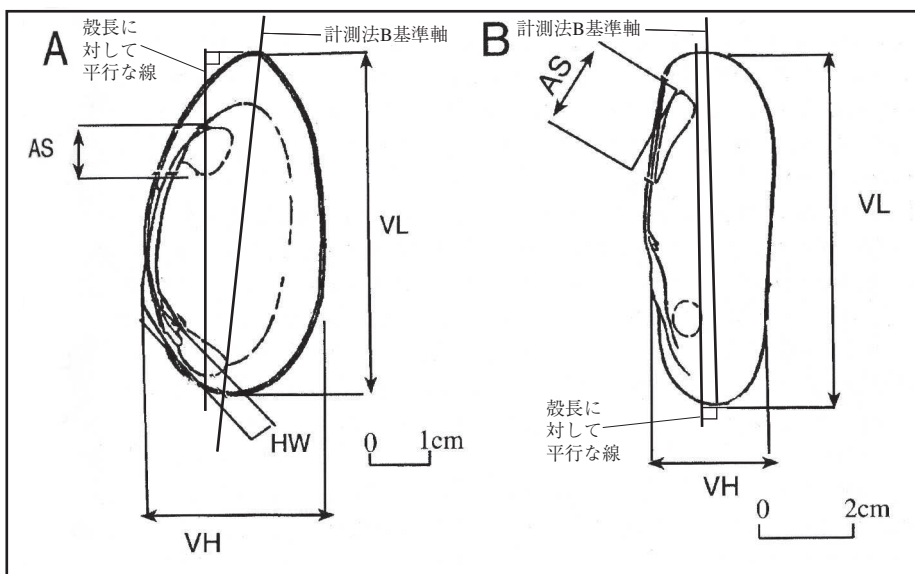


図5「How to measure the bivalve(二枚貝類計測法)」(Claassen1998)
 ※殻長に対して平行な線と計測法B基準軸(最大長計測軸)を加筆。
 HW=hinge width(蝶番幅), VL=valve length(殻長), VH=valve height(殻高), AS=※原著内記載なし

枚貝類において「殻幅」は両殻を合わせた際の厚さであることから、今後は、「殻厚」という名称を用いることにしたい。

外靱帯溝長：外靱帯溝は、後背縁において殻頂部からその中ほどにかけての靱帯の付着している溝を指す。外靱帯溝長はその部分の長さ。佐藤らは、「靱帯長」としている。(佐藤・松島 2000：図4)。

楯面長：楯面は、外靱帯溝の縁辺部分でやや外側に反り返っている部分を指す。楯面長はその部分の長さ。資料によっては、その部分が明瞭でないものもある。

歯間(鉸齒)長：前・後側歯の外側端部を計測点としたその間の長さ。アカガイ類など主歯および前・後側歯が一体となっているもの(鉸齒)は、その長さ。

3. 貝類図鑑などに見られる二枚貝類の部位の定義 一定義の提示の必要性一

最後に貝類図鑑や、他分野、他国における二枚貝類の部位の定義について検討を行う。

本項で例として用いる図鑑は、波部忠重・小菅貞男著『標準原色図鑑全集第3巻 貝』(保育社 1967年刊)である。図鑑において、二枚貝類の部位に関しての詳細な説明がなされていることは少ない。そこで掲載されている図から部位の定義を見出すことにする。掲載されている図を見ると、前後の閉殻筋痕が水平になるように書かれている(図3)。そして、その水平線に対して直交する2本の直線に挟まれた殻の幅を殻長、平行な2本の直線に挟まれた殻の幅を殻高としている。なお、殻長と最大長部分は一致しない。

さて、佐藤武弘らの古生物学の論文内に掲載されているウチムラサキガイの計測部位に関する図や(図4、佐藤・松島 2000)、ケンブリッジ大学より刊行されている考古学マニュアルシリーズの1冊である“Shells”(Claassen 1997)において掲載されている図(図5)も先の図鑑のものと同様の定義に基づいているものと推測される。しかし、同じく閉殻筋痕を基準としているようにみえる図4と図5でも微妙に基準が異なっている。まず、図4の佐藤らのものでは、閉殻筋痕の背側もしくは計測法A-2と同様に鉸齒部分が殻長と水平になっているのに対して、図5のClaassenのものは、Aは中位、Bは腹側が殻長と水平になっている⁽⁶⁾。なお、図3の図鑑のものは、前後の閉殻筋痕の大きさがほぼ同じに書かれているため、背側・中位・腹側のどの位置で結んでも、殻長に対して水平になるようになっている。以上のような違いが見られるもの、本来ならば、考古学研究者も計測に際して、もっとも一般に普及している図鑑に図示されている定義に準ずるのが妥当であるのかもしれない。しかし、日本国内の埋蔵文化財報告書において特にハマグリ(1)の計測方法は、最大長部分を基準軸とする計測法Bであることから、日本国内の考古学研究者間におけるデータの整合性についても考慮に入れる必要もある⁽⁷⁾。また、遺跡から出土する二枚貝類は、劣化や磨耗により基準となりうる閉殻筋痕が不明瞭もしくは完全に損なわれているものが多い。その為、図鑑の図から推測される定義に基づいて計測作業をおこなうことは考古学においては、非常に困難であるともいえる。さて、図4の説明でも指摘したが、前後の閉殻筋痕を結んだ線に対して、前後の側歯の外側点を結んだ線もしくは

(6) Claassenの示した図は、図Aも厳密には一致しないものの図Bと同様に閉殻筋痕の腹側が水平になるように書かれているようにも見える。

(7) なお、(1)で示した横川のものをはじめ、インターネットで計測法を調べた結果、ハマグリなどの計測定義は、最大長部分に基準軸を置くもの(計測法B)がほとんどであり、必ずしも図鑑に図示されているものが主流であるともいえない点も考慮に入れる必要がある。

はアカガイ類であるならば鉸歯はほぼ平行である。そのことから、閉殻筋痕を基準とした計測方法の代替として計測法 A-2 が有効であるともいえる。

日本考古学においてハマグリなどの計測に一般的に用いられている定義と、貝類図鑑やさらには他分野や他国の考古学マニュアルに図示されている定義が異なること、さらには、その同じ部位を基準としているにも関わらずその位置が微妙に異なることがある以上、他の動物遺体同様に、報告を行うに際しての部位もしくは計測定義の明記は、データの相互互換などを考える上で必要であるといえる。特に、今後、他分野との共同研究を視野に入れた場合、定義の明確化は重要となってくるものと思われる。

[参考文献]

- 阿部常樹 1999 「貝類遺体」『向台貝塚資料図譜』p.122-136 市立市川考古博物館
- 阿部常樹・加藤久雄 2003 「近世江戸府内遺跡出土ハマグリのサイズの推定法」『史紋』第1号 p.37-44 史紋編集委員会
- 奥谷喬司編著 2000 『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
- 斉藤弘吉 1963 『犬科動物骨格計測法』私家版
- 佐藤武弘・松島義章 2000 「多変量解析を用いた化石ウチムラサキガイ（マルスダレ科）の殻形態の解析とその古生物学的意義」『化石』p.19-31 日本古生物学会
- 茂原信夫 1986 『東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』東京大学総合研究資料館
- 野々村海・江田真毅・阿部常樹 2005 「医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』p.569-614 東京大学埋蔵文化財調査室
- 波部忠重・小菅貞男 1967 『標準原色図鑑全集第3巻 貝』保育社
- Claassen, Cheryl 1997 SHELLS, CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS.
- Driesch 1976 A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.

第4節 工学部14号館地点出土の魚類遺体

野々村 海

はじめに

工学部14号館地点の魚類遺体は、帰属年代が19世紀を中心に、18世紀前半から20世紀前半と推定された合計22基の遺構から出土したものである。なお、本資料は、現場において目視で確認することができたもののみを採取しており、本地点内における魚類の廃棄状況を反映しているとは言い難い。そのため、本報告では詳細な議論は避け、基本的に表によって基礎データを提示するにとどめる。なお、本地点における魚類の調理方法と食生活の復元を目的に、解体痕のある資料の観察を行なう。

1. 分析方法

以下に記す同定に関する基本的な定義および方法は、樋泉(1995・2003)に準ずる。

同定には、採取された資料の中から、目から科のレベルまで同定でき、頑丈で壊れにくい部位を抽出して用いる。具体的には、主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨の8つの部位を用いる。また、分類群によって、その他の部位も適宜同定に用いる。表記は、同定に用いない部位を「同定外」、破損などにより種や部位の特定が困難なものを「同定不可」同定に適した資料で、種の特定ができなかったものを「種不明」とする。

なお、椎骨はタイ科以外の魚種でもタイ科と酷似するものがあるため、タイ科の椎骨と酷似する資料については「タイ」型とする。

計数は、破片数で行なう。なお、接合可能なものはそれらで一つとして計数する。計測は、マダイの歯骨と大型の魚種の椎骨のみ行なう(計測点については図1参照)。計測には最小値が0.01mmであるデジタルノギスを使用する。

2. 分析結果

本地点からは、93点の魚類遺体が採取された(鱗、鰭棘や微細破片は除く)。そのうち81点の資料が同定され、16分類群が確認された。また他に2点の種不明資料がある。最も多かったのはタイ類(マダイ・マダイ亜科・タイ科・タイ型、32点)で、そのほかマグロ類(11点)ブリ属(6点)ヒラメ(6点)など、中～大型の魚種が多い。ほとんどの資料は、各遺構で、各種1、2点ずつ検出したが、SK3pit3からは、その大きさから同一個体の可能性のあるマダイの頭部の骨がほぼ一体分まとまって検出している。なお、ブリ属は椎骨の大きさでみると、体長37cmのイナダと呼ばれる若魚の現生標本とほぼ同じ大きさの資料、体長65cmのブリの現生標本より明らかに大きい資料、上記2つの現生標本の間程度の大きさの資料、以上の3種類が存在した。詳細は表2に記す。

3. 解体痕

本地点では、12点の資料で明確な解体痕が確認された。以下に、分類群ごとに詳細を記す。

マグロ類

椎骨の血管棘の基部を切断したもの(SK1)と、左右方向に横



図1 マダイ歯骨計測凡例

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

| | |
|----------------------------------|-------------------------------------|
| タラ目 Order Gadiformes | イサキ科 Family Haemulidae |
| タラ科 Family Gadidae | イサキ <i>Parapristipoma trineatum</i> |
| マダラ <i>Gadus macrocephalus</i> | タイ科 Family Sparidae |
| カサゴ目 Order Scorpaeniformes | マダイ亜科 Pagrinae |
| フサカサゴ科 Family Scorpaenidae | マダイ <i>Pagrus major</i> |
| 属種不明 gen. et sp. indet. | 属種不明 gen. et sp. indet. |
| ホウボウ科 Family Triglidae | サバ科 Family Scombridae |
| 属種不明 gen. et sp. indet. | カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i> |
| コチ科 Family Platycephalidae | マグロ類 <i>Thunnus</i> sp. |
| 属種不明 gen. et sp. indet. | カレイ目 Order Pleuronectiformes |
| スズキ目 Order Perciformes | ヒラメ科 Family Paralichthyidae |
| スズキ科 Family Serranidae | ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i> |
| スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i> | カレイ科 Family Pleuronectidae |
| アジ科 Family Carangidae | 属種不明 gen. et sp. indet. |
| マアジ <i>Trachurus japonicus</i> | |
| ブリ属 <i>Seriola</i> sp. | |

表1 工学部14号館地点出土魚類遺体種名表

断（輪切り）にしたもの（SU396）があった。マグロ類は、日本橋などの魚市場で輪切りに解体され、本地点に持ち込まれた可能性が考えられ（阿部2001）、本資料の解体痕はその際につけられたものと推測される。

マダイ・マダイ亜科・タイ型

SU2 から出土したマダイ亜科の後側頭骨（右）は上部の突起が切断されていた。これは、魚の鰓のつけ根付近を左右方向に横断したときについてと想定される。胴体と切り離れた頭部を汁物や煮物用に細かく切り分けたと考えられる。

SK3pit3 から出土したマダイの後頭骨は正中線から左寄りを縦に切断してある。しかし、小さな破片のため、明確な解体法は不明である。なお、本遺構から出土している、マダイ頭部の他の部位には解体痕がみられなかった。

SK188 から出土した「タイ」型の尾椎は、両側面を削ぐ様に切断されており、3枚におろされたものと考えられる。

ブリ属

SK3pit3 と SK291 から、かなり斜めの左右方向に切断（横断）された尾椎が2点出土している。どちらも頭部を左、腹部を手前にして置いた場合、右上から左下に向けて斜めに切った形である。二枚におろした骨のついた方の半身を、さらにそぎ切りにし、切り身にした場合このような解体痕がつくものと考えられる。

ヒラメ

SK96 から出土した椎骨は、やや斜めの左右方向に切断（横断）されていた。これは、さばく前の身を骨ごと切り分けるか、さばいた後の中骨を、汁物や、出汁を取るなどのために切断したものと推測される。

SK335 から出土した椎骨2点は神経棘の基部が斜めに切られている。これは、頭部を左にして置いた場合、刃を横にして手前から奥に向けた角度である。身をさばいた後の中骨を細かく切断し調理

第IV章 自然遺物

| 遺構名 | 分類群 | 部位名 | 左・右 | 破片数 | サイズ | 備考 |
|----------|----------|-------|-----|-----|--|--------------------|
| SK1 | マグロ類 | 尾椎 | — | 1 | Ba:35.0 Bp:35.6 L: 30.4 | CM: 血管棘を水平に切断。 |
| | マグロ類 | 腹椎 | — | 1 | Ba:25.5 L:20.4 | |
| | マグロ類 | 腹椎 | — | 1 | Ba:23.6 L:21.5 | |
| | マグロ類 | 腹椎 | — | 1 | L:21.1 | |
| SU2 | マダイ | 主鰓蓋骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ亜科 | 後側頭骨 | 右 | 1 | | CM: 横断。 |
| | 真骨類・同定不可 | 椎骨 | — | 1 | | |
| | 真骨類・同定外 | 鱗 | — | ○ | | |
| | 真骨類・同定外 | 鱗棘 | — | 1 | | |
| SK3 | マグロ類? | 椎骨 | — | 1 | | |
| SK3a | タイ型 | 尾椎 | — | 6 | | |
| | カレイ科 | 腹椎 | — | 1 | | |
| | 真骨類・同定外 | 尾部棒状骨 | — | 1 | | |
| | 真骨類・同定外 | 鱗 | — | 1 | | |
| | 真骨類・同定外 | 鱗棘 | — | — | | |
| SK3pit3 | マダイ | 後頭骨 | — | ○ | | CM: 正中線から左よりを縦に切断。 |
| | マダイ | 前上顎骨 | 左 | 1 | | |
| | マダイ | 主上顎骨 | 左 | 1 | | |
| | マダイ | 主上顎骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ | 歯骨 | 右 | 1 | DA-DB:28.79 DA-DD:8.92 | |
| | マダイ | 口蓋骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ亜科 | 角骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ亜科 | 上擬鎖骨 | 左 | 1 | | |
| | マダイ亜科 | 方骨 | 左 | 1 | | |
| | マダイ亜科 | 後側頭骨 | 左 | 1 | | |
| | タイ科 | 前鰓蓋骨 | 左 | 1 | | |
| | タイ科 | 間鰓蓋骨 | 右 | 1 | | |
| | タイ型 | 椎骨 | — | 1 | | |
| | ブリ属 | 尾椎 | — | 1 | 計測不可(体長37cmの現生標本(イナダ)とほぼ同じ) | CM: 斜めに横断。 |
| | 真骨類・同定不可 | 前鰓蓋骨 | 右 | 1 | | |
| 真骨類・同定外 | 肩甲骨 | 右 | 1 | | | |
| 真骨類・同定外 | 頭骨 | — | 2 | | | |
| SK10 | カツオ | 腹椎 | — | 1 | | |
| SK18 | マグロ類 | 尾椎 | — | 1 | Ba:23.0 Bp:22.1 L:24.1 | |
| SK22 | マグロ類 | 腹椎 | — | 1 | | |
| | 真骨類・同定不可 | 椎骨 | — | 1 | | |
| SK39 | マダラ | 前上顎骨 | 右 | 1 | | |
| SK54 | 真骨類・同定外 | 角舌骨 | — | 1 | | |
| SK96 | ヒラメ | 尾椎 | — | 1 | Bp:14.5 L:12.0 | CM: やや斜めに横断。 |
| | ヒラメ | 尾椎 | — | 1 | L:12.2 | |
| SK186 | マグロ類 | 尾椎 | — | 1 | Ba:25.2 Bp:26.5 L:27.0 | |
| SK188 | マダイ | 前頭骨 | — | 1 | | |
| | マダイ | 前上顎骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ | 主上顎骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ | 歯骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ | 主鰓蓋骨 | 右 | 1 | | |
| | マダイ亜科 | 方骨 | 左 | 1 | | |
| | タイ科 | 前鰓蓋骨 | 右 | 1 | | |
| | タイ型 | 尾椎 | — | 1 | | CM: 両側面をそぎ切り。 |
| | フサカサゴ科 | 前鰓蓋骨 | 左 | 1 | | |
| | コチ科 | 肩帯 | 左 | 1 | | |
| 真骨類・同定外 | 角舌骨 | 右 | 1 | | | |
| SK200 西表 | ヒラメ | 腹椎 | — | 1 | Bp:11.84 | |
| SK245 | ハウボウ科 | 前頭骨 | — | 1 | | |
| SK291 | ブリ属 | 尾椎 | — | 1 | 計測不可(体長37cmの現生標本(イナダ)より大きく、体長65cmの現生標本(ブリ)より小さい) | CM: 斜めに横断。 |
| | ブリ属 | 尾椎 | — | 1 | | |
| SK292 | マダイ亜科 | 基鱗骨 | 右 | 1 | | |
| | 真骨類・同定不可 | 椎骨破片 | — | 1 | | |

表2 工学部14号館出土魚類遺体一覧(1)

| 遺構名 | 分類群 | 部位名 | 左・右 | 破片数 | サイズ | 備考 |
|-------|----------|------|-----|-----|--|--------------------------|
| SK293 | イサキ | 前鰓蓋骨 | 右 | 1 | | |
| SK298 | ヒラメ | 擬鎖骨 | 左 | 1 | | |
| SK330 | スズキ | 主鰓蓋骨 | 右 | 1 | | |
| | カツオ | 擬鎖骨 | 左 | 1 | | |
| | 真骨類・同定外 | 肩甲骨 | 右 | 1 | | |
| SK335 | カツオ | 尾椎 | — | 2 | | |
| | カツオ? | 尾椎 | — | 3 | | |
| | マグロ類 | 椎骨 | — | 1 | Ba:22.4 | |
| | ヒラメ | 腹椎 | — | 1 | Ba:12.3 Bp:12.3 L:10.7 | CM:神経棘を斜めに切断。 |
| | ヒラメ | 腹椎 | — | 1 | Ba:11.8 Bp:11.8 L:10.7 | CM:神経棘を斜めに切断。 |
| | 真骨類・同定不可 | 尾椎 | — | 1 | | CM:横断。 |
| SK358 | マアジ | 角骨 | 右 | 1 | | |
| | タラ科 | 腹椎 | — | 1 | | CM:やや斜めに横断。 |
| | 真骨類・同定外 | 鱭棘 | — | 1 | | |
| SU360 | 真骨類・同定不可 | 前鰓蓋骨 | 左 | 1 | | |
| SU392 | マダイ | 歯骨 | 左 | 1 | DA-DD:10.58 (体長40cmの現生標本とほぼ同じ) | |
| | ホウボウ科 | 腹椎 | — | 5 | | |
| | ホウボウ科 | 尾椎 | — | 1 | | |
| | フサカサゴ科 | 歯骨 | 右 | 1 | | |
| | タラ科 | 腹椎 | — | 1 | | |
| | 真骨類・種不明 | 方骨 | — | 1 | | |
| SU396 | ブリ属 | 尾椎 | — | 1 | 計測不可(体長37cmの現生標本(イナダ)より大きく、体長65cmの現生標本(ブリ)より小さい) | |
| | ブリ属 | 腹椎 | — | 1 | Ba:20.1 L:17.0 | 体長65cm現生標本(ブリ)より明らかに大きい。 |
| | ブリ属 | 腹椎 | — | 1 | L:21.3 | |
| | マグロ類 | 尾椎 | — | 1 | Ba:34.2 Bp:32.0 L:41.1 | |
| | マグロ類 | 尾椎 | — | 1 | Ba:26.9 | CM:横断。 |
| | マグロ類 | 尾椎 | — | 1 | Ba:31.4 Bp:27.2 L:42.3 | |

※凡例: Ba:椎体前面横径、Bp:椎体後面横径、L:全長、DA・DD・DB:図1計測凡例図参照、CM:切断痕、○:破片

表2 工学部14号館出土魚類遺体一覧(2)

に用いたと考えられる。

タラ科

SK96のヒラメと同様に、腹椎をやや斜めに横断したものがSK358から1点出土している。

4. まとめ

本資料は、現在までに報告が行われている東京大学本郷構内の遺跡の他地点と比べ、量・種ともに少なく、各遺構からの出土量も僅かであった。また、同定されたほとんどの分類群は近世江戸遺跡から頻繁に出土するものであった。しかし、本遺跡の他地点や多くの近世江戸遺跡で見られる、イワシ類、カレイ科、サバ属などの小型魚が検出されず、マグロ類などの大型魚が目立った。これは、発掘の際の資料の採取方法によるものであると考えられる。

なお、大型魚が多いため、93点中12点と、出土資料数の割に多くの資料で解体痕がみられた。そして、これらの観察により、本地点における魚類の調理方法・解体方法の一部を復元することができた。解体痕を有する資料で一番多い部位は椎骨(10点)であった。椎骨の解体痕は、他の近世江戸遺跡の資料(麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡、芝公園一丁目増上寺子院群、東京大学本郷構内の遺跡

山上会館・御殿下記念館地点など)の中でも頻繁にみられた、横断や側面のそぎ切りの他に、血管棘や神経棘の基部を切断したものや、そぎ切りの様に斜めに横断した物など多様であった(麻布台一丁目遺跡調査会1986、港区教育委員会1988、東京大学埋蔵文化財調査室1990)。これは、魚種や料理によっ

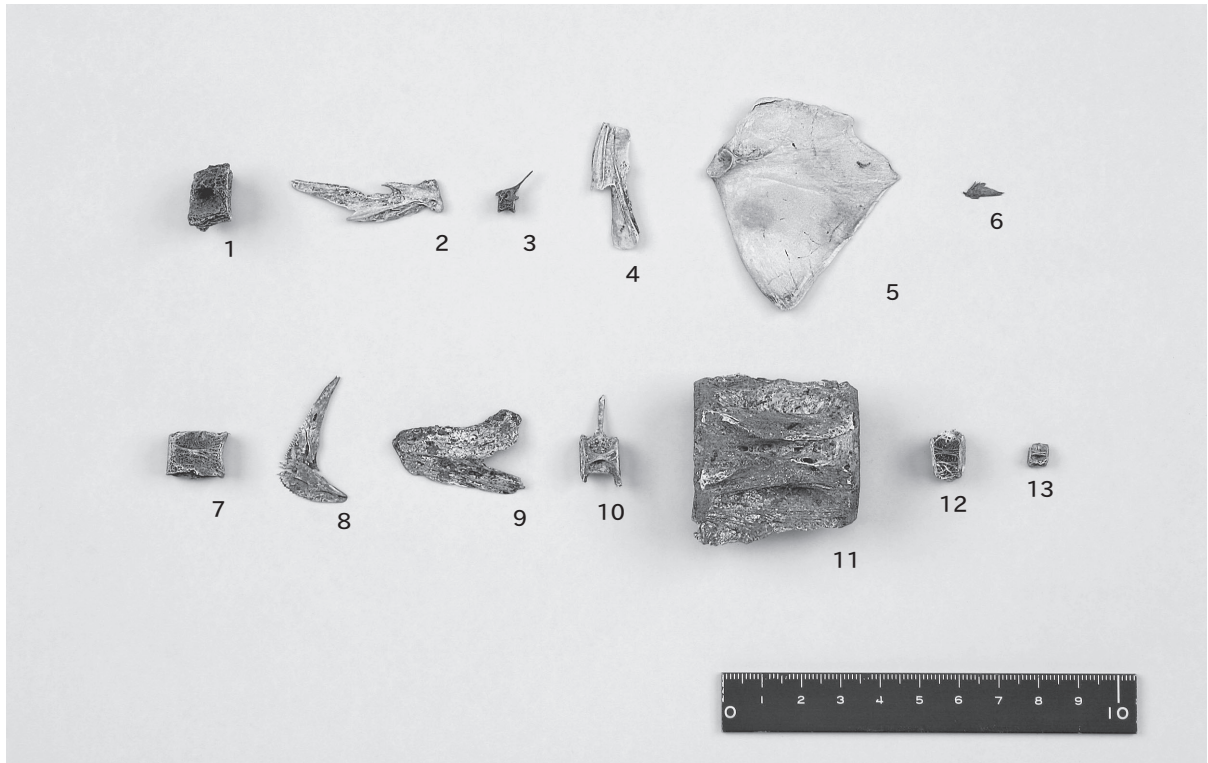
て、さばき方を使い分けているものと考えられる。しかし、それぞれのさばき方が、実際にどのような料理に用いられたものであるかは、文献史料などを参考に今後慎重に検討していく必要がある。

謝 辞

本報告を行うにあたり、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生をはじめ、樋泉岳二氏、小林園子氏、山根洋子氏、太田敦子氏、波形早季子氏には有益なご指導と、ご協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

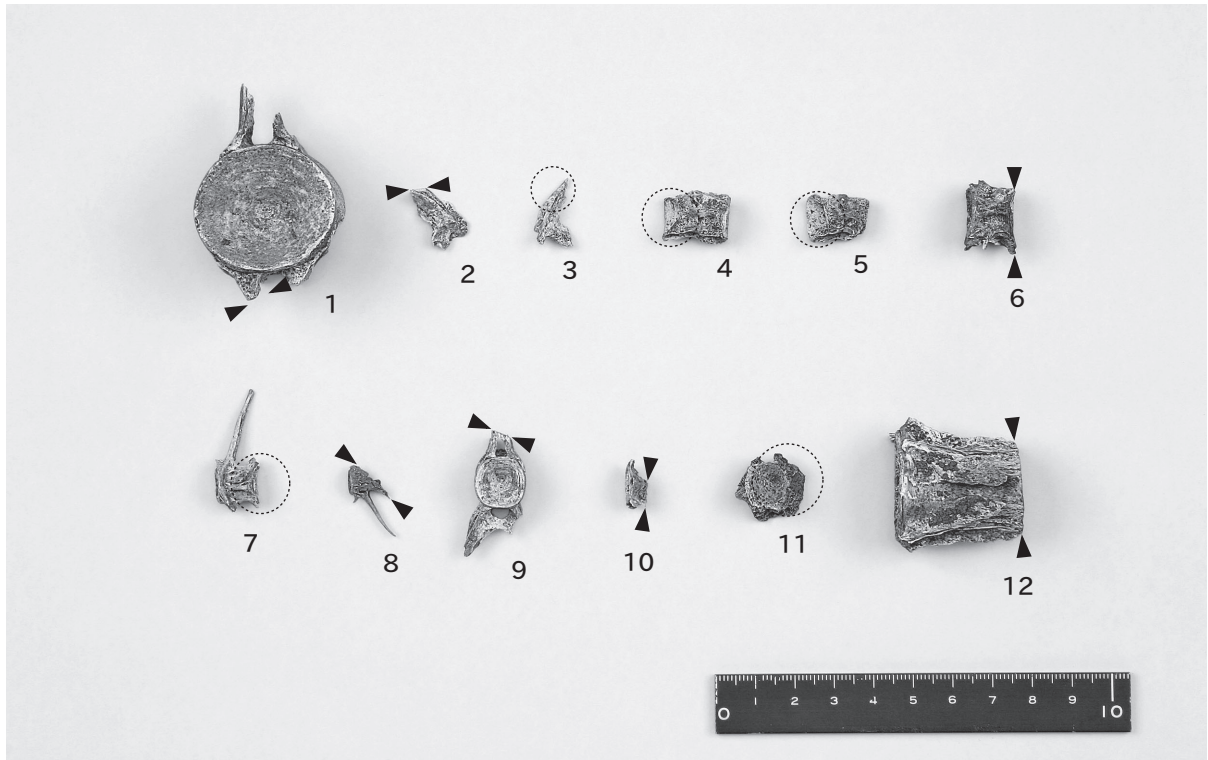
[参考文献]

- 麻布台一丁目遺跡調査会 1986 『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』
阿部常樹 2001 「魚類」『東京都中央区日本橋二丁目遺跡』日本橋二丁目遺跡調査会
田中恒雄 1991 「魚の包丁」『田中恒夫の包丁技法』
樋泉岳二 1995 「遺跡産魚骨同定の手引(Ⅱ)」『動物考古学』第5号 動物考古学研究会
樋泉岳二 2003 「明石町遺跡の魚類遺体群」『東京都中央区明石町遺跡』明石町遺跡調査会
東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』
港区教育委員会 1988 『芝公園一丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』



P.L.1

1. タラ科腹椎 (SK358) 2. フサカサゴ科右歯骨 (SU392) 3. ホウボウ科腹椎 (SU392) 4. コチ科左肩帯 (SK188) 5. スズキ右主鰓蓋骨 (SK330)
 6. マアジ右角骨 (SK358) 7. プリ属尾椎 (SK396) 8. イサキ右前鰓蓋骨 (SK293) 9. マダイ左歯骨 (SU392) 10. カツオ尾椎 (SK335)
 11. マグロ属尾椎 (SU396) 12. ヒラメ腹椎 (SK200) 13. カレイ科腹椎 (SK3a)



P.L.2 解体痕のある資料

1. マグロ類尾椎 (SK1) 2. マダイ右後側頭骨 (SK2) 3. マダイ頭骨 (SK3pit3) 4・5. プリ属尾椎 (SK291) 6. ヒラメ尾椎 (SK96)
 7. タイ型尾椎 (SK188) 8. プリ属尾椎 (SK03pit3) 9. ヒラメ腹椎 (SK335) 10. カツオ尾椎 (SK335) 11. タラ科腹椎 (SK358)
 12. マグロ類尾椎 (SK396)

第5節 工学部14号館地点出土の鳥類遺体

日本学術振興会・特別研究員 江田 真毅

はじめに

工学部14号館地点は江戸時代には御家人が拝領していた大縄地にあたり、加賀藩邸内に位置していた東京大学本郷構内の遺跡の他の大部分の地点とは一線を画す。鳥類遺体は、動物遺体の検出された72遺構中16遺構で検出された。これらの資料はすべて発掘時に現地できりあげられたものである。これらの遺構の廃絶時期は、覆土中の遺物から19世紀前半から中頃を中心に、18世紀前半から20世紀前半に比定される。本稿では、同地点から出土した鳥類遺体について記載するとともに、同遺跡内の他地点出土の鳥類遺体にみられた傾向と比較した。

資料と方法

資料の同定は、出土したすべての鳥類遺体(計23点)を対象に、現生骨格標本との肉眼比較でおこなった。現生標本としては、筆者所有の標本(EP)を利用した。骨の部位の名称は、Baumel et al (1993) および日本獣医解剖学会(1998)に、分類群名については基本的に日本鳥類目録編集委員会(2000)に従い、日本鳥類目録編集委員会(2000)が言及していないカモ科の亜科および族分類についてはA.O.U. (1983)に従った。同定は、上腕骨や尺骨、大腿骨や脛足根骨といったいわゆる主要四肢骨のほか、方形骨や寛骨、下顎の関節骨、上肢の指骨である小指翼骨、大指基節骨、大指末節骨、小指節骨など、解剖学的な位置が明らかにできて、かつ分類群間での形態の差が明瞭に認められるものを対象とした。足指骨と椎骨については、同定の対象とした部位の骨でありながら現生標本の不足などから鳥綱以下の同定ができなかった資料とともに、種不明鳥類とした。一方、資料の破損が著しいために同定できなかった資料は同定不能鳥類とした。資料の残存状態は、資料にほとんど損傷がないものは完存、近位端や遠位端の関節が半分以上残っているものはそれぞれ近位端、遠位端とした。また、いわゆる主要四肢骨のうち、骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨については中間部として記載し、以上の条件に合わない資料は中間部破片とした。各資料の観察項目として、骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づいて成長段階を記載し、解体痕については同定時に目に付いたものについて記載した。また、破損している資料については産卵前後の雌の骨中に二次的に形成される骨髓骨の有無を確認した。これら3項目についてはそれぞれ、成鳥、なし、なしを基調とし、基調と異なる場合のみ出土表に観察所見を示した。資料の計測はDreisch(1976)の基準にしたがった。

結果

骨の保存状態はきわめて良好で、分析した23点中20点で科以下を単位とした同定ができた。確認された分類群はサギ類、ガン類、カモ類、キジ類、ニワトリ、カラス類で4目4科であった(表1、2)。骨の形成が不完全な幼鳥や若鳥の骨は観察されなかった。以下、分類群ごとに記載する。

サギ類

B区SU396から右側の上腕骨と尺骨が検出された。どちらも標本のゴイサギ(EP-20)とほぼ同じ大きさであった。上腕骨の遠位端および尺骨の近位端に解体痕が認められた。

ガン類

C₁区SK245から標本のマガン(EP-25)とほぼ同じ大きさの鎖骨が検出された。また、同定には至らなかったものの、A区SK3a出土の鎖骨もガン類と類似した形質をもっていた。こちらの資料は前述のマガンの標本より大きいものであった。

カモ類

A区SK3、C₁区SK188、同SK200、同SK245、同SK291、同SU402、C₂区SK415の8遺構から検出され、出土点数(計11点)、検出された遺構数とも鳥類ではもっとも多かった。各遺構からの出土量は1点もしくは2点で、最少個体数はすべての遺構で1個体であった。検出された資料はすべて上肢の骨で、資料が2点確認された3つの遺構(SK245、SU402、SK415)ではそれぞれ同一側の骨が出土した。大きさにも変異が認められ、現生標本のコガモ(EP-7)程度、ハシビロガモ(EP-30)程度、ヒドリガモ(EP-6)程度、オナガガモ(EP-4)程度、カルガモ(EP-84)程度の大きさの資料が確認された。前述の資料が2点確認された3つの遺構では、それぞれ同じ種の現生標本と同程度の大きさであった。SK3出土の手根中手骨およびSK188出土の上腕骨では刺突されたような痕跡が確認された。

キジ類・ニワトリ

A区SK25、B区SU392、C₁区SK188、同SK386、同SK398の5遺構からそれぞれ1点ずつが検出された。カモ類とは異なり、上肢だけでなく下肢の骨も検出されている。SK25、SU392、SK188出土の資料は現生標本のキジ♂(EP-143)と同程度の大きさ、SK386とSK398出土の資料はこの標本よりも大きいものであった。特に、SK398出土の大腿骨はキジの特徴である大転子稜の内側の窩(江田・加藤2001)が認められず、大きさもナベヅル(EP-99)とほぼ同程度とかなり大きかったため、ニワトリと同定した。SU392出土の上腕骨では遠位端よりの骨幹前面に解体痕が、SK25出土の脛足根骨では近位側と遠位側両方に擦切り切断痕が確認された。また、同脛足根骨では骨髓骨も確認された。

カラス類

A区SK3aから現生標本のハシブトガラス(EP-13)とハシボソガラス(EP-32)の中間程度の大きさの尺骨が1点検出された。

考 察

本地点は御家人が拝領していた大縄地に位置する。各地区でカモ類とニワトリを含むキジ類が確認されており、家による利用鳥類の大きな違いは認められない。また、この地点は大縄地であるという観点から、加賀藩邸内に位置していた東京大学本郷構内の遺跡の他の大部分の地点とは性格が異なる。一方で、カモ類が主体で、キジ類・ニワトリが続き、ガン類、サギ類、カラス類がわずかに出土するという分類群の構成は、他地点や他の時代の遺体群、さらには山根(1998)が集成した江戸時代

鳥綱 Class Aves

コウノトリ目 Order Ciconiiformes

サギ科 Family Ardeidae

属種不明 gen. et sp. indet.

カモ目 Order Anseriformes

カモ科 Family Anatidae

ガン亜科 Subfamily Anserinae

ガン族 Tribe Anserini

属種不明 gen. et sp. indet.

カモ亜科 Subfamily Anatinae

属種不明 gen. et sp. indet.

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family Phasianidae

ニワトリ *Gallus gallus* var. domesticus

属種不明 gen. et sp. indet.

スズメ目 Order Passeriformes

カラス科 Family Corvidae

属種不明 gen. et sp. indet.

表1 東京大学本郷構内の遺跡・工学部14号地点出土鳥類種名表

| 地区 | 遺構 | 時代 | 分類群 | 部位 | 左右 | 残存 | 標本との大きさの比較 | 備考 |
|------------------|-------|------------|--------|-------|----|---------|--|------------------------------------|
| A区 | SK3 | 19世紀中頃 | カモ類 | 手根中手骨 | 右 | 完存 | ヒドリガモ(EP-6)とほぼ同大。BP: 12.1, GL: 51.2 | 腹面近位端小翼中手骨部に2箇所、および遠位より骨幹に1箇所刺突痕あり |
| | SK3a | 19世紀中頃 | カラス類 | 尺骨 | 左 | 遠位端～中間部 | ハンブトガラス(EP-13)とハンボンガラス(EP-32)の中間。Did: 10.3 | |
| | SK25 | 不明 | 同定不能鳥類 | 鎖骨 | 右 | 中間部 | マガン(EP-25)より大きい | おそらくガン類だが決め手にかける |
| | SU2 | 19世紀後半 | キジ類 | 脛足根骨 | 右 | 中間部破片 | キジ♂(EP-143)とほぼ同大 | 骨髄骨あり。遠位端、近位端とも擦り切り切断されている |
| B区 | SK101 | 19世紀中頃 | 同定不能鳥類 | 四肢骨 | | 中間部破片 | | |
| | SK358 | 20世紀前半 | カモ類 | 尺骨 | 右 | 完存 | ハンビロガモ(EP-30)とほぼ同大。BP: 7.2, Did: 7.46 | |
| | SU392 | 19世紀中頃 | キジ類 | 上腕骨 | 左 | 遠位端～中間部 | キジ♂(EP-143)とほぼ同大 | 骨幹前面遠位端よりに解体痕あり |
| | SU396 | 19世紀前半 | サギ類 | 尺骨 | 右 | 近位端～中間部 | ゴイサギ(EP-20)とほぼ同大。BP: 10.0 | 上腕骨との関節部に解体痕あり |
| | SK188 | 19世紀前半～中頃 | カモ類 | 上腕骨 | 右 | 完存 | ゴイサギ(EP-20)とほぼ同大。BD: 14.9, GL: 105.0 | 遠位端腹側縁から顆間切痕にかけて解体痕あり |
| C区 | SK200 | 19世紀中頃 | キジ類 | 脛足根骨 | 左 | 中間部 | オナガガモ(EP-4)とほぼ同大 | 前面近位端よりの骨幹に刺突痕2箇所あり |
| | SK245 | 18世紀前半 | カモ類 | 大指基節骨 | 右 | 完存 | キジ♂(EP-143)とほぼ同大。BD: 10.5 | |
| | SK291 | 19世紀前半から中頃 | カモ類 | 尺骨 | 右 | 完存 | カルガモ(EP-84)とオナガガモ(EP-4)の中間。GL: 23.5 | |
| | SK398 | 19世紀中頃 | カモ類 | 尺骨 | 右 | 近位端～中間部 | オナガガモ(EP-4)とほぼ同大 | |
| | SU402 | 19世紀中頃 | カモ類 | 手根中手骨 | 右 | 完存 | オナガガモ(EP-4)とほぼ同大。BP: 12.6, GL: 56.7 | |
| | SK386 | 明治時代 | キジ類 | 鎖骨 | | | マガン(EP-25)とほぼ同大 | 胸骨との関節部に解体痕あり |
| | SK415 | 18世紀前半 | カモ類 | 尺骨 | 左 | 完存 | コガモ(EP-7)とほぼ同大。BP: 6.2, Did: 6.9 | |
| | | | カモ類 | 尺骨 | 左 | 近位端 | キジ♂(EP-143)より大きい。BP: 22.3 | |
| | | | ニワトリ | 大腿骨 | 左 | 完存 | ヒドリガモ(EP-6)とほぼ同大 | |
| | | | カモ類 | 尺骨 | 左 | 遠位端～中間部 | ヒドリガモ(EP-6)とほぼ同大 | |
| | | | カモ類 | 腕骨 | 左 | 遠位端～中間部 | ヒドリガモ(EP-6)とほぼ同大 | |
| C ₂ 区 | SK386 | 明治時代 | キジ類 | 手根中手骨 | 右 | 完存 | キジ♂(EP-143)より大きい。GL: 46.9, Did: 8.5 | |
| | SK415 | 18世紀前半 | カモ類 | 尺骨 | 左 | 完存 | ヒドリガモ(EP-6)とほぼ同大。BP: 4.5 | |
| | | | カモ類 | 尺骨 | 左 | 近位端～中間部 | ヒドリガモ(EP-6)とほぼ同大。BD: 5.8 | |
| | | | カモ類 | 腕骨 | 左 | 遠位端～中間部 | ヒドリガモ(EP-6)とほぼ同大。BD: 5.8 | |

表2 東京大学本郷構内の遺跡・工学部14号地点出土鳥類遺体一覧

の他の遺跡とも共通したものであった。これは、山根（1998）も指摘しているように、江戸時代を通じて市中で入手しやすい鳥類がカモ類やニワトリ、ガン類であったことを示唆すると考えられる。出土点数や各遺構を単位とした最少個体数は他地点の遺構に比べると比較的少ないものの、他地点でも他の動物遺体が確認されるにも関わらず鳥類遺体が出土しない遺構も多数あり、この点をもって大縄地と藩邸内の違いとするのは早計にすぎるのであろう。

カモ類の遺体が上肢を中心とし、これに対してキジ類やニワトリでは下肢も多く出現するというパターンも他地点、あるいは他の遺跡でも確認されている傾向である（江田2006）。3つの遺構からカモ類の骨が2点検出されたが、その組合せは解剖学的な観点から関節する部位である同一側の尺骨と手根中手骨、同一側の尺骨と橈骨（2例）であった。しかもそれぞれの遺構から出土した資料は同一の現生標本とほぼ同じ大きさであった。このことは、これらの遺構から出土した組合せが同一個体に由来することを想起させる。これに対して、同一の遺構から解剖学的に関節しない骨や、反対側の骨、あるいは異なった大きさの骨が検出された例はなかった。SU396のサギ類でも同様にゴイサギとほぼ同じ大きさの右側の上腕骨と尺骨（解剖学的に関節する）が確認されている。同様の傾向は、法学部4号館地点のC7-3号土坑8層でも認められている。同層出土の動物遺体は遺物のブロックごとに72の小単位に分けて報告されており、マガモやコガモ、ウズラなどで一つの小単位から同一側の上肢や下肢の組合せが認められている（金子1990）。タフォノミーやサンプリングエラーによって廃棄されたすべての遺物が検出されるわけではないことを考慮しても、ある骨格部位へのこれら2つの要因の影響が、個体の左右どちら側に由来するかによって大きく相違するとは考えられない。したがって、このような傾向は金子（1990）が指摘するように「調理の進行の一端」（金子1990、p504）をうかがわせる資料であり、さらに、当時鳥類が必ずしも個体を単位に扱われていたのではなく部位肉としての流通も一般的であった可能性を示唆すると考えられる。この議論をより深めるためには、他の江戸時代の遺跡の各遺構から、同様に解剖学的に関節する部位の組合せが多く出土する傾向があるかどうかを検討する必要があるだろう。

まとめ

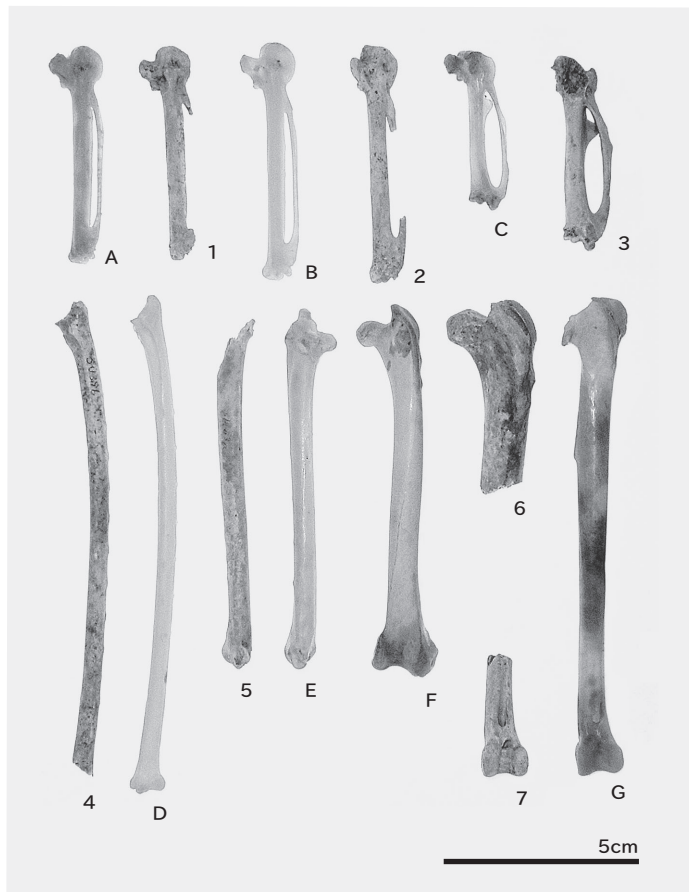
本地点から出土した鳥類遺体は、19世紀前半から中頃を主体とする大縄地内の遺構から検出されたものである。カモ類とキジ類・ニワトリを中心とする出土分類群の構成は、他の加賀藩邸内の遺構や江戸時代の遺跡と同様のものであり、当時市中で入手しやすい鳥類を反映していることを窺わせた。

謝辞

末筆ながらこの資料を分析する機会を与えていただいた東京大学埋蔵文化財調査室の成瀬晃司氏・堀内秀樹氏・阿部常樹氏に厚く御礼申し上げる次第である。

〔引用文献〕

- 江田真毅 2006 「遺構一括出土遺体からみた江戸時代の鳥類の利用形態 - 東京大学本郷構内の遺跡を中心に -」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5 東京大学埋蔵文化財調査室 p.42-60
- 江田真毅・加藤久雄 2001 「動物遺存体・鳥類」『飯田町遺跡』p.240-242 千代田区飯田町遺跡調査会
- 金子浩昌 1990 「動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学埋蔵文化財調査室 p.917-958
- 日本獣医解剖学会 1998 『家禽解剖学用語』日本中央競馬会
- 日本鳥類目録編集委員会 2000 『日本鳥類目録 改訂第6版』日本鳥学会
- 山根洋子 1998 「近世江戸出土の鳥類遺体 - 文京区駒込追分町遺跡の資料を中心に -」『動物考古学』11号 p.55-68
- A.O.U. 1983 The A.O.U. Check List of North American Birds. A.O.U
- Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., & Berge, J.C.V., 1993 Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium. Nuttall Ornithological Club.
- von den Driesch, A. 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.



本地点出土の鳥類遺体

1～3・A～C 右手根中手骨、
4・D 右尺骨、 5・E 左尺骨、
6・F 左大腿骨、 7・G 右脛足根骨

● 現生標本

A ヒドリガモ、 B オナガガモ、
C・F・G キジ、 D ゴイサギ、
E ハシボソガラス

● 本地点出土資料

1. カモ類 (SK3)、 2. カモ類 (SK245)、
3. キジ類 (SK386)、 4. サギ類 (SU396)、
5. カラス類 (SK3a)、 6. ニワトリ (SK398)、
7. キジ類 (SK188)

第6節 工学部14号館地点出土の哺乳類

名古屋大学博物館 新美 倫子

はじめに

工学部14号館地点で出土した動物遺体のうち、哺乳類はコンテナ(35cm×55cm×15cm)1.5箱分であった。714点の資料が出土しており、そのうち種の判明したものはイヌ566点、ネコ21点、ウシ9点、ウマ4点、ウシまたはウマ12点、ブタ2点、ブタ?1点、ヒツジ1点、ウサギ1点、シカ1点、オキゴンドウ?1点である。これらの資料は発掘時に取り上げられたものであり、大部分は江戸時代の御先手鉄砲組組屋敷の与力居住区から出土したが、明治期に属するものも一部含まれると思われる。表1~4に出土内容を示し、表5~7にイヌ・ウマの歯などの計測値を示した。

なお、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、また東京大学埋蔵文化財調査室の成瀬晃司氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

1. イヌ(表1・5・6)

イヌは566点の資料が出土しており、これらのうち幼獣は52点、若獣が168点、成獣が346点であった。各遺構での出土内容を表1に示し、上顎骨・下顎骨については表5、6に計測値を示した。資料の大部分は埋葬された状態ではなく散乱して出土したが、SU18やSK25のように同一個体と思われる資料がある程度まとまって出土したケースもあった。

SK16からは成獣の下顎骨が出土しており、この資料の下顎底はやや丸く骨体の高さは平行に近い。歯列の湾曲は少ない。その全長からの推定体高は47.1cmであった(山内1958)。四肢骨には、筆書所蔵の現生柴犬標本と比較すると同程度の大きさの資料とひとまわり大きな資料が多かったが、SK398出土の上腕骨は柴犬よりもひとまわり小さかった。SU18出土の寛骨・距骨・踵骨・椎骨には異常な骨増殖が見られた。また、SK200出土の左右の寛骨には解体痕が見られ、食用になった個体が含まれていると思われる。

2. ネコ(表2)

ネコは21点出土した。上顎骨・下顎骨・上腕骨・寛骨・大腿骨・脛骨などが見られたが、埋葬されていた資料はなく、いずれも散乱状態で出土している。すべて成獣であり、筆者所蔵の現生標本と比べるとやや小さい資料であった。

3. ウシ・ウマ(表3・7)

ウシは寛骨破片4点・大腿骨1点・脛骨1点・踵骨1点・膝蓋骨2点が見られ、いずれも資料の大きさは筆者所蔵の改良和種現生標本よりも少し小さい。寛骨破片はいずれも腸骨部分を幅2~4cmに鋸状の刃物で切断した資料である。大腿骨・脛骨・踵骨も切断されていた。

ウマはSK326から頭蓋骨が2個出土しており(表3の①と②)、表7にこれらの臼歯の長さ・幅を示した。頭蓋骨①、②ともにはほぼ全体が残っていたが、切歯骨部分の保存状況は悪く、犬歯の有無が不明であるため雌雄は不明である。骨体はいずれも筆者所蔵の現生ヨナグニウマ♀標本より少し大

第IV章 自然遺物

| 遺構 | 出土部位・量 | 計 |
|-------|---|-----|
| SK16 | 下顎骨右(×××C××P3欠M1××)関節突起あり 下C左1、尺骨左1、大腿骨右下1、椎骨1、肋骨破片4 | 9 |
| SU18 | 側頭骨下顎関節窩部分右1、頭蓋骨破片10 上顎骨左(M12) 同一 上顎骨右(I1×I3C)(P34M12) 同一か 上I3左1、下M2右1、不明C1、下顎関節突起右1、下顎骨破片3、軸椎1 肩甲骨左1、右1、橈骨左1、右下1、尺骨左1、右下1、寛骨左1、右(腸のみ)1 大腿骨左上1、右上1(骨頭欠損)、脛骨左上1、下1、距骨右1、踵骨左1、右1 中手・中足骨13、下3、基節骨11、中節骨9、末節骨7、椎骨19、仙骨1、肋骨破片31、手足根骨8 | 138 |
| SK25 | 下顎骨左(m2×m4M1×)M1未出、歯槽開く。未出Cあり 幼 肩甲骨左1、上腕骨左1(上下なし)、尺骨左1、寛骨左(腸+坐)1、右(腸のみ)1 同一か 大腿骨右上1(上なし)、脛骨右1(上下なし)、椎骨8、肋骨破片29 頭蓋骨ほぼ完存 上顎骨左(×I23C×P234M12)I23・C・P4・M2萌出途中 上顎骨右(×I23C×P234M12)P23萌出はじめ、M1萌出ほぼ完了 下顎骨左(××I3C×P2m34M123)I3・M12萌出途中、C・M3萌出開始 若 下顎骨右(××I3C×m234M123)乳cあり、未出P234あり 同一 環椎1、軸椎1、肩甲骨左1、右1、上腕骨左1(上下あり)、右1(上下あり) 橈骨左上1(上下あり)、右1(上下あり)、尺骨左1、右1、寛骨左腸骨破片1 右腸骨破片1、大腿骨左下1(下なし)、右下1(下なし)、中手・中足骨5、下2 基節骨7、中節骨6、末節骨6、椎骨23、肋骨破片68、手足根骨5 | 184 |
| SK188 | 上P4左1、下M1右1、尺骨左破片1、右1、脛骨左下1、右下1、距骨右1、踵骨右1、中手・中足骨2 上腕骨右上1 | 11 |
| SK200 | 頭蓋骨破片4若、下C右1 上腕骨右上1若(上なし)、左1若(上下なし) 橈骨右1若(上下なし)、寛骨左1、右1、大腿骨右1若(上下なし)、仙骨1 | 12 |
| SK245 | 中手・中足骨1、基節骨1 | 2 |
| SK258 | 側頭骨下顎関節窩部分左+後頭骨左1、頭頂骨左+側頭骨左+後頭骨1若 下顎骨左(×P4M12×)関節突起あり、M12は完了直後。若 下顎骨破片2、環椎(半欠)1若、肩甲骨右破片4、上腕骨左下1若(下あり)、右1若(上下あり) 尺骨右1若、寛骨(腸のみ)左1、脛骨左中間1、中手・中足骨2若、上1 基節骨3若、椎骨4若、肋骨破片20、四肢骨破片20、破片54 | 119 |
| SK259 | 橈骨左中間1 | 1 |
| SK291 | 橈骨左下1若(下になし) 環椎(半欠)1幼、橈骨左1(上下なし)若 | 3 |
| SK292 | 頭蓋骨破片20、上顎骨右(×P4)、軸椎1幼 | 22 |
| SK293 | 切歯骨右+前頭骨~頭頂骨1幼、上腕骨右下破片1、寛骨右1 | 3 |
| SU295 | 側頭骨左下顎関節窩部分+後頭骨+頬骨左右1 上顎骨左(cm234) 幼 下顎骨左(i123cm234M1)M1未出、歯槽開く。関節突起あり 同一 下顎骨右(i123cm234M1) 環椎1、肩甲骨右1、上腕骨左上1、右上1 | 8 |
| SK298 | 軸椎1 | 1 |
| SK317 | 中手・中足骨上1 | 1 |
| SU335 | 肋骨破片2 | 2 |
| SK358 | 頭蓋骨破片1、肩甲骨左破片1、右1 上腕骨左1若(上あり、下つく)、右1若(上あり、下つく)、橈骨左中間1、右中間1、尺骨左1 右1若、右破片1若、大腿骨左下1、右中間1、脛骨右上1若(上なし)、椎骨12、肋骨破片20 | 45 |
| SK398 | 上腕骨左1、脛骨左下1 | 2 |
| SK402 | 大腿骨左上1 | 1 |
| 遺構外 | 中手・中足骨1、上1 | 2 |
| 計 | | 566 |

註 I: 切歯、C: 犬歯、P: 前臼歯、M: 後臼歯、i: 乳切歯、c: 乳犬歯、m: 乳臼歯、I・P・M・i・mに伴う数字は歯の順番を示す。()は顎骨があることを示し、×は歯が脱落していることを示す。
腸: 腸骨部分、坐: 坐骨部分。上: 近位部、中間: 中間部、下: 遠位部、上・中間・下のないものは完存。幼: 幼獣、若: 若獣、幼・若のないものは成獣。()内の「あり」は骨端部がはずれてか
つある場合、「なし」は骨端部がはずれてかつない場合、「つく」は骨端部が癒着している場合。

表1 イヌ出土内容

第6節 工学部14号館地点出土の哺乳類

| 遺構 | 出土部位・量 | 計 |
|-------|--|----|
| SK3 | 下顎骨右1、大腿骨右1 | 2 |
| SK194 | 上顎骨右1、下顎骨右1、上P4左1 上腕骨左上破片1、右上破片1、寛骨(腸のみ)右1 大腿骨左下1、右下1、脛骨右下1 踵骨右1、中手・中足骨下1 | 11 |
| SK258 | 上腕骨左上1 | 1 |
| SK331 | 下顎骨右1 | 1 |
| SK338 | 大腿骨左上1 | 1 |
| SK358 | 上腕骨左下1、大腿骨左上1、脛骨左下1 | 3 |
| SU385 | 寛骨(坐)右破片1 | 1 |
| 遺構外 | 大腿骨右下1 | 1 |
| 計 | | 21 |

註 表1参照。

表2 ネコ出土内容

| 遺構 | 出土部位・量 | 計 |
|-------|--|----|
| SU2 | ウシ寛骨(腸)左破片2、ウマ膝蓋骨左1 ウシ or ウマ椎骨破片4、肋骨破片1 | 8 |
| SK22 | ウシ寛骨(腸)左破片1、ウシ or ウマ破片1 | 2 |
| SK24 | ウシ脛骨右上1 | 1 |
| SU38 | ウシ or ウマ椎骨破片1 | 1 |
| SX60 | ウシ踵骨右破片1 | 1 |
| SX60 | ウシ or ウマ椎骨破片1、肋骨破片1 | 2 |
| SK100 | ウシ膝蓋骨右1 | 1 |
| SK200 | ウシ or ウマ椎骨破片1 | 1 |
| SK293 | ウシ or ウマ四肢骨破片1 | 1 |
| SK326 | ウマ頭蓋骨ほぼ1個分① 上顎骨左(P234M123) 上顎骨右I3 (P234M123) ウマ頭蓋骨ほぼ1個分② 上顎骨左I2 (P234M123) 上顎骨右(P234M123) | 2 |
| SK356 | ウシ膝蓋骨左1 | 1 |
| SK358 | ウシ大腿骨左下破片1、ウマ脛骨右中間1 | 2 |
| 遺構外 | ウシ or ウマ四肢骨破片1 ウシ寛骨(腸)右破片1、陸獣破片1 | 3 |
| 計 | | 26 |

註 表1参照。

表3 ウシ・ウマ出土内容

| 遺構 | 種・部位・量 | 計 |
|-------|-------------------------------|-----|
| SU2 | ヒツジ橈骨右下1、シカ角破片1、 オキゴンドウ?歯1 | 3 |
| SK16 | 陸獣四肢破片1 | 1 |
| SU18 | ヒト or 家畜破片2、陸獣破片30 | 32 |
| SK19 | ブタ?大腿骨左中間1 | 1 |
| SK25 | 陸獣破片33 | 33 |
| SK89 | 不明破片5 | 5 |
| SK188 | 陸獣破片4 | 4 |
| SK194 | 陸獣破片1 | 1 |
| SK200 | ブタ寛骨(腸)左1若 | 1 |
| SK292 | 陸獣破片1 | 1 |
| SU295 | 陸獣破片1 | 1 |
| SK317 | 陸獣破片10 | 10 |
| SK337 | ウサギ脛骨左中間1 | 1 |
| SK358 | ブタ肩甲骨右破片1、陸獣破片3 | 4 |
| SK398 | 陸獣破片1 | 1 |
| 遺構外 | 家畜破片2 | 2 |
| 計 | | 101 |

註 表1参照。

表4 その他出土内容

| | |
|-----------|-------|
| P2P3間の高さ | 19.5 |
| P3中央部での高さ | 20.5 |
| M1中央部での高さ | 23.7 |
| M1M2間での高さ | 23.1 |
| P3中央部での厚さ | 9.9 |
| M1中央部での厚さ | 12.3 |
| M2中央部での厚さ | 10.7 |
| M1長さ | 19.4 |
| 下顎骨全長1 | 136.0 |
| 下顎骨全長2 | 133.3 |

註 表1参照。計測点は斎藤弘吉(1963)に従った。計測値の単位はmm。

表5 SK16出土イヌ右下顎骨の計測値

| 遺構 | 資料 | P4長さ | M1長さ |
|-------|----------------------------|--------|------|
| SU18 | 上顎骨右(I1 × I3C) - (P34M12) | 16.1 | |
| SK25 | 上顎骨左(× I23C × P234M12)若 | 20.1 | |
| | 下顎骨左(× × I3C × P2m34M123)若 | | 22.2 |
| SK188 | 下M1右1 | 22.0 ± | |
| SK258 | 下顎骨左(× P4M12 ×)若 | | 21.9 |
| SK292 | 上顎骨右(× P4) | 17.0 | |

註 表1参照。P4・M1長さの単位はmm。±付きの数値は近似値を示す。

表6 その他のイヌ計測値

きい。頭蓋骨 ①の上顎では右第3切歯と左右の前臼歯・後臼歯が見られた。これらの臼歯の咬合面中心部と歯根中心部との距離から推定される年齢は4～5歳である(西中川編 1991)。頭蓋骨 ②の上顎では左第2切歯と左右の前臼歯・後臼歯が見られた。①と同様に臼歯から推定される年齢は10～12歳である(西中川編 1991)。頭蓋骨以外には右脛骨中間部と左膝蓋骨が見られ、膝蓋骨は端部が切断されていた。ウシまたはウマとした12点のうち、椎骨破片5点と肋骨破片1点は切断されている。

| 資料 歯種 | ① | | ② | |
|----------|------|------|------|------|
| | 長さ | 幅 | 長さ | 幅 |
| P2 | 35.7 | 21.9 | 37.7 | 24.0 |
| P3 | 28.0 | 23.4 | 26.5 | 26.3 |
| P4 | 26.3 | 22.5 | 25.4 | 27.1 |
| M1 | 24.4 | 24.3 | 22.5 | 25.3 |
| M2 | 24.2 | 21.3 | 22.9 | 23.9 |
| M3 | 24.7 | 19.0 | 27.8 | 22.0 |

註 表1参照。長さの単位はmm。

表7 ウマの歯計測値

4. その他(表4)

ブタは関節部のない右肩甲骨と左寛骨(腸骨部分のみ)が見られ、ブタ?とした資料は左大腿骨中間部である。ヒツジは右橈骨遠位部が1点出土し、ウサギは左脛骨中間部が1点出土した。シカは角の破片であり、切断痕が見られた。オキゴンドウ?は歯の歯根部下半分を切断した資料である。種のわからなかった資料は、陸獣破片86点、家畜破片2点、ヒトまたは家畜破片2点、不明破片5点が見られた。

[引用文献]

- 斎藤弘吉 1963 『犬科動物骨格計測法』
 西中川駿編 1991 『平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書 古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』
 山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』7、125-131頁



写真1イヌ(約2/3)

1・2.下顎骨 3・8.上腕骨 4・9・12.尺骨 5.脛骨 6.環椎 7.軸椎 10.大腿骨 11.橈骨 1・2・4・8・11・12は左側、3・5・9・10は右側。1・3～5は幼獣、2・6～10は若獣、11・12は成獣。

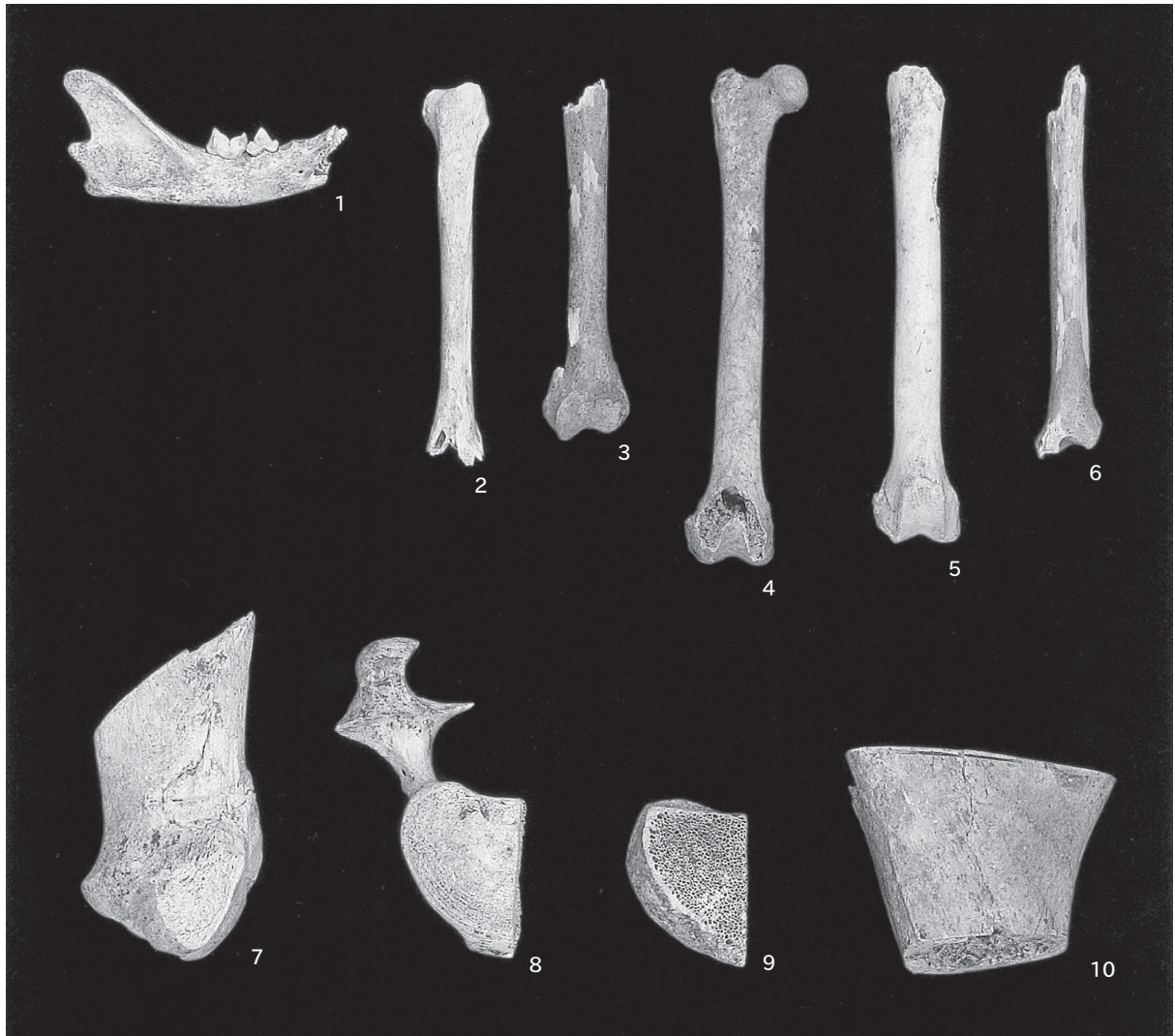


写真2 ネコ・その他 (約 2/3)

1～6. ネコ (1. 下顎骨 2・3. 上腕骨 4・5. 大腿骨 6. 脛骨) 7. ウシ踵骨 8・9. ウシ or ウマ椎骨 10. ウシ寛骨 (腸骨部分) 2・3・6 は左側、1・4・5・7 は右側。7～10 には切断痕が見られる。

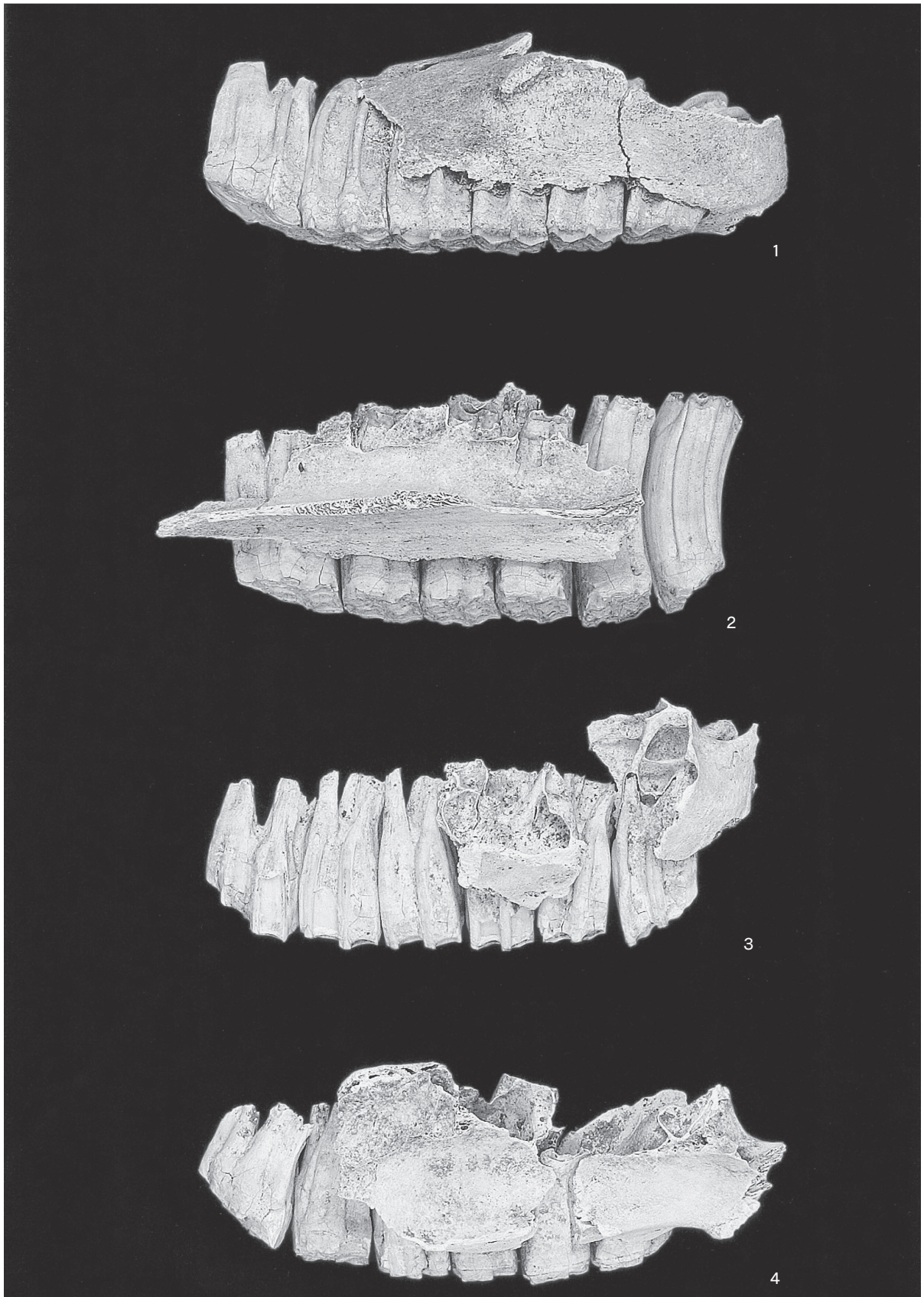


写真3 ウマ(約1/2)

1. ウマ①上顎骨左側(外面) 2. ウマ①上顎骨右側(内面) 3. ウマ②上顎骨左側(外面) 4. ウマ②上顎骨右側(内面)

第V章 工学部 14 号館地点をめぐる諸問題

- 第1節 工学部 14 号館地点の空間構成 成瀬 晃司
- 第2節 工学部 14 号館地点出土の磁器・陶器・土器について 大成 可乃
- 第3節 東大構内遺跡出土の人形にみる一考察
－工学部 14 号館地点の人形の様相と各期にみる成形技法－ 安芸 毬子
- 第4節 江戸時代の貨幣流通についての一考察
－工学部 14 号館地点 SU335 出土の銭差をふまえて－ 大貫 浩子
- 第5節 工学部 14 号館地点の一括廃棄土壌から出土した「鉄丹ベンガラ」の
生産関連資料に関する調査 北野 信彦・降幡 順子・肥塚 隆保
- 第6節 近世ガラスの化学分析 西田 泰民・吉田 邦夫

第1節 工学部14号館地点の空間構成

成瀬 晃司

はじめに

工学部14号館地点はI章でも触れたように、江戸時代を通じて御先手鉄砲組組屋敷内に位置し、検出された近世の遺構、遺物のほぼ全てが組屋敷内居住者に関する資料である。

江戸時代の組屋敷に関しては新宿区・四谷三丁目遺跡（新宿区四谷三丁目遺跡調査団1991）、南町遺跡（新宿区南町遺跡調査団1994）、早稲田南町遺跡（新宿区遺跡調査会1994）、荒木町遺跡（荒木町遺跡調査団1994、新宿区荒木町遺跡調査団1998）、住吉町遺跡（新宿区遺跡調査会1996）、文京区駒込鰻縄手御先手組組屋敷（都内遺跡調査会1997）などで、発掘調査が実施されている。本稿では、工学部14号館地点で検出された遺構の特性（空間分布、変遷）を捉えた上で、他遺跡での調査成果も踏まえ、本地点の空間構成の復元を試みたい。

1. 御先手鉄砲組組屋敷と調査地点の位置

御先手鉄砲組組屋敷は、中山道を挟みその両側に位置していたことが絵図から読み取ることができ（I-5～7図）、本調査地点は中山道の東側で加賀藩邸に3方を囲まれた長方形区画の一面に比定することができる。安政3（1856）年の『諸向地面取調書』によれば、この本郷森川宿に在した御先手鉄砲組に関し、「内藤甚左衛門組 六千九百九十七坪式合六勺」とある（史籍研究会1982）。ここに表記された面積は中山道を挟んだ東西両方の組屋敷面積で、本地点を含む中山道東側の区画は、明治16年作成の参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図（以下、東京図測量原図と略す）から、南北270m、東西36m、面積にして9720m²、約2950坪に比定される。一方、残り約4000坪は切絵図と現在の路地との対比から、本郷通りを挟み西側、西方2丁目21～26付近約13,000m²に比定され、面積的にほぼ一致し、西方2丁目内の路地の多くが江戸時代から踏襲されていることも確認された。そこで、その路地を視点に東京図測量原図に調査地点の位置を対比されたのが図1である。東京図測量原図は幕末の切絵図と比較した場合、その町割りが残っている点、西洋式測量技術によって正確に表記された上、等高線を含む地形図記号によって、土地利用や地形の状況を詳細に把握することが可能な点で江戸と現代をつなぐ有益な資料として扱われている。東京図測量原図には地境、建物配置はもとより各敷地内の井戸も「#」と表記されており、その箇所を「○」でトレースした。この地図情報をベースに検出遺構のうち地図と対応可能な井戸、地境（柱穴列）との関係を以下に提示する。

その結果、調査区域内には2基の井戸が対応し、北側の井戸をA、南側をBとした。本調査においては総数11基の井戸が検出されているが（●印）、そのうち近代以降の遺物が出土した井戸はD11グリッドに位置するSE199と、C15グリッドに位置するSE416の2基である。この2基の井戸は若干の誤差はあるもののSE199がAの井戸、SE416がBの井戸と対応し、東京図測量原図に示された井戸に対比することができる。一方、本地点の調査ではFライン付近を南北に伸びる平

行した2条の柱穴列が検出されている(SB64、SB65)。街区東側の大学構内との境界線とほぼ重なり同軸上に伸びていることから、この柱穴列を地図上の屋敷境と対比することができる。以上、路地、検出遺構(井戸、柱穴列)から調査区域を明治16年の地形図へと対比した結果、位置、傾きともに比較的良好な結果が得られ、本調査区域は長方形街区の中央やや南寄り、裏手1/2辺りに位置付けることができ、奥行き20間を測る本街区の間口は現在の本郷通りのほぼセンターライン付近に復元することができる。

2. 境界施設と屋敷割り

この結果を踏まえ、本地点で検出されたもう一つの境界遺構を検証したい。それは調査区内を東西に横断する柱穴列で5ライン付近に位置するSB82と、9ライン北1m付近に位置するSB397である。東京図測量原図に対比させると、SB82は東西に鍵形に伸びる建物の南に位置し、樹木の表記と推定される空き地を取り囲むL字状破線の北縁部分とほぼ一致し、SB397は東西方向に伸びる建物の北壁に一致する。この区画を中山道へ向けて延長するとそこに面した建物にあたり、明治16年段階では屋敷境としては機能していない。逆にこの場所に位置する屋敷の範囲は調査区北端と、井戸Aの南側に表記されている。井戸Aの南側、12ライン南2mは本調査において地境遺構は検出されなかったものの遺構分布状況から屋敷境を想定したラインと一致する。さらに井戸Bの南側でやはり遺構分布状況から屋敷境が想定される16ライン付近は、東京図測量原図において東西に伸びる建物の北縁に位置する。この建物は南側は鍵状に凸凹しているが、北壁は直線を成し、その北東角から東へ境界と推定される破線が伸びている。一辺が直線を呈している壁面は中山道など道路、即ち境界に面している(規制されている)部分に用いられている周囲の状況から、この建物北壁とそれに続く破線は屋敷境を意味しているものと推定される。東京図測量原図にみられる屋敷割りは1876年の明治東京全図(I-8図)とも、1895年の東京実測全図(I-9図)とも異なり、この区域の屋敷割りが短期間で変更を繰り返してきたことは明らかであるが、本郷通りに面した区画の変化に対し、奥にあたる東側では緩やかに変化しており、本調査区内においても東京図測量原図に対応させると、地境を継承する12ライン南2m、建物の壁面にあたり地境が想定される9ライン北1mと16ライン、一屋敷地内に含まれているが、屋敷内の区画に受け継がれている5



図1 明治16年の調査区周辺と井戸の位置
(参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図に加筆・トレース)

ラインと、いずれも建物を跨ぐ例はなく、近世に想定された屋敷割り（間口10間）が踏襲されていることが読み取れる。

調査区内における屋敷境はいずれの境界間も10間間隔と等しい。先述したように東京図測量原図では南北270m=150間を測り、全ての屋敷の間口が10間で統一されていれば15ブロックに分割される。しかし1876（明治9）年の明治東京全図では街区ほぼ中央に東西を分割する境界が設けられ、調査区に対比される東側街区は16区画、本郷通りに面した西側は7区画と、東側の倍以上の間口を有し、東西非対称の配置となっている。さらに北西部にはL字状の道路が整えられている。東京図測量原図では屋敷境が不明瞭な部分も多く断定は困難であるが、建物配置からみて間口から奥行き20間を通す屋敷の存在は明らかで、東西中央で分割された区画が統合された箇所も認められる。仮に1軒に1基の井戸を想定すると19軒を数え、その分布状況から1軒あたりの面積も均一でないといと推定される。東京実測全図では根津から上ってくる言問通りが本郷通りまで開通したことにより長方形街区の北側が南北に寸断される。また南側ではさらに区画の変化が認められるが、東側に限ってみると13区画を数える。言問通り北側では中央で分割された東側の区画が消滅し第一高等学校校内に吸収されているが、その範囲は過去の3区画分に相当し、南側と併せて16区画を想定することができる。このように明治期における区画変化は16区画を基本的なあり方とし、それを基準に変化していたと推定される。即ち、調査区域内では間口を10間として均一に区画されているが、街区全体としては10間未満の区画が存在していたと言えよう。

3. 各区にみられる遺構配置（図2～5）

続いて、検出された遺構を各区画単位でその分布、変遷状況をみていきたい。屋敷割りは繰り返し述べているように東西に伸びる柱穴列群、遺構の空閑地帯により、北から順にA区、B区、C₁区、C₂区、C₃区と復元したが、C₃区に関しては調査範囲が狭く、本稿の分析からは割愛した⁽¹⁾。なお、本報告書で扱うSU、すなわち地下室は、開口部からオーバーハングして床面に達する形状の遺構を一括した。本稿ではその一群に対し、以下のような細分を試みる。

地下室A：床面、壁面ともに調整が施され、平滑に調整されているタイプ。

地下室B：床面、壁面ともに調整が未達で、工具痕が残り、各面境界の稜線が曖昧なタイプ

A区の様相

A区は5ライン付近を東西に伸びるSB82を南限とする区画で、北限に関しては2ライン以北の攪乱のため不明である。間口を10間とすれば攪乱中に存在することになる。A区より検出された主な遺構には地下室、井戸、長方形土坑、不整形土坑（採土坑）、池、ピットがある。

地下室AにはD2グリッドに位置するSU2、B・C4グリッドに位置するSU38の2基があり、ともに階段を有する。SU2の昇降口は遺構南東部にあり、室部の東側に階段を有する。室部床面積は4.9m²を測る。出土遺物は東大編年Ⅷc期に帰属する遺物を主体とし、1～6層より出土している。ただし8、10層はロームブロック主体土であることから、天井崩落後のくぼ地へ廃棄された遺物群である。遺物は調査時に覆土一括として取り上げたため、7層以下の遺物との判別は不可能であるが、7層以下の覆土の大半がロームブロック主体土であるため、遺物含有量は少ないと推定される。7層上面が階段東側に広がるテラス部分の坑底とほぼ一致することから、天井崩落後のくぼ地を埋め戻した後、再度テラス部分から6層下面のラインまでを掘り起こし、廃棄遺構とした可能性も考えられる。ただし、本遺構の廃絶年代に関しては出土遺物中に18世紀代の遺物が含まれるが、散見される程度で、

まとまりを抽出するには至らず、18世紀代の可能性を指摘するにとどめたい。SU38の昇降口は遺構西側にあり東側の室部へ接続する。ステップは下から2段が室部へ張り出している。本遺構の階段部はスロープに木製の階段を付設した状態から、木杭で固定された土留め板枠内にローム土を充填した階段へと変化している。スロープ段階の室部床面積は7.7m²を測る。遺物は18世紀後半の陶磁器類が出土している。本遺構も天井部が崩落しているが、崩落以前に1m前後の覆土が堆積しており、遺物の年代観が遺構の廃絶年代には直接結びつかないものの、それに近い可能性は指摘できる。地下室BにはE3グリッドに位置するSU18がある。本遺構は加賀藩邸との屋敷境としたSB64、65に隣接し、屋敷最奥部に位置している。室部床面積は4.8m²を測る。出土遺物は寛保3(1743)年銘遺物をはじめ、東大編年VI～VII期に帰属し、18世紀後半を廃絶年代の下限とする遺構である。このようにA区より検出された地下室はいずれも19世紀以前には廃絶されていたと推定される。

井戸はB3グリッドに位置するSE83、E2グリッドに位置するSE17の2基がある。SE83からは遺物の出土がなく、その廃絶年代は不明である。一方、SE17も17世紀代の陶磁器類が数点出土したにすぎないが、直径110cmを測るその規模から18世紀以前に構築された可能性は高い。またその位置がSB64、65上にあることから、明治期から遡れる屋敷割りとは異なる規制下で構築された可能性が高い。

長方形土坑は5ライン付近、SB82の北側に隣接して集中する傾向が看取される。西からSK51、SK50、SK39、SK53、SK88、SK34、SK25がそれに該当し、SK87を除き遺構主軸はSB82と平行する東西方向である。出土遺物の年代観はSK87、SK25が17世紀、SK50が18世紀前半、SK51が18世紀、SK39、SK25が19世紀前半、SK53が19世紀中葉に位置付けられ、長方形土坑が屋敷奥部かつ屋敷境近接域に江戸時代を通して構築されていたことがわかる。

不整形土坑にはE2～E4グリッドにかけて位置するSK3がある。本遺構は事実記載でも述べたように大きくはa、bとした2遺構の重複であるが、複雑な平面形を呈する遺構形態から採土坑と考えられる。また、a、bともに加賀藩邸との地境際で南北に伸びる不整形を呈しており、土採り行為が屋敷内最奥部の一定区域内で繰り返し行われていたことを示している。

以上、A区で検出された主な遺構の分布状況を振り返ったが、それをまとめると、地下室AはC、Dライン付近に位置し、昇降口は中山道または南を向いている。その使用年代は18世紀代に収まる。長方形土坑はB区との地境付近に集中し、それは江戸時代を通し、その区域に構築、廃絶が繰り返された結果であった。井戸はSB64、SB65と重なるSE17を除くと、中山道よりのBラインに位置する。またBラインからCラインにかけてピットが多数存在する。残念ながら共伴関係を捉えることはできなかったが、この区域においてなんらかの境界を示しているといえる。ピットの東側でSU38の北側、C2グリッドを中心とする区域にはほとんど遺構がなく、逆の見方をすれば先に列挙した地下室、採土坑、長方形土坑が加賀藩邸との境界付近からB区との境界付近へL字状に分布していると読み取ることができ、地面を掘削するような土地利用が一定の区域内に規制されていたとみることができる。

ピットが集中するB4グリッドにはSU38廃絶後にSK36が構築されている。本遺構は平面楕円形、断面皿状を呈する浅い土坑で、厚さ数cmの漆喰が全面に貼られている。また1ヶ所の張り出しを有し、そこには瀬戸・美濃の甕(TC-15-b)が横位の状態で置かれていた。この甕も漆喰で固定されている。その状況から池と考えられ、この区域が庭として利用されていたことが窺われる。

B区の様相

B区はSB82を北限とし、9ライン北1m付近を東西に伸びるSB397を南限とする区画で、その

間約18mを測る。B区より検出された主な遺構には地下室、井戸、長方形土坑、不整形土坑（採土坑）、ピットがある。

地下室Aには階段を有するタイプと、開口部の直下に室部を有するタイプの2種類が存在する。前者ではB6、7グリッドに位置するSU63がある。区画ほぼ中央部に位置し、南側に昇降口が設けられている。室部は階段昇降方向に対し、直交方向に主軸を有する長方形を呈し、ステップの下3段が室内へ張り出している。床面積は9.4m²を測る。北東角には排水坑と推定される不整形の浅い落ち込みが、西壁北側には小室が付設されている。出土遺物の下限は東大編年Ⅶ期にあり、廃絶後の埋め戻しは天井崩落以前に完了していることから、18世紀代に廃絶されたことが確認される。後者にはC8グリッドに位置するSU176がある。本遺構の開口部は南壁側にあり、開口部壁面から室部天井へは明確な稜線を有し、ほぼ直角に広がる。室部はほぼ正方形を呈し、床面は平坦に、壁面は垂直に立ち上がり、ともに丁寧に整形されている。床面積は8.1m²を測る。出土遺物は2時期に分かれるが、本遺構廃絶に伴う埋め戻しには東大編年Ⅳb～Ⅴ期段階の遺物が伴い、18世紀前半には廃絶されたことが確認される。

地下室Bには開口部から袋状に室部が広がるE6グリッドのSU396、開口部から断面撥形に広がるE7グリッドのSU392がある。床面積は前者が2.3m²、後者が3.9m²を測る。出土遺物はSU392が東大編年Ⅷd期、SU396がⅧc期に帰属し、SU63、SU176と廃絶年代に大きな開きが認められる。

井戸はB5グリッドに位置するSE173、C7グリッドに位置するSE174、C8グリッドで、SB397ライン上に位置するSE300がある。SE173は直径約80cmと小形の井戸である。遺物はなく廃絶年代は不明であるが、重複するSK66に切られていることから、近代に下ることはない。SE174、SE300の廃絶年代は出土遺物の年代観から17世紀末から18世紀初頭に位置付けられる。そのうちSE300はSB397上に位置することからSB397による区画の成立が18世紀以降に設定されたことを示唆する遺構である。

長方形土坑は多数検出されているが、SB397に隣接するSK309、SK308、SK301、SK302、SK360、SK359、SK394をはじめ全ての遺構が7ライン以南即ち区画の南半分より検出されている。遺構廃絶年代では18世紀前半に7ライン周辺のSK97、SK175、SB397に近接するSK360、SK359、18世紀後半にE8グリッドのSK394、C8グリッドのSK317、19世紀前半にSB397に隣接するSK301、SK308、SK309と長方形土坑は18世紀～19世紀前半を通し、連綿と構築されているが、そのなかでもSB397に隣接する遺構は19世紀前半に帰属する傾向が強い。

不整形土坑は、やはりその形状と埋没過程から採土坑として掘削された遺構と推定される。D・E5グリッドに位置するSK101、D6グリッドに位置するSK140、E6・7グリッドに位置するSK391がある。SK391は出土遺物の年代観から18世紀初頭に埋め戻されたと推定される。確認面からの平均深度は約80cmを測り、浅く、広く土採り行為が行われている。この様相は予想される埋め戻し年代も含めてA区のSK3bと共通する。

ピットはC、Dライン間を南北に伸びるグループと、7、8ライン間を東西に伸びるグループが認められる。しかしいずれのグループも共伴するピット列を見いだすことはできなかった。

以上、B区から検出された主な遺構を振り返った。それぞれの様相をまとめると地下室AはB～Cラインの区画南側に分布し、昇降口は南側を向いている点、18世紀代に廃絶された点で共通し、出土遺物の年代観からSU63が18世紀後半、SU176が18世紀前半に位置付けられ、地下室Aは一時期に1基が機能していたと推定される。井戸は17世紀代の遺構も含めてB～Cラインの区画南側

に分布し、地下室Aの分布域と同一傾向を示す。長方形土坑はSB397近辺、即ちC₁区との境界付近に多く分布し、それ以外の遺構もB区中央である7ライン付近より南側に分布する傾向が認められた。採土坑と推定される不整形土坑はDラインより東側で加賀藩邸との境界付近に集中して分布する。またピットの分布域北西エリアでは17世紀代と推定されるSE173、近代に帰属するSK66を除き、遺構密度が希薄で18世紀以降幕末までオープンエリアとして利用されていた可能性が高い。このように主要遺構の分布状況は、各遺構毎の傾向をはじめ、全体的にもB、C・5、6グリッドを除く逆L字状の分布を呈しているといえる。

C₁区の様相

C₁区はSB397を北限とし、12ライン南約2mの遺構空闲地を南限とする区画とした。その間約18mを測る。主な遺構には地下室、井戸、長方形土坑、不整形土坑、ピットがある。

地下室Aには階段を有するSU254、SU295と開口部から垂下するSU294がある。SU254はD10・11グリッドに位置し、昇降口は南側に設けられている。室部は長方形を呈し、床面積は9.6m²を測る。階段の室部への張り出しはない。室部中央には排水施設と推定される不整形の浅い落ち込みが存在する。覆土は昇降口からの流入によって堆積しており、天井部も埋没後に陥没していることから、出土遺物は本遺構の埋没過程で廃棄されたものである。よって出土遺物の年代観から18世紀前半が本遺構の廃絶年代の下限となる。SU295はC・D11グリッドに位置し、昇降口は東側に設けられている。室部は正方形を呈し、床面積は13.7m²を測る。階段の室部への張り出しはない。また北壁には床面積約1.8m²の棚状施設が設けられており、それを併せると15.5m²と、本地点最大規模の地下室である。覆土最下層には天井崩落によるローム土が堆積しており、遺構廃絶から埋め戻しに至る早い段階で天井が崩落している。出土遺物のうち19世紀以降の遺物は天井崩落後の第1層より出土した遺物で、本遺構埋没過程で廃棄された遺物の下限は18世紀後半に位置付けられる。開口部から垂下する地下室SU294はC11・12グリッドに位置する。室部南側には昇降装置の固定用と考えられるピットが4基存在するが、そのうち2基が天井下に位置することより北側から傾斜した昇降装置と推定される。室部は平行四辺形を呈し、床面積は約7m²を測る。出土遺物には東大編年V～VI期とVIIIb期と2時期にピークが認められるが、VIIIb期の遺物が本遺構を切るSK293(VIIIa～VIIId期)と遺構間接合をすることから調査時における重複部分での遺物の混在と判断され、本遺構の下限はVI期(18世紀中葉)に位置付けることができる。

井戸はB10グリッドに位置するSE198のみである。本遺構には共伴する遺物がないが、規模が直径100cmと小さいこと、覆土が黒色土を呈することなど、17世紀代の様相と共通する。

長方形土坑はB9グリッドのSK186(19世紀前半)、SK185(18世紀後半)、E9グリッドのSK258(19世紀前半)、E10グリッドのSK402(19世紀)、E11グリッドのSK350(18世紀前半)、SK291(19世紀中葉)などがある。このほかにスロープ状の施設を有するSK245(18世紀前半)が存在する。これらの遺構の廃絶年代は18世紀から19世紀中葉と構築から廃絶が繰り返行われたことを示しているが、特にC₁区の北端と東端に集中して構築され、この区域は他の不整形遺構も含め、著しい重複が認められる。またC₁区南端にはSK293、SK292のような不整形遺構が集中する。

以上、C₁区から検出された主な遺構を振り返った。地下室Aは区画南部(C・D～10・11グリッド)に3基が集中して分布し、いずれも18世紀代に帰属するが、出土遺物の年代差より1時期には1基のみが使用され、廃絶と構築が繰り返行われていたことがわかる。長方形土坑はA、B区の様相と異なり区画南端に東西方向の集中分布は認められず、逆に不整形土坑を合わせた一群が区画北端で東西方向に密集する様相が看取された。その結果、SU294、SU295の推定開口範囲を想定すると、

Cライン東2m以西、9ライン南2m以南の区域にはSK185を除き、不整形遺構、ピットが僅かに存在するのみの空閑地が認められる。また、加賀藩邸との地境からも約1.5mの空閑地が存在し、地境に沿った大形不整形土坑は存在しない。このように本区画はA、B両区画とは土地利用のあり方に若干の差異が認められる。

C₂区の様相

C₂区は12ライン南2mより、16ラインまでの18mを範囲として設定した。主な遺構には地下室、井戸、長方形土坑、ピットがある。

地下室AにはC13・14グリッドに位置するSU327、C14・15グリッドに位置するSU389、E13・14グリッドに位置するSU382、D・E15グリッドに位置するSU335の4基が該当し、SU335を除き階段を有するタイプである。SU327は南側に昇降口を有し、階段は下2段が室部内へ張り出している。室部はほぼ正方形を呈し、床面積は10.5m²を測る。事実記載でも触れているように本地下室の壁面には、作業期間、職人に関する情報が釘書きされている。遺物は覆土の大半が天井崩落によるロームブロック主体土で構成されていることから量的には少ないが、18世紀前半の土器類を主体としている。出土遺物の年代観と「丑」年の釘書きから、構築を18世紀以降と仮定した場合、1709、1721、1733、1745年が候補に挙げられる。SU389は南側に昇降口を有し、階段は下1段が室部内へ張り出している。また階段上部は18世紀前葉の推定廃絶年代を有すSK383を切っている。室部は台形を呈し、床面積は8.2m²を測る。遺物は18世紀末～19世紀初頭の陶磁器類が主体を占めるが、いずれも上層からの出土で、天井崩落後の廃棄と考えられる。よって、その一群の年代観を上限とすると、本遺構の廃絶時期は18世紀中～後葉に位置付けられる。SU382は南側に昇降口を有し、階段下2段が室部へ張り出している。床面には階段張り出し部を取り囲むように3基のピットが存在し、壁面に認められる天井の痕跡から、ピットまでが開口していたと判断される。室部は台形を呈し、床面積は5.3m²と比較的狭い。出土遺物は18世紀後葉の陶磁器類を主体とし、18世紀前葉を推定廃棄年代とするSK390を切っていることから、使用年代は18世紀中葉に位置付けられる。SU335は確認面からの深さは120cmと浅いものの、南～北壁にて天井の一部が残存し、覆土最下層には天井崩落土であるロームブロックが堆積していることから、地下室と認識できる。床面はほぼ正方形を呈し、面積は4.5m²を測る。天井崩落土上の覆土には多量の焼土が含まれ、遺物の年代観より元禄16(1703)年の火災に比定される。地下室BにはD・E14グリッドに位置するSU381がある。Bタイプの中では唯一階段を有する。室部西側に昇降口を有し、階段の大半が室部へ張り出している。階段、室部ともに整形痕は全く認められず、全体的に工具痕による凹凸が著しい。床面は楕円形を呈し、面積は2.8m²と狭い。階段部の様相が整形を前提とした粗掘りとは考えられないこと、覆土に天井の崩落土が存在しないことから、本遺構は製作途中段階での廃絶とは考えがたく、採土坑の可能性が高い。なお本遺構はSU382を切って構築されていることから、埋没年代は19世紀初頭と推定される。

井戸はB・C14グリッドに位置するSE326、B15グリッドに位置するSE333、D15グリッドに位置するSE371、C15グリッドに位置するSE416の4基があり、そのうちSE416は近代である。SE328には遺物がなく、廃絶時期を特定することはできないが、明治前半の遺物を含むSK331に切られていることから、江戸時代に帰属すると推定される。SE333は直径100cmを測る小形の井戸である。覆土には多量の焼土が含まれており、陶磁器の年代観から元禄16(1703)年の火災によって廃絶されたと考えられる。SE371は本地点において唯一付帯施設が確認された井戸で上部のテラス部には井桁の痕跡が確認された。出土遺物の下限は19世紀初頭である。

長方形土坑は、12ライン南約2m、遺構配置から想定したC₁区との境界に分布する一群と、Dライン以東の一群の2つの分布域に分かれる。前者にはSK311(19世紀前葉)、SK507(19世紀中葉)、SK319(19世紀中葉)の3基が存在し、主軸方位はいずれも東西方向を示している。廃絶年代も19世紀代に集中しており、この区域に特定されていた様相が窺われる。またSK507は確認面からの深さが245cmと深く、壁面には昇降用の足掛け穴が付けられている。壁面には工具痕が残り、特に床面付近で顕著である。後者には主軸方向が東西方向を示すSK378(19世紀中葉)、SK337(19世紀前葉)、SK338(19世紀前半)と、南北方向を示すSK377(19世紀中葉)、SK399(19世紀中葉)、SK373(18世紀)、SK379、SK388(18世紀中葉)、SK600、SK387(19世紀前半)SK461(19世紀中葉)がある。C₁区との境界域に分布する一群と同様に、19世紀代の廃絶を示す遺構、近接する境界施設と平行方向の主軸方位を有する遺構が多数を占める。

ピットにはB-Cライン間で南北方向の集中域と、16ライン付近で東西方向の集中域が認められる。ピット集中域にはその他の遺構はなく、継続的に境界として利用されていたことを窺わせている。16ライン付近の一群はC₁区との境界より18mを測り、C₂区の南限と推定される。

以上が、C₂区から検出された主要遺構の概観である。地下室Aの廃絶年代はいずれも18世紀代に収まり19世紀に使用されていたものはない。その分布はC-Dライン間とE-Fライン間に集中し、階段を有する地下室については全て南側からの出入りとなっている。井戸はB-Cライン間に2基、Dラインに1基存在するが、いずれも14-16ライン間にあり、屋敷地南東部に築かれていたといえる。長方形土坑はC₁区との境界域にそれに沿うように築かれた一群と、Dライン-SB64間に南北方向に築かれた一群とに分かれるが、いずれも屋敷地縁辺部に位置する点で共通する。ピット群は相伴関係については認識できなかったが、B-Cライン間で南北方向の集中が認められることより、屋敷の表、裏といった屋敷地内の境界として位置付けられる。そして、C₁区との境界南約1mから14ライン、Eライン以西の一面はピットが散見される程度で、18世紀以降、空地地として一貫した利用状況を窺い知ることができる。

3. 検出遺構の変遷 (図2~4)

17世紀

本段階に廃絶された主な遺構には地下室A、井戸、方形土坑、採土坑があるが、次段階以降の遺構密度と比較して、遺構数は極めて少ない。井戸は直径が約100cm前後と小形で、それを反映して足掛け穴を有する特徴も併せ持つ。そのうちSE17(A区)は加賀藩邸の境界(SB64、SB65)上に、SE300は、B、C₁区の境界(SB397)上に位置し、これらの区割りが17世紀まで遡らないことを示している。遺構数の少なさから本段階における屋敷割り及び遺構配置のあり方を言及することはできないが、覆土に元禄16(1703)年の火災に比定される焼土、被災遺物が含まれる遺構が多く認められることから、その火災が土地利用のあり方に大きな変化をもたらした契機となったことが考えられる。

18世紀前半

本段階に廃絶された主な遺構には地下室A、井戸、長方形土坑などがある。総じてC-Fライン間、即ち屋敷地中～奥部に分布域が認められる。加賀藩邸との境界、組屋敷内での10間間隔の境界を跨ぐ遺構はなく、区画の成立を見て取ることができる。地下室Aには階段を有するタイプと垂下するタイプがみられるが、一区画に対し1基が存在する。長方形土坑は各境界域に偏って構築され、当

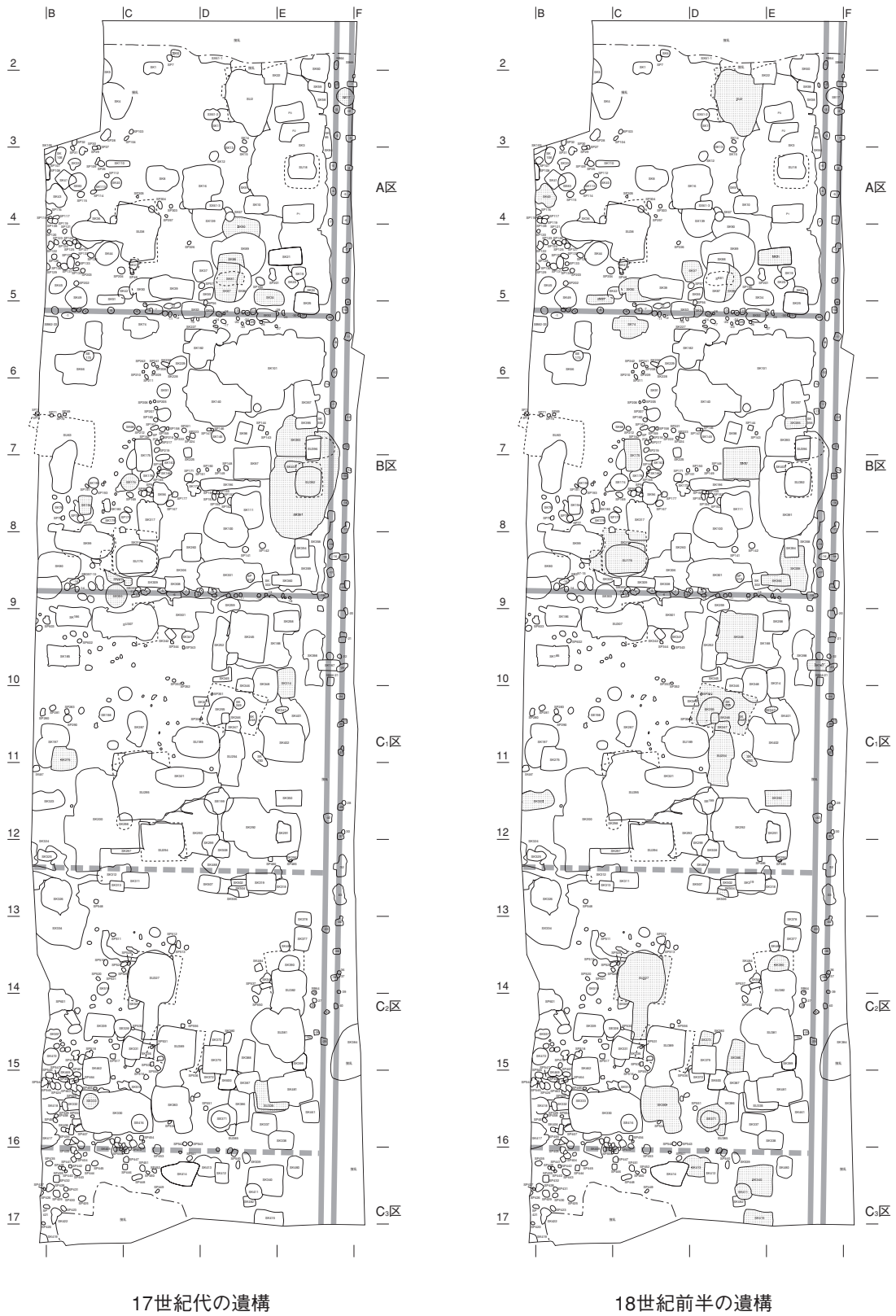


図2 各区の遺構変遷(1)

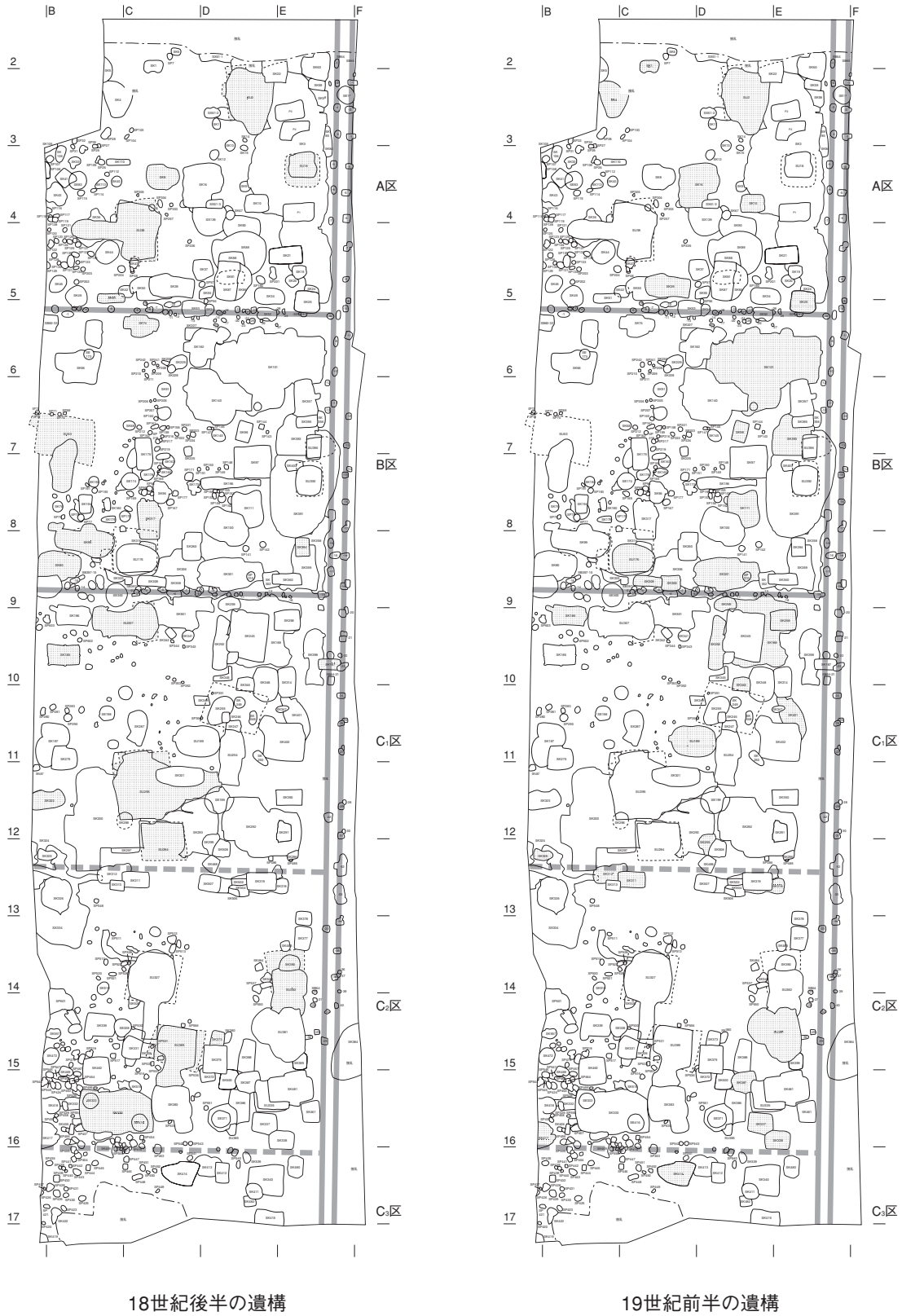


図3 各区の遺構変遷(2)

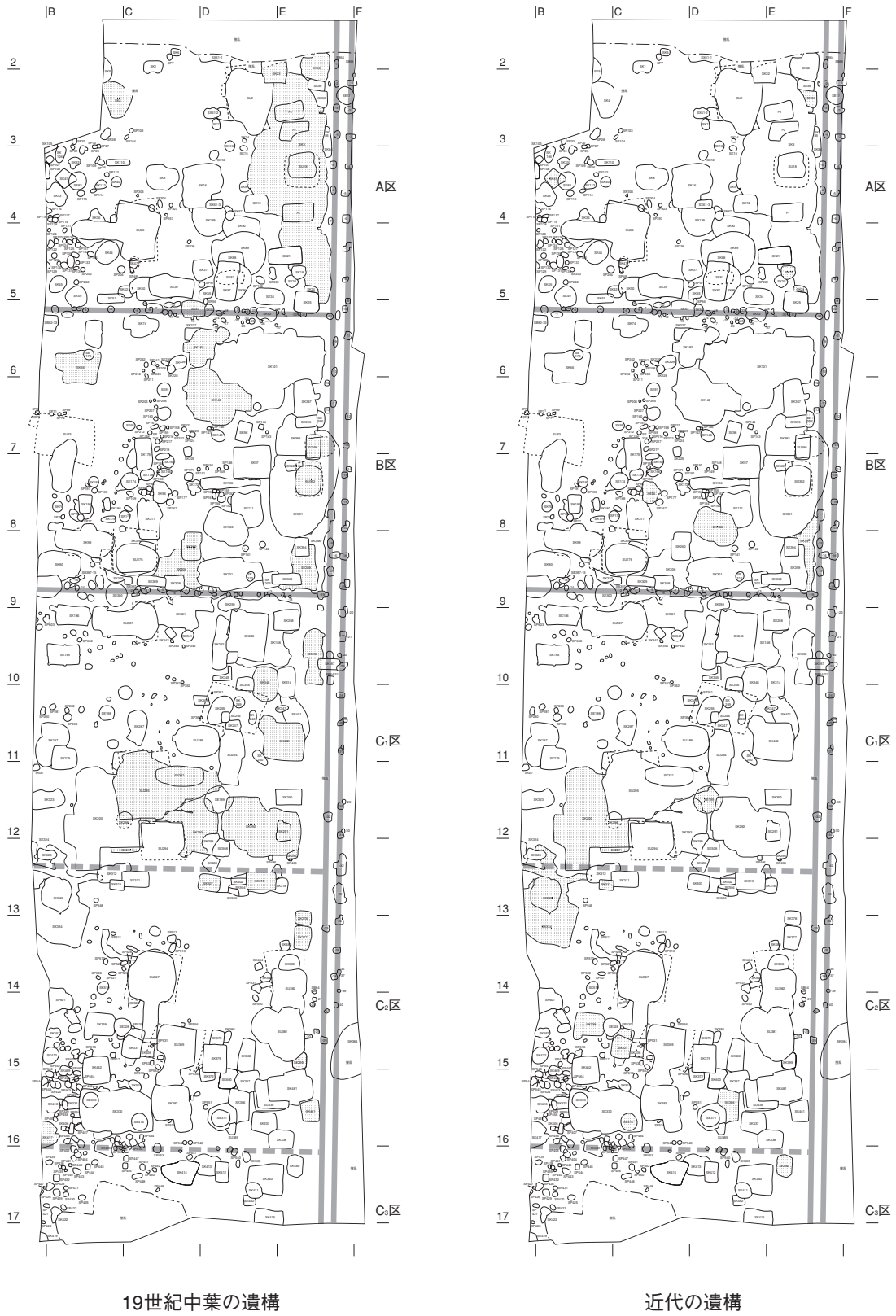


図4 各区の遺構変遷(3)

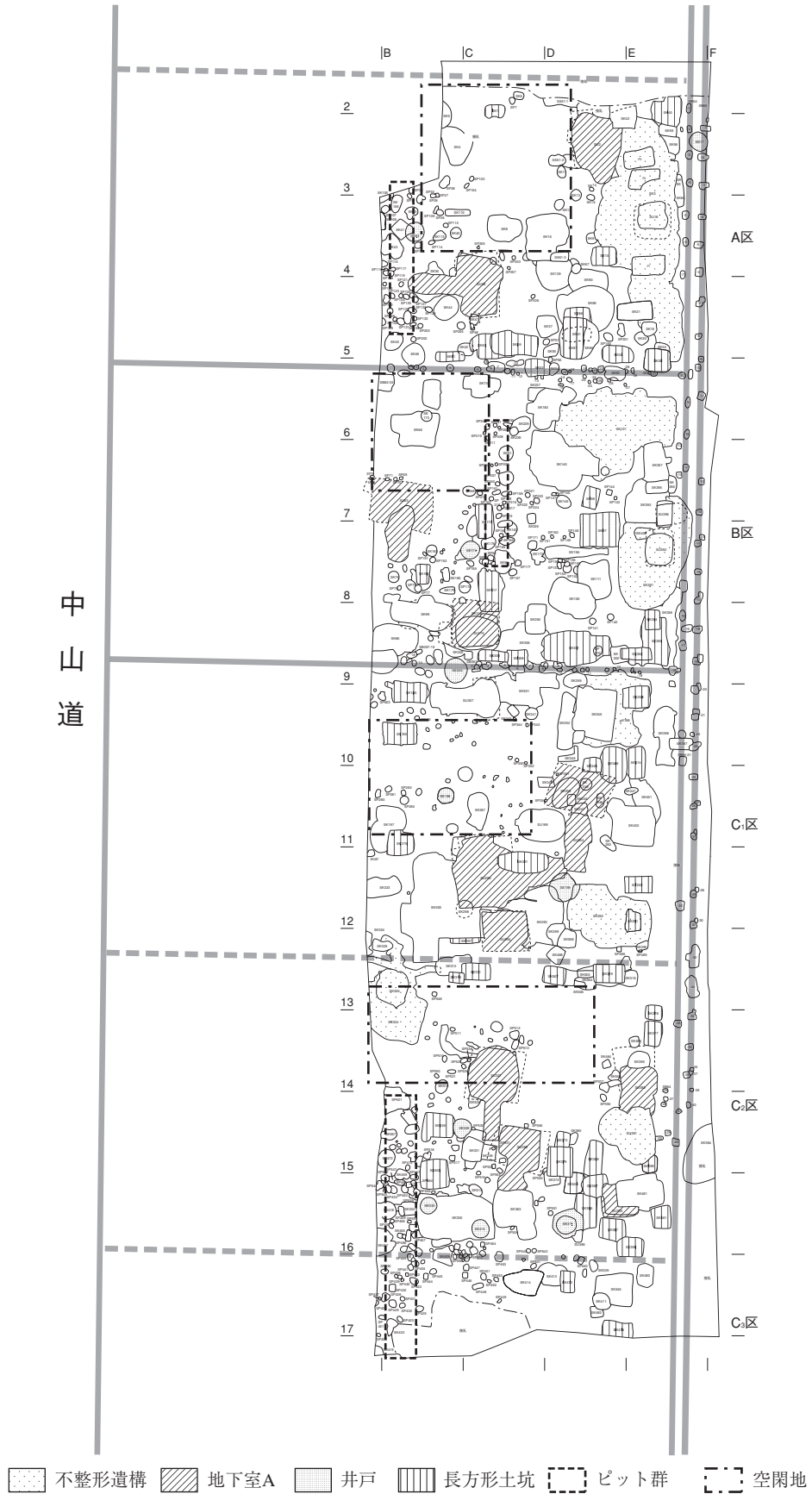


図5 屋敷割りの復元と空間構成

初から長方形土坑と境界との密接な関係を窺い知ることができる。また採土坑と考えられる大形不整形土坑はなく、井戸も SE371 (C₂ 区) の 1 基と少ない。

18 世紀後半

本段階に廃絶された主な遺構には地下室 A、地下室 B、長方形土坑がある。遺構分布は総じて B-D ライン間、即ち屋敷地中域に集中傾向が認められる。地下室 A は A、B 区で 1 基、C₁、C₂ 区で 2 基認められる。出土遺物の年代観から C₁ 区の SU294、C₂ 区の SU382 は 18 世紀中葉、C₁ 区の SU295、C₂ 区の SU389 は 18 世紀後葉に廃絶されたことが推定され、いずれも同時期に併存していないことが確かめられる。長方形土坑は前段階と比較するとその数は少ないが、境界域を中心として構築されている。また、本段階で廃絶された井戸、大形不整形土坑はない。

19 世紀前半

本段階に廃絶された主な遺構には地下室 B、長方形土坑、大形不整形土坑がある。地下室 A は存在しないが、天井崩落後の窪地を利用した廃棄が A 区の SU2、B 区の SU176、C₂ 区の SU389 で認められる。長方形土坑は再び境界域に積極的に構築されるようになる。D-F ライン間の屋敷地最奥部では採土坑の可能性が高い B 区の SK101、C₁ 区の SK189 などの大形不整形土坑や、C₂ 区の SU381 などが構築され、埋め戻し時には廃棄遺構として利用される。

19 世紀中葉

本段階に廃絶された遺構には地下室 B、長方形土坑、大形不整形土坑がある。遺構分布は総じて D-F ライン間の屋敷地最奥部に集中している。大形不整形土坑には採土坑と推定される A 区の SK3、C₁ 区の SK292、SK293 があり、掘削後には廃棄遺構に転じ、埋め戻し時に多量の遺物が廃棄されている。C₁ 区では SK293 と隣接する SU295 の天井崩落による窪地にも廃棄が行われ、3 遺構間では多くの遺構間接合事例が認められた。長方形土坑は加賀藩邸との境界域をはじめ、屋敷地間境界域においても比較的東側（屋敷地最奥部）での分布が認められる。地下室 B には B 区の SU392、SU396 がある。両遺構は南北に隣接して構築され、ともに埋め戻し段階で生産関連遺物が大量に廃棄されているなどの共通点を有し、用途における関連性が指摘できる。

4. 工学部 14 号館地点の空間構成 (図 5)

以上を整理すると、17 世紀代は遺構数も少なく、境界域の設定もまだ不明確な状況を呈しているが、18 世紀に入り、遺構数が急激に増加する様相が看取される。そこには境界を跨ぐ遺構は無く、区割りの成立を窺わせる。地下室 A は 1 区画内で 30~50 年のサイクルで構築、廃絶が繰り返され、基本的に区画内で 1 地下室を維持している。そして 19 世紀に継続する例はなく、全ての地下室 A が 18 世紀内で廃絶されている。また、18 世紀前半では奥域を利用した地下室、長方形土坑の遺構集中域が、中葉から後葉にかけて、屋敷地中域へ変化している点が注目される。19 世紀に入ると再び奥域の利用が活発になり、長方形土坑に加え、大形不整形土坑が構築されるようになる。この動向は採土坑の意味合いを持つ大形不整形土坑など日常生活に直接関係のない遺構と空間属性との関連を窺わせるとともに、区画内中~奥域の土地利用が活発化し、過去に掘削されていない場所を求めた現れといえよう。こうした遺構分布の変化の中で、各区域の北西部は空閑地として連綿として利用され、その周囲には屋敷内区画もしくは長屋跡と推定されるピット集中域が存在する。井戸は 11 基が検出されているが、そのうちの 4 基が 17 世紀に、2 基が近代に帰属している。4 基は遺物の出土がなく、帰属年代は不明であるが、仮に 18 世紀から幕末に位置付けたとしても、各屋敷地に 1 基しか存在し

ないことから、調査区外の西、間口寄りに構築されていたことも考えられる。

このように18世紀から幕末までの本地点における遺構の変遷と分布は、各屋敷を越えた共通点が多く、間口10間、奥行き20間と同面積の短冊形地割り内の土地利用は、現代の分譲住宅を思いおこさせるような、画一的な利用形態がとられ、屋敷内の景観は18世紀以降ほとんど変化がなかったといえる。

また、間口から奥手に向けて、〔表〕建物→〔中〕庭・井戸・地下室→〔奥〕不整形土坑・廃棄遺構とする空間構成は、新宿区・南町遺跡、早稲田南町遺跡、住吉町遺跡、荒木町遺跡、文京区・駒込鰻縄手御先手組組屋敷などで報告された組屋敷の空間構成と同様のあり方を示しており、台地上における短冊形地割り屋敷地の基本的な空間構成要素と位置付けられる。

【註】

(1) C₃区は「第Ⅱ章遺構」においても、C₂区として取り扱っている。

【参考文献】

- 荒木町遺跡調査団 1994 『荒木町遺跡 発掘調査報告書』
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
- 大八木謙司 1992 「四谷三丁目遺跡における景観復元の試み」『國學院雑誌』第93巻 第12号
- 北原糸子 1990 「近世考古学に望むもの—下級武士の日記を素材に—」『江戸のくらし—近世考古学の世界—』
新宿区立新宿歴史博物館
- 史籍研究会 1982 内閣文庫所蔵史籍叢刊 第16巻 『諸向地面取調書(三)』 汲古書院
- 新宿区荒木町遺跡調査団 1998 『荒木町遺跡Ⅱ—宗教法人 解脱会東京新築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区遺跡調査会 1994 『東京都新宿区 早稲田南町遺跡—新宿区立早稲田第四アパート改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区遺跡調査会 1996 『東京都新宿区 住吉町遺跡—新宿区住吉町社会教育会館改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区南町遺跡調査団 1994 『東京都新宿区 南町遺跡—兵庫県東京宿舍市ヶ谷寮改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 『四谷三丁目遺跡—(仮称)東京消防庁四谷消防署合同庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 都内遺跡調査会 1997 『駒込鰻縄手 御先手組組屋敷—都立向丘高校校舎改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 日本地図センター複製 1989 建設省国土地理院所蔵 『参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図』
- 原 祐一 1994 「組屋敷の土地利用状況と居住者—新宿区早稲田南町遺跡を中心に—」『江戸遺跡研究会会報』
No.49

第2節 工学部 14 号館地点出土の磁器・陶器・土器について

大成 可乃

はじめに

東京大学本郷構内は切絵図などとの比較から、加賀藩上屋敷やその支藩である富山藩上屋敷、大聖寺藩上屋敷、越後高田藩中屋敷、水戸藩中屋敷、安志藩下屋敷、旗本森川家屋敷などが存在していたことが知られている。1983年以降実施されている構内の発掘調査では、それら大名屋敷に該当すると考えられる地点の調査が70件余り（立会、試掘調査も含む）実施され、その様相は徐々に明らかに成りつつある。しかし工学部 14 号館地点は、幕府先手鉄砲組（以下、御先手組）の組屋敷の一部で、『諸向地面取調書』（史籍研究会 1982）によると本地点を含む御先手組組屋敷は内藤甚左衛門組にあたり、与力・同心といった下級武士が居住した地点である可能性が高い。構内の発掘調査でいわゆる幕臣の下級武士の居住区を調査するのは初めてのことであり、本稿ではそのような下級武士の生活様相について、発掘調査から明らかとなっている屋敷地毎（A区～C₂区）に磁器・陶器・土器の様相を概観し、各屋敷地の特徴をとらえ、居住者の生活諸相を明らかにしたい。

1. 分析の目的と方法

埋蔵文化財調査室では、東京大学構内の各調査地点で1つの遺構から出土した陶磁器・土器（以後、遺構一括遺物とする）および1つの層から出土した陶磁器・土器の様相の把握を行い、分析の基礎資料としている。なおその際は器種・産地組成の把握を行うことと、年代の判断材料を多く有することでその蓋然性を高めるという2つの理由により、遺物が多量に出土した遺構を分析の対象としている。実際の分類基準の詳細は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（1）（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）を、方法や実年代の推定については「東京大学構内の遺跡における年代的考察」（堀内 1997）に基づき分析を行った。

陶磁器・土器の数量分析をする際は基本的に以下の基準にて行った。①底部糸切り痕の中心の数②底部が1/2以上残存するもの③注口の数など、各個体毎に1箇所しかない部位を、重複してカウント対象とならないよう配慮しカウントを実施した。そして分析対象とする遺構は客観的評価が可能と考えられる100個体以上を数えるものをその対象とした。カウントの詳細はIV-2表磁器・陶器・土器組成表（1）～（16）を参照されたい。

2. 工学部 14 号館地点出土の磁器・陶器・土器の様相（図1、表1～3）

工学部 14 号館地点からは、コンテナ総数で約740箱の磁器・陶器・土器が出土している。推定個体数が100個体以上あることが確認された遺構は、A区ではSU2、SK3、SK16、SK18、B区ではSU63、SK101、SU176、SK358、SU392、SU396、C₁区ではSK188、SK292、SK293、SU294、SK402、C₂区ではSK330、SU382の計17遺構である。陶磁器の様相からSU2は東大

編年のⅧc、SK3はⅥb～Ⅷd、SK16はⅧa、SU18はⅥ～Ⅶ、SU63はⅣb～Ⅶ、SK101はⅧa～b、SU176はⅣb～Ⅴ・Ⅷa～b、SK358は明治中葉、SU392はⅧd、SU396はⅧc、SK188はⅧb～c、SK292はⅧ、SK293はⅧ、SU294はⅤ～Ⅵ、SK402はⅦ～Ⅷ、SK330はⅦ、SU382はⅥb～Ⅶ期にそれぞれ比定される。

次に屋敷地毎に各遺構の磁器・陶器・土器の様相を年代順に概観する。

(1) A区

SU18

推定個体数347点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が70点で20%、陶器が87点で25%、土器が190点で55%で土器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が40%、皿が30%の順に多く、いずれもほぼ肥前系磁器(JB)でしめられている。それぞれ中心となる器種をみると肥前系磁器碗(JB-1)は半球形碗(1-f)が25%、いわゆる小丸碗(1-j)が17%、肥前系磁器皿(JB-2)は高台断面がシャープな「u」字状を呈すもの(2-e)が56%、いわゆるくらわんか手のもの(2-g)が22%の順に多い。なお碗、皿ともに輸入系磁器(JA)を少量含む。陶器の器種組成比をみると碗が41%、瓶が27%をしめ、碗は京都・信楽系陶器碗(TD-1)が63%で多く、瀬戸・美濃系陶器碗(TC-1)は34%でそれに続く。TD-1は薄手半球形碗(1-b)が55%、筒形碗(1-j)が20%の順に多いが、それらには色絵や錆絵染付などが施されたものが多い。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)が中心で、容量が5合のもの(10-d)が72%と圧倒的に多く、器形は釣鐘形を呈し、飴釉が施されたものが大半である。なお容量が2合半のものは17%と少なく、すべて底部釉拭き取りの製品(10-a)でしめられる。土器の器種組成比をみると皿(DZ-2)が76%をしめ、大半は実測図にある2～3寸の底部に左回転系切り痕のあるもの(2-b)で、口縁部などに灯心痕が看取されるものはほとんどない。以上のような遺物群の様相から東大編年Ⅵ～Ⅶ期に比定される遺構一括遺物と考えられる。なお本遺構からは写真1のような朱で「寛三癸亥」の暦が描かれた京都・信楽系色絵半球形碗の破片が出土している。遺物群の様相を鑑み18世紀中葉以降、「癸亥」に該当する年号を検索すると「寛保3」(1743)「享和3」(1803)「文久3」(1863)の3つである。年号の1文字が省略されることはよくあることであり、「寛三」は「寛保三」の「保」が省略されたものである可能性が高い。従ってこれが本遺構一括遺物の古い遺物になると思われる。なお磁器・陶器ともに上手のものが比較的多く含まれ、それらの中にいわゆる「揃い」のものと思われる同手の製品が複数個体確認されるのも本遺構の特徴である。

SK3

推定個体数454点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が140点で31%、陶器が151点で33%、土器が163点で36%で土器の比率がわずかに高い。磁器の器種組成比をみると碗が41%で圧倒的に多く、産地をみると肥前系磁器碗(JB-1)が54%、瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)が46%で、JB-1の比率がやや高い。JB-1はいわゆる小広東碗(1-i)が30%、端反形碗(1-n)が19%の順に多く、少量ではあるが半球形碗(1-f)、筒形碗(1-l)、いわゆる小丸碗(1-j)、広東碗(1-m)なども認められる。JC-1は端反形碗が大半をしめる。陶器の器種組成比をみると瓶が31%と多く、



写真1

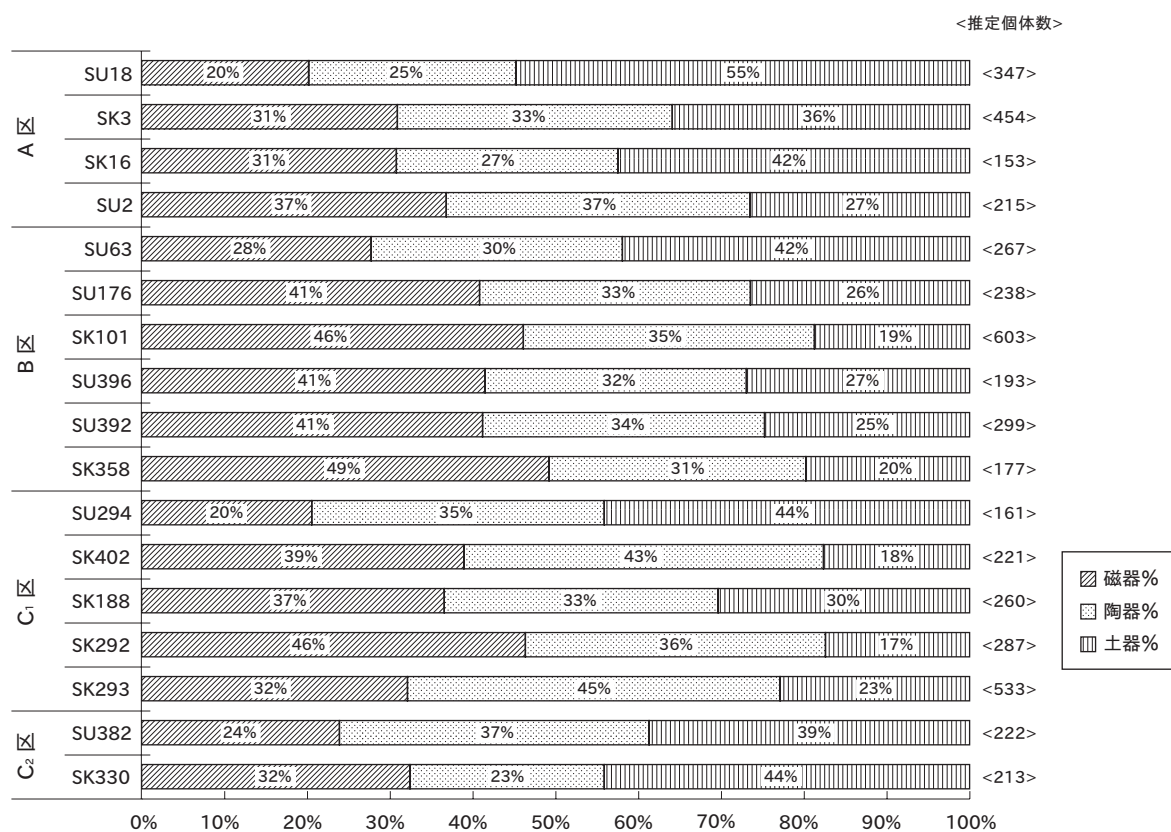


図1 胎質別比

| 屋敷地 | 遺構名 | 磁器 | | 陶器 | | 土器 | |
|-----|-------|-------|---------|-------------|---------|----------|-----------|
| A区 | SU18 | 碗 40% | 皿 30% | 碗 41% | 瓶 27% | 皿 76% | 油受け皿 7% |
| | SK3 | 碗 41% | 皿 19% | 瓶 31% | 碗 16% | 皿 39% | 油受け皿 27% |
| | SK16 | 碗 66% | 皿、坏 10% | 瓶 28% | 碗 22% | 油受け皿 30% | 皿 21% |
| | SU2 | 坏 29% | 碗 23% | 植木鉢、壺・甕 16% | 瓶 14% | 植木鉢 34% | 皿 25% |
| B区 | SU63 | 碗 40% | 皿 21% | 碗 42% | 瓶 26% | 皿 60% | 塩壺 11% |
| | SU176 | 碗 49% | 皿、坏 14% | 瓶 31% | 皿 14% | 皿 30% | 鉢 20% |
| | SK101 | 碗 51% | 坏 15% | 瓶 41% | 土瓶 10% | 油受け皿 25% | 皿 20% |
| | SU396 | 碗 34% | 坏 24% | 瓶 23% | 皿 19% | 皿 54% | ほうろく 13% |
| | SU392 | 碗 33% | 坏 23% | 瓶 38% | 壺・甕 18% | 皿 48% | 植木鉢 21% |
| | SK358 | 碗 35% | 坏 27% | 瓶 38% | 土瓶 13% | 皿 53% | 植木鉢 24% |
| C1区 | SU294 | 碗 48% | 坏 21% | 瓶 27% | 碗 23% | 皿 60% | 塩壺 25% |
| | SK402 | 碗 44% | 皿 11% | 瓶 27% | 碗 15% | 皿 47% | 油受け皿 31% |
| | SK188 | 碗 49% | 坏 16% | 碗 26% | 瓶 24% | 皿 55% | 植木鉢 12% |
| | SK292 | 碗 40% | 坏 25% | 碗 18% | 瓶 16% | 皿 40% | 油受け皿 17% |
| | SK293 | 碗 62% | 皿 12% | 瓶 44% | 碗 13% | 皿 31% | 鉢 13% |
| C2区 | SU382 | 碗 50% | 皿 16% | 碗 25% | 瓶 21% | 皿 64% | ひょうそく 13% |
| | SK330 | 碗 61% | 皿、坏 13% | 碗 27% | 瓶・鍋 15% | 塩壺 47% | 皿 22% |

表1 胎質別器種組成比 (各胎質上位2器種のみ表示)

第2節 工学部14号館地点出土の磁器・陶器・土器について

| 屋敷地 | 遺構名 | 磁器 | | | | 陶器 | | | | 土器 | | | | |
|--------|------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|------|------|---------|---------|------|------|----|
| | | 小器種 | 個体数 | % | 器種合計 | 小器種 | 個体数 | % | 器種合計 | 小器種 | 個体数 | % | 器種合計 | |
| A区 | SU18 | JB-1-f | 6 | 25% | 24 | TD-1-b | 11 | 55% | 20 | DZ-2-b | 126 | 93% | 136 | |
| | | JB-1-j | 4 | 17% | 24 | TD-1-j | 4 | 20% | 20 | DZ-2-h | 5 | 4% | 136 | |
| | | JB-2-e | 10 | 56% | 18 | TC-10-d | 13 | 72% | 18 | DZ-40-d | 6 | 50% | 12 | |
| | | JB-2-g | 4 | 22% | 18 | TC-10-a | 3 | 17% | 18 | DZ-40-a | 4 | 33% | 12 | |
| | SK3 | JB-1-i | 8 | 30% | 27 | TC-10-a | 15 | 41% | 37 | DZ-2-h | 29 | 49% | 59 | |
| | | JB-1-n | 5 | 19% | 27 | TC-10-c | 14 | 38% | 37 | DZ-2-b | 23 | 39% | 59 | |
| | | JB-2-i | 5 | 31% | 16 | TD-1-d | 4 | 50% | 8 | DZ-40-b | 30 | 75% | 40 | |
| | | JB-2-g | 4 | 25% | 16 | TD-1-b | 2 | 25% | 8 | DZ-40-a | 8 | 20% | 40 | |
| | | | | | TD-1-g | 2 | 25% | 8 | | | | | | |
| | SK16 | JC-1-d | 12 | 86% | 14 | TC-10-c | 7 | 70% | 10 | DZ-40-b | 12 | 71% | 17 | |
| | | JC-1-c | 1 | 7% | 14 | TC-10-d | 2 | 20% | 10 | DZ-40-a | 5 | 29% | 17 | |
| | | JC-1-e | 1 | 7% | 14 | TD-1-d | 3 | 60% | 5 | DZ-2-h | 11 | 92% | 12 | |
| | | JB-2-e | 1 | 25% | 4 | TD-1-e | 1 | 20% | 5 | DZ-2-b | 1 | 8% | 12 | |
| | | JB-2-i | 1 | 25% | 4 | TD-1-g | 1 | 20% | 5 | | | | | |
| | | JB-2-l | 1 | 25% | 4 | | | | | | | | | |
| | | JB-2-r | 1 | 25% | 4 | | | | | | | | | |
| | SU2 | JB-6-a | 2 | 67% | 3 | | | | | | | | | |
| | | JB-6-c | 1 | 33% | 3 | | | | | | | | | |
| | | JB-6-c | 4 | 31% | 13 | TC-21 | 10 | 100% | 10 | DZ-21-b | 11 | 61% | 18 | |
| | | JB-6-a | 3 | 23% | 13 | TC-15-a | 4 | 49% | 8 | DZ-21-c | 6 | 33% | 18 | |
| | | JB-6-b | 3 | 23% | 13 | TC-15-他 | 3 | 38% | 8 | DZ-2-b | 10 | 77% | 13 | |
| | | JB-1-g | 2 | 22% | 9 | TC-10-c | 4 | 40% | 10 | DZ-2-h | 2 | 15% | 13 | |
| | | JB-1-n | 2 | 22% | 9 | TC-10-e | 2 | 20% | 10 | | | | | |
| | | JB-1-s | 2 | 22% | 9 | TC-10-g | 2 | 20% | 10 | | | | | |
| | B区 | SU63 | JB-1-f | 8 | 28% | 29 | TD-1-b | 11 | 58% | 19 | DZ-2-b | 55 | 95% | 58 |
| | | | JB-1-e | 7 | 24% | 29 | TD-1-d | 3 | 16% | 19 | DZ-2-a | 2 | 3% | 58 |
| | | | JB-2-e | 8 | 57% | 14 | TC-10-a | 10 | 63% | 16 | DZ-51-w | 6 | 55% | 11 |
| | | | JB-2-r | 2 | 14% | 14 | TC-10-d | 6 | 38% | 16 | DZ-51-g | 3 | 27% | 11 |
| SU176 | | JB-1-e | 11 | 37% | 30 | TC-10-c | 7 | 33% | 21 | DZ-2-b | 11 | 69% | 16 | |
| | | JB-1-u | 6 | 20% | 30 | TC-10-d | 6 | 29% | 21 | DZ-2-h | 3 | 19% | 16 | |
| | | JB-2-e | 4 | 36% | 11 | TD-2-a | 5 | 83% | 6 | DZ-5-他 | 6 | 55% | 11 | |
| | | JB-2-g | 2 | 18% | 11 | TD-2-b | 1 | 17% | 6 | DZ-5-c | 4 | 36% | 11 | |
| | | JB-2-q | 2 | 18% | 11 | | | | | | | | | |
| | | JB-6-a | 8 | 73% | 11 | | | | | | | | | |
| SK101 | | JB-6-f | 3 | 27% | 11 | | | | | | | | | |
| | | JC-1-d | 44 | 75% | 59 | TC-10-c | 41 | 58% | 71 | DZ-40-b | 14 | 54% | 26 | |
| | | JC-1-c | 7 | 12% | 59 | TC-10-d | 19 | 27% | 71 | DZ-40-a | 12 | 46% | 26 | |
| | | JB-6-a | 5 | 22% | 23 | TZ-34-g | 6 | 38% | 16 | DZ-2-b | 11 | 55% | 20 | |
| | | JB-6-c | 5 | 22% | 23 | TZ-34-a | 3 | 19% | 16 | DZ-2-h | 9 | 45% | 20 | |
| | | JB-6-b | 4 | 17% | 23 | | | | | | | | | |
| SU396 | | JB-6-f | 4 | 17% | 23 | | | | | | | | | |
| | | JC-1-d | 9 | 57% | 16 | TC-10-e | 5 | 42% | 12 | DZ-2-b | 25 | 96% | 26 | |
| | | JC-1-a | 5 | 31% | 16 | TC-10-d | 4 | 33% | 12 | DZ-2-h | 1 | 4% | 26 | |
| | | JC-6-d | 7 | 64% | 11 | TD-2-b | 4 | 67% | 6 | DZ-47-a | 6 | 100% | 6 | |
| JC-6-a | 3 | 27% | 11 | TD-2-a | 2 | 33% | 6 | | | | | | | |

表2 胎質別主要器種個体数(1)

第V章 工学部 14 号館地点をめぐる諸問題

| 屋敷地 | 遺構名 | 磁器 | | | | 陶器 | | | | 土器 | | | | |
|------------------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|-----|------|----------|---------|------|------|----|
| | | 小器種 | 個体数 | % | 器種合計 | 小器種 | 個体数 | % | 器種合計 | 小器種 | 個体数 | % | 器種合計 | |
| B 区 | SU392 | JC-1-d | 14 | 66% | 21 | TC-10-c | 11 | 39% | 29 | DZ-2-b | 29 | 91% | 32 | |
| | | JC-1-e | 4 | 19% | 21 | TC-10-g | 9 | 31% | 29 | DZ-2-h | 3 | 9% | 32 | |
| | | JC-6-d | 10 | 58% | 17 | TC-15-b | 7 | 54% | 13 | DZ-21-b | 11 | 79% | 14 | |
| | | JC-6-a | 3 | 18% | 17 | TC-15-a | 3 | 23% | 13 | DZ-21-a | 2 | 14% | 14 | |
| | | | | | | TC-15-他 | 3 | 23% | 13 | | | | | |
| | SK358 | JC-1-d | 6 | 33% | 18 | TC-10-c | 5 | 56% | 9 | DZ-2-b | 18 | 100% | 18 | |
| | | JC-1-f | 6 | 33% | 18 | TC-10-e | 2 | 22% | 9 | DZ-21-a | 3 | 50% | 6 | |
| | | JC-1-a | 3 | 17% | 18 | TC-10-他 | 2 | 22% | 9 | DZ-21-b | 2 | 33% | 6 | |
| | | JC-1-e | 3 | 17% | 18 | TZ-34-b | 3 | 49% | 6 | | | | | |
| | | JC-6-b | 4 | 24% | 16 | TZ-34-c | 1 | 17% | 6 | | | | | |
| | | JC-6-c | 3 | 18% | 16 | TZ-34-g | 1 | 17% | 6 | | | | | |
| | | | | | TZ-34-他 | 1 | 17% | 6 | | | | | | |
| C ₁ 区 | SU294 | JB-1-f | 7 | 47% | 15 | TC-10-d | 10 | 77% | 13 | DZ-2-b | 38 | 100% | 38 | |
| | | JB-1-e | 3 | 20% | 15 | TC-10-c | 2 | 15% | 13 | DZ-51-g | 8 | 50% | 16 | |
| | | JB-6-a | 3 | 43% | 7 | TD-1-b | 5 | 83% | 6 | DZ-51-w | 3 | 19% | 16 | |
| | | JB-6-f | 3 | 43% | 7 | TD-1-他 | 1 | 17% | 6 | | | | | |
| | | JB-6-b | 1 | 14% | 7 | TC-1-l | 2 | 33% | 6 | | | | | |
| | | | | | | TC-1-g | 1 | 17% | 6 | | | | | |
| | | | | | | TC-1-k | 1 | 17% | 6 | | | | | |
| | SK402 | JC-1-d | 14 | 82% | 17 | TC-10-d | 6 | 25% | 24 | DZ-2-b | 14 | 82% | 17 | |
| | | JC-1-a | 1 | 6% | 17 | TC-10-c | 5 | 21% | 24 | DZ-2-h | 2 | 12% | 17 | |
| | | JC-1-e | 1 | 6% | 17 | TC-10-g | 5 | 21% | 24 | DZ-40-a | 8 | 73% | 11 | |
| | | JC-1-他 | 1 | 6% | 17 | TD-1-g | 3 | 43% | 7 | DZ-40-b | 3 | 27% | 11 | |
| | | JB-1-n | 4 | 27% | 15 | TD-1-b | 2 | 29% | 7 | | | | | |
| | | JB-1-m | 2 | 13% | 15 | TC-1-q | 2 | 50% | 4 | | | | | |
| | | JB-1-o | 2 | 13% | 15 | | | | | | | | | |
| | SK188 | JB-1-f | 7 | 33% | 21 | TB-1-g | 4 | 50% | 8 | DZ-2-b | 37 | 90% | 41 | |
| | | JB-1-n | 5 | 24% | 21 | TB-1-h | 2 | 25% | 8 | DZ-2-d | 2 | 5% | 41 | |
| | | JB-6-b | 3 | 30% | 10 | TD-1-b | 5 | 63% | 8 | DZ-2-h | 2 | 5% | 41 | |
| | | JB-6-c | 3 | 30% | 10 | TD-1-g | 2 | 25% | 8 | DZ-21-b | 6 | 67% | 9 | |
| | | JB-6-f | 2 | 20% | 10 | TC-10-d | 11 | 61% | 18 | DZ-21-a | 3 | 33% | 9 | |
| | | | | | | TC-10-c | 4 | 22% | 18 | | | | | |
| | | SK292 | JB-1-n | 8 | 25% | 32 | TD-1-b | 5 | 56% | 9 | DZ-2-b | 11 | 65% | 17 |
| | | | JB-1-e | 5 | 16% | 32 | TD-1-i | 2 | 22% | 9 | DZ-2-h | 5 | 29% | 17 |
| | | | JB-6-a | 7 | 54% | 13 | TC-10-d | 8 | 67% | 12 | DZ-40-b | 4 | 57% | 7 |
| | | | JB-6-c | 3 | 23% | 13 | TC-10-g | 2 | 17% | 12 | DZ-40-f | 2 | 29% | 7 |
| | JC-6-d | | 8 | 62% | 13 | | | | | | | | | |
| | JC-6-a | | 5 | 38% | 13 | | | | | | | | | |
| | SK293 | JB-1-n | 10 | 20% | 51 | TC-10-c | 40 | 45% | 89 | DZ-2-b | 23 | 70% | 33 | |
| | | JB-1-g | 7 | 14% | 51 | TC-10-d | 27 | 30% | 89 | DZ-2-h | 5 | 15% | 33 | |
| | | JB-1-l | 7 | 14% | 51 | TD-1-g | 10 | 55% | 18 | DZ-5-他 | 6 | 43% | 14 | |
| | | JC-1-d | 31 | 72% | 43 | TD-1-d | 5 | 28% | 18 | DZ-5-a | 5 | 36% | 14 | |
| C ₂ 区 | SU382 | JB-1-l | 6 | 24% | 25 | TC-1-u | 5 | 45% | 11 | DZ-2-b | 48 | 94% | 51 | |
| | | JB-1-f | 5 | 20% | 25 | TC-1-c | 3 | 27% | 11 | DZ-2-h | 2 | 4% | 51 | |
| | | JB-1-j | 5 | 20% | 25 | TC-10-d | 9 | 56% | 16 | DZ-44-c | 9 | 90% | 10 | |
| | | JB-2-e | 3 | 43% | 7 | TC-10-a | 3 | 19% | 16 | DZ-44-e | 1 | 10% | 10 | |
| | | JB-2-j | 2 | 29% | 7 | TC-10-e | 3 | 19% | 16 | | | | | |
| | SK330 | JB-1-j | 11 | 29% | 38 | TD-1-b | 4 | 40% | 10 | DZ-51-w | 34 | 94% | 36 | |
| | | JB-1-i | 10 | 26% | 38 | TD-1-h | 2 | 20% | 10 | DZ-51-ab | 2 | 6% | 36 | |
| | | | | | | TC-10-a | 3 | 43% | 7 | DZ-2-b | 15 | 88% | 17 | |
| | | | | | | TC-10-d | 3 | 43% | 7 | | | | | |
| | | | | TZ-33-a | 7 | 100% | 7 | | | | | | | |

表 3 胎質別主要器種個体数 (2)

碗が16%でそれに続く。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)が中心である。容量は2合半のものが多く、底部釉が拭き取りされたもの(10-a)が41%、底部釉が浸け掛けされたもの(10-c)が38%で、わずかに10-aが多い。碗は京都・信楽系陶器碗(TD-1)が40%、瀬戸・美濃系陶器碗(TC-1)が25%で続く。TD-1はいわゆる小杉茶碗(1-d)が50%と多く、半球形碗(1-b)と端反形碗(1-g)が25%でそれに続く。土器の器種組成比をみると皿(DZ-2)が39%、油受け皿(DZ-40)が27%の順に多い。DZ-2は施釉されたもの(2-h)が49%、底部に左回転糸切り痕があるもの(2-b)が39%をしめる。ちなみに2-hは完形か半完形のものが多く、2-bは細片が多い。DZ-40は脚無で施釉されたもの(40-b)が75%、脚付きで施釉されたもの(40-a)が20%で、ほぼ施釉製品でしめられ、その多くが完形ないし半完形である。以上のような遺物群の様相や、瀬戸・美濃系磁器皿(JC-2)に木型打込のもの(2-d)が認められること、磁器坏に器壁がごく薄いもの(JB-6-c、JC-6-d)が多く、それらにはいわゆる酸化コバルトによる絵付が施された製品が目立つこと、塩壺(DZ-51)に板作成形とロクロ成形のものが混在することなどから東大編年VIb~VIIId期とやや年代幅の大きい遺構一括遺物に比定されると考えられる。遺構の事実記載によると、本遺構は廃棄と掘削が繰り返された遺構であり、調査時には確認できなかった遺構の重複関係が存在したことが指摘されており、出土遺物の年代幅が大きくなった一因と考えられる。

SK16

推定個体数153点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が47点で31%、陶器が41点で27%、土器が65点で42%と土器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が66%で圧倒的に多く、皿と坏がそれに続く。磁器碗の産地をみると肥前系磁器碗(JB-1)が41%、瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)が52%で、JC-1の比率が高い。JC-1は端反形碗(1-d)が86%で圧倒的に多く、器壁が薄手で、口縁部内面に帯文様を配し、高台内に銘款が看取される初期の形態を呈するものが多い。JB-1はいわゆる広東碗(1-m)が36%、小広東碗(1-i)、端反形碗(1-n)の順に多い。陶器の器種組成比をみると瓶が28%、碗が22%をしめる。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)のみでしめられ、容量が2合半で底部釉が浸け掛けのもの(10-c)が70%で中心となっている。碗は京都・信楽系陶器碗(TD-1)が63%と多く、いわゆる小杉茶碗(1-d)が60%、口縁部の釉が掛け分けされた端反碗(1-e)と細かい貫入がはいった灰釉端反碗(1-g)も20%認められる。土器の器種組成比をみると油受け皿(DZ-40)が30%、皿(DZ-2)が21%をしめる。DZ-40は脚無で施釉されたもの(40-b)が71%、脚付きで施釉されたもの(40-a)が29%、DZ-2は施釉されたもの(2-h)が92%で大半をしめ、DZ-40もDZ-2も施釉製品が大半をしめる。以上のような遺物群の様相から東大編年VIIIa期に比定される遺構一括遺物と考えられる。

SU2

推定個体数215点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると陶器が79点で37%、磁器が79点で37%、土器が57点で27%と、A区のカウント対象の遺構の中では土器の比率が唯一少ない。磁器の器種組成比をみると坏が29%、碗が23%の順に多い。磁器坏は肥前系磁器坏(JB-6)が65%、瀬戸・美濃系磁器坏(JC-6)が35%をしめる。JB-6は器壁が極めて薄いもの(6-c)が31%で多く、丸形のもの(6-a)、端反形のもの(6-c)がそれに続く。磁器碗は肥前系磁器碗(JB-1)が56%、瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)が31%をしめる。JB-1はいわゆるくらわんか碗(1-g)、端反形碗(1-n)、幅広の高台を有すもの(1-s)が各22%みられる。JC-1は端反形碗(1-d)が大半をしめるが、筒形碗(1-b)もわずかに認められる。なお端反形碗の口縁はJB-1-n、JC-1-dともに外反が緩やかなものが中心である。陶器の器種組成比をみると植木鉢と壺・甕が16%、瓶が14%の順に多く、いずれの器種も瀬戸・

美濃系陶器 (TC) が中心となっている。瀬戸・美濃系陶器植木鉢 (TC-21) の比率がA区の中でも極端に高く、全屋敷地をみても突出していることから、SU2にまとめて廃棄された可能性も考えられる。瀬戸・美濃系陶器壺・甕 (TC-15) はいわゆる赤津半胴 (15-a) が49%をしめ、その大部分は底部が2次的に穿孔されているものであり、これらも植木鉢に転用されていた可能性がある。瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) は容量が2合半で底部釉が浸け掛けされたもの (10-c) が40%と多く、1升徳利 (10-e) と献上備前写し (10-g) がそれに続く。土器の器種組成比をみると植木鉢 (DZ-21) が34%、皿 (DZ-2) が25%の順に多く、植木鉢の比率が高い傾向は陶器と同様である。DZ-21は瓦質のもの (21-b) が61%、施釉されたもの (21-c) が33%、DZ-2は底部に左回転糸切り痕のあるもの (2-b) が77%、施釉されたもの (2-h) が15%をしめる。以上のような遺物群の様相から東大編年Ⅷc期に比定される遺構一括遺物と考えられる。ただし一部の磁器に酸化コバルトを使用した染付製品が看取されるなど19世紀中葉の遺物も含む。なお磁器の中心はJBであるが、現状では産地特定の困難な磁器が認められるのも本遺構の特徴である。

(2) B区

SU63

推定個体数267点を数える遺構一括遺物で、いわゆる上手の製品が多い。胎質別にみると磁器が74点で28%、陶器が81点で30%、土器が112点で42%と土器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が40%、皿が21%で、碗が圧倒的に多い。碗、皿ともに肥前系磁器 (JB) が中心で、肥前系磁器碗 (JB-1) は半球形碗 (1-f) が28%、高台断面がシャープな「u」字状を呈し高台高の低いもの (1-e) が24%をしめる。肥前系磁器皿 (JB-2) は高台断面がシャープな「u」字状を呈すもの (2-e) が57%、糸切り細工の貼付高台を有すもの (2-r) が14%でそれに続く。陶器の器種組成比をみると碗が42%、瓶が26%の順に多い。碗は京都・信楽系陶器碗 (TD-1) が63%、瀬戸・美濃系陶器碗 (TC-1) が30%をしめる。TD-1は半球形碗 (1-b) が58%と圧倒的に多いが、いわゆる小杉茶碗 (1-d) も16%ほど認められる。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) が中心で、容量が2合半で底部釉が拭き取りされたもの (10-a) が63%、5合徳利 (10-d) が38%でそれに続く。10-a、10-dともに頸部が長く、釘書きは線刻されたものが大半である。土器の器種組成比をみると皿 (DZ-2) が60%、塩壺 (DZ-51) が11%の順に多い。DZ-2は底部に左回転糸切り痕のあるもの (2-b) が95%をしめ、施釉されたもの (2-h) はみられない。DZ-51はロクロ成形で無印の筒形を呈するもの (51-w) が55%、板作成形で「泉湊伊織」の刻印を有するもの (51-g) が27%でそれに続く。以上のような遺物群の様相から、やや年代幅のある東大編年Ⅳb～Ⅶ期に比定される遺構一括遺物と考えられる。しかしJB-1に高台が「ハ」の字状に開く碗 (1-q)、いわゆる小広東 (1-i)、広東碗 (1-m) が少ないことや、肥前系磁器皿 (JB-2) に蛇の目凹形高台で高台高が低いタイプ (2-j) が少ないこと、TC-10の釘書きに線刻されたものが多いこと、TD-1の比率の高さなどを考えると中心はⅤ～Ⅵ期にあると思われる。

SU176

推定個体数238点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が97点で41%、陶器が78点で33%、土器が63点で26%で、磁器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が49%と圧倒的に多く、産地をみると肥前系磁器碗 (JB-1) が70%をしめるが、瀬戸・美濃系磁器碗 (JC-1) も26%認められる。JB-1は高台断面がシャープな「u」字状を呈し、高台高の低いもの (1-e) が37%、高台断面がシャープな「u」字状を呈し高台高が高く、小振りなもののもの (1-u) が20%の順に多いが、その他に梅寿文が描かれた粗製の碗 (1-v)、いわゆる広東碗 (1-m)、くらわんか碗 (1-g)、

端反形碗(1-n)、湯呑碗(1-o)もみられる。JC-1は端反形碗(1-d)が圧倒的に多いが、湯呑碗(1-e)も少量認められる。陶器の器種組成比をみると瓶が31%、皿が14%でそれに続く。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)が中心で、容量が2合半で底部釉が浸け掛けされたもの(10-c)が33%、5合徳利(10-d)が29%の順に多い。皿は京都・信楽系陶器皿(TD-2)が中心で、見込みに櫛目のあるもの(2-a)が83%で圧倒的に多い。土器の器種組成比をみると皿(DZ-2)が30%、鉢(DZ-5)が20%の順に多い。DZ-2は底部に左回転糸切り痕のあるもの(2-b)が69%と多く、透明釉が施釉されたもの(2-h)も19%みられる。DZ-5はそのほか55%、釜形土製品(5-c)が36%をしめる。以上のような遺物群の様相から東大編年IVb~V期・VIIa~b期に比定される遺構一括遺物と考えられる。遺構の事実記載から年代観に2つのピークが確認されるのは、地下室としての廃絶時に伴うもの(IV~V期)と、それ以降の廃棄に伴うもの(VIIa~b期)を遺構調査時に一括で取り上げたためではないかと推測されている。なお図化されているものは遺構廃絶後に廃棄されたものが主に抽出されているが、遺物を見るとIV~V期に比定される遺物の完形率が高く、VIIa~b期に比定される遺物群の方が細片が多い。

SK101

推定個体数603点を数える遺構一括遺物で、今回カウント対象とした遺構の中でもっとも推定個体数が多い。胎質別にみると磁器が278点で46%、陶器が212点で35%、土器が113点で19%で、磁器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が51%と多く、坏が15%でそれに続く。碗は肥前系磁器碗(JB-1)が41%、瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)が49%をしめ、JC-1の比率がやや高い。JC-1は端反形碗(1-d)が75%と多く、いわゆる広東碗(1-c)も少量認められる。JB-1は広東碗(1-m)、端反形碗(1-n)の順に多いが、その他にいわゆる小丸碗(1-j)、高台断面が「u」字状を呈し、高台高の低い碗(1-e)、いわゆる小広東碗(1-i)、筒形碗(1-l)などもみられる。なお景德鎮窯系(JA1-1)端反形碗も10%弱看取される。坏は肥前系磁器坏(JB-6)が66%、瀬戸・美濃系磁器坏(JC-6)が26%でJB-6の比率が高い。JB-6は丸形坏(6-a)、器壁のごく薄いもの(6-c)が22%、端反形坏(6-b)と半球形薄手坏(6-f)が17%をしめる。なおJB-6-cは大半が染付が施されたもので、いわゆる酸化コバルトにより絵付された製品は認められない。陶器の器種組成比をみると瓶が41%で、それに続く土瓶は10%ほどである。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)が95%をしめ、容量が2合半の底部釉が浸け掛けされたもの(10-c)が58%、5合徳利(10-d)が27%をしめる。土瓶は産地不明の陶器土瓶(TZ-34)が大半をしめ、灰釉が施釉されたもの(34-g)が38%と多く、いわゆる青土瓶(34-a)がそれに続く。土器の器種組成比をみると油受け皿(DZ-40)が25%、皿(DZ-2)が20%の順に多い。DZ-40は脚無で透明釉が施釉されたもの(40-b)が54%、脚付きで透明釉が施釉されたもの(40-a)が46%をしめ、大半が施釉されたものである。DZ-2は底部に左回転糸切り痕のあるもの(2-b)が55%と多いが、透明釉が施釉されたもの(2-h)も45%をしめ、DZ-2も施釉されたものの比率が比較的高い。以上のような遺物群の様相から東大編年VIIa~b期に比定される遺構一括遺物と考えられる。ただし瀬戸・美濃系磁器(JC)に木型打込皿(2-d)や明治時代の製品と思われる磁器碗や土瓶類などが認められるなど、若干年代が下る遺物も含む。

SU396

推定個体数193点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が80点で41%、陶器が61点で32%、土器が52点で27%で、磁器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が34%、坏が24%の順に多く、ともに瀬戸・美濃系磁器(JC)が70%ほどをしめる。JC-1は端反形碗(1-d)が57%をしめ、丸碗(1-a)がそれに続く。JC-6は器壁が極めて薄い坏(6-d)が64%で中心となっている。陶器の器種組成比をみると瓶が23%、皿が19%の順に多い。瓶はすべて瀬戸・美濃系陶器

瓶 (TC-10) で、1 升徳利 (10-e) が 42%、5 合徳利 (10-d) が 33%をしめる。皿は京都・信楽系陶器皿 (TD-2) が 60%で中心で、見込みに櫛目があるもの (2-a) が 33%、櫛目がないもの (2-b) が 67%をしめ、2-b が多い。土器の器種組成比をみると皿 (DZ-2) が 54%で多く、ほうろく (DZ-47) がそれに続く。DZ-2 は底部に左回転系切り痕のあるもの (2-b) が 96%で圧倒的に多い。以上のような遺物群の様相や磁器の絵付に酸化コバルトを使用したものや、いわゆる木型打込の皿や坏が認められないことなどから、東大編年Ⅷc 期に比定される遺構一括遺物と考えられる。

SU392

推定個体数 299 点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が 123 点で 41%、陶器が 102 点 34%、土器が 74 点で 25%で、磁器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が 33%、坏が 23%の順に多く、ともに瀬戸・美濃系磁器 (JC) が 60% 前後をしめる。瀬戸・美濃系磁器碗 (JC-1) は端反形碗 (1-d) が 66%と多いが、いわゆる湯呑碗 (1-e) も少量認められる。瀬戸・美濃系磁器坏 (JC-6) は器壁が極めて薄い坏 (6-d) が 58%と多いが、酸化コバルトによる絵付が施された製品はみられない。また輸入系磁器碗 (JA1-1) が磁器碗の 20%強、輸入系磁器皿が (JA1-2) が 0.5%強をしめるなど、他の遺構と比較して JA が出土する割合が高い。陶器の器種組成比をみると瓶が 38%、壺・甕が 18%でそれに続く。ともに瀬戸・美濃系陶器 (TC) が中心となっている。瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) は容量が 2 合半の底部釉が浸け掛けされたもの (10-c) が 39%、いわゆる献上備前写しのもの (10-g) が 31%、瀬戸・美濃系陶器壺・甕 (TC-15) は柿釉に灰釉が流し掛けされたもの (15-b) が 54%、いわゆる赤津半胴 (15-a) とその他がそれに続く。土器 (DZ) の器種組成比をみると皿 (DZ-2) が 48%、植木鉢 (DZ-21) が 21%の順に多い。DZ-2 は底部に左回転系切り痕のあるもの (2-b) が 91%で圧倒的に多いが、施釉されたもの (2-h) も少量認められる。植木鉢は瓦質のもの (21-b) が 79%をしめ、土師質のもの (21-a) より多い。以上のような遺物群の様相から幕末が下限である東大編年Ⅷd 期に比定される遺構一括遺物と考えられる。

SK358

推定個体数 177 点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が 87 点で 49%、陶器が 55 点で 31%、土器が 35 点で 20%で、磁器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると、碗が 35%、坏が 27%の順に多く、ともに瀬戸・美濃系磁器 (JC) が 60% 前後をしめる。瀬戸・美濃系磁器碗 (JC-1) は端反形碗 (1-d) と高台から体部が直線的に開く碗 (1-f) が 33%で多く、丸碗 (1-a)、いわゆる湯呑碗 (1-e) がそれに続く。瀬戸・美濃系磁器坏 (JC-6) は端反形坏 (6-b) が 24%、筒形坏 (6-c) が 18%をしめる。陶器の器種組成比をみると瓶が 38%、土瓶が 13%で、瓶が圧倒的に多い。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) が 50%で最も多いが、本遺構以外の TC-10 のしめる割合がすべて 80%以上である状況とは大きく異なる。これは TC-10 以外の産地の陶器瓶のしめる割合が高いことが要因である。TC-10 は容量 2 合半で底部釉が浸け掛けされたもの (10-c) が 56%で多く、1 升徳利 (10-d) とその他が 22%で続く。土瓶は産地不明のもの (TZ-34) でしめられ、白土染付されたもの (34-b) が 49%をしめる。土器の器種組成比をみると皿 (DZ-2) が 53%、植木鉢 (DZ-21) が 24%、他に油受け皿 (DZ-40) やひょうそく (DZ-44) などが少量認められるだけであり、器種、出土量ともに土器は少ない。以上のような遺物群の様相と、磁器にクロム青磁や型紙摺の製品が多数認められ、その中に少なからず銅版転写で絵付が施された製品もあること、陶器瓶に鉄で屋号と思われる文字が書かれているものがあること、笠間・益子系陶器 (TM) と思われる鉢や鍋が認められることなど、明治中葉頃に比定される遺構一括遺物と考えられる。なお陶磁器以外の遺物として、明治 15 (1882) 年と 17 (1884) 年の硬貨が出土しており、これらが本遺構の上限資料となろう。

(3) C₁区

SU294

推定個体数161点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が33点で20%、陶器が57点で35%、土器が71点で44%をしめ、土器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が48%と多く、坏がそれに続く。ほぼ肥前系磁器(JB)でしめられ、肥前系磁器碗(JB-1)は半球薄手碗(1-f)が47%、高台断面が「u」字状を呈し高台高が低いもの(1-e)が20%、肥前系磁器坏(JB-6)は丸形坏(6-a)と半球形薄手坏(6-f)が43%をしめる。陶器の器種組成比をみると瓶が27%、碗が23%の順に多い。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)が87%をしめ、容量が5合のもの(10-d)が77%をしめる。いずれの屋敷地でも陶器の中心器種として瓶が挙げられるが、その中心は容量が2合半のものであり、C₁区の遺構は5合が多くみられるという傾向がある。碗は京都・信楽系陶器碗(TD-1)と瀬戸・美濃系陶器碗(TC-1)が46%ずつ認められる。TD-1は半球形碗(1-b)が83%をしめ、TC-1はいわゆるせんじ(1-l)が33%と多く、いわゆる柳茶碗(1-g)、凹みを有する灰釉碗(1-k)、京焼風平碗(1-n)が各17%をしめ、TD-1は1つの小器種が大量にみられ、TC-1はさまざまな小器種がみられる傾向がうかがえる。土器の器種組成比をみると皿(DZ-2)が60%、塩壺(DZ-51)が25%の順に多い。DZ-2は底部に左回転系切り痕のあるもの(2-b)のみである。DZ-51は板作成形で「泉湊伊織」の刻印を有すもの(51-g)が50%で最も多く、ロクロ成形で筒形無印のもの(51-w)が19%でそれに続く。以上のような遺物群の様相から中心は東大編年V～VI期に比定される遺構一括遺物だと考えられるが、一部にいわゆる湯呑碗やロクロ成形無印の塩壺など東大編年VIIIb期まで下る遺物を含む。この要因は遺構の事実記載によると、本遺構を切るような新しい遺構の覆土を本遺構の覆土として調査してしまったことではないかと指摘されており、本遺構の廃絶時に伴う遺物はV～VI期の遺物と考えられる。

SK402

推定個体数221点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が86点で39%、陶器が96点で43%、土器が39点で18%で、陶器の比率がやや高い。磁器の器種組成比をみると碗が44%で中心となっており、産地をみると瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)が53%、肥前系磁器碗(JB-1)が47%とわずかにJC-1が多い。JC-1は端反形碗(1-d)が82%をしめ、あまり器種のバラエティーは認められない。JB-1はいわゆる端反形碗(1-n)が多く、湯呑碗(1-o)、広東碗(1-m)などもみられる。陶器の器種組成比をみると瓶が27%、碗が15%の順に多い。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)のみで、容量が5合の徳利(10-d)が25%、2合半で底部釉が浸け掛けされもの(10-c)といわゆるぺこかん徳利(10-g)が21%をしめる。碗は京都・信楽系陶器碗(TD-1)が54%、瀬戸・美濃系陶器碗(TC-1)が31%の順に多い。TD-1は端反形碗(1-g)が43%、半球形薄手碗(1-b)が29%、TC-1は錆釉が斑状に施釉された碗(1-q)が50%、灰釉薄手碗(1-c)、いわゆる小杉茶碗(1-w)がそれに続く。土器の器種組成比をみると皿(DZ-2)が47%、油受け皿(DZ-40)が31%の順に多い。DZ-2は底部に左回転系切り痕のあるもの(2-b)が82%と圧倒的に多いが、わずかに透明釉が施釉されたもの(2-h)も看取される。DZ-40は脚付きで透明釉が施釉されたもの(40-a)が73%と中心となっているが、脚無で透明釉が施釉されたもの(40-b)も27%認められる。以上のような遺物群の様相から東大編年VII～VIII期に比定される遺構一括遺物と考えられる。

SK188

推定個体数260点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が95点で37%、陶器が86点で33%、土器が79点で30%でわずかに磁器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が49%と多く、坏がそれに続く。碗は肥前系磁器碗(JB-1)が51%、瀬戸・美濃系磁器碗(JC-1)が49%でわずかにJB-1が多い。JB-1は半球形碗(1-f)が33%、端反形碗(1-n)が24%の順に多いが、そのほかに量的には少ないが、いわゆるくらかわんか碗(1-g)、小広東碗(1-i)、小丸碗(1-j)などもみられる。JC-1は端反形碗(1-d)が90%をしめる。陶器の器種組成比をみると碗が26%、瓶が24%の順に多い。碗は肥前系陶器碗(TB-1)と京都・信楽系陶器碗(TD-1)がそれぞれ36%で並ぶ。TB-1は刷毛目が施された丸碗(1-g)が50%、刷毛目が施された端反形碗(1-h)が25%、TD-1は半球形碗(1-b)が63%、端反形碗(1-g)も少量認められる。瓶はほぼ瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)でしめられ、容量5合のもの(10-d)が61%をしめる。その形態は、肩が張るものと紡錘形を呈するいわゆる尾呂徳利のようなものが混在する。容量2合半のものは底部釉が浸け掛けされもの(10-c)のみが認められる。土器の器種組成比をみると皿が(DZ-2)55%で多く、植木鉢(DZ-21)がそれに続く。DZ-2は底部に左回転糸切り痕のあるもの(2-b)が90%で圧倒的に多い。以上のような遺物群の様相から東大編年V~VI、VIIIb~c期の2つのピークが比定される遺構一括遺物と考えられる。なお本遺構と切り合い関係のあるSK245からは東大編年V~VI期に比定される遺物が出土しており、本遺構出土遺物でV~VI期とされる遺物群はSK245の遺物であった可能性もある。

SK292

推定個体数287点を数える一括資料である。胎質別にみると磁器が133点で46%、陶器が104点で36%、土器が50点で17%で、磁器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が40%、坏が25%の順に多い。碗は肥前系磁器碗(JB-1)が70%近くをしめ、端反形碗(1-n)が25%、高台断面「u」字状を呈し高台高の低いもの(1-e)が16%の順に多く、その他にいわゆるくらかわんか碗(1-g)、半球形碗(1-f)、湯呑碗(1-o)もみられる。なおJB-1-nはやや大振りで器壁の薄いものから、全体的に矮小化した小振りのものまで認められる。坏は肥前系磁器坏(JB-6)と瀬戸・美濃系磁器坏(JC-6)が45%と同じ割合で認められる。JB-6には丸形坏(6-a)が54%、器壁の極めて薄いもの(6-c)が23%、JC-6には器壁の極めて薄いもの(6-d)が62%、丸形坏(6-a)が38%みられる。JB-6-c、JC-6-dには、酸化コバルトにより絵付された製品も含まれる。陶器の器種組成比をみると碗が18%、瓶が16%の順に比率が高いが、突出して高い器種はない。産地をみると碗は京都・信楽系陶器碗(TD-1)が60%で中心となっており、半球形碗(1-b)が56%、半筒形碗(1-i)が22%でそれに続く。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶(TC-10)が中心で、容量が5合のもの(10-d)が67%、いわゆるぺこかん徳利(10-g)も認められる。土器の器種組成比をみると皿(DZ-2)が40%、油受け皿(DZ-40)が17%の順に多い。DZ-2は底部に左回転糸切り痕のあるもの(2-b)が65%、透明釉が施釉されたもの(2-h)が29%、DZ-40は脚無で透明釉が施釉されたもの(40-b)が57%、ドーナツ形のもの(40-f)が29%をしめる。以上のような遺物群の様相から、やや年代幅の大きい東大編年VIII期に比定される遺構一括遺物と考えられる。しかしTC-10-dに灰釉が施釉され体部形状が寸胴形を呈すものと、鉛釉が施釉され体部形状が紡錘形を呈すものがあり、量的には後者のものが多いこと、また容量が2合半のものに底部釉が拭き取りのもの(10-a)と浸け掛けのもの(10-c)の両方があるなど、東大編年Vb~VI期に比定される遺物群も看取される。しかし陶器瓶以外にはVb~VI期の様相を示す遺物は少ない。遺構の事実記載によると、本遺構内に別遺構の存在があったことを疑わざるを得ないとされており、Vb~VI期に比定される遺物群はそのような遺構の遺物である可能性が

ある。

なお本遺構からはⅢ-52 図、1 の鍋島の七寸皿 (JB-2-n) や 2 の「成化年製」銘のあるホタル手の技法が施された坏 (JA1-6)、Ⅲ-52 図、6、9 のような急須が看取されるなど、使用者の経済力や嗜好をうかがわせる遺物も出土している。

SK293

推定個体数 533 点を数える遺構一括遺物で、B 区の SK101 について推定個体数が多い遺構である。胎質別にみると磁器が 171 点で 32%、陶器が 240 点で 45%、土器が 122 点で 23% で、陶器の比率が高い。磁器の器種組成比をみると碗が 62% で圧倒的に多く、肥前系磁器碗 (JB-1) が 54%、瀬戸・美濃系磁器碗 (JC-1) が 45% で、JB-1 の比率がわずかに高い。JB-1 は端反形碗 (1-n) が 20%、いわゆるくらわんか碗 (1-g)、筒形碗 (1-l) が 14% をしめるが、その他に半球形碗 (1-f)、高台断面「u」字状で高台高が低い碗 (1-e)、梅寿文が施された碗 (1-v)、広東碗 (1-m)、小広東 (1-i) や小丸碗 (1-j)、湯呑碗 (1-o) など認められる。JC-1 は端反碗 (1-d) が 72% で圧倒的に多いが、他に丸碗 (1-a)、いわゆる広東碗 (1-c)、湯呑碗 (1-e) などみられる。陶器の器種組成比をみると瓶が 44% で中心器種となっている。瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) が中心で、容量が 2 合半で底部釉が浸け掛けされたもの (10-c) が 45%、容量が 5 合のもの (10-d) が 30% の順に多い。土器の器種組成比をみると皿 (DZ-2) が 31%、鉢 (DZ-5) が 13% でそれに続く。DZ-2 は底部に左回転糸切り痕のあるもの (2-b) が 70%、透明釉が施釉されたもの (2-h) が 15%、DZ-5 はその他が 43%、土師質で端反形のもの (5-a) が 36% をしめる。以上のような遺物群の様相から、やや年代幅の大きい東大編年Ⅷ期に比定される一括遺物と考えられる。なお本遺構からは写真 2 のような「享和二」(1802) 年の墨書が描かれた瀬戸・美濃系陶器水注の蓋が出土しており、これが本遺構一括一遺物料の古い資料になろう。また銅版転写やクロム青磁などの近代遺物を一部含むことから、19 世紀後半まで遺構の開口期間があったことが推測される。なお本遺構からは直径 5cm 程の産地不明鉄釉把手付鍋 (TZ-33-a) が他の遺構より多く出土している。



写真 2

(4) C₂ 区

SU382

推定個体数 222 点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が 53 点で 24%、陶器が 83 点で 37%、土器が 86 点で 39% で、土器の比率がわずかに高い。磁器の器種組成比をみると碗が 50% で圧倒的に多い。磁器はすべて肥前系磁器 (JB) であり、肥前系磁器碗 (JB-1) は筒形碗 (1-l) が 24%、半球形碗 (1-f)、いわゆる小丸碗 (1-j) が各 20% の順に多い。陶器の器種組成比をみると碗が 25%、瓶が 21% をしめる。碗は瀬戸・美濃系陶器碗 (TC-1) が 55%、京都・信楽系陶器碗 (TD-1) が 40% の順に多い。TC-1 はいわゆる腰鏝碗 (1-u) が 45%、灰釉薄掛け碗 (1-c) が 27%、瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) が大半をしめる。TC-10 は容量が 5 合のもの (10-d) が 56%、2 合半で底部釉が拭き取りされたもの (10-a)、1 升徳利 (10-e) が各 19% をしめる。土器の器種組成比をみると皿 (DZ-2) が 64% と多く、ひょうそく (DZ-44) が 13% でそれに続く。DZ-2 は底部に左回転糸切り痕のあるもの (2-b) が 94%、DZ-44 は無釉で脚部が無いもの (44-c) が 90% をしめ、ともに器

種のバリエーションは少ない。以上のような遺物群の様相から東大編年VIb～VII期に比定される遺構一括遺物と考えられる。しかし萩系陶器碗 (TH-1-a)、肥前系磁器薄手坏 (JB-6-c) など、それより年代が下る遺物も散見されるなど、一部VIIIa 期に比定される遺物群も含む。また本遺構出土遺物の特徴として、無釉で脚無のひょうそく (DZ-44-c) の完形率が高いことが挙げられる。

SK330

推定個体数 213 点を数える遺構一括遺物である。胎質別にみると磁器が 69 点で 32%、陶器が 50 点で 23%、土器が 94 点で 44% をしめ、土器の比率がやや高い。磁器の器種組成比をみると碗が 61% と圧倒的に多い。磁器はすべて肥前系磁器 (JB) で、肥前系磁器碗 (JB-1) はいわゆる小丸碗 (1-j) が 29%、小広東碗 (1-i) が 26% の順に多く、その他に半球形碗 (1-f)、いわゆるくらわんか碗 (1-g)、筒形碗 (1-l)、高台が「ハ」の字状に開く碗 (1-q)、広東碗 (1-m) などみられる。陶器の器種組成比をみると碗が 27%、瓶と鍋が 15% の順に比率が高い。碗は京都・信楽系陶器碗 (TD-1) が 77% をしめ、瓶は瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10)、鍋はすべて産地不明 (TZ-33) のものでしめられる。TD-1 は薄手半球形碗 (1-b) が 40% で最も多く、平碗 (1-h) が 20% でそれに続く。TC-10 は容量が 2 合半で底部釉が拭き取りされたもの (10-a) と、5 合のもの (10-d) が各 43% ずつ認められる。TZ-33 はすべて鉄釉把手付鍋 (33-a) で、口径が直径 5～6cm のものと、直径 15cm 前後の 2 種類のサイズのものみられる。なお TZ-33-a が多く出土する傾向は C₁ 区の SK293 でも認められる。土器の器種組成比をみると塩壺 (DZ-51) が 47%、皿 (DZ-2) が 22% でそれに続く。DZ-51 はロクロ成形無印のもの (51-w) が 94% で圧倒的多数をしめる。なお SK330 で看取される 51-w は部が寸胴形を呈し、口縁部の外反がないタイプのもものが中心であり、これは工学部 1 号館地点のイ類に相当するもので、口類としたものは散見される程度である。ちなみにハ類はない⁽¹⁾。DZ-2 は底部に左回転系切り痕のあるもの (2-b) が 88% をしめ、施釉されたものはみられない。以上のような遺物群の様相から東大編年VII期に比定される遺構一括遺物と考えられる。

3. 各屋敷地の磁器・陶器・土器の動向 (図1、表1、4)

A 区

A 区のカウント対象となっている遺構一括遺物は 18 世紀後半～19 世紀中葉に比定されるものである。19 世紀中葉に比定される SU2 以外はすべて土器の比率が高いが、時代が下るほど全体の中で土器の比率が低くなる傾向が認められる。ちなみに磁器と陶器は時代が下るほど比率が高くなり、SU2 では陶器、磁器、土器の順に比率が高い。

磁器は 7～15 器種が確認され、遺構毎に若干の増減はあるものの幕末に近いほど器種が増加する傾向が認められる。増加している器種は水滴や植木鉢などである。どの遺構も磁器の 40% ほどを碗がしめる傾向がうかがえるが、SU2 は坏の比率が碗を上回り 30% 近くをしめ、19 世紀初頭に比定される SK16 は碗の割合が 60% を超えるなど、やや他の遺構とは異なる。陶器は 10～18 器種が確認され、磁器と同じく幕末に近いほど器種の数が増加する傾向が認められるが、増加している器種は鍋、土瓶、行平鍋などのいわゆる調理具や、水滴、花生け、灰落し、水注、洩瓶、餌入れなどである。18 世紀後半に比定される SU18 は碗が 40% ほどをしめ陶器の中心器種となっているが、18 世紀後半～19 世紀中葉に比定される SK3 や、19 世紀初頭に比定される SK16 では瓶が 30% 前後をしめ中心器種となっている。土器は 8～13 器種が確認されるが、器種の増減は磁器、陶器に比べて少ない。ただし器種の増減はさほどないものの、各器種の出土数が減少する傾向がうかがえる。SU18 では皿

が76%と圧倒的に多いが、他では皿が約40%~20%強にまで減少している。なおSU2のみは植木鉢が土器の34%をしめ、他の遺構とは様相が大きく異なる。

B区

B区のカウント対象となっている遺構一括遺物は17世紀末葉~明治中葉に比定されるものである。17世紀末葉~18世紀後葉に比定されているSU63を除き、いずれの遺構も磁器の比率が高く、特に明治中葉に比定されるSK358では49%をしめる。

磁器は10~16器種が確認され、B区でも時代が下るほど器種が増加する傾向が認められる。増加している器種は急須、蓮華、土瓶などのいわゆる飲食具、調理具が中心である。全ての遺構で磁器の中心器種は碗で、磁器の30%強~50%ほどをしめる。しかし碗の占有率も19世紀前葉のSK101がピークで徐々に減少し、SK358ではやや増加している。ちなみに碗について比率が高いのは坏で、この傾向は他の屋敷地とも共通するところであるが、明治中葉までに30%弱にまでその割合が増加しているのはB区のみである。陶器は14~25器種確認される。18~19世紀中葉にかけて急須、爛鍋、油徳利、行平鍋、カンテラなどが増加し、明治中葉ごろは片口鉢、播鉢、鍋などの調理具が減少している。陶器の中心器種は17世紀末葉~18世紀後葉に比定されるSU63では碗で42%をしめるが、以後の他の遺構では瓶が30%~50%弱をしめ、中心器種となっている。土器は7~13器種が確認される。19世紀前葉くらいまでが器種の増加のピークで、瓶、急須、行平鍋、燭台、手焙り、植木鉢などの器種が増加するが、明治中葉に比定されるSK358ではそれまでみられた鉢、塩壺、火鉢などがみられない。土器の中心器種は19世紀前葉に比定されるSK101と18世紀前葉と19世紀前葉の2時期に比定されるSU176以外は皿で50%前後をしめる。

C₁区

C₁区のカウント対象となっている遺構一括遺物は18世紀前葉~19世紀中葉に比定されるものである。C₁区の遺構一括遺物は遺構毎にその様相が異なり、時間軸の中での様相差は見出しにくい。これはこの屋敷地の遺構一括遺物の年代幅が大きいことが要因の1つになっていると思われる。例えば中心となる胎質をみると、18世紀前~中葉ごろに比定されるSU294は土器の比率が高く、18世紀後葉~19世紀中葉に比定されるSK402と19世紀初頭~中葉に比定されるSK293は陶器の比率が高く、19世紀前葉から中葉に比定されるSK188と19世紀初頭~中葉に比定されるSK292は、磁器の比率が高い。しかし大きな流れの中でみるとC₁区の中では18世紀前葉~幕末にかけて中心となる器種が土器、陶器、磁器と変化したと言えよう。

磁器は7~15器種確認され、若干の増減はあるものの時代が下ると器種が増加する傾向が認められる。増加している器種は爛徳利、蓮華、合子、水滴、植木鉢、花生などである。しかし器種が増加しても中心器種は碗であり、どの遺構も40%~50%ほどをしめ、SK293などは碗が62%をしめている。陶器は17~22器種確認され、磁器同様、時代が下ると器種が増加する傾向が認められる。増加している器種は、急須、ちろり、行平鍋、蒸し器、餌入れ、柄杓などである。陶器の中心器種はSU294、SK402、SK293では瓶であるが、SK188、SK292は碗である。土器は6~13器種が確認され、やはり時代が下ると器種が増加する傾向がみられる。増加している器種をみると急須、壺・甕、鍋、行平鍋などである。土器の中心器種はどの時期の遺構も皿であるが、土器の中での比率自体は減少傾向がうかがえる。

C₂区

C₂区のカウント対象となっている遺構一括遺物は18世紀後葉に比定されるものである。2遺構ともに土器が40%前後をしめ中心となっているが、遺物の年代幅がないSK330のほうが土器の比率

が高い。

磁器は7～8器種が認められ、器種数の上の変化はあまりみられない。中心器種はともに碗で50%～60%をしめ、SK330の方がやや比率が高い。なお磁器の中で碗の比率が50%～60%というのは、他の屋敷地の18世紀代の遺構が40%～50%であるのに比べてやや高い。陶器は15～17器種が認められ、わずかにSK330の方が器種が少ない。しかし2遺構の器種組成は大きく異なり、SU382でみられた片口鉢、油受け皿、花生、香炉・火入れ、油壺、鬢水入れがSK330ではみられず、SU382ではみられなかった猪口、植木鉢、水注、柄杓などがみられる。中心器種は碗とともに陶器の20%強をしめるが、A区とB区の18世紀代の遺構が40%をしめているのと比較するとかなり低い。土器は8～9器種が確認され、数量的な変化は少ない。しかし陶器同様その組成が異なり、SU382でみられた七輪、瓦燈、火鉢などがSK330ではみられず、SU382ではみられないカンテラ、燭台などがSK330ではみられる。このような陶器と土器にみられる組成の違いは、SU382がVIb～VII期とやや年代幅のある遺構一括遺物であることや、個々の遺構の特質が反映されている可能性もある。土器の中心器種はSU382では皿で64%をしめるが、SK330は塩壺が47%をしめる。ちなみにSK330では皿は2番目に多い器種で22%をしめる。土器の中で皿が60%～70%をしめるという傾向は、どの屋敷地の18世紀代の遺構にも共通する傾向であるが、塩壺がSK330のように土器の50%近くをしめるような遺構は他には認められず、この遺構の特徴と思われる。

これまで屋敷地毎に時間軸の中で磁器、陶器、土器の様相の変化をみてきたが、以下ではそれが各屋敷地固有のものなのか否かを検討してみる。まず中心となっている胎質をみると、19世紀中葉に比定されるSU2以外のA区の遺構とC₂区の遺構では、土器が中心である。B区では17世紀末葉～18世紀後葉に比定されるSU63で土器が中心である以外、すべての遺構で磁器が中心であり、C₁区は遺構毎に中心となる胎質が異なっていた。以上のことから各屋敷地で中心となる陶磁器の胎質が年代的な要因ではなく、別の要因で決まっている可能性が高い。次に胎質毎に器種の数と中心器種をみると、磁器はA区とC₁区で7～15器種、B区では10～16器種、C₂区では7～8器種で、A区のSU2を除き、いずれの屋敷地でも碗が磁器の中心器種であるが、幕末に近づくにつれその比率は減少する。陶器はA区では10～18器種、B区では14～25器種、C₁区では17～22器種、C₂区では15～17器種が確認された。陶器の中心器種はA区のSU2を除き碗か瓶である。碗が中心となっている遺構をみると、A区のSU18、B区のSU63、C₁区のSK188とSK292、C₂区のSU382とSK330で、おおよそ18世紀後半～19世紀初頭に比定された遺物が出土している遺構であり、全屋敷地を通じて19世紀初頭以降に陶器の中心器種が碗から瓶になったといえるのでないだろうか。土器はA区では8～13器種、B区では7～13器種、C₁区では6～13器種、C₂区では8～9器種が確認され、A区のSK16とSU2、B区のSK101、C₂区のSK330以外は皿が土器の中心器種となっているが、磁器の碗と同じく幕末に近づくにつれてその比率は減少している。

4. いわゆる「揃い」といわれるものについて

次に同手のものが複数個体ある、いわゆる「揃い」といわれるものについて、それがどのような器種に、どのくらいの数が出土しているのかを屋敷地毎にみてみたい。

A区(図2)

SU2の18が最小個体数で4個体以上、SK3の17が2個体以上、SK16の12が2個体以上、SU18の4が2個体以上、6が4個体以上、15が3個体以上確認された。また実測外遺物であるが、

SK3 で端反碗が 3 個体以上、小広東碗が 2 個体以上、SK16 で端反碗が 2 個体以上「揃い」のものがあることを確認している。以上のように A 区では「揃い」のものは碗、皿の器種で、最小個体数で 2～4 個体確認される例が多い。また SU18 のような比較的上手の製品についても揃いものが認められる。

B 区 (図 2、3)

SU63 の 6、8、22 が最小個体数で各 2 個体以上、SK101 の 3 が 3 個体以上、6、19、50 が 2 個体以上、36 が 4 個体以上、37 が 3 個体以上、SK358 の 9、23、34 が 2 個体以上、SU392 の 8、11、25 が最小個体数で 3 個体以上、10 が 5 個体以上、14、32 が 2 個体以上、21～23 が 5 個体以上、SU396 の 4 が 5 個体以上、14 が 2 個体以上、20、21 が 3 個体以上確認された。また実測外遺物であるが、SK101 では坏が 2 個体以上、小丸碗が 2 個体以上「揃い」のものがあることを確認している。以上のように B 区はいわゆる「揃い」のものが一番多く確認されている。器種は碗、皿を中心にみられるが、その他に鉢、坏、瓶、蓋物など様々な器種で確認され、最小個体数で 2～5 個体が確認される例が多い。また SK101 などのように輸入磁器にも看取されるのが特徴である。

C₁ 区 (図 4)

SK188 の 1 が最小個体数で 4 個体以上、SK293 の 3 が最小個体数で 9 個体以上あることが確認された。また実測外遺物であるが、SK292 には端反碗、坏が各 2 個体以上、小皿が 3 個体以上、SK293 では、端反碗、筒形碗、皿が各 2 個体以上、いわゆるくらかわんか碗が 3 個体以上「揃い」のものがあることを確認している。以上のように「揃い」のものは碗、皿、坏で確認され、最小個体数 2～4 個体で確認される例が多い。しかしその中に SK293 の 3 のように最小個体数が 9 個体以上あるようなものもある。なおやや下手な製品について認められる例が多いようである。

C₂ 区 (図 4)

SK330 の 6、7 が最小個体数で 2 個体以上、13、14 が 3 個体以上あることが確認されている。以上のように C₂ 区の「揃い」のものは碗が中心で、最小個体数 2～3 個体で確認される例が多い。なお C₂ 区は他の屋敷地と比較して「揃い」のものが少ない傾向がうかがえる。これはカウント対象遺構となるような、遺物が多量に出土する遺構が少なかった事も影響しているかもしれない。

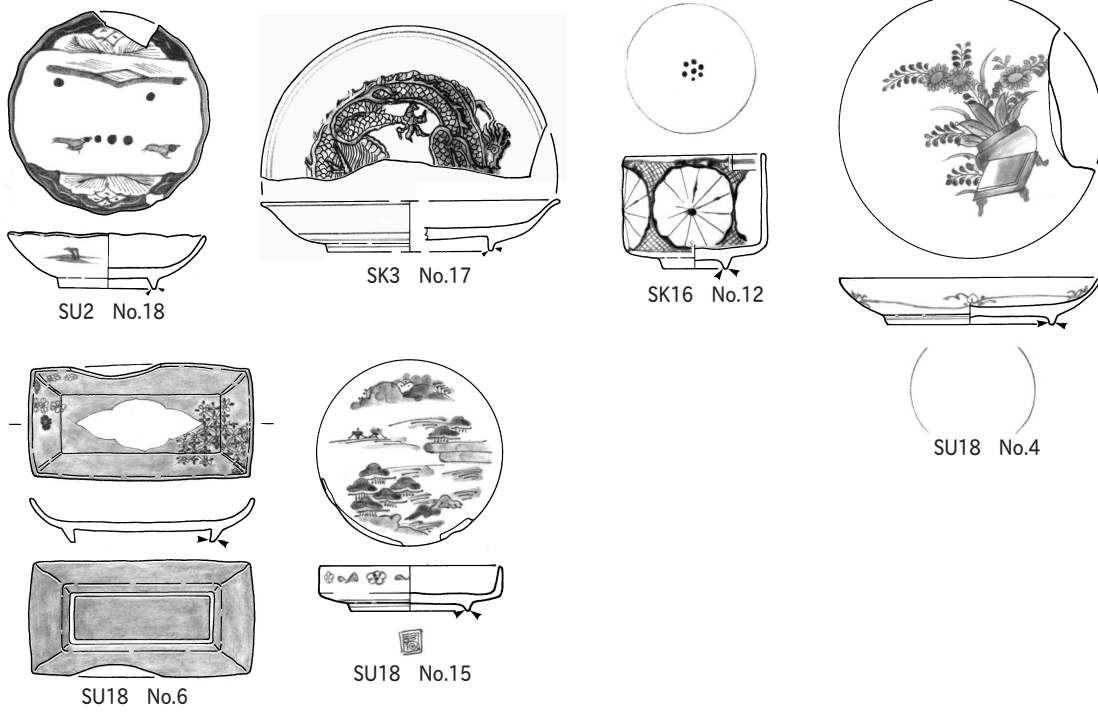
屋敷地毎にカウント対象とした遺構についてのみではあるが、「揃い」といわれるものについて概観してみた。その結果、屋敷地によって認められる器種、数量ともに随分と違いがあることがわかる。例えば A 区や B 区で「揃い」のものが確認された製品には、居住者の嗜好や経済力をうかがわせる比較的上手の製品や輸入磁器なども含まれるが、C₁ 区や C₂ 区では日常的に使用していたと考えられる器種で、しかも C₁ 区のものはやや下手のものが目立つという違いがある。なお大名屋敷では居住する人数やその性質上、工学部 14 号館地点で確認された数量よりも「揃い」のものが多く確認される例が多いが、工学部 14 号館地点でも C₁ 区の SK293 の 3 のように最小個体数で 9 個体以上確認されるものもあり、C₁ 区の居住者や利用のされ方を考える上で興味深い資料である。

5. 生産関連遺物とされた磁器・陶器・土器について

第三章第 2 節で取り上げられている生産関連遺物をみると、羽口や鉄滓以外に陶磁器が含まれている。そこでここでは生産関連遺物とされた陶磁器がどこの屋敷地で出土しているのか、また屋敷地により出土量の偏りがあるのかをみてみたい。なお生産関連遺物の詳細や各遺物の実測図については前節を参考にしていきたい。

生産関連遺物とされているものは大きく 6 つに分類することができる。

A区



B区

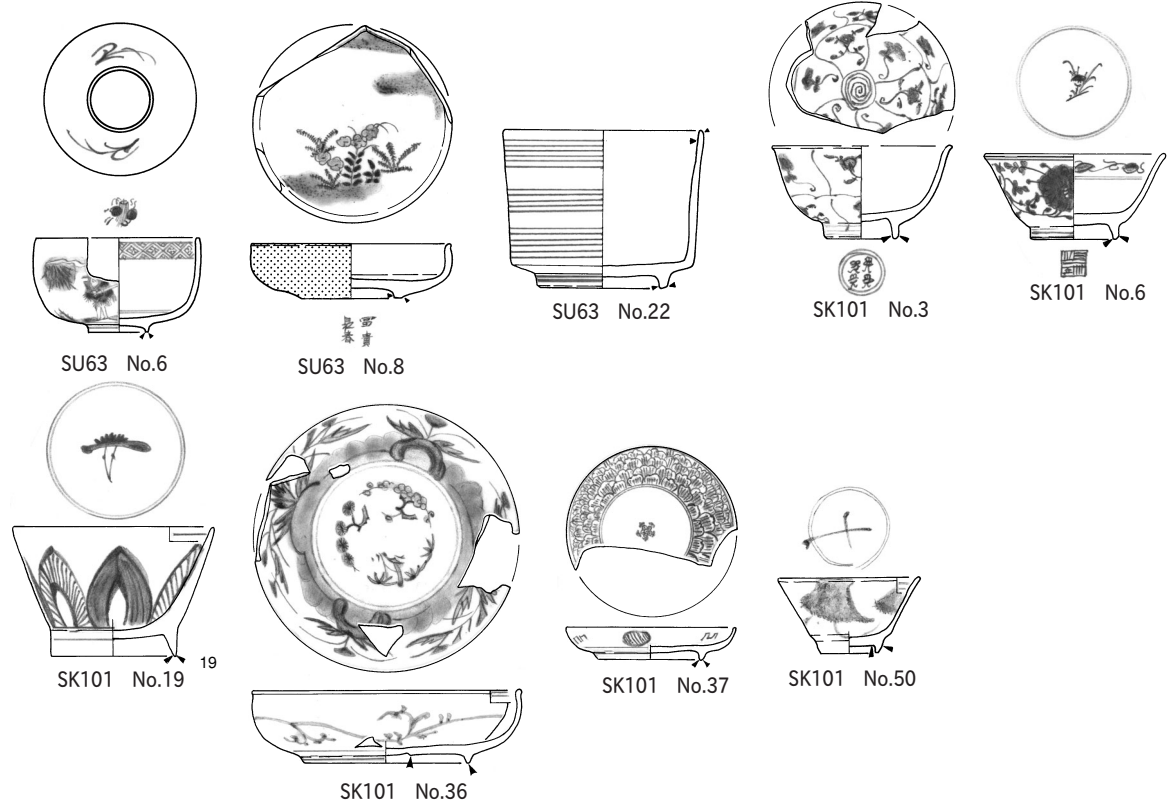


図2 「揃い」と考えられる陶磁器 (1)

B区

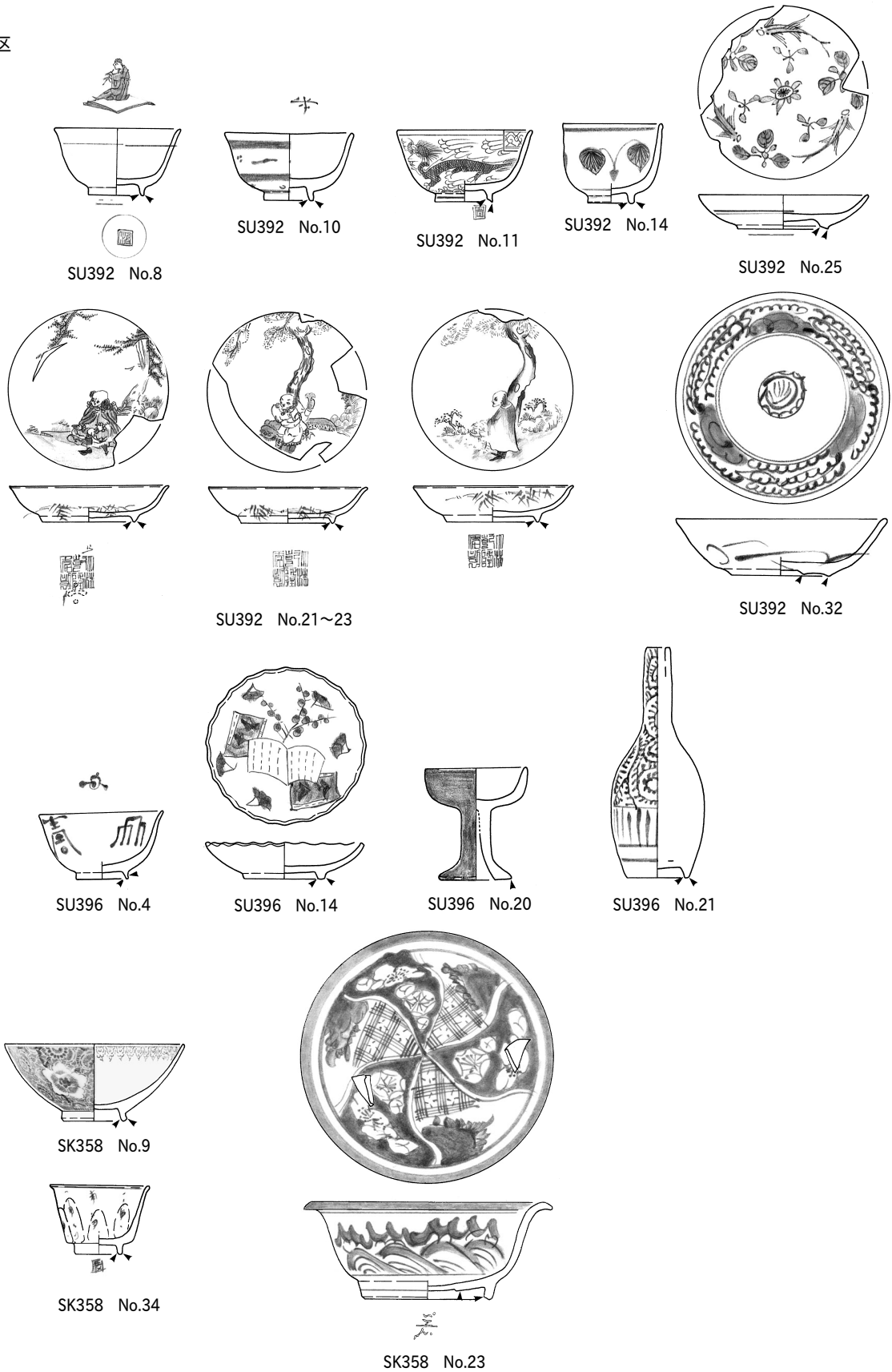
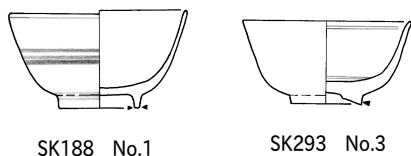


図3 「揃い」と考えられる陶磁器 (2)

C₁ 区



C₂ 区

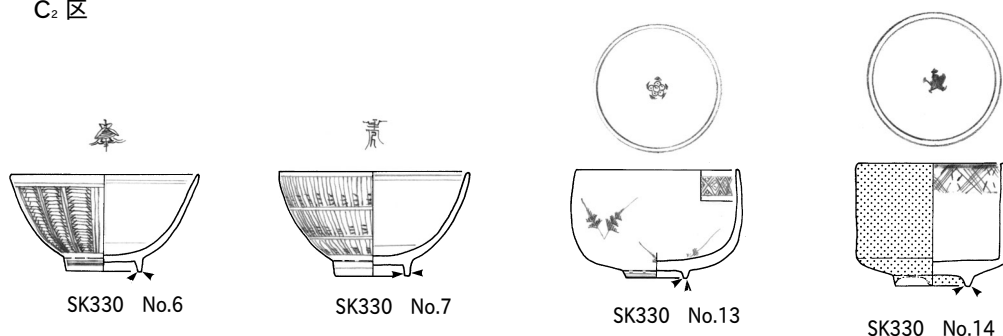


図4 「揃い」と考えられる陶磁器 (3)

- (1) フイゴの羽口
- (2) 椀形鉄滓 (鉄滓塊も含む)
- (3) 鉄滓が付着した瀬戸・美濃系陶器で柿釉に灰釉が流し掛けされた壺・甕 (TC-15-b) や、いわゆる赤津半胴 (TC-15-a)
- (4) 鉄滓が付着した陶磁器
- (5) ベンガラ生産に使用されたと考えられる瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10)
- (6) ベンガラ生産に使用されたと考えられる陶磁器

(3) を (4) から、(5) を (6) から分離したのは、これらが他の陶磁器と比較すると非常に多く認められたためであり、分類項目として独立させた。

実測図に掲載されている生産関連遺物について出土屋敷地、出土遺構、遺物の種類をまとめたものが表5である。なお表中のカッコ数字は分類項目と対応するものであり、「B+C₁区」となっているものは、屋敷地を超えて接合したことを示している。ただし今回取り上げたものは実測遺物として抽出されているものであり、工学部14号館地点から出土しているすべての生産関連遺物を網羅しているものではない。

A 区

- (1) が1点、(5) が3点、(6) が2点出土している。

B 区

(1) が13点、(2) が10点、(3) が15点。うち1点はC₁区の遺構と遺構間接合している。(4) が6点、(5) が8点、(6) が2点、それぞれ確認された。分類項目すべてのものが確認できたのは

この屋敷地だけである。特に(1)～(4)の分類項目はB区に集中している。また(5)もB区で一番多く認められた。

C₁ 区

(1)が1点、(2)は実測図の掲載はなく、本文中の記載のみである。(3)はB区の遺構と屋敷地を超えて遺構間接合しているものが1点、(5)が6点、(6)が3点確認される。(5)の出土点数はB区について2番目に多い。また、出土点数こそ少ないがB区について生産関連遺物とされるものが多く認められる屋敷地である。なお屋敷地を超えて遺構間接合するのは、生産関連遺物に限らずB区とこのC₁区の間が多い。

C₂ 区

(2)は実測図の掲載はなく、本文中の記載のみである。(5)が1点、(6)が1点である。全屋敷地の中で出土点数、種類ともに最も少ない。

以上、屋敷地毎に概観してみたが、出土状況をみるとフィゴの羽口や鉄滓塊など(分類項目(1)～(4))が確認されるのが最も多いのはB区であるが、A区、C₁区、C₂区でもわずかに確認されている。このことから何らかの生産行為を中心となって行っていたのはB区で、それ以外の屋敷地ではごく小規模に、あるいは臨時的に行っていたのか、または廃棄段階で偶然混入したとも考えられる。またベンガラ関係のもの(分類項目(5)・(6))も全屋敷地から出土しているが、やはり量的に多いのはB区である。隣接しているC₁区でも比較的多く出土しているが、この2つの屋敷地は他の遺物をみても比較的頻繁に遺構間接合しており、屋敷地を跨いで廃棄行為が行われていた可能性も否定できない場所である。しかしそのような廃棄行為の中でベンガラ生産に関連した遺物が多数混入したということであれば、鉄滓関連の遺物も多く出土するのではないだろうか。ただし廃棄物により廃棄場所が決まっていたとすれば、前述のようなことが起こらないことはない。やや想像を逞しくすれば、(1)～(4)と、(5)と(6)の生産関連遺物の出土状況が大きく異なるのは、羽口などのあまり日常的には使用しない道具を使う作業は、専門の職人などが居住していた空間を中心に行われ、徳利をはじめ身近な陶磁器を転用することでできる作業は全屋敷地を通して行われていたということを示唆しているのかもしれない。また注目されるのが瀬戸・美濃系壺・甕や瓶が他の陶磁器類に比べて転用例が多いことである。瀬戸・美濃系壺・甕などは植木鉢などに転用される例も多いが、この2器種が転用容器として汎用性のある便利なものと認識されていたのか、あるいは転用という事ではなく、当初から鉄やベンガラなどの生産行為に必要な専用器になりうる安価な製品として購入、使用したのかなどは検討する必要がある。

6. 小結

これまで工学部 14 号館地点から出土した磁器・陶器・土器の様相を遺構毎、屋敷地毎にその特徴を抽出し、様々な角度から分析を試みた。分析をする際に困惑したのが一括遺物に年代幅のあるものが多かったという点である。大名屋敷は国元と江戸屋敷との間で人間の出入りが頻繁で、比較的短期間に生活用品が廃棄されることが多いために遺構一括遺物の年代が限定しやすいが、組屋敷の場合、役職替えや災害などが無い限り長期にわたり居住し、廃棄行為が長期にわたり行われている可能性が高い。今回カウント対象となった遺構一括遺物にも年代幅のあるものが多いことや、その中で特定のピークが見いだせず継続的な廃棄が目立つことも、そのような組屋敷の様相を反映しているものであろう。また年代幅のある資料であるために、屋敷地の時間的な様相を抽出するのはかなり困難であ

第2節 工学部14号館地点出土の磁器・陶器・土器について

| 図 No. | 遺構名 | 分類 | 屋敷地 | 図 No. | 遺構名 | 分類 | 屋敷地 |
|-------|----------------|-------------|------------------|-------|---------------------|-------------|----------------------|
| 1 | SU392 | (1) | B 区 | 41 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 |
| 2 | SU392 | (1) | B 区 | 42 | SK140・293 | TC-15-b (3) | B + C ₁ 区 |
| 3 | SU392 | (1) | B 区 | 43 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 |
| 4 | SU396 | (1) | B 区 | 44 | SK101 | TC-15-b (3) | B 区 |
| 5 | SU392 | (1) | B 区 | 45 | SU392 | TC-15-a (3) | B 区 |
| 6 | SU392 | (1) | B 区 | 46 | SU392 | TC-15-a (3) | B 区 |
| 7 | SU392 | (1) | B 区 | 47 | SU294 | TC-15 (6) | C ₁ 区 |
| 8 | SK101 | (1) | B 区 | 48 | SK21 | TC-10-d (5) | A 区 |
| 9 | SK101 | (1) | B 区 | 49 | SK3 | JC-1-e (6) | A 区 |
| 10 | SU396 | (1) | B 区 | 50 | SU392 | TD-1-b (6) | B 区 |
| 11 | SU396 | (1) | B 区 | 51 | SK188 | TC-10-h (5) | C ₁ 区 |
| 12 | SK140 | (1) | B 区 | 52 | SU294 | JB-6-f (6) | C ₁ 区 |
| 13 | SK20 | (1) | A 区 | 53 | SK293・SU295 上・SK296 | TC-10-f (5) | C ₁ 区 |
| 14 | SK200・293 | (1) | C ₁ 区 | 54 | SK200 | TC-10-c (5) | C ₁ 区 |
| 15 | SU396 | (2) | B 区 | 55 | SU294 | TC-10-d (5) | C ₁ 区 |
| 16 | SU396 | (2) | B 区 | 56 | SU294 | TC-10-a (5) | C ₁ 区 |
| 17 | SU396 | (2) | B 区 | 57 | SK39 | TC-10-d (5) | A 区 |
| 18 | SU392 | (2) | B 区 | 58 | SK186 | TC-10-e (5) | C ₁ 区 |
| 19 | SU396 | (2) | B 区 | 59 | SU389 | TC-10-e (5) | C ₂ 区 |
| 20 | SU396 | (2) | B 区 | 60 | SK317 | TC-10-e (5) | B 区 |
| 21 | SU396 | (2) | B 区 | 61 | SK101 | TC-10-e (5) | B 区 |
| 22 | SU396 | (2) | B 区 | 62 | SU18 | TC-10-g (5) | A 区 |
| 23 | SU396 | (2) | B 区 | 63 | SK358 | TZ-34-h (6) | B 区 |
| 24 | SU396 | (2) | B 区 | 64 | SU38 | TC-15 (6) | A 区 |
| 26 | SU396 | TC-9-c (4) | B 区 | 65 | SU382 | TC-15 (6) | C ₂ 区 |
| 27 | SU392 | TC-1-u (4) | B 区 | 66 | SK291・SK292・SK293 | TC-15 (6) | C ₁ 区 |
| 28 | SU392・396 | TC-1-u (4) | B 区 | 67 | SU396 | TC-10-e (5) | B 区 |
| 29 | SU392 | TC-1-u (4) | B 区 | 68 | SU396 | TC-10-e (5) | B 区 |
| 30 | SU392 | TC-1-u (4) | B 区 | 69 | SU392 | TC-10-c (5) | B 区 |
| 31 | SU392 | JB-1-w (4) | B 区 | 70 | SU392 | TC-10-c (5) | B 区 |
| 32 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | 71 | SU396 | TC-10-e (5) | B 区 |
| 33 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | 72 | SU396 | TC-10-e (5) | B 区 |
| 34 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | | | | |
| 35 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | | | | |
| 36 | SU396 | TC-15-b (3) | B 区 | | | | |
| 37 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | | | | |
| 38 | SK358 SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | | | | |
| 39 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | | | | |
| 40 | SU392 | TC-15-b (3) | B 区 | | | | |

表5 生産関連遺物出土遺構 (図 No. は実測図版に対応)

り、そこからうかがい知ることができる居住者の変化（経済状況、嗜好性、人数など）をとらえることも困難な作業であった。その中でこの組屋敷の居住者の様相を反映しているのではないかと考えられたのが、特定の遺物がまとまって出土している屋敷地がある事と、生産関連遺物の出土状況である。前者にはA区SU2の植木鉢やC₂区SK330の塩壺や鉄軸把手付鍋のようなものが挙げられる。ちなみにSK330ではこの他にも西行をモチーフにした人形、釜形土製品、ミニチュアのコンロなども他の遺構と比べて非常に多く出土している。共通しているのは多量に出土している遺物のいずれも土器であるという点で、想像を逞しくするとC₂区では土器の生産を行っていた、あるいはそれら土製品を商いしていた居住者がいた可能性も考えられるのではなかろうか。後者の生産関連遺物はその出土状況からB区に鉄やベンガラなどの生産に従事するような職人がいたのではないかと指摘したが、そのように生産したものを売買して生業としていた可能性も当然あるであろう。B区では輸入陶磁器やボウフラのような煎茶道具をはじめ、居住者の嗜好や経済力を反映したようなものが他の屋敷地より多く出土しており、そのような生業に従事していることで他の屋敷地の居住者より経済的に裕福であったとも推測されるが、想像の域はでない。

なお今回分析する際に、他の組屋敷との比較やこれまで調査研究が進められてきている加賀藩邸のような大名屋敷との比較検討を行うことができなかった。今後の課題としたい。

本稿を草するに際して、東京大学史料編纂所の宮崎勝美氏には遺物に書かれた文字の判読をはじめ、本地点に関わる文献史料についてもご教示いただきました。感謝申し上げます。

【註】

(1) 大貫浩子氏は工学部1号館地点出土のDZ-51-wに分類される塩壺を口縁部の形態や胴部プロポーションなどから3種類に分類されている。

イ類：口縁部が平らで筒形である。口縁部内面が真直に立ち上がっており、蓋受けの名残のようなものをもつものである。口縁部から底部にかけて直線的である。

ロ類：口縁部が平らで底部がやや窄まっている。口縁部内面が真直に立ち上がっており、蓋受けの名残のようなものをもつものである。

ハ類：口縁部に鏝を持つもので口唇部がやや内傾しているものが多い。全体的に規格性に乏しく、個体差が大きい。

【参考文献】

- 井汲隆夫・成田涼子 1994 「近世南町遺跡居住者の生活史」『東京都新宿区南町遺跡』
- 井汲隆夫 1996 「江戸の大縄地に関する考古学的考察」『東京都新宿区百人町三丁目遺跡Ⅲ』
- 大成可乃 2000 「やきもの考—本郷構内出土の陶磁器・土器類について」『加賀殿再訪』東京大学コレクションX
- 大貫浩子 2005 「加賀藩邸内における陶磁器消費の諸相」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書6
- 堀内秀樹 1997 「東京大学構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 九州近世陶磁学会 2006 『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 九州編』
- 史籍研究会編 1982 『諸向地面取調書』汲古書院
- 陶器全集刊行会 1973 『日本古陶銘款集』(株)平安堂書店
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』

- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類』(1)
東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『医学部附属病院外来診療棟地点』

第3節 東大構内遺跡出土の人形にみる一考察

—工学部 14 号館地点の人形の様相と各期にみる成形技法—

安芸 穂子

1. はじめに

東京大学本郷構内の遺跡（以下東大構内遺跡）の多くは、加賀藩邸を中心に大名屋敷が主であったが、本地点は御先手組組屋敷で幕臣地にあたる場所である。御先手組は江戸の警護、防衛を役割としてしていた。本地点は江戸時代初期から幕末まで御先手組として機能していた場所である。発掘地点は組屋敷の屋敷から約 10 間の裏手部分にあたる。嘉永 3（1850）年近江屋板江戸切絵図に居住者の氏名 10 名が記載されている。発掘面積は 1700m² で、加賀藩邸との地境と思われる柱穴列や地下室、井戸、土坑、ピットなど多くの遺構が確認された。本地点は、検出した遺構から A 区、B 区、C₁ 区、C₂ 区の 4 区の居住区にわけられる。各区の遺構から人形やミニチュアが出土しているが、最も多く出土した地区は B 区と C₁ 区であった。遺跡からは多くのものが出土する、かつて当時の人達が使い生活していたものである。ここで報告する人形・ミニチュアから当時の人々の精神文化の一端を知ることができる。ここでは、下級武士の生活跡から出土した人形を報告していきたい。また、東大構内で出土した人形の成形技法を年代別にみていき、成形技法による年代判定が可能かどうか検討してみたい。

2. 工学部 14 号館出土の人形の様相

本地点で最も古い遺構は SK194（B 区）で、17 世紀末～18 世紀初頭の遺構である。出土した人形は、片膝を立て座る西行法師と施釉された猿が出土している（Ⅲ-48 図 5）。17 世紀末～18 世紀前葉の遺構に SK415（C₂ 区）がある、ここからは、船に乗った猿の人形と、瓢箪から駒が飛び出している人形と白色系胎土の手捻り成形の人形が出土している（Ⅲ-107 図 11～13）。18 世紀前葉の遺構は SK43（A 区）と SK245（C₁ 区）である。SK43 からは、狐の首人形が出土している（Ⅲ-19 図）。SK245 からは、2 種類の成形法の小形の西行法師が出土している（Ⅲ-49 図）。その他の多くは 18 世紀中葉～19 世紀中葉の遺構である。列記した古い 4 遺構からの人形の出土量は少ない。この時期は、まだ人形の種類も少なく量産はされていないと考えられる。

（1）出土量の多い人形

ここでは、人形やミニチュアが 30 点以上出土した 33 遺構について取り上げ、過去において出土例の多い人形を選出し出土点数をカウントした。出土点数が多いものから記述していく。

- ①鳩笛やふくら雀の土笛が最も多く 31 点出土している。31 点のうち 6 点は SU2 から出土している。土笛の謂われは、ものを食べた時、食べ物がノドに詰まらないようにとの願いが込められたものである。
- ②ぶら人形は 22 点出土している。22 点のうち 7 点は SK101 から出土している。この人形は手足が別に作られ、布なので繫いでぶらぶら動くような仕組みの人形である。上手の三折れ人形を

意識したものと云われている抱き人形である（Ⅲ-33 図 161～164）。

- ③犬（狛）は 22 点出土している。白色系胎土で施釉された、狛乗り童子の人形は 2 点出土している（Ⅲ-68 図 42）。1 点の犬の腹部には「てつ」と名前が墨書されている。東大構内の遺跡で犬が出土した最も古い遺構は、医学部附属病院病棟地点（以下、HW と略す）東大編年Ⅳa 期（以下、東大編年を省略）の遺構 SK3 である。本地点の SU2 遺構からは、犬張り子型のものが出土している。犬張り子の原流は、宮中で産所用の用具とされた犬宮で、産室に置いて、邪霊や魔を祓う魔除けのまじないとしたものである。犬は安産のお守りでまた、子供が無事育つようにとの願いの込められた人形である。
- ④姉様で 16 点出土している。いわゆる女雛である。袴を着けた袴雛と対の人形であるが、男雛の袴雛の出土は少ない。袴を着けた人形は古くは 17 世紀中葉の遺構御殿下記念館地点 276 号遺構から台付きで出土している。
- ⑤馬の人形は 14 点出土している。構内の遺跡で古いものはⅣa 期 HW-SK3 から出土している。馬の人形は端午の節句に飾ったといわれている。また初午の時に買い求めたそうである。
- ⑥猫は 13 点出土している。大半が座っているポーズのものである。
- ⑦西行法師は 13 点出土している。13 点のうち 5 点は SU63 から出土している。大きいものは首部のない状態で 238mm のものである（Ⅲ-22 図 83）。本地点で人形類が出土した遺構の中で特殊な遺構である。遺構の年代はⅣb 期～Ⅶ期と幅の広い遺構である。西行法師は、構内の遺跡の中で最も古い遺構Ⅲa 期にあたる HW-SP883 から出土している。
- ⑧天神は 12 点出土している。構内の遺跡で古いものはⅣa 期の HW-SK3 から 4 点出土している。古くは五穀豊穡の願い込めて祀ったと云われている。学問、書道の神様として子供のために祀ったともいわれている。三月三日の上巳の節句や五月五日の端午の節句に飾る習性がいまでも山陰地方に残っている。
- ⑨狐も 12 点出土している。当時流行した稻荷信仰のものと思われる台付きの狐と（Ⅲ-11 図 108）、着物をきて擬人化された狐が出土している（Ⅲ-33 図 166）。狐が出土した遺構はすべて 19 世紀代の遺構である。
- ⑩恵比寿、大黒である。この人形は古くは 17 世紀後葉の遺構から出土している。二つで二福神といわれ縁起物として祀られた。信仰の起源は古く平安時代にはすでにあり、室町期に一般化し庶民に親しまれていたようである。
- ⑪亀乗り童子で 5 点出土している。京都で作られた伏見人形とおもわれるもので、白色系胎土の人形のなかで、狛抱き童子、鴛鴦、魚とならび江戸で最も多くみられる人形である。SU2 から出土した亀乗り童子は SK3 と遺構間接合したものである。亀の胸部に二重亀甲の中に象形文字風の亀の刻印がついていたものである（Ⅲ-5 図 102）。
- ⑫狛抱き童子で 4 点出土している（Ⅲ-34 図 175）。施釉されたものが多い。郷土人形の研究者が「ねぶり人形」といっているもので、今日のおしゃぶりである。
- ⑬虚無僧であるが本地点からは 3 点出土している。本地点の SU2 から出土した虚無僧は亀乗り童子と同様の胎土の人形である（Ⅲ-5 図 103）。

人形ではないが本地点からは型に土を入れて抜いて遊ぶ面形が 13 点出土している。SU382 出土の狐の面形の裏面には狐の顔が描かれている（Ⅲ-93 図 56）。泥面子は 45 点、碁石形土製品は 71 点であった。

本地点は、東大構内の遺跡の他の地点にくらべ人形やミニチュアの飯事道具が多く出土した地点で

ある。人形の多くは子供の成長を願ったものや縁起物である。前身を赤く塗った小形の力士の人形が出土しているが(Ⅲ-5 図 107)、赤彩された人形は当時恐れられていた疱瘡除けの呪いとされていたものである。大量に出土したミニチュアの播鉢や碗には子供の名前の「と茂」や「と」の頭文字が墨書されたものが多く出土している。多数の遺構から出土しているが、おそらく同一人物の持ち物であったと推測される。前記した狛乗り童子には「てつ」、箱庭道具の石段の内側には「三吾」(Ⅲ-57 図 85)の名がみられる。当時の流行を反映していた人形がある、歌舞伎「彦山権現」お園を題材にした人形の女虚無僧(Ⅲ-34 図 169)や、お座敷遊びの狐拳の狐や獵師や、瓢箪から駒の諺から瓢箪の中から馬が飛び出している人形などが出土している。そして、笑い物と称される人形で、女性の性器を表現した子守人形や(Ⅲ-62 図 64)、行水人形(Ⅲ-89 図 7)などが出土している。男性の性器を表現した陽物(Ⅲ-40 図 41)も出土している。実に様々な人形が出土している地点である。人形の多くは庶民的信仰や、縁起に結びついたものである。付録の CD-ROM にここで取り上げた 33 遺構の組成表を載せておく。

(2) 他の遺構と異なる様相の遺構

SU63 (IVb 期～VII 期、Ⅲ-21～23 図)

人形、ミニチュアが 62 点出土している。この遺構からは、西行法師の人形が 5 点出土している。5 点のうち 2 点は片膝を立て座っているもので「富士見西行」と呼ばれているものである。立ち姿の一番大きいものは残存高が 238mm のものである。西行法師の人形はすべて、底部が開いたものである。中実の人形は面持ち童子と袈裟人形、小形の虚無僧である。中空のものは太鼓を打つ仕草の唐子の人形である。共伴したものに、柚でんぼ、器台、素焼きの蓋、陶器の播鉢、磁器製の碗や皿がある。型抜き遊びの面形が 2 点出土している(Ⅲ-21～23 図)。立西行は盗難除け、腰を下ろした西行は腰痛の呪いとされているが、定かではない。一遺構から西行の人形が 5 点も出土しているのは珍しい事例と思われる。巾広い年代であるが、人形は、古い様相を呈している。

SK140 (18 世紀後葉～19 世紀中葉、Ⅲ-36、37 図)

人形、ミニチュアが 58 点出土している。出土したものは塔や祠、面形、ミニチュアの急須、土鈴が出土している。人形は天神が 2 点、狛犬が 2 点ですべて中実である。また、ホラ貝をもつ猿や象や力士か? 獵師等が出土している。象や力士は手捻り成形であるが、重量感のある人形である。獵師の人形は、裏面が欠損して全体像はつかめないが、器壁の厚い、二枚の型で底部開口型した、硬質感のある人形である。天神の台座は高く、梅の文様や薄縁の文様は丁寧である。狛犬が 2 点出土しているが、天神の前に置かれるものである。人形の作風が他の遺構と異なる一群である。

SK330 (VII 期、Ⅲ-73～75 図)

人形、ミニチュアが 105 点出土している。この遺構からはミニチュアではないが釜形土製品が 8 点竈が多数出土している。人形は、ぶら人形、福祿寿、状態を反らした力士とおもわれるもので底部が開いている人形である。また、ここから二枚の型で中実の極めて小さい人形が出土している。

以上、他の遺構とは趣が異なる遺構の三遺構をとりあげた。本地点からは SK330 の他にも多くの釜形土製品が出土しており、中には穿孔されたものも出土している(Ⅲ-13 図 29、56 図 68)。釜形土製品がどのような使われ方をしたのか未だ明らかではない。また、ミニチュアの竈が多数出土しており、明らかに飯事道具とおもわれる竈とは、作風が異なる。

3. 東大構内遺跡出土の人形にみる成形技法

人形の成形技法について、どのような技法のものがいつ頃から登場するのか、東京大学構内の遺跡から出土した人形で検証していきたい。検証にあたり表1を作成した。表中の印は下記の通りである。備考欄の表記は図版が掲載されている報告書と図版番号である。

○印は、江戸在地系と云われている胎土が橙色系の人形や泥面子・面形である。

●印は、江戸在地系と云われている胎土が橙色系で、施釉された人形である。

◇印は、京都系といわれている胎土が白色系の人形である。

◆印は、京都系といわれている胎土が白色系で、施釉された人形である。

△印は、磁器製の人形である。

▲印は、陶製の人形である。

<備考欄略字の報告書名>

山上・御殿下は、山上会館・御殿下記念館地点

医附病は、医学部附属病院地点

外来は、医学部附属病院外来診療棟地点

数字のみは本文中の図版番号

(1) 成形技法

人形の成形技法にはA型押し・B型打ち・C手捻りがある。A～世紀の成形技法について若干の説明をしておく。文中の番号は参考資料として本文中の図版番号を記載したものである。

A. 型押し成形

型押し成形の型は凹型である。表裏二つの凹型を使用した場合と凹型1つだけの二通りある。

成形工程

①型の内側に離剤の雲母（キラ）等をふる。

②粘土をつめ、指で押押し型に密着させる。縁からでた粘土は篋で切り落とす。

③少し時間をおいて型から抜き取る。3段階まで同じである。型を二枚使用した場合の合わせ方は、前後・左右・上下（Ⅲ-5 図 102）・対角線（Ⅲ-36 図 32～34）による方法がある。型合わせの場合、内側に空洞ができる中空と、空洞のない中実（Ⅲ-23 図 87、88）の二通りある。中空の人形には底部があるものと（Ⅲ-5 図 116）開口している（Ⅲ-22 図 80～84）二種類がある。中実の人形はすべてに底部はある。

④貼合わせは刷毛で貼付箇所を水で濡らして、表裏を押付けて合わせる。その後、合わせ目を指やヘラで濡らしてよく撫でて調整する。一枚の型のみで合わせがないものは泥面子や芥子面、撫で牛（Ⅲ-107 図 SK480-2）で、箱庭道具などにもみられる。凹型には木製と土製のものがある。型による成形は弥生時代からすでに行われているが、江戸期の人形と同じ技法のものは、すでに14世紀代の菩薩像にみることができる。成形技法については以前筆者が『江戸文化の考古学』（安芸 2000）のなかに書いた二枚の型を使用したものを「型合わせ」と、一枚型を「型抜き」と記載したものである。今後、成形方法についての用語は現在報告している「型押し成形」、「型打ち成形」、「手捻り成形」と訂正したい。

| 地点名 | 遺構名 | 陶磁器からみた遺構年代 | 型押し成形 | | | | 型打ち成形 | | 手捻り成形 | | 備考 |
|----------|--------|-----------------------------------|-------|----|----|-------|-----------|-------|-------|-----------------------------------|----|
| | | | 二枚型 | | 一枚 | 型打ち成形 | 型十 手捻り | 手捻り成形 | | | |
| | | | 底部開口 | 中空 | | | | | | | |
| | | | 底面有 | 中空 | | | | | | | |
| 病院精練 | SP883 | III a 期(1650 ~ 1660 年代) | ○ | | | | | | | 未報告 | |
| 病院精練 | SP2326 | III b 期(1670 ~ 1682 年代) | ○ | | | | | | | 未報告 | |
| 御殿下記念館 | 276号 | III b 期(1670 ~ 1682 年) | | ○ | | | | | | 山上・御殿下第2分頁 695/407 図-1 | |
| 病院中央診療棟 | F34-11 | IV a 期(1650 年代) | ○ | ● | ○ | ○ | ○ | ● | ○ | 医附精練IV-202 図 18・203 図 31.32.35.40 | |
| 病院精練 | SK3 | IV a 期(1680 年代) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ | 未報告 | |
| 病院中央診療棟 | 6号組石 | 1680 年代 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 医附精練 P754/IV-208 図 1.41 | |
| 御殿下記念館 | 534号 | 1680 年代 | | △ | | | | | | 山上・御殿第2分頁 695/407 図-10 | |
| 農学部畜畜病院 | SK09 | IV b 期(1690 ~ 1700 年代) | ○ | | | | | ○ | | 年報 1・P133 図 20-41 | |
| 病院精練 | SK3715 | IV b 期(1690 ~ 1700 年代) | ○ | | | | | △ | | 未報告 | |
| 病院精練 | SK557 | 17C 末 ~ 18C 初 | | | | | | | ◇ | 未報告 | |
| 工学部 14号館 | SK194 | 17C 末 ~ 18C 初 | ○ | | | | | | ● | III-48 図 5 | |
| 外米精練 | SU2 | 17C 末(完緑 16 火災) | | ◆ | | | | | | 外W-103 図 3 | |
| 外米精練 | SU313 | 17C 末(完緑 16 火災) | ○ | | | | | | | 外W-104 図 29 | |
| 外米精練 | SE10 | 17C 末 | | | | | | | ▲ | 外W-103 図 4 | |
| 外米精練 | SU370 | 17C 末 | | | | | | | | 外W-103 図 30 | |
| 病院中央診療棟 | E29-1 | 17C 末 ~ 18C 前 | | ○ | | | | | | 医附精練IV-204 図 44 | |
| 工学部 14号館 | SK415 | 17C 末 ~ 18C 前 | | ○ | | | | | ◆ | III-107 図 | |
| 病院中央診療棟 | D28-1 | 18C 前 | | | | | | | ▲ | 医附精練IV-204 図 49 | |
| 工学部 14号館 | SK245 | 18C 前 | ○ | | | | | | ○ | III-49 図 27.28 | |
| 病院精練 | SK1313 | IV b ~ V a 期(1690 ~ 1720 年代) | | ○ | | | | | | 未報告 | |
| 外米精練 | SK18 | V a 期(1710 ~ 1720 年代) | ○ | ◆ | | | | | | 外W-103 図 7.8 | |
| 外米精練 | SU20 | V a 期(1710 ~ 1720 年代) | ○ | | | | | | ▲ | 外W-103 図 10 | |
| 病院中央診療棟 | F33-3 | V a 期(1710 ~ 1720 年代) | | ○ | | | | | ◇ | 医附精練IV-202 図 15/ 廊下系 | |
| 外米精練 | SK131 | 18C 前(享保 15 火災) | | ○ | | | | | ○ | 外W-103 図 11 | |
| 設備管理棟 | AD35-2 | V b 期(1730 ~ 1740 年代) | | | | | | | | 医附精練IV-203 図 19 | |
| 設備管理棟 | AE36-4 | V ~ VI a 期(1710 ~ 1760 年代) | ○ | | | | | | | 医附精練IV-202 図 12・203 図 23 | |
| 外米精練 | SU115 | 18C 前 ~ 中 | | | | | | | | 外米IV-103 図 | |
| 病院精練 | SK1409 | VI a 期(1750 ~ 1760 年代) | | ◆ | | | | | | 未報告 | |
| 病院精練 | SU593 | VI 期(1750 ~ 1770 年代) | | | | | | | | 未報告 | |
| 工学部 14号館 | SU18 | VI ~ VII 期(1750 ~ 1790 年代) | | | | | | | ○ | III-15 図 | |
| 工学部 14号館 | SU382 | VI ~ VII 期(1750 ~ 1790 年代) | | | | | | | ○ | III-93 図 | |
| 設備管理棟 | AE34-3 | VII 期(1780 ~ 1790 年代) | | | | | | | ○ | 医附精練IV-203 図 19 | |
| 設備管理棟 | AE39-1 | VIII 期(1780 ~ 1790 年代) | | ● | | | | | ○ | 医附精練IV-203 図 38・204 図 51 | |
| 工学部 14号館 | SK330 | VIII 期(1780 ~ 1790 年代) | ○ | | | | | | ○ | III-75 図 | |
| 工学部 14号館 | SK337 | 18C 後 ~ 19C 前 | | | | | | | | III-79 図・刻印「雍正」灯笼 | |
| 工学部 14号館 | SK16 | VIII a 期(1800 ~ 1810 年代) | | | | | | | | III-13 図 | |
| 給水設備棟 | AJ35-J | VIII a 期(1800 ~ 1810 年代) | | | | | | | | 医附精練IV-202 図 9・208 図 139 | |
| 工学部 14号館 | SK101 | VIII a ~ VIII b 期(1800 ~ 1830 年代) | | | | | | | ○ | III-32 ~ 34 図・刻印「亀」[家] ミニチュア了瓶、皿 | |
| 工学部 14号館 | SK301 | 19C 前 | | ○ | | | | | ○ | III-88 図・刻印「亀」 ミニチュア了鉢 | |
| 工学部 14号館 | SK140 | 18C 末 ~ 19C 中 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | III-37 図 | |
| 工学部 14号館 | SK292 | VIII a ~ VIII d 期(1800 ~ 1860 年代) | | | | | | | ○ | III-52 ~ 53 図 | |
| 工学部 14号館 | SK293 | VIII a ~ VIII d 期(1800 ~ 1860 年代) | | | | | | | ○ | III-56 図(磨り) 磨に文字刻印 | |
| 工学部 14号館 | SK188 | VIII b ~ VIII c 期(1820 ~ 1840 年代) | | | | | | | ○ | III-44 図 | |
| 工学部 14号館 | SK2 | VIII c 期(1830 ~ 1840 年代) | | | | | | | ○ | III-3 ~ 5 図・刻印「亀」人形、「福山」ミニチュア了瓶子 | |
| 工学部 14号館 | SK3 | VIII b ~ VIII d 期(1820 ~ 1860 年代) | | | | | | | ▲ | III-10 ~ 11 図 | |
| 工学部 14号館 | SU392 | VIII d 期(1850 ~ 1860 年代) | | | | | | | ○ | III-101 図 | |
| 工学部 14号館 | SU396 | VIII c 期(1830 ~ 1840 年代) | | | | | | | ○ | III-103 ~ 104 図 | |

○土器・●土器施釉・△磁器・▲陶器・◇白色土器・◆白色土器施釉

表 1 東大構内遺跡出土・年代にみる人形成形技法

B. 型打ち成型

型打ちの型は、凸型となり型に粘土を被せて押圧する成形方法である。ミニチュアの皿や土を入れて抜いて遊ぶ面形がこの成形法である（Ⅲ-36 図 35、36）。型打ち成形の場合、皿などの内側の文様は陽刻である。裏面は指頭押圧痕が多く観察される（Ⅲ-4 図 98）。

C. 手捻り（手捏ね）

粘土紐や粘土塊を手で捏ね、捻りだし手足や衣等を表現し、ヘラなどをつかい調整する。しかし、人形のすべてが手捻りではなく、頭部は型により貼付されたものが多い。また、手足や衣等別に成形し貼付された人形も多い。（Ⅲ-37 図 43～45、56 図 76）

（2）各期にみられる成形技法

Ⅲa 期（1650～1660 年代）

この時期の遺構は、HW-SP883 である。人形は、型押し成形、二枚の型、底部が開いた西行法師である。器壁は厚く、首部は差込式である。残念ながら顔の部分は欠損している。胎土はやや褐色に近い橙色である。人形には離れ剤の雲母が観察される。後に出土する西行法師と類似するが、手に持つ笠が小さく衣の襷が優しいものである。出土したものはこの 1 点のみである。

Ⅲb 期（1670～1682 年代）

この時期の遺構は HW-SE326 と御殿下記念館地点 276 号がある。HW-SE326 の人形は、型押し成形、二枚の型で底部が開いた西行法師である。首部は欠損しているが残存高が 208mm と大きいもので、器壁は厚く重量感のある人形で胎土は灰褐色で、衣には布目の表現がされていた。離れ剤の雲母が観察される。特殊なものであったのか出土した時点は布で包まれていた。川越城八幡曲輪 2 号廃棄遺構から出土した、片膝立ちの座る西行法師にも同様の布目が観察される。胎土、成形技法も類似したものである。共伴した陶磁器類は、中世のものを含む 17 世紀前半～18 世紀前葉のものが存在していた遺構である（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001）。御殿下記念館地点 276 号の人形は、台付き裱人形である。型押し成形、二枚の型で底部があり中実である。後に出土する裱人形とは異なり、台が付いており着物や袴の調整も丁寧なものである。残念ながら二次的に火を受けており胎土は不明で、首部も欠損していた。

Ⅳa 期（1680 年代）

この時期の遺構は、東京大学医学部附属病院中央診療棟地点（以下、中央診療棟と略す）F34-11 と御殿下記念館地点 534 号・HW-SK3 がある。この時期から成形技法が多種にわたる。型押し成形で一枚の型と、二枚の型を使用した中空の人形と、中実で無釉、中実で施釉された人形、型+手捻り成形の人形が出土している。また、江戸在地系の胎土とは異なる白色系の施釉の人形や材質のことなる陶磁器製の人形がある。その他陶磁器製のミニチュアが多器種出土している。中央診療棟 F34-11 から出土した人形は、型押し成形、二枚の型で中実と中空の人形である。中空の人形は鳥で器壁が厚く重量感があり、振ると音が鳴るものである。小さく振っても玉はすぐに内壁にあたり音がでることから、空洞の部分は狭いとおもわれる。後世に出土する中空のものとは異なる趣のものである。底部開口型は西行法師の人形である。首部は差込式でなく、身体と一体型である。中実の人形は施釉されたもので巾着の上に人物が乗っているものが出土している。一枚型のものは、胎土が褐色のお面である。また、顔が型で体部が手捻り成形の施釉された猿が出土している。共伴したミニチュアでは型押し成形の祠の屋根が出土している。御殿下記念館地点 534 号からは、型押し成形、二枚の型で、底部がある中空の肥前磁器製の人形が出土している。顔は鉄釉、衣は緑色の青磁釉、頭巾は灰白色

で、荷物を背負った人形である。底部は釉を剥ぎ取り、後面腰と右側面に大きな穿孔が観察される。HW-SK3 からは、型押し成形、二枚の型で底部が開いた土製の人形と、中実と中空の磁器製の人形が出土している。また、一枚の型で成形した面も出土している。土製のもので、型押し成形、二枚の型で底部が開いたものは、器壁が厚く、狩衣に似た衣装に袴を着けたもので、左手に蹴鞠の鞠か鼓の様なものを抱えた人形である。首部が欠損した残存高は 108mm とやや大きめのものである。この他は中実のもので、蹴鞠を掲げた人形、西行法師、俵乗り大黒様、天神、猩々、組相撲、犬、獅子、熊等であった。西行法師の胎土は瓦質に近い黒灰色と橙色系のものが出土している。西行法師の首部、笠は差込式である。白色系の胎土のものは、台付きの馬と施釉された猿と緑釉を流し掛けした恵比寿様が出土している。また、陶器製で中実の人形が出土している。肥前磁器の人形は多数出土しており、色絵磁器の飾り馬や鶏、瑠璃釉の鶴、また、灯心押さえといわれている背中に穿孔、底部が開いた高麗聖人等である。高麗聖人は、顔は型押し成形で身体は手塗り成形である。

17 世紀末（元禄 16 年の火災）

この時期の遺構には、医学部附属病院外来診療棟地点（以下、HG と略す）SU2・SE10・SU313・SU370 がある。型押し成形、二枚の型を使用した中実の人形と、底部が大きく開口したものと型+手捻り成形のものが出土している。SU2 からは白色系胎土の施釉された大黒様で、透明釉に緑釉を流し掛けしている。SE10 からは、手捻り成形の陶器製の小さな犬が出土している。腹部は無釉である。SU313 からは、底部が大きく開口したもので、片膝を立て座る西行法師の人形である。頭上の笠は手捻りで作り貼付している。SU370 の人形は、型+手捻り成形の施釉の猿である。上記した中央診療棟 F34-11 から出土している猿と同様のものである。SU2、SE10、SU313 は元禄 16（1703）年の火災を受けた資料である。

IVb 期（1690～1700 年代）

新たに加わる成形技法は、無釉の手捻り成形である。この時期の遺構は、農学部家畜病院地点（以下、VMC と略す）SK9・HW-SP3715・SU313 である。VMC-SK9 の人形は、無釉の手捻り成形の馬である。目や口等の表現は先端の尖ったもので刻み描いている。HW-SP3715 から出土した人形は、型押し成形、二枚の型、底部開口型の西行法師である。首部は前期段階で出土した差込み式ではなく体部と一体の型を使用している。また、中空の磁器製の鴛鴦は上下合わせのものである。HG-SU313 の人形は、型押し成形、二枚の型、底部が開いた座る西行法師である。衣の裾が大きく広がるもので、被った笠は手捻りで貼付している。SU313 は元禄 16（1703）年の火災を受けている遺構である。

17 世紀末～18 世紀初頭・前葉

この時期の遺構は、HW-SK557 と工学部 14 号館地点（以下、工 14 と略す）SK194 と SK415 である。HW-SK557 の人形は、型と手捻り成形のものである。精製された白色の胎土である。顔は型で仕上げ差込み、身体部分は円柱状にした粘土に径が 12mm 程の棒状工具を突き刺し空洞にし、手足を貼付し、衣は着せるように貼付け細部は篋などで表現している。出土している人形は、笑顔で手足に動きのある造作のものである。中央診療棟の Va 期の F33-3 から同様の下半身と手が出土している。工 14-SK194 の人形は、型押し成形、二枚の型で底部が大きく開口した座った西行法師（Ⅲ-48 図 5）と型+手捻り成形の施釉の猿が出土している。猿は IVa 期の F34-11 から出土した猿と同様のものである。工 14-SK415 からは、胎土が灰橙色で、型押し成形、二枚の型の中実の瓢箪から駒の人形、型+手捻り成形の白色系胎土の施釉の人形、手捻りの船乗り猿が出土している（Ⅲ-107 図 11～13）。

Va 期（1710～1720 年代）・18 世紀前葉

この時期の遺構は、工 14-SK245 と HG-SK18・SU20・SK31 と中央診療棟 F33-3 がある。型押

し成形で二枚の型を使用した、底部開口型、中実の人形、型+手捻り成形、手捻りの成形の人形が出土している。中実の人形は橙色系胎土の無釉のもの、白色系胎土で施釉したものが出土している。工 14-SK245 の人形は、2点とも小形の西行法師の人形である。1点は手捻り成形で首部は差込み式で手足と荷は貼付である。もう1点は型押し成形で二枚の型、底部開口型のものである。共伴したミニチュアの碗は、白色系胎土で黄色の釉が施釉されたものである(Ⅲ-49 図 25~28)。また、HG-SK31 出土の人形は、片膝を立て座っている小形の西行法師である。胎土は橙色系、型押し成形で二枚の型で中実のものである。中央診療棟地点 F33-3 からは、型+手捻り成形の白色系胎土の人形が出土している。17世紀末~18世紀初頭・前葉の項で前記した、HW-SK557 出土の人形と同様である。

Vb 期 (1730~1740 年代)

ここで漸く土製で型押し成形で二枚の型の中空の人形が登場する。この時期の遺構は、HG-SK137、医学部附属病院設備管理棟地点(以下設備管理棟と略す)の AD35-2 である。HG-SK137 からは、橙色系の胎土で型押し成形、二枚の型、中空の人形の姉様(袷雛の女雛)が出土している。首部は差込式のものであった。顔は欠損していたが頸部は残存し動いた為、首部の構造がよくわかった資料である。共伴した人形は白色系の胎土で、型押し成形、二枚の型の中空の蛙で、足は貼付である。型押し成形で中空の陶器の鳥が出土している。また、設備管理棟 AD35-2 からは、姉様と陶器製の犬が出土している。2点とも型押し成形で二枚の型の中空である。

VIa 期 (1750~1760 年代)・VI 期 (1750~1760 年代)

この時期の遺構は、HW-SU593、SK1409 と設備管理棟 AE36-4 である。HW-SU593 の人形は、型押し成形、二枚の型で中空の犬である。胎土は白色系で胡粉と赤彩が観察される。HW-SK1409 からは、二枚の型で中実の白色系胎土の施釉の人形が出土している。病院設備管理棟地点 AE36-4 出土の人形は、羽織を着け片膝を立て座る武将のような人形と片膝を立て座る西行法師である。型押し成形、二枚の型で、底部開口型の人形である。武将のような人形は、共伴している座る西行や、以前に出土したものに見られる器壁が厚く裾が広がるものではなく、器壁は薄く丸みのある楕円形の開口である。また、共伴の人形には中実と中空のものが出土している。中実の人形は、振り袖に袴を着けた立ち姿の人形である。中空の人形は、袴姿で正座しているもので、2点とも赤彩痕が観察される。3点とも雲母が顕著で硬質感のある人形である。共伴したミニチュアは箱庭道具の祠の屋根と土製の蓋である。

VI 期~VII 期 (1750~1790 年代)

この時期の遺構は、工 14-SU18・SU382 である。SU18 の人形は、型押し成形、二枚の型で中空の人形が大半である。その一つに、立膝で中腰の唐子人形がある。他の人形は、ぶら人形、狐と陶器の人形がある。一枚型では軽石状のもので作られた型と、白色系胎土の般若の面が出土している。また、手捻り成形の人形は裸婦像で、胸は大きく女性の性器を表現したものである。唐子の人形は同じ地点の工 14-SU63 から出土している。立ち姿で太鼓を打とうと構えたポーズの人形である。やはり、二枚の型で中空の人形で(Ⅲ-23 図 86)、丁寧な作りのものである。遺構の年代はIVb 期~VII 期と中のある遺構である。SU382 からは、型押し成形、二枚型使用中空の人形と底部が開口している五鈷鈴である。中空の人形には姉様や猫等であった。開口型の五鈷鈴については人形でないが掲載した。型打ち成形は面形、型+手捻りの人形が出土している。型+手捻りの人形は、白色系胎土の組相撲と橙色系胎土の猿である。この遺構は白色系胎土で透明釉と緑釉と鉄釉で装飾された洲浜状庭園と橋などが出土している遺構である(Ⅲ-93 図)。

Ⅶ期 (1780～1790年代)

この時期の遺構は、病院設備管理棟 AE34-3、AE39-1 と工 14-SU330 である。AE34-3 からは型押し成形、二枚の型で中空の人形のみで占められている。人形は赤彩が観察される親子猿で、親猿は烏帽子を被り小猿を背負っている。共伴した人形は、白色系胎土の亀乗り童子の小片である。AE39-1 からは、二枚の型を使用した中実の施釉された鳩と、型+手捻りの施釉された親子猿が出土している。共伴したミニチュアは、播鉢や瓶、塔などである。工 14-SK330 からは、型押し成形で二枚の型、中空と中実、底部開口型のものが出土している。中空の人形はぶら人形と、白色系胎土の施釉の福祿寿である。中実の人形は小さな天神、恵比寿、大黒、虚無僧、飾り馬である。また、ミニチュアでは箱庭道具の五重塔や灯籠、火焰太鼓で、何れも白色系胎土のものである。底部が開口した人形は、身体を突っ張っている仕草のものが2点出土している(Ⅲ-75 図)。一枚型は魚で、裏面はわずかに脹らむ。手捻り成形の人形は鹿とおもわれる動物と、施釉された蛙、立ち小便を想像させる仕草の人形である。共伴したミニチュアは、大きめの灯籠や庵の屋根、陶器や施釉された播鉢、釜形土製品、竈が多数出土している遺構である。

18世紀後半～19世紀前半

この時期の遺構は、工 14-SK337 である(Ⅲ-79 図、78 図)。型押し成形では、二枚の型の中空の人形と一枚の型による泥面子である。型打ち成形では面形が出土している。この遺構はやや大きめのミニチュアの器物と施釉された箱庭道具の灯籠とお堂、鳥居が出土している。灯籠には刻印「楽正」の銘が陽刻されていた。この時期になり漸く泥面子と刻印付のものが登場する。

Ⅷa期 (1800～1810年)

この時期の良好な遺構は、給水管理棟 AJ35-1 と工 14-SK16 である。AJ35-1 からは型押し成形で、二枚の型を使用した中空の人形と、一枚の型の魚と手捻り成形の人形が出土している。型を使用した人形は、ぶら人形と禿、桃持ち猿、犬や飾り馬、鶏である。手捻りの人形は足を開いた妊婦の人形で、脹らんだ腹部と張り出した両胸は貼付し、性器は穿孔して表現している。共伴したミニチュアは、施釉された器台と赤彩された播鉢である。SK16 からは、型押し成形で二枚の型を使用した中空の人形が出土している。人形は台付きの飾り馬と狐である。

Ⅷa期～Ⅷb期 (1800～1830年代)

この時期の遺構は、工 14-SK101 である。SK101 からは本地点の中で最も多く人形、ミニチュア類が出土した遺構である。人形は、型押し成形で、二枚の型を使用した中空と一枚の型のもの、手捻り成形のものが出土している。中空の人形の主なものに、ぶら人形、着物狐、達磨乗り童子、組相撲、姉様、犬、歌舞伎人形、西行法師に施釉された狐拳遊びの狐、獵師、庄屋である。白色系胎土の人形は施釉された狛抱きと狛乗り童子と天神である。共伴したミニチュアには白色系胎土の徳利や皿に「亀」や「楽」の刻印が付いたものが出土している(Ⅲ-32～34 図)。

Ⅷb期～Ⅷc期 (1820～1840年代)

この時期の遺構は、工 14-SK188 である。この遺構からは、型押し成形、二枚の型で中空の人形と、一枚の型を使用したものがある。二枚の型で中空の人形は、犬、兎、町人と笛、白色系胎土の鴛鴦である。また、一枚の型によるものは、蟬と泥面子である(Ⅲ-44 図)。

Ⅷc期 (1830～1840年代)

この時期の遺構は、工 14-SU2 である。この遺構からは、型押し成形、二枚の型で中空のものの中実の人形、一枚の型のものが出土している。二枚の型で中空の人形には、大きな達磨や赤彩された力士、お多福、施釉された大黒、牛、犬や亀で、白色系胎土の人形は亀乗り童子や虚無僧、鴛鴦であった。

犬は2点出土しているが、大きい犬は犬張り子型である。お多福の底部は中央に向かい凹む。一枚の型で成形されたものは、天神、恵比寿様、燕と泥面子である。この遺構は鳩笛やふくら雀の土笛が6点出土している。また、共伴したミニチュアの器物が多く、白色系胎土で緑釉で装飾された徳利には亀甲の中に「亀」の刻印と瓶子には「楓山」の銘が押されていた(Ⅲ-3~5図)。

Ⅷb期~Ⅷd期(1820~1860年代)

この時期の遺構は、工14-SK3である。この遺構からは、型押し成形、二枚の型で中空と底部が開いたものと、一枚の型によるものと、型+手捻りで成形された人形が出土している。中空の人形は桃持ち童子や姉様や施釉された浮き人形の蛙、でんでん太鼓等である。底部が開いた人形は、台付きの狐である。一枚の型を使用したものは泥面子である。型+手捻りの人形は焼締め陶器の獅子で、おそらく阿吽の獅子で一对の置物だったとおもわれる(Ⅲ-10、11図)。

Ⅷd期(1850~1860年代)

この時期の遺構は、工14-SU392・SU396である。SU392遺構からは、型押し成形、二枚の型で中空の人形と、一枚の型の泥面子が出土している。人形は兎、彩色施釉された犬、禿、稚児、行水人形である。SU396遺構からは、型押し成形、二枚の型で中空の人形と一枚の型の人形と泥面子が出土している。中空の人形は鳩笛と白色系胎土の魚である。一枚の型で作られた人形は、恵比寿様と泥面子と寒紅のおまけにつけられた紅牛である。

Ⅷa期~Ⅷd期(1800~1860年代)

この時期の遺構は、工14-SK292・SK293である。幅の広い年代であるが、参考に提示しておく。SK292の人形は、型押し成形で二枚の型を使用した中空の人形、一枚の型のものと同様の手捻りの人形である。中空の人形は、刻印のある施釉の唐子人形が1点で、他は犬、猫、狸、達磨、振り袖若衆、ぶら人形などであった。一枚の型は、獅子頭と施釉された蟬である。手捻り成形の人形は三味線引きの人形で身体を軸に首部、手、帯、三味線を貼付したものである(Ⅲ-52、53図)。SK293の人形は、型押し成形で、二枚の型で中空のものと同様の一枚の型と、型+手捻り成形のものである。中空の人形には、唐子、ぶら人形、狐、犬、猿、刻印つきの飾り馬、施釉された浮き人形の鴛鴦で白色系胎土の御輿掲げ童子や施釉された亀である。一枚の型は泥面子やミニチュアの硯や等にみられる。型+手捻り成形のものは猿である(Ⅲ-56、57図)。

以上東大構内の遺跡から出土した人形について成形技法を中心にみてきた。遺構年代は陶磁器による推定年代である。陶磁器製と白色系胎土と表記のないものは橙色系胎土のものである。表1は東大構内出土の人形についての試行であるため、他の遺跡とのズレが生じる可能性はある。

4. まとめ

江戸での人形製作はⅢa期からすでに始まっていることがわかる。Ⅲa、Ⅲb期の人形は型押し成形で二枚の型で底部が開き、器壁が厚く首部は差込式の西行法師のみである。Ⅳa期になり他種類の成形法が出現する。型押し成形で、二枚の型で底部が開いたものに加え、中実の人形と型+手捻り成形のもの、型一枚による成形された人形が登場する。また、胎土の異なる白色系胎土の施釉されたものがある。白色系の施釉された人形には単釉のもの、透明釉に緑釉を流し掛けしたものが出土している。Ⅳa期はⅢa、Ⅲb期の時期より人形の種類が増え、共伴しているミニチュアも多く出土するようになる。HW-SK3からは西行法師の他蹴鞠を掲げる人形や、狸々、天神、大黒様、犬、猿、振り袖に袴を着けた小形の人形と、白色胎土の施釉された恵比寿や猿などが出土している。また、肥

前磁器の人形では、瑠璃釉の鶴や鶏や飾り馬、灯心押さえと云われている高麗聖人等で、陶器製の小形の人形も出土している。ミニチュアの器物では肥前磁器、京焼、備前焼が出土している。17世紀末に出土した手捻り成形のものは、素焼きのものと、陶器製人形である。17世紀末～18世紀初頭の遺構からは顔が型で胴部が手捻りの素焼きの人形が出土している。胎土は精製されたもので、上手ものの人形である。大名屋敷などからの出土が大半で、本地点からは出土していない。Va期(1710～1720年代)まではあまり変化なく、Vb期(1730～1740年代)になり、二枚の型で、中空の人形が出現する。この頃から子供や女性が好むような人形が登場する。HG-SK137から姉様(袴雛と対になる女雛)が出土している。18世紀中葉以降は中空の人形が主流となり、中実の人形は以前に出土した大きいものではなく、24～35mmくらいの小形のものが出土するようになる。18世紀末～19世紀前葉にかけお座敷遊びや、歌舞伎の人形、そして笑いものと称する娯楽性の高い人形が出土するようになる。18世紀後葉からは人形の種類が多くなり、施釉されたものが多くみられるようになり、刻印つきのものが出土するようになる。17世紀後葉から出土していた恵比寿、大黒、天神、猿、犬は19世紀代まで続いて出土する。成形技法による年代の判定は詳細なものではないが、捉えることが出来そうである。

【参考文献】

- 安芸穂子 2000 「掘り出された人形」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001 『川越城 / 小在家Ⅱ』
 斉藤良輔 1997 『郷土玩具辞典』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学構内の遺跡医学部附属病院地点』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点』
 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1996 『東京大学構内遺跡調査研究年報1』
 東京都埋蔵文化財センター 1998 『尾張藩上屋敷跡Ⅲ』

第4節 江戸時代の貨幣流通についての一考察

—工学部14号館地点SU335出土の銭差をふまえて—

大貫 浩子

はじめに

近年は遺跡の発掘調査によって、火災などによる遺構の下限が押さえられた銭の資料が少しずつ増加している。東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点（以降「工14」と省略する）SU335遺構からも、401枚の縉状の銭が検出された。江戸時代の貨幣流通について東京大学構内の遺跡を中心に他の遺跡も含めて、遺構の下限が押さえられているものを用いて考察してみたい。また、この銭差の位置づけについても考えてみたい。

これまでに銭は古銭学に基づいて細分が進められ、文献資料によって鑄造地や初鑄年の研究などが進められてきた。考古学では、発掘調査の結果から、文献によって導き出された銭の初鑄年に対する考察がなされている。それ以外にも、形態的特徴による分類や蛍光X線などによる金属成分分析がなされてきた。

また、江戸時代貨幣流通の研究は、墓から出土した六道銭によって進められてきた。鈴木公雄氏は、セリエーション分析により「渡来銭から古寛永通宝への移行のパターンはきわめて不連続である。古寛永通宝から文銭、文銭から新寛永通宝への移行はきわめて漸移的である。」との結論を導き出している。（鈴木1988）また、東北地方から九州地方にいたるまで全国的に六道銭を分析し、「渡来銭から古寛永通宝への流通銭貨の交替は全国的にみて各地域間に大きな時間的落差を伴わず、急速に行われたと考えられる。」（鈴木1993）とされている。

工14 SU335 出土の縉状の銭について

工14は加賀藩邸に隣接する御先手組組屋敷地に位置する。SU335遺構は遺跡を北から4区画に区分した一番南側にある区画のC₂区に位置する地下室である。銭は床面約1cmのところから、焼土に埋もれ縉状で401枚検出された。紐は炭化しており、また被熱し銭と銭にかなりの溶着がみられた。おそらく、この地下室に直接保管されていたものではなく、火災の後片付けのために焼土と共にここに廃棄されたものであろう。この火災は、共伴している陶磁器から元禄16（1703）年の火災と推定されている。この縉状の銭は大きく3列に並んでいた。その3列がつながって2本またはそれ以上の本数になっていたかどうかは不明であるが、溶着状況からみて、一カ所に保管されていた銭差と考えてよいであろう。（これ以降は、「銭差」と記載。）

銭種の詳細は日本貨幣協会の小林茂之氏のご教示による。また、『新寛永通寶図会』（株）ハドソン・東洋鑄造貨幣研究所編1998）、『古寛永泉志（改訂版）』（増尾1976）を参考とした。401枚の銭の銭種は次のようである。渡来銭6枚・古寛永通寶84枚・新寛永通寶311枚（文銭46枚・四ツ寶銭254枚・旧猿江銭8枚・不旧手1枚・萩原銭1枚・不明1枚）である。

まず、一番数多く検出されている四ツ寶銭であるが、鑄造地不明であり、銭譜では、宝永期亀戸銭と推定している。これまでも発掘調査の結果から元禄期鑄造の可能性を指摘されているが、元禄

16 (1703) 年の火災と推定されている本遺構の銭差の中から 254 枚検出されており、元禄期鑄造の可能性を裏づける良好な資料であろう。また、旧猿江銭は銭譜で享保期、不旧手は泉譜で享保期の鑄造とされていたが、近世遺跡での出土状況から、元禄期鑄造の可能性がきわめて高いことが指摘されている(東洋鑄造貨幣研究所編 1998)。本緞銭は、旧猿江銭 8 枚・不旧手 1 枚が含まれていることなどから、四ツ寶銭と同様にいずれも元禄期鑄造の可能性がきわめて高いことを裏づける良好な資料であろう。

緞状の銭の順番をできうる限り復元し検証してみたが、銭種や裏表の順番などに恣意的なものは確認されなかった。

銭の流通について

当時の銭の流通状況を考えるために、細かい銭種によってではなく考古学の報告書で多く分類されている、渡来銭・古寛永通宝(以降は「古寛永」と省略)・新寛永通宝 文銭(以降は「文銭」と省略)・文銭以外の新寛永通宝(以降は「新寛永」と省略)の分類を用いて分析を行ってみたい。渡来銭の中には模鑄銭なども含まれていると思うが今回は検証せず報告書の記載をそのまま使用した。

銭の流通について、遺構の廃棄年代がはっきりしていると推定される遺構について、銭の比率を割り出し検討をしてみたい。取り上げた遺構については、ほとんどが地下室や土坑などで火災による廃棄年代が確かなもののみを用いた。溝は開口期間が比較的長いものが多いので使用しなかった。

遺構の廃棄年代が確認でき銭が検出されているのは、天和 2 (1682) 年の火災を下限とする遺構で 2 地点で確認された

医学部附属病院中央診療棟地点 H32-5

大聖寺藩邸に位置する地下室である。埋土のほとんどが焼土及び焼土塊を多量に含み火災の後始末と思われる。この焼土は天和 2 (1682) 年の火災の焼土と考えられている。多量の火災により被熱した陶磁器とともに渡来銭 1 枚：古寛永 3 枚：文銭 9 枚が検出されている。

医学部附属病院病棟地点 D面焼土層(報告書作成中)

D面焼土層は天和 2 (1682) 年の火災層で、約 10cm の厚さで D 1 面上面に堆積している層である。D 1 面は下級武士の長屋群が検出された面である。この焼土は天和 2 (1682) 年の火災の後あまり片付けなどが行われずに上面に土が盛られて次の生活面としたと考えられている。そのため、その当時の状態を示す非常に良好な資料であろう。多量の火災により被熱した陶磁器とともに多くの銭が検出されている。渡来銭 4 枚：古寛永 100 枚：文銭 120 枚が散逸した状態で検出されている。

また、近い時期で、天和 3 (1683) 年の火災に伴うものが 2 遺構で確認された。

尾張藩上屋敷跡遺跡 V 48-5A-1

48-5A-1 は尾張藩市ヶ谷邸以前の留守居番大縄地に位置し、天和 3 (1683) 年の火災遺物で充填されている遺構である。渡来銭 0 枚：古寛永 5 枚：文銭 2 枚が検出されている。

尾張藩上屋敷跡遺跡 IV 120-4D-1

120-4D-1 は尾張藩邸に位置し、天和 3 (1683) 年の火災遺物による瓦廃棄層から検出された銭である。渡来銭 0 枚：古寛永 8 枚：文銭 8 枚が検出されている。

天和 2 (1682) 年の火災を下限とする遺構と天和 3 (1683) 年の火災を下限とする遺構は、同一時期として分析した。天和 3 (1683) 年にはまだ文銭以外の新寛永は鑄造されておらず、1 枚も確認されていない。医学部附属病院病棟地点 D面焼土層の資料は非常に数量が多いため他の数値に対する影

第4節 江戸時代の貨幣流通についての一考察

| 推定年代 | 遺跡名 | 遺構名 | 渡来銭 | 古寛永 | 文銭 | 新寛永 |
|-------|--------------------------|---------------------|-------|-----|-----|-----|
| ～1683 | 東京大学構内の遺跡 医学部附属病院病棟地点 | D面焼土 | 4 | 100 | 120 | |
| | | 尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅳ | | 5 | 2 | |
| | | 尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅳ | | 8 | 8 | |
| | | 東京大学構内の遺跡 医学部附属病院地点 | H32-5 | 1 | 3 | 9 |
| | | 計 | 5 | 116 | 139 | |
| ～1703 | 東京大学構内の遺跡 工学部14号館地点 | SU335 | 6 | 84 | 46 | 265 |
| ～1703 | 東京大学構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 | 537 | | 2 | 1 | 11 |
| | 東京大学構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点 | SU2 | | 2 | | 5 |
| | 東京大学構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点 | SK139 | 1 | 4 | 4 | 4 |
| | 東京大学構内の遺跡 医学部附属病院病棟地点 | 1264 | | 3 | 4 | 3 |
| | | 計 | 1 | 11 | 9 | 23 |
| ～1725 | 尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ | 41-4X-2 | 1 | 4 | | 11 |
| | | 49-4V-1 | 1 | 5 | 1 | 7 |
| | | 79-4C-1 | | | 2 | 4 |
| | | 78-4O-1 | 3 | 10 | 6 | 40 |
| | | 計 | 5 | 19 | 9 | 62 |

表1 遺構出土銭種別出土数集計表

図1-1

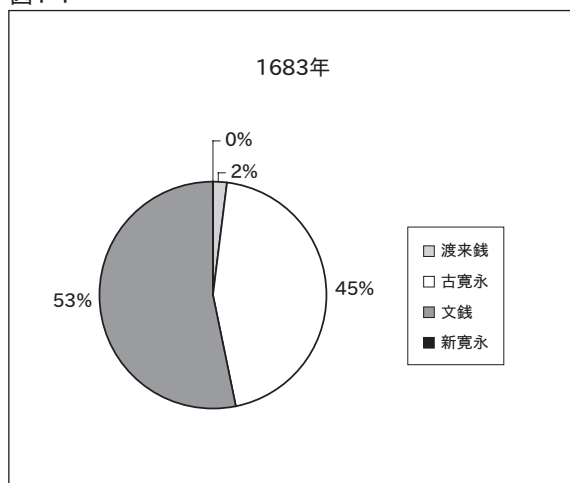


図1-2

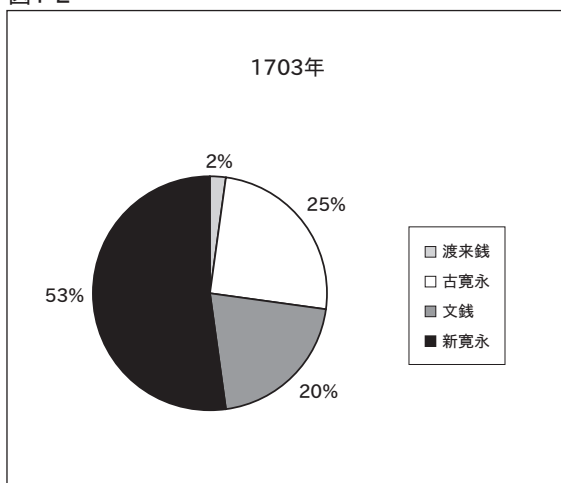


図1-3

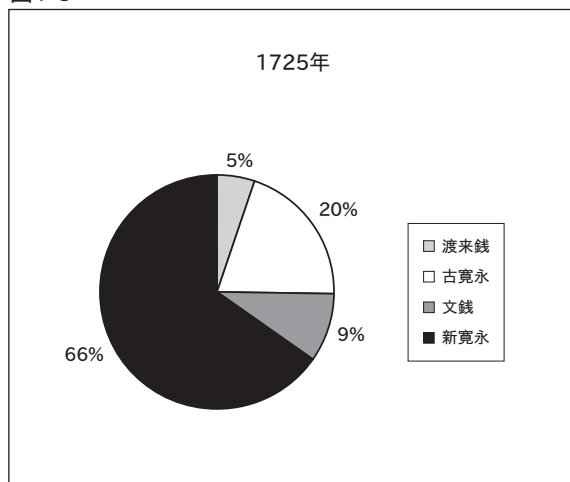


図1-4

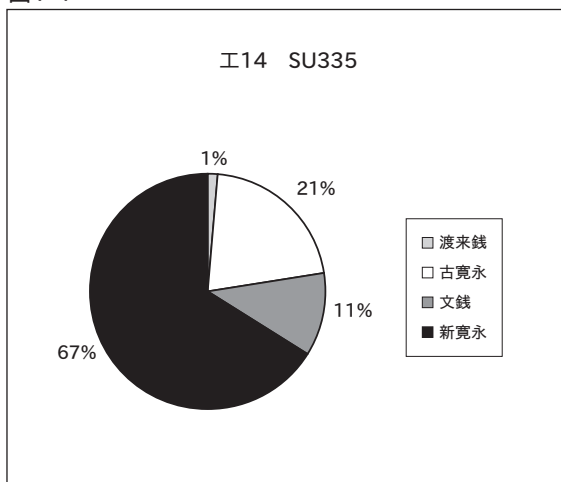


図1 年代別の銭種別比率

響が大きいと考え、D面焼土層以外の遺構の比率とD面焼土層の比率を別々に出してみた。D面焼土層以外の遺構だけでみると渡来銭1枚：古寛永16枚：文銭19枚が検出されている。比率は2%：45%：53%となる(図1-1)。医学部附属病院病棟地点D面焼土層をみると渡来銭4枚：古寛永100枚：文銭120枚が検出されている。比率は3%：44%：53%となった。他の遺構の比率とD面焼土層の比率を比べるとほとんど比率が変わらないことがわかった。つまり、D1面で生活していた下級武士達が使用していた銭が、そのまま火災により焼土層に包含されたと考えてよいのであろう。文銭の初鑄年は寛文8(1668)年とされており、文銭は鑄造され始めてからおよそ15年である。文銭の占める割合は15年間で53%になっていることがわかる。

元禄16(1703)年の火災を下限と考えられる遺構で銭が検出されている遺構は銭差を検出している工14 SU335以外に4遺構で確認された。いずれも東京大学構内の遺跡であり、各地点は次のようである。

山上会館・御殿下記念館地点 537号遺構

山上会館・御殿下記念館地点は加賀藩上屋敷の中央部分に位置し元禄期の絵図には「頭分」「役所」「外局」などと記載されている部分に該当する。537号遺構は長辺3.7mの地下室で壁際に補強のための柱列をもつ。「外局」を構成する建物遺構の外縁部にあり、これらの施設で使われた器財が焼土とともに一括廃棄されたものと推定されている。この焼土は元禄16(1703)年の火災と考えられている。渡来銭0枚：古寛永2枚：文銭1枚：新寛永11枚が検出された。

医学部附属病院外来診療棟地点 SU2

医学部附属病院外来診療棟地点のFライン東側は大聖寺藩邸最西端に位置する。下級藩士の居住区域と推定されている地域である。SU2は規模が南北110cm、東西90cmの地下室で焼土が充填された状態で検出された。この焼土は元禄16(1703)年の火災の一括廃棄と考えられている。陶磁器、焼本瓦、多量の釘と共に銭も検出された。内訳は渡来銭0枚：古寛永2枚：文銭0枚：新寛永5枚である。

医学部附属病院外来診療棟地点 SK139

医学部附属病院外来診療棟地点のFライン西側は加賀藩邸に位置する。遺構が希薄な空間と考えられている。SK139は平面長方形3.5m×2.8mの土坑である。壁際にはピットが巡っている。遺物の多くが二次的な火災を受けた痕跡を認められる。元禄16(1703)年の火災に伴う一括廃棄と推定されている。陶磁器、土器類を中心に瓦、石製品、金属製品などが検出されている。銭は渡来銭1枚：古寛永4枚：文銭4枚：新寛永4枚が検出された。

医学部附属病院病棟地点 SU1264(報告書作成中)

医学部附属病院病棟地点 SU1264は大聖寺藩邸に位置する地下室である。覆土には厚い焼土層がみられ、この焼土は元禄16(1703)年の火災と考えられている。渡来銭0枚：古寛永3枚：文銭4枚：新寛永3枚が検出された。

工14 SU335出土の銭差は非常に数量が多いため他の数値に対する影響が大きいと考え、工14 SU335出土の銭差とそれ以外の遺構から検出されている銭との比率を別々に出してみた。工14 SU335出土の銭差以外の遺構から検出されている銭を合計すると、渡来銭1枚：古寛永11枚：文銭9枚：新寛永23枚で比率は2%：25%：20%：53%になった(図1-2)。工14 SU335出土の銭差は渡来銭6枚：古寛永84枚：文銭46枚：新寛永265枚で構成されており、比率はそれぞれが1%：21%：11%：67%である(図1-4)。これらを比較してみると、渡来銭は1%と2%、古寛永は21%と25%、文銭は11%と20%、新寛永は67%と53%となる。銭差の方が文銭の比率が低く、

新寛永の比率が高くなっている。このような比率の違いはどのように生じたのであろうか。火災などによる、遺構の廃棄年代がはっきりしている遺構のみを取り上げたため、元禄16(1703)年下限の資料がやや少ないことがあげられる。また、備蓄銭以外の銭差については、当時の銭の流通状況を十分に表していると考えている。銭差の作られた状況により様々な要因が加味されてくるであろう。廣本家近世銭貨として調査された16161枚の銭差として備蓄された銭貨があるがこれらには文銭が多く56.99%に達している(永井1994)。良銭として意図的に備蓄されたと考えられている。銭差の取り扱いに関しては注意しなければならないであろう。工14 SU335の銭差は御先手組組屋敷地内の地下室からの出土であり、他から運び込まれたものではなく、御先手組組屋敷地内の火災の後片付けのゴミであるとすれば、下級武士である御家人が備蓄などができる経済状況にあったとは考えづらい。家禄などとしてまとまって受け取ったものとするれば、流通しているものよりもやや新寛永の比率が高いのもうなずけよう。工14 SU335の銭差が当時の銭の流通を良く表しているのではないかと想定して、検証を加えてきた。ある程度の傾向は表してはいるが、その銭差が作られた状況によって実際の流通とはやや異なる比率となったと考えられる。しかし、四ツ寶銭が大量に作られ、流通し始める定点的資料としては非常に良好な資料といえるのではないだろうか。また、銭差以外のところから出土された新寛永の比率をみても、元禄16(1703)年には少なくとも53%を占めるようになっていることがわかる。

次に享保10(1725)年の火災の資料と比較してみたい。享保10(1725)年の火災を下限と考えられる遺構で銭が検出されている遺構は4遺構で確認された。各地点は次のようである。

尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ 41-4X-2

41-4X-2は尾張藩市ヶ谷邸に位置する地下室で、享保10(1725)年の火災遺物が一括廃棄された遺構である。渡来銭1枚：古寛永4枚：文銭0枚：新寛永11枚が検出されている。

尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ 49-4V-1

49-4V-1は尾張藩市ヶ谷邸に位置する方形の地下室で、享保10(1725)年の火災遺物が一括廃棄された遺構である。渡来銭1枚：古寛永5枚：文銭1枚：新寛永7枚が検出されている。

尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ 79-4C-1

79-4C-1は尾張藩市ヶ谷邸長屋(詰人空間)に位置する地下室で、享保10(1725)年の火災遺物が一括廃棄された遺構である。渡来銭0枚：古寛永0枚：文銭2枚：新寛永4枚が検出されている。

尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ 78-4O-1

78-4O-1は尾張藩市ヶ谷邸長屋(詰人空間)に位置する断面がフラスコ状になる地下室である。覆土は崩落した天井部を除くとすべて焼土、炭化物を多量に含んだ層で形成され、それに混じって多量の遺物が検出されている。焼土、炭化物は享保10(1725)年の火災遺物の一括廃棄と考えられている。渡来銭3枚：古寛永10枚：文銭6枚：新寛永40枚が検出されている。

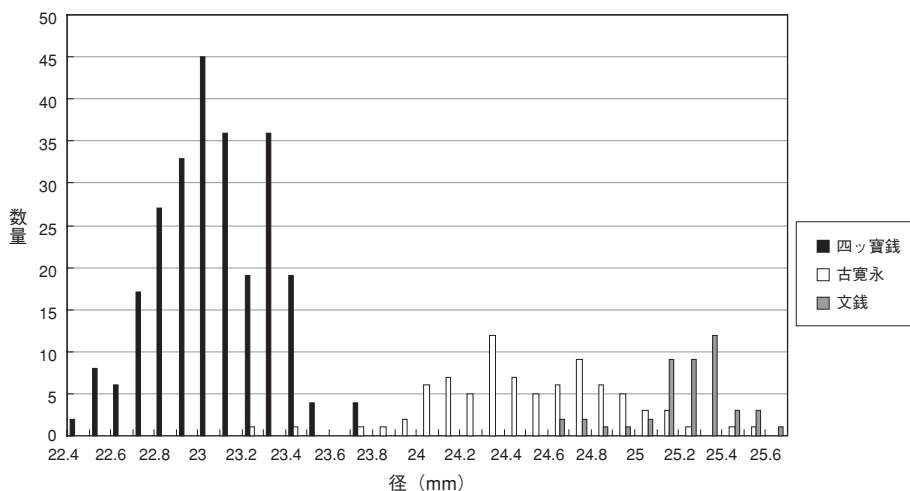
それぞれから検出されている銭を合計すると、渡来銭5枚：古寛永19枚：文銭9枚：新寛永62枚が検出されている。比率は5%：20%：9%：66%となる(図1-3)。

元禄16(1703)年の火災、天和2(1682)年の火災、享保10(1725)年の火災の各時期の銭の比率を元に流通について考えてみたい。

これらの銭の出土地であるが、年代が限定できる火災資料などを使用しているためほとんどが武家地である江戸藩邸内の詰人空間からの出土となっている。加賀藩上屋敷の役所部分、大聖寺藩の下級藩士の居住区、尾張藩の詰人空間の居住区部分などで、御殿空間などよりも、より人々が日常生活を行い銭が流通している場所から検出されたものであることがわかる。

まず渡来銭から古寛永に移行する時期について考えてみたい。渡来銭から急速に入れ替わったとされている古寛永は、渡来銭や模鑄銭による貨幣流通の混乱を納めるために幕府の公鑄により鑄造された。銭座をいくつも設けたために、古寛

図2 工14 銭差銭種別径分布表



永は大きさや重さに幅ができてしまったとされている。図2に工14 銭差銭種別径分布表を作成した。古寛永 84 枚をみると、銭径 23.2~25.5mm で径差は 2.3mm となり、横に幅広く分布しているのがわかる。

渡来銭の比率を天和2(1682)年の火災を下限とする銭から享保10(1725)年の火災を下限とする銭を比較してみると、渡来銭は、ほぼ同様の比率で推移していることがわかる。渡来銭については古寛永に切り替わる段階で渡来銭の通用停止と寛永通宝による銭貨統一の政策がとられたとされているが、天和2(1682)年の段階では渡来銭に対する幕府の政策は終了していたと考えてよいのであろう。

古寛永から文銭に移行する時期について考えてみたい。幕府は次第に銭が不足してくると銭の規格を統一させるために、1カ所の銭座において新たに文銭を鑄造した。表3の文銭46枚をみると、銭径 24.7~25.7mm で径差は 1.0mm である。表の右側に集中して分布しており、古寛永に比べ明らかに統一のとれた銭であることわかる。比率をみると、先に述べたように15年間で約53%の比率となっている。1カ所の銭座に集中させたために、急速に入れ替わるほどの鑄造量ではなかったのだろう。しかし、1カ所の銭座の鑄造量としては、非常に大規模であったことが伺われる。

次に文銭から新寛永に移行する時期について考えてみたい。流通経済の発展により銭貨が不足し、元禄10(1697)年から銭の大増鑄が行われる。品質は粗悪で、荻原銭と呼ばれているものがこれに相当すると推定されている。本縞銭の荻原銭の径は 23.4mm で、文銭よりも小振りになっているのがわかる。また、本縞銭の四ッ寶銭 254 枚は銭径が 22.4~23.7mm で図2の左側に集中しており荻原銭の径は、この中に含まれてくる。また、先に述べた文銭よりも明らかに小振りになっているのがわかる。本縞銭から検出されている四ッ寶銭・旧猿江銭・不旧手も荻原銭の鑄造が始まったこの時期に比較的近い時期から鑄造され始めたのであろうことが推測される。元禄期には何カ所もの銭座で鑄造が行われたのであろう。文銭の占める割合は15年間で53%に、新寛永に分類されている四ッ寶銭・旧猿江銭・不旧手は初鑄年が不明であるのであくまでも推定であるが、荻原銭の鑄造が始まったこの時期に比較的近い時期から鑄造され始めたとすれば、6年間かそれよりもっと短い期間で53%を占めるようになっていくことがわかる⁽¹⁾。古寛永から文銭に移行する比率に比べ文銭から新寛永に移行する比率が高いことがわかる。その後の享保10(1725)年の火災の資料をみると新寛永の比率は66%になっている。つまり元禄16(1703)年の火災の資料から22年間でそれまでに比べて流通量の比率はあまり高くなっていないことがわかる。つまり、銭不足を解消するまでの一定期間大増鑄が行われ、その後は徐々に鑄造が行われていたのではないだろうか。

鈴木公雄氏は、六道銭のセリエーション分析により「従来から古寛永通宝から文銭、文銭から新寛永通宝への移行はきわめて漸移的である。」(鈴木 1988)との結論を導き出している。副葬された銭貨が恣意的な選択なしに選ばれていたのか、つまり、当時の流通状況を的確に表しているのかどうかなどのことを考えなければいけない。選り銭の意識は当時の人々の間にまだあったと思われる。六道銭の寛永通宝にも選り銭の意識が働いてもおかしくはないであろう。質の悪い新寛永通宝を墓に納めるよりはより良質の古寛永や文銭を墓に納めようとする恣意的な選択が働くことではないだろうか。また、セリエーション分析を行うに当たって、鈴木氏も述べているが、先史考古学で開発されたセリエーション分析の手法が細かな年代の変遷を追求する必要がある銭貨の流通過程の分析に応用することの妥当性についてである。渡来銭から古寛永のようなある程度急激な変化を考える場合には、推定される一つの事象として示すことは可能であり、そのことはその他の歴史的検証により実証されてきている。しかし、文銭から新寛永に関して、これらが入れ替わる年代幅のような問題に果たして適している分析方法なのであろうか。関口慶久氏は「六道銭とセリエーション論」の中でやはり鈴木氏の行ったセリエーションの分析に関して、資料として六道銭が相応しい資料なのか疑問を呈している(関口 2006)。実際に埋納時の絶対年代のわかる六道銭を用いて、絶対年代に基づいて配列した表と鈴木氏のセリエーション配列法に従って配列した表を比較している。新寛永は、軍艦型ではなくかなりののでこぼこがみられる。また、寛永鉄銭は新寛永から寛永鉄銭に緩やかに移行せず補助的に使われていることが指摘されている。鈴木氏の表では鉄銭の入らない組み合わせは鉄銭の初鑄年である 1735 年までの IV 期にすべて含まれてしまうが、実際は 1708 年から 1898 年に渡る資料である。関口氏の表と遺跡から出土した新寛永の比率を比較することを考えたが、関口氏の表には今回用いた 18 世紀初頭の資料が少ないため細かく比較することができなかった。また、1708 年に 3 組の六道銭が検出されているが、1 組は古寛永のみの組み合わせであり明らかに選り銭を行っていると考えられる。六道銭を用いては、細かい数値の対応は難しいのではないかと。1735 年以降、新寛永 6 枚の組み合わせが出てくる比率が増える。このことから、六道銭からも遅くとも 1735 年以降の新寛永の流通量の増加を推測することはできよう。あくまでも、新寛永に対しての選り銭が行われていないことが前提となる。古寛永通宝から文銭、文銭から新寛永通宝への移行はきわめて漸移的と、大まかに表現することは可能であろうが、これらの銭の移行は漸移的という言葉だけでは表現できない変化を含んでいる。セリエーション分析を、より細かな時間的経過に基づく文献史学上の問題に対して適用することはやはり難しいのではないだろうか。

まとめ

渡来銭から古寛永への流通銭貨の交替は幕府の政策の元で急速に行われたであろうと考えられている。そのような早さではないにしても新寛永が荻原銭の鑄造が始まった時期に比較的近い時期から鑄造され始めたとすれば、およそ 6 年間の短い期間で銭の流通量のおよそ半分を占めるようになっていたことがわかる。文銭から新寛永への移行は銭不足という使う側からの必然性の中でかなりの早さで行われていったのではないだろうか。銭の流通を出土銭貨から考える場合、今回の分析の結果から銭差や六道銭などの扱いには十分注意が必要であることがわかった。残念ながら今回は藩邸内の資料のみしか検証することができず、良好な状態で検出されている町屋の資料を確認することができなかった。そのため、分析結果に偏りができてしまった可能性もある。また、文献などの別の角度からの検証も必要であると考えている。

銭種の詳細は日本貨幣協会の小林茂之氏にご教示いただきました。ここに感謝申し上げます。

【註】

- (1)「江戸銀座とは、元禄 10（1697）年より宝永元（1704）年まで、江戸亀戸にて請負人丁字屋味休らによるという鑄銭所を指す。」『貨幣と鋳山』小葉田 淳著 の記述があり四ツ寶銭が元禄 10（1697）年より鑄造されているとされている。

【参考文献】

- 新宿区南町遺跡調査団 1994 『南町遺跡』
- 小葉田淳 1999 『貨幣と鋳山』思文閣出版
- 小林茂之 2005 「元禄期の遺構から出土した寛永銭について（上）」『貨幣』第 49 卷 第 2 号 日本貨幣協会
- 小林茂之 2005 「元禄期の遺構から出土した寛永銭について（下）」『貨幣』第 49 卷 第 3 号 日本貨幣協会
- 鈴木公雄 1988 「出土六道銭の組み合わせからみた近世前期銅銭流通」『社会経済史学』53-6
- 鈴木公雄 1993 「渡来銭から古寛永通宝へー出土六道銭からみた近世前期銭貨流通史の復元ー」天山舎 東京
論苑考古学
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 関口慶久 2006 「六道銭とセリエーション論」ミニシンポ『中近世の葬墓制と六道銭』レジメ集 出土銭貨研
究会 墓標研究会
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部 7 号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990a 『東京大学本郷構内の遺跡 法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990b 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1996 『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ』
- 東洋鑄造貨幣研究所編 1998 『新寛永通寶図会』（株）ハドソン
- 永井久美男 1994 「廣本家近世出土銭貨」『山崎町の中世・近世銭貨』兵庫県埋蔵銭調査会編 兵庫県山崎町教
育委員会
- 増尾富房 1976 『古寛永泉志（改訂版）』

第5節 工学部 14 号館地点の一括廃棄土壌から出土した 「鉄丹ベンガラ」の生産関連資料に関する調査

くらしき作陽大学 北野 信彦
奈良文化財研究所 降幡 順子・肥塚 隆保

はじめに

東京大学本郷構内の遺跡 工学部 14 号館地点の一括廃棄土壌からは、江戸時代後期頃の生活什器類や鍛冶関連資料が大量に検出された。この中には、「鉄丹」と称せられる酸化第二鉄を主成分とした赤色顔料（以下、鉄丹ベンガラと呼称）の生産関連資料、すなわち原材料および製造用具ではないかと推測される一括資料も含まれていた。本報では、これらの観察および分析を行い、これらが「鉄丹ベンガラ」と関係する資料群であるかどうかを検討した。調査の結果、これらがいずれも江戸市中における「鉄丹ベンガラ」の製造の姿を明確に示す貴重な一括資料群であることがわかったので報告する。

1. 鉄丹ベンガラの生産関連資料群の概要

本稿が調査対象とする一括資料が出土した工学部 14 号館地点は、絵図との比較から東側を加賀藩邸に接する幕府の御先手組（御先鉄砲組）の与力武家屋敷地にあたる。発掘調査の結果、この地点は中山道に面する間口 10 間と加賀藩邸の地境堀跡で画される奥行き 20 間（約 200 坪）の短冊状地割の奥部分であり、江戸時代後期頃に、かれらが組屋敷内で行っていた副業の生産活動を示す鉄宰やるつぼ・ふいごの羽口などの鍛冶関連資料が検出された。このなかには、(1) 鉄サビに覆われた鉄屑片が中に充填された瀬戸美濃系陶器製の一升徳利、(2) 鉄サビが内部の側面や底面に付着した同種の一升徳利、(3) 赤色顔料が中に充填された同種の一升徳利（徳利外面に被熱痕）などが同一のゴミ穴（SU396、SU392）から纏まって検出された（写真 1～3、図 1）。この陶器製の一升徳利は、いずれも江戸時代後期～幕末期頃に江戸市中でごく普通に酒や醤油などの液体を入れて使用した、通称『貧乏徳利』とよばれる安価な量産型の生活什器である（図 2）。ところが本資料の場合、鉄屑を入れ易いように意図的に頸部を打ち欠いたり、赤色顔料が中に充填されたものは加熱による被熱痕が認められている（写真 4）。そのため、これらは一連の作業工程の製造用具（るつぼ）として、陶器製の徳利を再利用したものであろう。

2. 文献史料からみた鉄丹ベンガラとその製法

さて、江戸時代には各種本草書が出版され、このなかには、本稿が取り上げる鉄丹ベンガラの製法に関する記述が幾つか管見される。享和 3（1803）年の小野蘭山『本草綱目啓蒙』「赤土」「緑礬」の項目には、鉄丹ベンガラに関する記述がみられる（史料 1、2）。この内容を簡単に纏めると、鉄丹ベンガラとは大坂周辺で鉄屑を焼いて水を蒸発させて作成するベンガラのことである。緑礬（ローハ）

を焼いて作る良質のローハベングラと比較すると、やや下品であり「偽物」とさえ規定されている。

これとほぼ同様の記述が正徳 2 (1712) 年の寺島良安『和漢三才図会』にもみられるが、ここでは鉄丹ベングラはローハベングラに先行する人造ベングラであるが、赤色漆の使用顔料としては朱やローハベングラと比較しても遜色がないとしている(史料 3)。

一方、江戸時代中期以降にローハベングラの量産体制が確立する備中成羽郡坂本村(現岡山県川上郡成羽町吹屋地区)の「西江家文書」には、寛政 7 (1795) 年の坂本村緑髻荷主から庄屋宛の古文書がある。この内容からは『くず緑髻』『てつくず之弁柄』が安価な粗製品として当該生産地でも存在したことがわかる(史料 4)。

いずれにしてもこれらの文献史料からは、当時の鉄丹ベングラは、やや粗製品ベングラの一種類として広く一般にも知られていたようである。

3. 出土資料の観察・分析

調査は、一括廃棄土壌(ゴミ穴)から纏まって出土した陶器製徳利にそれぞれ充填されていた各資料が一連の鉄丹ベングラの生産に関連するかどうか、関連するならば江戸時代の鉄丹ベングラの性質とその製法(原材料と製造工程)がどのようなものであるのかを推察するための観察と分析を行った。以下、調査対象試料と分析方法を記す。

4-1. 調査対象試料

- (a) 頸部を打ち欠いた一升徳利内に充填されていた鉄屑資料(写真 1)
- (b) 一升徳利側面および底面に付着していた鉄サビ資料(写真 2)
- (c) 被熱痕が認められる一升徳利内に充填されていた赤色顔料の塊(写真 3)
- (d) 試料(c)が充填されていた被熱痕がある瀬戸美濃系陶器製一升徳利(写真 4)
- (e) (c) 試料に残存混入していた鉄屑小片(写真 5 丸枠内)

4-2. 実験

4-2-1 出土試料の加熱に対する属性を知るための実験

加熱実験は、徳利内面に付着した(b)試料 1g を 3 試料ずつ燃焼するつぼに入れ、アドバンテック東洋(株)製 KM 0280-100V 型電気マッフル炉を使用して 200・400・600・1000℃と設定条件をかえて 3 時間ずつ加熱した。さらに(b)試料の示差熱分析(TG-DTA)を行った。測定には、リガク電気製示差熱天秤 TG8101D 型を用いた。測定条件は、大気中において昇温速度 10℃ / 分で、室温から設定温度は 1000℃まで行った。なお標準試料には酸化アルミナの粉末(Al_2O_3)を用いた。各設定温度で得られた試料は、X 線回折装置を用いて結晶を同定した。

4-2-2 試料および生成物の観察

各試料および実験で得られた生成物の観察は実体顕微鏡観察した後、走査型電子顕微鏡で画像観察した。各試料はカーボン蒸着した後、日本電子製 JSM-5800LV2 型走査電子顕微鏡にエネルギー分散型電子線分析装置 JED-2100 (EPMA) を連動させて、Fe がマッピング検出される部分を中心に観察した。

4-2-3 試料および生成物の同定方法

本実験における加熱実験前の試料および加熱実験後の生成物の同定には、マックスサイエンス社 M18XHF-SRA 型の X 線回折分析装置を使用した。測定条件は以下の通りである。対陰極:Cu、管電圧:40kV、管電流:150mA、走査速度:2deg./min.、走査範囲:2θ=10-80deg、ステップ幅:0.02deg、モノクロメーター:使用である。

4-2-4 赤色系顔料の粒度分布測定

赤色系顔料の粒度分布の測定には堀場製作所のレーザー回折 / 散乱型粒度分析装置 LA-910 型を使用した。またこの分析結果を比較するため、人造ベンガラの一種類であるローハベンガラの分析も併せて行った。

4-2-5 原材料である鉄屑片の組織分析

原材料の金属組成の観察は、(a) 試料片および (e) 試料 (写真 5 丸枠内) をエポキシ樹脂で包埋してエメリー紙・ダイヤモンドペーストで断面研磨した後、金属顕微鏡で観察した。金属地金の材質を推定する上で重要と判断された組織については、岩手県立博物館の赤沼英男博士の協力を得て、新鮮な地金の断面観察および電子線マイクロアナライザー (EPMA) によるマッピング分析を行った。

4. 結果と考察

まず、原材料と推定される (a) (b) 試料の結晶鉱物相を X 線回折分析した結果、非晶質のブロードのピークの中に鉄水酸化物である α -FeOOH や γ -FeOOH などの鉄サビ成分が同定された (図 2)。さらに電子顕微鏡や金属顕微鏡で表面および断面観察した結果、(a) 試料は健全な鉄地金を内部芯に残しながらも表面は鉄サビに覆われた鉄屑片試料である (写真 6)。(b) 資料は徳利内面に付着した鉄サビ試料のため、水漬けにした鉄屑片から溶出した鉄イオンが徳利内面に吸着した後に酸化が進んだ非晶質の含水酸化鉄 ($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot n\text{H}_2\text{O}$) などが本来の主成分であろう。

赤色顔料の塊である (c) 資料は、0.2~0.3 μm 程度の微細な球型粒子の酸化第二鉄 (hematite : α - Fe_2O_3) の集合体であると同定された (写真 7、図 3)。そしてこの試料の粒度分布は、ローハベンガラ (6) のそれよりもやや微細な集合体であることもわかった (図 4)。ベンガラの塊を丹念に観察してみると、水分もしくはガスが抜けた穴のような空隙部分が多く⁽¹⁾、かつ不純物である鉄地金組織を残す鉄屑小片が多く残存混入している。この (c) 試料のベンガラ塊に多く残存していた鉄屑小片は、原材料である鉄屑小片の一部がそのままベンガラに生成されずに残存したものであった (写真 8)。そのためこの (c) 試料自体も、これまで文献史料のみに存在が知られていた鉄屑を原材料とする鉄丹ベンガラの製法を示す貴重な資料であると理解した。

この一括資料の中で原材料と推定した (a) 資料と (c) 試料に混入残存していた鉄屑片との相互関連性について調査する目的で、両者の鉄地金の組成を分析した。その結果、両者とも健全な金属部分はレーデブライト組織により構成される銑鉄であることが同定された (写真 9)。そして EPMA によるカラーマッピングの結果、両者ともに P (リン) と Cu (銅) 濃度の高い領域がみられた (写真 10)。いずれにしても (a)、(c) 試料ともに、元の素材は極めて類似した銑鉄 (鋳物) 資料である。

次に、(b) 試料の属性を知る目的で示差熱分析と加熱実験を行なった。筆者らによるこれまでの先行研究では、単に鉄サビの原材料をそのまま加熱しただけでは赤色顔料として認識されるような色相を有する酸化第二鉄を生成させることは困難であるが、原材料に強酸性の硫酸塩性温泉水などの酸化促進剤を添加して攪拌し、これを加熱すると良好な赤色を呈する酸化第二鉄を主成分としたベンガラ

顔料を作成することが可能であることがわかっている。本実験では3%の希硫酸水を添加した試料を加熱した結果、(b) 資料である鉄サビは200℃までの加熱では色調や生成物に変化はみられなかったが、400℃以上加熱すると赤い呈色や酸化第二鉄の生成が進み、赤い呈色を示すようになった。これを、1000℃まで加熱すると酸化第二鉄の生成はみられるものの色調自体は黒色に変化した。さらに(b) 試料の示差熱分析では、減量曲線・示差熱曲線ともに300℃前後の加熱で明瞭な減量・吸熱ピークが確認され、加熱温度が600～800℃の設定条件では安定した発熱・吸熱ピークを示し、赤い色調も良好であった(図5)。またX線回折の回折パターンでもhematite: $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$ のピークが設定温度を上げるに従い現われ、構造も安定していく様子が観察された(図6)。そして、実験室レベルではあるが最終的に鉄丹ベンガラの商品となった赤色顔料の個々の粒子形態を高倍率の電子顕微鏡観察した結果、いずれも0.1 μm 程度のやや角張った球形の微粒子の集合体であることがわかった(写真11)。

5. 結 論

筆者らによるこれまでの鉄丹ベンガラの製造に関する基礎実験の結果では、文献史料で「鉄屑のベンガラ」とも呼称される鉄丹ベンガラの原材料は、鉄屑そのものというよりは鉄屑をさびさせた鉄サビである。これらは650～700℃程度のやや低温条件で加熱しても、試料単独の場合は色調変化もベンガラの生成もみられなかった。ところが試料に塩化物や硫酸塩(天然で入手可能なものには強酸性の硫酸塩を含む温泉水がある)を添加することで、ベンガラの主要物質である赤い呈色をもつ酸化第二鉄を簡便に得られた。そしてこれらは、ローハベンガラに比べて赤色の鮮明さはやや劣るくすんだ呈色ではあるが、今日感覚ではややサビ止塗料の赤色に近い色調であることが確認された。

本稿では、以上のような基礎実験の結果をふまえて、このような鉄丹ベンガラとの関係が想定される東京大学本郷構内の遺跡 工学部 14 号館地点から一括で出土した資料の観察および分析を行なった。その結果、これらはいずれも江戸時代の『鉄丹ベンガラ』の生産との関係が指摘できる資料であることがわかった。この一括の出土資料から鉄丹ベンガラ生産の一連の作業工程を推察すると次のようになる。

- (1) 原材料には鋳鉄廃棄物などの鉄屑片を用いる。
- (2) この鉄屑片を、安価な生活什器である陶器製の一升徳利にストックとして充填する(この際、鉄屑を充填し易いように徳利容器の径部を打ち欠く場合もある)。
- (3) この鉄屑片は徳利内で水漬け静置されて鉄サビとなる。
- (4) 水分を含んだ鉄サビのみを同種の陶器製の徳利容器に充填しなおす。この際、サビ化していない金属小片が混入することも多い。
- (5) 陶器製の徳利に充填した水を含んだ鉄サビを、徳利毎火にかけて600～800℃前後の温度で加熱して鉄丹ベンガラを作成する。この際、陶器製の徳利表面には被熱痕跡が付く場合が多い。
- (6) 一連の作業中に混入もしくは残存した鉄屑小片や土壌成分などの不純物を水簸工程で除去し、赤色顔料である鉄丹ベンガラの製品として仕上げる。

以上の結果から、江戸時代における『鉄丹ベンガラ』の作業工程の一端が明らかにされた。そして、この生産自体は、江戸市中で鉄屑や徳利などの手近かな物品を利用して行なわれていたことが特徴的である。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、東京大学埋蔵文化財調査室の寺島孝一先生をはじめ、成瀬晃司、堀内秀樹、原祐一の諸氏には貴重な資料提供を受けました。また、鉄組織の分析にはおよび解析には、岩手県立博物館の赤沼英男先生のお手を煩わせました。あわせて厚く御礼申し上げます。

【文献史料】

(史料1)『本草綱目啓蒙 卷之三 土之一』

「赤土、今大坂近辺ニテ鉄ノセンクヅヲ焼テ水飛シタルヲベンガラト云フ。此レハ偽物ナリ。石瑠ノ条下ノ鉄丹ナリ。」(小野蘭山『本草綱目啓蒙』1、東洋文庫 531、平凡社(1991))

(史料2)『本草綱目啓蒙 卷之三 石之五』

「緑礬、緑礬ヲヤクトキハ色赤クナル。是ヲ礬紅ト云。コレ真ノベンガラナリ。下品ノベンガラハ、鉄屑ヲ焼成ス者ニシテ、鉄丹ナリ。石瑠ノ条下」(小野蘭山『本草綱目啓蒙』1、東洋文庫 531、平凡社(1991))

(史料3)『和漢三才図会 卷五十五 地部』

「丹土、蛮船が持ってくる丹土を傍葛刺土という。漆にまぜて器に塗る。その赤色は朱や辰砂に次ぐ。近頃『本草綱目』の製法に拠って緑礬を焼いて作るが、最もよい。また鉄屑を焼いて作る。ともに漆に混ぜるが、辰砂に劣らない」(寺島良安『和漢三才図絵』8、東洋文庫 476、平凡社(1987))

(史料4)『指出申一札』

「一、先達而大坂江御出之時分、私共貴宅江参候時分御申候者、近年桶底ニ溜り土燈登乱ニ取計致候而者大坂緑礬直段ニ、並くず緑礬・てつくず之弁柄売払揃ニ茂礬候間、此度山方地首之者江相談之上、貴殿方御揃方御申、私共三人之もの迄一同承知仕候、右年数三ケ年之内、一ケ山江銀壱両ヲ 貴殿より御渡、月々御対談之通土御買取被下候旨銘々承知仕候、成羽問屋及対談候通、少しも相違無御座候、御勝手次第、当十二月より年限三ケ年之内申定、違変無御座候

一、くず緑礬・てつくず之弁柄之儀茂貴殿御指図を請売払可申候、貴殿御望ニも御座候ハバ、外方江売払候直段より少々引下ケ進可申候、外方江抜申候而者大坂江持登候緑礬直段ニも響キ、永々メリニ茂相成間敷裁与存、当地ニ而売払勝手次第致候義、外より御聞被成候節、如何被仰付候共少茂御座候

坂本村緑礬荷主 磯次郎 印

甚 六 印

寛政七年卯年十一月

以下略

御代官早川八郎左衛門様御支配所

坂本村御庄屋 兵右衛門殿

(備中成羽郡坂本村 西江家文書)

(成羽町史編集委員会『成羽町史 史料編』(1994))

【註】

- (1) 瀬戸美濃系陶器製の一升徳利の容積を水を入れて計量した結果、(c) 試料が充填されていた徳利、は約 1,900cc、(a) 試料が充填されていた徳利は、頸部が打ち欠かれていたために容積が少なく、約 1,600cc であった。(c) 試料の鉄丹ベンガラは、一升徳利の底 1/3 程度に充填されており 330g を計った。
- (2) 空隙率の目安 [穴痕跡がみられる塊試料の体積÷この試料を水中にて粉碎して沈殿させた実質体積] の比率で計算してみると、(c) 試料の平均空隙率は約 40～50%程度であった。

【参考文献】

- 寺島良安 1975 『和漢三才図説 第8巻、東洋文庫 476』平凡社
- 宗 應星 1985 『天工開物、東洋文庫 130』平凡社
- 小野蘭山 1975 『本草綱目啓蒙 第1巻、東洋文庫 531』平凡社
- 成瀬晃司 1997 「工学部 14 号館地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1、p.13-17 東京大学埋蔵文化財調査室
- 北野信彦・肥塚隆保 1996 「近世におけるベンガラの製法に関する復元的実験」『文化財保存修復学会誌』vol.40、p.35-47 文化財保存修復学会
- 三沢俊平 1970 「鉄さび生成の現状と未解明点」『防食技術』vol.32、p.657-667 腐食防食学会
- 吉木文平 1959 「酸化鉄 (Fe₂O₃, FeO)」『鉱物工学』p.196-216 技報堂
- 西山 巖 1977 「べんがら」『改訂増補 最新顔料便覧』日本顔料技術協会編、p.448-451 誠文堂新光社
- 社団法人 日本分析化学会編 1987 『分析化学実験ハンドブック』丸善



写真1 原材料である鉄屑が充填されていた陶器製容器（試料a）

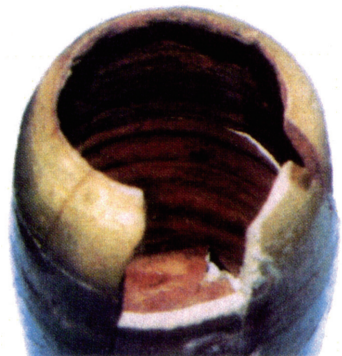
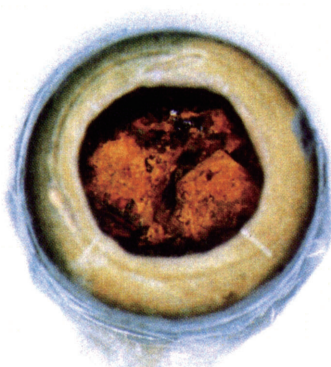


写真2 鉄サビの痕跡が認められる陶器製容器（試料b）

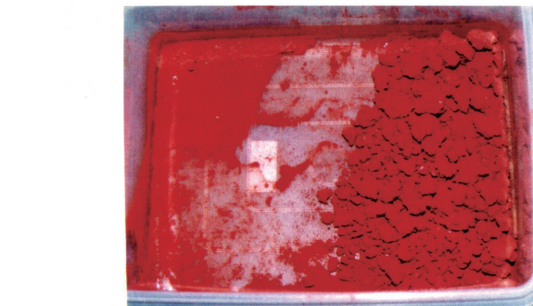


写真3 鉄丹ベンガラが充填されていた陶器製容器と出土の鉄丹ベンガラ（試料c）

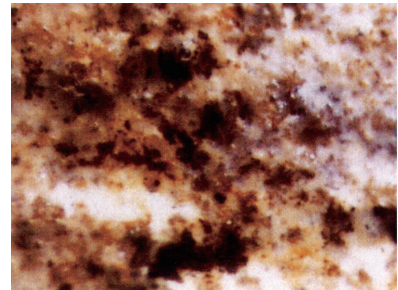
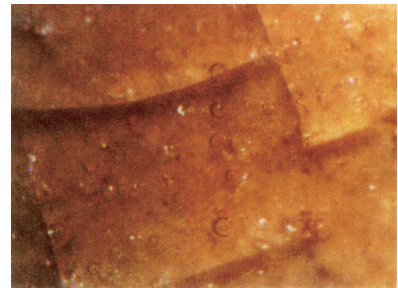


写真4 陶器製容器表面にみられる被熱痕跡の様子（×30）

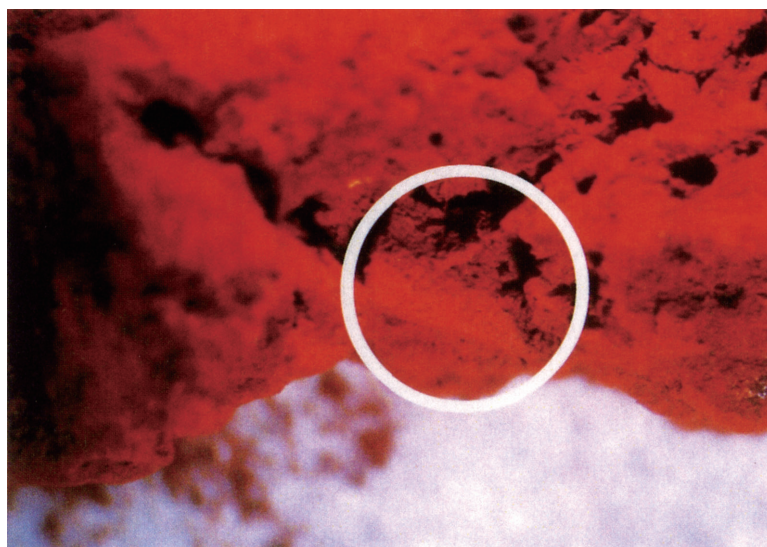


写真5 試料cに残存混入していた鉄屑小片（○枠内：試料e）

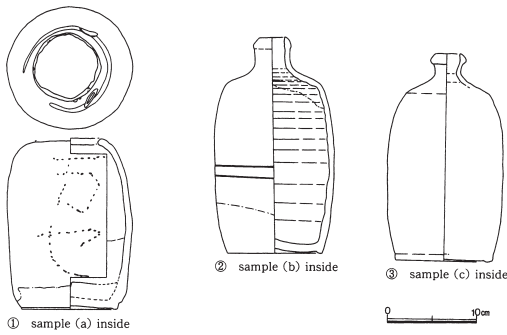


図1 鉄丹ベンガラを作成するために使用された出土陶器製容器(貧乏徳利)

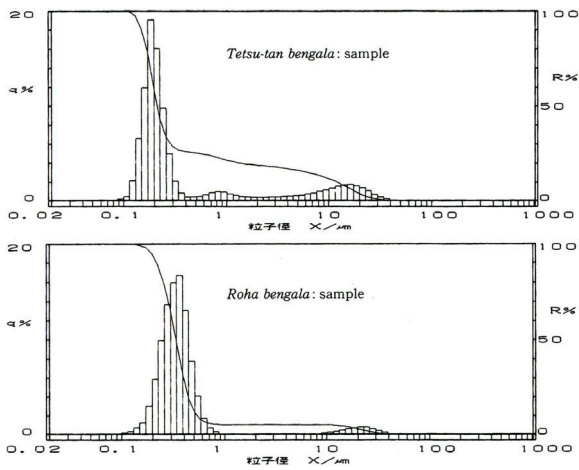


図4 鉄丹ベンガラ(試料c)とローハベンガラの粒度分布の比較

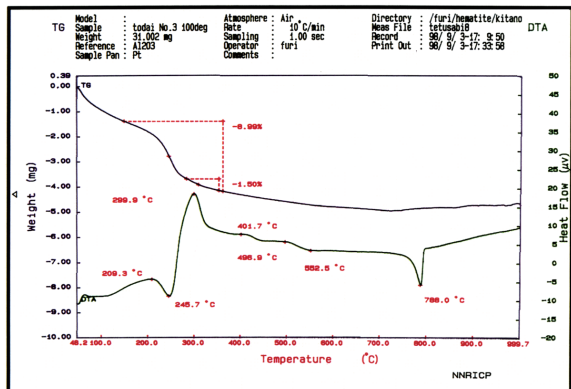


図6 鉄丹ベンガラの復元実験結果(示差熱分析による発熱・吸熱ピークの変化図)

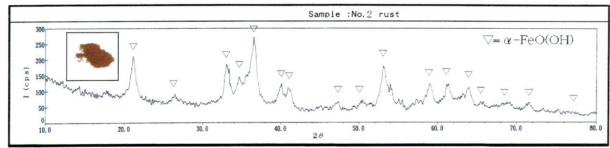


図2 (試料b)のX線解析分析結果

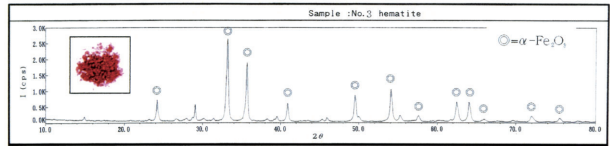


図3 (試料c)のX線解析分析結果

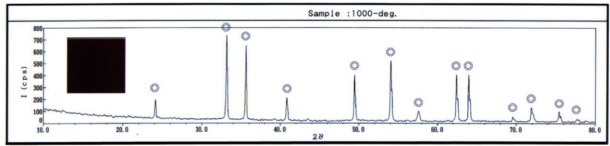
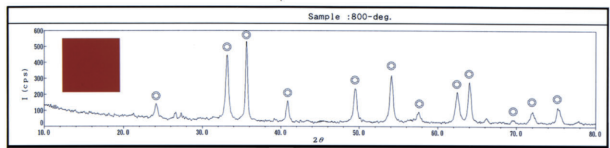
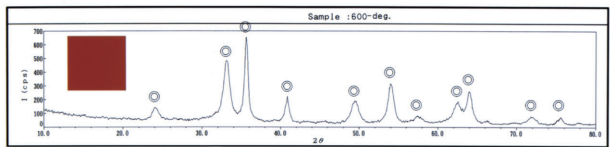
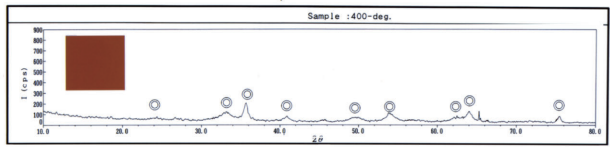
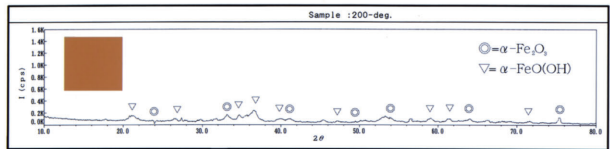


図5 鉄丹ベンガラの復元実験結果(加熱温度別の色相変化と結晶鉱物相(生成物)の生成状況の変化)

第6節 近世ガラスの化学分析

新潟県立歴史博物館 西田 泰民・東京大学 吉田 邦夫

1. はじめに

本郷構内 2 地点（工学部 14 号館地点・医学部附属病院外来診療棟地点）の出土ガラスの化学分析を行う機会を得たので報告する。近世遺跡出土ガラスの化学分析例はこれまでも公表されているが、定量値が示されている例はまだ多くはない。その一因は出土ガラスの場合は特に土中での劣化が著しい場合が少なくなく、非破壊分析では意味のある定量値が出しにくいことにある。また、表面形状が様々であるために、理想的な形態である標準試料を用いた定量に慎重にならざるを得ない事情がある。

2. 試料と方法

今回は 2 地点の出土ガラスの中でも棒状の製品を中心に蛍光 X 線分析を行い、化学組成を検討した。これらの製品にしぼったのはその多くが装身具と考えられ、近世後期には比較的安価に出回っていた製品であるため、江戸のガラス製品の組成をとらえるには都合がよいと推測されるからである。

表 1 に試料一覧を示す。附属病院外来診療棟地点出土ガラスについては既刊報告書第 IV 章第 8 節も参照されたい。

各測定試料のほとんどは表面が劣化した状態であるため、本来の透明度が認められる程度まで測定部分を超精密グラインダーを用いて研削し、エタノールで洗浄してから測定をおこなった。

測定には東京大学総合研究博物館の堀場製作所製 X 線分析顕微鏡 XGT2700W および日本電子 KK 製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3201 を用いた。XGT では電流 1 mA、径 0.1mm、JSX では電流 4mA、径 0.5~2mm、でそれぞれ電圧 15kV および 30kV で 1000 秒測定を行った。標準試料として NIST1412a (multi-component glass) および NIST630 (soda-lime container glass) を用いた。組成比は Na から Fe までの元素濃度は 15kV での測定値、それより重い元素の濃度については 30kV での測定値を採用し、各条件での測定値を Si 成分値を基準として標準化し、合成する方法で算出した。

鉛ガラスの出土状態のままの不透明部分と破断面や研削後の透明部分の測定結果には明らかな違いがある。ガラス表面の劣化と元素組成比の変化については、肥塚らがすでに発表を行っているが、同様の結果を得ており、特にカリウムの値が大きく異なることから、カリウム鉛ガラスである江戸期国産ガラスの化学分析には注意が必要である。

また測定面が平面でない試料の場合には曲率が検出精度に影響する可能性があるため、標準試料を半径 3 mm の円筒状に整形して測定を行い、平面での測定結果と比較した。その結果、0.5mm のコリメータを用いた場合は、軽元素で 50% 以上検出効率が下がる場合があることが判明した。

工学部 14 号館地点

| 資料番号 | 遺構番号 | 年代 | 形状 | 色 | 図版番号 |
|--------|-------|-------------|------|-------|------------|
| K14-01 | SU2 | VIIc | 角柱状 | 褐色透明 | |
| K14-02 | SX61 | 18c末～19前 | 角柱状 | 無色透明 | |
| K14-03 | SU63 | 18 | 扁平棒状 | 褐色透明 | III-137-17 |
| K14-04 | SK185 | 18後 | 角柱状 | 無色透明 | |
| K14-05 | SK188 | VIIIb～VIIc | 角柱状 | 無色透明 | |
| K14-06 | SK252 | 19前 | 扁平棒状 | 褐色透明 | |
| K14-07 | SK293 | VIIIa～VIIId | 扁平棒状 | 褐色透明 | |
| K14-08 | SK293 | VIIIa～VIIId | ねじり棒 | 褐色透明 | |
| K14-09 | SK299 | 19前 | 管状 | 褐色透明 | III-137-18 |
| K14-10 | SK301 | 19前 | ねじり棒 | 淡緑透明 | |
| K14-11 | SK301 | 19前 | 管状 | 無色透明 | |
| K14-12 | SK301 | 19前 | 棒状 | 青色不透明 | |
| K14-13 | SU327 | 18 | 花卉状 | 青色透明 | III-137-14 |
| K14-14 | SK330 | VII | 角柱状 | 無色透明 | III-137-19 |
| K14-15 | SK337 | 18後～19前 | 角柱状 | 無色透明 | |
| K14-16 | SK378 | 19前～中 | 角柱状 | 無色透明 | III-137-16 |
| K14-17 | SK378 | 19前～中 | 角柱状 | 無色透明 | |
| K14-18 | SU381 | 18後～19初 | 合わせ棒 | 淡緑透明 | III-137-20 |
| K14-19 | SU381 | 18後～19初 | 角柱状 | 褐色透明 | |
| K14-20 | SU385 | 18後～19前 | 扁平棒状 | 無色透明 | |
| K14-21 | SK387 | 19前 | 棒状 | 淡青不透明 | |
| K14-22 | SK388 | 18中 | 角柱状 | 褐色透明 | |
| K14-23 | SU389 | 18末～19初 | ねじり棒 | 無色透明 | |
| K14-24 | SU392 | VIII | 扁平棒状 | 褐色透明 | |
| K14-25 | SU392 | VIII | 扁平棒状 | 褐色透明 | III-137-21 |
| K14-26 | SU392 | VIII | 扁平棒状 | 褐色透明 | III-137-22 |
| K14-27 | SK393 | 18後～19前 | ねじり棒 | 無色透明 | |
| K14-28 | SU396 | VIIc | 棒状 | 無色透明 | |
| K14-29 | SU396 | VIIc | 棒状 | 無色透明 | |
| K14-30 | SK461 | 19前～中 | 合わせ棒 | 褐色透明 | |
| K14-31 | SK140 | 19前～中 | 角柱状 | 青色透明 | |

VIIa 期(1800～1810年代)、VIIb 期(1820～30年代)、VIIc 期(1830～40年代)、VIIId 期(1850～60年代)

病院外来診療棟地点

| 資料番号 | 遺構番号 | 年代 | 形状 | 色 | 図版番号 |
|-------|-------|---------|-----------|----------|-----------|
| HG-01 | SU1 | 19前半 | 棒状 | 無色透明 | |
| HG-02 | SK21 | 19前～中 | 耳かき部 角柱状 | 無色透明 | IV-131-4 |
| HG-03 | SK21 | 19前～中 | 棒状 | 無色透明 | IV-131-5 |
| HG-04 | SK21 | 19前～中 | 管状 | 無色透明 | IV-131-6 |
| HG-05 | SD62 | 19前～中 | 取っ手? | 暗褐色透明 | IV-131-11 |
| HG-06 | SD62 | 19前～中 | 三日月形 | 無色透明 | IV-131-10 |
| HG-07 | SD62 | 19前～中 | ねじり棒 | 無色透明 | |
| HG-08 | SD62 | 19前～中 | 棒状 | 無色透明 | |
| HG-09 | SD62 | 19前～中 | 合わせ棒 | 無色透明 | |
| HG-10 | SD62 | 19前～中 | 棒状 | 無色透明 | |
| HG-11 | SK81 | VIIIb 期 | 耳かき部 ねじり棒 | 無色透明+青 | IV-131-13 |
| HG-12 | SK81 | VIIIb 期 | 棒状 | 淡黄色 | IV-131-14 |
| HG-13 | SK81 | VIIIb 期 | 合わせ棒 | 淡青透明 | IV-131-15 |
| HG-14 | SK81 | VIIIb 期 | 角柱状 | 無色透明 | |
| HG-15 | SK81 | VIIIb 期 | 棒状 | 無色透明+青・白 | IV-131-12 |
| HG-16 | SK81 | VIIIb 期 | 扁平棒状 | 無色透明 | |
| HG-17 | SK81 | VIIIb 期 | 棒状 | 無色透明 | |
| HG-18 | SK81 | VIIIb 期 | ねじり棒 | 無色透明 | |
| HG-19 | SK81 | VIIIb 期 | 扁平棒状 | 無色透明 | |
| HG-20 | SK81 | VIIIb 期 | 棒状 | 褐色透明 | |
| HG-21 | SK81 | VIIIb 期 | 角柱状 | 褐色透明 | |
| HG-22 | SK166 | VIIIc 期 | 棒状 | 無色透明 | IV-131-21 |
| HG-23 | SK166 | VIIIc 期 | 扁平棒状 | 無色透明 | |
| HG-24 | SK392 | VIIIc 期 | 角柱状 | 無色透明 | IV-131-29 |
| HG-25 | SK392 | VIIIc 期 | 棒状 | 無色透明 | IV-131-30 |
| HG-26 | SK392 | VIIIc 期 | 管状 | 褐色透明 | |
| HG-27 | SK392 | VIIIc 期 | 角柱状 | 褐色透明 | |
| HG-28 | SK392 | VIIIc 期 | 角柱状 | 褐色透明 | |
| HG-29 | SK392 | VIIIc 期 | 棒状 | 無色透明 | |
| HG-30 | SK392 | VIIIc 期 | 棒状 | 無色透明 | |
| HG-31 | 包含層 | | 角柱状 | 無色透明 | |

表 1 分析資料リスト

| | HG-01 | HG-02 | HG-03 | HG-04 | HG-05 | HG-06 | HG-07 | HG-08 | HG-09 | HG-10 | HG-11 | HG-12 | HG-13 | HG-14 | HG-15 | HG-16 | HG-17 | HG-18 | HG-19 | HG-20 | HG-21 | HG-22 | HG-23 | HG-24 | HG-25 | HG-26 | HG-27 | HG-28 | HG-29 | HG-30 | HG-31 | |
|--------------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| Na ₂ O | - | - | - | - | 9.39 | - | - | - | - | - | 2.41 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| MgO | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 4.90 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| Al ₂ O ₃ | n.d. | 0.41 | 0.82 | 1.58 | 2.79 | n.d. | n.d. | 0.70 | 0.70 | n.d. | 0.54 | 0.81 | 0.54 | 0.54 | 4.29 | 0.00 | 0.73 | 0.31 | 0.36 | 0.59 | n.d. | n.d. | 0.47 | n.d. | n.d. | 0.64 | 0.84 | 0.91 | 1.33 | n.d. | n.d. | |
| SiO ₂ | 38.82 | 38.56 | 45.19 | 35.34 | 62.14 | 33.35 | 43.51 | 43.67 | 38.83 | 39.89 | 42.42 | 66.25 | 48.56 | 40.03 | 85.80 | 41.88 | 40.66 | 40.59 | 34.67 | 36.75 | 38.18 | 40.19 | 44.15 | 36.11 | 44.91 | 33.84 | 34.29 | 37.86 | 39.50 | 36.98 | 39.12 | |
| K ₂ O | 6.96 | 11.43 | 11.86 | 9.05 | 1.31 | 7.74 | 11.46 | 12.08 | 12.65 | 9.13 | 11.99 | 9.71 | 15.80 | 12.70 | 3.43 | 13.48 | 11.86 | 11.26 | 8.08 | 14.71 | 12.74 | 12.67 | 13.35 | 10.77 | 9.79 | 10.60 | 12.41 | 9.54 | 9.63 | 14.78 | 10.32 | |
| CaO | 0.25 | 0.96 | 0.42 | 0.00 | 5.71 | 0.21 | 0.54 | 1.45 | 1.62 | 0.21 | 0.86 | 15.54 | 0.44 | 1.40 | 6.17 | 0.42 | 0.38 | 0.85 | 0.45 | 0.52 | 0.62 | 0.38 | 1.31 | 0.30 | 1.11 | 0.55 | 0.49 | 0.47 | 1.51 | 1.60 | 1.72 | |
| TiO ₂ | - | - | - | - | 0.03 | - | - | - | - | - | 0.03 | 0.08 | - | - | 0.09 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | |
| MnO ₂ | - | - | - | - | 17.80 | - | - | 0.03 | 0.06 | 0.02 | 0.05 | 0.01 | 0.01 | - | - | - | - | 0.05 | 0.03 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 0.06 |
| Fe ₂ O ₃ | 0.08 | 0.06 | 0.05 | 0.15 | 0.39 | 0.11 | 0.05 | 0.02 | 0.05 | 0.04 | 0.07 | 0.49 | 0.10 | 0.09 | 0.12 | 0.12 | 0.12 | 0.15 | 0.19 | 1.93 | 1.52 | 0.01 | 0.05 | 0.02 | 0.03 | 3.11 | 1.25 | 1.61 | 0.04 | 0.04 | 0.03 | |
| CuO | 0.03 | 0.02 | 0.01 | 0.05 | - | 0.01 | 0.01 | 0.02 | 0.02 | 0.02 | 0.03 | - | 0.86 | 0.02 | 0.02 | 0.02 | 0.03 | 0.04 | 0.03 | 0.03 | 0.01 | 0.02 | 0.02 | 0.02 | 0.03 | 0.04 | 0.03 | 0.05 | 0.03 | 0.02 | 0.03 | |
| As ₂ O ₃ | - | - | - | - | 0.01 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 0.09 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ZnO | 0.23 | 0.74 | 0.42 | 0.18 | 0.10 | 0.34 | 0.62 | 0.71 | 0.53 | 0.01 | 0.03 | 0.01 | 3.18 | 0.34 | 0.27 | 0.03 | 0.07 | 0.11 | 0.39 | 0.43 | 0.39 | 0.43 | 0.01 | 0.26 | 0.01 | 0.01 | 0.47 | 0.40 | 0.49 | 0.33 | 0.01 | 0.01 |
| PbO | 53.63 | 47.83 | 41.22 | 53.64 | 0.04 | 58.24 | 43.81 | 42.01 | 45.54 | 50.69 | 44.52 | 30.44 | 44.88 | 44.88 | 43.81 | 46.20 | 46.69 | 56.09 | 45.08 | 46.50 | 45.08 | 46.72 | 40.40 | 52.78 | 44.12 | 50.28 | 50.22 | 48.66 | 48.97 | 46.57 | 48.71 | |
| 比重 | 4.20 | 3.50 | 3.50 | 4.25 | 2.62 | 4.13 | 3.75 | 3.56 | 3.91 | 4.20 | 3.50 | 2.59 | 3.23 | 3.56 | 2.60 | 3.52 | 3.48 | 3.40 | 4.40 | 3.58 | 4.81 | 3.69 | 3.86 | 3.70 | 3.59 | 4.30 | 3.73 | 3.55 | 3.83 | 3.70 | 3.55 | |

| | K14-01 | K14-02 | K14-03 | K14-04 | K14-05 | K14-06 | K14-07 | K14-08 | K14-09 | K14-10 | K14-11 | K14-12 | K14-13 | K14-14 | K14-15 | K14-16 | K14-17 | K14-18 | K14-19 | K14-20 | K14-21 | K14-22 | K14-23 | K14-24 | K14-25 | K14-26 | K14-27 | K14-28 | K14-29 | K14-30 | K14-31 |
|--------------------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| Na ₂ O | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 0.47 | 6.91 | - | - | - | - | - | - | - | - | 1.31 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| MgO | - | - | - | - | - | - | 0.78 | 0.70 | - | - | - | 0.23 | - | - | - | - | - | - | - | - | 0.30 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| Al ₂ O ₃ | 0.65 | 1.64 | 0.95 | n.d. | 0.60 | n.d. | 0.31 | 0.00 | 1.85 | n.d. | n.d. | 3.82 | 3.16 | 0.34 | 2.89 | n.d. | n.d. | 0.57 | 0.64 | n.d. | 4.97 | 0.54 | n.d. | n.d. | 1.01 | 1.75 | n.d. | 0.84 | n.d. | 0.33 | n.d. |
| SiO ₂ | 33.50 | 32.72 | 38.05 | 37.21 | 44.43 | 34.04 | 31.90 | 30.55 | 32.15 | 37.28 | 42.68 | 60.49 | 73.13 | 37.41 | 43.03 | 35.42 | 37.82 | 39.15 | 33.81 | 34.85 | 61.29 | 50.26 | 44.20 | 36.79 | 33.90 | 37.72 | 39.26 | 42.57 | 45.51 | 34.41 | 37.57 |
| K ₂ O | 11.56 | 11.80 | 9.74 | 6.66 | 14.60 | 6.38 | 6.54 | 7.26 | 12.53 | 8.18 | 12.72 | 21.01 | 1.88 | 8.64 | 6.91 | 7.47 | 7.52 | 6.43 | 7.23 | 8.35 | 19.47 | 7.70 | 6.50 | 11.32 | 9.85 | 12.08 | 7.70 | 11.61 | 12.37 | 7.28 | 7.17 |
| CaO | 0.53 | 0.78 | 0.41 | 0.00 | 1.28 | 0.21 | 0.14 | 0.26 | 0.77 | 0.35 | 0.75 | 10.67 | 12.83 | 0.25 | 0.47 | 0.16 | 0.23 | 0.20 | 0.17 | 0.23 | 9.31 | 0.88 | 0.00 | 0.56 | 0.57 | 1.15 | 0.31 | 0.43 | 0.50 | 0.31 | 0.10 |
| TiO ₂ | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 0.17 | 0.06 | - | - | - | - | - | - | - | 0.19 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| MnO ₂ | 0.03 | 0.04 | - | - | 0.06 | - | - | - | - | - | - | 0.22 | - | - | - | - | - | - | 0.02 | 0.02 | - | - | - | - | - | - | - | - | 0.05 | 0.00 | 0.02 |
| Fe ₂ O ₃ | 1.41 | 0.04 | 1.43 | 0.01 | 0.04 | 0.91 | 0.90 | 1.01 | 3.57 | 0.18 | 0.03 | 0.74 | 0.33 | 0.06 | 0.16 | 0.05 | 0.08 | 0.14 | 1.25 | 0.01 | 0.77 | 1.31 | 0.10 | 1.28 | 1.47 | 1.38 | 0.13 | 0.05 | 0.08 | 1.09 | 0.08 |
| CuO | 0.03 | 0.02 | 0.05 | 0.03 | 0.02 | 0.05 | 0.05 | 0.06 | 0.06 | 0.22 | 0.03 | 1.52 | 0.74 | 0.04 | 0.03 | 0.02 | 0.02 | 0.20 | 0.04 | 0.04 | 1.46 | 0.04 | 0.03 | 0.05 | 0.00 | 0.05 | 0.03 | 0.02 | 0.03 | 0.06 | 0.04 |
| ZnO | 0.24 | 0.49 | 0.02 | 0.72 | 0.11 | 0.26 | 0.24 | 0.28 | 0.39 | 3.00 | 0.02 | 0.57 | - | 0.79 | 0.51 | 0.61 | 0.55 | 0.80 | 0.39 | 0.21 | 0.53 | 0.22 | 0.64 | 0.16 | 0.88 | 0.06 | 1.01 | 0.01 | 0.00 | 0.20 | 0.74 |
| PbO | 52.05 | 52.48 | 49.35 | 55.29 | 38.88 | 58.14 | 59.13 | 59.88 | 48.68 | 50.79 | 43.76 | 0.24 | 0.37 | 52.47 | 46.01 | 56.26 | 53.77 | 52.50 | 56.45 | 56.20 | 0.24 | 39.05 | 48.53 | 49.85 | 52.32 | 45.80 | 51.56 | 44.48 | 41.45 | 56.31 | 54.27 |
| 比重 | 3.71 | 3.81 | 3.74 | 3.89 | 3.31 | 4.19 | 4.00 | 4.31 | 4.86 | 4.19 | 4.50 | 2.56 | 2.71 | 3.85 | 4.20 | 3.73 | 3.90 | 3.71 | 4.00 | 4.42 | 2.55 | 3.33 | 3.89 | 3.85 | 4.19 | 3.73 | 3.50 | 4.33 | 3.16 | 4.23 | 3.78 |

表2 分析結果

| | 軟硬 | 中硬 | 硬種 | 中通 | 色消 | 中通 | 中硬 | 中通 | 硬種 |
|------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| SiO ₂ | 34.4 | 36.5 | 39.2 | 37.7 | 39.3 | 42.9 | 40.8 | 49.4 | 49.4 |
| K ₂ O | 8.6 | 8.1 | 8 | 17.6 | 18.3 | 11 | 19.3 | 8.1 | 8.1 |
| PbO | 57 | 55.5 | 52.8 | 44.7 | 42.4 | 46.2 | 39.9 | 42.6 | 42.6 |

欄係(1983)より

表3 文献による成分組成比

3. 分析結果について

前節で述べたような検出効率の問題から、この報告ではX線分析顕微鏡での測定結果を使って考察にあたることとした。表2に分析値を示す。

試料のうち、HG-05・HG-12・HG-15・K14-13は透明のアルカリ石灰ガラス、K14-12・K14-21は乳濁したアルカリガラス、それ以外はカリ鉛ガラスである。

近世の鉛ガラスの化学組成については、箱書きなどで年代の押さえられる伝世資料の比重測定から鉛含有量の大きな変遷が指摘されている。また、出土ガラスについても比重測定を行って、その傾向を確かめようとした例がある(二宮1998)。江戸の遺跡では一般的に19世紀以降になってガラス製品が多く出土するようになり、18世紀段階のガラス分析例は多くないことと年代が特定できる例が少ないため、まだ組成の時代変遷・地理的差異を出土遺物から追うのは難しい。鉛量の違いは地域・年代による違いだけではない。近世ガラス製造の記述から軟種(やわらかたね)・中硬(ちゅうかた)・硬種(かたたね)など数種類のガラス素材の製造法が江戸時代後期には存在したことが認められており、その推定組成値が柵橋によって計算されている(柵橋1983など)。これらは主要成分である鉛、カリウム、珪素の3成分によって示されているので、柵橋による計算値(表3)と今回の分析値のうちの3成分の組成比を百分率で再計算し、プロットしたのが図1である。ガラス種の値を菱形、分析資料を黒丸で示した。あえて、試料の形態的特徴との関連をいうならば、角柱状・扁平棒状の製品のSiO₂濃度が40%未満のものが多く、棒状製品では40%以上が多いといえることができるかもしれない。容器類の分析値を重ね合わせるならば、また新たなグルーピングが可能となるであろう。

着色剤は一般的に言われているとおりであり、褐色は鉄、緑や青は銅による発色である。鉛滓を除くために添加される亜鉛、消色剤として使われるマンガン濃度については積極的に年代差を認めることは難しい。

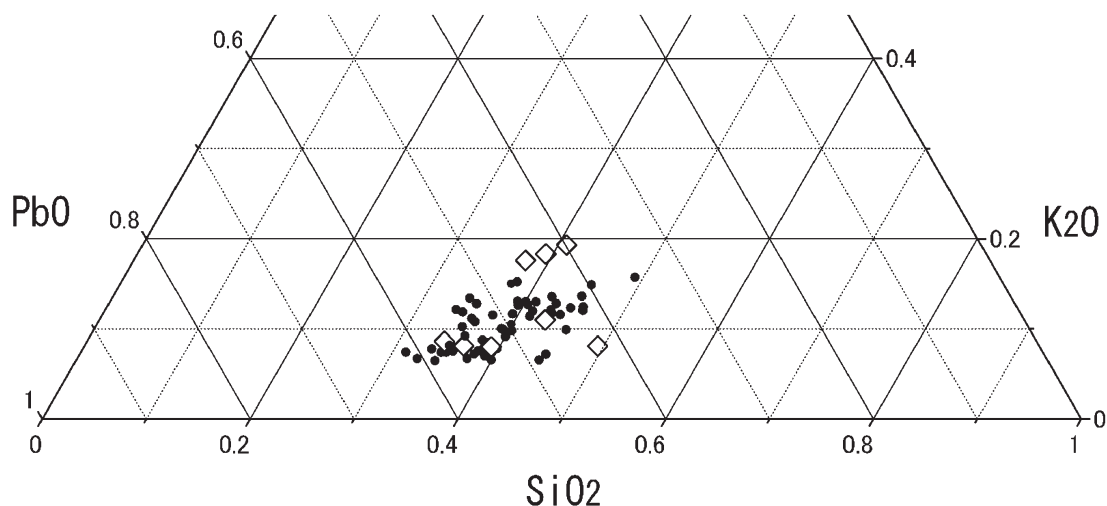


図1 3成分比プロット

また注意すべきなのは、萩城の報告書でも触れられているように(応用地質株式会社2006)、花井一好の『和硝子製作編』に国産ホウ酸ガラスの記述があることである(柵橋1975)。当時、和製義屋満(ギヤマン)と呼ばれたこの国産ホウ酸ガラス製品が酒器・筭・簪として市中に出回っていたとあり、真実とすれば、単に比重測定のみで鉛・アルカリガラスを区別し、国産・非国産と判断するのは正し

くないことになる。これまで化学分析を行わずに比重によって鉛ガラスとアルカリガラスを区別し、鉛ガラスは国産、アルカリガラスは国外産という記述をした報告書は少なくない。いまのところ非破壊でホウ素が測定できる手段はないため実際に伝世品でホウ酸ガラスであることが確かめられた事例はないようである。棚橋の計算によると『和硝子製作編』に記述されたホウ酸ガラス製法ではナトリウム量がカリウムを上回るようであり、アルカリガラスと判断されるグループの中でナトリウムの測定値に注目すれば、蛍光X線分析でも区別ができる可能性がある。京都市公家町遺跡ではヨーロッパ製品とされた酒器1点がICP発光分析によりホウ酸ガラスであることが判明しているが、カリウムがわずかであり、棚橋の推測する国産ホウ酸ガラスの組成とは異なっている(肥塚2004)。今回測定しアルカリガラスと判明した試料中には、棚橋の試算に対応するようなナトリウム量の多い試料はなかった。

江戸の幕末期の出土ガラスには淡青色や白色の不透明ガラスが含まれることがある。化学分析ではこれらはわずかに鉛を含んだカリガラスであり、比重値ではアルカリガラスに分類されることになる。長崎市内の報告書で中国産と記述されているのはこの種のガラスを含んでいるようであり(扇浦2000)、唐人屋敷で相当量の出土が見られる(長崎市教育委員会2001,2003)。京都市公家町出土乳濁ガラスについても中国産との見方が示されているが(竜子2004)、江戸時代に中国からこうした製品が輸入されていたという文献史料からの補強がほしいところである。また『和硝子製作編』に白・黄・青の乳濁ガラスを作るための着色剤の記載があることも気にかかり、中国産と断言するにはさらなる根拠が求められよう。今回の分析試料では試料番号K14-12とK14-21が該当し、近似した組成を示している。中国清朝のガラスについて公表されている化学分析値(千福熹他2005)には、カリウムを20%前後含むものが多い傾向は見られるが、ばらつきがあるため母集団として扱えず比較が難しい。日本国内の出土品の化学分析を進めていく必要がある。

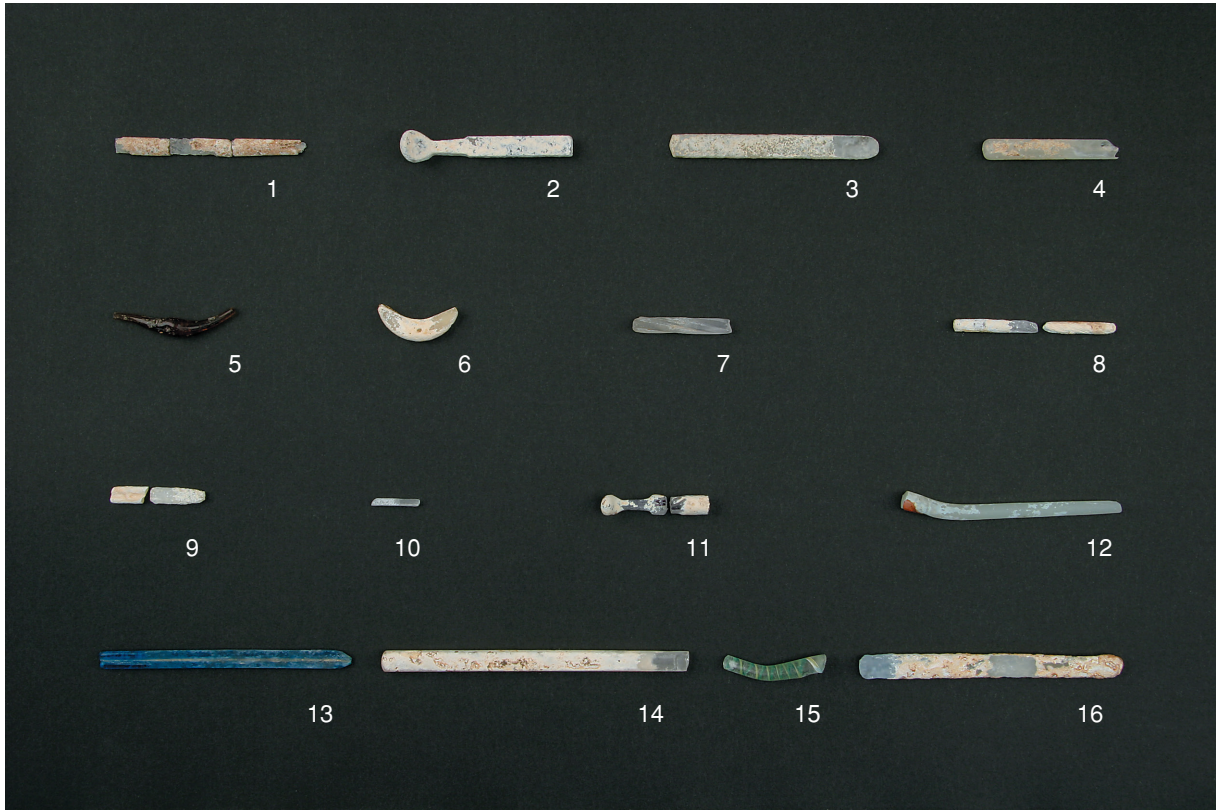
比重測定に当たり、サントリー美術館の土田ルリ子氏、瀬山里志氏のご協力をいただいたことに感謝いたします。

【参考文献】

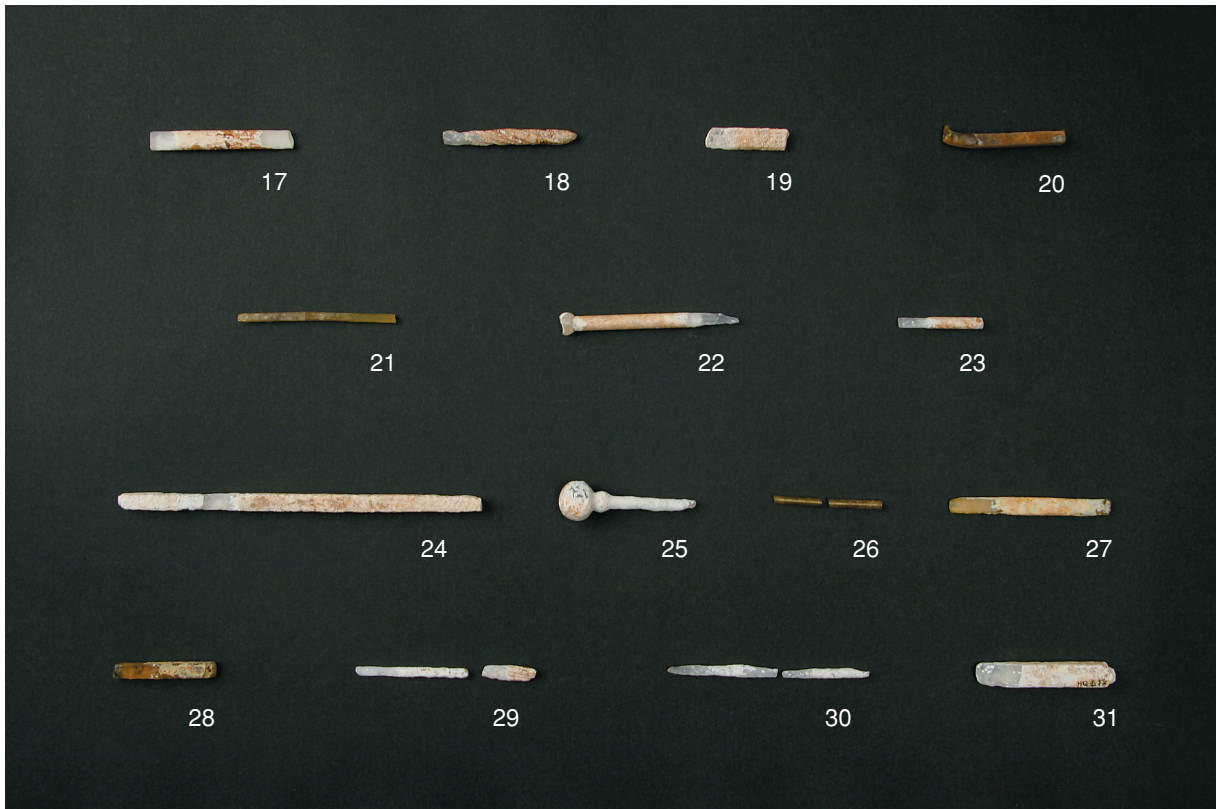
- 扇浦正義 2000 「ガラス製品」『桜町遺跡』長崎市埋蔵文化財調査協議会
- 応用地質株式会社 2006 「萩城跡(外堀地区)出土ガラス製品の材質分析」『萩城跡(外堀地区)Ⅲ』山口県埋蔵文化財センター
- 小田幸子・棚橋淳二・山崎一雄 1983 「武雄市役所蔵のガラス器の材質について」『Glass』16
- 肥塚隆保 2004 「出土ガラス製品の化学分析」『平安京左京北辺四坊 一第2分冊一(公家町)』京都市埋蔵文化財研究所
- 千福熹他 2005 『中国古代玻璃技術的發展』上海科学技術出版社
- 棚橋淳二 1974 「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス(一)」『松蔭女子学院大学研究紀要』16
- 棚橋淳二 1975 「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス(二)」『松蔭女子学院大学研究紀要』17
- 棚橋淳二 1975 『和硝子製作編并附録』についてⅠ』『Glass』1
- 棚橋淳二 1976 『和硝子製作編并附録』についてⅡ』『Glass』2
- 棚橋淳二 1977 「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス(三)」『松蔭女子学院大学研究紀要』19
- 棚橋淳二 1979 「鉛丹ガラスと金属鉛ガラス(四)」『松蔭女子学院大学研究紀要』21
- 棚橋淳二 1983 「江戸時代におけるガラス技術の変遷と伝播」『松蔭女子学院大学研究紀要』25
- 東京大学埋蔵文化財調査室編 2005 『医学部附属病院外来診療棟地点』
- 富沢威・葉袋佳考・馬淵久夫・富永健 1987 「真砂遺跡出土の江戸時代に製造されたガラス容器の化学組成」『真

砂遺跡』真砂遺跡調査会

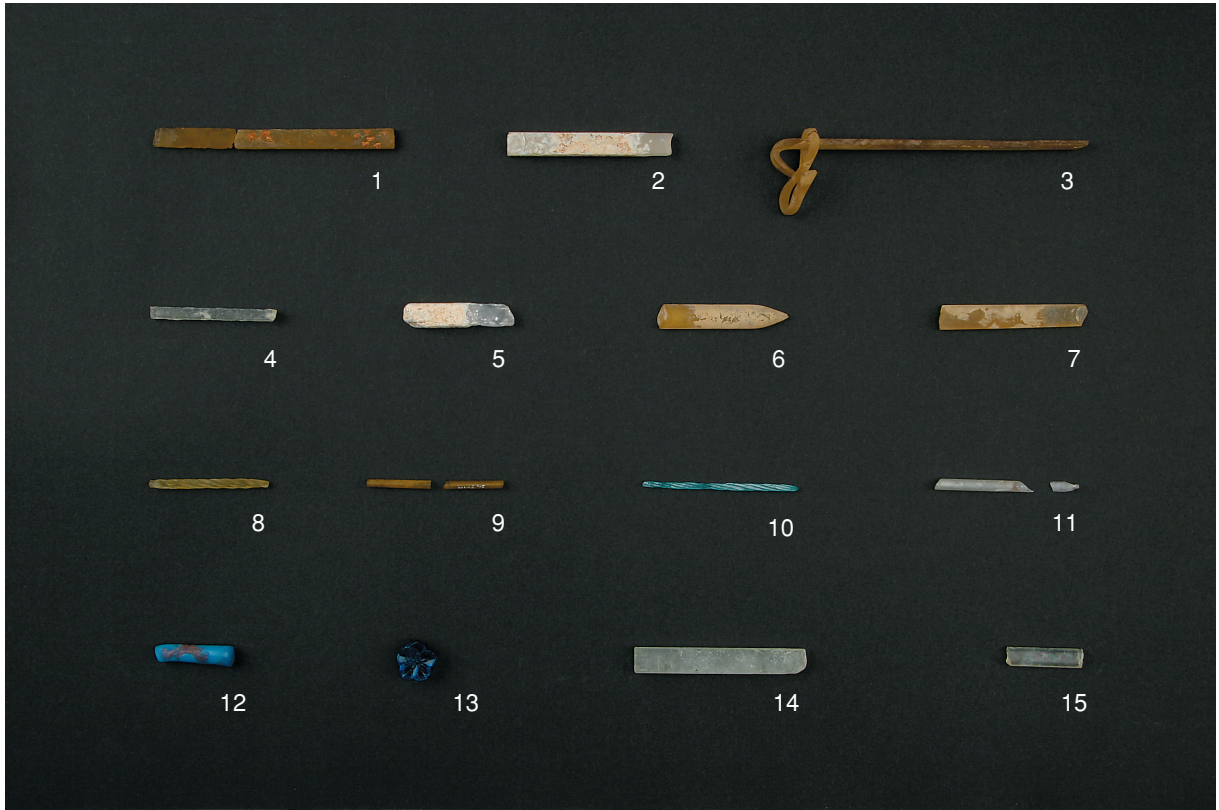
- 富沢威・馬淵久夫・富永健・森本伊知郎 1989 「白金館址遺跡で出土した15点のガラス製品について」『白金館址遺跡Ⅲ』白金館址遺跡調査会
- 富沢威・西田泰民・小泉好延 1990 「御殿下記念館地点出土の近世ガラス製品の中性子放射化分析」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 考察編』東京大学遺跡調査室
- 富沢威・富永健・小泉好延 1990 「近世ガラス製品の化学組成」『東比叡山 寛永寺護国院 I』都立学校遺跡調査会
- 富沢威・米沢仲四郎・葉袋佳孝・富永健 1996 「東京都文京区諏訪町遺跡出土の江戸時代のガラスの化学組成」『諏訪町遺跡』鹿島建設株式会社・文京区遺跡調査会
- 長崎市教育委員会 2001 『唐人屋敷 十善寺地区コミュニティ住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 長崎市教育委員会 2003 『唐人屋敷 天后堂前広場整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 西田泰民・小泉好延・富沢威・小林紘一・山下博 1989 「理学部7号館地点出土のガラスの化学分析」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室
- 二宮修治 1995 「ガラス製品の蛍光X線分析」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会
- 二宮修治・今野春樹・中村瑞絵 1998 「千駄ヶ谷五丁目遺跡2次調査出土のガラス及び焼継ぎ材の理化学的分析について」『千駄ヶ谷五丁目遺跡第2次調査報告』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 山崎一雄 1984 「長崎傘鉾ガラスの材質」『Glass』17
- 竜子正彦 2004 「公家町のガラス」『リーフレット京都』183



病院外来診療棟地点出土のガラス試料（1）



病院外来診療棟地点出土のガラス試料（2）



工学部14号館出土のガラス試料(1)



工学部14号館出土のガラス試料(2)

おわりに

工学部 14 号館地点の調査は、平成 4～5 年にかけての冬季に行われた。建設計画が迫っていることもあって、土曜日はもちろん、祝祭日も関係なく、調査を行った。その第一の要因は試掘成果をはるかに凌ぐ遺構が検出され、夥しい量の遺物が出土したことにつきる。本地点の調査以前、調査室が行った事前調査は全て大名屋敷に関する調査で、遺構、遺物量が多いとはいえ、本地点のように全面的に渉ることはなかった。そこには限られた区画内で遺構の構築、廃絶が繰り返され続けてきた組屋敷としての歴史が反映されている。すでにⅡ、Ⅴ章でも触れているように、本地点の土地利用は 1 区画が 10×20 間の 200 坪を基本とし、その区画内で営まれた居住者の生活様相の積み重ねが多量の遺構、遺物となって残されており、遺構の複雑な重複と、圧倒される出土遺物量に翻弄された調査であった。

本地点は、柱穴列、遺構の重複がみられない僅かな空閑地から南北 10 間を屋敷割りの単位として捉え、また、東西方向の奥行きに関しても絵図、地形図資料から 20 間を復元することができ、本地点はそのうちの奥側約 10 間に該当することが明らかにされた。検出された主な遺構は地下室、井戸、長方形土坑、不整形土坑、ピットで、そこには建築物に関する遺構はなく、屋敷地内の中～奥に該当する庭、空き地という利用形態を観ることができた。各々の遺構に関しても、地下室、井戸は中域に、長方形土坑や、不整形土坑は南北の屋敷境界域や加賀藩邸との地境域である東端域で、近接する境界に沿って構築されていた。Ⅴ章第 1 節でも触れているが、検出された地下室はいずれも 18 世紀代を下限とし、その後も当エリア内では土蔵など地下室に代わる遺構は検出されていない。ピット群は屋敷地中域に密集し、遺構空閑地がそれに近接して存在していた。このように各々の遺構の性格によって構築位置が定められていたことが窺われる。また、結果的に複雑な重複関係を呈しているが、遺構分布域には年代による変化が認められ、地下室などオーバーハングする遺構は、以前に遺構が構築されていないエリアが選択されていた。

A 区の SK36 は漆喰を貼った床面構造、横位に設置された甕から池と考えられ、B 区の SK97 は遺構内にも多量の根穴痕が認められることから花壇と推定される。しかしほかに植栽痕など庭園施設として推定される遺構は認められなかった。

このような状況から復元される景観は、部分的に観賞用としての庭が設けられてはいるが、基本的にはゴミ捨て場的な裏の空間として意識されていたと考えられる。

出土遺物はコンテナ数にして約 800 箱を数え、調査面積比では本郷構内における大名藩邸での出土量を凌駕している。もっとも屋敷地が広大な大名藩邸の場合、礎石が主体となる御殿エリア、袋状などの地下室がまとまる長屋エリア、藩邸周縁部のゴミ集積エリアなど調査区の場所によって様相が大きく異なることがある。それに対し、組屋敷、町屋のような限られた区画では、建物範囲以外の限定された空間、即ち本地点での中～奥域で地下室、廃棄遺構など活発な掘削行為が繰り返行われており、屋敷裏手一面が遺構で埋め尽くされている状態を成している。

第Ⅲ章の陶磁器・土器組成表で、推定個体数 100 点以上でカウント対象になった遺構をみて気づくことは、第Ⅴ章第 2 節で大成が指摘しているように、大名屋敷と比較して一括資料の年代幅が広

いことが挙げられる。もう一つの特徴として対象 17 遺構のうち、18 世紀中葉が 1 遺構、18 世紀後葉が 4 遺構、19 世紀前葉が 4 遺構、19 世紀中葉を下限とする資料が最低 5 遺構を数え、屋敷内での廃棄行為が 18 世紀後葉から活発化していくことである。また、A 区から C₁ 区までは 18 世紀後葉、19 世紀前葉、19 世紀中葉の資料全てがカウント対象になっているのに対し、C₂ 区では 19 世紀前～中葉の一括資料がなく、それが C₂ 区のカウント対象遺構の少なさにつながっているとも言えよう。18 世紀の中～後葉は、施釉土器の出現や、陶磁器の器種、器形の増加・分化が認められ、やきものが日常生活へ普及し、量産に拍車がかかる段階である。本地点において該期から出土量に増加が窺われるのは当然そのような動向の反映として受け止めることができる。それに加えて、ゴミ処理に関する問題がある。水運を利用した永代島への廃棄を想定した場合、最寄りの河川、運河は現在のお茶の水界限で、そこまでは陸送が必要になる。本郷周辺におけるゴミ処理システムについてはその存在から検証する必要があるが、その処理料金の負担を考えた場合、当然屋敷内への廃棄は主要な選択肢で、その結果、地下室陥没による窪地や掘削後の採土坑が積極的にゴミ廃棄場所として利用されていたと考えられる。

一括廃棄資料のなかに、特に B 区を中心として、鞆の羽口、鉄滓、鉄滓が付着した陶磁器、ベンガラが付着した陶磁器が出土している。ベンガラの生成については北野論考に詳細な分析と見解が提示されているように、鍛冶行為と密接に結びついている。残念ながら鍛冶に関する遺構は検出されなかったが、鞆の羽口、鉄滓を含む関連遺物の出土数量は組屋敷内でかなり本格的に鍛冶行為が行われていたことを証明するに十分な量といえる。

『諸向地面取調書』には本地点を含む組屋敷について与力、同心以外に医師、御家人などの人数が書かれているが、繰り返し述べているように本組屋敷は中山道の東西両側に位置しているため、東側区画にあたる本地点の具体的な居住者像を把握することはできない。また、すでに指摘されているように屋敷地裏部分を貸家とするケース、さらにそれを又貸しするケースも存在する。屋敷地裏手を調査対象とする本地点はまさしくそのケースに該当し、残念ながら、鍛冶活動が与力、同心の内職によるものなのか、家借人の生業として行われていたのかを判断する材料はない。

最後に遺構間接合について触れたい。本地点で遺構間接合が最も多く認められたエリアは C₁ 区の南域で、特に SK292、SK293、SK402、SU295 天井陥没部分での接合が顕著である。これらの遺構一括資料はいずれも 19 世紀中葉に位置付けられることから、屋敷地引き払いに関する廃棄行為と推定される。また、それらの遺構間接合資料には B 区出土遺構と接合する例も数点含まれている。これは明治初期に行われた建物解体、埋め戻しを含む再整地の段階で、境界を越えて分散したためと推定されるが、第 I 章で触れた近代以降の土地変遷にも現れているように、本地点周辺の区画が頻繁に変更されていることから、再整地段階で B、C₁ 区が 1 区画に統合された結果を反映するものと考えられる。

調査終了後の 2 月末に行われた現地説明会で、当時室長であった藤本強先生が鬼平犯科帳の世界を例に現場のイメージを説明されたとき、穴だらけの現場をみてキョトンとしていた見学者が、一転して五感を働かせ、遺構、遺物を身近に感じとっていた光景が思い出された。

遺物も遺構もそれ単体では何も発することはなく、考古学的方法からのアプローチのみでは、遺構、遺物が所有する情報の全てを引き出すことはできない。本報告においても、銭貨、動物遺体、ベンガラ生成、ガラス製品について、諸分野からの分析を依頼して、様々な成果を得ることができた。

文末ではあるが、多忙の中、快諾してくださった諸先生方に、あらためて感謝の意を表したい。

【引用・参考文献】

- D.H.DUCO 1982 『Merken vaw Goudse pijpewmakers 1660-1940』 De Tijdstroom
- Marie-Rose Bagaens 1992 『Drukdecors op Maastrichts aardewerk 1850-1900』 Uitgeversmaatschappij ANTIEKLochem b.v. Lochem
- Michiel Bartels 1999 『Cities in Sherds 1』
- 安芸毬子 2005 「江戸遺跡出土のキセル—東大構内遺跡における時期別様相—」 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 5 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』 pp.627-641 東京大学埋蔵文化財調査室
- 荒木町遺跡調査団 1994 『荒木町遺跡 発掘調査報告書』
- 井上暁子 2004 『ガラスの見わけ方 改訂版』
- 内野 正 2005 「出土陶器碗からみた尾張市谷邸の画期—柳茶碗・御小納戸茶碗・灰釉平碗の分析から—」 『東京大学埋蔵文化財センター研究紀要』 XX I
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房株式会社
- 大橋康二 2001 「鍋島焼の編年についての考え方」 『青山考古』 第 18 号
- 大八木謙司 1992 「四谷三丁目遺跡における景観復元の試み」 『國學院雑誌』 第 93 卷 第 12 号
- 岡康 正 1987 「びいどろからガラスへ」 『明治のガラス展』
- 古泉 弘 1987 『考古学ライブラリー 48 江戸の考古学』 ニューサイエンス社
- 小林 克 1991 「オランダからきたクレイパイプ」 『甦る江戸』 新人物往来社
- 史籍研究会 1982 内閣文庫所蔵史籍叢刊 第 16 卷 『諸向地面取調書 (三)』 汲古書院
- 新宿区荒木町遺跡調査団 1998 『荒木町遺跡Ⅱ—宗教法人 解脱会東京新築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区遺跡調査会 1994 『東京都新宿区 早稲田南町遺跡—新宿区立早稲田第四アパート改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区遺跡調査会 1996 『東京都新宿区 住吉町遺跡—新宿区住吉町社会教育会館改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区教育委員会 1991 『三栄町遺跡—骨角貝製品・動物遺存体編—』
- (財)新宿区生涯学習財団・新宿区歴史博物館・埋蔵文化財課 2002 『東京都新宿区坂町遺跡』
- 新宿区筑土八幡町遺跡調査団 1996 『筑土八幡遺跡—東京消防庁牛込消防署庁舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 新宿区南町遺跡調査団 1994 『東京都新宿区 南町遺跡—兵庫県東京宿舍市ヶ谷寮改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 『四谷三丁目遺跡—(仮称)東京消防庁四谷消防署合同庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1987 「西茨 1 号窯」 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 VI
- 仙台市立根白石中学校・たたら製鉄実験実行委員会 1993 『酸化と還元の旅 たたら製鉄と実験学習報告書』
- 田中富吉 1988 「きせる」 『きせる』 pp.234-239 たばこと塩の博物館
- 谷田有史 1988 「きせるの形と素材、彫金の技法」 『きせる』 pp.240-246 たばこと塩の博物館
- 陶器全集刊行会編 1941 『日本古陶名款集』 京都・補遺篇
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報』 4
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡Ⅶ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡Ⅸ』
- 都内遺跡調査会 1997 『駒込鰻縄手 御先手組組屋敷—都立向丘高校校舎改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』

- 長崎県窯業試験場 1985 『波佐見古陶磁文様集』
- 長崎市教育委員会 2001 『唐人屋敷跡』
- 長崎市教育委員会 2003 『長崎市勝山町遺跡』
- 長崎市教育委員会 2003 『唐人屋敷跡』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2000 『桜町遺跡』
- 日本地図センター複製 1989 建設省国土地理院所蔵『参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図』
- (株)ハドソン・東洋鑄造貨幣研究所 1998 『新寛永通 寶図会』
- 原 祐一 1994 「組屋敷の土地利用状況と居住者－新宿区早稲田南町遺跡を中心に－」『江戸遺跡研究会会報』
No.49
- 原 祐一 2002 「東京大学医科学研究所(旧大村藩下屋敷)から出土した鉛塊について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3 東京大学埋蔵文化財調査室
- 文京区教育委員会 1980 『ぶんきょうの坂道』
- 文京区遺跡調査会 1999 『春日町遺跡第VI地点』
- 増尾富房編 1976 『古寛永泉志(改訂版)』
- 山本孝造 1990 『びんの話』日本能率協会
- 由水常雄・棚橋淳二 1977 『東洋のガラス』三彩社
- 吉川金次 1991 『鍛冶道具考－実験考古学ノート－ 神奈川大学日本常民文化叢書』2 株式会社平凡社
- 若林由美・西木浩一 1994 「第2章 江戸の組屋敷について－南町遺跡検討のために－」『東京都新宿区 南町遺跡』

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|---|--|-------|--|---|--|--|---------------------|----------------------------------|
| ふりがな | とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき こうがくぶ 14 号かんちてん | | | | | | | |
| 書名 | 東京大学本郷構内の遺跡 工学部 14 号館地点 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 7 | | | | | | | |
| 編著者名 | 成瀬晃司、堀内秀樹、寺島孝一、大成可乃、原祐一、安芸穂子、大貫浩子、野々村海、阿部常樹、江田真毅、新美倫子、北野信彦、降幡順子、肥塚隆保、西田泰民、吉田邦夫 | | | | | | | |
| 編集機関 | 東京大学埋蔵文化財調査室 | 所在地 | 〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103 | | | | | |
| 発行機関 | 東京大学埋蔵文化財調査室 | 所在地 | 〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103 | | | | | |
| 発行年月日 | 平成 18 年 3 月 31 日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | ° ' " | ° ' " | | | |
| とうきょうだいがくほんごうこうない 東京大学本郷構内 の遺跡 (本郷台遺跡群) 工学部 14 号館地点 | とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 ほんごう ちようめ 本郷 7 丁目 ほんごう 3 番 1 号 | 13105 | 47 | 35° 42' 39" 35° 42' 41" | 139° 45' 45" 139° 45' 46" | 平成 4 年 11 月 26 日～平成 5 年 2 月 23 日 | 1,785m ² | 工学部校舎 14 号館建設 に先立つ事 前調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 東京大学本郷構内 の遺跡(本郷台遺跡 群)工学部 14 号館 地点 | 武家地 (組屋敷) | 近世 | 地下室、井戸、溝、 堀跡、建物跡、採土 坑、植栽痕、遺物廃 棄遺構 | 陶器、磁器、土器・土 製品、瓦、金属製品、 石製品、ガラス製品、 木製品、動物製品、動 物遺体 | | 御先手鉄砲組屋敷の調 査。加賀藩邸との地境堀 を確認。副業と推定され る生産関連遺物(鍛冶、 ベンガラ生産)の一括廃 棄資料を検出。地下室内 壁に施工者、施工期間を 記した釘書きが残されて いた。 | | |

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 7

東京大学本郷構内の遺跡

工学部 14 号館地点

2006 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4-6-1

印刷 株式会社セビマス
福島県いわき市平字作町 1-3-11
